

上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書 19

—小諸市内 3—

三子塚遺跡群 三田原遺跡群 岩下遺跡 石神遺跡群
郷土遺跡 東丸山遺跡 西丸山遺跡 深沢遺跡群

本 文 編

2000

日 本 道 路 公 団
長 野 県 教 育 委 員 会
長 野 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書 19

—小諸市内 3—

三子塚遺跡群 三田原遺跡群 岩下遺跡 石神遺跡群
郷土遺跡 東丸山遺跡 西丸山遺跡 深沢遺跡群

本文編

2000

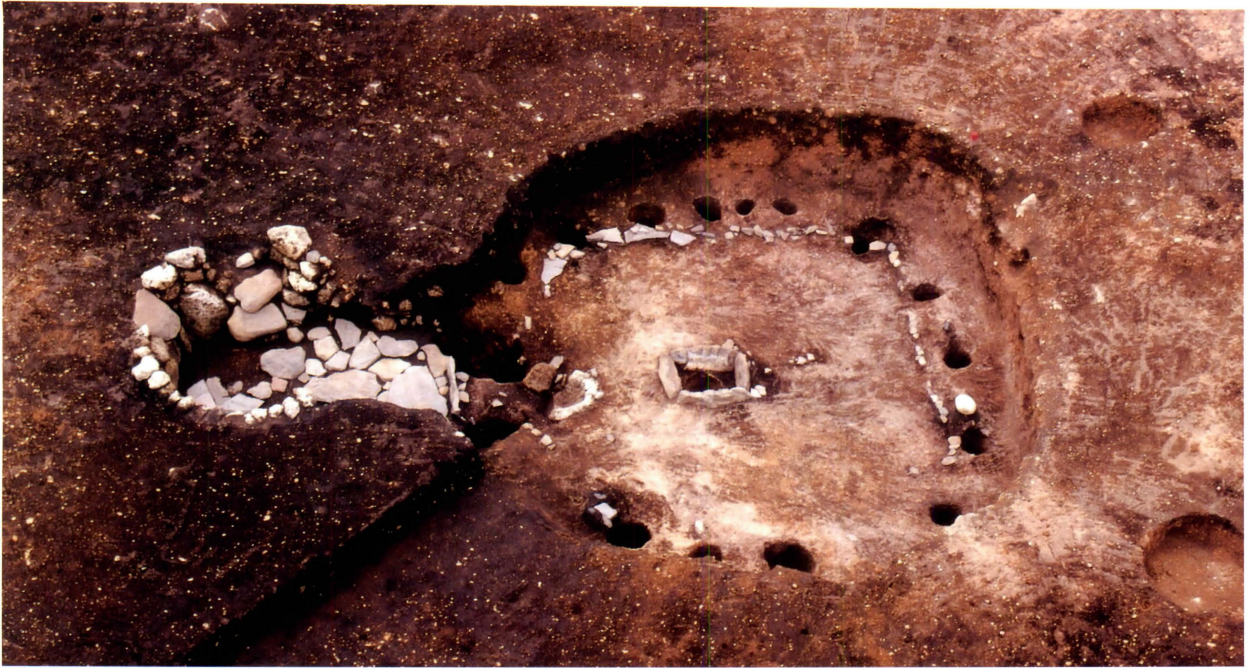
日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター



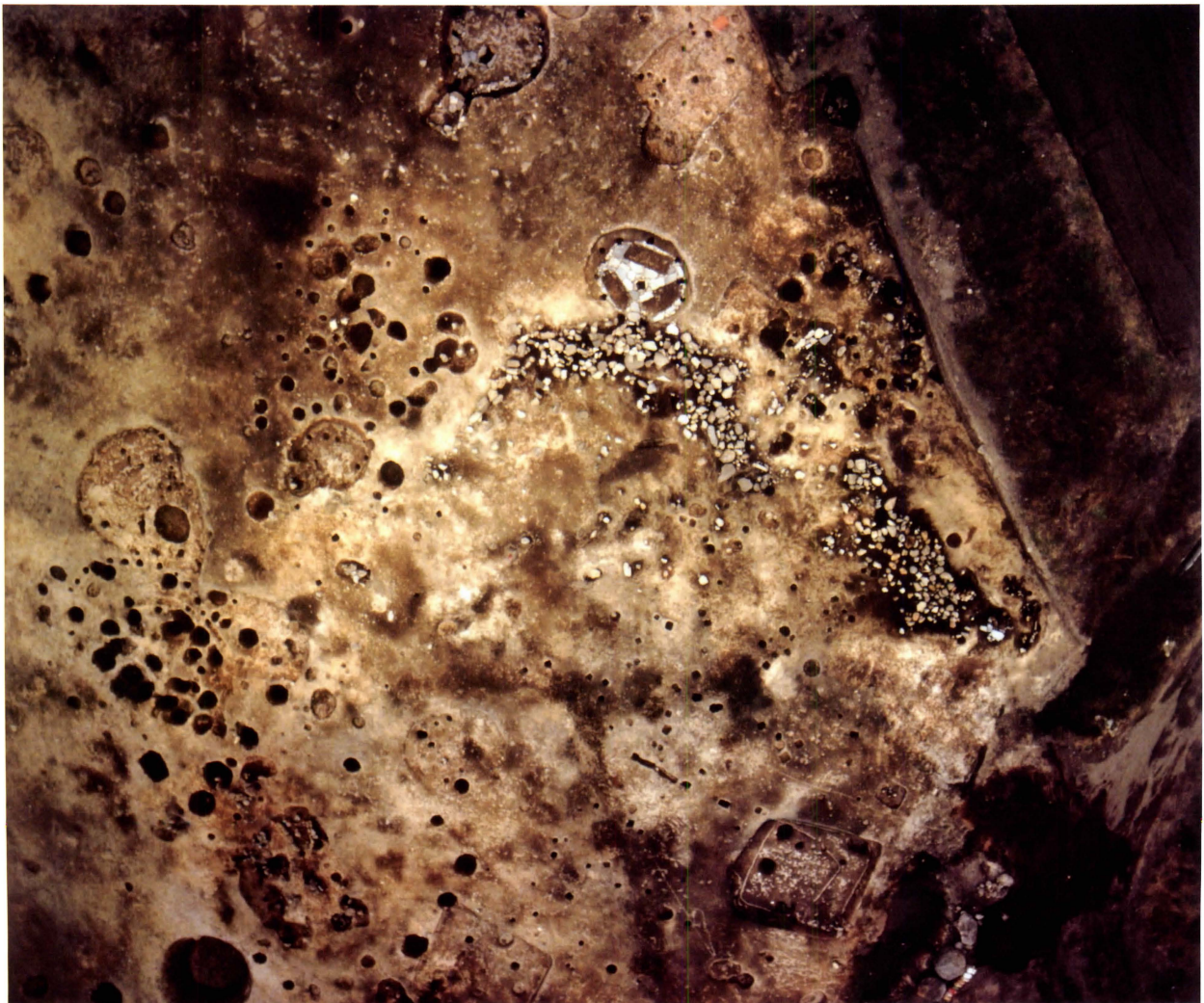
郷土遺跡から浅間山をあおぐ（平成5年度）



郷土遺跡24号住居跡出土土器



三田原遺跡群 7号住居跡



岩下遺跡縄文時代後期前半の環状集落

序

上信越自動車道は平成11年10月に全面開通いたしました。佐久一小諸間はそれに先立つこと4年前の平成7年11月7日に開通し、地域の高速交通網の一翼を担っています。本書はこの区間のうち小諸市内に存在する8遺跡の発掘調査報告書です。平成3年度から10年度までの8年間にわたる発掘調査及び整理作業の成果であります。

上信越自動車道は、小諸市域に入ると、しばらくの平坦部を経た後、浅間山の南麓を横断して東部町・上田市へと進んでいきます。本書で紹介する8遺跡は、こうした浅間山南麓に位置しています。標高約700～850mに立地するこれらの遺跡は、縄文時代のものがその大半を占めており、したがって、本書は浅間山南麓の縄文遺跡の報告書ともいえるものです。従来、縄文時代、とりわけ中期といえば、尖石遺跡や井戸尻遺跡の存在する八ヶ岳西南麓が全国的にも有名であり、それに比べると浅間山南麓は目立たない地域でありました。しかしながら、近年、この地域にも圃場整備事業や道路建設に伴い、縄文遺跡の発掘調査が相次ぎ、八ヶ岳西南麓に優るとも劣らない縄文文化が華咲いていたことが徐々にわかってきています。今回の発掘調査もこうした浅間山南麓に栄えた縄文文化の一端を明らかにしました。なかでも三田原遺跡群や岩下遺跡で発見された巨大配石を伴う敷石住居跡群は、縄文時代の従来のイメージを大きく変えるものです。また極めて豊富な遺物量を誇る郷土遺跡、古くからその名を知られる石神遺跡群などこれからの縄文時代研究に新たな資料を提供しうる遺跡が多く明らかにされました。浅間山南麓の縄文文化の繁栄ぶりがしのべれます。また、縄文時代のほかにも三子塚4号墳や郷土2号墳などの古墳、それに平安時代の集落跡など地域の歴史を叙述するに欠かせない資料の発見もありました。

今回、上信越自動車道建設のため調査された8遺跡はその現状が大きく改変されました。その記録保存の結果が本書であります。今回の調査によって得られた膨大な資料と情報が、今後多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで、深い御理解と御支援を賜りました日本道路公団東京建設局、長野県高速道局、小諸市、同教育委員会、地元対策委員会、ならびに適切な御指導と御助言を賜りました長野県教育委員会、そして何よりも、発掘作業や整理作業に従事され献身的な御尽力を賜りました多くの方に、心から敬意と感謝を表する次第です。

平成12年3月30日

(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間鉄四郎

例 言

- 1 本書は、上信越自動車道建設工事及びそれにかかわる小諸市道拡幅工事に伴い発掘調査された、小諸市内に所在する全8遺跡（三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡、深沢遺跡群）の発掘調査報告書の本文編である。郷土遺跡の図版の一部と各遺跡の写真図版は、別冊の図版編とする。
- 2 発掘調査事業は、日本道路公団東京第二建設局及び小諸市の委託を受けた長野県教育委員会が（財）長野県埋蔵文化財センターに委託して実施した。
- 3 実際の業務は、平成3年度から6年度にかけての発掘調査は佐久調査事務所が担当し、同事務所が6年度をもって閉所となったため、平成7年度から9年度にかけての発掘調査及び整理作業は上田調査事務所が担当した。また平成9年度をもって（財）長野県埋蔵文化財センターは解散したため、10年度からはその業務を引き継いだ（財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが整理作業及び印刷・刊行業務を担当した。
- 4 上記遺跡の調査概要は、すでに『長野県埋蔵文化財センター年報8～13・15』、『埋蔵文化財ニュース』、『信州の大遺跡』（郷土出版社刊）及び佐久考古学会遺跡報告会、長野県考古学会秋季大会等で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 5 本書で掲載した地図は、日本道路公団作成の上信越自動車道路平面図（1：1000）・建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000及び1：50,000）を使用した。
- 6 本書で掲載した展開写真は小川忠博氏に依頼した。
- 7 自然科学分析・鑑定関係では次の方から玉稿を賜り、該当遺跡の記述の中に掲載した。
早稲田大学教育学部 金子浩昌講師
京都大学霊長類研究所 茂原信生教授
このほかの自然科学分析結果については、フォッサマグナミュージアム及び（株）パリノサーヴェイに依頼したものだが、本書では分析報告書の一部を引用もしくは参考とした。
- 8 本書の作成に係る執筆分担及び担当業務は下記の通りである。
桜井秀雄 第1章・第2章・第7章のうち第3節以外・第10章・抄録
宇賀神誠司 第3章・第4章・第5章のうち第6節以外・第6章・第8章・第9章
川崎 保 第5章第6節、郷土遺跡以外の石器石材鑑定
贄田 明 第7章第3節
興水太仲 郷土遺跡の石器石材鑑定
田村 彬 遺物写真（撮影・現像・焼き付け）
西嶋 力 遺跡写真（撮影・現像）
- 11 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸氏に御指導・御支援を賜った。（敬称略、順不同）
秋田かな子、石井寛、市沢英利、稲村晃嗣、井出正義、岡田正彦、岡部静、小川卓也、小林真寿、小山岳夫、白沢勝彦、菅谷通保、関孝一、関根慎二、谷藤保彦、都築（旧姓本橋）恵美子、堤 隆、花岡弘、樋口昇一、平林彰、藤沢平治、星野保彦、福島邦男、丸山徹一郎、故・森嶋稔、山形眞理子、山下歳信、綿田弘実
- 12 本書で報告した各遺跡の記録類及び出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。

凡 例

- 1 遺構番号は遺跡別に遺構種ごと付してあるが、遺跡によって取り扱いが異なっており、発掘調査時の番号を変更しなかったものと変更したものがある。いずれの場合も欠番が生じている。遺物番号は内容に応じ、遺跡別の通し番号または遺構ごとの通し番号となっている。
- 2 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記の通りであるが、例外も少なくないため、図版中のスケールを参照していただきたい。
 - (1) 遺構実測図
 調査区域図 1 : 1,000 ~ 1 : 4,000、遺構配置図 1 : 120、竪穴住居跡 1 : 60 ~ 1 : 80、
 炉等住居内施設 1 : 30 ~ 1 : 60、掘立柱建物跡 1 : 60 ~ 1 : 80、土坑 1 : 40、溝 1 : 200、
 古墳 1 : 60
 - (2) 遺物実測図
 小形土器 1 : 4、大形土器 1 : 6、土器拓影 1 : 3 ~ 1 : 4、小形石器・金属器 1 : 2、
 大形石器 1 : 4 ~ 1 : 6、銭貨拓影 1 : 1
 - (3) 遺物写真
 小形土器 1 : 4、大形土器 1 : 6、土器片 1 : 3、小形石器 1 : 1 ~ 1 : 3、大形石器 1 : 6、
- 3 個別遺構の実測図では、原則として新旧関係の新しい重複遺構のみ上端線で示してある。
- 4 実測図及び拓影図のスクリーントーンは、第7章（郷土遺跡）では下記の通り使用した。これ以外の場合は、該当項目で説明してある。

(1) 遺構実測図

火床・焼土



炭化物・灰



地山（浅間第2軽石流）



攪乱



石棒・丸石・石皿



石・礫



軽石



(2) 遺物実測図

須恵器

黒色処理

打製石斧の使用痕

織織土器

断面黒塗



断面網点

巻頭図版 三田原遺跡配石遺構、岩下遺跡配石遺構、郷土遺跡14号竪穴住居跡出土土器、郷土遺跡全景
序

例 言

凡 例

本文目次

第1章 序 説	1
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査委託契約	1
2 調査体制	3
第2節 調査の方法	6
1 発掘調査の方法	6
2 整理方針と報告書の構成	7
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	9
第3章 三子塚遺跡群	13
第1節 遺跡の概観	13
第2節 調査の概要	13
第3節 縄文時代から古墳時代の遺物	16
第4節 奈良時代の遺構と遺物	18
1 三子塚4号墳	18
第5節 平安時代の遺構と遺物	22
1 竪穴住居跡	22
2 掘立柱建物跡	30
3 流路跡	30
第6節 時期不明の遺構	30
1 畑跡	30
第7節 小結	31
第4章 三田原遺跡群	33
第1節 遺跡の概観	33
第2節 調査の概要	33
第3節 縄文時代の遺構と遺物	38
1 後期前半の環状集落	38
(1) 竪穴住居跡	41
2 その他の竪穴住居跡	52
3 土坑	85

4	遺物溜まり	85
5	遺構外出土遺物	88
第4節	古墳時代以降の遺構と遺物	104
第5節	小結	106
第5章	岩下遺跡	110
第1節	遺跡の概観	110
第2節	調査の概要	110
第3節	縄文時代の遺構と遺物	112
1	前期初頭から中期初頭	112
(1)	竪穴住居跡	112
(2)	土坑	119
2	中期後葉から後期中葉	119
(1)	後期前半の環状集落	119
①	石列	125
②	竪穴住居跡	131
③	石棺・土坑墓・土坑	146
(2)	後期前半の石列を伴う集落	150
①	竪穴住居跡	150
(3)	その他の竪穴住居跡	154
(4)	平地式住居跡	170
(5)	土坑	172
3	遺構外出土遺物	185
第4節	古墳時代から平安時代の遺構と遺物	193
1	竪穴住居跡	193
2	掘立柱建物跡	197
第5節	中世以降の遺構	197
1	竪穴建物跡	197
2	2号掘立柱建物跡及び柱穴群	200
第6節	三田原遺跡群、岩下遺跡の石器・石製品のX線マイクロアナライザーによる 岩石種の同定について	201
第7節	小結	207
第6章	石神遺跡群	211
第1節	遺跡の概観	211
第2節	調査の概要	211
第3節	縄文時代の遺構と遺物	214
1	土坑	214
2	集石土坑	219
3	遺構外出土遺物	220

第4節	古墳時代の遺構と遺物	220
1	縦穴住居跡	220
2	1号大形土坑	225
第5節	小結	225
第7章	郷土遺跡	227
第1節	遺跡の概観	227
1	自然環境	227
2	今までの調査歴	227
第2節	調査の概要	229
1	発掘調査の経過	229
2	調査日誌抄	229
3	整理作業の経過	230
4	発掘調査及び整理作業参加者	230
5	基本土層	234
6	概観	234
第3節	縄文早期末葉～前期の遺構と遺物	236
1	検出遺構	236
(1)	早期末葉の様相	236
(2)	縦穴住居跡	237
(3)	土坑	238
2	出土土器	243
(1)	出土土器の分類	243
(2)	遺構出土土器	243
(3)	遺構外出土土器	246
3	石製装飾品	251
第4節	縄文時代中期中葉から後期前葉の遺構と遺物	252
1	検出遺構	252
(1)	概観	252
(2)	各説	252
①	縦穴住居跡	252
②	土坑	346
③	掘立柱建物跡	384
④	屋外埋甕 ア屋外埋甕群A、イ屋外埋甕群B、ウ屋外埋甕群C	385
⑤	集石	389
⑥	土器集中	389
⑦	単独土器	390
2	出土遺物	391
(1)	概観	391
(2)	各説	391

① 土器	391
② 石器	396
③ 土製品	401
④ 動物遺存体	401
第5節 弥生時代から古墳時代前期の遺物	413
第6節 郷土古墳群2号墳	413
1 郷土古墳群について	413
2 郷土古墳群2号墳の概要	413
3 郷土遺跡出土の人骨（古墳時代）と脊椎動物遺存体（縄文時代）	415
第7節 奈良時代及びそれ以降の遺構と遺物	419
1 検出遺構	419
① 住居跡	419
② 土坑	420
③ 自然流路	420
2 出土遺物	420
① 土器	420
② 石製品	426
③ 古銭	426
第8節 時期不明の遺構	426
① 土坑	426
② ピット	426
③ 1号配石	427
第9節 小結	427
第8章 東丸山遺跡	429
第1節 遺跡の概観	429
第2節 調査の概要	429
第3節 縄文時代の遺構と遺物	431
1 竪穴住居跡	431
2 土坑	434
3 陥し穴	438
4 遺構外出土遺物	438
第4節 小結	438
第9章 西丸山遺跡	443
第1節 遺跡の概観	443
第2節 調査の概要	443
第3節 縄文時代の遺構と遺物	446
1 土坑	446
2 遺構外出土遺物	446

第4節 小結	446
第10章 深沢遺跡群	451
第1節 遺跡の概観	451
第2節 調査の概要	451
第3節 縄文時代の遺構と遺物	453
第4節 平安時代の遺構と遺物	453
第5節 時期不明の遺構	455
第6節 小結	455
第11章 結語	456

報告書抄録

第1章 序 説

第1節 調査の経過

1 発掘調査委託契約

上信越自動車道建設にかかわる発掘調査は、群馬県境から佐久インターチェンジ間（以下、「I.C」と略称する。）の23遺跡については平成元年度をもって終了し、藤岡I.C～佐久I.C間は平成4年に供用が開始された。本書では佐久I.C以北に分布する遺跡のうち（財）長野県埋蔵文化財センター（平成9年度で解散し、平成10年度からは財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが、その業務を引き継いでいる。以下、両者ともに埋文センターと略称する。）佐久調査事務所で発掘調査を実施した18遺跡の中の8遺跡を収録する。これらは小諸市に所在している。また小諸市の委託を受けた側道部分の発掘調査も4遺跡で同時に実施した。

上信越自動車道建設用地内の埋蔵文化財の発掘調査委託契約については、「日本道路公団の建設事業など工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき、長野県の場合は日本道路公団が県教育委員会に委託し、県教育委員会では埋文センターに再委託する方式をとっている。

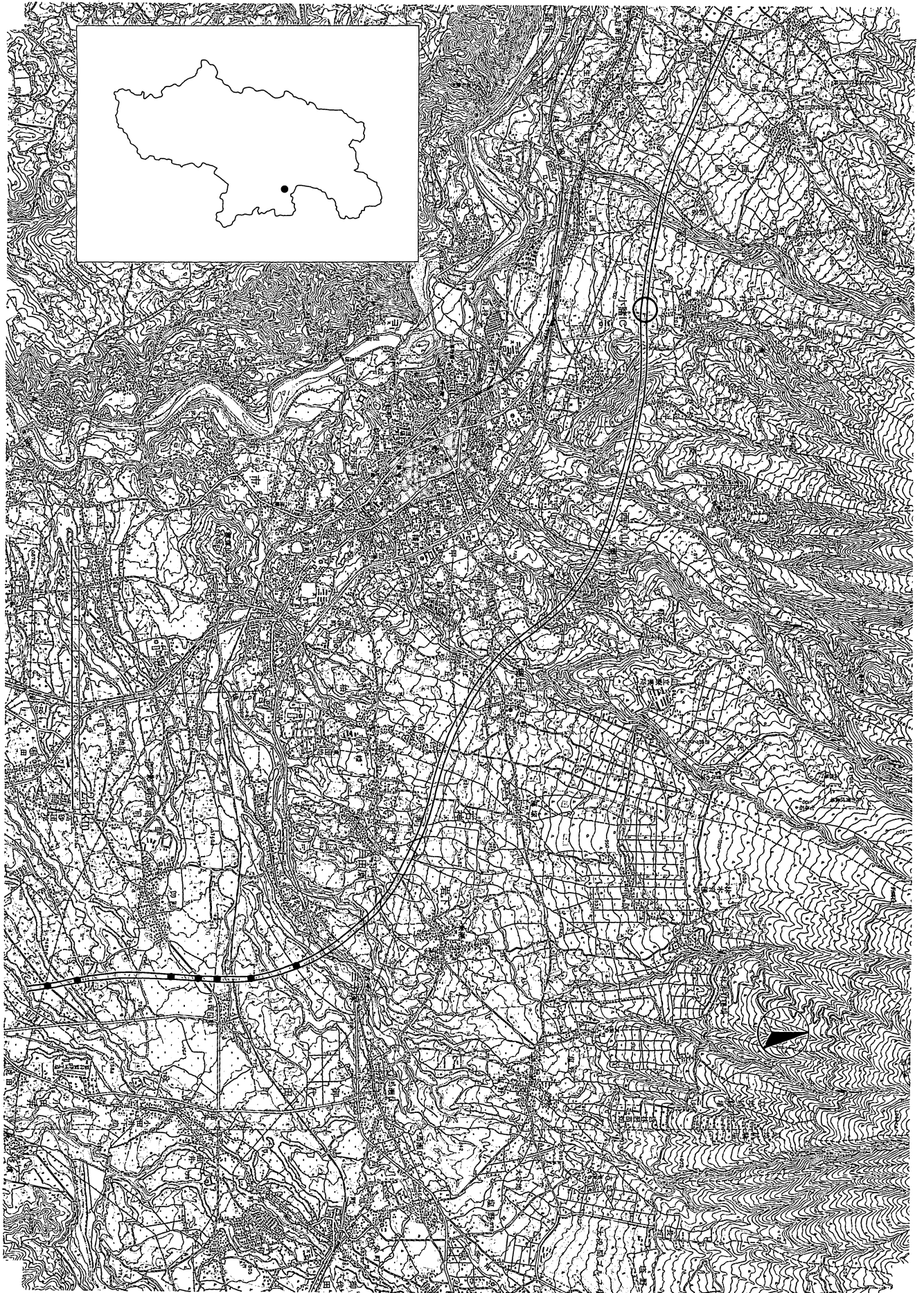
佐久I.C以北の遺跡についての発掘調査は平成2年度から始まったが、本書収録の8遺跡は平成3年度から7年度にかけて発掘調査されたものである。佐久管内の遺跡については、平成6年度で郷土遺跡の一部の残件を除いて調査は終了し、佐久調査事務所は同年をもって閉所した。郷土遺跡の残件は平成7年度に上田調査事務所にて実施し、本書収録遺跡すべての発掘調査が終了した。なお、佐久I.C～小諸I.C間は平成7年に供用が開始されている。

発掘調査遺跡の年度別契約面積は下記の通りである。

第1表 年度別調査契約面積

(単位：m²)

遺跡名	総面積	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	備考
三子塚遺跡群	30,000	8,900	21,100				
三田原遺跡群	8,480		7,480	1,000			含側道 480
岩下遺跡	12,100		11,000	1,000			含側道1,100
石神遺跡群	2,500	2,500					
郷土遺跡	8,525		1,780	4,245	2,300	200	含側道 525
東丸山遺跡	2,100	2,100					
西丸山遺跡	2,800	2,800					
深沢遺跡群	8,890		8,890				含側道 890
合計	75,395	16,300	50,250	6,245	2,300	200	



第1図 遺構の位置

また平成4年度には愛宕山城跡について試掘調査130㎡を実施したが、山城の可能性はないものと判断し、本調査は行わなかった。

2 調査体制

平成3年度から6年度までの発掘調査は(財)長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所が担当し、同事務所が6年度末をもって閉所したため、7・8年度の発掘調査及び整理作業は上田調査事務所にて担当した。9年度は当該担当調査研究員が市町村派遣及び他遺跡の整理作業に従事するため、整理作業を凍結した。また(財)長野県埋蔵文化財センターは9年度をもって解散し、10年度の整理作業及び11年度の印刷・刊行は、その業務を引き継いだ(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターで行った。

(1) 調査組織

平成3年度

理事長	宮崎和順	佐久調査事務所長	畑 幹雄 (～12月31日)
副理事長	伊藤万寿雄		塚原隆明 (兼、1月1日～)
事務局長	塚原隆明	庶務部長	畑 幹雄 (兼、～12月31日)
総務部長	塚田次夫		塚原隆明 (兼、1月1日～)
調査部長	小林秀夫	主任	古川英治
		調査課長代理	寺島俊郎
		調査研究員	木内英一 小林秀行 近藤尚義 宇賀神誠司 依田謙一
		調査員	輿水太伸

三子塚遺跡群、石神遺跡群、東丸山遺跡、西丸山遺跡の発掘調査を実施した。

平成4年度

理事長	宮崎和順	佐久調査事務所長	青沼博之
副理事長	伊藤万寿雄	庶務課長	玉井昌二
局長	峯村忠司	主任	古川英治
総務部長	神林幹生	調査課長	白田武正
調査部長	小林秀夫	調査研究員	木内英一 五十嵐敏秀 白鳥喜一郎 飯田吉隆 寺島俊郎 近藤尚義 征矢野安政 宇賀神誠司 田村彬 依田謙一 藤原直人 桜井秀雄
		調査員	輿水太伸 尾台 昇

三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、郷土遺跡、深沢遺跡群の発掘調査及び愛宕山城跡の試掘調査を実施した。

平成5年度

理事長	宮崎和順 (～10月15日)	佐久調査事務所長	青沼博之
理事長	佐藤善處 (10月16日～)	庶務課長	玉井昌二
副理事長	伊藤万寿雄	主任	古川英治

第1章 序 説

事務局長	峯村忠司	調査課長	白田武正		
総務部長	神林幹生	調査研究員	木内英一	五十嵐敏秀	白鳥喜一郎
調査部長	小林秀夫		飯田吉隆	寺島俊郎	近藤尚義
			征矢野安政	宇賀神誠司	田村 彬
			依田謙一	藤原直人	桜井秀雄
			山崎光顕	山岡一英	上沼由彦
		調査員	尾台 昇		

三田原遺跡群、岩下遺跡、郷土遺跡の発掘調査を実施した。

平成6年度

理事長	佐藤善處	佐久調査事務所長	青沼博之		
副理事長	田村治夫	庶務課長	玉井昌二	事務職員	小島きみ子
事務局長	峯村忠司	調査課長	白田武正		
総務部長	神林幹生	調査研究員	白鳥喜一郎	征矢野安政	宇賀神誠司
調査部長	小林秀夫		依田謙一	藤原直人	桜井秀雄
			山岡一英	上沼由彦	
		調査員	尾台 昇		

郷土遺跡の発掘調査を実施した。当年度にて佐久調査事務所は閉所となった。

平成7年度

理事長	佐藤善處	上田調査事務所長	小林秀夫（兼）		
副理事長	田村治夫	庶務課長	山口栄一		
事務局長	峯村忠司	主 事	石坂 裕		
総務部長	西尾紀雄	調査第一課長	白田武正		
調査部長	小林秀夫	調査第二課長	広瀬昭弘		
		調査研究員	宇賀神誠司	桜井秀雄	
					（以上、当該整理担当）

上田調査事務所にて本格的な整理作業を開始する。郷土遺跡の残件部分の発掘調査を実施した。

平成8年度

理事長	戸田正明	上田調査事務所長	小林秀夫（兼）		
副理事長	佐久間鉄四郎	庶務課長	山口栄一		
事務局長	青木 久	主 任	小岩一男（10月1日～）		
総務部長	西尾紀雄	主 事	石坂 裕（～9月30日）		
調査部長	小林秀夫	調査第一課長	白田武正		
		調査第二課長	広瀬昭弘		
		調査研究員	宇賀神誠司	桜井秀雄	
					（以上、当該整理担当）

整理作業の2年目にあったが、途中で県営蓼科ダム建設に伴う笹原上遺跡の発掘調査に宇賀神と桜井があたったため整理作業は半年間の期間延長となった。

平成9年度

当該整理担当の桜井が原村教育委員会へ1年間派遣され、また宇賀神は笹原上遺跡の整理作業にあたるため、整理作業は1年間凍結した。

平成10年度（財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターへ組織変更）

理事長 吉村午良

所長 佐久間鉄四郎

調査第三課長 広瀬昭弘

副所長兼管理部長

調査研究員 宇賀神誠司、桜井秀雄

山崎悦雄

（以上、当該整理担当）

調査部長 小林秀夫

整理作業の最終年度にあたった。

平成11年度

所長 佐久間鉄四郎

調査部長 小林秀夫

副所長兼管理部長

調査第一課長 百瀬長秀

山崎悦雄

印刷・刊行業務を実施した。



写真1 上田調査事務所（平成4年度～9年度）

第2節 調査の方法

1 発掘調査の方法

調査に当たっては、埋文センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に基づき、各遺跡ごとに具体的な実施計画を策定し、発掘調査を行った。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名は、長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。ただし、岩下遺跡は新発見の遺跡であるため、県教育委員会及び小諸市教育委員会との協議を経た上で、遺跡名称をつけた。また、記録の便宜を図るために、大文字アルファベット3文字で表記される遺跡記号を用いた。3文字の1番目は、県内を9地区に分けた地区記号であり、2・3番目は遺跡名の頭文字である。例えば、郷土遺跡は、佐久地区の地区記号「D」と遺跡名GOUDOの「G」と「O」を組み合わせ、「DGO」とした。各種の記録類や遺物の注記はこの記号を用いている。

三子塚遺跡群 (みつごづかいせきぐん)	遺跡記号	DMG
三田原遺跡群 (さんだはらいせきぐん)	遺跡記号	DSD
岩下遺跡 (いわしたいせき)	遺跡記号	DIS
石神遺跡群 (いしがみいせきぐん)	遺跡記号	DIG
郷土遺跡 (ごうどいせき)	遺跡記号	DGO
東丸山遺跡 (ひがしまるやまいせき)	遺跡記号	DHM
西丸山遺跡 (にしまるやまいせき)	遺跡記号	DNH
深沢遺跡群 (ふかさわいせきぐん)	遺跡記号	DFS

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構名称は検出時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合がある。そのため遺構の形状および特徴で区分し、遺跡記号と同様に記録の便宜を図るため、記録類・注記には次の記号を用いた。

SB	竪穴住居跡、竪穴建物跡、竪穴状遺構
ST	掘立柱建物跡、方形柱穴列
SK	土坑 (ゴミ穴、貯蔵穴、墓穴、陥し穴など)
SH	集石・配石 (郷土遺跡では礫が多量に出土した土坑にもこの記号を用いた。)
SD	溝跡、堀跡
SM	古墳など
SQ	遺物集中箇所
SF	単独で存在し、火を焚いた跡

ただし、本報告書では一般の利用者の便を考慮し、原則として記号を使わずに、「1号竪穴住居跡」、あるいは「1住」のように表記した。略称には「坑」=土坑などを用いている。その場合、基本的には遺構番号と同じ番号としているが、遺跡によっては調査時に付けた遺構番号を変更して報告しているものもあ

る。

(3) 調査区の設定

ア 調査区は、遺跡ごと、国土地理院の平面直角座標系の第Ⅷ系（ $X=0.0000$ 、 $Y=0.0000$ ）を基点に200mの倍数値で 200×200 mの区画を設定し、大々地区とする。大々地区は調査範囲をカバーする最小限に抑え、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字を与えた。

イ 大々地区を 40×40 mの25区画に分割し、大地区とする。大地区は、北西から南東へA～Yのアルファベットを与えた。

ウ 大地区を 8×8 mの25区画に分割し、中地区とする。中地区は、北西から南東へ1～25の番号を与え、遺構測量の基準線とした。

エ 大地区を 2×2 mの400区画に分割し小地区とする。小地区は、大地区の北西隅を起点としX軸上に西から東へA～Tのアルファベットを、Y軸上に北から南へ01～20の数字を与え40区分し、両者をあわせて小地区名とする。遺構外遺物の取り上げの基準とした。ただし、諸般の事情からこうした遺構外遺物の取り上げができなかった遺跡もある。

現場における調査区の設定は、中地区（ 8×8 m）が基本で、業者委託して実施したが、一部は調査研究員が測量し設定した。標高は日本道路公団の工事用水準点もしくは公共水準点を利用し、ベンチマークを設定した。遺構測量は、原則として簡易遣り方で行い、一部は平板測量を行った。また全体図と遺構実測図の一部については、業者委託の航空写真測量を採用した。

2 整理方針と報告書の構成

調査結果については、報告書への掲載不掲載にかかわらず、遺物の接合・復元・実測と遺構の計測などできるだけの資料化に努めたが、諸種の制約からこれらすべてを報告書に掲載することはできなかった。その場合は、数量化及び統計等によって数値の把握ができるように心がけた。

調査報告については、当該地域の対象遺跡を位置的に東から西の順番に羅列して収録することにした。



写真2 佐久調査事務所（昭和61年度～平成6年度）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

地形的に小諸市域をみると、①浅間火山南麓の緩傾斜面の北部地域、②三方・高峰山など烏帽子火山群の裾野をなす諸・西小諸地域、③佐久市北半部とともに通称佐久平と呼ばれ、佐久平に特有な「田切り地形」をひかえた東南部地域、④御牧が原台地と千曲川の細い段丘からなる千曲川左岸の南西部地域、の4つにわけられる。本書で報告する8遺跡についてみれば、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡は①の地域に、深沢遺跡群は②の地域に、三子塚遺跡群は③の地域に、それぞれ属している。

次に地質的な観点から概観してみる。

三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡の6遺跡は、浅間第2軽石流の堆積の上に立地している。浅間第2軽石流は浅間火山の活動史の中で「軽石流期」にみられたものである。「軽石流期」には軽石噴火と大規模な火砕流が頻繁に発生し、浅間第1軽石流と浅間第2軽石流が堆積した。『小諸市誌 自然編』では、第1軽石流と第2軽石流の軽石流堆積物の間には厚さ約20cmに達する黒色風化土が存在するため、両者の間に数百年位の時間的間隙があったのではないかと推測している。この軽石流期は約1万4千年前から約1万1千年前頃と考えられている。ところで今回の郷土遺跡の調査において、排水のために重機で数m程の深さのトレンチを入れた際に浅間第2軽石流中に含まれる炭化自然木を得ることができた。浅間第2軽石流の年代決定のひとつのサンプルになればとの考えから、放射性炭素測定を実施してみたところ、炭化木はコナラ属コナラ亜属コナラ節であり、年代は12020±200年(Gak-18680)という測定結果を得た。測定報告書によると、測定した炭化木は軽石流にとりこまれて炭化した当時の自然木と考えられ、浅間山麓の斜面では軽石流が発生した時点で落葉広葉樹が生育していたことが推定されるという。また『小諸市誌 自然編』では、浅間第2軽石流中に含まれる炭化木について、10650±250 Y B P (Gak-311)、11300±400 Y B P (M-1430)という2つの測定数値をあげている(小諸市誌編纂委1986)。こうして堆積した浅間第2軽石流は、その後、大小さまざまな河川によって浸食され、平坦部では「田切り地形」と呼ばれるこの地域独特の地形を形成することになる。どの田切り地形もほぼ東北東—西南西の方向の向きに列をなしている。三子塚遺跡群はこのような田切り地形の台地上に存在しているのである。

①の浅間火山南麓では、こうした田切り地形は平坦部でみられるほど発達していないが、浸食によって作り出された台地上及び緩やかに傾斜する斜面上に遺跡は立地しており、これには三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡が該当する。

西丸山遺跡は高峰山麓層群の天池層の上に立地している。この天池層は高峰山麓のほとんどの火砕流に乗ったり、切られたりして、高峰火砕流堆積物に覆われている。主に灰質火山砂礫層で構成されている。

一方、深沢遺跡群の所在する諸・西小諸地区は、三方・高峰山などの烏帽子火山群の裾野をなし、山体部を深く刻み浸食して流下する諸河川の形成した押出扇状地を形成している。その地質は烏帽子火山群の火山活動による、凝灰角礫岩、泥流、火砕流などから構成されている。深沢遺跡群は、深沢川の形成する

押出扇状地性堆積物の上に立地しているのである。

第2節 歴史的環境

本節では小諸市域の遺跡を概観したい。

小諸市域で確認される旧石器時代の遺物は千曲川左岸の南西部地域にみられる御牧が原台地で2例が認められるにすぎない（註1）。また浅間火山南麓の北部地域は前節で述べたように、約1万1千年～約1万4千年前頃に堆積した浅間第1及び第2軽石流が厚く覆っているため、旧石器時代の痕跡を知ることは極めて困難であり、その実態は不明である。

縄文遺跡は千曲川第一段丘上にある大久保地籍の水遺跡の標高約550mの地点を最低とし、糠地地籍の水水平C遺跡の約1140mまでの間に分布しており、約130か所が確認されている（小諸市誌編纂委1974）。なかでも浅間火山南麓の標高約700m～850mにかけての地帯に縄文遺跡は集中している。このような事象はすでに『北佐久郡の考古学的調査』において八幡一郎氏が言及している（八幡1934）。八幡氏は、縄文時代にあたる「先史時代前期」の遺跡は「標高八百米臺最も多く、七百米及び六百米臺之に次ぎ、五百米臺一箇所、九百米臺三箇所に過ぎ」ないことを指摘している。これはこの標高地帯が浅間第一伏流水の湧水群地帯であることに起因するのであろう。今回調査した遺跡でも石神遺跡群には現在も続く湧泉がみられ、郷土遺跡の近くでも近年まで湧泉が存在したという。このような豊富な湧泉群に支えられ、浅間火山南麓には縄文文化が花開いていたのである。時期的には、本地域では石神遺跡群や郷土遺跡などで早・前期の遺構・遺物が、また石神遺跡群などで晩期の遺構・遺物が認められているが、遺跡数が急増するのは中・後期である。

さて、浅間火山南麓に展開する縄文遺跡の主なものとしては、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡、郷土遺跡、加増遺跡群、東丸山遺跡、西丸山遺跡等があげられる。そして地質的には烏帽子火山群に属するが、諸遺跡、寺ノ裏遺跡群、成立遺跡群（小諸市と東部町にまたがる）も一連のものとして理解できるだろう。加増遺跡は縄文時代中・後期及び古墳時代の複合遺跡であるが、昭和28年に発掘調査を行い、後期の敷石住居跡が2軒が発見されている。諸遺跡は早期～晩期にわたる遺物が認められるが、過去、正式な発掘調査は実施されていない。寺ノ裏遺跡は昭和5年に上小教育会郷土史研究部員を中心として発掘調査が実施され、昭和8年には国史跡の指定を受けている。発掘された遺構は縄文時代後期の敷石住居跡であったようである。大石沢川を隔て、約500mほど離れたところにはほぼ同時期に国史跡となった東部町成立遺跡が存在している。なお、本書で掲載する遺跡はその当該章でその概要を紹介することにしたい。他にも本地域では後期で西城遺跡、上遺跡、中大宮遺跡、塩野山遺跡が存在する。

東南部地域では加曾利E期～堀之内II期の住居跡13軒が検出された久保田遺跡が注目される。なかでも堀之内期に比定されるJ13号住は張り出し部を含めた長径約13m、短径約9mという大形の柄鏡形礫堤住居跡である。他には大林遺跡、長林遺跡、牛原遺跡、宮ノ反遺跡群、大塚原遺跡群、谷地原遺跡群、立原遺跡、菖蒲沢遺跡、耳取城跡などで中・後期を中心とする遺物が出土している。また大塚原遺跡では前期の土器片が出土している。晩期では城下遺跡で遺物が出土している。

千曲川左岸の南西部地域では水遺跡が認められる。本遺跡は千曲川左岸に発達する連続断崖上に位置し、崖錘の山麓平坦面から斜面にかけてひろがっている。昭和29年に『信濃史料』編纂に伴う考古資料調査の際に採集資料が注目され、翌30年に永峯光一氏によって発掘調査が実施された。発掘範囲は約20㎡弱とごく狭いものであったにもかかわらず、出土土器は1000点を超え、水I式・水II式が設定された。縄文時代晩期の標識遺跡として重要な遺跡である。また本遺跡は平成6年には再び永峯光一氏によって再調査

が、また8年には小諸市教育委員会でも発掘調査が実施されている。

弥生時代の遺跡は少ない。北部地域では石神遺跡群から後期箱清水式の土器片が、野火附遺跡から中期後半の土器片が、本書収録の郷土遺跡から中・後期の土器片が、それぞれ出土しているのをあげる程度であり、遺構は検出されていない。しかしながら、同じ浅間火山南麓地域では御代田町の細田・下荒田遺跡で後期末のほぼ同時期と考えられる住居跡が計15軒検出されており、付近の湿地などを利用して水稻耕作を行っていたことも近年では推測されている（御代田町誌編纂委1998）。東南部地域では久保田遺跡で後期の住居跡1軒と方形周溝墓1基が検出されているのが注目される。本遺跡では続く弥生時代末から古墳時代前期にかけての時期にも2軒の住居跡と2基の円形・方形周溝墓が検出されている。ここでは東海系土器の出土もみる。他には宮ノ反遺跡群で中期栗林式と後期箱清水式の土器破片、立原遺跡で挟入石斧が出土しているのをあげるにすぎない。

古墳時代前期にはいると、東南部地域の久保田遺跡、和田原遺跡、竹花遺跡、大下原遺跡、野火附遺跡、五領B遺跡などで住居跡が認められるようになる。和田原遺跡では初頭期の住居跡4軒が検出され、東海地方西部、東部以東の土器がみつまっている。野火附遺跡では古墳時代前期末から中期初頭の住居跡が検出されている。五領B遺跡では前期5軒・中期1軒の住居跡が認められる。古墳時代中期は、調査例が少なく、東南部地域の竹花遺跡、前述した野火附遺跡、五領B遺跡などで住居跡が検出されているのをあげるにすぎない。

古墳時代後期になると、集落遺跡は東南部地域の田切り台地上に爆発的な増加をみる。これらは計画村落と考えられ、古墳時代後期から奈良時代と続き、そして平安時代初期の10世紀代をもって集落が急速に消滅していくものが多い。これは東南部地域及び佐久市北部からなる通称佐久平の田切り地形に顕著にみられ、周防畑遺跡群、栗毛坂遺跡群、長土呂遺跡群、芝宮遺跡群（以上佐久市）、中原遺跡群（小諸市）、鋳物師屋遺跡群（佐久市、御代田町、小諸市）などがあげられよう。小諸市域についてみれば、中原遺跡群では古墳時代後半から平安時代にかけての住居跡約140軒、掘立柱建物跡約90軒が検出されており、小諸市の鋳物師屋遺跡、佐久市の鋳物屋遺跡・前田遺跡、御代田町の野火付遺跡・十二遺跡・根岸遺跡・前田遺跡を含む計7遺跡からなる鋳物屋遺跡群は古墳時代後期から平安時代にかけて400軒を超える竪穴住居跡及びほぼ同数の掘立柱建物跡などが検出されている。また実質的には鋳物師屋遺跡群を構成する一遺跡と考えられる埋文センターで調査した宮ノ反A遺跡群では住居跡91軒、掘立柱建物跡79棟が検出されている。他には久保田遺跡、宮ノ反遺跡、関口B遺跡、大下原遺跡、東下原遺跡、五ヶ城遺跡などがあげられる。宮ノ反A遺跡群竹花遺跡では県内初の土製模造六鈴鏡が住居跡カマド脇から出土する。宮ノ反A遺跡群では7世紀末から8世紀初頭頃に廃棄された官衙跡が認められている。

次に古墳についてみよう。小諸市域では現在のところ、前期・中期の古墳の存在は知られておらず、すべて後期古墳である。北部の浅間火山南麓では松井古墳、郷土古墳群、北霞古墳群、堰下古墳群などがみられるが、当該時期の集落遺跡はほとんど認められない。東南部地域では後期古墳としては一ツ谷大塚古墳、耳取大塚古墳、西十文字古墳、十文字古墳などがある。現在は消滅しているが、かつては八幡在家古墳も存在しており、明治時代頃には発掘もおこなわれ、人骨・刀剣などが出土したようである。7世紀前半に比定される耳取大塚古墳は径25m、高さ5mの規模をはかる小諸市域最大の単独円墳であり、市重要文化財に指定されている。他にも市村藤塚古墳、与良古墳、松井古墳、観音平古墳、久保田第2号墳、加増第1号墳、加増第6号墳、三子塚第1号墳、唐松第1号墳、唐松第2号墳、唐松第3号墳、唐松第4号墳、一ツ谷大塚古墳の13基も市文化財に指定されている。またすでに消滅してしまったが、加増4号墳では昭和20年に人物埴輪が発見されている。

奈良時代では前述した鋳物屋遺跡群が代表にあげられよう。古墳時代後期から続く本遺跡群の中心は7

世紀後半から8世紀にかけての時期であり、250軒以上の竪穴住居跡がこの時期に比定されている。なかでも小諸市域内の鋳物師屋遺跡では溝で区画された倉庫群がみつまっている。また宮ノ反A遺跡群では官衙跡が発見されている。他には宮ノ反遺跡、舟窪遺跡などでも住居跡が認められている。中原遺跡群では4号住居跡から県下最古と思われる円錐形の鉄鐮が出土している。宮ノ反A遺跡群竹花遺跡では奈良時代後半の土坑から出土した漆紙文書が特筆されよう。

また律令体制下では駅制の整備も進められ、東山道には信濃国に15の駅が置かれた。延喜式には小県郡の浦野、亘理に続き、佐久郡では清水、長倉の駅名が記されている。このうち清水駅跡は昭和24年の北佐久郡志編纂のための調査によって地割や堰などを残していることが確認され、諸地籍が比定地とされている。清水駅跡は市史跡に指定されている。

平安時代にはいと東南部地域で古墳時代後期から営まれてきた計画村落も10世紀代をもって急速に衰え、その後は北部地域にも小単位の山棲み集落が形成されてくる。東南部地域では十石坂上遺跡、宮ノ反遺跡、宮ノ北遺跡、関口A遺跡、関口B遺跡、下柏原遺跡、宮裏遺跡、久保田遺跡、大塚原遺跡、竹花遺跡、舟窪遺跡、五ヶ城遺跡などがみられ、北部地域では石神遺跡群、郷土遺跡などで住居跡が検出され、いわゆる山棲み集落として理解できよう。また竹花遺跡では郷名を示す「大井」のほか多数の墨書土器がみつまっている。

中世は城跡と城館が中心となっている。北部地域では柏木南城跡、柏木北城跡、古屋敷遺跡、宮崎城跡などがみられ、ひとつの城域に属するものと考えられる。北部地域では他に小諸市教育委員会で平成8年度調査された典型的な山城である富士見城跡も存在した。東南部地域では城館跡としては耳取城跡、北ノ城跡、舟窪館、森山城跡、塩川城跡などが存在し、五ヶ城遺跡では室町時代の墓跡が確認されている。また北裏B遺跡からは五輪塔群が出土している。関口A遺跡では16世紀以降の土坑墓がみつきり、宮ノ反A遺跡群では15世紀中頃まで使用された居館跡が検出されている。南西部地域では平成8年に全面発掘された愛宕山城跡が特筆されよう。

近世の小諸藩は1591年に入封した仙石秀久が小諸域内外を整備した。以降は徳川氏、松平氏、青山氏、酒井氏、西尾氏、石川氏の統治を経て、1702年に牧野康重が入封してからは、1869年の廃藩置県まで牧野氏による治世が10代にわたり続いた。北国街道には平原、唐松、青木の3か所に一里塚が築かれたが、このうち現存する唐松一里塚が市史跡として指定されている。また幕府直轄領であった御影地区では中之条代官の出張陣屋であった御影陣屋跡がみられ、県史跡に指定されている。発掘調査で遺構が検出された例はまだないが、本書掲載の郷土遺跡では近世陶磁器や寛永通宝などの遺物が認められている。

註1 小諸市教育委員会花岡弘氏のご教示による。

引用参考文献

- 小諸市誌編纂委員会 1974 『小諸市誌 考古篇』
 小諸市誌編纂委員会 1986 『小諸市誌 自然篇』
 御代田町誌編纂委員会 1998 『御代田町誌 歴史編—原始・古代・中世—』
 八幡一郎 1934 『北佐久郡の考古学的調査』、今回は1978年に歴史図書社から再刊されたものを参照した。

第2節 引用遺跡報告書

- 中原遺跡群・芝宮遺跡群：長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18—佐久市内その4・小諸市内その2—芝宮・中原』、小諸市教育委員会 1988 『中原』
 野火附遺跡・宮ノ反A遺跡群：長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17—佐久市内その3・小諸市内その1—栗毛坂・長土呂・野火附・前田・宮ノ反A・下前田原・長野原・赤沼』
 東下原遺跡・大下原遺跡・竹花遺跡・舟窪遺跡・大塚原遺跡：小諸市教育委員会 1994 『東下原遺跡・大下原・竹花・舟窪・大塚原』、小諸市教育委員会 1994 『大塚原（第二次）』
 五ヶ城遺跡：小諸市教育委員会 1981 『五ヶ城』
 久保田遺跡：小諸市教育委員会 1984 『久保田』

第2章 遺跡の環境

宮ノ反遺跡：小諸市教育委員会 1985 『宮ノ反』

耳取城跡・古城遺跡：小諸市教育委員会 1986 『耳取城跡・古城遺跡』

西城遺跡：小諸市教育委員会 1989 『西城遺跡』

関口A遺跡・関口B遺跡・下柏原遺跡：小諸市教育委員会 1991 『関口A・関口B・下柏原』

八幡在家遺跡：小諸市教育委員会 1994 『八幡在家』

柏木南城跡：小諸市教育委員会 1995 『柏木南城跡』

十石坂上遺跡：小諸市教育委員会 1995 『十石坂上』

戊立遺跡・寺ノ浦遺跡・耳取大塚古墳・加増古墳群：長野県史刊行会 1982 『長野県史考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』

富士見城跡：小諸市教育委員会 1997 『富士見城跡』

氷遺跡：永峯光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代 九』（今回は『小諸市誌 考古篇』に再録されたものを参照した。）、永峯光一・小林青樹1995 「氷遺跡第二次調査概要報告」『信濃』47巻-4号、小諸市教育委員会 1998 『柳沢遺跡・氷遺跡』

愛宕山城跡：小諸市教育委員会 1998 『愛宕山城跡』

その他には、小諸市教育委員会 1987 『長野県小諸市遺跡詳細分布調査報告書』、小諸市教育委員会 1999 『小諸の文化財』を参考とした。

(補註) 本書掲載の8遺跡の整理作業は、桜井秀雄(郷土遺跡、深沢遺跡群)と宇賀神誠司(三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、東丸山遺跡、西丸山遺跡)が分担して行った。また整理作業に従事された方は、以下の通りである。

桜井班(第7章に掲載)

宇賀神班(片桐ゆかり、岩田あさ江、大内秀子)。

記して深く感謝の意を表する次第である。

第3章 ^{みつごづか}三子塚遺跡群

第1節 遺跡の概観

小諸市大字平原に位置する大遺跡群であり、標高は723～785mほどをはかる。田切り地形が発達する浅間山南麓の台地上に立地し、南側に繰矢川、北側に北川が西流し、これにより垂直崖をつくりだしている。とりわけ繰矢川の田切り地形は、その中でも最大級で、比高差30mほどをはかる。田切りを挟んで、南側に縄文時代の遺物散布地である赤沼遺跡（長野県埋蔵文化財センター1999）や律令期の計画村落である宮ノ反A遺跡群（小諸市教育委員会1985・1994及び長野県埋蔵文化財センター1999）、北側に縄文時代を主体とする三田原遺跡群（本書第4章所収）、北原遺跡群、平原城跡などが存在する。

この遺跡群は、幅が狭いながらも距離は長大で、長さ3km余りにも及んでいる。国道18号が通過しており、由来はわからないが、古道が通過していたようであり、以前「平原一里塚」が存在したらしい（小諸市教育委員会1987）。中世以降、平原に集落が営まれ、集落以外には畑地・山林が分布している。

遺跡群東端部近くには、古墳時代後期後半から奈良時代初頭頃の三子塚古墳群、また中央付近には、同じく寺裏塚古墳が築かれており、古墳時代終末期以後、ここがその葬地として選ばれている。また、遺跡群西端部にほど近い部分を、昭和27年に「下原住居跡」として2棟の竪穴住居跡が調査された（永原1974）。弥生時代後期（古墳時代前期初頭のものか？）と古墳時代後期のもので、少なくとも西端部は、古墳が築造される頃、集落の場として利用されていたことがわかる。

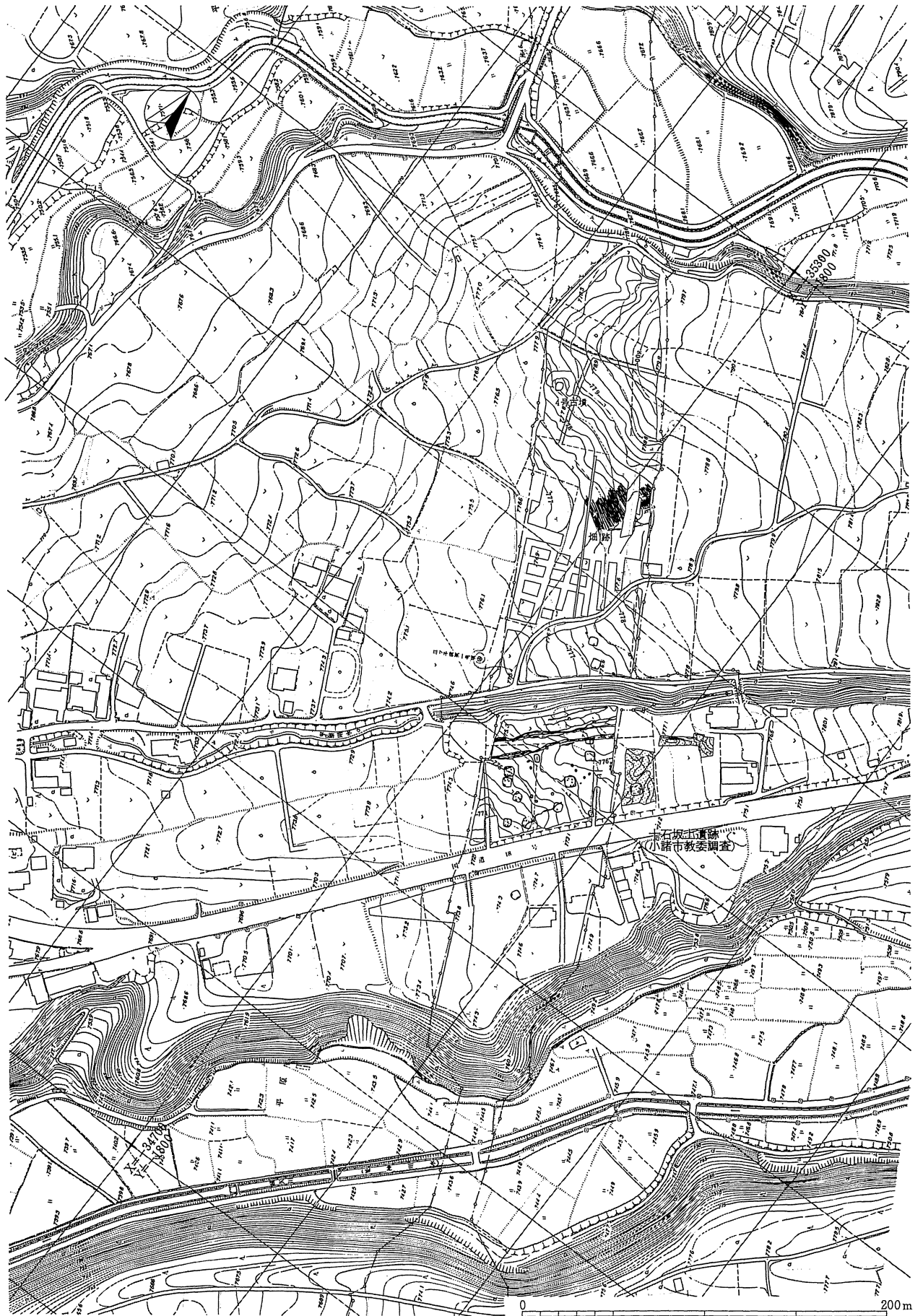
上信越自動車道発掘調査終了後のことであったが、遺跡群西端部で国道141号バイパス工事に先立つ調査が行われ（小諸市教育委員会1994）、また上信越自動車道東隣で個人土地改良事業に伴って調査が行われた（小諸市教育委員会1995）。前者では、比較的規模の大きい古墳時代前期及び後期後半の遺構群が発見され、あわせて平安時代の遺構も若干認められた。後者では、9世紀後半と11世紀代の竪穴住居跡が確認され、細々とした平安時代の集落の姿が読み取れた。このように、ようやく近年になり、遺跡の概観が読み取れるようになってきた。

第2節 調査の概要

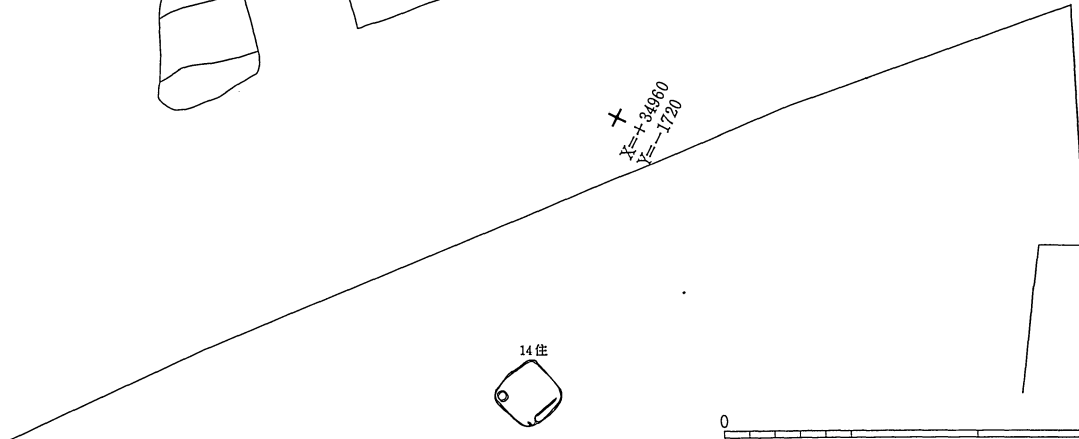
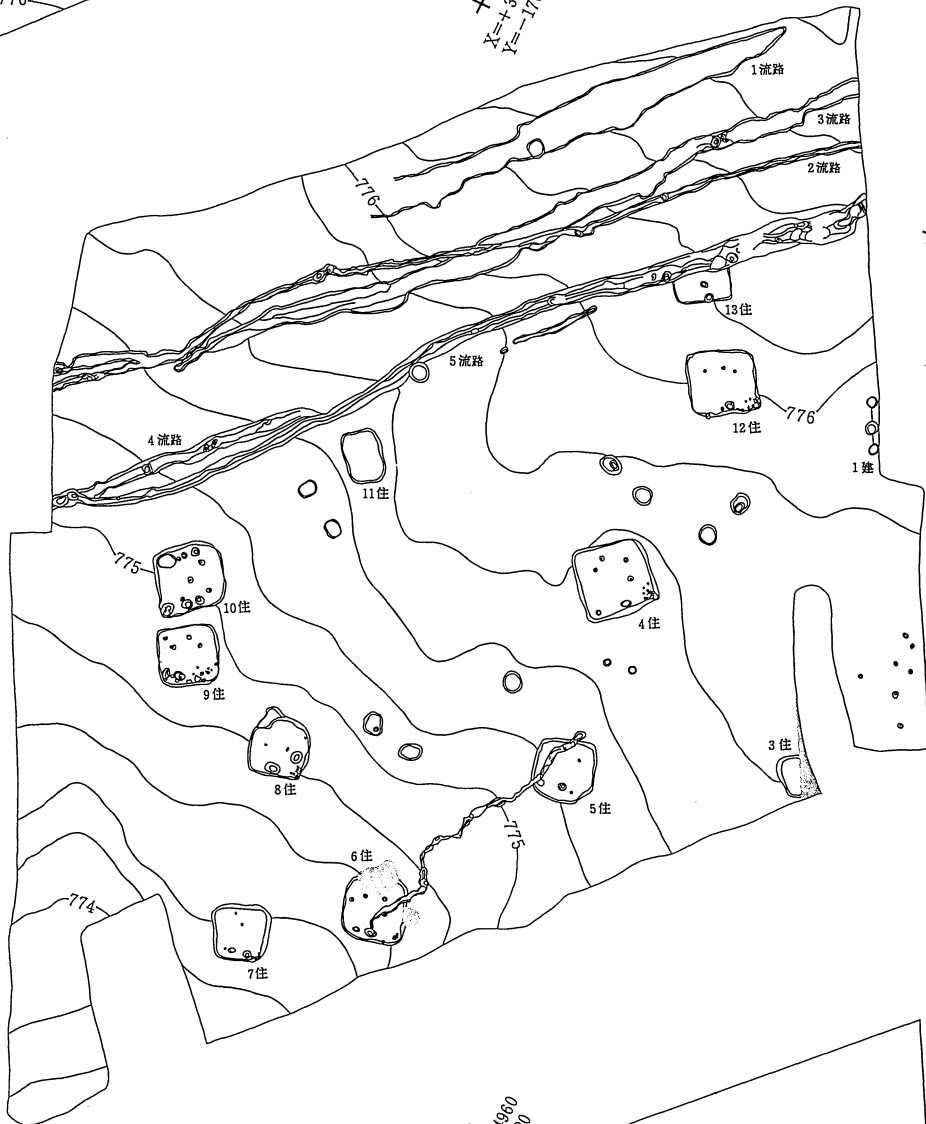
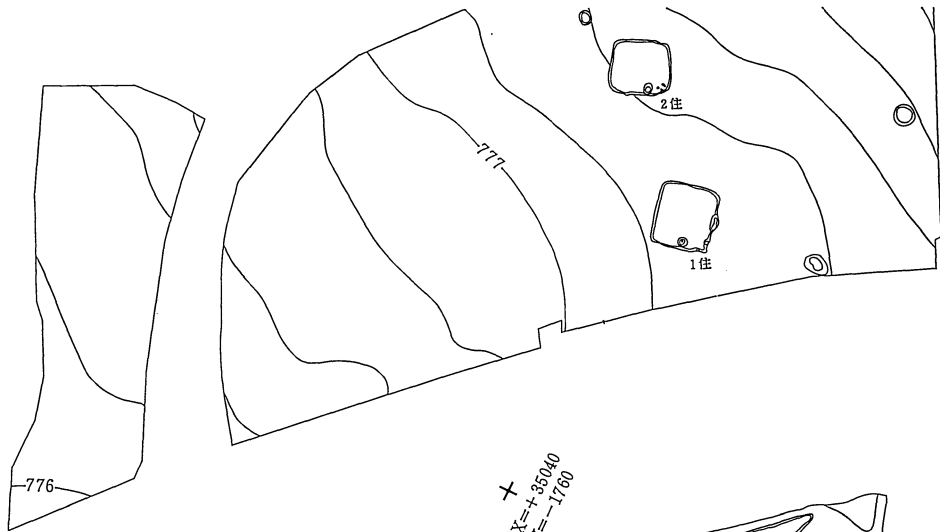
上信越自動車道は、遺跡群の東端部分を南北に横断することとなり、30,000㎡が調査の対象となった。前節で紹介した「下原住居跡」の調査地点は、はるか西方に位置することから、付近一帯の発掘調査は今回が最初のこととなる。また、すぐ西側には三子塚古墳群が分布する。

平成3年度から調査を始めたが、用地買収が9月以降に遅れたこと、ならびに宅地や作付けされた畑地の存在から、調査可能な範囲が数回に分けられた。結果的に、途切れながらも平成4年度まで3回に分けて調査を実施した。

平成3年9月17日、調査対象範囲のやや北寄りの部分、8,900㎡を第1次調査として開始した。遺構分布は希薄であったが、古代末の竪穴住居跡2棟・時期不明の畑跡・その他を確認した。途中で一部途切れた格好になったが、11月16日終了した。



第1図 遺構配置(1)



第2図 遺構配置(2)

同年12月16日から20日までの間に、これから国道18号にかけ、試掘トレンチを設定した。約7,000m²の範囲であったが、全域に竪穴住居跡が確認でき、全面的な調査が必要と判断した。

平成4年4月14日から8月4日までに第2次調査として、国道18号北側で第1次調査範囲外を調査し、また第3次調査として、11月17日から26日までの間に国道18号南側の調査を行った。面積21,000m²である。古代末の竪穴住居跡群・掘立柱建物跡・流路跡・土坑などが検出されている。そのほかに、奈良時代初頭の古墳1基を確認したが、周知されている3基の古墳群とは別物であり、これを三子塚4号墳として調査した。

調査日誌抄

平成3年度		12月16日～20日	
9月17日	第1次調査開始。手掘りによる試掘調査から行う。		第2次調査分の試掘調査を行う。
9月27日	成果がないまま、試掘調査終了。	平成4年度	
10月2日	重機による試掘調査及び表土剥ぎ作業開始。	4月14日	第2次調査開始。遺構検出作業。
10月5日	畑跡を確認。	4月20日	遺構掘削作業開始。
10月7日	竪穴住居跡1棟・土坑1基を検出。全面表土剥ぎに変更。	5月27日	三子塚4号墳掘削開始。
10月14日	遺構検出作業。	6月25日	航空撮影実施。
10月16日	遺構掘削作業開始。	6月28日	現地説明会実施。見学者178名。
10月30日	表土剥ぎ再開。	8月4日	調査終了。
11月16日	調査終了。	11月17日	第3次調査開始。竪穴住居跡1棟を検出。
		11月26日	調査終了。

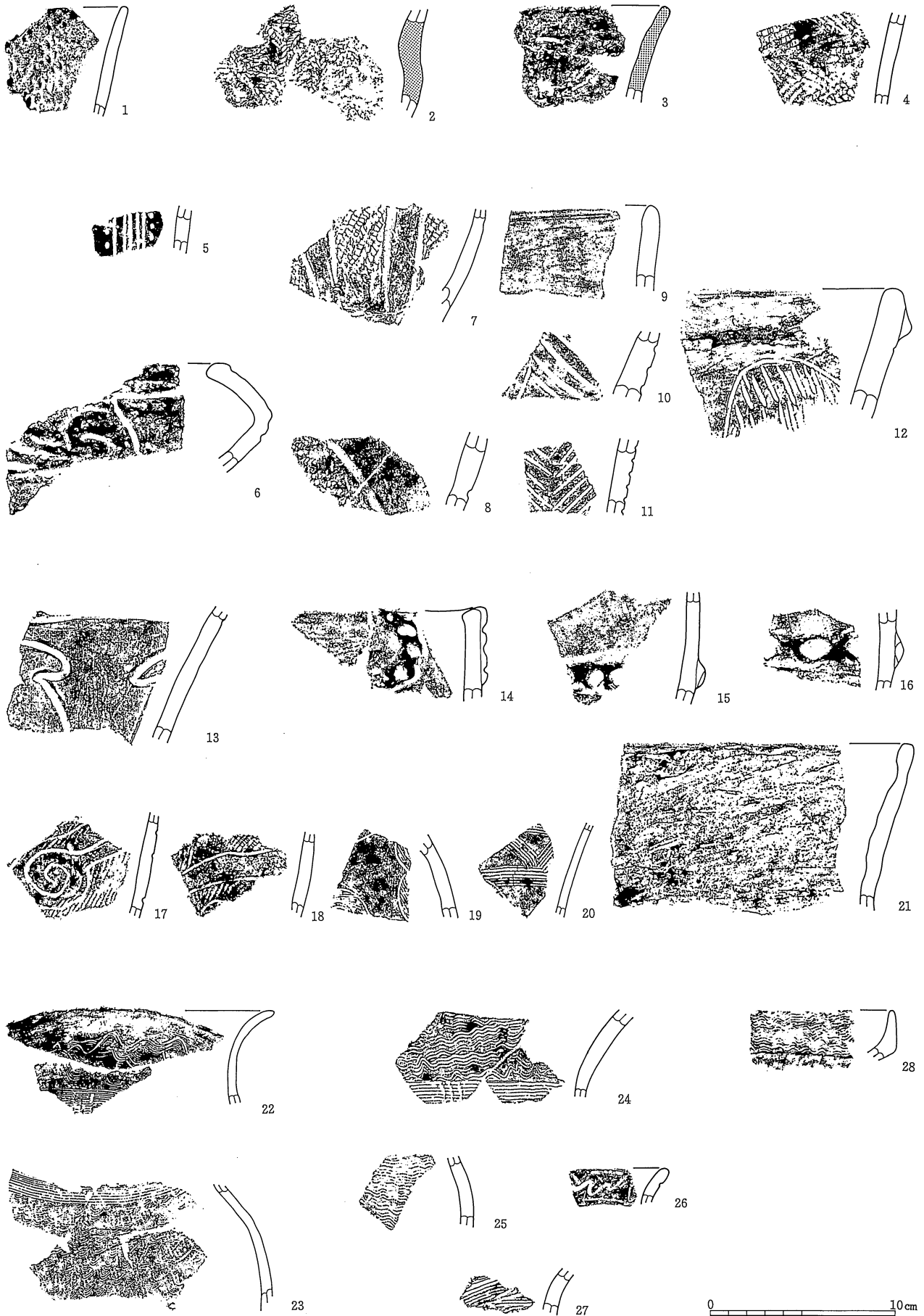
第3節 縄文時代から古墳時代の遺物 (第3・4図、P L 7)

これらは、すべて遺構外ないしは奈良時代以降の遺構内から出土した遺物であり、遺構はまったく確認されていない。

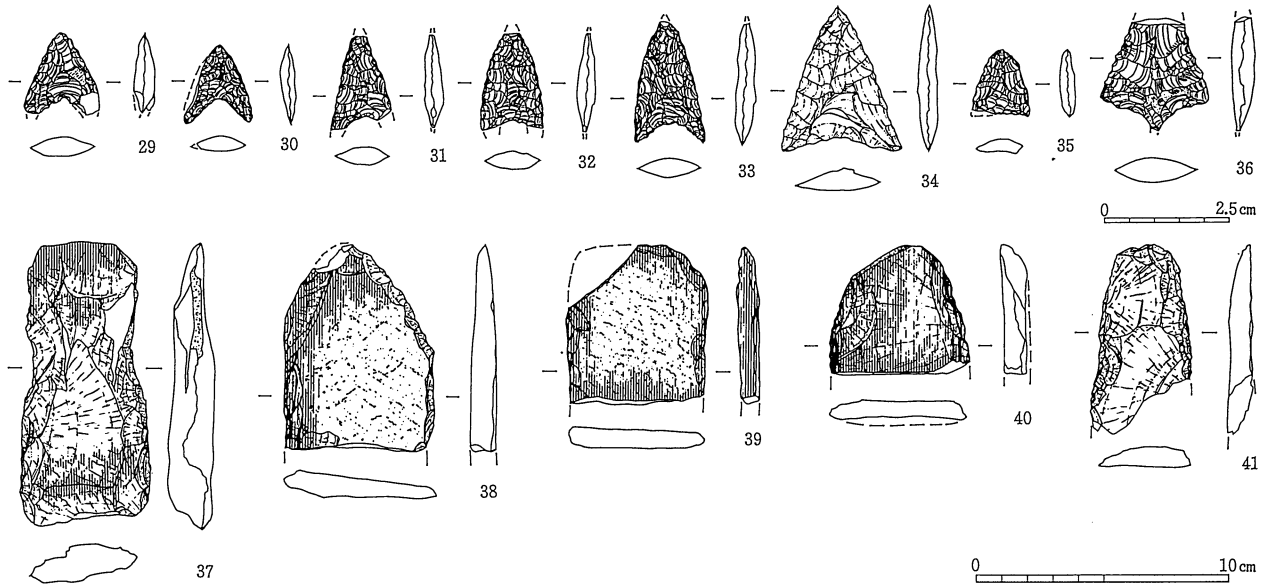
1～21が縄文土器である。1が早期中葉細久保式の押型文土器、2・3はともに前期初頭の所産だが、2は花積下層式から二ツ木式、3が中越式に併行するものか。4は前期初頭から中葉にかけてのものである。5は中期初頭五領ヶ台Ⅱ式併行、6は中期中葉勝坂式の浅鉢だが、その中でも比較的新しい段階のものであろう。7～11は中期後葉加曾利EⅢ式、12は同じくEⅣ式新段階の産物である。13～21は後期前葉の土器で、13は称名寺Ⅱ式、14～16は称名寺式から堀之内1式、17～20は堀之内2式、21は称名寺式から堀之内式にかけてのものと思われる。

22～28が弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器である。22～27が甕、28が壺であり、後者については口唇部外面を除いて赤色塗彩が行われている。22・23は同一個体で、頸部の屈曲度合いからすれば、明らかに古墳時代前期初頭の所産であることは間違いなく、また、28の口縁部断面形態も弥生時代まで遡らせることが難しい。24～27については、時間幅を広く捉えなければならないものの、付近周辺には弥生時代の集落が認められず、したがって古墳時代前期初頭の可能性が高い。

29～41は、縄文時代の石器である。時期は不明だが、29～36は石鏃、37～41が打製石斧である。



第3図 縄文時代から古墳時代の土器



第4図 縄文時代の石器

第4節 奈良時代の遺構と遺物

1 三子塚4号墳 (第5～7図、PL2・3・8・9)

未周知の古墳であったが、事前踏査の際、地表面の一部に古墳に使用されたとされる安山岩系の礫が多数散在していたため、すぐに存在が判明した。

田切り台地の北縁、台地部分でも最も高位置なところを狙って構築されている。また、付近はまったくの平坦地であり、いわゆる「風水思想」の影響は認められない。

墳丘は一部しか残っておらず、形態を知ることができない。ただし、北側に周溝が存在し、それによれば径8 m前後の円墳と思われる。

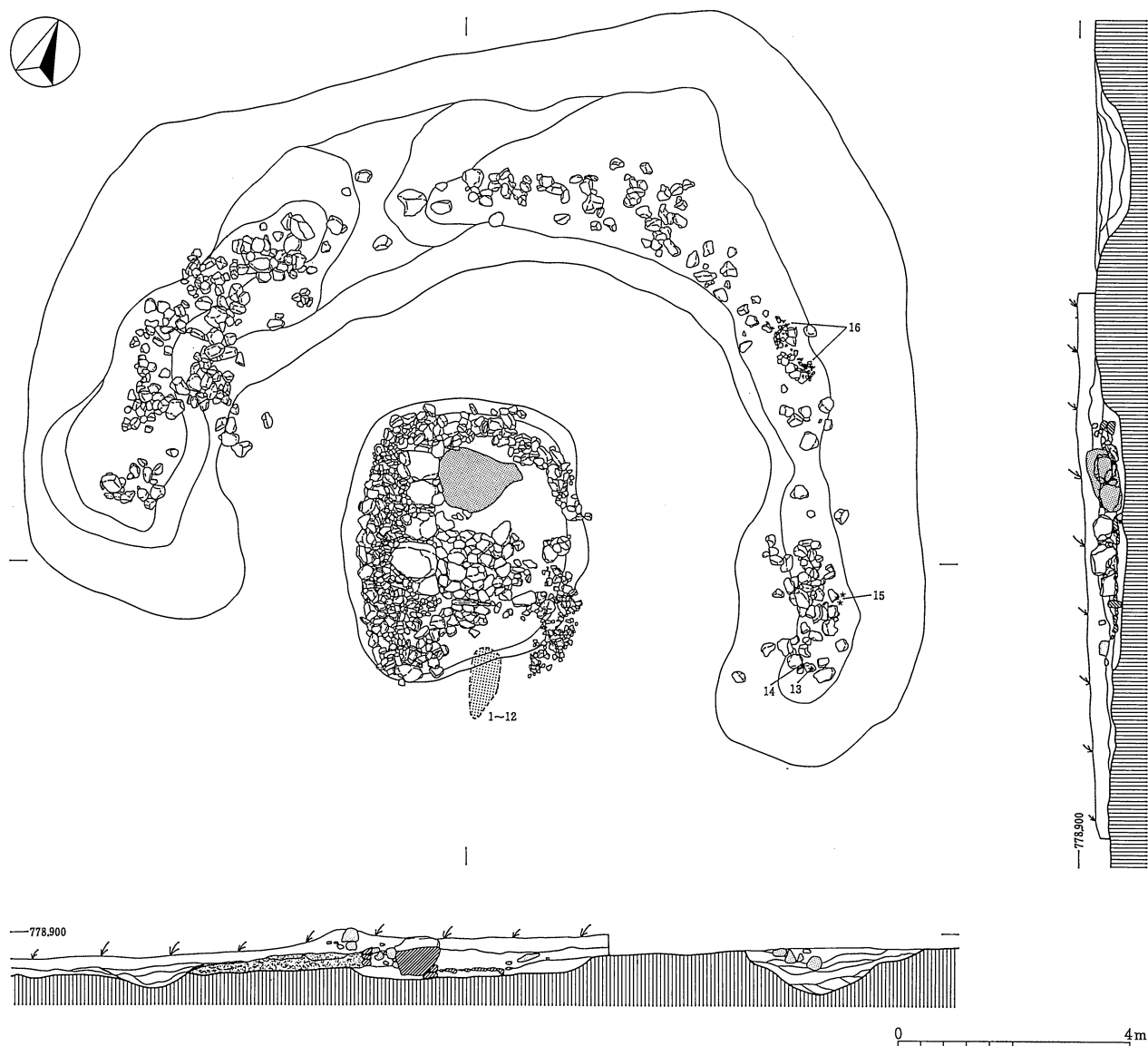
周溝は、浅間第2軽石流上面のところで、幅2.52～5.00 m、深さもまちまちで35～94 cmをはかる。形態的にもけっして正円形とはならず、かなり無造作に掘られている。南端についてはきれいに立ち上がり、明らかに周溝をここで止めており、あわせて石室の主軸ラインと線対称ではない。覆土中層に礫が多数含まれているが、古墳を取り巻く外護列石ないし葺石が崩落したものと思われる。

石室の開口方向は、N-22°-Wを呈する。石室構築面は若干地表を掘り込み、石室の一部が掘方内に納まるようにしているため、その部分だけが微かに残存していた。なお、墳丘の位置が明確にわからないものの、奥壁の位置が中心部よりもかなり奥まった地点に設けられたことは間違いない。

奥壁には、高さ1.10 m、幅1.46 mの自然石を利用しており、本来、腰石状に立石させたものだが、完全に内側に倒れこんでいた。幅を考慮に入れば、さらに上段に積み上げられた礫は少ないものと考えられ、低墳丘墳であったことが予測される。

側壁は、玄室西側の根石しか残存していない。板状摂理しやすい性状の礫を使用しているため、自然石が荒割りしたものかわからないが、それを掘方直上、横目地を描えながら小口積みし、しかも直線的に並べている。内側には控え積みとも取れる大形の礫が多数認められた。以上の点から、玄室の平面形は「短冊形」ということになる。

羨道部と玄室との境に段差はなく、また2個の栴石で区画している。栴石については、側壁から離れた



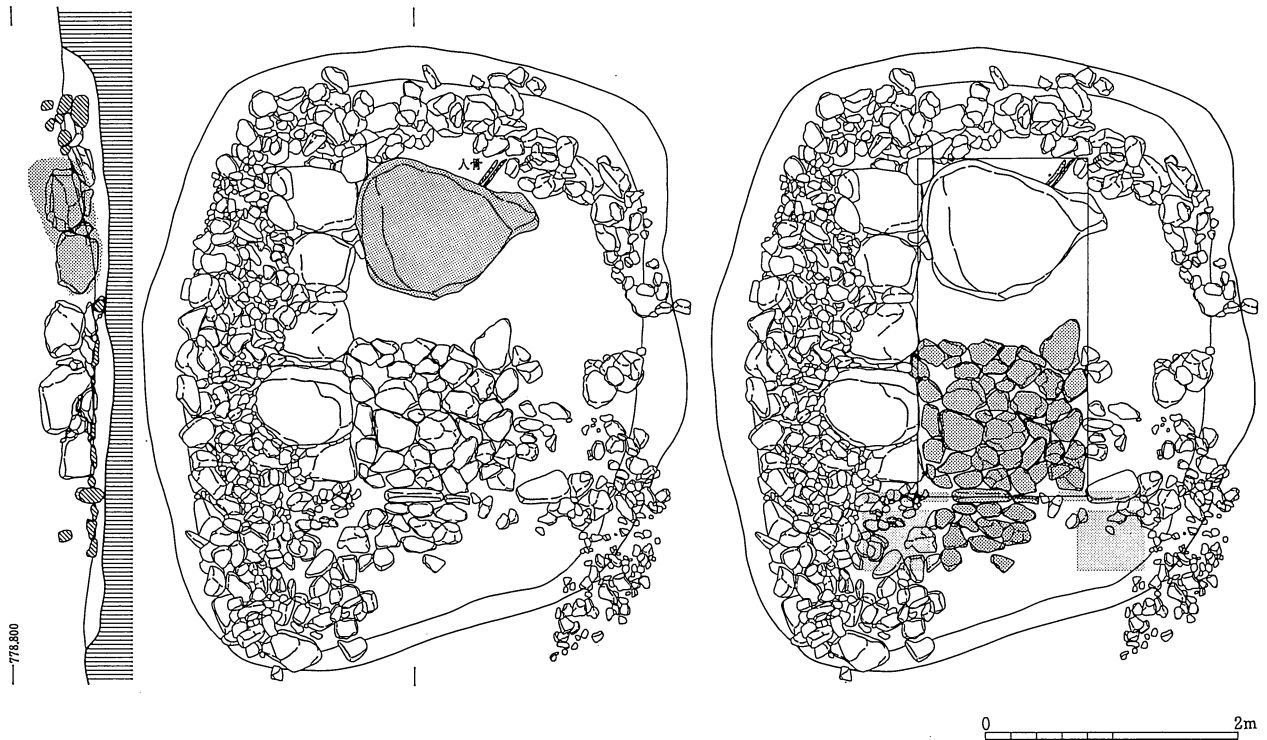
第5図 三子塚4号墳

位置にあるし、後記する床面との問題でもやはり両端が空いている。とすれば、おそらくこの両側に立柱石状の玄関が付いていたはずで、実際に柵石の両側には礫らしきものがない。したがって、本石室は「玄関付両袖式横穴式石室」である公算が大きいといえる。

床面は玄室のみ完全な状態で残っていたが、羨道部は柵石近辺しか認められなかった。ともに掘方を埋めるような格好で盛土した後、偏平な亜角礫を水平に敷設したものである。玄室の礫床については、奥壁に向かって半分もいかないまま終了しているが、横幅は1.34m前後、また奥壁の倒れた位置からすると、長さは2.68m前後に達するものと思われる。

石室の外部には、純粋な礫層からなる裏込め石が認められた。さらにその外側には、盛土との混交を防ぐために、裏込めの外側に石積みが施されている。一部だが、石積みの外側に第1次墳丘と呼ばれる初期の盛土を確認しており、それをみれば、築造当初、浅間第2軽石流上面まで一度整地した可能性が高い。

出土遺物は、1が土師器で群馬県の鏑川流域からもたらされたもの、それ以外は須恵器である。1～12が羨道部先端から集中して出土し、13～16が周溝東側から礫とともに、17・18が本古墳から出土していることは確かだが場所が不明なものである。なお、2～7の底部外面はヘラ切り手法によるものである。玄室からは、一片たりとも出土していないし、もちろん装身具や武具の副葬品もなかった。



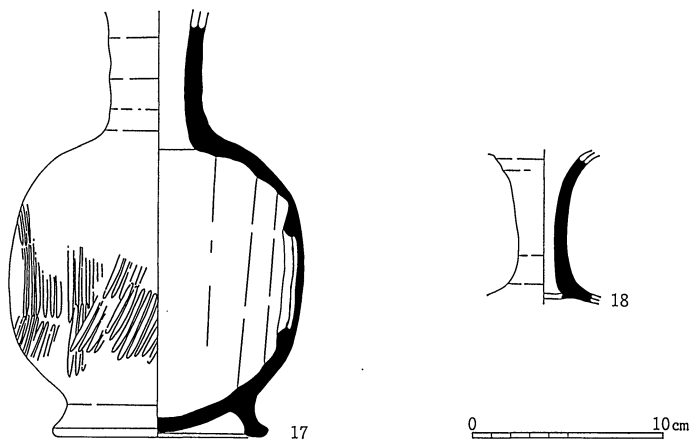
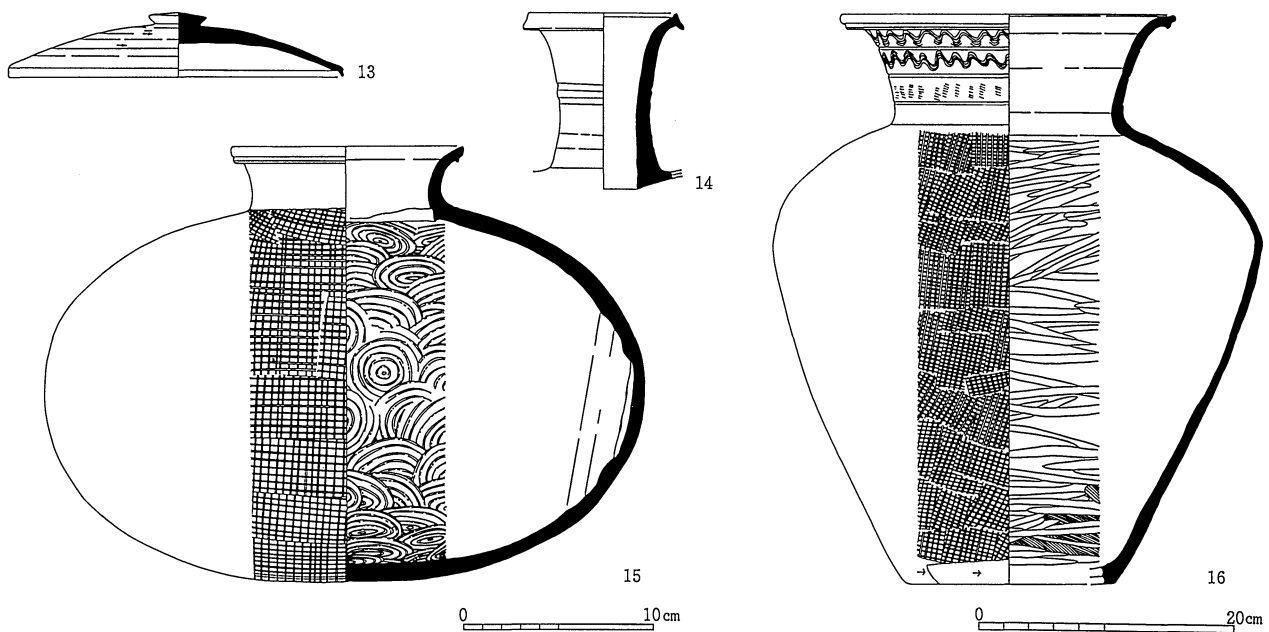
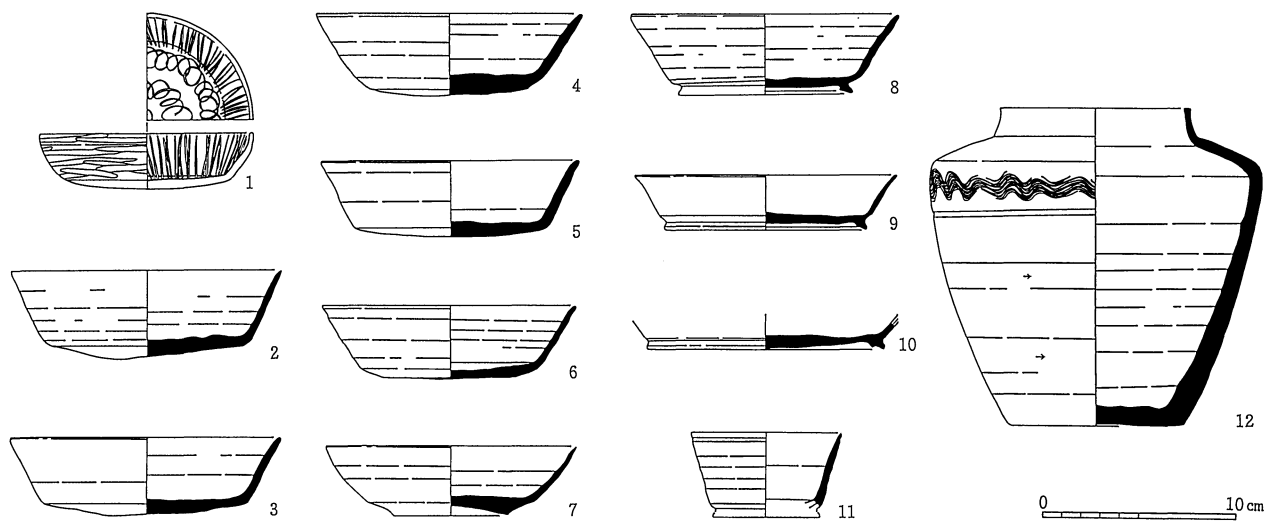
第6図 石室

玄室内からは、人骨が出土している。北東コーナーの床面直上、奥壁との隙間に半分かかるようにして大腿骨らしき人骨が認められたが、取り上げの際、細かな小片と化してしまった。いずれにしても、波形の亀裂が入り、焼きムラが一切みられないため、かなり高熱で火葬されたものと判断できる。それ以外にも、焼骨の小破片が多数出土しており、形態を留めないものも無数あるようだ。火葬骨を収納した容器は破片すら出ていないので、木櫃のようなものを骨蔵器にしたものか。

築造時期は、土器からすれば型式差がほとんどなく8世紀前葉、また、石室の形態からみても規模からして7世紀第4四半期以降、あわせて玄室の側壁に腰石を持たないこと、奥壁の位置が奥まったところに存在すること、低墳丘墳である可能性が高いことなどから、その中でもより新しい所産であることがわかる。また、副葬品に装身具や武具などが認められない点も7世紀の古墳には見当たらない。したがって、本古墳を8世紀前葉、奈良時代前葉の産物と見做している。

奈良時代の墓地であれば、火葬墓であってもけっして不思議ではないのだが、そのためにこれだけの古墳を造りえるかという疑問を抱く。しかし、奈良時代以降の小石室をもつ古墳は単葬墓が通例で、副葬することはまずない。古墳に埋葬してからはるか時を隔てた後、再度火葬墓として葬ったという可能性もなきにしもあらずだが、その時の容器、すなわち骨蔵器が存在しないのである。木櫃であればそれは単葬ではなく副葬なのである。本古墳が火葬として葬られた単葬墓という見方が強くなってこよう。

それとは別に、玄室の内法は幅約1.34m、長さ約2.68mとしたが、つまり1:2の割合で整数比が認められた。これを「完数」と呼び、すなわち、尺度を利用していたことは確からしい。奈良時代前葉といえ、まず唐尺(≒0.296m)が考えられるがそれはありえないし、尾崎喜左雄氏のいう高麗尺(≒0.35m)(尾崎1966)についても当てはまらない。奈良時代の古墳においても、なお身度尺を利用したのだろうか。近年になり、新井宏氏が高麗尺に打って変わって「古韓尺(≒0.268m)」というものを唱え、地方では8世紀代まで使用が存続したという(新井1992)。古韓尺の肯定も否定もしないが、その5尺が1.34mであるし、10尺が2.68mに換算可能である。ちなみに、墳丘の規模は径8m前後と見做したが、古韓尺の30尺が8.04mとなる。



第7図 出土遺物

第5節 平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

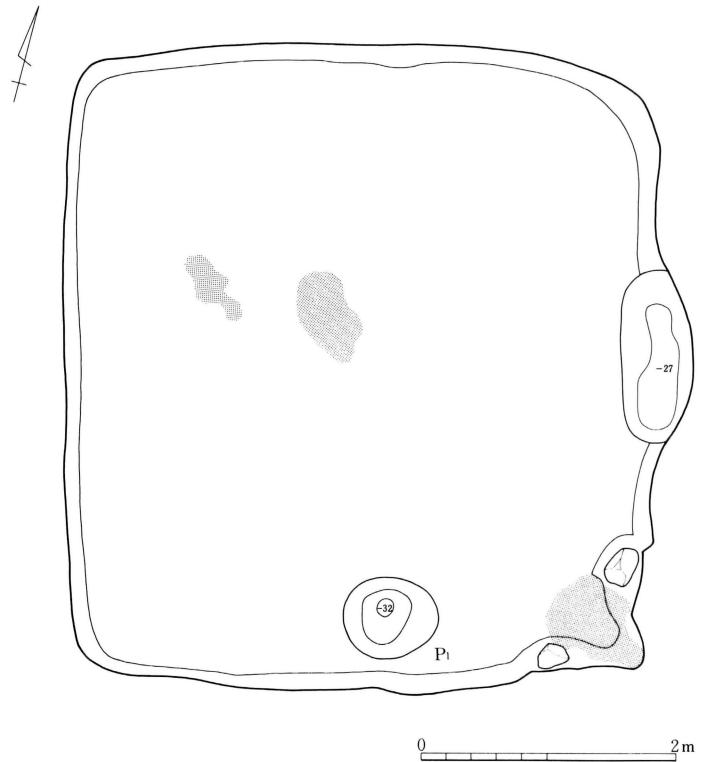
1号竪穴住居跡（第8図、PL4）

主軸はN-18°-W前後、主軸長は5.22m、副軸長は4.68m、壁高は最高で30cmをはかる。

柱穴・周溝などは認められず、唯一、この時期特有の南壁沿い中央に検出されたP₁が存在する。また、東壁際にも壁から半分突出した恰好で周溝状のピットが設けられていた。掘方は、一様にわずか数cmを確認しているが、これが本来「掘方」と呼べるものかどうかわからない。なお、堅緻面は存在しなかった。そのほか、床面の一部が焼土化していた。

カマドは、南東隅に構築されており、軽石製の袖石の一部が残されていた。内部がよく焼土化し、中央には灰層が認められている。

遺物は、覆土中から羽釜の破片が数点出土しただけであり、時期的には10~11世紀としかいいようがない。ただし、コーナーカマドを有することから、10世紀後半から11世紀代という最低限の確証は得られている。

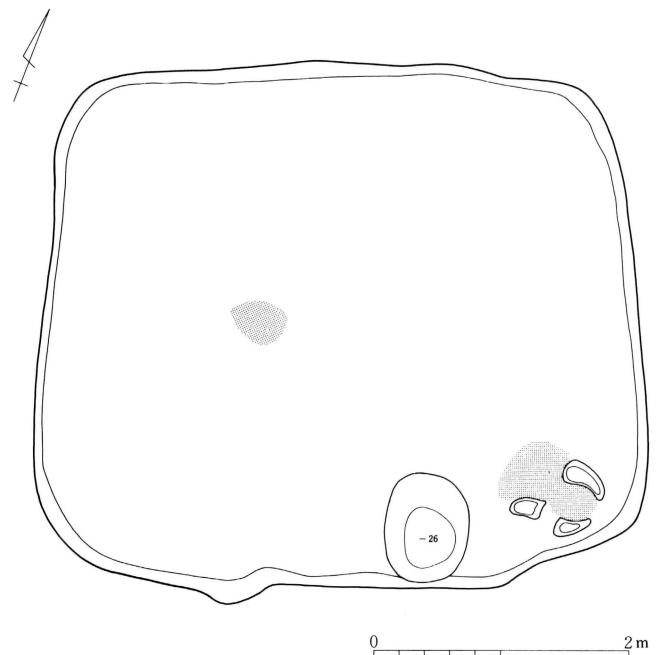


第8図 1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（第9図、PL4）

主軸はN-25°-W、主軸長は4.12m、副軸長は4.70m前後をはかる。壁高は、おおむね16cm内外であった。

柱穴や周溝などは確認されていないものの、南壁沿いにはやや大形のピットが認められた。床面は一様に軟弱であったが、全体的に数cm程度の掘方が認められている。住居中央部分の床面が焼土化していた。カマドは、南東コーナーに設けられている。火床のみを確認したが、袖石の掘方とも取れる小ピットが左右に認められている。



第9図 2号竪穴住居跡

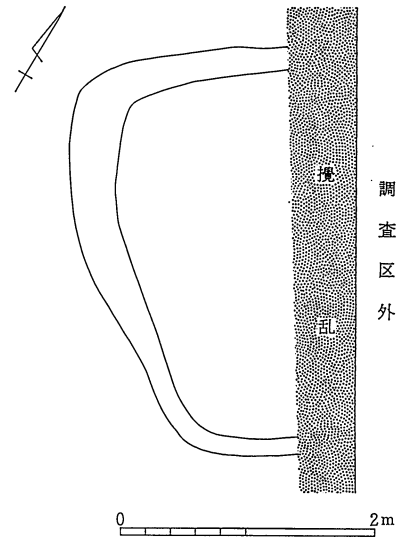
遺物は、羽釜の破片が出土しただけである。したがって、時期的には1号竪穴住居跡同様、10世紀後半から11世紀代という年代しか与えられない。

3号竪穴住居跡 (第10図)

主軸はN-36°-W、主軸長は3.24m、壁高は最高で32cmをはかる。住居跡東側半分を農道により破壊されていた。

柱穴などの内部構造は一切認められていない。床面はやや堅緻であったが、掘方は存在しなかった。壁の立ち上がりが緩やかな点は、ほかの住居跡とは異なる。

遺物は、羽釜の胴部小破片が2点出土したのみである。10~11世紀代の所産としかいえまい。



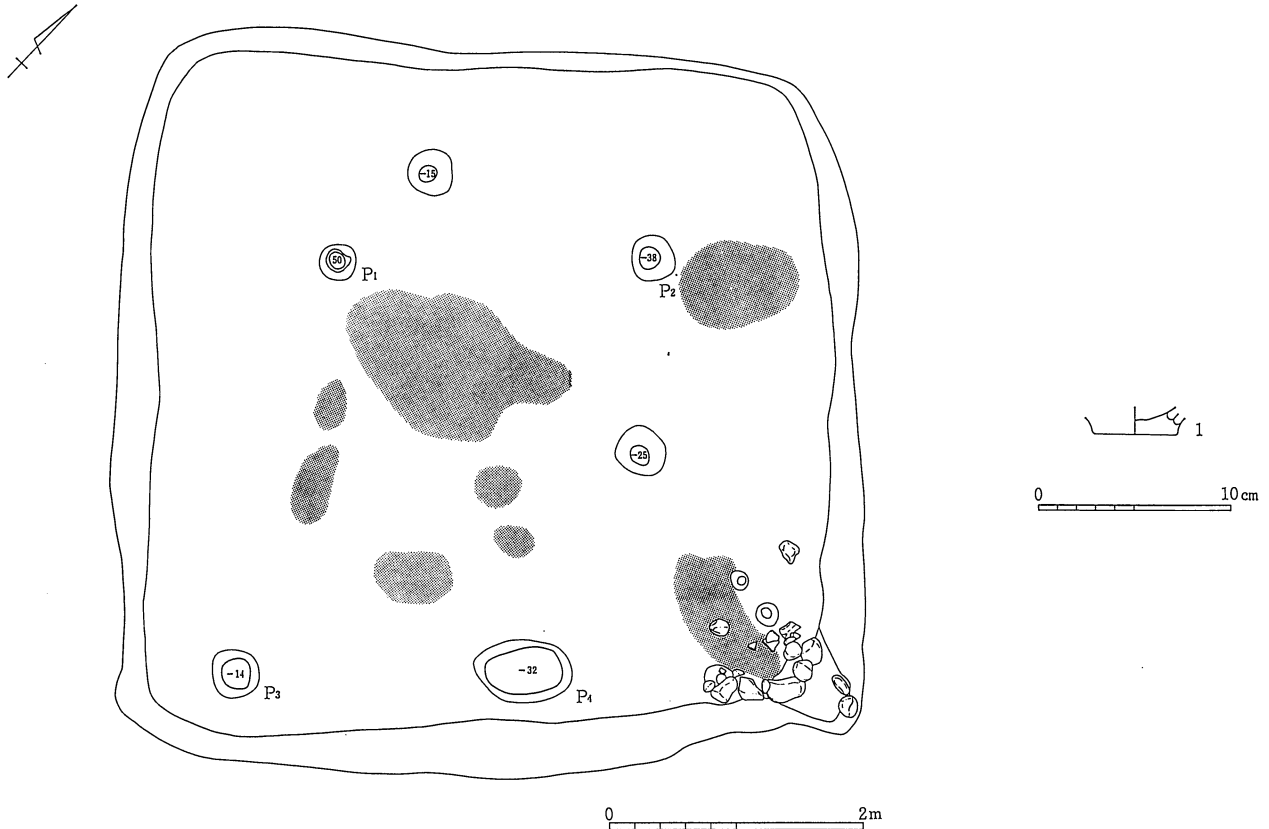
第10図 3号竪穴住居跡

4号竪穴住居跡 (第11図、P L 4)

主軸はN-45°-W、主軸長は5.80m、副軸長は5.84m、壁高は最高で45cmをはかる。

覆土には軽石が充填されており (P L 4)、埋没時に意図的な投棄が行われたものと思われる。掘方は深さ10cm前後のものが全体に認められた。また、床面の一部が焼土化していた。P₁~P₄が柱穴とも捉えられるが、平行四辺形を成しており、P₃の深度も比較的浅い。P₄をこの時期特有の南壁際大形ピットとみるほうが無難だろう。

カマドは、南東コーナーに設けられており、火床・煙道・礫で構築された袖の一部を確認した。



第11図 4号竪穴住居跡

遺物は1が土師質の坏ないし小皿で出土地点は不明、ほかに羽釜の破片が多数出土しているが実測不可能だった。

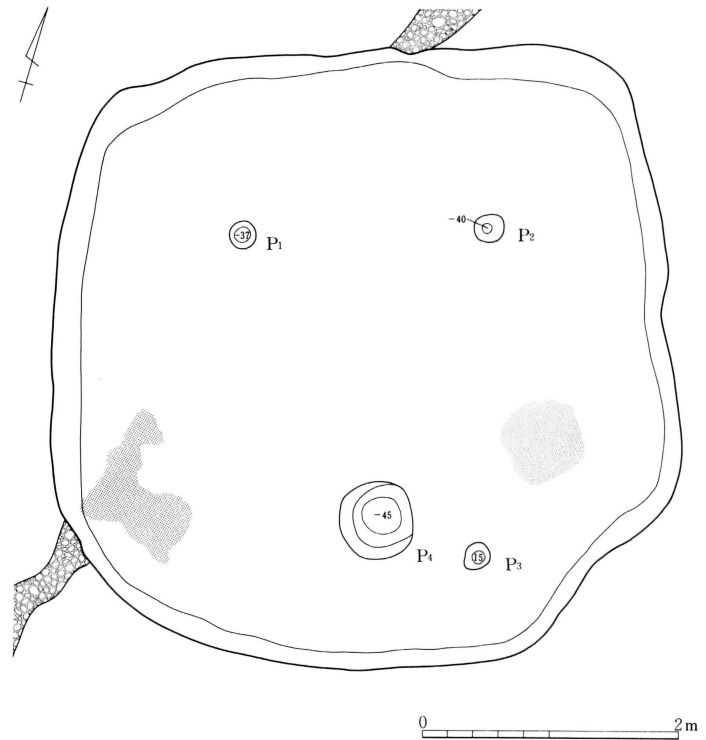
時期は10世紀末～11世紀代である。

5号竪穴住居跡 (第12図、PL 4)

主軸はN-19°-W、主軸長は4.92m、副軸長は4.88mをはかる。壁高は最高で37cmを有する。

P₁・P₂が柱穴、P₄は柱穴ないしは南壁際の大形ピットである。掘方は認められない。南西コーナーにみられる焼土跡がカマドの火床の痕跡である。東壁付近も焼けているが、カマドとの関連はない。

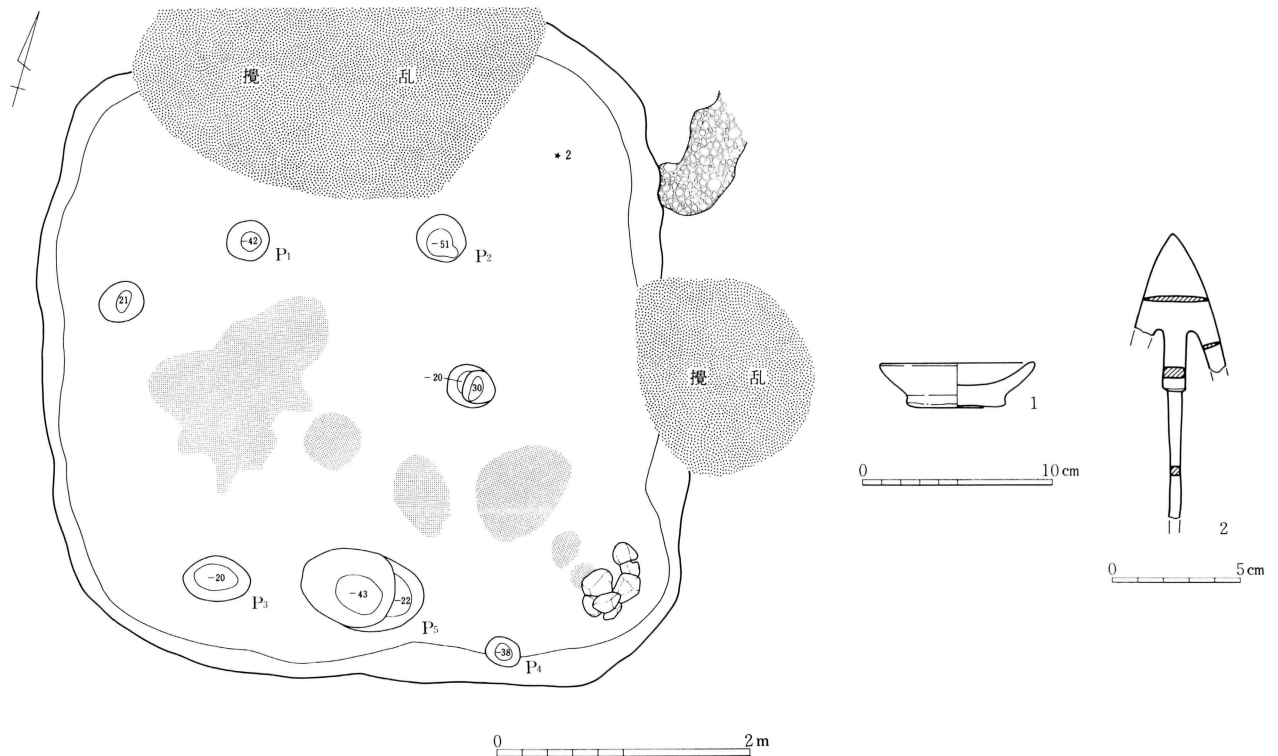
遺物は須恵器甕の胴部破片1点しか出土していない。コーナーカマドをもつことから、时期的には10世紀後半から11世紀のものとしておきたい。



第12図 5号竪穴住居跡

6号竪穴住居跡 (第13図、PL 5・9)

主軸はN-21°-Wであり、副軸長4.97m、壁高最大で40cmをはかる。主軸長はおよそ5.2m前後と思われる。



第13図 6号竪穴住居跡

掘方は全体的に数cmの深さで認められ、その後貼床を行っている。床面は中央が極めて堅緻であった。また、随所が焼土化していた。P₁~P₄が柱穴と思えるが、P₃については位置・深さとも若干問題がある。P₅は南壁際に存在する大形ピットである。

カマドは南東コーナーに構築されており、カマドに利用した礫の残骸が火床上に取り残されていた。

遺物は1が土師質の小皿で覆土中から、2が鉄鏃で床面から5cm浮いた状態で出土している。

時期は1の器形から10世紀末から11世紀前半という年代が与えられる。

7号竪穴住居跡 (第14図、PL5)

主軸はN-26°-W、主軸長は4.42m、副軸長は3.70~4.70m前後、壁高は最高で51cmをはかる。

掘方は、全体的に10cm前後の深さで認められている。堅緻面はなく、一部が焼土化していた。明確に柱穴と思われるようなものは存在しなかったが、住居中央北寄りには深さ40cmのピットが認められた。また、カマド近くにはやや大形のピットが確認でき、かなり東側に偏っているものの、通有的にみられる南壁沿い大形ピットの可能性がある。

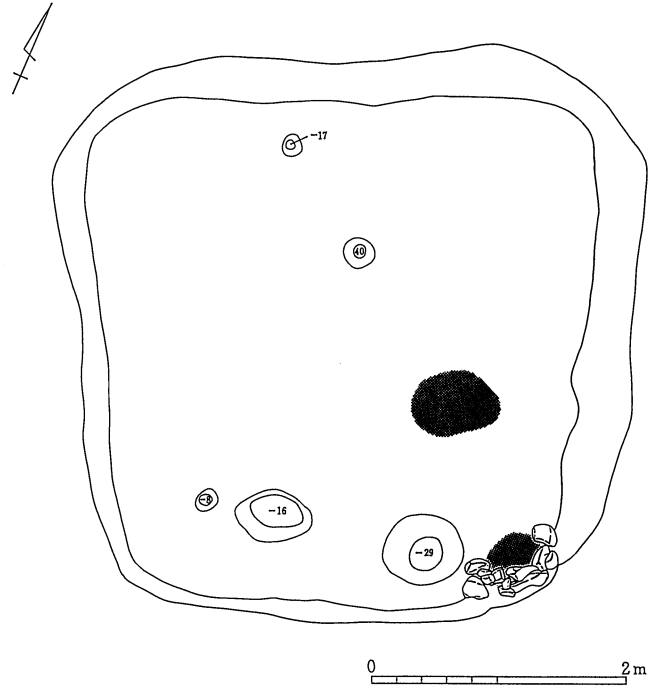
カマドは南東コーナーに構築されている。袖の一部と思われる礫が遺存していたが、原位置を示しておらず、おそらく破壊を受けたものと思われる。

出土遺物は土師器坏破片1、羽釜破片4点が出土したに過ぎない。10世紀後半から11世紀代の産物としか言いようがない。

8号竪穴住居跡 (第15図、PL5)

主軸はN-18°-W、主軸長は4.70m前後、副軸長は4.78mをはかる。壁高は最高で31cmを有する。基本的には方形プランだが、北東コーナーはかなり隅丸となり、また北壁西側については、不整形の棚状の施設らしき掘り込みが確認されている。

掘方は5cm前後の深さで全体的に認められた。堅緻面はない。床面がよく焼けており、一部には炭化層や灰層が床面上に認められ、廃棄の際、明



第14図 7号竪穴住居跡



第15図 8号竪穴住居跡

らかに火熱を受けたことがうかがえる。P₁・P₂は柱穴ないしはそれに付随するピットか。P₃は南壁際中央の大形ピットである。

カマドは南東コーナーに設けられたものであり、袖石などが比較的良好に残っていた。袖石は一部軽石を利用しているが、安山岩系の円礫を多用しそれらを密に立石させ袖としている。本来、粘土などで周辺を補強したと思われるが、それについては確認できなかった。

出土遺物は羽釜の破片が出土したのみである。したがって、遺物からでは時期の詳細がいえず、10世紀後半から11世紀代の産物とだけしておきたい。

9号竪穴住居跡（第16図、PL5・9）

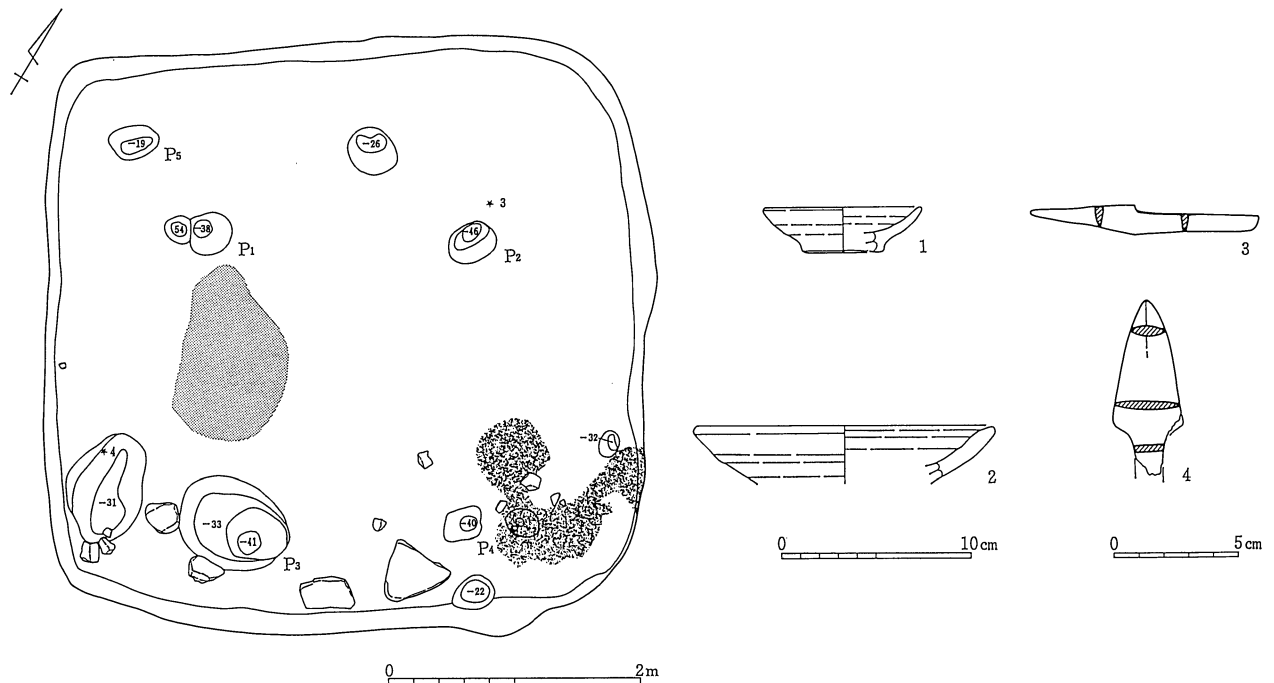
N-35°-Wを主軸とし、主軸長は4.65m、副軸長は4.70mをはかり、ほぼ正方形、壁高は最高でも18cmとやや浅めである。

掘方はとくに企画性はないが、浅いところでは4・5cm、深いところは20cm前後になる。また、住居中央については比較的堅緻な床面が広がり、一部床面が焼土化した部分も認められた。P₁～P₄は深さからみて柱穴であることは間違いない。逆に南壁際大形ピットは存在しない。

南東コーナーに認められる粘土をカマド跡と判断した。しかし、火床部は確認できていないし、そもそもこのような粘土を利用したカマド自体、周りの住居跡には存在しない。

出土遺物は1が土師器小皿、2が土師器坏で、ともに破片で出土位置を押さえていない。3は刀子で床直、4は鉄鏃でピット内より出土した。その他、床直から大小の角礫が南壁際よりから出土し、分析には出していないものの、あわせて鉄滓の小片が出土している。

時期は1の器形から10世紀末から11世紀前半と考えられる。



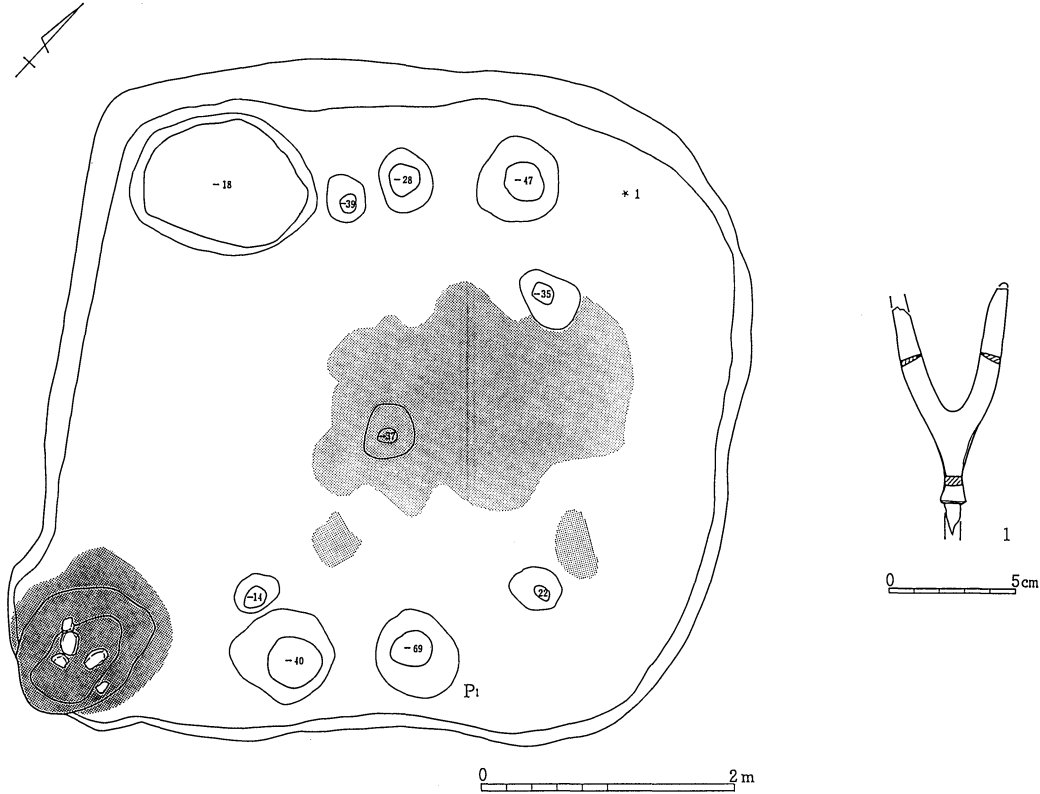
第16図 9号竪穴住居跡

ところで、鉄滓が出土していること、並びに礫が多出していることなどから、本跡が小鍛冶工房の場であった公算が大きい。住居全体の掘り込みが浅いこと、明確な4本柱を持つことはそのためであろうか。また、カマド跡と考えた粘土の敷設についても、もしかすると何らかの関係があるのかもしれない。

10号竪穴住居跡 (第17図、PL 5・9)

主軸はN-41°-W、主軸長は5.20m、副軸長は5.32m、壁高は最高で24cmをはかる。

掘方は数cm程度の深さのものがほぼ全体に認められる。床面の多くが焼土化し、わずかだが一部には炭化物が層として認められた。炭化材は確認できなかったが、住居廃棄の際、ある段階で火が焚かれたものと思われる。ピットは多数確認できたが、これといって柱穴と呼べるようなものはない。ただし、P₁の



第17図 10号竪穴住居跡

み取り分け深く、南壁際中央の大形ピットである可能性が高い。

カマドは南西コーナーに構築されており、ほかの住居とは違い、コーナーから突出している。また、火床部をわずかに掘り込み、その両端には袖を組むための空間を置いていた。

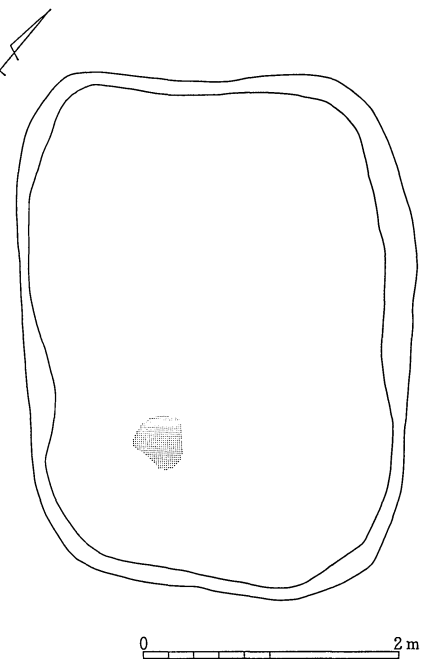
実測可能な遺物は鉄鏃1点だけであり、床面直上から出土した。その他、羽釜の破片が多数出土している。遺物からでは細かな時期設定はできず、10世紀後半から11世紀代の所産としかいえない。

11号竪穴住居跡 (第18図)

N-43°-Wを主軸とし、主軸長は4.10m、副軸長は3.06m、壁高は最高で22cmをはかる。長方形プランで、しかも小形な竪穴住居跡である。

掘方はなく、堅緻な床面も存在しなかった。床面の一部が焼土化している。覆土中には多数の軽石の投棄が認められた。ピットは存在せず、またカマドさえ痕跡すらなかった。

遺物は一切検出されなかったため、時代・時期とも不明である。



第18図 11号竪穴住居跡

ただし、火災を受けたためか床面の一部が焼土化していること、並びに覆土中に軽石の投棄が認められることなどから、10世紀後半から11世紀代の集落の一部と判断している。とすれば、長方形プランでしかも小形、ましてやカマドも見当たらないのであれば、一般の竪穴住居とはかなり利用方法が異なるものと思われる。

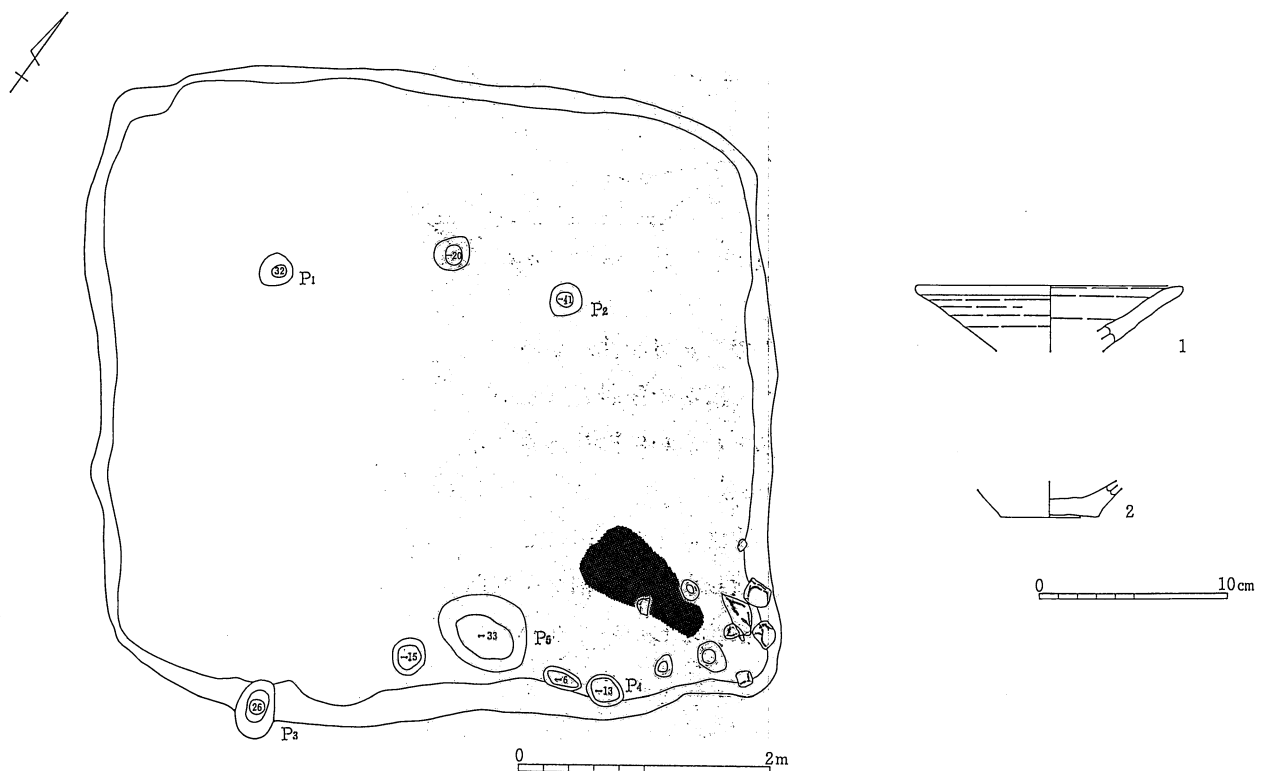
12号竪穴住居跡（第19図、P L 6）

主軸はN-34°-Wであり、主軸長は5.10m、副軸長は5.38m、壁高は最高で37cmをはかる。

覆土中層から上層にかけ、一面に軽石が検出され、明らかに意図的な投棄が行われたものと思われる。軽石直下では一度火が焚かれたようで、薄い焼土層が広範に認められており、以下、床面まで自然堆積とも取れる褐色土が存在した。掘方は数cmの深さで認められ、あわせて、床面全体が極めて堅緻であった。本集落跡では珍しいものの、P₁~P₄がこの時期特有の柱穴である。P₅は南壁際中央の大形ピットであろう。

カマドは南東コーナーに設けられたもので、著しく破壊を受けている。原位置を示すものではないものの、軽石を主体にした礫が残存しており、本来、袖あるいは煙道の一部として機能していたのではなかろうか。火床部は良く焼土化していたが、かなり住居内側に位置しており、規模の大きいカマドが設置されていた可能性が高い。

遺物は、1・2とも土師質の坏で覆土中から出土している。その他、覆土中から羽釜の破片が少量出土



第19図 12号竪穴住居跡

している。

遺物から判断しても時期は10世紀後半から11世紀代という年代しか与えられない。

13号竪穴住居跡（第20図、P L 6）

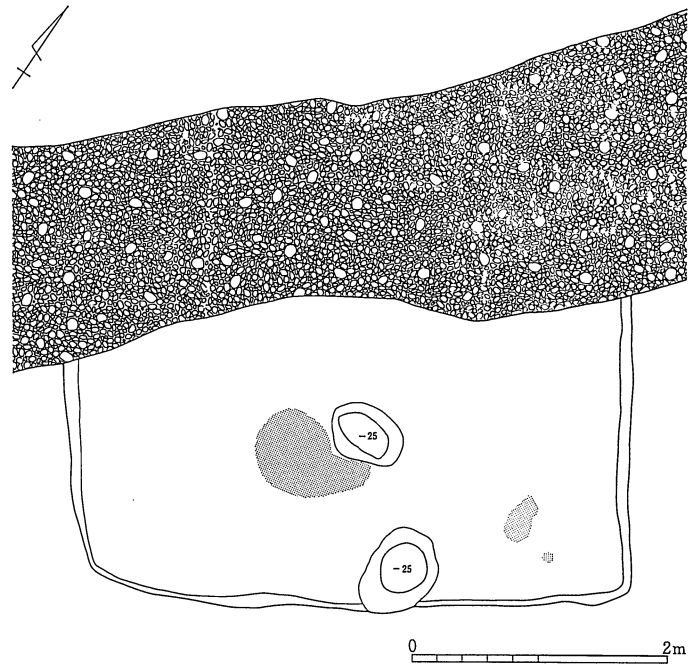
5号流路により、住居北側を切られている。主軸はN-38°-Wを呈し、副軸長は4.50m、壁高は最高

で14cmをはかる。主軸長は不明だが、5号流路北側で検出できなかったのも、おそらく副軸長の方が若干長めとなっていたはずである。

覆土中には、量的には少ないが、床面上に軽石が崩落していた。これも偶然とは言いがたく、やはり意図的な投棄や上屋との関連が想定できる。掘方は確認できず、地山をそのまま床としており、当然、堅緻面も存在しない。また、床の一部が焼けていた。ピットは2個確認したが、南壁中央際で検出されたものについては、通有的に認められる大形ピットの可能性が高い。

カマドは見当たらなかった。北側に構築された可能性もあるのだが、時期からすれば南側に設けられるのが常で、やはり存在しないものとみたほうが無難だろう。

出土遺物は実測していないが、土師質の坏・羽釜・須恵器甕の破片が検出されている。土師質の坏をみれば、10世紀後半をけっして遡るものではない。したがって、11号竪穴住居跡同様、集落の中でもカマドをもたない竪穴住居、もしくはそれ以外の機能を果していた遺構と考えられる。



第20図 13号竪穴住居跡

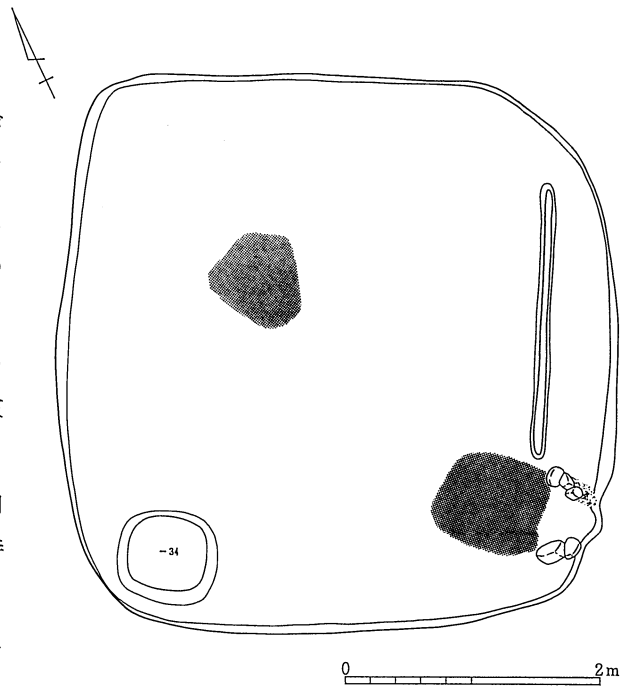
14号竪穴住居跡 (第21図)

主軸はN-27°-Eを成す。主軸長は4.44m、副軸長は4.42m、壁高は最高で35cmをはかる。ひとり集落から外れた地点に位置するばかりか、軸も大きく東に向いている。

掘方はなく、堅緻面も存在しない。床面の一部が焼土化していた。唯一周溝が検出されたが、東壁側だけで、しかも住居内側に入り込んでいる。柱穴は存在しないものの、南西コーナーから方形プランのピットを確認した。

カマドは東壁の南東コーナー寄りに構築されていた。安山岩系の円礫を利用した石組みカマドで、左袖にはそれを保護する赤色粘土が充填されている。コーナーに位置しない点もさることながら、軸方向をコーナーの対角線上にのせないこともひとつの特徴といえる。

遺物は羽釜の破片二つが出土しただけである。したがって、時期の詳細がわからず、10世紀後半から11世紀代の所産としておくが、カマド構造からして、コーナーカマドにしてもその初期の姿に近いものと思われる。

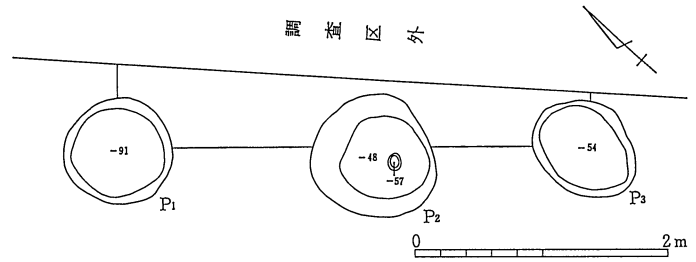


第21図 14号竪穴住居跡

2 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第22図、P L 6）

調査区東端で確認し、西側の一部のみ調査した。南北軸2間となり、東西軸については不明である。東西軸の軸方向はN-30°-Wを成す。覆土の観察を行ったが、いずれも単層で柱痕などは認められなかった。なお、ピットの深度については、もっとも標高が高いP₁の上端を0として算出している。



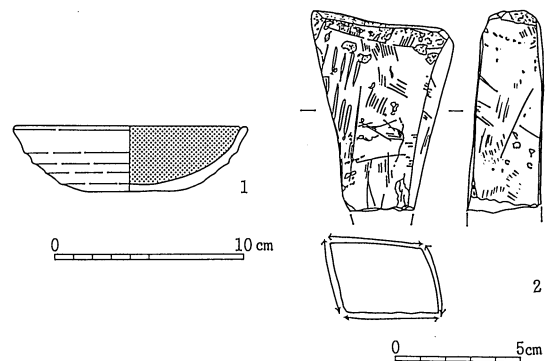
第22図 1号掘立柱建物跡

出土遺物はない。したがって、時代・時期ともに不明なのだが、平安時代以外に集落の存在が認められないのが現状なので、一応平安時代のものと考えた。

3 流路跡（第2・23図、P L 6）

平安時代の集落のやや北寄りの部分を、等高線に直交したかたちで、北東から南西に流下する流路跡を確認した。一見、平坦に見えるが、等高線をみればわずかだが窪地となっている。

5本認められ、いずれもほぼ直線的に流れている。それぞれの幅は概ね平均的だが、おのおのの差が大きく、例えば2号流路跡は60cm前後、1号流路跡は2.5m前後となる。深さ・断面形は、2～5号流路跡が約30～50cmで概ね箱薬研状、1号流路跡だけが深くても20cmで丸底状を呈していた。覆土には砂礫層が主体となって堆積していたが、礫は大きいものでも軽石のみであり、流れはかなり弱かったものと思われる。



第23図 流路跡出土遺物

直線的に流れしか幅が揃うこと、また深さも一定し、1号流路跡を除いては断面箱薬研堀を呈することから、これらを人為的な流路と判断したい。

遺物は極めて微量で、2号流路跡から1の内面黒色処理の土師器坏、4号流路跡から2の砥石が検出されている以外出土していない。1の内面は口唇部が丹念にヨコミガキされているが、それ以外はわずかに放射状のミガキが認められるに過ぎない。9世紀後葉から10世紀初頭の産物といえる。また、5号流路跡は13号竪穴住居跡を切っているから、どうみても10世紀前半に遡るものではない。したがって、これらの流路跡群の時期は、10世紀から11世紀の間であろうか。集落が経営されるなか、細々と流れていた人口流路と考えられる。

第6節 時期不明の遺構

1 畑跡（第1図、P L 6）

調査区中央やや北寄りで見出された。幅約50m、深さは現状で1.3m前後の谷状地形が認められ、表土を剥いだ時点で、この地点のみ砂層を確認し、畑跡を見出した。地表下約30cm、間層を挟んで浅間第2軽石流まで最高で約1.2mの地点である。

等高線に平行した方向で畝立てされており、長さは20m前後、40cmほどの畝立てをもち、畝幅は1m前後にはほぼ収まる。畝の高さは現状で5cmほどしかなく、上端が若干削られたものと思われる。東側には、以前これに直交する恰好で畝立てされたものも認められた。

畑を覆う砂層、及びその下部の層からは、古墳時代前期初頭以前の遺物しか認められなかった。表土層直下であるから、古墳時代前期初頭に位置づけるわけにもいかず、したがって時期不明の遺構としておく。

第7節 小結

縄文時代の遺物については、早期中葉から後期前半のものがわずかに認められた。主体的な活動の場ではなく、生活を繰り広げた地点は、北側の田切り谷を挟んだ三田原遺跡群（第4章所収）以北と捉えられる。石器をみても石鏃の未成品はなく、それ以外には打製石斧、しかも破片が主体であった。全時期をとって集落とは異なる石器組成といえる。キャンプサイト的な場として利用したのだろうか。

古墳時代前期初頭の遺物については、短期のうちに終焉を迎えるが、ちょうどこの頃、集落の拡散化を行っており、とりわけ浅間火山の南裾には非常に多く認められる。生産基盤の拡大、あるいは活発化した群馬との交流ルートといったことが読み取れるのかもしれない。いずれにせよ、そうしたことを契機として、ここでも該期の遺物が採取でき、おそらく小規模ながらも集落を営んでいたものと思われる。

三子塚4号墳は、8世紀前葉、奈良時代の産物であった。佐久地方では現在、奈良時代の古墳としては佐久市大星尻古墳（宇賀神1991）、同市長峯古墳群（三石・羽毛田1988）白田町五霊西12号墳（島田ほか1988）などがその代表例で、少しずつ数を増やしつつある。今のところ類型化は困難極まりないが、むしろ奈良時代の古墳であるが故に、極端にばらつきが多いのではなかろうか。

ところで、三子塚4号墳には火葬骨が埋葬されていた。五霊西12号墳についてもその可能性が高いという。これが最初の被葬者かどうかは問題となるところだが、律令体制の躍進期に相当するこの頃、葬送儀礼が流行ったのか斬新性や先進性を求めて、言わば流行現象として火葬が展開する。もちろん、一般庶民には困難で、たとえば地方では豪族や、そこから輩出した官人層と考えられてきた。奈良時代の古墳の被葬者たちもそのひとりである。玄室の内法は1.34×2.68m前後であるが、火葬骨を入れるには大きすぎることはいうまでもない。ただ、8世紀前葉に火葬墓が始まり、それを一般的な古墳に単葬した場合もありそうだという点は、今後ひとつの課題として残るだろう。

平安時代の集落は、時間幅を広くみても10世紀後半から11世紀代に経営されたものだった。ところが調査区のすぐ東側を小諸市教育委員会が調査したときには、9世紀後半と11世紀の竪穴住居跡がそれぞれ1棟ずつ確認されている。律令体制がまもなく崩壊する頃、この地点にもようやく人々が住み着くらしいが、当調査区でも、該期の遺物は2号流路跡から出土した土師器坏1点のみであり、極めて散発的な存在でしかない。

主体は古代末、10世紀後半以降の集落の姿である。9世紀後半までは、律令体制さながらの世であり、たとえば、栗毛坂遺跡群（寺島ほか1991）、長土呂遺跡群（宇賀神1999）、芝宮遺跡群（藤原1999）、中原遺跡群（藤原1999）、鑄師屋遺跡群の前田遺跡（堤1987・林ほか1989）や根岸遺跡（堤1989）、宮ノ反A遺跡群（花岡1994・宇賀神1999）など、三子塚遺跡群よりはさらに低地部分に遺跡が集中している。一般には推定される郡衙周辺ないしは古東山道周辺・駅路周辺とされている。律令体制が崩壊するなか、これら集落は一挙に弱小化し、かわって点々とした集落が、しかも山間部においても認められる。そこで生まれたのが三子塚遺跡群の古代末の集落跡であった。住居間の切り合いはないが、9号竪穴住居跡と10号竪穴

第3章 三子塚遺跡群

住居跡では外壁が近く、同時に存在していたとは思えないが、それにしても、該期の集落としてはこれでも比較的規模の大きな存在である。

重ねていうが、けっして10世紀後半から11世紀まで存続していたわけではない。期間はかならず短かったはずで、覆土中からの遺物が余りにも少なすぎた。もちろん、古代のような遺物の豊富さはないだろうが、まったく何も出土しない遺構も存在し、存在しても数片という竪穴住居跡も多かった。全体的には、貧弱性を思い知るしかなく、平野部に営まれた集落とは雲泥の差が認められた。

引用参考文献

- 新井 宏 1992 『まぼろしの古代尺』吉川弘文館
- 宇賀神誠司 1991 「第3章第11節4(3)大星尻古墳」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2-佐久市内その2-』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 宇賀神誠司 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17-佐久市内その3・小諸市内その1』長野県埋蔵文化財センター
- 尾崎喜左雄 1966 『横穴式古墳の研究』吉川弘文館
- 小諸市教育委員会 1985 『宮ノ反』
- 小諸市教育委員会 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』
- 小諸市教育委員会 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚』
- 小諸市教育委員会 1995 『十石坂上遺跡』
- 島田恵子ほか 1988 『五霊西拾貳号古墳』白田町教育委員会
- 堤 隆 1987 『前田遺跡』御代田町教育委員会
- 堤 隆 1989 『根岸遺跡』御代田町教育委員会
- 寺島俊郎ほか 1991 「第3章第18節栗毛坂遺跡群」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2-佐久市内その2-』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17-佐久市内その3・小諸市内その1』
- 永原秀山 1974 「下原住居跡に就いて」『小諸市誌 考古篇』
- 花岡 弘 1994 『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚』小諸市教育委員会
- 林 幸彦ほか 1989 『前田遺跡』佐久市教育委員会
- 藤原直人 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18-佐久市内その4・小諸市内その2』長野県埋蔵文化財センター
- 三石宗一・羽毛田卓也 1988 『長峯古墳群』佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

表1 石器観察表

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
遺構外-29	石鏃	黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.7	
遺構外-30	石鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.1	0.3	
遺構外-31	石鏃	黒曜石	1.8	1.0	0.2	0.6	
遺構外-32	石鏃	黒曜石	1.7	1.1	0.2	0.7	
遺構外-33	石鏃	黒曜石	2.3	1.3	0.3	0.1	
遺構外-34	石鏃	硬砂岩	2.7	2.2	0.3	1.8	
遺構外-35	石鏃	黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.4	
遺構外-36	石鏃	黒曜石	2.1	2.0	0.4	1.9	有基式
遺構外-37	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.9	5.2	1.7	121.5	
遺構外-38	打製石斧	千枚岩質粘板岩	7.8	5.9	0.9	56.5	
遺構外-39	打製石斧	安山岩?	6.0	5.3	0.8	47.5	
遺構外-40	打製石斧	千枚岩質粘板岩	4.9	5.3	0.8	31.7	
遺構外-41	打製石斧	千枚岩質粘板岩	7.4	3.9	0.9	28.6	
4 流路-2	砥石	凝灰岩	7.6	5.5	2.8	172.0	

第4章 さんだはら三田原遺跡群

第1節 遺跡の概観

小諸市平原字上三田原・下三田原に所在する。浅間火山南麓に分布する田切り地形の北端部に相当し、これから北は浅間火山の裾野地形となり、縄文時代の遺跡が密集する場所となる。

幅は100mから350m、長さ約900mをはかり、標高は765～805mほどをはかる。視界を遮るものはなく、景観の良い場所と言える。畑地が主な地目だが、北端では宅地も見受けられる。田切り地形の南側には北川、西側に沢田川、北側に田川支流の沢が流れており、とりわけ北川に関しては、かつてこの地でも湧水が認められ、その水が北川に流れ込んだという。谷を挟んで、南側に三子塚遺跡群（本書第3章所収）、西側に北原遺跡群、北側に岩下遺跡（本書第5章所収）が存在する。また、遺跡東端部には中世の城館跡、上三田原城跡も含まれている。

本遺跡群はこれまで調査されたことがない。『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』では、縄文時代と平安時代の集落跡とされているが（小諸市教育委員会1987）、事前の踏査からすると、縄文時代中期後葉から後期前葉の遺物がすこぶる多く採取できた。相当規模の埋蔵文化財が眠っているものと考えられる。

第2節 調査の概要

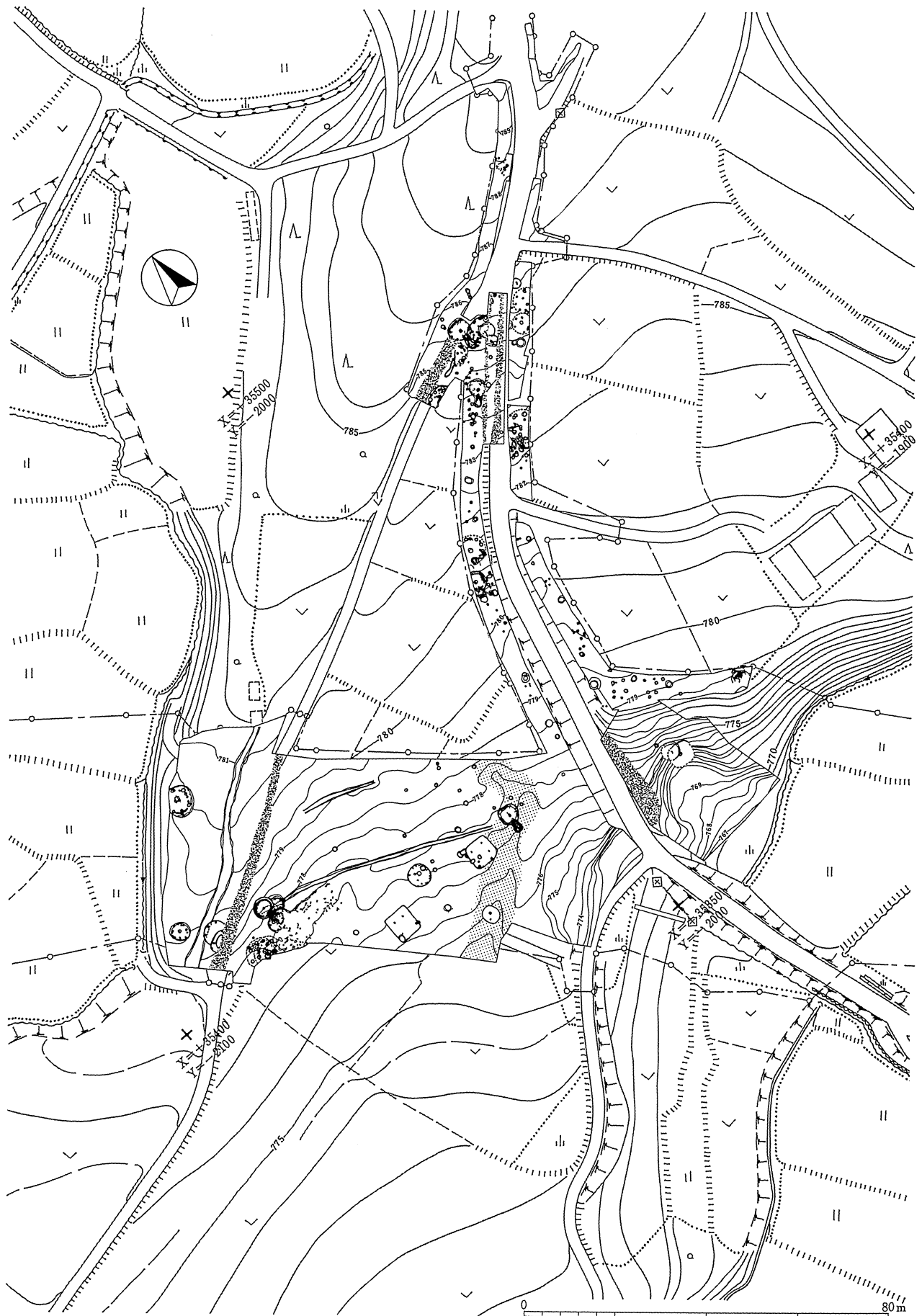
上信越自動車道は遺跡群のほぼ中央部分を横断することとなり、8,480㎡（側道480㎡を含む）が調査の対象となった。主に本線部分とその東側の市道0117号線拡幅部分とに分かれたが、前者については平成4年度に、後者については用地買収の遅れから平成5年度に行った。調査面積は前者が7,480㎡、後者が1,000㎡である。

平成4年4月14日から調査を開始した。事前踏査で縄文時代の遺物が多量に採集できたことから、手掘りによる試掘トレンチを設定した。一部では遺物包含層が残存し、また南東隅の急斜面には遺物捨て場の痕跡が認められた。これを手掘りによって調査し、それ以外は浅間第2軽石流上面まで重機で掘り下げることにした。

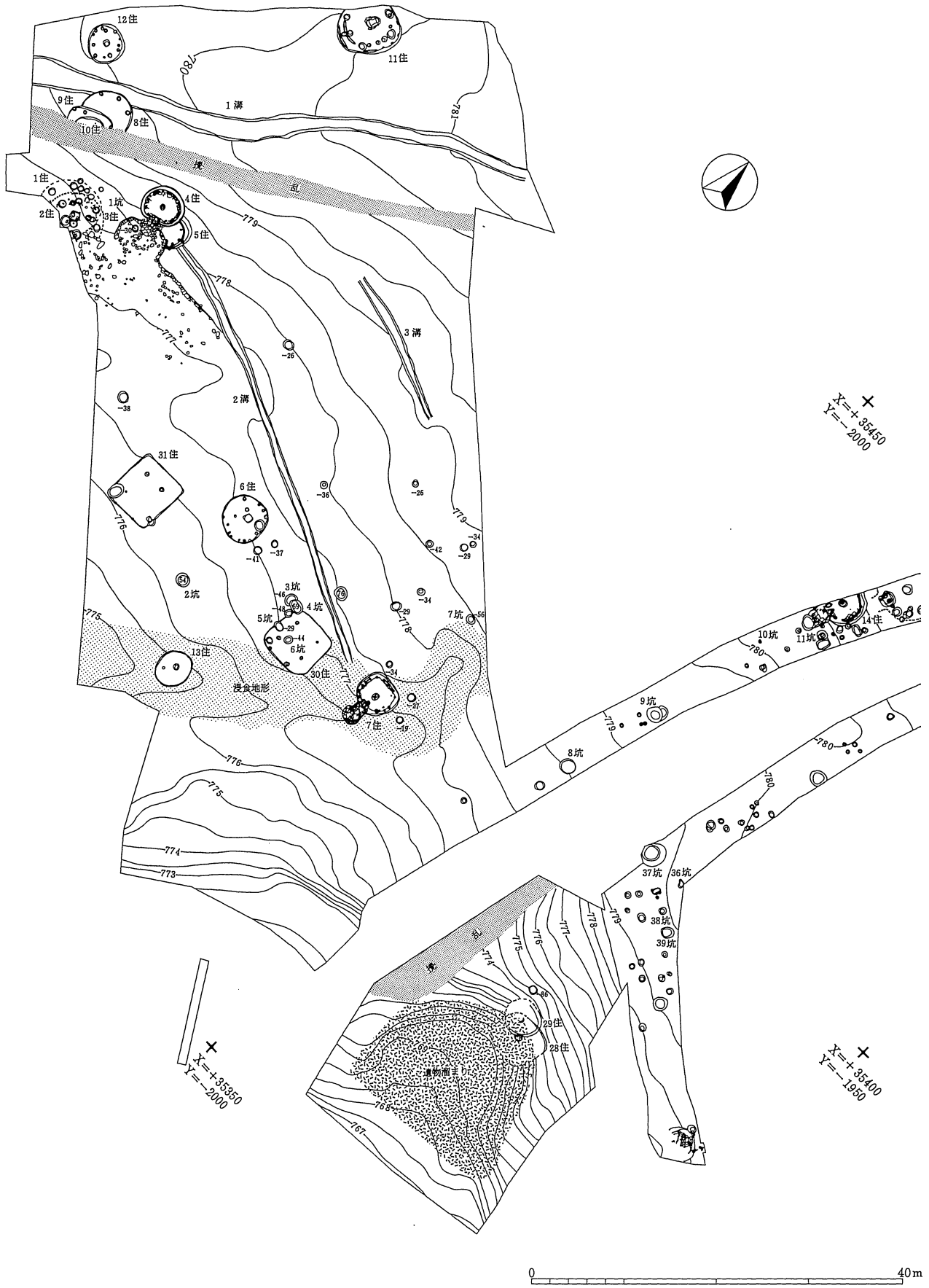
台地部分では縄文時代の中期後葉から後期前半の遺構群が把握され、あわせて古代末の竪穴住居跡2棟も確認できた。称名寺式期の柄鏡形敷石住居跡の張出部に出入口部が認められた点は、全国でも初めてのことであったし、環状に並ぶ石列と敷石住居跡がセットになる堀之内式期の遺構についてもすこぶる珍しいものであった。急斜面の遺物捨て場には、押型文土器以降の遺物が捨てられていたが、層位的にみるとその初期は縄文時代中期後葉にあるものと思われる。8月18日、最後まで残った遺物捨て場の掘削作業及び石列の除去作業が終了し、これをもって第1次調査を終了とした。

平成5年10月7日から、第2次調査として市道0117号線拡幅部分の調査を行った。縄文時代中期後葉から後期前半の遺構群が把握でき、12月14日に終了した。

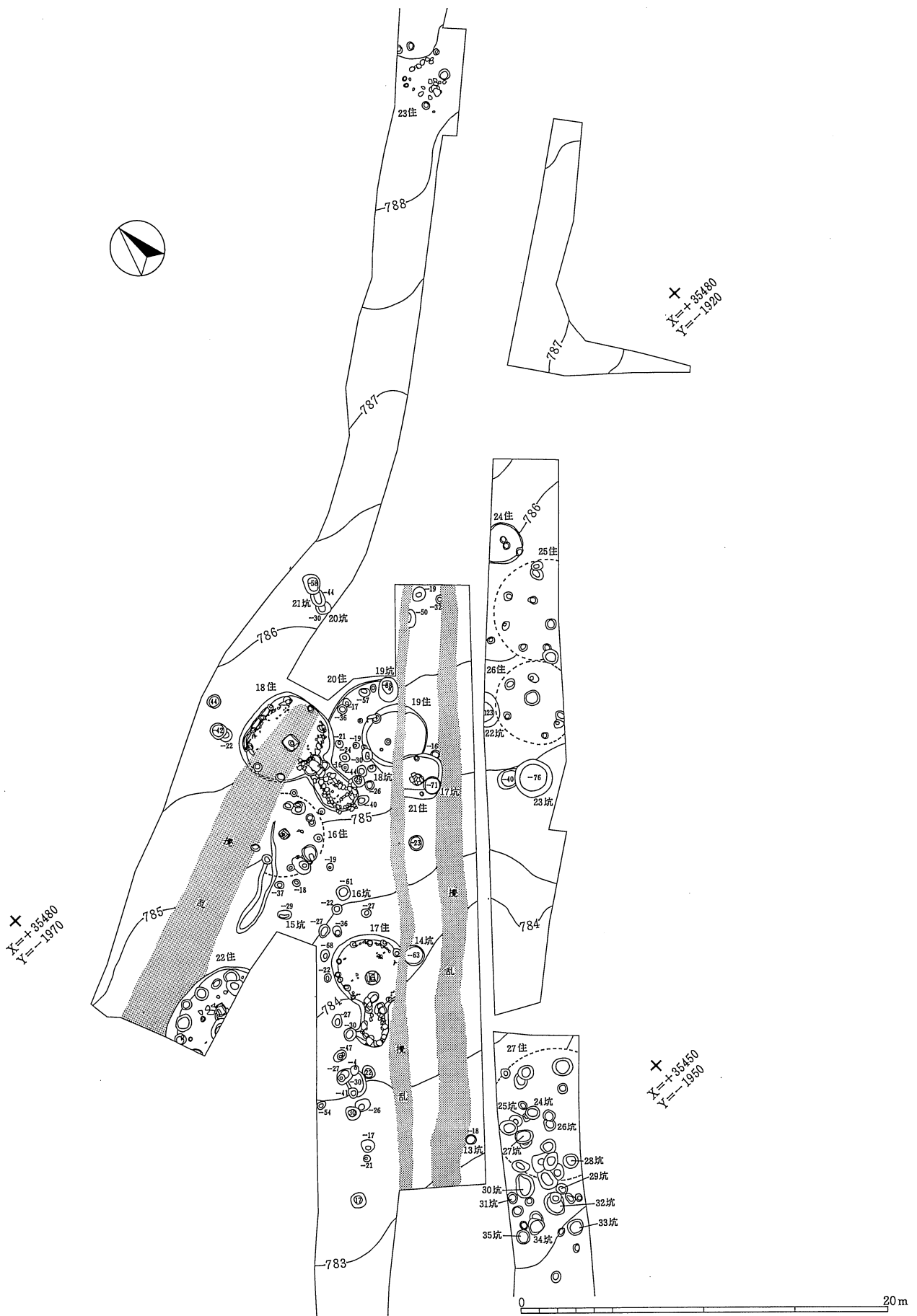
平成6年3月11日から15日にかけて、最東端である市道0117号線下部の調査を第3次調査として行った。縄文時代中期後葉の竪穴住居跡2棟、その他を確認している。



第1図 遺構配置



第2図 遺構配置 (部分1)



第4図 遺構配置 (部分3)

調査日誌抄

平成4年度

4月14日 調査開始。手掘りによる試掘調査から開始。
 4月15日 試掘調査にあわせ、表土剥ぎ作業も開始。縄文時代の土坑数基を確認。南東隅の急斜面には縄文時代の遺物溜まりが存在することが判明。
 4月16日 古代末の竪穴住居跡2棟を検出。
 4月17日 試掘調査終了。遺物包含層が残存する部分を確認。
 4月18日 表土剥ぎ作業終了。縄文時代の竪穴住居跡数棟を検出。
 4月20日 遺構検出作業。遺構掘削作業開始。
 4月21日 遺物包含層の調査に着手。基準杭設定開始。
 5月7日 7号竪穴住居跡が、称名寺式期の柄鏡形敷石住居跡であることが判明。
 5月13日 西端から環状に配石された礫群を確認(後に環状集落の石列と確認)。
 5月19日 4号竪穴住居跡も堀之内式期の敷石住居であることが判明。
 6月11日 遺物溜まりの調査に着手。
 6月16日 農道の迂回路工事開始。
 6月19日 7号竪穴住居跡の張出部に出入口部を

確認。
 6月25日 航空撮影実施。
 6月28日 現地説明会実施。見学者178名。
 6月30日 4号竪穴住居跡は、柄鏡形敷石住居跡であることが判明。
 7月2日 市道3115号線迂回路工事実施。
 7月15日 環状配石と4号竪穴住居跡の張出部が結合。
 7月17日 遺物溜まりに竪穴住居跡が存在することを確認。
 7月29日 11号竪穴住居跡の炉周辺に配石が存在することが判明。
 8月10日 遺物溜まり掘削終了。
 8月11日 遺構調査終了。コンタ図作成・環状集落の石列除去作業開始。
 8月18日 第1次調査終了。
 平成5年度
 10月7日 調査開始。遺構検出作業及び遺物包含層の掘削から開始。
 10月21日 遺構掘削作業開始。
 12月14日 第2次調査終了。
 3月11日 市道0117号線下の調査に着手。竪穴住居跡2棟、土坑5基を確認。
 3月15日 第3次調査終了。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 後期前半の環状集落

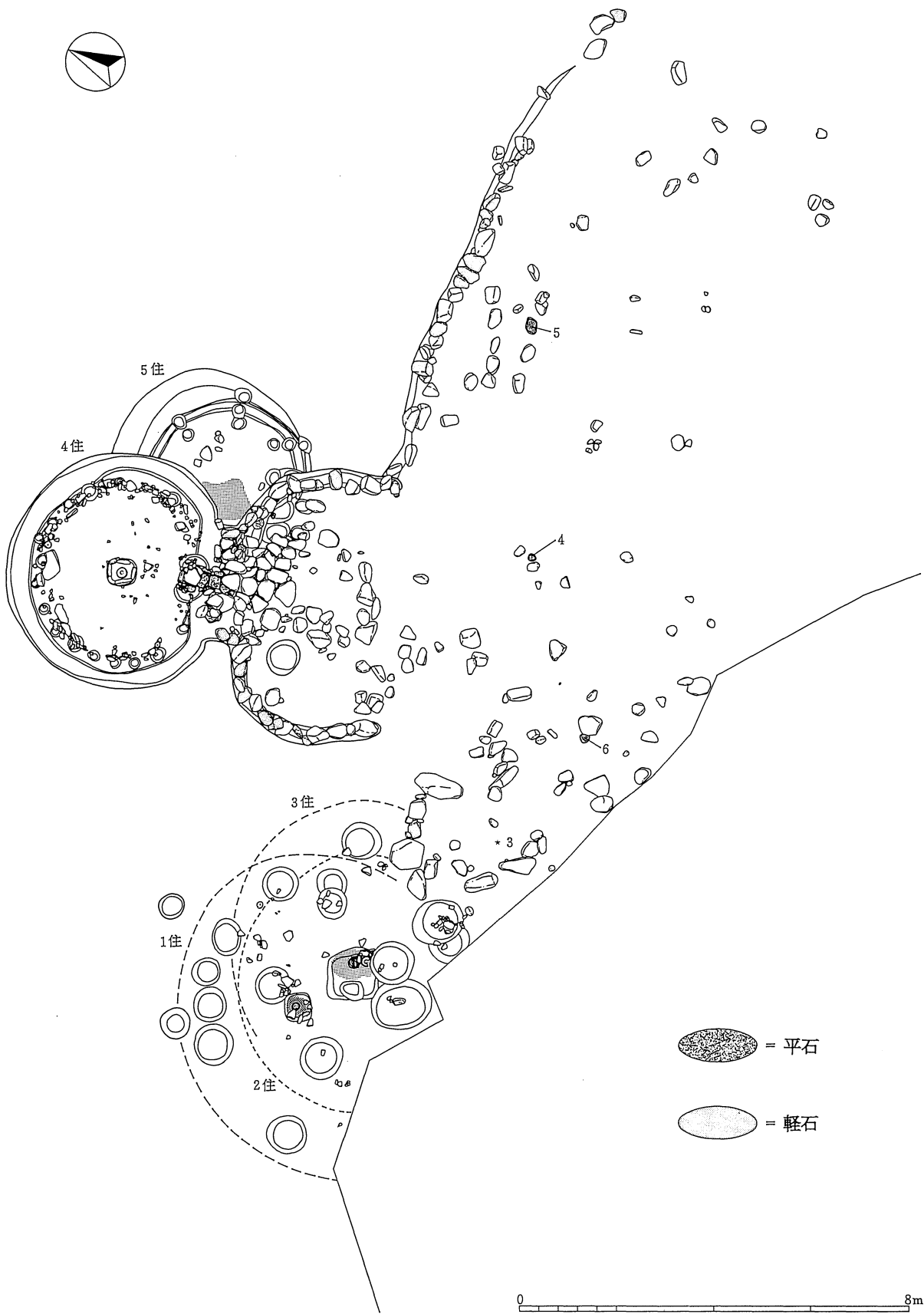
調査区本線部分西側から、環状を成すと思われる集落の東側半分を確認した。時期は堀之内1式期に相当する。

緩やかな南斜面に位置しており、建て替えを繰り返す巨大な1～3号竪穴住居跡を北縁に置き、これを円弧の基点として環状配列が行われている。1～3号竪穴住居跡の連結部東側に石列が見られ、すぐ東側には、これも建て替えを行った4・5号竪穴住居跡が構築されている。さらにより新しい4号竪穴住居跡の張出部東側にも石列が弧状を描いて南下している。この円弧上には同期の6号竪穴住居跡が位置しており、これも環状集落の一員とすれば、径40m内外の円形サークルが成立することとなる。

石列は北側にしか認められないが、そもそもこの部分については、表土以外は縄文時代の遺物包含層と承知していたため、すべて手掘り作業によって調査を進めた地点である。にもかかわらず、北縁を除けば礫ひとつ出土しなかった。けっして全周せず、中核となる1～3号竪穴住居跡の連結部周辺だけに存在したものと考えられるだろう。

ただし、後世に多少の抜き取りが行われていることは確かである。第5図は、すべての礫を図化したものだが、手掘り掘削の割りにはこの程度の量しか出土しなかった。調査区外、農道を一本挟んで1～3号竪穴住居跡の西側には、安山岩系の礫が幅2～3m、高さ1m前後にまで積み上げられており、実際にはこれが敷石住居跡や石列のパーツと考えられる。そもそも、ここには軽石以外に礫は存在せず、一見して判断可能であった。地表面から20～30cmほどで礫に達してしまうから、耕作者にとっては邪魔な存在でしかない。実は、今なおこの抜き取り作業は行われているのだ。

4号竪穴住居跡東側の石列をみると、地山面を4号竪穴住居跡付近で30cmほどカットして立て掛けられ



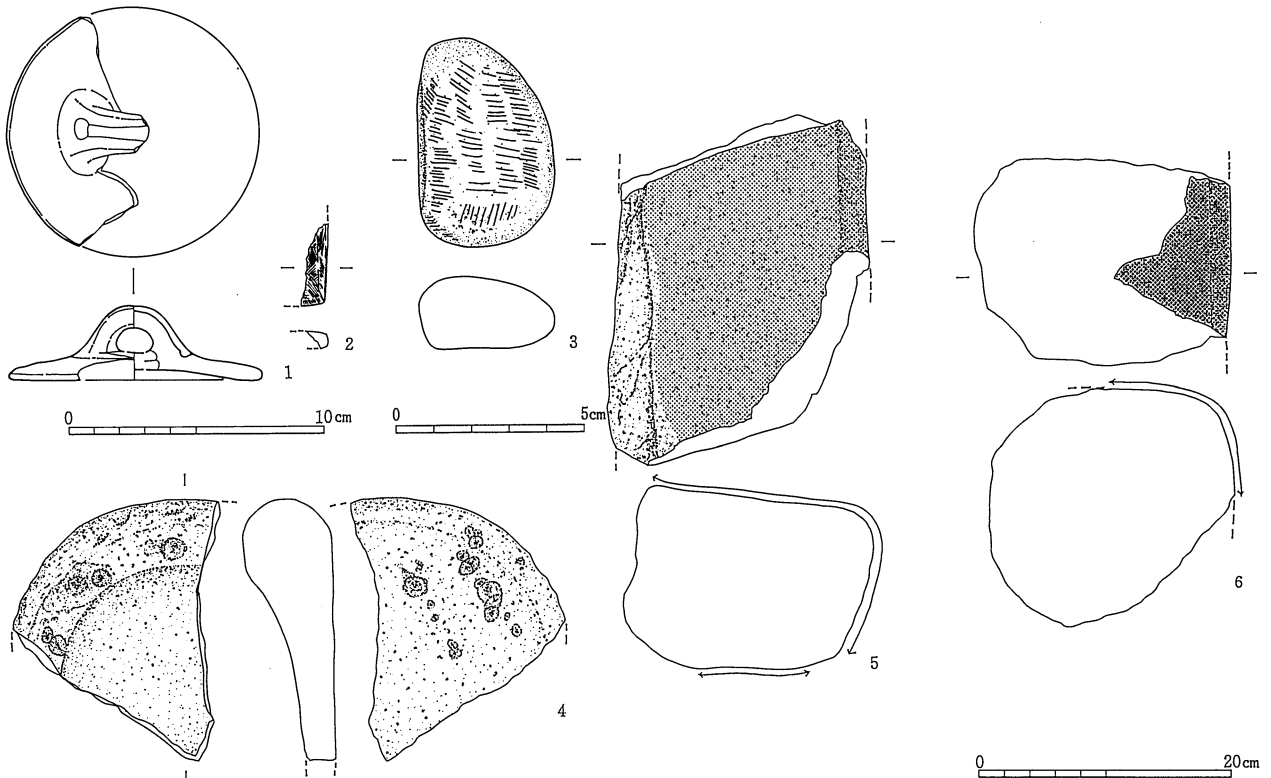
第5図 後期前半の環状集落北端部

しており、南下するほど掘り込みが浅くなる。4号竪穴住居跡近くでは横積みした箇所も認められるが、立石したものも多分に存在し、これ以上の石積みはあまり想定できそうにもない。なお、立石を基調とするものについては、底面をさらに掘り込み、より安定度を高めていた。

一方、1～3号竪穴住居跡の連結部付近の石列は、崩壊が激しく、また抜き取りも行われたらしく明確に把握できなかった。だが、大形の石材を用い、また礫の数からいえば多様な構造となっていたらしい。その中で、第7図上段のアミ掛け部分については原位置に近い状態ではないかと考えている。なお、これにもカット面が存在したはずだが、黒色土中での検出であったため確認できなかった。

内部の崩落礫とともに出土した遺物を第6図に提示した。5・6の石棒は、おそらく石列ないしは環状集落北端部の祭祀具として樹立されていたのだろう。3の玉類は2号竪穴住居跡の遺物として取り上げたのだが、後にそこまで範囲を広げることが困難であることが判明し、仕方なくこの図に入れておいた。だが、1～3号竪穴住居跡のいずれかに帰属するものではなかろうか。1・2・4は、遺構外遺物の項に入れるべきか悩む資料である。これ以外にも、石器や土器片などが伴っているものの、環状集落外との差が看取できなかったことから、ここで扱うことを止めた。全体を通してみれば、5・6の石棒を祀った可能性は高いが、それを除けば貧弱極まりないというか、むしろ何も存在しないのではないかといた状況であった。

斜面上方側をカットして石列を組むから、その内部は比較的平坦な空間が広がることとなる。上記の通り、遺物の点では石棒を除けば「無」の空間であった。遺構も同様に、円形広場内に特殊な施設は見当たらず、土坑すら数少ない。焼土跡や炭化物が広がるどころさえ存在しなかった。ただ、5の石棒が位置するところだけ、不可解な礫の並びとなり、もしかするとここだけ何らかの遺構が存在していたのかもしれない。そうだとすると、それは石列に伴う北縁部だけに認められるもので、基本的には「無」の空間が広がっていたということになる。



第6図 環状集落内出土遺物

(1) 竪穴住居跡

1～3号竪穴住居跡(第7・8図、P L23・32・36)

環状集落の中核となるもっとも巨大な敷石住居跡である。しかも柱穴が太く、深度も深い。壮観たる住居であったに違いない。これら3棟は建て替えを繰り返したものだが、拡張のレベルではなく、明らかに住居の位置そのものを変えている。したがって、それぞれに個別の名称を与えた。

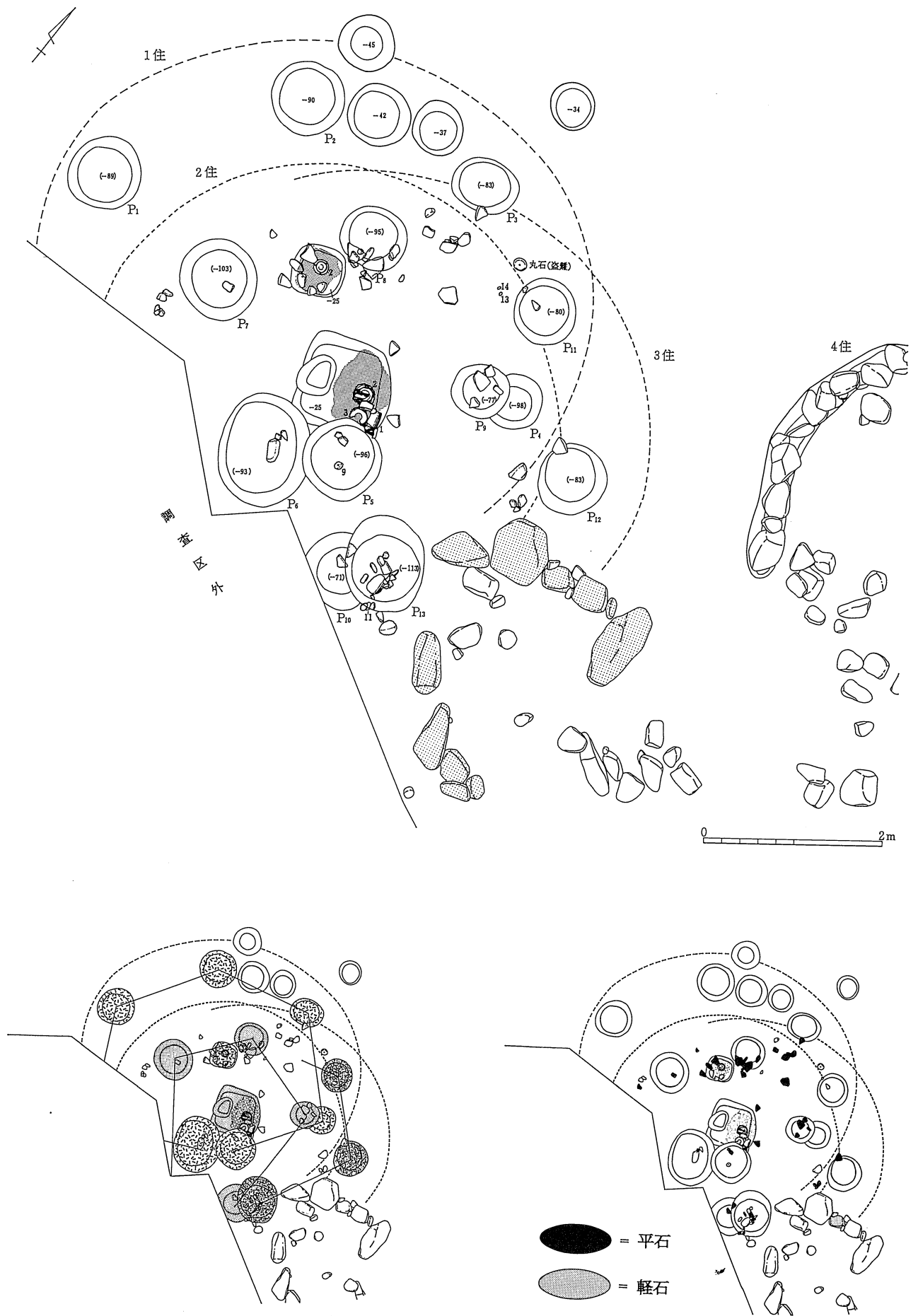
3号竪穴住居跡が最初に営まれ、順に2号竪穴住居跡→1号竪穴住居跡が構築されている。少しずつ西側に寄り、また主軸自体も次第に西側へと傾いていく。3号竪穴住居跡の規模は分からないが、2号竪穴住居跡から1号竪穴住居跡への建て替えの際、住居規模をより大きなものに変化させている。

この地点には、黒色土がやや厚めに堆積していたが、それでもなお奥壁部に至っても軽石流堆積物を掘り込むことがなかった。すぐ東隣りの4・5号竪穴住居跡とは雲泥の差が認められる。極めて浅い壁体しか持ち合わせていなかったのだろうが、残念ながら壁を検出することができなかった。柱穴については、軽石流堆積物上面で確認し、各深度については、1号竪穴住居跡関連と2号竪穴住居跡関連とでは、炉の検出レベルや縁石の位置関係が概ね10cmほどの差が認められたので、それぞれ個別にマイナス計算した。3号竪穴住居跡は不明なので、2号竪穴住居跡と同様に算出した次第である。

1号竪穴住居跡は炉を検出し、あわせて縁石の一部とも取れる礫を確認したことから住居跡と判断した。柱穴については、炉が住居中央に位置することは間違いなく、しかも柄鏡形の住居に違いないと判断して、 $P_1 \sim P_4$ を壁柱穴、 $P_5 \cdot P_6$ を対ピットとした。そうなれば、 $N-40^\circ-W$ を主軸とし、副軸長は少なく見積もっても6.3mはあるものと思われる。炉は深さ約22cmの埋甕炉であるが、不思議と石囲炉的な痕跡は認められない。黒色土中での検出であるため、底部が二段掘りかどうかは分からない。また、炉体土器の周辺が異様に焼けていた。遺物は2が炉体土器、また北東コーナーに丸石が置かれていたが盗難に遇っている。時期は1の土器が堀之内1式最終末から堀之内2式最古段階のものであり、また環状集落全体の資料をみても堀之内2式の資料は出土していないから、本跡を堀之内1式最終末に比定したい。なお、先述した1～3号竪穴住居跡連結部付近の石列というのは、実際には1号竪穴住居跡のものである。

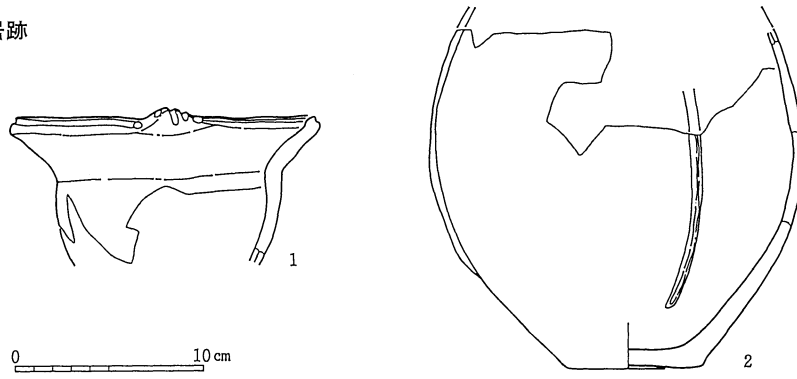
2号竪穴住居跡は、1号竪穴住居跡とした炉と縁石の下から、再び同様の施設を検出したことで、同じく住居跡として認定した。柱穴も同じように判断したが、5本主柱で、うち P_{10} が対ピットと主柱穴を同時にこなしていることになり、該期の住居としては珍しい存在となってしまふ。批判する方も多かろうかと思うが、これ以外の選択肢は見出せなかった次第である。取り敢えずこれが正解なら、主軸は $N-20^\circ-W$ 前後となり、副軸長は5.7m前後と推定される。炉は、これも埋甕炉で炉縁石は一切存在しなかった。しかも2個体の炉体土器が南東コーナー付近に埋設されており、調査の下手際でもあったのかとも考えるが、調査の上ではあくまでこれが事実であった。なお、底部までは25cm、おそらく段掘りしたと思われるが確認はできていない。ともに正位に埋設されていたが、南側のものは8cm上位に位置していた。また、北側の炉体土器周辺は良く焼土化していたが南側の炉体土器の内部もなぜか焼けていた。出土遺物のうち、2・3が炉体土器、1・4～7も炉から出土している。その他、位置を確認しているものは床面直上、8・10が P_{13} から出土している。時期は堀之内1式期に該当し、その中でも中頃に位置付くものと考えられる。

3号竪穴住居跡は、1・2号竪穴住居跡の柱穴にそぐわない柱穴が存在することから、住居跡として認定した。すべての柱穴を確認したわけではなく、多くは1・2号竪穴住居跡の柱穴に破壊されているものと考えられる。 $P_{11} \sim P_{13}$ がそれで、この配置をみると2号竪穴住居跡の $P_8 \sim P_{10}$ と瓜二つの構造となる。正しければ、 $N-10^\circ-E$ 前後が主軸となるだろうし、規模は2号竪穴住居跡とそう変化がないようだ。柱穴のみの確認で、縁石や敷石などは見つからず、遺物すら皆無であった。2号竪穴住居跡の床面よ

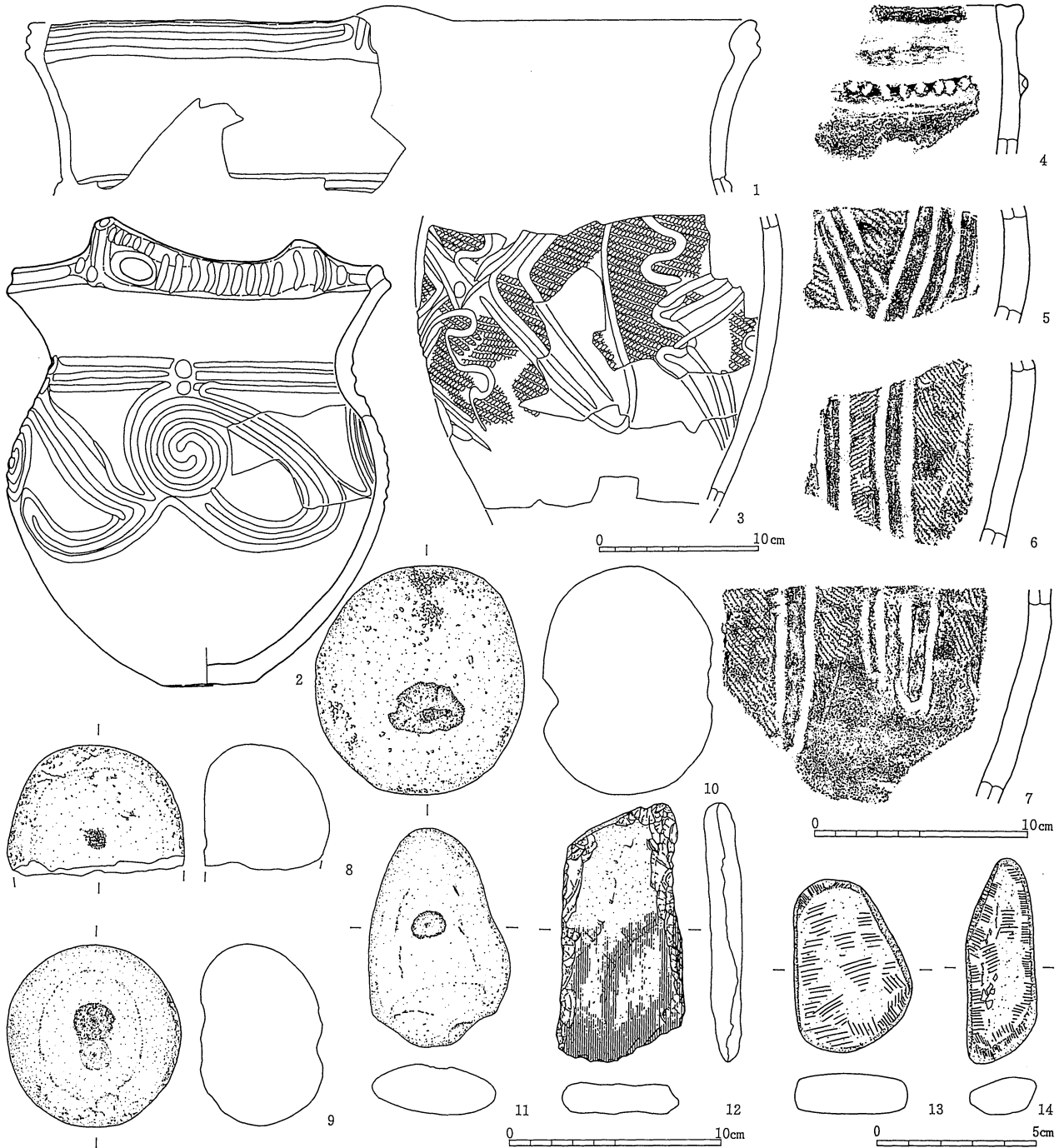


第7図 1~3 竪穴住居跡

1号竖穴住居跡



2号竖穴住居跡



第8図 1・2号竖穴住居跡

りも高い位置に床を設定していたのであろうか、炉まで確認できなかった。したがって、時期は不明なのだが、1～3号竪穴住居跡が一連のものであることは間違いのないのであるから、2号竪穴住居跡よりもさほど遡らない時期に比定されるものと考えられる。

4号竪穴住居跡（第9～12図、P L12～14・23・32～36）

環状集落北端部東側に位置する柄鏡形敷石住居である。5号竪穴住居跡を切っているが、おそらくこれを建て替えて、本跡を構築したのではないかと考えている。

N-14°-Wを主軸とし、壁高は奥壁側で最高60cmをはかる。規模は、主体部が主軸長4.18m・副軸長4.85m、張出部が主軸長3.30m・副軸長5.60mとなり、これに連結部を加えると全長7.97mとなる。また、連結部の副軸長は2.40mをはかるが、これは掘方で、通路の幅はわずか0.50mしかない。

覆土は主体部しか確認していないものの、まったくの単層であった。通例の埋没土壌で見た目上何ら変哲もなかったが、床面上に多数の軽石が投棄されており、しかも、ことに東側には拳大のものが密集し、上方にくると人頭大のものが点在する傾向にあった。理由は不明だが、人為的な行動の結果であることは間違いのない。それと合わせて覆土自体が単層なら、早期のうちに埋め戻された可能性があるのではないかと考えている。また張出部については崩落礫のみ確認したが、ここではすべて大形の礫で構成されており、しかも軽石が少なく、安山岩系の円礫が主体であった。

主体部の床は周囲にテラスを設けたものの、内側に黒色土を充填し平坦な床面を形成している。言わば貼床的な施設なのであろうか、縁石が全周するが、すべて黒色土上面に敷設している。柱穴は壁柱穴で、その中でもP₁～P₆が支柱穴である。P₆・P₇は対ピットであるが、それを繋ぐ大形ピットは存在しない。なお、南東コーナー付近の支柱穴以外の壁柱穴は、5号竪穴住居と重複しており、軽石流堆積物にまで達していないので確認できなかった。

主体部には非常に良好な状態で縁石が一巡していた。とりわけ、平石（鉄平石）が立石するものが目立ち、横たわっていても内側に倒れ込んだような傾斜方向を示すものが多かった。しかし、もし平石（鉄平石）のほとんどのものが立石していたとしたら、それを保護する施設がなにもなく、極めて不可解な状況になってしまう。見た目上把握できなかったものの、縁石の背後にテラス上の土盛りがあれば好都合になるはずだがいかがであらうか。なお、奥壁中央に位置する比較的大形の平石（鉄平石）は、状況から判断して、ここに敷設された可能性が高い。

主体部以上の張出部を有するが、先端部に掘り込みがなく、東端部先端は方向を変えて、以後石列と化してしまう。柱穴などは一切なく、上屋などは想定できる由もない。張出部でありながら、反面、石列の片棒を担いでいるのである。

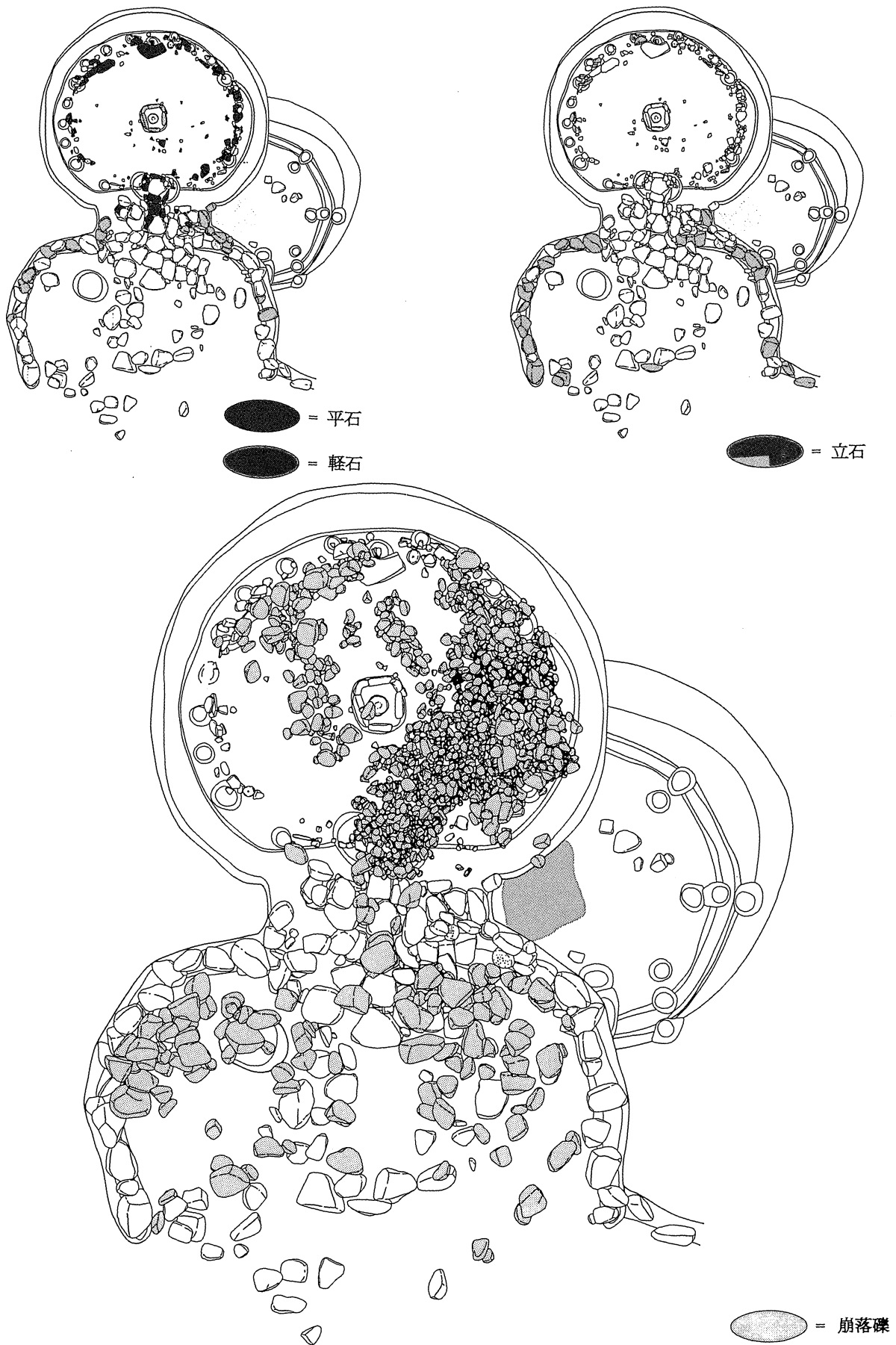
外縁を周溝状に掘り込み、内部に礫を置き壁体としている。立積みかつ1段が主体だが、より高低差のある連結部付近では、立積みの上にさらに石積みを行っている。連結部付近を中心に敷石が認められるものの、部分的でしかも乱雑なところもある。しかし、壁体の石積みがほぼ完全な状態で残存しているのだから、後世に抜き取られたということはないだろう。なお、主体部への通路部分については、一直線上に礫を並べ、とくに連結部では平石（鉄平石）を多用していた。

連結部は両側に面が揃った石材を横積みし、均整の取れた空間を作りだしている。極端に大きな掘方をもっており、内部には裏込め石的な礫が存在している。

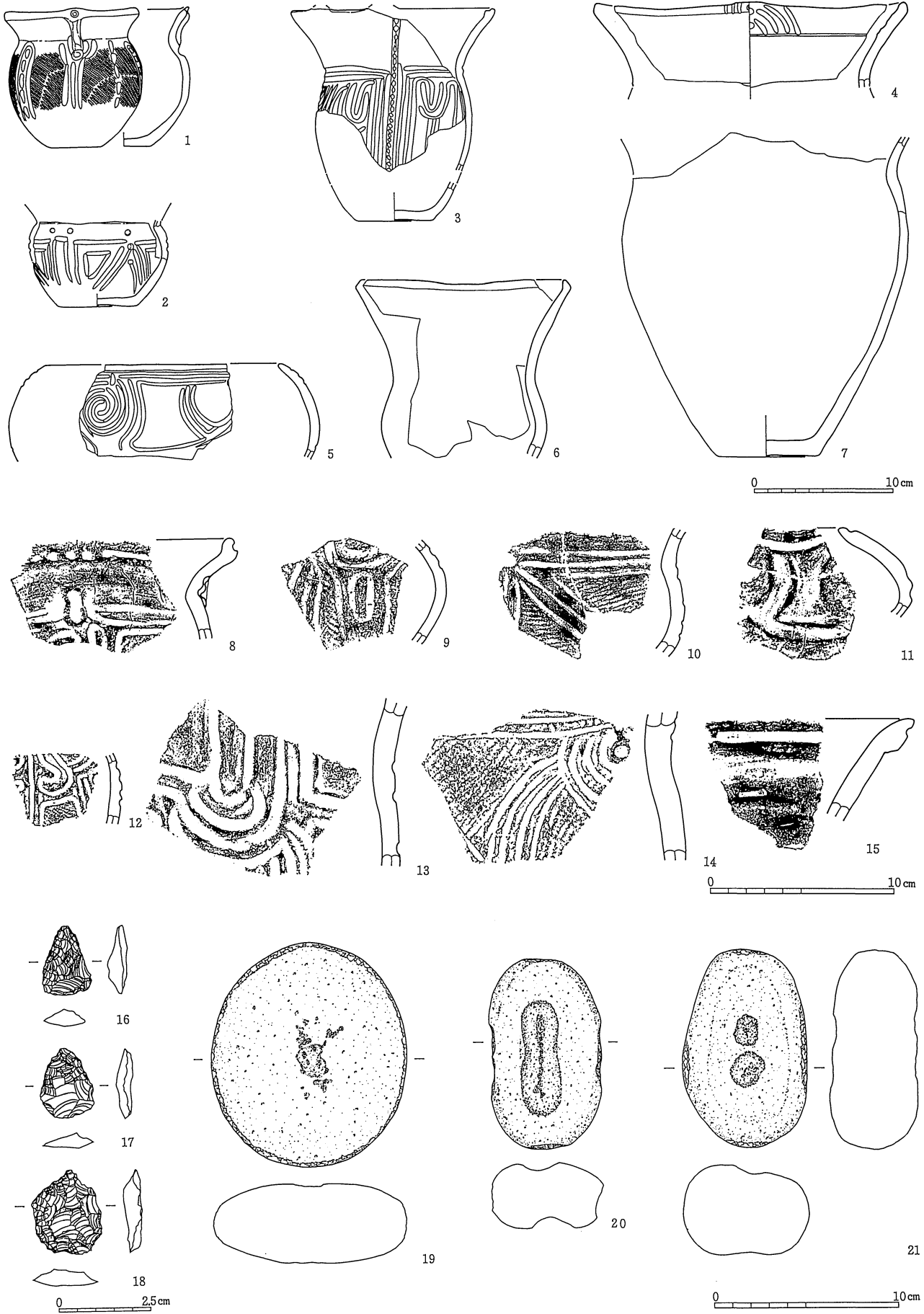
炉は石囲埋甕炉であり、埋甕炉部分だけが異常に深い構造となっていた。炉縁石は極端に整形された軽石を使用しており、とりわけ奥壁側の両コーナーには、カーブ面をきれいに作出したものが使われていた。



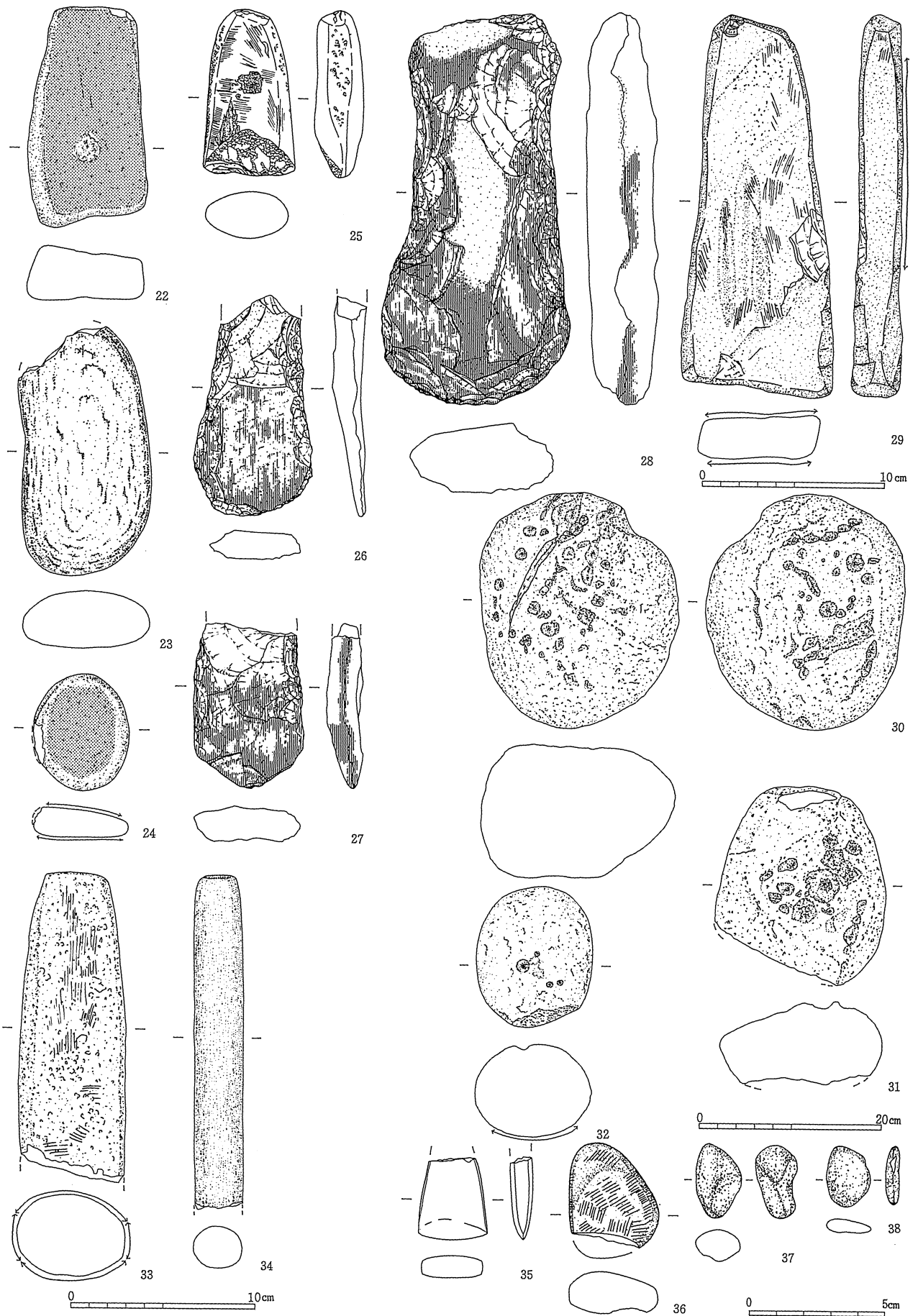
第9図 4号竖穴住居跡(1)



第10図 4号竪穴住居跡(2)



第11図 4号竖穴住居跡(3)



第12図 4号竪穴住居跡(4)

出土遺物のうち7は炉体土器、30・31の多孔石は張出部の壁体として出土し、その他、位置を把握したのものについてはすべて床面直上に認められたものである。祭祀遺物である32の丸石・34の石棒は、出土位置からして重要なポイントとなる。37の玉類は主体部の南東コーナーから出土しているが、同様に38の玉類もまた、この付近で認められた。同地点から29の砥石が出土しており、またこれとは直接関係ないかもしれないが、付近から別母岩を素材とする大形剥片類が多数認められた。

時期は出土土器から堀之内1式最終段階に比定される。

5号竪穴住居跡（第13図、P L 32・36）

4号竪穴住居跡に西側上半を切られた恰好となるが、本跡を廃棄して4号竪穴住居跡を構築したものと考えている。また、本跡は拡張住居であり、新旧の関係が明瞭となっている。

新住居跡は外側のプランを指し、 $P_1 \sim P_7$ が壁柱穴、 $P_8 \cdot P_9$ が対ピットとなる。旧住居跡の床面から数cm上に床を設定したらしいが、同時に調査を進めたために、新住居跡の床面についてはほとんどないがしろにしてしまった。主軸はN -8° -W、柄鏡形を呈していたかもしれないが、現状では主軸長・副軸長が4.32m \times 4.76m、壁高が最高で74cmをはかる。床面上に礫が散在するものの、敷石的なものではない。炉は確認していない。旧住居跡の床面にみられる焼土の一部が該当するのかもしれない。

旧住居跡は一回り小さく、 $P_{15} \cdot P_{16}$ を対ピットとし、 $P_{10} \sim P_{14}$ が壁柱穴となっている。それ以外の壁柱穴は、新住居跡と共有しているものと考えられる。主軸長と副軸長は3.60m \times 4.18m、主軸方向は同一である。南西コーナーを除き周溝が巡る。炉は掘り込みをもち、床面が顕著に焼土化するだけであった。

遺物はすべて新住居跡から出土したものである。13・14は床面から出土している。また11は新潟県地方を中心とした南三十稲葉式土器であり、3もその影響が考えられるものだろう。

時期は堀之内1式期の中頃である。

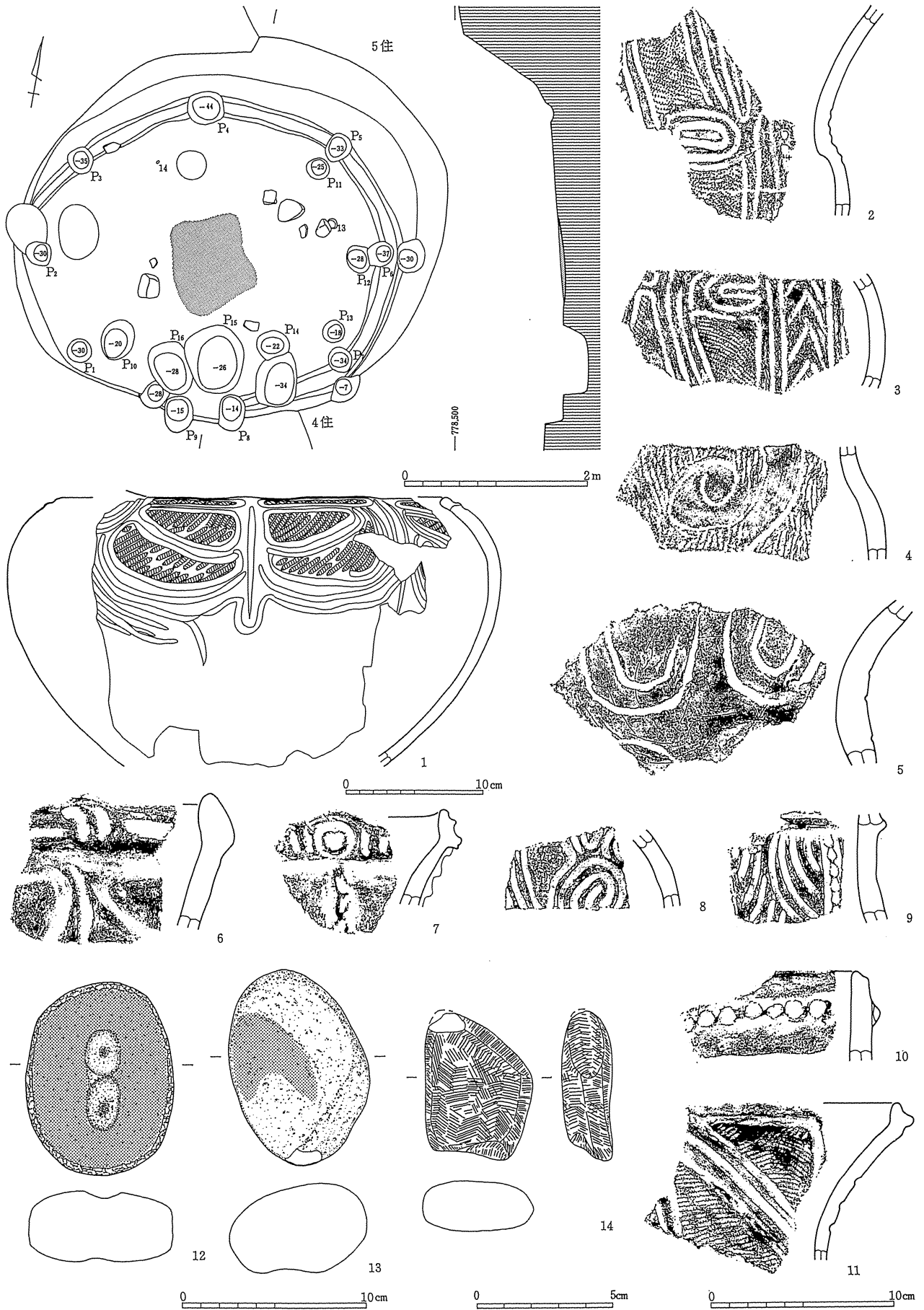
6号竪穴住居跡（第14図、P L 23・24）

主軸方向は、概ね座標北を示している。主軸長は5.00m、副軸長は4.92m、壁高は最高で26cmをはかる。覆土は3層に分層可能だったが、柱穴内部及び炉の底部を除けば、焼土粒子を少量含む黒色土壌が充填されるだけだった。床は斜面に沿って傾斜しており、最大40cmもの差が認められた。柱穴は壁柱穴となるが、乱雑に配されており、また各ピット間に大小の差を見出すことが難しく、主柱穴らしいものは確認できていない。なお、住居西側については、住居よりも古い風倒木痕が存在しているのだが、地山層が乱れているため、柱穴の検出は不可能であった。また、 P_1 とした大形ピットが存在しており、もしかすると本跡には帰属しない土坑かもしれないが、覆土第1層が本跡第1層に等しいことから、この範疇に入れておいた。

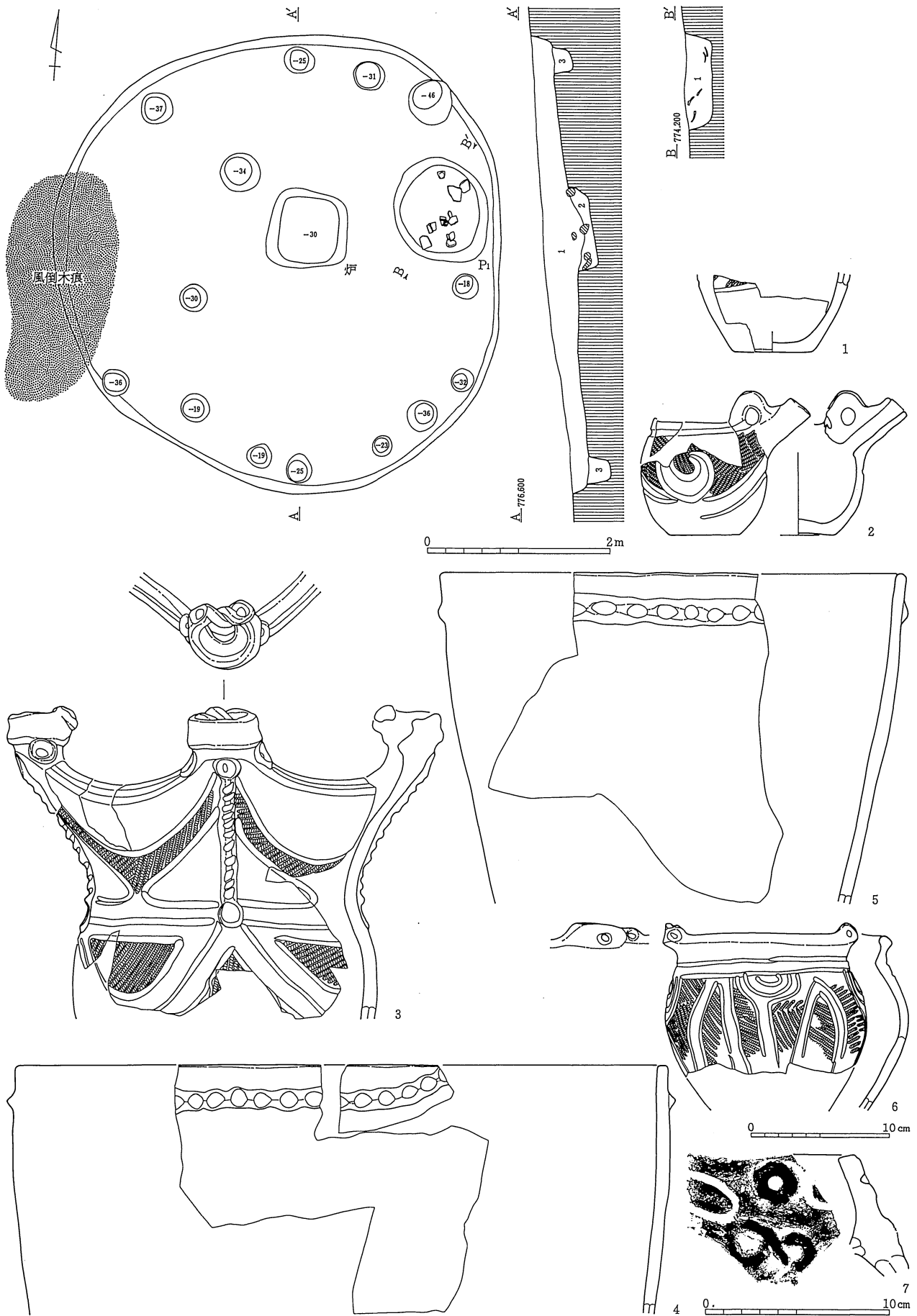
炉は住居中央ではなく、やや奥壁際に寄っている。地床炉なのか、炉縁石は確認していない。焼土も一切認められなかった。

遺物は比較的豊富そうに見えるが、すべて破片として出土し、しかも散乱した状態となっていた。したがって、出土位置を明確に把握したものはない。ただし、5のみが P_1 内から出土している。

時期は、堀之内1式期でも、やや古い段階に比定される。



第13图 5号竖穴住居跡



第14図 6号竖穴住居跡

2 その他の竪穴住居跡

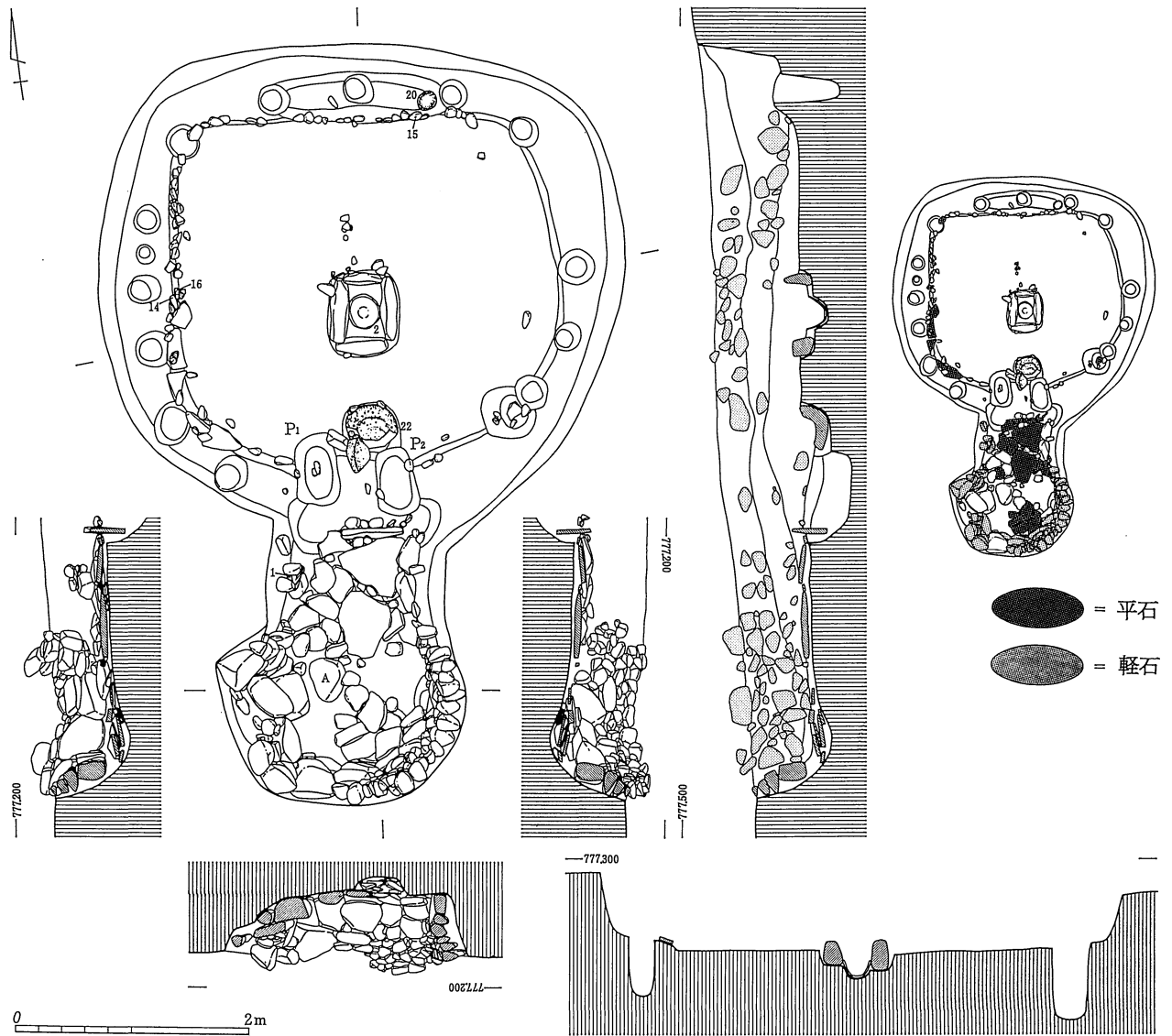
7号竪穴住居跡 (第15~17図、P L14~16・24・32・33・35・36)

保存状態の良好な柄鏡形敷石住居跡である。張出部に出入口施設をもつことから、かつて『長野県埋蔵文化財センター年報』9において「3号住居跡」として報告したが(長野県埋蔵文化財センター1992)、報告書の都合上、これを「7号竪穴住居跡」に変更することとする。

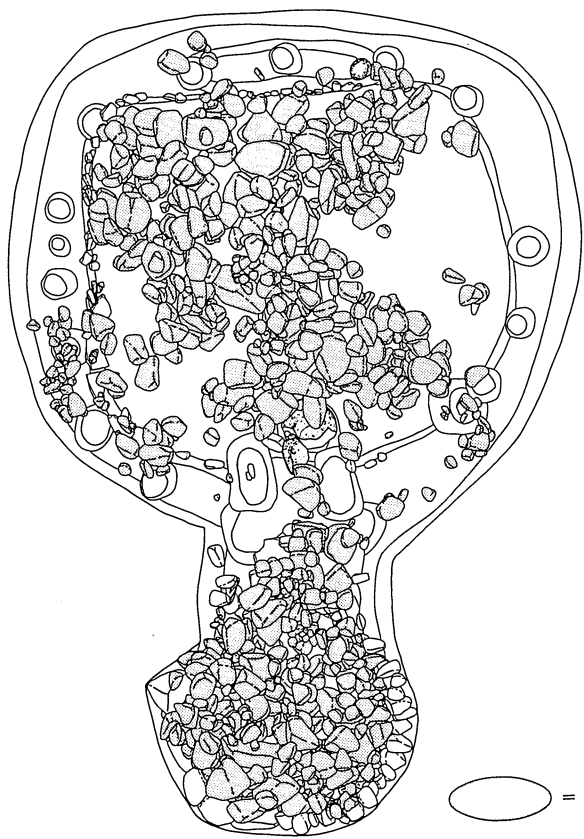
N-5°-Eを主軸とし、主体部の主軸長・副軸長は4.22m×4.50m、張出部の主軸長・副軸長は2.30m×2.04m、全長は6.52mとなる。壁高は北壁が最大値をはかり、70cmを有する。

覆土は3層に分層可能であったが、うち、中間層の奥壁寄り、また最終層の主体部中央部分及び張出部全体に軽石が投棄されていた。

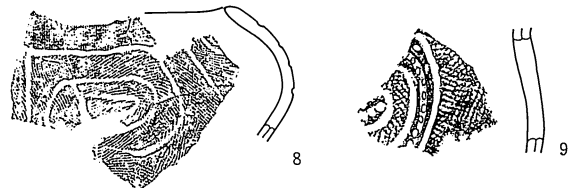
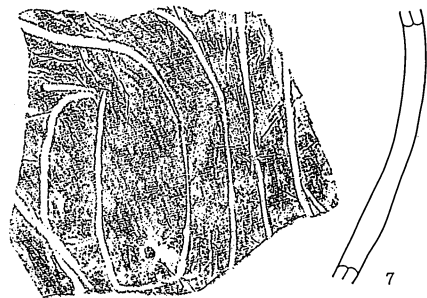
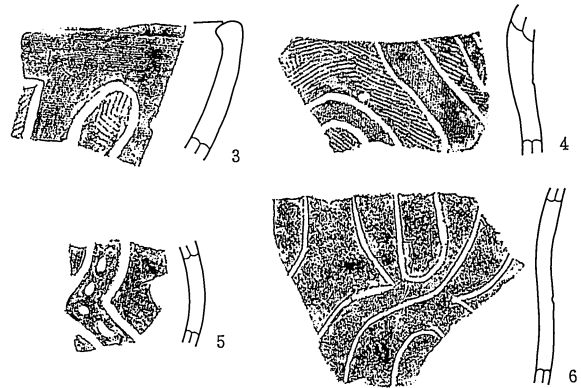
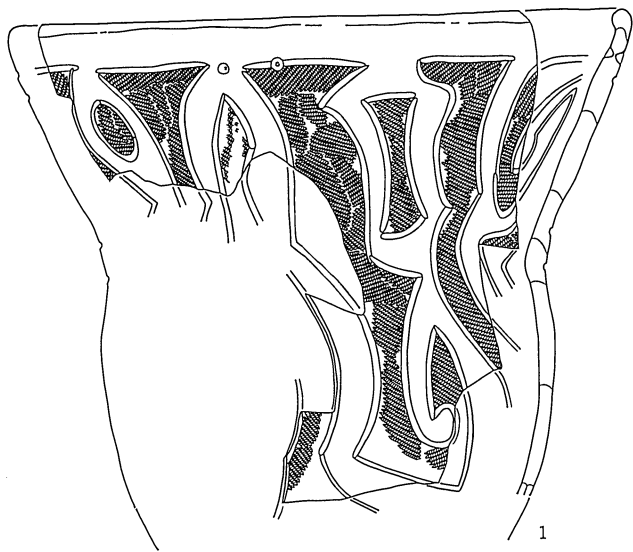
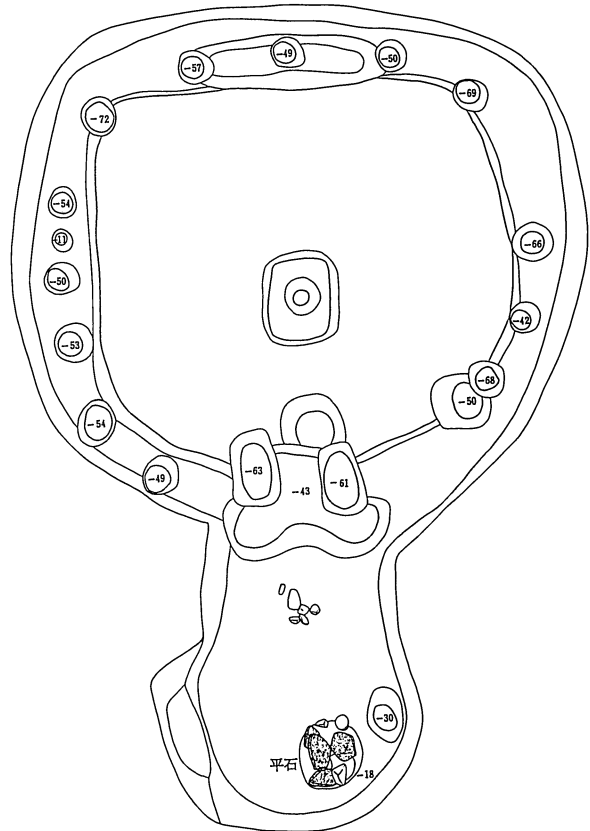
主体部の床の周縁には数cmほどのテラスが設けられており、またその奥壁側では、テラスから7~8cm高い、やはり地山掘り残しの周堤状施設が存在している。テラス内には壁柱穴が巡っている。また、P₁・P₂が対ピットで、それを結ぶ大形ピットが存在する。炉は石囲埋甕炉で、炉体土器の範囲だけ深く掘り込んだものである。焼土は認められなかったが、炉縁石の内面及び炉体土器の上部は良く焼けてい



第15図 7号竪穴住居跡(1)



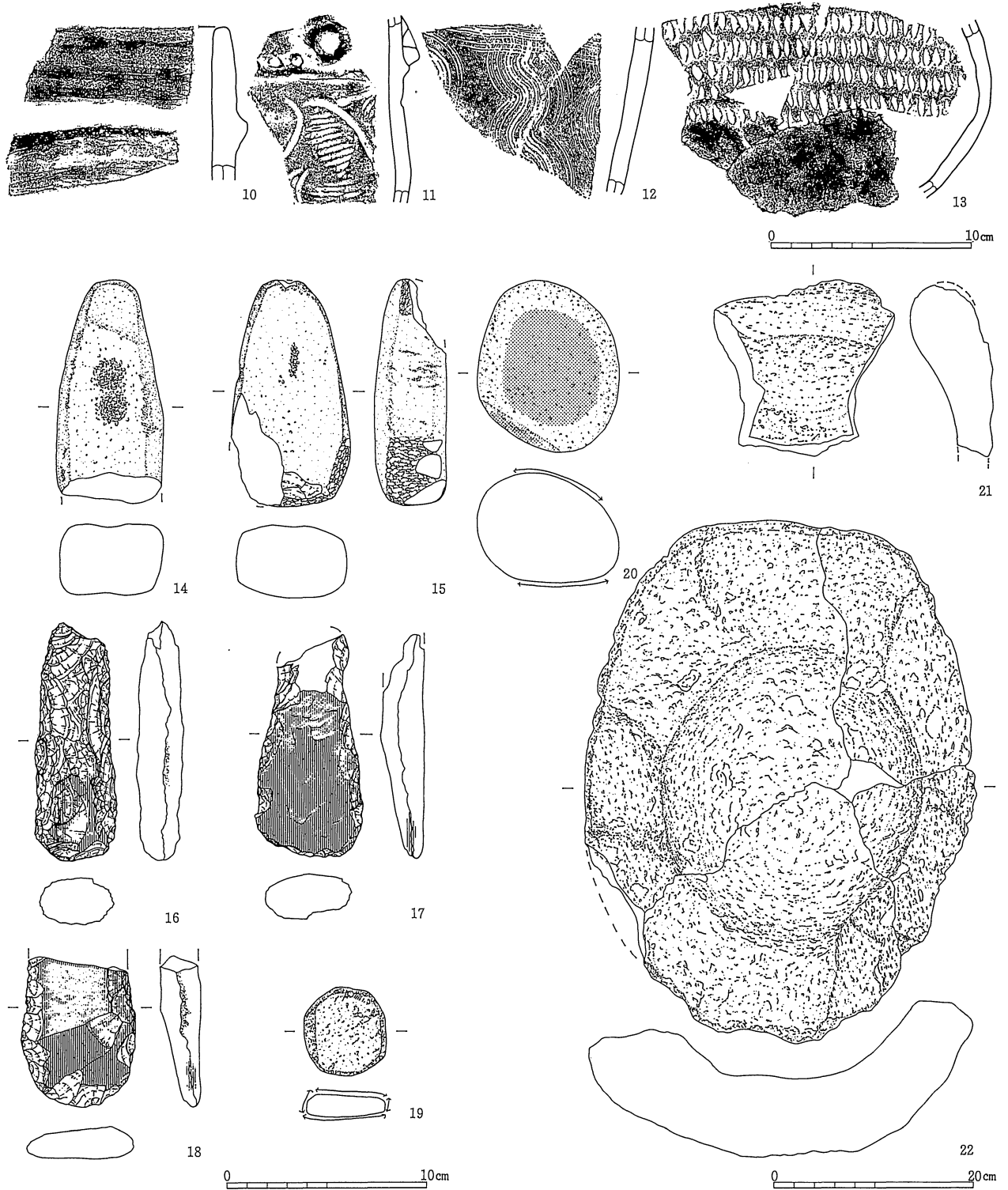
○ = 崩落礫



0 10 cm

0 10 cm

第16図 7号竖穴住居跡(2)



第17図 7号竪穴住居跡(3)

た。

主体部には東壁を除いてテラス直下に縁石が巡っていた。川原石が主体で、壁に密着するようなかたちで横積みされたものがほとんどである。連結部には平石（鉄平石）による框石を設け、そこから張出部側にかけて平石（鉄平石）を主体とした敷石を行っている。また、手前側ではピットを設け、ことさら偏平な平石（鉄平石）で覆っていた。

張出部の側壁には、ほぼ完全な状態で石積みが残されていた。軽石が主体で、根石を立積み、それから

上を小口積みとし、また礫の大きさも前者が人頭大程度、後者が拳大ほどのものがほとんどであった。西側壁中央には安山岩系の扁平な礫を2個横積みしているが、それより北側の軽石の側壁には、明らかにそれに向かって壁面を形成しており、またこの部分の掘方自体も、段をなして外方へと突出しているものだった。さらに、Aとした礫は安山岩系の円礫だが、ほかの敷石よりも高いレベルに設定されており、しかもほかとは違って表面がざら付いており、滑り止めのような趣を感じさせるものであった。したがって、この場所を出入口部として認定した次第である。

出土遺物のうち、1が壁体の一部、14～16が縁石の一部、20が周堤状施設上面、22が対ピットと炉間のピット内から出土し、また2が炉体土器である。なお、13は新潟県を主体とする三十稲葉式土器である。時期は後期初頭、称名寺式の中頃に比定されるものと思われる。

8号竪穴住居跡（第18～19図、P L 24・33・34）

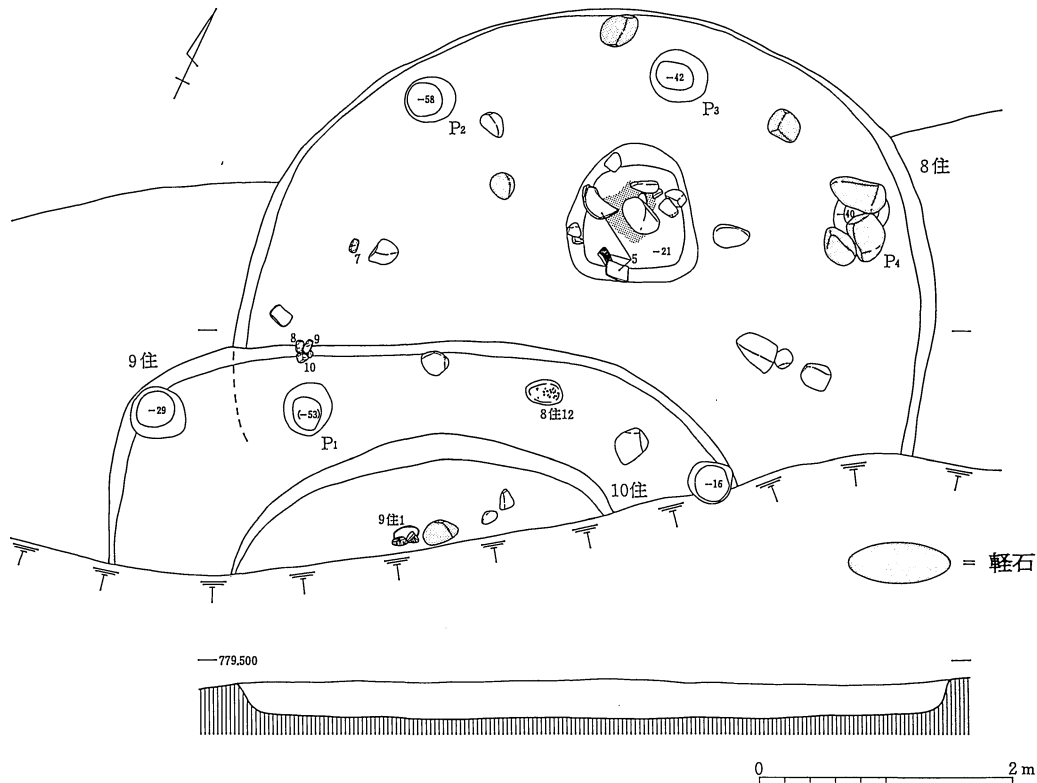
9・10号竪穴住居跡及び溝跡と重複し、9・10号竪穴住居跡を切り、溝跡に切られている。また、南半を市道3115号線による攪乱で削り取られている。

主軸はN-8°-W前後と推定され、副軸長は5.50mをはかる。壁高は最高で29cmを計測する。

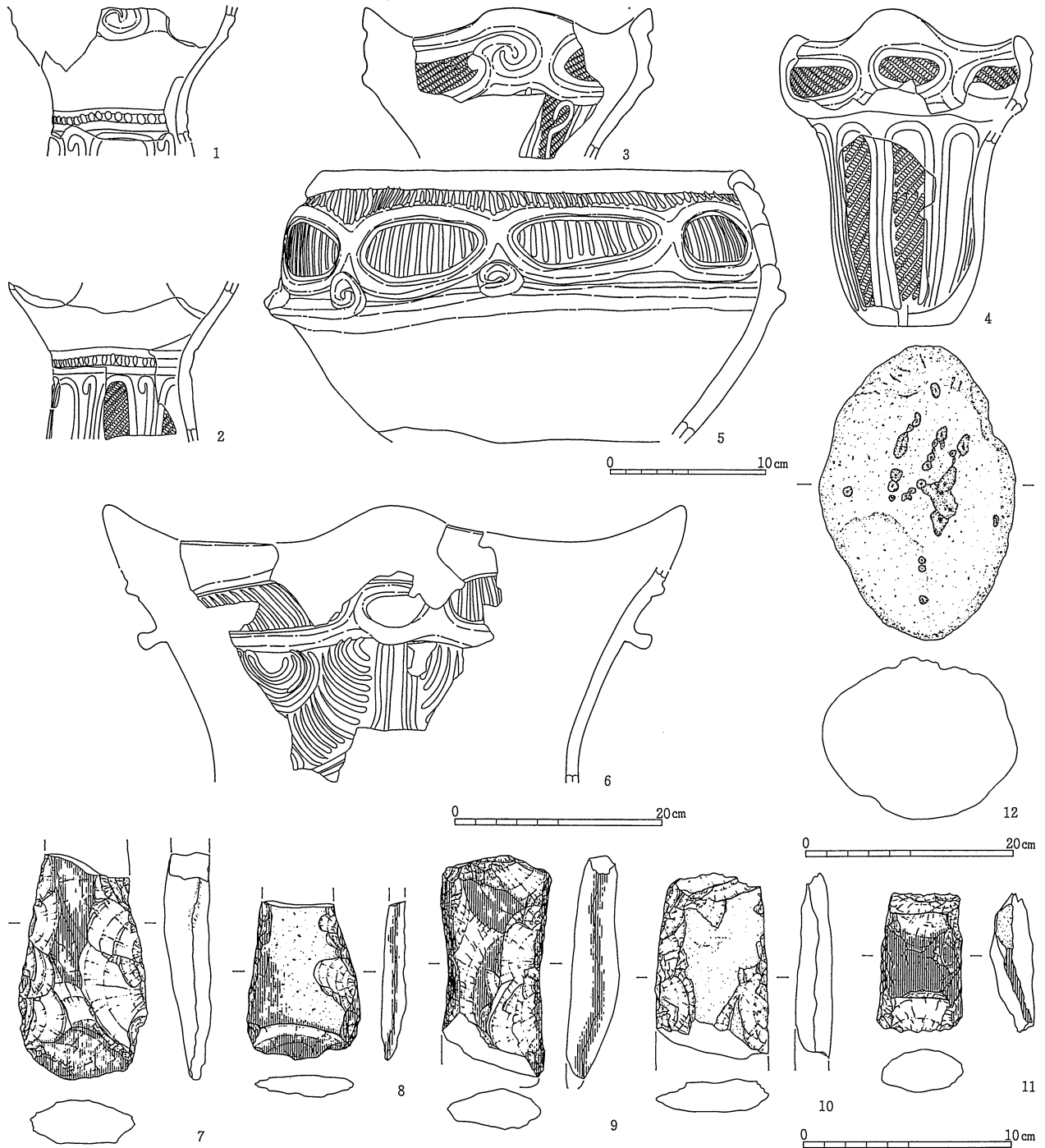
覆土は暗褐色土の単層である。P₁～P₄が支柱穴と思われ、基本的には5本支柱の形態をとるものと考えられる。炉は深さ21cm程度を呈し、底面に焼土が残存していた。炉縁石は残っておらず、また内部に川原石が散在するものの、被熱していなかった。

出土遺物のうち、5は炉の底部から、7～10は床面直上から、12も床面直上と想定される位置から出土したものである。なお、6の内面には赤色塗彩の痕跡が残っている。

時期は中期後葉、加曾利Ⅲ式に相当し、その中でも古段階に位置付くものと思われる。



第18図 8～10号竪穴住居跡



第19図 8号竪穴住居跡

9号竪穴住居跡 (第18・20図、P L24)

8号竪穴住居跡に切られ、10号竪穴住居跡を切っている。また、南側の大半を市道3115号線によって削り取られている。

主軸はN-25°-W前後であろうか。副軸長は現状で4.96mをはかる。壁高は最高で37cmである。

柱穴や炉などの内部施設は存在しない。1の深鉢形土器が床面から出土した。

時期は1が唐草文系土器群に相当するものの、2の土器の存在から、加曾利E II式に該当もしくは併行する段階と考えたい。

10号竪穴住居跡 (第18・20図、P L24)

住居全体を8・9号竪穴住居跡に切られた恰好となるが、本跡の方が床面が低く、辛うじて形態を残している。ただし、市道3115号線によって削り取られてしまい、奥壁しか残っていない。

主軸は不明である。正確な規模は分からないが、小規模な住居であったことは間違いない。現状では3m強の副軸長を測定する。壁高は25cmを最大とするが、これを切る住居跡がなければ70cm以上の壁高が存在したものと考えられよう。

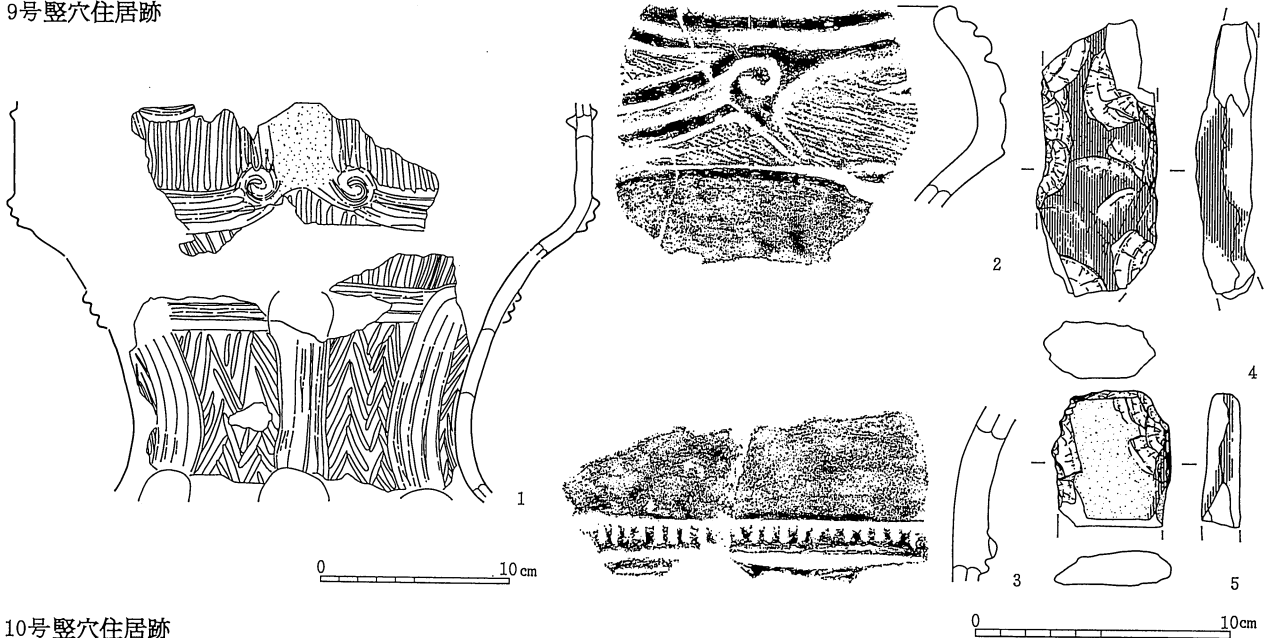
時期は加曽利E I式に該当する。なお、4・5は同一個体である。

11号竪穴住居跡 (第21~27図、P L17・25~27・32・33・35・36)

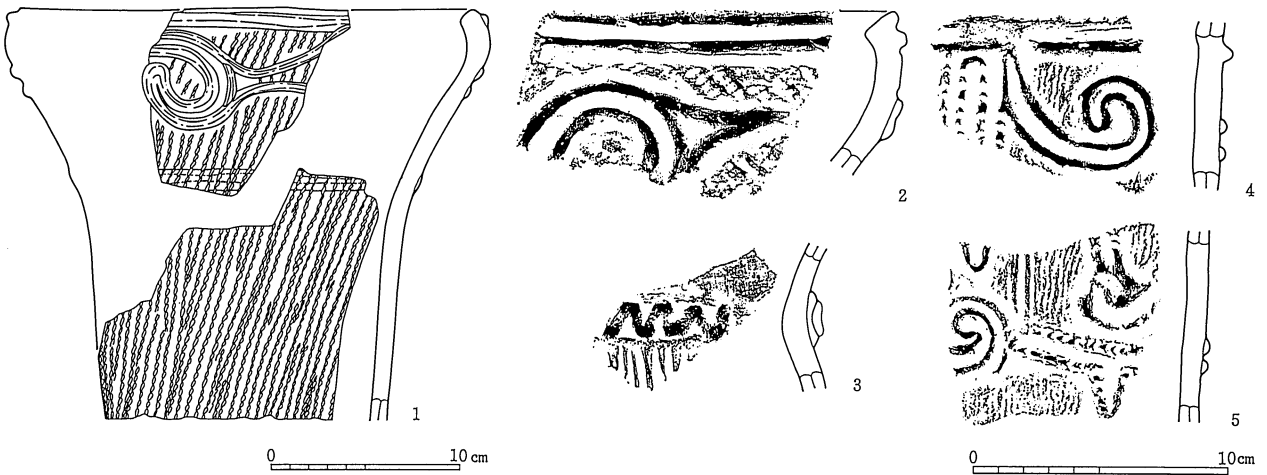
出入口部を拡張した住居跡である。したがって、出入口部構造が二重となり、また出入口埋塞もふたつ存在することとなる。なお、西壁については、浸食により崩壊してしまった。

主軸はN-23°-Eを呈する。主軸長は古段階で5.75m、新段階で6.64mをはかる。副軸長は6m強であろう。壁高は最高で70cmを有する。

9号竪穴住居跡

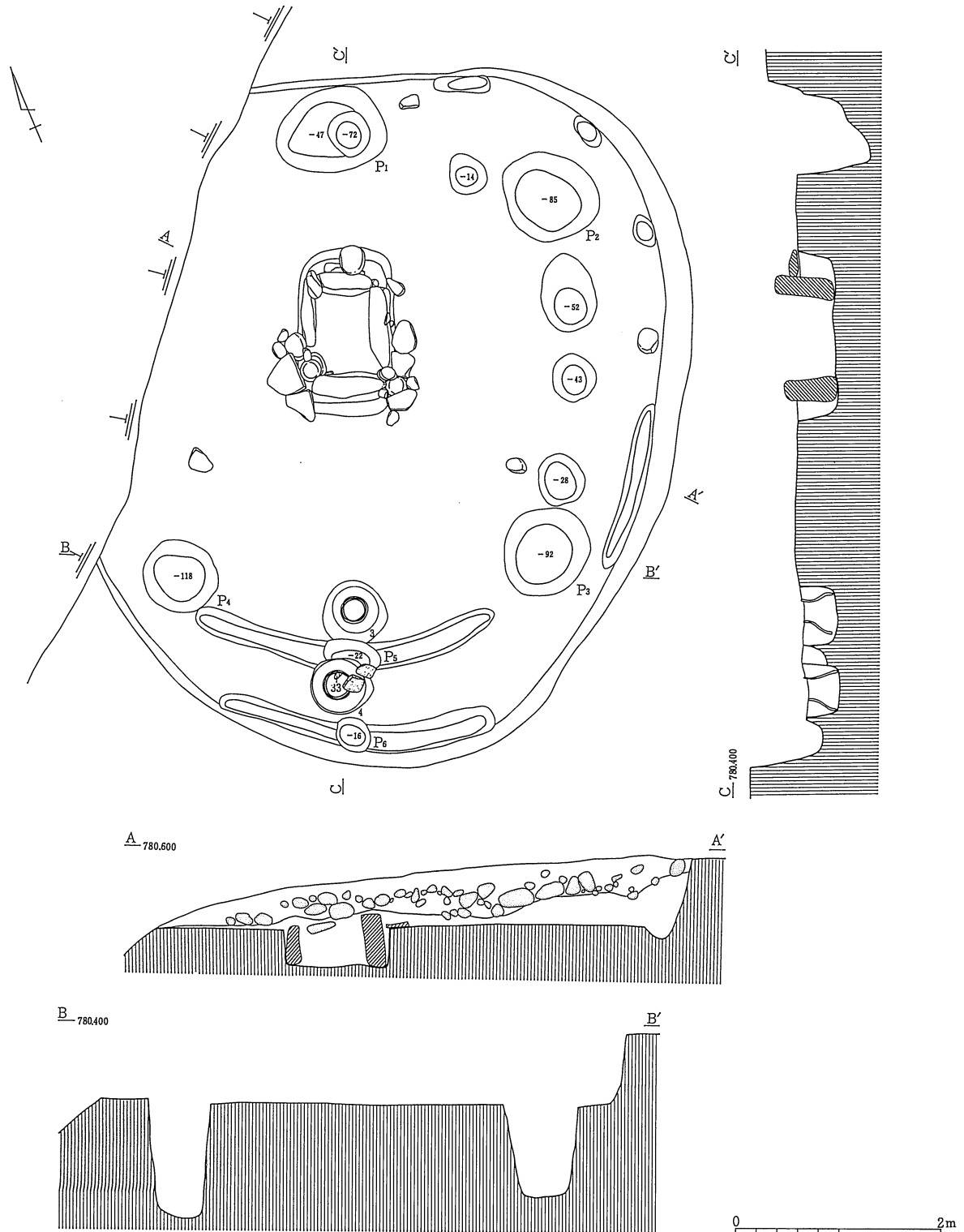


10号竪穴住居跡

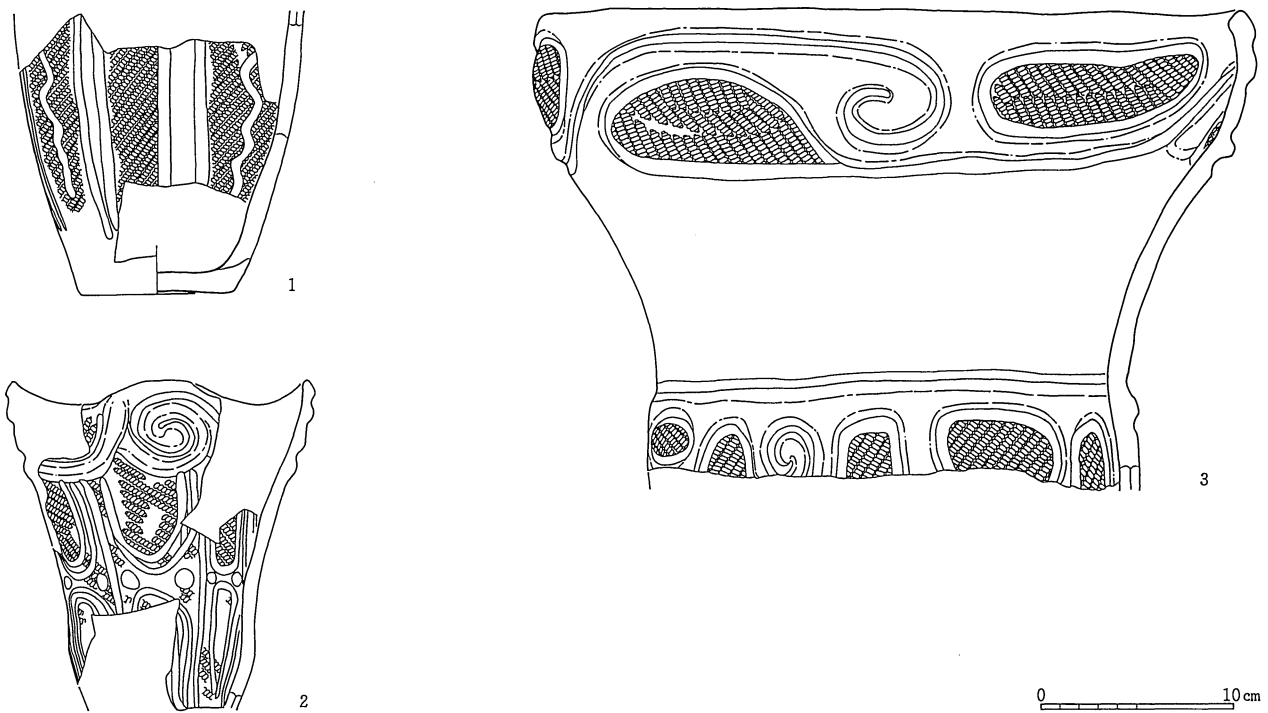
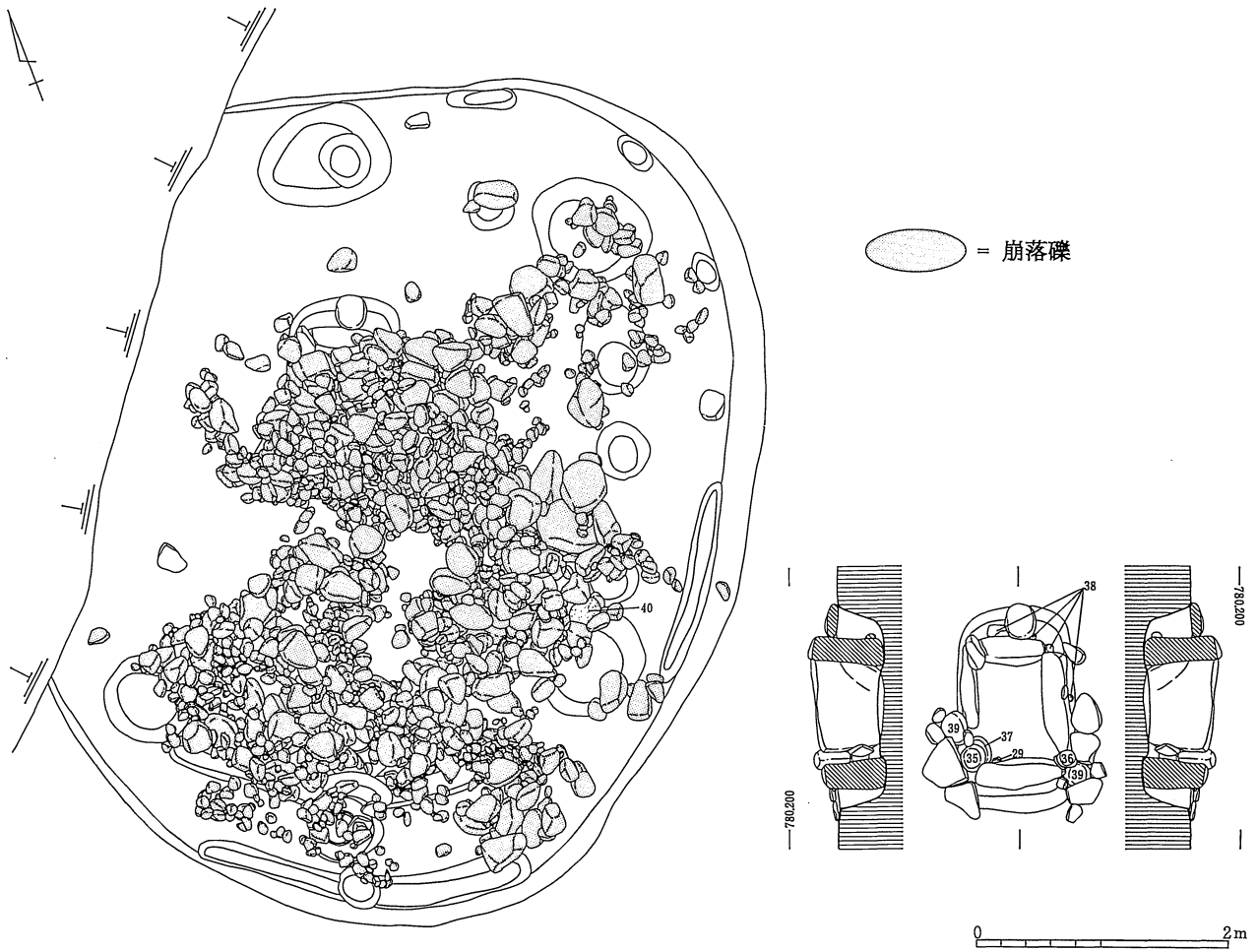


第20図 9・10号竪穴住居跡

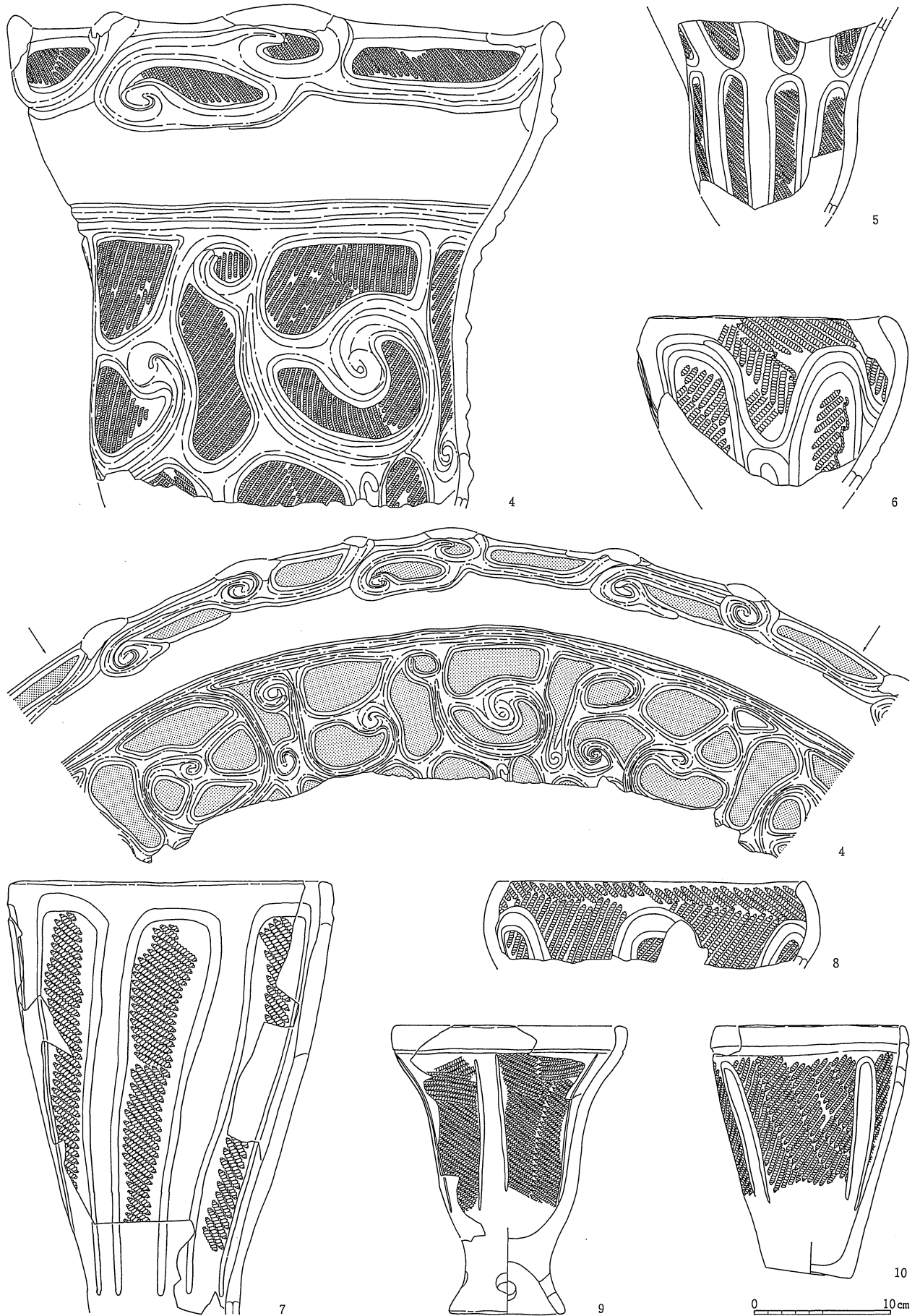
覆土は2層に分層可能であったが、初期の覆土が埋没した直後、住居内に多数の軽石が投棄されており、またその上面には、膨大な量の土器破片が住居全体に投げ捨てられていた。3・4以外の土器はすべてここから出土したもので、これ以外にも実測するまでには至らない数多くの破片が出土している。破片はいずれも細かく割れており、出土状況自体も小破片が集中するばかりで、しかも個体そのものを認定することすら不可能であった。繰り返し接合作業を行ってようやくここまで漕ぎ着けたが、それでも完形品



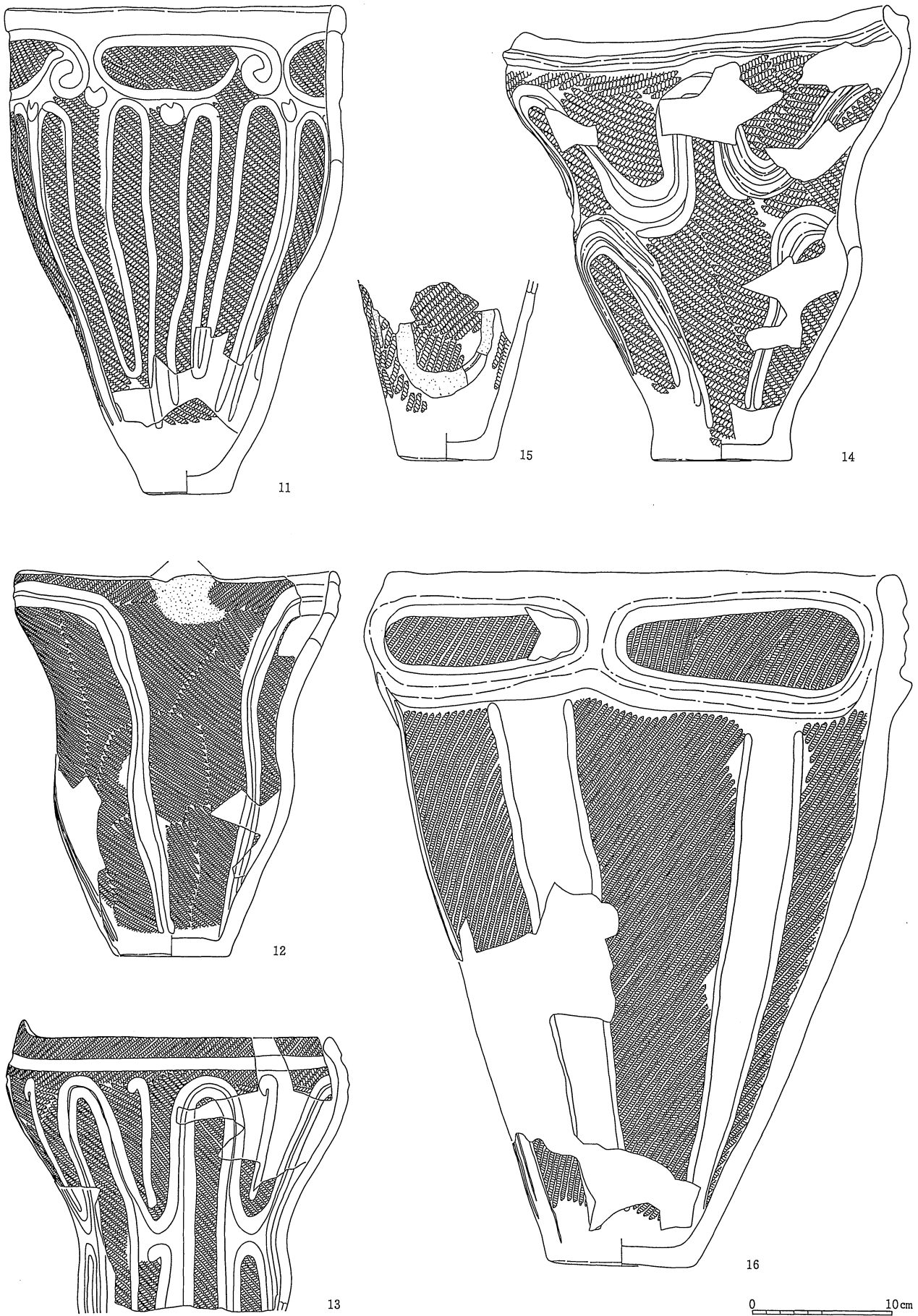
第21図 11号竖穴住居跡(1)



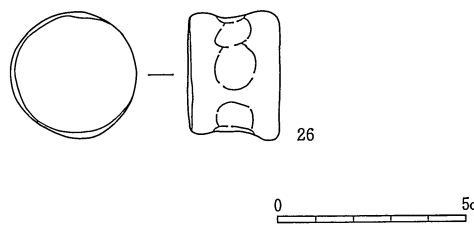
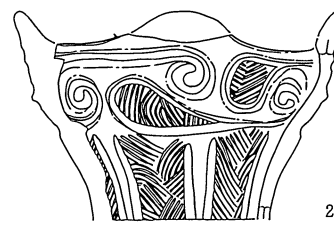
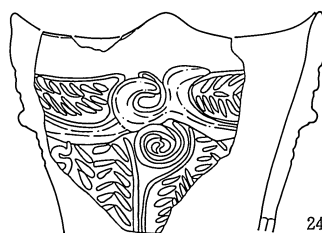
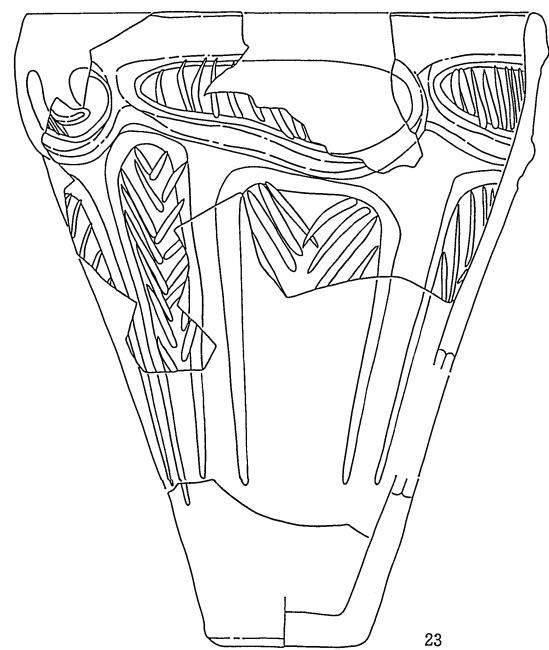
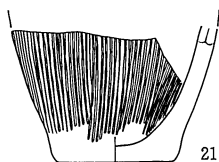
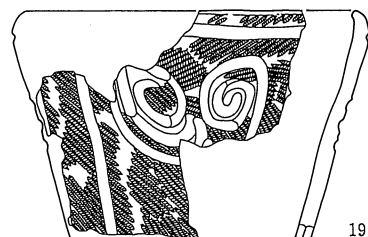
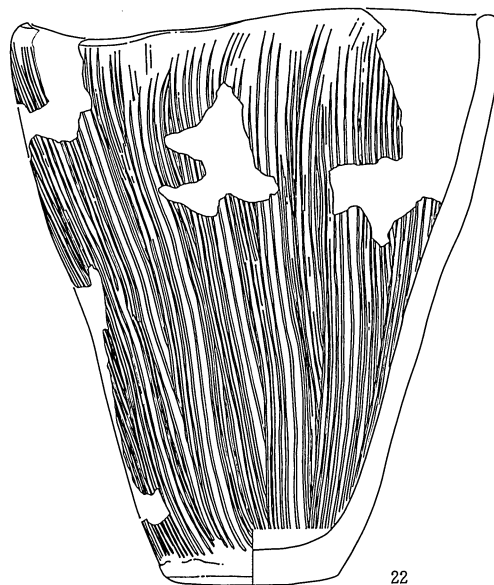
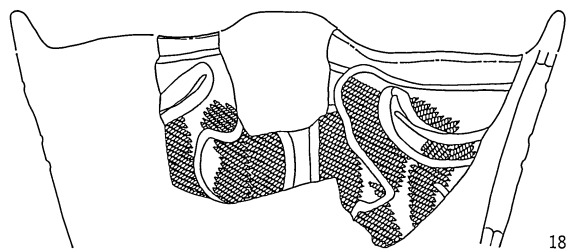
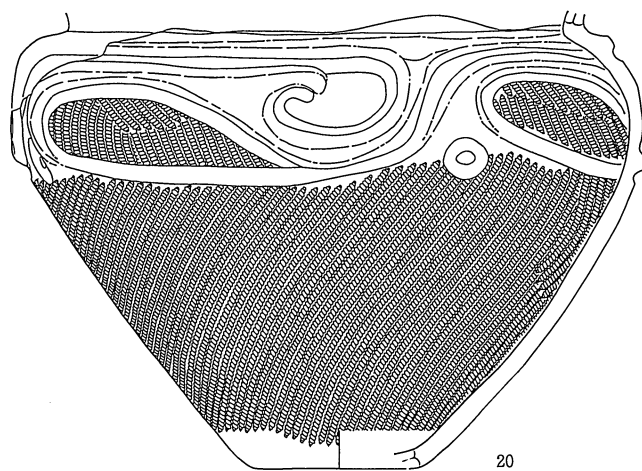
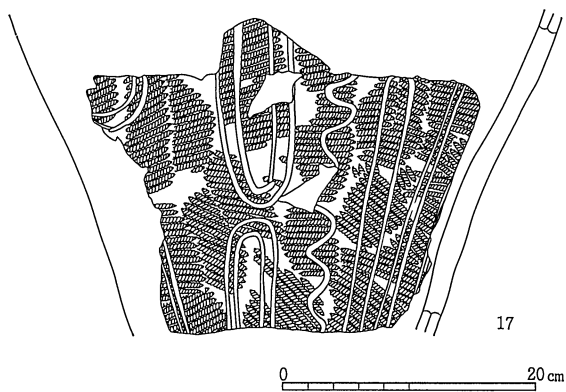
第22図 11号竖穴住居跡(2)



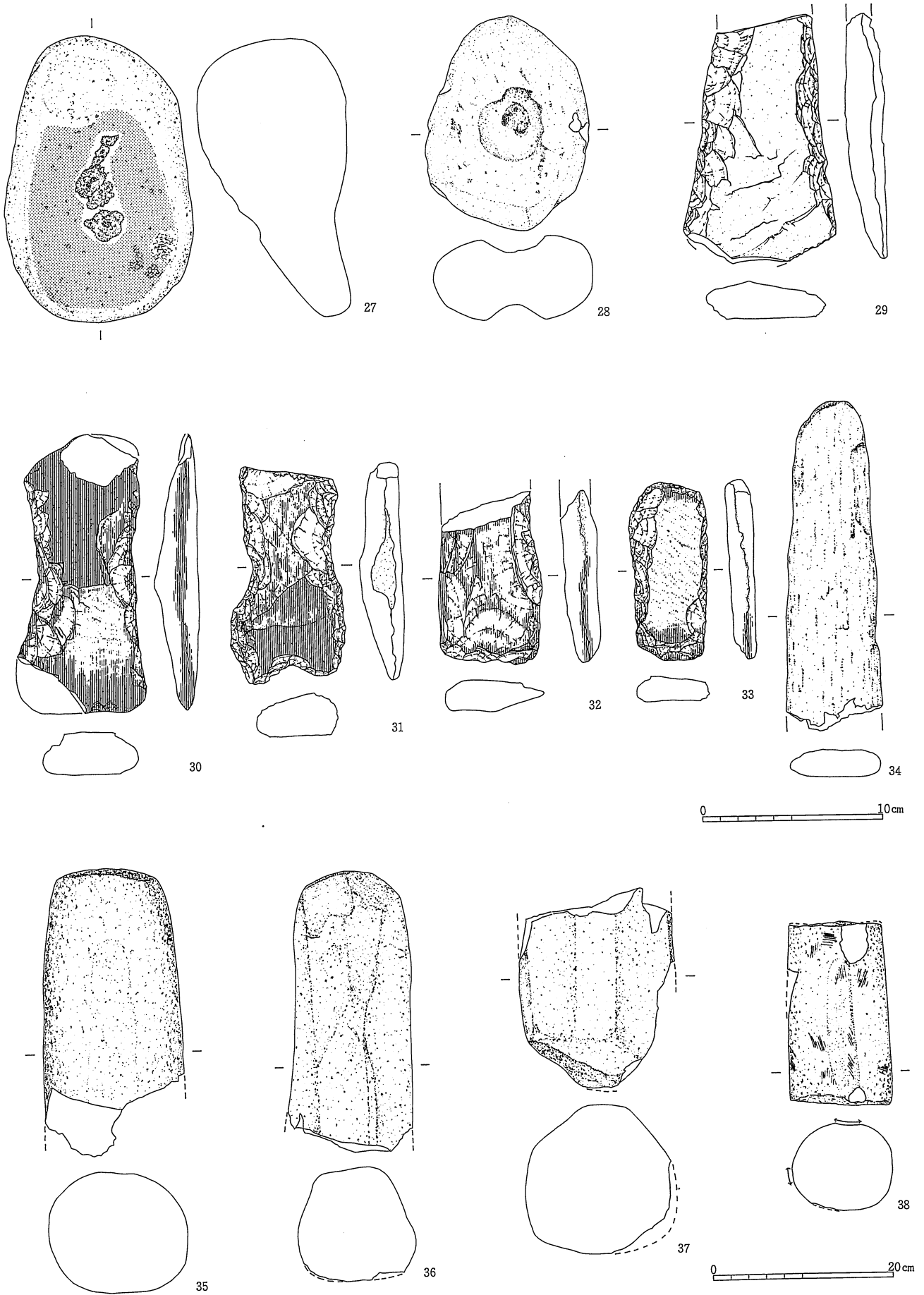
第23図 11号竖穴住居跡(3)



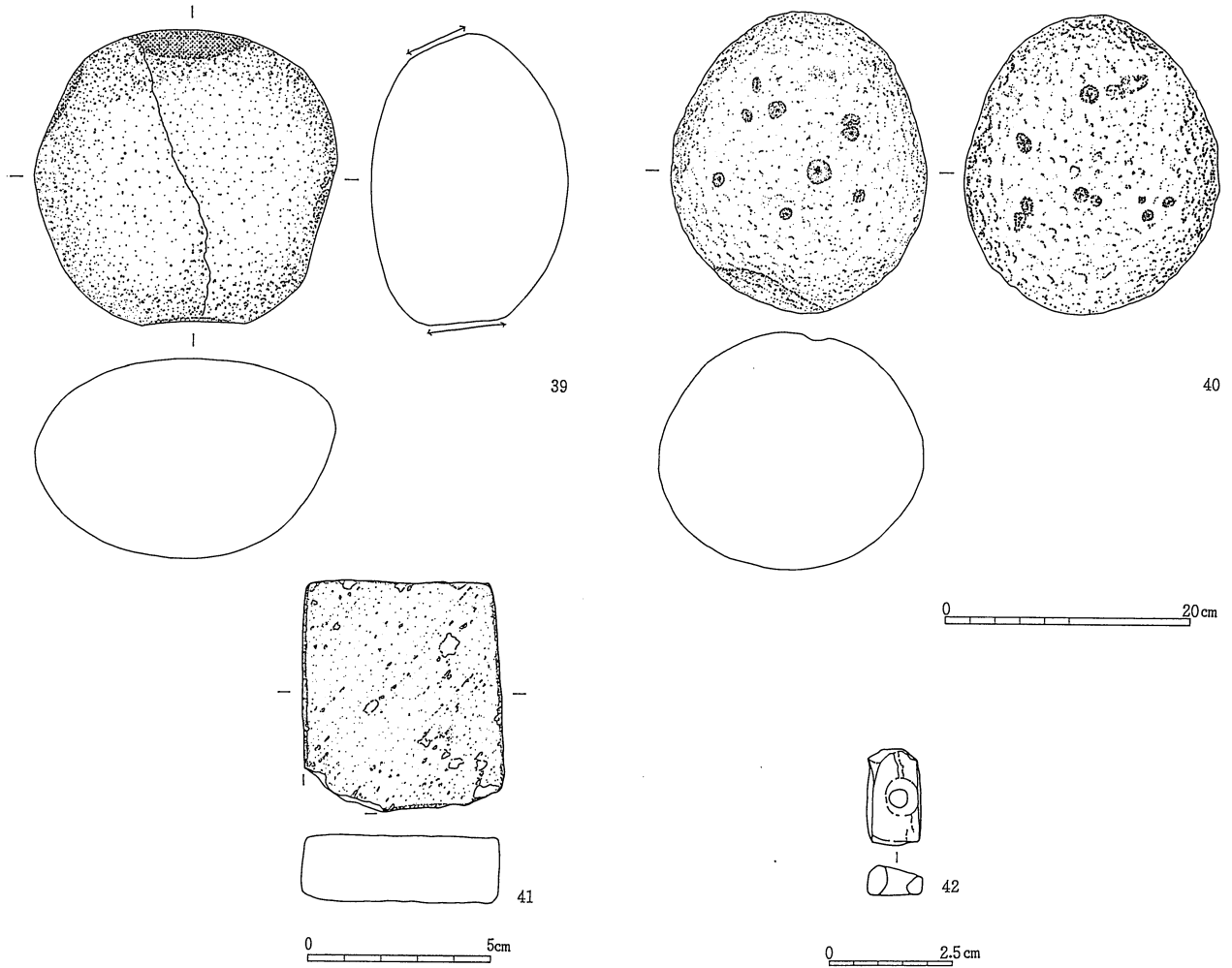
第24図 11号竖穴住居跡(4)



第25図 11号竪穴住居跡(5)



第26図 11号竖穴住居跡(6)



第27図 11号竪穴住居跡(7)

は存在しなかった。

拡張住居でありながら、柱穴の配置は変えていない。P₁～P₄が支柱穴と考えられ、5本支柱の形態を取っていたものと思われる。出入口部にはともに周溝が認められ、中央には梯子穴とも取れるP₅・P₆が存在する。

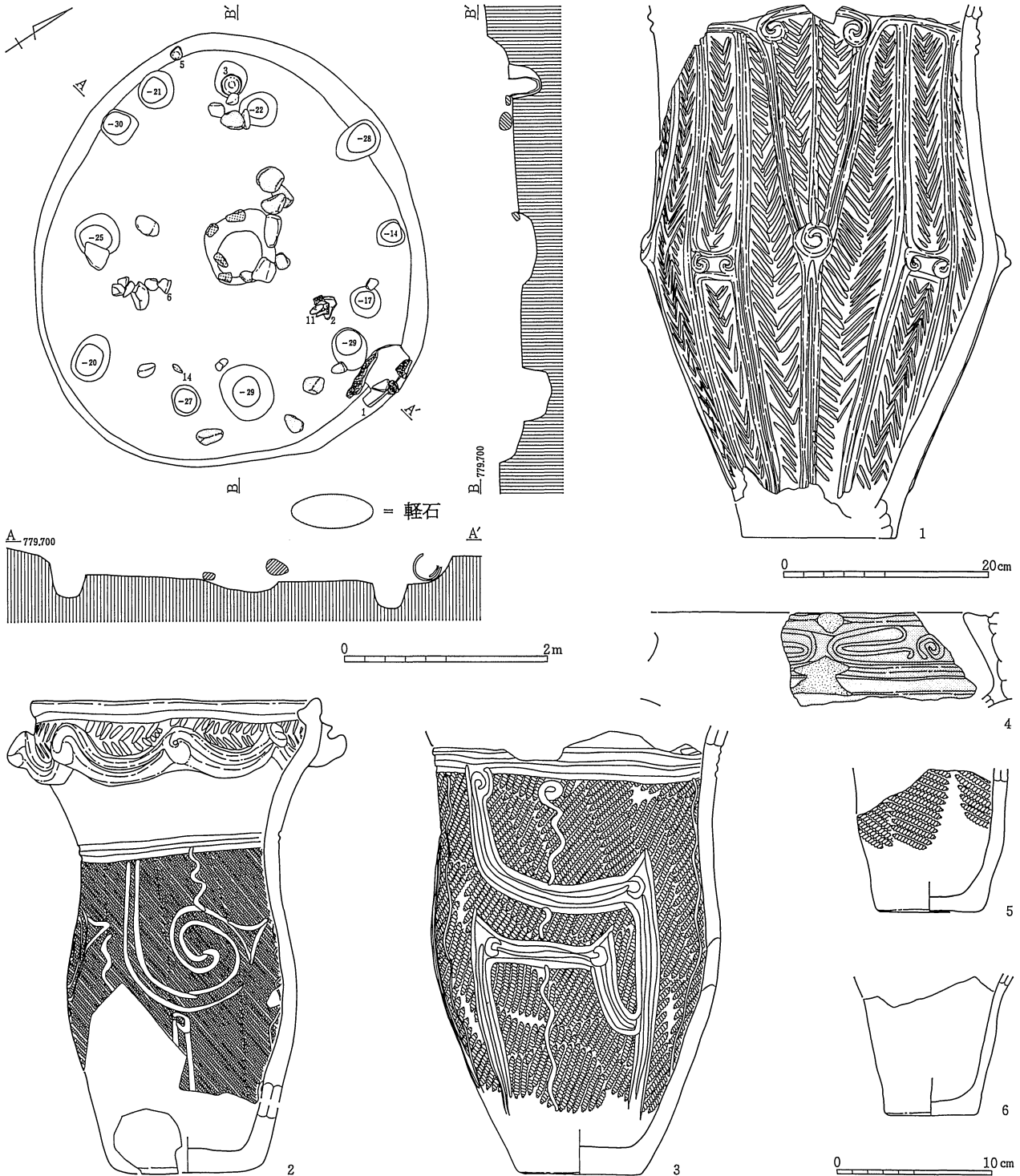
埋甕は2個存在し、土器の時間的關係は逆転するものの、位置からみて3を埋設するものが古段階、4を埋設するものが新段階の住居跡に帰属するものと考えられる。ともに胴部下半以下を欠落したものを逆位に、しかも斜位に埋設するものであった。4の埋設土器内部は、極めて柔弱な覆土で覆われており、一般の覆土とは大きな隔たりが認められた。また、その脇には石蓋とまでは言えないにしても、平石（鉄平石）がふたつ敷設されていた。なお、4の口縁部把手部分は意図的に削り取られており、平坦面を作出することで何らかの役割を担っていたらしい。

炉は左右対称に配石をもつ規模の大きな長方形石囲炉で、さらに石棒や丸石を有するものであった。炉縁石は大形の垂角礫からなる。石棒は住居手前側の両コーナーに樹立させ、しかも頂点が炉縁石よりも高い位置になるよう設定されている。また、38の石棒を砕いて、炉縁石と壁との隙間に入れ込んだものもある。また丸石は、ふたつに割ったものを石棒の傍らに置いていた。配石は偏平な円礫もしくは平石（鉄平石ではない）を利用したものである。

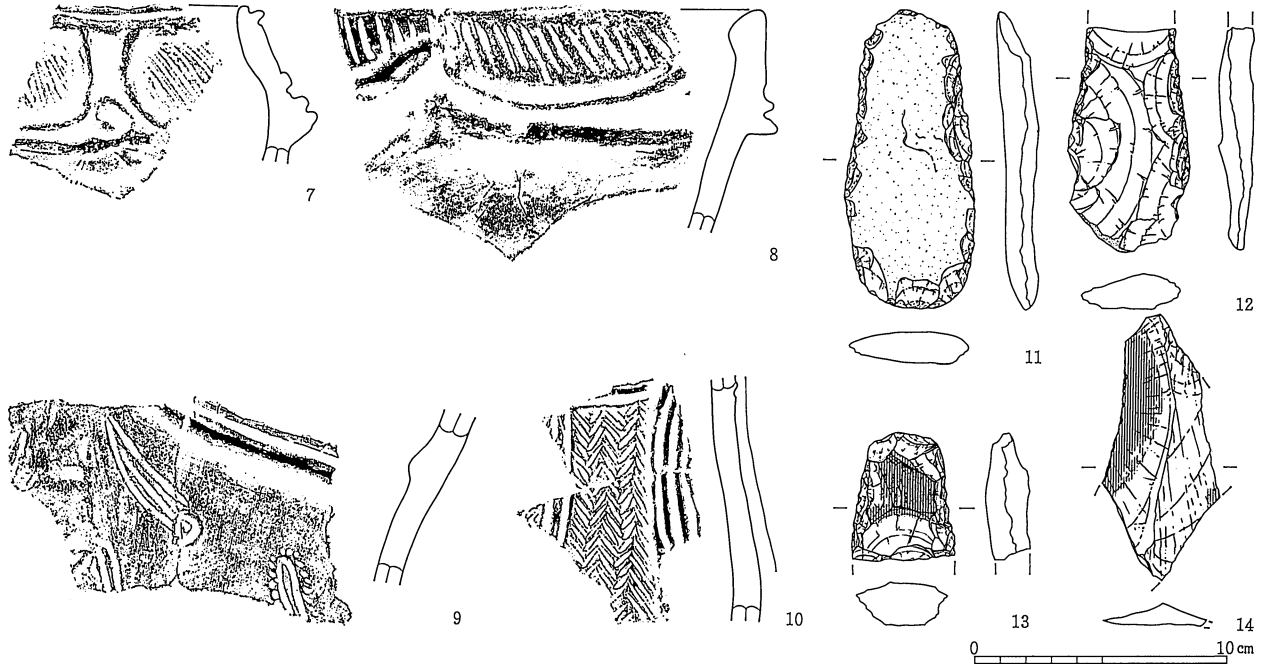
遺物は投棄された軽石上面には数多く認められたものの、それ以下には混入したものがほとんど認められなかった。構築時に既に存在したものと、ある程度埋没した時点で投げ捨てられたものとに大きく別れ

るようだ。前者には3・4の埋甕、29・35~39の炉関連遺物、4の底部から出土した33が該当し、後者には軽石とともに出土した40、3・4以外の土器がそれに該当する。位置を押さえていないが42も軽石上面から出土したものである。それ以外の遺物も軽石層以下では出土していないので、後者に位置付く可能性が高いものと考えられる。

時期は3・4の遺物から中期後葉、加曾利E II式最終末に構築されたと考えられるが、軽石投棄後の状況をみれば加曾利E III式の古い段階から新しい段階までがともに出てきてしまう。廃棄時期が問題となる



第28図 12号竖穴住居跡(1)



第29図 12号竪穴住居跡(2)

が、加曾利EⅢ式のある段階で使用に終止符が打たれ、その新段階で軽石が投げ込まれ、あわせて土器も捨てられたとみた方がいいだろう。

12号竪穴住居跡 (第28・29図、P L18・28・32)

何をもって主軸方向を決めるのか、決定付ける材料がなく主軸はなしとする。長軸長4.27m、短軸長3.85m、壁高は最高で31cmをはかる。

覆土は軽石流堆積物に酷似した明黄褐色を呈していたことから発見が遅れた。柱穴は方形を基調にした配置とも取れるが定かでない。炉は周囲に被熱を受けた割石がみられたが、焼土や炭化物は一切残っていなかった。埋甕は北西側の壁直下にあることから、出入口部に相当する場所とは思えない。口縁部を欠失したものを正位に、しかも口縁部を炉方向に向けて埋設していた。

3が埋甕、1が床面直上に存在し、また、5が7cm、2・14が10cm、6・11が18cm、それぞれ浮いた状態で出土した。なお、1・10は唐草文系土器群であり、3は大木8b式との関連が予測される。また、4は内外面とも赤色塗彩されている。

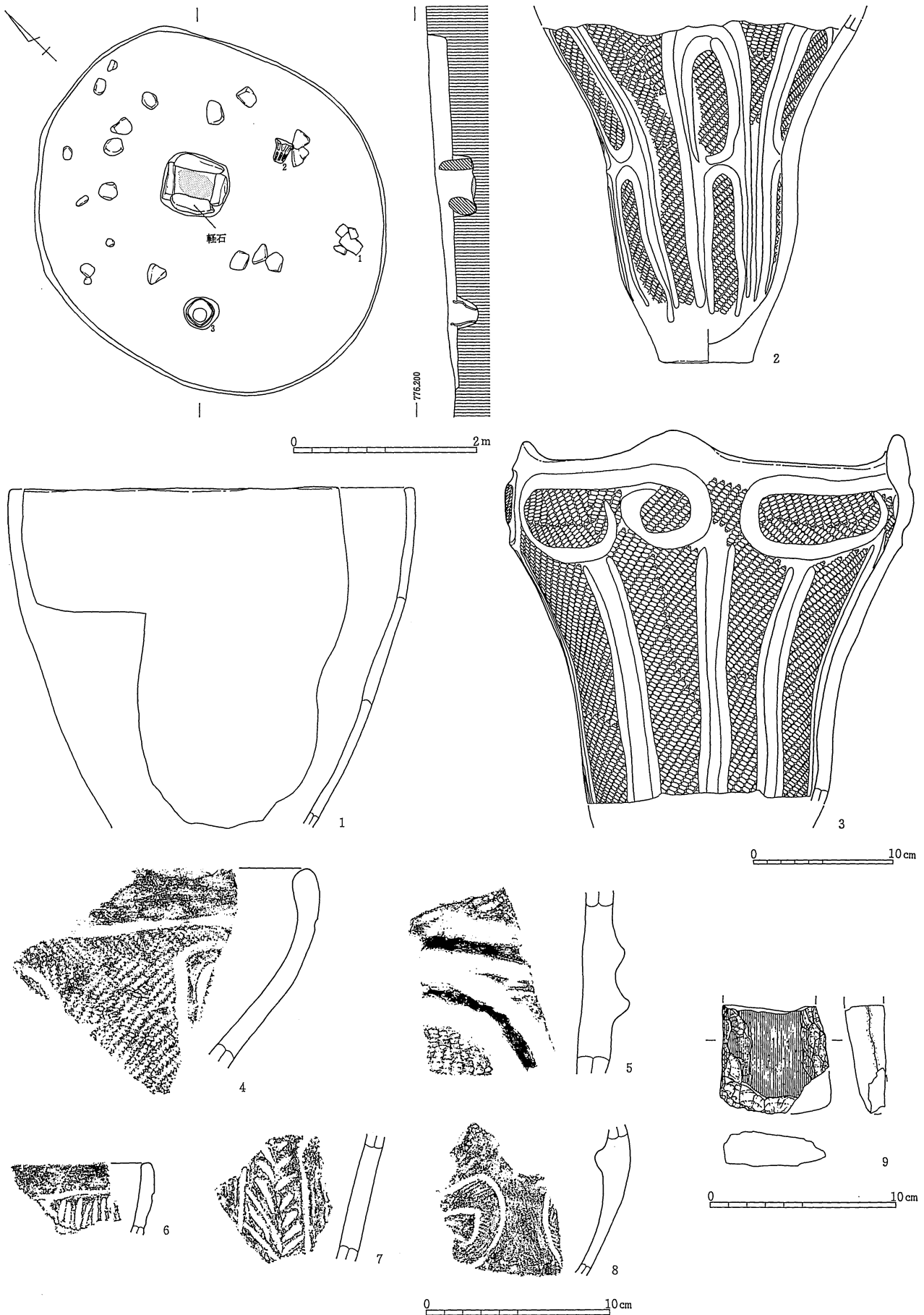
時期は中期後葉に比定されるが、3の土器からすれば加曾利EⅠ式後葉、ほかの土器をみれば加曾利EⅡ式の古い段階に落ち付くものと思われる。これが、構築時期と廃棄時期の時間差と考えている。

13号竪穴住居跡 (第30図、P L18・29)

浸食地形の上面に位置することから、黒色土中での検出であった。したがって、平面プランや床の位置などは、いまひとつ不明瞭な部分が多かった。

炉と埋甕の位置から主軸はN-43°-Eと想定してみた。その場合、住居の平面プランと認定した覆土第1層の範囲は、主軸長及び副軸長、3.87m×3.83mである。壁高は最高で29cmをはかる。

柱穴などのピット類は、黒色土中での構築のため確認できなかった。炉は住居手前側だけ軽石を利用しているが、ほかは安山岩系の角礫を用いている。底部は顕著に焼けていた。埋甕は底部を欠いたものを正位に、しかも口縁部を炉方向に向けて埋設していた。



第30図 13号竖穴住居跡

3が埋甕、2が床面直上、1が15cm浮いて出土している。また住居内に礫が多数出土しているが、すべて床面直上から出土した安山岩系の川原石である。ただし、敷石住居のようなものではない。

時期は中期後葉の加曾利EⅢ式に該当するが、3の埋甕は古段階でも新しい部類、その他の土器は概ね新段階の産物である。およそ、構築時期と廃棄時期の型式学的な年代差が判明したということになる。

14号竪穴住居跡（第31・32図、P L18・29・32）

柄鏡形敷石住居跡である。主体部の西側が調査区から外れている。張出部先端の大形ピットについては、調査担当者は住居に帰属するものと考えているが、整理担当者は土層観察や敷石の状況から、これを住居よりも新しい土坑と判断している。

主軸は、主体部と張出部が平行していないが、取り敢えず主体部中心に考えれば、 $N-20^{\circ}-E$ を示すこととなる。主体部の主軸長は4.50m、張出部の副軸長は最高で1.94mをはかる。壁高は奥壁がもっとも深く45cmをはかり、張出部に向かって徐々に浅くなり、最終的には20cm前後となる。なお、調査担当者の意見を尊重すれば、全長7.32mの住居跡ということになる。

主体部の壁際から若干離れて周溝が巡り、その内部に壁柱穴が穿たれている。その深さからみて、 $P_1 \sim P_4$ が支柱穴、その間に小ピットが存在する。また、 $P_5 \cdot P_6$ が対ピットである。

主体部の周溝の内側を中心として、小さな円礫や平石（鉄平石）で縁石を敷設した様子が残る。また東側にのみみられる現象だが、さらにその内側に敷石を行っている。部分的ながらも、張出部にも平石（鉄平石）による敷石が認められた。全体として遺存状況はあまり良くない。

炉は埋甕炉であり、床面を5cmほど掘り込み、さらに中心を約20cm掘り込んで炉体土器を埋設するものであった。石囲炉の様相は残していなかったが、縁石や敷石の遺存状況の悪さからいっても、抜き取られた可能性が高いのではないかと考えている。

出土遺物のうち、3は炉体土器、19は縁石とともに、5は床面よりも36cm浮いてしかも正位の状態で、1・20は覆土中から出土した。

時期は、後期前半の堀之内1式期に該当し、その中でも中頃に比定される。

15号竪穴住居跡（第33・34図、P L19・33）

規模の大きな柄鏡形敷石住居跡であるが、軽石流堆積物上面を床としているため、遺存状況は良好でない。

$N-18^{\circ}-E$ を主軸とし、主体部の主軸長及び副軸長については、優に6mを越えるに違いない。

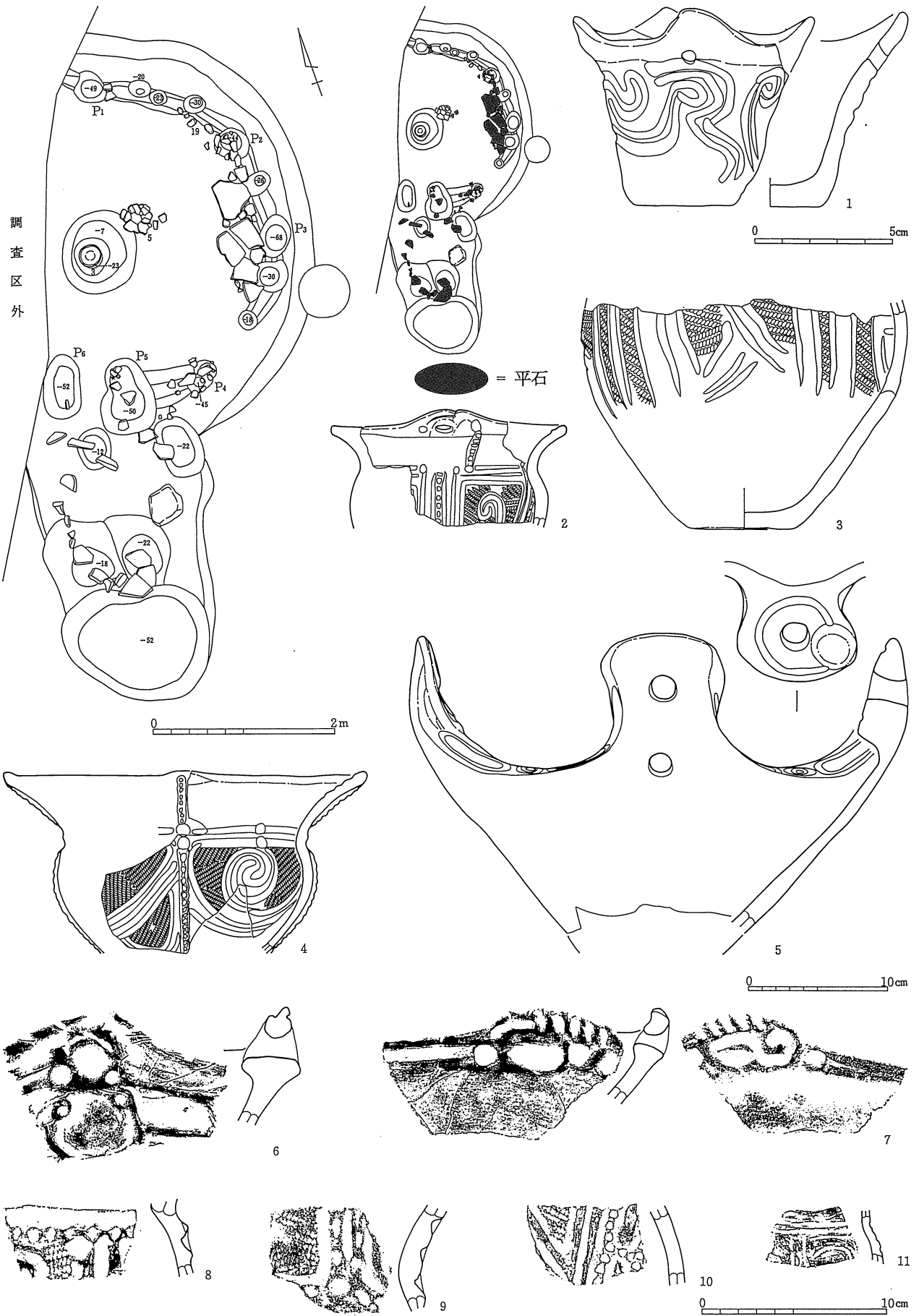
壁柱穴が巡り、その中で $P_1 \sim P_4$ の大形ピットが支柱穴となり、その間にそれよりも小振りのピットをひとつずつ配していく。また、 P_5 は対ピットである。

奥壁側にのみ縁石が残存していた。小振りの平石（鉄平石）が主体で、一部には連なって立石するものも存在した。

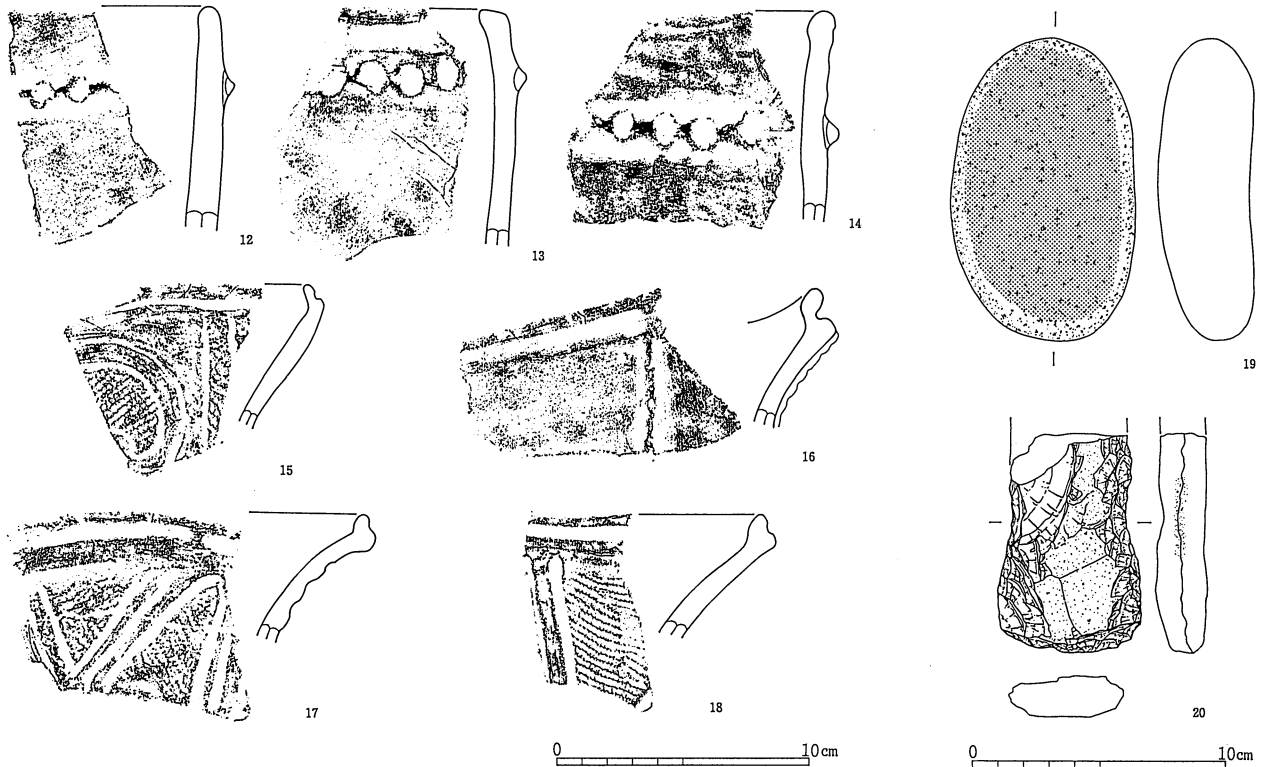
炉は埋甕炉で、床面を40cm弱掘り込み、炉体土器を埋設している。周囲を礫で囲んだ様子は一切認められなかった。

出土遺物のうち、4は炉体土器、2が縁石とともに、6～9が炉から、5・10～13は P_3 から、14～16は P_4 から、3・17は P_5 から、1が P_6 から出土している。

時期は後期前半の堀之内1式期に該当し、その中でもかなり古い段階に落ち着くのではなかろうか。



第31図 14号竖穴住居跡(1)



第32図 14号竖穴住居跡(2)

16号竖穴住居跡 (第35図)

軽石流堆積物上面を床としているために、遺存状況は良好でない。また、奥壁側を市道3115号線によって攪乱され、西側の一部を溝によって削り取られている。

主軸はほぼ座標北に等しい方向を示す。壁は残存していないが、4 m強の規模が想定可能である。

壁柱穴が巡り、また P_1 ・ P_2 が対ピットとなる。あわせて、床面には一部平石（鉄平石）が認められるので、もしかすると柄鏡形敷石住居となるかもしれない。

炉は住居中央に位置する石囲埋甕炉である。5 cmほど掘り込んで直方体に整形された軽石を配し、炉体土器埋設部分だけを再度掘削して深鉢の胴部を正位に埋めていた。

対ピットの北側には、出入口部の埋甕が存在する。正位に埋設しているが、その方向性については、残念ながら捉えることを怠ってしまった。

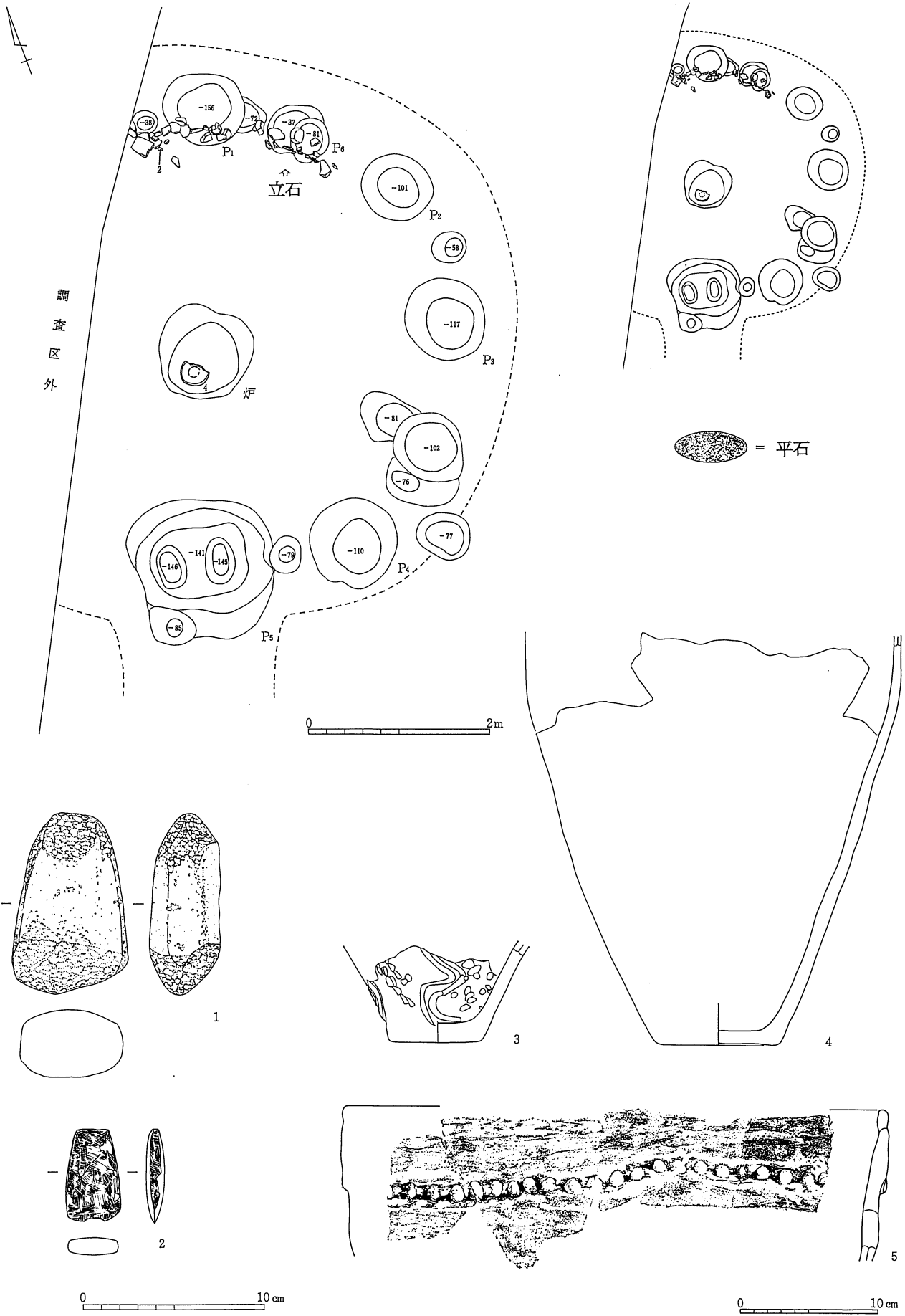
1が炉体土器、2が埋甕であり、それ以外には何ら出土していない。

時期は中期後葉の加曾利E式期に相当するが、2の土器をみればE III式の範疇に入る。しかし、住居形態そのものはE IV式期以降のもので、なぜこのような矛盾が生じるのか不可思議としかいいようがない。こうした住居がE III式期まで遡りえるのか、今後の問題として残される。

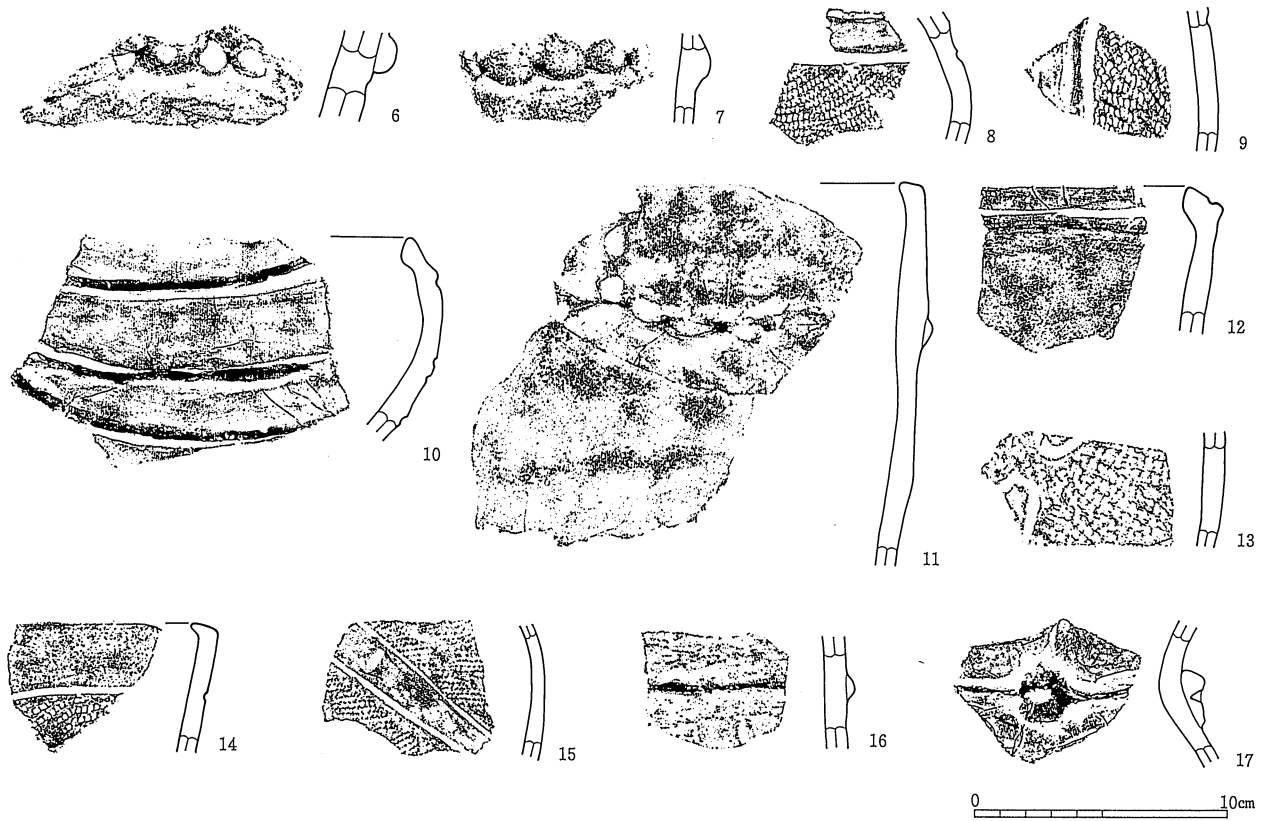
17号竖穴住居跡 (第36図、P L 19・32~34)

張出部に出入口施設を有する柄鏡形敷石住居跡である。主体部の東壁は、市道0117号線によって削り取られている。なお、本跡については、礫の石材を厳密に観察することを怠った。

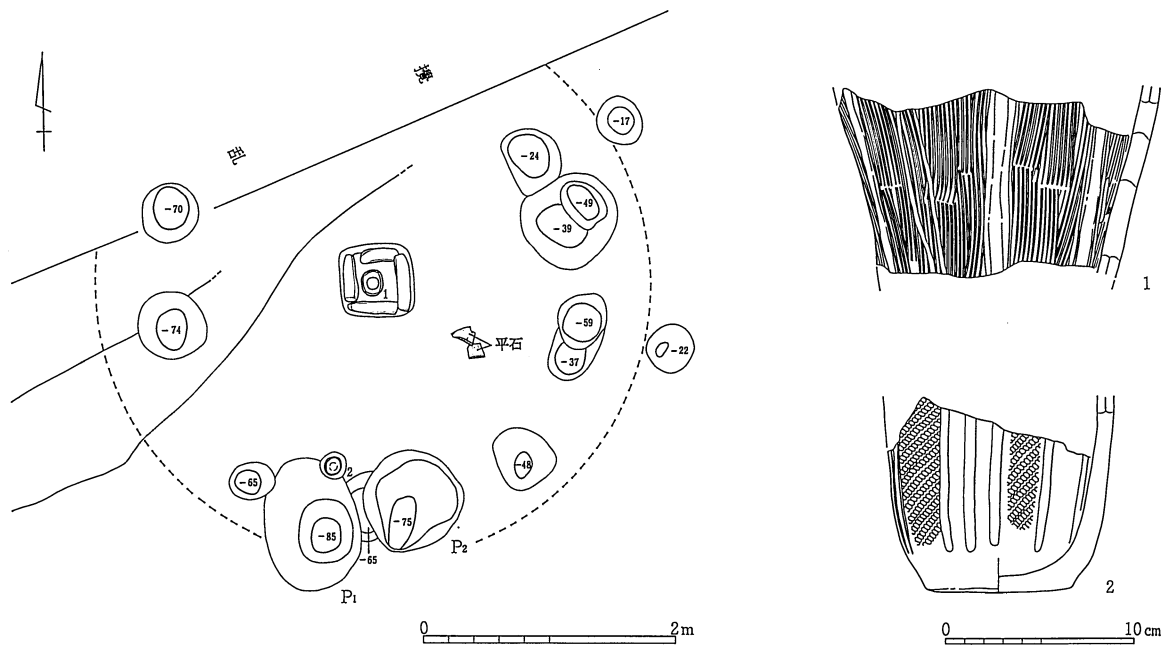
主軸は $N-40^{\circ}-E$ を成す。主体部の主軸長は3.85 mをはかり、副軸長はほぼ4 mが推定できる。張出部の主軸長は2.24 mで、副軸長は出入口部を除けば1.50 mとなる。主体部と張出部の主軸長を合計して、全長6.09 mの竖穴住居跡である。壁高は主体部の北西コーナー側がもっとも高く52 cmを有する。張出部に向かって徐々に下降していき、最低値は20 cmとなる。



第33図 15号竖穴住居跡(1)



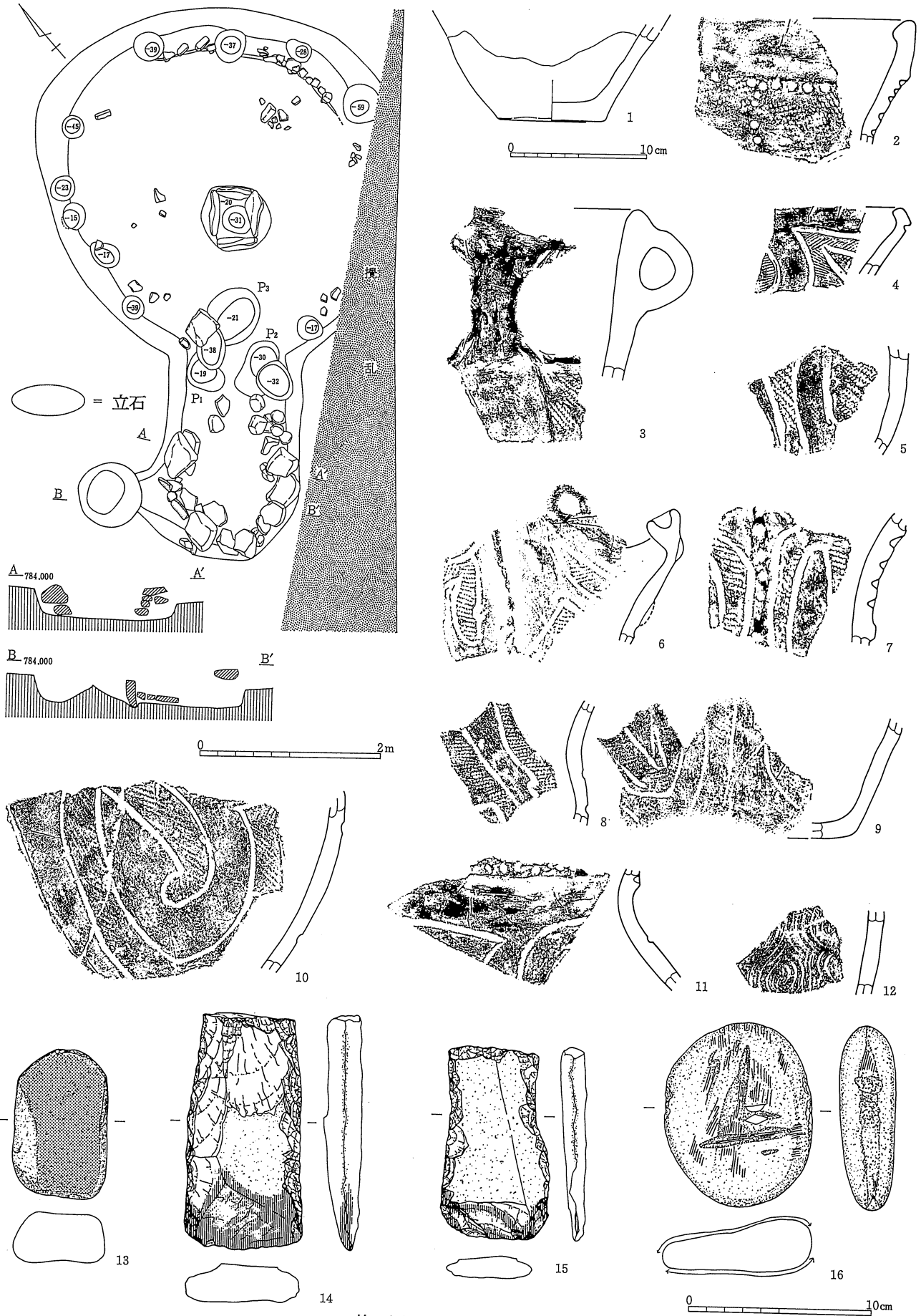
第34図 15号竪穴住居跡(2)



第35図 16号竪穴住居跡

張出部内には拳大～人頭大の軽石が密集して認められており、投棄もしくは何らかの役割を担っていたかのどちらかであろう。

床面の奥壁部側では辛うじてテラスが残存していた。わずか2～3cm程度だが、地山掘り残しのものである。柱穴は主体部のみに巡るもので、いわゆる壁柱穴である。またP₁・P₂が対ピット、P₃が軽石製の石鉢を埋設したピットであろう。



第36図 14号竪穴住居跡

炉は石囲炉であり、安山岩系の偏平な礫を炉縁石に利用するものだった。炉縁石の上面は、床面から7～8cmほど高い位置にある。炉底中央には、さらに深さ9cmほどのピットを設けているので、おそらく石囲埋甕炉が本来の姿ではないだろうか。

主体部には縁石が巡っていたようで、テラスが残る奥壁側のみ遺存していた。平石（鉄平石）が主体で、しかもテラス上面に敷設している。張出部先端には安山岩系の川原石を主体とする壁構造が認められる。また、南西コーナーには分厚い平石（鉄平石）をふたつ立石させ、その東側にはいくつかの平石（鉄平石）を敷設しており、壁自体もこの部分だけ外方に突出している。7号竪穴住居跡同様、これを出入口施設と認定したい。

出土遺物のうち、1・14・15は床面直上からの出土である。

時期は後期初頭、称名寺式期に該当する。

18号竪穴住居跡（第37・38図、P L20・34・36）

柄鏡形敷石住居跡である。20号竪穴住居跡を切って構築されている。なお、主体部中央を市道3115号線が通過しており、これにより床の上面が削り取られてしまった。

主軸はN-3°-Wである。主体部の主軸長・副軸長は4.55m×4.88m、張出部は同じく2.78m×2.03mであり、全長は7.33mということになる。壁高は奥壁側で79cm、張出部先端で10cmとなる。

張出部内は拳大～人頭大ほどの軽石で充填されており、7号竪穴住居跡や17号竪穴住居跡とまったく同じタイプといえる。その意味は分からないが、該期（称名寺式期）の柄鏡形敷石住居跡に付きまとう問題なので今後一考を要するところであろう。

床にはテラス状施設は認められておらず、かわって奥壁際に周溝が存在する。主体部には壁柱穴が巡り、連結部には対ピットとも取れるP₁が認められる。

炉は唯一南側にのみ炉縁石（石材不明）が残存していたので石囲炉であることが分かるが、炉底を二段掘りしているから、内部に土器を埋設していたのではないかと考えている。

主体部内には平石（鉄平石）が主体の縁石を敷設し、また連結部から張出部については同じく平石（鉄平石）による敷石が行われている。P₁上面の巨大な敷石の南側には框石が、北側には軽石の石鉢が埋設されていた。なお、軽石の石鉢の上端は、床面よりも高い位置に設定してある。

張出部の壁体には東側では安山岩系の川原石、それ以外は軽石を主材とした石積みを施したようだが、東側を除けば破壊が著しく、構造把握は正確にできていない。ただし、平面的には南側に進むにつれしだいに幅を広げていき、とりわけ南東コーナーが飛び抜けて突出することは間違いない。本跡の場合、南東コーナーが出入口部であった可能性もあるのではなかろうか。

出土遺物のうち、13は軽石製の石鉢として埋設されたもので、11・12・15は縁石とともに、10は張出部床面直上から、14は張出部の石積みの一部として出土したものである。

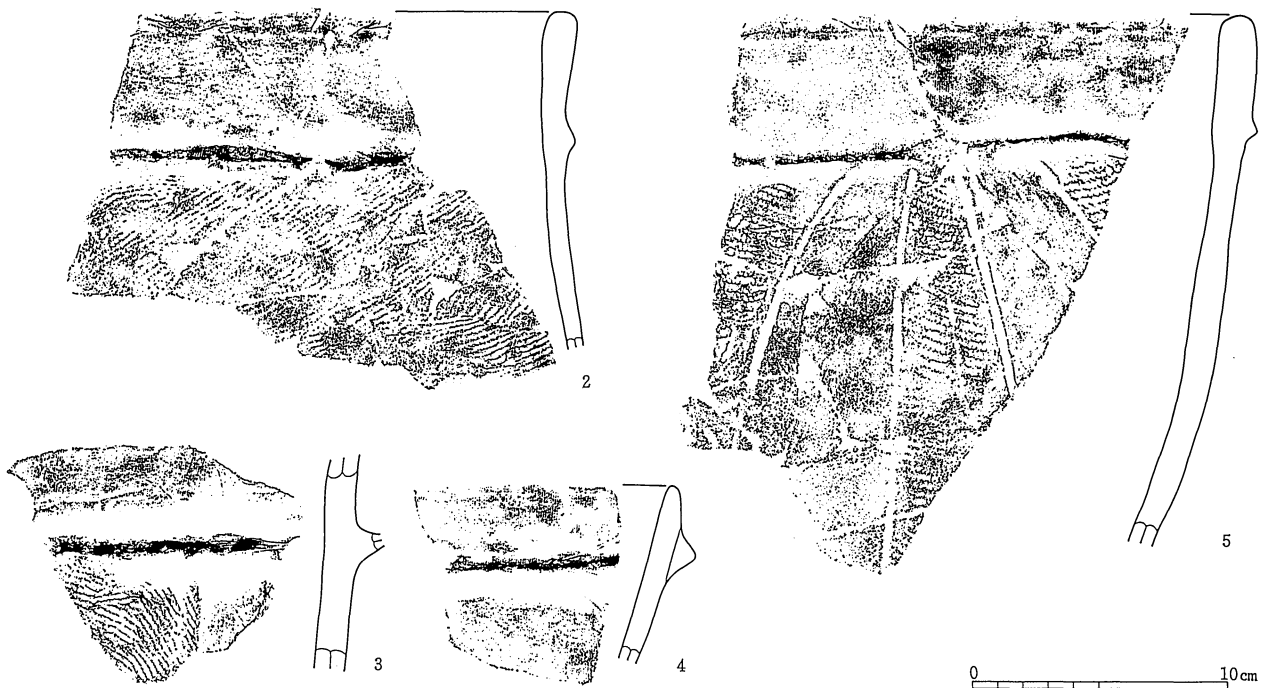
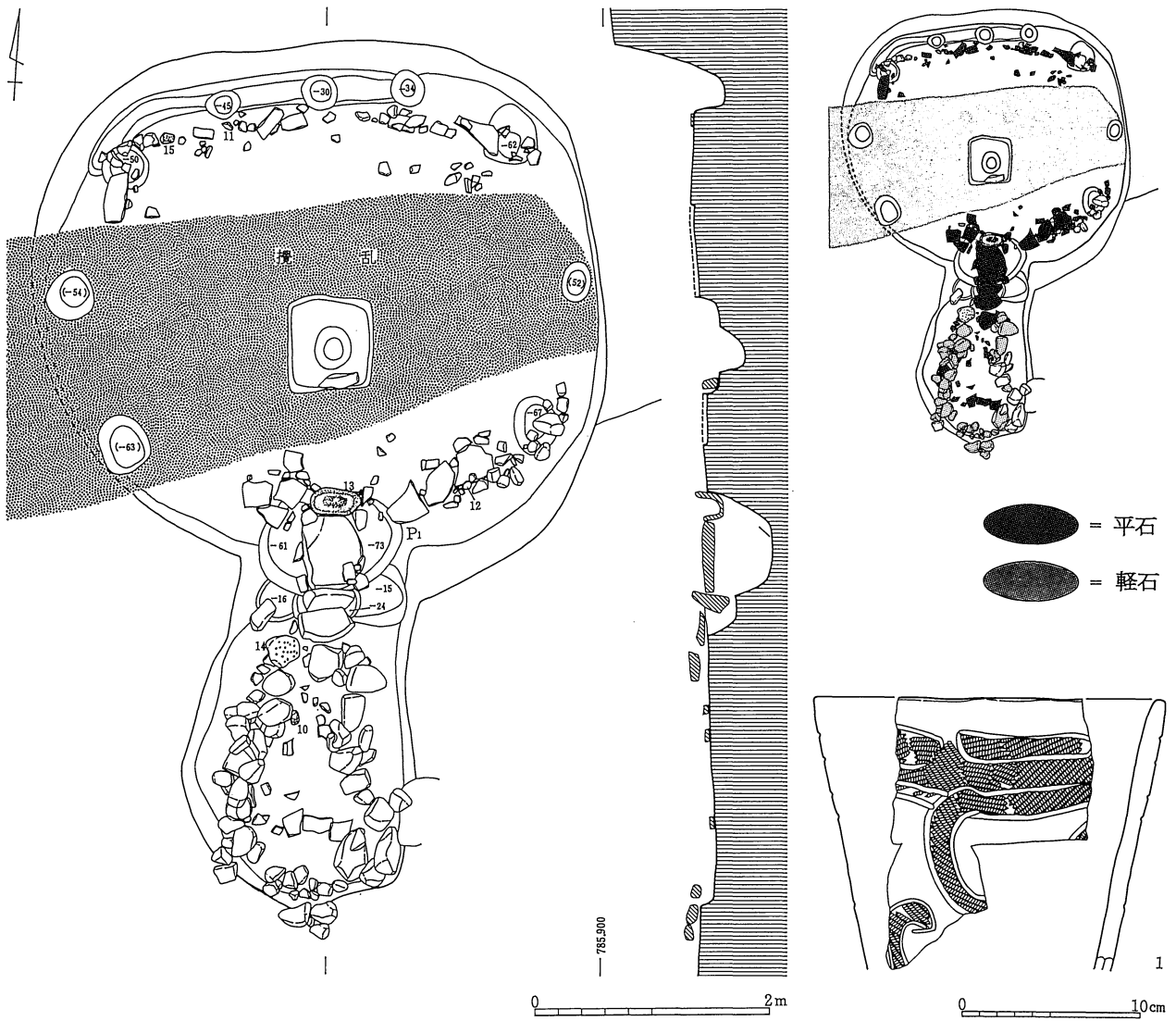
時期は後期初頭、称名寺式の古い段階か。

19号竪穴住居跡（第39図、P L21）

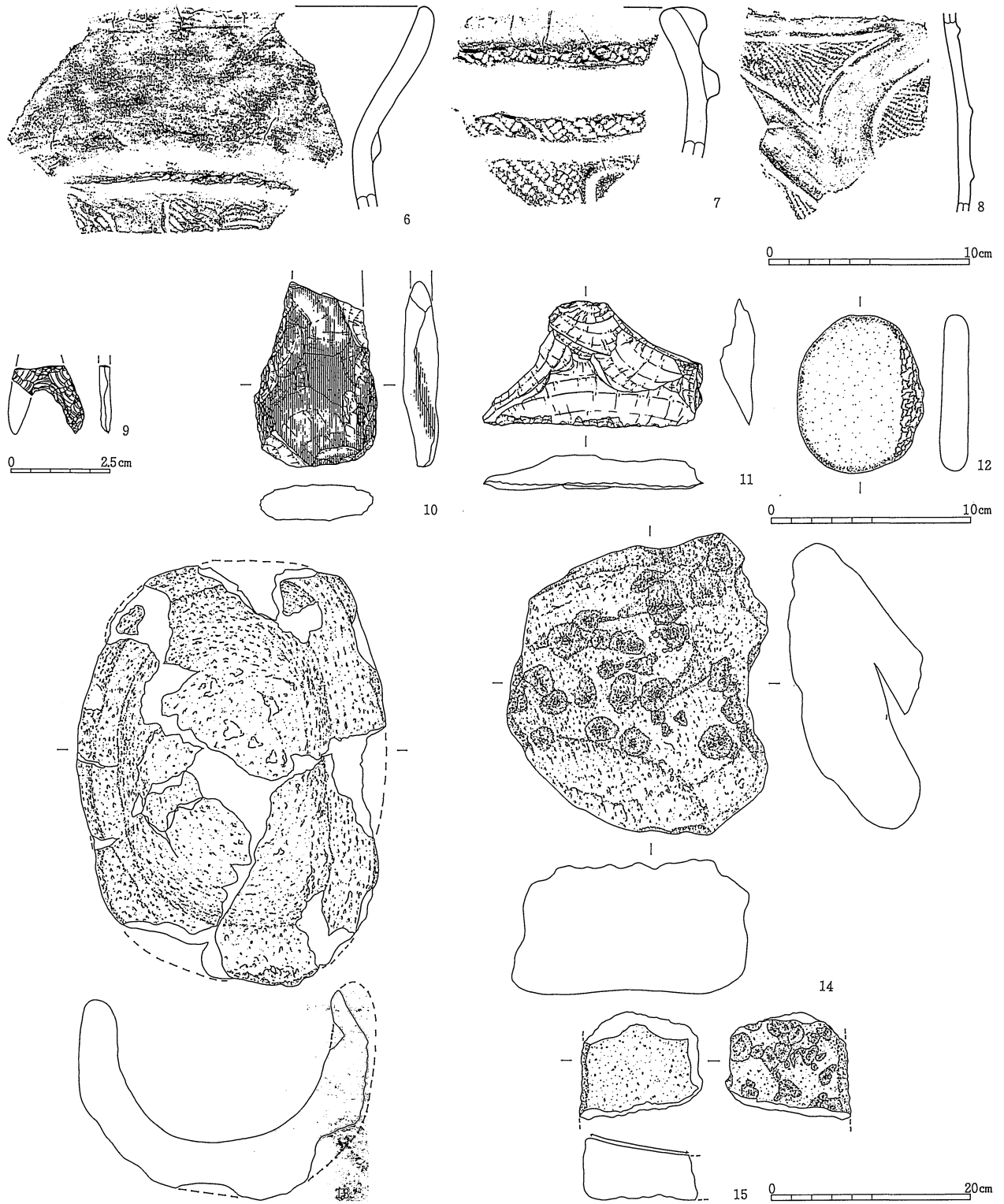
20・21号竪穴住居跡によって切られている。また住居の南東側半分は、市道0117号線下に入り大きく削られている。それに並走して水道管理設溝が住居中央を横断している。

主軸は不明、規模は長軸長3.50m・短軸長3.38mを呈する。壁高は最高で35cmをはかる。

付属施設は一切ない。炉は存在したかもしれないが、水道管理設溝によって破壊されたものと思われる。時期は、出土土器からみて、中期後葉の加曾利EⅢ式中頃と考えられる。



第37図 18号竖穴住居跡(1)

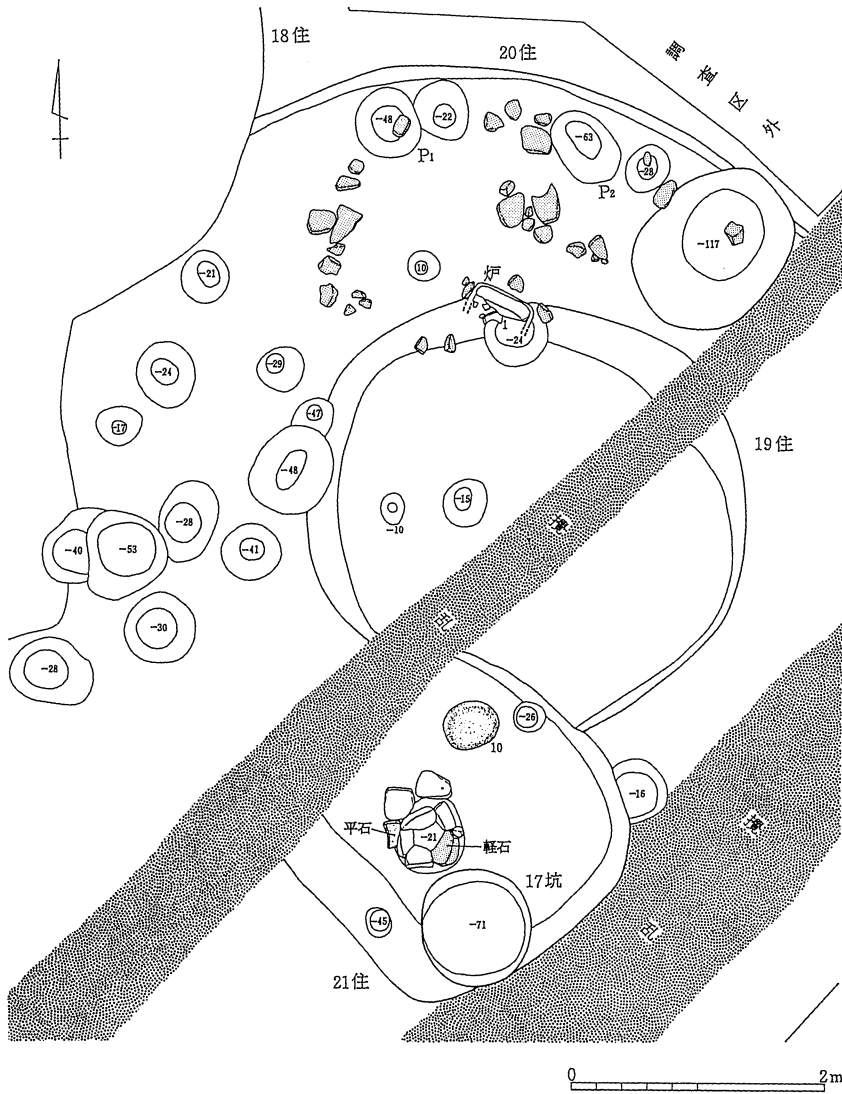


第38図 18号竪穴住居跡(2)

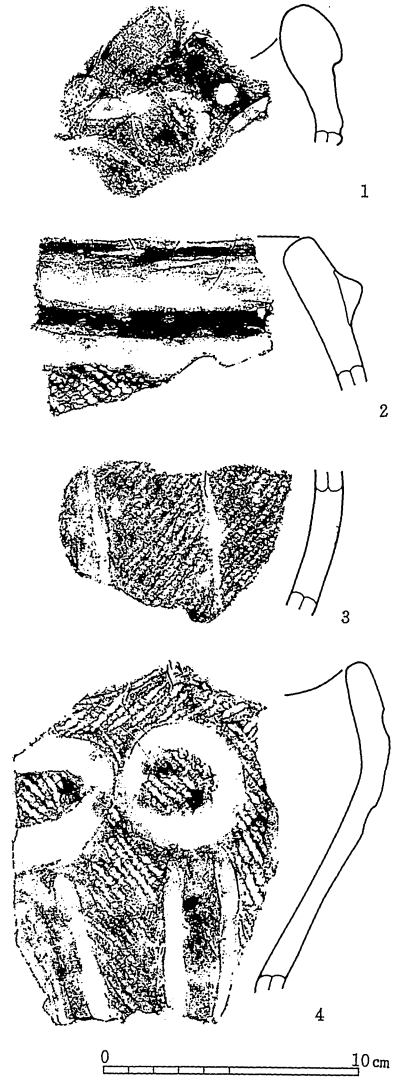
20号竪穴住居跡 (第39図、P L 21)

18・19号竪穴住居跡と重複し、19号竪穴住居跡を切り、18号竪穴住居跡に切られている。なお、全体に掘り込みが浅いことから、南西壁については既に消失しており、また住居南東部については市道0117号線下に入り込み、完全に姿を消してしまった。

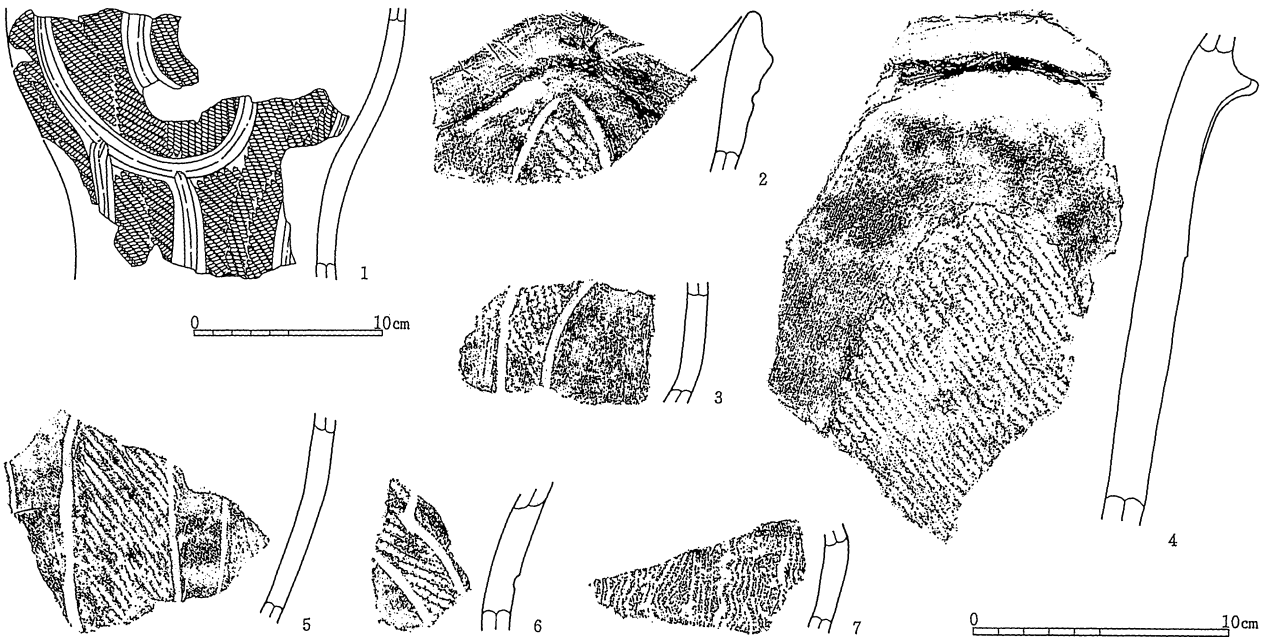
主軸はN-25°-Eを成す。規模は不明だが、比較的規模の大きな存在であったことは間違いない。壁高を計測することを怠ったが、写真から判断すれば20cm前後が最大値となろう。



19号 竪穴住居跡



20号 竪穴住居跡



第39図 19~21号 竪穴住居跡

柱穴はおそらく5本主柱となるのだろうが、 $P_1 \cdot P_2$ が主柱穴となる以外は、ピットが集中するところなので当てはめることができなかった。

炉は石囲埋甕炉である。炉縁石には安山岩系の亜角礫を利用しており、1の土器を埋設していた。

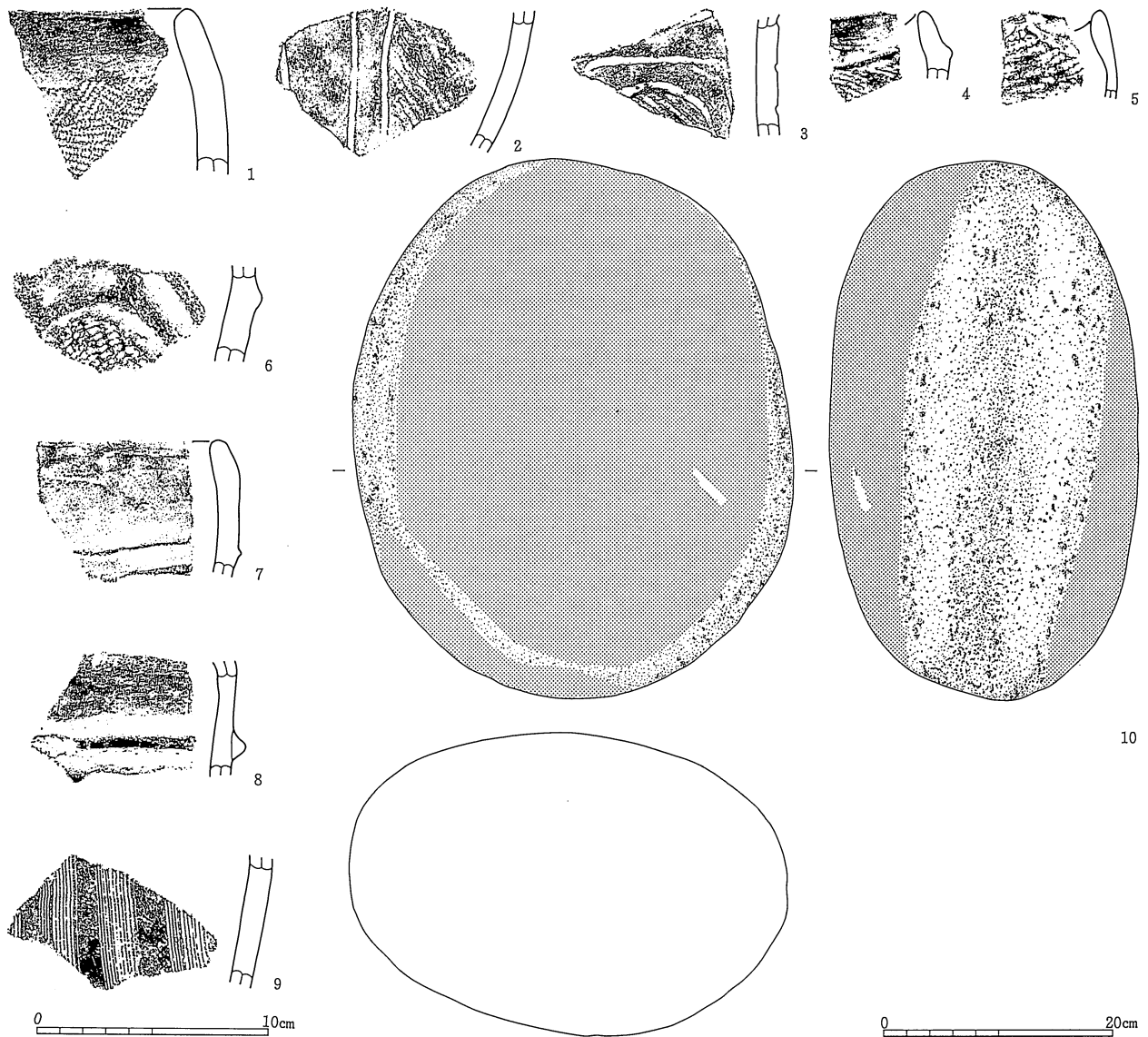
住居内には、床面もしくはその付近から安山岩系の礫が多数認められるものの、平石ではなく、また見た目上敷設を目的とするものではないものと考えられる。しかし、ここには存在しえない礫であるから、無視するわけにはいかず、敷石でなければそれ以外の何らかの役割を考えなければならない。

時期は中期後葉、加曾利EⅢ式でも新しい段階に落ち着くものと考えられる。

21号竪穴住居跡（第39・40図、P L21・35）

19号竪穴住居跡を切って構築されている。17号土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。市道0117号線下にあり、その下部に埋設された水道管によって住居北西側を破壊されている。

N-47-E前後を主軸とし、2.39mを主軸長とする非常に小形の住居跡である。副軸長は2.5m前後が見込まれようか。壁高は約30cmを最高値とする。



第40図 21号竪穴住居跡

壁は緩やかに立ち上がり、床も炉に向かった傾斜が著しいものであった。柱穴は確認していない。炉は石囲炉であるが、五角形を成し、また炉縁石の1点だけは軽石を用いていた。炉縁石の上端は、床面から5～6cm高い位置に設定していた。なお、焼土は一切認められなかった。

炉の北西側には配石が施されている。1点は平石（鉄平石）、ほかは安山岩系の扁平な円礫である。

住居北側から10の重量68,000gという巨大な丸石が出土している。表面が良く研磨されており、一部赤色塗彩が行われている。床面から20cm浮いた状態で出土した。

時期は、出土土器から判断すると、中期後葉の加曾利EⅢ式のものも含まれるが、明らかにIV式の範疇に納まるものもあるので、加曾利EⅣ式期に廃絶された住居と考えたい。

22号 竪穴住居跡（第41図、P L21・29・34・36）

敷石住居跡であるが、多くは用地外にかかっているために不明なところが多い。なお、炉の下部には、本跡よりも古い土坑が2基重複している。

炉の向きからすれば、主軸はN-20°-E前後となり、柱穴の配置とはうまく合致しない。規模は不明だが、かなり大規模であったはずで、柱穴の様子をみてもすぐに分かる。壁高は最高で40cmをはかる。

柱穴は巨大な壁柱穴であり、その中でもP₁～P₃が主柱穴と考えられる。P₁～P₃を大ピットとすれば、それぞれの間に小ピットひとつずつ配していくという形態を取っている。

通常炉は住居中央に位置しなければならないのだが、どう見ても奥壁寄りに位置してしまう。床面と同レベルに存在することから、一応本跡に帰属させておくが、本跡よりも新しい存在かもしれない。石囲炉である。南側の炉縁石は抜き取られたのであろうか、残存していない。平石（鉄平石）を用い、床面よりも最大10cm高い位置に上端を設定していた。

炉の周辺には平石（鉄平石）による敷石が認められるものの、著しく損壊している。また、縁石も敷設していたようだが、これもまた一部にしか残っていない。

遺物は、1・14が床面直上、13・15がP₂内、10が床から8cm浮いて出土した。

時期は後期初頭から前半、称名寺式の末から堀之内1式の初め頃に比定される。

23号 竪穴住居跡（第42図、P L21・29・32）

山林地帯であり、しかも表土が極端に浅いことから、住居跡であることは確認できてきても、プランはおろか柱穴や炉さえみつけることができなかった。確認できたのは逆に埋設された1の出入口埋甕（斜位埋設）、柱穴の一部とも取れる小ピット、覆土中に存在する礫群のみである。

時期は中期後葉、加曾利EⅢ式の新しい段階に比定される。

24号 竪穴住居跡（第43図、P L21・34）

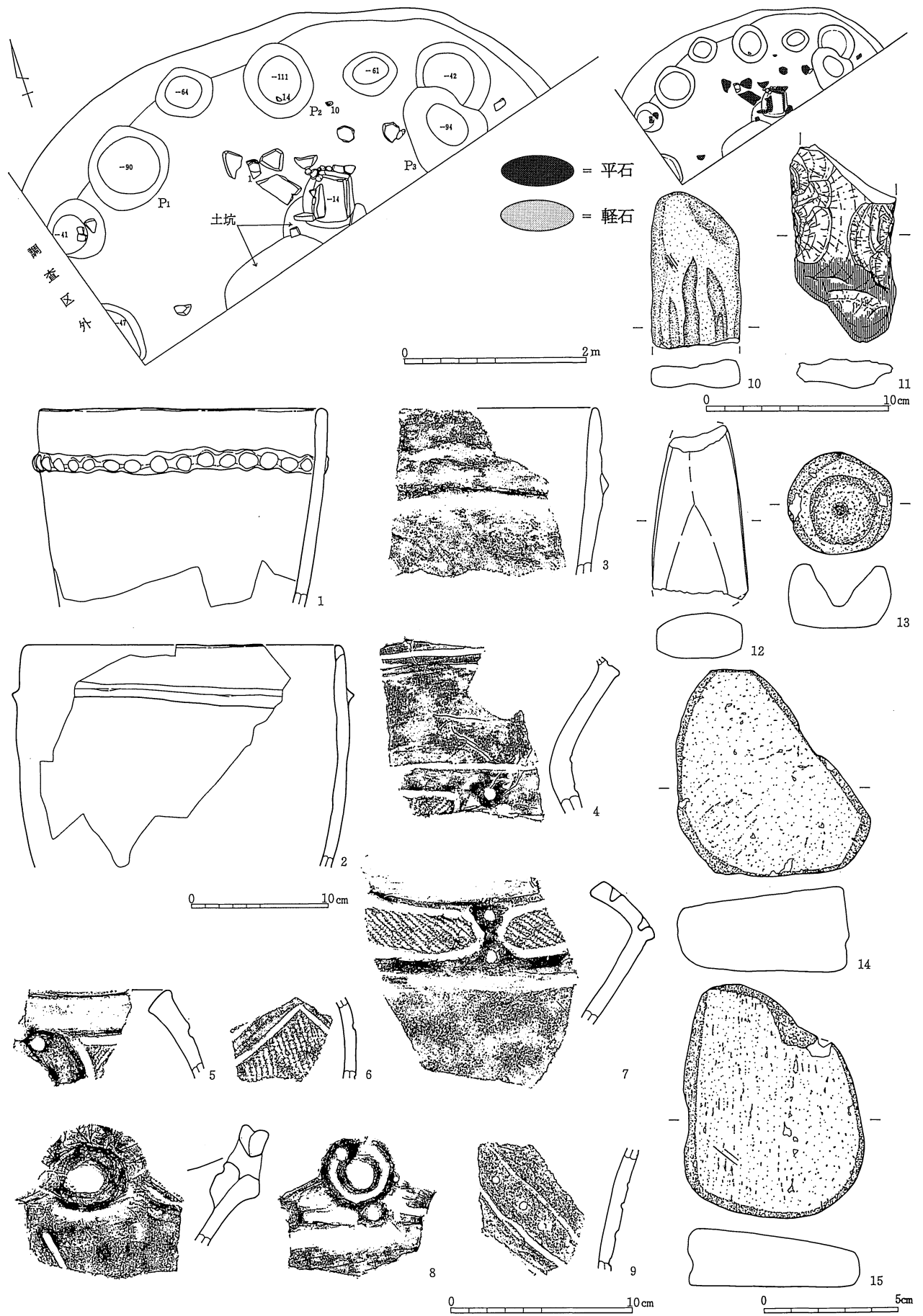
径2.3m程度の小形のもので、炉も認められない。柱穴なども存在しないから、竪穴住居とは別種のものかもしれない。壁高は最高でも19cmしかない。

5の石皿は覆土中から出土した。

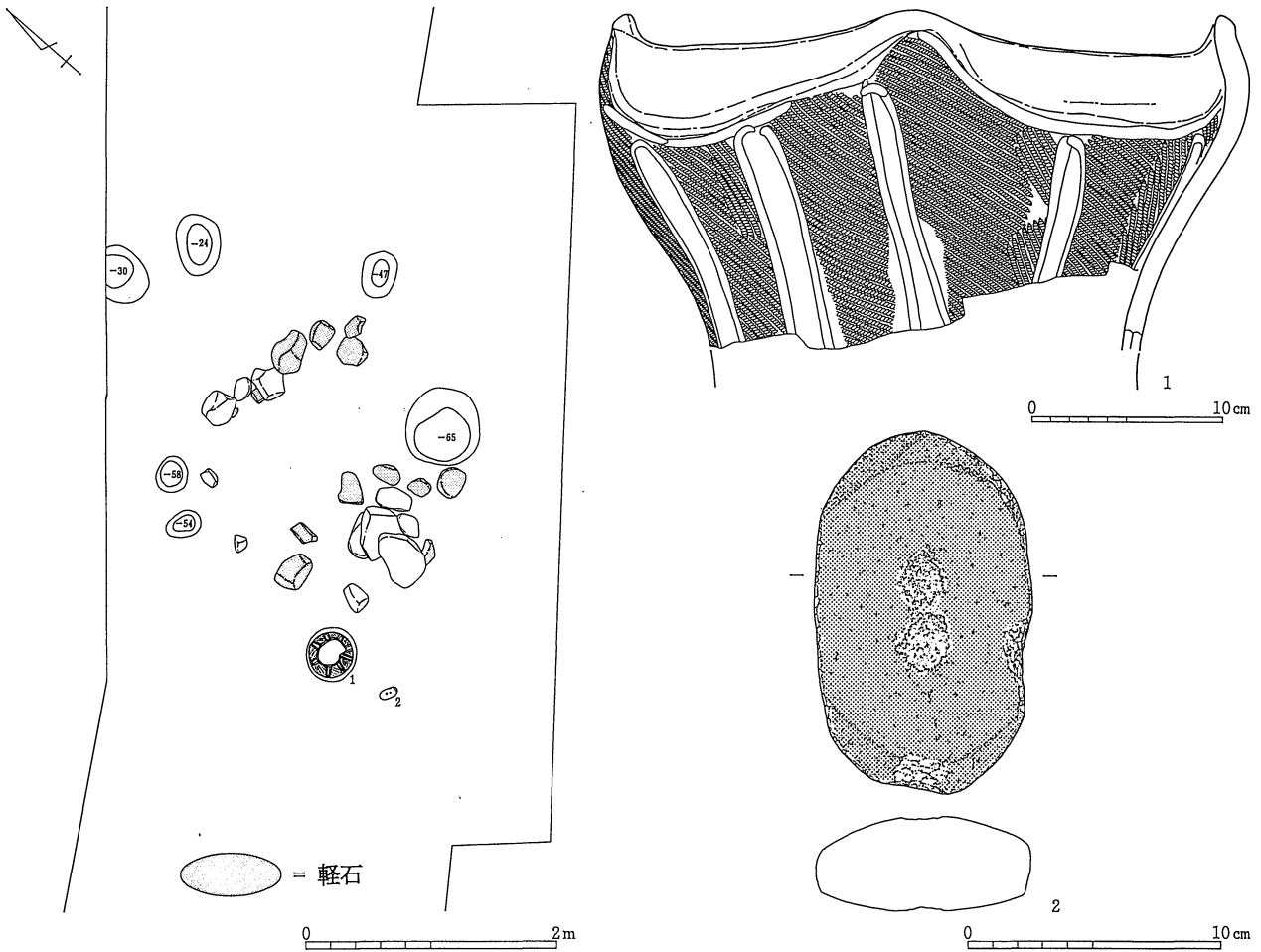
時期は中期後葉の加曾利EⅢ式の新しい段階から同IV式の土器が認められる。

25号 竪穴住居跡（第44図）

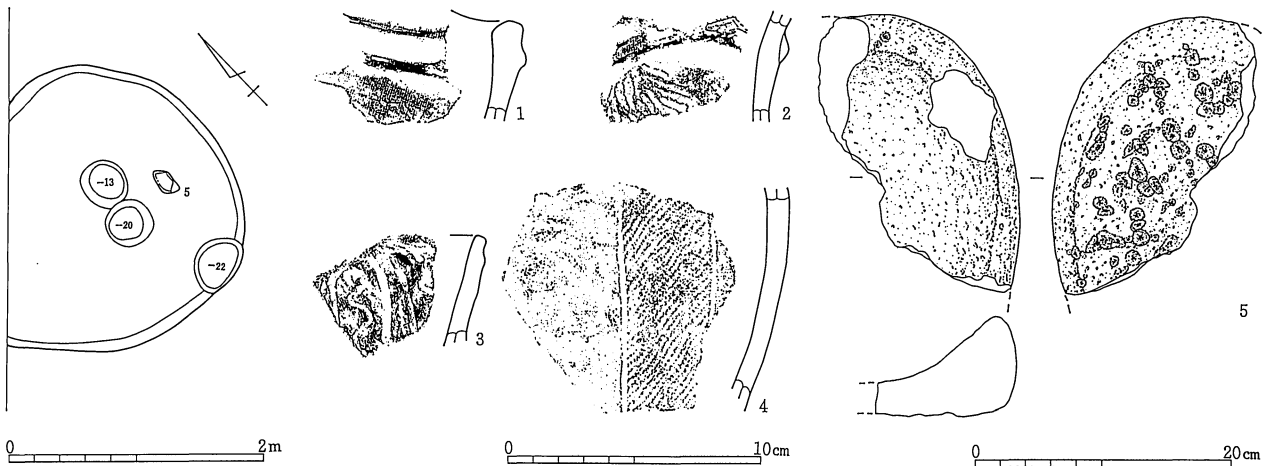
市道0117号線の東側一帯は地表面を大きく削られたのか、床を飛ばされた住居跡が多い。本跡も床は完全に飛ばされ、炉すら確認できなかった。また、住居の南側が用地外となるため、得られた情報は少な



第41図 22号竖穴住居跡



第42図 23号竖穴住居跡



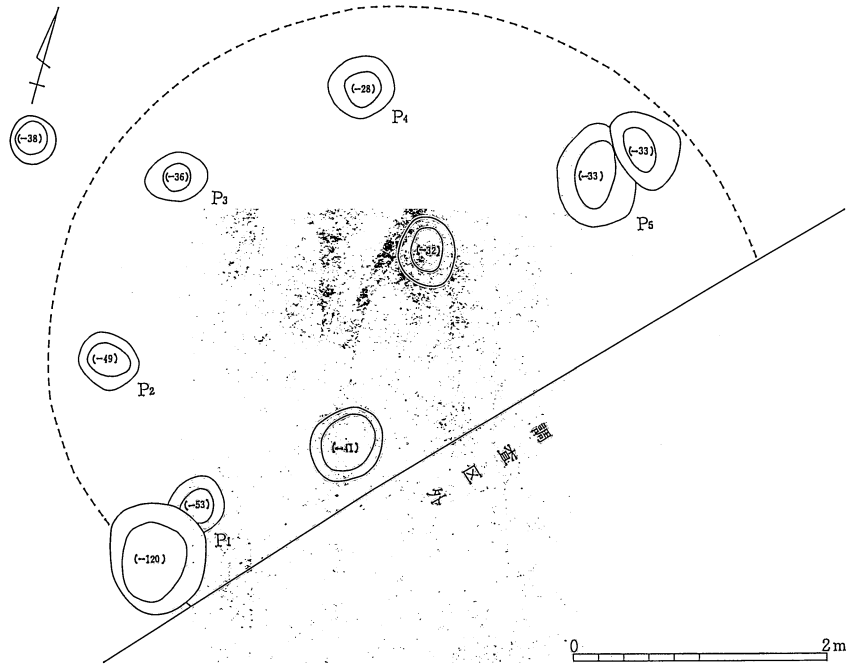
第43図 24号竖穴住居跡

い。

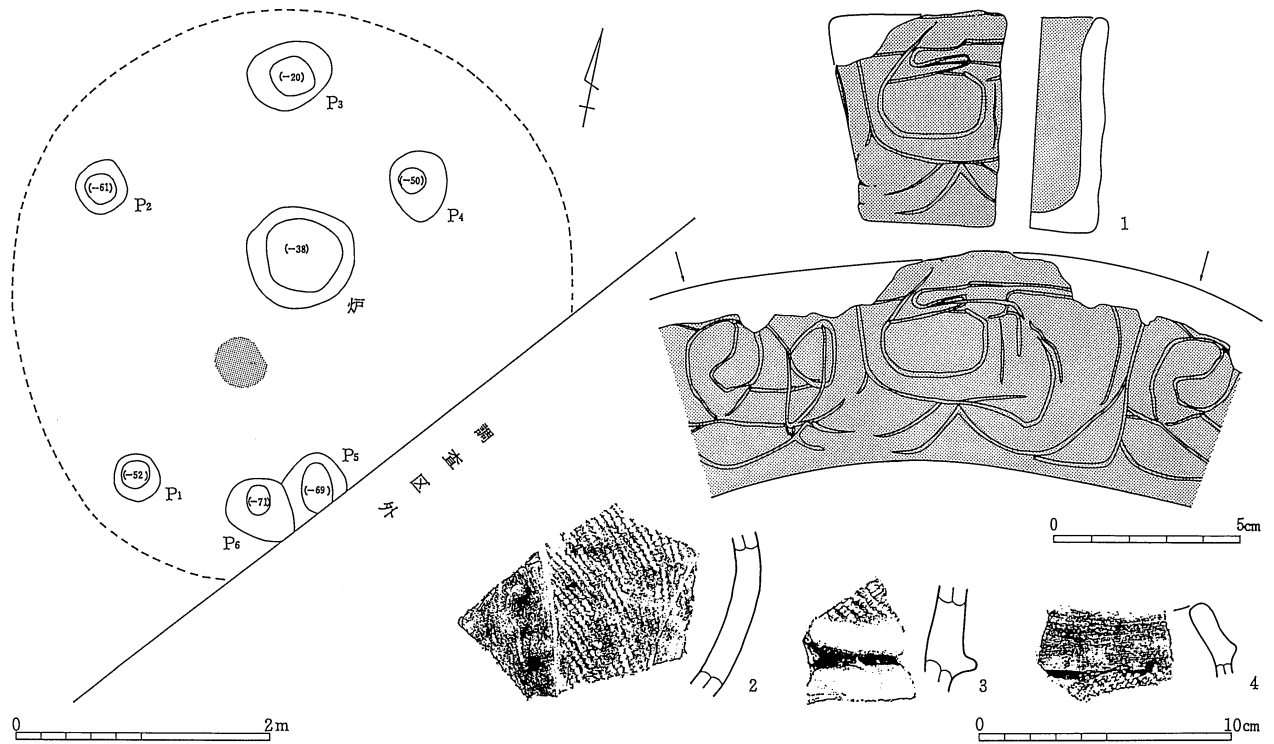
主軸はN-15°-W前後、規模は径6m弱と見込まれる。

柱穴はP₁~P₅の壁柱穴とみたが、P₂を除いて5本主柱と考えることも可能である。なお、柱穴の深さについては、もっとも標高が高いP₅の上端を0としてそれぞれを算出している。

時期は不明だが、中期後葉から後期前半の堀之内1式期までのものであることは間違いない。



第44図 25号竖穴住居跡



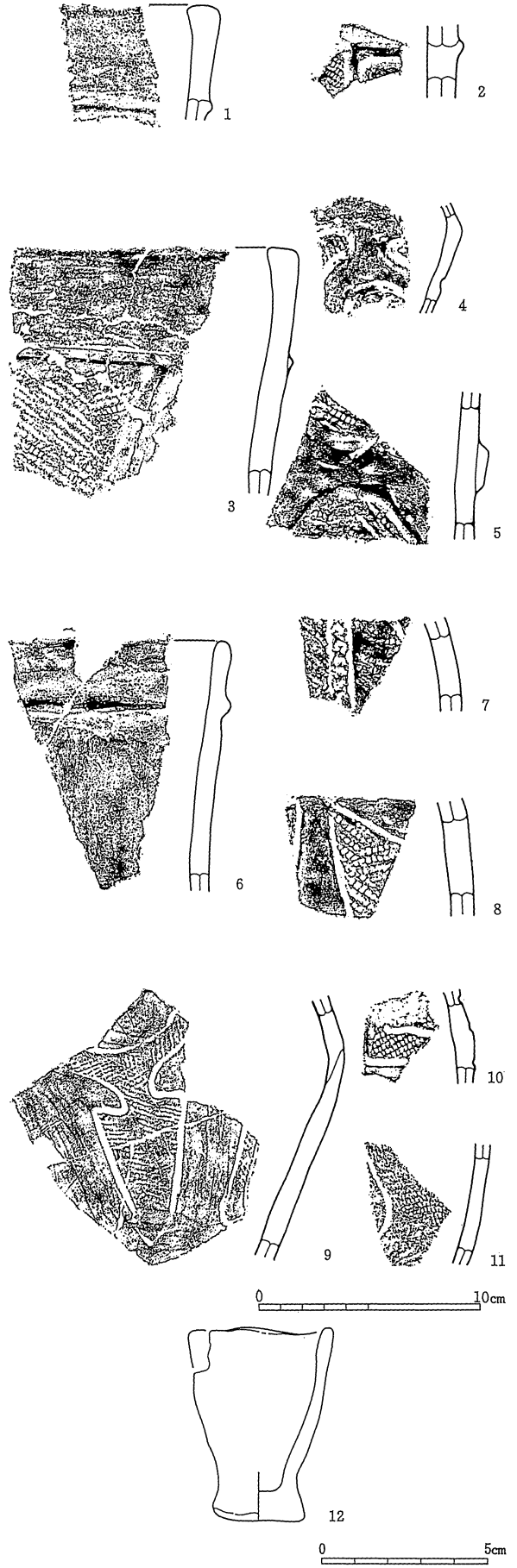
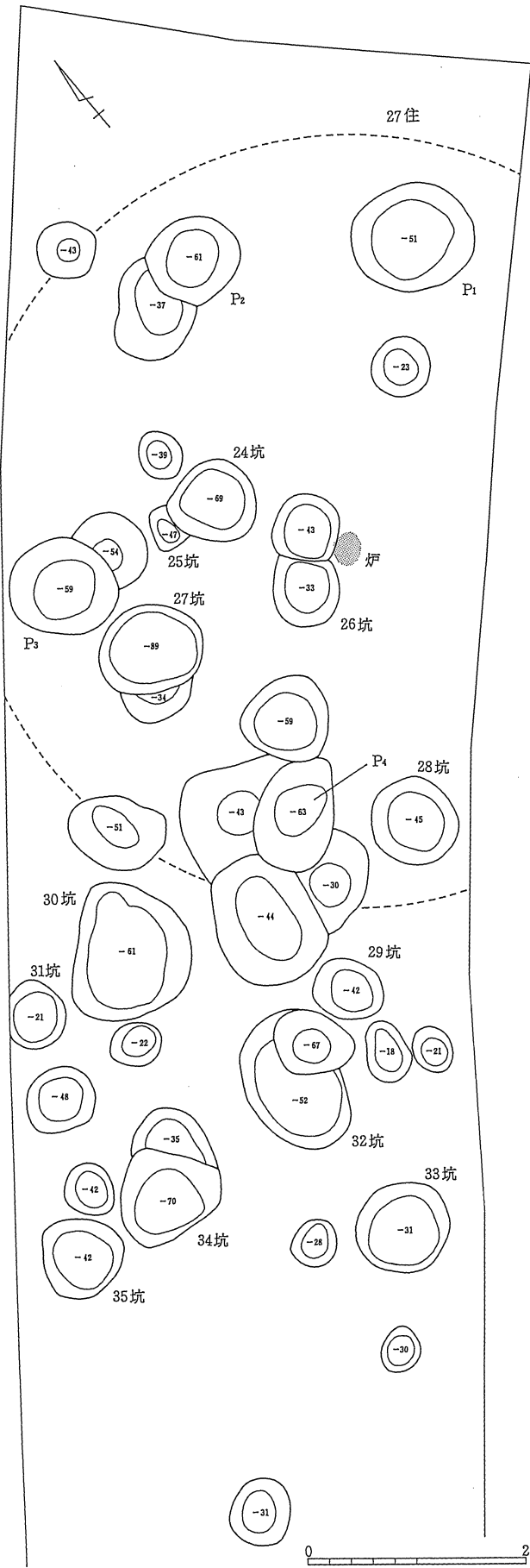
第45図 26号竖穴住居跡

26号竖穴住居跡（第45図）

25号竖穴住居跡同様、本跡も壁を完全に失っている。ただし、炉は残存し、またその南西側には焼土の痕跡も認められたから、微かに床面の一部が残存しているものと思われる。

主軸はN-13°-Wを呈し、主軸長・副軸長とも4.5m前後が想定可能である。

P₁～P₄が柱穴となり、5本主柱の形態を取る。底の深いP₅・P₆は対ピットであろうか。炉に焼土は存在しない。各ピットの深度については、もっとも標高が高いP₃の上端を0とし、それぞれの深さを算



第46図 27号竖穴住居跡及びその周辺

出した。

遺物は1がP₄、2・4がP₆、3がP₆から出土している。なお、1は内外面とも赤彩が施されている。時期は中期後葉の加曾利EIV式期以前のものと考えられる。

27号竪穴住居跡及びその周辺（第46図）

本地点は数多くのピットが連なる場所である。しかも深めのものが多い。25・26号竪穴住居跡同様、壁や床までも削平された地点である可能性が高く、多くは竪穴住居の柱穴ではないかと考えている。ここでは、唯一炉底と考えた焼土跡をもとに、強引ながらも27号竪穴住居跡を設定し、ほかについてはいくつかの想定はあるものの、深さだけの提示に留めておいた。

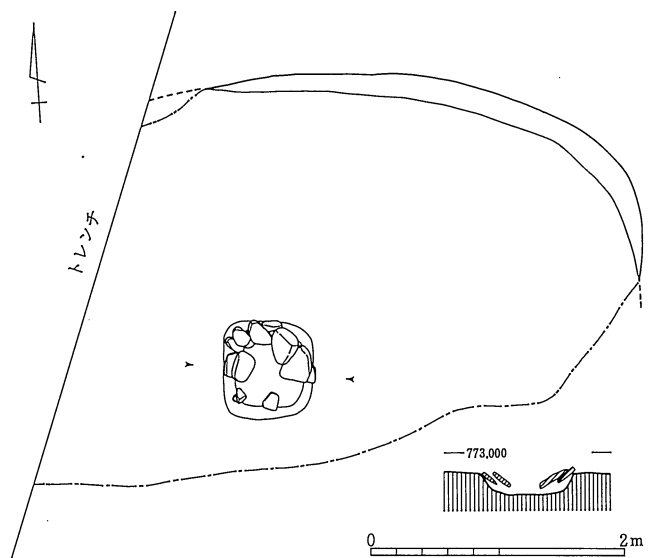
27号竪穴住居跡については、P₁～P₄を柱穴としたが、偶然にもそれぞれに遺物を含んでおり、それを見ても時間的に大きな隔たりは認められなかった。1・2がP₁、3～5がP₂、6がP₃、7～12がP₄から出土したものである。また、1と3は同一個体である。

P₁～P₄が正しく27号竪穴住居跡の柱穴なら、中期末から後期初頭、ちょうどその中間期に属するものと考えられる。

28号竪穴住居跡（第47図）

遺物溜まりの上面、しかも29号竪穴住居跡の覆土上層で認められたものである。かなりの急斜面に位置しており、遺物溜まりがなければ、しかもその断面図を取ろうとしなければ、けっして見つかることのなかった遺構といえる。

主軸はほぼ座標北に等しく、等高線に直交した方向で構築されている。黒色土中での調査のため規模はいまひとつはっきりしないが、副軸長は6 m前後が見込まれる。壁高は奥壁側で最高42cmをはかり、斜面下方に進むにつれ浅くなり、やがて壁そのものが消滅してしまう。



第47図 28号竪穴住居跡

柱穴は存在したと思えるが、黒色土を基盤とするため残念ながら確認できなかった。炉は周囲に小振りな割石や偏平な円礫を置く石囲炉であった。焼土は一切認められなかったが、礫そのものは顕著に被熱していた。

遺物はまったく出土していないので、時期不明なのだが、遺物溜まり自体が最終的には堀之内1式で終焉を迎え、また遺跡全体でも堀之内2式までしか遺物を採取していない。したがって、後期前半、堀之内1式期の最終段階から同2式期の間に比定したいが、いかがであろうか。

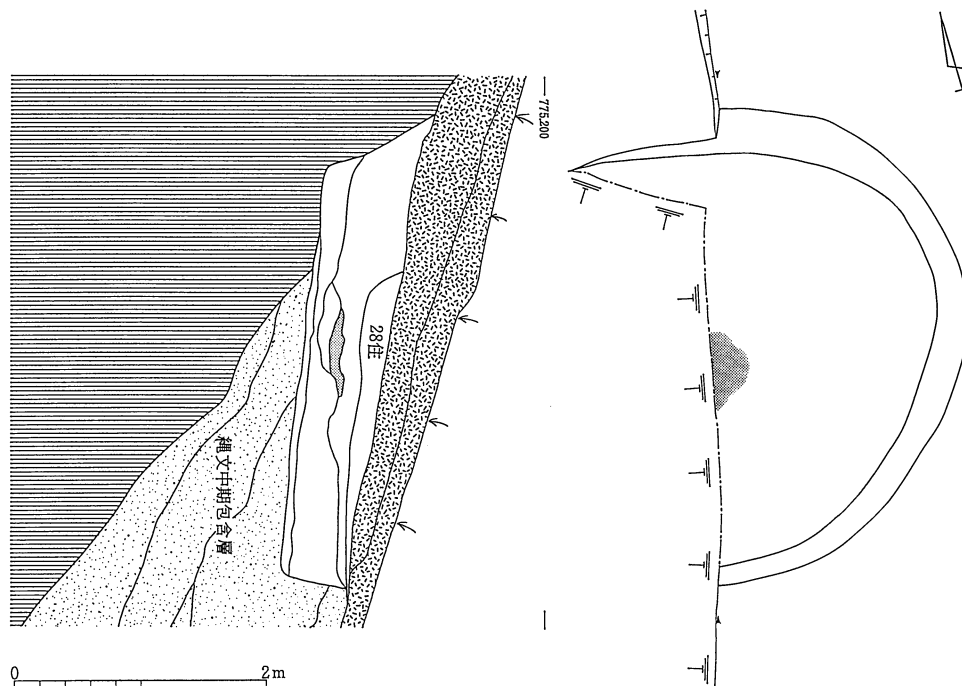
29号竪穴住居跡（第48図）

遺物溜まりの最上層で検出され、覆土上層には28号竪穴住居跡が構築されている。遺物溜まりの断面図を取る際、偶然発見したものである。段丘面からかなりずり落ちた斜面に位置しており、28号竪穴住居跡を除いて、ほかの遺構とは様相を異にする。

炉を検出できず、主軸は不明である。ただし、急斜面に位置するので等高線に直交する方向と見たほうがいだろう。南北の軸長は3.78mをはかり、東西軸については既に西半分を削り取ってしまったが、およそ同規模ではないかと考えている。壁高は、断面図で判断すれば、奥壁側で約90cmを計測する。

住居中央、覆土中層から焼土の単純層を検出した。量的には多いが、ここで焚かれたものではなく、明らかに投棄されたものである。柱穴は奥壁側のみ軽石流堆積物を掘り込んでいたが、それでも確認はできなかった。また炉も、住居の半分以上も調査しているというのに、その気配すら認められなかった。

遺物は一切ない。28号竪穴住居跡同様、後期前半、堀之内1式期最終末から同2式期の間に比定したい。



第48図 29号竪穴住居跡

3 土坑 (第49・50図、PL30・32・33)

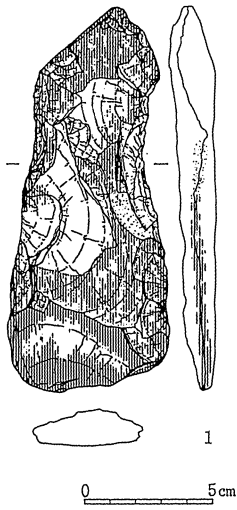
多数の土坑を検出しているが、うち遺物、とりわけ土器を伴出しているのは40基である(表1)。本遺跡群内では早期中葉以後、数々の遺物が認められたが、不思議と中期末葉頃から後期前半の堀之内1式までに納まり、唯一34号土坑のみが堀之内2式にまで降下するものであった。

これら土坑には特別な構造が認められず、また礫を配して何かを物語るようなこともなかった。出土遺物もごくまれで、図示した以外は小片しか出土していない。したがって平面図を割愛し、深さについては第2～4図を参照されたい。

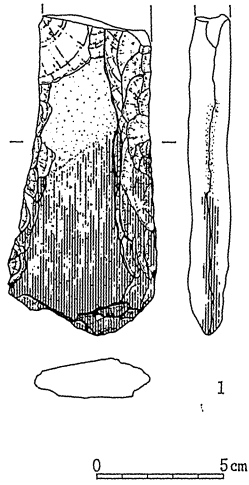
表1 土坑一覧

番号	時 期	番号	時 期	番号	時 期
1坑	中期末	14坑	中期末～後期初頭	27坑	称名寺後半～堀之内1式期
2坑	称名寺式期	15坑	中期末	28坑	中期末
3坑	後期	16坑	称名寺～堀之内1式期	29坑	称名寺式期
4坑	称名寺式期	17坑	中期末～後期初頭	30坑	後期前半
5坑	称名寺式期	18坑	称名寺式期	31坑	称名寺～堀之内1式期
6坑	後期前葉	19坑	中期末	32坑	称名寺式期
7坑	称名寺式期以降	20坑	堀之内1式期	33坑	称名寺II式期
8坑	中期末	21坑	中期末	34坑	堀之内2式期
9坑	称名寺～堀之内1式期	22坑	称名寺式期	35坑	中期末
10坑	称名寺I式期	23坑	称名寺式期	36坑	後期前葉
11坑	中期末	24坑	称名寺～堀之内1式期	37坑	堀之内1式期
12坑	堀之内1期	25坑	称名寺式期	38坑	堀之内1式期
13坑	称名寺式期	26坑	称名寺式期	39坑	中期末～後期前葉

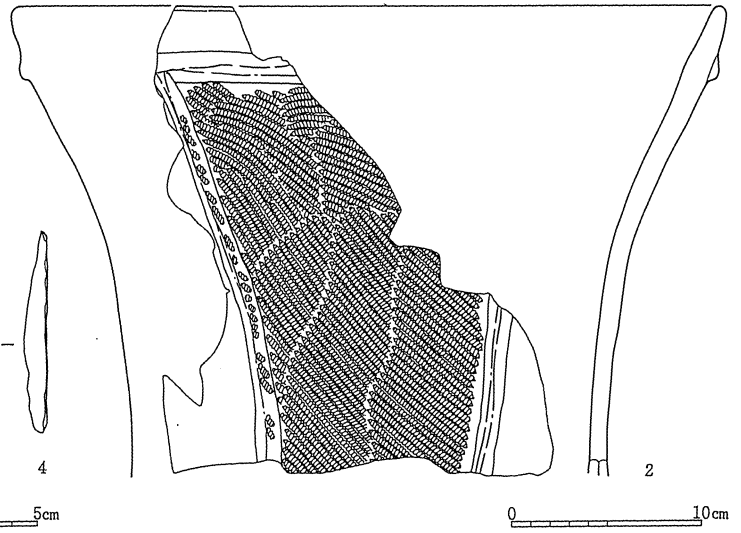
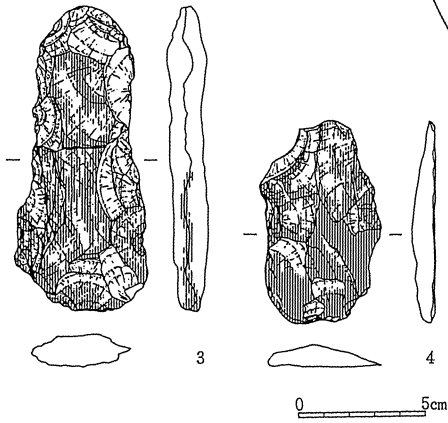
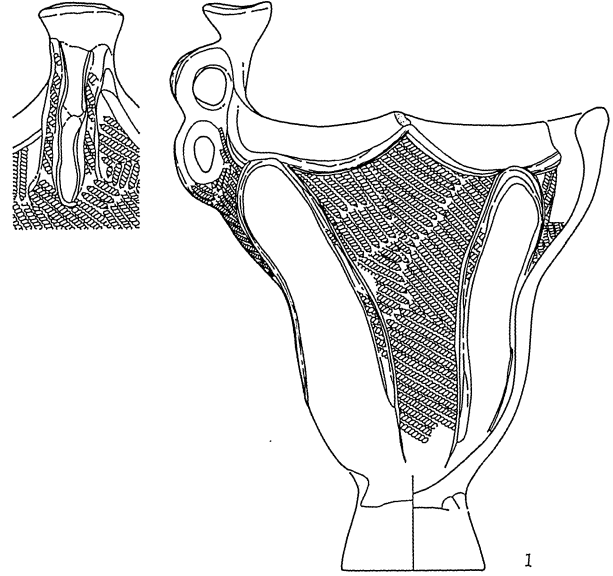
5号土坑



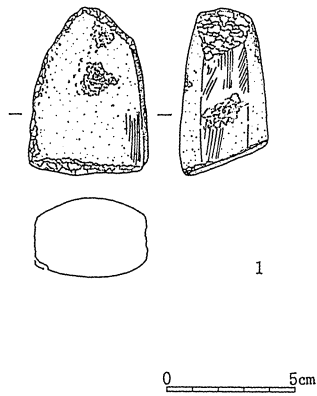
7号土坑



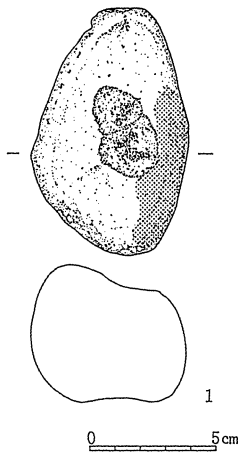
8号土坑



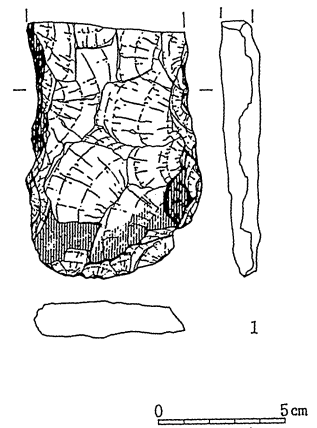
11号土坑



14号土坑

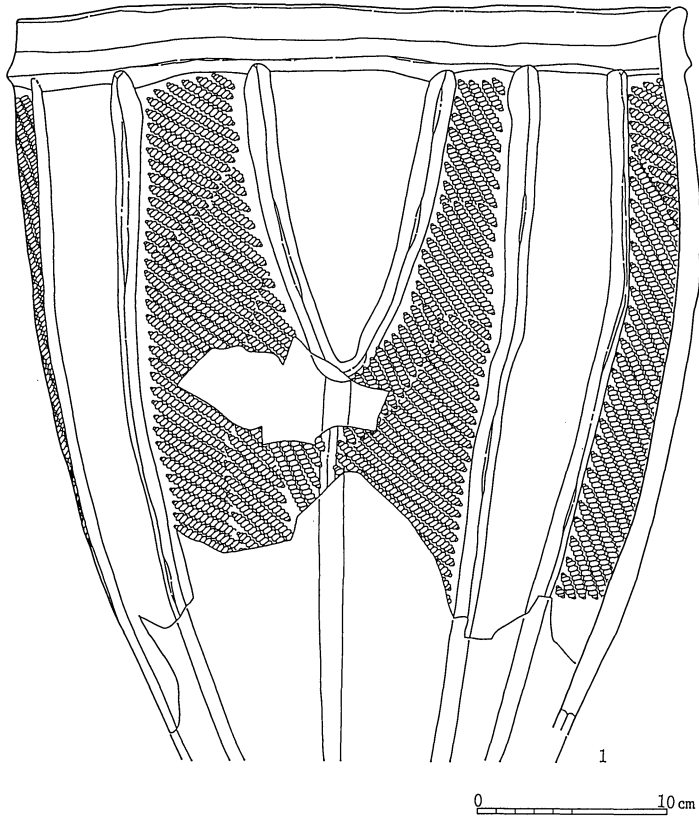


22号土坑

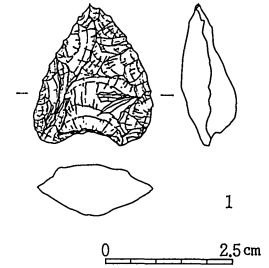


第49图 土坑(1)

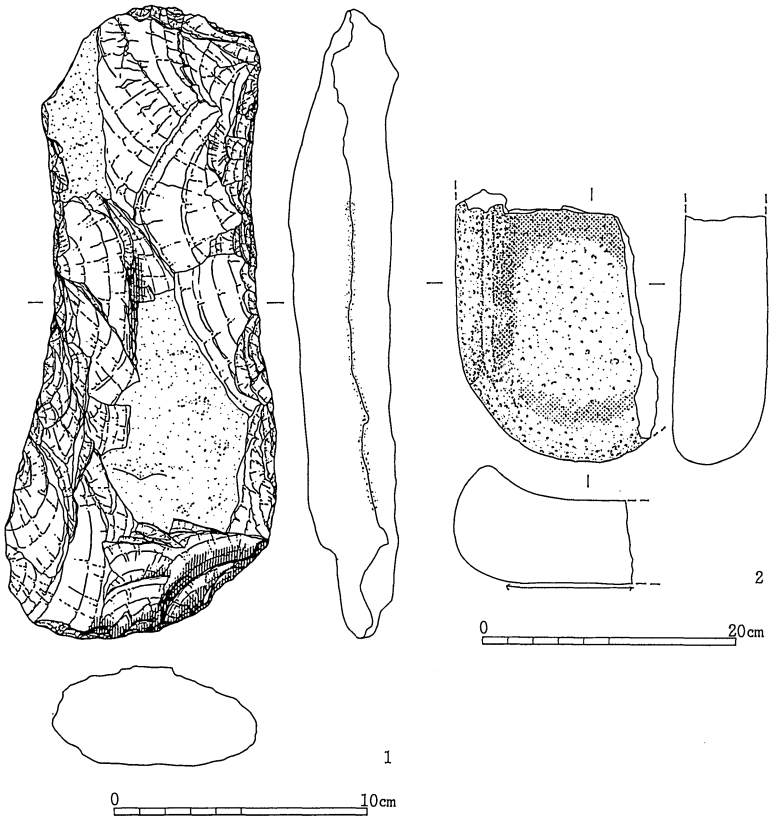
23号土坑



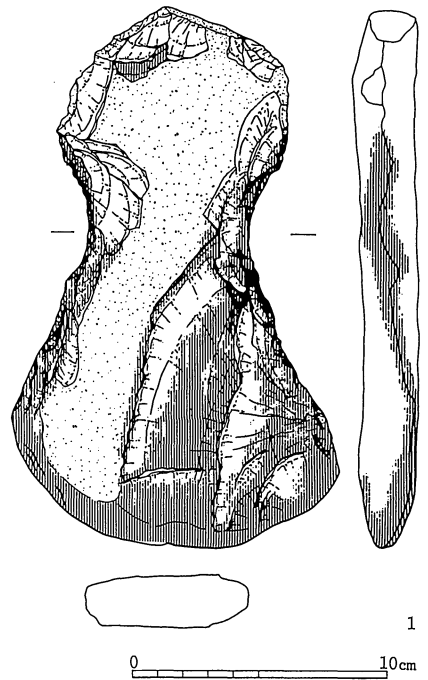
32号土坑



27号土坑



37号土坑



第50図 土坑(2)

4 遺物溜まり (第64～65図、P L22・30～34・36)

台地部分から南に下った急斜面に位置しており、田切り地形に認められる垂直崖のひとつ手前といったような状況下にある。ここに幅20m弱、長さ17mほどの田切り地形特有の浸食が起き、U字状に開口した窪地ができた。もっとも深いところでは現地表面から3m強もあり、この場所に多数の遺物が認められた。

浸食直後、中央付近から南側にかけて、まず拳大前後の軽石が急速に堆積し、中央では1m前後、以後南に向かって徐々に浅くなっていく。ここには遺物が一切認められず、P L22の断面写真ではその上面でストップした状態にある。以後、軽石をほとんど含まない黒色土や黒褐色土が堆積し、概ね5～6層に分層したが、いずれにも遺物が混入していた。最下層では少量しか認められなかったものの、上層に進むにつれ遺物量は増大していく傾向にあった。

時期的には早期中葉から後期前半までの間の遺物が認められるが、意外にも最下層においても中期後葉の加曾利EⅢ式土器が多数出土しており、浸食が起きたのは正しくこの時期で、同時にそれ以前の遺物までもがここに投げ捨てられたことが判明した。

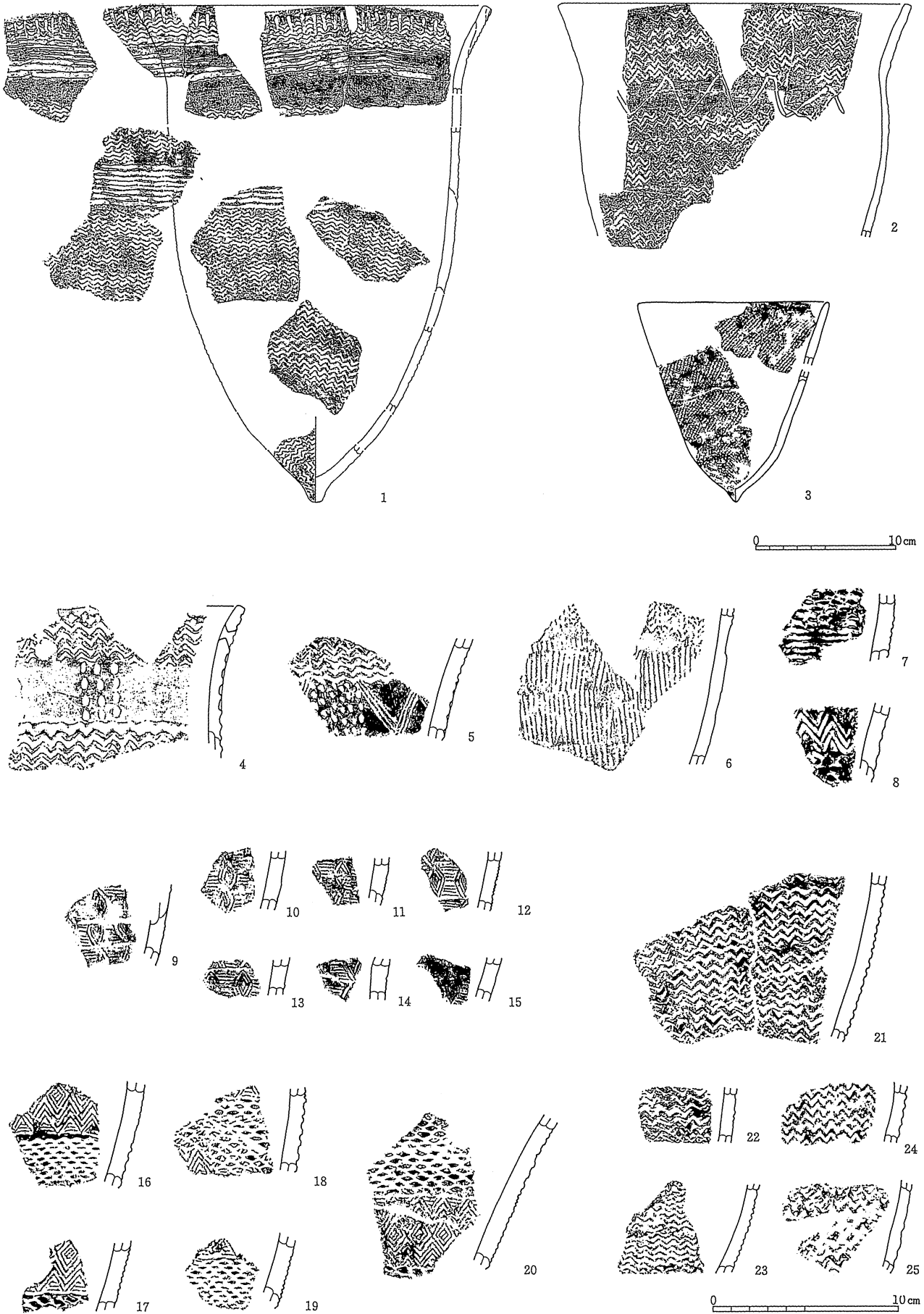
中期段階でほぼ完全に埋まりきったようで、後期以後では前半の称名寺式から堀之内1式までの遺物がごく少量伴うに過ぎない。最終的には、周辺の傾斜と何ら変わらない状態となり、その上に28・29号竪穴住居が構築されるようになった。

以下、出土遺物の説明を行うが、土器群のみとし、石器・石製品については表2を参照されたい。

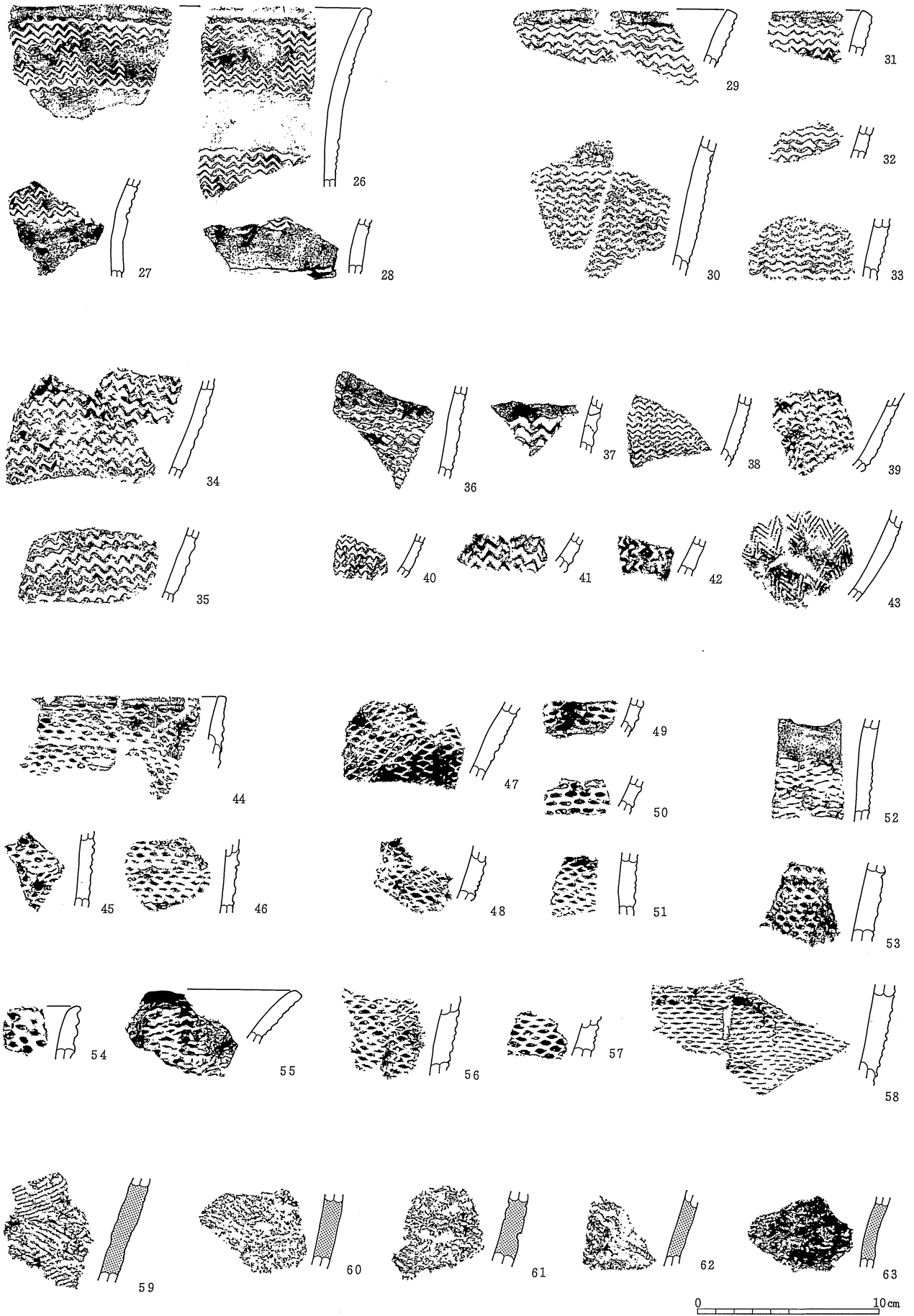
1～58は早期中葉の細久保式の一群で、うち9～15、16～19、26～28、29～33、34・35、44～46、47～51は同一個体。59～63は前期初頭の一群。64～147は前期末の諸磯式の一群で、64～90がa式、91～129がb式、130～132がc式の範疇に入り、また縄文だけを施文する133～147についてはa・b・c式いずれにも共有するものである。なお、77～78、85・86、88～90、94～96、145・146は同一個体の可能性が高い。148～152は前期最終末の晴ヶ峯式の一群、153は中期初頭の五領ヶ台Ⅱ式に相当する。154～238が中期後葉の一群である。154～165は梨久保B式に比定され、同一個体である166・167はおそらく該期に比定されると思われるが系統不明の文様構成となっている。168～171は曾利Ⅰ～Ⅱ式のいずれかの間に位置付き、また172・173は同時期の加曾利EⅠ～Ⅱ式に相当する。176は加曾利EⅡ～Ⅲ式、177が加曾利EⅡ～Ⅳ式という広い時間幅でしか捉えられない。174・175・178～192は別系統のものも若干含まれるが基本的に加曾利EⅡ式、193～205が加曾利EⅢ式の古い段階、206～213が加曾利EⅢ式中頃、214～232が加曾利EⅢ式の新しい段階に併行するものである。なお、233～238については、加曾利E式の範疇に入るが時期の詳細が不明のものである。239は中期末から後期初頭、240・241は後期初頭の称名寺式、242～245は後期前半の堀之内1式に比定される。

5 遺構外出土遺物 (第65・66図、P L32・33)

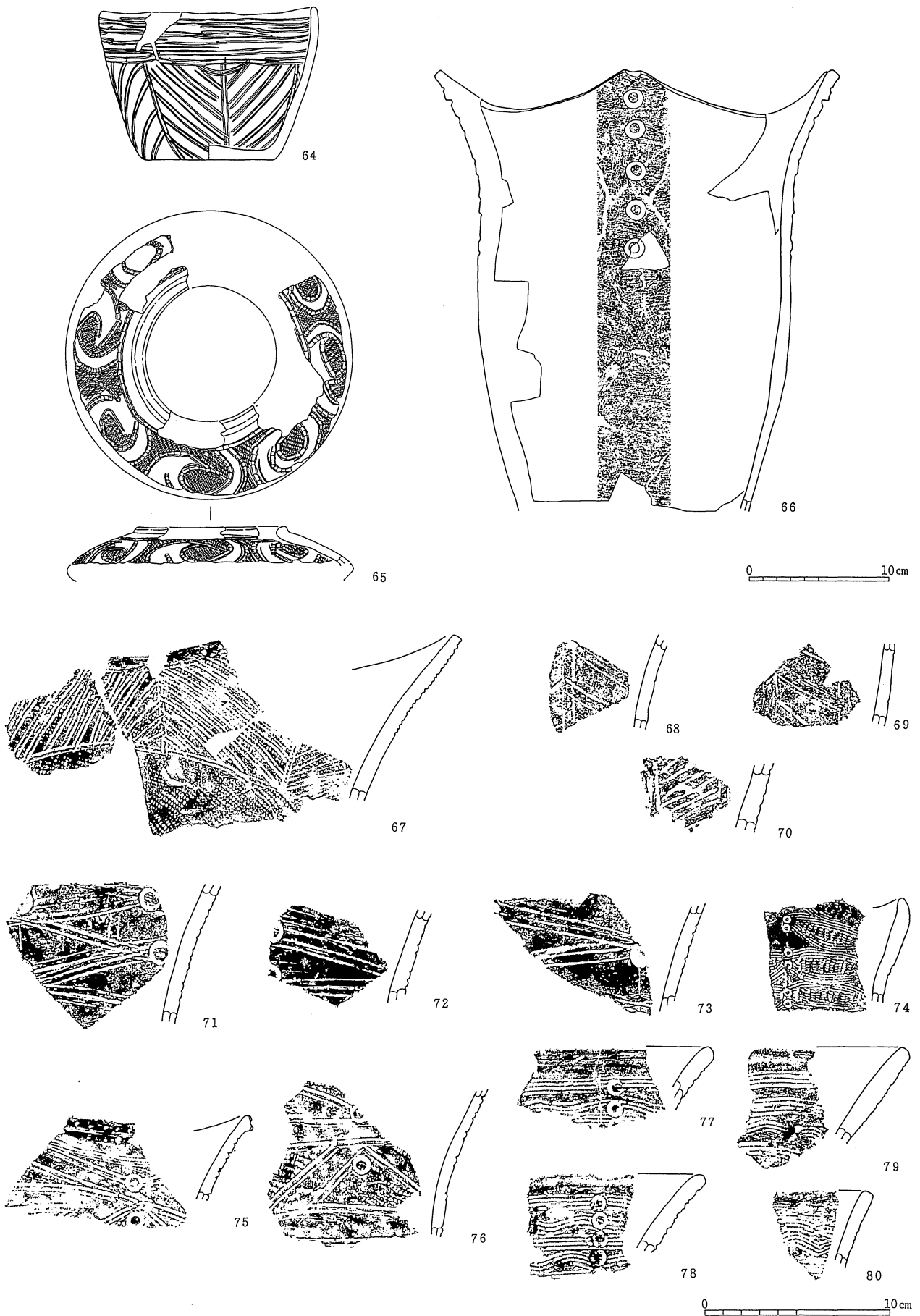
土器・石器・石製品とも存在するが、土器についてはいずれも小破片であり、竪穴住居跡及び遺物溜まりの項で掲載した以外の時期は存在しないのでここでの提示を割愛する。石器・石製品については、1の石槍、8の特殊磨石、24・25の玉類といった、ここでは貴重品ともいえるべき資料が出土しているので紹介し、あわせて関係品の類を同時に提示した次第である。なお、石器・石製品の細かな器種については、表2石器・石製品・土製品観察表を参照されたい。



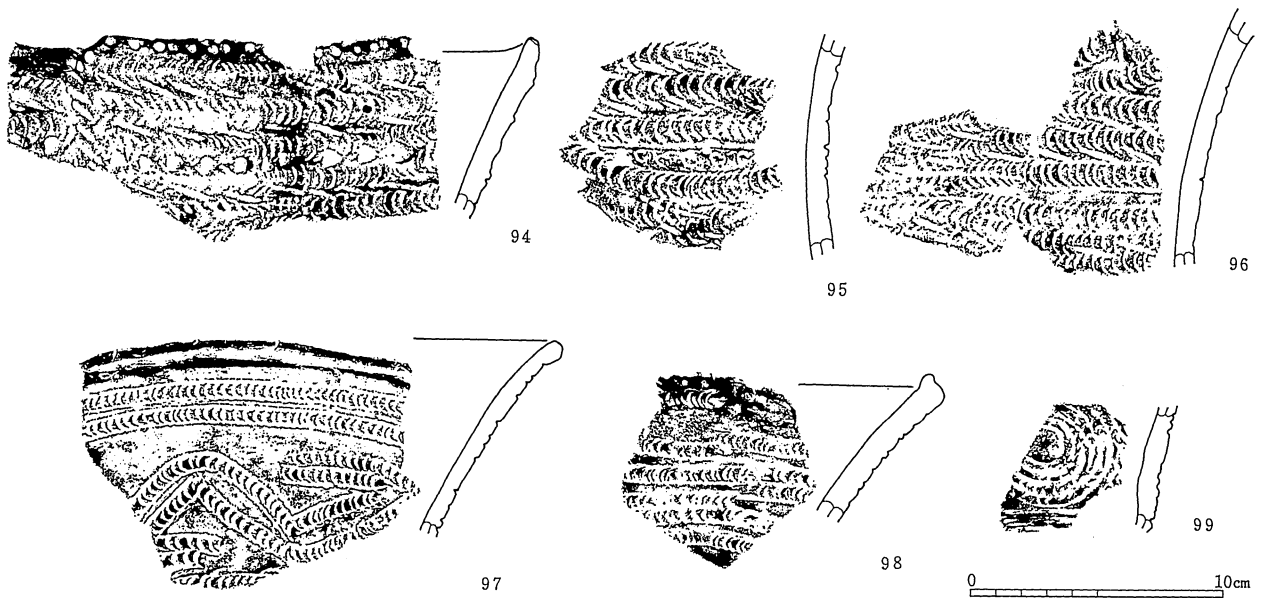
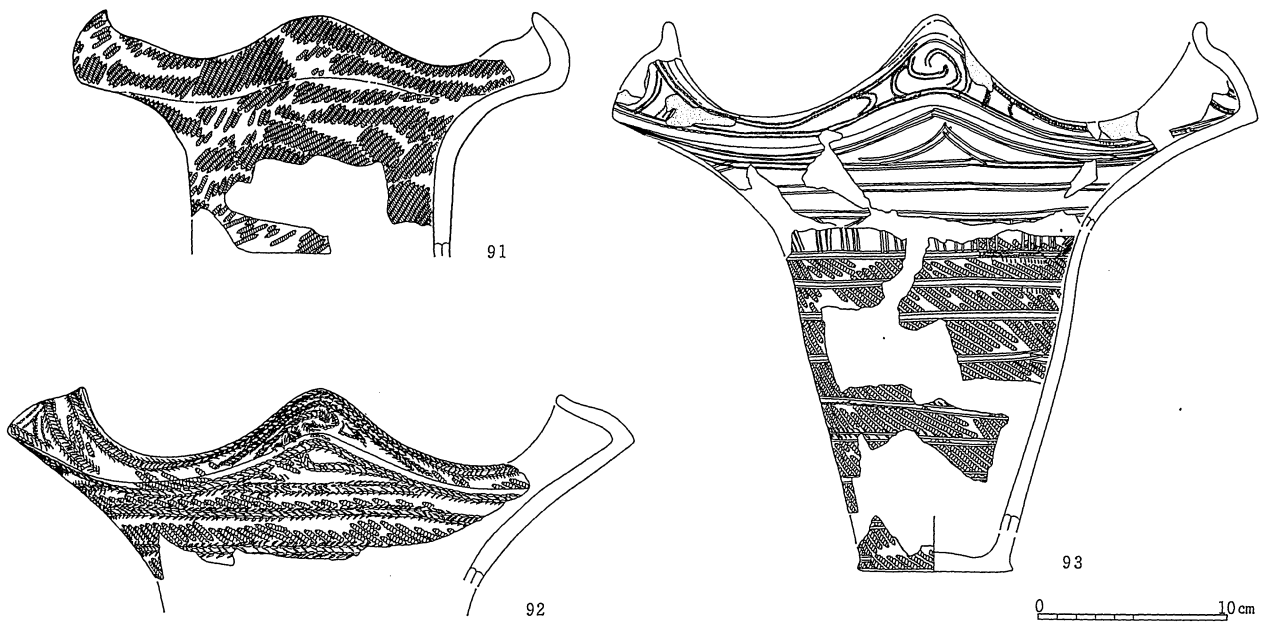
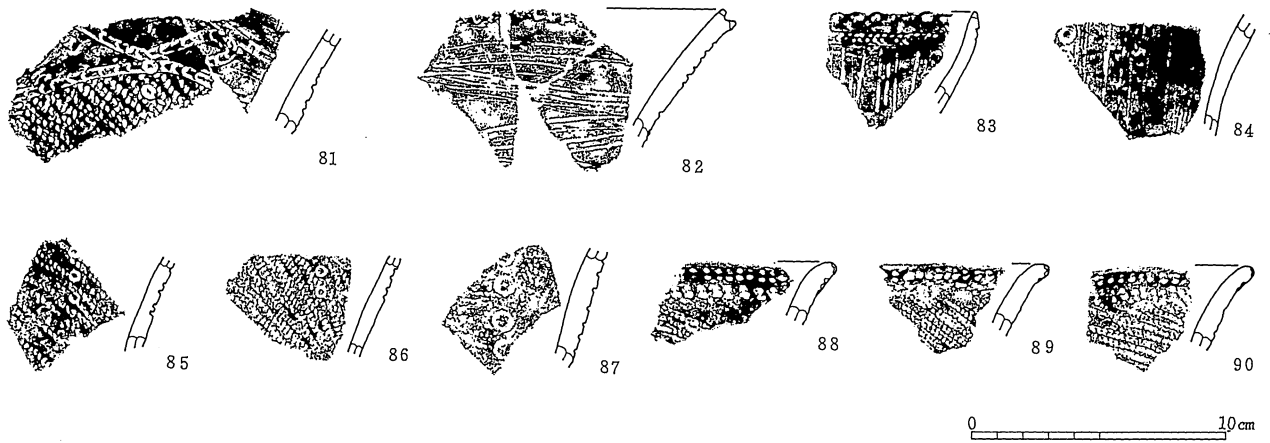
第51図 遺物溜まり出土遺物(1)



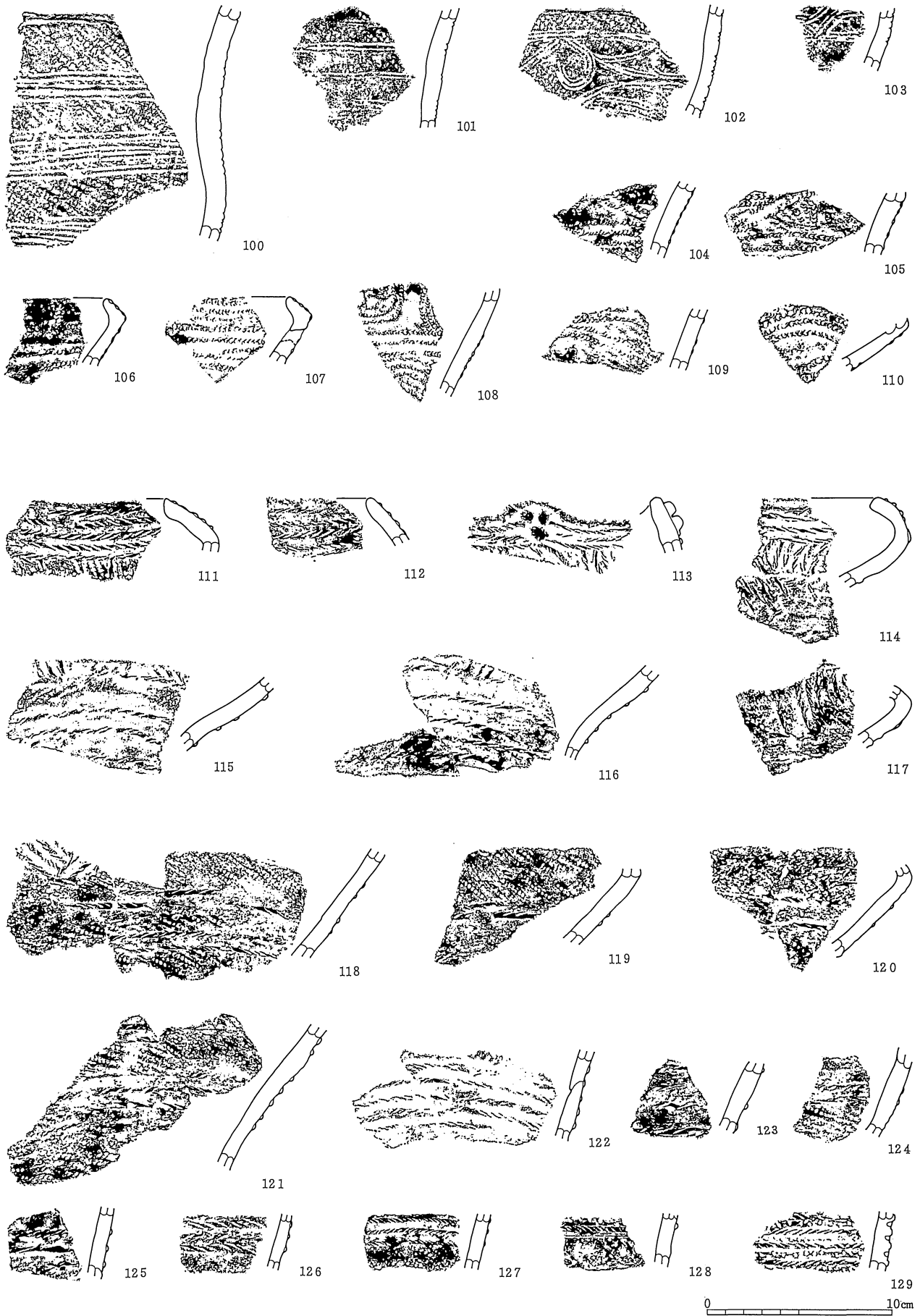
第52図 遺物溜まり出土遺物(2)



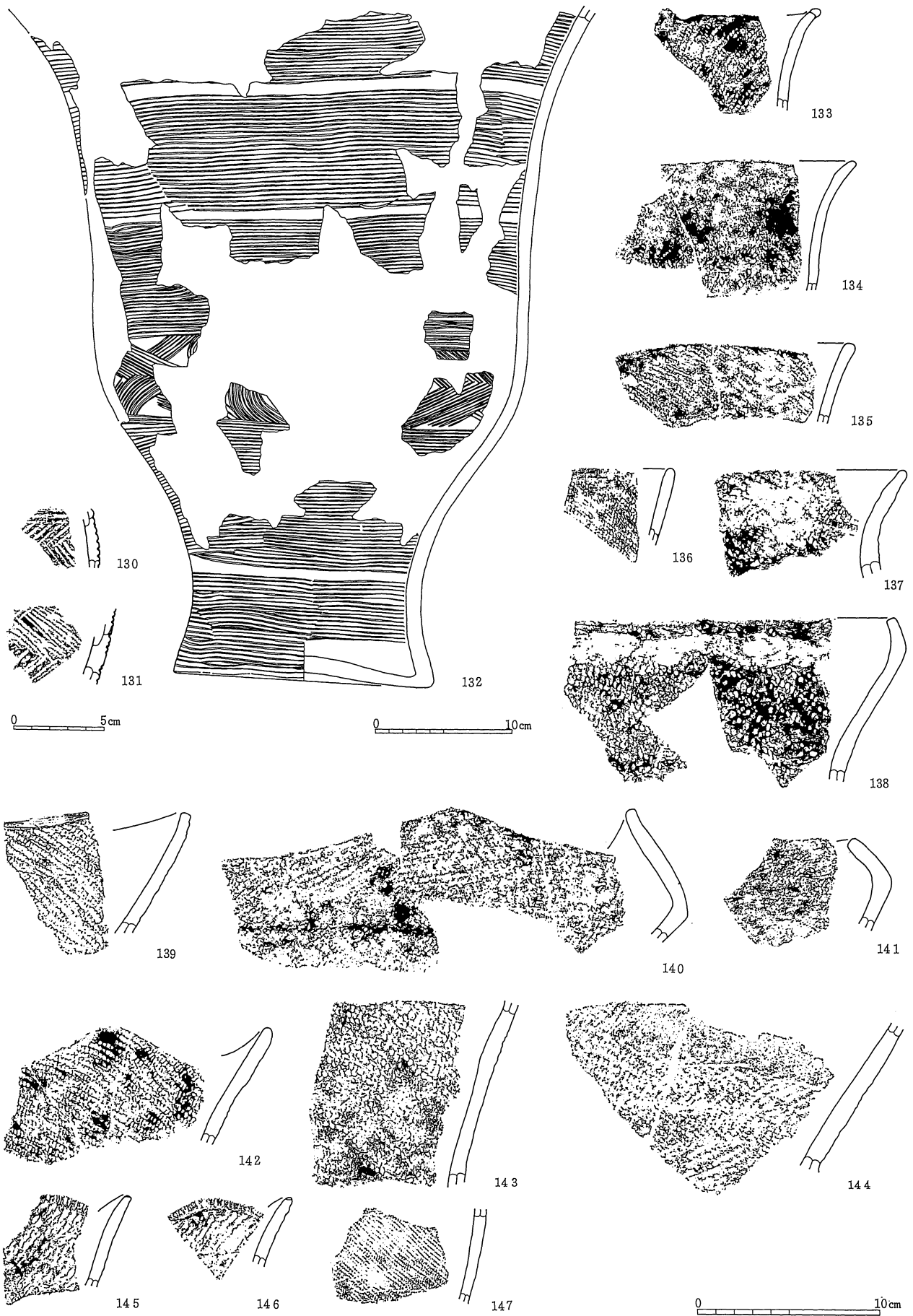
第53図 遺物溜まり出土遺物(3)



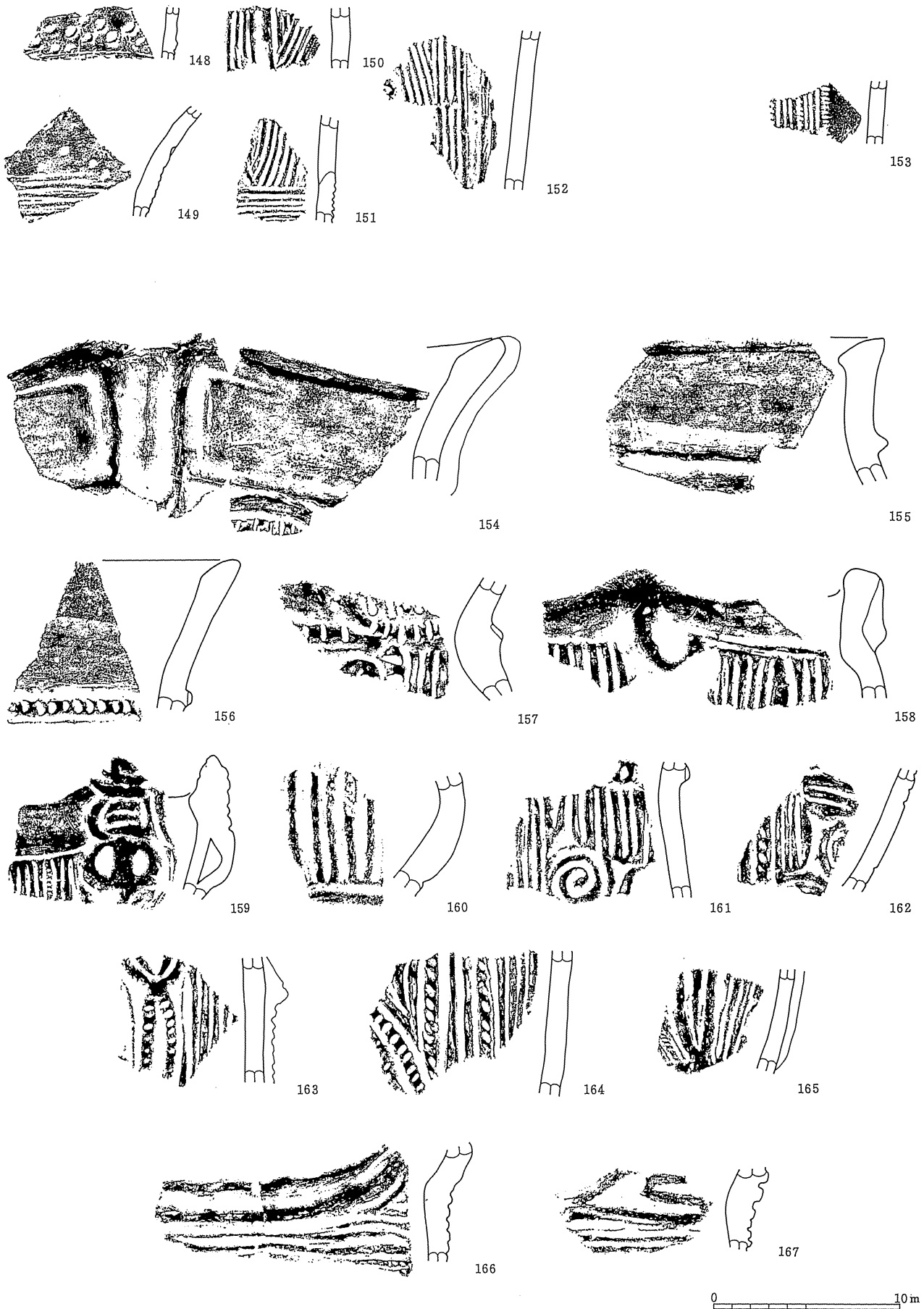
第54図 遺物溜まり出土遺物(4)



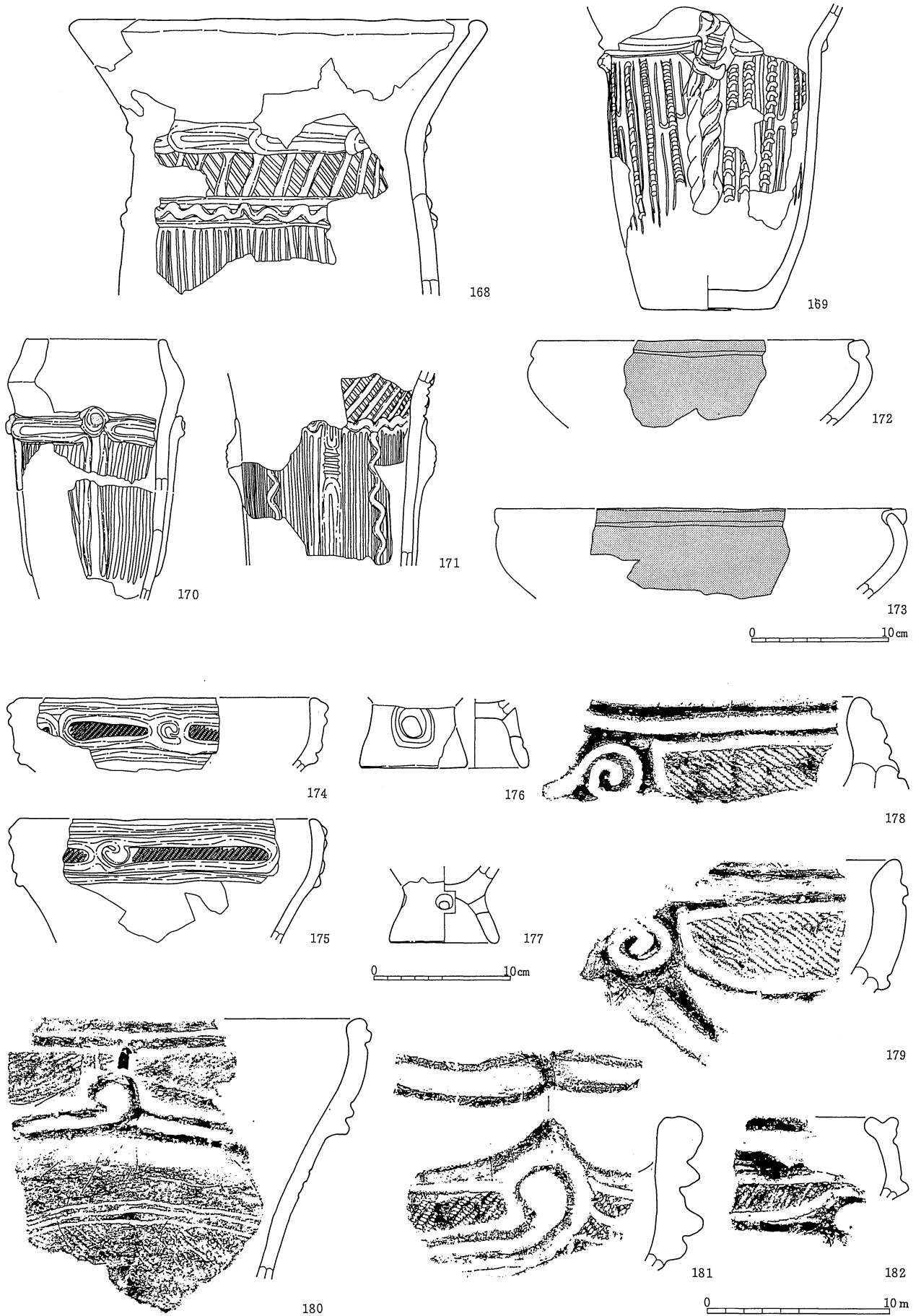
第55図 遺物溜まり出土遺物(5)



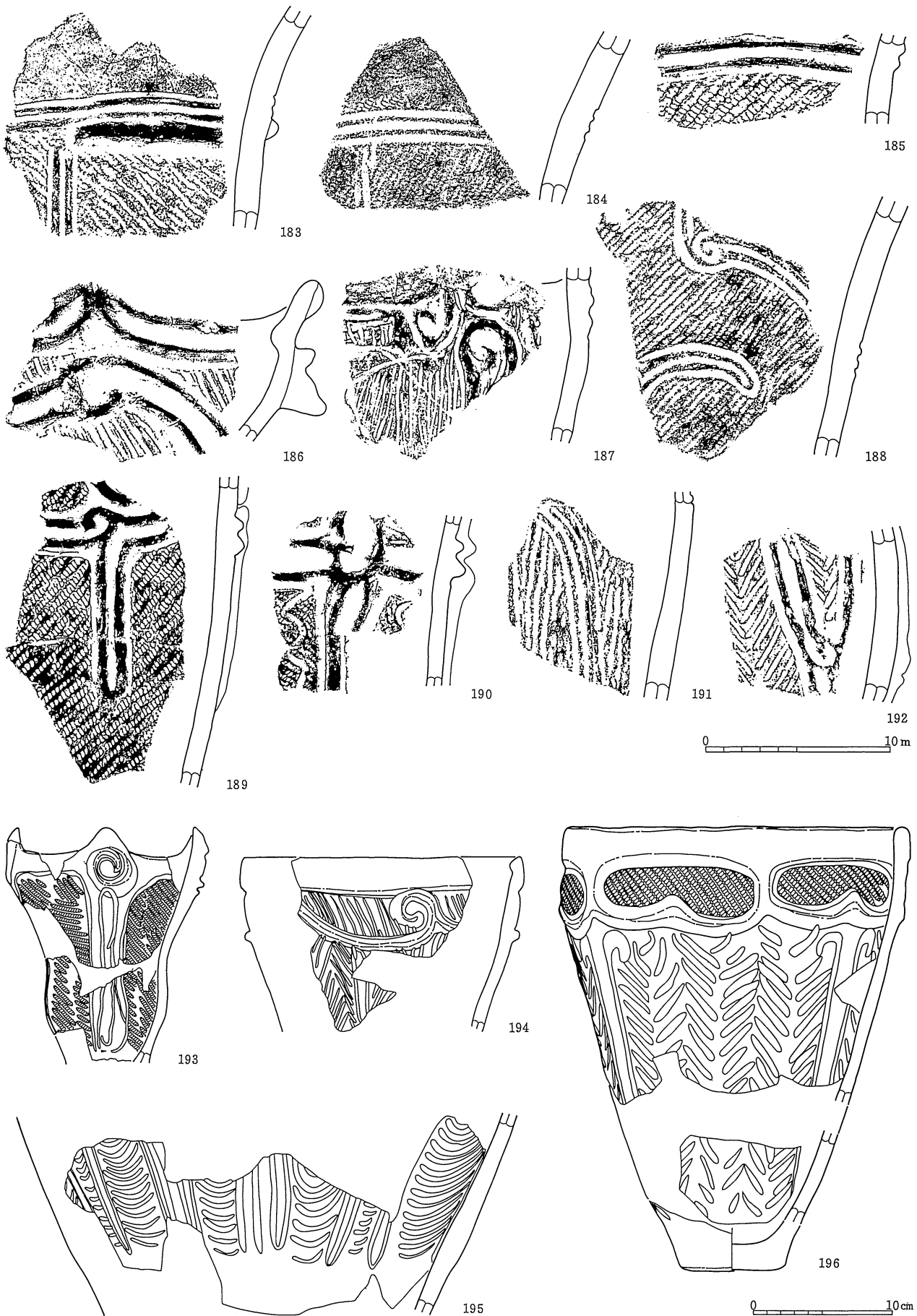
第56図 遺物溜まり出土遺物(6)



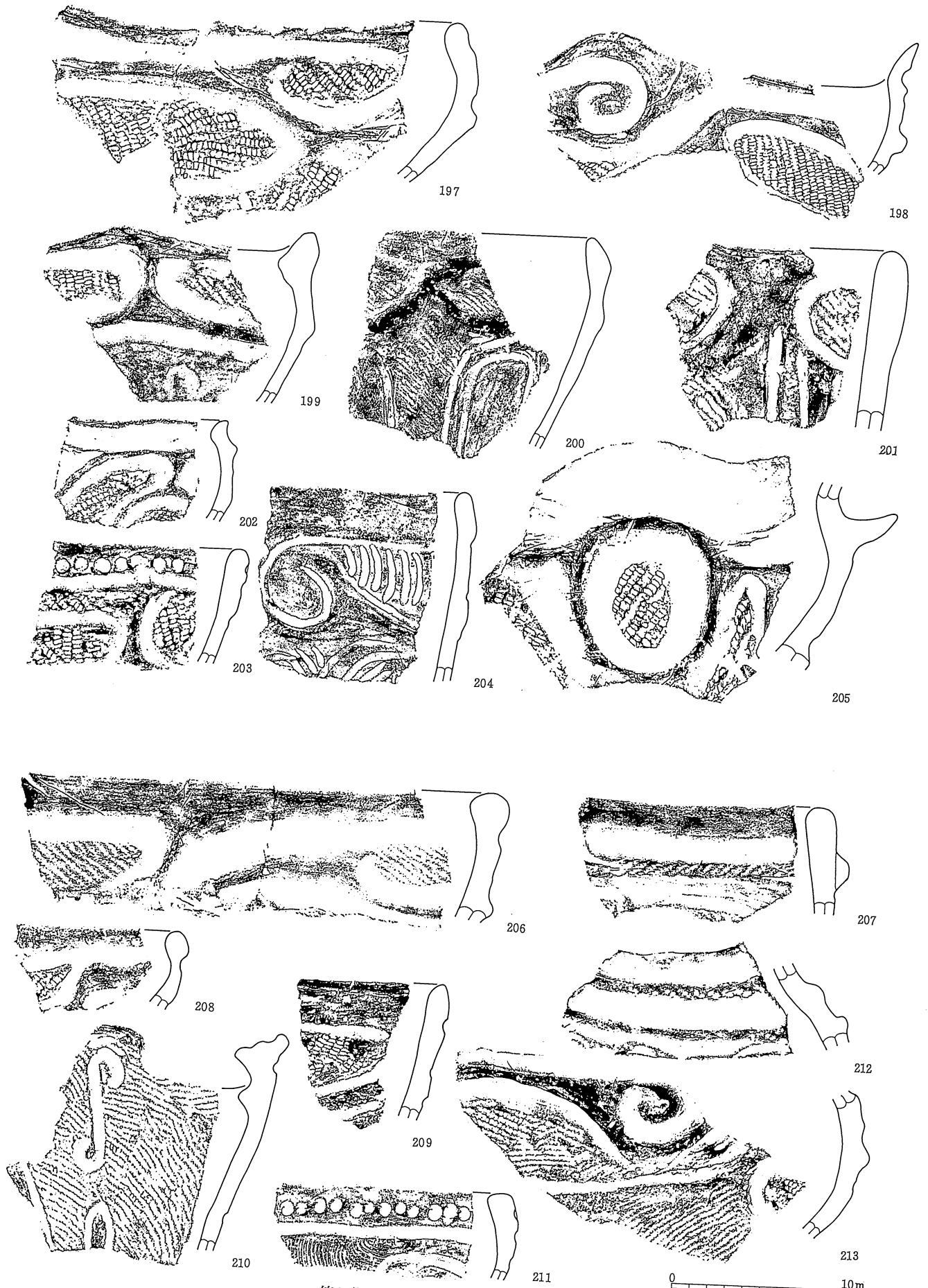
第57図 遺物溜まり出土遺物(7)



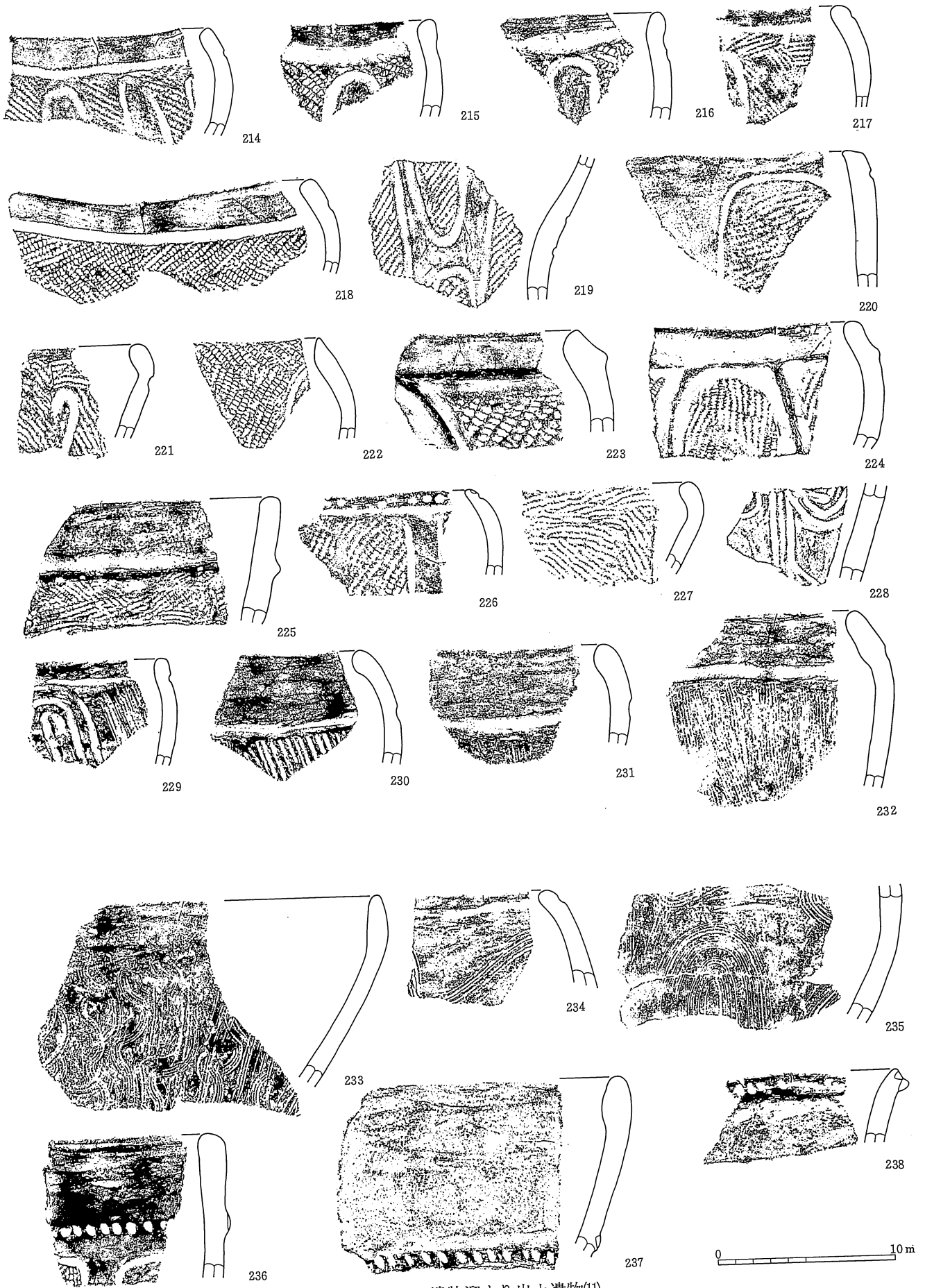
第58図 遺物溜まり出土遺物(8)



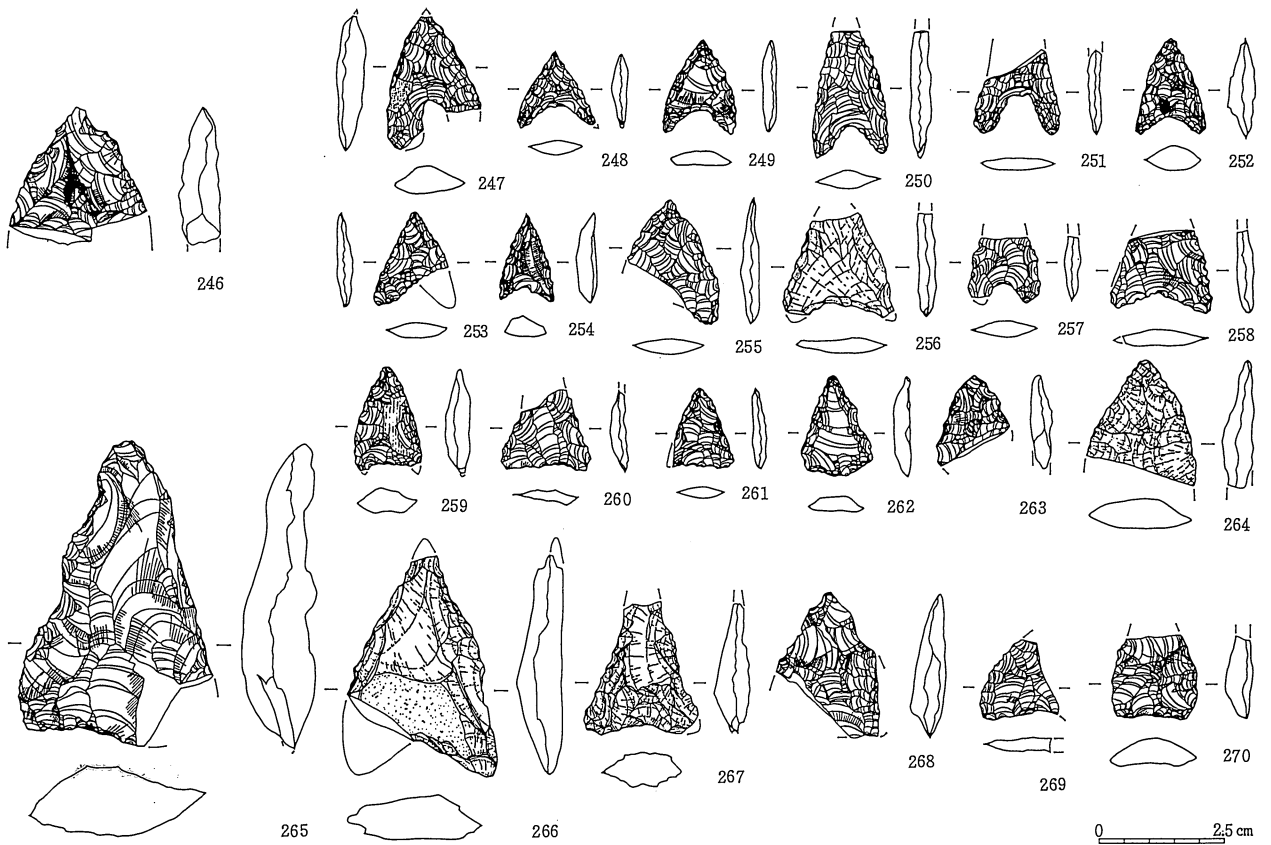
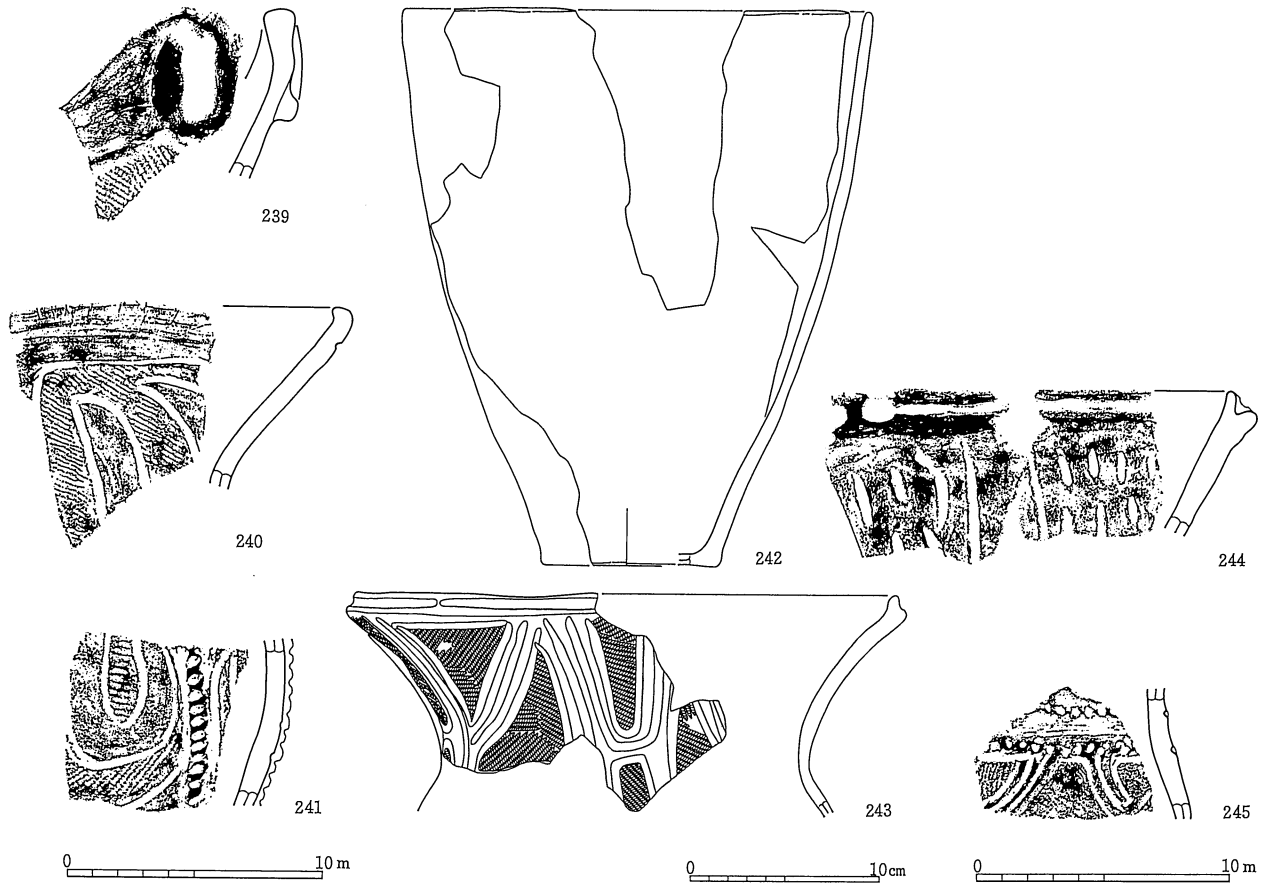
第59図 遺物溜まり出土遺物(9)



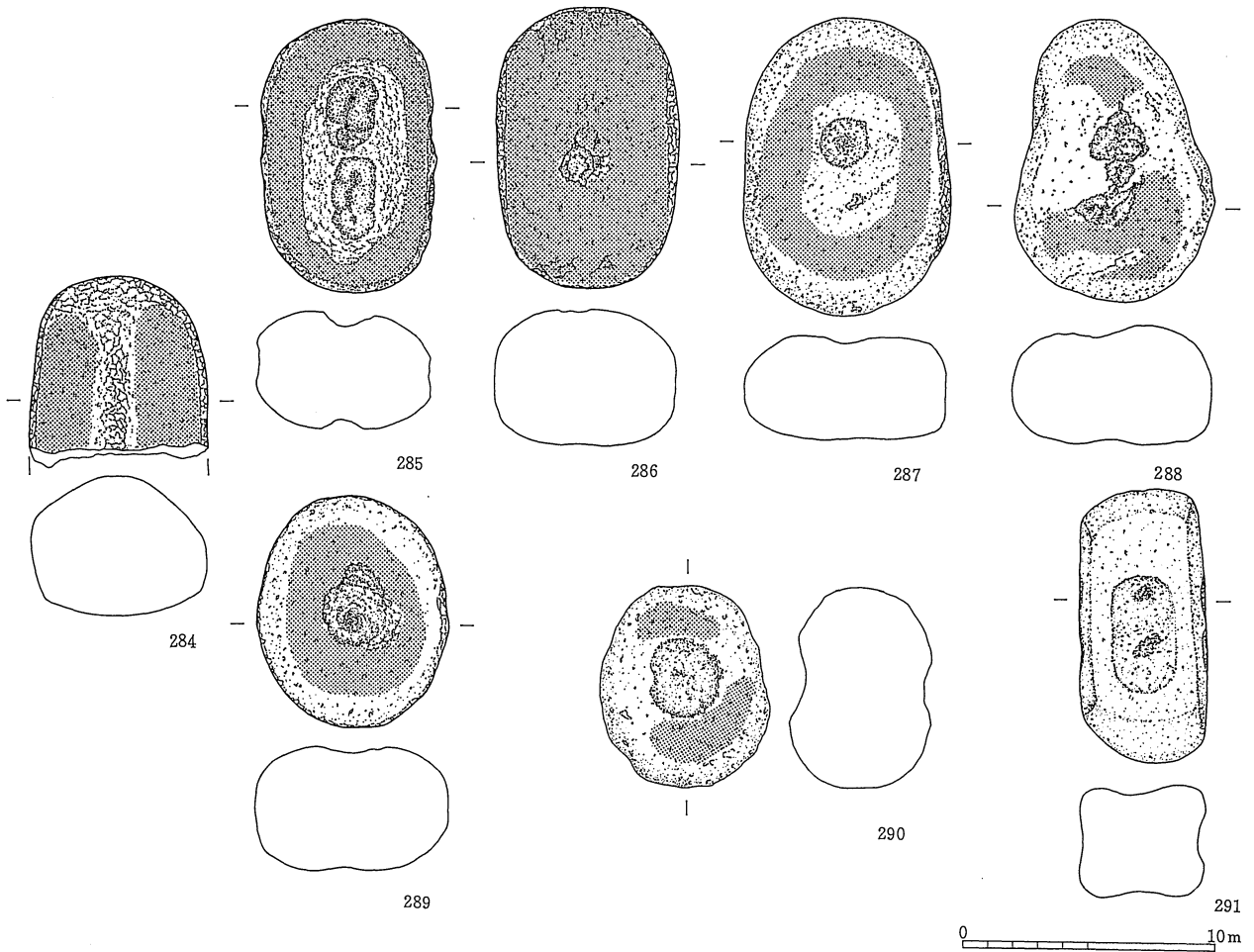
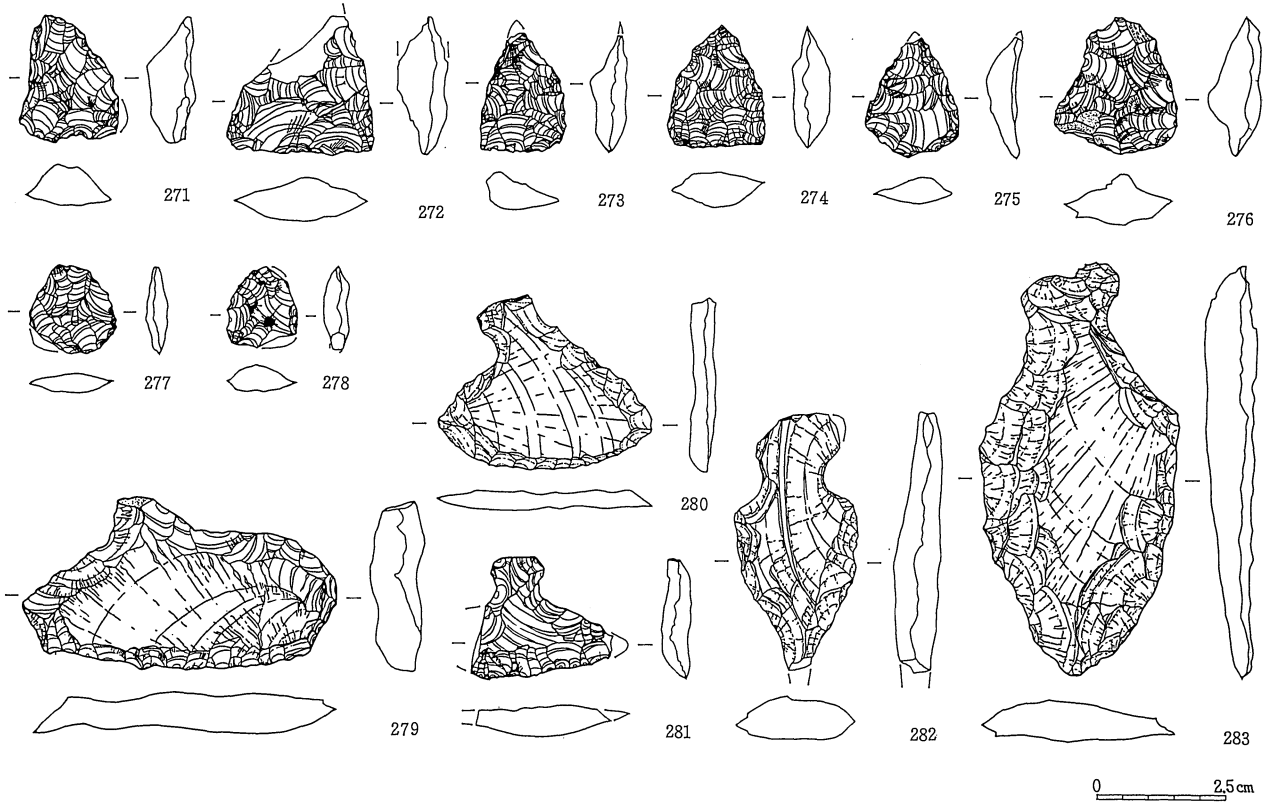
第60図 遺物溜まり出土遺物(10)



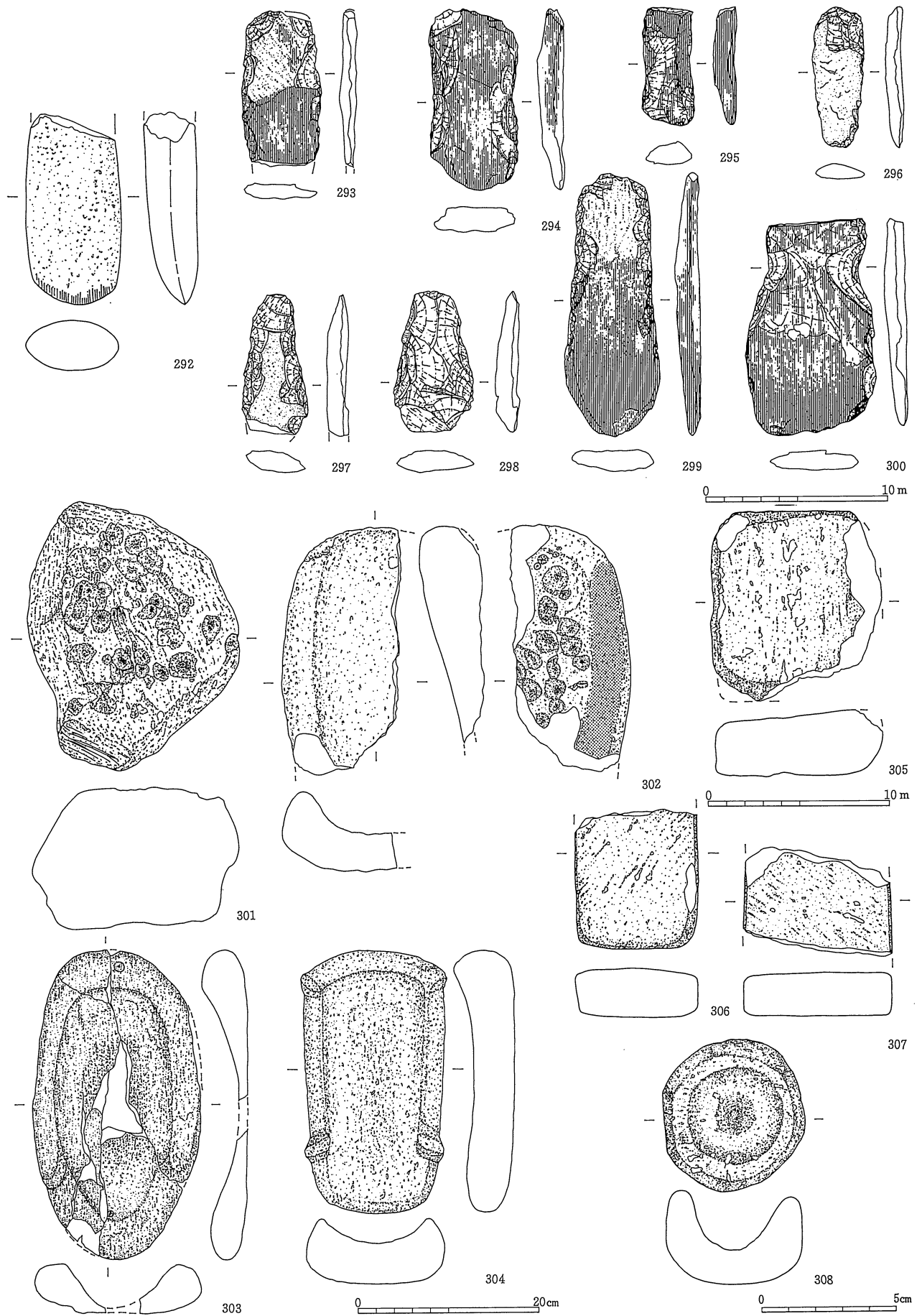
第61図 遺物溜まり出土遺物(11)



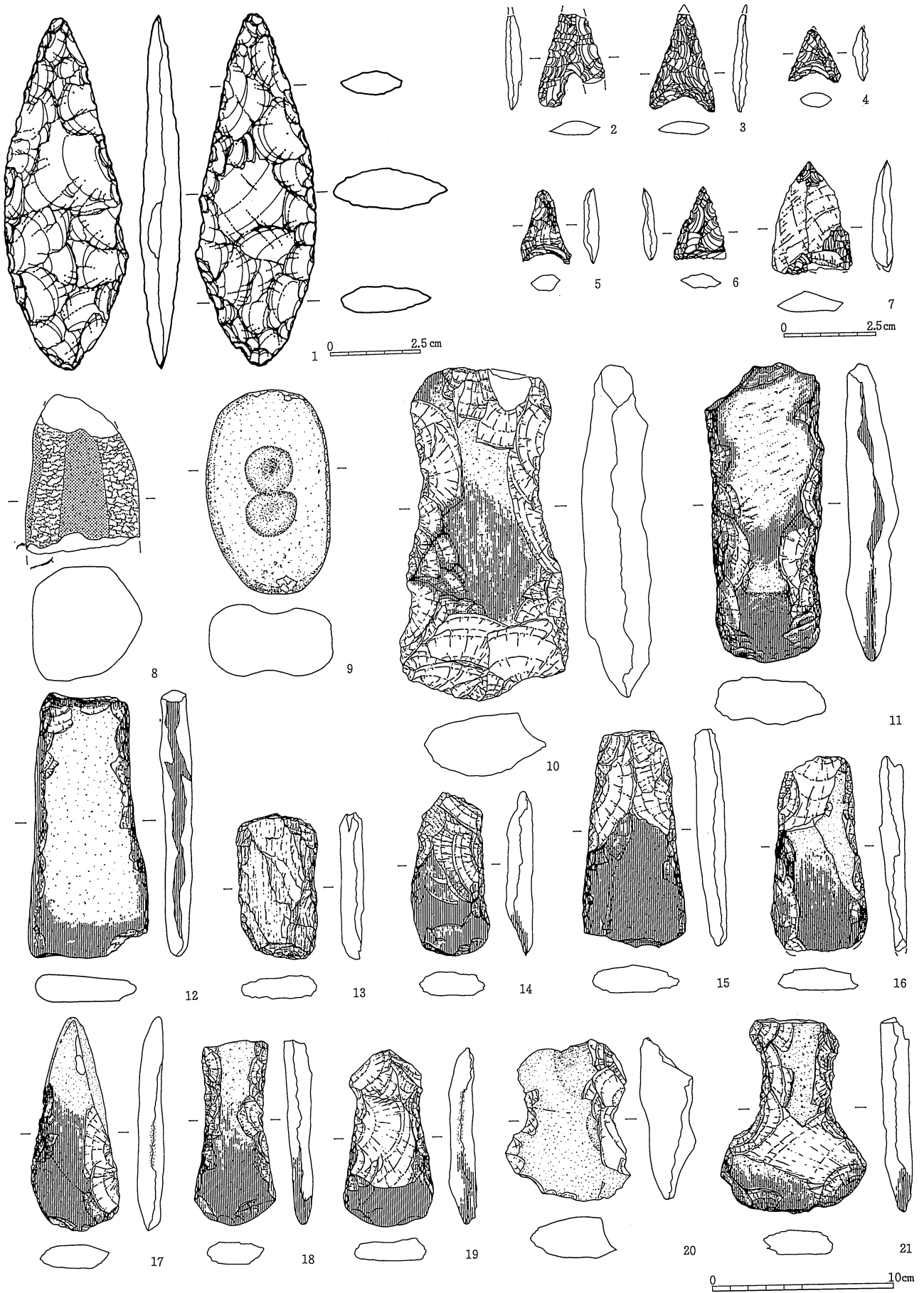
第62図 遺物溜まり出土遺物(12)



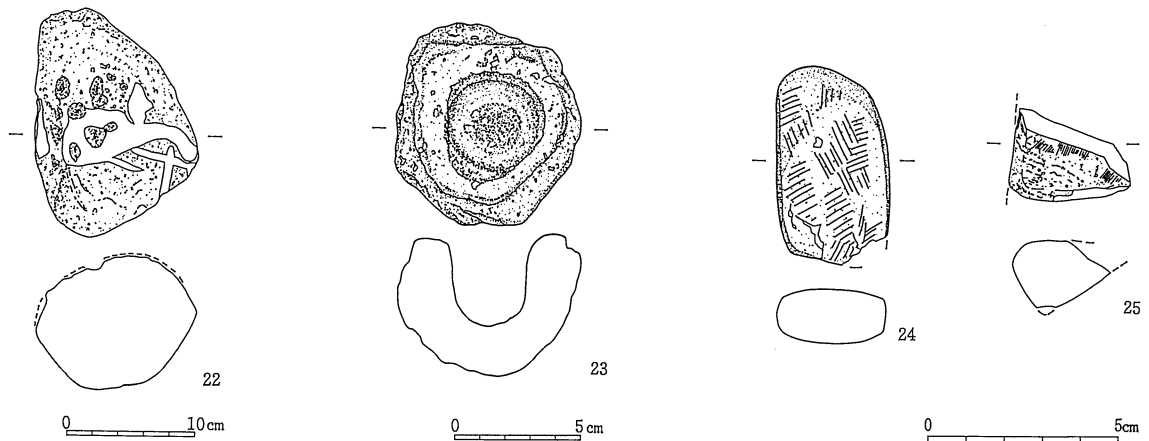
第63図 遺物溜まり出土遺物(13)



第64図 遺物溜まり出土遺物(14)



第65図 遺構外出土遺物(1)



第66図 遺構外出土遺物(2)

第4節 古墳時代以降の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

30号竪穴住居跡 (第67図、P L22)

N-5°-Eを主軸とし、5.77m×5.90mを主軸長及び副軸長とする。壁高は浅く、北壁の29cmを最高とする。

覆土は2層に細分したが、第2層は軽石流堆積物が主体で壁崩落土が主たる内容物ではないかと考えられる。第1層は周辺の遺跡でも認められるような夾雑物の少ない、しかも粘性の強い黒色細砂壤土である。

床は一見平坦に見えるものの、自然地形に沿って緩やかに傾斜しており、北と南とでは35cm前後の比高差が存在する。床面下に掘方も確認できたが、10cm前後の無作為な掘り込みだけで、とくに特徴らしきものは見当たらなかった。堅緻面は存在しない。

柱穴は通常の4本主柱となるが、それとあわせて古代末特有の南壁沿いにも柱を持つタイプであった。中間形式とも言うべきで、住居形態を考える上では興味深い資料である。カマドは南東コーナーに認められたが、火床部のみの確認であり、具体的な構造は把握していない。

住居北側を中心として、床面直上から安山岩系の亜角礫が多数出土している。ただし、使用痕は認められない。その他、1は土師質盤で床面直上、2は鉄鏝で床面から5cm浮いて、3は紡錘車の棒軸と思われるがやはり10cm浮いた状態で、4は滑石製勾玉で床面から出土している。

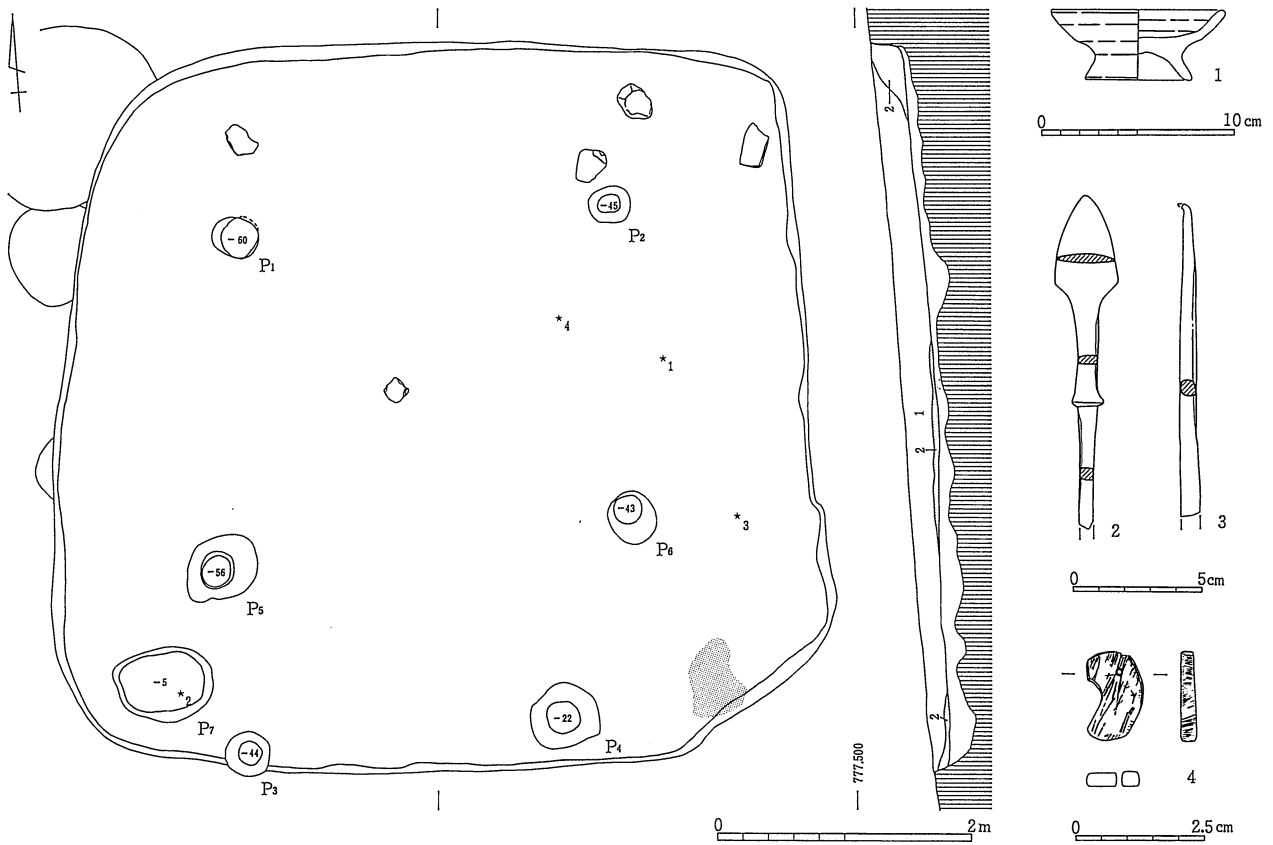
時期は1の遺物から10世紀末から11世紀代に比定されるが、4の滑石製模造品は6世紀代の祭祀遺物である。今回の調査では該期の遺物を採集していないものの、付近に古墳時代後期の集落が存在していたものと考えられる。

31号竪穴住居跡 (第68図、P L22)

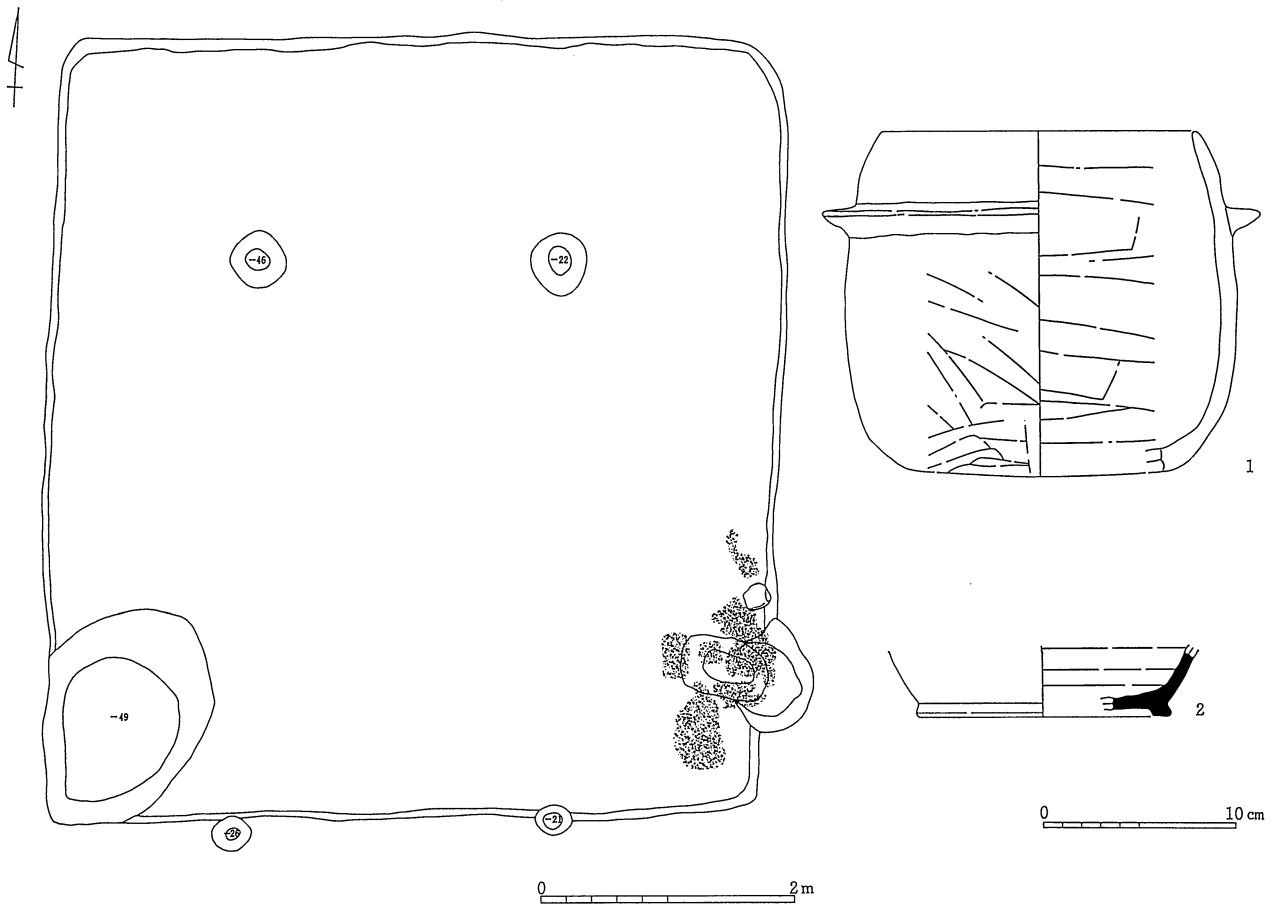
主軸はほぼ座標北に平行し、主軸長は6.24m、副軸長は5.75mをはかる。壁高は最高で28cmを計測する。

覆土の観察は行っていない。ただし、床面直上から多数の炭化材が検出されているので、廃棄直後に被熱した様子がうかがえる。

床は30号竪穴住居跡同様、南北で35cm前後の高低差がみられる。床面下には掘方と呼べるような確実な



第67図 30号竖穴住居跡



第68図 31号竖穴住居跡

掘り込みはなく、また堅緻面も存在していなかった。

柱穴は南列が壁際にくる該期特有の4本主柱となる。南西コーナーに大形ピットを設けているが、内部に炭化材を含んでいるため明らかに本跡に帰属するものと考えられる。カマドは南東コーナー寄りの東壁につくられており、向きは住居の副軸方向に平行している。火床部と煙道部の一部のみの検出であったが、火床部付近には灰層が多数確認できた。

遺物は微量で、実測可能なものは1の土師器甑と2の灰釉陶器の底部破片のみである。1はカマドから出土したものである。それ以外は、甑の破片が数点出土しているに過ぎない。

時期は遺物から考えれば10世紀後半から11世紀代という年代しか与えられないが、まだ完全なコーナーカマドとなっていない点、その中でもより古い段階に相当する可能性が大きい。

2 溝跡 (第2図)

本線部分から3条の溝を確認した。覆土中には縄文時代の遺物を包含するだけで、時期は不明である。各溝跡の覆土はそれぞれに特徴を持つが、いずれも暗褐色を基調とし、かつ灰色みを強く残すものであった。少なくとも古代末の黒色細砂壤土を覆土とするものよりも新しいことは確実である。以下、規模及び断面形だけを記述する。

1号溝跡……………最大幅=3.20m・最大深度=45cm・断面形=箱葉研形

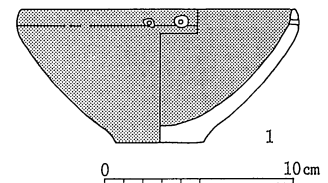
2号溝跡……………最大幅=1.10m・最大深度=38cm・断面形=丸底形

3号溝跡……………最大幅=1.26m・最大深度=19cm・断面形=丸底形

3 遺構外出土遺物 (第69図)

土器1点だけを報告する。これ以外には、古墳時代前期初頭と考えられる土器破片が何点か採集できたに過ぎない。

底部外面以外を赤色塗彩した鉢形土器で、唯一実測可能なものである。口唇部を穿孔しており、これは焼成後、外面から行われたものである。弥生時代後期から古墳時代前期初頭の産物としか言えないが、標高800m前後の地点にまで弥生時代の遺跡が登り詰めてくることは未だなく、逆に古墳時代前期初頭の集落はひるがえって多い。したがって、これを古墳時代前期初頭の遺物と見做し、報告しなかったそれ以外の小破片がその証左となる。



第69図 遺構外出土遺物

第5節 小 結

縄文時代を主体とした遺跡群であり、その始まりは早期中葉に認められ、後期前半の堀之内2式をもって閉ざされている。ただし、遺構が検出できたのは中期後葉から後期前半までで、しかも主体は加曽利EⅢ式期から堀之内1式期、すなわち中期末から後期前半初頭の間を過ぎない。ひと際短い期間でしかなく、しかも中期中葉以前は早期中葉(細久保式)・前期初頭・前期末から中期初頭(諸磯a式~五領ヶ台Ⅱ式)といった各小期に分断され、長期に渡って途切れた恰好となる。中期末から後期前半初頭を除けば、常時、人々が住み着く環境ではなかったらしいが、それでもこれより南に広がる田切り地形には認められない現象である。田切り地形の最北端のこの地、ようやく縄文時代の息吹が感じ取られるようになってきたのである。そのなかでも早期中葉の細久保式は好資料であるし、前期末の諸磯a・b式もまた打って付けの材料となり、土器分野の関係では好資料を得ることができた。

中期後半の集落については、まず加曾利EⅠ式後半～Ⅱ式期の12号竪穴住居跡から加曾利EⅡ式・唐草文系・大木8b式が共伴し、併行関係のある一点の姿を垣間見ることができた。加曾利EⅡ式後半の11号竪穴住居跡では、炉の周囲に配石を巡らすものが存在し、あわせて石棒や丸石も均等に配置されており、住居内祭祀を明確に示す資料であり、これも有意義な存在である。また、加曾利EⅢ式期に比定される16号竪穴住居跡では、壁柱穴と進化し、対ピットも存在している。しかも炉は住居中央、内部には平石（鉄平石）を敷設した可能性が高いという。加曾利EⅣ式期以降の敷石住居が既にこの時期から出現していたのか、竪穴住居跡の遺存状況がいまひとつ不鮮明であることから積極的な根拠に乏しいが、今後一考を要するところである。それともうひとつ、屋内埋甕を検出した11・12・13・16号竪穴住居跡をみれば、必ずと言っていいほど埋甕が一段階古い位置に比定されている。もちろん埋設時期と廃棄時期との時間差が存在するのだろうが、明らかに型式差として認定できるのなら、少なくとも本遺跡群では構築当初もしくは間もなくして埋設されたに違いない。埋設時期を探る大きなヒントになりそうだ。

後期初頭、称名寺式期の最大の成果は、柄鏡形敷石住居跡の張出部から出入口部を検出したことにある。7号竪穴住居跡では階段状の2段の横積み、17号竪穴住居跡では框石を立石させたもので、ともに張出部正面ではなく、左コーナーに寄るもので斜方向から出入りするものであった。これによって、張出部の役割をすべて解明したことにはならないにしても、出入口として機能していたことは確かとなったのである。また、張出部には柱穴が見当たらず、外周にも存在しない。これは堀之内式段階でも同様のことが言える。主体部と張出部の関係は、上屋の問題でも相当な開きがあるに違いない。あわせて、張出部の側壁に認められる石積みについても見事なものが多く、とりわけ軽石流堆積物上面に構築されたこの地では大小の軽石をふんだんに利用していた。7号竪穴住居跡の場合は根石を立積み、そこから上を小口積みといった手法を取り、技術的にもそうそうたるものがある。それとは別に、なぜか該期竪穴住居跡の覆土中には無数の軽石が認められ、これが投棄なのか上屋に利用されたものなのか現状では判断付かない。調査上の工夫が今後必要ではないかと考えられる。

後期前半の堀之内1式期では、本線部分北側から発見された石列を伴う環状集落が最大の成果と言える。詳細については既に述べたとおりだが、実はこの形態は堀之内2式期の岩下遺跡（第5章所収）の例とまったくもって同一なのである。1～3号竪穴住居跡の規模及び深さは岩下遺跡の13号竪穴住居跡に等しく、4・5号竪穴住居跡は岩下遺跡の16号竪穴住居跡に相当する。ほかに傾斜地をカットして円弧状の石列を組むこと、サークル内部を「無」の空間とすること等々、瓜二つの状況は山ほどある。ただし4号竪穴住居跡をみた場合、主体部よりも発達した張出部と石列は依然別形態となっており、これだけが大きな違いとなっている。だがこれは長大化を契機とした張出部の変遷過程における段階差を示していると考えられ、岩下遺跡では完全に石列と化してしまうのである。三田原遺跡群と岩下遺跡で張出部+石列→石列という先後関係が認められたわけで、後者では当然のように石列のなかに張出部という意味合いも想定していたはずだろう。谷を挟んで隣り合う集落だが、近年これに似た形態の集落がいくつか見いだされるようになってきた。このような石列を伴う環状集落をどう捉えるべきか、いくつかの解釈は知り得ても大きくは今後の課題として残されている。これらの資料を基に研究の進展が図れればと考えている。

堀之内2式期では、土坑1基を検出したに過ぎない。堀之内2式期に盛行した岩下遺跡へと移ったのか、遺構外出土遺物も極めて微量で、活動を停止した状況にちかい。以後、縄文時代の人々はここに訪れることすらなかったらしく、遺物は一切採集できていない。

古墳時代前期初頭及び平安時代中頃の問題については、第3章の第7節小結の項で記述しているのでそれを参照して頂きたい。

表2 石器・石製品・土製品観察表

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
環-2	磨製石斧	軟玉	3.2	1.1	0.7	2.8	DSD分析No.9
環-3	玉	軟玉	5.6	3.8	1.9	64.8	DSD分析No.10
環-4	石皿	安山岩	21.2	16.4	7.2	2425.0	
環-5	石棒	石材B	27.6	21.4	15.0	14200.0	磨り面が発達し、面取る
環-6	石棒	石材B	16.7	20.4	13.9	8200.0	磨り面が発達し、面取る
2住-8	磨石	ひん岩	6.2	8.3	6.0	442.6	
2住-9	凹石		8.8	8.1	5.8	643.3	花崗岩質の半深成岩
2住-10	凹石	輝石安山岩	10.9	9.9	8.0	1166.3	
2住-11	凹石	安山岩	10.5	6.6	2.3	261.2	
2住-12	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.4	6.1	1.5	163.2	
2住-13	玉	軟玉	5.6	3.3	1.3	48.4	全体に良く磨かれているDSD分析No.1
2住-14	玉	安山岩	6.6	2.2	1.3	27.3	全体に良く磨かれているDSD分析No.2
4住-16	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.8	
4住-17	石鏃	チャート	1.8	1.4	0.4	1.1	
4住-18	石鏃未製品	黒曜石	2.1	1.8	0.4	1.9	
4住-19	凹石	輝石安山岩	12.4	10.7	4.4	876.5	片面が燻けている
4住-20	凹石	多孔質の安山岩	10.5	6.1	3.7	290.7	
4住-21	凹石	安山岩	11.0	6.8	4.7	548.3	
4住-22	砥石?	安山岩?	12.1	6.6	3.3	411.9	火成岩、長石、有色鉱物を、全体に赤化側面燻ける
4住-23	磨石?	結晶片岩	13.8	7.1	3.1	501.1	全体に赤化
4住-24	磨石	輝石安山岩	6.4	5.3	1.7	100.9	
4住-25	磨製石斧再加工	緑レン石角閃岩	9.0	5.1	2.7	179.2	DSD分析No.3
4住-26	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.1	6.5	1.8	123.1	片面の使用痕が著しい
4住-27	打製石斧	千枚岩質粘板岩?	9.1	6.1	2.0	136.4	片面の使用痕が著しい
4住-28	打製石斧	ガラス質安山岩	21.6	10.5	3.8	1054.4	長石片?有り
4住-29	砥石	砂岩	21.1	8.3	2.8	523.1	
4住-30	多孔石	輝石安山岩	26.0	22.0	14.5	9700.0	
4住-31	多孔石	輝石安山岩	22.0	18.8	9.3	3770.0	
4住-32	丸石	石材B?	15.2	17.8	10.2	3290.0	ひん岩か?長石粒大、角閃石の微珠晶、被熱赤化
4住-33	石棒	浮石(軽石)	17.1	4.9	4.6	265.2	
4住-34	石棒	結晶片岩	18.5	2.7	2.4	235.7	緑泥片岩?
4住-35	磨製石斧	軟玉	3.1	2.1	0.8	10.6	DSD分析No.4
4住-36	玉	軟玉	4.3	3.3	1.8	32.2	DSD分析No.5
4住-37	玉	軟玉	2.8	1.6	1.4	7.6	
4住-38	玉	軟玉	2.4	1.6	0.5		
5住-12	凹石	砂岩	10.6	8.1	4.0	492.8	
5住-13	磨石	安山岩	10.8	7.7	5.0	452.7	
5住-14	玉	緑レン石角閃岩	5.4	4.0	1.9	61.4	DSD分析No.6
7住-14	磨・凹石?	安山岩	11.2	5.3	3.5	347.0	角閃石?
7住-15	磨製石斧再加工	角閃岩?	10.3	6.0	3.6	431.2	
7住-16	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.9	4.2	2.3	157.7	
7住-17	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.1	4.9	2.2	138.5	使用痕著しい
7住-18	打製石斧	千枚岩質粘板岩	7.5	5.8	2.0	96.5	使用痕著しい
7住-19	軽石製品	浮石(軽石)	4.5	4.2	1.1	9.8	軽石製品
7住-20	丸石	石材A	17.4	14.3	11.0	3420.0	
7住-21	石鏃	浮石(軽石)	17.2	18.0	8.4	678.1	
7住-22	石鏃	浮石(軽石)	52.2	39.4	13.0	12000.0	
8住-7	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.9	6.2	2.1	163.1	
8住-8	打製石斧	千枚岩質粘板岩	7.6	5.4	1.2	54.8	
8住-9	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.7	5.3	2.0	142.1	
8住-10	打製石斧	千枚岩質粘板岩	8.8	5.4	1.6	97.2	
8住-11	打製石斧	千枚岩質粘板岩	6.7	4.2	2.0	70.9	
8住-12	多孔石	輝石安山岩	28.2	19.0	15.6	9400.0	
9住-4	打製石斧	硬砂岩	10.9	4.8	2.2	138.9	片面に使用痕発達
9住-5	打製石斧	?	5.4	4.7	1.3	57.0	
11住-26	土製耳飾		3.4	2.4	3.4	35.4	
11住-27	凹石	輝石安山岩	15.1	10.5	8.4	1519.5	
11住-28	凹石	安山岩	12.1	8.9	4.6	473.5	
11住-29	打製石斧	千枚岩質粘板岩	18.8	8.6	2.1	261.2	
11住-30	打製石斧	千枚岩質粘板岩	15.5	7.3	2.4	250.9	
11住-31	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.2	5.5	2.4	223.8	
11住-32	打製石斧	千枚岩質粘板岩	9.7	5.8	2.0	123.0	
11住-33	打製石斧	千枚岩質粘板岩	9.9	4.5	1.4	93.9	
11住-34	石棒?	結晶片岩	18.4	5.4	1.6	200.8	
11住-35	石棒	石材A	32.2	15.7	13.9	10000.0	全面に磨り面が広がる赤化(被熱か)表面剥離
11住-36	石棒	石材B	31.7	14.0	13.0	9420.0	全面に磨り面が広がる赤化(被熱か)表面剥離

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
11住-37	石棒	石材B	23.0	17.4	17.1	9300.0	全面に磨り面が広がる赤化(被熱か)表面剥離
11住-38	石棒	石材A	21.0	10.3	10.0	3800.0	全面に磨り面が広がる赤化(被熱か)表面剥離
11住-39	丸石	輝石安山岩	24.1	24.7	16.2	14900.0	
11住-40	丸石	安山岩?	24.7	21.0	19.4	11500.0	
11住-41	軽石製品	浮石(軽石)	6.3	5.6	1.8	31.7	
11住-42	垂飾	軟玉	2.0	1.1	0.6	1.8	DSD分析No.8
12住-11	打製石斧	硬砂岩	11.9	5.2	1.4	105.8	
12住-12	打製石斧	千枚岩質粘板岩	9.0	4.9	1.4	54.0	
12住-13	打製石斧	千枚岩質粘板岩	5.1	4.1	1.7	39.4	
12住-14	使用痕ある剥片	粘板岩	10.5	4.7	0.9	34.2	
13住-9	打製石斧	千枚岩質粘板岩	5.9	6.0	2.1	91.5	
14住-19	磨石	多孔質安山岩	12.0	7.3	3.9	463.2	
14住-20	打製石斧	千枚岩質粘板岩	8.6	5.7	2.0	139.3	
15住-1	磨製石斧再加工	?	10.0	6.4	3.2	384.6	
15住-2	磨製石斧	軟玉	5.2	3.0	1.0	24.8	DSD分析No.7
17住-13	磨石	安山岩	8.4	5.2	2.8	192.4	
17住-14	打製石斧	千枚岩質粘板岩	13.1	6.5	2.2	266.5	
17住-15	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.8	5.9	1.3	124.1	
17住-16	砥石	砂岩	10.4	8.4	2.9	245.5	被熱して赤化
18住-9	石鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.3	0.5	
18住-10	打製石斧	ガラス質安山岩	9.3	6.4	1.8	121.9	
18住-11	使用痕有り	ガラス質安山岩	6.3	11.0	1.7	89.5	微細な剥離が連続する剥片
18住-12	砥石	砂岩	7.9	6.3	1.4	83.2	
18住-13	石鏃	浮石(軽石)	42.2	30.8	22.0	5300.0	
18住-14	多孔石剥片	浮石(軽石)	30.2	26.4	13.2	4000.0	
18住-15	石皿	多孔質安山岩	10.8	12.5	6.2	992.2	角閃石? 表面燻ける
21住-10	丸石	安山岩	47.2	38.4	26.9	68000.0	磨り面有り
22住-10	砥石	砂岩	8.7	4.8	1.6	78.1	
22住-11	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.9	5.8	1.7	96.0	
22住-12	磨製石斧	角閃岩?	6.9	3.0	1.6	53.7	
22住-13	軽石製品	浮石(軽石)	3.8	3.9	2.3	12.8	磨り面有り
22住-14	軽石製品	浮石(軽石)	8.6	6.6	2.2	65.4	磨り面有り
22住-15	軽石製品	浮石(軽石)	7.5	7.2	3.1	67.8	磨り面有り
23住-2	凹石	安山岩	14.5	8.7	3.7	664.7	側面敲打 表面の平坦面磨り面発達
24住-5	石玉	安山岩	20.1	16.0	8.0	2080.0	
30住-4	勾玉	滑石	1.8	1.1	0.3	1.1	軟質
5坑-1	打製石斧	安山岩	15.4	6.4	1.5	178.9	
7坑-1	打製石斧	安山岩	12.8	5.9	1.6	184.4	
8坑-3	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.7	5.7	1.3	105.8	
8坑-4	打製石斧	千枚岩質粘板岩	8.1	4.8	0.9	29.4	
11坑-1	磨製石斧再加工	角閃岩?	6.7	4.7	3.3	169.3	
14坑-1	凹石	安山岩	9.8	6.2	5.6	370.7	
22坑-1	打製石斧	安山岩	10.3	6.9	1.5	119.0	
27坑-1	打製石斧	安山岩	25.1	10.8	4.0	1136.3	
27坑-2	石皿	輝石安山岩	21.7	16.1	9.5	4300.0	
32坑-1	石鏃	ガラス質安山岩	2.8	2.4	1.1	4.9	
37坑-1	打製石斧	安山岩	21.4	12.9	2.2	746.4	片面の摩耗著しい
遺溜-246	石槍	黒曜石	2.6	2.6	1.7	3.9	
遺溜-247	石鏃	黒曜石	2.6	1.9	0.6	1.7	
遺溜-248	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.3	
遺溜-249	石鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.2	0.6	
遺溜-250	石鏃	チャート	2.5	1.5	0.4	1.5	
遺溜-251	石鏃	黒曜石	1.6	1.7	0.3	0.5	
遺溜-252	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.5	0.9	
遺溜-253	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.4	
遺溜-254	石鏃	黒曜石	1.6	1.0	0.3	0.5	
遺溜-255	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.3	0.9	
遺溜-256	石鏃	ガラス質安山岩	2.1	2.2	0.2	1.4	
遺溜-257	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.5	
遺溜-258	石鏃	黒曜石	1.7	2.0	0.3	0.9	
遺溜-259	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.5	1.1	
遺溜-260	石鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.3	0.7	
遺溜-261	石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.4	
遺溜-262	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.8	
遺溜-263	石鏃	黒曜石	1.9	1.9	0.4	0.6	
遺溜-264	石鏃	ガラス質安山岩	2.1	2.2	0.6	2.2	
遺溜-265	石鏃未製品	黒曜石	5.1	3.9	1.5	21.6	
遺溜-266	石鏃未製品	粘板岩	4.3	3.0	0.9	9.4	
遺溜-267	石鏃未製品	ガラス質安山岩	2.6	2.3	0.7	2.8	
遺溜-268	石鏃未製品	黒曜石	2.9	2.1	0.7	2.6	
遺溜-269	石鏃未製品	黒曜石	1.6	1.6	0.3	0.7	
遺溜-270	石鏃未製品	黒曜石	1.7	1.7	0.5	1.4	
遺溜-271	石鏃未製品	黒曜石	2.5	2.0	0.9	3.5	
遺溜-272	石鏃未製品	黒曜石	2.7	2.9	1.0	6.1	

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
遺溜-273	石鏃未製品	黒曜石	2.3	1.7	0.7	2.1	
遺溜-274	石鏃未製品	黒曜石	2.4	2.0	0.7	2.8	
遺溜-275	石鏃未製品	黒曜石	2.3	1.8	0.7	2.0	
遺溜-276	石鏃未製品	黒曜石	2.7	2.5	1.0	4.1	
遺溜-277	石鏃未製品	黒曜石	1.8	1.7	0.4	1.0	
遺溜-278	石鏃未製品	黒曜石	1.5	1.4	0.5	1.1	
遺溜-279	石匙	ガラス質安山岩	3.8	6.2	0.8	18.0	
遺溜-280	石匙	硬砂岩?	3.4	4.3	0.4	6.5	
遺溜-281	石匙	黒色珪質頁岩	2.3	2.9	0.6	3.2	いわゆる硬質頁岩に似る
遺溜-282	石匙	硬砂岩?	5.1	2.4	0.9	9.6	
遺溜-283	石匙	粘板岩	6.1	3.9	1.5	26.0	
遺溜-284	特殊磨石	輝石安山岩	7.8	7.1	5.5	463.3	
遺溜-285	凹石	砂岩	10.9	7.1	4.7	527.3	
遺溜-286	凹石	安山岩	11.2	7.3	5.4	726.3	磨り面発達 磨石? 側面敲打痕
遺溜-287	凹石	安山岩	11.9	8.2	4.2	576.1	
遺溜-288	凹石	安山岩	11.3	8.0	4.8	509.7	
遺溜-289	凹石	安山岩	9.4	7.8	5.1	507.0	
遺溜-290	凹石	安山岩	8.2	6.8	5.6	261.0	
遺溜-291	凹石	安山岩	11.1	5.1	4.6	437.8	多孔質
遺溜-292	磨製石斧	軟玉?	10.5	5.2	2.8	244.8	
遺溜-293	打製石斧	千枚岩質粘板岩	8.6	4.4	0.8	46.5	
遺溜-294	打製石斧	安山岩	9.9	4.8	1.4	89.7	
遺溜-295	打製石斧	?	6.4	2.9	1.2	28.3	
遺溜-296	打製石斧	粘板岩	7.7	2.8	0.9	25.3	
遺溜-297	打製石斧	粘板岩	7.7	3.7	1.2	37.3	
遺溜-298	打製石斧	粘板岩	7.8	4.4	1.2	42.3	
遺溜-299	打製石斧	千枚岩質粘板岩	14.5	5.2	1.2	118.0	
遺溜-300	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.0	7.2	1.1	123.6	
遺溜-301	多孔石	浮石(軽石)	28.6	23.2	16.6	3909.0	
遺溜-302	石皿	安山岩	27.4	13.1	7.0	2555.0	
遺溜-303	石皿	結晶片岩	34.5	18.5	5.0	3700.0	
遺溜-304	石皿	輝石安山岩	29.1	16.2	7.5	4000.0	

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
遺溜-305	軽石製品	浮石(軽石)	10.4	9.4	3.6	193.9	
遺溜-306	軽石製品	浮石(軽石)	5.1	4.4	1.7	25.3	
遺溜-307	軽石製品	浮石(軽石)	4.0	5.5	1.6	21.0	
遺溜-308	軽石製品	浮石(軽石)	5.6	5.7	3.5	37.0	
遺構外-1	石棺	?	9.7	3.2	1.2	36.3	
遺構外-2	石鏃	チャート	2.6	1.9	0.4	1.6	
遺構外-3	石鏃	黒曜石	2.7	1.8	0.4	1.2	
遺構外-4	石鏃	チャート	1.5	1.4	0.4	0.6	
遺構外-5	石鏃	チャート	2.1	1.4	0.4	1.0	
遺構外-6	石鏃		2.0	1.4	0.4	0.7	
遺構外-7	石鏃		3.1	2.2	0.6	3.7	
遺構外-8	特殊磨石		8.9	6.3	6.4		
遺構外-9	凹石	輝石安山岩	11.4	6.9	4.0	471.4	
遺構外-10	打製石斧	安山岩	18.6	9.4	3.5	799.3	
遺構外-11	打製石斧	?	16.7	6.5	2.6	345.2	
遺構外-12	打製石斧	?	14.8	6.7	1.5	234.7	
遺構外-13	打製石斧	結晶片岩	8.1	4.4	1.2	70.1	
遺構外-14	打製石斧	粘板岩	9.1	4.3	1.3	71.2	
遺構外-15	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.1	5.7	1.6	122.9	
遺構外-16	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.8	5.3	1.2	92.7	
遺構外-17	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.2	4.9	1.3	95.0	
遺構外-18	打製石斧	安山岩?	10.5	4.1	1.3	90.2	
遺構外-19	打製石斧	珪質粘板岩	10.0	5.0	1.3	87.9	
遺構外-20	打製石斧	硬砂岩	9.1	6.9	2.3	154.8	
遺構外-21	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.1	8.0	1.4	136.4	
遺構外-22	多孔石	安山岩	18.0	12.9	10.6	2735.0	
遺構外-23	軽石製品	浮石(軽石)	8.1	7.4	5.4	97.8	
遺構外-24	玉	軟玉	5.3	3.0	1.4	38.5	DSD分析No.11
遺構外-25	玉	碧玉	2.4	3.2	1.8	14.5	DSD分析No.12

引用参考文献

小諸市教育委員会 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』

(財)長野県埋蔵文化財センター 1992 『長野県埋蔵文化財センター年報9』

第5章 ^{いわした}岩下遺跡

第1節 遺跡の概観

小諸市八満字岩下・駒形などに所在する。浅間火山南麓の裾野、南北走行の尾根末端部に営まれた遺跡で、これから南方は走行方向を南西に変える田切り地形が発達している。田切り谷を挟んで、南東側に三田原遺跡群（本書第4章所収）、南西側に北原遺跡群があり、また浅間火山の谷状地形を挟んで西側に石神遺跡群（小諸市教育委員会1994・本書第6章所収）などが営まれている。それとは別に、遺跡南西端には駒形社が祀られており、これをもとに「塩野牧」の西南隅に当たる公算が大きいという考え方も強いし、また「東山道」との関連が指摘されてきた地でもある。

幅200m強、長さ350m前後をはかる遺跡で、比較的小規模なものといえる。標高は780～800mほどで、末端部ではやや急な斜面となっている。地目は畑地・水田が主体で、北端では一部宅地化されている。北側を除けば、沢田川支流の小河川が幾重にも認められる。

この遺跡は調査直前まで未周知であった。平成4年、三田原遺跡群調査途中で遺物が散布していることを聞き取り、実際に立ち寄ると、周辺が圃場整備されるなか、高速道用地内における黒色土は耕作土として必要で、その大半が既に削り取られており、縄文時代の遺物及び敷石住居跡の残骸（16号竪穴住居跡）が顔を出していた。急遽、7月20日から7月24の間、上信越自動車道用地内のみ手掘りによる試掘調査を行い、遺跡の範囲・規模・内容などを推察した。

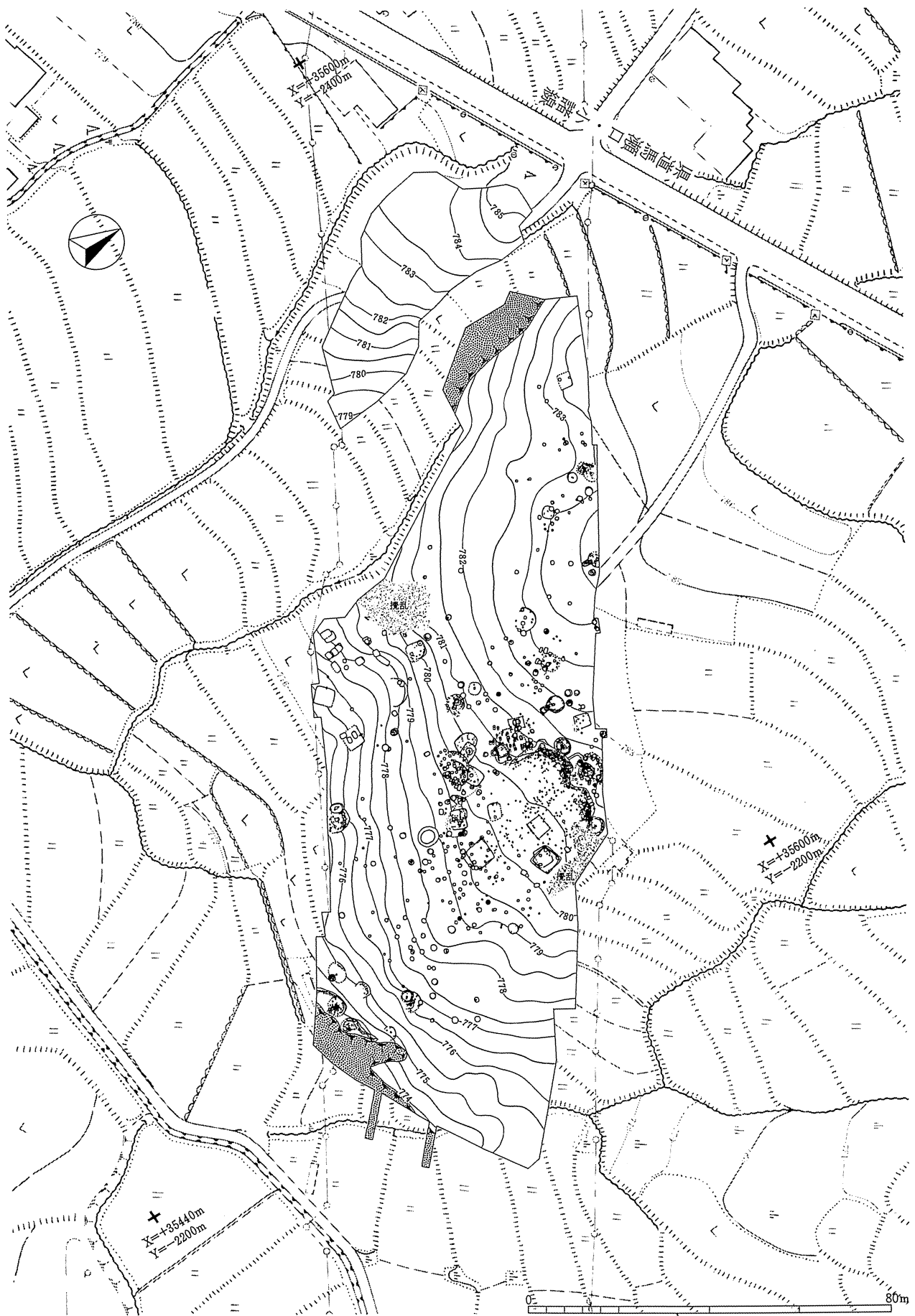
試掘調査の結果、台地部分から縄文時代後期前半を中心とした竪穴住居跡10棟、配石遺構（後に1号平地式住居跡）1基、土坑11基などが確認され、そのほか古墳時代後期及び平安時代の遺物も少量採集している。一部黒色土が残存しており、包含層や配石遺構が存在することが判明し、逆に谷部では土石流が流下し、遺跡は存在しえないと判断した。

第2節 調査の概要

上信越自動車道は、遺跡の南端を横断することとなり、12,100㎡（側道1,100㎡を含む）が調査の対象になった。駒形社の移転が遅れたため、それ以外の11,100㎡を平成4年度に、西端部の駒形社部分の1,000㎡を平成5年度に調査を行った。

平成4年8月3日から第1次調査を開始した。遺物包含層が残存する箇所は、表土剥ぎを重機で行い、以後手掘りで調査を行った。既に浅間第2軽石流上面まで削り取られた部分については、表面を重機で掘削し、以下一般的な方法で調査を進行させた。縄文時代前期初頭から後期前半の遺構が主体であったが、とりわけ後期前半の配石遺構を有する敷石住居跡群は他を圧倒させる成果であった。そのほか、古墳時代後期・古代末・中世の遺構も確認している。最終的には配石遺構の範囲確認・根石の確認・根石下部の遺構の存否などが調査に遅れを来していたが、12月18日、冬季厳寒中だが無事終了した。

平成5年4月5日、駒形社部分の調査に入ったが、遺構は存在しなかった。その日のうちに第2次調査は終了した。



第1図 遺構配置

調査日誌抄

平成4年度	10月19日	調査区中央に大規模な配石遺構が存在することが判明。
7月20日～24日	10月26日	配石遺構掘削終了。3棟の敷石住居跡の張出部とも捉えられる。崩壊著しく、やや不鮮明。
試掘調査実施。		
8月3日	11月6日	航空撮影実施。
調査開始。表土剥ぎ開始。	12月10日	配石遺構の根石を確認。張出部の一部であることが判明。
8月4日	12月18日	第1次調査終了。
中世の遺構群を検出。プレハブ設置。	平成5年度	
8月11日	3月25日	駒形社部分の表土剥ぎ作業開始。
作業員を投入。遺構検出作業に着手。	3月27日	表土剥ぎ作業終了。
8月12日	4月5日	作業員投入。遺構検出作業開始。遺構なし。第2次調査終了。
遺構掘削作業に着手。		
8月18日		
縄文時代以外に古墳時代後期の竪穴住居跡2棟を検出。		
8月19日		
表土剥ぎ作業終了。古代末の竪穴住居跡を検出。		
8月21日		
基準杭設定開始。		
9月21日		
一部表土剥ぎ作業開始。		
9月29日		
表土剥ぎ作業終了。		

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 前期初頭から中期初頭

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第3図)

径2.2m弱の円形プランを呈するものである。壁高は最大で19cmをはかる。中央に2個のピットが認められる。

出土遺物がないものの、5号竪穴住居跡や12号竪穴住居跡に形態が近似しており、前期前半頃に構築された公算が高い。

2号竪穴住居跡(第3図、P L38)

N-48°-Wを主軸とし、主軸長は2.92m、副軸長は2.68m、壁高は最大で17cmをはかる。長軸に沿った、やや面長の円形プランを呈している。

部分的に周溝が巡り、住居中央付近には深さ26cmのピットが認められる。壁付近には、規則的ではないが柱穴と思われるピットが配列されていた。

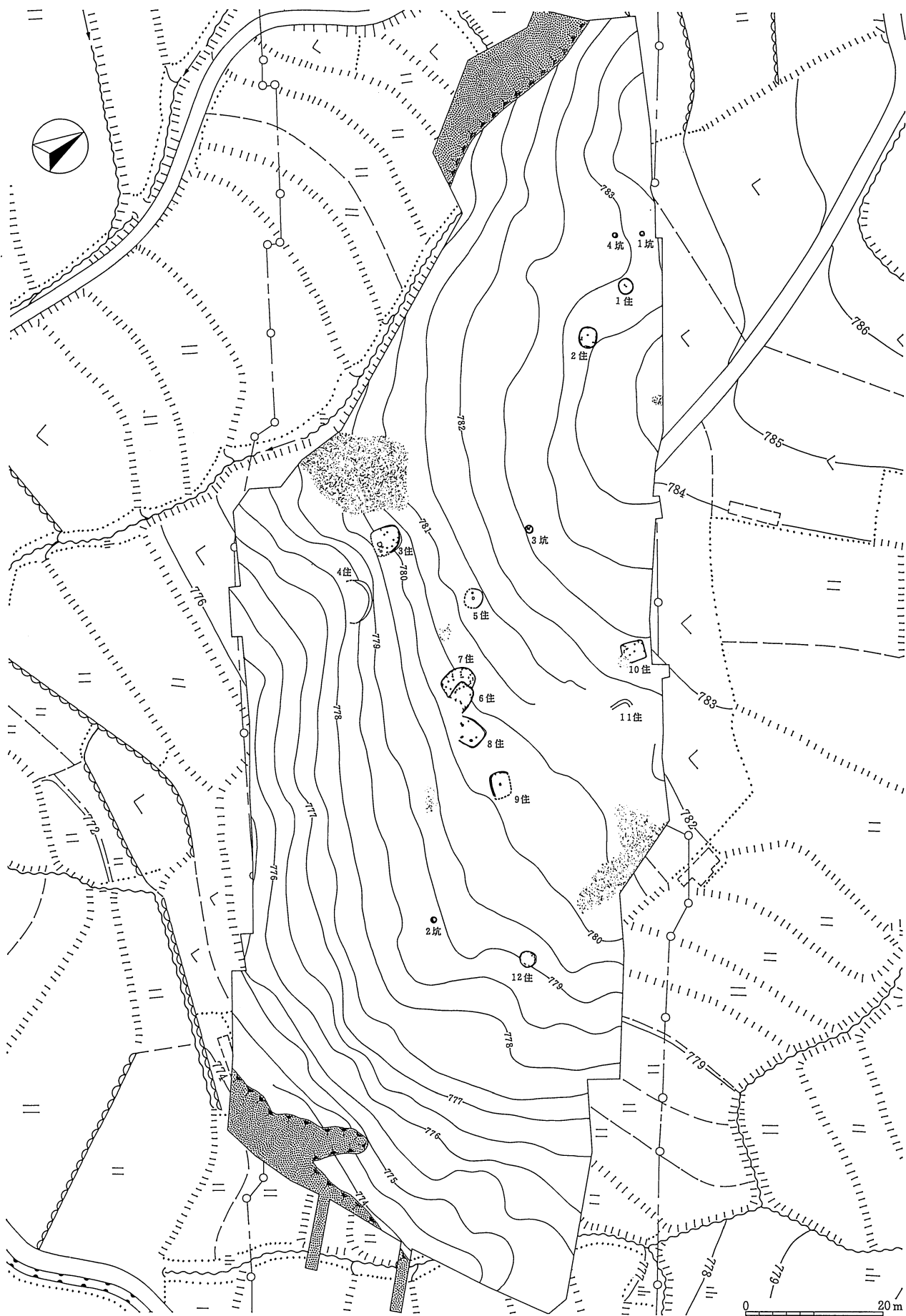
出土遺物は打製石斧1点のみである。ただし、形態的には5号竪穴住居跡や12号竪穴住居跡に類似しており、前期前半前後の産物である可能性が高い。

3号竪穴住居跡(第3図、P L53)

主軸はほぼ座標北を示し、主軸長はおよそ4.4m、副軸長は南端で3.92mをはかる。壁高は北側で最高64cmを計測するが、南斜面に位置するため、反面南側では欠落した状態にある。

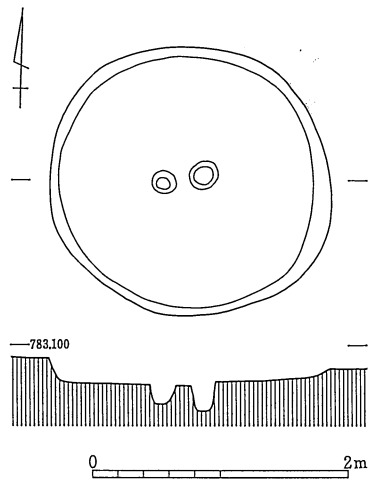
床面は斜面に沿って若干傾斜しており、北と南では最大23cmの差が認められた。周溝は南側だけに存在し、また柱穴などについても不規則な配置と見られがちだが、軽石の礫層中に床面を設けていたことから、十分に検出することは困難であった。本来、周溝や柱穴などについては、さらに数が増えるのではないかとと思われる。

出土遺物は微量だが、1が北壁付近の床面直上から出土した。前期末葉諸磯C式の時期である。

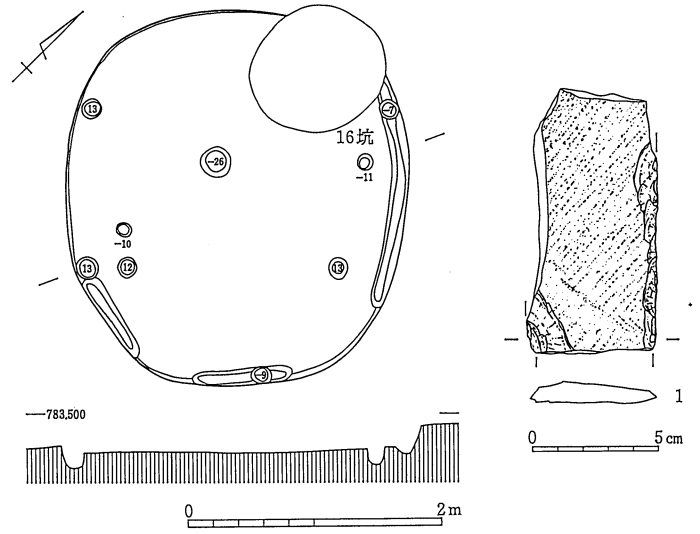


第2図 前期初頭から中期初頭の遺構配置

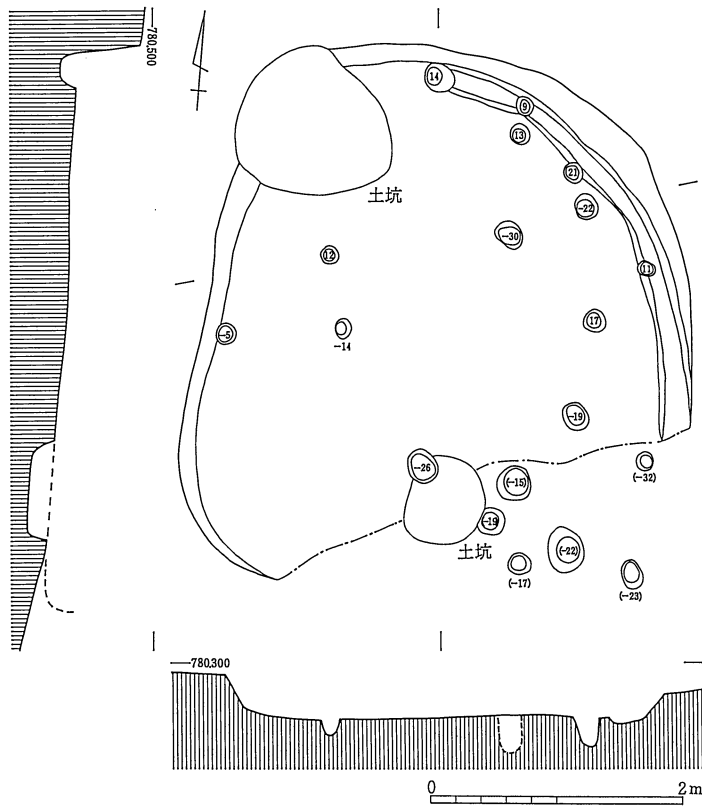
1号 豎穴住居跡



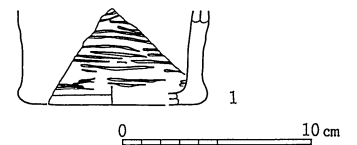
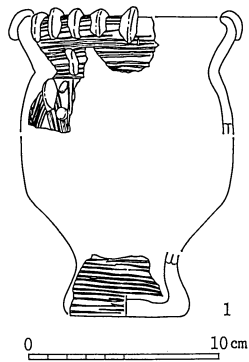
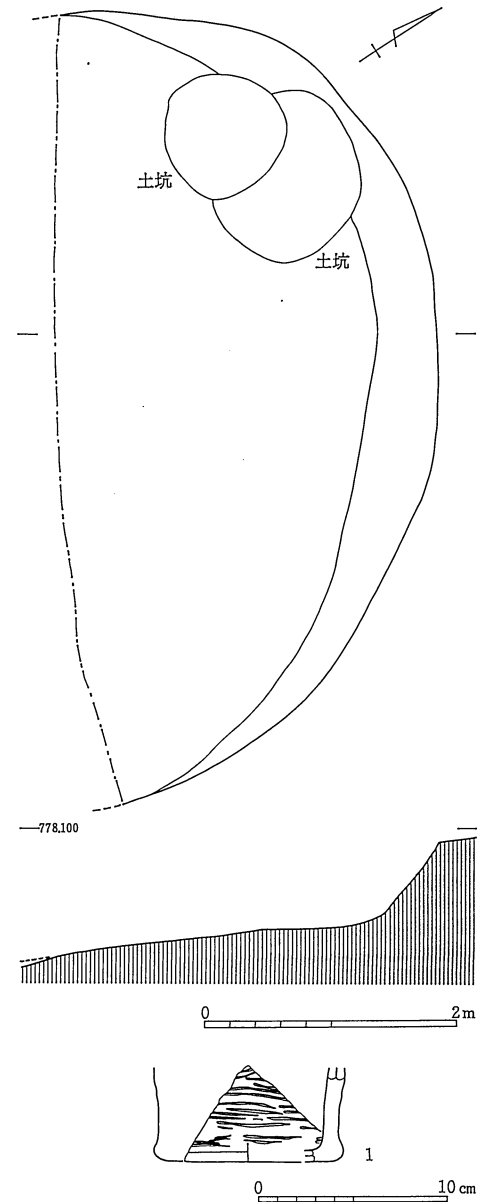
2号 豎穴住居跡



3号 豎穴住居跡

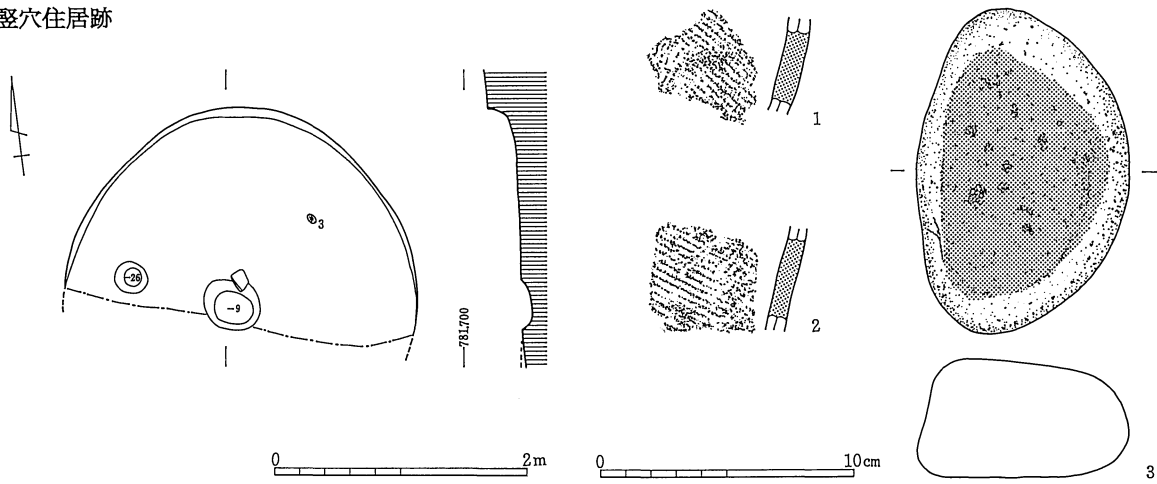


4号 豎穴住居跡

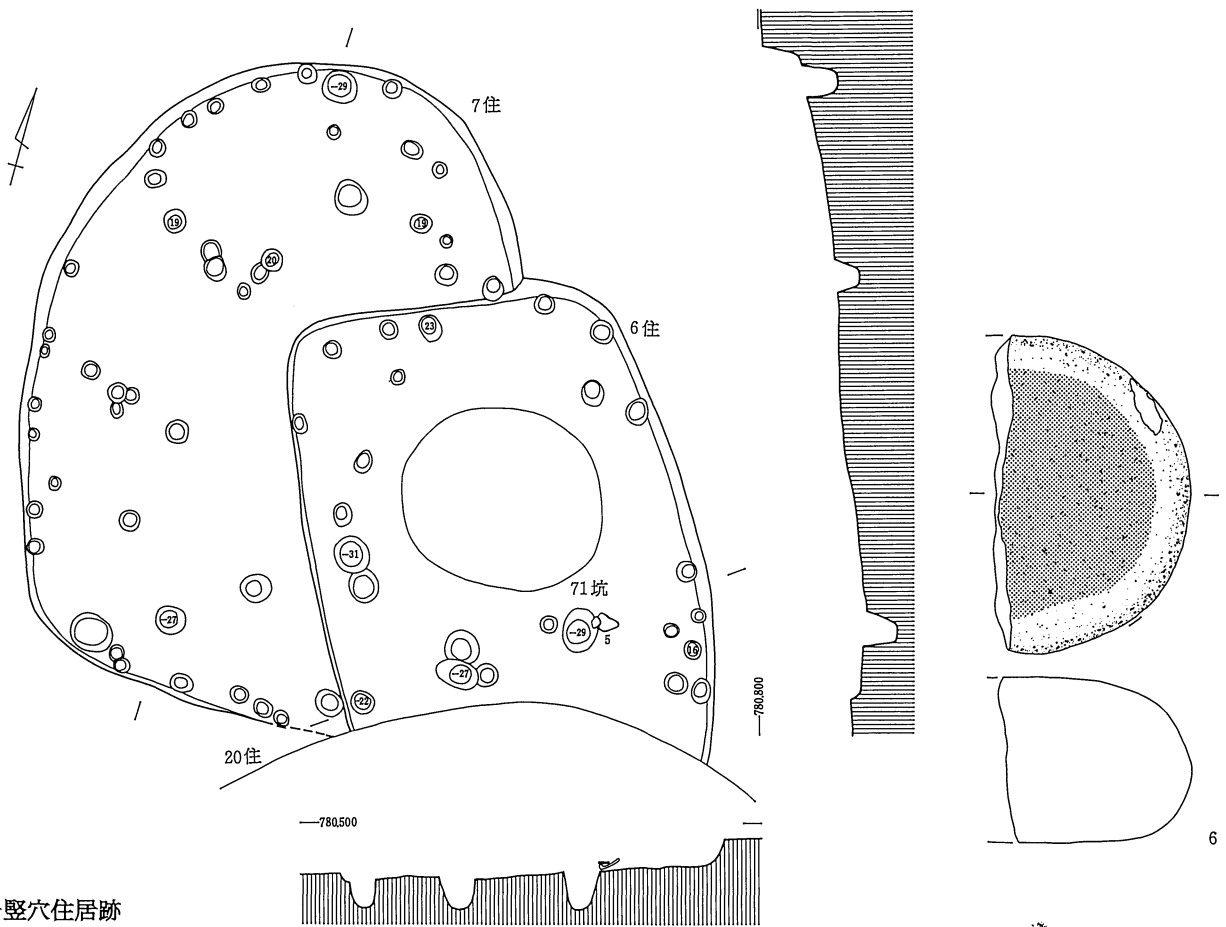


第3图 1~4号 豎穴住居跡

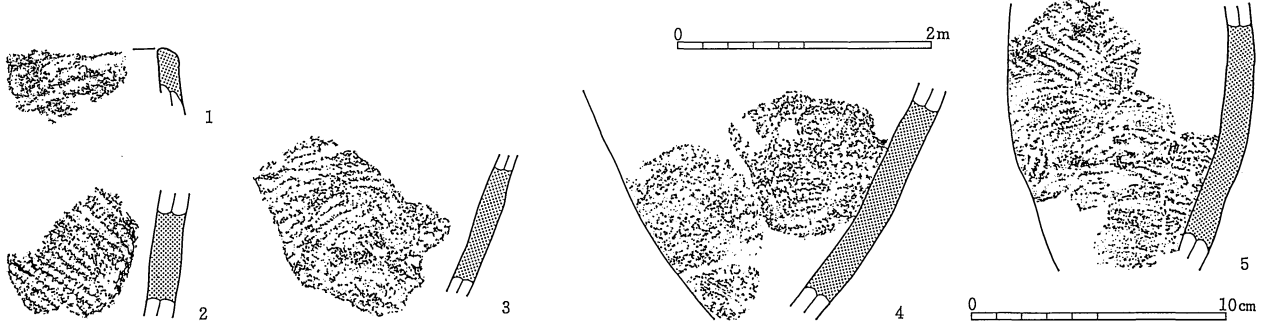
5号竪穴住居跡



6・7号竪穴住居跡

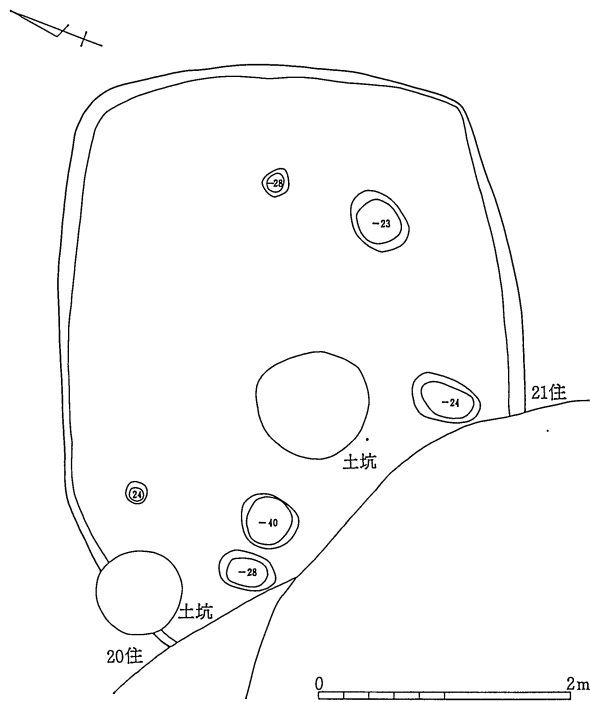


6号竪穴住居跡

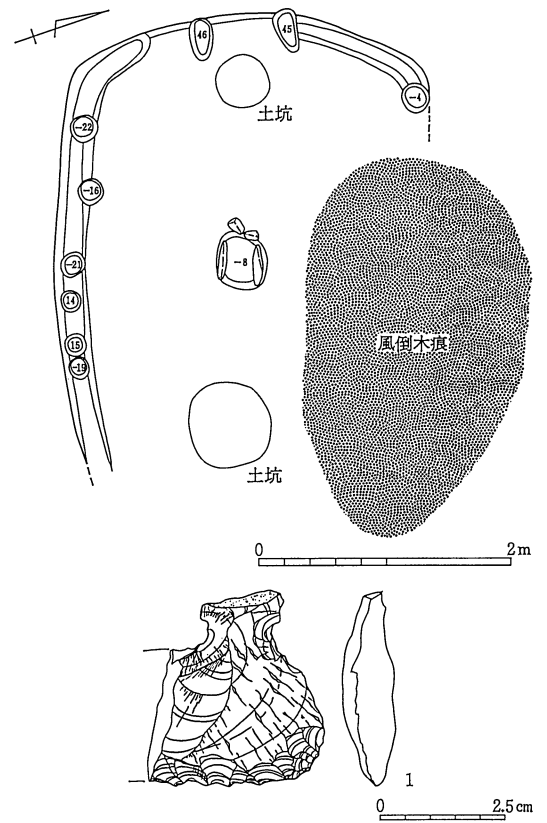


第4図 5～7号竪穴住居跡

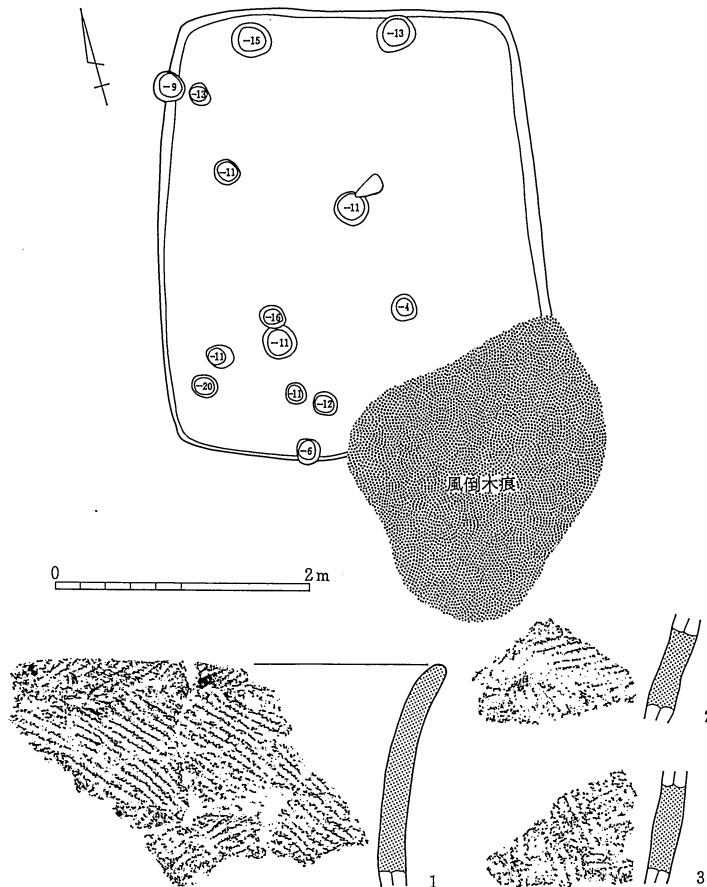
8号竖穴住居跡



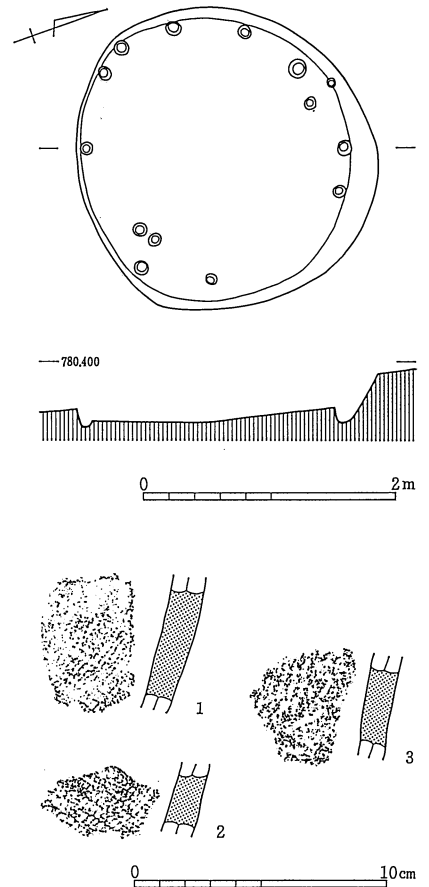
9号竖穴住居跡



10号竖穴住居跡



12号竖穴住居跡



第5图 8~10・12号竖穴住居跡

4号竪穴住居跡（第3図）

南斜面に位置し、南側のほとんどを失ってしまったので主軸方向は分からないのだが、東西軸が意外と長い為、等高線に直交した形で主軸を取っていた可能性が高く、そうするとN-62°-W前後となる可能性が高い。また、長軸長は現存長で6.26mをはかり、実際にはさらに数10cm延びるものと思われる。

付属施設は認められないが、3号竪穴住居跡同様、軽石の礫層中に床面を設けていることから検出は困難極まりなかった。

出土遺物は極めて微量であったが、北壁際の床面直上から前期末葉、1の諸磯C式土器が伴出している。

5号竪穴住居跡（第4図、PL38・60）

掘り込みが浅く、南半は欠落している。東西軸は約2.8mをはかり、円形プランを呈するものと思われる。壁高は最大で19cmを測定する。

住居中央には割石を伴うピットが存在するが、焼土などはなく地床炉とは考えられない。

1の磨石は床面から3cm浮いていた。ほかに1・2土器片を伴っていたが、前期前半の所産である。

6号竪穴住居跡（第4図）

7号竪穴住居跡・20号竪穴住居跡・71号土坑と切り合い、20号竪穴住居跡・71号土坑より古く、7号竪穴住居跡とは新旧関係が不明である。

主軸はN-24°-W、副軸長は最大で3.04m、壁高は最高でも20cm前後をはかる。主軸長については南側を20号竪穴住居跡に切られるので不明だが、概ね隅丸長方形のプランが想定される。

床面は非常に凹凸が目立ち、その中でもピット状のものを図化しておいた。深さを記載したものがとりわけ深く、それ以外は10cm前後の深さでしかない。

1～5の土器は、前期初頭、中道式の一群である。

7号竪穴住居跡（第4図）

6号竪穴住居跡と重複するものの、前後関係は不明である。

N-13°-Wを主軸とし、主軸長は5.18m、副軸長は北辺で3.64mをはかる。不定形な隅丸長方形のプランを呈する。また壁高は最大で30cmをはかる。

床は、6号竪穴住居跡同様、凹凸が目立つものであった。あわせて斜面に沿って床面も傾いており、最大で40cm前後の差が認められる不安定な構造であった。ピット状のものをすべて図化したが、レベルを記載していないものについては深さ10cmと浅いものである。レベルを記入したものについては、やや掘り込みは浅いものの、もしかすると柱穴の可能性もある。また、壁際には小ピットが群在するらしい。

遺物が出土しておらず、後期前半以前としかいいようがないのだが、住居形態から前期を中心とした時期の産物ではないかと考えている。

8号竪穴住居跡（第5図）

切り合い関係の中ではもっとも古く、19・20号竪穴住居跡、及びふたつの土坑に切られている。また、住居内にもいくつかのピットが存在するが、これが本跡に帰属するものかどうか定かではない。炉を確認していないので軸方向が今一つはっきりしないが、等高線と平行して住居を構築していることは確かで、ならば一応東側を入り口としてE-22°-Sという主軸方向となり、また、副軸長は最大で3.70m、壁高

は最高で27cmをはかる。主軸長は明確ではないものの、4.6m前後が見込まれ、隅丸長方形の平面プランが想定できる。

遺物を確認していないが、住居構造から前期を主体とした所産と思われる。

9号竪穴住居跡（第5図、P L60）

住居内をふたつの土坑に切られ、また北側を風倒木痕によって壊されている。さらに、掘り込みが浅いため、住居の東側はすでに削られてしまった。

一応、入り口を東側と考えて、主軸方向をN-69°-W前後と想定した。ただし、西側の妻方向に入り口施設とも取れる対となるピットが存在するので、まったく正反対の方向となるかもしれない。主軸長・副軸長とも正確な数値は出ないものの、前者は3.8m、後者は2.9m以上あることは間違いなく、等高線に平行した隅丸長方形の住居であったものと思われる。壁高は最高で29cmをはかる。

南北には周溝が巡り、内部に深さ10~20cm程度のピットがみられる。炉は住居中央付近に位置しており、東西両縁に安山岩系の割石を有する石囲炉であった。炉の掘方の深さはわずか数cm程度だが、炉縁石が床面から突出しているため、炉縁石上端から炉底までは10cm強の深度が存在する。また、炉の西側にも安山岩系の円礫が置かれており、これも本来何らかの役割を果たしていたものと思われる。

出土遺物は1の石匙の破片のみである。時期の細かな限定は無理だが、住居形態から前期を中心とした産物と思われる。

10号竪穴住居跡（第5図、P L38）

主軸はN-14°-Eを成し、主軸長は3.50m、副軸長は中央で3.00mをは計測する。等高線に直交した方向で構築されたもので、南側の妻側の方がより長い隅丸長方形プランを呈している。壁高は最高で14cmをはかる。

床面は全体的に小さな凹凸が目立ち、また住居中央に向かって10cm程度傾斜していた。ピットは多数検出されたが、規則的な柱穴の配置は認められない。住居中央には、ピットの傍らから、床面直上、安山岩系の割石が出土しており、炉との関連を考えてみたが、ピットから焼土は検出できなかった。

出土遺物は、3点の土器破片を提示したが、いずれも前期中葉の所産である。

11号竪穴住居跡

13号竪穴住居跡および環状集落北側の石列部分によって大半を切られており、北西コーナーが残存しているに過ぎない。

主軸は概ね座標北を示している。壁高は最高で33cmをはかる。付属施設はなく、出土遺物もなかった。

覆土中に遺物が認められないことから、少なくとも中期末葉以降の所産とは考え難く、しかも判明したワンコーナーがきれいな隅丸となっていることから、前期を中心とした産物ではないかと判断した。

12号竪穴住居跡（第5図、P L38）

径2.40m前後の円形プランを呈する。壁高は最高で23cmをはかる。

壁下に深さ6~14cmの小ピットが並ぶ。

遺物はすべて土器破片で、前期初頭のものである。1・2は同一個体である。

(2) 土坑 (第6図、P L53)

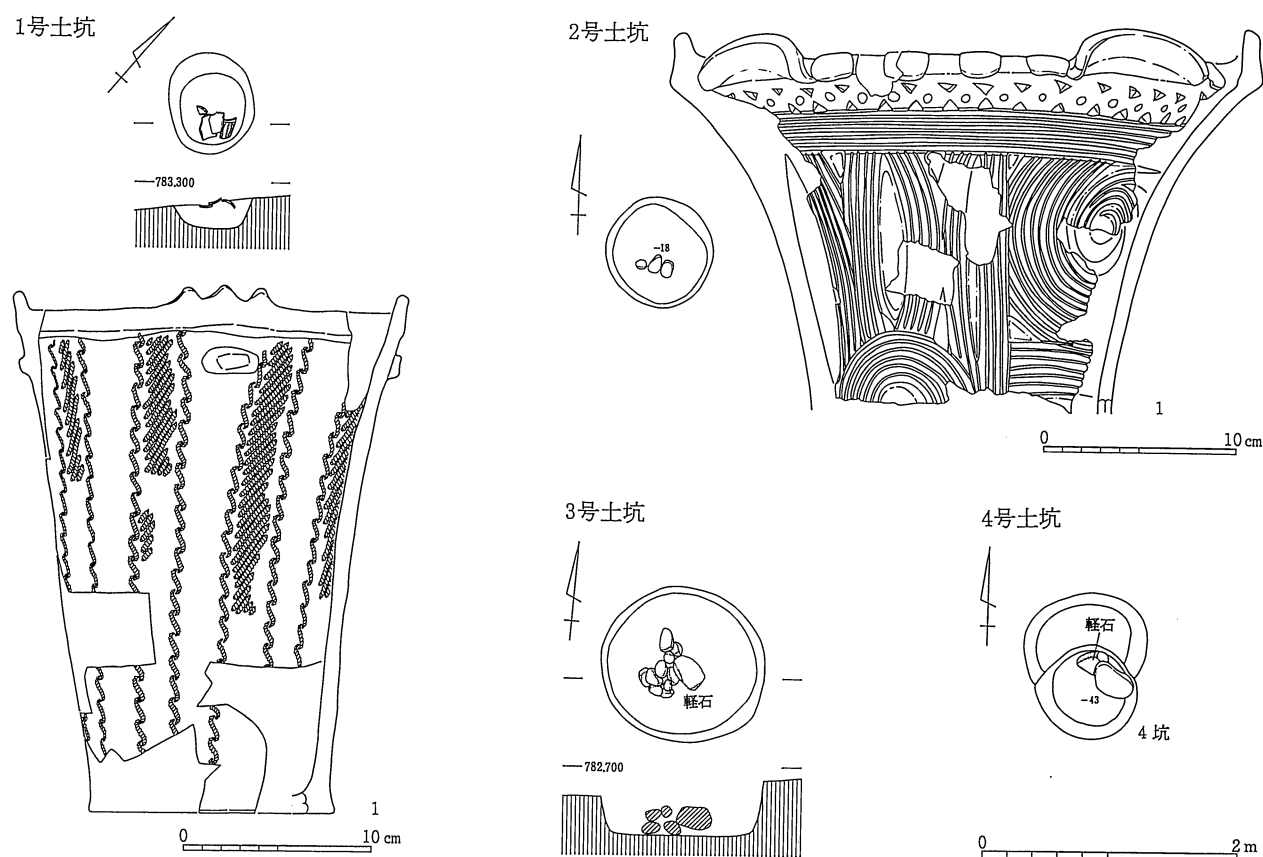
土坑4基を確認した。もちろん、これ以外にも存在するはずだが、遺物がなければ如何ともしがたい。いずれにしても、極めて微量な存在であつたらしい。

1号土坑は、覆土上層から中期初頭の五領ヶ台II式土器が出土したもので、径0.70~0.78mの円形プラン、底面までの深さは22cmである。

2号土坑は前期最終末の晴ヶ峯式を伴い、径0.82m前後の円形プランを呈し、底面までの深さは18cmである。底面には安山岩系の円礫が並んでいた。

3号土坑は径1.30m前後の円形で、深さは最高で45cmをはかる。内部には軽石による集石が行われていた。覆土中から、中期初頭、五領ヶ台II式併行の土器破片が出土している。

4号土坑は径0.72前後の円形プランを呈し、深さは43cmをはかる。北側を別の土坑によって切られている。北壁に沿って軽石と安山岩系の円礫が認められるが、ともに20cm前後浮いていた。覆土中から、前期初頭の土器破片が出土している。



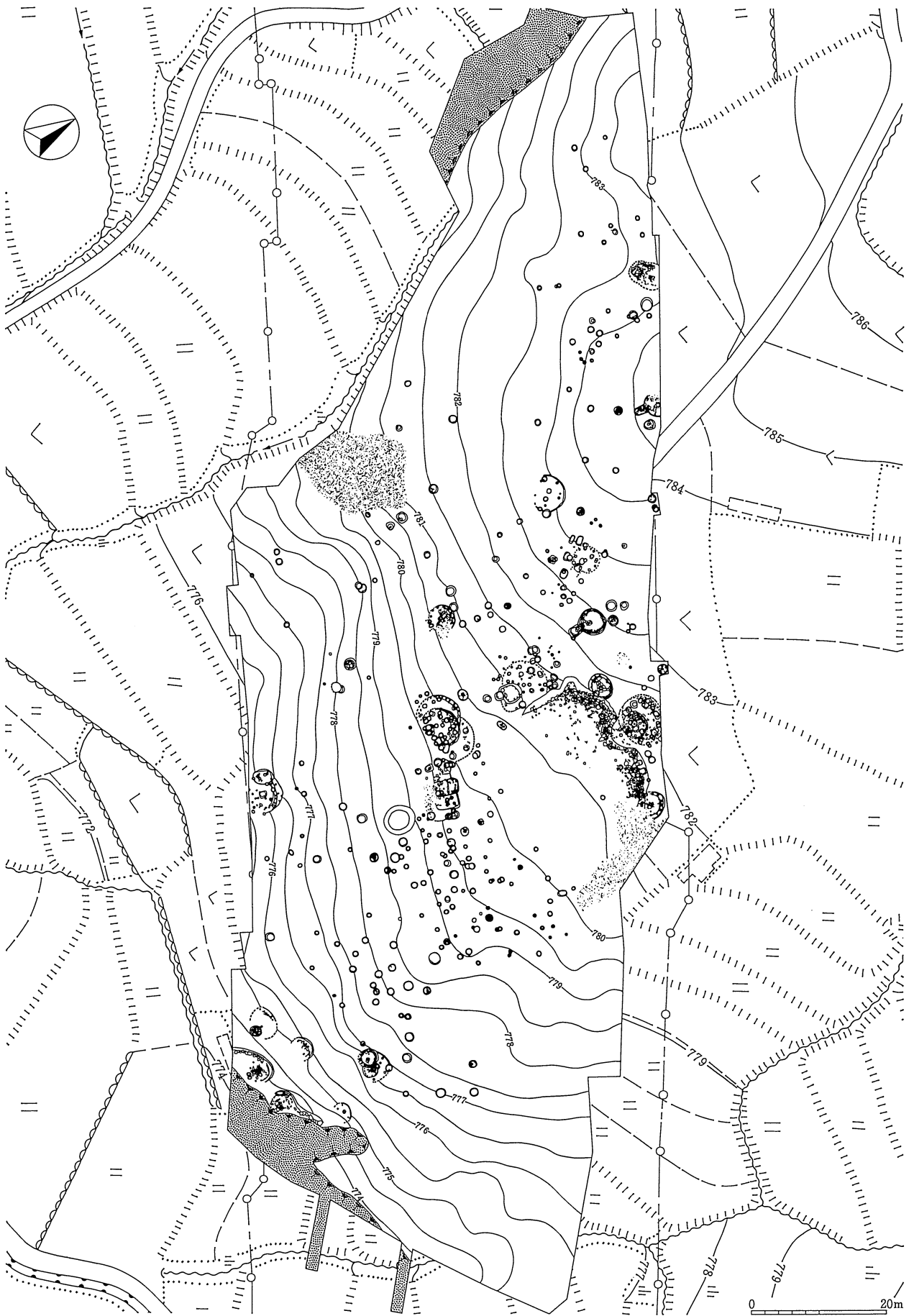
第6図 土坑

2 中期後葉から後期中葉

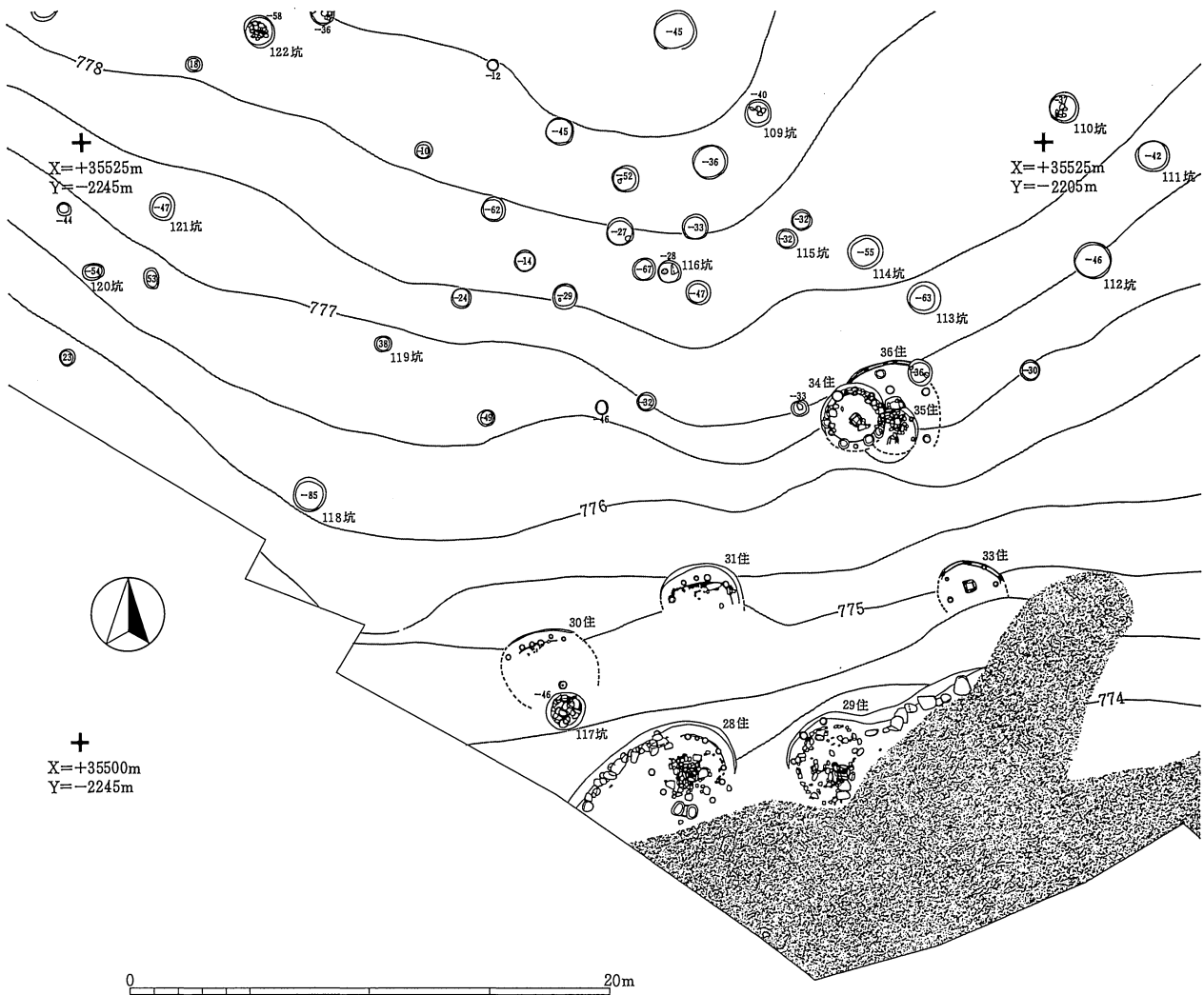
(1) 後期前半の環状集落 (P L38~41)

調査区北東側に位置する13~27号竪穴住居跡を中心にした場所である。

堀之内1式期に集落の初源形態が認められるものの、確実に該期まで遡りえるのは14・18・20~22号竪穴住居跡だけで、環状集落を営んでいたのかも危ぶまれる。ところが、堀之内2式期となると、その姿が明瞭となり、かつ土坑群なども明確な分布状況を示している。土坑に関していえば、環状集落内に



第7図 中期後葉から後期中葉の遺構配置



第8図 中期後葉から後期中葉の遺構配置（部分1）

構築されるものがほとんどなく、実際には堀之内1式期のものについてもそれは該当する。したがって、堀之内1式期に既に環状集落が出現していた公算が大きい。

堀之内1式期の竪穴住居跡をみると、まず堀之内2式期の環状集落の中心的存在である13号竪穴住居跡の前身段階、14号竪穴住居跡、西側中央には17号竪穴住居跡の前身か、火処不明な18号竪穴住居跡、南西隅には同一地点で堀之内1式から2式まで建て替えを行っているうちの20～22号竪穴住居跡が存在する。これと南側に分布する土坑を合わせれば、この時点でおよそ径25m程の円形サークルができていたことになる。

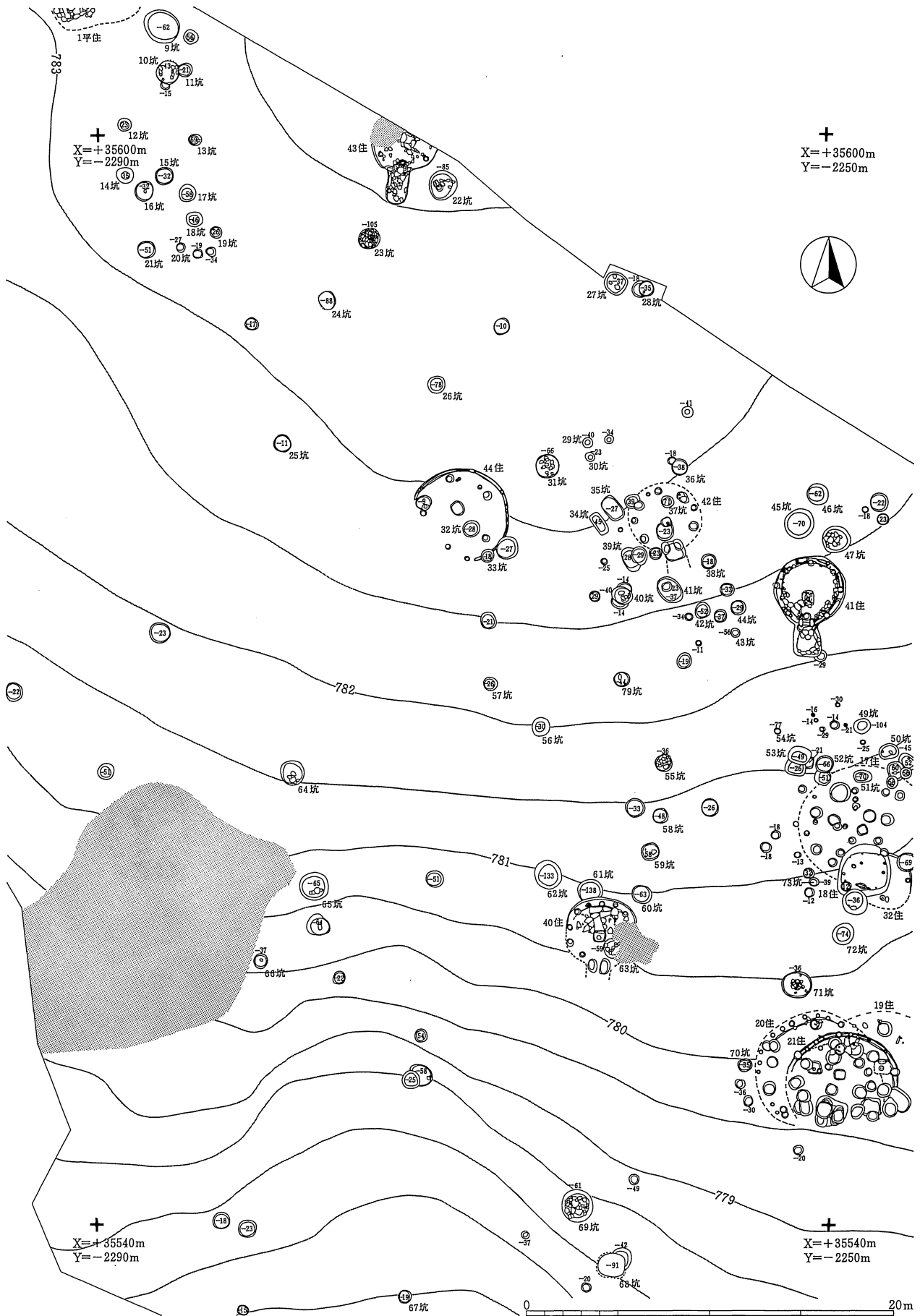
堀之内2式期では、14号竪穴住居跡が巨大化して13号竪穴住居跡となり、これを中核としてより環状配列を強固に構築していくようすがうかがえる。

13号竪穴住居跡の両翼には、サークルの中心方向に主軸を設定したかたちで住居を設け、それぞれの出入口部に斜面を大きく削りだして張出部を設定し、さらにカット面に石積みを施すという大がかりな作業を行っている。13号竪穴住居跡の南側は、弧状に広がる石列の場となり、またそれから南方は径約25mの円形かつ平坦な空間が広がる場所となった。

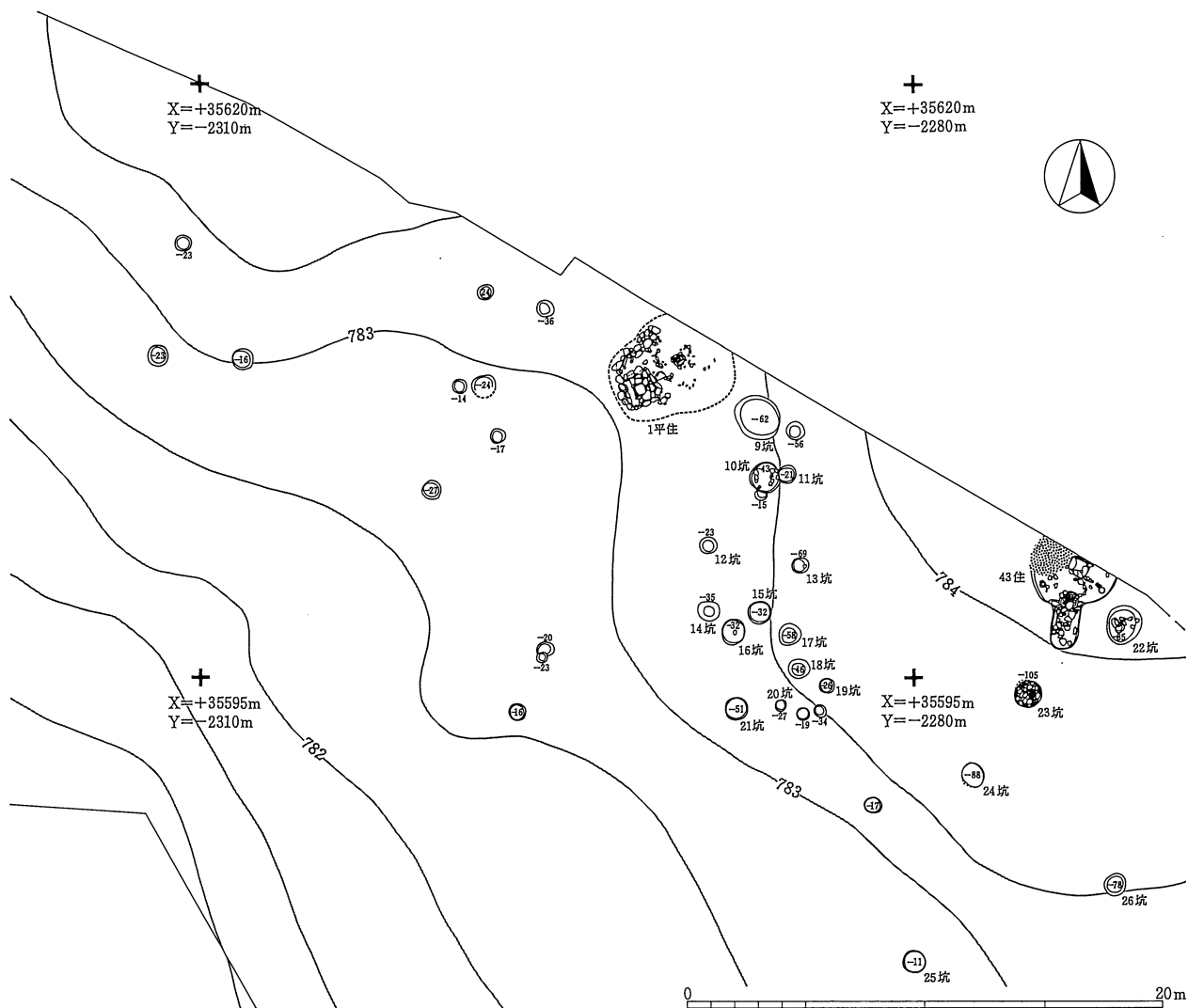
傾斜地のカット面は、比較的急な角度で掘り込まれていたが、13号竪穴住居跡南側になると急に緩斜面に近い状態となる。おそらく、ここではさらに北側から掘削を開始したのではないかと考えられ、実際に地山層上面にも礫が認められる。あわせて、崩落した石積み自体も無いに等しく（第12図）、一部直立し



第9図 中期後葉から後期中葉の遺構配置 (部分2)



第10図 中期後葉から後期中葉の遺構配置 (部分3)



第11図 中期後葉から後期中葉の遺構配置 (部分4)

ていていたものが倒壊した可能性があるものの、ほぼ原位置に近い状態ではないかと考えており、おそらく一段の石列を想定するのが妥当だろう。この場所を意図的につくられた13号竖穴住居跡の出入口部と考えており、途中、礫が散在することから石列の存在も想定可能である。

13号竖穴住居跡の出入口部として想定した箇所には、第13図にみられるようなP₁・P₂あるいはP₃・P₄のように、ほぼ線対称的に小土坑が認められ、何らかの構造物が存在した可能性が高い。取り分けP₁・P₂については、削平された場所でありながらもその深さは極端で、何物か立柱していたのは間違いないだろう。さらにその両奥には、石棺・土坑墓群が形成されており、おそらくカット後に掘り込まれたものと考えているが、一部堀之内1式土器を伴うものも存在し、若干の問題が生じている。

径約25mの円形かつ平坦な空間については、北半分を手掘りによって調査を進めたが、まったくもって「無」の空間であった。焼土跡や炭化物が散乱するような箇所は一切なく、該期の遺物すらほとんど認められなかった。基本的には土坑なども見当たらず、なぜこのような広場をつくったのか、まったくの謎に つつまれている。

円弧の西側中央には17号竖穴住居跡、南西隅には最後の建て替えとなる19号竖穴住居跡が営まれ、またその東側には23～27号竖穴住居跡と命名したが、本来1棟しか存在しなかったのか、長方形プランで火処や柱穴も不明な小竖穴が、建て替えを繰り返しながら認められる。さらに、サークルの南端には円形土坑

を多数構築し、またおそらく環状集落の最終段階となると南西隅に径約4.8m、深さ1.7mにも及ぶ大形土坑（7号土坑）が掘り込まれることとなったのである。

堀之内2式期の最終段階で経営を止めてしまうが、堀之内1式期から始まる14号竪穴住居跡や22号竪穴住居跡は同一地点で建て替えを繰り返すし、また15号竪穴住居跡や18号竪穴住居跡もその可能性が考えられる。堀之内2式期では、20号竪穴住居跡が一度、23～27号竪穴住居跡では4度もの建て替えを行うこととなり、一度場所を設定してしまえば、その配列を代々踏襲している姿が読み取れた。

なぜ長期間踏襲するのかという疑問が湧いてくるが、14号竪穴住居跡から13号竪穴住居跡の進化、及びその中での建て替え作業については、これが集落の中核的存在であるし、少なくとも堀之内2式期には周囲に石列を伴うためその場から離れるわけにはいくまい。22号竪穴住居跡から19号竪穴住居跡に進む過程は、これが大形の敷石住居であるから、おそらく三田原遺跡群4号竪穴住居跡のようなよほど大きな張出部を有していたのではないかと思われ、これもたやすく身動きが取れなかったのではなかろうか。これに伴うのか、23～27号竪穴住居跡という小竪穴もまた、同じで地点で繰り返し建て替えを行ったというひとつの想定が思いつくが、いかがであろうか。

① 石列（第13～16図、P L60～65）

15号竪穴住居跡及び16号竪穴住居跡の張出部に認められる石積みを基本的に指すが、ともに13号竪穴住居跡の張出部も意識したものであり、一部にはそれ以外の配石も認められる。また、双方に特徴的な遺物も認められるため、ここでは「石列」として一括して報告したい。

15・16号竪穴住居跡の出入口部を最大として、地山面から70～80cmほどカットして張出状の施設を設けている。黒ボク土が残存していれば、少なく見積もっても1m前後は掘り込まれていたと思われる。以後、斜面下方もしくは13号竪穴住居跡南側に向かうにつれ、徐々に高低差を縮めていくが、16号竪穴住居跡の東半は、圃場整備事業に伴う土取り作業によって攪乱を受けている。

石列は攪乱によって破壊された部分を除いては比較的遺存状況は良かったが、13号竪穴住居跡南東側の一部、第13図でいうところのP₂からP₄周辺はあまりに礫が少なく、どの時期で行われたのか分からないが一部抜き取られたのではないかと思われる。

これら石列は試掘調査で確認できなかったものの、表土剥ぎの際、上端が顔を出した時点で、以後手掘り作業に変更したのでほぼ完全な状態で検出したものと確信している。ほとんどのものがサークルの内側に崩落しているが、根石のみは残存し、一部横積みしている部分も認められた（P L43）。なお、16号竪穴住居跡西側部分の張出部については、現場段階では13号竪穴住居跡出入口部まで来るものと想定していたが、今考えてみれば、1号石棺南側に礫群が並び、また5号土坑との間にそれは認められない。やや手前、しかも内側で終焉していた公算が大きい。

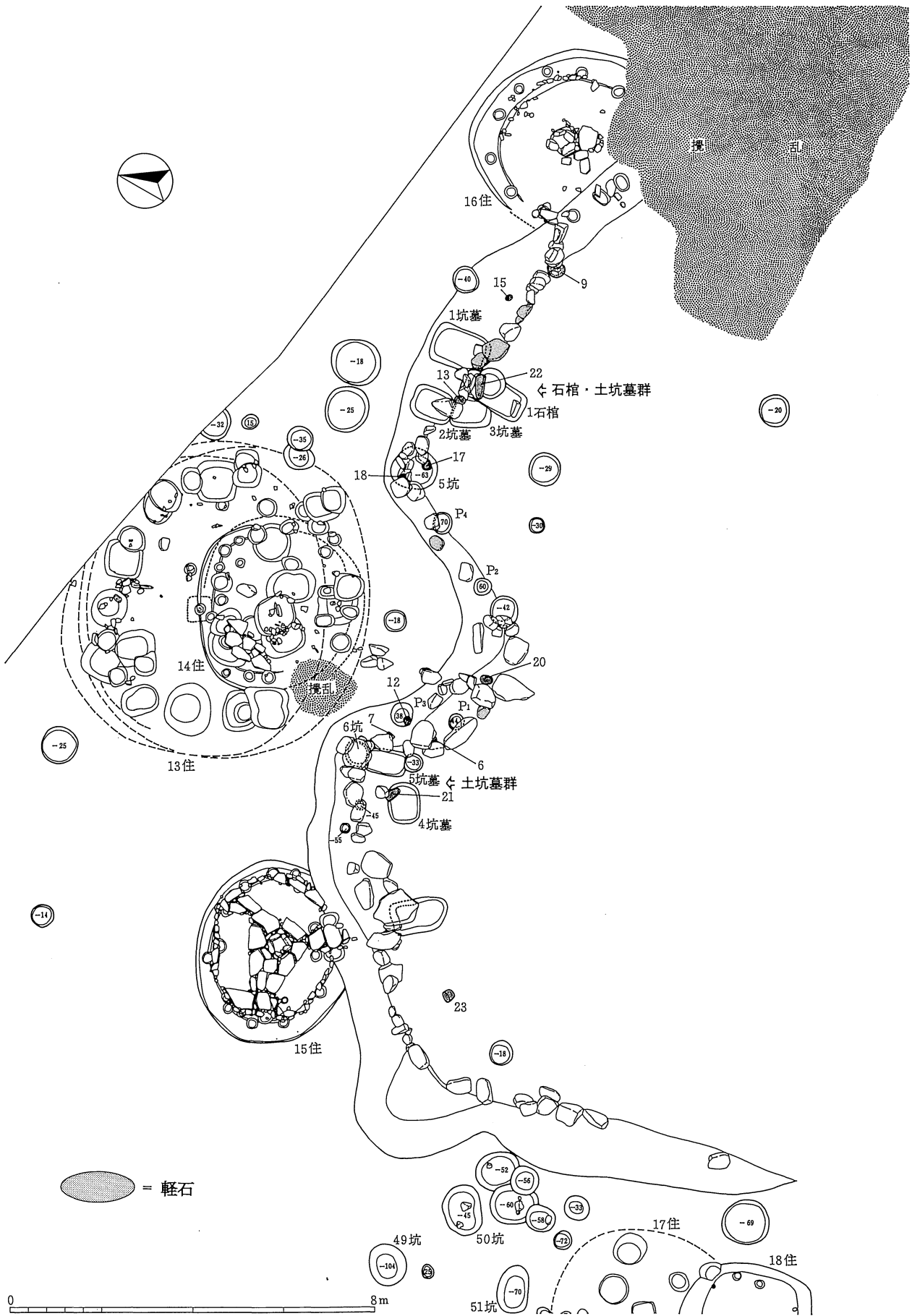
積み方は横積みを基本とする。裏込め石は当然の如く見出せない。安山岩系の円礫を主体的に用い、根石を過ぎると、礫も小振りとなり軽石も多用する。復元していないが、15・16号竪穴住居跡の出入口部では、最低でも7・8段程度の横積みが行われたと思われる。すべて石列のみで、底面に礫を敷いたようすは、出土状況からみてまずない。

15号竪穴住居跡南側では、カット面が大きく広がり緩やかな斜面状態となる。根石自体もその中央だけ認められないから、ここをサークルからの出入口として利用した可能性もあるのではなかろうか。

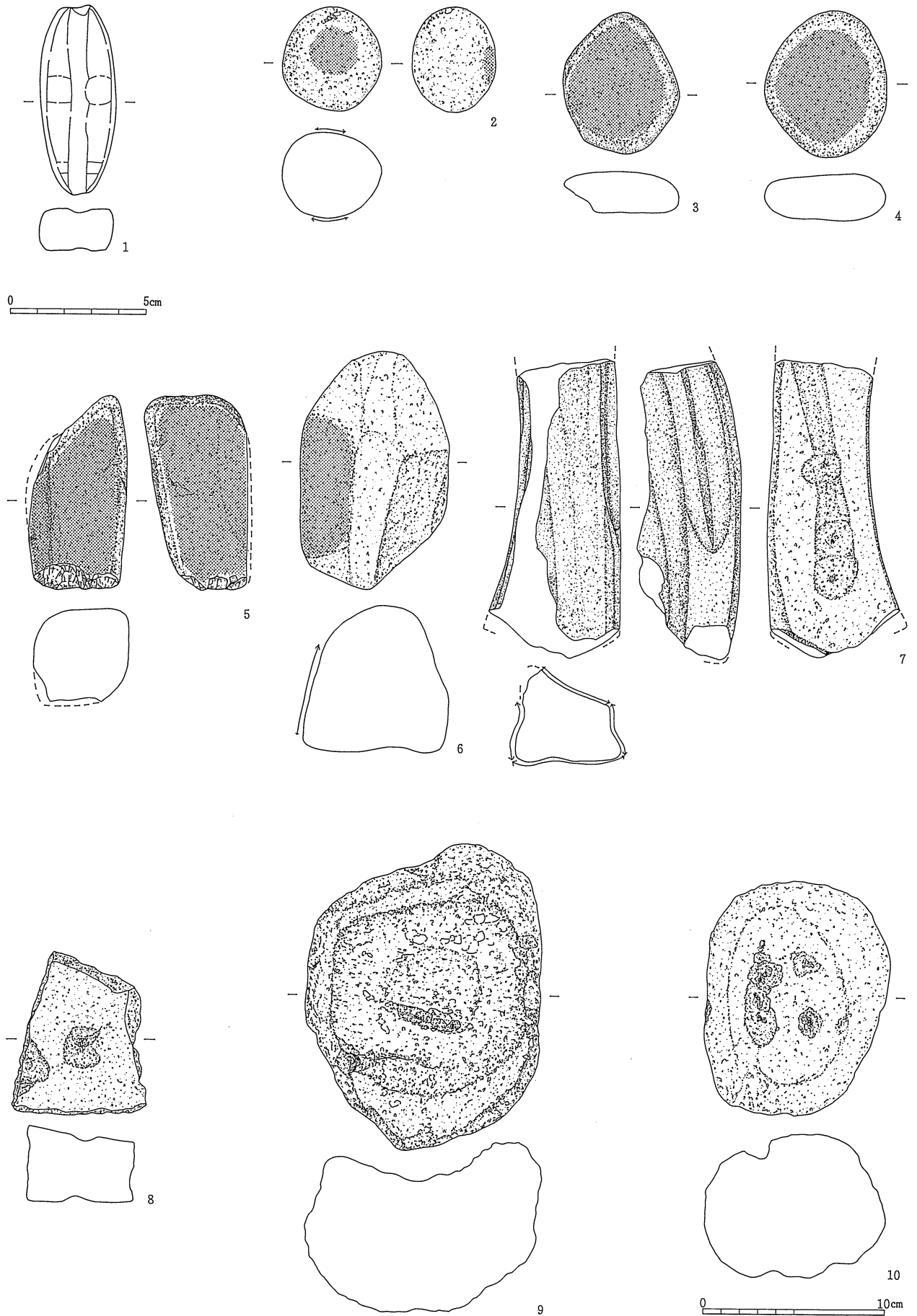
13号竪穴住居跡南方については、カット面上段に礫を有することから、通路状の石列が存在した可能性がある。西側に限られるが、その最南端には飛び切り大きな礫が位置している。ややもすれば、これが直立していたものではなかろうかと考える人も少なくなかろう。また、その東隣には偏平な礫を敷設して



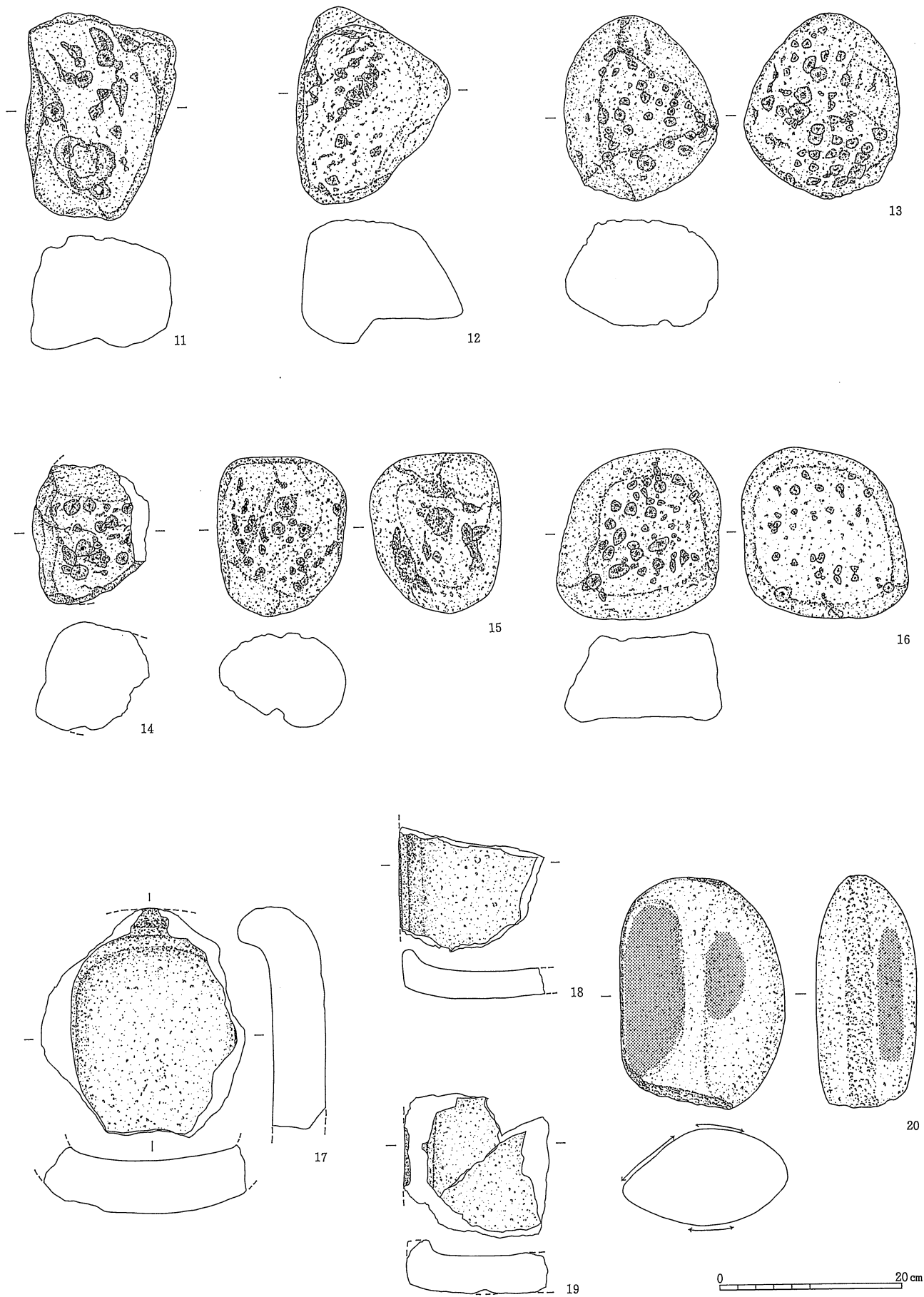
第12図 後期前半の環状集落北端部の石列崩落状態



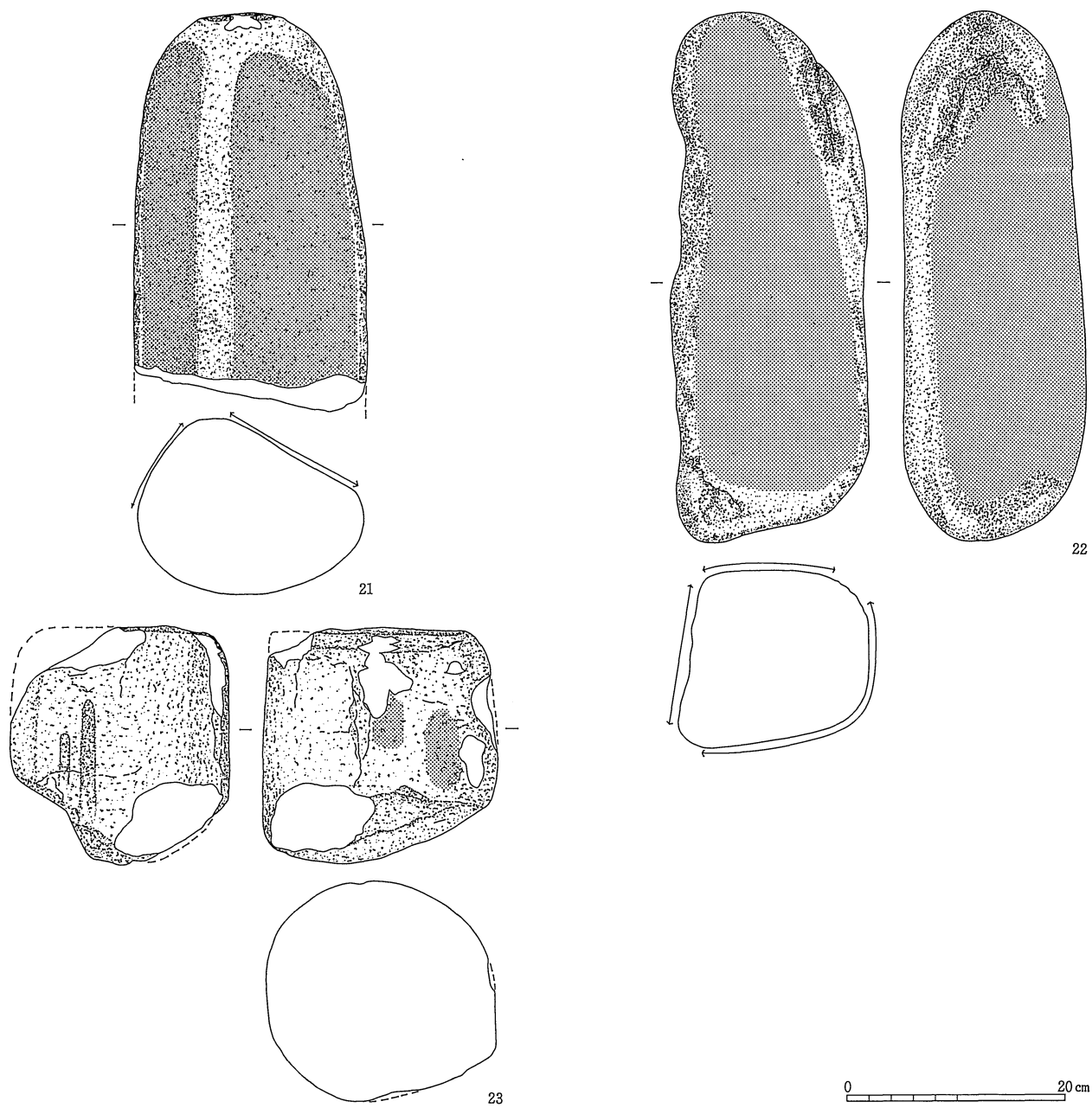
第13図 後期前半の環状集落北端部の石列根石出土状態



第14図 環状集落北端部出土遺物(1)



第15図 環状集落北端部出土遺物(2)



第16図 環状集落北端部出土遺物(3)

おり、これも出入口部として役割を果していたのではなかろうか。

石列とは別に、5号土坑には礫群でパックしたかのような状態であったし、13号竪穴住居跡と線対称的に位置する6号土坑にも巨大な円礫が蓋状に敷いてあった。前者は単独のものであるが、後者については石列との相互関連がありそうで、どの時点でこれが執り行われたのか興味深い。

遺物は石器及び石製品が出土しており、土器はまったく認められない。石列内に10～16の多孔石を利用している点は何らかの意図があつてのことだろう。また、直立していたとも想定される13号竪穴住居跡最南端の大形礫の北側に20の丸石が出土したことも出入口部として意味があるものと思われる。21・22の石棒については、まさしく線対称的な配置であり、その下部には石棺もしくは土坑墓が存在している。なお、17・18の石皿は、5号土坑をパックした礫群の一部で、ほかとは性格が異なる可能性がある。また、23の石棒は底面から浮いているので、単に石積みの一部として利用されたのかもしれない。

② 竪穴住居跡

13号竪穴住居跡（第17～19図、P L 42・53・60～65）

環状集落の中核的な存在であり、14号竪穴住居跡を拡張したものが本跡と思われる。敷石住居であり、張出部は15・16号竪穴住居跡の張出部がそれとなる。

掘り込みが浅く、床面は軽石流堆積物上面まで達していない。黒ボク土中から漠然と敷石（もしくは縁石）の残骸及び埋甕炉が認められ、本来存在すべく壁体については残念ながら確認していない。柱穴については軽石流堆積物上面まで下げて判断したものである。

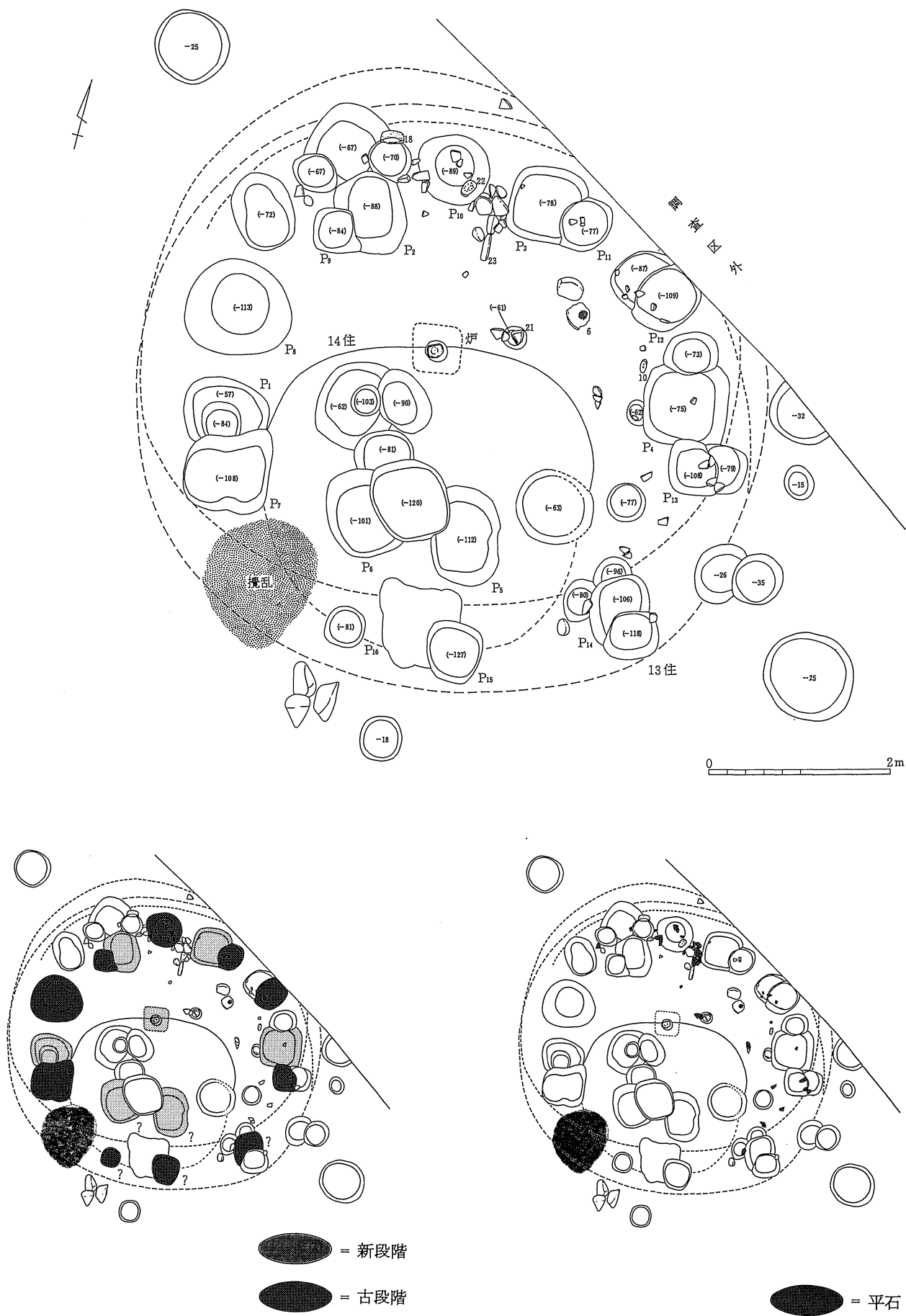
壁柱穴が切り合いながら連なっており、建て替えを繰り返したものと思われるが、およそその副軸幅は一定で、6.5m前後の規模を考えるのが妥当だろう。主体部長及び主軸は明確に判断できないものの、少なくとも主軸は、サークルの中心方向に沿っていたことは確かである。

大形住居であるが、柱穴についてもすこぶる巨大であり、しかも深い（柱穴の深度は敷石のレベルを概ね0として算出した）。重複関係をみれば、やや浅めの方形プランのものが新しいことは確実で、それと炉をセットと見做し、また該期においては炉が住居中央奥に行かないことは自明であり、したがって最低でもP₁～P₄を支柱穴、P₅・P₆を対ピットと認定し、主体部が横に長い楕円形プランのものをもっとも新しい住居として想定した。それ以外には、円形プランを基本とした大小の柱穴が存在するが、これが順々に展開している部分も認められ、大ピットと小ピットが連続する壁柱穴を想定し、これを古段階の住居とした。ただし、明確な対ピットは確認しておらず、主体部長は不明である。このような想定のもとに住居の新旧関係を見出したものの、それでもまだどこにも対応しない柱穴も存在し、これ以外にも建て替えを行った可能性が考えられる。

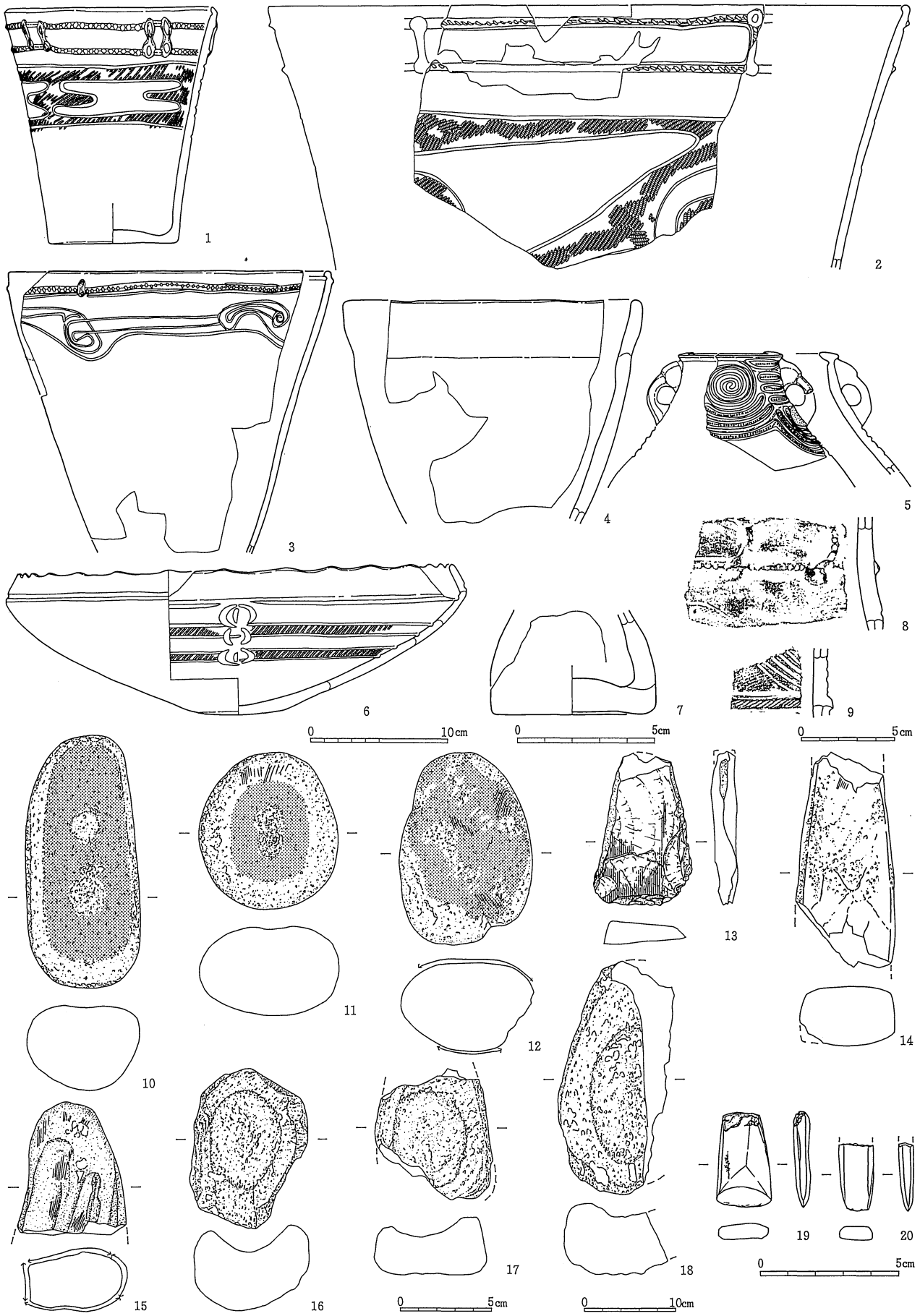
敷石住居の礫群については原位置を保つものはないが、縁辺部にのみ認められ、平石（鉄平石）を面的に敷いたようすはないので、縁石が崩壊したのではないかと考えている。炉は土器の底部を埋設した埋甕炉であり、住居中央やや西側に位置している。遺存状態が悪く実測不可能であったが、文様は認められなかった。

遺物は、6・18が30cm、10が26cm、21が10cm、22・23が14cmほど床面から浮いた覆土中から出土しており、また11がP₂、2・5・7・14・17・19はP₅、4はP₁₂、15・24はP₁₄内からの出土である。3については7号土坑から出土したものと接合した。その他は覆土中に認められたもので、新段階の住居に帰属するものである。

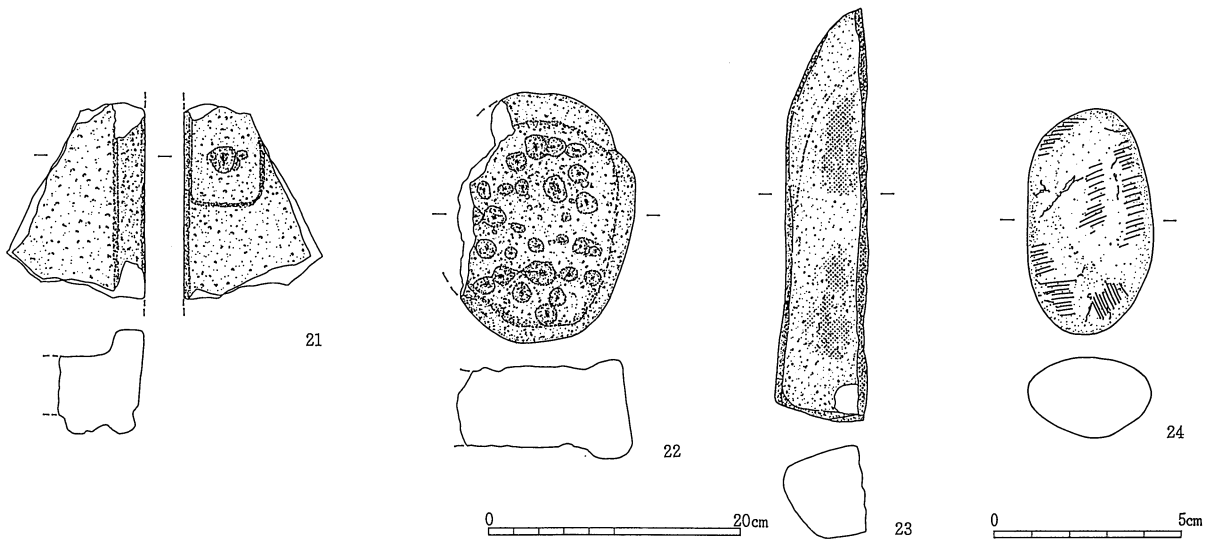
時期は、住居に新旧関係が存在するものの、堀之内1式まで遡るものはない。堀之内2式のある時点で構築され、その最終段階で廃棄が行われ、埋没する過程で6のような加曾利B I式が伴う段階となったも



第17図 13号竖穴住居跡(1)



第18図 13号竖穴住居跡(2)



第19図 13号竪穴住居跡(3)

のと思われる。

14号竪穴住居跡 (第20図、P L 42・54・61・65)

13号竪穴住居跡の前身的な存在である。13号竪穴住居跡の床面下20cmほどの位置に床面を形成していた。一見して通例の規模となり、取り立てて変哲もない。敷石住居であり、南側には対ピットが認められるので柄鏡形を呈していたものと推測される。

主軸はN-13°-W前後、主体部の副軸長は3.7mほどをはかる。主軸長は不明だが、連結部の状況から察して3.5m前後が想定される。床面はわずかに軽石流堆積物上面を掘り込んでおり、壁高は北端で最高2~3cmの高さを有していた。

床は外縁に床面から5cm前後の高さでテラス部分を設けたもので、また床内部には表面部を摩耗した平石(鉄平石)を主体とした敷石が一部残存している。住居中央には埋甕炉らしき痕跡が認められたが、上面が風倒木痕によって破壊されているため図化していない。P₁・P₂が対ピットで、またそれを取り込む大形ピットが存在する。柱穴は壁柱穴である。また、P₃はもしかすると対ピットの一部かもしれないし、壁柱穴も二重に存在する気配もある。拡張を含めた建て替えを行った可能性も考えられる。

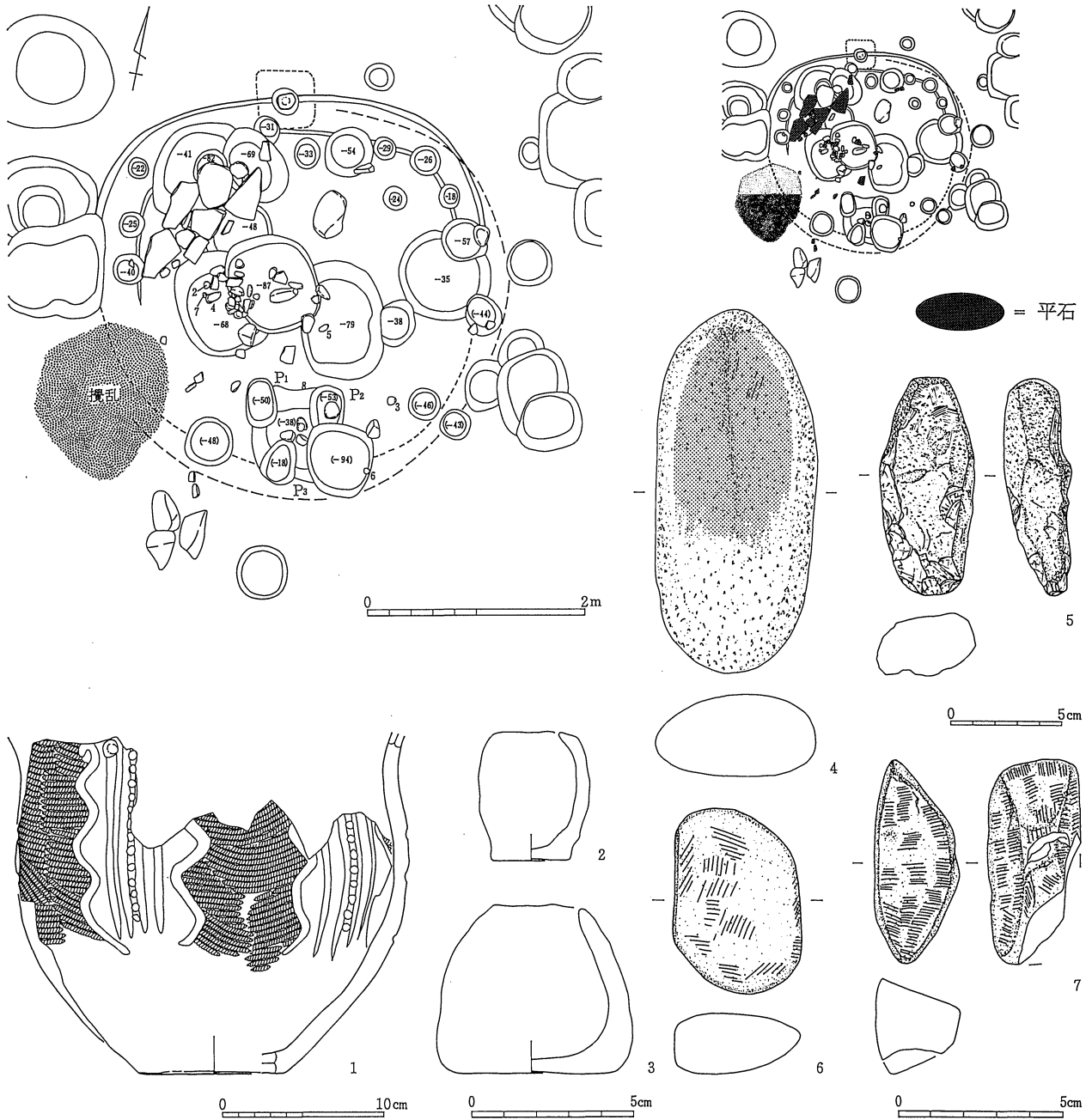
出土遺物のうち、1は炉体土器として利用されたもの、3は床面直上から出土したものである。6はピットの覆土中から出土しているので、本跡に帰属するものなのかどうか分からない。2・4・5についても、本来なら13号竪穴住居跡に含めるべきかもしれないが、この付近上面は浅い風倒木痕によって破壊されているので位置そのものを信じるわけにはいかない。取り敢えず1・3以外は13号竪穴住居跡との関わりを考える必要があるだろう。

時期は、1の土器から堀之内1式期に比定される。

15号竪穴住居跡 (第21図、P L 42・43)

保存状況が極めて良好な柄鏡形敷石住居跡である。張出部の石積み構造については「①石列」の項で記載してあるので、ここでは主体部と出入口部のみ記述しておく。

N-23°-Wを主軸とし、主体部の副軸長は4.04m、同じく主軸長は3.5m前後、住居全体の主軸長は張出部先端までを指すのかもしれないが、南側にピットが存在するのでこれをもって取り敢えず計測すれば、5.79mをはかることとなる。壁高は最大で30cmを計測する。

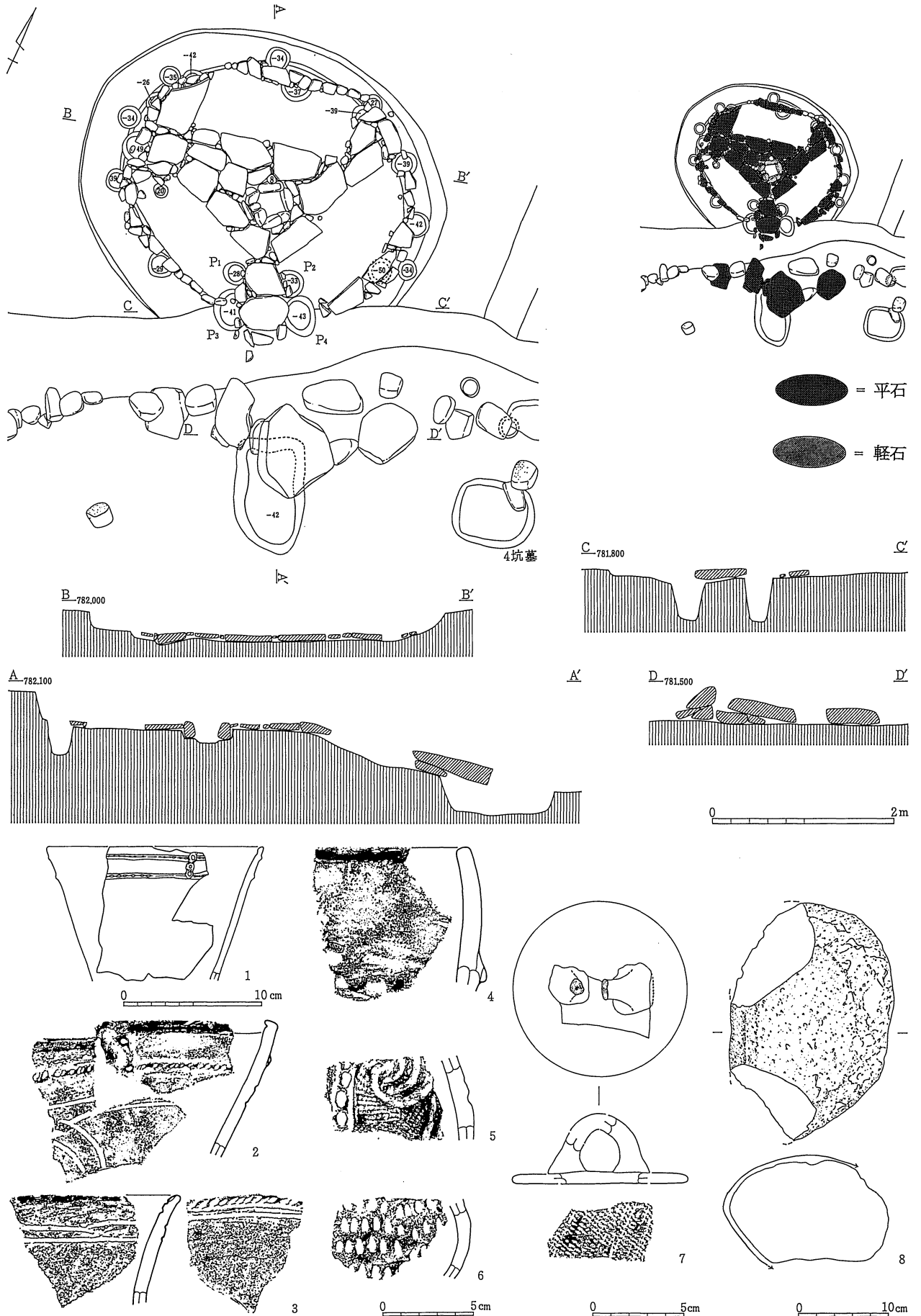


第20図 14号竪穴住居跡

主体部は外縁に高さ5cm前後のテラスを設け、おもにその内側に縁石を配し、内部にはさらに敷石がみられる。三方には、長方形を呈するみごとなまでの無敷石空間が存在する。縁石・敷石ともに平石（鉄平石）を多用し、しかも表面がきれいに摩耗していた。

炉縁石はすべて軽石を用い、一部表面を平坦に整形したものも存在する。また、方形プランを呈するものの、住居の主軸とは整合しない方向で構築されている。底部は中央が一段深く掘られており、もしかすると炉体土器が存在していたのかもしれない。なお、焼土はまったく認められなかった。

連結部から南は張出部のカット面となるが、特別な施設は認められない。地山面をそのまま40cmほど下がり、石積みが残る箇所になると、急遽平石（鉄平石）が目立つようになり、また軸上にはほかでは見受けられない巨大な平石（鉄平石）さえ存在する。また、その東側には横積みしたとも取れる平石（鉄平石）の一群がみられる。原位置を指し示すものかどうか分からないものの、石列との間に平石（鉄平



第21圖 15号豎穴住居跡

石)を多用した出入口施設が存在したことは確かである。

P₁—P₂、P₃—P₄が対ピットであり、2種のもが存在する。ほかに壁柱穴が存在するが、すべて確認したわけではないものの、これにもやはり内側に一定のラインがみえ、それらの多くが縁石・敷石の下部に認められた。主体部全体を拡張する建て替えを行った可能性が高いと言える。

出土遺物は極めて微量である。しかも出土位置を把握したものはない。土器は堀之内2式が主体であったが、5・6のような堀之内1式ないしは1式併行のものも出土している。なお、6は新潟県地方に中心をおく三十稻場式土器である。

時期は、堀之内2式期に廃棄されたものと考えられる。

16号竪穴住居跡(第22・23図、P L 43・54・61・63・64)

13号竪穴住居跡の東側に構築された巨大な張出部をもつ柄鏡形敷石住居であるが、張出部の構造については既に「①石列」の項で触れているので、ここでは主体部のみ扱いたい。

主軸はN—36°—Eを示す。傾斜をまったく無視し、サークル中央方向に主軸を向くよう構築している。主体部の副軸長は4.2m前後が見込まれ、主軸長は石積みの状況から3.5m前後と推測される。壁高は最大で28cmをはかる。

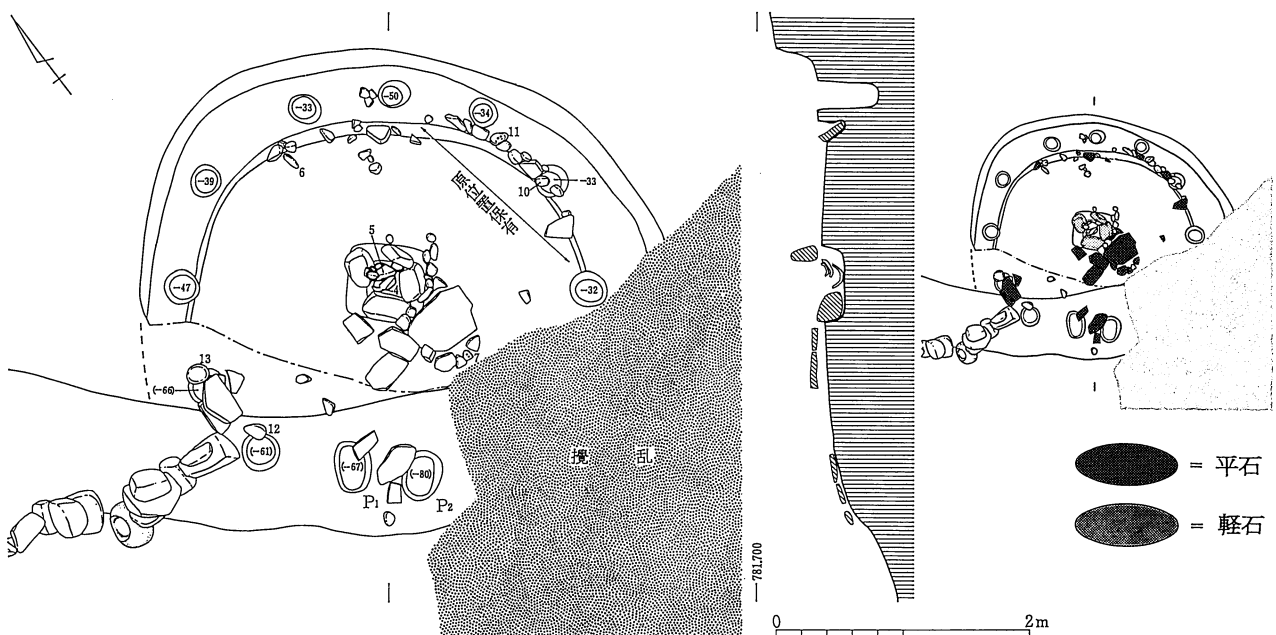
床の周縁には高さ数cmのテラスを設けている。そのもっとも内側には縁石を配していたようで、東側では原位置を保つものも認められた。炉の周辺には配石が認められるが、多くは破壊されているらしい。

炉は石囲埋甕炉である。礫は本来の位置から大分ずれているが、すべて軽石の自然礫を用いており、土器は4・5、それに実測していないがもうひとつの底部破片をそれぞれ正位に埋設して炉体としている。

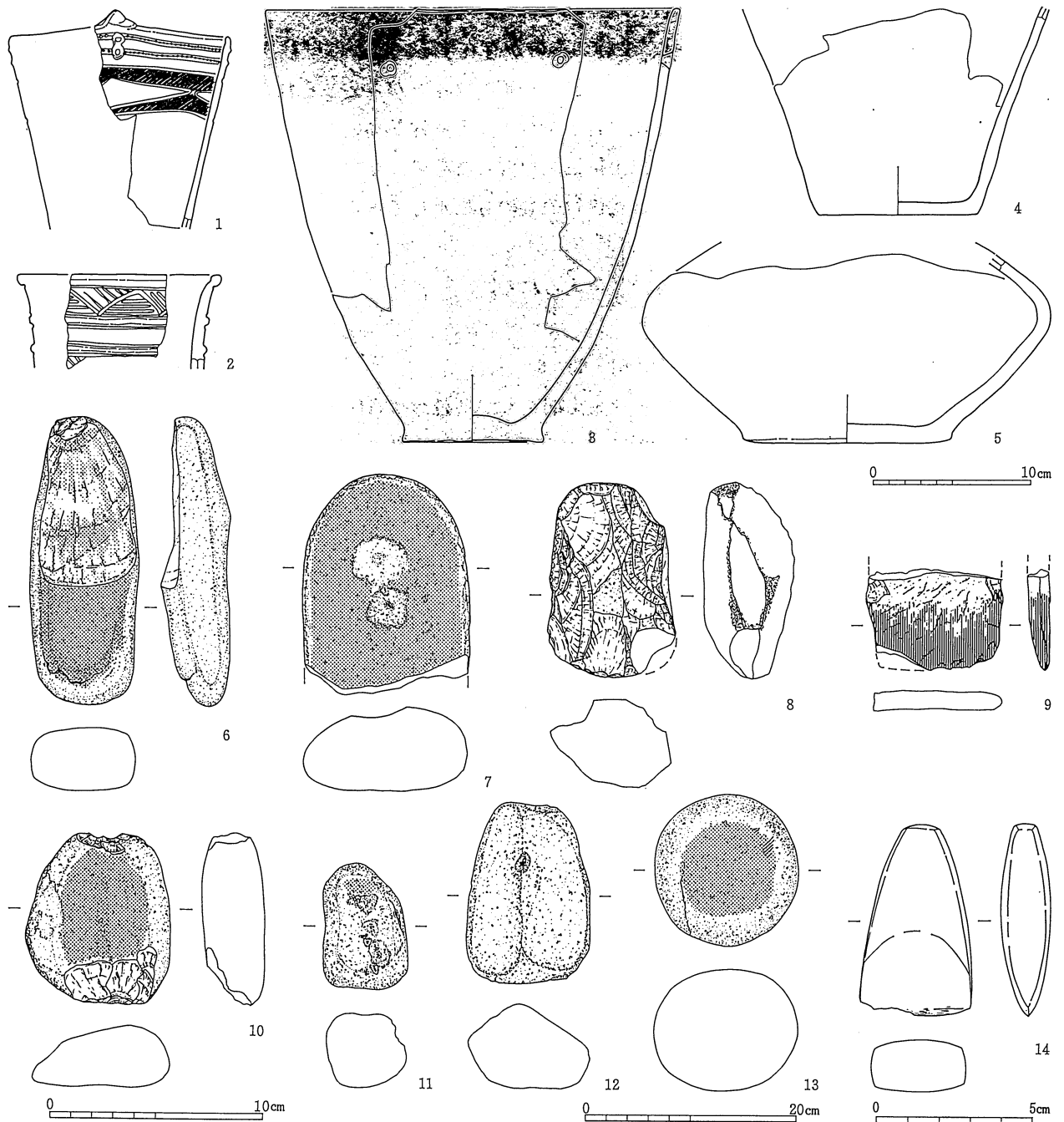
P₁・P₂が対ピット、柱穴は壁柱穴となる。出入口部に特殊な施設はなく、石積みの崩落状況(第12図)をみてもここだけ皆無の状態であった。当初から何も存在しなかったのが本跡の特徴なのか。

遺物は、6・10~12が縁石の一群として配されたもの、7は配石の詰め石か、13は南西コーナーに祀られたもの、4・5が炉体土器である。

時期は、堀之内2式期に比定される。



第22図 16号竪穴住居跡(1)



第23図 16号竪穴住居跡(2)

17号竪穴住居跡 (第24・25、P L64)

軽石流堆積物上面で炉を検出し、その北西側から平石（鉄平石）を確認した。あわせて小土坑が群在することから、これらの一部を柱穴とする比較的掘り込みの浅い敷石住居跡が存在するのではないかと考えた。ただし、柱穴などは調査段階において明確に把握することを怠った。整理時に強引にもP₁～P₅を柱穴の一部と見做し、プランを想定してみたが、それでは住居の東側は15号竪穴住居跡の張出部と重複してしまうので少々問題が起きる。炉と平石がセットになること自体間違いなのか。なお、点線内の深度は平石の下端を0として算出している。

遺物は2片の土器及び1点の磨石(?)が認められるが、ともに炉周辺の軽石流堆積物上面から出土したもので、かすかに残った床面直上の遺物という判断が可能である。1は堀之内1式、2は堀之内2式に該当する。提示していないが、P₃からも堀之内2式が伴出しており、本跡が堀之内2式期の産物という

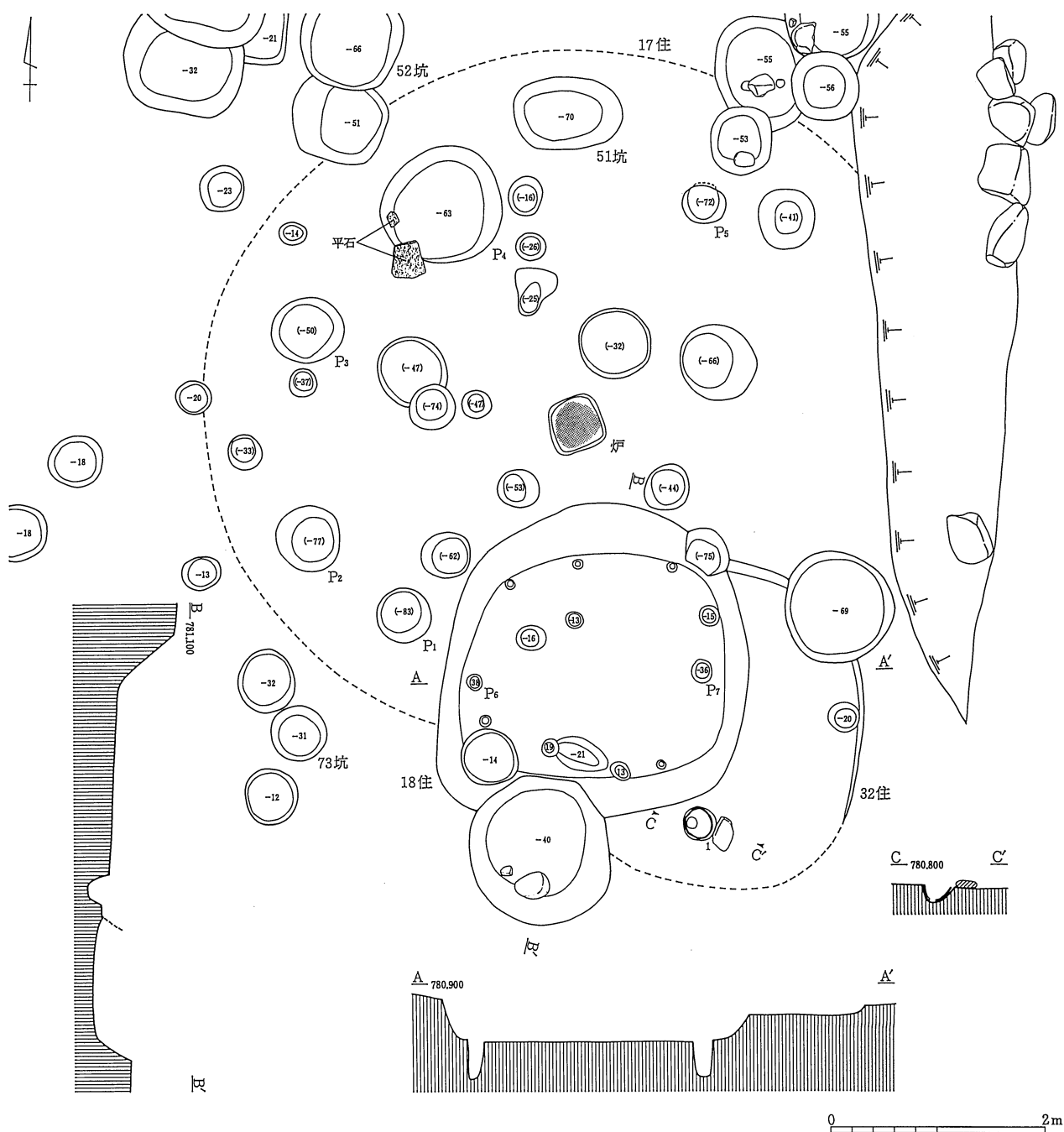
見方が強くなった。

18号竪穴住居跡 (第24・25図、P L44)

中期後葉の32号竪穴住居跡を切っており、また17号竪穴住居跡の見解からすれば、それよりも古い住居跡ということになろう。南側に位置する土坑との新旧関係は不明である。

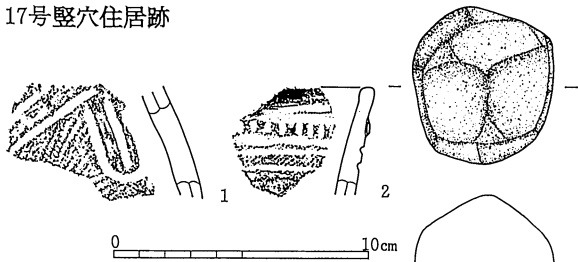
主軸はおよそ座標北を示し、主軸長は2.94m、副軸長は2.86m前後を計測する。また、壁高はとりわけ深く、軽石流堆積物上面から最高で48cmをはかる。

壁は緩やかに傾斜しており、炉も確認していない。壁下に小ピットが巡りそうで、とくにP₁・P₂は底が深く、一種の柱穴となるかもしれない。また南側には出入口部に関連したとも取れるピットが存在する。

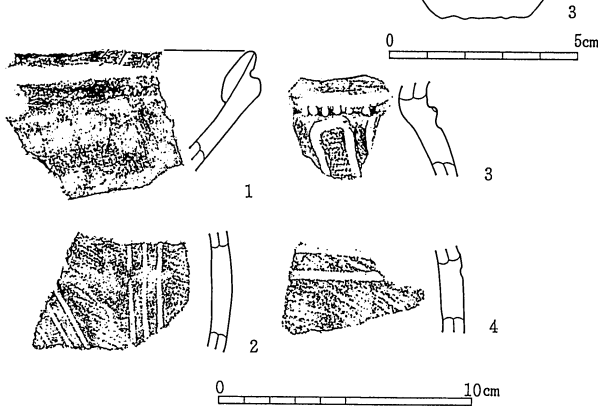


第24図 17・18・32号竪穴住居跡(1)

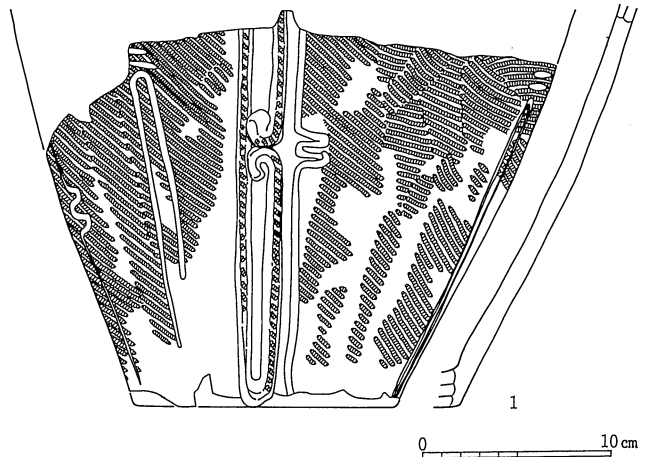
17号竪穴住居跡



18号竪穴住居跡



32号竪穴住居跡



第25図 17・18・32号竪穴住居跡(2)

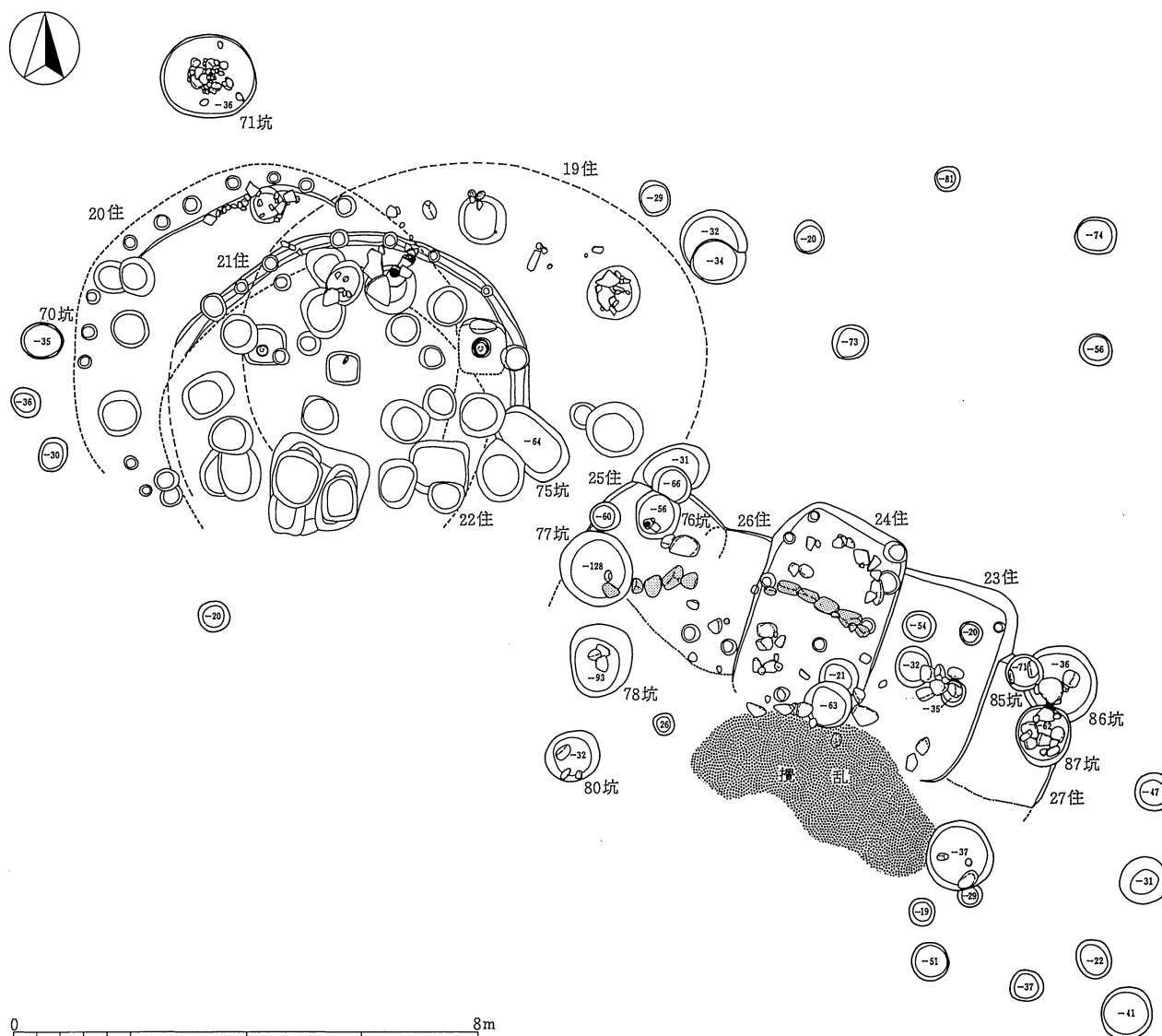
遺物はわずかししか出ていないが、いずれも堀之内1式の土器破片のみである。該期の産物であろう。

19～22号竪穴住居跡 (第26～31図、P L 44・54・60～65)

19号竪穴住居跡から22号竪穴住居跡までは、基本的に1棟の住居の建て替えと考えているのだが、それぞれに配置を微妙に変えているため、敢えて別名称を与えている。なお、いずれも柄鏡形敷石住居と考えられるものの、張出部部分は後の水田や畑の耕作によりすべて崩壊している。また、主軸は皆同じで、およそ座標北を向いている。ピットの深度については、床面が既に削られてしまった箇所に関し、各住居の床面レベルを概ね0としてマイナス計算して推定しているため、発掘時に計測した深度よりも増加している。また当然のことながら、隣り合うピットでも帰属する住居が異なれば推定深度の数値も相違する場合がある。

19号竪穴住居跡はもっとも新しい存在である。P₁～P₅の大形ピットを支柱穴とし、P₆・P₇を対ピットとする。壁体は確認していないが、例えばP₁とP₅間の芯々距離が約5.2mあり、この中ではもっとも大きな存在である。主体部の床は既に南半分が削られているものの、北側には敷石の一部が残存している。また、第32図に示す列石は、ややもすれば本跡の張出部に相当するものとも取れるのだが、23～27号竪穴住居跡との時間的關係がうまくマッチしない。位置を確認した遺物は、床面直上ないしは炉体土器である。また、10はP₃、12はP₄の覆土中から出土している。時期は堀之内2式期に廃棄されたものだろう。

それ以前に20号竪穴住居跡が営まれることになる。P₈～P₁₂を支柱穴とし、P₁₃・P₁₄を対ピットとするものである。壁体を確認していないが、周縁に数cmの高さでテラスを設けていたことは確かで、テラスの内部にはさらに小ピットを伴っている。これをもとに主体部の副軸長を復元すれば6.6m前後のものが想定可能である。礎は、北側からテラス下に縁石が認められる。炉は2の土器を埋設した埋甕炉であるが、基本的には石囲炉のはずである。出土遺物のうち、18・23は縁石とともに、2は炉体土器として、3

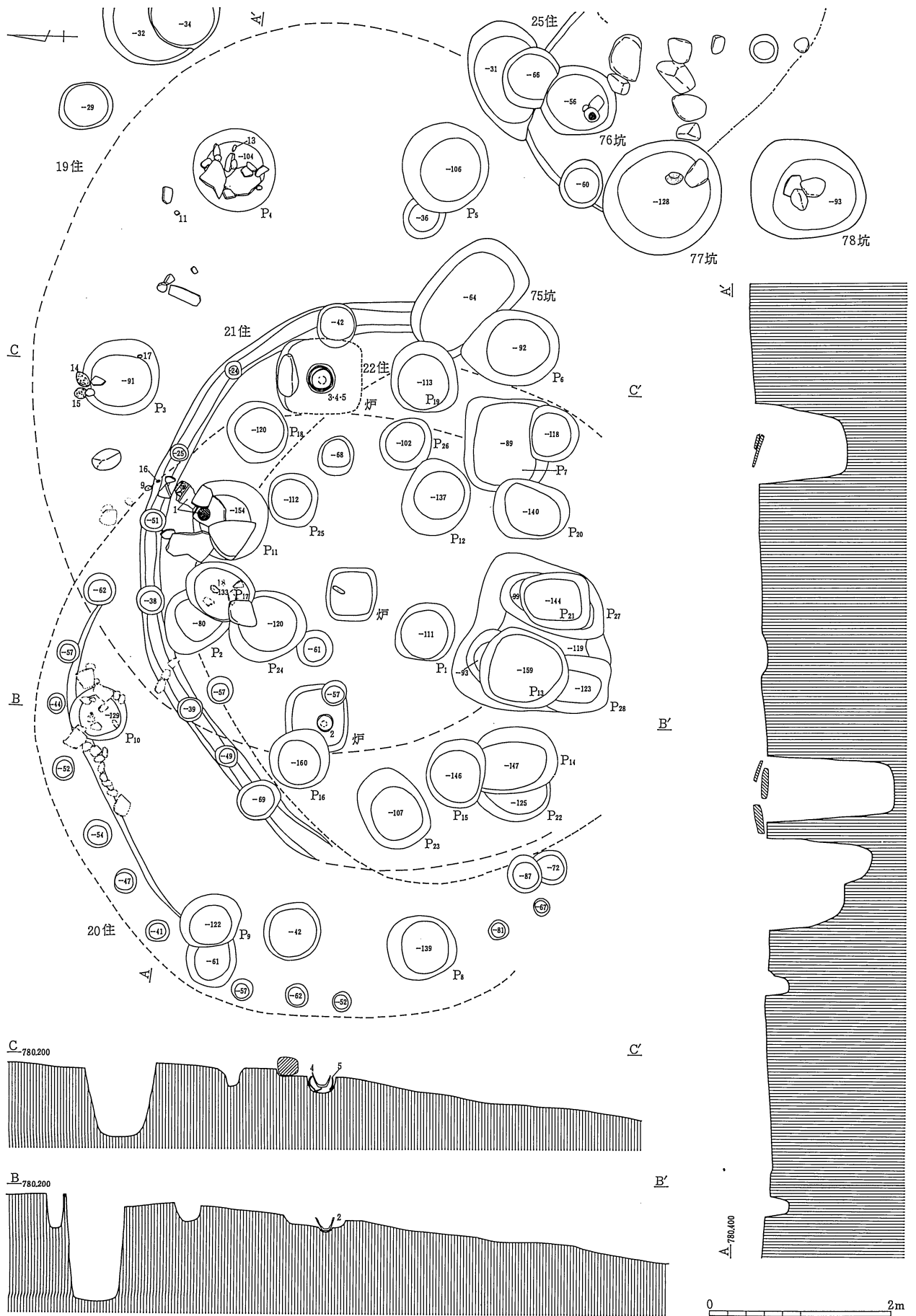


第26図 19～27号竪穴住居跡付近

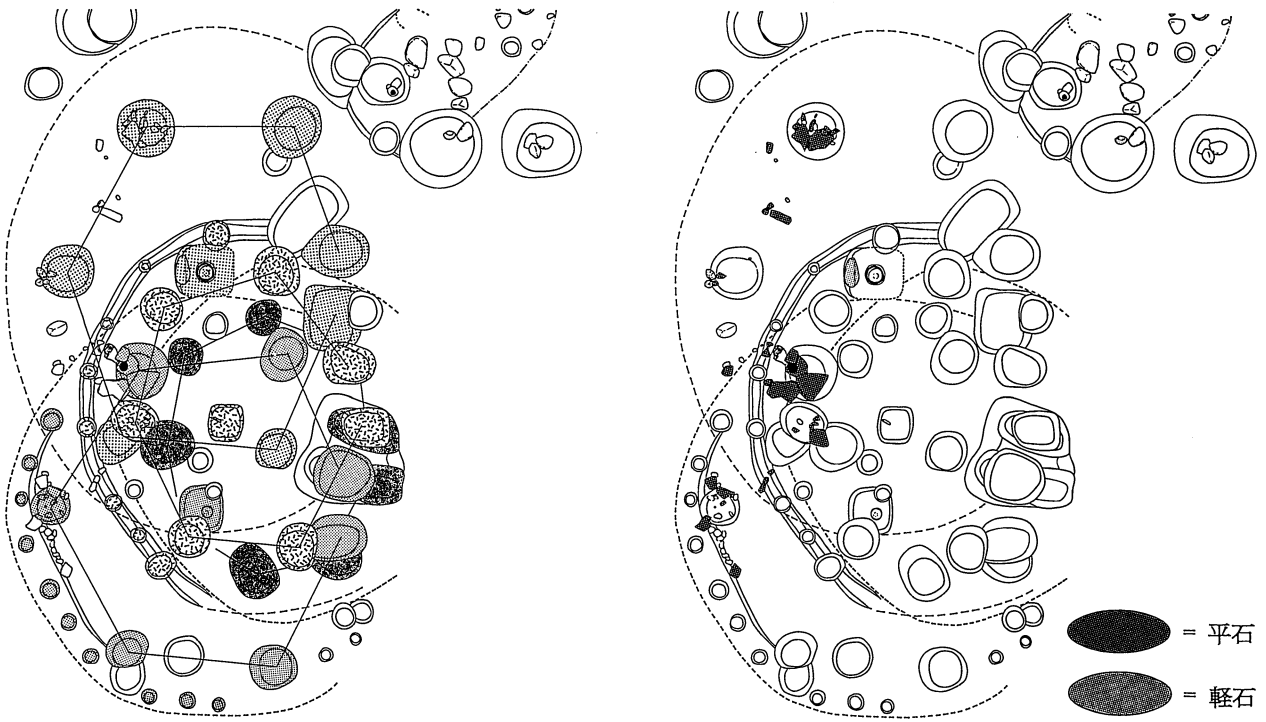
はP₈内、22はP₉内、5・6はP₁₀内、1はP₁₁内、20はP₁₂内、14はP₁₄内から出土している。なお、10・11は同一個体である。時期は、堀之内1式期に該当する。

19・20号竪穴住居跡の床面下には、21号竪穴住居跡が存在する。P₁₅～P₂₀を支柱穴とし、またP₂₁を対ピットの片割れと想定した。壁下に周溝が巡り、内部に等間隔でピットを穿っている。推定副軸長は6.25m、壁高は北側で3～4cmほど残存している。対ピットを有することから敷石住居の可能性が高いと思われるが、その痕跡は一切認められなかった。炉は掘方のみ確認した。遺物は覆土には皆無で、すべて柱穴内から認められたものである。8がP₁₇、1・4がP₁₈、ほかがP₂₀である。時期は、1が新潟県地方に主体を置く南三十稻場式土器であり、また20号竪穴住居跡よりも古いことは確実であるから、堀之内1式期でもそう新しい存在ではない。

さらにその下部には、P₂₂～P₂₆を支柱穴、P₂₇・P₂₈を対ピットとする22号竪穴住居跡が存在する。床面は21号竪穴住居跡と同レベルにあったのか、床・壁ともに残存していなかった。主体部の副軸長は不明だが、P₂₃とP₂₆の芯々距離は約4.1mであり、これらの中ではもっとも小振りとなる。床面が存在しないので、縁石もしくは敷石ともに遺存していない。炉はおそらく19号竪穴住居跡P₁によって破壊されているものと思われる。遺物は出土していないが、後期初頭、称名寺式期まで遡る可能性は低いのではないかと考えている。



第27图 19~22号竖穴住居跡(1)



第28図 19～22号竖穴住居跡(2)

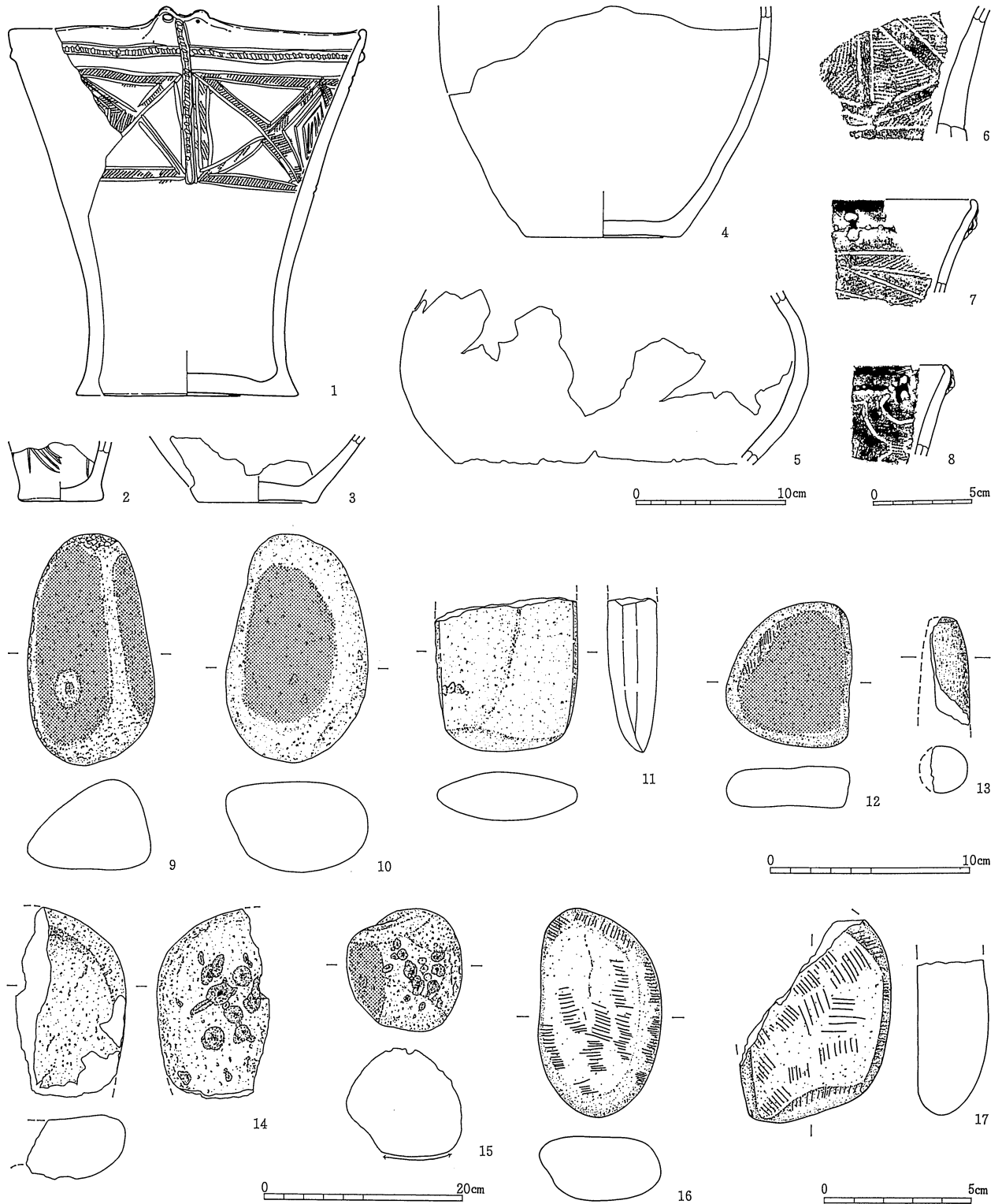
以上のように、22→21→20→19号竖穴住居跡の順に構築されている。少しずつ北に向かって新たな住居を構築し、その度に徐々に規模を大きくしていることが分かる。

23～27号竖穴住居跡 (第32・33、P L44・60～62)

23号竖穴住居跡から27号竖穴住居跡は、小規模な長方形プランであるし、炉や明確な柱穴の配置が認められないことから、一般的な住居とは大分性格が違うらしい。また、主軸をほぼ等しくしながら（N—20°—E前後）互いに切り合い、時期も堀之内2式期に納まるものである。おそらく、本来は1棟のみの存在で、短期のうちに傍らへと建て替えを行ったのではなかろうか。そこまで非常に似通った特徴を示しているのである。なお、これらの竖穴住居跡については、東西通しでの土層観察を行わなかったため、新旧関係が不明となってしまった。

26・27号竖穴住居跡はわずかな伴出遺物から堀之内2式期の範疇に納まるものとしかたないが、時期の詳細が分かるものでは、23号竖穴住居跡がもっとも新しい存在といえる。主軸長は3.5mほどが見込まれ、壁高は北壁で20cmを計測する。床は斜面に沿って少しずつ傾斜しており、北と南とでは最大30cmほどの差が認められた。住居中央には安山岩系の礫が床面上に集積されている。ピットが存在するが、本跡に帰属するものかどうか分からない。遺物は、地点を押さえていないものの、堀之内2式最終段階の2や加曾利B I式の5なども出土している。

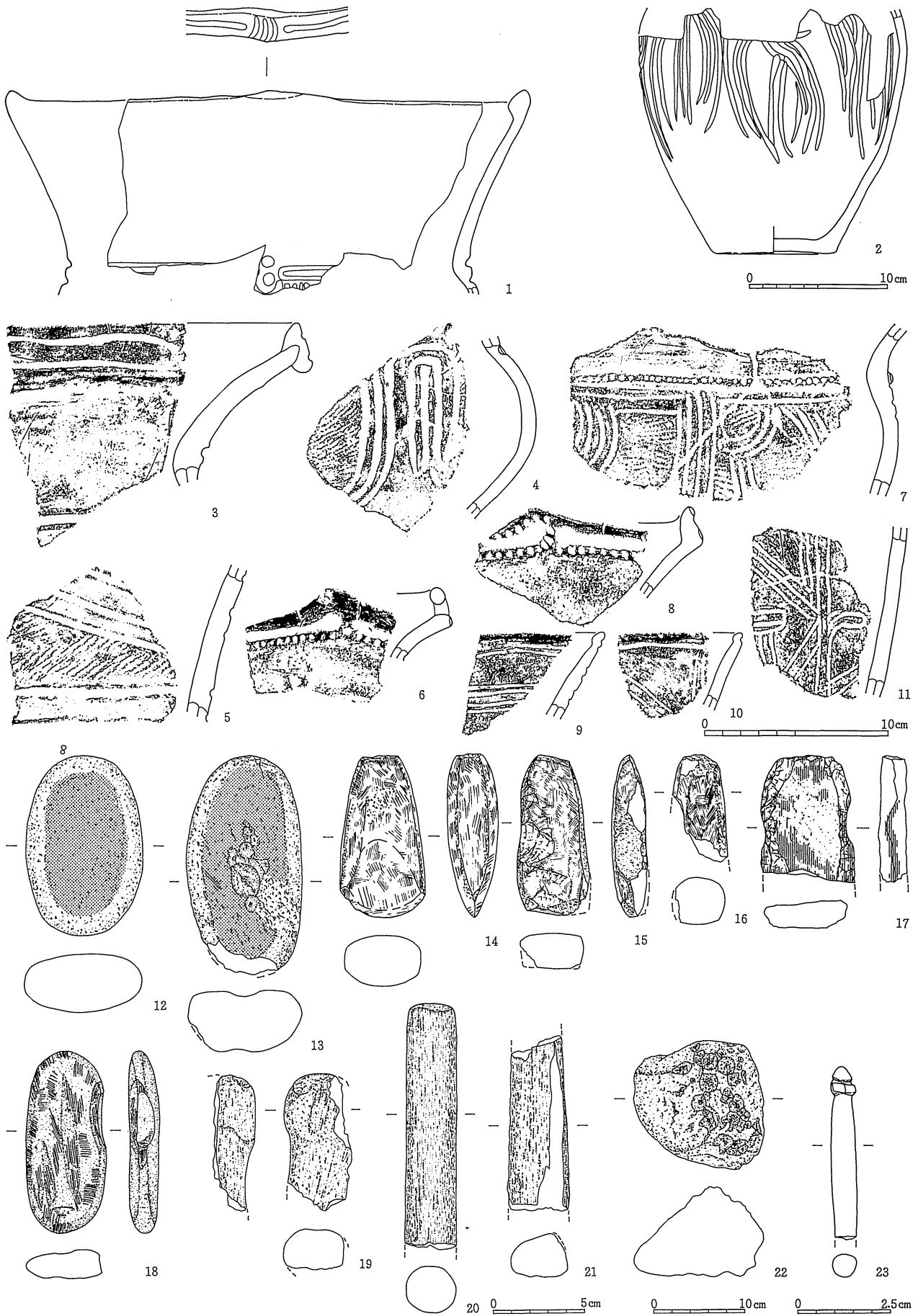
24号竖穴住居跡は、本来東側を23号竖穴住居跡に切られているはずだが、もっとも深く掘り込まれているので遺存状況は良好である。副軸長は2.34m、主軸長は3.7m前後と推測される。壁高は北側で最高36cmをはかる。住居北側には柱穴とも取れる小ピットが壁下に存在する。中央を東西に横断する列石は床面直上に存在するものである。ただし、25号竖穴住居跡の列石と同レベルにあり、もしかすると22号竖穴住居跡の張出部に相当するものかもしれない。住居北側には覆土中層に平石（鉄平石）を主体とした礫群が一定のレベルで認められ、人為的な敷設とも捉えられる。南側の礫群についてはバラツキが目立ち、とくに意図は見出せない。遺物は、7が風倒木痕上層から出土したもので、一応本跡に帰属させたものの、23



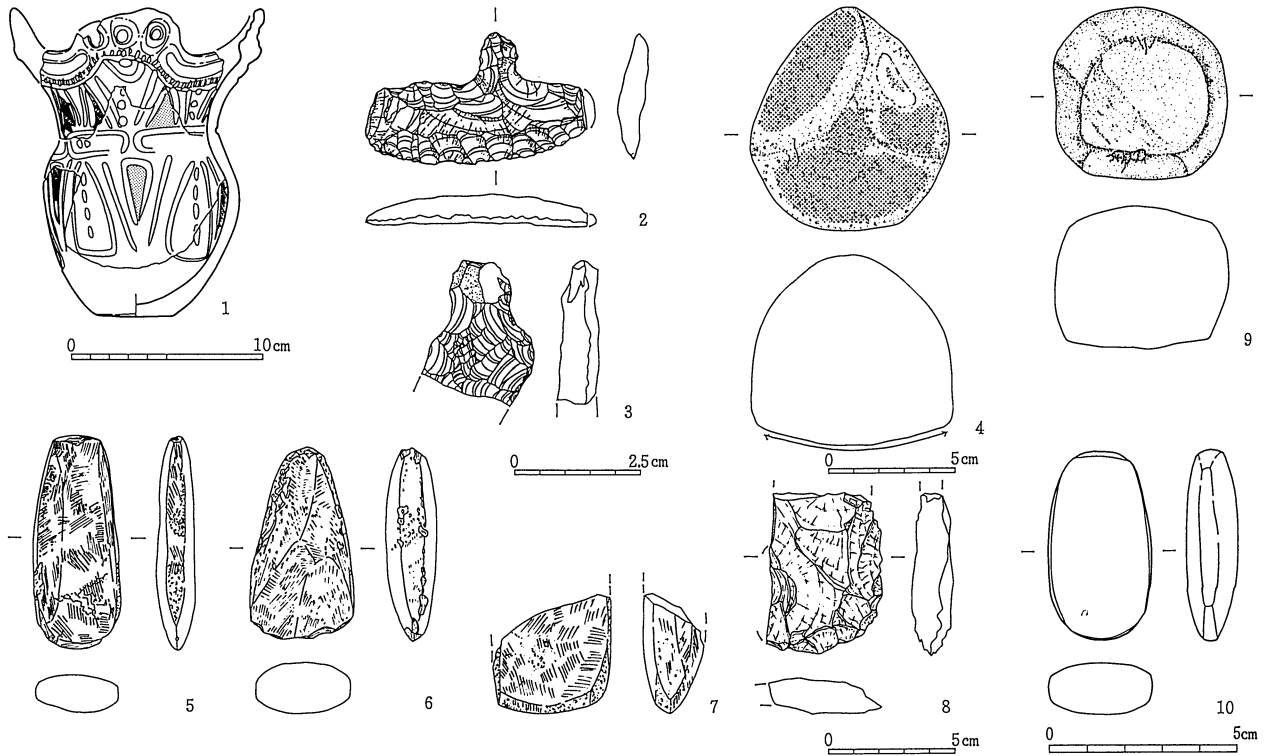
第29図 19号竖穴住居跡

号竖穴住居跡に帰属するものかもしれない。その他、位置を押さえていないが、土器破片をみる限り、堀之内2式でも比較的新しい段階の産物と考えられる。

25号竖穴住居跡は19号竖穴住居跡と重複するが、19号竖穴住居跡は壁体が存在しないのでその新旧関係は分からない。だが、19号竖穴住居跡の方が新しくなければ、19～22号竖穴住居跡と23～27号竖穴住居跡がセット関係にあるものとは言い切れなくなる。77号土坑とは、これを確かに切っていることが平面プラ



第30図 20号竖穴住居跡



第31図 21号竖穴住居跡

ン確認の際判明している。25号竖穴住居跡の規模は、東側が26号竖穴住居と重複し、また南側を削平されているのでまったく不明である。壁高は北側で最高15cmをはかる。主軸はほかの住居とは異なり若干東向きになっていたらしい。住居中央には床面上に礫が並んでいるが、その意味はまったくもって見当つかない。24号竖穴住居跡のところで述べたような可能性が本当にあるのであろうか。遺物は、土器破片しか出土していないが、堀之内2式に相当し、その中でも比較的古い段階に落ち着くものと判断できる。なお、1・2は同一個体である。

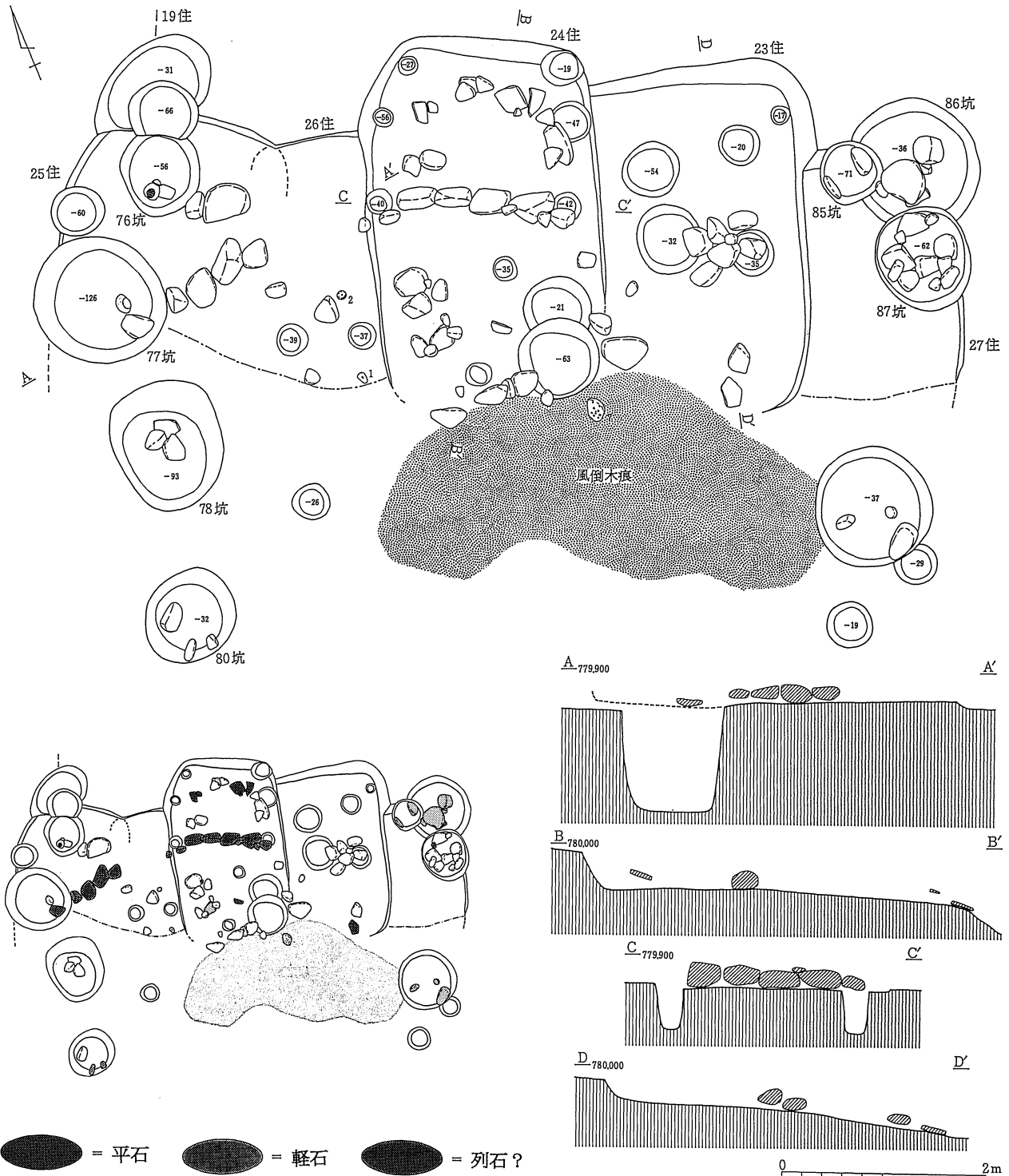
26号竖穴住居跡は、東西両側が24・25号竖穴住居跡と重複し、また南側を削られているため北壁の一带しか確認していない。もちろん規模などは一切不明である。時期は堀之内2式期だが、極めて微量の土器破片しか出土しておらずその詳細時期は不明である。1・2は床面から出土している。

27号竖穴住居跡は23号竖穴住居跡及び85～87号土坑と重複し、さらに南端を削平されている。規模は不明で出土遺物も非常に微量である。堀之内2式の土器破片を出土していることは判明したが、時期の詳細は判断しかねる。

以上のように、26・27号竖穴住居跡の詳細時期は分からないが、それ以外は25→24→23号竖穴住居跡という順番が想定可能であり、西から東へという建て替えを考える必要もある。とするなら、25号竖穴住居跡や24号竖穴住居跡にみられる列石は、19号竖穴住居跡の張出部の一部で、それとともに営まれたのが23・27号竖穴住居跡だったという考えもひとつ考慮に入れなければならない。ただしそうなれば、これまで見てきた遺物の多くは、実は19号竖穴住居跡の張出部から出土したものとなり、先の先後関係はまったく無視されることとなるのである。発掘時の考慮の甘さが、ここに出てきたわけである。

③ 石棺・土坑墓・土坑 (第34・35図、P L44)

これらは、15・16号竖穴住居跡の張出部に設けられたもので、中核となる13号竖穴住居跡からみれば、出入口部の両側のほぼ線対称的な位置に配されている。4号土坑墓を除いてその上部にも石列が認められ

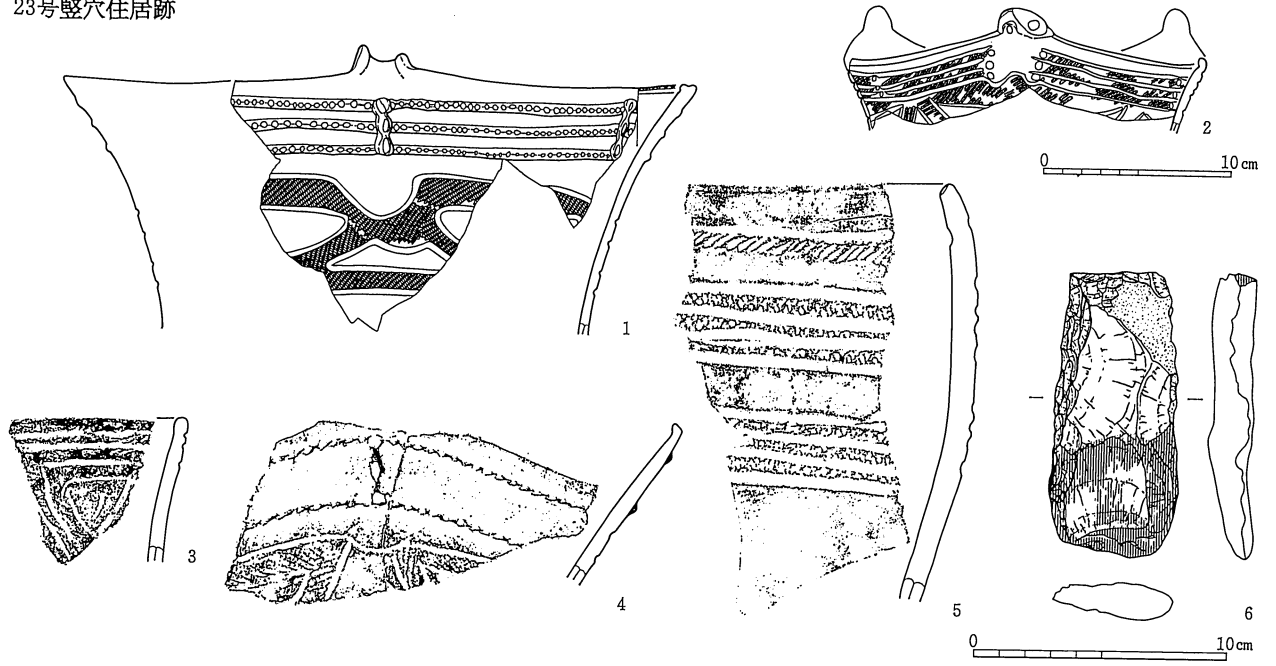


第32図 23～27号竪穴住居跡

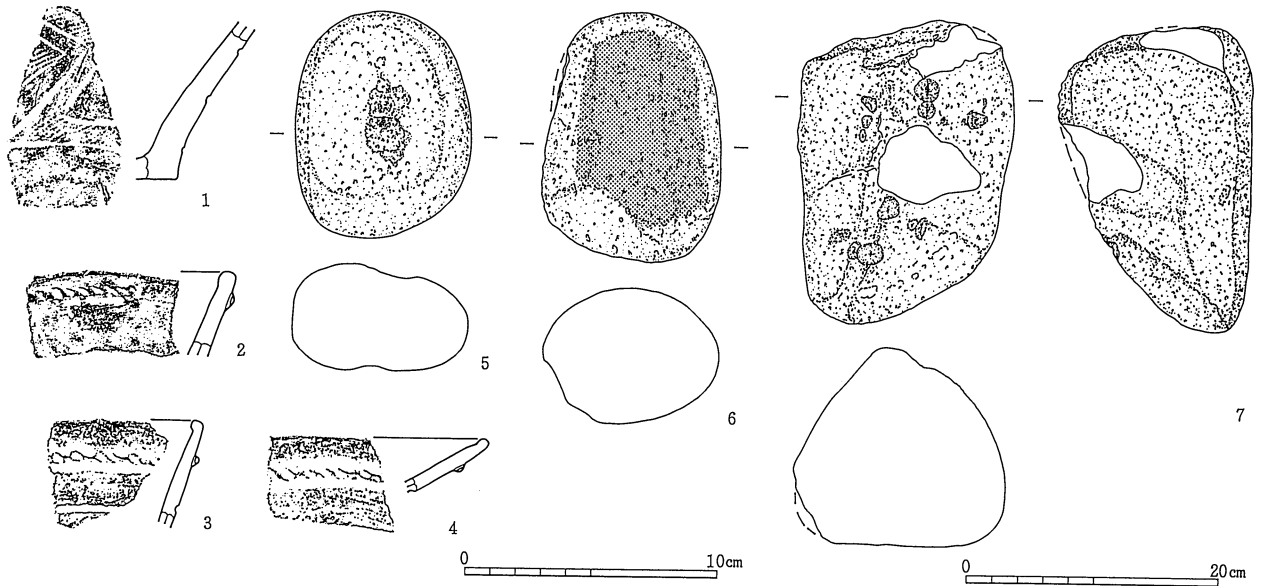
るが、それぞれの深さを考慮に入れば、張出部を作出するためのカット面が先行し、後にこれら一群を構築したことはほぼ間違いのないものと思われる。また、石列と同時並行で行われたのか、石列を破壊して再度しつらえたのかどうかは定かでない。

1号石棺は張出部の平坦面に位置し、主軸長1.48m、副軸長0.68m、深さは50cmをはかる。主軸はN-15°-Eを呈し、カット面に対して直交している。土坑墓及び土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。小口側に安山岩系の亜角礫を立積みし、西側壁にも同様のものを一部立積みしている。確実とは言いがたいが、蓋をしたかのような状態で礫を確認している。堀之内2式の比較的新しい段階の土器が伴出

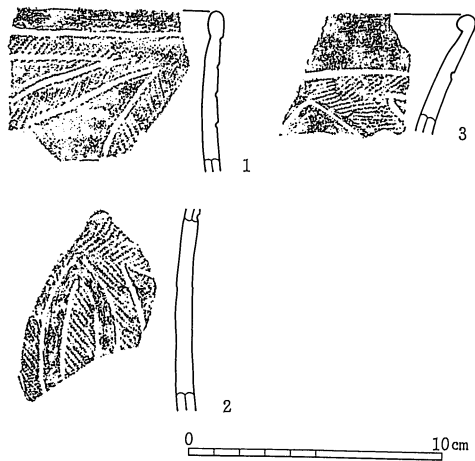
23号豎穴住居跡



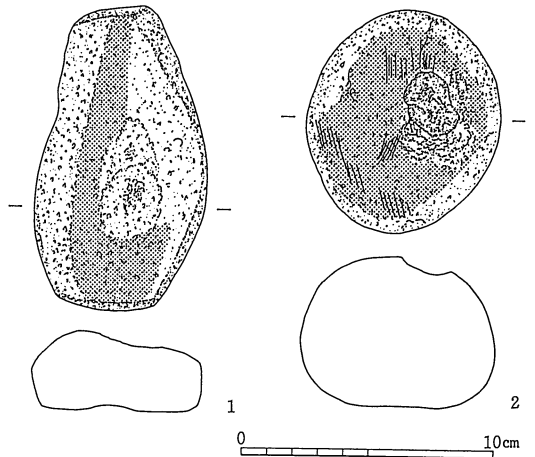
24号豎穴住居跡



25号豎穴住居跡



26号豎穴住居跡

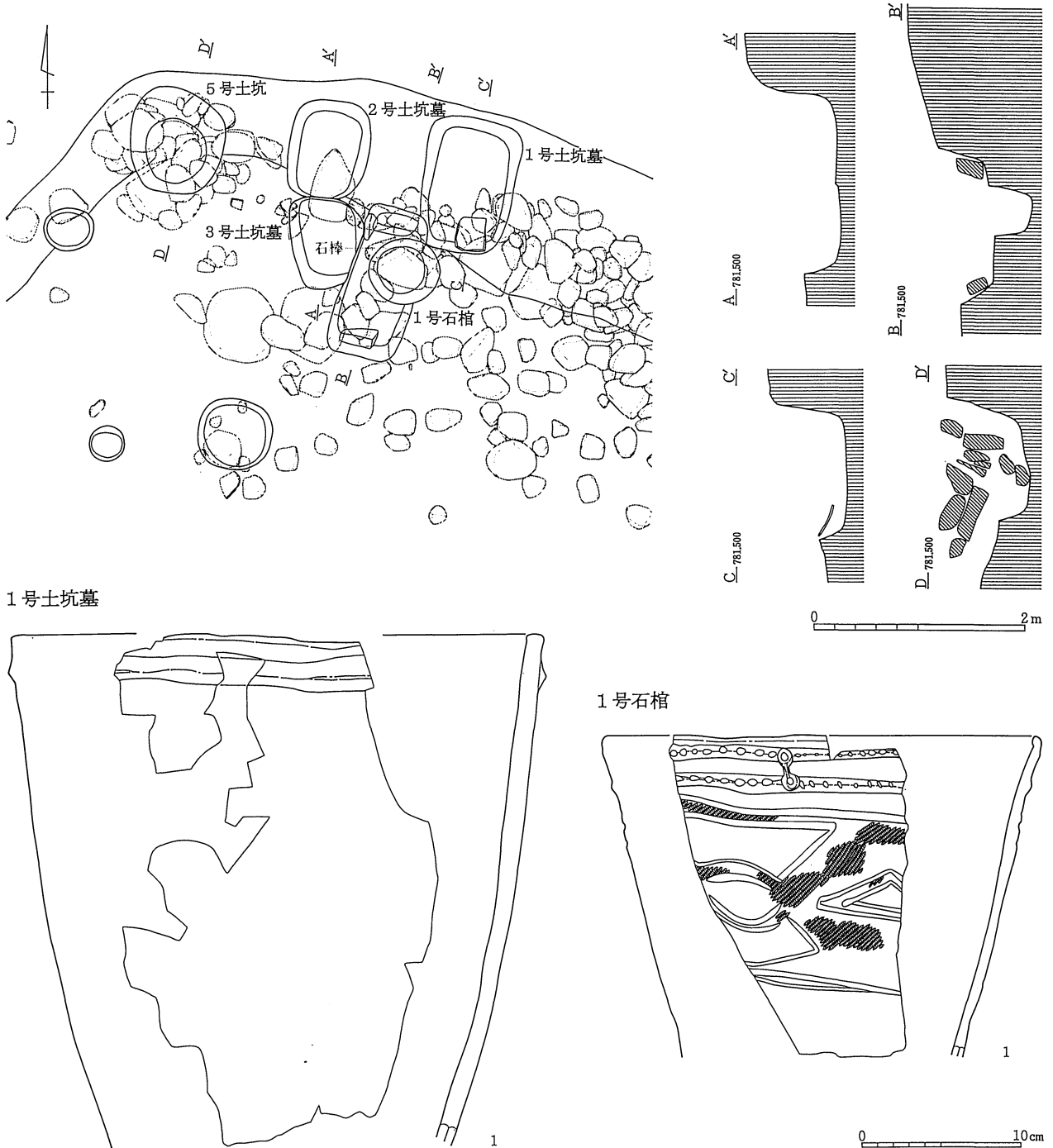


第33图 23~26号豎穴住居跡

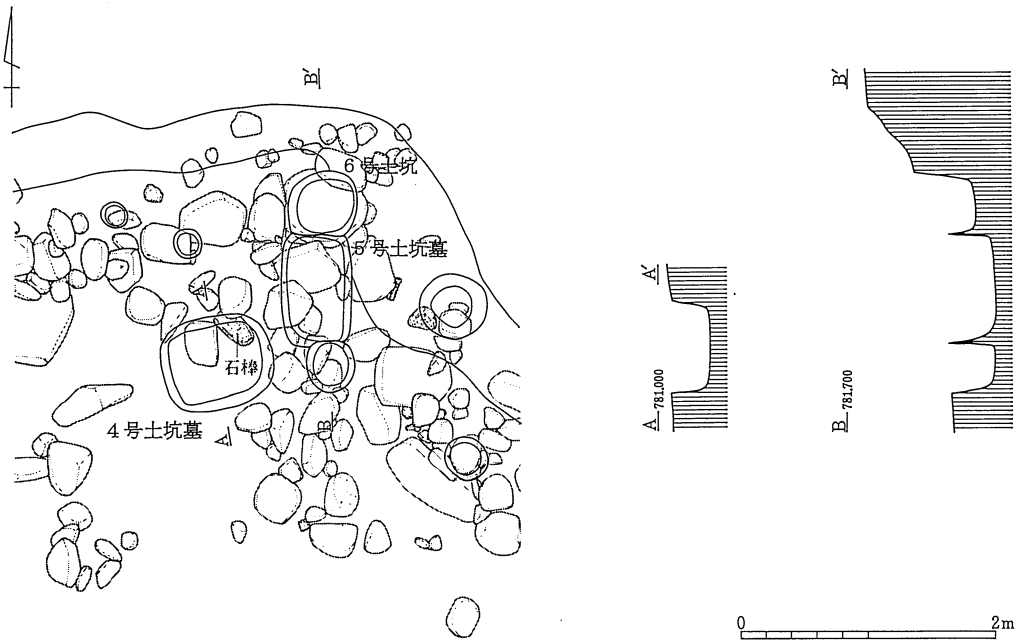
し、上面には石棒（第16図22）が立柱していた。

1～3号土坑墓については、本来、「墓」として認知できるようなデータは得られていないのだが、1号石棺と平面プランが近似していることから、これらを「土坑墓」として呼称している。4・5号土坑墓も同様である。

1号土坑墓は主軸長1.29m・副軸長0.86m・深さ66cm、2号土坑墓は主軸長0.94m・副軸長0.77m・深さ68cm、3号土坑墓は主軸長0.87m・副軸長0.70m・深さ41cm、4号土坑墓は主軸長0.90m・副軸長0.72m・深さ28cm、5号土坑墓は主軸長0.89m・副軸長0.56m・深さ40cmをはかる。4号土坑墓のみが完全に張出部の内側に位置しており、主軸も90度違えている。遺物を伴うものは1・2号土坑墓だけだが、2号土坑墓については中期末から後期初頭の土器小破片のみで明らかに混入品と考えられる。1号土坑墓の南



第34図 1号石棺、1～3号土坑墓、5号土坑



第35図 4・5号土坑墓、6号土坑

端には、覆土上層から称名寺式を中心とする粗製土器が出土しており、それ以外の破片をみても堀之内式以降のものは皆無であった。張出部が当時から存在していたとは思えず、カット面上段からの掘削なのでもしかすると当初から存在していたのか、それとも何らかの理由で旧来の遺物が混入したのか、そのどちらかが答えとなるだろう。なお、4号土坑墓上段には石棒（第16図21）が立柱していた。

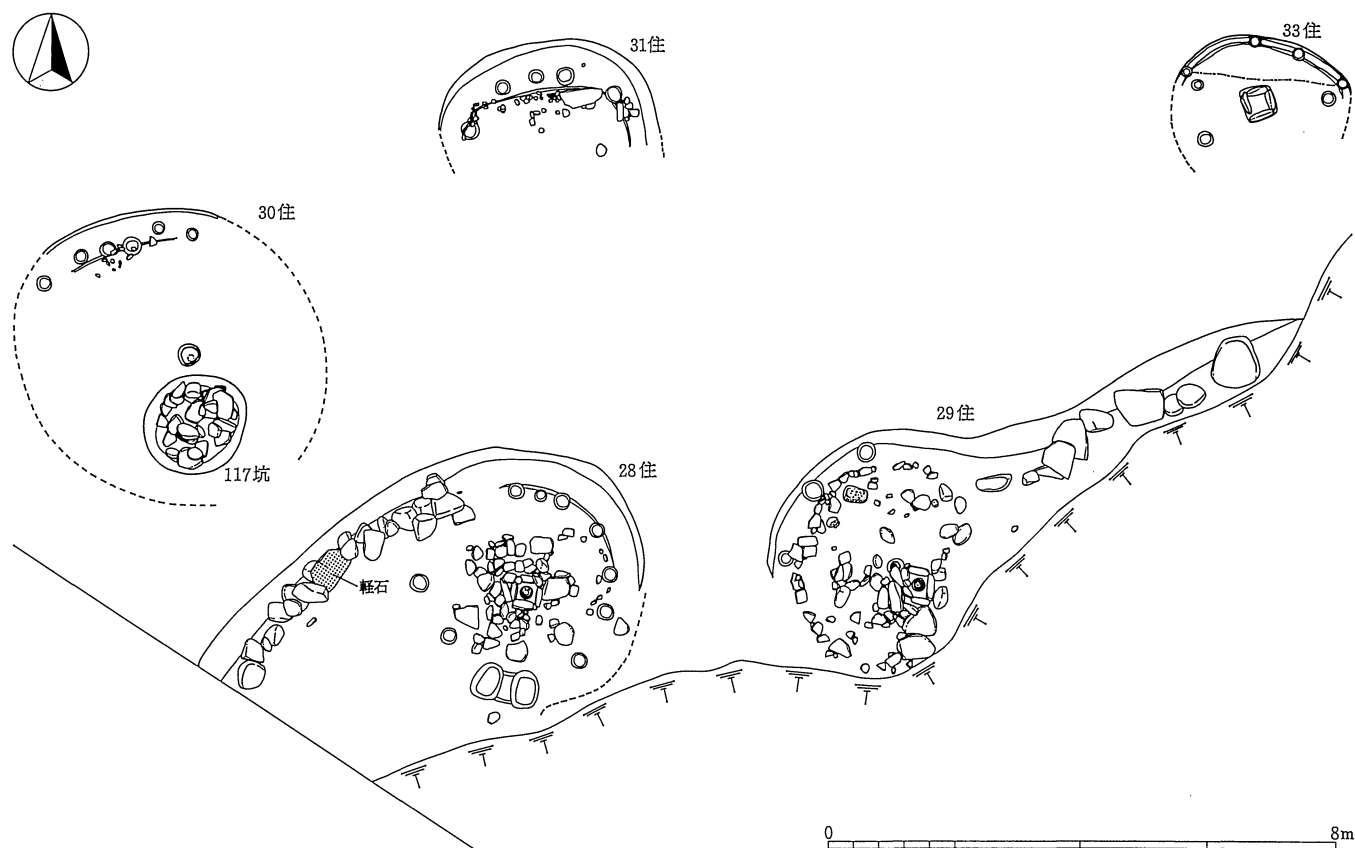
5・6号土坑はともに13号竖穴住居跡側の張出部変換点に位置しており、5号土坑は大形の立石を含む多数の礫で、6号土坑は巨大な円礫でパックされていた。また、5号土坑については、礫群中に石皿2個体が小破片となって出土している（第15図17・18）。

(2) 後期前半の石列を伴う集落（第36図、P L45）

調査区南東端、28～31号竖穴住居跡が建ち並ぶところを指している。すべて堀之内1式期の産物である。

石列は28・29号竖穴住居跡の奥壁部分から始まるようで、以後、外方へと開いていくが、28号竖穴住居跡側では調査区の外側に延びてしまうし、29号竖穴住居跡側では流出が認められる。底面は住居床面に等しい。第36図に示す石列は検出状態をそのまま図化したもので、したがって礫が崩落したようすはまったく認められない。また、28号竖穴住居跡側をみると、根石部分で既に立積みしている箇所が目立つから、多段構築を意識しているとは思えず、こうした姿が本来の形態にかなり近いものではないかと考えている。また、28号竖穴住居跡の縁石の上に石列が認められるので、住居を先行して構築したようすがうかがえる。

石列と住居跡については、土層観察を行っていないので、本来ひとつの構造物であるのかどうか、実は定かでないのである。たとえば28号竖穴住居の場合は、石列側にも一般的な柱穴が巡ることは確かで、上屋の構造がひとつの問題となるはずだ。しかし、28・29号竖穴住居跡とも壁体は一致するし、底面も住居床面に等しいのなら、やはり何らかの関連が存在するに違いない。実際に、これに前後する遺物は認められていないのである。正体不明の石列だが、以後、各竖穴住居跡の記述で詳細を述べたい。



第36図 後期前半の石列を伴う集落

① 竪穴住居跡

28号竪穴住居跡（第37・38図、P L45・55・60・61・65）

西側石列を伴う竪穴住居跡である。西壁については石列と絡んでいるため不明であるし、主体部の南壁から南は既に流出していることから、残りの不鮮明な住居といえる。ただし、対ピットを有することから、柄鏡形の敷石住居であることは確かである。

主軸はN-10°-Eを成し、主体部の副軸長は柱穴の配置から4.1m前後と推定される。壁高は北壁で最高31cmをはかる。

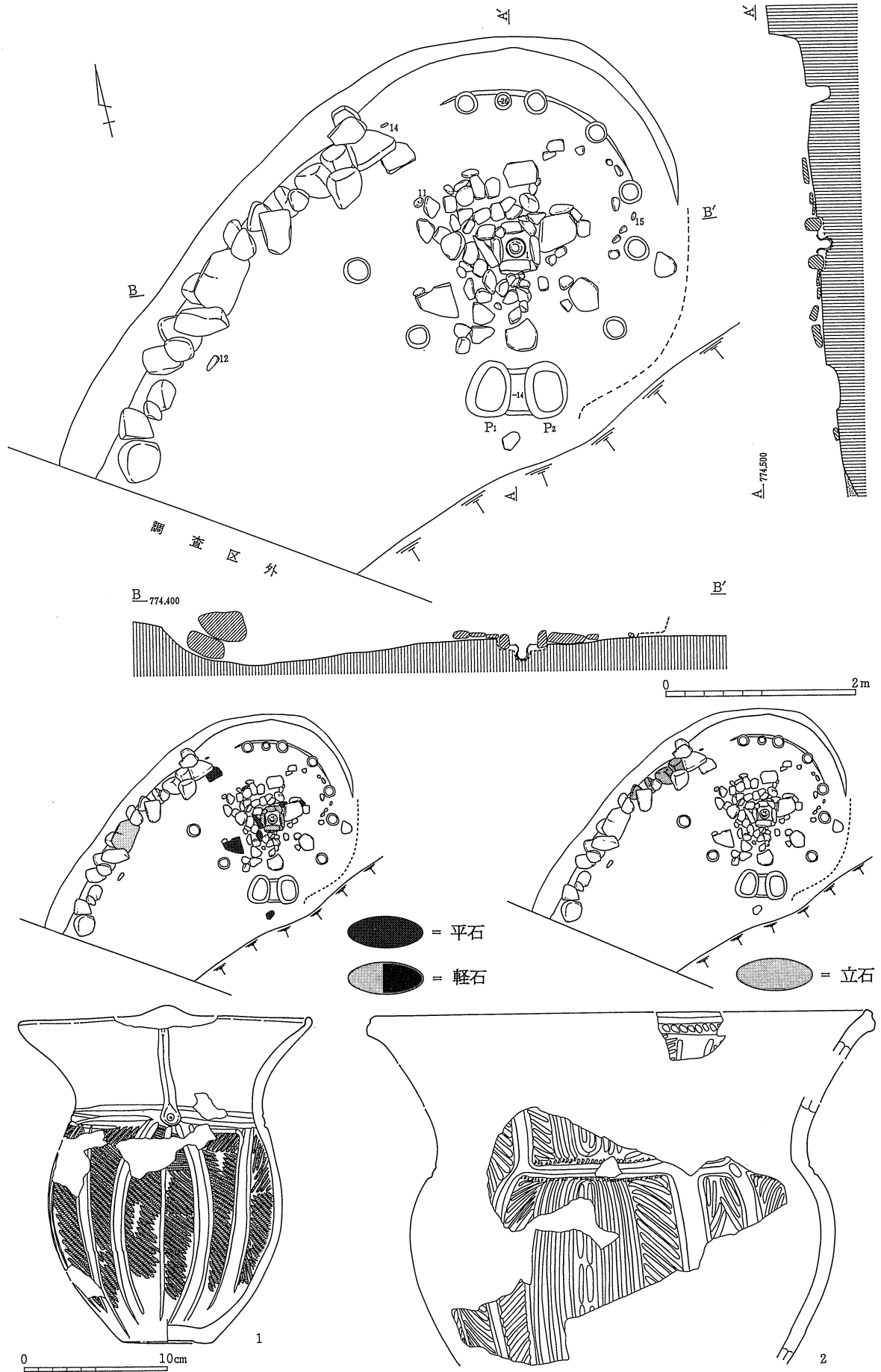
床は周縁に数cmほどのテラスを設定している。北西コーナーには平石（鉄平石）による縁石が認められ、東側にもテラス下に縁石の一部とも取れる小円礫がやや散乱した状態で確認されている。炉の周囲には敷石がなされているが、周囲が乱雑であることから、おそらく抜き取りを行っているものと思われる。また、いわゆる鉄平石は極限られた量で（図中の平石＝鉄平石）、礫が豊富な谷部にほど近いところでは、石の選択がかなり違うものと判断される。

炉は石囲埋壺炉であるが、礫はすべて軽石の自然礫であった。なお、その掘方は確認できなかったものの、炉体土器が一段深かったため、二段掘りの形状を想定するのが自然であろう。

P₁・P₂が対ピットで、またそれをつなぐ小ピットも存在する。柱穴はテラス下の壁柱穴となる。なお、湧き水がひどく、確認はできるが深度までは計測することはできなかった。

出土遺物のうち、1は炉体土器、11・14・15は床面直上、また12は石列に関与するものと思われるが、底面直上から出土している。その他、2は明らかに新潟県地方を中心とする南三十稻場式土器、8もその類だろう。

時期は堀之内1式期でも比較的新しい段階に相当するものと考えられる。



第37図 28号竖穴住居跡(1)

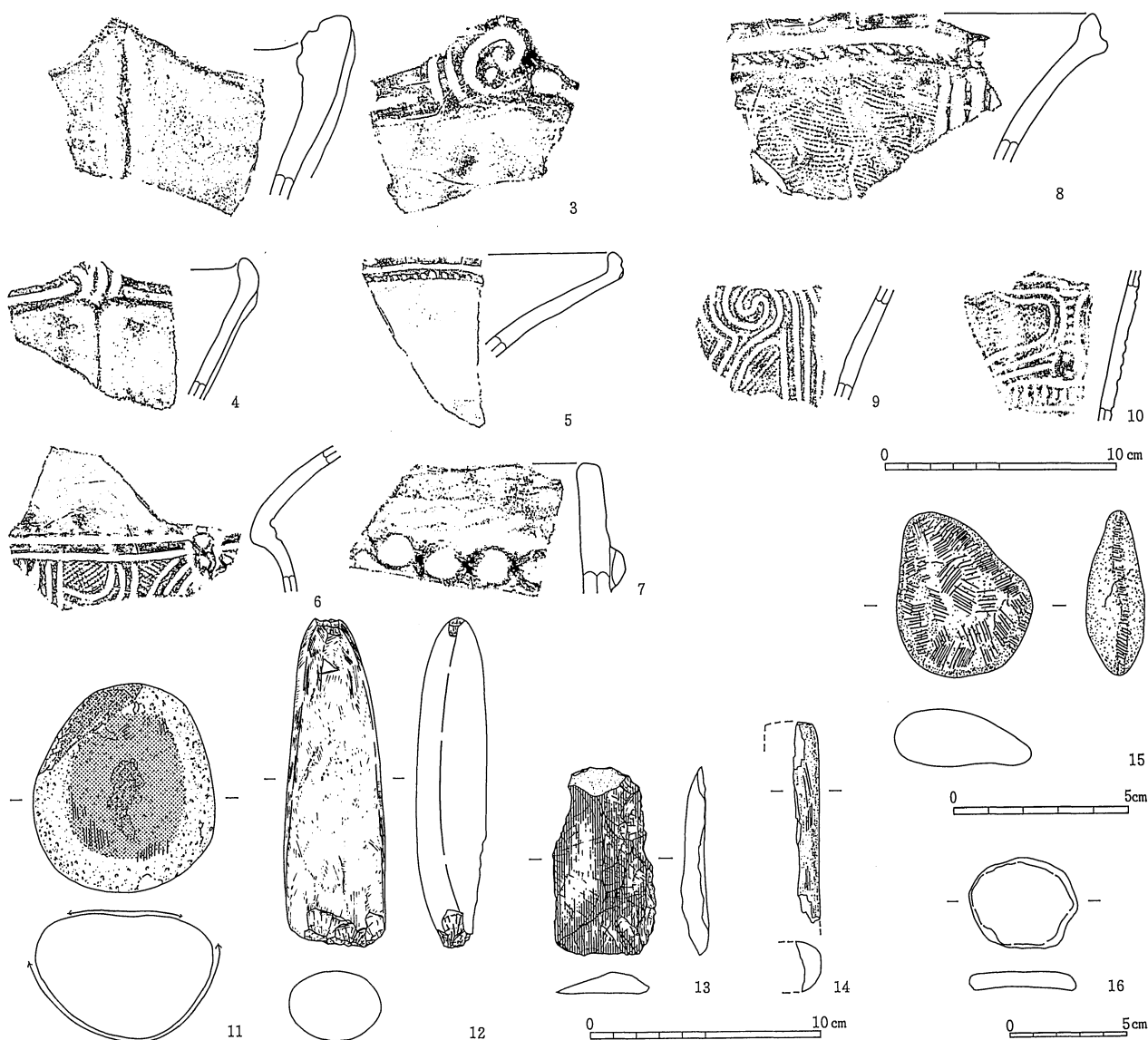
石列は先にも記したように縁石の上に構築されていることから、先に住居を築いたことは確実である。底面は正しく28号竪穴住居跡の床面と等しく、凹凸もない、いかにも住居の床面を見ているかのような状況であった。遺物は土器の小破片ばかりが目につくだけで、もちろんその他の施設もない。壁体は28号竪穴住居跡の奥壁からスムーズに進行し、ちょうど住居から離れる際から石列を開始する。大形の円礫を用いており、1点だけが軽石の自然礫を使用しているところもある。住居近くには、根石を立積みしており、その上に横積みした箇所が多い。その他は、厚みのある礫を横積みすることを基本とするようだ。

29号竪穴住居跡（第39・40図、P L45・55・60～64）

東側石列を伴う竪穴住居跡である。南壁は確認できないまま終わり、主体部から南は既に流出してしまった。また、石列の東端も同様である。敷石住居であるが、その基本的形態は不明である。

N-1°-E前後を主軸とする。規模は不明だが、28号竪穴住居跡とそう変わりはない。壁高は北壁で最大30cmを有する。

礫が湧起した地点に床が存在し、十分把握していない。おそらく、周縁にはテラスを設けていたものと



第38図 28号竪穴住居跡(2)

思えるが、それすら確認していない。柱穴なども同様で、壁柱穴が穿たれたことは確かだけれども、確認することも俣ならず、また確認しても水の湧出が激しく、深度まで知ることはできなかった。

周縁には平石（鉄平石）を主体とした縁石が敷かれ、炉の周辺には敷石が存在する。敷石については、礫が豊富な地点なので、28号竪穴住居跡同様、偏平な円礫を多用している。

石囲埋甕炉を用い、炉縁石には一部を除いて軽石の自然礫を使用し、炉体土器として2個体の土器を埋設していた。底面は確認できなかったものの、炉縁石と炉体土器との間にレベル差が存在するので、段掘りを行っていた可能性が高い。また、炉の北西側には、2の土器が埋設されていたが、遺存状況からすればこれも炉体土器の可能性が高く、住居の拡張ないしは移動を行ったのかもしれない。

出土遺物のうち、1・3は炉体土器、2は炉の北西側に埋設されたもの、8・10・12～15・17・18は床面直上、9は2の内側から出土したものである。なお、6は新潟県を主体とする南三十稻場式の影響と考えられる。

時期は堀之内1式期に該当し、その中でもやや新しい段階か。

石列は28号竪穴住居跡同様住居の奥壁から壁体を構築しはじめ、住居から離れるところで石積みを開始する。底面は住居の床面と等しく、何ら遮るものはない。西側の石列以上の巨礫を使用しているが、概ね偏平で横積みしている。

30号竪穴住居跡（第41図、P L 60）

畑の筆境となる地点であり、敷石住居の奥壁と炉の底部しか確認していない。

N-28°-Wを主軸とし、壁高は最高でも10cmにも満たない。規模は不明だが、奥壁から炉の中央まで2.53mほどあるから、およその規模は判断可能である。

床は周縁にテラスを設けるもので、テラス内には壁柱穴が巡る。テラス下には縁石の一部と思われる礫群が認められるが、原位置を留めるものではない。

炉は埋甕炉であり、その底部だけが残存していた。図上1個体となっているが、実際には2個体の土器を確認している。

出土遺物のうち、1・2が炉体土器で、1が下方、2が上方から出土し、7は縁石とともに出土した。

時期は堀之内1式期のものだが、それ以上の時期的な詳細は不明である。

31号竪穴住居跡（第42図、P L 45・61・63～65）

畑の筆境により、住居の大半が削られてしまった。敷石住居跡であるが、奥壁部分が残るのみである。主軸はN-14°-W前後を成し、副軸は現状で3.38mをはかる。壁高は約30cmを最高とする。

床は周縁に床から数cm程度のテラスを設け、テラス直下には縁石を配している。ひとつだけだが、縁石のなかに巨大な平石（鉄平石）が敷設してあり、敷石を示すものであろうか。北西コーナーには平石（鉄平石）を立石した箇所がある。北東コーナーには縁石が認められず、代わりに石棒を置き、テラス上に縁石とは別な形態で礫を配していた。柱穴は壁柱穴である。

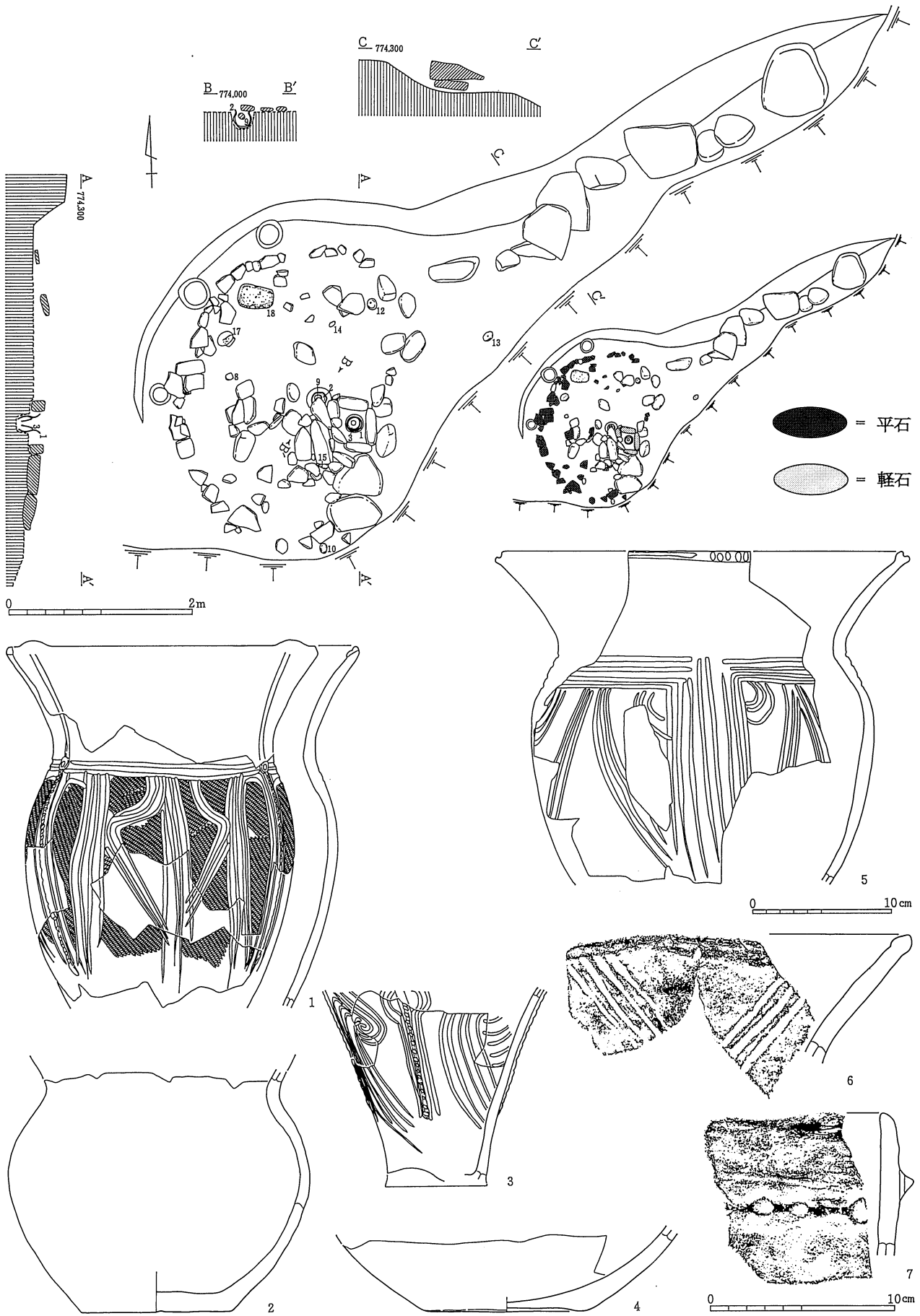
遺物は位置を確認したものはすべて床面直上から出土した。

時期は堀之内1式期に該当し、その中でも比較的新しい時期の産物と考えられる。

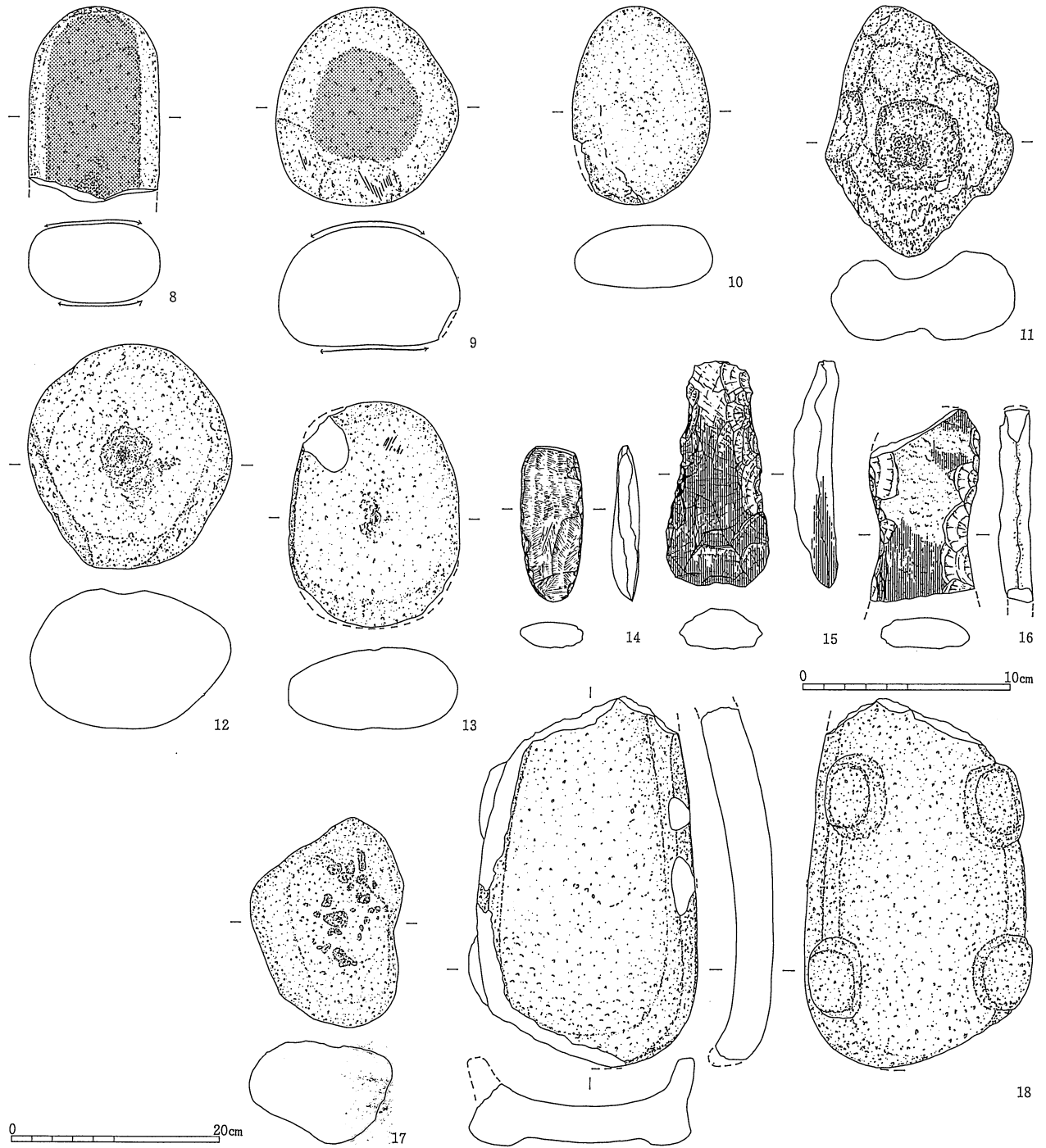
(3) その他の竪穴住居跡

32号竪穴住居跡（第24・25図、P L 44）

18号竪穴住居跡に西側を切られ、また土坑とも重複するが、それとの新旧関係は不明である。南壁につ



第39図 29号竖穴住居跡(1)



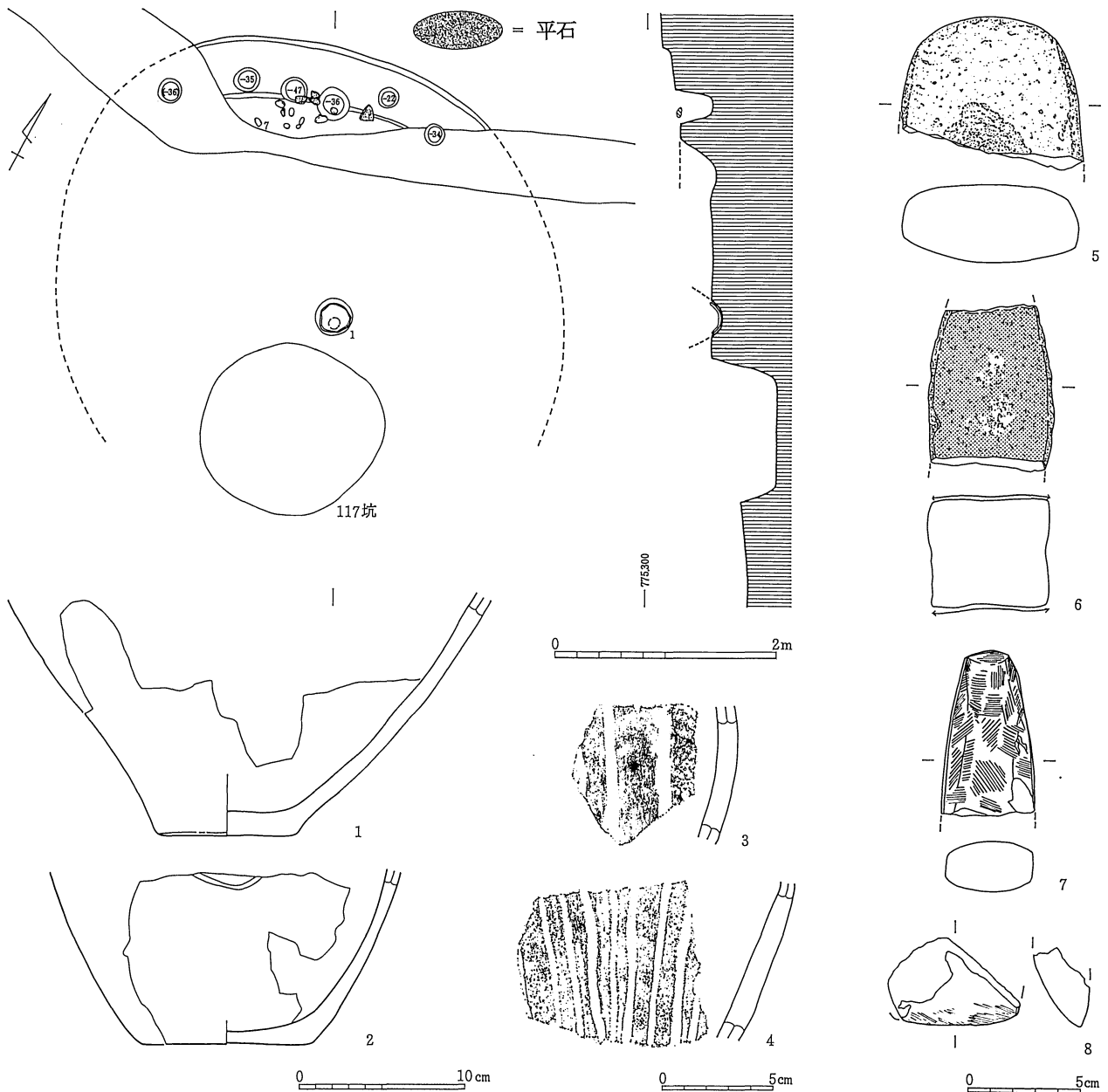
第40図 29号竪穴住居跡(2)

いては、既に削平されている。

主軸はN-5°-E前後と見込まれる。土器が埋設されているが、これを出入口部の埋甕とみるか、埋甕炉とみるかで、規模は大きく変化する。また、掘り込みが全体に浅く、東壁のラインもあまり信用できるものではない。壁高は北壁で最高25cmをはかる。

土器が埋設されている以外、特別な施設はない。土器は深鉢の胴部中央以下を用い、底部は貫通していた。焼土などは認められない。東側には偏平な円礫が敷設してあった。

時期が推定できる遺物は、埋設土器以外何ら出土していない。この種の文様は類例をみず、時期比定が困難なのだが、一応中期後葉の頃と推定した。ただし、胎土中に金雲母を含んでいることから、中期初頭、五領ヶ台II式の最終末という見方もある。



第41図 30号竖穴住居跡

33号竖穴住居跡 (第43図)

全体の掘り込みが浅く、しかも筆境の地点であるから、南端はすべて欠失している。床以上が残存する範囲も奥壁だけに限られる。

主軸は炉の方向からN-12°-W前後と考えられる。副軸長は推定2.7m、壁高は5cmにも満たない。

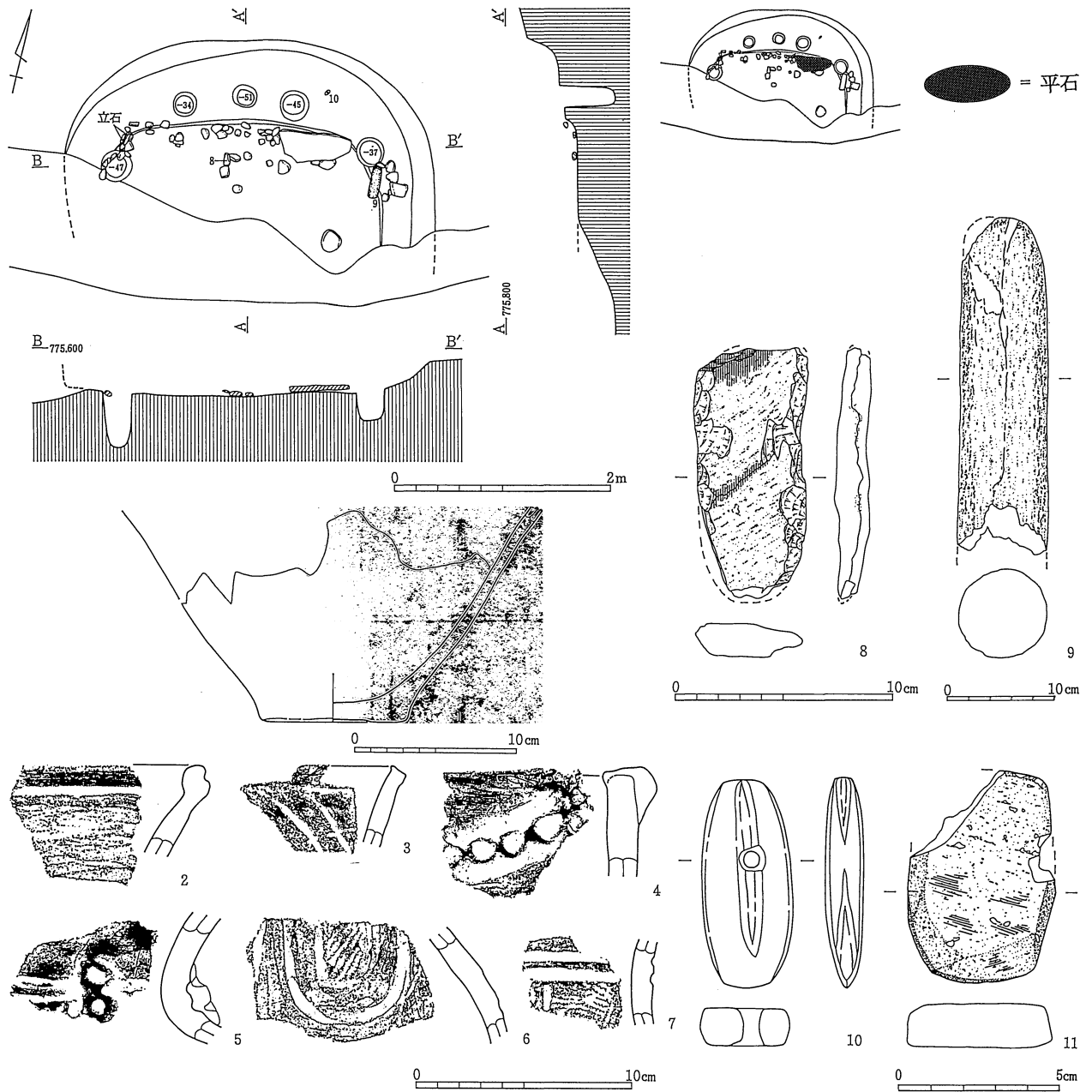
周縁には周溝が巡り、内部には小ピットが穿たれる。主柱穴が存在するものの、均等的な配置ではない。炉は安山岩系の礫を炉縁石とする石囲炉であった。

遺物は何も出土してしていない。住居構造からすれば、中期後葉の住居である公算が大きい。

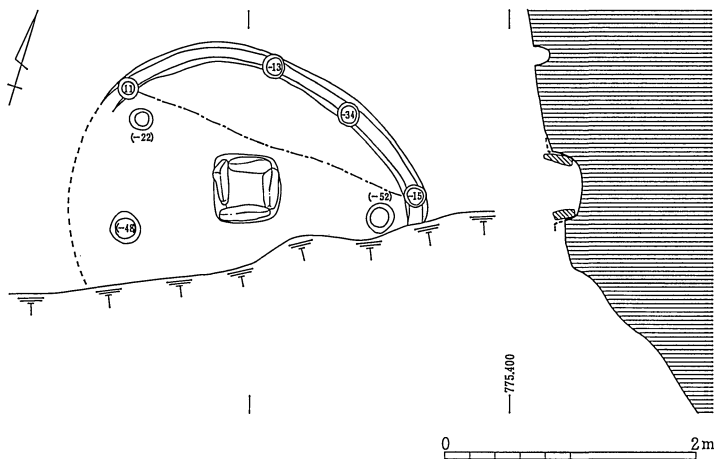
34号竖穴住居跡 (第44・45図、P L 45・55・64図)

35・36号竖穴住居跡を切っている。敷石住居跡であり、本来、柄鏡形を呈していたと思われるが、その部分は確認できなかった。また、南壁については欠落してしまった。

N-43°-Wを主軸とし、主体部の副軸長2.72m、推定主軸長2.6m、壁高は最高で64cmをはかる。



第42図 31号竖穴住居跡



第43図 33号竖穴住居跡

床の縁辺には高さ数cmほどのテラスが全周し、テラス直下には平石（鉄平石）を主体とする縁石が敷設される。その外側には、扁平な亜円礫から亜角礫を主体とした立石が認められたようで、それらの多くが転倒していたようだ。また、炉の南側には敷石の一部が残存している。

柱穴は壁柱穴だが、P₁～P₆がその中でも支柱穴となるもので、各間に小ピットが認められる。P₇・P₈が対ピ

ットである。

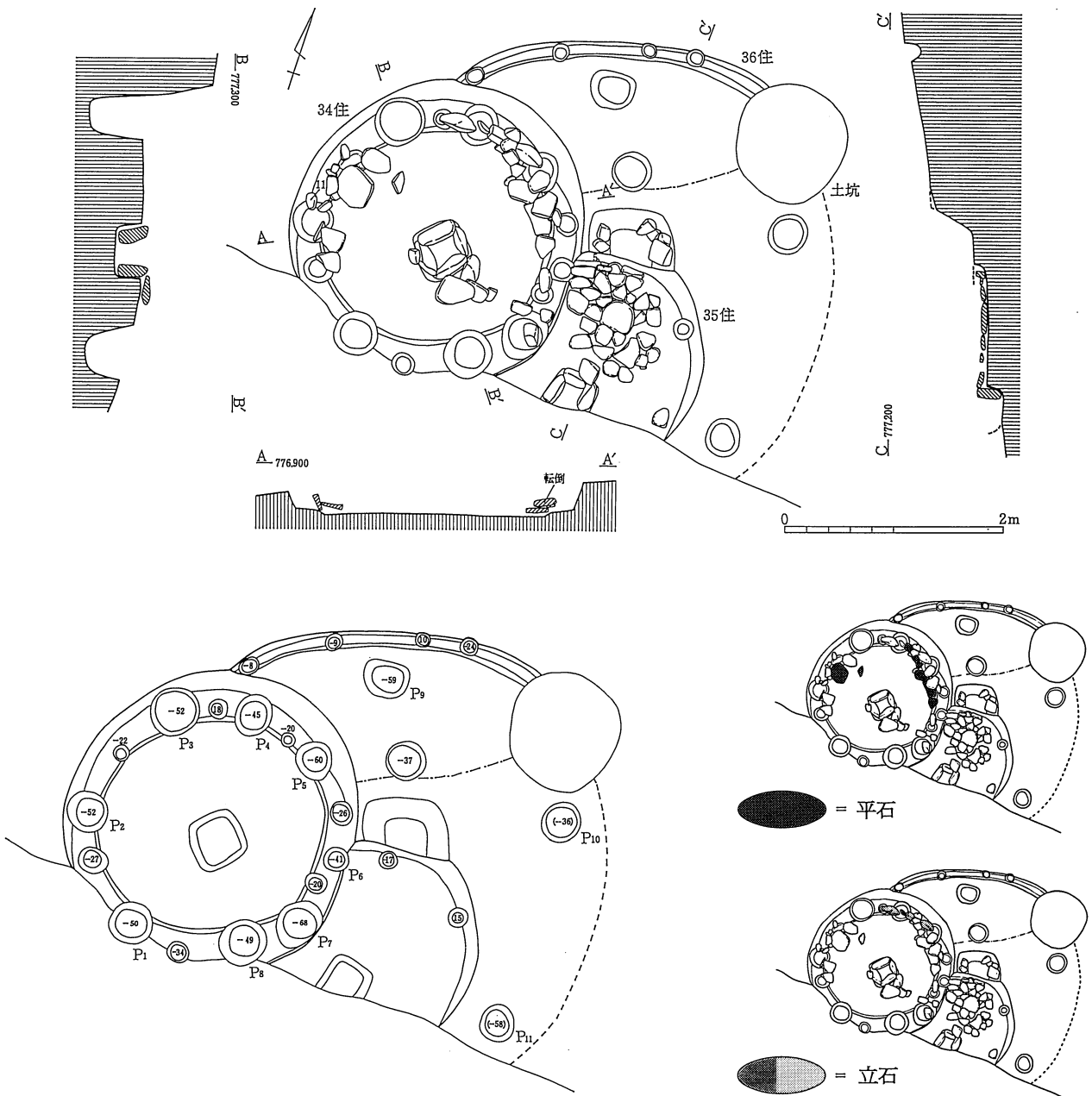
炉は安山岩系の礫を炉縁石とした石囲炉であり、底部を段掘りすることもなかった。位置を別にすれば、一見、中期的な様相を呈する構造である。

出土遺物のうち11はテラス面直上から出土した。それ以外は場所を把握していない。

時期は指標となる土器群が出土していないので困難極まりないが、例えば3については「茂沢タイプ」とも称されるもので、称名寺式の末から堀之内1式の初期という年代が考えられており、1・7のような粗製土器もその範疇に組み入れてもけっしておかしくはない。該期を中心とした年代を与えておこう。

35号竪穴住居跡（第44・46図、P L45・61）

36号竪穴住居跡を切り、34号竪穴住居跡によって西端を切られる。また南半分は、既に欠落している。



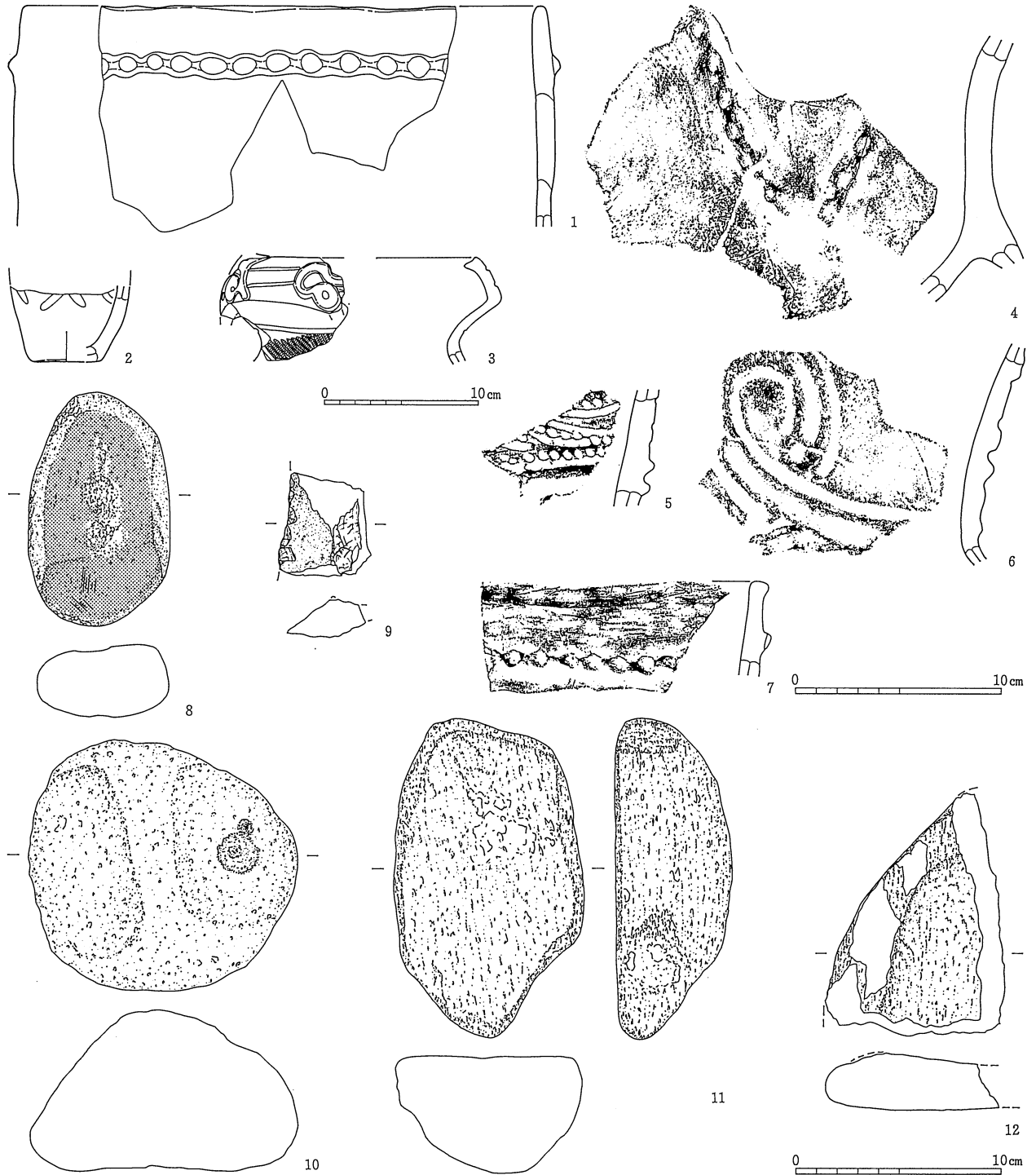
第44図 34～36号竪穴住居跡

敷石住居跡であるが、その形態は不明である。

主軸はN-14°-Eを成す。副軸長は2 m強と考えられ、非常に小振りな住居である。壁高は最高で40 cmほどをはかる。

床は平坦で、テラスなどの施設はない。柱穴らしきものも存在しないが、壁下に小ピットが認められる。炉の北側に敷石が認められるが、ここに平石（鉄平石）は存在せず、偏平な安山岩系の礫だけを使用していた。炉は石囲炉であり、安山岩系の垂角礫を炉縁石としていた。

5が床面直上、と言うよりは敷石の一部として敷いたようだ。ほかは、出土地点を把握していない。



第45図 34号竖穴住居跡

時期は、中期末から後期初頭のものか。

36号竪穴住居跡 (第44・46図、P L46・61)

34・35号竪穴住居跡によって、西側及び南側を切られる。また、土坑とも重複するが、新旧関係は不明である。

N-22°-Wを主軸とし、主軸長・副軸長とも推定4.4×3.8m前後になるものと考えられる。壁高は最高で20cmを計測する。

周溝をもち、内部に小孔を穿っている。P₉~P₁₁が主柱穴であり、該期特有の五角形を呈するものと思われる。炉は上端が削られているものの、東西両縁に角礫の残骸が残っており、石囲炉であったことが判明している。なお、焼土はまったく認められなかった。

出土遺物のうち、1は炉の内部から出土した。上面から出土し、しかも散乱した状態だったので、機能が何であったのかは分からない。2は覆土内から出土したものだが、場所を押さえていない。

時期は、1が中期後葉、加曾利EⅢ式新段階に位置することから、該期の住居跡と考えたい。

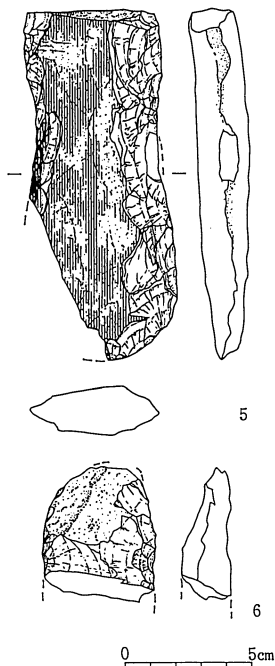
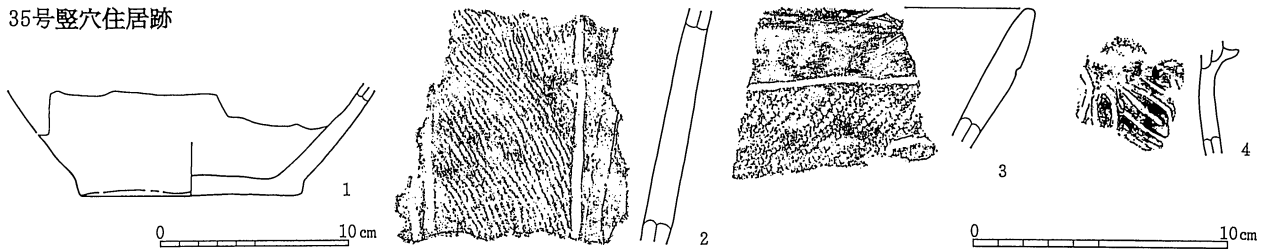
37号竪穴住居跡 (第47図、P L46・55・56)

38・39号竪穴住居跡を切って構築された、極めて小振りな竪穴住居跡である。

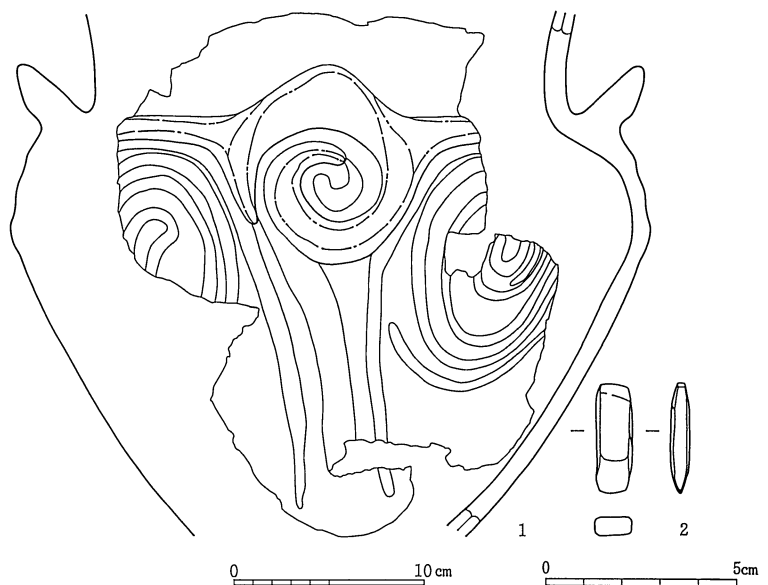
主軸はN-20°-Eを呈し、主軸長3.02m・副軸長2.08m・壁高は最高で64cmをはかる。

住居内に複数のピットが存在するものの、これらが本跡に帰属するものかどうか定かでない。ただし、

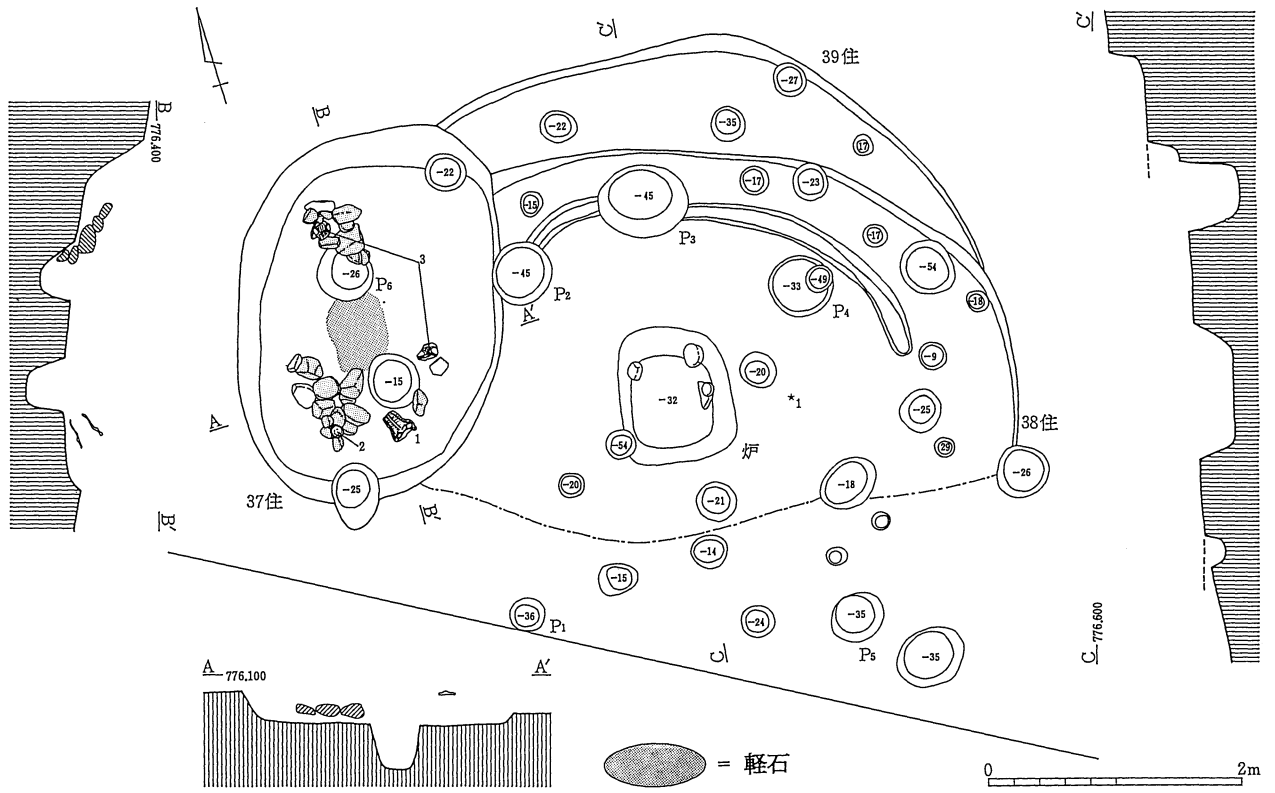
35号竪穴住居跡



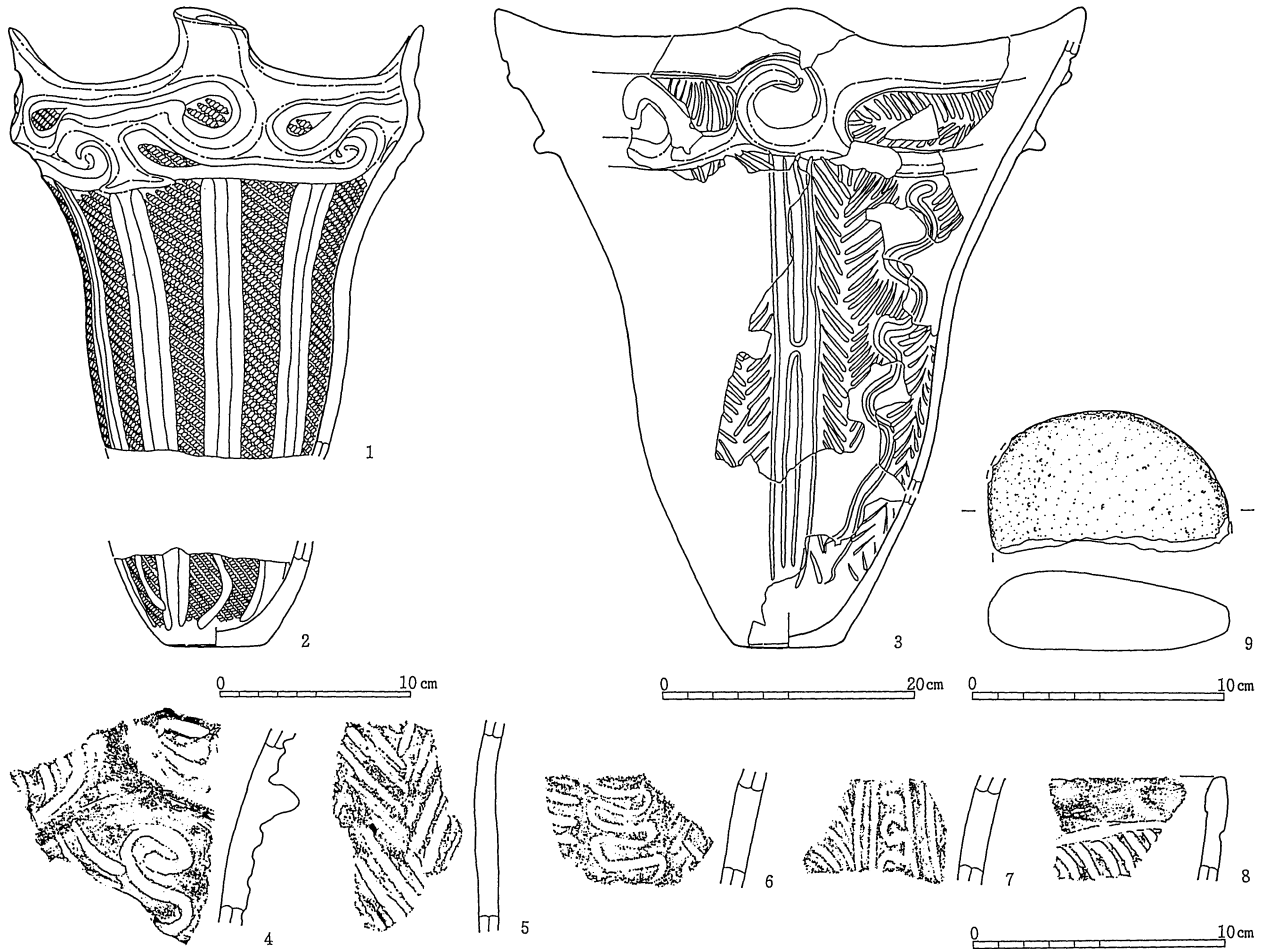
36号竪穴住居跡



第46図 35・36号竪穴住居跡

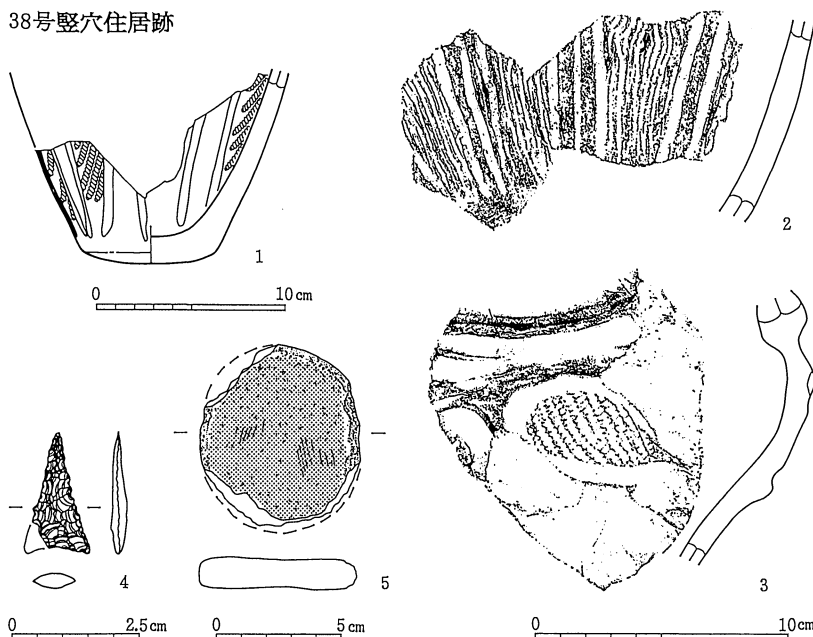


37号竖穴住居跡

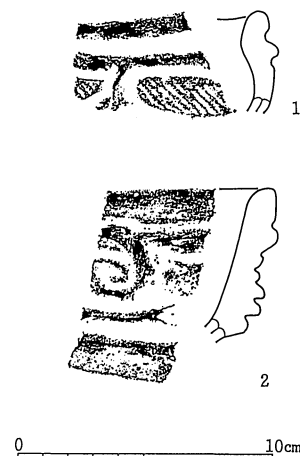


第47图 37~39号竖穴住居跡

38号竪穴住居跡



39号竪穴住居跡



第48図 38・39号竪穴住居跡

P₆には住居内の礫が入り込んでいるのでその可能性が高い。炉らしきものはないが、中央が顕著に焼けていた。炉の代わりに、これを火処として活用していたものと思われる。床面近くには、礫が一定のレベルで集積している。軽石がほとんどで、敷石を示すものではない。

出土遺物のうち、1は床面直上、2は礫上面、3は礫上面及び床から23cm浮いて出土したものと接合した。その他は、位置を押さえていない。

時期は中期後葉、加曾利E III式期に該当し、その中でも古段階に位置付くものと思われる。

38号竪穴住居跡（第47・48図、P L 46・60・61）

39号竪穴住居跡を切り、37号竪穴住居跡によって西壁を切られている。また、住居南側については、黒ボク土中に壁体を構築していることから、努力はしたものの残念ながら確認することはできなかった。

主軸はN-10°-E前後と見込まれ、副軸長は約5.4mと推定可能である。壁高は、39号竪穴住居跡を同時に調査しているので正確な数値は出てこないが、本来、50cm程度は確認していたことになるだろう。

奥壁のやや内側から周溝を確認した。P₂~P₄は支柱穴の一部であることが明確である。五角形を基本とするものと考え、対するものをP₁・P₅としたが、あまり正確性はない。炉には焼土が一切認められず、炉縁石も存在しなかった。

遺物はすべて覆土上層にしか認められていない。唯一、地点を把握した1についても、床から20cmも浮いていた。

時期は中期後葉、加曾利E III式期の古い段階に相当する。

39号竪穴住居跡（第47・48図、P L 46）

37・38号竪穴住居跡に大半を切られており、奥壁しか残存していない。

主軸や主軸長・副軸長などは一切不明である。ただし、一定の規模を有した住居跡であることは確からしい。壁高は最高で25cmをはかる。

わずかな出土土器から、中期後葉、加曾利E II式の時期と考えたい。

40号竪穴住居跡（第49図、P L46・56・60・65）

住居南半分は完全に削平されている。奥壁側では61号土坑を切っており、内部では新旧関係が分からないものの63号土坑と重複している。また、東側は風倒木痕によって破壊されている。南端部を壊されているが、柄鏡形敷石住居と考えられる。

主軸はN-2°-Eを成し、主体部の副軸長は約3.8mと推測される。主軸長は不明だが、連結部の状況からすれば3.7m前後であろうか。壁高は北壁で最高20cmをはかる。

床は縁辺に高さ数cmのテラスを設けている。テラスを除いた範囲には平石（鉄平石）を主とする敷石を敷設したらしいが、炉の北側を除いて抜き取りが行われたらしく、また炉から南は削平されているので、その形状が不鮮明である。なお平石（鉄平石）については、床面のみ見事に研磨されており、また詰め石の川原石もていねいに磨かれていた。

柱穴はテラス内に設けられた壁柱穴となる。ただし、深さ・大きさに一定の規則があり、P₁~P₄が大ピット（主柱穴）、その他が小ピットとなる。P₅・P₆は対ピットである。

炉は石囲埋甕炉である。奥壁側には唯一安山岩系の垂角礫が遺存しており、同レベルに炉体土器を埋設している。ただし、土器を埋設している以上、周囲を埋め戻すことになるのだから、見た目上段掘り状態になることは言うまでもない。

出土遺物のうち、4が炉体土器、7~10が床面直上から出土した。

時期は堀之内1式期の古い段階に位置付くものと考えられる。

41号竪穴住居跡（第50・51図、P L46・60）

柄鏡形敷石住居である。張出部の南東コーナーが土坑と重複している以外、単独で存在し、遺存状態も良好である。

N-2°-Eを主軸とする。主体部の主軸長及び副軸長は3.92×3.94m、張出部の主軸長及び副軸長は1.74×1.54mをはかる。壁高は最高で70cmを計測する。

覆土中には拳大から人頭大ほどの軽石が多数存在し、とくに炉の上面及び張出部については、万遍なく認められた。三田原遺跡群7・18号竪穴住居跡でも同様のことがいえる。

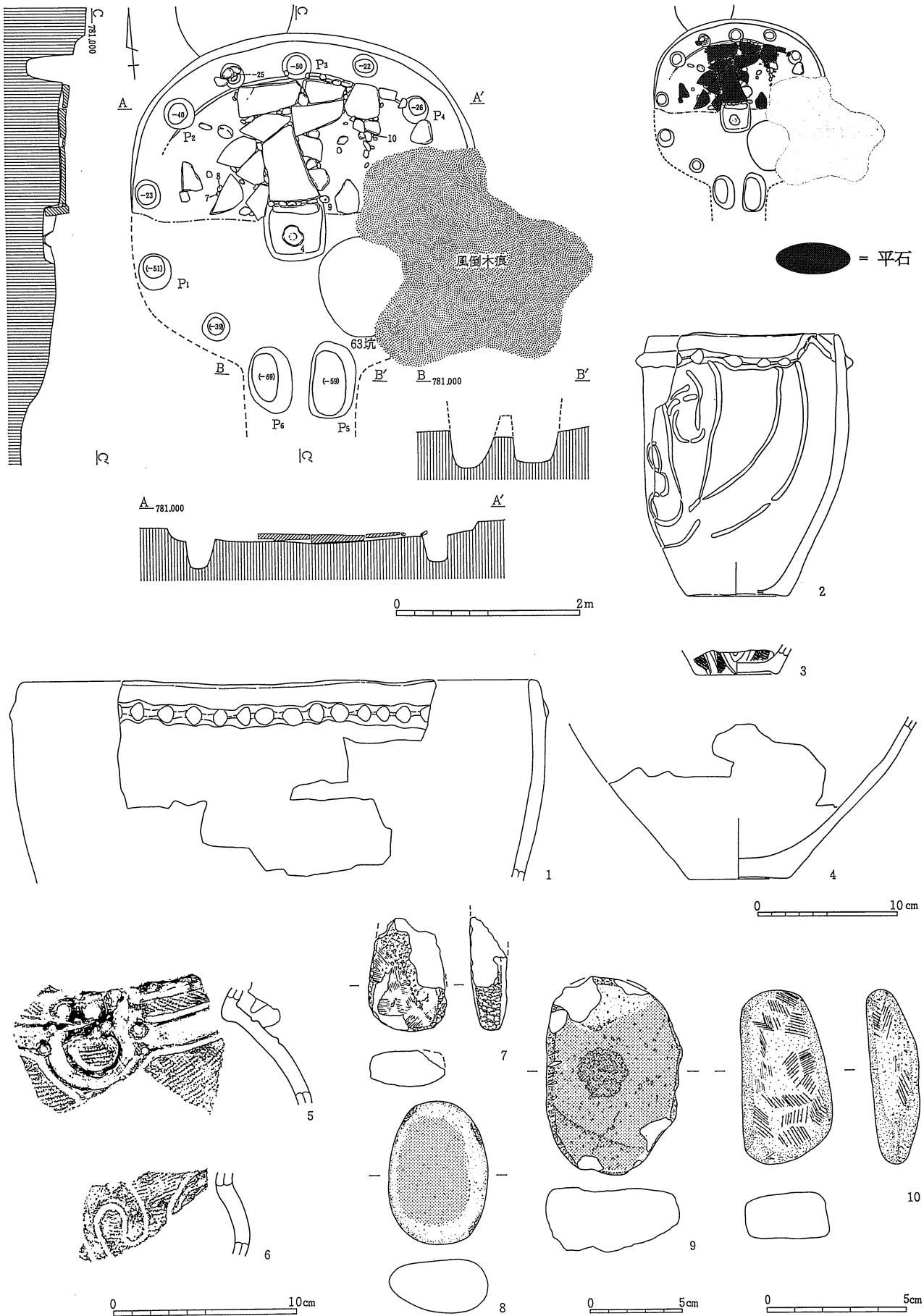
主体部の床は、対ピット間を除いて、縁辺部に高さ数cmほどのテラス面を設け、さらに一部テラス面内に周溝を設定していた。張出部を含め、ほかは一通り平坦であるが、炉の周辺だけわずかに傾斜している。

主体部には主にテラス部分に小円礫を、床面にやや大形の偏平な礫を縁石として敷設している。平石（鉄平石）はひとつしかなく、なかには地山中に含まれる火山弾（熔岩）も使用している。炉の南西側には平石（鉄平石）による敷石が認められた。

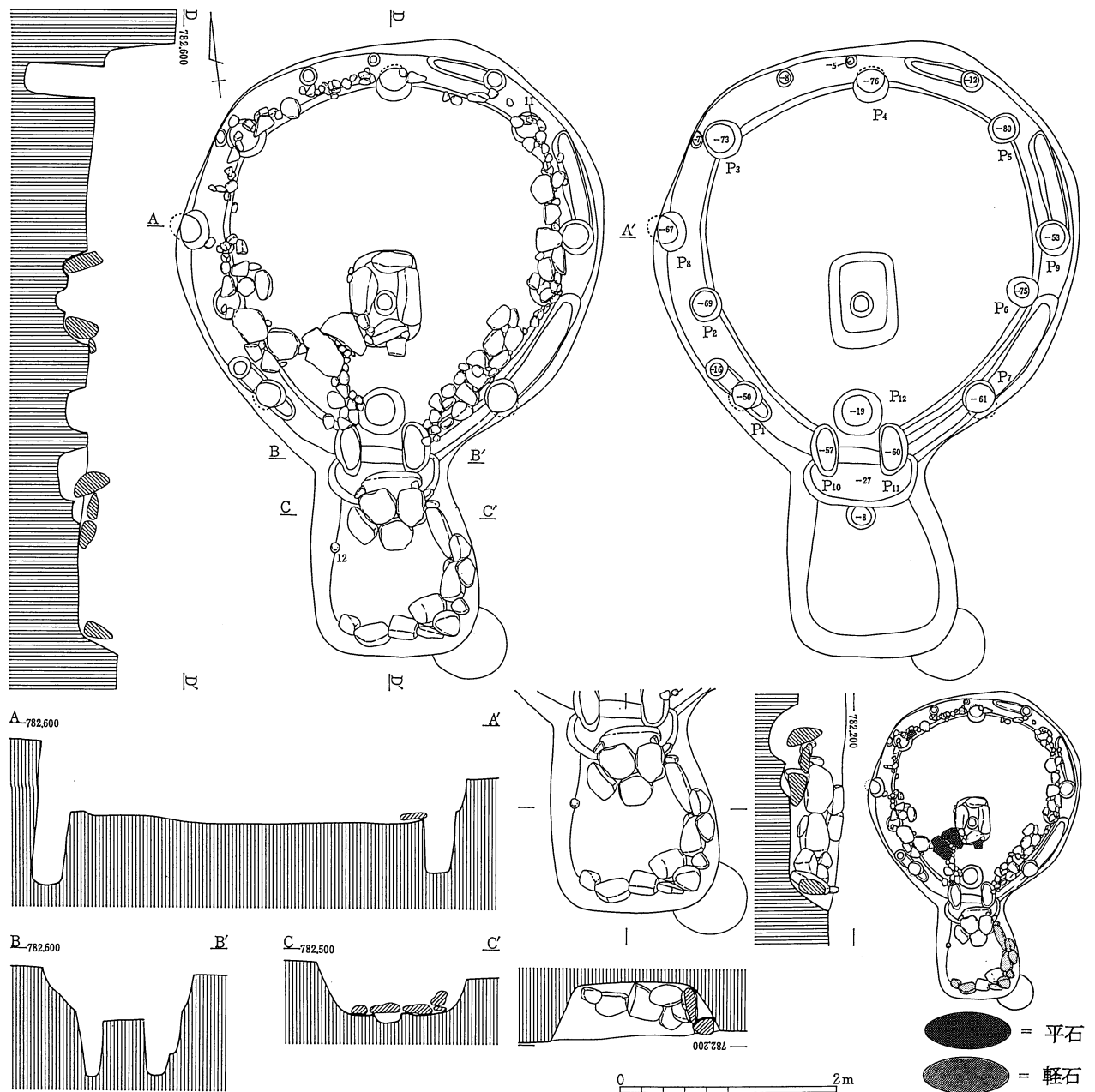
連結部には安山岩系の框石を埋め込み、そこから張出部に向けて、同様の偏平な礫を敷石状に敷設している。

張出部の壁体には、西側を除いて石積みを施している。根石を立積みするものがほとんどで、以後横積みへと変化していくのだろう。また、軽石を主体的に利用している。西側壁については、おそらく倒壊したのだろう、そもそも覆土中に軽石が多量に認められたことから識別困難であった。

柱穴は壁柱穴で、テラス上に位置するP₁~P₇が該当する。それ以外に、P₈・P₉という柱穴ラインから外れるピットが存在し、別な目的があって設置されたものと思われる。P₁₀・P₁₁は対ピット、またそれを繋ぐ楕円形の浅いピットが存在する。P₁₂は深さからみて土器を埋設するには浅すぎる。本来、軽石製の石鉢を埋め込むためのピットではないかと考えている。



第49図 40号竖穴住居跡



第50図 41号竪穴住居跡(1)

炉は石囲炉であり、安山岩系の垂角礫を炉縁石としていた。底部中央が一段下がっており、おそらくここには土器が埋設されていたのだろう。

遺物は極わずかしか出土していない。そのうち、位置を把握した11・12は床面直上から出土した。

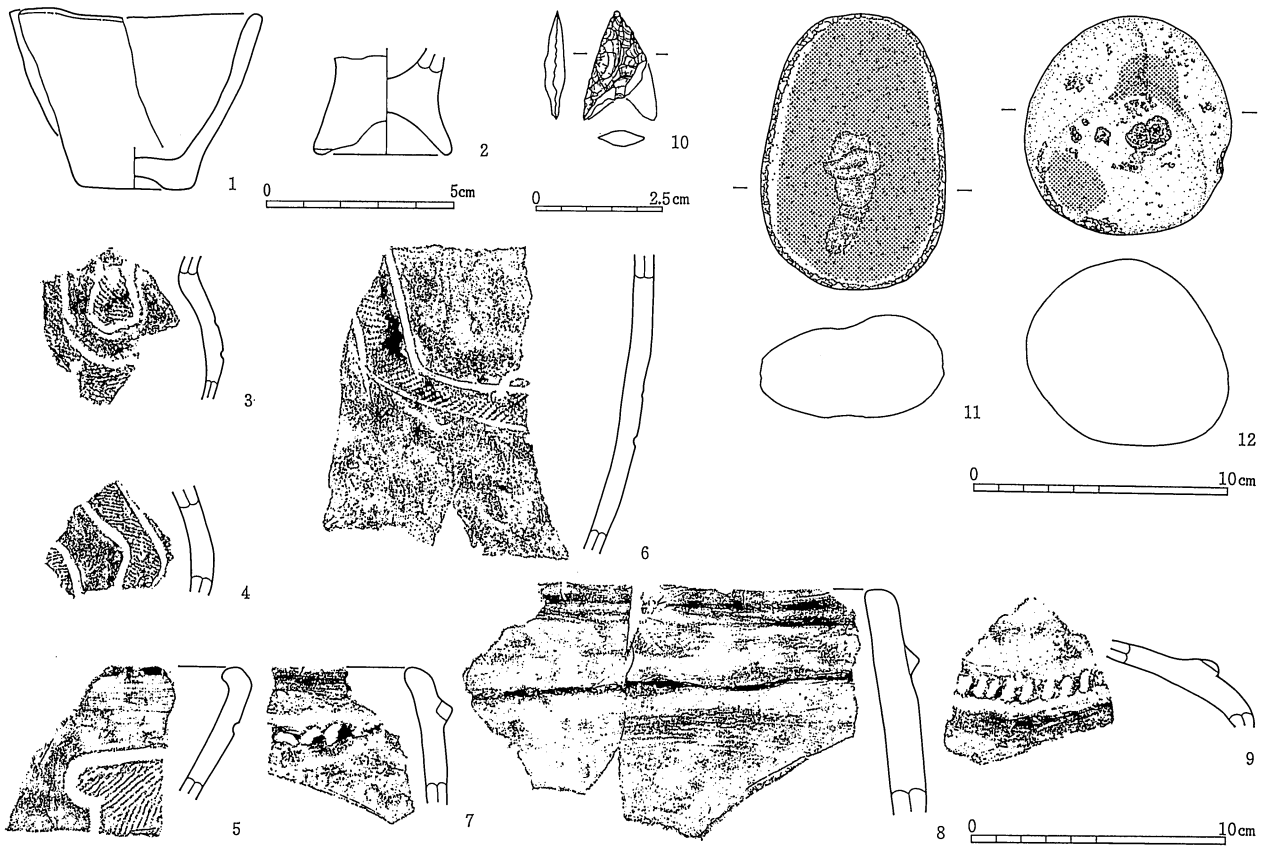
時期は後期初頭、称名寺式期に該当する。

42号竪穴住居跡 (第52図)

圃場整備事業にかかわる土取り作業によって、黒ボク土がすべてすき取られた部分であり、遺存状況は極めて悪い。柄鏡形敷石住居と考えられるが、床面そのものが削り取られている。

主軸はN-16°-Wを呈し、主体部の主軸長及び副軸長は、推定で3.8×4.0m前後と思われる。

主体部にはP₁~P₅という壁柱穴が巡り、東西中央軸には柱穴ラインから若干外に外れ、しかも柱穴に比べれば小ピットともいべきP₆・P₇が存在する。対ピットはP₈・P₉で、またそれを繋げる大形



第51図 41号竪穴住居跡(2)

のピットが存在する。本来、炉と対ピット間に軽石製の石鉢を埋設するピットが存在したはずだが、土坑と重複しているため確認できなかった。

P₄の覆土最上層からは、平石（鉄平石）及び詰め石とも取れる小さな川原石が出土した。縁石が落ち込んだものと判断し、これを敷石住居跡と考え、連結部状況から柄鏡形と推定した。

炉は段掘りして炉体土器を埋設したもので、基本的には石囲埋甕炉であったものと考えられる。

遺物は、1が炉体土器、2・3がP₆内、4がP₄内、5がP₈内である。

時期は後期初頭、称名寺式期のものである。

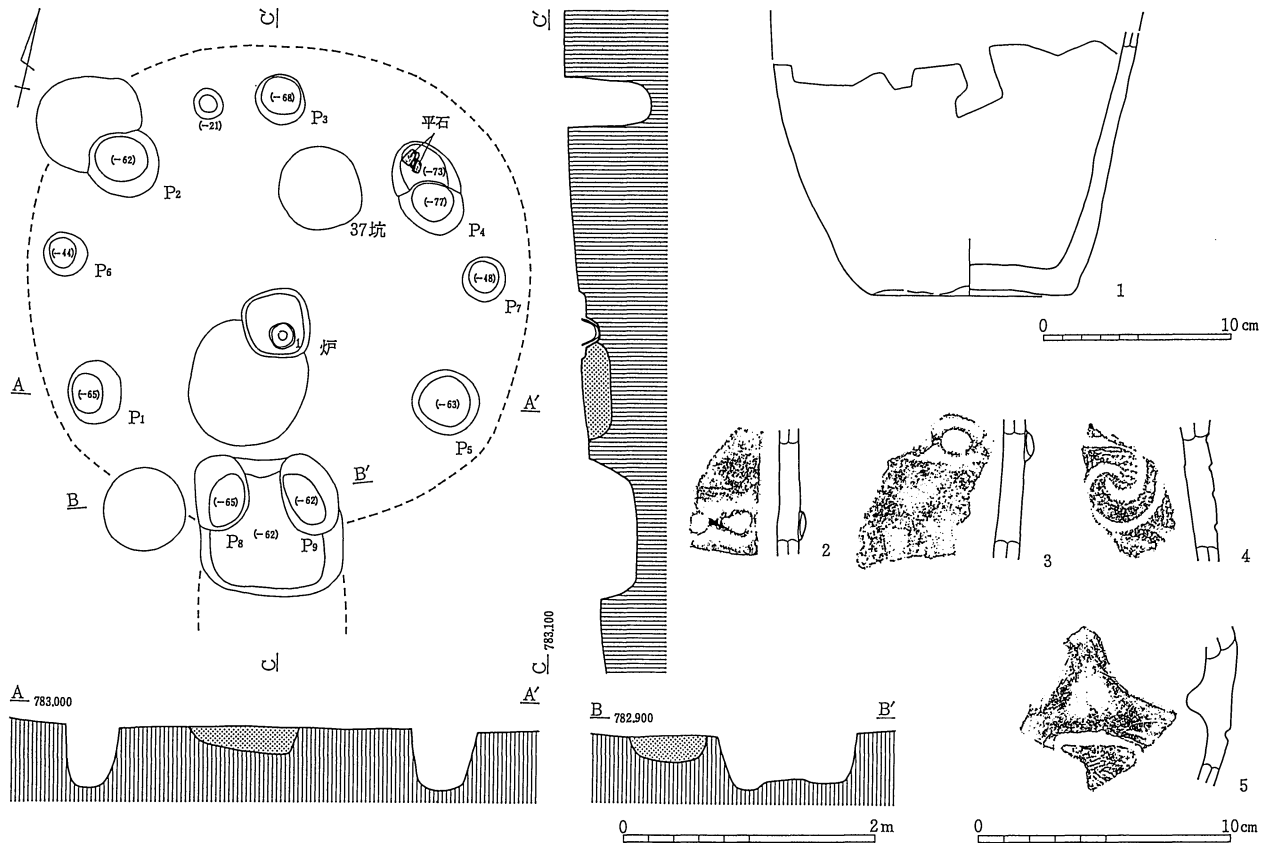
43号竪穴住居跡（第53図、P L47・60・61・64）

柄鏡形敷石住居跡である。奥壁側は調査区外となっており、主体部西側は攪乱によって破壊されている。また、全体に掘り込みが浅く、礫そのものが位置を変える部分が多い。

N-11°-Eを主軸とする。主体部の副軸長は3.7m前後と推定され、張出部の主軸長及び副軸長は1.89×1.14mをはかる。壁高は概ね15cm内外である。

主体部の床の周縁にテラス状施設は認められないが、床自体、荒されているので確実ではない。主体部の周縁には小礫が巡るようで、また炉の南側ではやや大きめの平石（鉄平石）が存在する。前者を縁石、後者を敷石の残骸と見做したい。連結部は偏平な円礫を敷設しており、框石は存在しない。張出部には平石（鉄平石）を主体に敷石を行っていた。東側壁には立石したものもあるが、壁体として利用したのか信憑性に欠ける。

壁柱穴及び対ピットが認められ、対ピットにはそれぞれを連結する浅いピットが存在する。また、対ピットの両側、主体部方向に延びる周溝状の底の深い掘り込みが存在する。張出部西側壁直下には周溝が延



第52図 42号竪穴住居跡

び、小ピットによって終焉する。対ピットと炉の間には、軽石製の石鉢が埋設されていた。

炉は安山岩系の垂角礫を利用した石囲炉であった。奥壁側だけが原位置を保ち、ほかは外側に倒れ込んでいた。

出土遺物のうち、1・2・11・12は床面直上から、3は炉の覆土中から、8は炉縁石の詰め石として出土した。13は埋設された石鉢である。

時期は3・5～7が中期末葉の加曽利EIV式、4が後期初頭に下りそうで、そのような年代を与えるしか仕方がないだろう。中期末から後期初頭としておきたい。

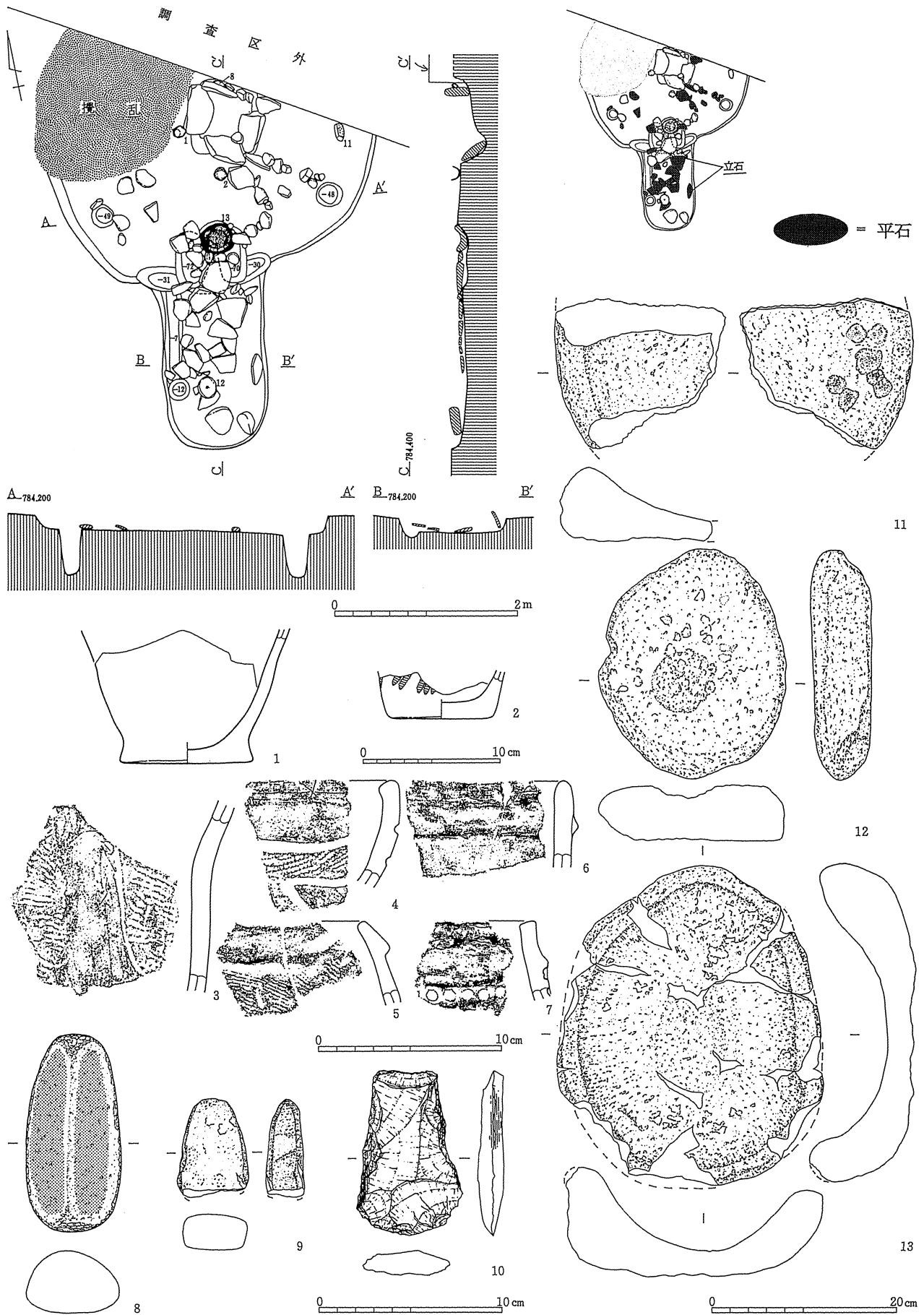
44号竪穴住居跡 (第54図、P L47)

圃場整備事業にかかわる土取り作業によって、黒ボク土がすべて取り払われた部分である。壁体はおろか、床面上端までもすき取られている。

主軸はN-19°-W前後を呈し、主軸長は5.18m、副軸長もほぼ同規模だと考えられる。

P₁～P₅が支柱穴で、五本柱となる。P₆はもしかすると出入口施設と何らかの関係があるのかもしれない。周溝が巡り、内部には10～20cm程度の小ピットが穿たれている。炉は存在するものの、焼土はまったく認められなかった。

遺物は周溝から出土した1の凹石だけで、柱穴も含め土器破片は出土していない。しかし、住居構造からすれば、中期末葉に位置付くことは間違いない。



第53図 43号竖穴住居跡



第54図 44号竖穴住居跡

(4) 平地式住居跡

1号平地式住居跡 (第55図、P L 47・48・63)

黒色土中に認められたものである。住居構造がほかとは異なり、住居全体を取り込む配石（もしくは敷石）や、特殊な張出部を有し、また床面下には堀之内2式以前の土器が多数包含していた（本跡は堀之内2式期）。わずかな掘り込みが存在したのかもしれないが、以上の理由で本跡を平地式住居としたい。

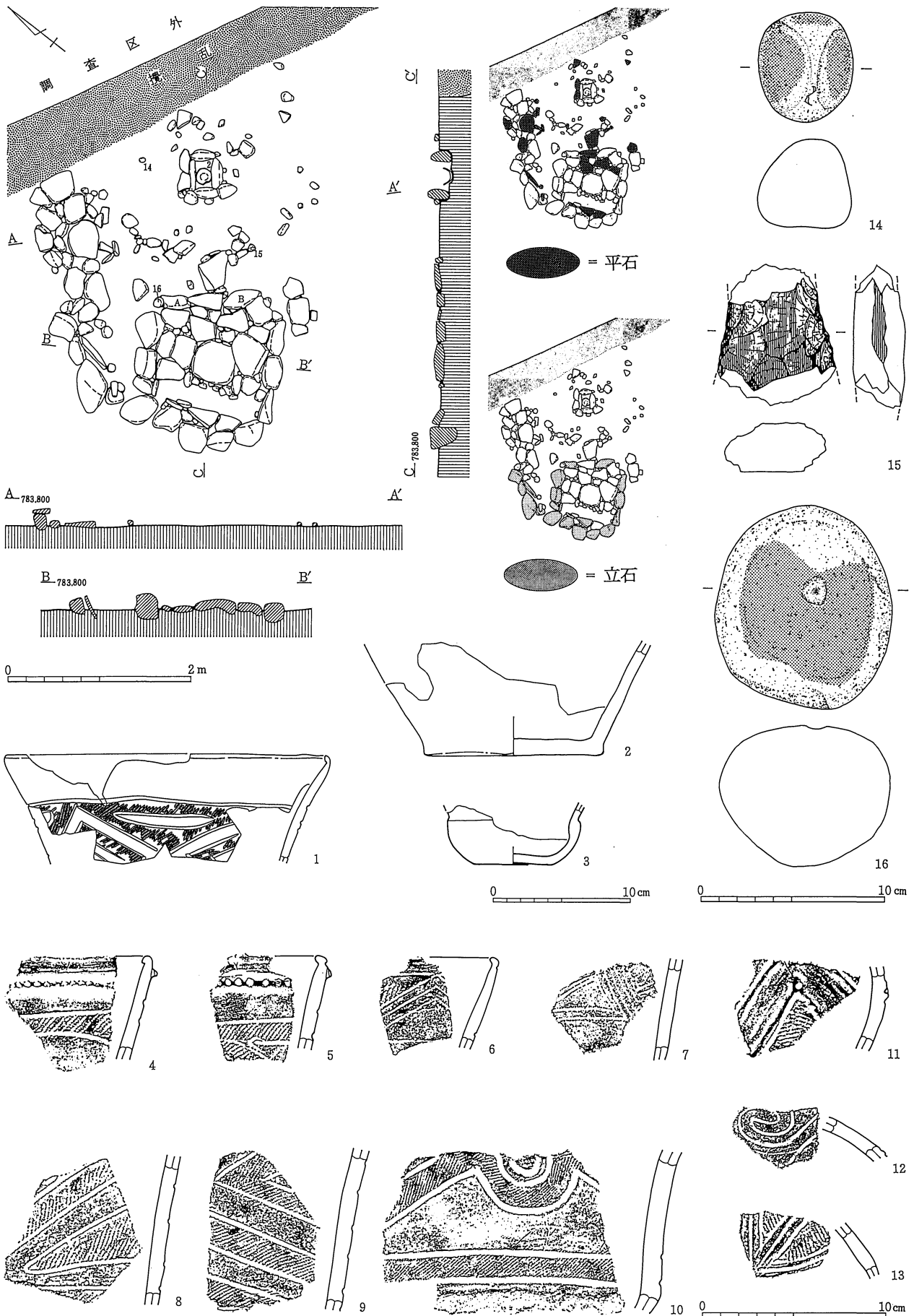
柄鏡形敷石住居の一類型と考えられる。奥壁側は調査区外となり、また農道が通過していることから攪乱が生じている。奥壁側は、最早何も残っていないだろう。

黒色土中で確認したため、床の状態はまったく不明である。しかし、礫の残存状況からすれば、ほぼ水平に近い状況を呈していたものと思われる。また、柱穴やその他のピットについても、確認できなかった。

主体部の周囲には円礫が飛散しており、張出部付近では比較的密集し、しかも円弧を描くように配置されているが、東側ではかなり乱雑となっている。これについては縁石の一部と判断していいだろう。炉の周辺には平石（鉄平石）を主体とした礫の敷設が認められ、これを敷石の一部と考えたい。

張出部は極めて特徴的で、周囲を方形に、しかも立石状に区画した後に、内部を偏平な礫によって充填している。前者が一段高く、後者が床面と同一レベルであるが、とりわけ、A・Bの礫は高く設定されており、出入口を強く意識していたものと思われる。連結部には平石（鉄平石）を重点的に配しており、やはり出入口部を意識したとしか思えない。張出部先端には、長方形に区画した無敷石空間を設定し、その南には平石（鉄平石）の立石が認められる。

炉は石囲埋壺炉である。安山岩系の亜角礫を炉縁石とし、底を段掘りして粗製深鉢の底部を埋設している。住居を取り囲む配石（もしくは敷石）は、西側にだけ認められた。東側にも存在したのだろうが、どこ



第55図 1号平地式住居跡

かの時点で抜き取りが行われたものと思われる。張出部同様、周縁を一段高く立積みし、そこから内側を床面と同レベルで偏平な礫を敷設している。立積み部分の北寄りでは、上に横積みを施した箇所が存在する。

出土遺物のうち、2は炉体土器、14・15は床面直上からの出土である。また、16は連結部西側に祀られたものである。その他は出土位置を把握していないが、基本的に覆土が存在しないから、床面上の遺物と判断願いたい。

時期は後期前半、堀之内2式期に該当し、土器をみればその中でも中葉頃に位置付くものと考えられる。

(5) 土坑 (第56～66図、P L 48～51・56～60・62・64・65)

該期の土坑は、表1に載せたとおりである。それ以外のものについては土器を伴っておらず、時期を把握することができない。しかし、そのほとんどが該期のものであることは間違いなく、さらに住居軒数からいえば後期前半代、しかも多くが堀之内式期に該当するのではないかと考えられる。ここでは、これらを一括して報告するが、以下、代表的な事例のみ記述することにする。代表的な事例とは、極端に規模が大きいもの・特殊な施設が認められるもの・覆土中に礫を有するものなどである。なお、各土坑の深度については、第8～11図を参照されたい。単位はcmである。

7号土坑は、径4.70m、深さ1.78mをはかる超特大の円形土坑である。覆土は細かく分層可能であったが、大きくは3層が水成堆積が主体で、粗砂・小礫からなるもの、2層がこれも水成堆積の影響力が大きいものの、黒色土が縞状に入り込むもの、1層が通常自然堆積土ということになる。短期のうちに2層まで堆積し、以後緩やかに埋没したものと考えられる。なお、1層中には多量の遺物が含まれており、ことさら土器破片が目立った。しかし、土器については接合しても完形品は皆無であり、また13号竪穴住居跡3と接合したものも存在した。それとは別に、2層から3層にかけてはシカの骨片が多量に出土しており、しかも状態が極めて良好であった(P L 65)。一部、焼骨も含まれている。1層下部には焼土層が存在し、状況からすれば投棄されたものではなく、ここで焚かれたものと判断した。またここから炭化材が出土し、先のシカの骨片が余りに残存状況が良かったため、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し放射性炭素年代測定を行った。実際には学習院大学放射性炭素年代測定室が行っているのだが、年代値は $2,820 \pm 170 \text{y.B.P}$ (870B.C : Gak-17262) であり、縄文時代晩期前半頃に相当する。だが、本遺跡では晩期の遺物は採取されていないし、実際には加曽利B III式までしか存在しないのである。考古学的見解は堀之内2式最終末という年代を与えたいのだが、調和しない理由はまったくもって不明である。

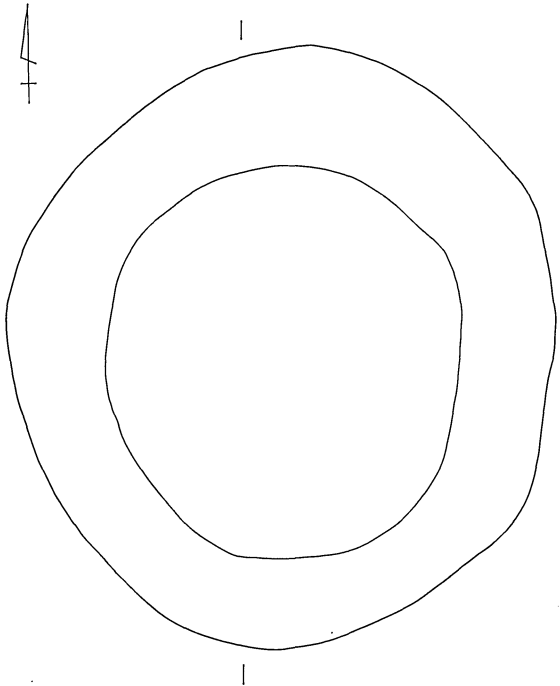
22号土坑は、堀之内1式土器が共伴しているもので、また5の軽石製石鉢が覆土中層に伴っていた。提示した土器は、すべて新潟県地方を中心とする南三十稻場式土器であり、珍しい遺物の在り方である。また、堀之内1式ともある時期併行関係にありそうな気配を感じる資料である。

23号土坑は、称名寺式の末から堀之内式の初頭の時期である。下部に軽石を詰め込み、その直上に1・3の土器を置き、周囲に安山岩系の偏平な礫を敷設している。最上層には、軽石まじりの黒褐色土が堆積し、遺物を多数含んでいた。提示したのは2・4・5のみだが、それ以外にも多くの土器破片を伴っていた。

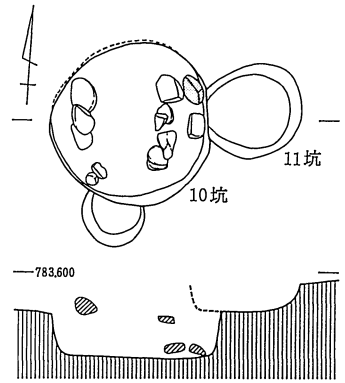
34・35号土坑は長方形プランを呈するもので、規模からみても1～5号土坑墓に近似している。35号土坑からは堀之内1式土器が共伴しており、もしかすると該期の土坑墓がここに形成されたのかもしれない。遺構番号を付していないが、34号土坑の東側、39号土坑と重複する土坑もこの形態を呈する。

61・62号土坑は異様に深く、また隣接している。61号土坑は堀之内1式古段階の40号住居に切られてお

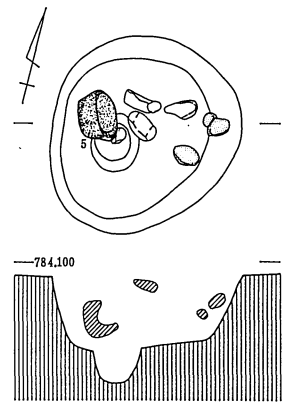
7号土坑



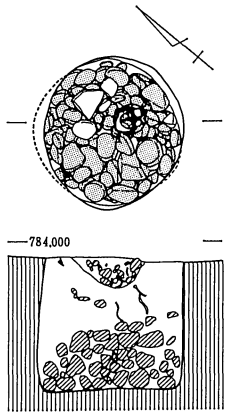
10・11号土坑



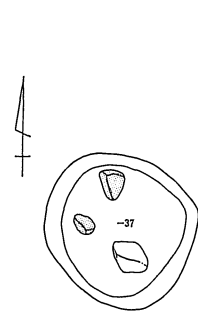
22号土坑



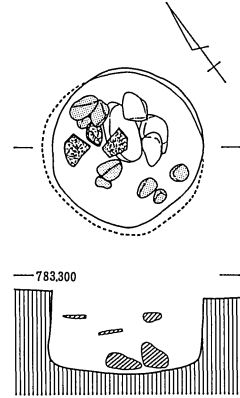
23号土坑



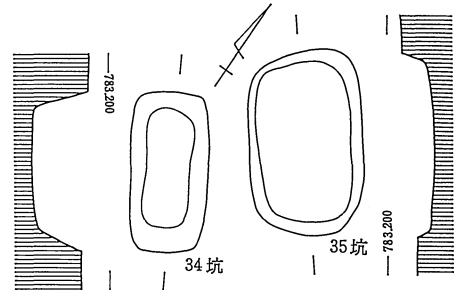
27号土坑



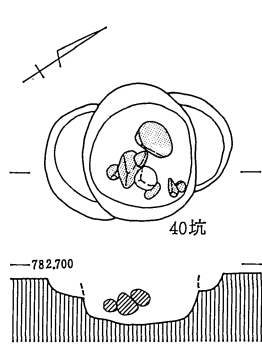
31号土坑



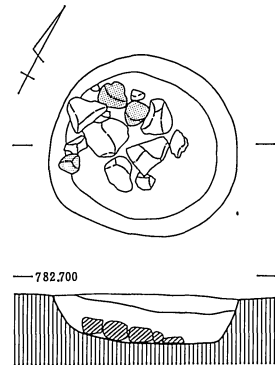
34・35号土坑



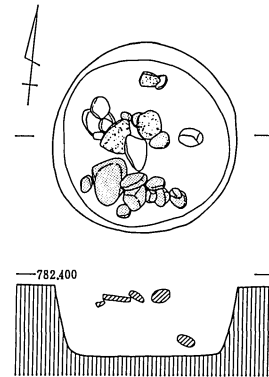
40号土坑



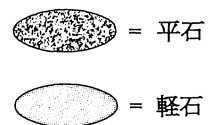
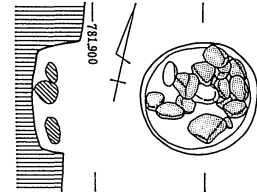
47号土坑



48号土坑

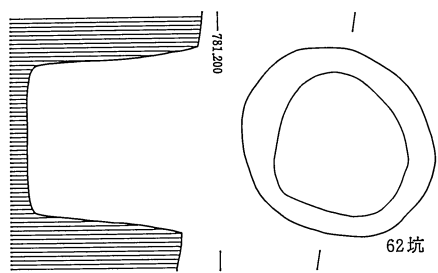


55号土坑

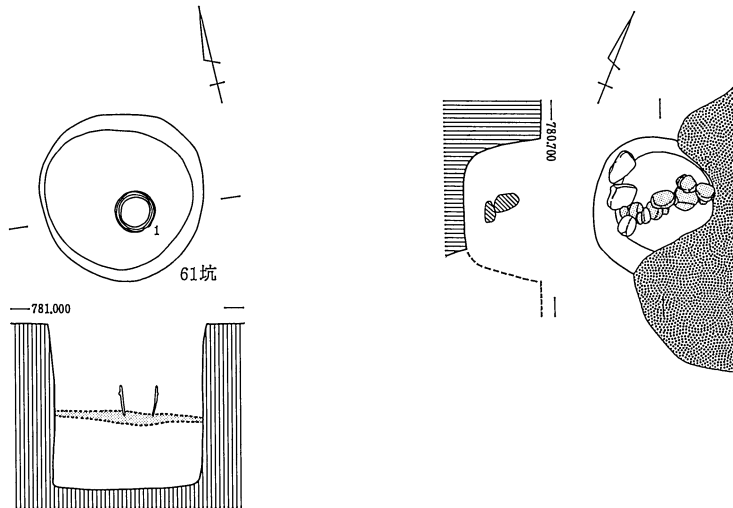


第56図・土坑(1)

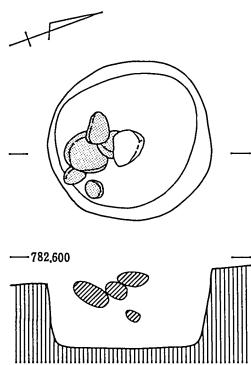
61・62号土坑



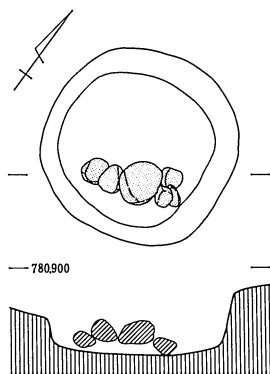
63号土坑



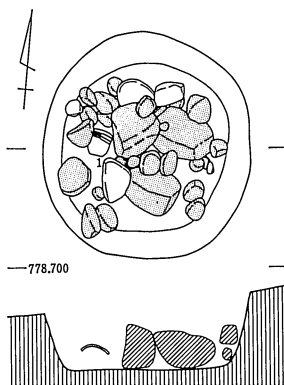
64号土坑



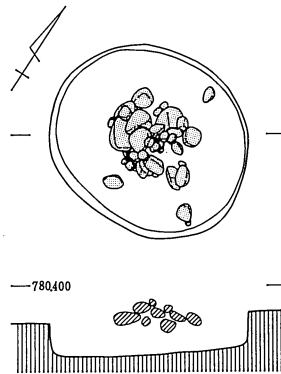
65号土坑



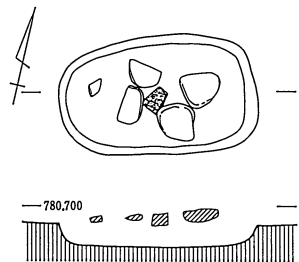
69号土坑



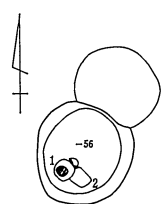
71号土坑



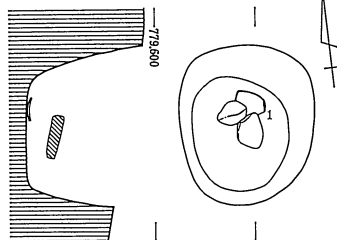
74号土坑



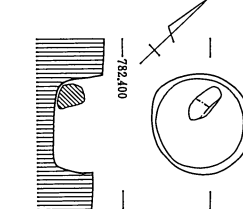
76号土坑



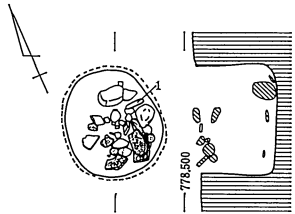
78号土坑



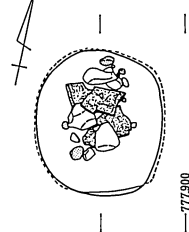
79号土坑



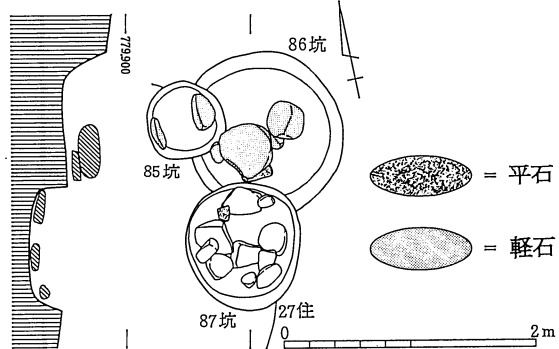
83号土坑



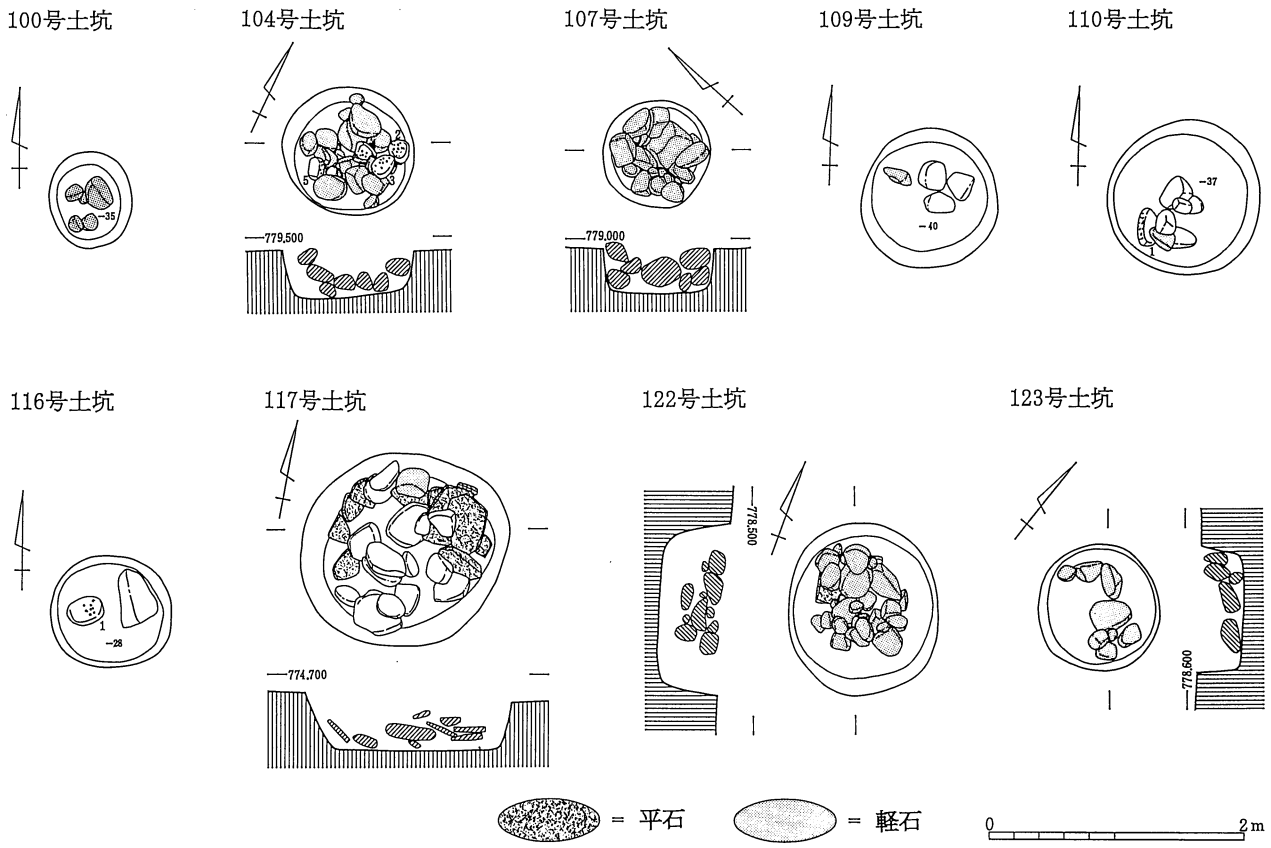
84号土坑



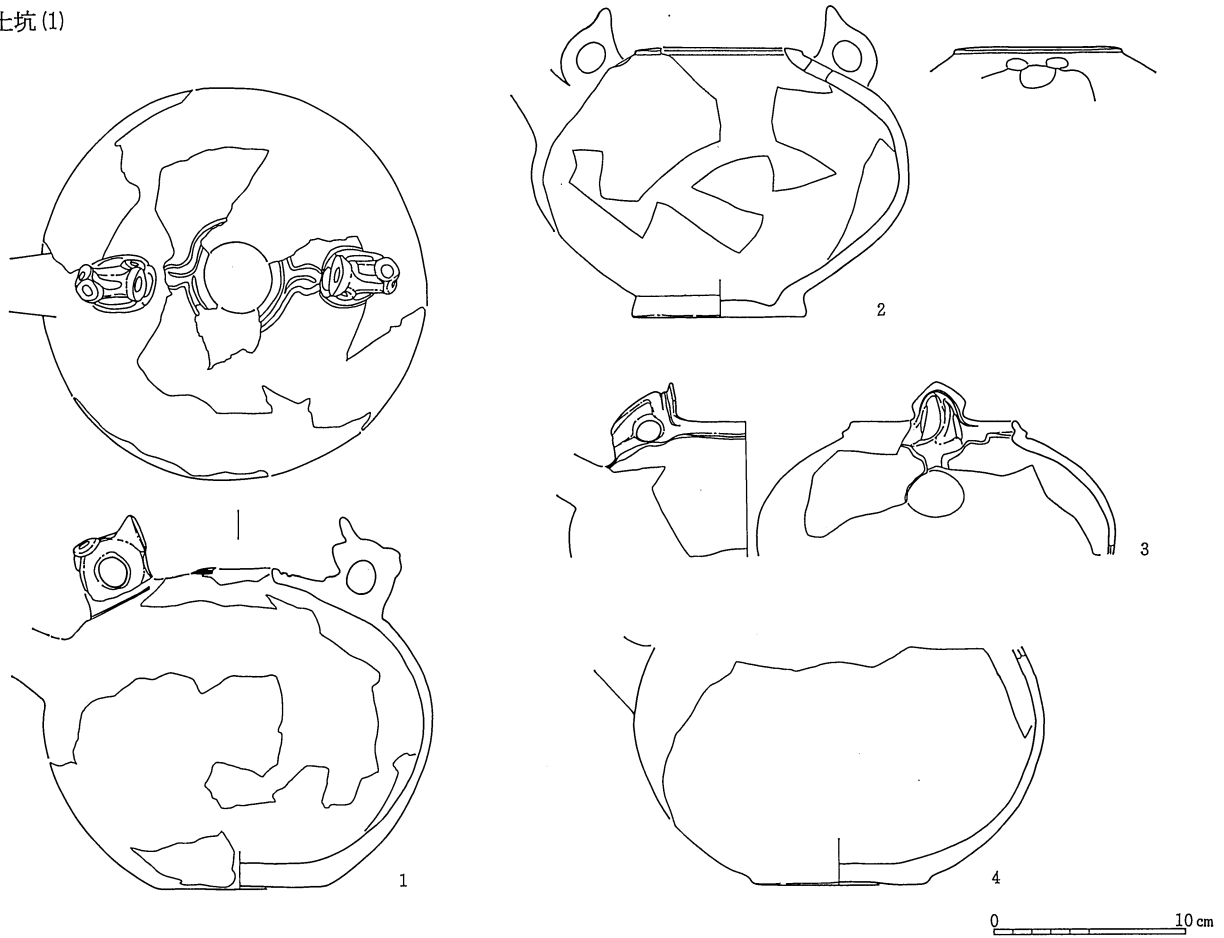
85・86・87号土坑



第57図 土坑(2)

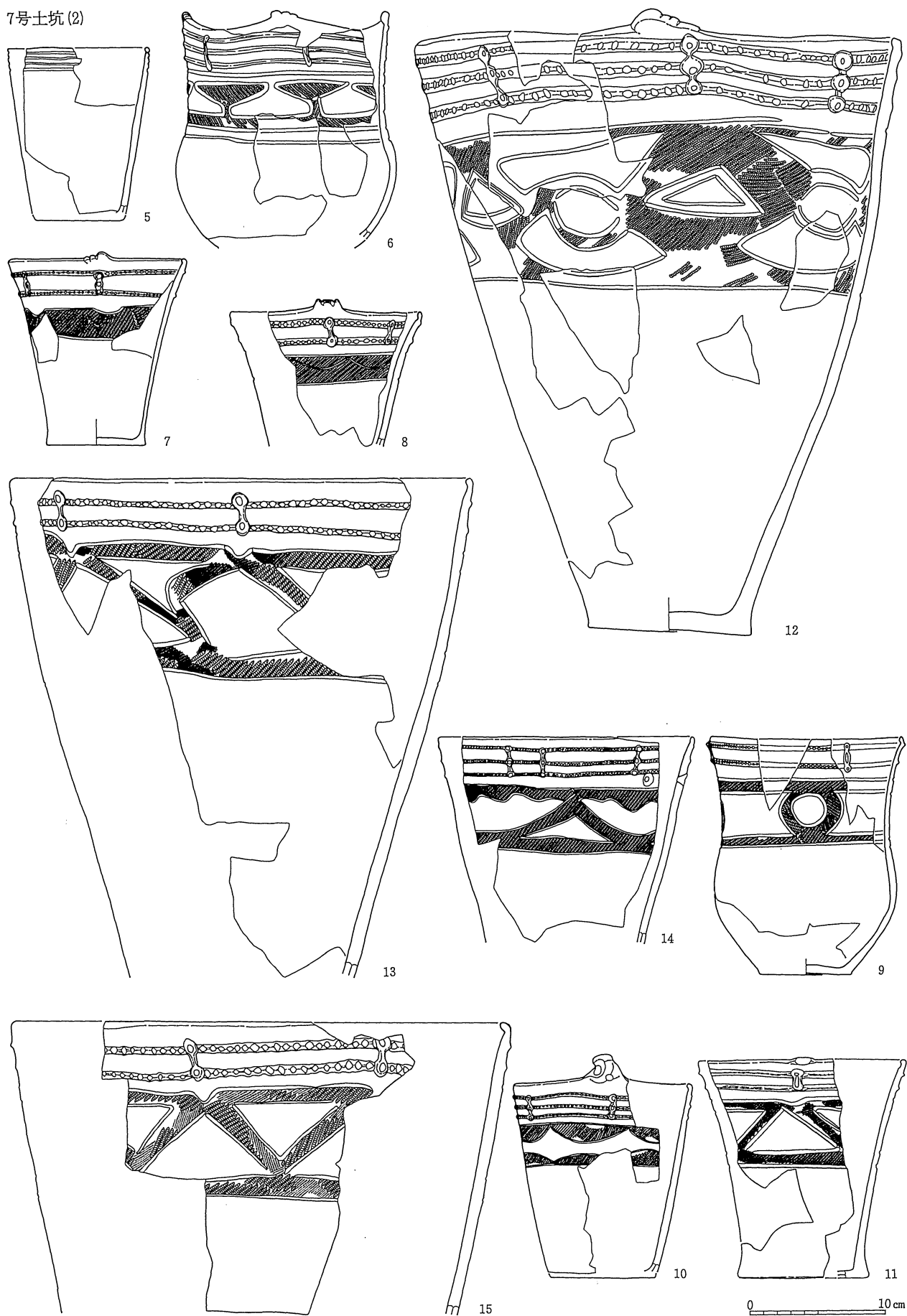


7号土坑(1)



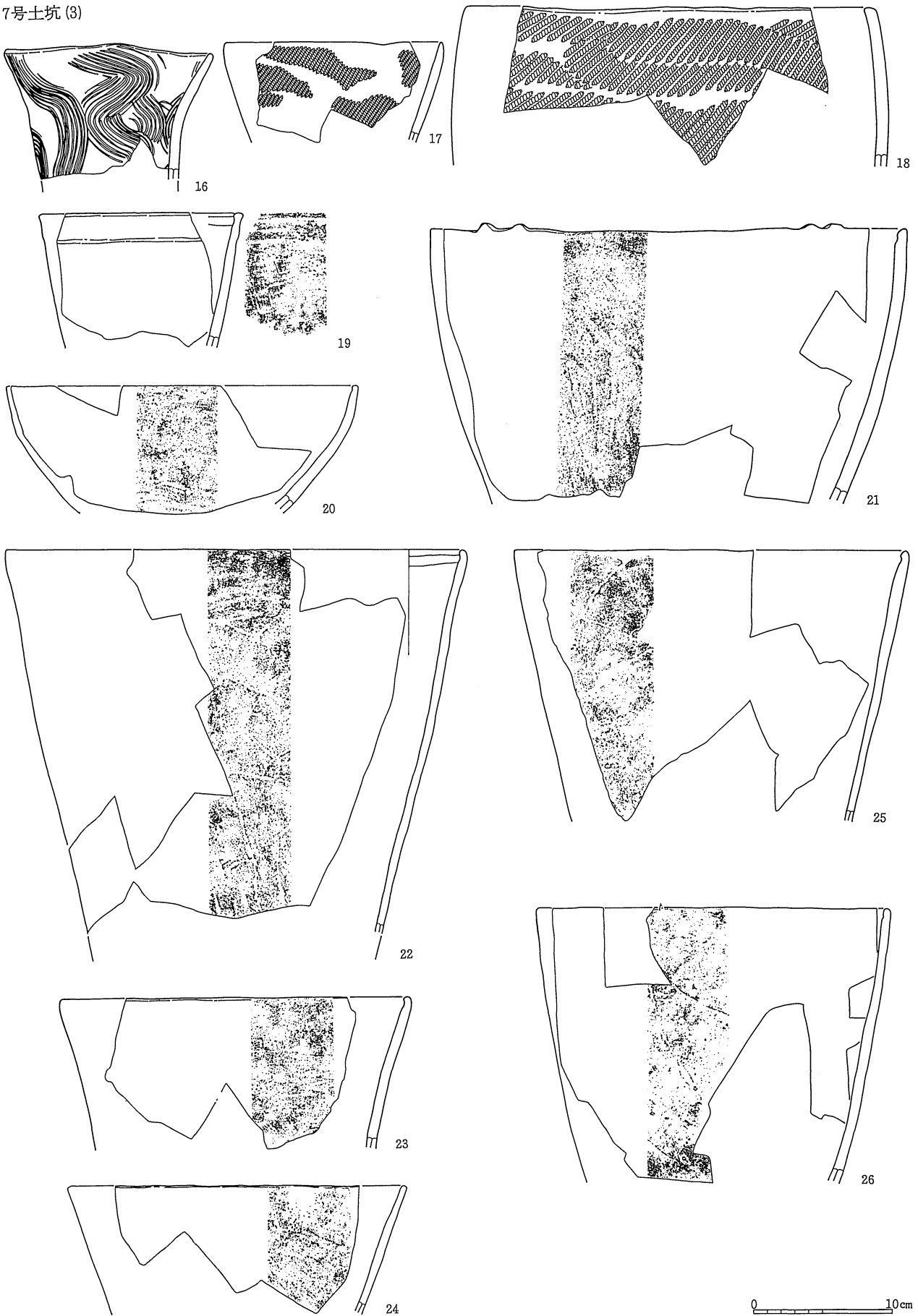
第58図 土坑(3)

7号土坑(2)



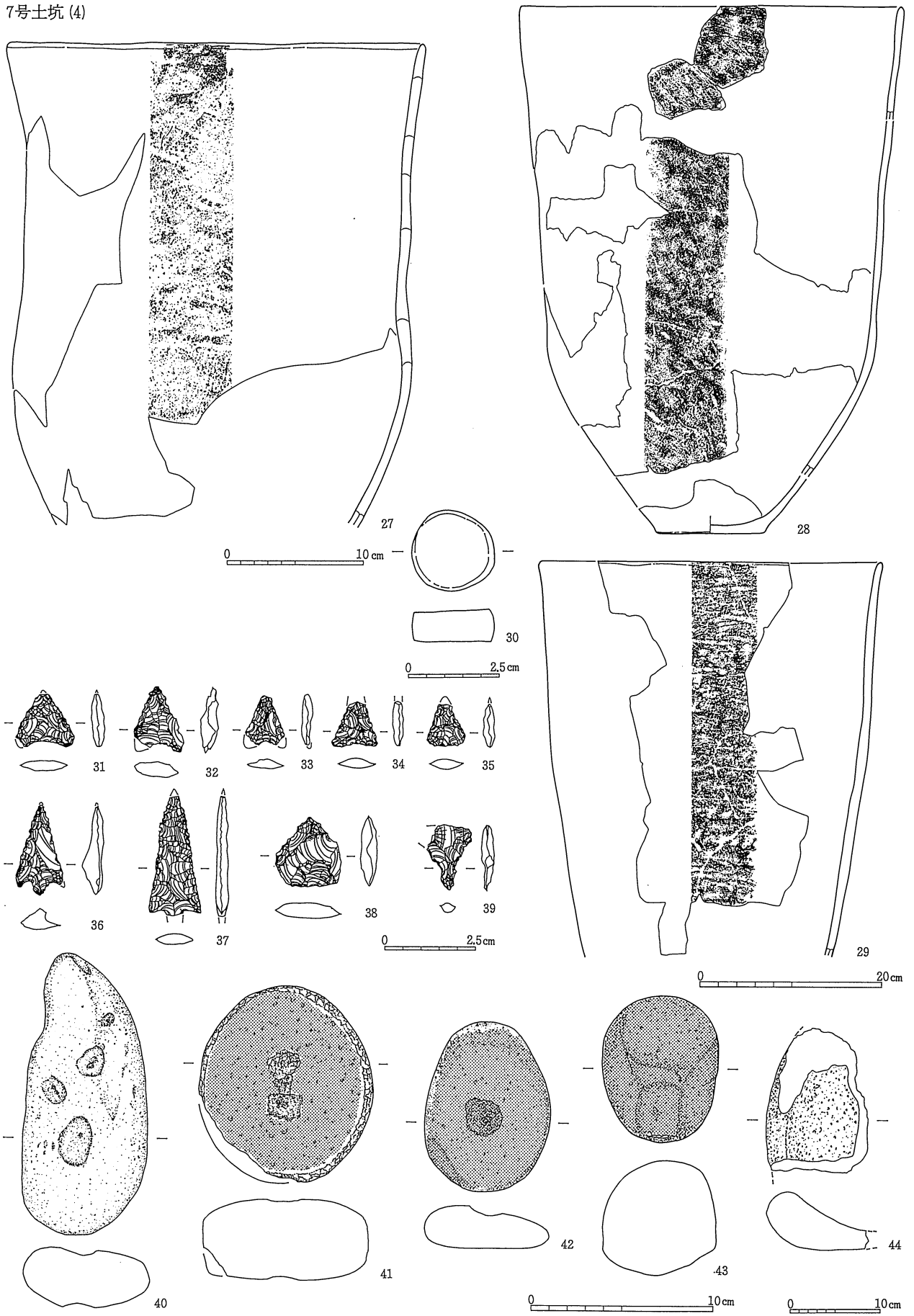
第59图 土坑(4)

7号土坑(3)



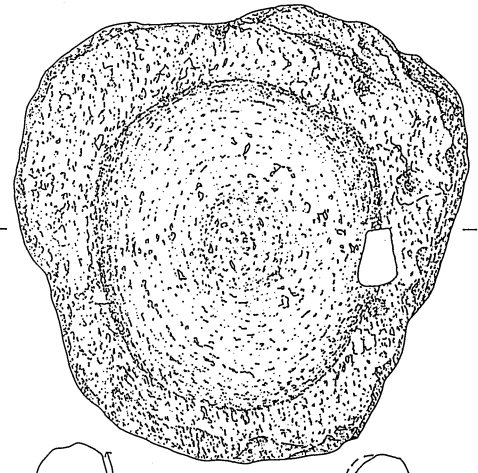
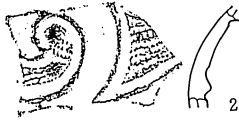
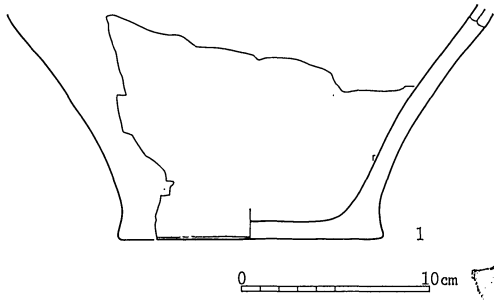
第60図 土坑(5)

7号土坑(4)

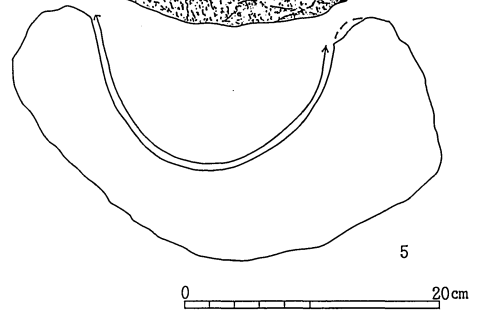
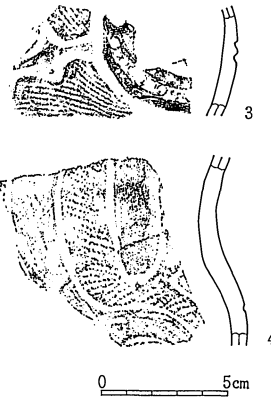
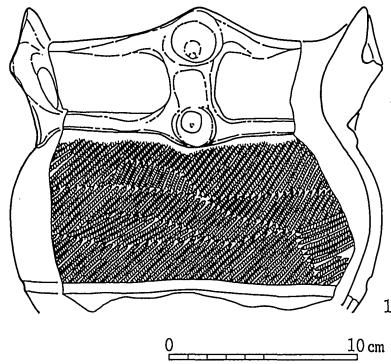


第61図 土坑(6)

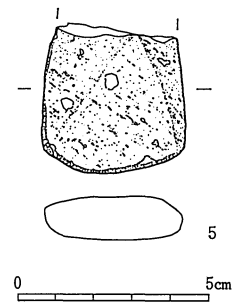
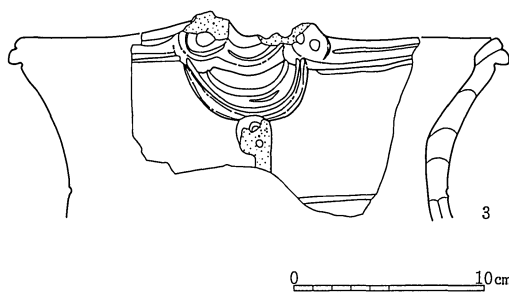
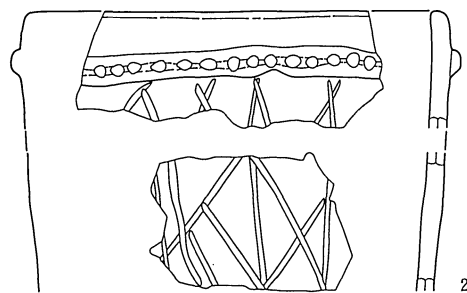
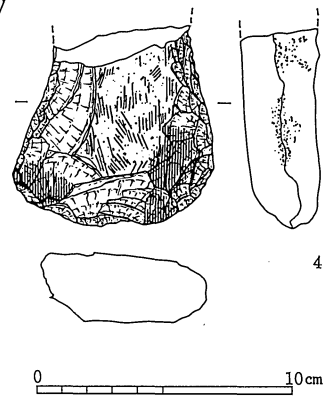
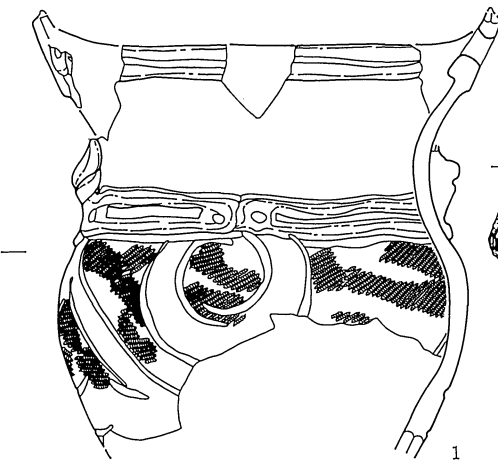
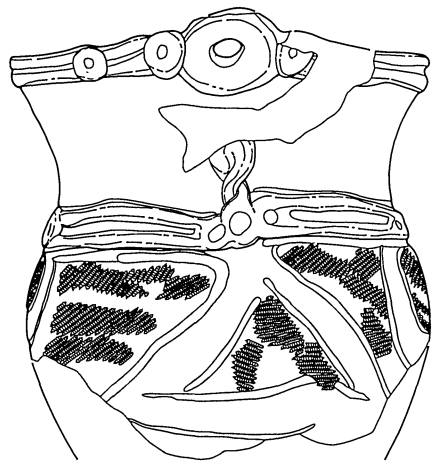
16号土坑



22号土坑

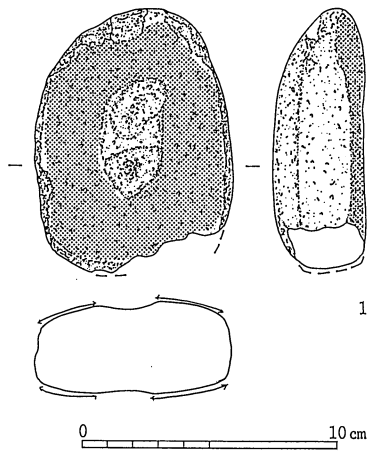


23号土坑

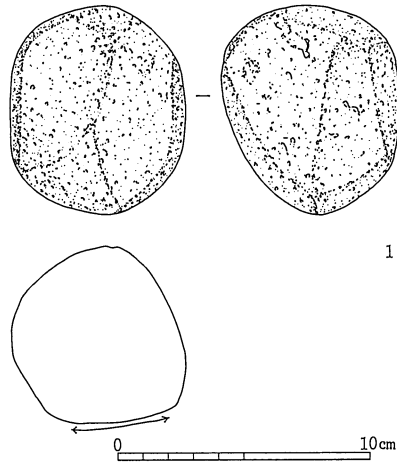


第62図 土坑(7)

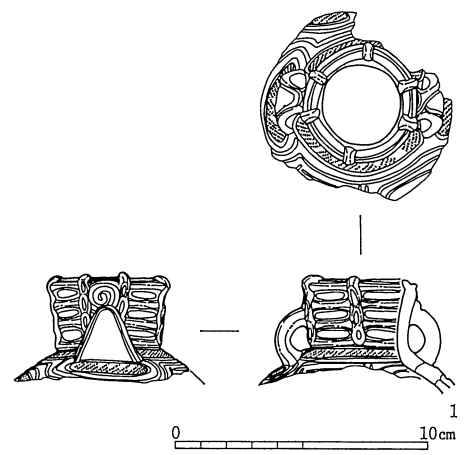
33号土坑



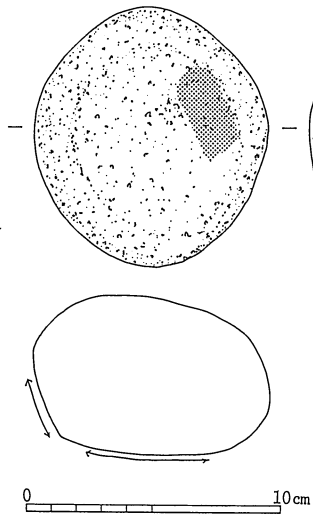
43号土坑



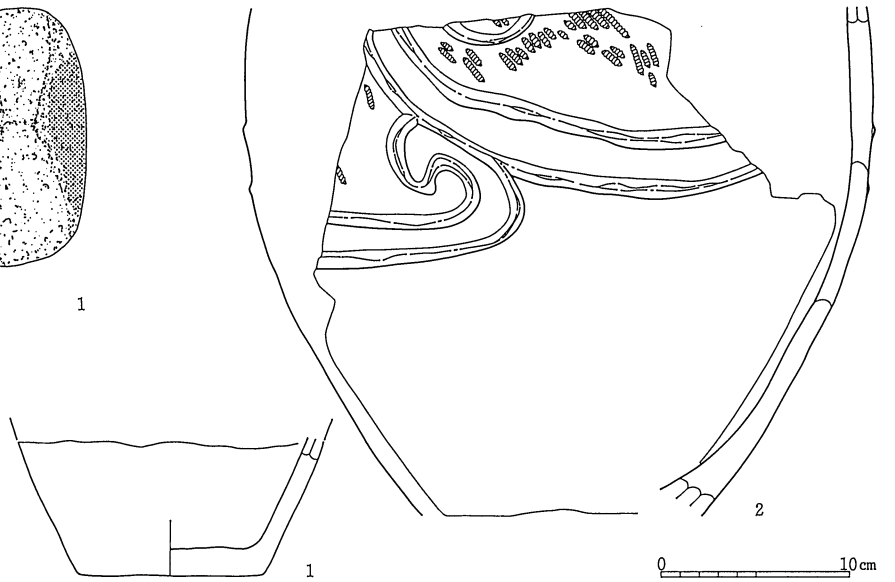
48号土坑



52号土坑



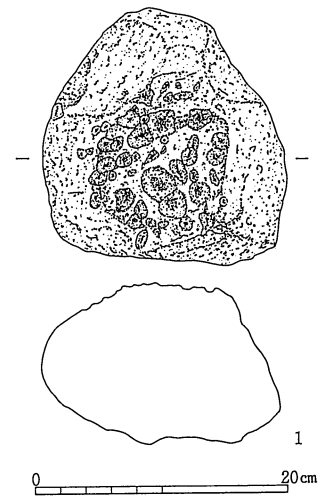
59号土坑



61号土坑

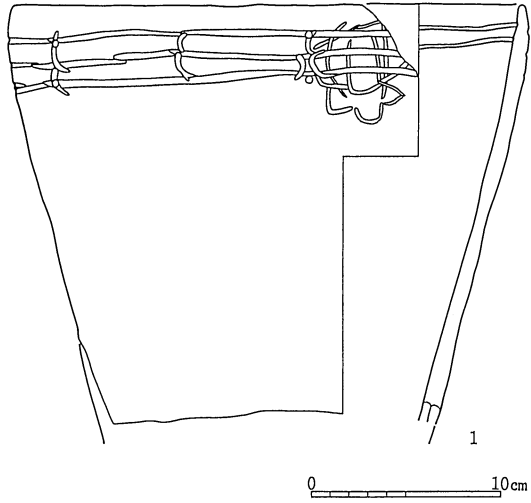


62号土坑

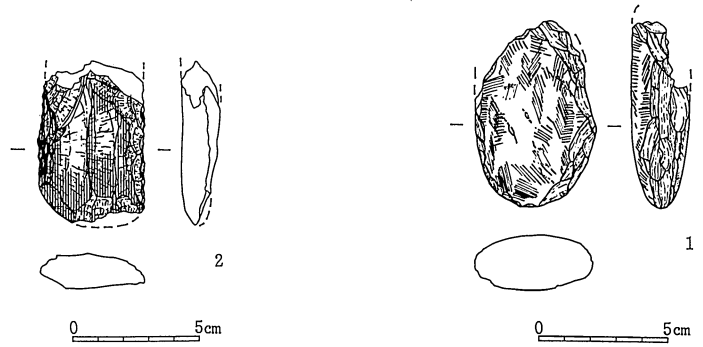


第63图 土坑(8)

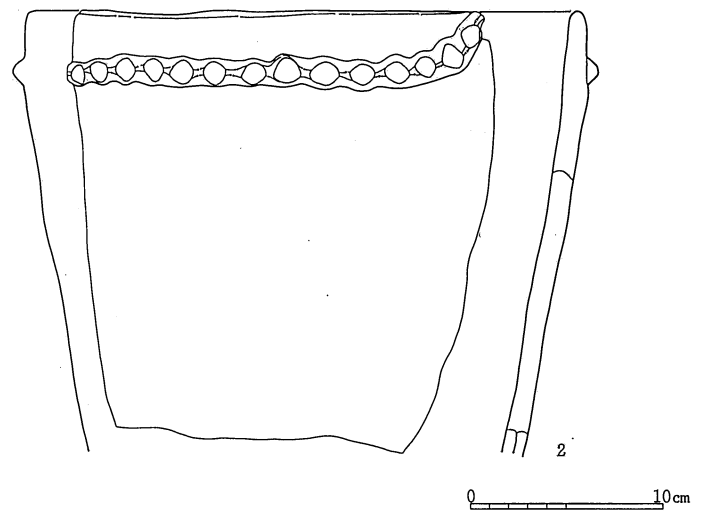
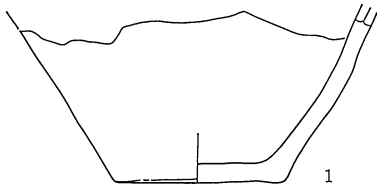
69号土坑



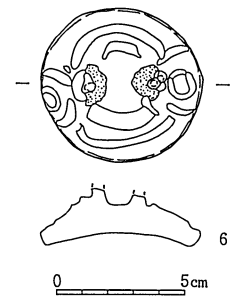
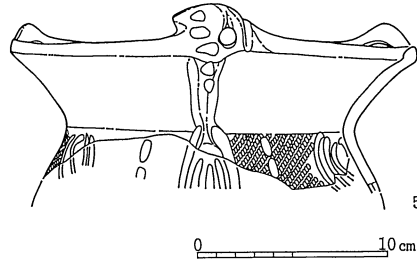
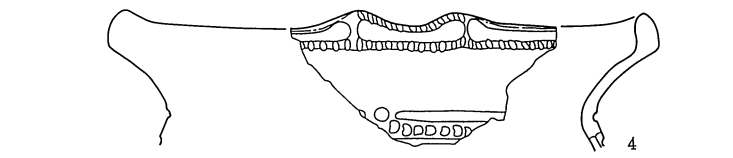
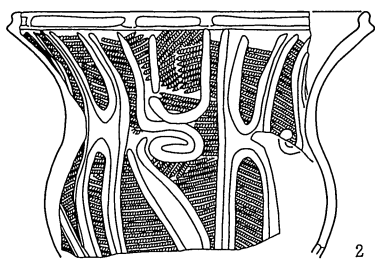
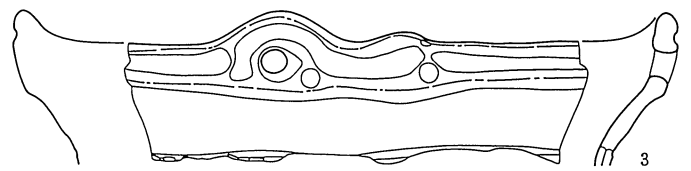
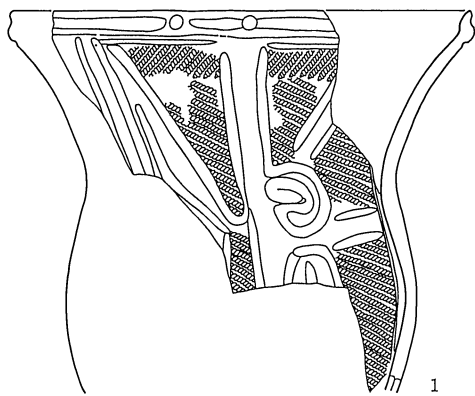
75号土坑



76号土坑

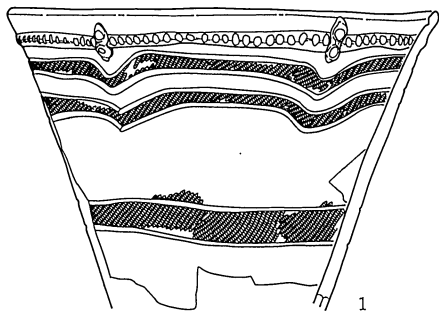


77号土坑

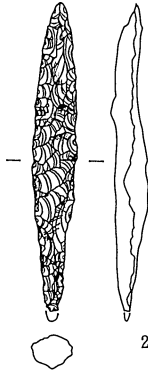


第64図 土坑(9)

78号土坑

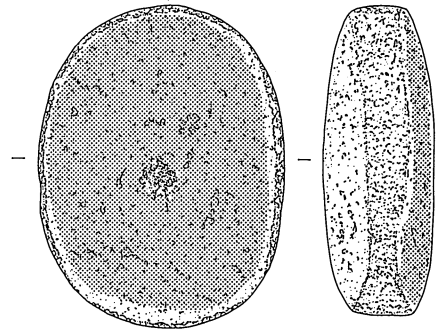


0 10cm



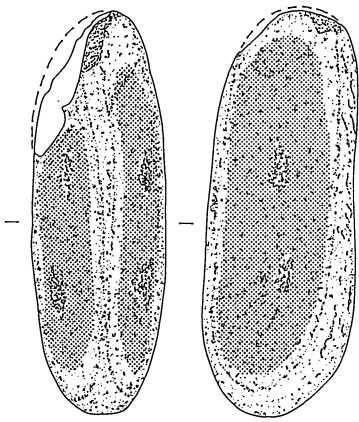
0 2.5cm

79号土坑



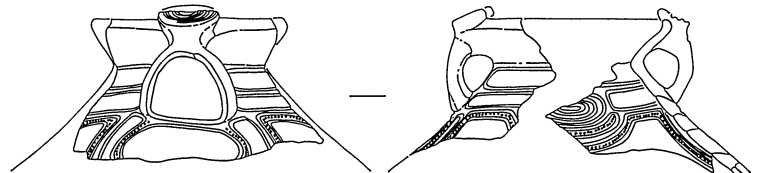
0 10cm

83号土坑



0 10cm

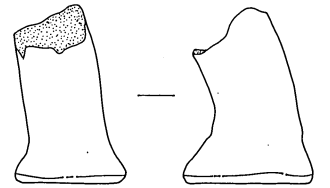
84号土坑



0 10cm

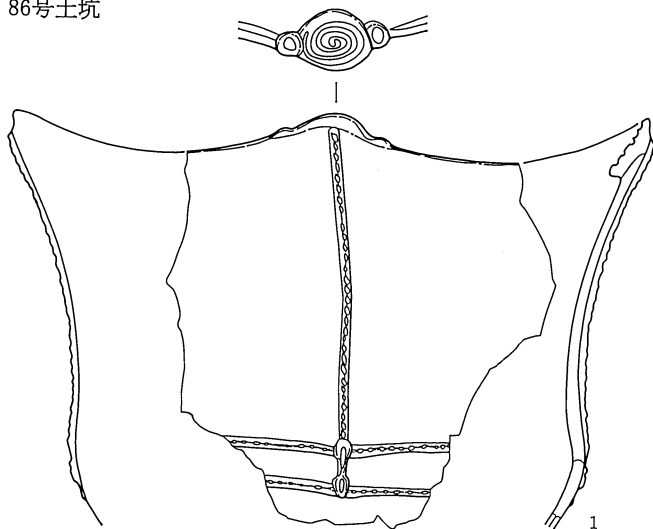


0 10cm



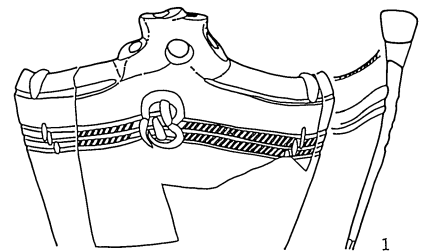
0 5cm

86号土坑



0 10cm

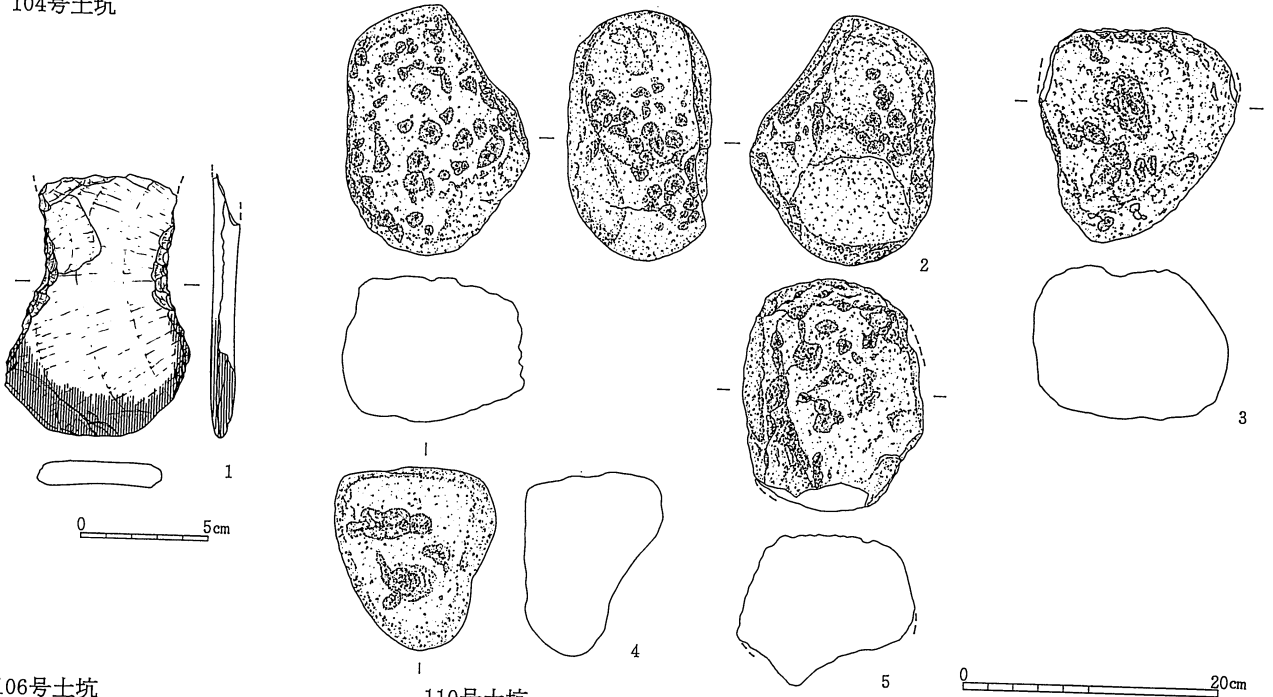
97号土坑



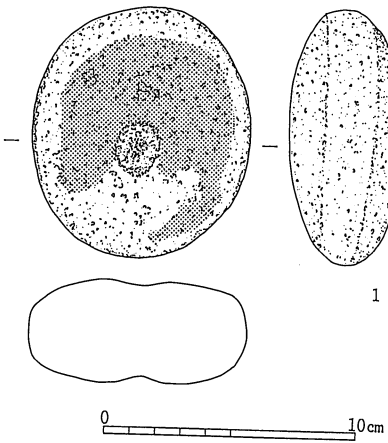
0 10cm

第65图 土坑(10)

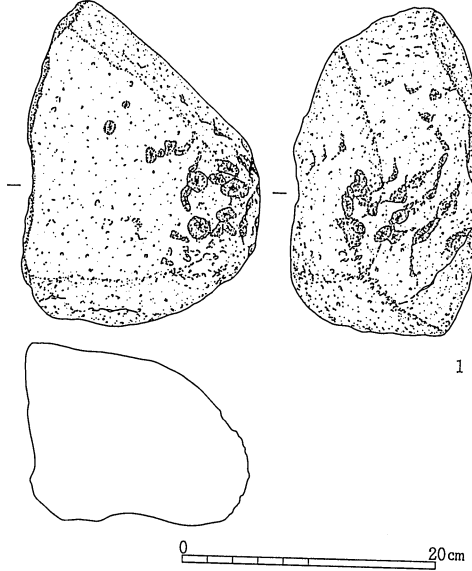
104号土坑



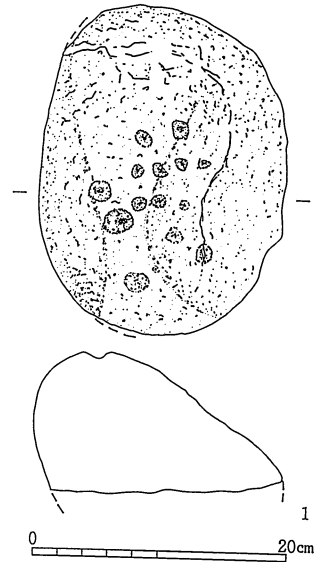
106号土坑



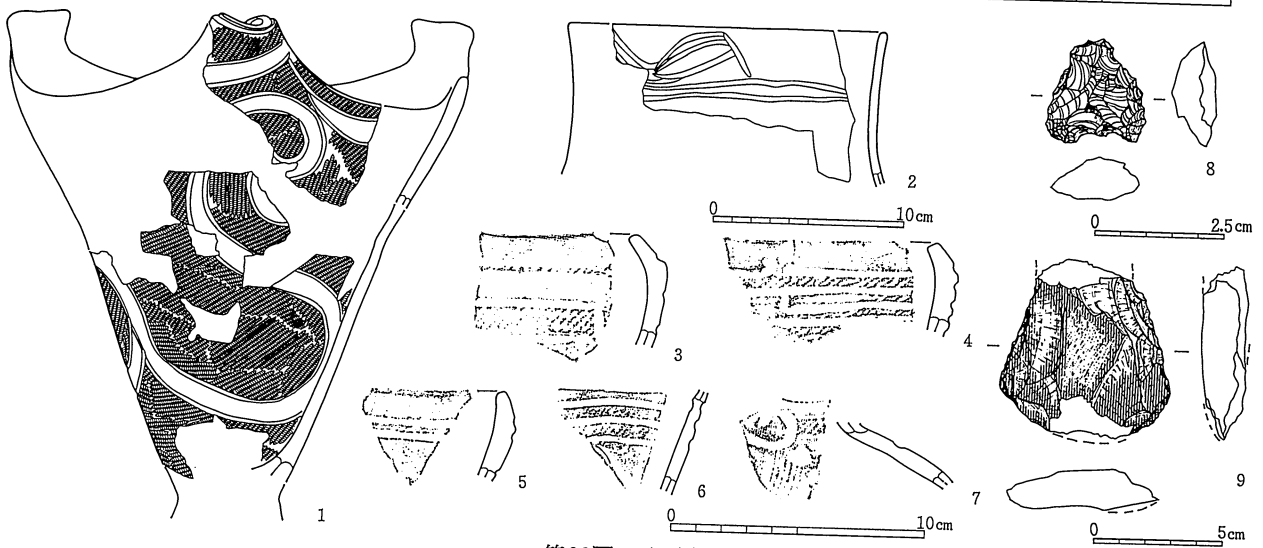
110号土坑



116号土坑



117号土坑



第66図 土坑(11)

り、称名寺式と捉えられる1が出土しているし、62号土坑は加曾利EIV式から称名寺式の土器破片が共伴している。おそらく称名寺式期を中心に掘り込まれたものなのだろう。61号土坑には覆土中層に純粋な軽石流堆積物層を充填し、直上に1の土器を置いている。覆土全体に軽石を含まず、ほかの土坑とは一種変わった様相を呈していた。62号土坑は覆土中層から上層にかけ人頭大の軽石が散在的に含まれていた。また、底部付近から1の多孔石が出土している。

74号土坑も長方形プランを呈するもので、34・35号土坑同様、形態的には土坑墓に近い。上面には配石らしきものが認められるものの、検出面であるためすべてを確認したわけではない。堀之内2式土器を伴っており、位置からすれば環状集落との関係が予測される。

77号土坑の出土遺物のうち、1・2は新潟県地方を主体とする南三十稻場式土器である。

83・84号土坑は近接しあい、ともに堀之内2式期の所産である。断面形はわずかに袋状を呈し、覆土中に平石（鉄平石）を多数に含んでいた。平石（鉄平石）については片面のみが摩耗しているため、本来、敷石住居に利用したものを、ここに埋設したらしい。そもそも、平石（鉄平石）を含む土坑は基本的にそのようなのだが、その典型が本例である。なお、84号土坑の出土遺物のうち、3は唯一出土した土偶の左足下端部である。

104号土坑は底部直上から軽石とともに4個体の多孔石が出土した。明らかに意図的に遺棄されたかと思えない。1式か2式か分からないが、堀之内式土器を共伴している。62・110・116号土坑にも多孔石が認められ、環状集落の石列にも多分に存在する。何らかの意図があつてのことだろう。

117号土坑は加曾利B I式期の所産である。該期には土坑しか確認していないが、調査区東端にしか見られない。本跡には83・84号土坑以上に敷石住居の平石（鉄平石）を活用もしくは廃棄している。なお、出土遺物の1は、東北地方北部を中心とした地域に見られる台付深鉢形土器であるが、製作地をそこまで限定できないまでも、一見して胎土の異なる存在であった。

表1 中期後葉から後期中葉の土坑一覧

番号	時期	番号	時期	番号	時期
7坑	堀之内2式期	45坑	堀之内2式期	83坑	堀之内2式期
9坑	堀之内2式期	46坑	堀之内2式期	84坑	堀之内2式期
10坑	堀之内2式期	47坑	堀之内2式期	85坑	堀之内2式期
11坑	堀之内1式期	48坑	堀之内2式期	87坑	堀之内2式期
12坑	後期以降	49坑	堀之内2式期	88坑	堀之内2式期
13坑	中期末～後期初頭	50坑	堀之内2式期	89坑	堀之内式期
14坑	後期	51坑	堀之内2式期	90坑	後期?
15坑	中期末～後期	52坑	堀之内2式期	91坑	中期後葉～後期
16坑	堀之内2式期	53坑	堀之内1式期?	92坑	堀之内1式期
17坑	堀之内1式期	54坑	堀之内1式期	93坑	中期末
18坑	称名寺式期	55坑	後期初頭?	94坑	堀之内2式期
19坑	後期	56坑	堀之内2式期	95坑	中期末
20坑	堀之内式期	57坑	堀之内2式期	96坑	中期末～後期初頭
21坑	堀之内式期	58坑	堀之内1式期?	97坑	堀之内2式期
22坑	堀之内1式期	59坑	中期末	98坑	堀之内式期
23坑	称名寺式期末～堀之内1式期古	60坑	称名寺～堀之内1式期	99坑	堀之内1式期
24坑	堀之内2式期	61坑	称名寺～堀之内式期	101坑	堀之内1式期
25坑	堀之内2式期	62坑	中期末～後期初頭	102坑	堀之内1式期
26坑	称名寺～堀之内1式期	63坑	称名寺～堀之内式期	103坑	堀之内2式期
27坑	堀之内式期	66坑	中期末～後期	104坑	堀之内式期
28坑	堀之内式期	67坑	中期末～後期	105坑	称名寺式期末～堀之内1式期古
29坑	堀之内式期	68坑	堀之内式期	106坑	堀之内1式期
30坑	後期	69坑	堀之内2式期	107坑	不明
		70坑	後期	108坑	堀之内1式期
		71坑	堀之内式期		

31坑	中期末	72坑	堀之内 1 式期	110坑	後期
32坑	堀之内 2 式期	73坑	後期	111坑	堀之内 2 式期
35坑	堀之内 1 式期	74坑	堀之内 2 式期	112坑	後期
36坑	後期	75坑	称名寺式期	113坑	称名寺～堀之内式期
37坑	中期末～後期初頭	76坑	堀之内 2 式期	114坑	加曾利 B I 式期
38坑	後期	77坑	堀之内 1 式期	115坑	加曾利 B I 式期
39坑	堀之内 2 式期	78坑	堀之内 2 式期	117坑	加曾利 B I 式期
40坑	堀之内 1 式期	79坑	称名寺～堀之内 1 式期	118坑	堀之内 2 式期
41坑	堀之内式期	80坑	堀之内 2 式期	119坑	中期後葉～後期
42坑	堀之内 2 式期	81坑	堀之内式期	120坑	後期
44坑	加曾利 B I 式期	82坑	堀之内式期	121坑	堀之内 2 式期

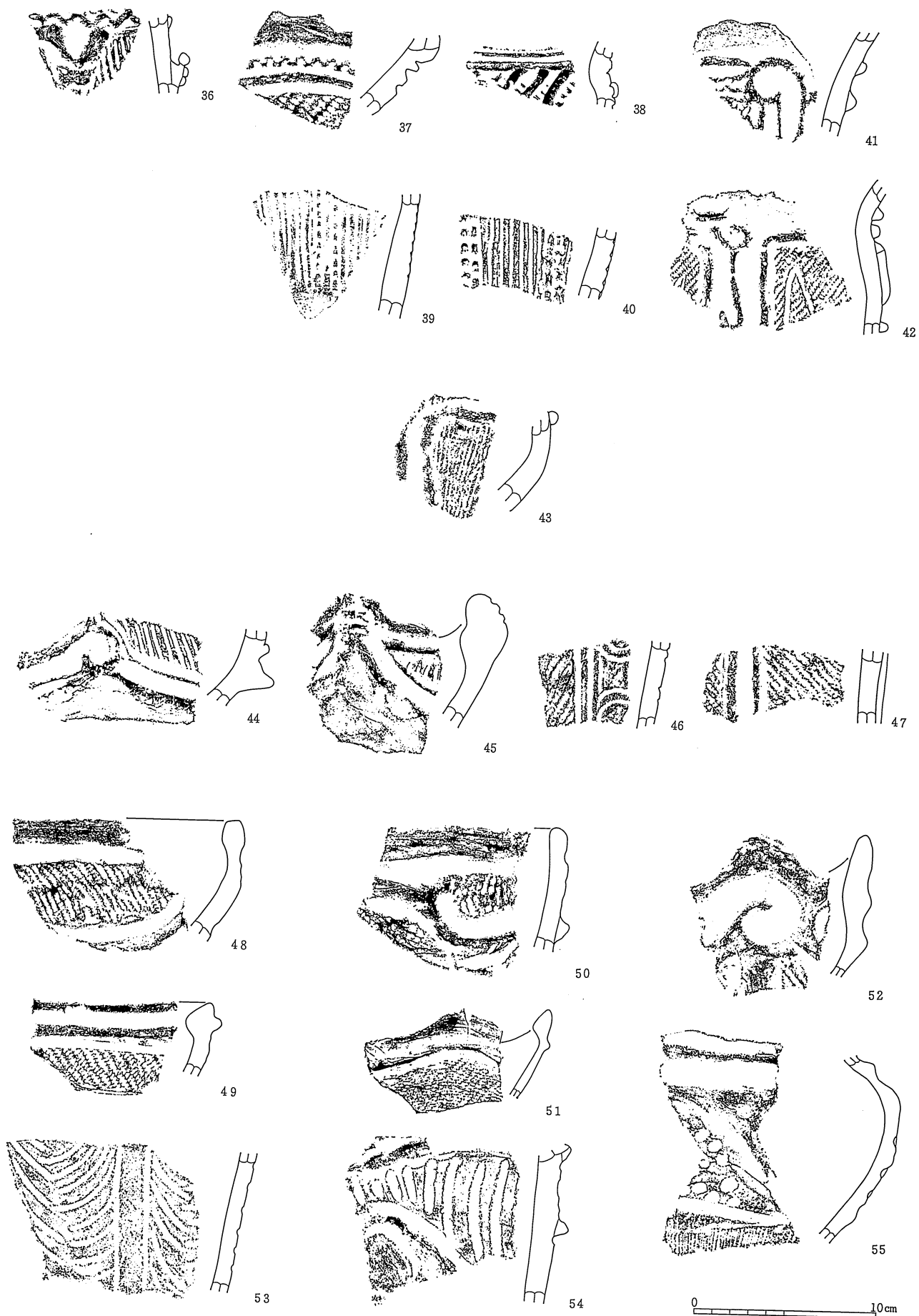
3 遺構外出土遺物 (第67～72図、P L60～64)

土器・石器ともに多数の遺物を採集した。土器については、本遺跡では数少ない前期から中期後葉でも加曾利 E II 式併行段階まで、ならびに後期中葉の加曾利 B 式においては、発見した遺物の大半を掲載することに努めた。それ以外は、遺構内から数多くの遺物が出土しているので、多くはそれぞれの時期の代表的な遺物を中心に提示した。石器については、関係品はもちろんのこと、特異な遺物を掲載することにも努力した次第である。また土製円盤が1点だけ出土し、それも掲載している。以下、土器について説明するが、石器の器種については表3 石器・石製品・土製品観察表を参照されたい。

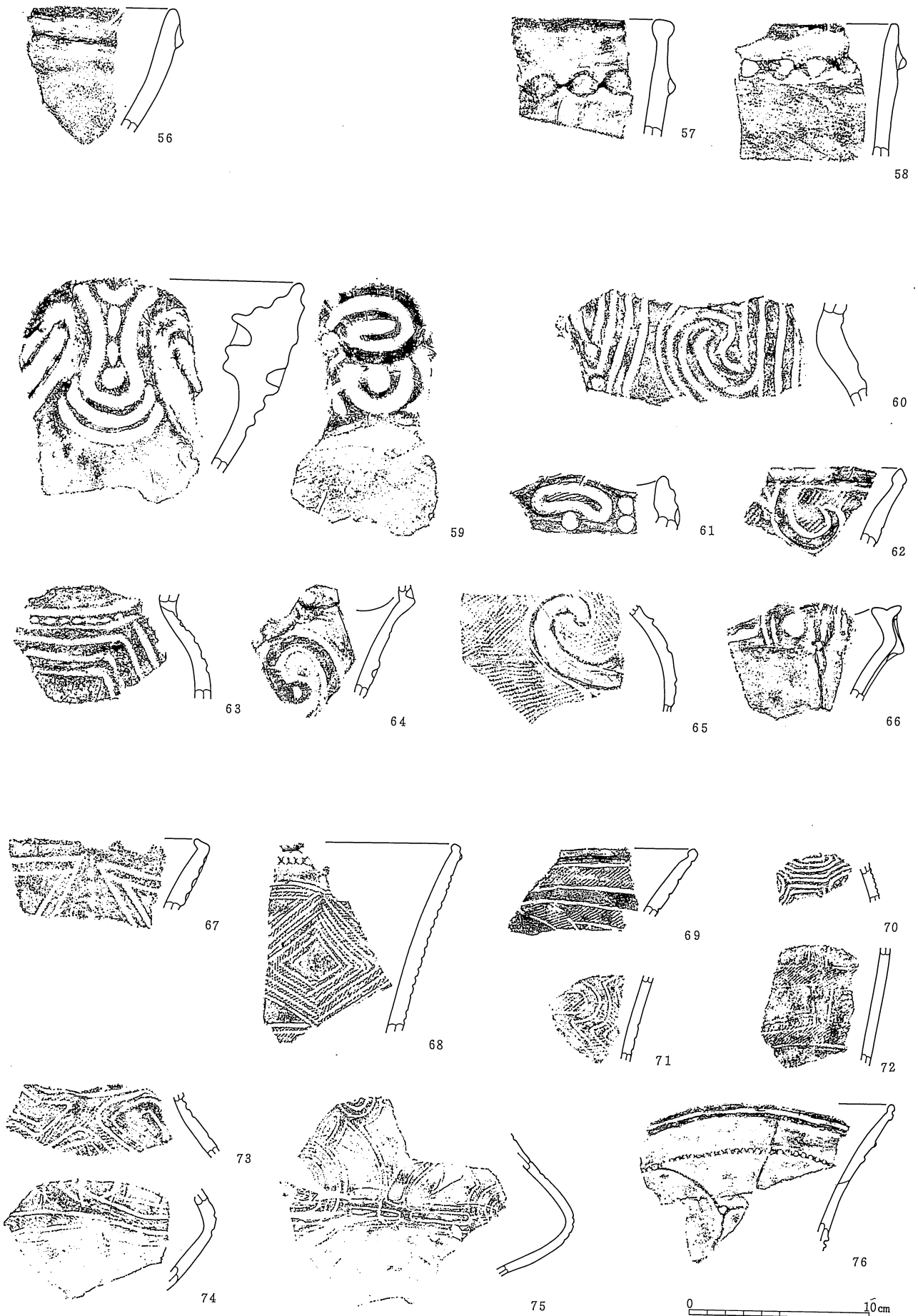
1～12は胎土に繊維を含む前期中葉の土器群、13～16は前期末葉の諸磯 a 式・17～20が同じく c 式土器で、21が諸磯式に併行する北白河下層 II 式土器である。22は前期最終末の晴ヶ峯式土器に相当する。23～35は中期初頭の五領ヶ台 II 式土器、ないしはそれに併行する在地の土器群である。36～54が中期後葉に比定され、36～40が曾利式、41が唐草文系、43～54が加曾利 E 式、42が未だ型式名が命名されていない土器群に該当する。なお、36が曾利 I 式、37・38が同 I～II 式、39・40が同 II 式、41が唐草文系第 II 類、43が加曾利 E I 式、44～47が同 II 式でその中でも47は新段階、48～54が同 III 式となり、うち48・49が古段階、42が加曾利 E II 式段階に併行する時期に比定される。55以降は後期初頭から中葉までの土器群であり、まず55は初頭の称名寺式期を中心としたもの、また56・57は称名寺式でも新しい段階から前半の堀之内 1 式にかけてのもの、57～63は同 1 式でしかも63はより2式に近い存在、64～74が同 2 式に相当し、64がより古段階、また74がより新段階に比定されるもの、75～83が中葉の加曾利 B 式土器であり、75～80までが B I 式でも新しい段階、81・82が B II 式でとくに82は後半段階に比定されるもの、83は B II 式末から B III 式初頭のものと考えられる。



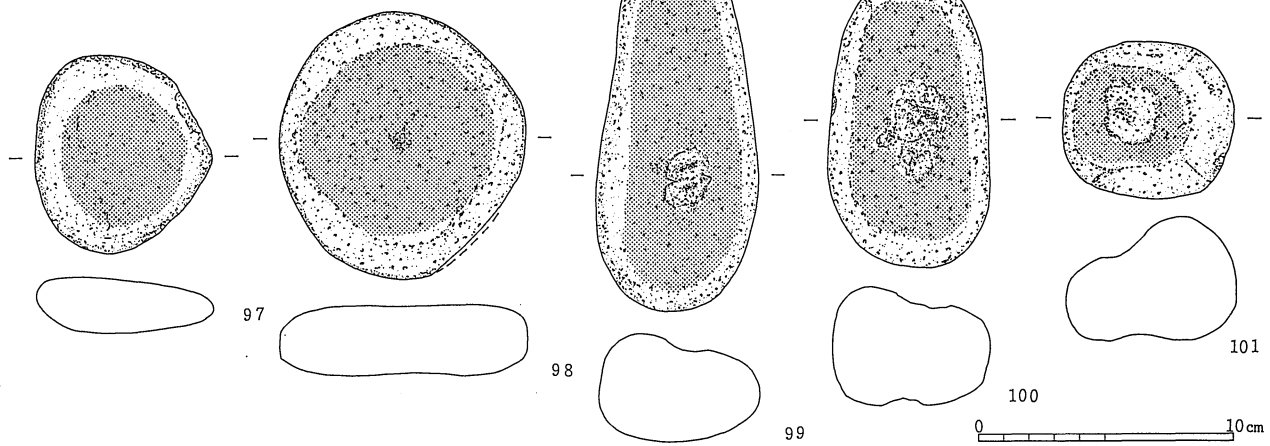
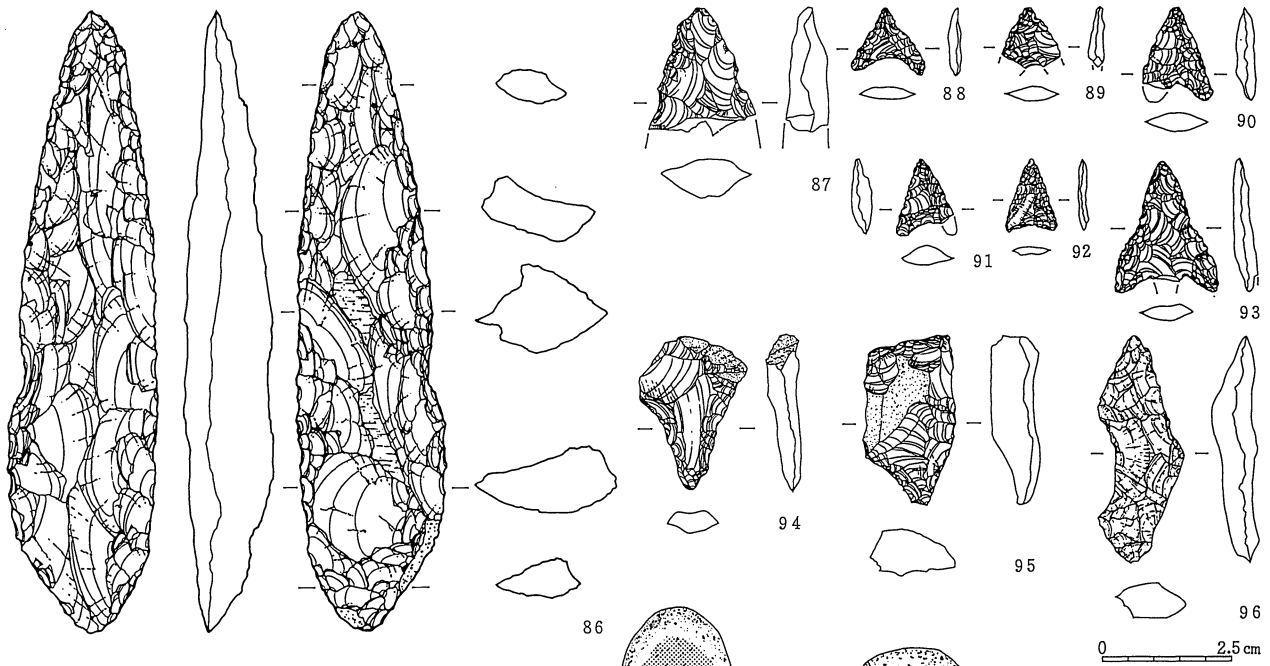
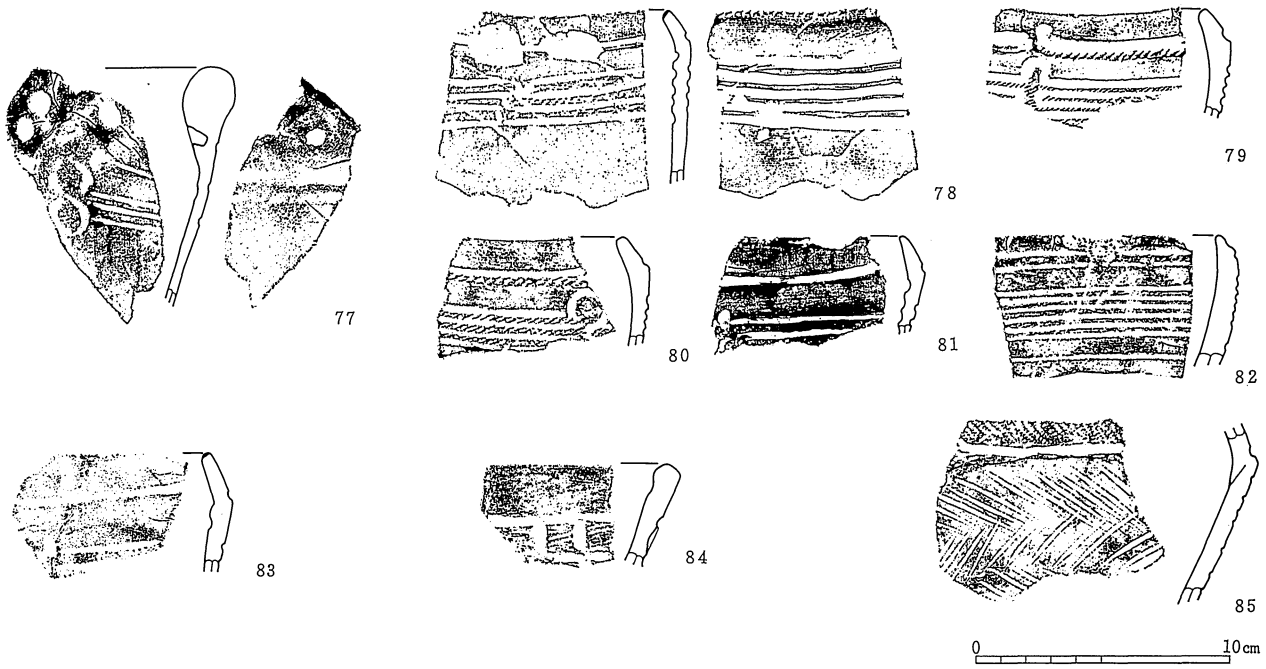
第67図 遺構外出土遺物(1)



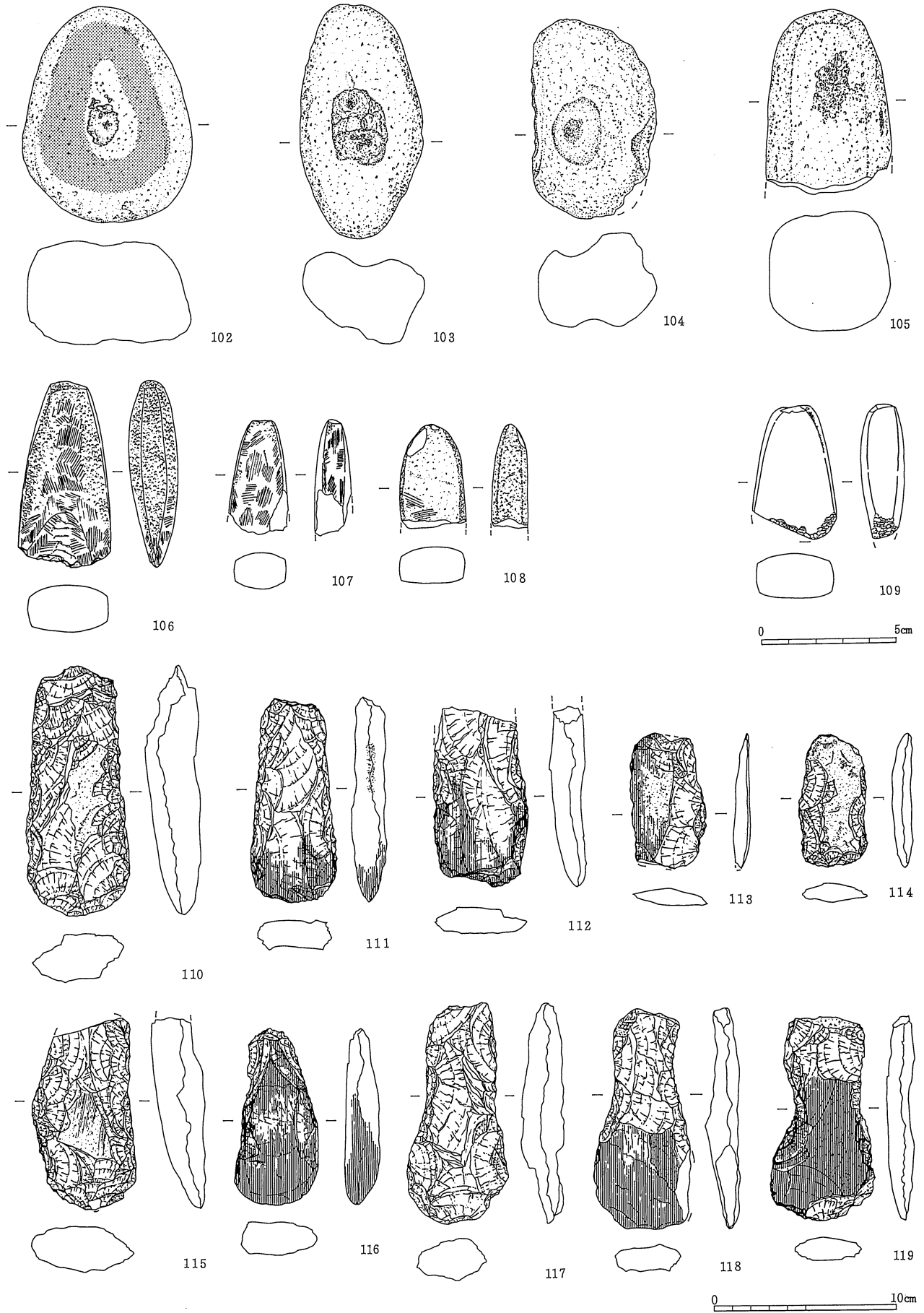
第68図 遺構外出土遺物(2)



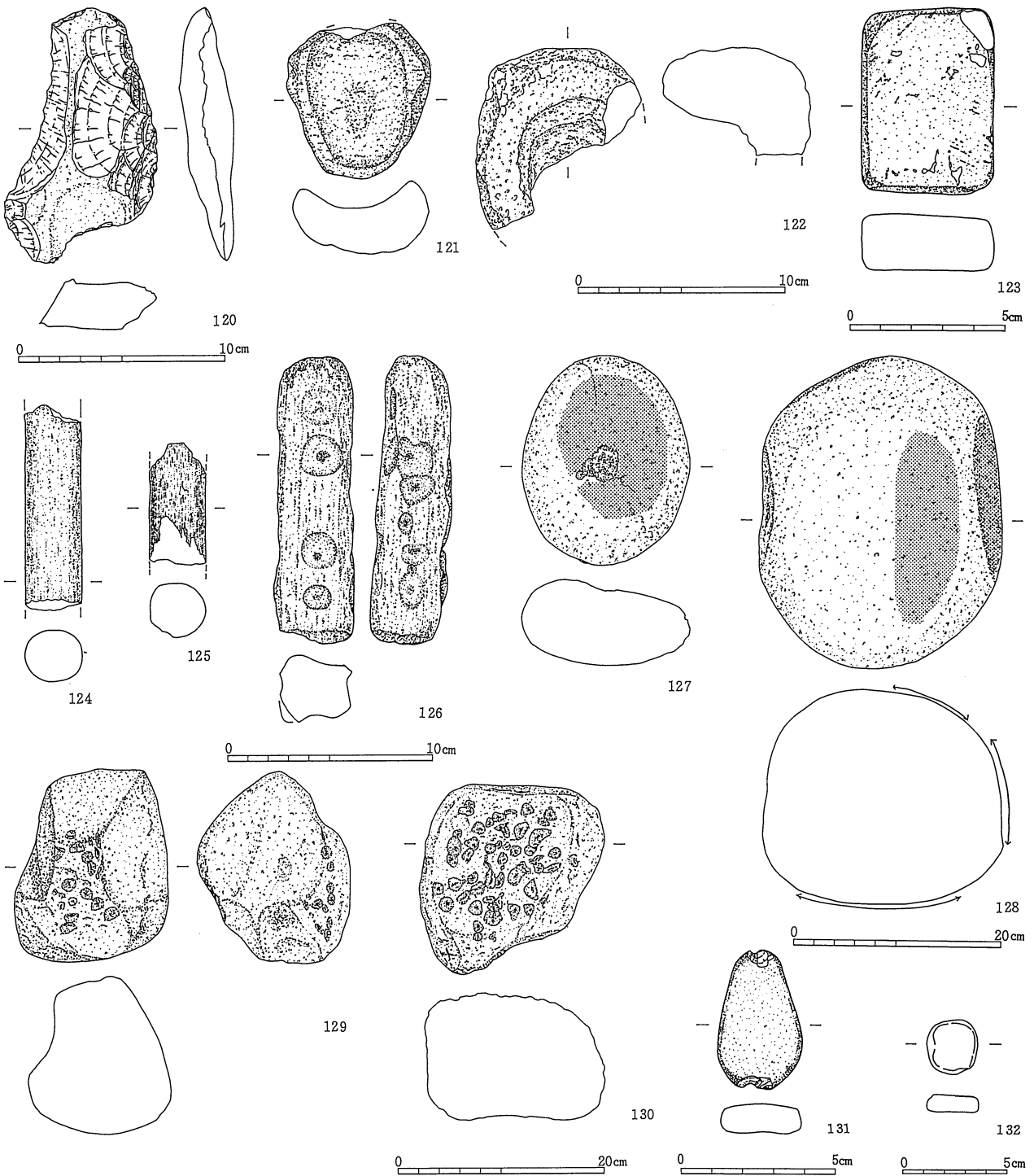
第69図 遺構外出土遺物(3)



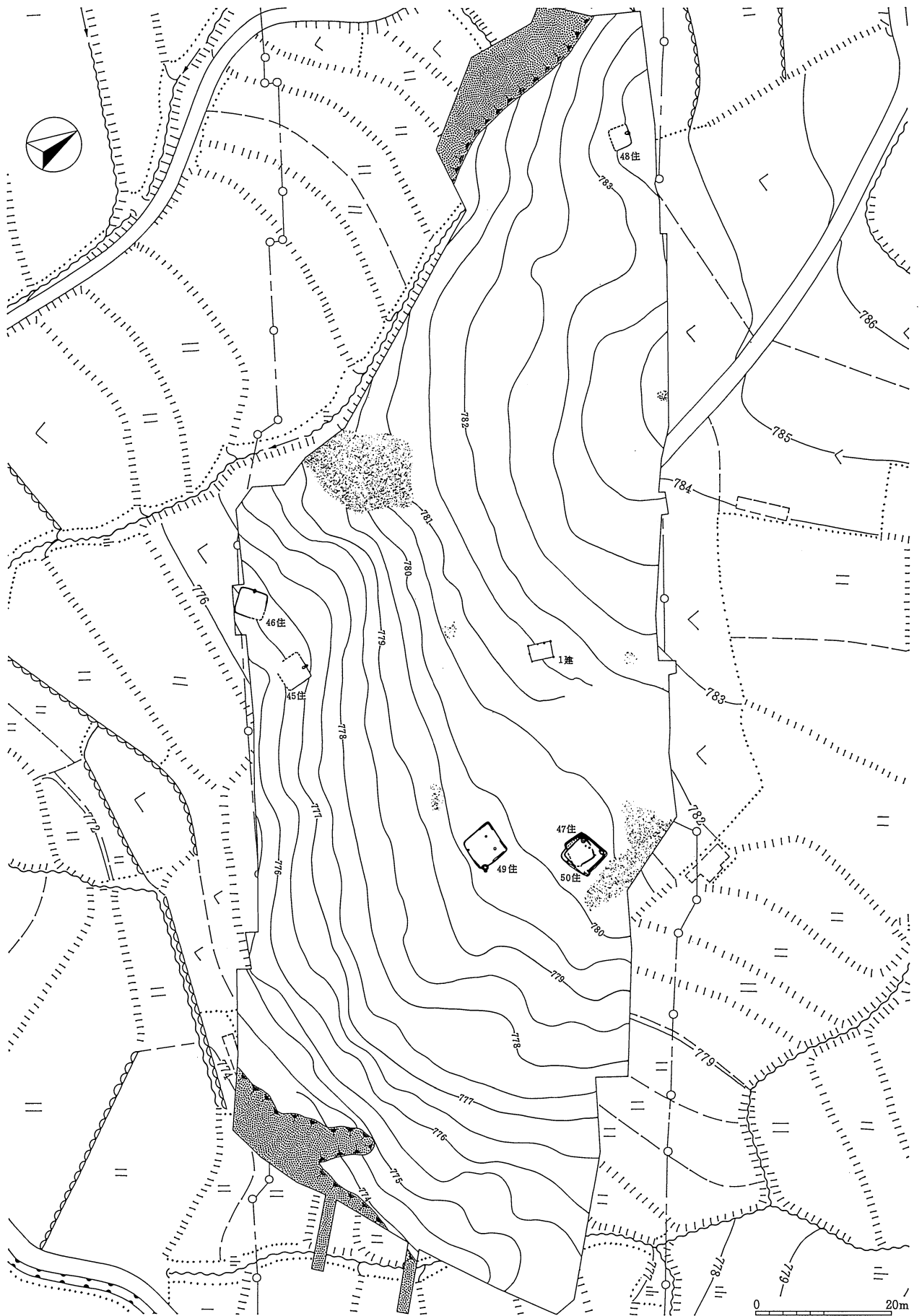
第70図 遺構外出土遺物(4)



第71図 遺構外出土遺物(5)



第72図 遺構外出土遺物(6)



第73図 古代の遺構配置

第4節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

45号竪穴住居跡（第74図）

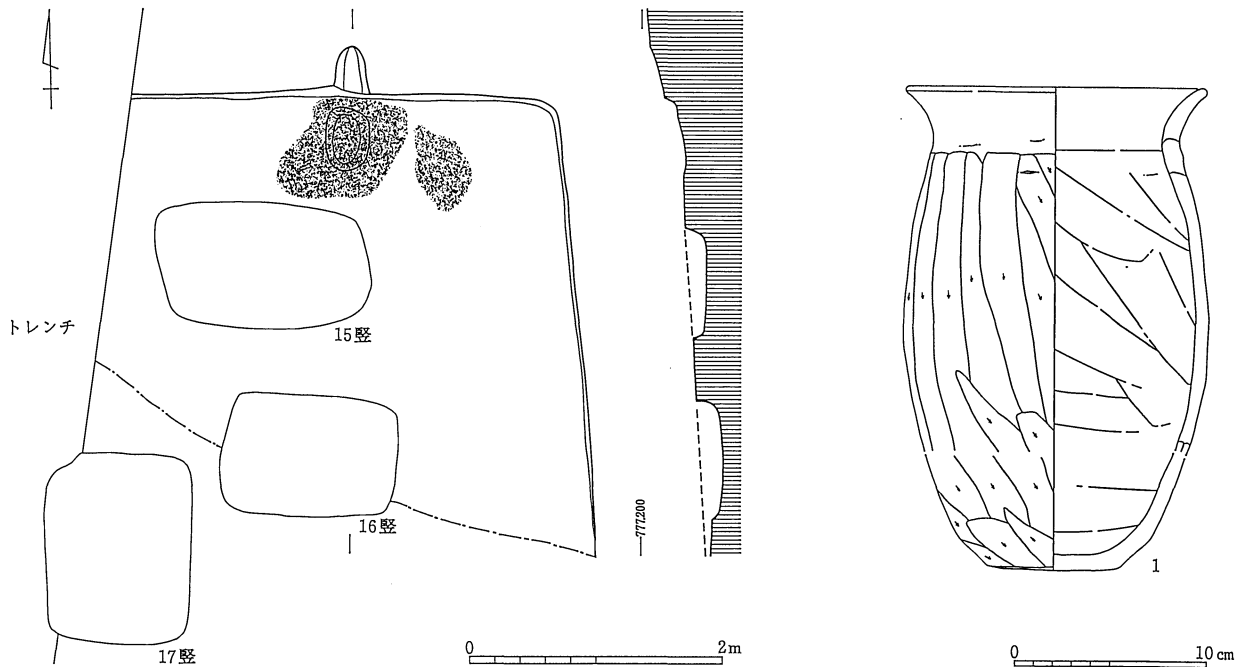
中世以降の竪穴建物跡によって住居内を切られ、また試掘トレンチで西壁を削られている。

主軸はほぼ座標北を示す。主軸長・副軸長とも不明である。壁高は北壁で最高14cmをはかる。

柱穴や周溝などは存在しなかった。床に掘方はない。カマドは北壁につくられ、煙道部と火床部のみが残存し、また構築材と取れる粘土状のものが散布していた。

遺物は極めてわずかであったが、火床部付近から1の長胴甕が出土している。

時期は古墳時代後期のものだが、時期比定可能な資料は長胴甕しかない。直立可能で7世紀前半を下らないと思われるが、上限が問題となる。6世紀中葉以前とは底部形態が異なるので、大きくみて6世紀後半から7世紀前半の所産とするしかないだろう。



第74図 45号竪穴住居跡

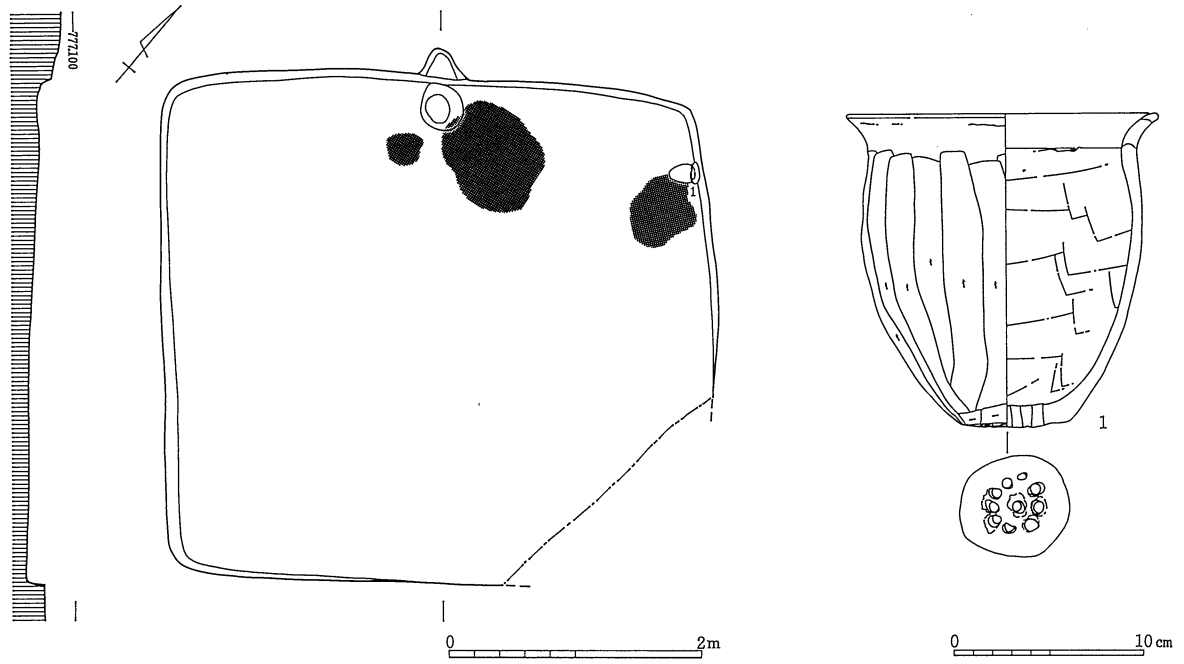
46号竪穴住居跡（第75図）

N-45°-Wを主軸とし、3.97mを主軸長、4.40mを副軸長とする。壁高は最高で20cmをはかる。

柱穴・周溝などは確認していない。掘方も存在しなかった。床面は斜面に沿いながら傾斜しており、最大10cm程の傾きがみられる。カマドは火床部と煙道部だけ残存し、周辺には焼土と構築材の粘土が入り交じって分布していた。

出土遺物は極微量であったが、北東コーナー付近から完形の小型甕が出土した。床面直上である。

時期は古墳時代後期に該当する。多孔式の小型甕は6世紀後半から7世紀にかけて作られたもので、時期の詳細は不明としか言えないが、形態からして7世紀後半以降には下りそうがない。おそらく45号竪穴住居跡と同時期の産物ではないかと考えられる。



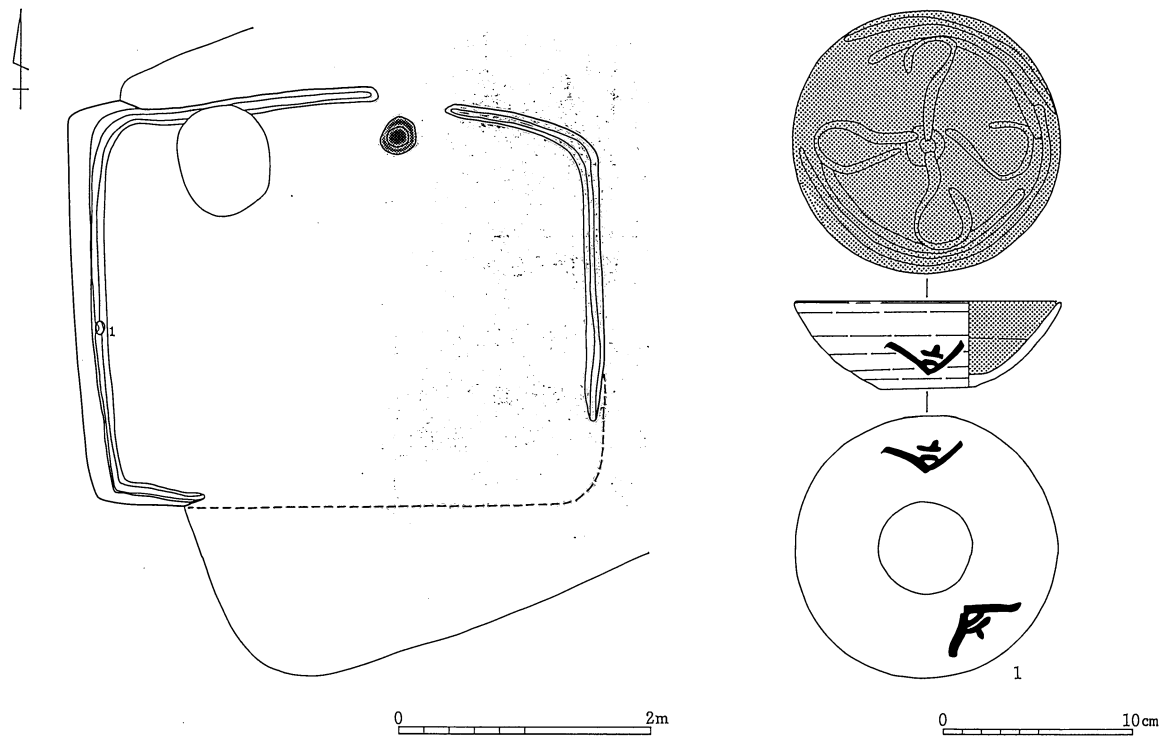
第75図 46号竖穴住居跡

47号竖穴住居跡 (第76図、P L52)

50号竖穴住居跡によって東側の大半を切られた恰好となるが、わずかに50号竖穴住居跡よりも深く掘り下げられた箇所が多いことから、およそ住居形態が分かる。

座標北とほぼ等しい位置を主軸とし、主軸長は3.29m、副軸長は4.08mをはかる。壁高は最高で40cmを測定する。

掘方はなく、軽石流堆積物上面をそのまま床としている。堅緻面も存在しない。周溝が巡り、北壁際に



第76図 47号竖穴住居跡

はカマドの火床部が存在した。

遺物はわずかしがなく、実測可能なものは1の土師器坏1点のみである。西壁際、覆土中層から出土した。内面黒色処理されたもので、内面は磨かず暗文のみ施している。墨書土器である。

時期は平安時代、10世紀代の産物と捉えられるが、土師器坏1点だけではそれ以上の細かな設定は困難である。ただし、その中でも、けっして新しい存在ではないだろう。

48号竪穴住居跡 (第77図、P L 51)

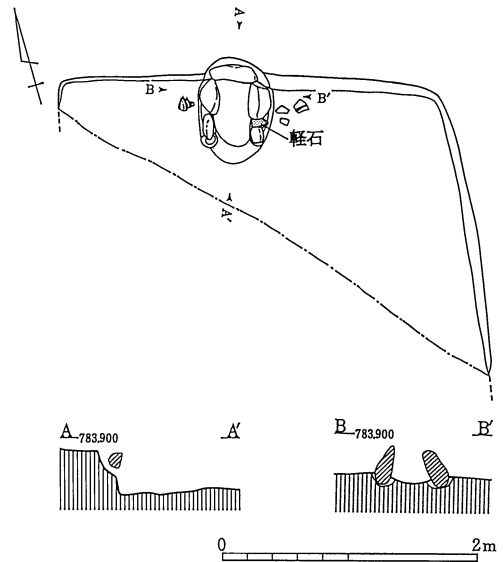
田の土手境に位置するため、住居の南半が既に削られてしまった。

主軸はN-12°-Eを示し、副軸長は奥壁側で3.10mをはかる。壁高は最高で27cmを計測する。

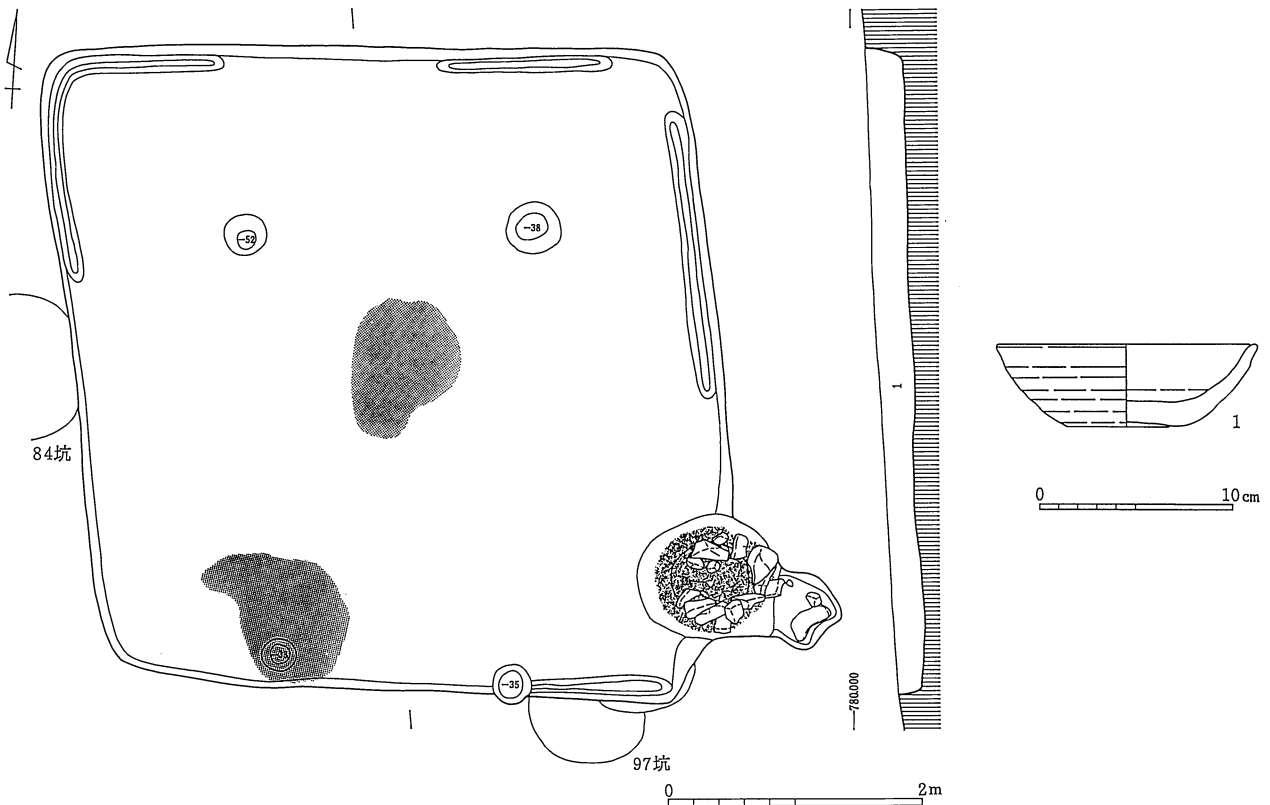
掘方はなく、柱穴や周溝なども存在しない。北壁中央に石組みカマドが遺存していたが、それを保護する粘土などは確認できなかった。また、焼土も一切認められず、積極的に利用した痕跡がない。

カマド周辺から羽釜の破片が出土しているものの、実測は不可能であった。

時期は平安時代に該当し、出土遺物及び住居構造から10世紀代の所産と考えられる。



第77図 48号竪穴住居跡



第78図 49号竪穴住居跡

49号竪穴住居跡 (第78図、P L51)

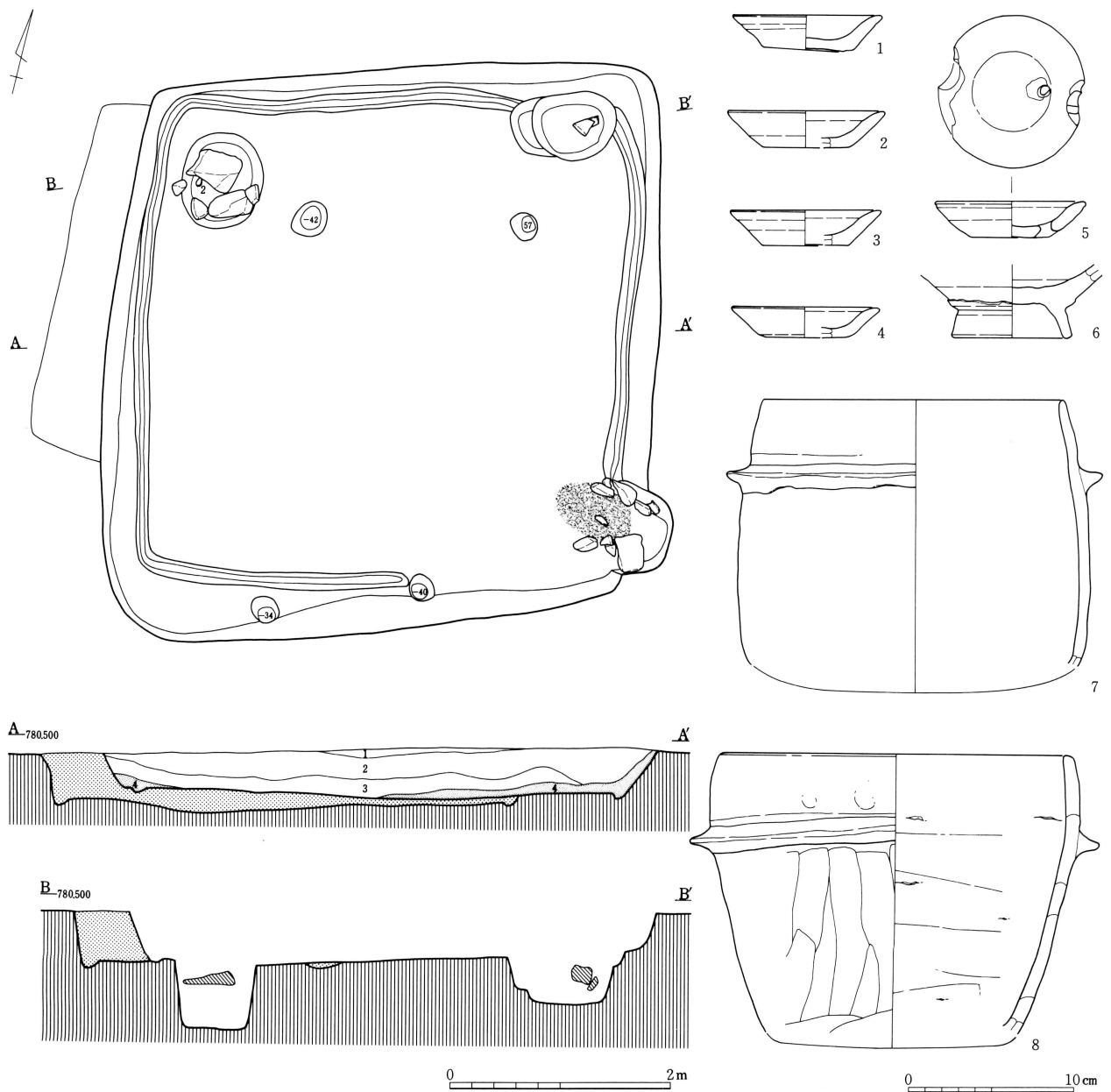
概ね座標北を主軸とし、主軸長5.12m、副軸長5.10m、壁高32cmをはかる。

掘方は存在せず、軽石流堆積物上面をそのまま床としている。柱穴は該期特有の4本柱となる。床面が一部焼土化していたが、それも該期住居跡の特徴である。周溝は部分的に認められた。

カマドは南東コーナー近くの東壁側に位置しており、副軸方向に平行してつくられていた。灰白色の粘土を敷設し、その上に小振りな礫を小口積みや立積みして袖を構築している。

遺物はほとんど無いに等しい状況であったが、唯一、1の土師質坏が出土している。

時期は平安時代に該当し、出土遺物からすれば10世紀後半から11世紀代、住居構造からすれば10世紀後葉から11世紀の比較的早い段階という年代が与えられる。ただし、おそらく50号竪穴住居跡と同時期ではないかと考えているので、11世紀前半という年代が適しているのではなかろうか。



第79図 50号竪穴住居跡

50号竪穴住居跡（第79図、P L 52）

47号竪穴住居跡と重複し、これを切っている。

主軸はN-18°-Wを示し、主軸長・副軸長とも5.00m、壁高は最高で43cmをはかる。

覆土は、4層が壁崩落土、1～3層が黒色から黒褐色の細砂壤土でとくに何の変哲もない。

床に掘方はなく、堅緻面も存在しない。柱穴は49号竪穴住居跡同様、該期特有の柱穴形態となるが、平行四辺形状の配置となる。周溝が伴い、また北側の両コーナーには上面に礫を含むピットが存在する。

カマドは、東壁、南東コーナー寄りに位置しており、向きは副軸方向に等しい。底部に茶褐色→暗緑灰→灰白色の順に粘土を敷設し、内部に安山岩系の自然礫を立積みして袖及び支脚石を構築している。粘土を敷設することから、火床部は床面よりも高い位置に設けられている。火床部西側には、本来カマド構築材として使われた灰白色粘土が多量に認められた。

遺物は、8がカマドから、2が北西コーナーのピット内から出土し、また6・7が床面上からの出土である。5の土師質小皿は、焼成後、口唇部両側をはぎ取り、さらに底部を穿孔している。

時期は平安時代に該当し、1～5の口径から11世紀前半と見做したい。

2 掘立柱建物跡

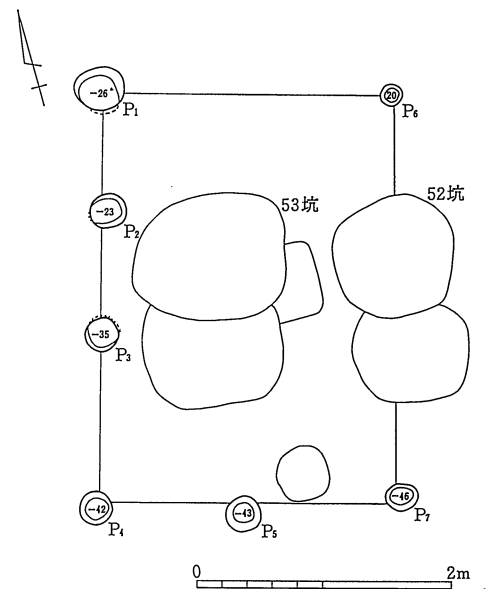
1号掘立柱建物跡（第80図）

3間×2間の南北棟の掘立柱建物跡である。縄文時代の土坑と重複しており、本跡の方が新しいのだが、その部分については残念ながら確認できなかった。

桁行3.20～3.30m、梁間2.30～2.40mをはかる。各柱穴の深さは、もっとも標高が高いP₁の上端を0としマイナス計算してある。

3間×2間という一般的な形態を呈するが、1間あたりの間隔が狭く、そもそも柱間寸法にバラツキが目立ち、しかも小柱穴で構成されている。かなり貧相な掘立柱建物であったことが予測される。

時期は遺物が出土していないので不明だが、縄文時代のものではなく、また中世以降のものでもないから、該期の範疇に組み入れた。



第80図 1号掘立柱建物跡

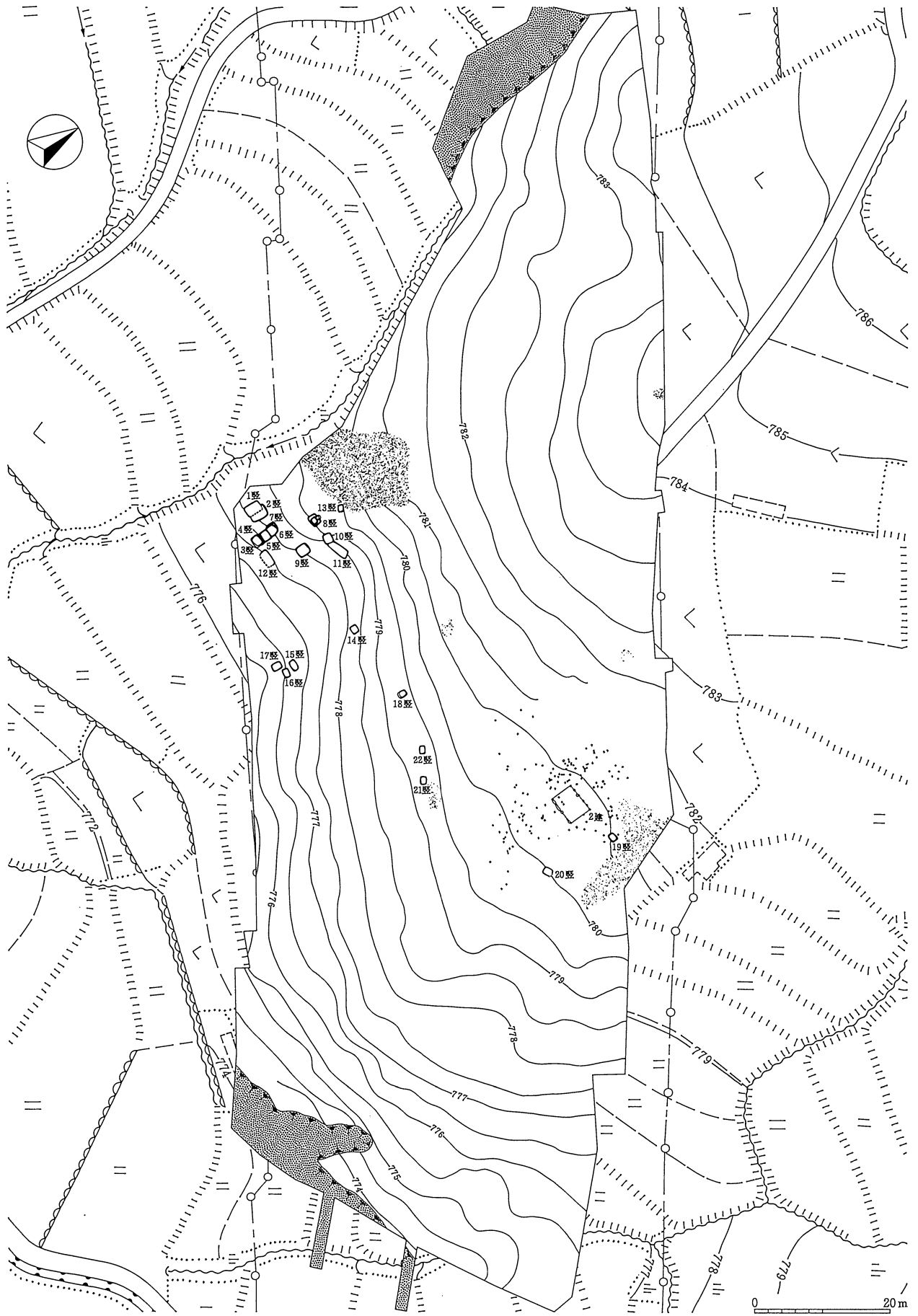
第5節 中世以降の遺構

竪穴建物跡と掘立柱建物跡及び柱穴群が認められるのだが、遺物は皆無であった。中世から近世にかけての遺構であることには相違なく、したがって、本節をもって一括報告する。

1 竪穴建物跡（第82・83図）

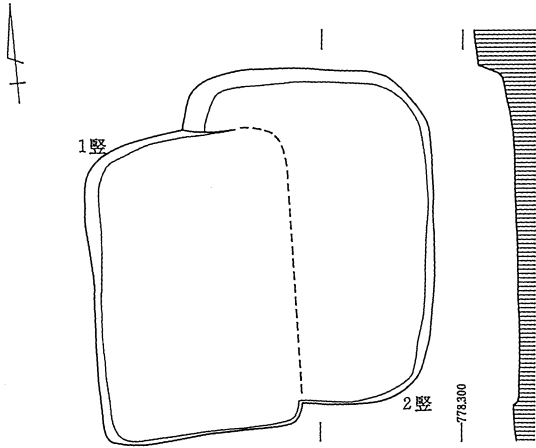
22基を確認した。平面形状が方形もしくは長方形を呈するものをすべてこれとし、規模的な意味合いは捨てている。しかし、「竪穴建物」という呼称を使えば、一般にはこれに上屋を持たせることを想定したはずで、本遺跡ではそれにそぐわない小形のものも多く存在する。

本遺跡では、掘立柱建物跡に囲まれたようなものはなく、それを匂わせる気配もなかった。柱穴・周

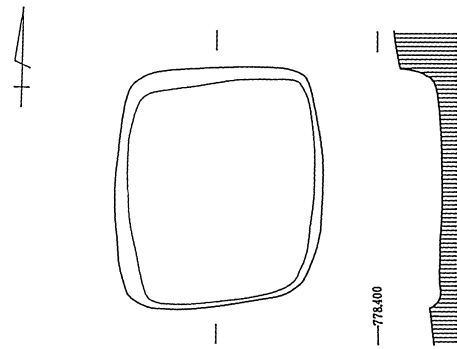


第81図 中世以降の遺構配置

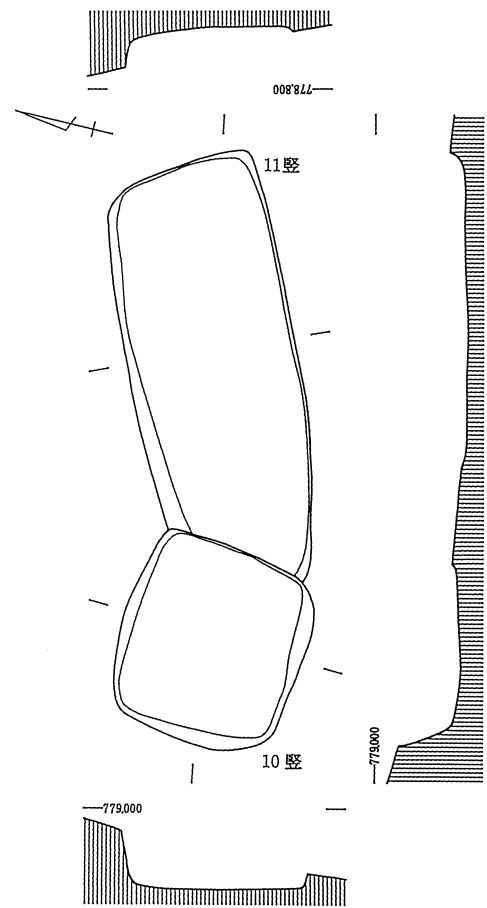
1・2号竪穴建物跡



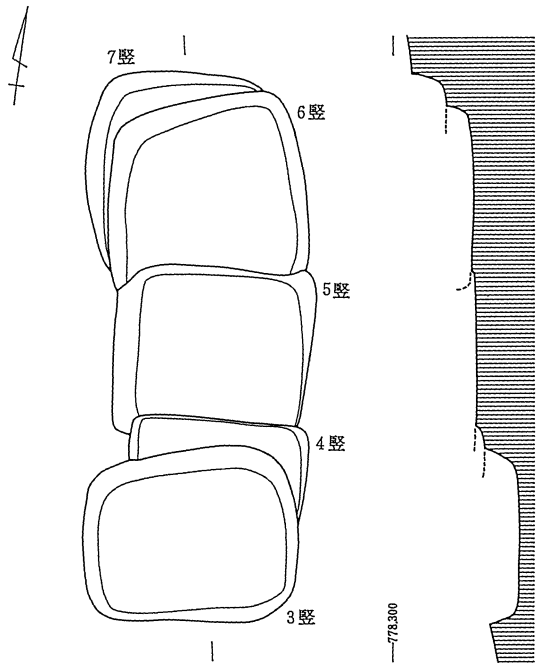
9号竪穴建物跡



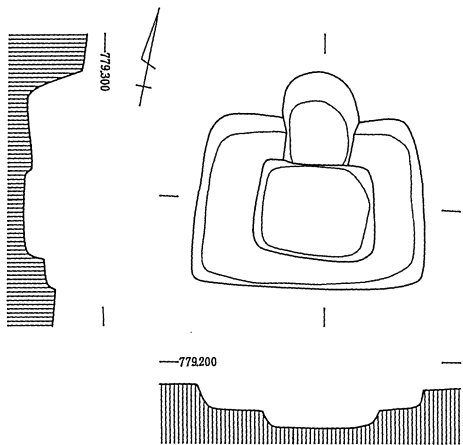
10・11号竪穴建物跡



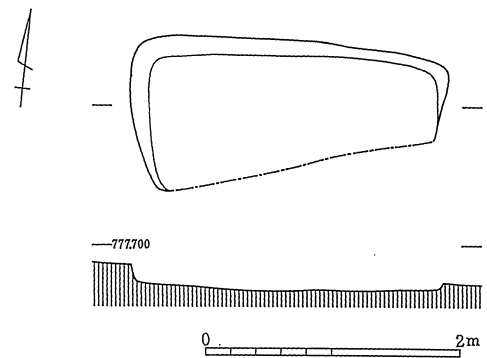
3～7号竪穴建物跡



8号竪穴建物跡

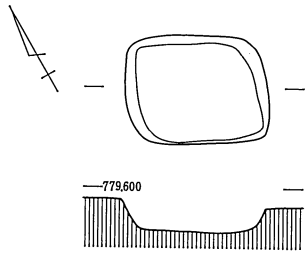


12号竪穴建物跡

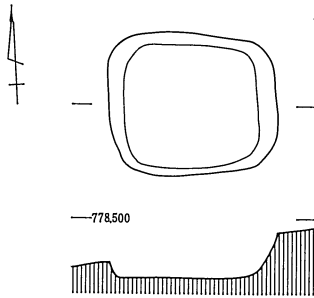


第82図 竪穴建物跡(1)

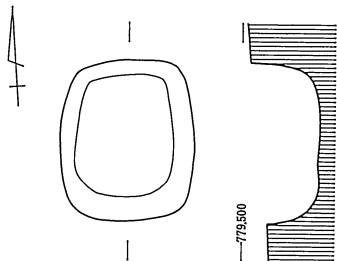
13号竪穴建物跡



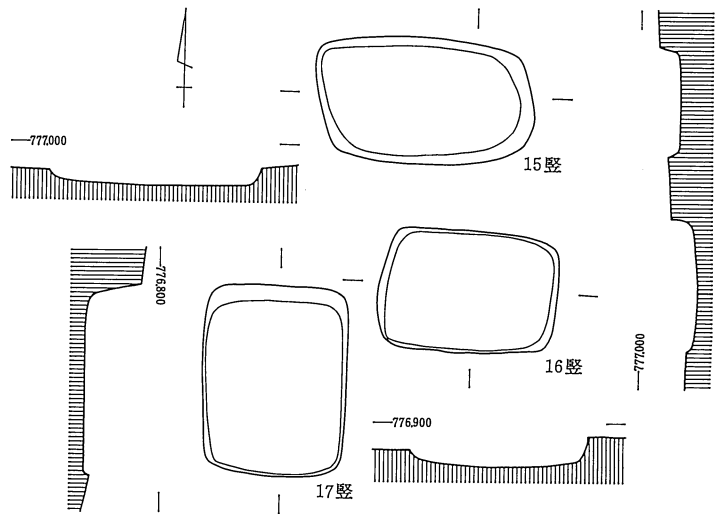
14号竪穴建物跡



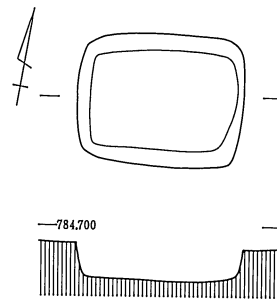
18号竪穴建物跡



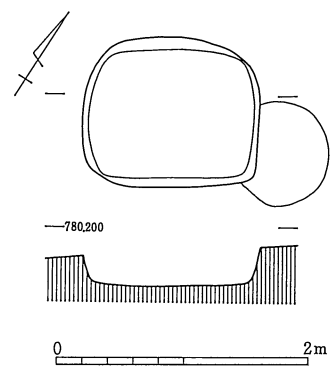
15～17号竪穴建物跡



19号竪穴建物跡



20号竪穴建物跡



第83図 竪穴建物跡(2)

溝・火床・階段状施設などは存在せず、また内部に石積みをも有するものもない。唯一、8号竪穴建物跡だけが二段掘り状の掘り込みと突出部を併有したものである。それ以外は、床は平坦であるものの、単なる土坑状の掘り込みでしかなかった。仮に中世であっても、けっして古い段階ではないらしい。なお、覆土を観察したが、すべて単層で取り立てて何かを看取することはなかった。

分布域については、調査区南西隅（1～16号竪穴建物跡）、調査区中央（18・20・21号竪穴建物跡）、掘立柱建物跡付近（19・20号竪穴建物跡）など、大きく3か所に別れている。調査区南西隅については、浅い谷状地形の周囲に構築されたもので、不思議と方位に平行して掘り込まれている。また、谷の西側、1～12号竪穴建物跡はとりわけ規模が大きく、また重複が著しいものが目立つ。掘立柱建物跡付近のものについては、この集落に伴うものであろうか。

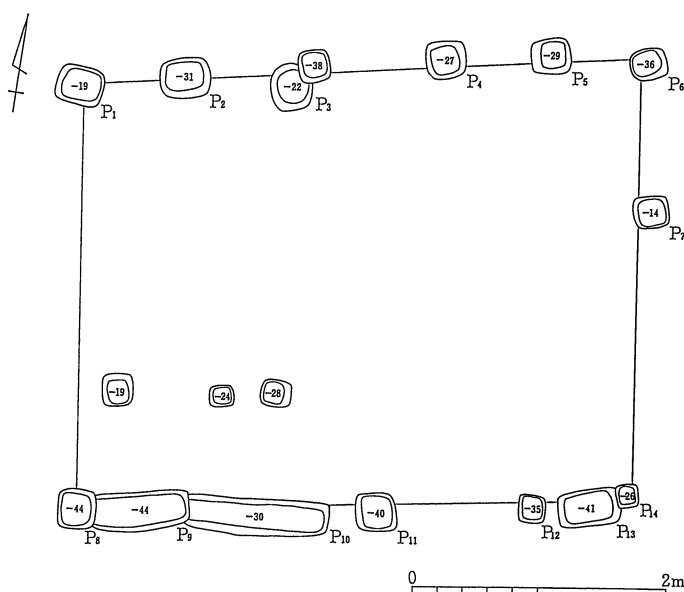
2 2号掘立柱建物跡及び柱穴群（第84図）

2号掘立柱建物跡及び柱穴群は、調査区北東隅に集中して認められた。実はこの場所は、縄文時代後期前半に大規模なカット作業が行われ、径25mほどの円形広場を設けた地点であった。おそらく、該期においても平坦面が存続し、ここに集落を經營しようと考えたのではなかろうか。

2号掘立柱建物跡は、東西棟で、北の東西軸を見れば5間、梁間は1間となる。南側の東西軸は溝持ち状

の掘り込みとなる。桁行4.40～4.50m、梁間3.40～3.45mをはかる。柱穴の深度は、もっとも標高の高いP₁の上端を0とし、マイナス計算してある。各柱穴の平面形状は方形を基調とし、深さにおいてもほかの柱穴群よりも深度を増すものが多かった。

柱穴群はやはり方形プランを基調とするもので、規模的には2号掘立柱建物跡の各柱穴と何ら変わりがない。本来、掘立柱建物跡や柱穴列になる可能性が高いのだが、すべてを確認したわけではなく、うまく適合させることができなかった。



第84図 2号掘立柱建物跡

第6節 三田原遺跡群・岩下遺跡出土の石器・石製品のX線マイクロアナライザによる岩石種の同定について

1 はじめに

三田原遺跡群および岩下遺跡では数多くの石器・石製品が出土していて、石質の同定については主に肉眼による観察で行った。大半の石材は従来から千曲川中上流域の縄文時代の遺跡に見られるものが多く、これらの大半は千曲川流域のさまざまな産地から持ち込まれているものと想定される。

ところが、三田原遺跡群および岩下遺跡の一部の石器・石製品には緑色を呈していて、磨くと光沢があり美しい石材が見られた。これらの石材は量的には石器全体から見れば少ないが、後述するように一部の石器・石製品に限定される点で興味深い。千曲川流域ではあまり見かけない石材であることから、その石質を調べる必要性が認められた。

2 X線マイクロアナライザによる石材の岩石種の同定について

周知の通り、遺跡出土の石器石材の同定は、遺物自体を破壊するして分析するのは非常に難しいので、おもに肉眼ないし実体顕微鏡などによる外面的な観察に頼ることになる。また、量的に豊富でありふれている石材であれば、いくつか分析試料を抽出し、岩石薄片などを作成し、同定の基準的な資料を作成し、比較検討を行っていけば、単なる肉眼鑑定よりはより精度が高いと考えられる。

ところがここで取り上げるような石材は資料の数が限られているので、破壊を前提とする分析は行いにくい。よって地質学(岩石学)の研究者に、肉眼・双眼実体顕微鏡による観察ならびにエネルギー分散型X線マイクロアナライザによる定性分析を行い石質を同定を依頼する方法をとった。

同定担当者：宮島宏(新潟県糸魚川市立フォッサマグナミュージアム 学芸係副参事)

測定機器の詳細：同博物館の日本電子製JSM-6300走査型電子顕微鏡にOxford社製LinkQX2000エネルギー分散型スペクトロメーターを取りつけたもの。

測定条件：加速電圧15kV、分析時間60秒、分析領域0.2mm×0.15mm、分析箇所は任意。

3 分析結果

X線マイクロアナライザによる分析結果のチャートは第 〇 図のとおり。

また、X線マイクロアナライザの結果と肉眼・双眼実体顕微鏡による観察によって宮島氏が同定した結果は表2のとおり。

4 小結

今回の分析では、遺跡周辺では極めて珍しい石質で、交易などによって遠方からもたらされた可能性のあるものを主に選択して分析にかけている。

玉(光沢のある石で全体に磨かれているものを玉と総称した)および垂飾は三田原遺跡群で7点中4点が軟玉(ほかには緑レン石角閃岩1点、碧玉1点、安山岩1点)、磨製石斧は4点中3点が軟玉(ほかには緑レン石角閃岩1点)。岩下遺跡は玉および垂飾は6点中4点が軟玉(ほかには緑レン石角閃岩1点、珪化したデイサイト1点)、磨製石斧は16点中9点が緑レン石角閃岩ないし角閃岩(ほかには軟玉4点、蛇紋岩1点、安山岩1点、不明1点)という結果が出ている。

なお磨製石斧に関しては分析装置に入れられない大きさであったりしたために筆者の肉眼で同定しただけのものがあり、三田原遺跡群では2点(1点軟玉、1点角閃岩ないし緑レン石角閃岩)岩下遺跡磨製石斧(未製品も含む)6点(5点角閃岩ないし緑レン石角閃岩、1点不明)を数える^(註1)。

もともとの個体数が打製石斧や石鏃などに比べて少ないので、大まかな傾向しか言えないが、玉、垂飾、磨製石斧には軟玉および角閃岩・緑レン石角閃岩が多いことは言えそうである。三田原遺跡群および岩下遺跡は時期的にも同じ浅間山麓の縄文時代後期を中心とした遺跡で、玉、垂飾、磨製石斧の流通に関しても似た状況であったと考えるのが自然であろう。

さて、ここで玉・垂飾・磨製石斧に多く利用されていることが判明している軟玉、角閃岩、緑レン石角閃岩について概述してみたい。

軟玉(nephrite)：緑閃石または透閃石よりなるもの。緑閃石はアクチノ角閃石または陽起石とも言う。緑閃石と透閃石は連続置換の関係にあり前者が暗緑色、後者が無色から白色。中国東北地方、トルキスタンなど中央アジアで産出し、中国で一般に「玉(ギョク)」といえば、軟玉のことを指す。

角閃岩(amphibolite)：ホルンブレンド(普通角閃石・珪素の少ないカルシウム角閃石)と斜長石からなる塩基性変成岩。

緑レン石角閃岩(epidoteamphibolite)：緑レン石とホルンブレンド、斜長石を含有する角閃岩。

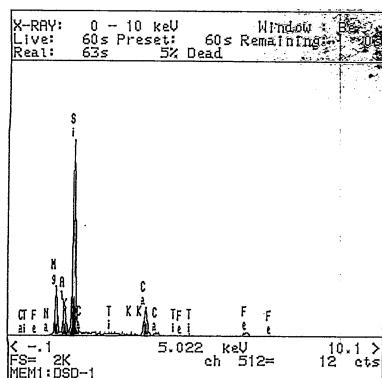
いわゆる硬玉ヒスイがヒスイ輝石(jadeite)などの輝石系鉱物からなるのに対し、軟玉は角閃岩や緑レン石角閃岩に含まれる普通角閃石とも同じく角閃石系鉱物からなる。ネフライトは「玉」としては硬玉よりは軟らかいということで軟玉と呼ばれるが、硬度は蛇紋岩や滑石よりもはるかに硬い。ただ、硬玉に比べれば緻密さや硬さが若干劣るためか加工しやすい石材のようである。角閃岩や緑レン石角閃岩も多少色合いや鉱物の緻密さなどが異なるが、いずれも広域変成帯に産することが知られており^(註2)、三田原遺跡群、岩下遺跡ではほぼ同じように玉、垂飾、磨製石斧に利用されており、縄文人は軟玉の仲間として認識していたのかもしれない。

すでに述べたように中国で玉といえば軟玉のことを指しており、三田原遺跡群・岩下遺跡に磨かれた「玉」は、まさに形状だけでなく、質的にも玉と呼べるものなのである。

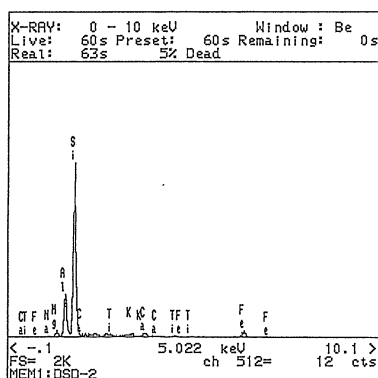
縄文文化の研究において玉というと硬玉(ジェイダイト)にばかり関心が集中してきたが、軟玉(ネフライト)にも当時の人が希少かつ美的な硬玉に似たような価値観を有していた可能性もあり、今後こう

表2 三田原遺跡群・岩下遺跡X線マイクロアナライザ定性化学分析試料一覧

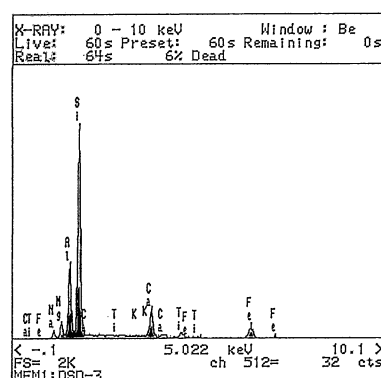
分析番号	遺跡名	挿図番号	器種	岩石名
DSD-1	三田原	2号住-13	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DSD-2	三田原	2号住-14	玉	安山岩
DSD-3	三田原	4号住-25	磨製石斧	緑レン石角閃岩
DSD-4	三田原	4号住-35	磨製石斧	軟玉(透緑閃石岩)
DSD-5	三田原	4号住-36	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DSD-6	三田原	5号住-14	玉	緑レン石角閃岩
DSD-7	三田原	15号住-2	磨製石斧	軟玉(透緑閃石岩)
DSD-8	三田原	11号住-42	垂飾	軟玉(透閃石岩)
DSD-9	三田原	環状-2	磨製石斧片	軟玉(透閃石岩)
DSD-10	三田原	環状-3	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DSD-11	三田原	遺構外-24	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DSD-12	三田原	遺構外-25	玉	碧玉
DIS-1	岩下	13号住-14	磨製石斧	風化顕著で分析不能
DIS-2	岩下	13号住-19	磨製石斧	安山岩
DIS-3	岩下	13号住-20	磨製石斧	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-4	岩下	13号住-24	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-5	岩下	16号住-14	磨製石斧	緑レン石角閃岩
DIS-6	岩下	19号住-16	玉	珪化したデイサイト
DIS-7	岩下	19号住-17	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-8	岩下	20号住-14	磨製石斧	角閃岩
DIS-9	岩下	20号住-15	磨製石斧	角閃岩
DIS-10	岩下	20号住-16	磨製石斧	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-11	岩下	21号住-10	玉	緑レン石角閃岩
DIS-12	岩下	28号住-15	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-13	岩下	29号住-14	磨製石斧	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-14	岩下	30号住-8	磨製石斧	蛇紋岩
DIS-15	岩下	30号住-7	磨製石斧	緑レン石角閃岩
DIS-16	岩下	31号住-10	玉	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-17	岩下	36号住-2	磨製石斧	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-18	岩下	43号住-9	磨製石斧	緑レン石角閃岩
DIS-19	岩下	75土坑-1	?	軟玉(透緑閃石岩)
DIS-20	岩下	遺構外-106	磨製石斧	角閃岩
DIS-21	岩下	遺構外-109	磨製石斧	角閃岩
DIS-22	岩下	遺構外-107	磨製石斧	緑レン石角閃岩
DIS-23	岩下	遺構外-131	磨製石斧	緑レン石角閃岩



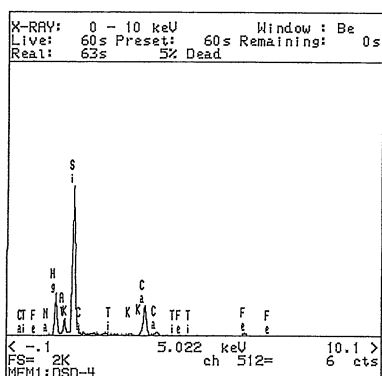
三田原-1



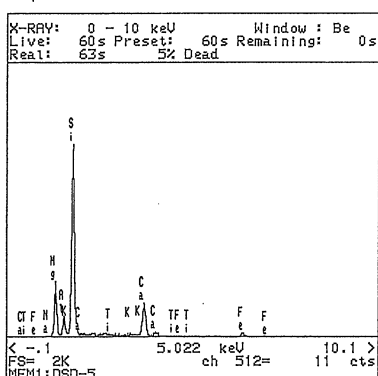
三田原-2



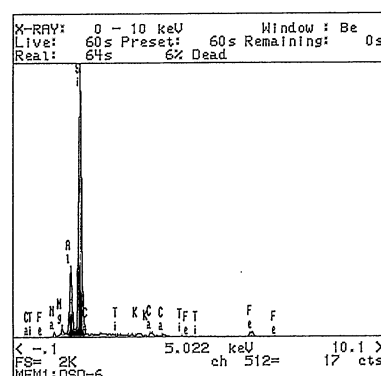
三田原-3



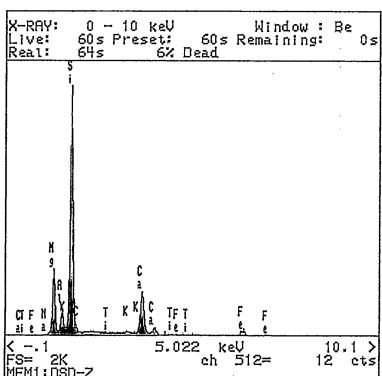
三田原-4



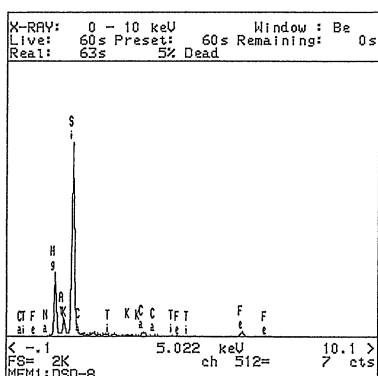
三田原-5



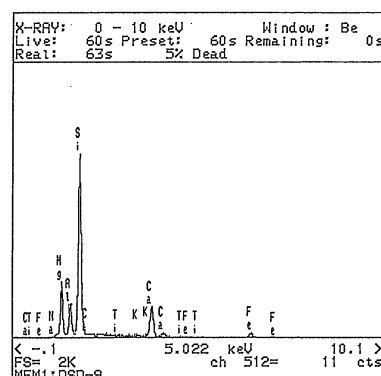
三田原-6



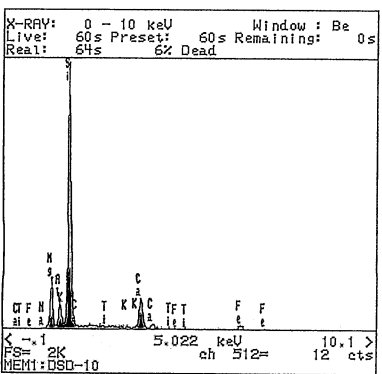
三田原-7



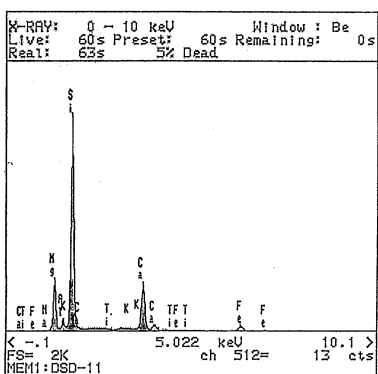
三田原-8



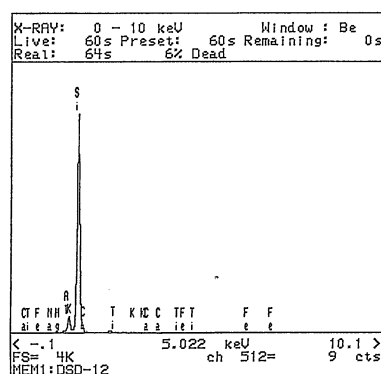
三田原-9



三田原-10

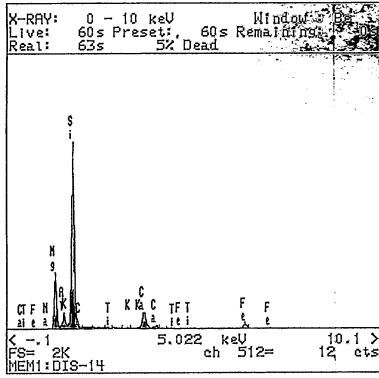


三田原-11

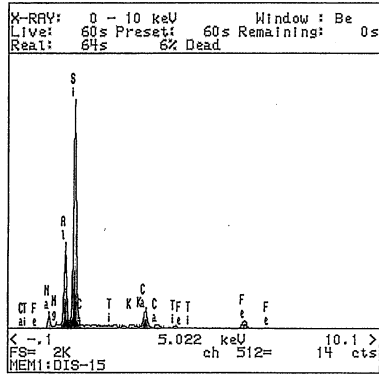


三田原-12

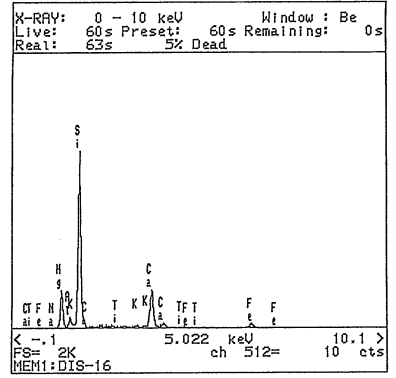
第85図 三田原遺跡群分析用チャート



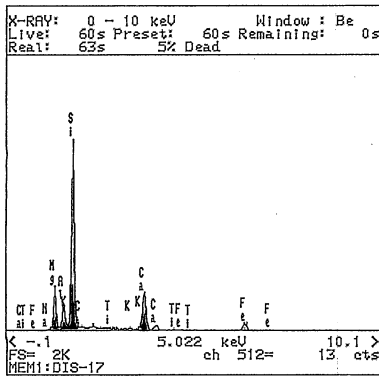
岩下-14



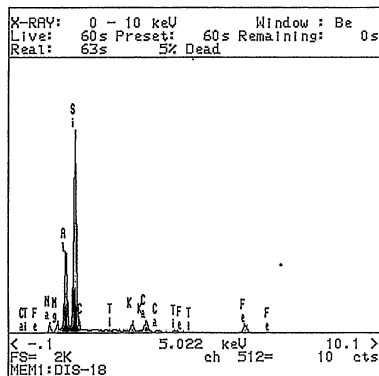
岩下-15



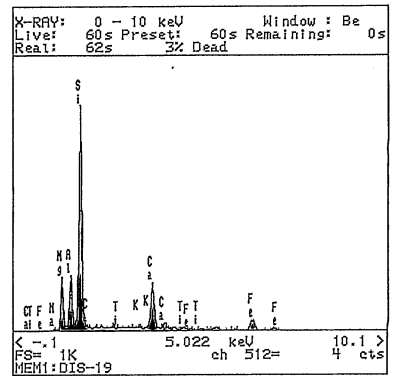
岩下-16



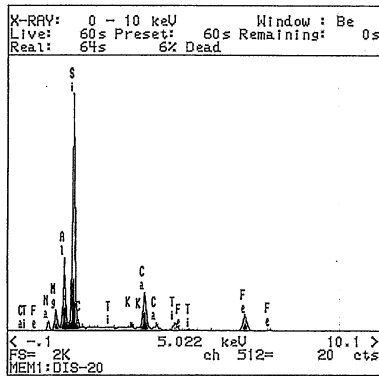
岩下-17



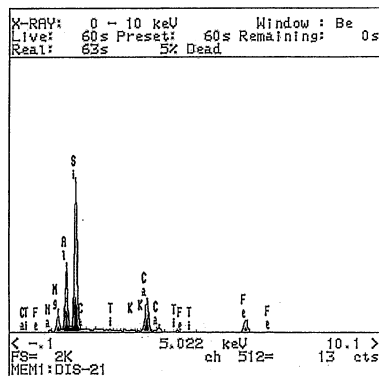
岩下-18



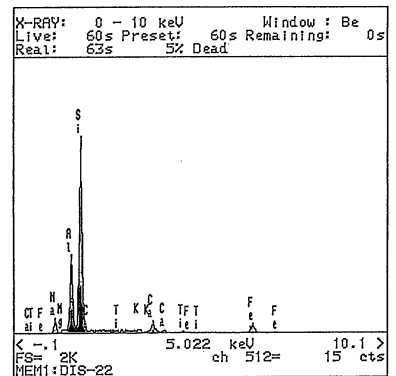
岩下-19



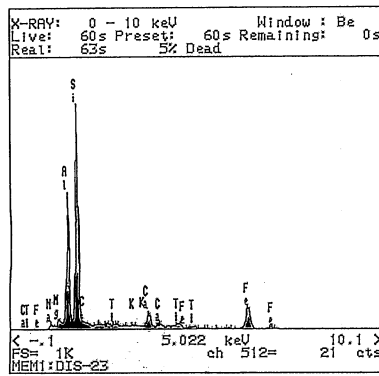
岩下-20



岩下-21



岩下-22



岩下-23

第87図 岩下遺跡分析用チャート(2)

した理化学的な分析を通じて同定し、その縄文社会における役割を考究していく必要があるだろう。

またX線マイクロアナライザによる玉などの石製品の岩石鑑定の実際については文献（川崎1998）も参照されたい。

註

- (1) 筆者の肉眼の鑑定では角閃岩と緑レン石角閃岩の峻別は極めて困難であったので、一括した。
- (2) 宮島宏氏のご教示による。緑レン石角閃岩や角閃岩は広域変成帯では広く見られるものらしい。しかし、軟玉はある程度産地が限られるが、今のところ産地同定までには至っていない。軟玉の産地としては新潟県糸魚川地方以外では北海道日高地方のいわゆる「日高ヒスイ」が著名であるという。

引用参考文献

- 川崎 保 1998 「石製品について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4—長野市内その2—松原遺跡縄文時代』 長野県埋蔵文化財センター
- 地学団体研究会編 1981 『増補改訂地学事典』 平凡社
- 都城秋穂・久城育夫 1972 『岩石学Ⅰ 偏光顕微鏡と造岩鉱物』 共立全書

第7節 小 結

縄文時代の集落は、前期初頭から始まり、前葉・中葉・末葉それぞれに小規模ながら存在していた。前期に入るやいなや、東信地方を中心とした地域に関東系の文化が流入して、極端に遺跡数を増加させているが、その一端がここにも現れている。目立った遺物は認められないものの、その傾向はここでも見受けられる。

以後、前期最終末の晴ヶ峯式や、中期初頭の五領ヶ台式の遺構もわずかに認められるが、再び集落が営まれるのは中期後葉、加曾利EⅡ式になってからのことである。

中期後葉から中期末～後期初頭にかけての住居は9棟あり、加曾利EⅡ式期が1棟（39号竪穴住居跡）・EⅢ式期が3棟（36～38号竪穴住居跡）・中期末～後期初頭が2棟（35・43号竪穴住居跡）・詳細不明が3棟（32・33・44号竪穴住居跡）となる。しかも、EⅢ式期の37号竪穴住居跡と38号竪穴住居跡とは重複している。定住を始めたらしいが、住居跡の配置はいずれも散在傾向にあり、おそらく1～2棟の住居が存在する程度の遺跡に過ぎなかったのではなかろうか。なお、中期末～後期初頭の段階には、ようやく敷石住居が出現するものの、35号竪穴住居跡では礫全体が小振りであること、平石（鉄平石）を用いないこと、及び柱穴が明確でないことなど、ほかの敷石住居とはかなり異なるところが多い。一方、43号竪穴住居跡では、もう称名寺式期のものと何ら変わりが無い柄鏡形敷石住居と化している。微妙な時期差でも存在したのであろうか。いずれにしても、これ以降、敷石住居の宝庫ともいわれる遺跡であったが、その初源期たる加曾利EⅢ式期には、皆無の状態であった。

後期初頭、称名寺式期の住居跡は、41・42号竪穴住居跡の2棟が該当し、また34号竪穴住居跡が称名寺式末～堀之内式新段階に落ち付くものである。遺跡全体を調査したわけではないものの、依然として規模の小さいものでしかなかった。形態を明確につかめたのは41号竪穴住居のみだが、いずれも柄鏡形敷石住居になるものと思われ、均一性が認められる。

堀之内式期になると、集落規模が増大し、しかも斜面をカットして設けられた環状集落や性格不明の石列をもつ住居群が形成されるなど、正しく集落の隆盛期を迎えることとなった。

堀之内1式期には、既に環状集落の基本形ができていたようで、中核となる14号竪穴住居跡は当初から

存在し、これを円弧の基点として18号竪穴住居跡・20～21号竪穴住居跡が営まれ、あわせて土坑群が取り巻いていた。ただ、この時の14号竪穴住居跡の形態は通例の大きさと何ら変わらず、また堀之内2式期に廃棄された15・16号竪穴住居跡がどこまで遡れるのかも分からないから、この時点で斜面をカットし、さらに石積みを施したかどうかは定かでない。

そもそもこの石積み（石列）は、堀之内1式期にみられる三田原遺跡群の環状集落の発展形態と考えられる。14号竪穴住居跡が巨大化した13号竪穴住居跡（堀之内2式期）の出入口部から始まる円弧を描く巨大な石積み（石列）が、実際には張出部状の施設となり、且つ円形広場との境界点となっており、またその中に15・16号竪穴住居跡を加味し、その張出部と14号竪穴住居跡の石積み（石列）が合体してこのような形状となっている。言わば三位一体の形態である。それが14号竪穴住居跡にも当てはまるというなら、15・16号竪穴住居跡の初現期をまたそこまで遡らせなければならないのだが、それはかなりの無理が生じる。ただ、14号竪穴住居跡にも張出部はあったはずで、しかも中核的存在なら何かしらの特徴的な構造物が存在したに違いない。

これと同時に営まれていたのが、尾根末端、南方に位置する竪穴住居跡群であった。すべて堀之内1式期の新しい段階で終焉を迎えている。不可思議なのは28・29号竪穴住居跡の奥壁に連結する石積み（石列）の存在である。どのような構造物であったのか不明のまま終了してしまったが、竪穴住居跡と何らかの関係があるらしい。これから下は谷地形となり、最早何も残存していないし、28・29号竪穴住居跡の調査中には柱穴内から水が湧きだし、また29号竪穴住居跡の床面には多数の礫が湧起していた。一般には、住居を構築する場所としてはかなり不適切なところとしか思えない。しかし、このような石積み（石列）を伴う竪穴住居跡群が確かに一グループ存在し、はるか斜面上方側には円形広場をもつ集団が住み着いており、これらが一体となってひとつのムラを形成していたに違いない。

堀之内2式期は、13号竪穴住居跡を中核とした環状集落の明確な出現を見出す時期となる。13号竪穴住居跡は、巨大で、柱穴もすこぶる大きいのが、意外に掘り込みは浅い。三田原遺跡群の環状集落の中核、1～3号竪穴住居跡のそれと同じような状況である。これを斜面上方側に置き、さきほど述べた三位一体の石積み（石列）が施され、径25mほどの円形広場を形作っている。13号竪穴住居跡は、形態・位置などをみても他を圧するものとなった。環状集落が以前からできていたとしても、その背景にはよほど大きな社会体制の変化が起きたことは確実で、正しく「中核」たる住居を集落内に設定したのである。

このような集落も、堀之内2式期の最終末になると、急遽姿を消してしまう。中葉の加曾利B I式期の段階になると、多少の土坑が検出されているものの、竪穴住居跡は発見されていない。以後、遺物すら認められず、縄文時代の活動は完全に休止することになる。

古墳時代後期の集落は、広く見て6世紀後半から7世紀前半のものと判断した。しかし、2棟しか存在せず、しかも近接した位置関係にある。地理的状况からすれば、さらに下方に1・2棟の竪穴住居が構築されていたかもしれないが、どうみても規模は小さいし、またとても100年間も維持したとは思えない。ちょうどこの頃、浅間南麓一帯の高燥地帯には、小さな集落が入り込み、短期間のうちに廃絶されるケースが多くみられる。以後、律令期の計画村落へと住まいを変えていくようだが、なぜこのような事態になったのか謎に包まれている。いずれにしても、その時の集落がここにも存在しており、着目している。

平安時代の集落は、遺物が希少なながらも、住居構造も含めおよそ2期に細別可能ではないかと考えている。すなわち、10世紀の比較的早い段階の47・48号竪穴住居跡、11世紀前半の49・50号竪穴住居跡の段階とである。どちらも、律令期が終わりを遂げた後で、計画村落自体も最早解体の時を辿っている。このような律令体制崩壊以後の集落は、散々たる状況の中にあり、至る所に、しかも小規模な経営を行っている場合が多いのである。今回は4棟のみの発見であったが、古墳時代後期同様、一般には見過ごされる場合

が多く、残念極まりない。縄文集落の中に、点々と広がる古代のムラに感謝の念を与えたい。

中世から近世と思われる遺構群については、惜しくも遺物は発見されなかった。したがって、残念ながら時代・時期とも不明のままとなってしまった。小規模な存在であったが、一部で集落が、もう一方で竪穴建物跡がやや密集して作られており、該期の遺構として新例を紹介することができた。なお、集落跡については、明らかに縄文時代後期前半の円形広場の中に収まり、該期に至るまでここが、なお平坦地であったことが推測される。

引用参考文献

小諸市教育委員会 1994 『石神』

表3 石器・石製品・土製品観察表

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
2住-1	スクレイパー	千枚岩質粘板岩	10.4	5.2	0.9	1.4	横刃形石器?
5住-3	磨石	安山岩	12.7	8.4	4.9	762.1	
6住-6	磨石	安山岩	12.6	7.4	5.1	944.4	側面敲打痕
9住-1	石匙	ガラス質安山岩	3.9	3.4	1.0	13.0	
環-1	土製品	5.8	2.8	1.5	30.9		
環-2	磨石	不明	5.8	4.7	5.0	153.3	
環-3	磨石	安山岩	7.8	6.3	2.3	153.5	
環-4	磨石	安山岩	8.0	6.8	2.6	198.4	
環-5	磨石	頁岩?	10.7	5.3	5.1	440.1	
環-6	磨石	安山岩	13.0	8.2	7.8	830.0	
環-7	砥石	安山岩	16.3	7.3	5.0	558.0	
環-8	凹石	安山岩	8.8	5.9	4.3	317.2	
環-9	石鉢?	浮石(軽石)	17.0	18.0	9.5	5900.0	
環-10	凹石	安山岩	12.9	10.1	8.0	1276.0	
環-11	多孔石	安山岩	23.0	16.1	12.0	6800.0	
環-12	多孔石	安山岩	22.0	17.0	13.8	5900.0	
環-13	多孔石	安山岩	20.0	16.9	11.7	4800.0	
環-14	多孔石	安山岩	15.5	12.9	11.9	2600.0	
環-15	多孔石	安山岩	17.8	14.4	10.4	3300.0	
環-16	多孔石	安山岩	18.7	17.3	9.9	5100.0	
環-17	石皿	安山岩	24.7	22.4	9.6	5500.0	
環-18	石皿	安山岩	12.5	16.2	5.1	871.3	
環-19	石皿	安山岩	15.7	15.7	6.2	1632.0	
環-20	丸石	安山岩?	26.0	18.2	10.8	7500.0	
環-21	石鉢	安山岩	36.6	21.2	16.0	24400.0	
環-22	石棒	石材A	48.7	17.6	16.4	18400.0	
環-23	石棒	石材A	21.5	21.5	19.9	11700.0	上下両端欠損か、被熱赤化
13住-10	凹石	安山岩	14.0	6.1	4.6	563.8	裏面煤付着・磨り面発達
13住-11	凹石	安山岩	8.7	7.7	4.8	444.1	磨り面発達
13住-12	磨石	安山岩	10.5	5.3	4.8	493.2	
13住-13	打製石斧	ガラス質安山岩	9.5	5.4	1.3	61.6	
13住-14	磨製石斧	変成岩	11.9	5.3	3.3	331.1	分析不能 風化顕著
13住-15	砥石	砂岩	7.4	6.0	3.2	173.2	
13住-16	軽石製品	浮石(軽石)	9.0	6.6	4.7	98.0	
13住-17	軽石製品	浮石(軽石)	7.3	6.2	3.3	53.2	
13住-18	軽石製品	浮石(軽石)	26.0	11.4	8.1	1108.6	
13住-19	磨製石斧	安山岩	3.7	2.0	0.6	6.7	DIS分析No.2
13住-20	磨製石斧	軟玉	2.6	1.3	0.5	3.9	DIS分析No.3
13住-21	石皿	安山岩	15.0	11.1	8.2	1370.2	
13住-22	多孔石	安山岩	19.9	14.1	7.8	2590.0	
13住-23	石棒	安山岩	29.9	7.5	7.5	2920.0	煤けている 被熱赤化
13住-24	玉	軟玉	4.9	3.4	2.1	62.8	DIS分析No.4
14住-4	磨石	安山岩?	16.7	7.4	3.7	610.9	
14住-5	未製品?	角閃岩?	10.0	4.4	2.9	190.1	磨製石斧の未製品か
14住-6	玉	頁岩?	5.7	4.0	1.9	62.1	
14住-7	玉	頁岩?	6.2	2.6	2.8	58.2	
15住-8	軽石製品	浮石(軽石)	26.0	18.0	13.2	2490.0	
16住-6	磨石	砂岩	13.6	5.2	3.0	310.3	
16住-7	凹石	安山岩	10.5	8.0	3.9	403.7	
16住-8	両面石器	安山岩	9.2	6.1	4.2	320.2	
16住-9	打製石斧	安山岩	4.8	6.5	0.9	43.8	
16住-10	石錐	安山岩	8.1	6.9	2.9	222.7	
16住-11	凹石	安山岩	12.0	8.1	7.0	849.0	
16住-12	磨石	安山岩	17.3	11.8	8.0	1967.1	
16住-13	丸石	安山岩	13.7	14.5	11.5	3290.0	
16住-14	磨製石斧	緑レン石角閃岩	5.0	3.6	1.7	58.1	DIS分析No.5
17住-3	磨石	安山岩?	4.1	3.8	4.2	97.8	
19住-9	凹石	安山岩	11.7	6.3	4.5	417.5	磨り面発達
19住-10	磨石	安山岩	11.5	7.2	4.5	514.1	赤化
19住-11	磨製石斧	安山岩	7.8	7.1	2.5	136.2	軟質で多孔質なので実用品かどうか分からない
19住-12	砥石	安山岩	7.3	6.2	2.1	128.1	赤化
19住-13	石棒	緑泥片岩	5.4	1.8	2.4	33.7	
19住-14	石皿	安山岩	19.0	11.4	6.4	1436.1	多孔石に転用
19住-15	多孔石	安山岩	11.7	12.5	11.6	1716.5	
19住-16	玉	珪化したサイト	6.9	4.2	2.2	97.3	DIS分析No.6
19住-17	玉	軟玉	6.7	5.0	6.8	121.6	DIS分析No.7
20住-12	磨石	安山岩	9.9	6.9	3.2	255.0	
20住-13	凹石	安山岩	12.1	6.4	3.4	394.2	
20住-14	磨製石斧	角閃岩	9.0	4.8	2.8	197.1	DIS分析No.8
20住-15	磨製石斧	角閃岩	8.9	4.0	2.9	101.0	DIS分析No.9
20住-16	磨製石斧?	軟玉	5.0	2.9	2.6	62.5	DIS分析No.10
20住-17	打製石斧	安山岩	6.9	5.1	1.5	75.2	
20住-18	砥石	砂岩	10.2	4.4	1.6	84.5	
20住-19	石棒	緑泥片岩	7.8	3.7	2.2	93.7	
20住-20	石棒	結晶片岩	13.8	2.9	2.6	193.0	
20住-21	石棒	結晶片岩	9.8	3.4	2.5	125.8	
20住-22	多孔石	安山岩	14.4	14.3	10.0	2051.3	
20住-23	小形石棒	粘板岩	4.9	0.7	0.6	3.4	
21住-2	石匙	ガラス質安山岩	2.5	4.4	0.6	5.3	
21住-3	石匙	黒曜石	2.9	2.2	0.8	3.8	
21住-4	磨石	安山岩	8.8	7.8	7.5	665.3	煤けている
21住-5	磨製石斧	角閃岩?	8.4	3.4	1.4	74.9	
21住-6	磨製石斧	角閃岩?	7.6	4.1	2.0	86.4	
21住-7	磨製石斧	角閃岩?	4.7	4.6	2.4	74.5	
21住-8	打製石斧	千枚岩質粘板岩	6.4	4.6	1.7	62.7	
21住-9	磨石	角閃岩?	4.5	4.7	3.7	154.6	
21住-10	玉	緑レン石角閃岩	5.0	2.8	1.9	32.7	DIS分析No.11
23住-6	打製石斧	粘板岩	11.2	5.2	1.8	123.7	
24住-5	凹石	安山岩	8.9	7.0	4.2	330.2	
24住-6	磨石	安山岩	9.8	7.1	5.4	421.1	
24住-7	多孔石	安山岩	23.8	15.1	15.3	7000.0	
26住-1	凹石	安山岩	12.1	6.8	3.3	408.9	磨り面発達
26住-2	凹石	安山岩	8.7	7.8	6.1	576.0	磨り面発達
28住-11	凹石	安山岩	9.2	7.8	5.5	512.3	磨り面発達
28住-12	磨製石斧	角閃岩?	19.6	4.1	3.2	313.0	
28住-13	打製石斧	珪質頁岩	8.4	4.4	1.1	43.1	
28住-14	石棒	結晶片岩	8.9	1.1	2.3	26.3	
28住-15	玉	軟玉	4.8	4.0	1.7	44.4	DIS分析No.12
28住-16	土製円盤	4.1	4.7	0.8	16.5		
29住-8	磨石	安山岩	9.5	6.4	3.9	395.2	煤けている 赤化
29住-9	磨石	安山岩	9.5	8.9	5.7	705.3	
29住-10	磨石	安山岩	9.5	6.7	3.0	274.1	
29住-11	軽石製品	浮石(軽石)	12.0	9.1	4.3	166.9	
29住-12	凹石	安山岩	11.0	9.8	6.8	758.2	
29住-13	凹石	安山岩	11.0	8.3	4.0	456.1	磨り面発達 両側面に敲打痕
29住-14	磨製石斧	軟玉	7.5	3.0	1.2	45.9	DIS分析No.13
29住-15	打製石斧	安山岩	10.9	5.1	1.9	115.4	
29住-16	打製石斧	安山岩	9.3	5.4	1.5	113.8	
29住-17	多孔石	安山岩	20.3	14.7	10.0	3210.0	
29住-18	石皿	安山岩	35.8	22.0	8.6	6800.0	四脚
30住-5	凹石	安山岩	7.0	8.0	3.6	231.7	磨り面発達
30住-6	砥石?	安山岩	7.6	5.7	4.9	415.3	
30住-7	磨製石斧	緑レン石角閃岩	7.5	4.2	2.3	125.5	DIS分析No.15
30住-8	磨製石斧	蛇紋岩?	4.0	4.9	2.5	47.6	DIS分析No.14
31住-8	打製石斧	安山岩?	10.6	5.2	1.6	120.0	
31住-9	石棒	緑泥片岩	31.1	8.3	8.1	3600.0	
31住-10	玉	軟玉	6.4	2.8	1.2	39.1	DIS分析No.16
31住-11	軽石製品	浮石(軽石)	6.5	4.6	1.4	23.2	
34住-8	凹石	安山岩	11.4	6.9	3.6	410.6	磨り面発達
34住-9	打製石斧片?	ガラス質安山岩	5.1	4.5	1.8	40.9	
34住-10	軽石製品	安山岩	12.2	13.1	8.0	1220.2	
34住-11	軽石製品	浮石(軽石)	15.6	9.3	5.3	293.3	
34住-12	石皿	結晶片岩	11.8	8.8	2.9	379.8	
35住-5	打製石斧	千枚岩質粘板岩	13.9	5.5	1.9	225.4	煤けている
35住-6	打製石斧	千枚岩質粘板岩	5.3	4.5	2.0	46.3	
36住-2	磨製石斧	軟玉	3.0	1.0	0.5	3.1	DIS分析No.17
37住-9	磨石	安山岩	5.1	9.5	3.1	246.3	
38住-4	石錐	黒曜石	2.4	1.0	0.3	0.4	
38住-5	砥石	砂岩	7.2	6.4	1.2	67.9	
40住-7	磨製石斧未製品?	角閃岩?	6.2	4.3	2.0	84.3	
40住-8	磨片岩	砂岩	8.0	5.4	3.1	202.8	
40住-9	凹石?	浮石(軽石)	11.1	7.4	3.6	157.9	
40住-10	玉	粘板岩?	6.4	3.2	1.7	54.1	

第5章 岩下遺跡

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
41住-10	石鏃	ガラス質安山岩	2.2	12.0	4.0	0.6	
41住-11	凹石	安山岩	10.0	7.2	4.1	506.2	磨り面発達
41住-12	丸石	安山岩	8.7	8.1	7.4	638.7	磨り面発達
43住-8	磨石	安山岩	11.2	5.2	3.6	310.3	
43住-9	磨製石斧	緑レン石角閃岩	5.6	4.0	2.1	78.5	DIS分析No18
43住-10	打製石斧	千枚岩質粘板岩	9.3	5.8	1.4	72.9	
43住-11	石皿	安山岩	16.4	18.7	8.2	2012.3	
43住-12	軽石製品	浮石(軽石)	25.4	20.3	6.2	1607.3	
43住-13	石鉢	浮石(軽石)	36.6	29.0	12.2	2975.0	
44住-1	凹石	安山岩	10.6	7.0	4.9	586.5	側面敲打面 表裏磨り面発達
1平住-14	磨石	安山岩	6.1	5.2	4.9	227.8	
1平住-15	打製石斧	ガラス質安山岩	7.8	6.5	2.8	159.9	
1平住-16	丸石	安山岩	10.1	9.6	7.8	835.4	
7坑-30	土製円盤	—	2.2	2.3	0.9	5.5	
7坑-31	石鏃	黒曜石	1.4	1.6	0.3	0.6	
7坑-32	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.4	0.8	
7坑-33	石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.3	
7坑-34	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.4	
7坑-35	石鏃	黒曜石	1.2	1.0	0.3	0.3	
7坑-36	石鏃	黒曜石	2.4	1.3	0.6	0.9	有茎式
7坑-37	石鏃	チャート	3.3	1.4	0.3	1.5	有茎式
7坑-38	石鏃未製品	黒曜石	1.9	1.9	0.4	1.4	
7坑-39	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.5	
7坑-40	凹石	凝灰岩?	15.2	6.9	3.3	488.7	
7坑-41	凹石	安山岩	10.3	9.6	4.5	650.4	側面敲打面 表裏磨り面発達
7坑-42	凹石	硬砂岩	9.4	6.9	2.7	188.4	先端保ける 表裏磨り面発達
7坑-43	磨石	安山岩	8.1	6.4	5.5	442.3	
7坑-44	石皿	安山岩	15.8	10.3	4.8	1243.1	
22坑-5	石鉢	浮石(軽石)	36.4	36.0	10.8	7400.0	
23坑-4	打製石斧	ガラス質安山岩	8.0	8.0	3.0	226.4	
23坑-5	軽石製品	浮石(軽石)	4.0	3.7	1.2	9.5	
33坑-1	凹石	安山岩	10.4	7.9	3.6	432.9	側面敲打面 表裏磨り面発達
43坑-1	磨石	安山岩	8.3	6.9	7.0	500.3	
52坑-1	磨石	安山岩	10.3	9.2	6.3	822.1	
62坑-1	多孔石	安山岩	20.5	19.2	13.2	5700.0	
69坑-2	打製石斧	千枚岩質粘板岩	6.4	4.2	1.4	51.5	
75坑-1	磨製石斧再加工	軟玉	7.4	4.7	2.2	100.6	DIS分析No19
78坑-2	石鏃	黒曜石	6.1	0.9	0.7	3.1	
79坑-1	凹石	安山岩	12.7	9.7	4.4	783.7	側面敲打面 表裏磨り面発達
83坑-1	凹石	安山岩	15.0	5.4	5.3	694.5	磨り面発達
104坑-1	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.4	7.3	1.1	96.1	
104坑-2	多孔石	安山岩	19.1	14.7	11.4	3620.0	
104坑-3	多孔石	安山岩	17.2	15.3	11.9	3220.0	
104坑-4	多孔石	安山岩	14.5	12.3	10.4	2100.0	
104坑-5	多孔石	安山岩	18.4	14.3	12.0	3800.0	
106坑-1	凹石	安山岩	10.0	8.6	4.2	480.5	磨り面発達
110坑-1	多孔石	安山岩	25.8	18.7	14.6	7000.0	
116坑-1	多孔石	安山岩	25.4	19.5	11.0	5300.0	

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
117坑-8	石鏃	黒曜石	2.1	2.0	0.9	2.4	
117坑-9	打製石斧	珪質粘板岩	7.2	6.8	1.8	6.3	
遺構外-86	石棺	ガラス質安山岩	12.3	2.7	1.6	56.0	
遺構外-87							
遺構外-88	石鏃	黒曜石	1.3	1.5	0.2	0.3	
遺構外-89	石鏃	黒曜石	1.2	1.2	0.3	0.3	
遺構外-90	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.4	0.6	
遺構外-91	石鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.4	0.4	
遺構外-92	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.2	0.2	
遺構外-93	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.3	1.3	
遺構外-94	石鏃	チャート	3.1	2.1	0.7	3.3	
遺構外-95	石鏃	珪質頁岩	3.4	1.8	1.0	5.9	
遺構外-96	石鏃?	ガラス質安山岩	4.5	1.6	0.8	5.1	
遺構外-97	磨石	砂岩	8.0	6.9	2.3	178.0	磨り面発達
遺構外-98	凹石?	安山岩	10.8	9.9	2.9	480.9	磨り面発達
遺構外-99	凹石	安山岩	15.0	6.4	4.3	580.4	磨り面発達
遺構外-100	凹石	安山岩	11.6	6.4	4.8	491.0	磨り面発達
遺構外-101	凹石	安山岩	6.3	6.7	5.0	206.7	磨り面発達
遺構外-102	凹石	安山岩	11.9	9.3	5.7	809.5	磨り面発達
遺構外-103	凹石	安山岩	12.9	6.8	5.0	390.7	
遺構外-104	凹石	安山岩	10.9	6.9	5.2	375.3	
遺構外-105	凹石	安山岩	10.0	7.0	5.1	693.0	磨り面発達
遺構外-106	磨製石斧	角閃岩	10.3	5.1	2.6	214.6	DIS分析No20
遺構外-107	磨製石斧	緑レン石角閃岩	4.9	3.0	1.6	40.1	DIS分析No22
遺構外-108	磨製石斧	緑泥片岩	5.7	3.6	2.0	82.3	
遺構外-109	磨製石斧	角閃岩	6.3	3.2	2.0	63.3	DIS分析No21
遺構外-110	打製石斧	硬砂岩	13.7	5.7	3.0	245.3	
遺構外-111	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.3	4.7	1.9	114.0	
遺構外-112	打製石斧	安山岩	8.9	5.7	1.9	105.3	
遺構外-113	打製石斧	千枚岩質粘板岩	7.4	4.1	0.9	29.5	
遺構外-114	打製石斧	千枚岩質粘板岩	7.3	3.8	1.1	33.7	
遺構外-115	打製石斧	安山岩	10.6	5.7	2.2	183.8	
遺構外-116	打製石斧	ガラス質安山岩	9.7	4.5	2.0	93.7	
遺構外-117	打製石斧	?	12.1	5.6	2.3	144.2	
遺構外-118	打製石斧	安山岩	12.2	5.3	1.8	113.4	
遺構外-119	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.2	5.8	1.5	105.8	
遺構外-120	?	千枚岩質粘板岩	12.4	7.4	2.7	180.0	
遺構外-121	軽石製品	浮石(軽石)	7.1	7.0	3.5	55.7	
遺構外-122	軽石製品	浮石(軽石)	8.9	8.0	7.4	157.5	
遺構外-123	軽石製品	浮石(軽石)	6.0	4.2	1.8	28.6	
遺構外-124	石棒	結晶片岩	10.0	2.8	2.5	129.6	
遺構外-125	石棒	結晶片岩	5.9	2.7	2.7	56.8	
遺構外-126	凹石?	緑泥片岩?	14.1	3.9	3.3	345.5	石棒の転用?
遺構外-127	丸石	安山岩	20.5	16.2	8.5	4100.0	磨り面発達
遺構外-128	丸石	安山岩	30.4	23.5	21.1	2560.0	
遺構外-129	多孔石	安山岩	18.6	14.9	14.3	4800.0	
遺構外-130	多孔石	安山岩	18.6	18.0	12.5	5500.0	
遺構外-131	磨製石斧?	緑レン石角閃岩	4.4	2.7	1.0	19.2	DIS分析No23
遺構外-132	土製円盤	—	2.7	2.4	0.9	6.1	

第6章 ^{いしがみ}石神遺跡群

第1節 遺跡の概観

小諸市大字八満字石神から狐島地籍に所在し、標高は約795～845mをはかる。浅間山麓からひだ状に南行する細長い尾根に営まれた遺跡であるが、狭く浅い谷状地形を挟んだ複数の尾根からなる範囲を「遺跡群」として呼んでいる。南方には平坦な佐久平が展開しており、日当たりと景観の良い場所である。

この地籍の中心辺に水量豊富な泉が湧き、そこに櫛の大木が二本立っていて、その根元には俗に石神と呼ばれる石の祠がある。現在はこの泉を水源として、これより下は水田が開かれているが、これから上は畑地である。

この石神遺跡群は、とにかく縄文時代の遺物が拾えることでことさら有名な場所であった。明治13年に出された八満村の石神社の項にもその内容が書かれており（長野県1936）、古くからその存在が知られていた。明治30年前後には、次第に考古学及びその趣味の発達向上に伴って、遺物の採集が盛んに行われたとされている（岩崎1949）。

昭和9年には八幡一郎氏によって『北佐久郡の考古学的調査』が発刊されたが（八幡1925）、もちろん当時の考古学的レベルの最高水準のものといえるに違いない。ここでは、縄文時代前・後・晩期の土器や石器のほか、石神古墳出土の勾玉・切子玉・丸玉・金環などが紹介されている。なお、今ではこの古墳は完全に煙滅している。

以後、一躍縄文時代の大集落遺跡として認められて脚光を浴び、研究者や好事家達によって積極的に採集が行われるに至った。

昭和47年11月には敷石住居跡が発見されることとなった（小諸市誌編纂委員会編1974）。伴った土器から縄文時代晩期のものとされている。

平成3年には、北大井地区の農業の近代化に即応するための圃場整備事業に伴い、4月16日～12月13日までの間に、遺跡群北部の一端が調査された。縄文時代前期から晩期、また平安時代の集落の姿が読み取れ、とりわけ縄文時代後・晩期の遺物の質・量については、すこぶる成果が大きいものであった。

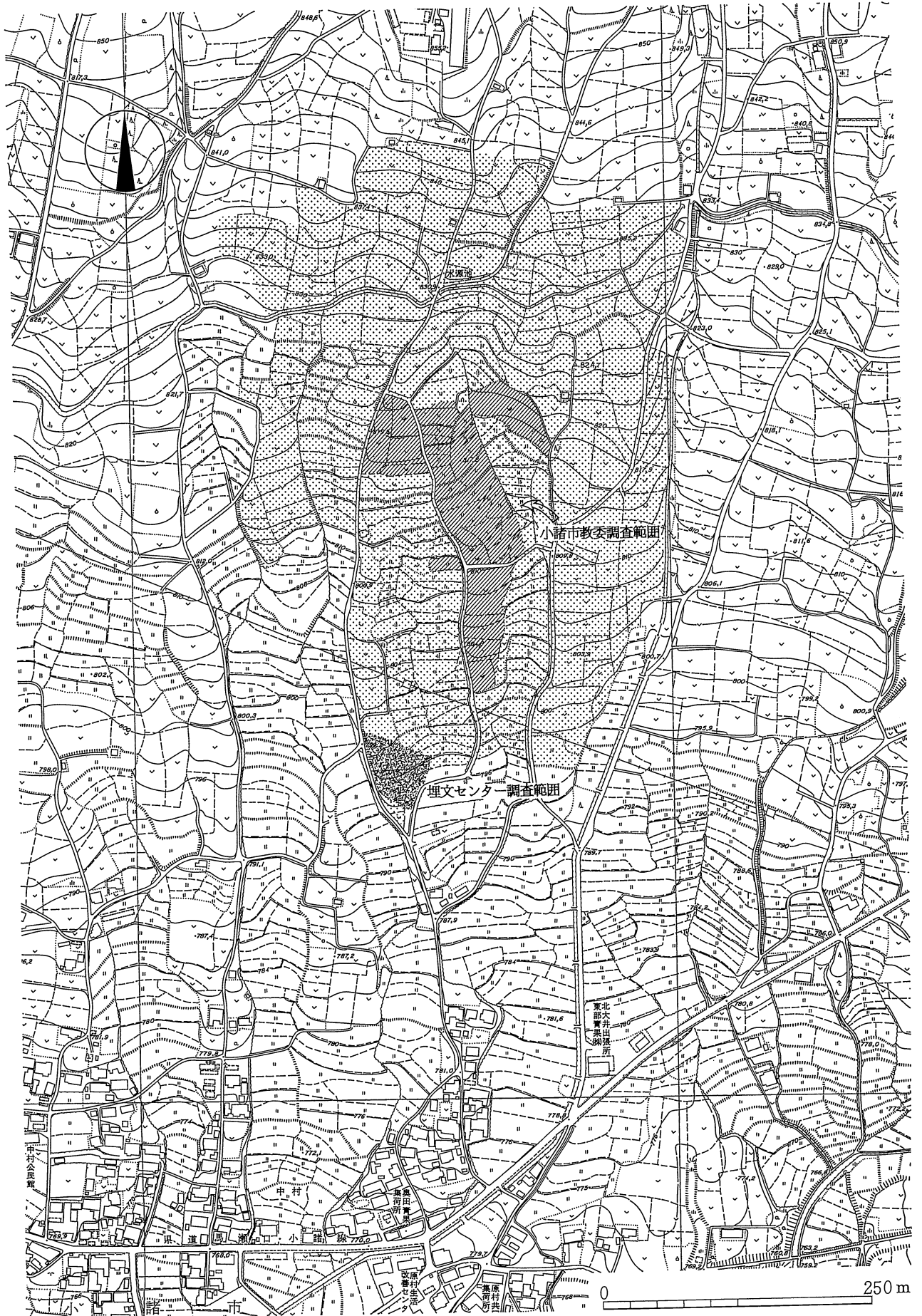
第2節 調査の概要

上信越自動車道は遺跡群の最南端を横断することとなり、2,500m²が調査対象面積となった。

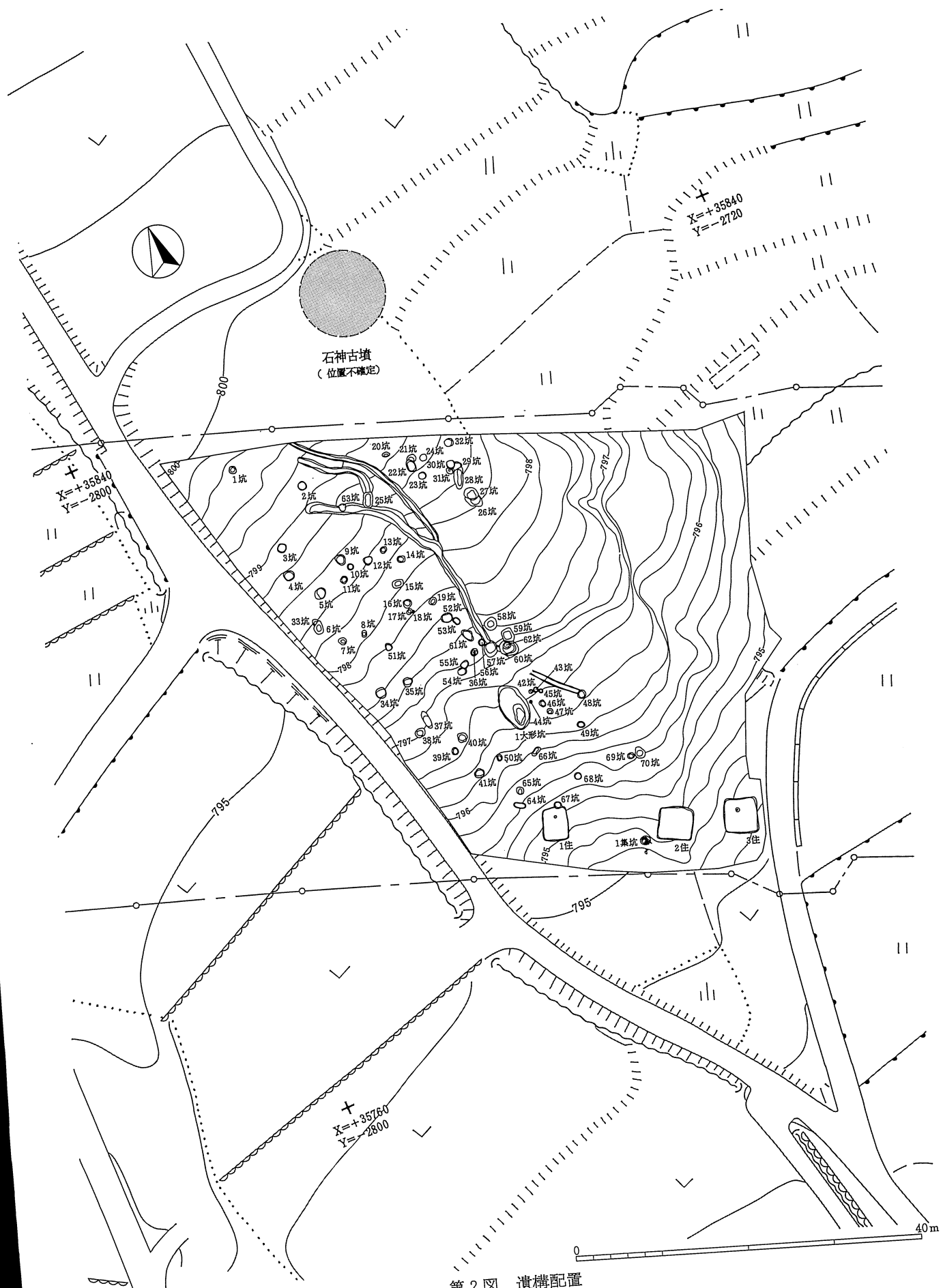
平成3年4月15日から調査を開始し、まず手掘りによるトレンチ調査から開始した。竪穴住居跡や土坑などが検出され、全面的な面的調査が必要と判断した。あわせて周知範囲外にもトレンチを設定したが、いずれも谷地形ばかりで遺構は存在しないものと判断し、周知範囲外まで調査することはしなかった。

調査対象範囲には、縄文時代の遺物包含層が認められた。これを手掘りにより調査し、あわせて常時検出される竪穴住居跡や土坑などを調査した。

5月24日にすべて作業が終了した。古墳時代前期の竪穴住居跡3棟、古墳時代後期の大形土坑1基、縄文時代の土坑70基、その他である。



第1図 調査範囲



第2図 遺構配置

調査日誌抄

平成3年度		4月30日	土坑は縄文時代、竪穴住居跡は古墳時代前期と判明。また大形土坑は古墳時代後期のものと判断。
4月15日	調査開始。手掘りによる試掘調査から開始。	4月30日	土坑は縄文時代、竪穴住居跡は古墳時代前期と判明。また大形土坑は古墳時代後期のものと判断。
4月16日	竪穴住居跡1棟、土坑敷基を確認。遺跡範囲外に試掘調査を延長。	5月1日	新たに古墳時代前期の竪穴住居跡1棟を確認。
4月17日	表土剥ぎ作業開始。	5月14日	新たに古墳時代前期の竪穴住居跡1棟を確認。
4月20日	表土剥ぎ作業終了。遺跡範囲外の試掘部に遺構は無しと判断。	5月15日	全体図及びコンタ図作成開始。
4月22日	遺構掘削作業及び縄文時代の包含層の調査開始。	5月24日	遺物包含層の調査終了。遺構調査も終了し、全作業が終了する。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 土坑 (第3～7図、P L67～71)

尾根の頂部分を中心に、計70基の土坑を検出した。ただし、遺物を含むのはわずかで、実際に、土坑以外にも古墳時代の遺構が認められることから、いくつかのものについては縄文時代から外れる可能性もある。時期を分離することが不可能なので、その多くが縄文時代に属するものと見込んで、ここでは一括したい。

これらはすべて浅間第2軽石流堆積物上面で検出した。深さ10cmにも満たないものも存在するので、本来存在した土坑のいくつかは、すでに消滅してしまったものと思われる。

一部小土坑を含むが、そのほとんどが径50cmを越えるものである。平面プランが円形のもの基本となるものの、中には方形プランや長方形プラン、はたまた不正形のものさえ見える。ただし、風倒木痕のようなものについては一切手を出していない。深さ及び断面形態もまちまちで、一定の機能を果していたのではないだろう。

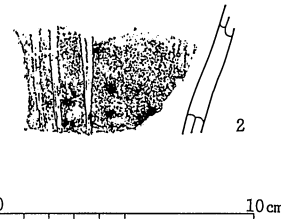
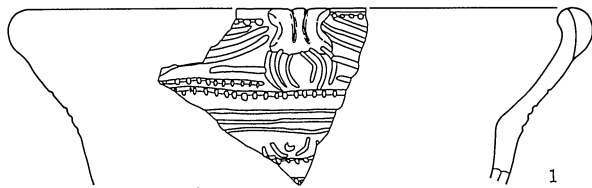
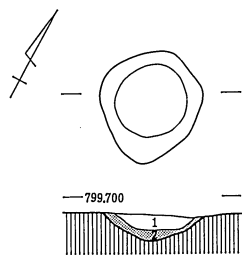
覆土はほとんどのものを観察したが、概ね黒褐色土の細砂壤土を主体とし、自然堆積と判断した。ただし、23号土坑や59号土坑のように、必要以上に軽石流堆積物が崩落しているものについては、人為的な色彩が強いのではないかと考えている。

この地点には、安山岩系の礫は一切分布してしていない。したがって、その種の礫は調査中すべて残しており、図中の白ヌキのものがそれである。径1m弱の円形土坑で、いずれも底面直上から出土しているが、単体で出土したものや、9号土坑のように複数で出る場合もあった。埋葬との関連を指摘する声もあるが、調査時においてはその検証を怠った。また、軽石については、覆土中に集中して出土するものや比較的大きなものは稀で、30号土坑・59号土坑・60号土坑などは、人為的な意図があつたのことと思われる。

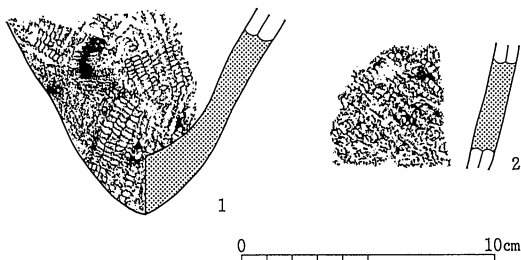
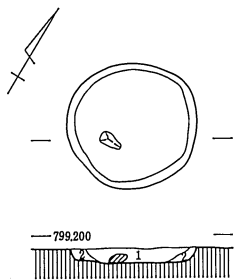
出土遺物はわずかな土坑からしか確認できていない。また、ほとんどが破片であり、覆土中の混入品と考えられるが、51号土坑のみ覆土上層から遺棄された状態で土器が認められた。いずれにせよ、各土坑内に時期の異なる遺物は紛れていないので、時期的な判断を行うには差し支えない。

出土した遺物については、ほとんど掲載してある。2号土坑・25号土坑は前期初頭、52号土坑は前期中葉関山II式、1号土坑・9号土坑・11号土坑・12号土坑・41号土坑・43号土坑・47号土坑・51号土坑・54号土坑は中期初頭五領ヶ台II式またはII式併行の在地の土器である。

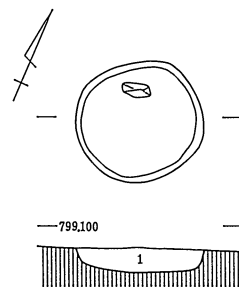
1号土坑



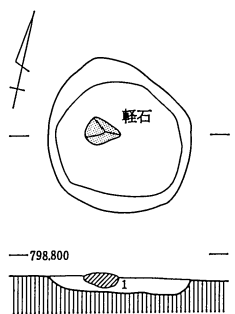
2号土坑



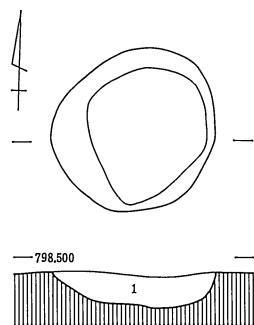
3号土坑



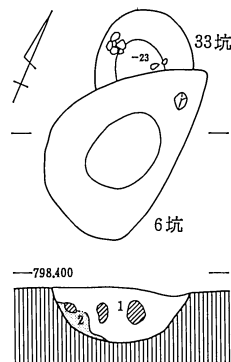
4号土坑



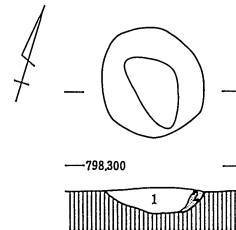
5号土坑



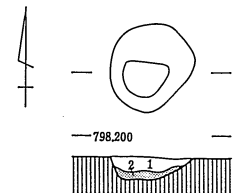
6・33号土坑



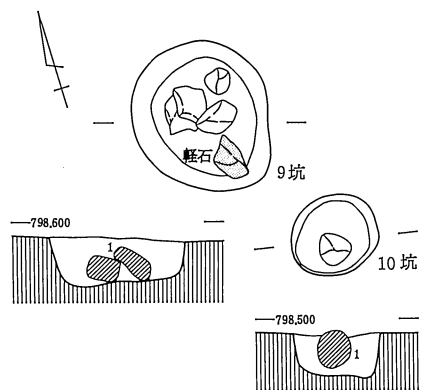
7号土坑



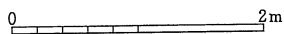
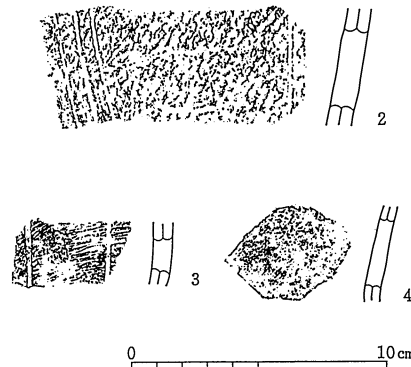
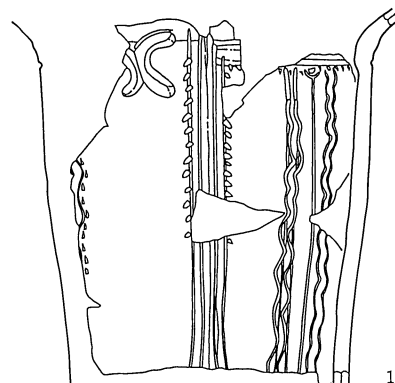
8号土坑



9・10号土坑



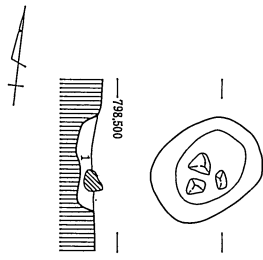
9号土坑



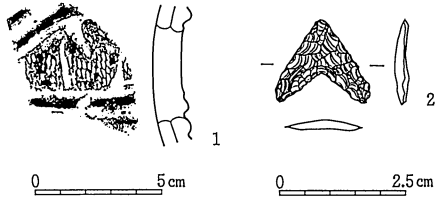
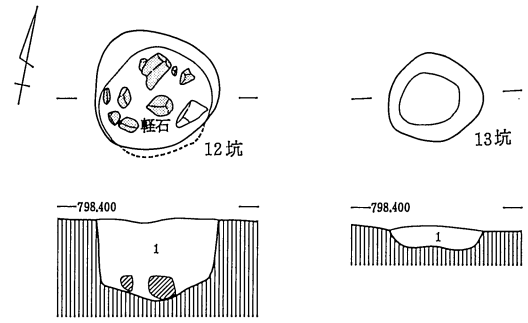
○ = 壁崩落土

第3図 土坑(1)

11号土坑



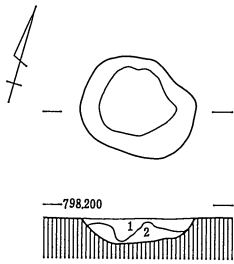
12·13号土坑



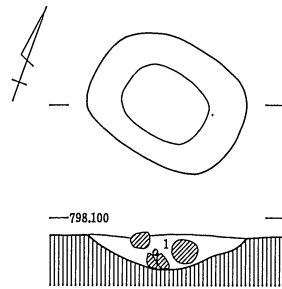
12号土坑



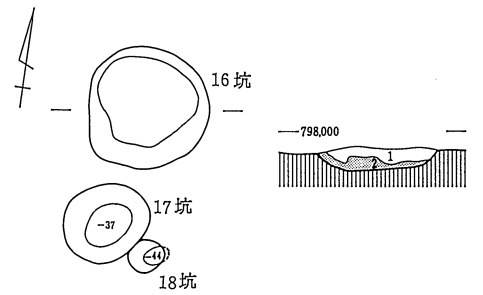
14号土坑



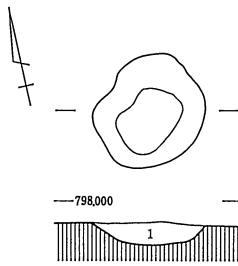
15号土坑



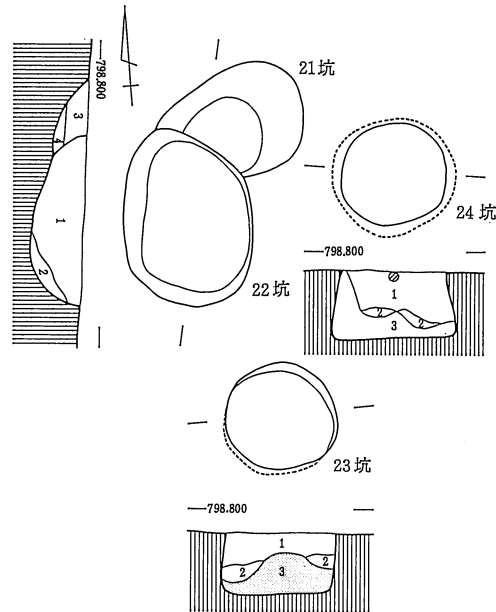
16~18号土坑



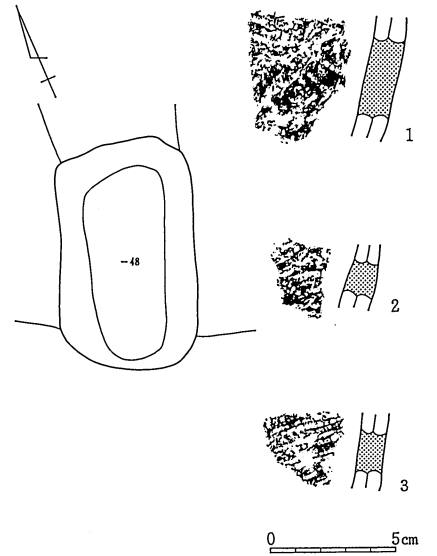
19号土坑



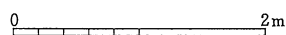
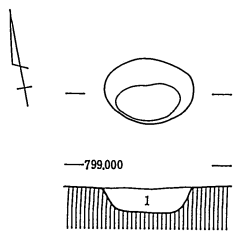
21~24号土坑



25号土坑



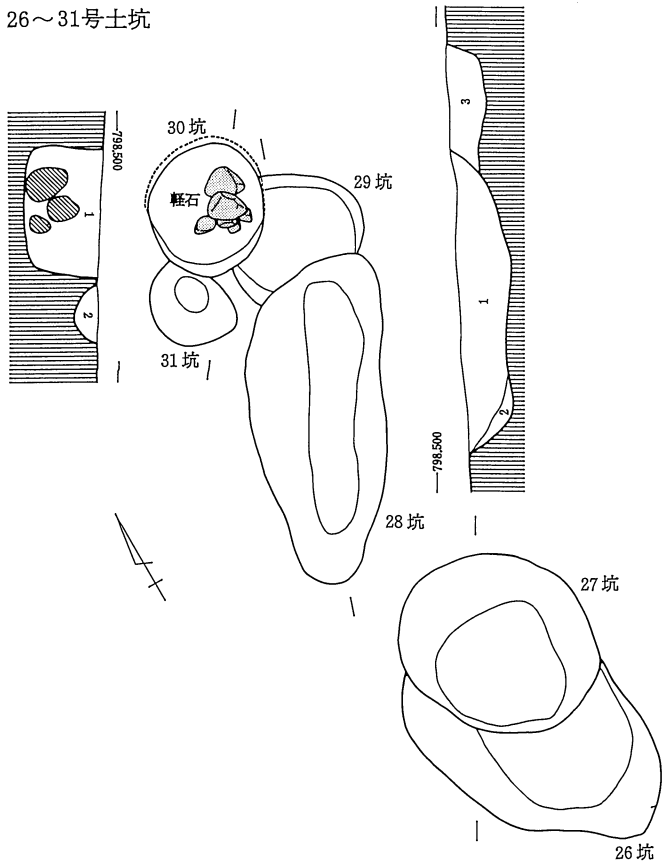
20号土坑



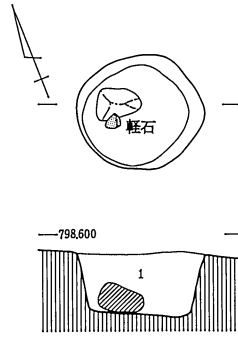
○ = 壁崩落土

第4图 土坑(2)

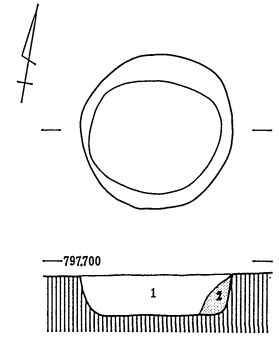
26～31号土坑



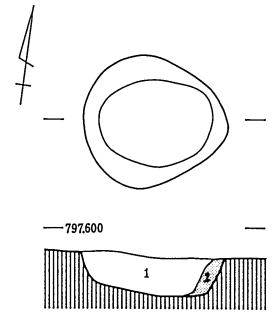
32号土坑



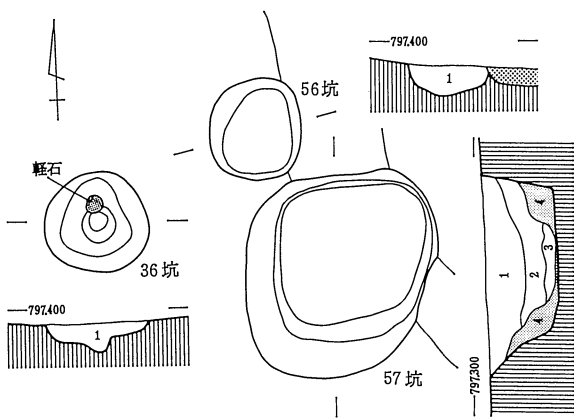
34号土坑



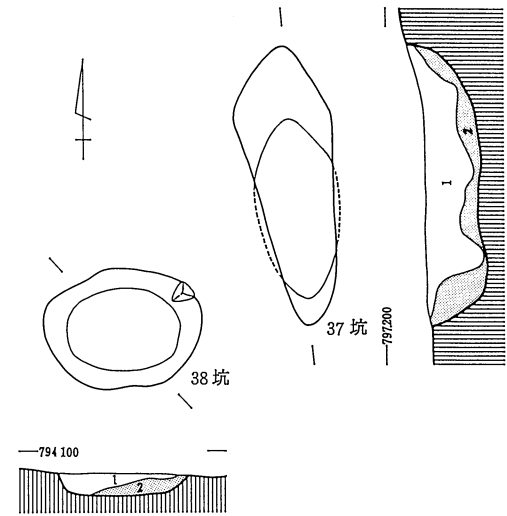
35号土坑



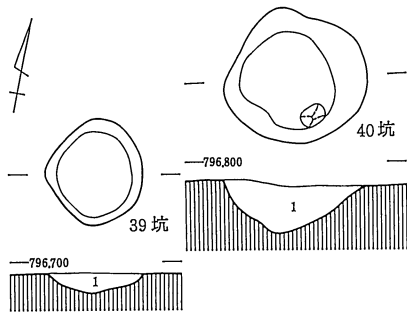
36・56・57号土坑



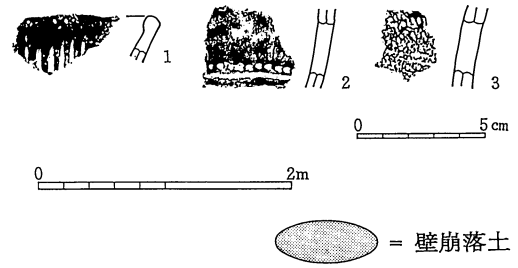
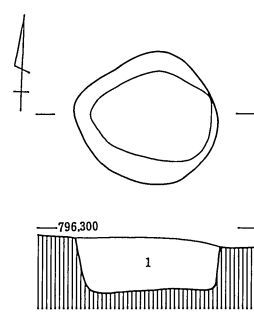
37・38号土坑



39・40号土坑

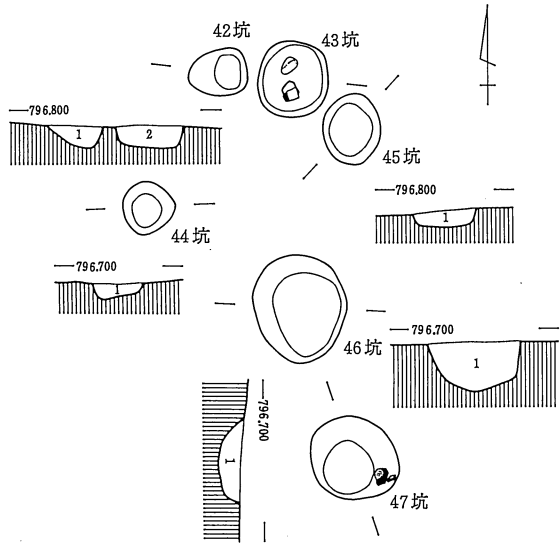


41号土坑

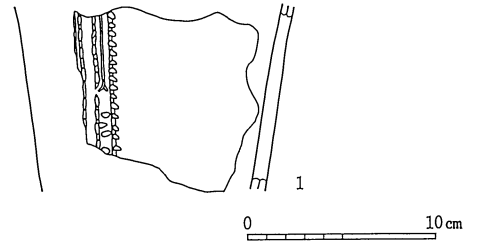


第5図 土坑(3)

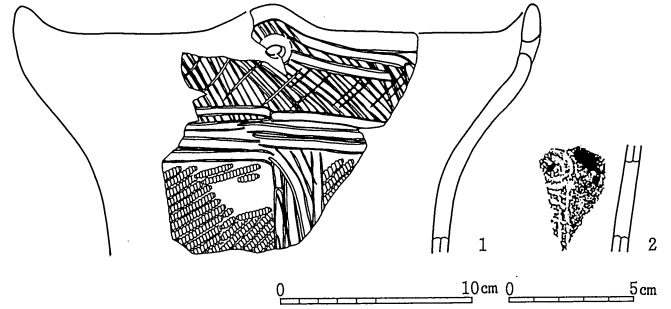
42~47号土坑



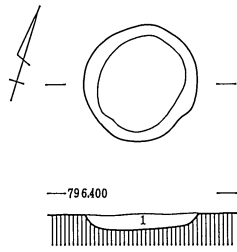
43号土坑



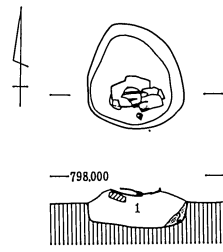
47号土坑



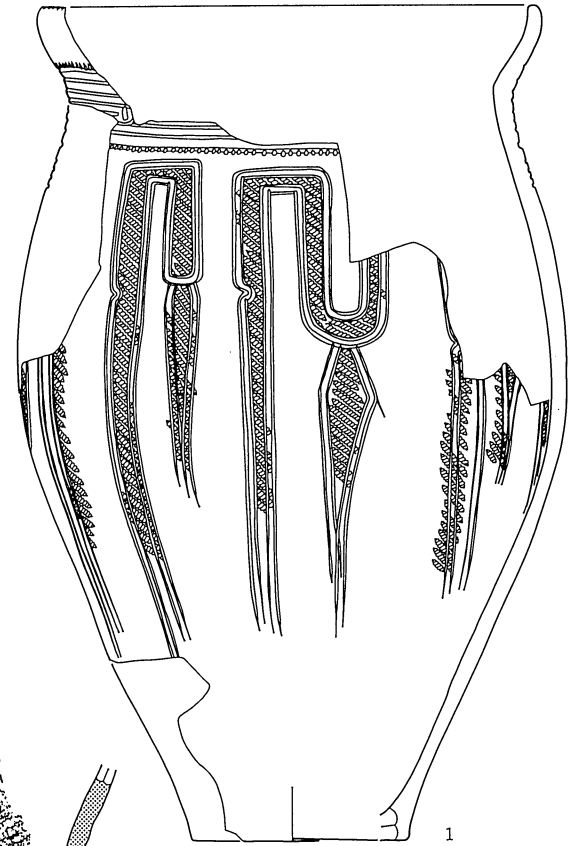
48号土坑



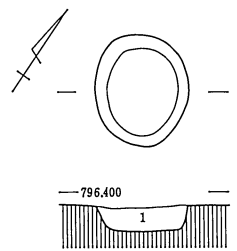
51号土坑



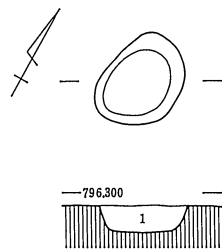
51号土坑



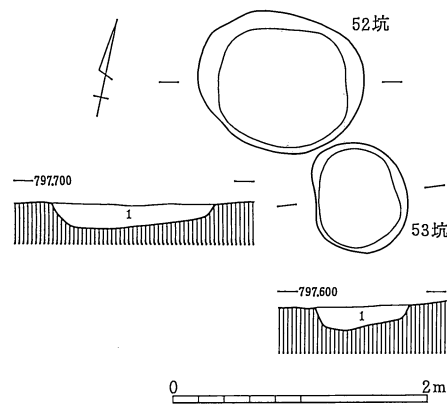
49号土坑



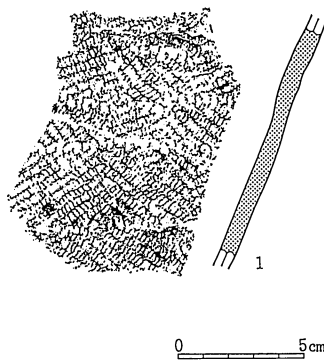
50号土坑



52·53号土坑

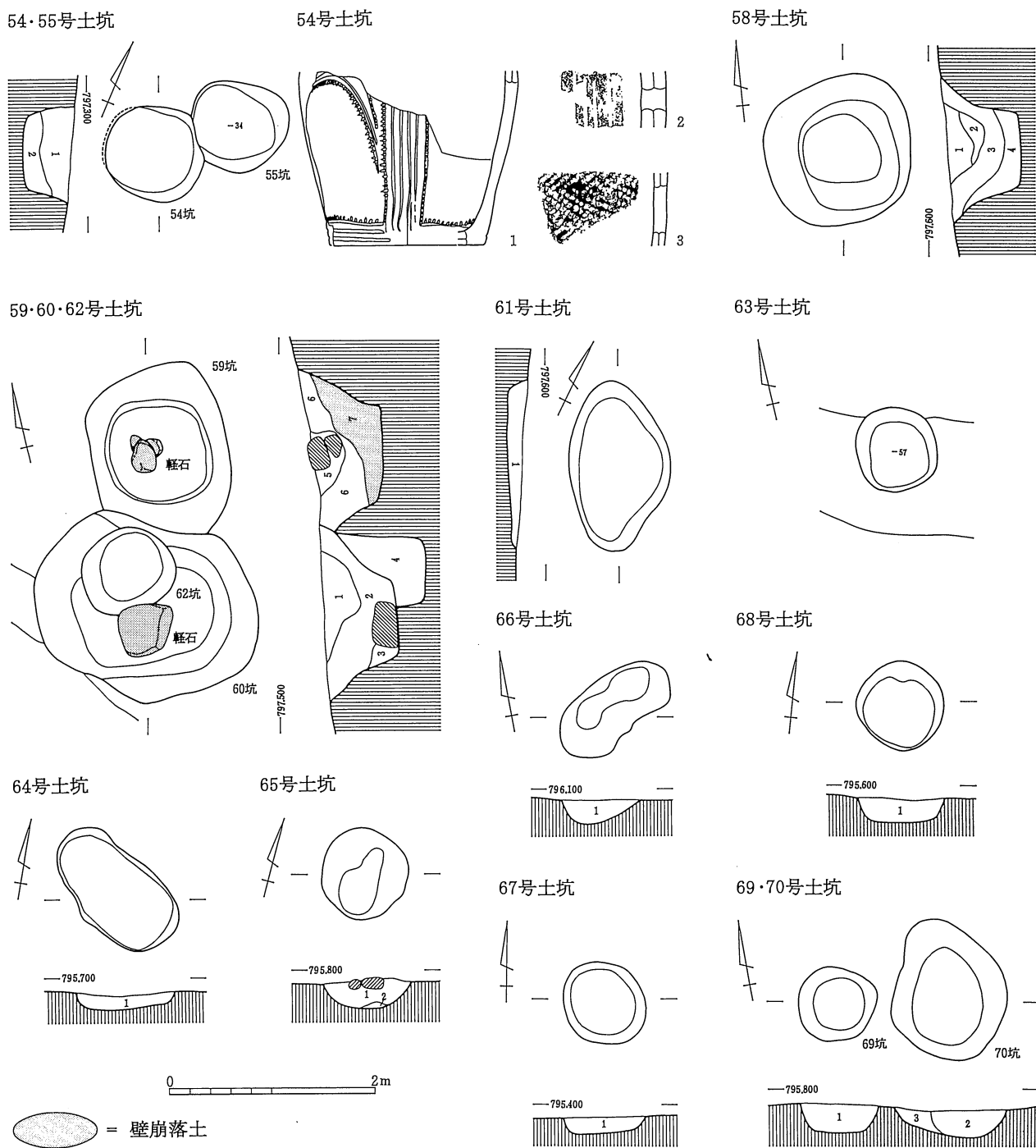


52号土坑



○ = 壁崩落土

第6图 土坑(4)



第7図 土坑(5)

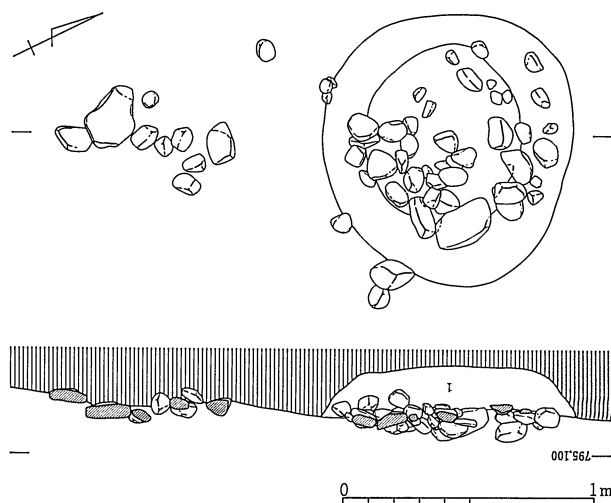
2 集石土坑 (第8図、P L69)

調査区最南端から検出された。遺物を伴わず、本来、「時期不明の遺構」としなければならないのだが、弥生時代以降の所産である可能性が低いことから、本節で取り上げた。

縄文時代の遺物包含層を調査している際に発見されたものである。黒色土中に存在し、中央に土坑が存在するものの、これも浅間第2軽石流まで達していない。

礫はすべて安山岩系の円礫で、土坑の覆土上層にややまばらな状態で分布していた。その南側、すなわち斜面下方側にも若干認められるが、礫の一部が流出したものか。礫面に変化はみられず、とくに被熱したようすはなかった。

土坑の存在は当初から判明していたが、検出が困難であるため、中央を断ち割り、覆土を観察したうえでプランを認定した。径1m強の円形土坑で、深さは約16cmをはかる。礫の一部が流出したとすれば、これが本来の深さではなかろうか。なお、覆土には焼土、炭化物は一切含まれていなかった。



第8図 1号集石土坑

3 遺構外出土遺物 (第9・10図、P L71・72)

1・2は同一個体で前期初頭、3は前期前半の東海地方の木島式で搬入品である。4～13は前期中葉の関山II式に該当し、うち4・11・12は同一個体と思われる。14も前期中葉の所産と考えられるが、関山II式よりも新しい。15は前期末葉諸磯c式、16・17は同一個体で、同じく諸磯式に相当するが型式の細別は難しい。ただし、より新しい段階の産物であることは間違いない。18～26は中期初頭五領ヶ台II式ないしはそれに併行する土器群である。27は後期前葉堀之内1式、28・29は後期中葉加曾利B III式併行、30～35が晩期に該当し、30が佐野I式、31が佐野II式、32が離山段階から氷I式、33・34が氷I式、35が氷II式の土器群である。

36～50は石鏃で、少なくとも45～50については未成品と考えられる。51・52は石匙、53は石棒の先端部分、54はいわゆる特殊磨石、55は磨石に類するものだろう。56・57は、結晶片岩を使用しており、これらは明らかに秩父地方から搬入されたものである。ただし、その機能は不明である。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

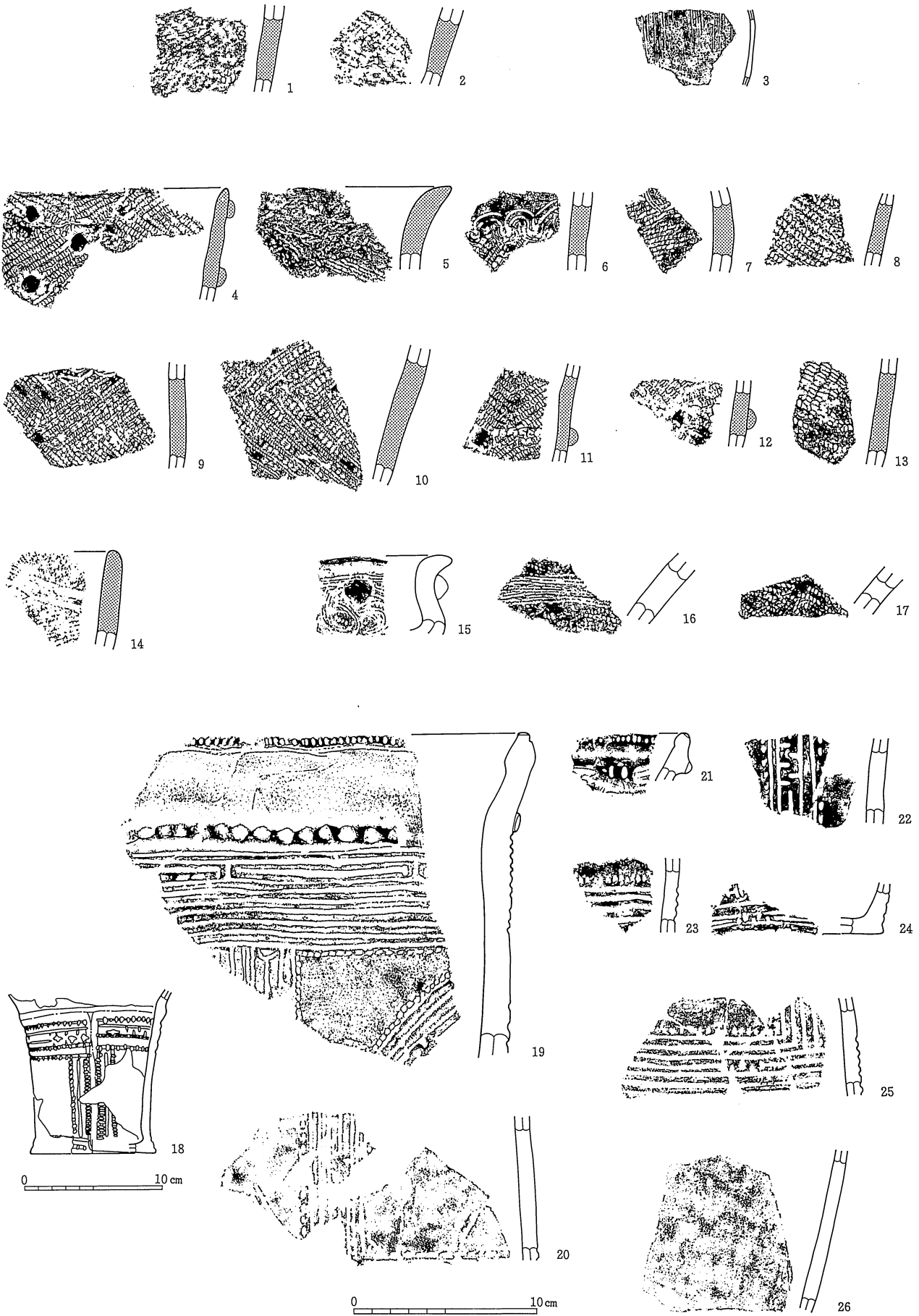
1号竪穴住居跡 (第11図、P L69・72)

縄文時代の包含層を調査している際、検出されたものである。浅間第2軽石流堆積物までには達せず、すべて黒色土中で確認した。

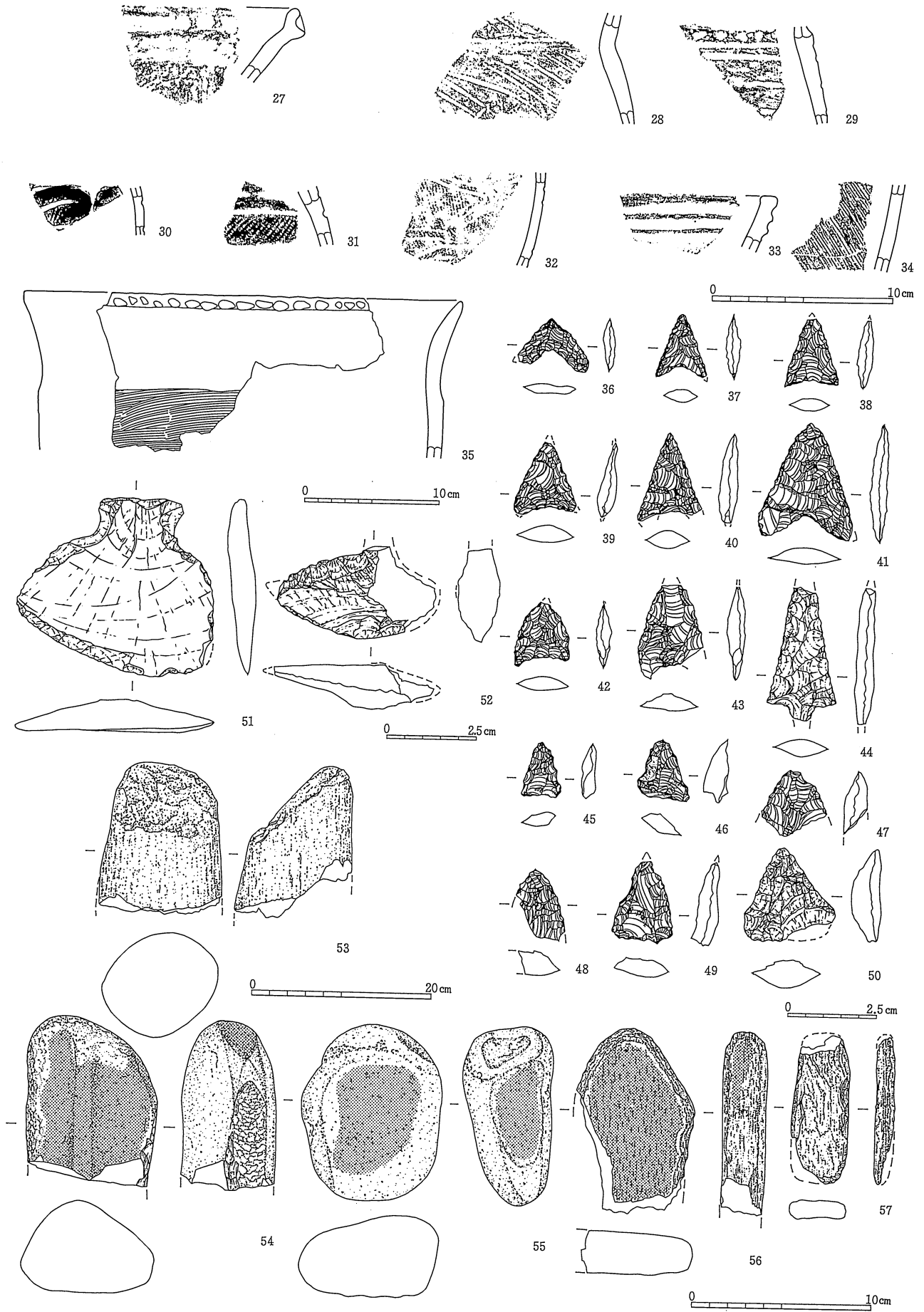
N-17°-Eを主軸とし、主軸長は3.82m、副軸長は2.86m、壁高は北壁で最高20cmをはかる。主軸を等高線と逆方向に取る、長方形プランの住居跡である。

覆土は単層で、粘性の弱い黒色の細砂壤土が認められ、また夾雑物もほとんど混入していなかった。床下に掘方はなく、堅緻面も存在しない。床面は斜面下方に向かって大きく下がり、北と南では20cm前後の差が認められた。柱穴・周溝などは、黒色土中での検出のため確認していない。炉は地床炉であり、一面が焼土化していた。

出土遺物は極めて微量で、実測可能なものは1の高坏のみである。床面から15cm浮いた状態で出土し



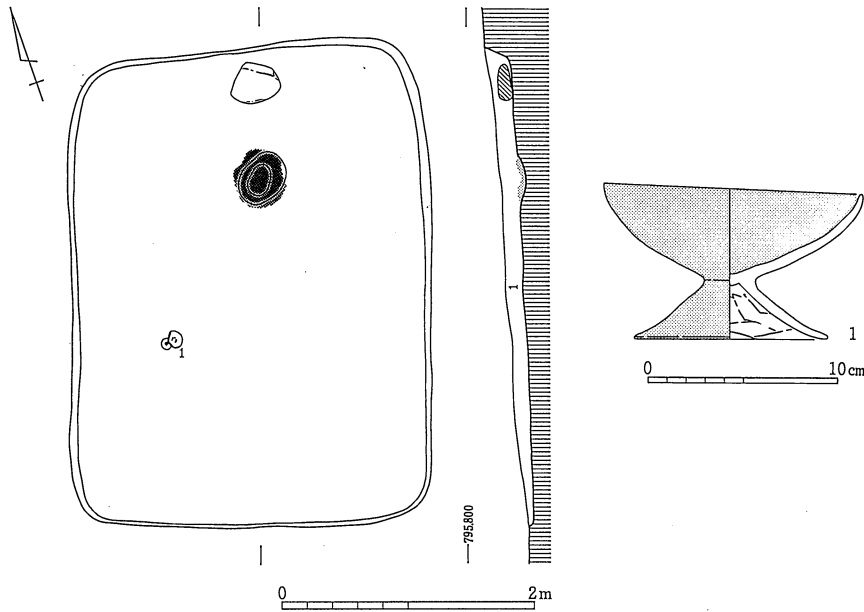
第9図 遺構外出土遺物(1)



第10図 遺構外出土遺物(2)

た。また、北壁中央付近から、床面直上より安山岩系の亜角礫が出土しているが、とくに使用した痕跡は認められなかった。

時期は、1の存在、微量だが甕は櫛描波状文を施文することなどから、古墳時代前期初頭の所産と思われる。



第11図 1号竖穴住居跡

2号竖穴住居跡 (第12図、P L69・72)

炉が検出されていないので向きをどう捉えるかが問題となるところだが、ほかの住居跡が北向きに居を構えているので、ここでもN-27°-Eという方向で主軸を考えたい。とすれば主軸長は3.80m、副軸長は4.03mとなり、また壁高は最高で49cmをはかる。

覆土のうち、第4層は基本土層がブロック化したもので壁崩落土、主体となる第2層には全体に粗流で炭化物および軽石流堆積物を頻繁に含んでおり、あわせて安山岩系の円礫を多数含んでいた。積極的な根拠は低いものの自然堆積したものとは思えず、意図的あるいは上屋の崩落といった某かの原因が存在したのではないかと考えている。床下に掘方は存在せず、掘り込み面を整地し床としている。堅緻面はない。床面はすべて軽石流堆積物に達していたが、炉・柱穴などは存在しなかった。

出土遺物は1が高坏、2・3が甕、4が土製紡錘車である。3・4が床面直上、ほかは出土位置を押さえていない。

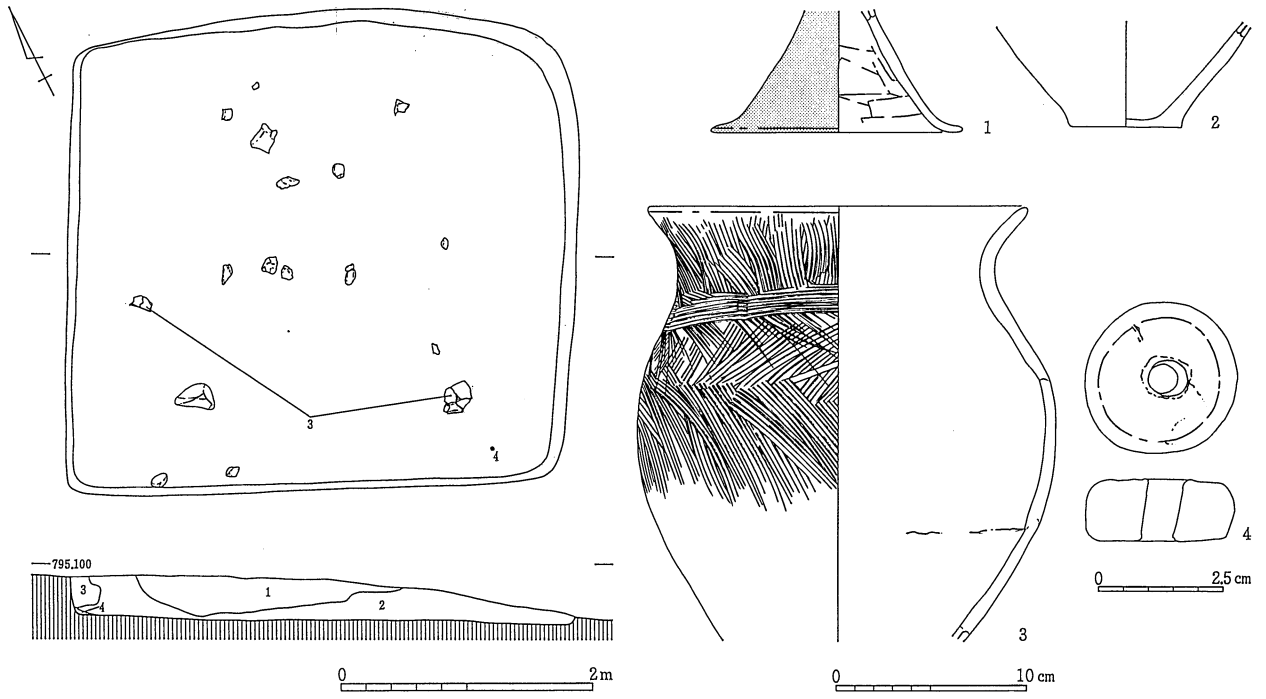
時期は3の器形から古墳時代前期初頭に位置付く。

3号竖穴住居跡 (第13図、P L69・72)

主軸はN-18°-Eを成し、主軸長・副軸長ともども3.96m、壁高は最高で32cmを有する。一部、軽石流堆積物を切るが、その大半が黒色土中に構築されている。

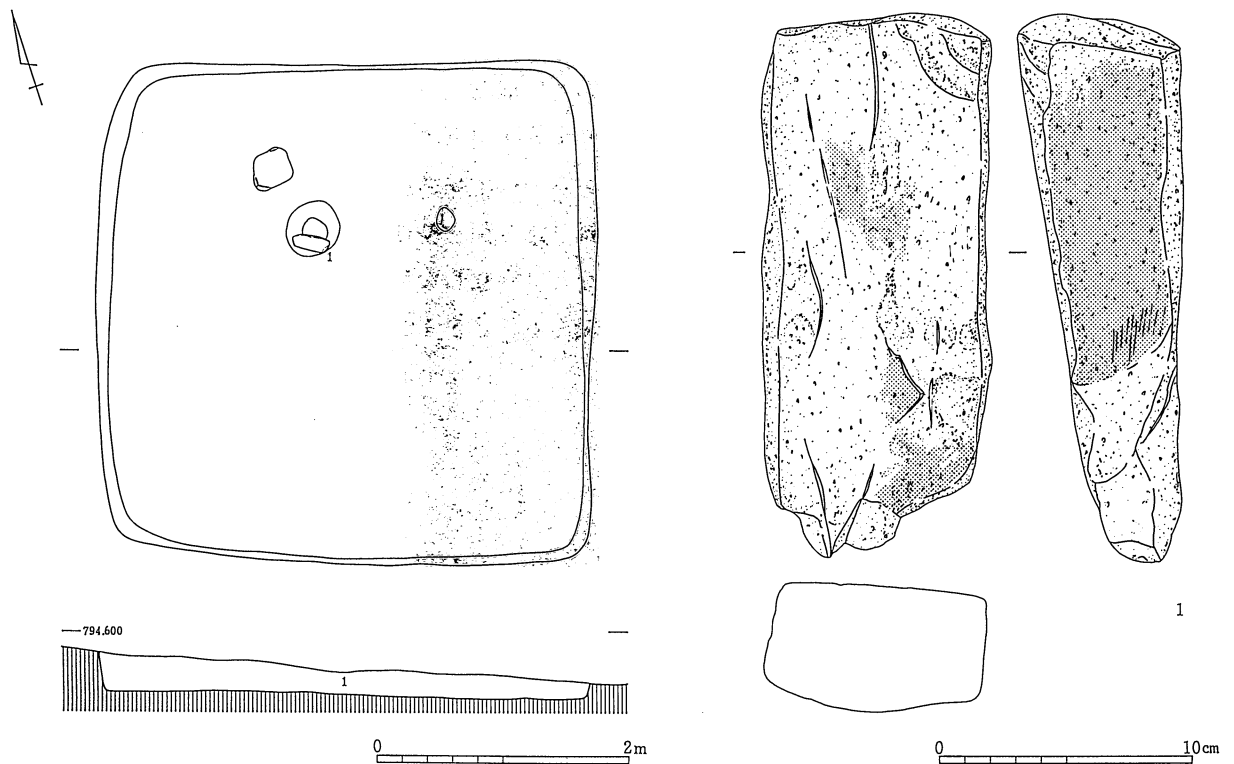
覆土は1号竖穴住居跡に等しい。床下の掘方・堅緻面・柱穴などは存在しない。炉は置き砥石を枕石とした地床炉を確認したが、底面はまったく焼けていなかった。炉の北側には床から28cm浮いた状態で安山岩系の亜円礫が出土しているが、使用痕は認められなかった。

出土遺物はわずかで、1の置き砥石以外実測可能なものはなかった。その他、櫛描波状文の甕や赤色塗彩された高坏や鉢なども少量出土しているが、時期の詳細を決定する材料には乏しい。ただし、ほかの2



第12図 2号竖穴住居跡

棟が古墳時代に帰属するし、また今のところこの標高にまで弥生時代の集落は登り詰めてこない。したがって、古墳時代前期初頭にまで降下する可能性がもっとも高い。



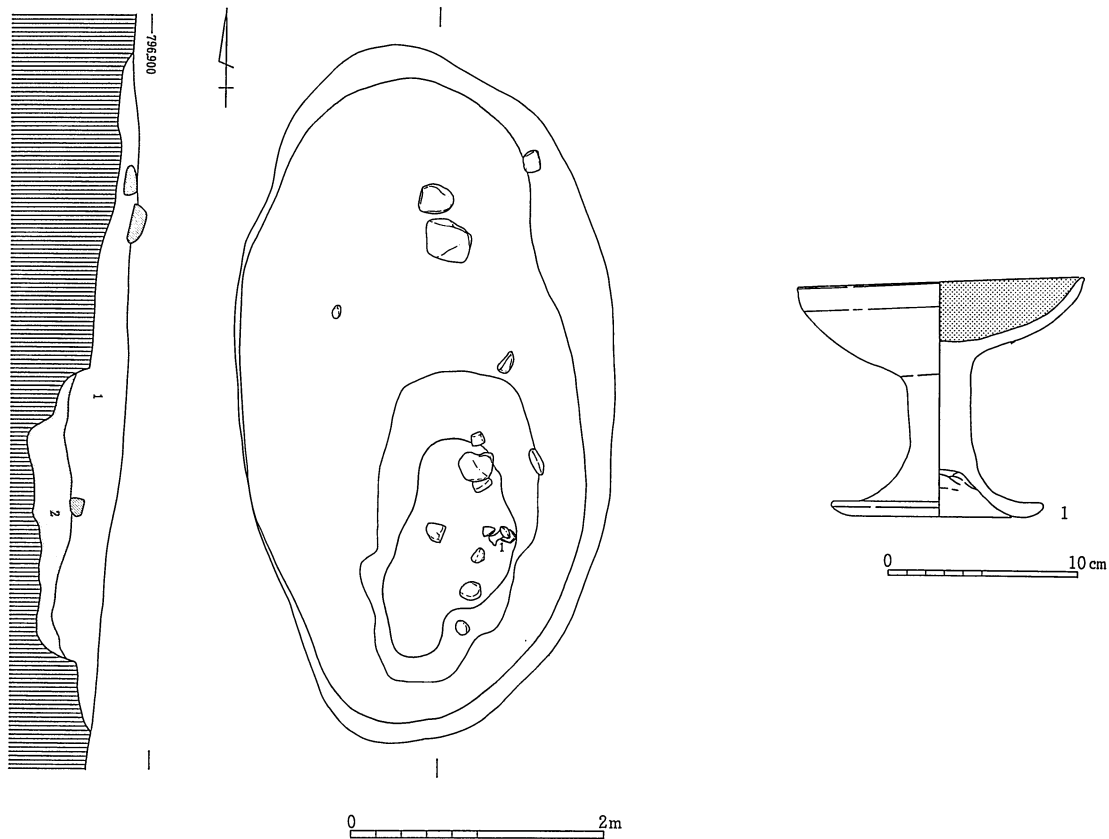
第13図 3号竖穴住居跡

2 1号大形土坑 (第14図、P L69・72)

軽石流堆積物上面で確認した。長軸長5.50m、短軸長2.98m、長軸の方向はほぼ南北を指し示している。楕円形の平面プランを有し、やや凹凸をもちながら傾斜に沿ったかたちで底面を作りだしている。南端にはさらに深掘りを行い、ピット状の施設を設けていたが、平面形・断面形とも極端に凹凸が目立ち、けっして丁寧な掘り込みではない。

覆土は1層が黒色の細砂壤土で自然堆積層と考えられるが、安山岩系の円礫や角礫を含み、また1のような土器も認められた。2層は軽石流堆積物が主体的に含まれ、しかも遺物はおろか、ほかの内容物は一切確認できなかった。これも早い時点で埋没したものなのか、それとも人為的なものかは判断できない。

該期の遺物は1の土器以外出土していない。古墳時代後期後半の高坏で、しかも畿内系の高坏を模倣しているから、そのなかでもより新しい存在である。7世紀中葉以後の産物と思われる。



第14図 1号大形土坑

第5節 小 結

縄文時代の遺物が表面採集できる場所としてことさら有名な遺跡群であったが、今回の調査地点は遺跡群の南西隅に位置しており、遺物もわずか、遺構も小土坑ばかりが連なる結果となってしまった。同期に行われた小諸市教育委員会の調査は、正しく遺跡の中心部に相当し、とりわけ縄文時代後・晩期の資料をみれば遺物の宝庫ともいべき姿であった。

ところが、この土坑群にもそれなりの意味はある。これらを構築した人々は、前期初頭及び中葉の頃にもいたらしいが、意外にも中期初頭五領ヶ台式期に多かったのである。前期初頭から中葉にかけての集落は小諸市教育委員会の調査で既に見つかっているが、反面、五領ヶ台式については唯一遺構外から1片採

集しているに過ぎない。遺跡群の南西端は、中期初頭の人々が根付いた場所であり、おそらく尾根の北側にはこれらを築いた集落が存在するのではなかろうか。

また遺構外遺物をみると、遺跡群の中心であるべき後・晩期の資料が至って少ない。あまり立ち入ることとはなかったようで、同じ遺跡群でも性格の違いを如実に表している。

古墳時代前期初頭になると、短期のうちに終焉を迎えるらしいが、集落を経営しはじめた。本報告書では、同様に三子塚遺跡群（第3章所収）、三田原遺跡群（第4章所収）、郷土遺跡（第7章所収）でも遺物が採集されている。このような浅間火山の南裾、標高でいえば800m前後を調査すれば、小規模ながらも該期の集落に当たる可能性が高い。しかも、けっして4世紀後半代にまで存続するものがなく、必ずといっていいほど開始後間もなくして終息してしまうのである。生産域の拡大をねらったのか、それとも群馬側とのルート上の起点としたのか、あるいは両者併用なのか、答えはなかなか出てこないが、集落経営の失敗あるいは政治上の転換期であったのだろうか、その一場面がここでもみられたのである。

古墳時代後期の大形土坑については、これが一体何なのか、なぜここにあるのかという疑問しか湧いてこない。群馬県側では、7世紀後半になると古墳の前庭部に前庭状遺構とも称される大形土坑を持つものも多くみられるが、その部分だけが残存したのかという一案も思いつく。ただし、佐久地方ではまだそのような古墳は発見されておらず、まったくもって想像の域を出ない。では集落と関連があるのかといえ、調査区の北側約25mのところにかつて石神古墳が存在し、古墳時代後期後半にはここが墓域となっていたことが考えられ、集落の存在は有り得ない。古墳ではなく、集落に関連するものでもないならば、その存在意味は何だったのだろうか。ヒントのひとつは、規模は大きい非常に手荒く掘られていることにある。何かを収納するための掘り込みではなく、土取りを意識したかのような存在であった。また、それが軽石流堆積物にまで達していることも留意点ではなかろうか。踏み固めるとよくしまる軽石流堆積物欲しさに土取りを行った可能性もあるのである。証明する手立てはないものの、石神古墳の墳丘には必ず版築工法が取られていたはずで、しまりの良い軽石流堆積物もどこかしこかで使われていたはずだ。そこでこのような土坑を必要としたのではないかという試案も思いつくのである。いずれにしても、ここは古墳時代後期後半の墓域であるから、まがいなりにも古墳との関連があるに違いない。

引用参考文献

岩崎長思 1949 「石神」『史跡名勝天然記念物調査報告書 第27集』

小諸市誌編纂委員会編 1974 「小諸市誌 考古篇」小諸市教育委員会

長野県 1936 「長野県町村誌 東信篇」

八幡一郎 1925 「北佐久郡の考古学的調査」北佐久教育会

表1 石器観察表

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
11坑-2	石鏃	黒曜石	1.5	1.7	0.2	0.4	
遺構外-36	石鏃	黒曜石	1.5	2.0	0.3	0.5	
遺構外-37	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.4	0.5	
遺構外-38	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.7	
遺構外-39	石鏃	黒曜石	2.1	1.9	0.5	0.4	
遺構外-40	石鏃	黒曜石	2.0	1.8	0.6	1.3	
遺構外-41	石鏃	黒曜石	3.4	2.6	0.5	2.6	
遺構外-42	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.4	0.8	
遺構外-43	石鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.5	1.5	
遺構外-44	石鏃	千枚岩質粘板岩	3.8	2.0	0.5	2.9	有茎式
遺構外-45	石鏃未製品	黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.5	
遺構外-46	石鏃未製品	黒曜石	1.8	1.3	0.7	1.0	
遺構外-47	石鏃未製品	チャート	1.8	1.8	0.7	1.4	
遺構外-48	石鏃未製品	黒曜石	2.0	1.1	0.6	1.3	
遺構外-49	石鏃未製品	黒曜石	2.3	1.7	0.6	2.1	
遺構外-50	石鏃未製品	ガラス質安山岩	2.4	1.8	0.5	3.8	
遺構外-51	石匙	硬砂岩?	4.9	5.4	0.7	19.0	
遺構外-52	石匙	ガラス質安山岩	2.1	4.4	1.2	10.2	
遺構外-53	石棒	?	16.7	13.4	12.5	3440.0	緑泥片岩?
遺構外-54	特殊磨石	安山岩?	9.0	7.2	5.3	540.3	敲打痕有り
遺構外-55	磨石	安山岩	10.0	7.8	5.0	557.3	
遺構外-56	?	結晶片岩	10.1	6.2	2.4	241.4	
遺構外-57	?	結晶片岩	8.2	3.3	1.1	41.1	
3住-1	砥石	安山岩?	21.2	9.1	5.5	1950.0	

第7章 ^{ごうど} 郷土遺跡

第1節 遺跡の概観

1 自然環境

郷土遺跡は小諸市大字甲字中郷土4146ほかに所在し、浅間火山の南裾部の標高約820～830mをはかる緩傾斜面上に立地する。東南方には平尾山、荒船山が望める。南方には佐久平がひろがり、千曲川の流れの向こうには八ヶ岳連峰があり、蓼科山も遠望できる。気象条件のよい時にははるか彼方に富士山を望むこともできる。西方には御牧ヶ原台地、美ヶ原、日本アルプスがみられる。遠望のきく展開された地であるといえよう。遺跡は浅間第2軽石流の堆積の上に存在しているため、極めて透過性に富んでいる。

水利については小淵武一氏によると、本遺跡の東側を流れる蛇堀川の付近には多量の湧水があり、また隣接する下郷土にもきれいな湧水があったが現在は小諸市の上水道に利用されているということである(小淵1993)。現在小諸市の貯水タンクになっている付近であろう。また本遺跡の西側付近にも最近まで湧水が存在していたということを発掘調査中に地元の方から伺ったことがある。これらはいずれも浅間第一伏流水による湧水である。

周辺の植生には、ケヤキ、アカマツ、カスミザクラ、ヒノキ、クヌギ、クリ、コナラ、カエデ、サトザクラなどが現在はみられている。

2 今までの調査歴

郷土遺跡の名は古くから知られ、昭和9年に刊行された八幡一郎氏の『北佐久郡の考古学的調査』に出土遺物とともにその存在が紹介されている。

また、昭和36年と40年には東京教育大学の八幡一郎教授によって学術発掘調査が行われている。これらの発掘調査については正式な報告書は刊行されていないが、八幡一郎氏執筆の『長野県史 考古資料編 主要遺跡(北・東信)』所収「郷土遺跡」(以下、引用する際には『長野県史』と略する。)及び『小諸市誌 考古篇』所収の「郷土遺跡発掘記録」、岩崎卓也氏執筆の『日本考古学年報18』所収「長野県小諸市郷土遺跡」(以下、引用する際には『年報』と略する。)によって当時の様子を知ることができる。

36年に行われた第1次の発掘調査については岡村節氏による調査日誌が残っている(「郷土遺跡発掘記録」所収)。それによると、当時、郷土地籍一面にわたって、縄文土器破片や石器等が散布しており、また耕作の際には多数の敷石が耕作機械に触れて出土しているため、市誌編纂委員会では発掘調査を行いたい希望を持っていた。そのような折りの昭和36年3月に、郷土遺跡の所在する草間正三氏の畑の一隅より敷石住居の一部と住居跡の炉が発見された。これが契機となり、4月の委員会で発掘調査が具体化し、東京教育大学の八幡一郎教授に発掘調査を依頼することになったということである。調査期間は5月11日から18日までの8日間行われ、参加者は八幡教授の他、岩崎卓也氏(前筑波大学教授、現東京家政学院大学教授)、東京教育大学の学生、地元からは与良清氏、村山正氏(当時小諸高校教諭、後に県教育長・埋文センター理事長)、土屋実氏、岡村節氏、草間正三氏、原田諭氏などの名前がみられる。この調査では

A・Bの2地点を選んで発掘調査を行った。『長野県史』によれば、A地点は草間氏が耕作中に敷石と炉跡を見出したところで、発掘の結果竪穴住居跡2軒の重複している状況が確認でき、各々の住居の中央部と思われるところに石囲いの正方形に近い形の炉跡を検出した。またこれらとは別にもう一箇所、竪穴住居跡に付属すると考えられる石囲いの炉が発見された。この内部には土器1個体が直立した状態で埋置されていた。B地点は、A地点より50mほど東方に離れた地点で、ここもかつて敷石が発見されたところで、竪穴住居跡2軒が検出された。1軒は石囲いの炉の部分で、もう1軒は部分的に設けられた板石の敷石部分に当たっている。

昭和40年の第2次の発掘調査については、同じく『小諸市誌 考古篇』に岩崎卓也氏による概略報告が記載されており、また『年報』によれば、調査期間は4月6日～8日、検出された遺構は縄文時代の敷石住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡1軒である。『長野県史』によれば、敷石住居跡は、柄鏡形を呈するものであり、主体部の径は、長軸上の入口部と接するところまでで最大2.8m、これに直交する方向で最大2.8mを数えるという。また『年報』では「ほぼ中央に方形の石囲炉があった。使用石材は、いわゆる鉄平石で、敷石相互間の隙間をつくらぬように周縁をこまかく打ち欠いたものが多かった。また、石の間隙を埋めるため、細長い小石を挿入してあったが、これらは当初短冊打製石斧と見紛ったほどであった。」とあり、入口部については『長野県史』に「主体部に近い部分に一对の円柱状の礫が左右対称に立てられていた。また入口の先端部には板状の石が立てられていた。床には礫が散在していたが、攪乱のためか部分的なものにとどまっている。」と記されている。また平安時代の竪穴住居跡は、「5.5×3.5mの長方形プランを有し東南隅にカマドと思われる焼土が検出されたが、柱穴は発見できなかった。床面中央に20cm大の石が相当量集積していた。」と記載されている。出土した縄文土器に関しては『長野県史』によれば、縄文時代中期末葉から後期初頭のものがみられるという。なお、第2次調査で発掘調査された敷石住居跡は地主草間正三氏の尽力により復元保存され、現在も見学することができる。昭和45年に小諸市史跡の指定を受けている。とりわけ第2次調査において検出された敷石住居跡は全国的にも早い時期の発見であり、「敷石住居跡の郷土遺跡」として広くその名は知られるようになったのである。

その後、正式な発掘調査はなされなかったが、藤沢平治氏の御教示によれば、地元の考古愛好家によって表面採集などがしばしば行われていた模様である。

再び発掘調査の対象となったのは平成4年からである。この郷土遺跡の地に上信越自動車道が建設され



写真①
昭和40年に発掘された敷石住居跡は現在も保存され、小諸市指定文化財となっている。

ることとなり、まず高速道路用地内にある民間会社の駐車場移転及び小諸市側道の拡幅に伴った発掘調査が小諸市教育委員会によって実施された。調査期間は平成4年7月28日～9月26日、検出された遺構は縄文時代中期中葉～後葉の住居跡7軒、土坑49基などである。平成4年度から当センターによる上信越自動車道建設に伴う発掘調査もはじまった。小諸市教育委員会では平成7年にも調査を行っている。

第2節 調査と整理の概要

1 発掘調査の経過

埋文センターでは平成4年度から上信越自動車道建設及び小諸市側道拡幅工事に伴う発掘調査を開始した。調査対象面積は上信越自動車道建設用地の8000㎡と小諸市より委託を受けた小諸市側道拡幅部分の525㎡の計8525㎡である。用地収用の関係から調査は4ケ年にわたることとなった。

平成4年度の調査は上信越自動車道用地内の工事用道路部分1500㎡と小諸市側道拡幅部分280㎡の計1780㎡が調査対象となった。当センターの調査に先立って隣接する部分を小諸市教育委員会が発掘調査を実施していたが、このうち2軒の住居跡と数基の土坑が上信越自動車道用地にかかることが判明したため、市教委と協議を行った結果、これらの遺構については埋文センターで調査することになり、急遽、8月25日～9月2日まで調査を行った（32号住居跡及び33号住居跡）。当年度の本格的調査は10月19日に開始し、12月24日をもって終了した。

平成5年度の調査は残件の6500㎡が対象であり、4月11日に発掘調査を開始した。しかしながら用地収用が順調に進まず、9月10日をもって本年度の調査を終了せざるをえなかった。調査面積は本線部分4000㎡と側道拡幅部分245㎡の計4,245㎡にとどまり、2500㎡は6年度に延ばすこととなった。

平成6年度の調査は4月11日から開始した。本年度も用地収用及び上物の解決が完全にまとまらず、解決した部分から順次調査に着手していくという状況であり、発掘調査は困難を極めた。12月22日をもって調査は終了したが、本年度は2300㎡の調査にとどまった。住宅部分の200㎡については地権者と日本道路公団との間で係争となり、（12月19日佐久地裁に公団が訴訟をおこす。）裁判所の判決を待つため、次年度に送ることとなった。

平成7年度の調査は東京高等裁判所の和解勧告が8月30日に出された後、9月8日に和解が成立したのを受けて9月19日から開始し、佐久インターから小諸インターまでの開通を11月7日に控えた約一か月前の10月9日をもって終了した。

2 調査日誌抄

平成4年

8月25日	起工承諾がとれた畑地部分の発掘調査を開始。小諸市教育委員会調査地域との境界にかかる遺構の遺物・記録類の帰属を協議、竪穴住居跡2軒を当センターで調査。白田武正調査課長が担当。	11月9日	14号住居跡から多量の土器が出土。
		11月24日	本日と翌25日、遺跡見学会を催す。計280名の見学者を数える。25日には坂ノ上小学校5年生86名も見学。小諸市教委花岡弘氏来訪。
9月2日	竪穴住居跡2軒の調査終了。（のちに32号住・33号住の番号を付ける）	12月11日	ラジコンヘリによる航空撮影。
9月30日	調査予定地の表土剝開始。	12月18日	本日で作業員の従事は終了。
10月19日	作業員従事、本調査開始。担当調査研究員は桜井秀雄と依田謙一の2名。小諸市教委星野保彦氏、小諸市議大井章氏、来訪。	12月24日	雪の中、最後の遺構測量を行い、今年度の発掘調査終了。
		12月25日	器材の撤収。
		1月11日	冬期の整理作業開始。

平成5年			
4月5日	作業員従事、調査開始。調査研究員は桜井秀雄、依田謙一、木内英一、山崎光顕の4名。遺構外から珧状耳飾りが出土。	7月1日	調査地の拡張が地権者と調整がつかず白紙に戻り、調査計画見直し。
4月7日	ベルトコンベアー設置。	7月7日	現場作業と土器洗い作業を平行して実施。
4月15日	地主の了解を得て、24号住を調査区外まで拡張、調査。	7月29日	2回目の航空撮影実施。
4月16日	24号住より大形浅鉢出土。	7月31日	地元松井地区の育成会21名が来訪。
4月26日	小諸市立野岸小学校6年生106名見学。	8月23日	現場作業は本日で終了。土器洗い作業のみ続行。
6月10日	第1回目の航空撮影。	9月9日	城西国際大学専任講師倉林真砂斗氏と学生9名が来訪。
6月11日	小諸新聞取材。	9月10日	今年度の調査終了。
平成6年			
4月11日	作業員従事、調査開始。調査研究員は桜井秀雄、依田謙一、上沼由彦の3名。工事用道路の脇での調査となり、安全確保に注意する。	6月21日	航空撮影を実施。
4月14日	和同開珎が出土。	7月29日	ボランティア養成講座13名が来訪、発掘調査の指導を行う。小諸コミュニティテレビも取材。地権者と合意した樹木の伐採が突如不可となり、調査計画を見直す。
4月27日	道路公団(田村工事長)、JV(足立所長、松原副所長)、埋文センター(白田課長、桜井)の3者で地権者と協議を行い、連休明けから遺跡西側部分の発掘調査に入ることができることとなる。	8月21日	現地説明会開催。小雨にもかかわらず102名の見学者。
5月11日	古墳らしき遺構発見、人骨検出。	8月29日	白鳥喜一郎・征矢野安政両調査研究員が加わる。
5月16日	山岡一英調査研究員が加わる。	9月2日	上沼調査研究員、長野調査事務所への応援のため、担当をはずれる。
5月21日	小諸市立野岸小学校6年生120名が来訪。	9月15日	今年度の調査地の一部を引き渡す。
5月22日	上信越自動車道小諸工事区見学会の一環として遺物展示及び現場公開を実施。参加者137名。	9月19日	調査地内の小屋の撤去。
5月23日	本日より残件部分の一部着手、上物のタラの木を一日5本だけ抜いてよいとのことのため、調査難航する。	11月9日	港区芝白金小学校6年生29名来訪。
6月6日	調査地内の樹木の伐採開始。	11月10日	2回目の航空撮影を行う。
平成7年			
9月18日	午前、住宅基礎の撤去及び表土剥ぎ、午後、発掘器材の搬入。担当は白田調査課長と桜井秀雄調査研究員の2名。	11月21日	午前中残件部分の協議、11月末をもって調査終了で合意したが、午後地権者の態度が軟化、急遽、調査続行。ただし、住宅部分は来年度に送る。
9月19日	作業員従事、調査を開始する。工事がかなり進み、小諸インターから現場へはいる。	12月20日	3回目の航空撮影を行う。
		12月22日	今年度の調査を終了。
		10月4日	航空撮影を行う。
		10月9日	すべての発掘調査を終了。

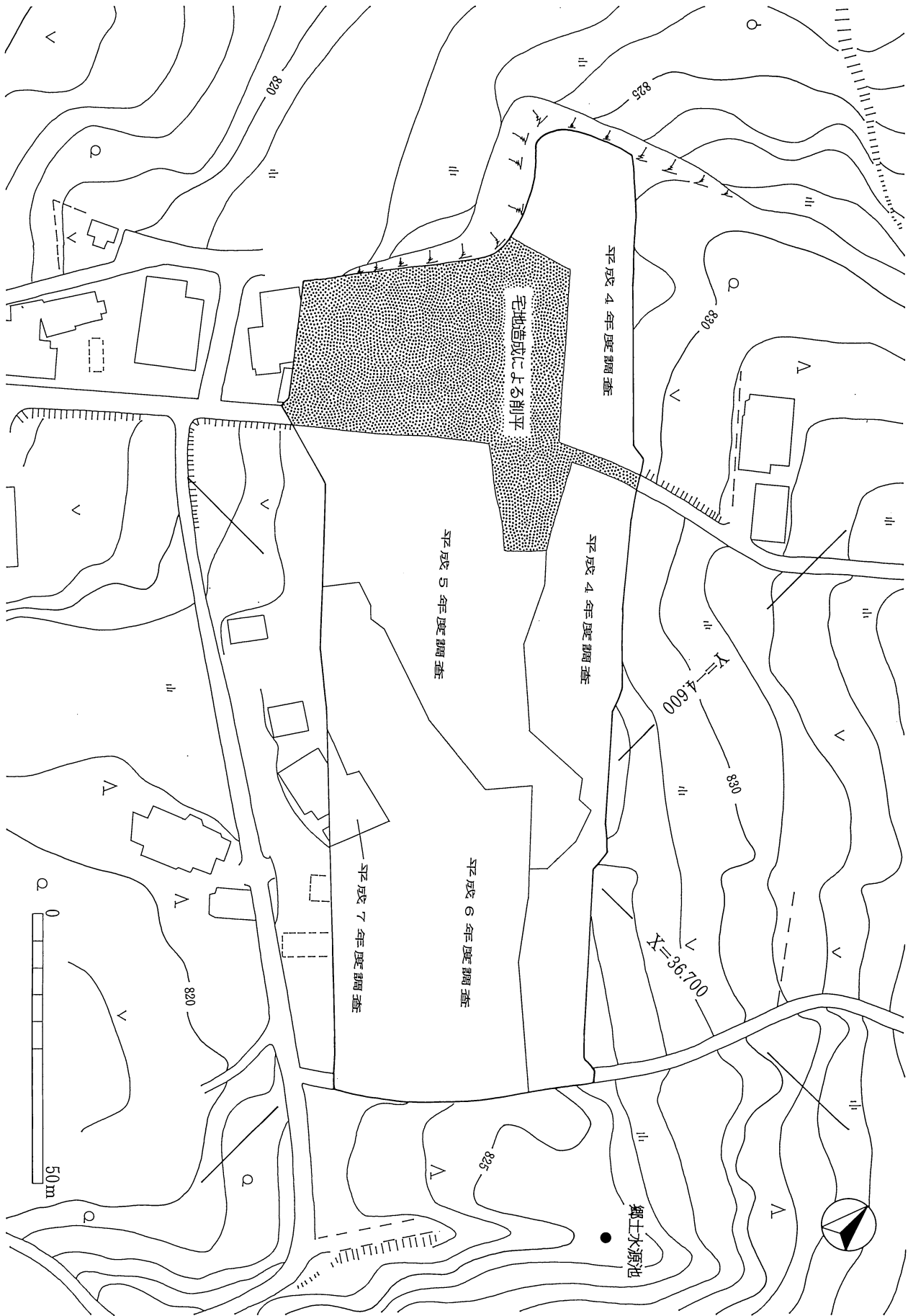
3 整理作業の経過

本格的な整理作業は平成7年度から開始した。7年度は遺物の注記と接合、復元が中心であり、一部、図面整理と土器実測を行った。8年度は遺物の台帳づくりと遺物実測が中心となった。また途中で担当の桜井が笹原上遺跡の発掘調査に従事した。9年度は担当の桜井が原村教育委員会へ1年間派遣されることとなり、整理作業は凍結した。桜井が戻った10年度に整理作業を再開し、遺物実測及びトレース作業、遺構トレース、土器拓本等を行った。11年度には桜井が再び原村教育委員会へ派遣となったが、予定通りに印刷・刊行の運びとなった。

4 発掘調査および整理作業参加者(順不同)

[発掘調査]

小山内玲子、柳沢国喜、白鳥信雄、岩佐正雄、小林永一、関武夫、平川藤雄、掛川きん子、清水せつ、田中タツ子、田中直子、土屋喜代見、笠原洋子、高地近子、村田夏枝、白鳥澄江、柳沢八代江、大池巖、小野沢二十八、片岡周雄、井出幸子、成沢シメノ、柳沢糸子、柳沢たけ子、柳沢ゆき子、小林君代、村上亀吉、村上国利、別府幸治、村上まつ子、柳沢すず、柳沢りん、田口巳津郎、土屋功、久保田昌枝、神津



第1図 郷土遺跡発掘調査範囲 1 : 1000

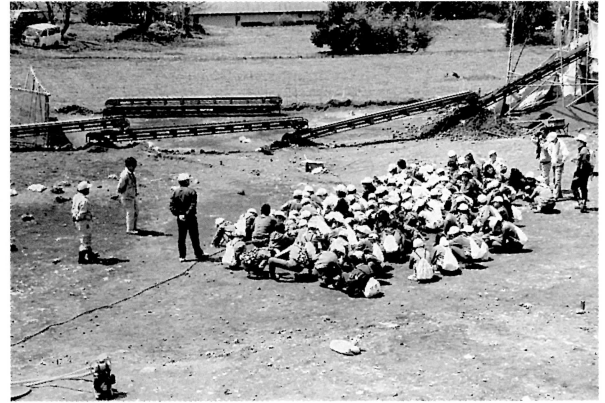
文江、中山かち子、柳沢すみ江、土屋丈雄、土屋かつよ、土屋文子、土屋まさみ、白鳥信雄、中山常長、関口昌男、根岸とみよ、大井善蔵、甘利辰雄、宮下栄三、日下部静子、小林弘子、伊藤良一、茂木幸一、渡辺今朝登、竹内由美子、小林満子、藤森太平、小金沢吉三、青木秀夫、星野重一、秋山又三郎、森泉政吉、井出康之、中島武三郎、秋山芳子、荻原定雄、山内和夫、柳沢時枝、飯田政一、新津誠、荻原留義、井出政子、土屋和登、古畑治三郎、森下はつ代、高橋ふさ代、古畑うきえ、伊藤進、小山澄江、森山幸男、高橋志津子、吉野安子、井出八郎、秋山みち子、秋山たけ子、依田誠江、大井鈴子、大井重夫、小金沢たけみ、原野洋子、小林和儀、小山正吉、梅沢汎子、大井文雄

[整理作業]

小山内玲子、大塚利枝、小林尚子、小山千恵子、清水まゆみ、菅沼かよ子、竹内優子、松井礼子、宮原豊子、倉島恵子、飯田和子、梅原祝、大西啓子、尾島平一、雲井博子、摺田伸子、田島富子、丸山公子、



写真② 平成5年度調査風景



写真③ 野岸小見学 (平成5年度)



写真④ 野岸小見学 (平成5年度)



写真⑤ 野岸小見学 (平成5年度)



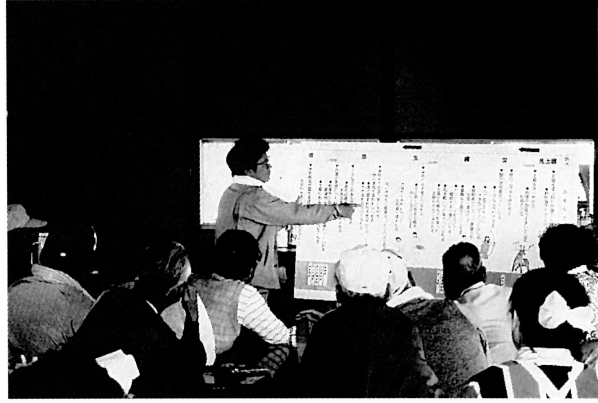
写真⑥ 野岸小見学 (平成5年度)



写真⑦ 小諸工事区見学会 (平成6年度)



写真⑧ 調査風景 (平成6年度)



写真⑨ 現場プレハブにての研修 (平成6年度)



写真⑩ ボランティア講座 (平成6年度)



写真⑪ ボランティア講座 (平成6年度)



写真⑫ 調査風景 (平成6年度)



写真⑬ 調査風景 (平成6年度)



写真⑭ 24住出土土器復元風景 (平成5年度)



写真⑮ 塩尻小見学 (平成7年度)

丸山すみ子、宮島珠子、中川麻由美（以上、整理作業については深沢遺跡群も同じ。）

5 基本土層

基本土層（第2図）は、25号住居跡付近のものを掲載した。これは25号住の調査が終了した後、大雨により遺跡の北方から大水が遺跡へ流れ込み、その排水のために重機で3 m程度の深さのトレンチを入れる必要性が生じたため、結果的に浅間第2軽石流中まで土層観察が可能となったことによる。第2章でも述べたようにこの排水用トレンチによって、浅間第2軽石流中に含まれる炭化自然木を得るという思わぬ副産物も手に入れることができたが、土層に関しても同様である。

第I層は耕作土であり、黒褐色土である。第II層は黒色土であり、場所によっては本層が認められないところもある。第III層は浅間第2軽石流である。遺構確認の大半は本層上面において行った。本層はさらに5つに分層できた。III-1層は明黄褐色土であり、軽石が多く含まれる。II-2層はにぶい黄褐色土で軽石はあまり含まれない。III-3層は緑灰色土で径20~30cm程の軽石を多く含む。部分的に明黄褐色土が混じる。この層から炭化自然木が検出された。III-4層は極暗赤褐色土、粘性大でしまりが非常に良い。III-5層は黄褐色土で上部はやや赤味を帯びる。軽石を多く含む。

6 概観

(1) 検出された遺構と遺物

縄文時代早期末～前期

遺構としては、竪穴住居跡6基と土坑4基が検出された。遺物としては土器・石器の他、遺構外出土である珧状耳飾りも本時期のものと考えられよう。竪穴住居跡は、0-10~K-12グリッドにかけての範囲に5軒（9住、36住、59住、61住、63住）が集中している。1軒（27住）のみがK-23グリッドに離れて存在している。また、前期後半期の土器片3点も遺構外から出土している。

縄文時代中葉～後期初頭期

竪穴住居跡は107軒を数える。井戸尻I式期から称名寺式期まで集落は絶えることなく継続している。なかでも加曾利EII~III式期頃に集落は最盛期を迎えている。これらは環状集落を呈するものと推定されよう。土坑は本時期の遺物を伴出した462基が認められる。遺物を出土していない土坑の中にも本時期に属するものは少なくないと考えられよう。なお、土器は加曾利B2式まで認められている。

弥生時代～古墳時代初頭

弥生時代中期の土器片が2点、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器片が3点、計5点が出土した。いずれも遺構外出土である。

郷土古墳群2号墳

かつて5基の存在が認められた郷土古墳群のうち、2号墳が今回の調査区内で姿をあらわした。8世紀代に比定される可能性が高いと考えられる。

奈良時代及びそれ以降

奈良時代には郷土2号墳の他、遺構外から和同開珎が1点検出している。平安時代では竪穴住居跡が2軒、土坑1基が認められる。また、自然流路もこの時期に最終的に形成されたものと考えられる。他には永楽通宝、寛永通宝などの古銭、江戸時代頃の陶磁器片が若干出土している。

(2) 住居跡の欠番

竪穴住居跡は132号まで番号をつけたが、以下は欠番である。

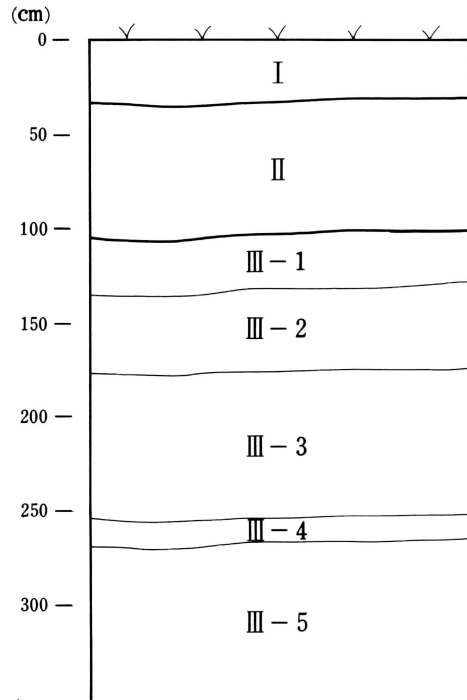
13住、34住、51住、52～58住、62住、65住、66住、68住、73住、86住、115住、117住

(3) 土坑の欠番

土坑は総計1125基が認められた。番号は1420号までつけたが、以下は欠番である。

3坑、4坑、14坑、47坑、50坑、53坑、80坑、82～85坑、88～95坑、121～123坑、191坑、192坑、207坑、218～236坑、240坑、291坑、296坑、297坑、331～350坑、359坑、400坑、438～440坑、442～455坑、464坑、472～499坑、524坑、536坑、542坑、543坑、547坑、550坑、552坑、555坑、560坑、562坑、604坑、637坑、643坑、670坑、678坑、708坑、709坑、711坑、721坑、722坑、725坑、726坑、730～737坑、790坑、813坑、815坑、819坑、822坑、823坑、848坑、850坑、853坑、854坑、856坑、857坑、864坑、871～874坑、876～899坑、915坑、981坑、1078～1100坑、1118坑、1159～1161坑、1163～1169坑、1177坑、1194坑、1195坑、1206坑、1232坑、1261坑、1271坑、1285坑、1314坑、1345坑、1347～1360坑、1385坑、1398～1400坑、1409坑、1412坑

なお、調査段階では土坑にはSK及びSHという2種類の記号を用いたが、本書ではともに土坑として報告する。そのため、SHは1100番台以降に付け替えた。つまりSH1は1101号土坑としている。



第2図 郷土遺跡の基本土層 1 : 40



写真⑩ トレンチ観察風景



写真⑰ 浅間第二軽石流中の炭化自然木

第3節 縄文早期末葉～前期の遺構と遺物

1 検出遺構

(1) 早期末葉の様相

早期末葉の遺構は、竪穴住居跡6軒・土坑4基を数える。出土土器の様相から、非常に近接して連続する時期と想定される為、一括して遺構を概観する。また、土坑は時期判定が困難な例が多く、こうした例を縄文中期に含めている為早期末葉の土坑がこの中にも存在すると思われ、実際には4基以上となろう。該当する遺構は、以下の通りである

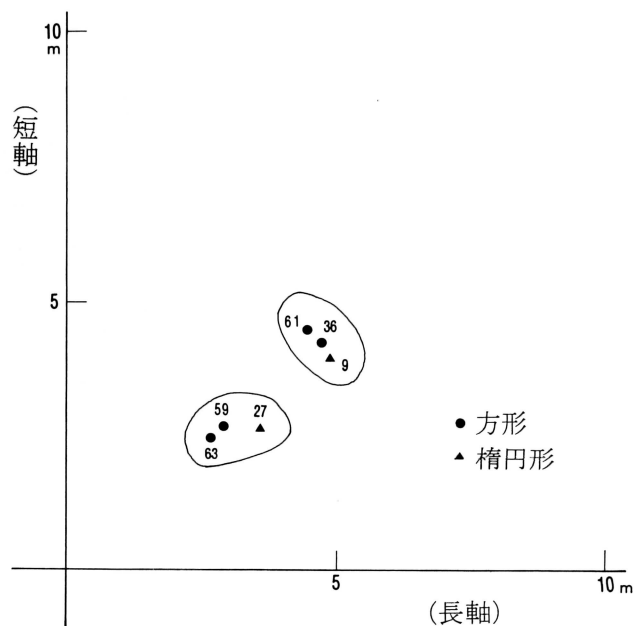
○竪穴住居跡：9・27・36・59・61・63号竪穴住居跡

○土坑：61・63・1162・1182号土坑

早期末葉の集落は、田切り地形が形成する馬背状の台地の標高825、5m付近に立地する。遺構の分布は、縄文中期とは大きな差異があり、縄文中期は粗密が認められるもののD地区北側を除いた調査区全面に展開するのに対して、早期末葉はK・O地区への集中傾向が指摘できる（第1・2図）。竪穴住居跡は、O-10・15～K-6・7・11・12地区検出の一群とK-23地区検出の一群とに分かれ、前者は9号及び重複関係にある36・59・61・63号竪穴住居跡が、後者は27号竪穴住居跡が該当し、両群はやや離れて位置している。この傾向は土坑も同様で、61・63号土坑がそれぞれO-5・K-11地区の検出で9・36・59・61・63号竪穴住居跡と、1182号土坑はP-2地区の検出で27号竪穴住居跡と近接する。また、1162号土坑はO-7地区の検出だが、O～K地区検出の他の遺構とはやや離れる。

竪穴住居跡の形態は、第9・27号竪穴住居跡の楕円形と第36・59・61・63号竪穴住居跡の方形が認められるが、両者は明確な形態を示すのではなく不整形な要素を含む。規模は、楕円形・方形の双方に長軸4、5～4、9m・短軸3、95～4、5mを測るグループ（9・36・61号竪穴住居址）と、長軸2、7～3、6m・短軸2、5～2、7mを測るグループ（27・59・63号竪穴住居跡）が見受けられ、大形住居と小形住居の存在が理解されよう（第3図）。住居内施設は、各住居で柱穴が検出され、1基～多数と規則性はないが、その中で方形の第36号竪穴住居跡だけは規則的な配置がなされている。炉・周溝等は検出されず、また、床面は硬化面や貼り床がなく軟弱で、基本土層III層をそのまま床面とする。

一方土坑は、第61・63・1182号土坑が円形、第1162号土坑が楕円形を呈する。円形の3基は、径110～120cmの第61・1182号土坑と径200cmを超える第63号土坑に分かれ、楕円形の第1162号土坑も第61・1182号土坑と同様の規模を持っている。また、第63号土坑は、



第3図 竪穴住居跡の規模

規模・断面形態等が大きく異なり、双方の機能的側面に興味を持たれよう。

(2) 竪穴住居跡

9号竪穴住居跡 (SB9 遺構：第6図、PL76 遺物：第9図、図版230、PL126、200)

遺構：K-11・12グリッドに位置する。長径4.9m、短径3.95mの規模を測り、南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する。壁高は北側では最大33cmを測るが、南側では5cmが検出されたにすぎない。覆土は黒褐色土の単層である。床は掘り込んだ基本土層Ⅲ層をそのまま床面として利用し、硬化面や貼床はなく、南方向へ徐々に傾斜している。住居内施設は炉や周溝は確認できず、ピットは15基が検出されたが、柱穴配置は不明である。

遺物：土器はI D類の小破片が1点出土した(第9図1)。石器は磨石4点が出土し、1点を図示した(図版230-317)。

27号竪穴住居跡 (SB27 遺構：第7図、PL76 遺物：第9図、PL126)

遺構：K-23グリッドに位置する。規模は長径3.6m、短径2.65mを測り、やや不整形だが南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する。壁高は5～32cmを測る。覆土は黒褐色土の単層であるが、南側では径30cm程の軽石を多く含んでいた。床は基本土層Ⅲ層を掘り下げてそのまま利用しており、硬化面・貼床は認められなかった。また、炉・周溝等の住居内施設も検出されていない。ピットは1基が検出されたが、柱穴となるかは不明である。

遺物：I D類に分類される土器の小破片が2点出土した(2・3)。

36号竪穴住居跡 (SB36 遺構：第8図、PL76 遺物：第9図、図版228、PL126、198)

遺構：O-10・15グリッドに位置する。遺構検出段階で63号竪穴住居跡よりも新しい所産である事が理解できた。壁高は北側で最大27cmを測るが、西側では不明確である。覆土はパミスを含む黒色土で、小指大から拳大の軽石も認められる。規模は長径4.75m、短径が推定約4.2m程を測り、形態はやや不整形だが方形を呈している。床は基本土層Ⅲ層を掘り下げてそのまま利用しており、硬化面・貼床は認められない。また、炉や周溝も検出されていないが4基のピットが見受けられ、規則的な柱穴配置を構成する。

遺物：I C～E類の土器(4～8)及び、磨石2点、敲石1点、剥片石器1点(図版228-290)が出土した。

59号竪穴住居跡 (SB59 遺構：第7図、PL76 遺物：図版211、216、PL187、190)

遺構：K-5・6・10・11グリッドに位置する。遺構検出段階で61号竪穴住居跡より新しく、縄文中期の48号竪穴住居跡に切られる事が理解できた。南西側は攪乱による破壊を受けているが、長径2.9m、短径2.7mの規模を測り、形態は方形を呈する。壁高は6～12cmで、覆土はパミスを含む暗褐色土の単層である。床は掘り込んだ基本土層Ⅲ層をそのまま利用しており、硬化面・貼床は認められない。また、炉・周溝等の住居内施設は見られないが、2基のピットが検出されている。

遺物：石鏃3点(図版211-11、24)、石匙1点(図版216-132)、磨石1点、敲石1点が出土した。また、本遺構の検出時にK-6グリッドで珧状耳飾が1点出土し、本遺構に伴っていた可能性もある。

61号竪穴住居跡 (SB61 遺構：第7図、PL76 遺物：第9図、PL126)

遺構：K-6グリッドに位置する。遺構検出段階で37・48・59号竪穴住居跡と重複するが、そのいずれよりも古い所産であることが理解できた。規模は長径・短径ともに4.5m程を測り、形態はやや不整だが方

形を呈する。壁高は5～20cmで、床は掘り込んだ基本土層Ⅲ層をそのまま利用しており、硬化面・貼床は認められなかった。炉や周溝は見受けられず、またピットは28を検出したが浅いものが殆どで、柱穴配置は不明である。

遺物：I D類の土器（9～11）及び石鏃3点が出土した。

63号竪穴住居跡（SB63 遺構：第7図、PL76）

遺構：O-15グリッドに位置する。36号竪穴住居跡、71・148号土坑と重複し、そのいずれよりも古い所産である。東側の一部は攪乱による破壊を受けている。規模は長径2.7cm、短径約2.5センチを測り、方形に近い形状を呈する。壁高は数cmで、床は掘り込んだ基本土層Ⅲ層をそのまま利用しており、硬化面・貼床は認められない。炉・周溝はなく、またピットは19基が検出されたが浅いものが多く、柱穴配置等は不明である。

遺物：出土していない。

(3) 土坑

61号土坑（SK61 遺構：第8図 遺物：第9図、PL126）

位置：O-5グリッド 重複：遺構検出段階で12号土坑よりも古い構築である事が理解できた。

形態・規模：径114cm程の円形を呈し、深さ36cmを測る。 覆土：不明

遺物：I D類の土器が出土した（12～18）。

63号土坑（SK63 遺構：第8図 遺物：第10図、PL127）

位置：K-11グリッド 重複：縄文中期の44・48号竪穴住居跡と重複する。44号竪穴住居跡の周溝及び48号竪穴住居跡の炉に切られている点から、それよりも古い構築である事が理解できた。

形態・規模：径232×200cmの円形を呈し、深さは124cmを測る。断面形態はややオーバーハングする。

覆土：12層が堆積する。1層はしまりの悪い黒色土でパミス粒を多く含む。2層は黒色土でパミス粒を少し含む。僅かに炭化物も認められる。3層は明黄褐色土でローム土が多く含まれる。4層はローム土が崩壊したものと考えられる。5層は粒子の粗い灰褐色土。6層は脆い黒色土。7・8層はしまりの悪い暗褐色土でパミス粒は含まれない。9層は明褐色土。10層は粒子の細かい黒色土。11層はローム土が崩壊したものと考えられる。12層は粒子の粗い暗褐色土。

遺物：I D類の土器（19～29）及び、打製石斧2点、磨石1点が出土した。

1162号土坑（SK1162 遺構：第8図 遺物：第10図、PL127）

位置：O-7グリッド 重複：なし 形態・規模：長径140×短径92cmの楕円形で、深さ44cmを測る。

覆土：パミス粒を含む黒色土の単層である。検出段階で、平たい自然礫が露呈していた。

遺物：I D類の土器が出土した（31～34）。

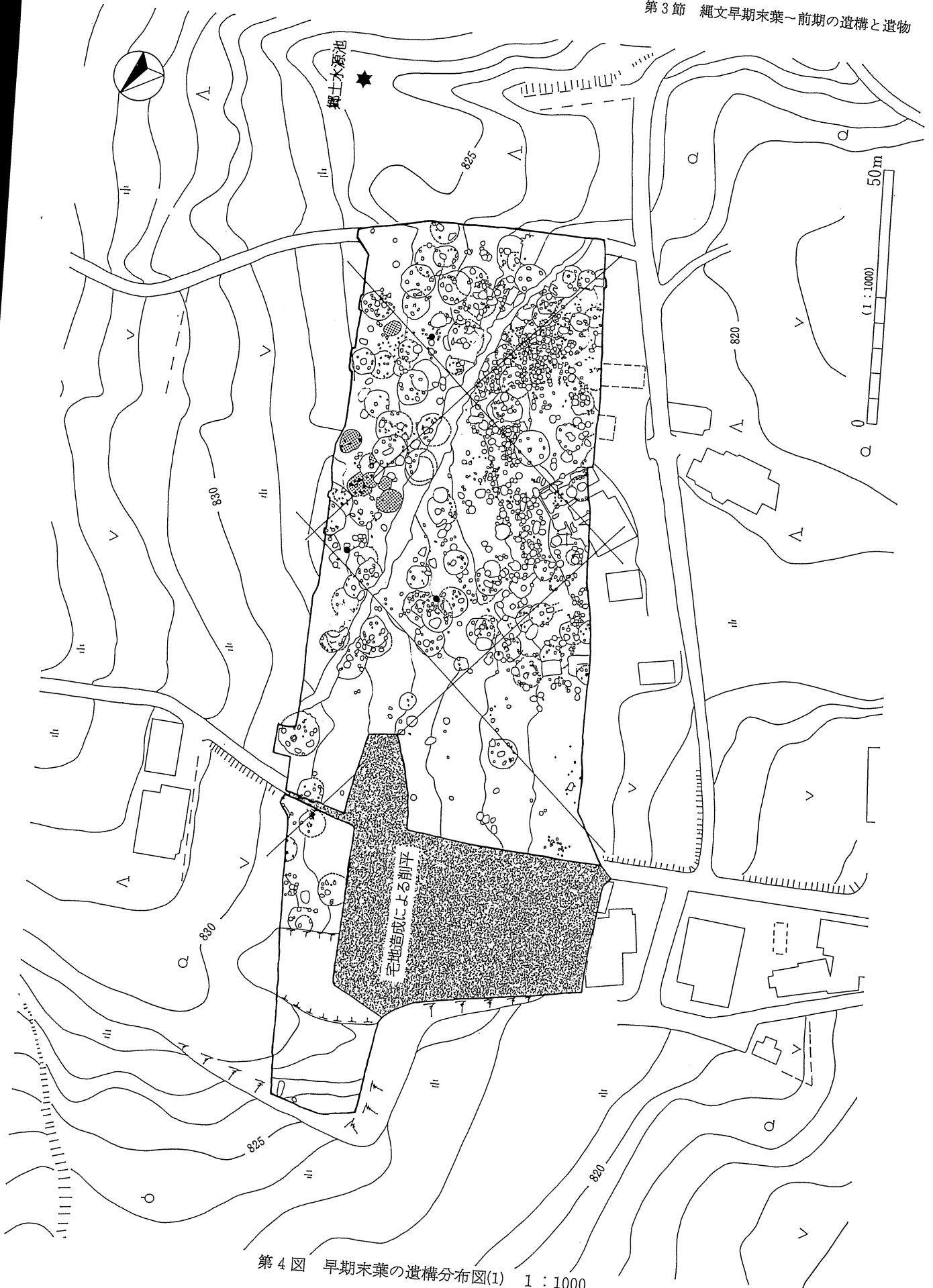
1182号土坑（SK1182 遺構：第8図 遺物：第10図）

位置：P-2グリッド 重複：なし

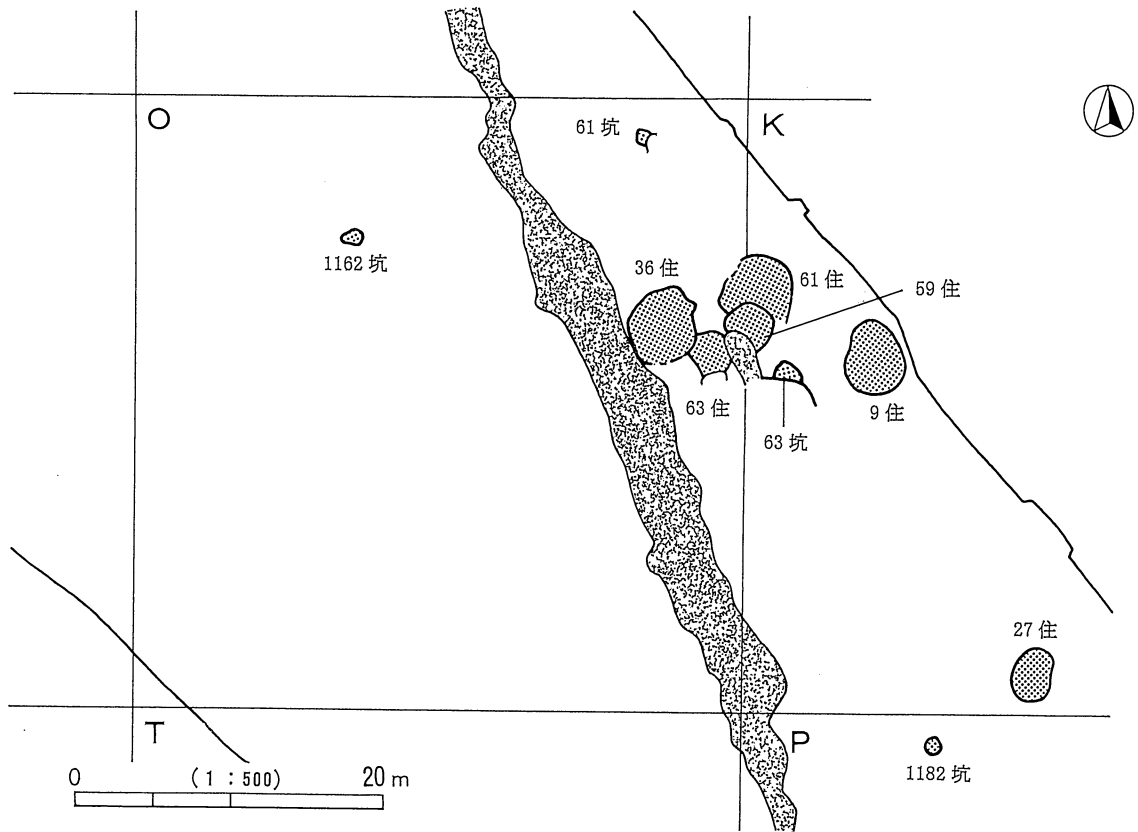
形態・規模：径120×112cmの円形を呈し、深さ00cmを測る。

覆土：しまりの良い黒色土の単層であり、径5cmの軽石礫及びローム土が部分的に認められる。

遺物：I D類の土器が出土した（30）。

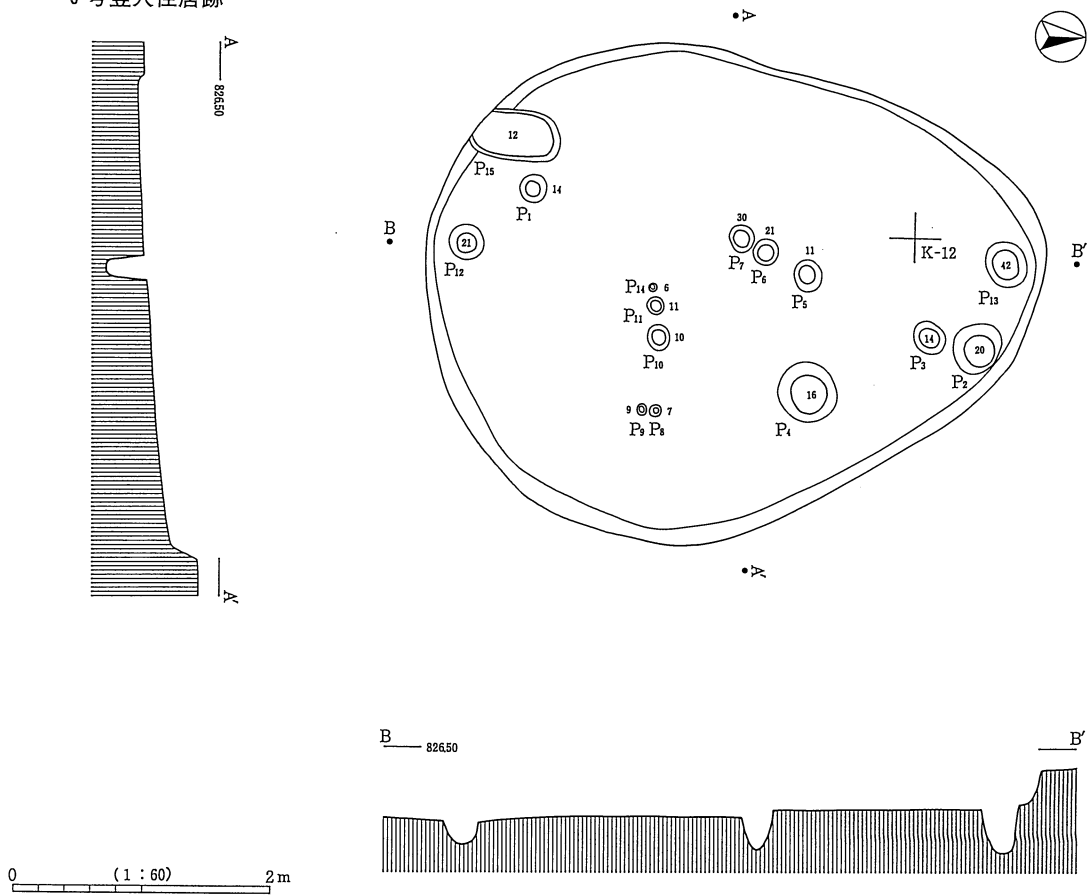


第4図 早期末葉の遺構分布図(1) 1:1000



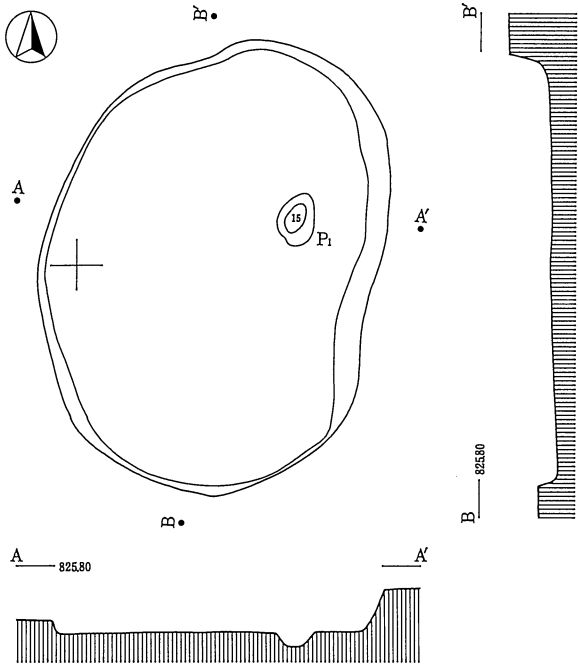
第5図 早期末葉の遺構分布図(2) 1:500

9号竪穴住居跡

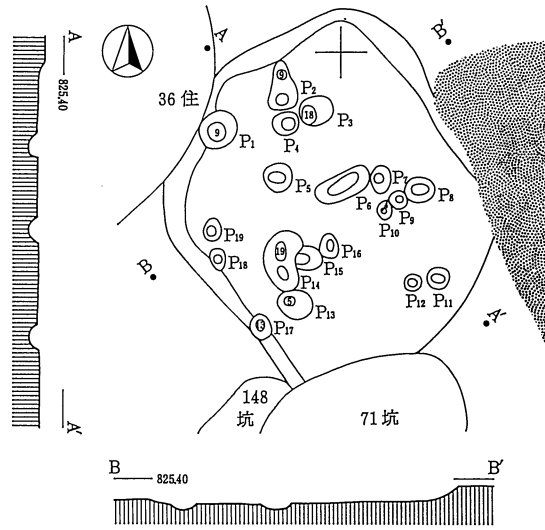


第6図 早期末葉の遺構(1) 1:60

27号竪穴住居跡



63号竪穴住居跡

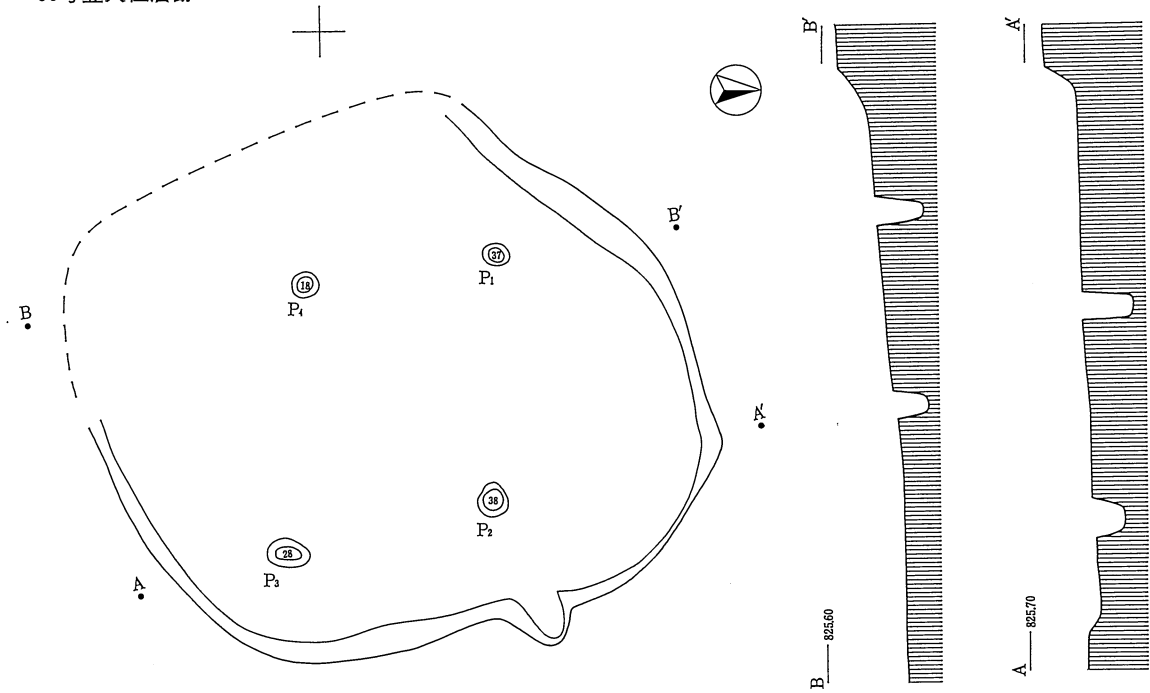


59号・61号竪穴住居跡

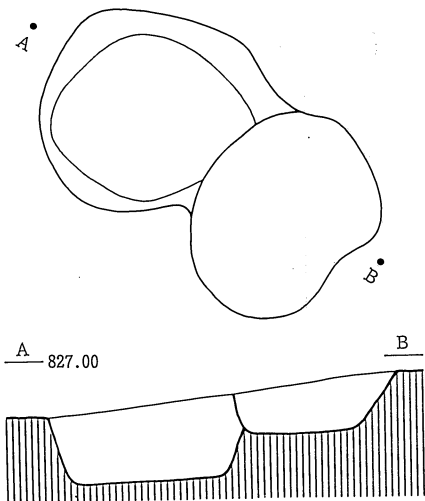


第7図 早期末葉の遺構(2) 1 : 60

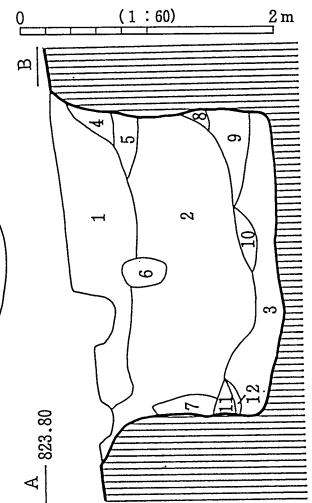
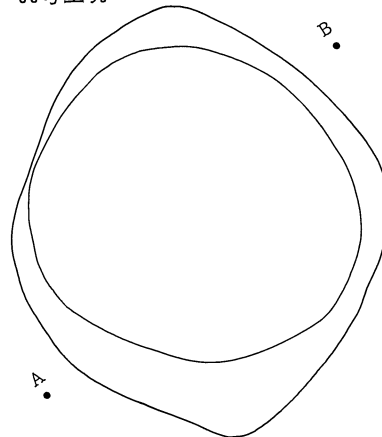
36号竪穴住居跡



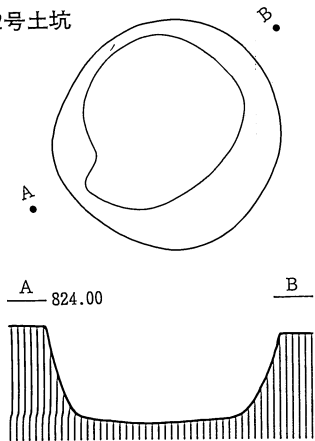
61号土坑



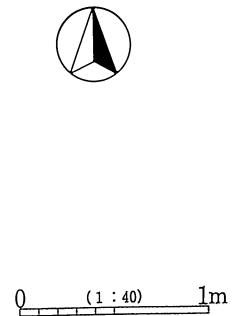
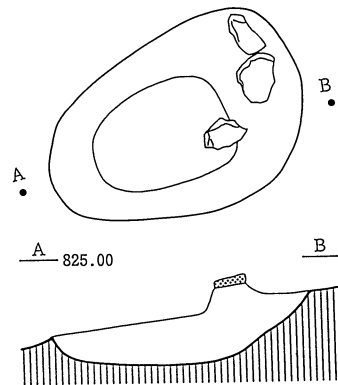
63号土坑



1182号土坑



1162号土坑



第8図 早期末葉の遺構(3) 1:60、1:30

2 出土土器

(1) 出土土器の分類

本遺跡より出土した早期末葉～前期土器群を、以下の様に分類した。

第I群：早期末葉土器群

A類：口縁部に絡条体圧痕文を施文する一群

B類：口縁部に隆帯を貼付する一群

C類：口縁部に沈線で文様を描く一群

D類：縄文施文の一群

E類：撚糸文施文の一群

F類：無文の可能性のある一群

第II群：前期後半土器群

I D・E類は器面全面に縄文・撚糸文を施文する一群だが、口縁部文様帯を有するI A～C類の胴部以下の破片を含む。F類は後述する通り、I D・E類の一部となる可能性がある。また、第II群は総量が僅かな為、細分を避けて一括した。

(2) 遺構出土土器

9・27・36・61号竪穴住居跡及び、61・63・1162・1182号土坑から当該期の土器が出土した。その多くは小破片の資料だが、36号竪穴住居跡や61・63号土坑出土土器は比較的纏まった資料である。

① 竪穴住居跡出土土器（第9図、PL126）

1は9号竪穴住居跡出土で、I D類の胴部である。縄文LRが横位施文され、内面の一部には横方向の条痕が認められる。条痕の原体は不明確だが、絡条体条痕の可能性があろう。

2・3は27号竪穴住居跡出土である。I D類の胴部で、2は縄文LR・RLの横位羽状構成、3は縄文RLの横位施文となる。

4～8は36号竪穴住居跡から出土した。4・5はI D類の胴部である。4は縄文LRの横位施文で、円形刺突が施されるがその原体は不明である。5は縄文LR・RLによる横位羽状構成で、一部に縄文施文後に付いた斜め方向の擦痕が認められる。6・7はI E類の胴部で6は横・斜位方向、7は縦・斜位方向の施文を行い、7は縦長の菱形を構成した可能性があろう。8はI C類の良好な資料である。器形は平縁を呈し、胴部が直線的に立ち上がって口唇部付近でやや外反する。撚糸文を地文としながら口縁部へ、2本1対の沈線で文様を描いている。モチーフは上端に緩やかな弧状沈線を描き、器面を縦位分割してそれぞれにX字状の文様を配置し、その中央へ横位の短沈線を加えている。縦位分割の下端は、弧状沈線により区画がなされる。内面はナデ整形で、口唇部直下に撚糸文を施文する。

9～11は61号竪穴住居跡出土で、9はI D類の胴部、10・11はI D類の底部付近あるいは底部である。9・10は縄文LR・RLの横位羽状構成となり、11は縄文LRの横位施文が見受けられる。

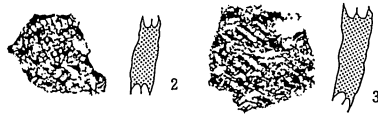
② 土坑出土土器（第9・10図、PL126・127）

12～18は61号土坑出土から出土した。I D類の胴部あるいは底部で、12・13・16・17は縄文LR・RLによる横位羽状構成、14・15は縦条の縄文である。18は縄文LRの横位施文だが、一部に無文部が見受けられる。

9号竖穴住居跡



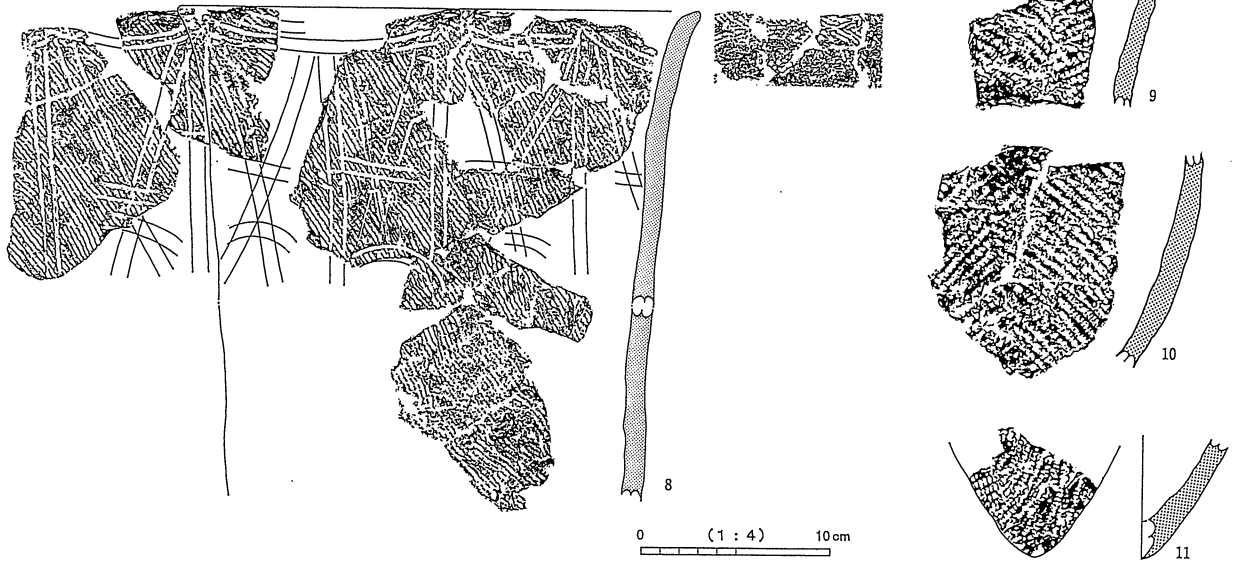
27号竖穴住居跡



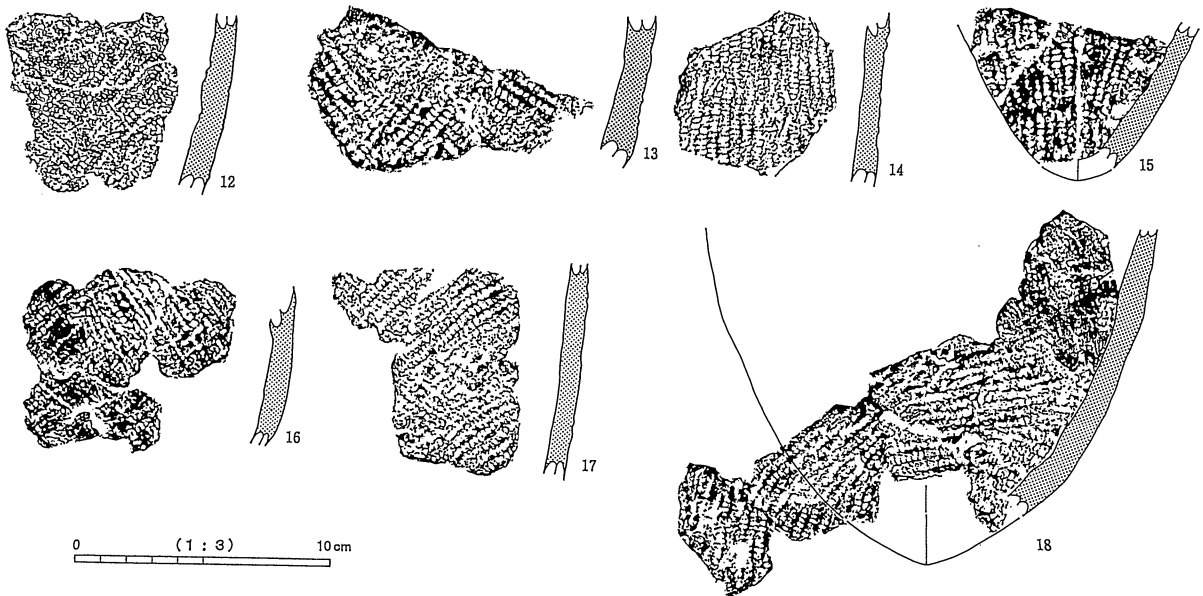
36号竖穴住居跡



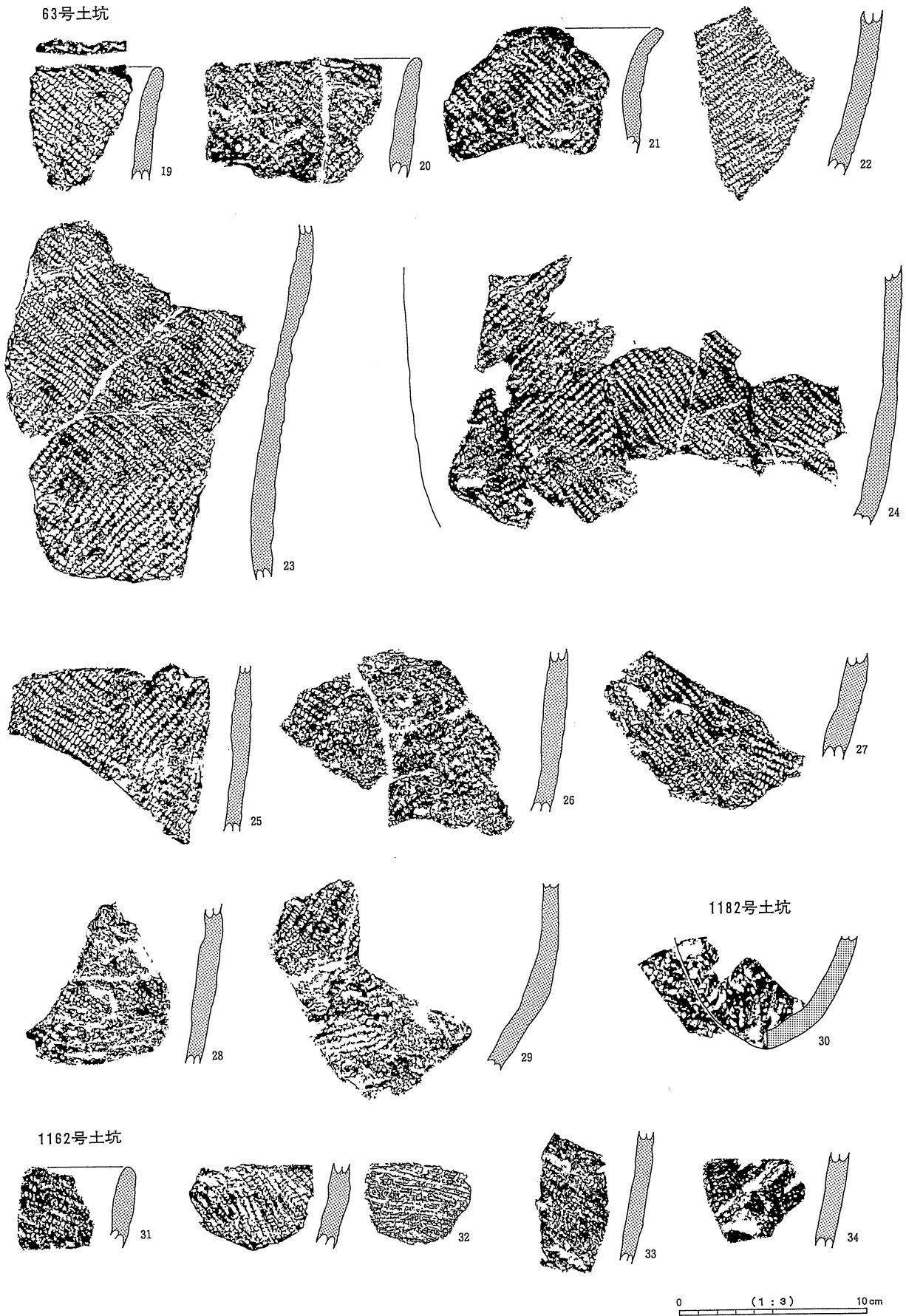
61号竖穴住居跡



61号土坑



第9図 早期末葉の土器(1) 1:3



第10図 早期末葉の土器(2) 1 : 3

19～29は63号土坑より出土し、全てI D類に分類される。19～21は口縁部である。19は縄文RLの横位施文で、口唇部には刺突を行った可能性がある。20・21は縄文LR・RLで、横位羽状を構成する。22～28は胴部で、この内23～25は同一個体と思われる。22は縄文LRの、26～28は縄文RLの横位施文、また、23～25は縄文LR・RLによる横位菱形構成となる。29は底部付近で、単節縄文を施文する。

30は1182号土坑出土で、I D類に分類される底部であり、単節縄文を施文する。

31～34は1162号土坑の出土である。31は口縁部、32～34は胴部で、いずれもI D類に所属する。31～33は縄文RLの横位施文であり、32は内面に横方向の条痕を有する。34は単節縄文と考えられるが、不明確である。

(3) 遺構外出土土器 (第11～14図、PL128～131)

早期末葉及び前期後半の土器が存在するが、前者が圧倒的な量を占め、後者は報告する3点に留まる。(1)で提示した分類に沿いながら、土器を概観する。

① 第I群土器

○I A類 (35)

本類は図示した1点のみの出土である。35は口縁下部で縄文RLの地文上に、3条以上となる横位多段構成の絡条体圧痕文を施文する。内面に条痕はなく、ナデ調整が施されている。

○I B類 (36～51)

垂下隆帯の36以外は、全て1条の水平隆帯を貼付する。36は緩やかな波状口縁の波頂部より隆帯を垂下し、隆帯上に1条の沈線を描いている。隆帯の脇に縄文Lが施文され、また、口唇部には刻みを持つと思われるが不鮮明である。

1条の水平隆帯を持つ37～51は平縁で、隆帯が全体的に低く、隆帯上を斜め又は縦方向に刻む37・45・46・48～50、隆帯上を無文にする39～41・43・44・47、縄文が一部かかる38・42・51があり、40・43～45・47・49は更に隆帯の脇を沈線でなぞっている。また、38の隆帯は極めて低く、僅かな隆起を有するのみである。

縄文は37・38・41・43がLR・RLによる横位羽状構成、39・40・44・49～51がLRの横位施文、42・47がRLの横位施文、45が縦条の縄文となる。37は口唇部、39は内面の口唇部直下へ施文が及ぶ。内面は横方向の条痕が認められる37を除き、ナデ調整が施される。

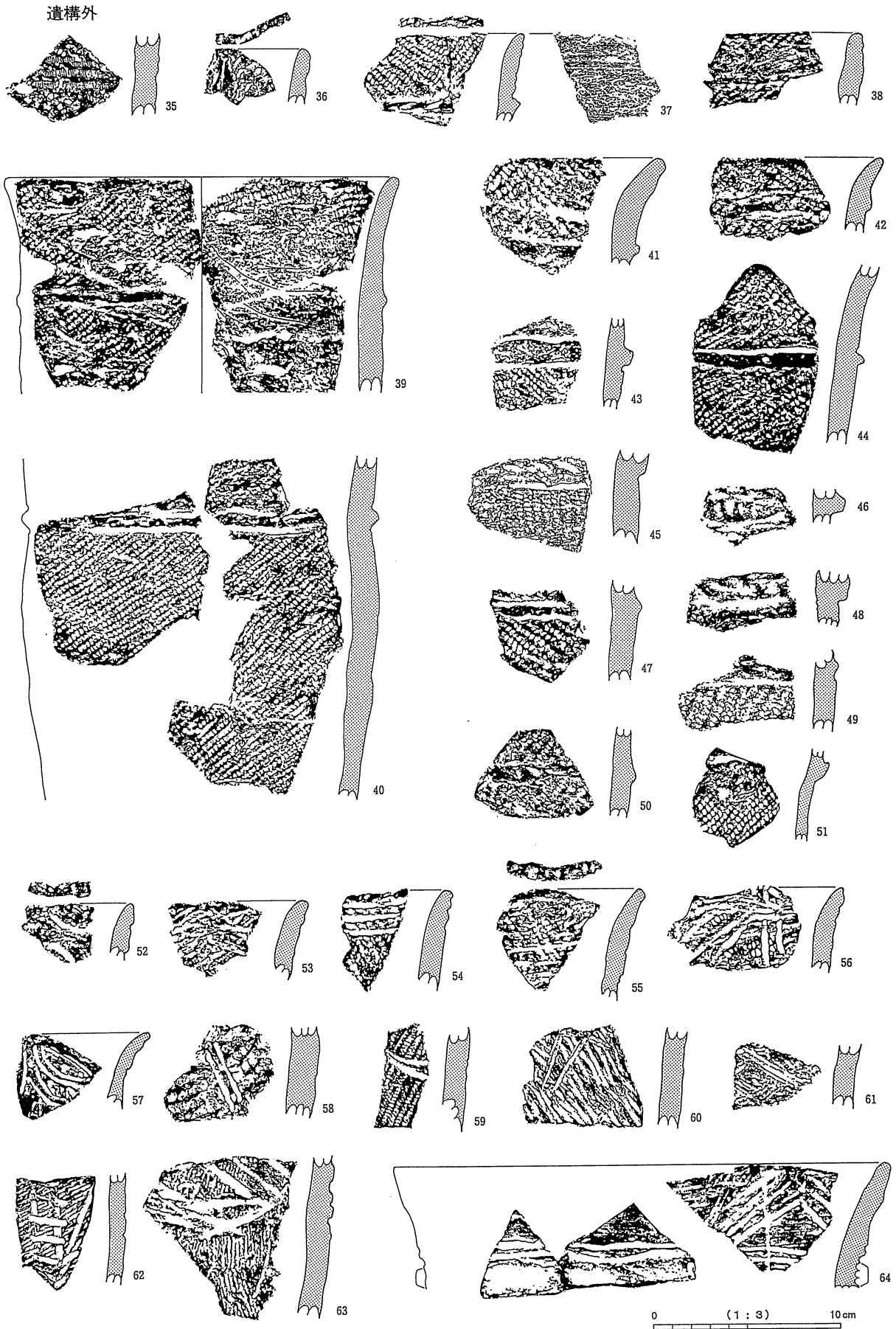
○I C類 (52～64)

平縁と54・55・57の緩やかな波状口縁が存在し、52・55は口唇部に刻みを施す。小破片のため不明確だが、口縁部文様帯は36号住居跡出土の8の様に隆帯を持たずやや幅広になる例と、64に見受けられる水平隆帯の上部へ形成する例がある。弧状・平行・菱形や鋸歯などの幾何学的な文様を描くが、沈線を1本で描くものと2本1対のものが認められる。

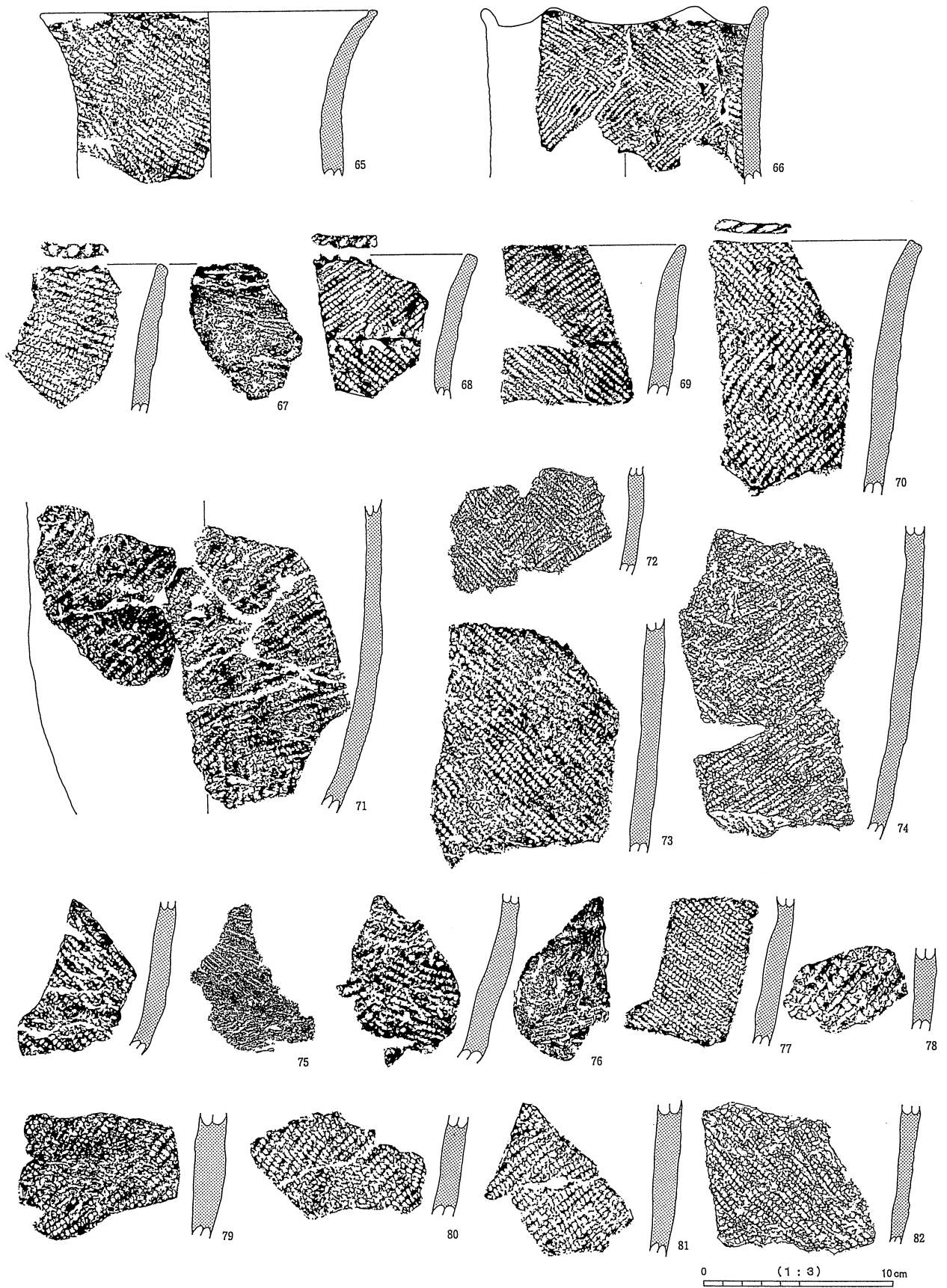
文様の地文は52・53・56・58・59が縄文LR、54・55が縄文RLの横位施文、60～63は撚糸文で、57は不明確、64は地文を持たない。内面に条痕を有する例はなく、ナデ調整が施される。

○I D類 (65～107)

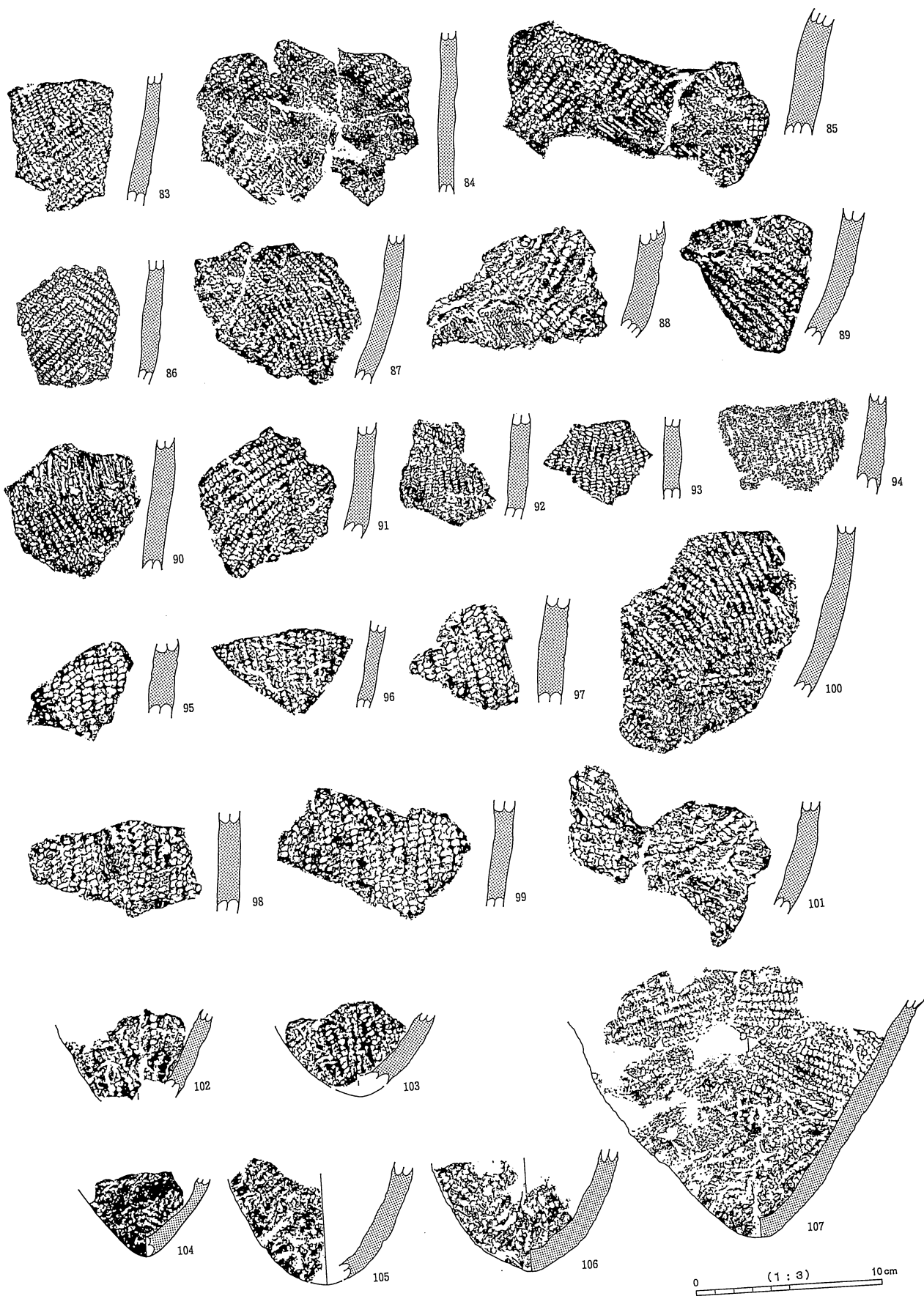
縄文は全て単節で、78の附加条風も存在する。施文構成は65・67・71・73・75～80・82・84・85・



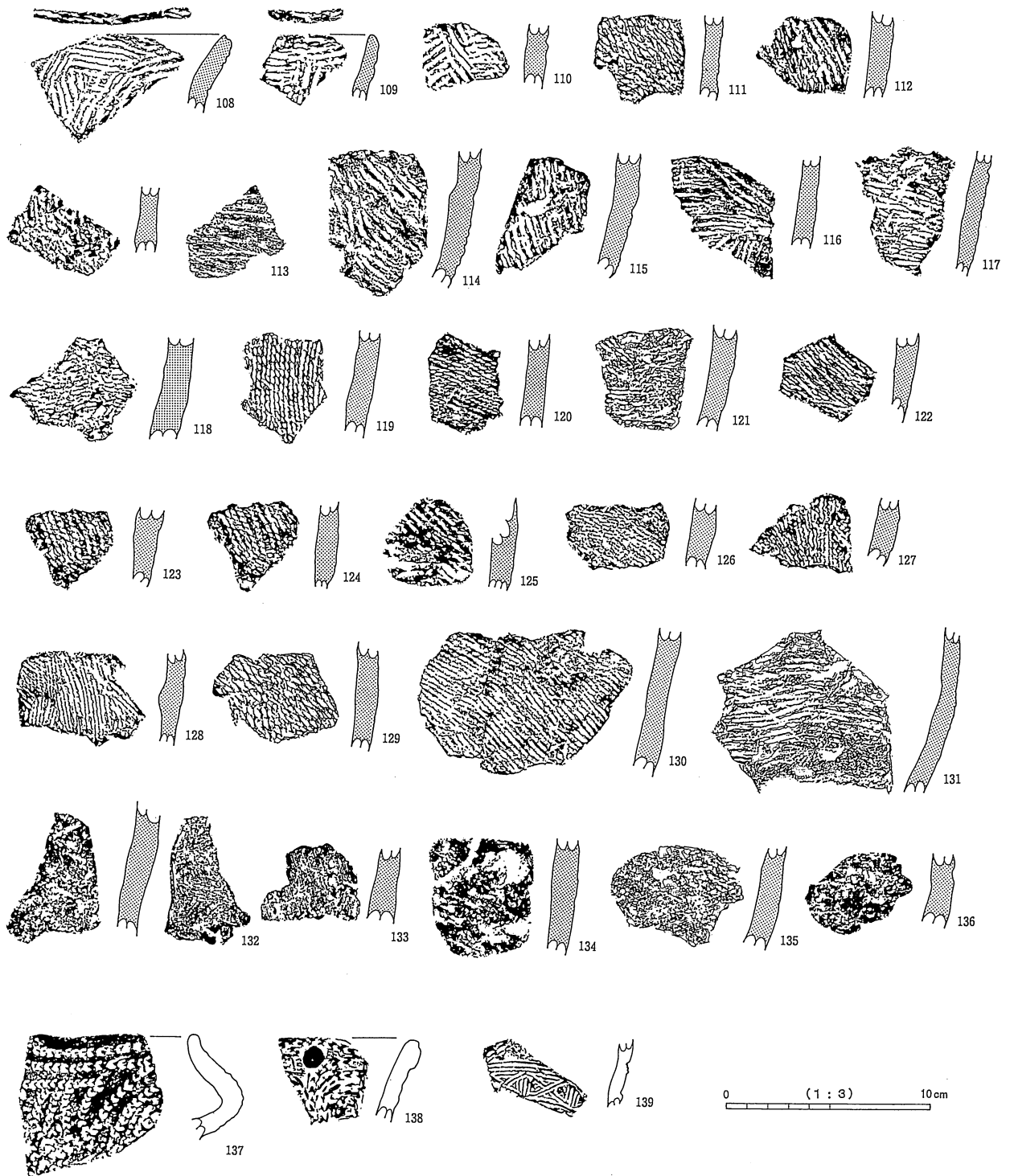
第11図 早期末葉の土器(3) 1 : 3



第12図 早期前葉の土器(4) 1:3



第13図 早期末葉の土器(5) 1 : 3



第14図 早期末葉・前期後半の土器 1 : 3

87～91・100・101がLRあるいはRLの横位斜構成、66・68～70・72・74・81・83・86がLR・RLによる横位羽状構成、92～99が縦条の縄文で、この内95～99は同一個体の可能性が高い。65～70は口縁部で平縁と66の波状口縁が存在し、開きの差はあるが全て外反している。66は4単位以上だが、正確な単位数は不明である。67・68・70は口唇部を刻むが、その原体は不明。107の底部は縄文施文が及ばない無文部が看取され、61号土坑出土の18と共通する。

内面は67・75・76に横・斜め方向の条痕調整、70・73・95～99・101・107に横方向の擦痕状調整が観察される。条痕は部分的で弱く不明確だが、絡条体条痕であろう。その他は全て、ナデ調整である。

○ I E類 (108～131)

数本を1単位とする密接な撚糸文で、横位・縦位・斜位方向の回転施文が認められ、側面圧痕文やRとLを組み合わせた原体は存在しない。施文構成は36号竪穴住居跡出土資料の7について、縦長の菱形を構成する可能性を指摘したが、ここでは明確な資料は存在しない。

108～110は同一個体で波状口縁を呈し外反するが、その度合いが108・109で若干異なる。器面と同一の原体を用いて、口唇部への施文も行う。131は下部に、撚糸文が及ばない無文部が看取される。

内面は113に条痕調整が施され、それ以外はナデ調整となる。

○ I F類 (132～136)

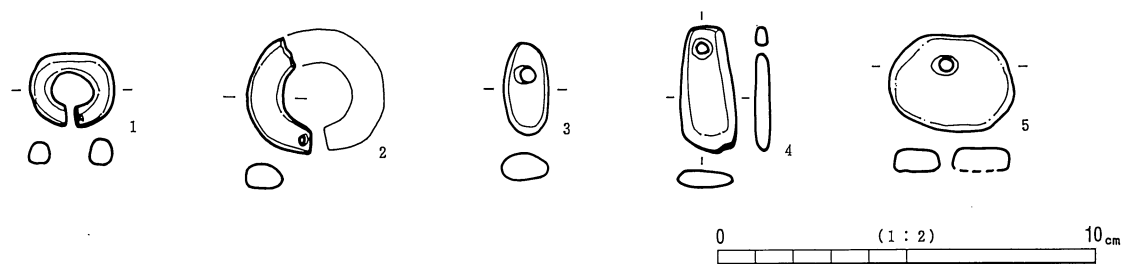
本類は無文土器を一括しているが、実際に無文土器と認定して良いのか不安が残る。I D類の底部である18・107には施文が及ばない無文部が観察され、また132・135の部位が比較的底部に近いと想定される事による。しかしながら、I C類には地文としての縄文・撚糸文を持たない64が存在しており、無文の可能性を完全に否定する事もできない。よって、無文土器及びI D類等に含まれる、両方の可能性を考えておく。器面はナデ調整が施されており、132の内面には横・斜め方向の弱い条痕が看取される。また、136の内面には弱い横方向の擦痕状調整が施されている可能性があるだろう。

② 第II群土器

137は強く湾曲する口縁部で、爪形文で文様を構成する。138は外反する平縁で、爪形文施文後、ボタン状貼付文を施す。139は平行沈線で文様を構成する。137は諸磯b式、138・139は諸磯c式である。

3 石製装飾品

本遺跡では、遺構外だが5点の石製装飾品が出土した(第15図1～5、PL220)。その全てが早期末葉



第15図 石器装飾品

に所属するのは不明だが、玦状耳飾が看取される為ここで一括して報告する。

1・2は玦状耳飾である。1は透明感のある緑がかった淡褐色で光沢・脂質感を有し、軟質で滑石製と考えられる。中央孔が大きく、孔側は細く厚みがあり、平面形は円環形を呈する。形態的特徴は、前期初頭に近い。2は黒色で、光沢・脂質感を若干持つ。軟質だが、1の石材ほどではない。スリット付近に穿孔が認められるが補修孔とは考えにくく、垂飾に転用した際の孔、あるいはスリットの両側に穿孔を施す耳飾であろう。形態は円環形で、1より中央孔が大きくやや薄手で、早期末葉の特徴を有する。

3～5は垂飾である。3は若干緑がかった灰色で光沢があり、軟質で滑石製と考えられる。4は黒色だが、銀白色に光る鉱物を含む。光沢・脂質感をやや持つ。5は砂岩を円盤状に加工し、その中央に小孔を穿孔する。

第4節 縄文時代中期中葉から後期前葉の遺構と遺物

1 検出遺構

(1) 概観

本項では縄文時代中期中葉から後期前葉にかけての時期に比定される遺構を報告する。当該時期の遺物を出土する遺構としては竪穴住居跡、土坑、掘立柱建物跡、屋外埋甕、集石、土器集中、単独土器があげられる。

当該期の竪穴住居跡は、107軒が検出されている。井戸尻Ⅰ式期から称名寺式期まで継続して営まれている。

本遺跡からは1125基の土坑が検出されている。このうち当該期の遺物を伴出するものは462基にのぼっている。うち遺物を図示したのは278基である。

掘立柱建物跡は1棟のみの検出であるが、出土土器片から当該期に比定できる。

集石は3基が検出されているが、いずれも当該期の遺物を出土しているため本項でとりあげる。

また、屋外埋甕8基と2ヶ所の土器集中、単独土器は厳密な意味では遺構ではないが、本項でとりあげることにする。

なお、本文中の遺物番号は図版の番号と対応している。また中期については、その編年軸を井戸尻編年及び加曾利Ⅴ式編年（谷井彪ほか1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要』の編年軸）に基づき、10段階に細分した。つまり、1段階（井戸尻Ⅰ式併行）、2段階（井戸尻Ⅲ式併行）、3段階（曾利Ⅰ式・加曾利ⅤⅠ式古併行）、4段階（加曾利ⅤⅠ式新併行）、5段階（加曾利ⅤⅡ式古併行）、6段階（加曾利ⅤⅡ式中併行）、7段階（加曾利ⅤⅡ式新併行）、8段階（加曾利ⅤⅢ式古併行）、9段階（加曾利ⅤⅢ式新併行）、10段階（加曾利ⅤⅣ式併行）とした。

以下、①竪穴住居跡、②土坑、③掘立柱建物跡、④屋外埋甕、⑤集石、⑥土器集中、⑦単独土器の順に報告していくことにする。

(2) 各説

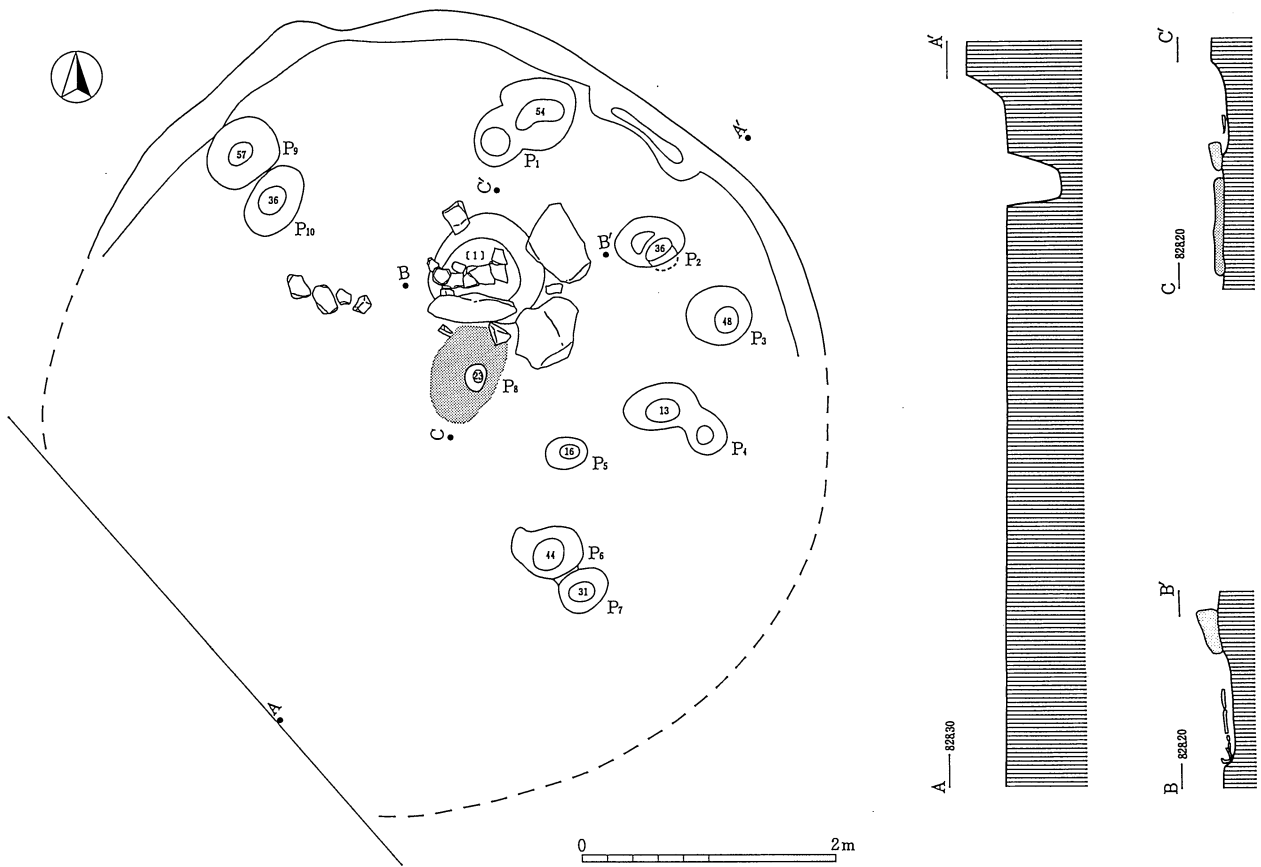
① 竪穴住居跡

当該期のものとしては107軒を数える。その時期細分については文末に記してある。また出土遺物については、図示はごく一部にとどめざるをえなかったが、数量等はできるだけ記載するように努めた。

1号竪穴住居跡（遺構：第16図、PL77、遺物：図版79、PL132）

遺構：D-23、D-24グリッドに位置する。住居跡の南西部が住宅造成のため消失しており、また南東部も削平が著しいため、明確な平面プランはつかめなかったが、径6m程度の規模を測り、ほぼ円形を呈するものと思われる。壁高は北壁付近では約30cm程残っているものの、南側ではほとんど検出できなかった。わずかに残る覆土はバミスを多く含む黒褐色土の単層である。また覆土上部には拳大の軽石が集中してみられた。床には硬化面や貼床は認められなかった。中央やや北寄りに炉が存在している。本来は、方形の掘り方をもつ安山岩質の石を用いた石囲炉と考えられるが、炉石のうち原位置をとどめているのは南辺のものだけであり、他は本住居跡廃絶時に抜き取られたと思われる、炉周辺に散乱している。また、炉内には1個体分の深鉢形土器(1)が横たえた状態で検出されている。炉の掘り方は深さ10cm程と浅く、灰や焼土は認められず、炉底も焼けていなかった。一方、炉の南側には、厚さ10cm程の焼土塊が約80cm×約55cmの範囲に認められている。周溝は北側に一部みられるだけである。ピットは10ヶ検出されているが、このうち柱穴の可能性のあるものとしては、P1、P2、P3、P4、P6、P7、P9、P10があげられようか。

遺物：土器は7点を図示した(1~7)。1は口縁部の渦巻き文は6単位、胴部の隆帯は粘土紐をなでつけたものでやや粗雑である。2は渦巻き文による5単位の波状口縁を有し、その直下には補修孔が認められている。外側からの穿孔である。4は口縁部に6単位の渦巻き文をもち、胴部の蛇行隆帯は3単位である。5は口縁部に5単位の渦巻き文、胴部には5単位の2条蛇行沈線がみられる。石器は、石鏃1点、石錐未製品1点(110)、剥片石器1点(286)、軽石製品1点(608)、打製石斧16点(203・212~214)、磨石



第16図 1号竪穴住居跡 1:60

1点が出土している。

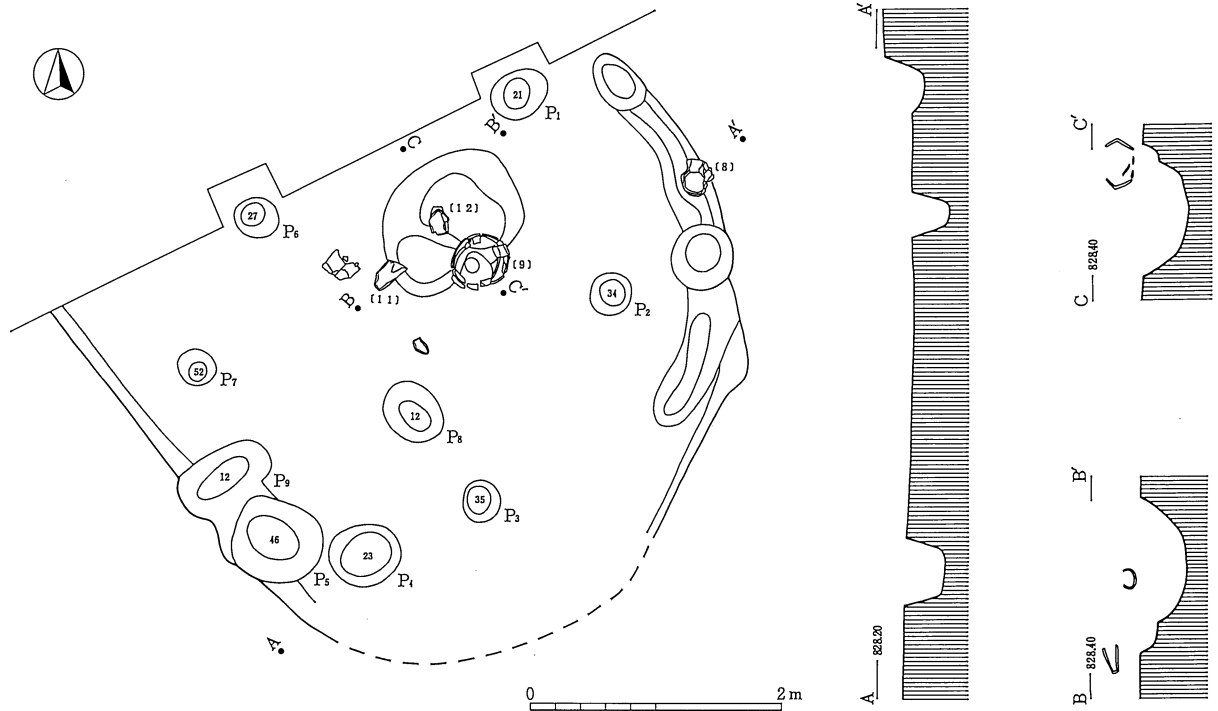
時期：出土した土器から、中期6段階に比定できる。

2号竪穴住居跡（遺構：第17図、PL77、遺物：図版80、PL132、133）

遺構：J-1グリッドに位置する。北西部分は道路によって破壊されており、また南東部は壁が消失しているため、平面プランは明確ではないが、径5m程度の規模を測り、やや不整の円形を呈するものと推定される。壁は北側付近で約20cm、西側付近で数cmが検出された他にはほとんど残っていないが、わずかに残る覆土はパミスを含む黒褐色土である。床には硬化面や貼床は特に認められなかった。周溝は、北東部にみられるのみである。中央やや北寄りに炉が存在している。本来は楕円形の掘り方をもつ石囲炉であったと思われるが、炉石は全く残存していない。炉は深さ40cm程の掘り方をもつが、住居跡覆土と同じ土が堆積している。灰や焼土は認められなかった。また炉底も焼けていなかった。炉を中心とした覆土には拳大から頭大の軽石が多く含まれている。ピットは9ヶが検出された。このうちP1、P2、P3、P5、P7が柱穴として考えられよう。

遺物：土器は6点を図示した（8～13）。8・11は口縁部から胴部下部までの全面に縄文を施す。9・10はともに口縁部が欠損しているが、本来は口縁部が「くの字」形に外反するタイプの浅鉢であろう。また9には補修孔が認められる。13は櫛歯状工具による繊細な沈線を施している。いずれも床面から10～20cm程浮いた状態で出土している。住居跡覆土中にみられる軽石と同じレベルで検出されているため、住居廃絶時あるいは廃絶後に投棄されたものと考えられ、一括性が極めて高い。石器は、石鏃1点（17）、打製石斧5点、磨石2点（332）が出土している。土製品としてはミニチュア土器1点（82）が検出された。

時期：出土した土器から、中期6段階に比定される。



第17図 2号竪穴住居跡 1:60

3号竪穴住居跡（遺構：第18図、PL77 遺物：図版80、PL133）

遺構：J-18、J-23グリッドに位置する。南東部は攪乱による破壊を受け、また南側部分は壁が消失しているため、明確なプランはつかめないが、本来は柄鏡形敷石住居跡であると考えられる。その場合、東西方向が約4.3m、南北方向が約6m程度の規模になるものと推定されよう。壁高は北壁付近では20cm前後が検出されているが、南西部では数cmをみるにすぎない。覆土はパミスを含む黒褐色土の単層である。35住と重複しているが、本跡の敷石をはずした後に35住が検出されたため、本跡の方が新しい。また推定プランに従えば、自然流路である1溝とも張り出し部で重複している可能性が高いが、この場合は平安時代の土器が出土している1溝の方が新しいと理解できる。敷石は北壁の柱穴に沿うように配置されているもの及び炉の周辺に散在しているものが認められている。敷石には平石を主体に円礫も使用されている。この付近は耕作土が浅いためか、敷石の遺存状態はあまりよくない。炉は、中央に土器が正位に埋設されている石囲埋甕炉である。東辺と南辺には炉石は認められていないが、おそらく本跡廃絶時に抜き取ったものと考えられる。土器を埋設した浅い掘り込みの西辺に安山岩質の炉石を配している。また北辺の炉石は整形を施した軽石を使用している。埋設された土器の周囲にはわずかながら焼土が認められている。主体部の入口部近くには軽石製の石鉢（530）が埋設されているが、これは土器の代わりに軽石製石鉢を用いたものと考えられ、埋甕と同様な働きを有するものと理解できるだろう。ピットは12ヶが検出された。このうちP1～P11は壁柱穴と考えられよう。P12は主体部と張り出し部の連結部にあたる場所であり、また埋甕の代用と理解できる軽石製の石鉢が認められることから、対ピットが連結したものである可能性が高いと思われる。

遺物：本跡に属する土器としては炉内に埋設された土器（14）をあげるのみである。やや小型の深鉢形土器であるが、底部のみが遺存している。おそらく口縁部及び胴部は意図的に割られてから、埋設されたものと考えられる。石器は石鏃1点、打製石斧3点、凹石1点（341）、軽石製品1点（530）が出土している。

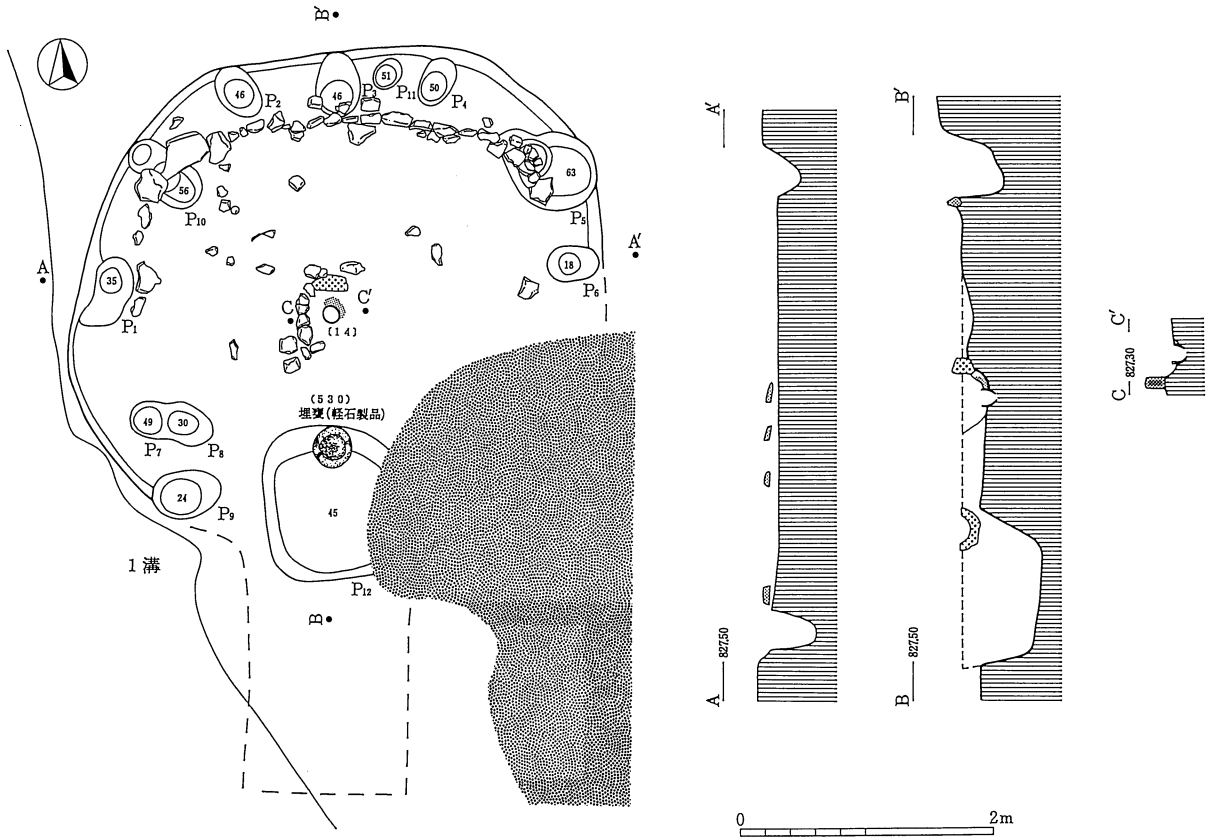
時期：炉内埋設土器から、後期称名寺式に比定できる。

4号竪穴住居跡（遺構：第19図、PL78 遺物：図版81、PL133）

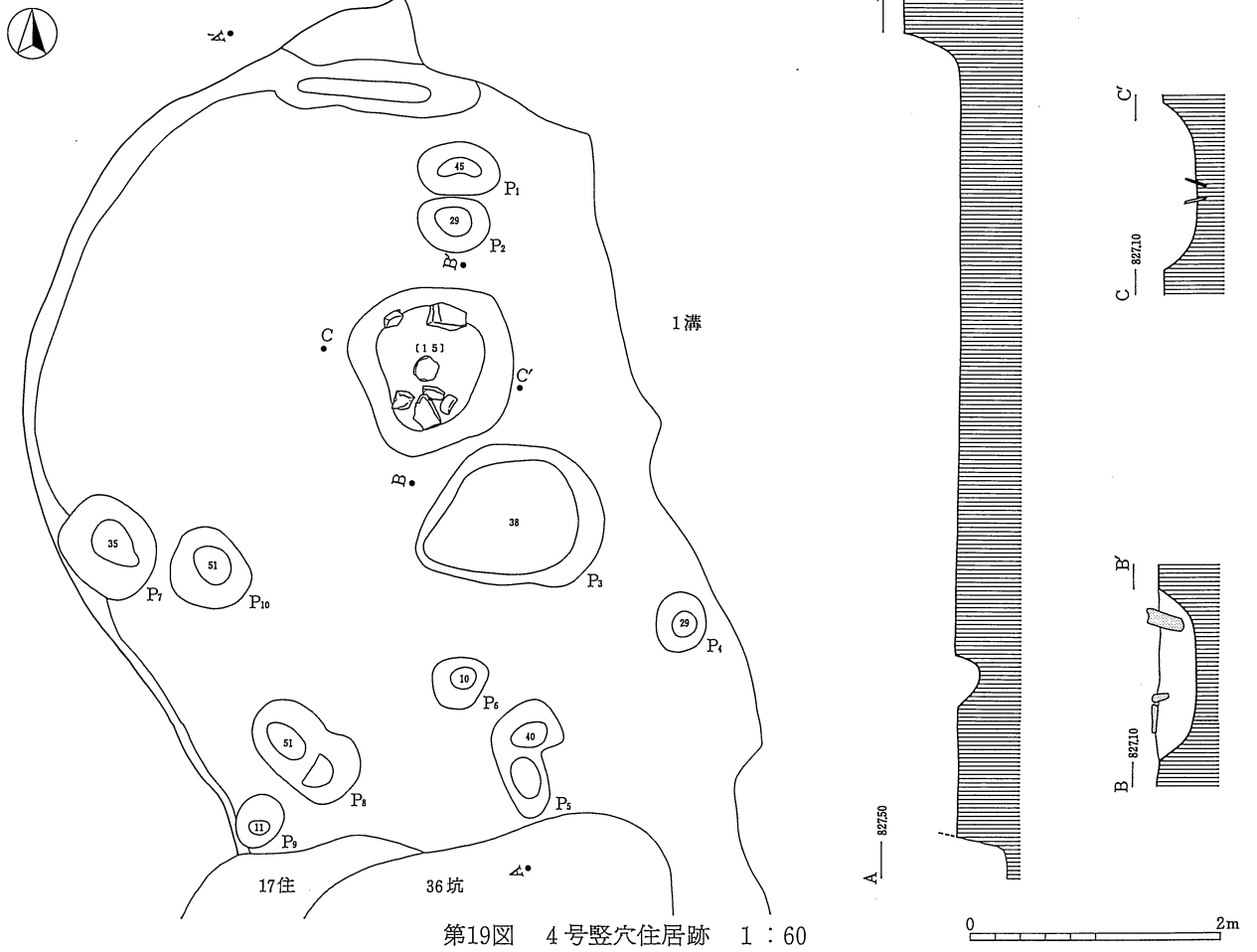
遺構：J-17、J-18グリッドに位置する。17住、36坑、1溝と重複しているが、遺構検出段階で本跡が最も古い遺構であることが理解できた。しかしながら出土土器から判断すれば、17住出土土器よりも本跡出土土器の方が新しい。このように新旧関係は遺構検出時と出土土器との間で矛盾が発生しているが、炉内埋設土器をはじめ完形土器の多い本跡に比べ、17住は破片資料のみであることを踏まえると、報告者はやはり遺構検出時での所見を優先させたいと考えるものである。

さて、東側を1溝に、南側を17住と36坑によって破壊されているため、平面プランは推定の域を出ないが、径8m程度の規模を測り、ほぼ円形を呈する大形の住居跡であると思われる。壁高は北壁付近で約40cm、西壁付近では約10cmが検出された。覆土は暗褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。周溝は北側の一部にみられるだけである。炉は中央やや北寄りに存在している。北辺には炉石が据えられており、周囲には炉石として用いられたと思われる安山岩質の石が散乱している。一方、炉の中央には土器（15）が埋設されていることから、不整な方形の掘り方をもつ石囲埋甕炉であると考えられる。炉の掘り方は深さが約30cmほどであり、住居跡覆土と同じ土が堆積しているが、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。ピットは10ヶを数えるが、このうち柱穴として理解できるのは、P1、P5、P8、P10である。

遺物：土器は5点を図示した（15～19）。15は炉の埋設土器である。底部を欠し、正位で埋設されていた。



第18图 3号竖穴住居跡 1:60



第19图 4号竖穴住居跡 1:60

石器は打製石斧7点(208、215、242)、磨石1点(327)、凹石1点、軽石製品2点(539、564)、剥片石器2点が出土している。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。

5号竪穴住居跡(遺構：第20図、PL78 遺物：図版81)

遺構：J-24、O-4グリッドに位置する。西側を攪乱による破壊を受け、西側は6住と重複している。したがって平面プランははっきりしないが、径約4m程度の規模を測るやや不整な円形を呈するものと考えられる。重複関係は、先行トレンチでの土層観察によって6住よりも古い構築であることが判明した。壁高は約30～40cmほどを測り、覆土はパミスを含む暗褐色土の単層である。また覆土上層には拳大から頭大程度の軽石が多量に検出されている。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや北寄りに存在する。本来は円形の掘り方をもつ石囲炉であったと思われるが、多くは住居廃絶時に抜き取られたらしく、南東辺で安山岩質の炉石が残存しているのみであった。炉の掘り方は30cm程であるが、住居跡覆土と同じ土が堆積している。灰や焼土は認められていない。住居廃絶時に片付けられたようである。炉底も焼けていない。周溝は全くみられない。ピットは5ヶが検出されているが、このうちP1～P4までが柱穴の可能性がある。

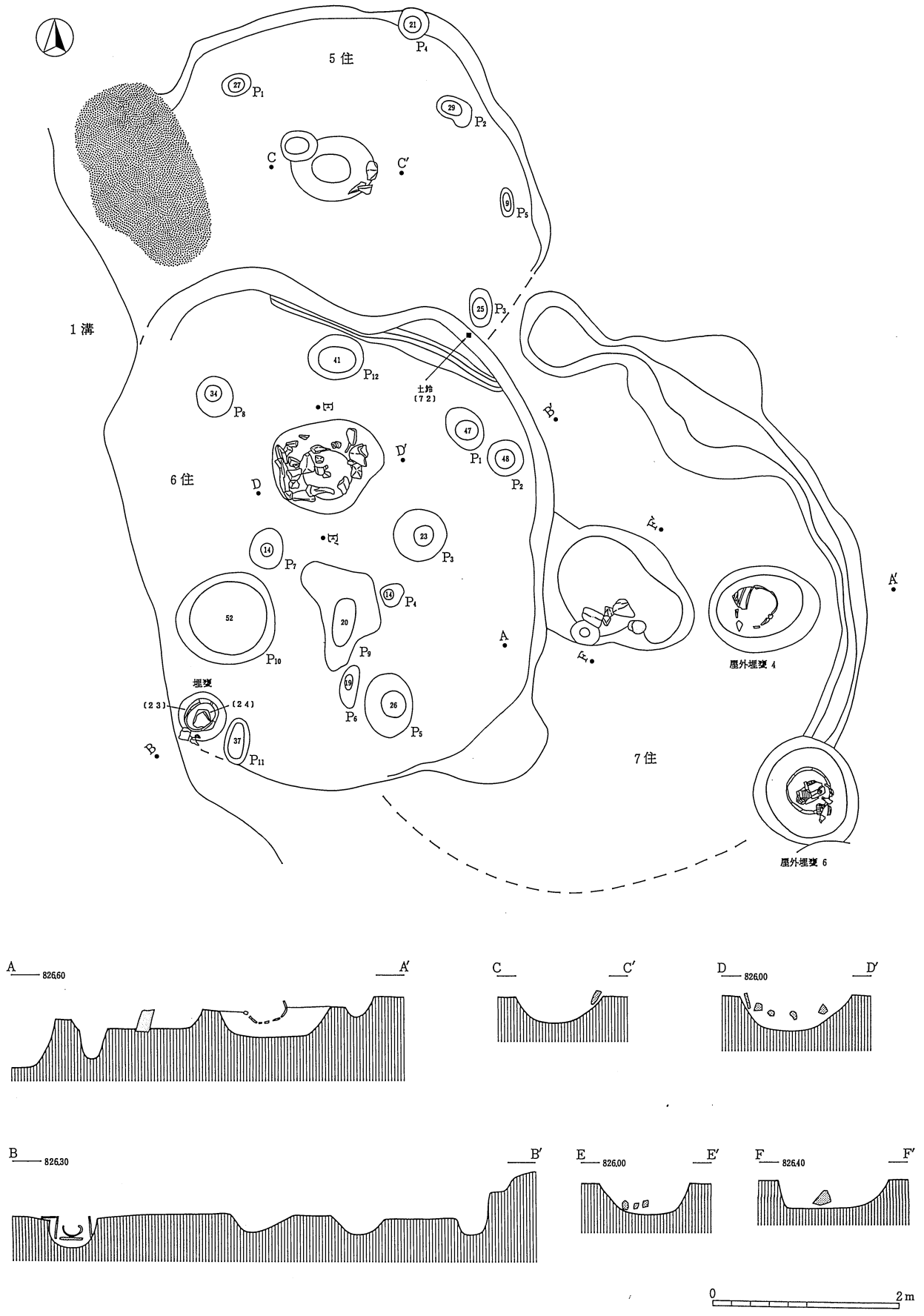
遺物：出土遺物はビニール袋に2つにすぎず、土器はすべて破片資料である。図示したのは20、21、22である。20は浅鉢と思われる。石器は石鏃1点、打製石斧1点(278)、磨石1点(340)、凹石1点(351)、剥片石器1点(287)が出土している。

時期：破片資料だけからの判断だが、中期5～7段階頃に比定できようか。

6号竪穴住居跡(遺構：第20図、PL78 遺物：図版82、PL133)

遺構：O-4グリッドに位置する。5住、7住及び1溝と重複している。トレンチによる土層観察の結果、5住よりも新しく、1溝よりは古い構築であることが判明した。また7住の炉を壊しているため、本跡の方が新しいと判断した。西側部分は1溝によって破壊されているが、平面プランは径約5m程度の不整な円形を呈するものと推定される。壁高は北側で約20cmあるが、南側ではほとんど検出できなかった。覆土は軽石を含む黒褐色土の単層である。拳大から頭大程度の軽石が北側の覆土上層から多量に検出されている。床には硬化面や貼床は認められない。炉は中央やや北寄りにみられる。本来は不整円形の掘り方をもつ石囲炉であったと理解できる。炉内には10～20cm程度の小ぶりの安山岩質の礫が認められている。これらは炉石として用いられたものを住居廃絶時に破碎したと思われる。炉の掘り方は約40cm程の深さを有するが、住居跡覆土と同じ土が堆積している。灰や焼土は認められなかった。炉底は焼けていない。周溝は北側に一部確認されるのみである。南西隅には埋甕(23)が検出されている。位置からみて入口部に埋設されたものと理解できよう。胴部以下を欠いて逆位に埋設されていた。埋甕の下には扁平な安山岩質の石が置かれてあった。ピットは12ヶ認められている。このうちP1、P2、P5、P8、P12は主柱穴と考えられよう。P10は本住居跡には伴わないものかもしれない。擦切磨製石斧(197)が出土しているP11は、出入口部に関係するピットの可能性もある。

遺物：土器は5点を図示した(23～27)。23は埋甕、24は23の内部から検出されたものだが、同一個体ではない。25は口縁部の渦巻き文は6単位、胴部には2条からなる沈線が6単位と1か所のみ蛇行沈線が認められている。27は後期初頭頃の土器の混入か。石器は、打製石斧4点、磨石類2点(333)、敲石1点、磨製石斧2点(182、197)が出土している。197は擦切磨製石斧であり、P11から検出されている。また北東壁下からは土鈴1点(72)が出土している。



第20図 5号・6号・7号竖穴住居跡 1:60

時期：出土した土器から、中期7段階に比定される。

7号竪穴住居跡（遺構：第20図 遺物：図版82）

遺構：O-4、O-5グリッドに位置する。西側部分を6住によって壊されているため、本跡の方が古い構築であると判断した。壁は消失しており、したがって平面プランは推定の域を出ないが、北側から東側にかけて認められる周溝によって、径約6m程度のほぼ円形を呈するものであることが想定できる。周溝の覆土は黒褐色土であった。床には硬化面及び貼床は認められなかった。炉は推定プランに従えば、中央やや北寄りに位置していると思われる。本来は東西に長い楕円形の掘り方をもつ石囲炉であると考えられるが、原位置をとどめている炉石はほとんどなく、その一部と思われる安山岩質の石が炉内に散乱しているのみである。ただし、炉縁と推定できる位置に石棒A類が認められているが、これは原位置をとどめていると理解できる。炉には径5～15cm程の軽石が多量に投げこまれたような状態で覆われていた。炉の掘り方は深さ約30cm程度である。炉内には暗褐色土が堆積していたが、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。炉の東側には屋外埋甕4（971）が認められている。口縁部から底部までほぼ完存する土器を正位で埋設している。この屋外埋甕については、調査の初期段階では本跡に属するものとして理解したが、周辺には屋外埋甕5・6（972、973）がみられ、屋外埋甕群を成していること、また埋設方法や土器の大きさがそれらの屋外埋甕と極めて類似しているため、本跡に属するものではなく、屋外埋甕として理解すべきであると認識した。ピットは検出できなかった。

遺物：出土遺物はビニール袋1つにすぎず、すべて破片資料である。土器は4点（28～31）を図示した。石器も欠損した打製石斧1点と石棒A類1点が出土したにすぎない。

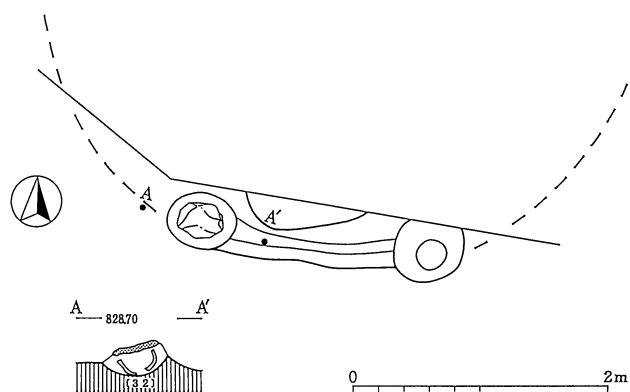
時期：破片資料は、中期中葉から加曽利E II式期頃までの時期のものが混じっている。6住よりも古い構築であるため、中期7段階以前であるとしかたない。

8号竪穴住居跡（遺構：第21図、PL78 遺物：図版82、PL134）

遺構：E-21グリッドに位置する。埋甕と周溝の一部が検出されただけであるが、住居跡と認定した。埋甕は口縁部及び胴部が欠損した土器（32）が、正位で埋設されている。扁平な安山岩質の石を蓋石として使用している。埋甕内は暗黄褐色土の単層である。おそらく出入口部に埋設されたものと思われる。

遺物：検出された遺物は埋甕（32）と打製石斧2点のみである。埋甕は浅鉢形であるが、口縁部を欠している。図示した打製石斧は撥形（279）である。

時期：埋甕から判断すれば、中期7段階に比定できるであろう。



第21図 8号竪穴住居跡 1：60

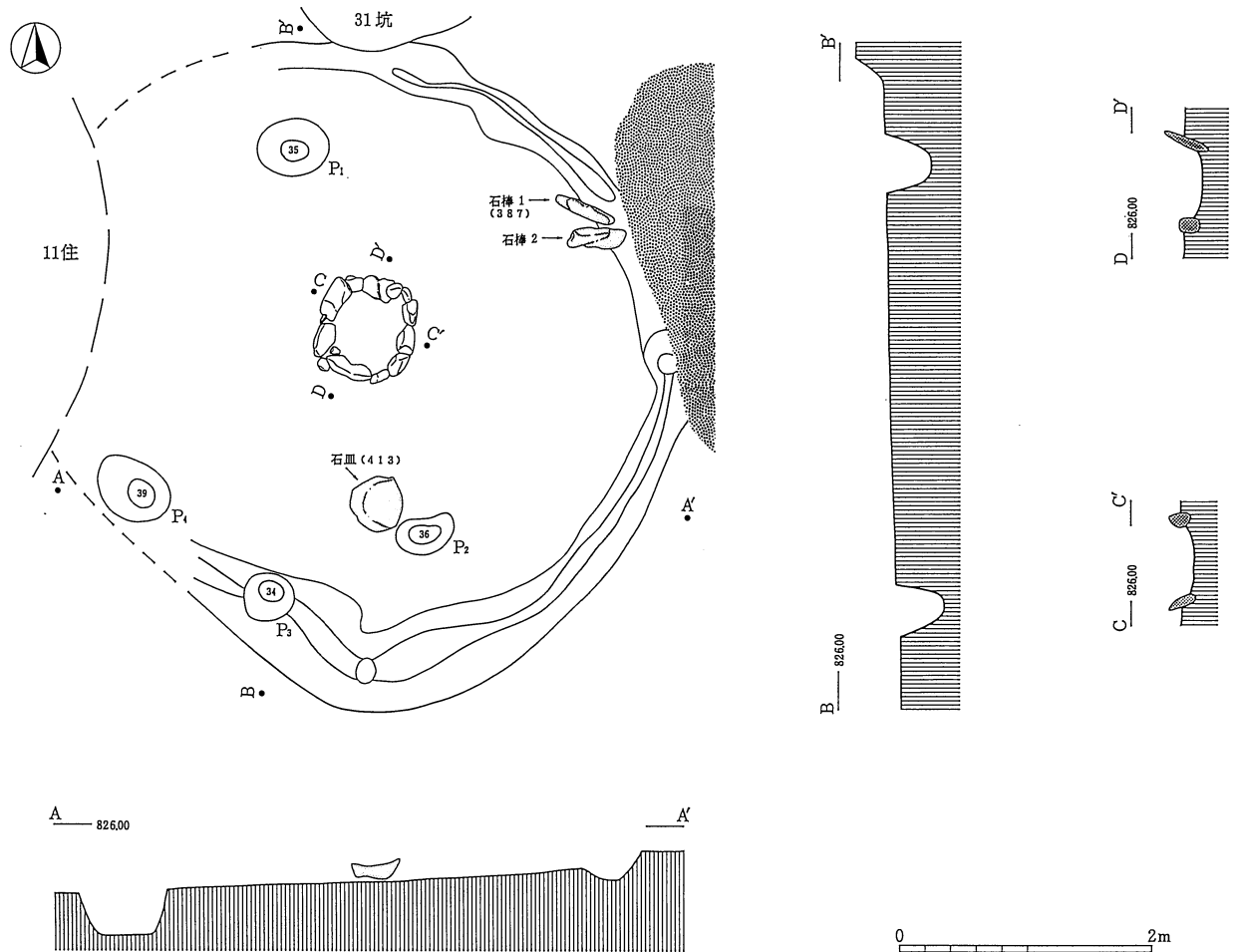
10号竪穴住居跡（遺構：第22図、PL79 遺物：図版83、PL134）

遺構：K-17グリッドに位置する。11住、31坑と重複している。遺構検出段階で31坑の方が新しいと判断した。11住との新旧関係は平面プラン確認の段階ではつかめなかったが、出土土器から判断すれば本跡の

方が新しい。東側の一部を攪乱により破壊され、西側は壁が消失しているため、平面プランははっきりしないが、径約5.5m程度の規模を測り、やや不整な円形を呈するものと推定される。壁高は消失した西側を除くと20cm程を測り、平均している。覆土は暗褐色土が中心であるが、下部には黒褐色土の堆積のみられる部分もある。床には硬化面や貼床は認められない。炉はほぼ中央に存在する。炉には径20~30cm程の軽石が投げこまれたように覆っていた。安山岩質の石を13個用いた方形石囲炉であり、完存している。ごく浅く掘りくぼめた炉内には灰や焼土は認められていない。炉底も焼けていない。周溝は西側を除いて巡っている。炉の南1m程の場所には石皿(413)が床面上に置かれている。炉と近接していることから使用時の関連性を感じさせる。また北東壁下の床面には石棒B類が2点、隣接して検出されている。本来は直立していた可能性が高いと思われる。ピットは4ヶが検出されているが、そのいずれも柱穴として考えられるものである。なかでもP4からはクヌギの炭化物が検出されており、柱痕の可能性が高い。

遺物：土器は3点を図示した(33~35)。33は撚糸文による地文である。石器は石鏃1点、磨石1点、敲石1点、石皿1点(413)、石棒B類2点(387)出土している。石製品は滑石製垂飾1点(4)が検出された。

時期：出土した土器から、中期4段階に比定できる。



第22図 10号竪穴住居跡 1:60

11号竪穴住居跡 (遺構：第23図、PL79 遺物：図版83・84、PL134)

遺構：K-11、K-16グリッドに位置する。本跡は平成4年度に調査したものであるが、用地収用の関係で当年度は限られた部分の調査にとどまった。したがって44住(平成5年度調査)との重複は確認できた

が、重複しない部分のみの調査にとどまった。その新旧関係はつかむことはできなかつたが出土土器から判断すれば本跡の方が古い。また15坑とも重複しているが、遺構検出段階での所見から本跡よりも新しいことが理解できた。このように北西側は44住と重複し、南側は壁が消失しているため、平面プランは明確ではない。周溝などを手掛かりにすると、推定径約7m程度の規模を測る円形を呈するものと考えられる。東側の周溝が二重に巡っていることから、東側に拡張したことが推測できる。壁高は北側の一部で、約30cmが検出されているのみであり、残存している覆土はパミスを含む黒褐色土である。床には硬化面や貼床は認められなかつた。炉は精査したが、掘り込みも焼土も確認できなかつた。周溝は北側から東側にかけて巡っている。東側の一部では先述したように二重に認められている。また、44住の調査において本跡の周溝が検出されている。ピットは28ヶ検出されているが、このうち柱穴としてはP1、P3、P4、P5、P6、P7、P12、P13が該当すると考えられる。特にP1ではクヌギの炭化材が柱状に遺存しているため、柱痕の可能性が高い。

遺物：土器は2点を図示した(36、37)。いずれも床面に横たわった状態で出土している。ともに撚糸を



第23図 11号竪穴住居跡 1:60

地文にしている。石器は打製石斧2点(216)、軽石製品1点(580)が出土している。

時期：出土した土器から、中期2段階に比定できる。

12号竪穴住居跡(遺構：第26図、PL79 遺物：図版84・85、PL135)

遺構：K-22に位置する。16住、20住、1041坑と重複する。遺構検出段階で1041坑よりも古いことは確認できたが、16住・20住との新旧関係はつかめなかった。また壁が消失しているため明確ではないが、15住とも重複すると考えられる。出土土器からすれば15住と20住よりは古いことがわかる。壁は北側から東側にかけて約30cmの深さで検出されているが、南側では消失している。したがって規模は推定であるが、南北径3.4m、東西径約3mを測り、やや南北に長い楕円形を呈すると思われる。覆土は黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。ほぼ中央に円形の掘り方を有する炉跡が検出された。掘り方は約30cmの深さをもつが、石囲炉であるのか、地床炉であるのかは不明である。炉には住居覆土と同じ土が堆積しているが、焼土、灰は認められなかった。炉底も焼けていない。周溝はみられない。ピットは2ヶのみの検出である。P2は柱穴としてはやや大きすぎるきらいがあるが、2ヶとも柱穴として理解したい。

遺物：土器は6点を図示した(38~43)。38は撚糸を地文にもつ。42は焼町土器の範疇に入るだろう。石器は磨石5点(375)、敲石1点、軽石製品1点出土している。

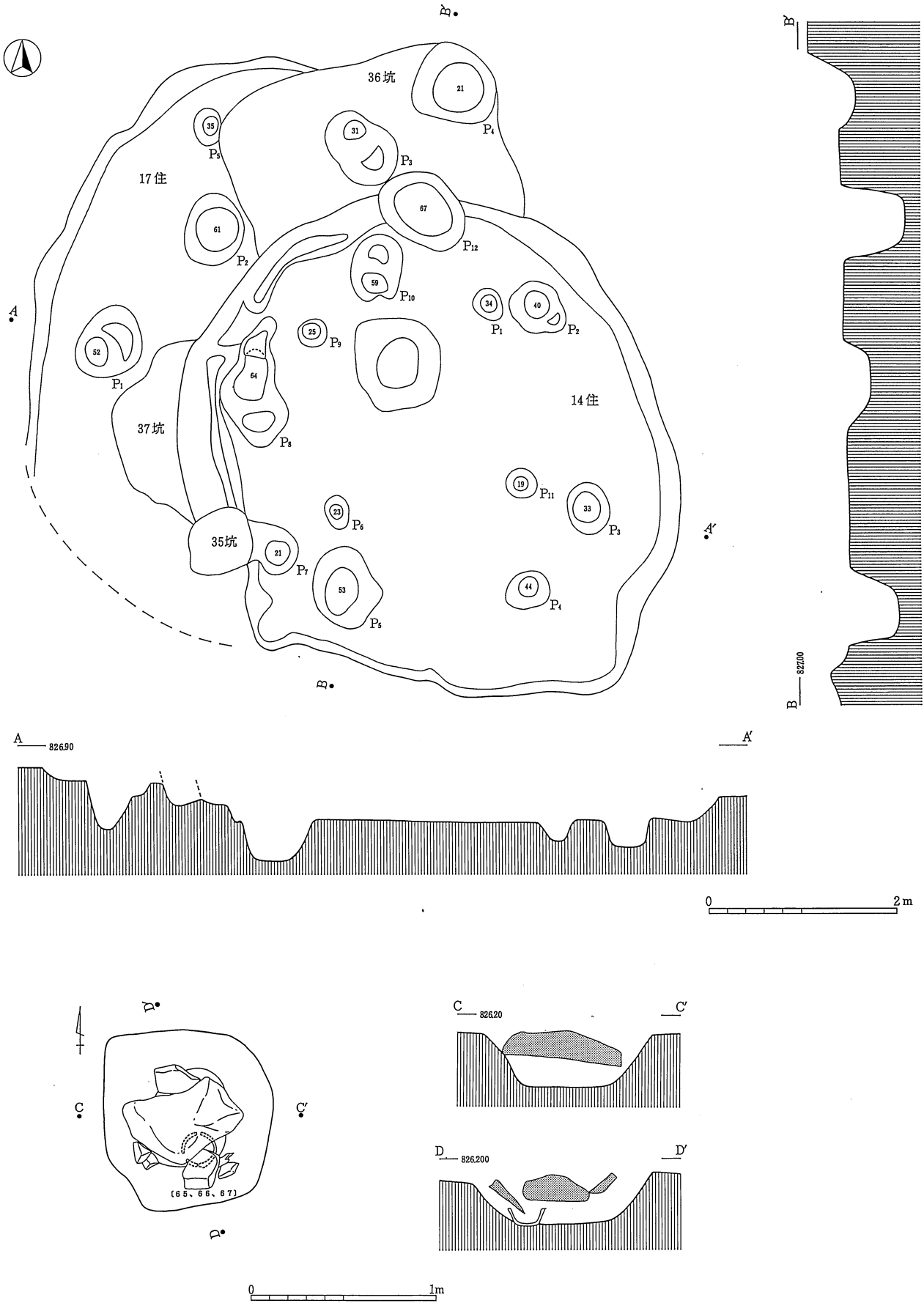
時期：38はやや後出と思われるが、他の土器から中期2段階に比定できよう。

14号竪穴住居跡(遺構：第24・25図、PL80 遺物：図版86~90、PL135~137)

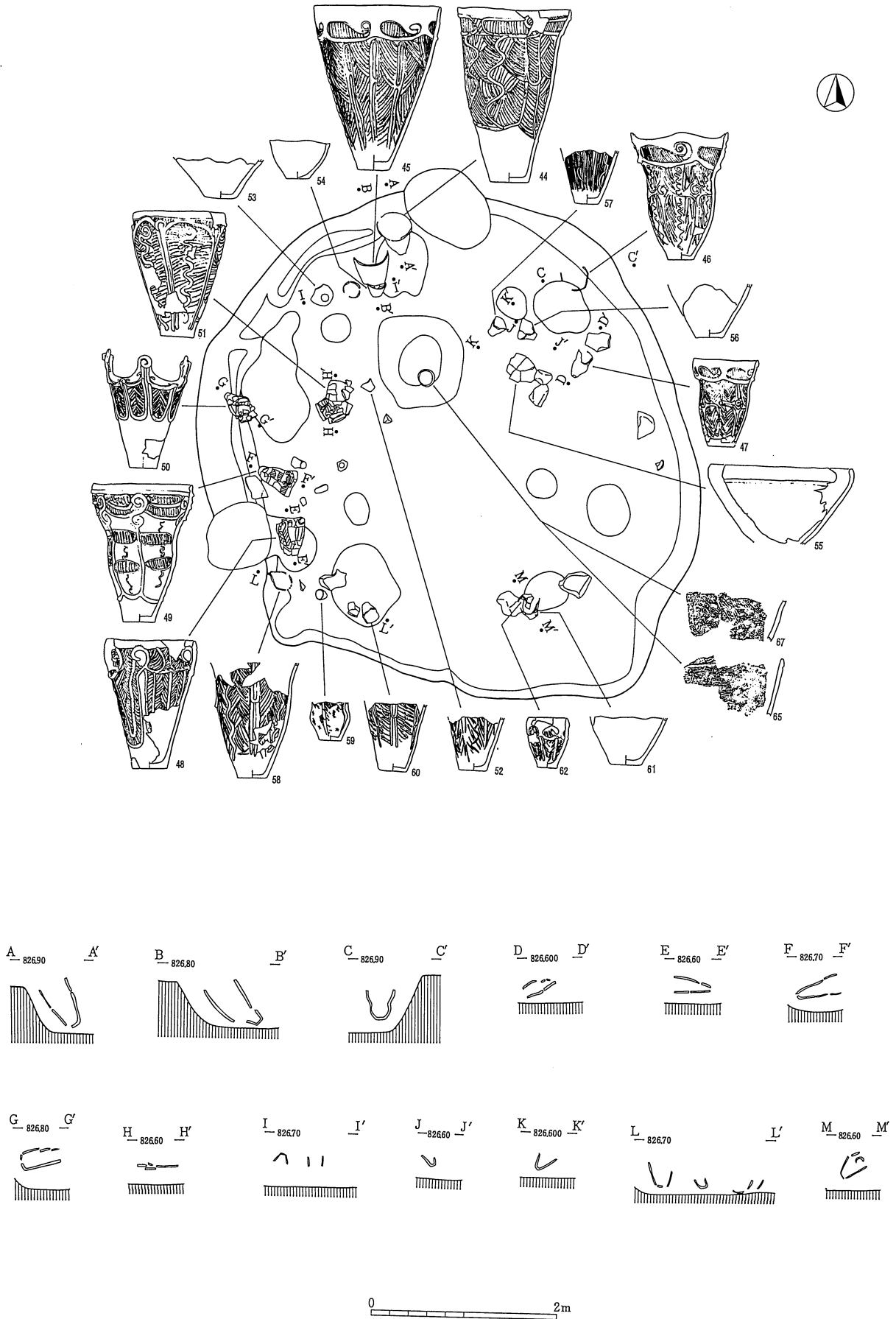
遺構：J-22、J-23グリッドに位置する。17住、35坑、36坑、37坑と重複する。このうち遺構検出段階で35坑が新しく、他はいずれも本跡よりも古いことが判断できた。南北径5.5m、東西径5.2mの規模を測り、不整な円形を呈する。壁高は北壁の約60cmを最大とするが、南方向へ徐々に低くなり、南壁では数cmを測るにすぎない。覆土は暗褐色土の単層であるが、上層には拳大から頭大の軽石が集中している。とりわけ、南側に軽石が多くみられている。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや北寄りに存在している。やや不整の方形の掘り方を有する。炉底には土器(65~67)が埋設しており、その上部を約60×240cm程の扁平な安山岩質の石が覆っている。炉内には他にも数個の安山岩質石が認められているが、これらは炉石の残存と思われ、本来は石囲埋甕炉であったことが理解できる。本跡が廃絶された際に、炉の解体も行われ、炉石を取りはずした後に炉を覆うかのように大形の石を伏せたという行為が想定できるだろう。炉の掘り方は約30cmの深さを有するが、住居覆土と同じ土が堆積しており、灰や焼土は全く認められなかった。炉底も焼けていない。周溝は西側の一部にみられるだけである。ピットは12ヶが検出されているが、このうちP1、P2、P3、P4、P5、P8、P10、P12が柱穴として考えられる。

遺物：遺物の出土量は極めて多い。図示した土器は24点(44~67)に及ぶ。このうち44~64には床面より数cm程浮いた所で出土しているものが多く、住居埋没途中のある段階で一括して投棄されたものと考えられる。63・64は50の下部から出土している。51は口縁部下に沈線をもつ。54は口縁部がゆがむ。55は口縁部下にごく浅い指頭状の沈線を施す。57は櫛歯状工具による施文、59は無節縄文を施す。65~67は炉内に埋設されてあった土器である。これら3点は同一個体ではなく、3個体の土器片を組み合わせて炉内に埋め込んでいることがわかる。石器は石鏃1点(18)、欠損した打製石斧16点、石匙1点(114)、凹石1点(359)、剥片石器1点(288)が出土している。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。



第24図 14号・17号竪穴住居跡 1:60

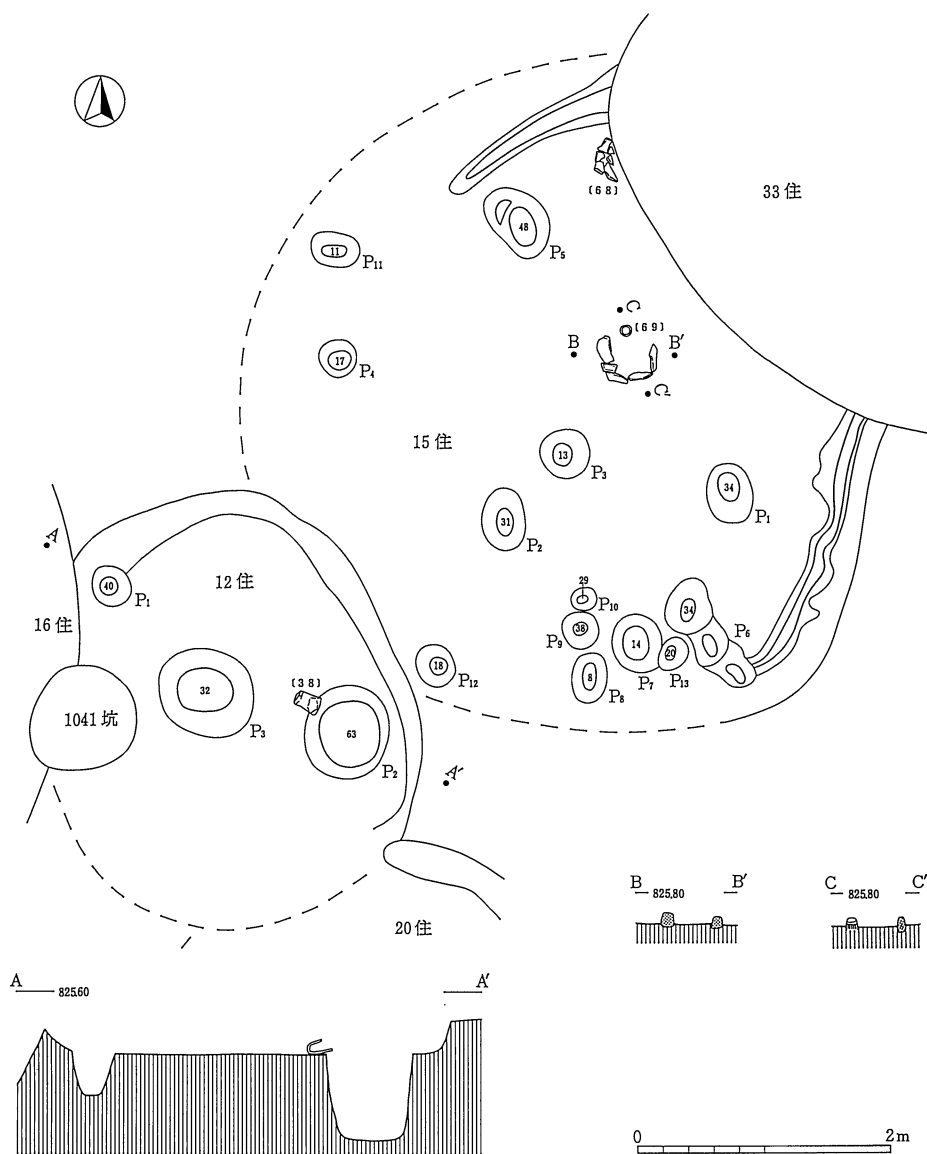


第25図 14号竪穴住居跡遺物出土状況 1:60

15号竪穴住居跡（遺構：第26図、PL81 遺物：図版91、PL138）

遺構：K-17、K-22、K-23グリッドに位置する。33住と重複するが、調査行程の関係で新旧関係をつかむ前に33住を先に調査せざるをえなかった。出土遺物から判断すると本跡の方が古い（33住の項を参照）。また12住とも重複し、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかったが、出土遺物から判断すると本跡の方が新しい。壁は東側の一部で約10cmの壁高を測る以外は、消失しており、周溝およびピットの位置から平面プランを推定するしかないが、径約5.2m程度の規模を測り、ほぼ円形を呈するものと思われる。覆土はごくわずかししか残存していないが、パミスを含む黒褐色土である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は推定プランのほぼ中央に確認されている。炉石は北辺のものが抜き取られているが、炉内には土器（69）が埋設されており、安山岩質の石を用いた方形石囲埋甕炉であることがわかる。周溝は北側と東側の一部にみられている。ピットは13ヶが検出されている。このうち柱穴の可能性のあるものとしてはP1、P5、P6、P9があげられる。

遺物：土器は2点（68、69）を図示した。68は床面から5cm程浮いた状態で出土している。胴部は欠しているが、地文には撚糸が施される。69は炉体土器である。石器は磨石1点、剥片石器1点、軽石製品1点



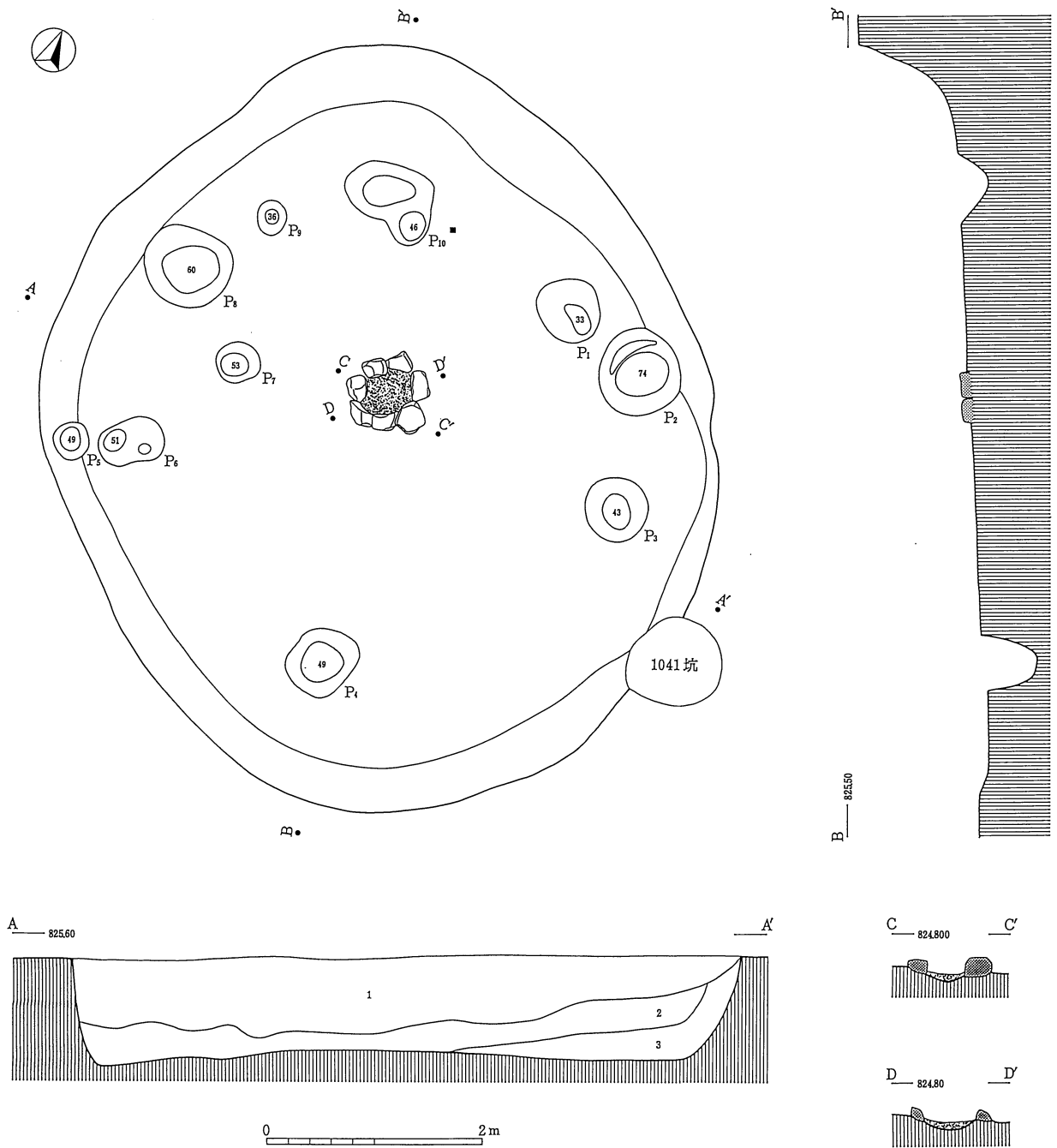
第26図 12号・15号竪穴住居跡 1 : 60

(589) が出土している。

時期：出土した土器から、中期3段階に比定できる。

16号竪穴住居跡（遺構：第27図、PL81 遺物：図版91～94、PL138・139）

遺構：K-16、K-17、K-21、K-22グリッドに位置する。本住居跡は用地収容の関係で平成4年度と5年度の2ヶ年に分けて調査を行った。4年度の調査によって12住と重複することがわかったが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。6年度の調査で116住との重複が確認され、重複部分の土層観察の結果、116住よりは新しい所産であることが判断できた。長径7.12m、短径6.2mの規模を測り、南北方向に長い楕円形を呈する。壁高は平均約1mの深さを測る。覆土は3層に分けられる。1層が黒褐色土で



第27図 16号竪穴住居跡 1 : 60

径15～70cm程度の軽石礫を多量に含んでいる。投棄されたものと考えられる。2層はパミスをわずかに含む暗褐色土、3層はパミスを多く含む黒褐色土である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉はほぼ中央に確認された。7個の安山岩質石を用いた石囲炉であり、完存している。炉内では数cm程の灰が堆積している。炉底は焼けていない。周溝はみられない。ピットは10ヶ検出されているが、このうちP2、P3、P4、P6、P8、P10が柱穴と考えられる。

遺物：土器は12点（70～81）を図示した。70は床面より20cm程、75は50～60cm程それぞれ浮いた状態で出土している。70は焼町土器的だが北陸の流れを有するものであろうか。77は覆土最上層から出土し、4単位からなる渦巻突起文を有するが2単位しか残存してはいない。また表面には赤色塗彩も認められたため、X線回析分析法を行った結果、使用された赤色顔料はベンガラであることが判明した。79は部分的な資料から復元実測したものである。80は破片資料であるが有孔鏝付土器であろう。石器は石鏃1点、石鏃未製品3点、打製石斧12点、石錐未製品1点、石匙1点（115）、磨製石斧1点（174）、磨石5点（322）、凹石1点（342）、敲石3点、剥片石器1点、多孔石3点（442）、台石2点、石皿1点（414）、砥石1点（656）が出土している。また土製品としては、耳栓（75）が1層より出土し、他には土偶（35）が認められる。

時期：出土した土器から、中期2段階に比定できる。

17号竪穴住居跡（遺構：第24図、PL81 遺物：図版95）

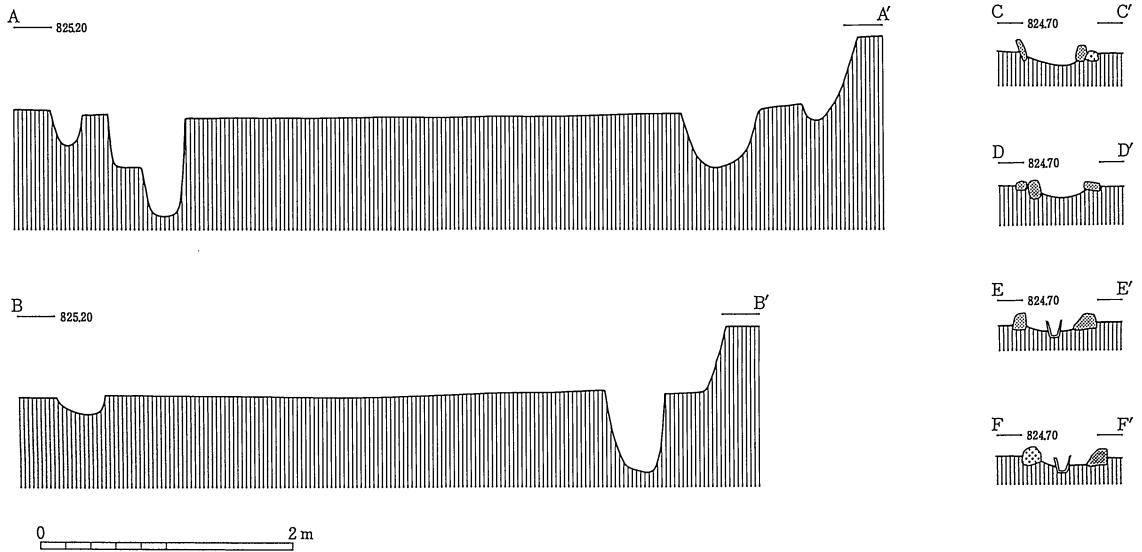
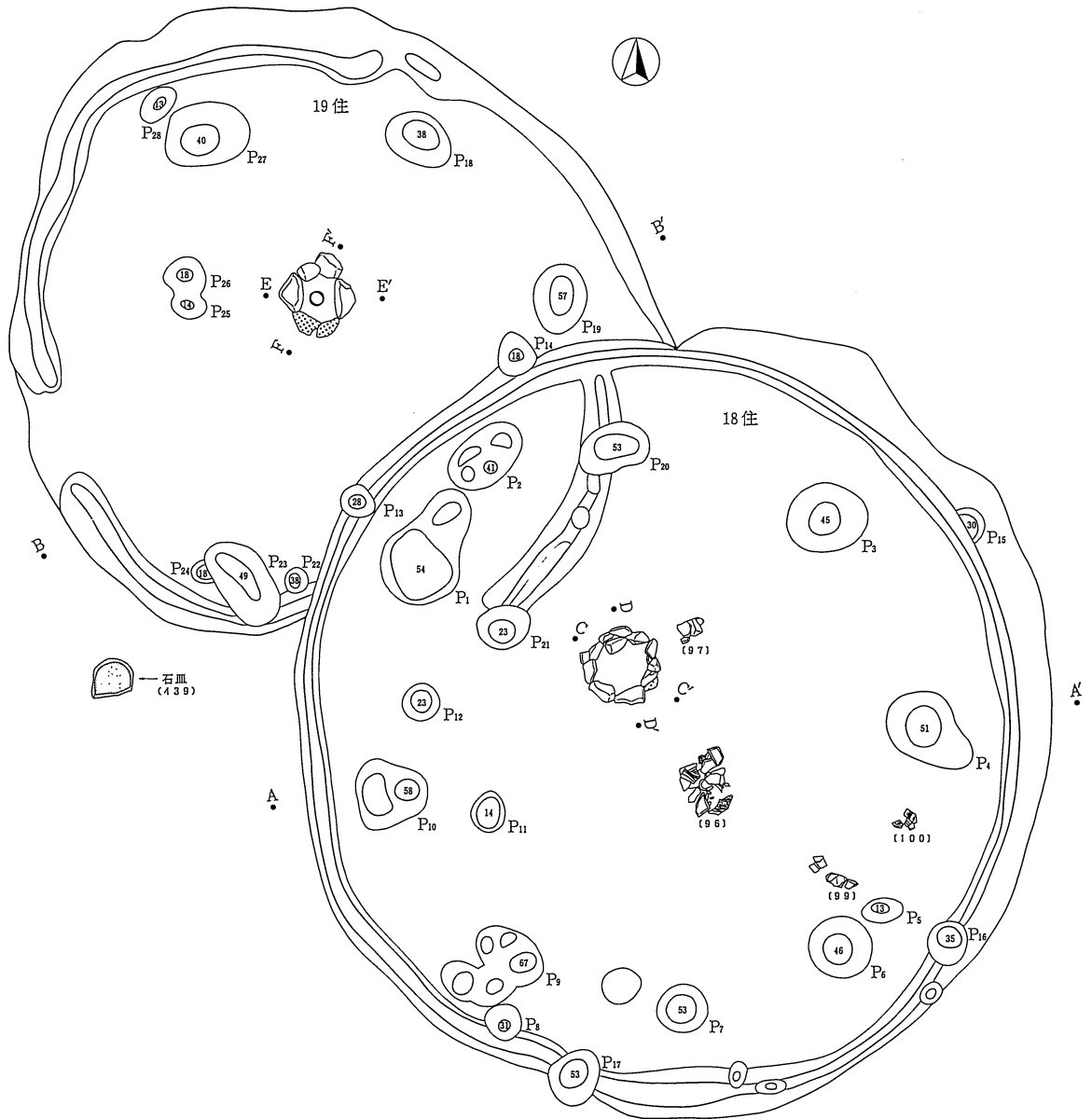
遺構：J-22、J-23グリッドに位置する。14住、36坑、37坑と重複するが、遺構検出段階で本跡が最も古いことが理解できた。また4住とも重複するが、4住の項でも述べたように遺構検出段階の所見と出土土器の間で齟齬があるものの、ここでは本跡の方が新しいと判断する。東側を14住によって壊されているため、残存部分は少ないが、平面プランは径6.5m程度の規模を測る円形を呈するものと推定される。壁高は北壁付近では最大で約20cmの深さを測るが、南側では消失している。覆土は黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は確認できなかった。14住によって壊された可能性が高い。周溝はみられなかった。ピットは5ヶ検出されている。このうちP1～P4が柱穴の可能性があると考えられる。P3とP4は36坑を床面まで掘り下げた段階で検出されたものであるため、36坑のものとは考えられず、したがって本跡に付属するピットとして理解した。

遺物：遺物はビニール袋1つにすぎなかった。土器はすべて破片資料であり、3点（82～84）を図示した。石器は打製石斧1点（217）、敲石1点のみの出土であった。

時期：遺構検出段階での所見を踏まえて、中期7段階としておきたい。

18号竪穴住居跡（遺構：第28図、PL82 遺物：図版96・97、PL140）

遺構：P-3、P-4、P-8、P-9に位置する。本跡は用地収容の関係上、平成4年度に北半分を、6年度に残りの南半分を調査することになった。そのため、19住、21住と重複していることは4年度の調査において判明していたが、遺構検出段階では19住との新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば本跡の方が古い。21住とは本跡の方が新しい所産であることが土層観察によって判断できた。規模は長径6.68m、短径6.4mを測り、ほぼ円形を呈している。壁高は北壁付近で約60cmの深さを有するが、南壁付近では数cmほどが認められたにすぎない。覆土は黒褐色土の単層である。また床面から20cm程浮いた覆土には径15～50cm程度の軽石が、炉の北寄り部分を中心に集中してみられた。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや北寄りに存在している。13個の安山岩質石と1個の軽石を用いた石囲炉である。炉石は完存している。炉の掘り方は約10cm程で住居覆土と同じ土が堆積している。炉底は焼けていな



第28図 18号・19号竪穴住居跡 1 : 60

い。周溝は全周している。溝は最大で28cmという深い掘り込みをもっている。ピットは17ヶが検出された。このうちP1、P2、P3、P4、P6、P7、P9、P10が柱穴に該当するだろう。

遺物：土器は5点（96～100）を図示した。いずれも覆土からの出土であり、96は床面より約20cm、97は約30cm、99は約40cm、100は約40cm、それぞれ浮いた状態であった。96は胴部に楕円形文の貼付が認められる。97の胴部には縄文が施されている。石器は打製石斧8点（218、219）、石匙1点（117）、磨石3点（360）、凹石1点（334）、敲石4点（379）、石皿1点（415）、石鏃2点（19）、石鏃未製品4点（85）が出土している。土製品としては土偶3点（16、21、36）が出土している。26は焼町土器の文様をもつものである。

時期：出土した土器から中期1段階に比定できようか。99、100は焼町土器、96は見かけない土器である。

19号竪穴住居跡（遺構：第28図、PL82 遺物：図版97、PL140）

遺構：P-3グリッドに位置する。18住と同様に平成4年度と6年度にまたがって調査せざるをえなかった。18住と重複するが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば本跡の方が新しい。また238坑とも重複するが遺構検出段階で本跡の方が新しいことが理解できた。平面プランは18住と重複している部分のはっきりしないが、周溝等から判断すると、南北方向5.4m、東西方向5.55mの規模を測り、やや不整な円形を呈するものと考えられる。壁高は北壁付近で最大57cmの深さを測る。覆土は黒褐色土の単層であり、拳大程度の軽石が多く含まれている。床には硬化面や貼床は認められなかった。ほぼ中央に炉が存在している。2個の軽石と4個の安山岩質石を用いた石囲埋甕炉である。炉石は完存している。炉内は10cm程度を掘りくぼめてあり、住居覆土と同じ土が堆積していた。灰や焼土は認められず、炉底も焼けていなかった。炉体土器（101）は口縁部から胴部中位までを欠したものを正位に埋設してあった。周溝は北東側と南東側、西側一部を除いて巡っている。ピットは11ヶが検出された。このうちP1、P2、P3、P4、P6、P10が柱穴として考えられよう。

遺物：土器は3点（101～103）を図示した。101は炉体土器である。103は浅鉢。石器は打製石斧7点（280）、凹石1点（367）、敲石2点（370・376）、石鏃1点（20）が出土している。また本住居跡の南脇のⅢ層上面上に石皿（439）が認められている。位置的に本住居跡と何らかの関係がある可能性もあるだろう。

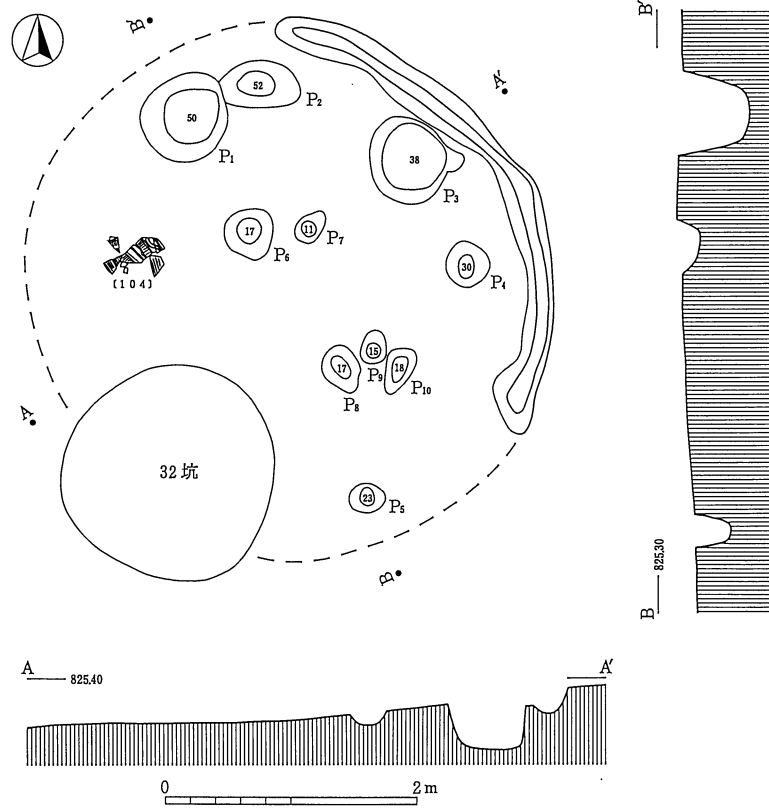
時期：102は曾利Ⅰ式期であるが、炉体土器である101をもって本跡の時期決定としたいため、2段階に比定したい。

20号竪穴住居跡（遺構：第29図 遺物：図版98、PL140）

遺構：K-22グリッドに位置する。32坑、12住と重複するが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかったが出土土器からすれば本跡の方が新しい。遺構検出段階ではすでに壁はすべて消失しており、北東部分に認められる周溝の存在によって住居跡であると判断した。したがって平面プランは推定の域をでないが、径4m程度の円形を呈するものと考えられる。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は精査したが検出できなかった。ピットは10ヶが検出されたが、このうちP1、P2、P3が柱穴の可能性が高い。

遺物：図示できた土器は1点（104）のみである。これは床面からの出土であり、18住出土破片とも接合したが、主体は本住居跡である。口縁部は2本隆帯でS字文を形成する。胴部の地文は撚糸文であり、蛇体文が認められる。石器は出土していない。

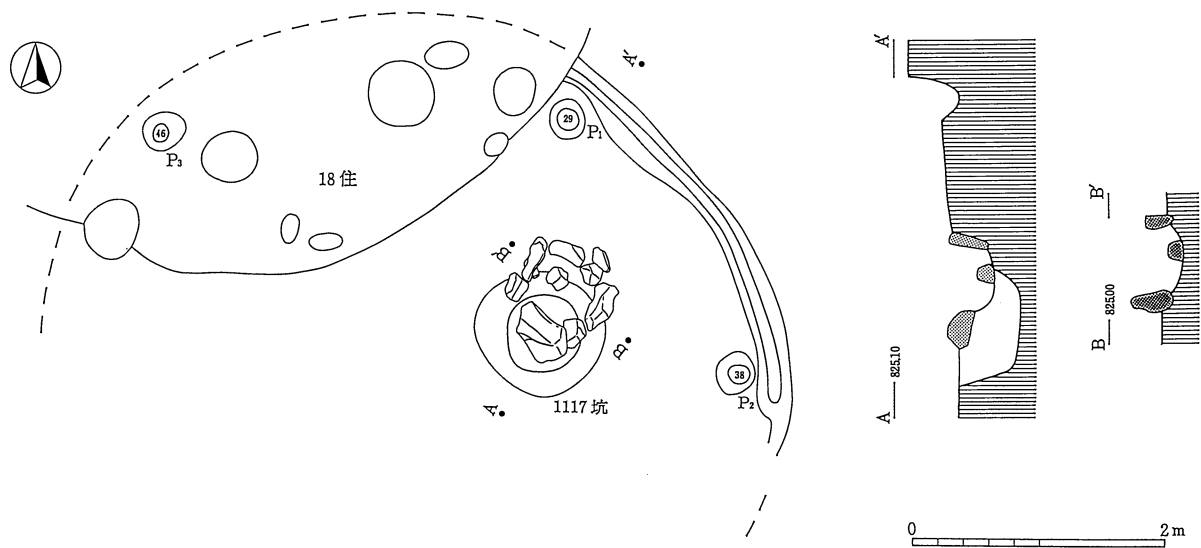
時期：104から判断するに中期3段階に比定できよう。



第29図 20号竖穴住居跡 1 : 60

21号竖穴住居跡 (遺構：第30図、PL82 遺物：図版95)

遺構：P-9グリッドに位置する。本跡も平成4年度と6年度の2ヶ年にかけて調査を行った。4年度の調査で18住との重複が確認されたが、遺構検出段階で本跡の方が古いと判断した。また6年度の調査では、壁が消失していたが、83住と重複していると考えられた。また炉の部分で1117坑とも重複しているが、これは遺構検出段階では本跡の方が新しいことが理解できた。北東部分以外は壁が消失していたため、平面プランは推定の域を出ないが、径6 m程度の円形を呈するものと思われる。壁高は北壁付近で最



第30図 21号竖穴住居跡 1 : 60

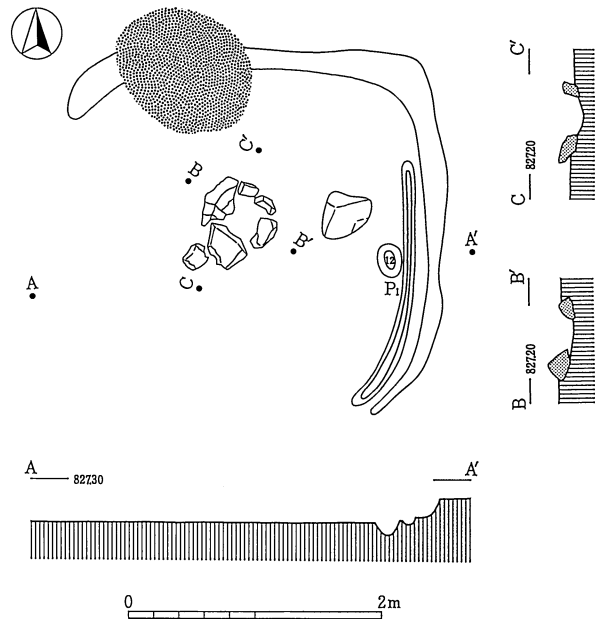
大27cmを測るが、多くは壁が消失している。覆土は黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は推定プランの中央より北寄りに存在している。やや大型の安山岩質石を用いた方形の石囲炉である。炉内にも安山岩質石が1個認められるが、これは本来は南西縁にあったものが転落したと考えられる。炉内は15cm程掘りくぼめてあるが、住居覆土と同じ土が堆積していた。灰や焼土は認められず、炉底も焼けていなかった。周溝は壁が残存していた北東部分にのみみられている。ピットは3ヶ検出されたが、いずれも柱穴と理解できるものである。南側部分では検出できなかった。

遺物：遺物はビニール袋2つにすぎない。図示した土器は破片資料のみで6点（85～90）である。石器は打製石斧欠損品1点と炉内から出土した凹石1点（352）だけである。土製品としては土偶1点（38）が出土している。

時期：出土土器から中期1段階頃に比定できようか。

22号竪穴住居跡（遺構：第31図、PL82 遺物：図版95）

遺構：J-25、O-5グリッドに位置する。西側から南西部分の壁は消失しているため、平面プランははっきりしないが、短径が約3.5m程度の楕円形を呈するものと推定される。この場合は長径は4.5m程度になるものと思われる。壁高は最大で32cmを測るが、消失している部分も多い。覆土は黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。ほぼ中央に炉が確認されている。安山岩質石を用いた石囲炉であり、住居跡の規模に比べると大型な炉である。南側にやや離れてみられる石も本来は炉石であると考えられる。炉内は10cm程掘りくぼめてあるが、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。周溝は東側に一部認められるだけである。ピットは1ヶのみが検出された。



第31図 22号竪穴住居跡 1：60

遺物：遺物はビニール袋1つにすぎない。土器はすべて破片資料である。3点（91～93）を図示した。石器は石皿1点（418）のみであり、裏面に小穴を有している。土製品としては土鈴1点（73）が出土している。位置は不明であるが、床面からの出土である。

時期：出土した土器から、中期6段階に比定できる。

23号竪穴住居跡（遺構：第32図 遺物：図版95）

遺構：O-5、K-1グリッドに位置する。25住、38坑と重複するが、遺構検出段階でそのいずれよりも新しい所産であると判断できた。北半分は調査区域外であったため、完掘はできなかったが、径6.5m程度の円形を呈するものと考えられる。壁高は浅く、9～35cmの深さである。覆土はパミスをわずかに含む黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉、周溝は確認できなかった。ピットは8ヶが検出されたが、このうちP1、P4、P5が支柱穴として考えられる。

遺物：図示した土器は2点（94、95）であり、94は床面より5cm程浮いて出土している。底部近くまで沈線が施されている。石器は敲石1点のみである。

時期：破片資料のため確定できないが中期5～7段階頃であろうか。

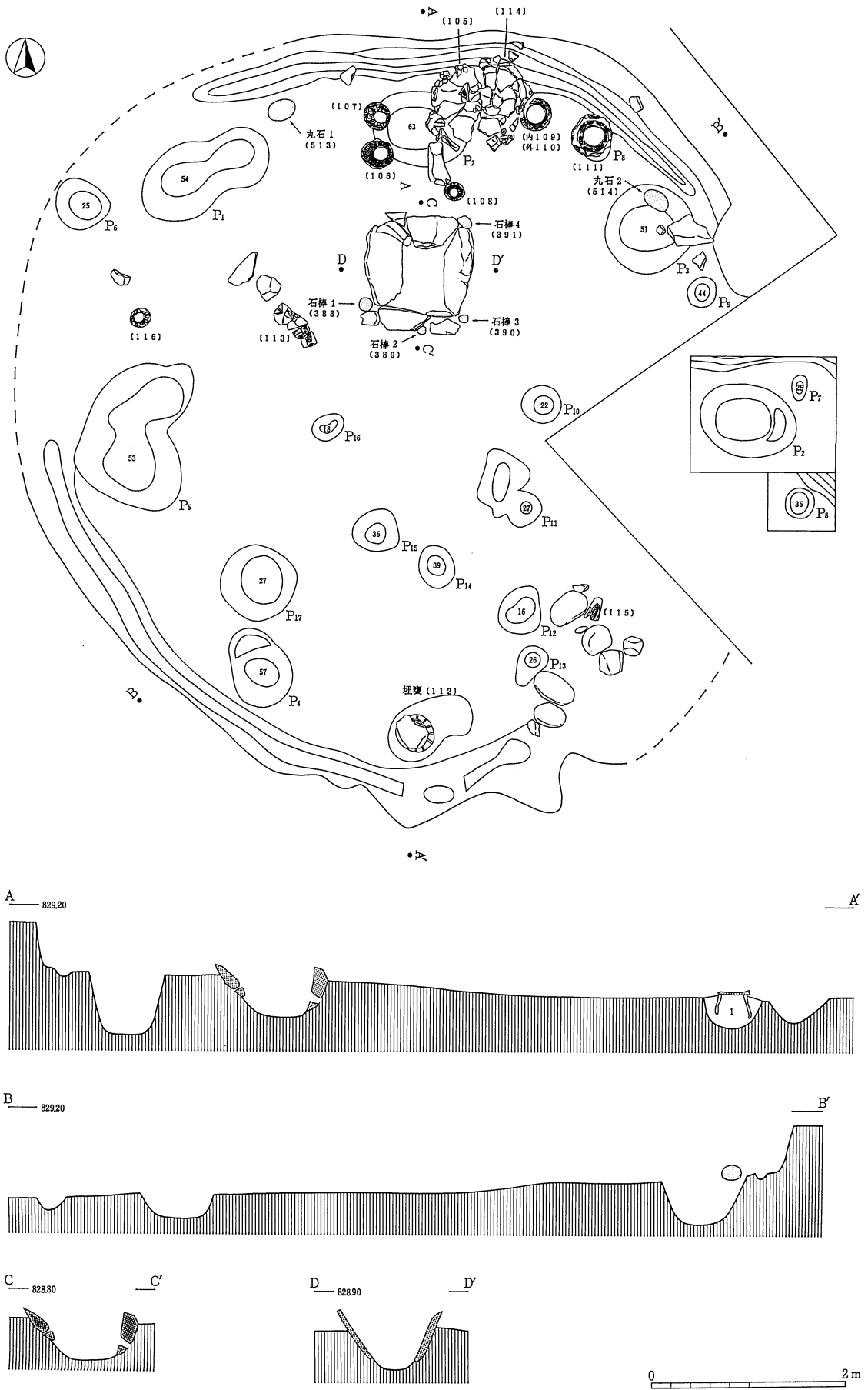
24号竪穴住居跡（遺構：第33図、PL83 遺物：図版98～101、PL141～143）

遺構：J-7グリッドに位置する。本跡は平成4年度に調査を実施したが、調査区域際で炉石の一部と石棒が確認された。当年度はこの段階で調査を終えたが、せめて炉の完掘だけでも行おうと考え、5年度に地主の承諾を得て、調査区を拡張し、炉の完掘を試みた。炉の調査を進めていくうちに、炉の奥壁側に底部を欠した土器が伏せて置かれてあることに気付き、調査面積をひろげていくと、最終的には6個の伏甕と大形な浅鉢が姿を現した。調査日程及び諸般の事情により完掘はできなかったものの、当初に予想した以上の成果を得ることができた。

本跡は先述したように完掘していないが、残存する壁及び周溝から推定すれば、径8m程の規模を測り、ほぼ円形のプランを呈するものと考えられる。この付近は耕作土が浅いため、壁は一部を除いて消失している。残存する壁高は北壁で最大47cmを測り、南壁では4cmにすぎない。わずかに残る覆土は暗褐色土である。床には硬化面や貼床は認められない。炉は中央から北寄りに存在している。扁平な安山岩質石を4辺に配し、その隙間をやや小ぶりの石で埋めるように組んでいる。大形な方形石囲炉である。石棒A類1点(388)が南西隅に樹立しており、南東隅と北東隅及び南辺の中央に計3個の石棒B類(389～391)が認められている。北西隅には石棒はみられなかった。炉の掘り方は約45cmの深さを測るが、住居覆土と同じ土が堆積しており、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。炉の北側にあたる奥壁部には丸石が左右に1個ずつ(513、514)置かれ、その内側には最大径約80cm、容量約90ℓを有する大形浅鉢(105)を中心として、これを囲むかのような状態で底部を切断された6個の土器(106～111)が逆位で伏せられていた。このような出土状態から、住居廃絶直前もしくは住居廃絶時には本跡において何らかの祭祀行為が行われていたことがうかがえる。奥壁部には特別な施設等は見られなかったが、奥壁部のうち約4m離れた2つの丸石(513・514)によって囲まれた部分は一種の祭壇的性格を有していると考えられるだろう。また本跡は遺跡内で最大の規模を測り、石囲炉の炉縁には計4個の石棒類を樹立するなど他の住居跡とはかなり様相を異にしている。祭祀を執り行うための専用住居、もしくは集落において祭祀の中心的役割を果たす人物の住居であった可能性も十分考えられるだろう。南壁下に石蓋を伴った埋甕が存在している。パミスをわずかに含む黒褐色土の掘り方埋土をもち、底部を欠した土器(112)が口縁部を下にした逆位に埋設されていた。扁平な安山岩質の石を蓋として埋甕の上に置かれている。周溝は北壁付近と南西部にみられている。ピットは16ヶが検出されているが、このうちP1、P2、P3、P4、P5が柱穴に該当すると考えられる。

遺物：土器は17点を図示した(105～121)。106～111の6個体はすべて胴部以下を欠しており、床面に逆位で伏せられていたものであり、石囲炉の北側、奥壁部に105の大形鉢を取り囲むように配置されていた。109と110は入れ子状に二重になっており、109が内側になっている。105は口縁部を欠しているが割れ口を研磨し、擬似口縁を形成している。これらの7個体は本跡廃絶段階の良好な一括土器として理解できる。また112は埋甕である。113は床面より20cm程浮いている。114は奥壁部の壁に接して出土し、床面より20cm程浮いている。115は床面より5cm程、また116は20cm程浮いての出土である。106は5単位の波状口縁を有する。110の隆帯は粗雑な粘土紐の貼付。111は6単位の波状口縁を有する。118は無節縄文。121は埼玉県北部地域に多くみられる大形甕形土器である。石器は石鏃1点、石鏃未製品3点、磨石1点、磨製石斧1点、石棒4点(388～391)、丸石2点(513、514)が出土している。土製品としては土偶1点(39)が出土している。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。



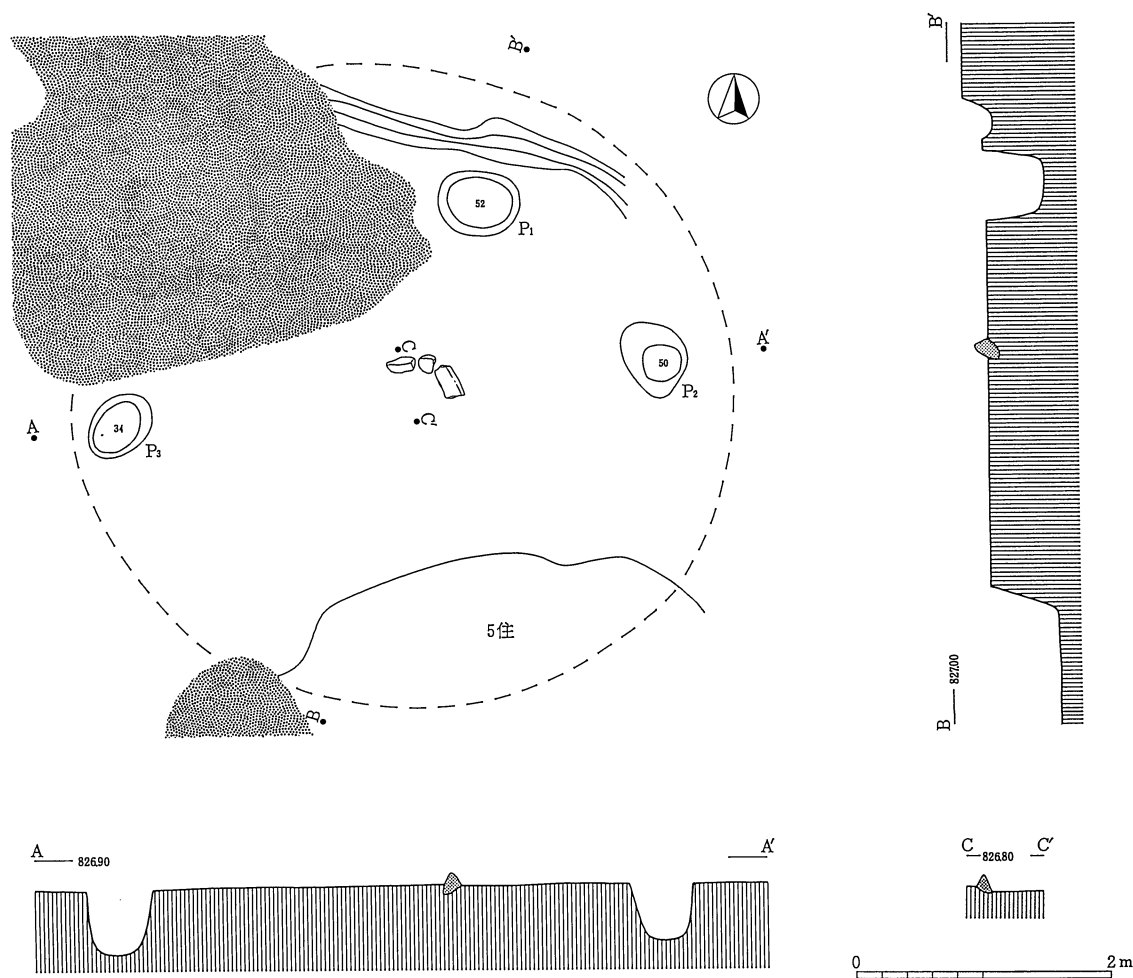
第33图 24号竖穴住居跡 1:60

25号竪穴住居跡（遺構：第32図、PL84 遺物：図版102～104、PL143）

遺構：K-6、O-10グリッドに位置する。23住と重複するが、遺構検出段階で本跡の方が古い所産であることが理解できた。また37住とは出土土器から本跡の方が古いことが理解される。西側を23住に壊され、北側は調査区域外であるため、住居跡の4分の1程度の調査にとどまったが、推定で約7.6m程度の円形を呈するものと考えられる。壁高は浅く、最大で18cmである。覆土はパミスを含む黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。推定プランの中央やや南寄りに炉が存在している。7個の安山岩質石を用いた石囲炉であり、完存している。炉内は10cm程度掘りくぼめてあるが、住居覆土と同じ土が堆積しており、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。周溝はみられなかった。ピットは15ヶ検出されたが、柱穴は明確でない。

遺物：P14の北側の調査区域際から多量の土器片が集中して出土した。可能な限り調査区域をひろげた結果、土器集中区のひろがりをほぼつかむことができた。これらは土器片が床面から覆土上層まで積み重なるように認められ、一括して廃棄されたものと考えられる。図示した9点（122～130）は、その土器集中地点からの出土である。興味深いことにはほぼ完形に接合・復元できたのは122のみであり、他の8点はすべて破片資料で、最大でも4分の1程度の残存割合にとどまっている。122の地文は撚糸である。124は無節縄文を地文にもつ。石器は打製石斧17点（237）、磨石2点（323）、凹石1点、敲石2点（373）、軽石製品1点（553）、剥片石器1点が出土している。土製品は土偶1点（42）が出土している。

時期：126・127は曾利I式期であり、中期3段階に比定される。128はやや古いか。



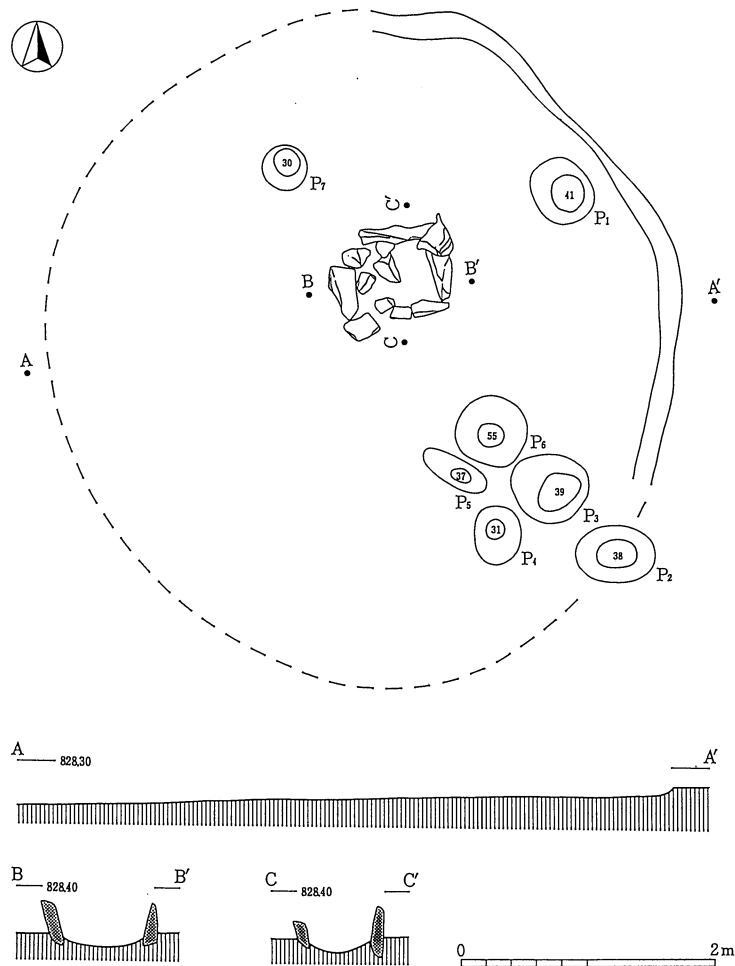
第34図 26号竪穴住居跡 1 : 60

26号竖穴住居跡（遺構：第34図 遺物：図版104）

遺構：J-24グリッドに位置する。この付近は耕作土が浅く、検出した段階ではすでに壁は消失しており、北側にみられる周溝と炉石の存在によって住居跡であると判断した。床には硬化面も貼床も認められなかった。北西部は攪乱によって破壊を受け、南西部は5住と重複するが、5住の調査が終了した後で本跡の存在が明らかになったため、本跡の方が古いものと判断した。平面プランは一部にみられる周溝とピットの位置関係をもって推定するしかないが、その場合は、径5m程度の規模を測る、円形を呈するものと考えられる。炉は推定プランのほぼ中央に存在している。安山岩質石を用いた石囲炉であると考えられるが、残存しているのは北辺と東辺だけであり、西辺及び南辺は抜き取られたものと思われる。炉内に掘り込みはほとんどみられない。灰や焼土も認められなかった。炉底も焼けていない。ピットは3ヶを本跡に伴うものとしてとりあげたが、そのいずれも柱穴として理解できよう。

遺物：土器は破片資料で10点程が出土したにすぎず、図示しえたのは1点（131）のみである。石器は出土していない。

時期：わずかな破片資料で時期を決定するしかない。中期5～7段階あたりであろうか。



第35図 28号竖穴住居跡 1:60

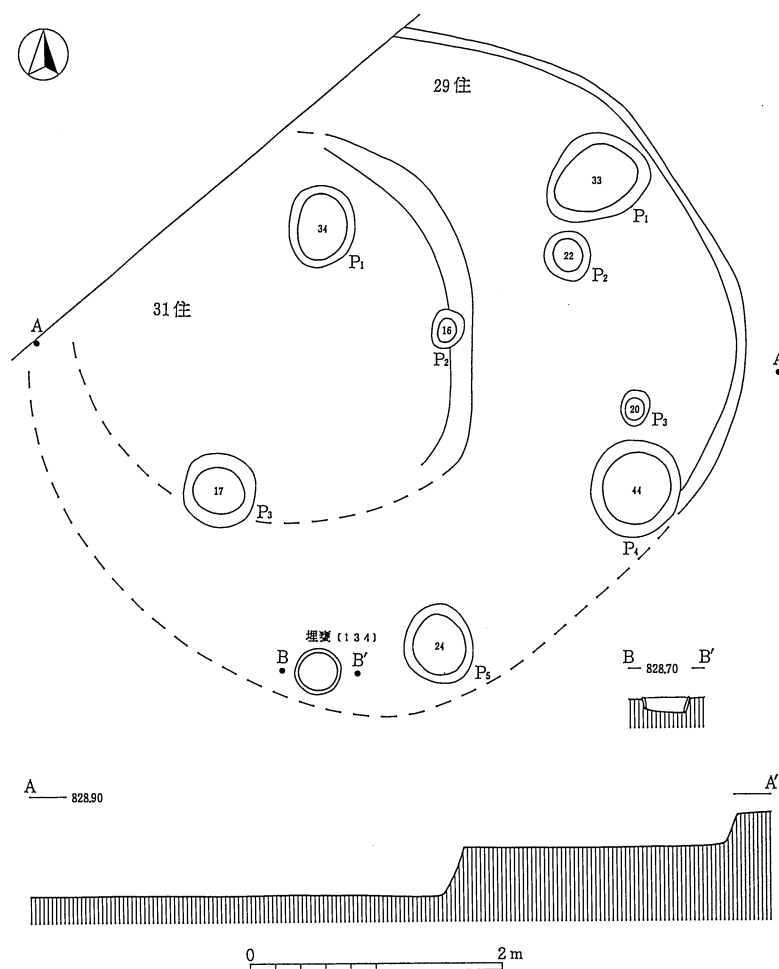
28号竖穴住居跡（遺構：第35図、PL84 遺物：図版104）

遺構：D-25、I-5グリッドに位置する。この付近は耕作土が浅く、壁は北壁で最大12cmを測るにすぎず、西側及び南側においては壁は消失している。したがって平面プランは推定の域を出ないが、径5

～5.5m程度の規模を測る、ほぼ円形を呈するものと考えられる。わずかに残る覆土は黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は推定プランの中央やや北寄りに存在している。安山岩質の石を用いた方形の石囲炉であると思われる。炉内にも安山岩質の石がみられるが、これらも本来は炉石であった可能性が高い。炉内は10cm程を掘りくぼめているが、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。また、炉内及び炉周辺には拳大から頭大の軽石が数個みられている。廃棄時に投げこまれたものと理解したい。周溝はみられない。ピットは7ヶが検出されているが、柱穴として考えられるのはP1を除くと明確でない。

遺物：出土遺物はビニール袋1つにすぎない。土器はすべて破片資料であり、図示したのは2点（132、133）のみである。石器は欠損した打製石斧2点のみである。

時期：わずかな破片資料のみからではあるが、中期7段階に比定できよう。



第36図 29号・31号竪穴住居跡 1：60

29号竪穴住居跡（遺構：第36図 遺物：第104図、PL143）

遺構：D-19グリッドに位置する。31住と重複するが、この付近の耕作土は浅く、遺構検出段階ですでに新旧関係はつかめなかった。北西側は田切り地形による小谷になっており、本跡及び31住はその谷に切られている。また近年はその谷間がゴミ捨て場として利用されていたため、攪乱も激しい。なお、北西側の小田切りによって本跡及び31住が壊されていることから、この田切り地形の形成は少なくとも本跡よりも新しい時期のものであることが理解できるだろう。一方、南側は壁が消失している。したがって平面プ

ランは明確ではないが、南側にみられる埋甕を出入口部と考えれば、径約5.5m程の規模を測り、ほぼ円形を呈するものと推定できる。壁高は最大でも20cmを測るにすぎない。わずかに残る覆土は暗褐色土である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉、周溝はみられなかった。南側の出入口部に推定できる位置に埋甕（134）が確認された。底部を欠した土器を、口縁部を下にした逆位で埋設したものである。掘り方は土器がちょうど収まる大きさであり、埋土は暗褐色土である。ピットは5ヶが検出されたが、このうちP1、P3、P5が柱穴として該当すると思われる。

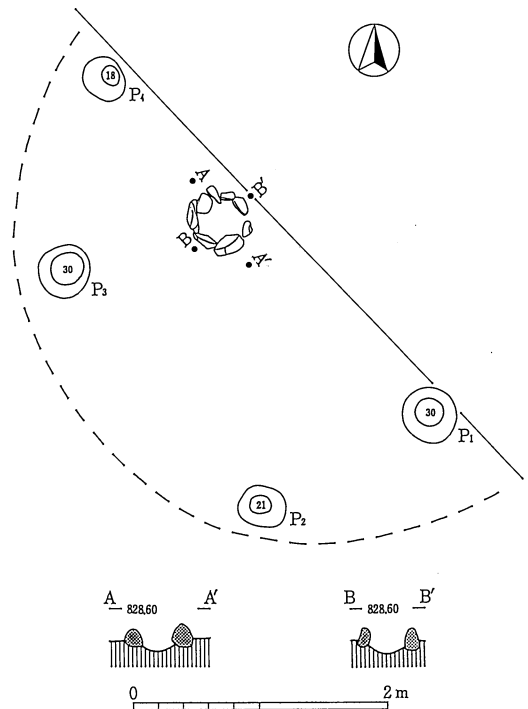
遺物：出土遺物としてはビニール袋1つにすぎず、図示できた土器は埋甕（134）のみである。松本盆地周辺の唐草文土器に比較的近いものである。石器は出土していない。

時期：中期6段階頃であろう。

30号竪穴住居跡（遺構：第37図、PL84）

遺構：D-25グリッドに位置する。壁は消失していたが、調査区際から検出された炉及びピットの存在により、住居跡と判断した。ピットの配列状態から平面プランを推定すると、径約5m程の円形を呈するものと考えられる。このうち北半分は調査区外に存在しているものと想定される。床には硬化面も貼床もみられなかった。炉は8個の安山岩質の石を用いた石囲炉である。炉内は10cm程を掘りくぼめているが、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。周溝はみられなかった。ピットは4ヶを本跡に属するものとして考えたが、そのいずれも柱穴として理解したい。

遺物・時期：遺物は出土しなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。



第37図 30号竪穴住居跡 1:60

31号竪穴住居跡（遺構：第36図）

遺構：D-19グリッドに位置する。29住と重複するが、新旧関係は不明である。壁は東側に残存しているだけである。壁高は残存部で19~29cmを測る。覆土は暗褐色土であり、29住との相違はみられない。平面プランは推定ではあるが、径約3.2m程度のほぼ円形を呈するものと考えられる。炉、周溝は認められなかった。床に硬化面や貼床は確認できなかった。ピットは3ヶが検出されたが、柱穴は明確ではない。

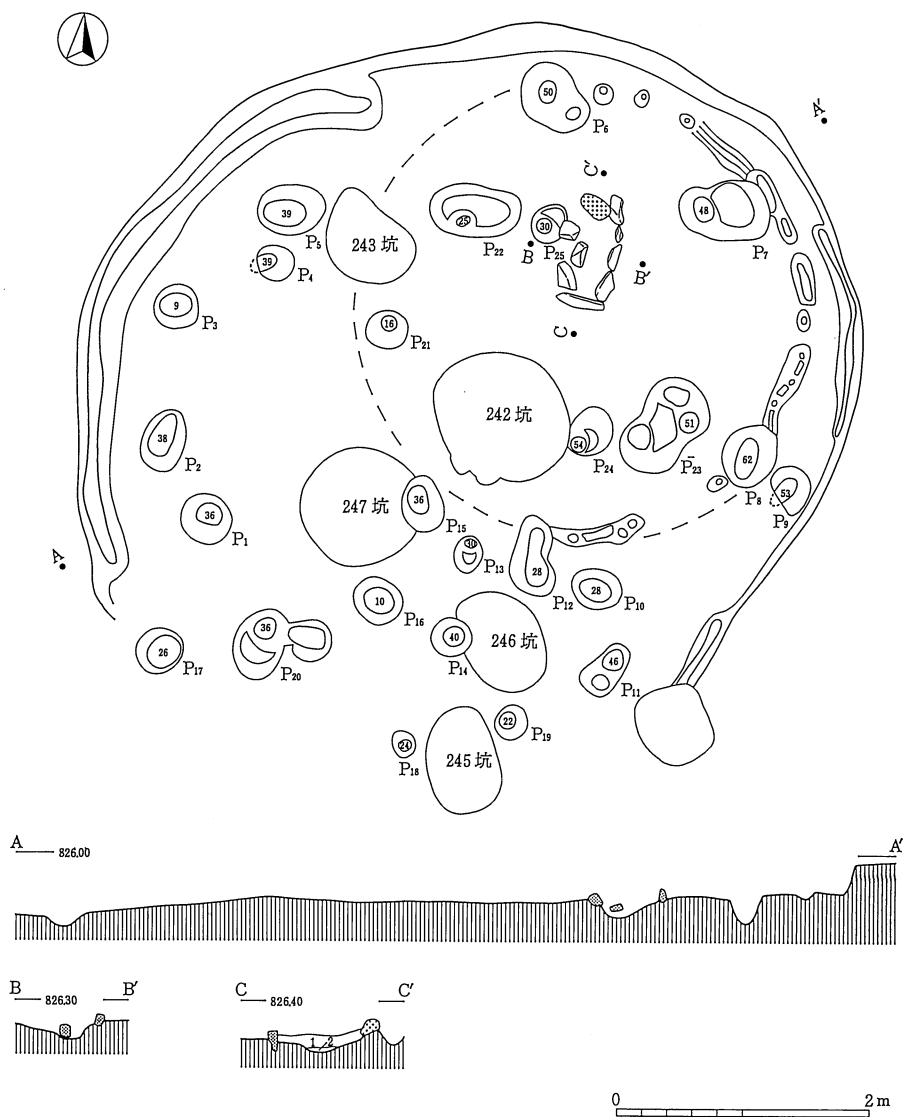
遺物・時期：遺物は出土しなかったが、中期6段階の29住と重複していることから、縄文中期の可能性が高いだろう。

32号竪穴住居跡（遺構：第38図、PL85 遺物：図版105・106、PL143・144）

遺構：K-23、K-24、P-3、P-4グリッドに位置する。本跡は平成4年度に実施された小諸市教育委員会の調査対象地区に一部かかっており、さらに小諸市教育委員会調査分の「第3号住居址」よりも新しい構築であることが判明したため、協議の結果、急遽、埋文センターにて調査することになったものである。また小諸市教育委員会調査分の「第31号土坑」をはじめ、242坑、243坑、245坑、246坑、247坑と重複するが、遺構検出段階での新旧関係は不明であった。壁は北側で最大25cmの深さを測るが、南方向へ徐々に浅くなり、南側では消失している。平面プランは長径約6m、短径約5.7m程の規模を測り、北東

一南西方向にやや長い楕円形を呈するものと推定される。覆土はパミスとローム粒を含む黒褐色土の単層である。ところで、周溝は東側の壁の一部及び西側の壁に沿うものの他に、東側にはもうひとつ別の周溝が巡っている。整理作業段階で検討した結果、柱穴とおぼしきピットの配列及び内側にめぐるもうひとつの周溝の存在から、別の住居跡として理解すべきものであると判断した。その場合、周溝及び柱穴と想定されるピットの配列から径3.7m程の円形を呈するものと考えられる。しかしながら新旧関係はもはや不明であり、遺物も一括してとりあげているため、新たな住居跡番号は付けずに報告する。炉は北寄りに存在している。長方形の石囲炉である。北辺の1個が軽石の他は安山岩質の石を用いている。西辺では炉石が一部欠損しており、付近には軽石礫が数点みられている。炉は15cm程を掘りくぼめたものであり、覆土は2層にわけられる。1層は炭化物・パミスを含む黒色土、2層はローム粒を含む黒色土である。炉底は焼けていなかった。床には、硬化面や貼床は認められなかった。ピットは24ヶが検出されたが、柱穴は明確ではない。

遺物：遺物は収納箱で1つ程であった。図示した土器は7点（135～141）であり、135と138は33住及び242坑の破片と接合するが、主体は本跡である。135・136・138は撚糸を地文にもつ。136は口縁部に沈線



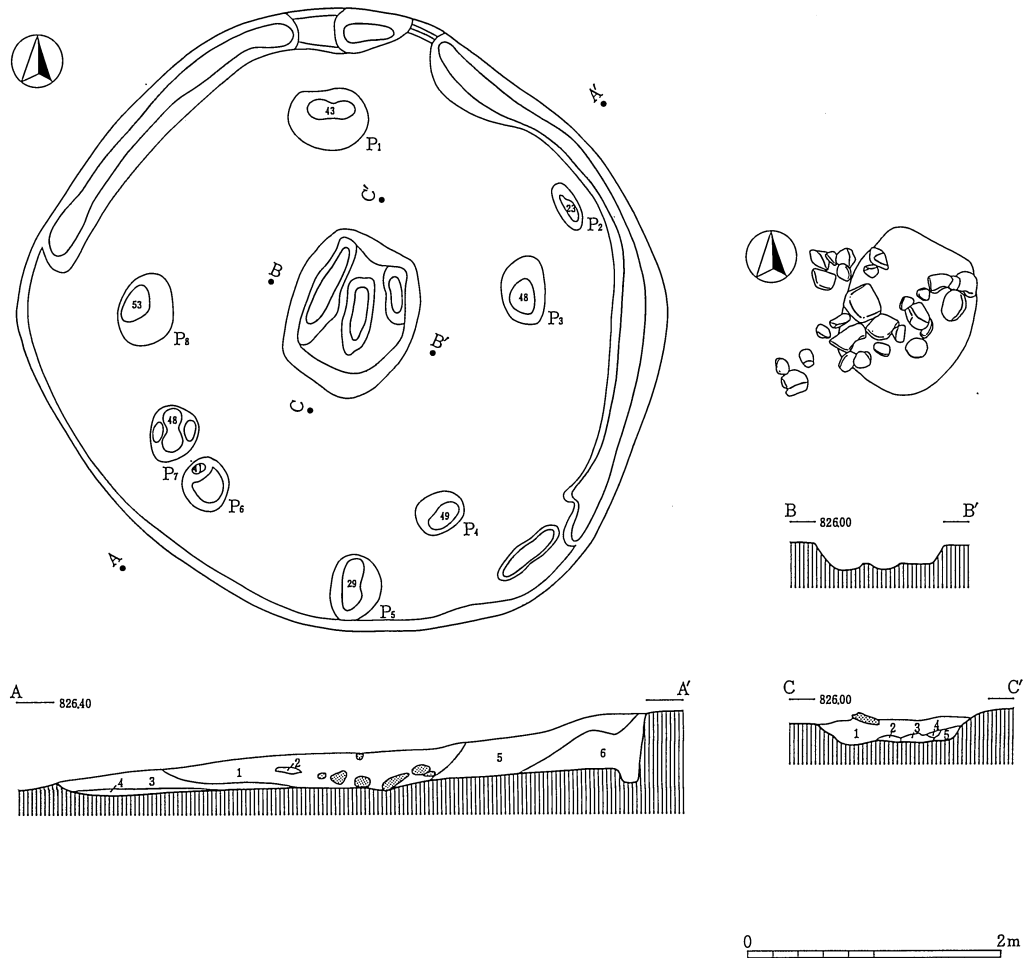
第38図 32号竪穴住居跡 1 : 60

が認められる浅鉢。141は曾利I式期。石器は石鏃1点(6)、石匙1点(116)、石錐1点(90)、磨石1点が出土している。

時期：出土した土器から、中期3段階に比定できる。

33号竪穴住居跡(遺構：第39図、PL85 遺物：図版107、PL144)

遺構：K-23グリッドに位置する。本跡は平成4年度に小諸市教育委員会で実施した調査地区内に一部がかかったため、協議の結果、急遽、当センターが調査することになったものである。後日、本格的な調査をはじめから15住とも重複することが判明したが、出土土器からは本跡の方が新しい。平面プランは北西-南東方向が4.9m、北東-南西方向が4.7mの規模を測る、やや北西-南東方向へ長い楕円形を呈している。壁高は北壁付近で最大37cmを測るが南へ徐々に浅くなり、南壁付近では最小9cmになる。覆土は6つに分層できた。1層はパミス・ローム粒を含む黒褐色土で安山岩質の石も散在している。2層は灰・炭化物を含む黒色土、3層はパミス・ローム粒をわずかに含む黒褐色土、4層はパミス・ローム粒を含む暗褐色土で貼床の可能性も高い。5層はパミスを含む黒色土、6層はパミス・ローム粒を多く含む黒色土である。4層が貼床であるとすれば南西部分にひろがるものと理解できる。他に硬化面は認められなかった。ほぼ中央に方形の掘り方をもつ炉が存在している。炉石はまったく認められなかったが、炉石の抜き取り痕と思われる浅い窪みが検出されたので、本来は石囲炉であったと考えられる。炉の掘り方は約20cm程度であり、覆土は5層にわけられる。1層は炭化物・骨片を含む黒色土、2層は灰・ローム粒を含むに



第39図 33号竪穴住居跡 1 : 60

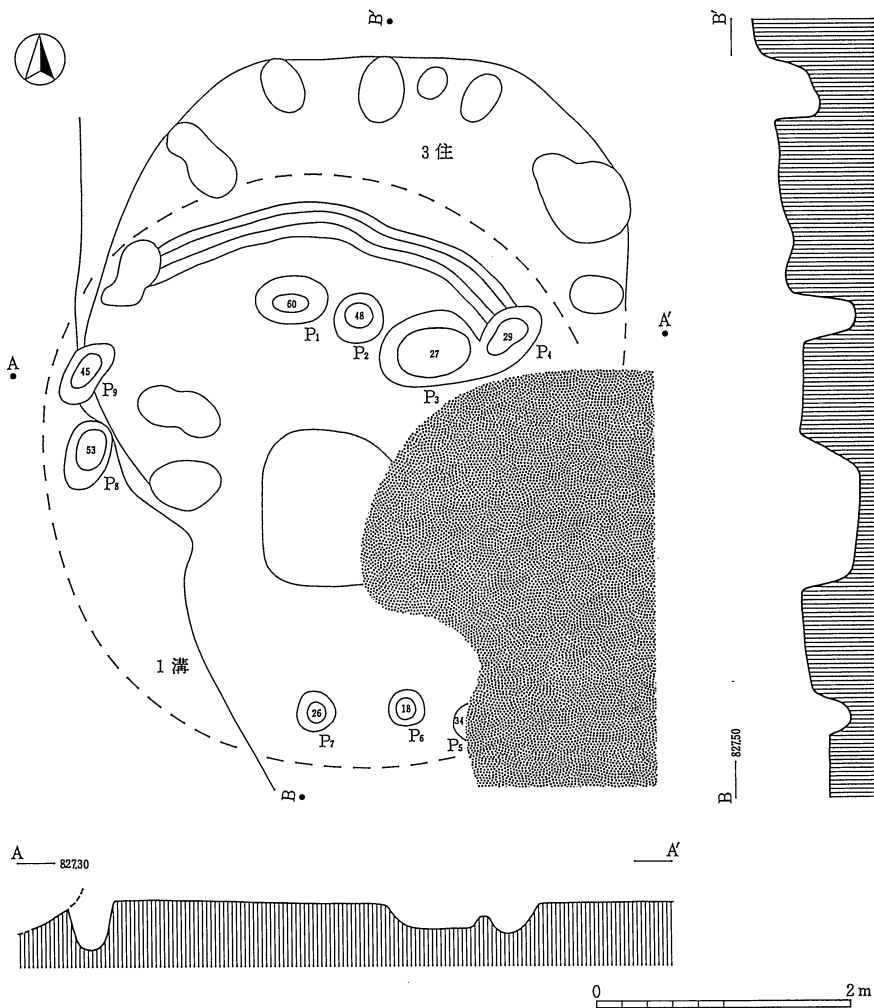
ふい黄褐色土、3層は黄褐色土の灰層でローム粒をわずかに含み、4層は暗褐色土の灰層、5層は灰・ローム粒をわずかに含む黒褐色土である。覆土の上部には炉石と思われる安山岩質の石が多量の軽石礫とともに集中して認められている。炉石を抜き取った後に、軽石礫とともに炉内に投棄したものと考えられよう。周溝は東側及び南西部にみられている。ピットは8ヶが検出されている。このうちP1、P3、P4、P6、P7、P8が支柱穴に該当すると思われる。

遺物：土器は5点（142～146）を図示したが、142は242坑との接合資料であり、主体は242坑であるため、本跡には伴わないものと理解したい。撚糸で地文を施した後に横方向に沈線を引いている。143は炉内から出土したものである。石器は、石鏃未製品1点、石錐未製品1点、打製石斧4点、磨石2点、敲石2点、石皿1点（416）、軽石製品1点（547）、多孔石1点（443）、石棒B類1点（392）が出土している。土製品としては土偶1点（40）と土製匙1点（69）が検出された。

時期：出土した土器から、中期5段階に比定できる。

35号竪穴住居跡（遺構：第40図）

遺構：J-18グリッドに位置する。3住と重複する。3住の敷石をはずし、掘り方の精査を行った段階で、周溝及びピットが検出されたため、3住よりも古い構築である本跡の存在が明らかになった。壁は検出段階ではすでに消失していた。この他、東側を攪乱、西側を1溝によってそれぞれ破壊を受けているた



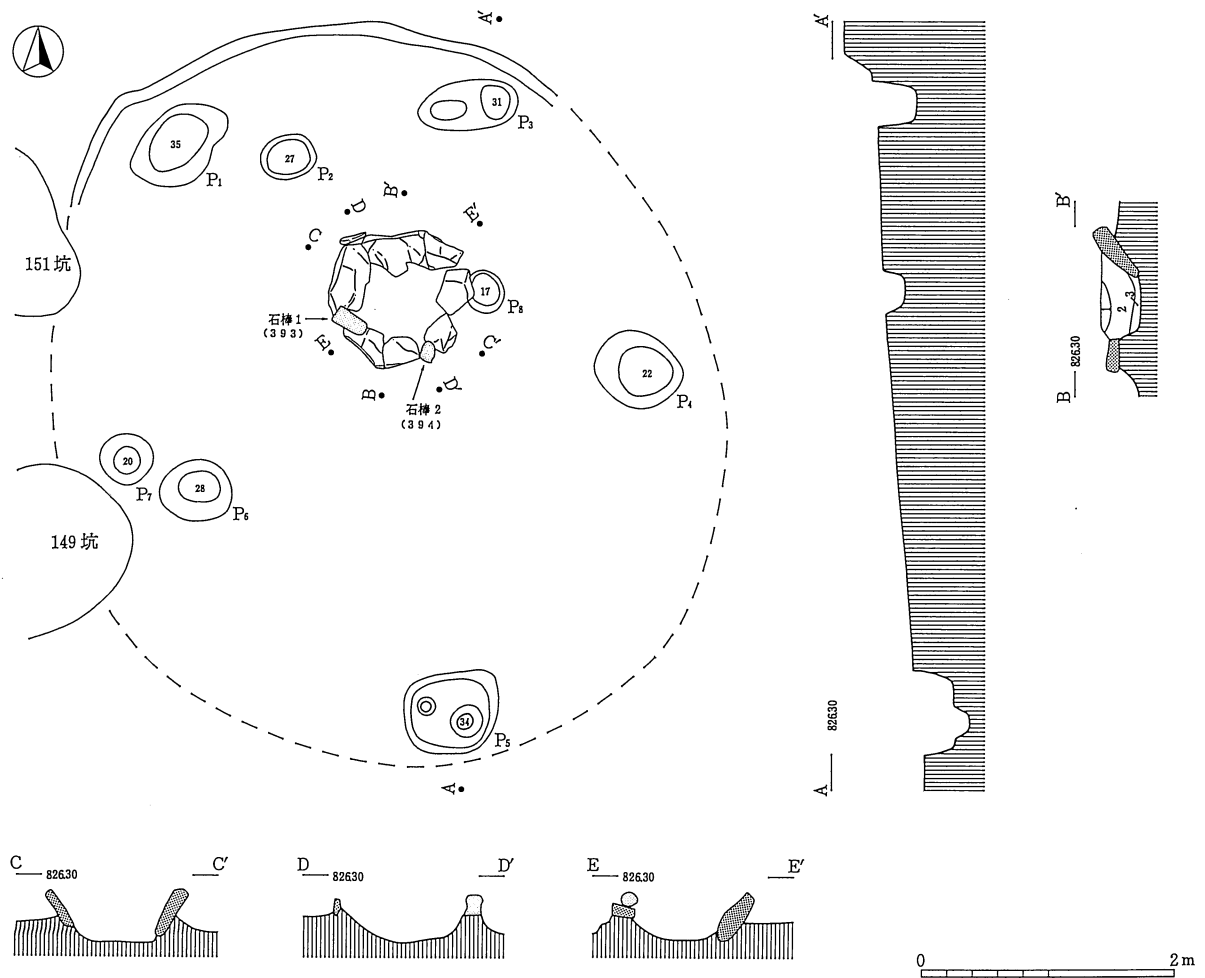
第40図 35号竪穴住居跡 1 : 60

め、残りは非常に悪い。したがって平面プランも明確ではないが、北側に存在する周溝とピットを手掛かりにすると、径約4.5m程度の規模を測り、ほぼ円形を呈するものと想定できる。ピットは9ヶが検出されているが、いずれも壁柱穴痕であると理解できよう。炉は認められなかった。

遺物・時期：遺物は出土していないが、3住よりも古い所産であるため縄文中期の可能性が高いだろう。

37号竪穴住居跡（遺構：第41図、PL85 遺物：図版108）

遺構：K-5グリッドに位置する。25住、36住、61住、149坑、151坑と重複する。遺構検出段階で36住と61住よりも新しく、149坑、151坑よりも古い所産であることは判断できたが、25住との新旧関係はつかめなかった。本跡の壁は、北側で10~20cmを測る以外には消失しているため、図面上では25住に切られるように見受けられるが、出土土器からは本跡の方が新しい。周溝もみられないため、平面プランは本跡に属すると思われるピットの配置から推定するほかないが、その場合、南北径5.9m、東西径5.3m程度の規模を測るものと想定される。覆土はパミス或少し含む暗褐色土が主体であるが、部分的に黒色土も散在している。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は推定プランの中央やや北寄りに存在している。安山岩質の石を用いた石囲炉である。北辺及び南辺の炉石はそれぞれ本来は1つである。南辺東隅には胴部以下を欠した石棒A類1点（394）が樹立されており、また南辺西側の炉石の上には頭部を欠した石棒A類1点（395）が横たわっている。おそらく本来は南辺西隅に樹立されてあったものと考えられる。炉は10~20cm程の掘り方を有している。炉内の覆土は3層にわけられる。1層は暗褐色土、2層はパミス或少



第41図 37号竪穴住居跡 1:60

し含む黒色土、3層は焼土である。炭化物はみられなかった。ピットは7ヶが検出されたが、このうちP1、P3、P4、P5、P6が柱穴として考えられようか。

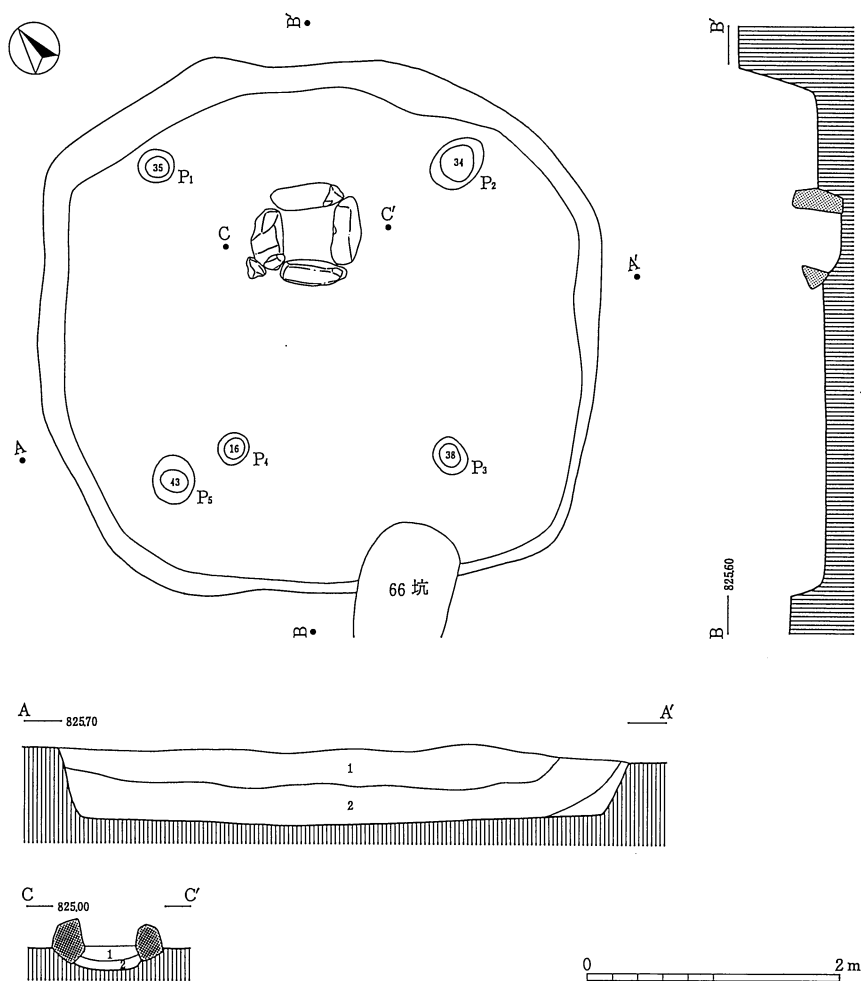
遺物：出土遺物はビニール袋1つ程にすぎず、土器は破片資料のみであった。図示できたのは1点(147)のみである。石器は石棒A類3点のみの出土であり、2点を図示した(394、395)。

時期：出土した土器から、中期6段階に比定できる。

38号竪穴住居跡（遺構：第42図、PL86 遺物：図版109、PL144）

遺構：O-8グリッドに位置する。66坑と重複関係にあり、遺構検出段階で本跡の方が古い所産であると判断できた。規模は北東-南西方向径4.15m、北西-南東方向径4.45mを測る。隅丸方形とでもいえそうな平面プランである。壁高は21~53cmを測る。覆土は3層にわけられる。1層はパミスを含む黒色土で、径20cm程度の軽石及び多量の遺物を含み、2層はパミスを含む暗黄褐色土、3層はパミスを含む暗褐色土である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央北寄りに存在している。安山岩質の石を用いた石囲炉である。4辺に配された炉石はいずれも内側面を磨っている。炉内は15~20cm程を掘りくぼめており、覆土は2層にわけられる。1層はパミスをわずかに含む暗黄褐色土、2層はパミスを少し含む暗褐色土である。いずれも焼土や炭化物はみられなかった。周溝は認められなかった。ピットは5ヶが検出されたが、P4を除く4ヶが柱穴と考えられる。

遺物：遺物は少ない。図示できた土器は1点(162)のみである。床面より30cm程浮いての出土である。



第42図 38号竪穴住居跡 1:60

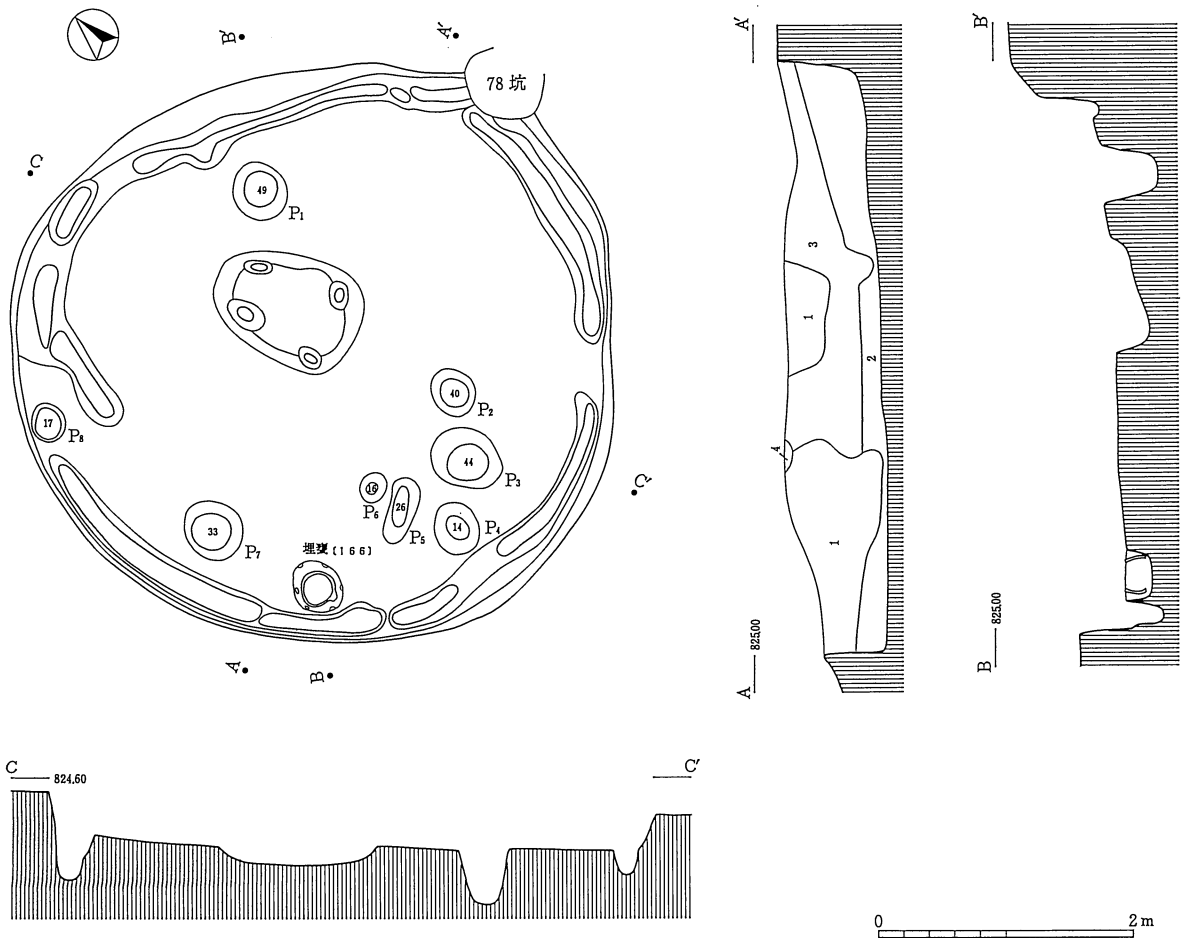
石器は石鏃1点、打製石斧8点(220~222、281)、磨石2点、凹石1点(361)が出土した。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

39号竪穴住居跡(遺構：第43図、PL86 遺物：図版109・110、PL145)

遺構：O-7、O-8、O-12、O-13グリッドに位置する。78坑、86坑、87坑と重複する。遺構検出段階で78坑よりも古く、86坑、87坑よりも新しい構築であることが理解できた。南北径4.9m、東西径4.7mの規模を測り、円形を呈している。壁高は40~60cm程の深さを測る。覆土は4層にわけられる。1層は黒色土で、径30~50cm程の軽石、安山岩質石、土器・石器等の遺物が多量に含まれている。2層は暗褐色土で、径30cm程の軽石が含まれる。3層は軽石を含む暗褐色土、4層は黒色土である。堆積状態から判断すると、1層は本跡が埋まった後に改めて掘り直し、軽石や安山岩質の石を土器・石器等とともに投棄したものであると考えられる。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや北寄りに存在している。炉石は全くみられないが、炉石の抜き取り痕と思われる小さな窪みが4か所で認められているため、本来は石囲炉であったと考えられる。炉の掘り方は30cm程である。住居覆土2層と同じ土が堆積しており、焼土や炭化物はみられなかったが、底面にわずかながらも灰が認められた。炉底は焼けていない。周溝は南東側及び北西側の一部を除いて巡っている。ピットは8ヶが検出されているが、このうちP1、P2、P3、P7が柱穴の可能性はある。南西壁下に埋甕(166)が検出された。胴部以下を欠した土器を、口縁部を下にした逆位に埋設している。

遺物：遺物の多くは1層から出土している。図示した土器は10点(163~172)であり、163と168は1層か



第43図 39号竪穴住居跡 1:60

らの出土、164と165は2層からの出土であり、167は1層及び2層の両方から出土した破片が接合したものである。166は埋甕である。石器は石鏃1点、打製石斧40点（うち欠損品35）、磨石2点（343）、凹石1点、敲石2点、多孔石2点、台石4点、石棒3点（396、397、444）、剥片石器2点（289）が出土している。土製品としては土偶1点（37）が出土している。また未鑑定ではあるが、動物とおぼしき骨片が検出されている。

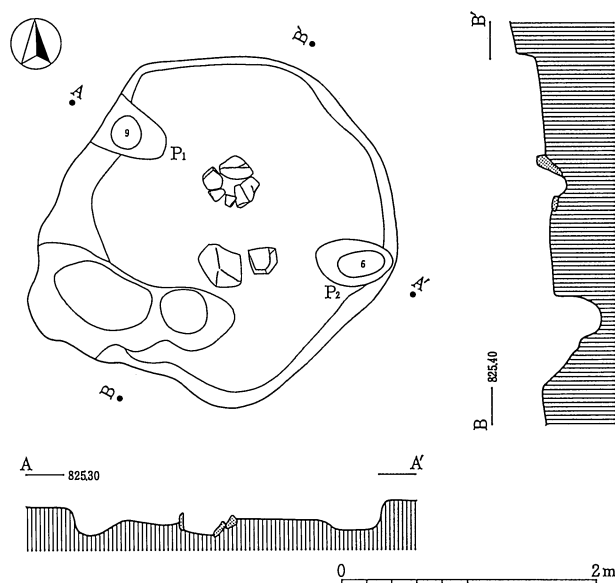
時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

40号竪穴住居跡（遺構：第44図、PL86 遺物：図版108）

遺構：〇-1グリッドに位置する。重複関係をもつ遺構はない。南北径2.7m、東西径2.55mの規模を測り、やや不整な円形を呈している。壁は浅く、10~22cmの高さである。覆土はパミスを含む黒褐色土の単層である。床には硬化面や貼床は認められなかった。また南東側には不整な形状の掘り込みがあるが、その性格は不明である。中央やや北寄りに炉が存在している。安山岩質の石を用いた石囲炉であり、完存している。北辺の炉石は内側を磨っているのが確認できた。炉内は10cm程を掘りくぼめているが、住居覆土と同じ土が堆積しており、灰や焼土は認められなかった。炉底も焼けていない。周溝はみられない。ピットは2ヶが検出された。いずれも柱穴としての機能が考えられる。

遺物：遺物はビニール袋2つにすぎない。土器は破片資料だけで、4点（148~151）を図示した。石器は打製石斧1点（224）、剥片石器1点（291）が出土しており、土製品は、土偶2点（23、41）が出土している。

時期：148はやや古いが、中期5~7段階に比定できようか。

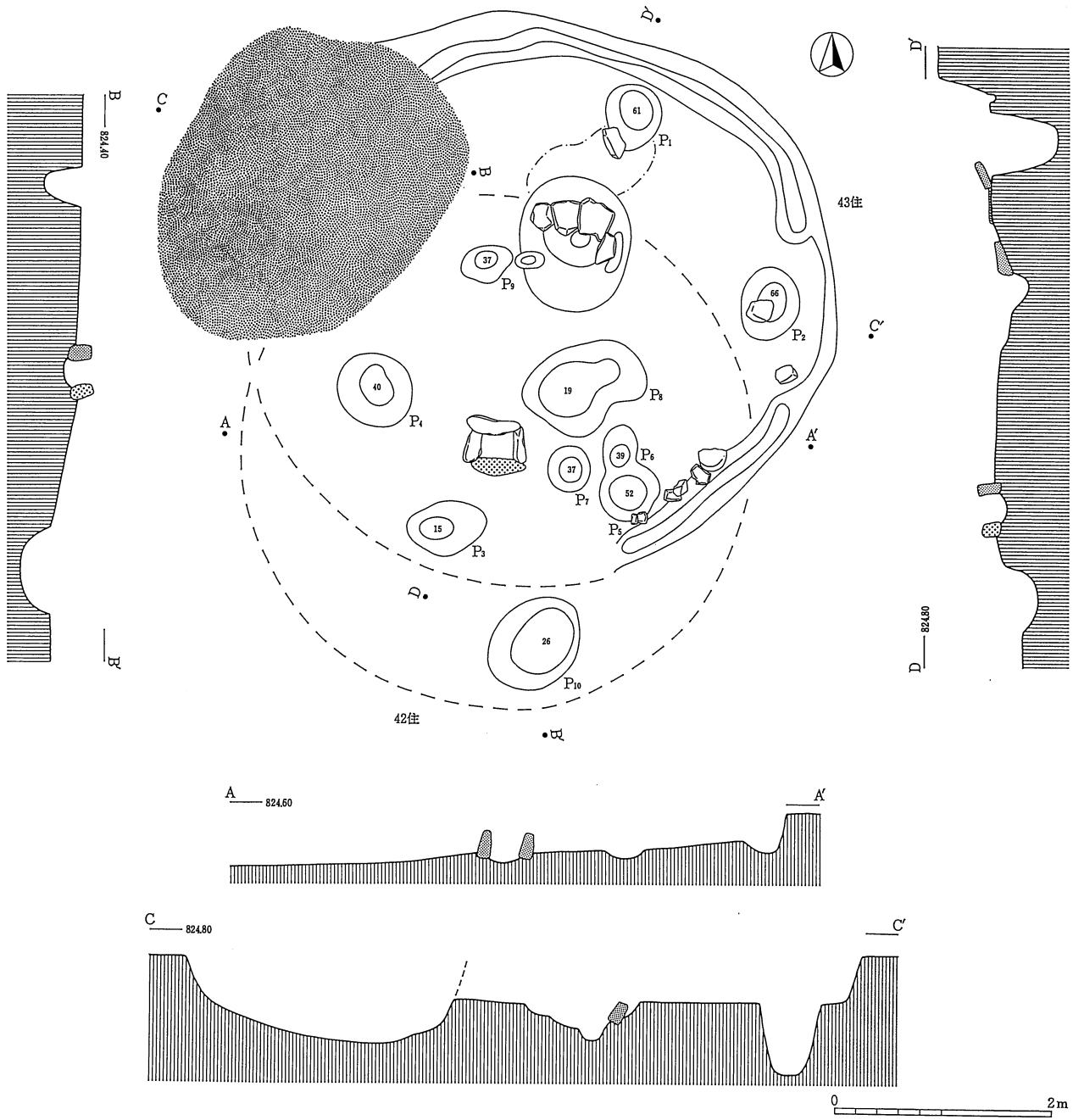


第44図 40号竪穴住居跡 1:60

41号竪穴住居跡（遺構：第45図、PL87・89 遺物：図版111、PL145）

遺構：〇-7グリッドに位置する。49住、1160坑、1161坑と重複する。49住とは覆土が浅いため、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかったが、49住の炉が本跡の周溝を壊して構築されていることから本跡の方が古い所産であると判断した。また遺構検出段階で1160坑、1161坑よりも古い構築であることも理解できた。壁は最大でも20cmを測るにすぎず、多くは周溝のみが確認されるにとどまる。また東側及び北西側では周溝も認められないため規模は推定の域を出ないが、南北径5.8m、東西径推定5.5mを測り、ほぼ円形を呈するものと考えられる。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや西寄りに存在している。安山岩質の石を用いた石囲炉であり、完存している。炉内は15cm程を掘りくぼめてあり、覆土は2層にわけられる。1層はパミスを含む暗褐色土、2層は焼土である。ピットは18ヶが検出されたが、このうち柱穴の可能性のあるものとしてはP1、P7、P8、P10、P15、P18が該当するだろう。また西側には深さ15cm程の溝状の落ち込みがある。周溝ではないと考えられ、性格は不明である。なお、49住で出入口部施設と理解した石組は本跡の奥壁部施設である可能性もあるだろう。

遺物：遺物はビニール袋3つにすぎない。図示できた土器は2点（173、174）のみである。石器は打製石



第46図 42号・43号竪穴住居跡 1 : 60

含まれている。炉とP1の間には貼床が認められている。炉は楕円形の掘り方を持ち、炉内には炉石と思われる安山岩質の石がみられるが原位置とはどめてはいない。本来は石囲炉であったものが住居廃絶時に破壊されたものと考えられる。炉の掘り方は最大で30cmの深さを有するが、住居覆土と同じ土が堆積しており、灰や焼土、炭化物などは認められなかった。本跡に伴うと想定できるピットとしては、P1～P8が該当すると考えられ、このうちP1、P2、P4、P5は柱穴の可能性が高い。南東壁際では、床から数cm～20cm程浮いて、石皿（419）を含む安山岩質石が数点出土している。石皿以外は加工された形跡はないものであるが、壁際に沿うように出土しており、何らかの意図をもって配置したようにも思われる。

遺物：先述したように遺物はすべて43号住居跡のものとしてとりあげている。図示した土器は3点（175～177）である。176は櫛歯状工具による沈線を施す。177は器種不明。石器は石鏃4点（21～23）、石鏃未製品1点（86）、打製石斧25点（225）、磨石2点、敲石3点、磨製石斧1点（188）、軽石製品1点（602）、台石1点、丸石1点（515）、石皿1点（419）、剥片石器1点（293）が出土している。419には裏面に小穴を有している。土製品としては土偶1点（2）が出土している。また炭化種実遺体2点が出土している。1点はオニグルミの核の破片であり、もう1点は植物の根茎の一部であろうと思われるがはっきりしたことは不明である。

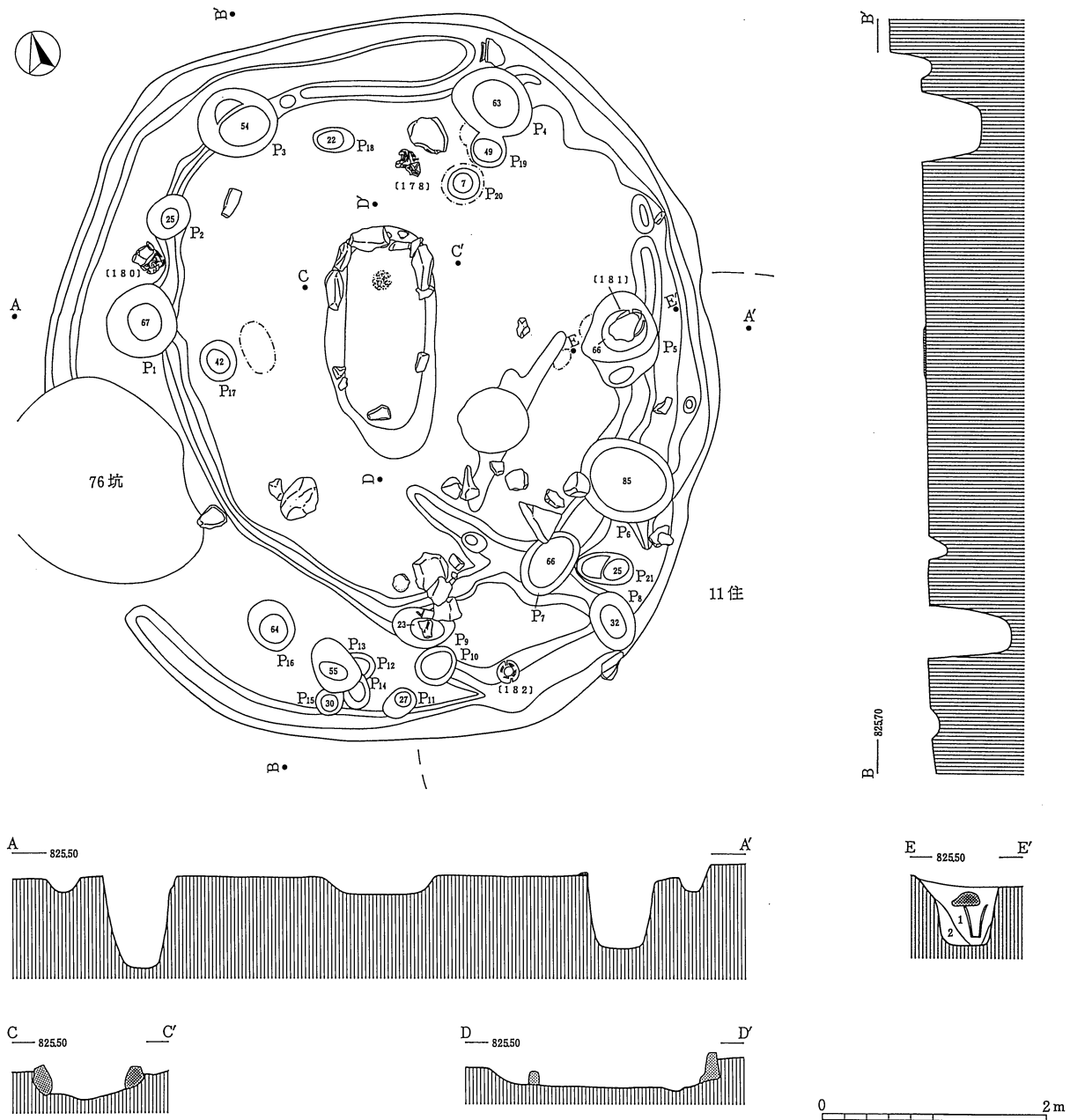
時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。

44号竪穴住居跡（遺構：第47図、PL88 遺物：図版112・113、PL146）

遺構：K-10、K-11グリッドに位置する。11住、76坑と重複している。76坑よりは古い構築である。11住とは、調査年度が2年にまたがり、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかったが、出土土器からすれば、本跡の方が新しい。また48住は壁が消失しているため新旧関係は不明であるが、推定プランに従えば、本跡と重複している可能性がある。本跡は平成5年度に大半を調査したが、西側の一部は用地収容の関係で平成6年度に調査を送った。壁が消失しており、ほぼ全周する周溝から規模を測ると、南北径6.48m、東西径6.06mであり、円形を呈している。周溝は北東側の一部を除き、二重に巡っている。おそらく西側に拡張した住居跡であると考えられる。炉は中央に存在し、長大な楕円形の掘り方を有している。北辺及び東西辺の一部には炉石が残存しており、本来は石囲炉であったことが理解できる。炉石のうち1点は多孔石を転用したものである。炉内の掘り込みは20～25cm程度であり、炉底にわずかな灰がみられたほかは、焼土や炭化物は認められなかった。貼床はP17の東側、P5・P19の付近、P20の周囲、でそれぞれ確認されている。ピットは21ヶが検出されている。このうちP1、P3、P4、P5、P6、P7、P16が支柱穴の可能性が高い。P5からはほぼ完形の土器（181）が石蓋を伴って埋設されていた。おそらく柱を抜き取った後に埋めたものと考えられる。

遺物：遺物量はかなり多い。土器では床面及び床面直上からの出土がその大半を占める。図示した土器は8点（178～185）である。182は底部を欠した土器を口縁部を下にして伏せた状態で出土している。178、179、180は床面からの出土である。183～185は床面から浮いた覆土からの出土であるため、本跡に伴うものとは考えられない。石器は石鏃1点、石鏃未製品1点、石錐1点（98）、打製石斧9点（233、264）、凹石3点（353、354、362）、多孔石1点、軽石製品2点（445、540）、磨製石斧1点（183）が出土している。軽石製品、磨製石斧も床面から出土している。南東部では安山岩質の自然礫が多くみられている。これも床面からの出土が大半である。

時期：178～182から中期5段階に比定できよう。183～185は加曾利EIV式であるが、混入と考えたい。



第47図 44号竪穴住居跡 1 : 60

45号竪穴住居跡 (遺構：第48図、PL89 遺物：図版108)

遺構：O-2グリッドに位置する。46住、49住と重複するが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば46住よりも本跡の方が古い。平面プランは西側の49住と重複する部分が不明であるが、径約2.9m程の方形に近い形状を呈するものと考えられる。ピットは4ヶが検出された。ピット中央の底部近くに石組を有するP4は、小諸市教育委員会が調査した石神遺跡第175号土坑（小諸市教育委員会1994）と類似するものであるため、本跡とは関係のない単独の土坑である可能性も高いが、ここでは本跡に伴うものとして報告しておく。この石組は石囲炉と形態的には非常によく似ているが、炉として機能したものかどうかは不明である。おそらく炉の可能性は低いと思われる。他の3ヶのピットも柱穴であるか明確でない。床には硬化面や貼床はみられなかった。周溝も認められない。

遺物・時期：遺物は土器のみであり、ビニール袋2つにすぎない。すべて破片資料であるが、3点(152~155)を図示した。中期6段階に比定できようか。



第48図 45号・46号竖穴住居跡 1 : 60

46号竖穴住居跡（遺構：第48図、PL89 遺物：図版114、PL147）

遺構：0-2グリッドに位置する。45住、47住、49住と重複するが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば45住よりも新しく、47住よりも古い。残存している平面プランから推定すると、径7m程度の規模を測るものと考えられる。壁は北側及び東側では30cm前後の深さをもつが、南側では消失している。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉、周溝はみられない。ピットは14ヶが検出されたが、このうちP1、P2、P6、P11、P14が柱穴の可能性が高い。

遺物：遺物はビニール袋で2つにすぎない。土器は2点（186、187）を図示した。186は口縁部に刺突文を施し、胴部には粗雑な蛇行隆帯を有する。石器も石鏃1点が出土しているにとどまる。

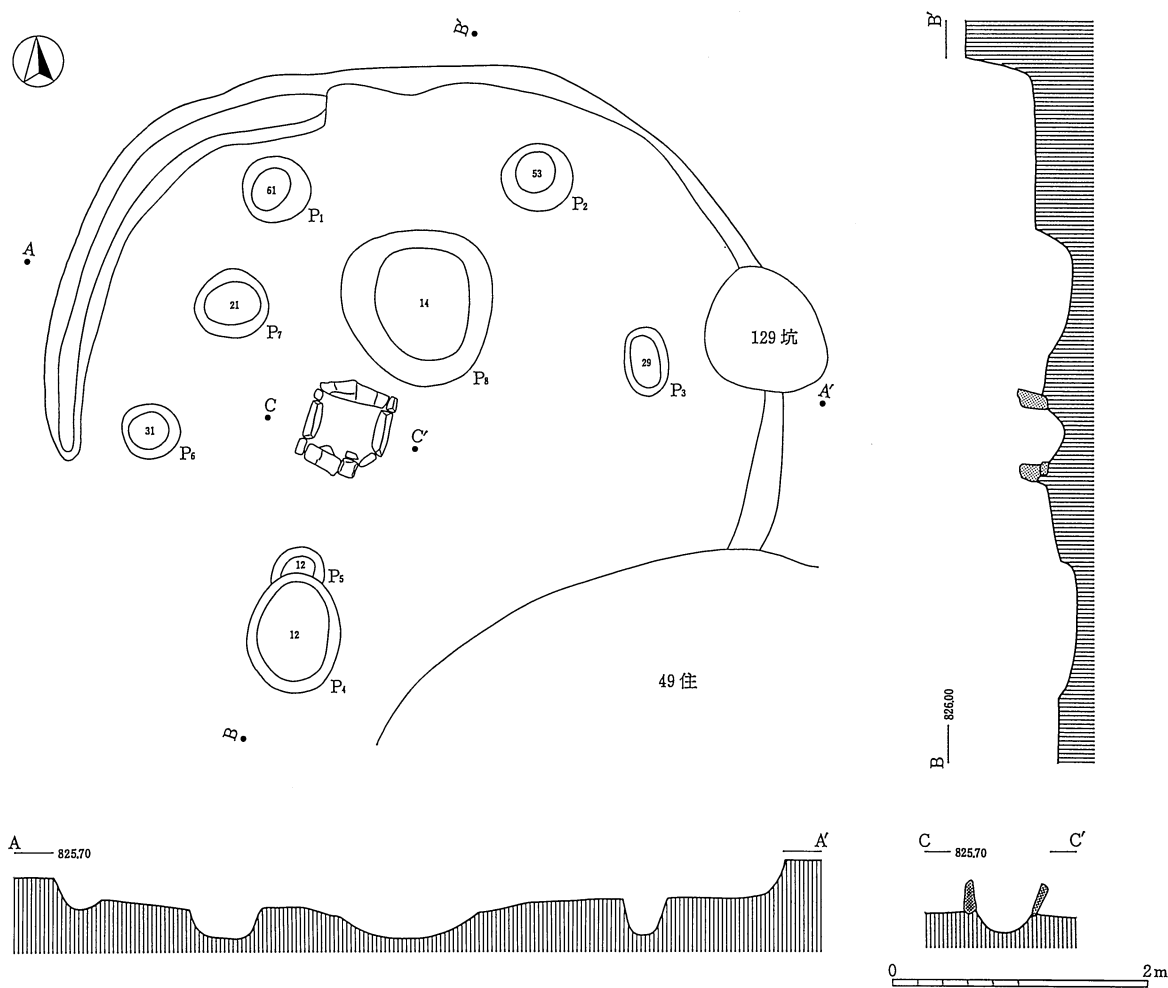
時期：わずかな破片資料からであるが、中期7段階に比定できよう。

47号竪穴住居跡（遺構：第49図、PL89 遺物：図版114、PL147）

遺構：O-1、O-2グリッドに位置する。46住、49住と重複する。遺構検出段階で49住よりも古く、46住よりも新しい構築であることが理解できた。南側の壁が消失しているが、径約6m程度の規模を測るものと考えられる。残存している壁高は30~50cm程である。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや南側に存在している。安山岩質の石を縦に組んだ方形の石囲炉である。炉内は15cm程を掘りくぼめているが、炭化物や灰、焼土などは認められなかった。周溝は北西部に一部みられるのみであった。ピットは7ヶが検出されたが、柱穴はP1、P2の他は不明である。また、柱穴から検出された柱材と思われる炭化材は鑑定の結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節であることが判明した。

遺物：遺物はビニール袋で3つを採取したにとどまる。土器は4点（188~191）を図示した。190は有孔鏝付土器である。石器は石鏃2点、打製石斧1点、磨石3点、敲石2点（380）、台石1点（490）、石棒A類1点（398）が出土している。

時期：191は井戸尻式期であるが、他は中期8段階に比定されようか。



第49図 47号竪穴住居跡 1:60

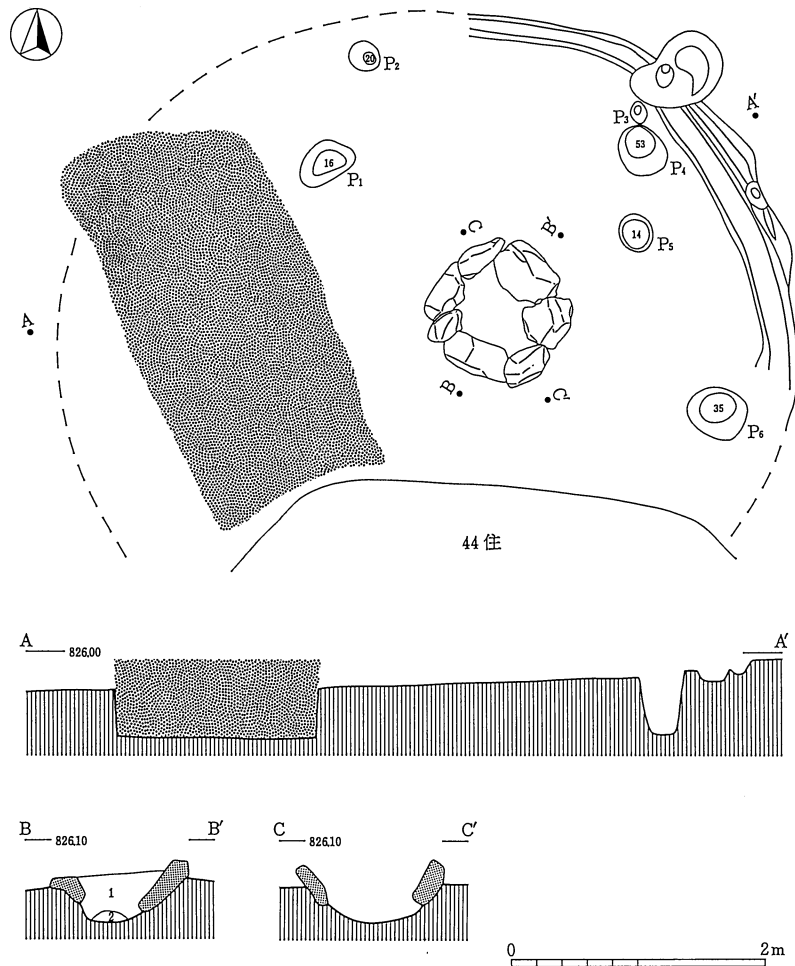
48号竪穴住居跡（遺構：第50図、PL89 遺物：図版108）

遺構：K-6、K-11グリッドに位置する。検出した段階ではすでに壁はほとんど消失しており、最大でも数cm程である。西側を攪乱により破壊され、南側は44住と重複するため、平面プランも明確ではない。前期に比定される59住と63坑よりは新しい所産であるが、遺構検出段階では44住との新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば本跡の方が古い。北東側に残る周溝の巡りから、径5.6m程の規模と推定さ

れる。床には硬化面や貼床等は認められない。炉は推定プランのほぼ中央に位置している。安山岩質石を7点用いた石囲炉であり、完存している。炉の掘り方は約30cm程の深さを測る。炉内覆土は2層に分かれる。1層はパミスをわずかに含む黒色土、2層は明褐色の焼土である。ピットは6ヶが検出されたが、P1、P2、P4、P6が柱穴の可能性はある。

遺物：遺物は極めて少なく、図示できた土器は3点（156～158）にすぎず、石器は磨石1点が出土しているにとどまる。

時期：157は加曾利E II式だが、他は井戸尻式期と思われるため、中期1～2段階頃に比定できよう。



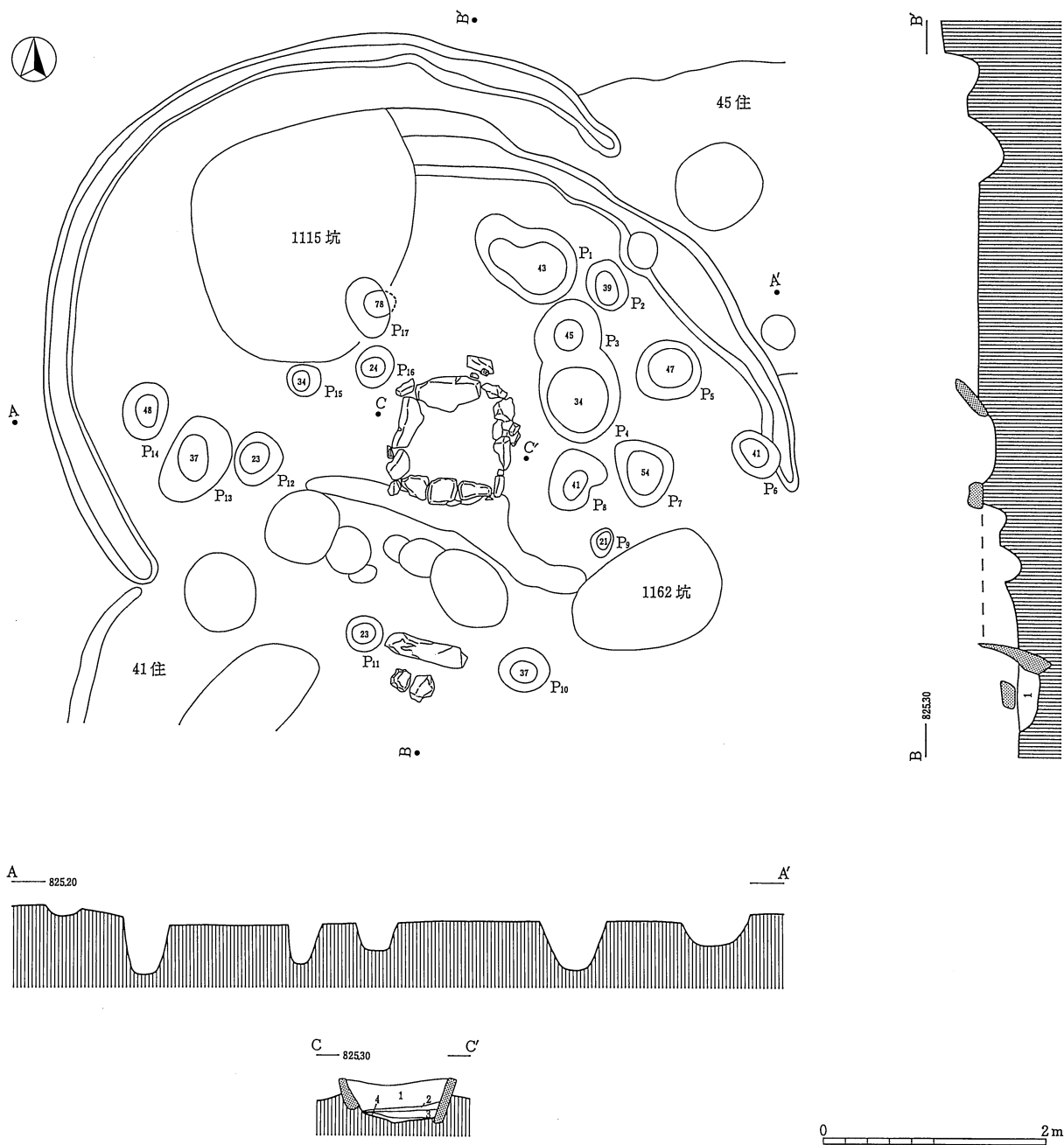
第50図 48号竪穴住居跡 1:60

49号竪穴住居跡（遺構：第51図、PL87・89）

遺構：O-2、O-7グリッドに位置する。41住、45住、46住、47住、1115坑、1162坑、1号集石、2号集石と重複する。本跡を検出した段階ではすでに壁はほとんど消失しており、土層の相違による新旧関係はつかめなかった。ただ41住の周溝上に本跡の炉が構築されていることからすれば、41住よりも新しい所産であることは確かであると思われる。またP17が1115坑に切られていることから1115坑より古い所産であると考えられる。他の遺構との新旧関係は不明である。周溝は二重に巡っており、拡張された可能性が高い。また炉より約1.2m程南には、扁平な安山岩質石を縦に埋め込み、その南側には2点の安山岩質石が並べて配置されている。位置的にみると何らかの出入口部施設であると思われる。ただし、41住の奥壁部施設である可能性も十分考えられる。平面プランは周溝および出入口部施設の位置から推定すると、径約6m程の規模を測るものと考えられる。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は大形の方形石囲

炉である。南辺を除く3辺は板状の扁平な安山岩質石を縦に配しているが、南辺のみは上面が平坦な枕状の石を用いている。焚き口の機能と関係するのであろう。炉石はいずれも顕著に焼けている。炉内の掘り方は約25cm程であり、底部には焼土が認められた。ピットは17ヶが検出されたが、柱穴は明確ではない。またP10、P11は出入口部施設に伴うピットの可能性が高い。

遺物・時期：遺物は極めて少なく、土器は破片資料だけであり、図示できるものはなかった。石器も欠損の打製石斧1点と図示した軽石製品1点（635）が出土したにすぎない。41住よりは新しいため、中期7段階以降であろうか。



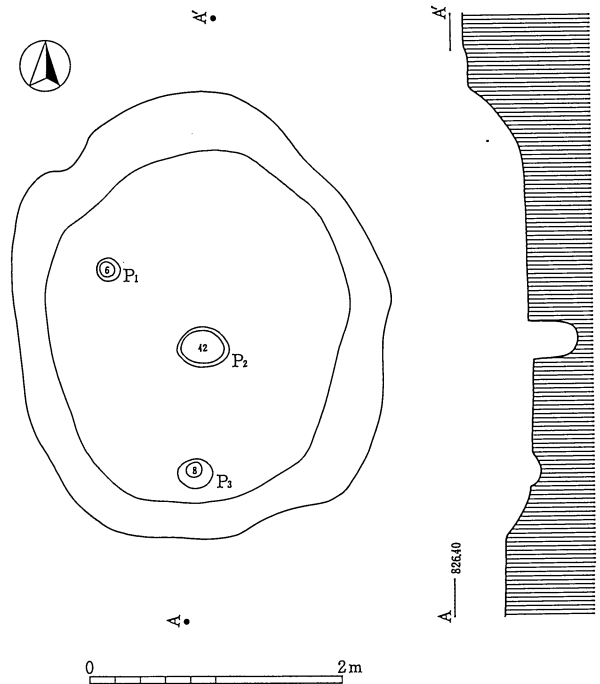
第51図 49号竖穴住居跡 1 : 60

50号竪穴住居跡（遺構：第52図、PL89 遺物：図版108）

遺構：J-16、J-21グリッドに位置する。長径3.55m、短径3.0mの規模を測り、やや南北に長い不整楕円形を呈する。壁高は最大で約55cmを測る。床は軟弱である。炉、周溝は認められなかった。ピットは3ヶが検出されているが、柱穴は不明である。

遺物：遺物はビニール袋1つにすぎない。土器はすべて破片資料であり、図示したのは3点（159～161）である。石器も磨石2点（328）、敲石1点が出土したにとどまる。

時期：中期1～2段階頃であろう。



第52図 50号竪穴住居跡 1：60

60号竪穴住居跡（遺構：第53図、PL90 遺物：図版115・116、PL144・148）

遺構：I-23、I-24、N-3、N-4グリッドに位置する。東側の一部に攪乱による破壊を受けているが、径5.8mの規模を測り、円形を呈する。壁高は北側では最大29cmを測るが、南側ではほとんど消失している。南側の覆土からは軽石礫が集中しており、それに混じって遺物が出土している。床には硬化面や貼床は認められなかった。炉は中央やや北寄りに位置している。炉石の抜き取り痕が認められているため、本来は石囲炉であったと想定されるがすべて抜き取られている。炉内は12～3cm程を掘りくぼめており、中央部付近には焼土が堆積している。周溝は全周している。ピットは29ヶが検出されている。主柱穴としてはP1、P2、P4、P7、P13、P17が想定される。これらはいずれも覆土中に径15～20cm程度の軽石礫が数点含まれている。他のピットからは出土していないため、柱を抜き取った後で意図的に投棄した可能性がある。またP8、P10、P11は出入口部に伴うピットの可能性が高い。

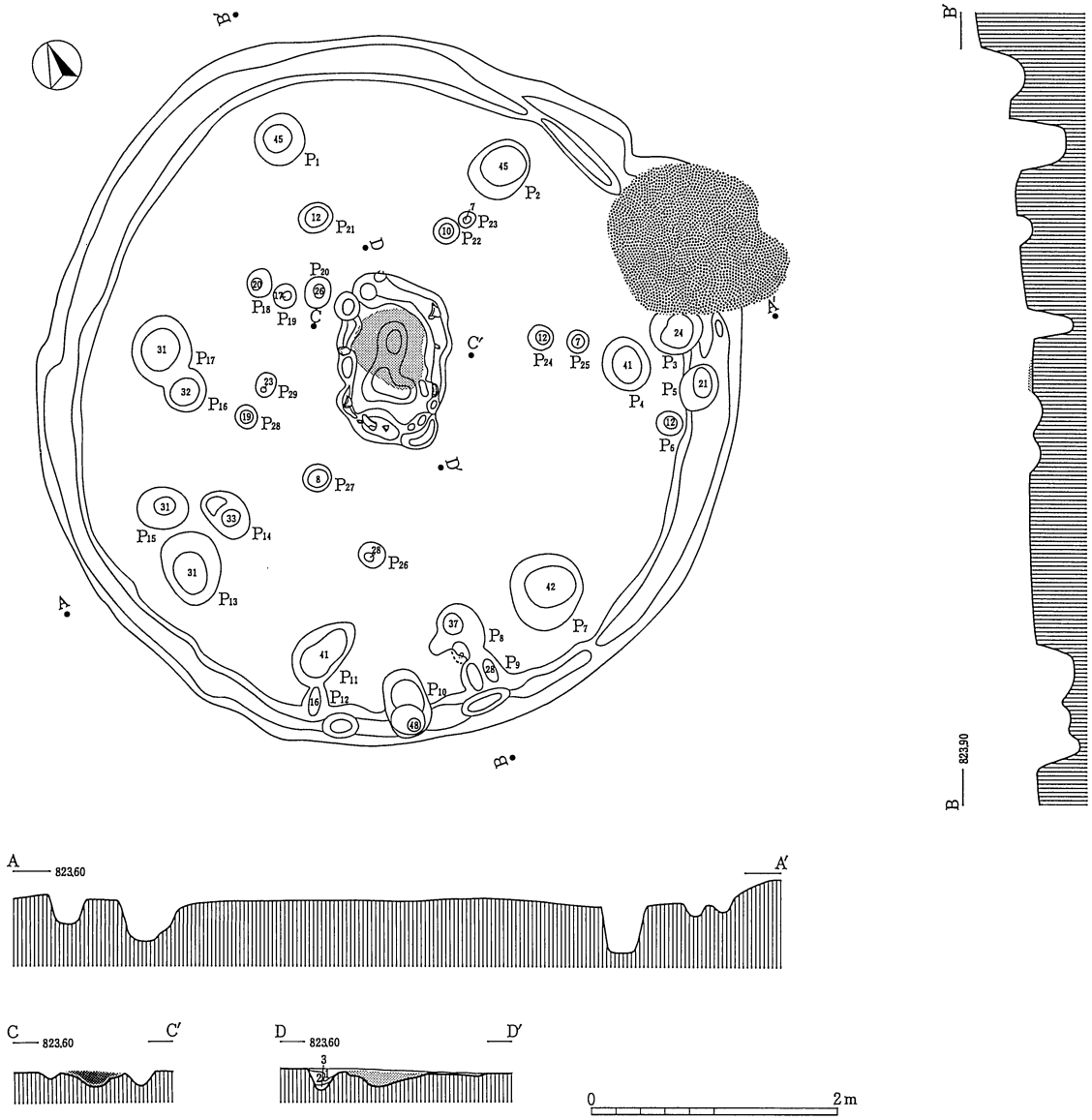
遺物：土器は9点（192～200）を図示した。これらはすべて床面より10～15cm程浮いての出土である。192は44号住と33号住炉のものとも接合しているが、主体は本跡である。196は無節縄文を施す。197は頸部にみられる隆帯をはさみ、口縁部から底部近くまでを縄文で施す。石器は石匙2点（119）、打製石斧2点（246、265）、磨石3点、凹石3点（344、355）、敲石1点、石皿1点、多孔石1点（446）、軽石製品2点（531）が出土している。土製品としては、土偶1点（31）が出土している。

時期：出土した土器から、中期5段階に比定できる。

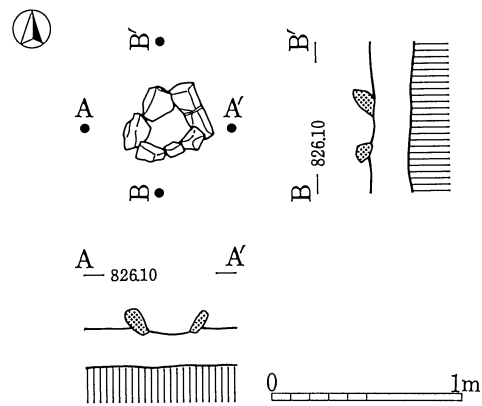
64号竪穴住居跡（遺構：第54図、PL91）

遺構：I-20グリッドに位置する。II層から石囲炉が検出されたため、住居跡として認定したものである。数個の安山岩質石を配置する。掘り込みやピット等は精査したが確認できなかった。II層において検出された住居跡は本遺跡で唯一である。

遺物・時期：遺物が出土していないため時期は不明であるが、縄文中期の可能性が高いだろう。



第53図 60号竖穴住居跡 1 : 60

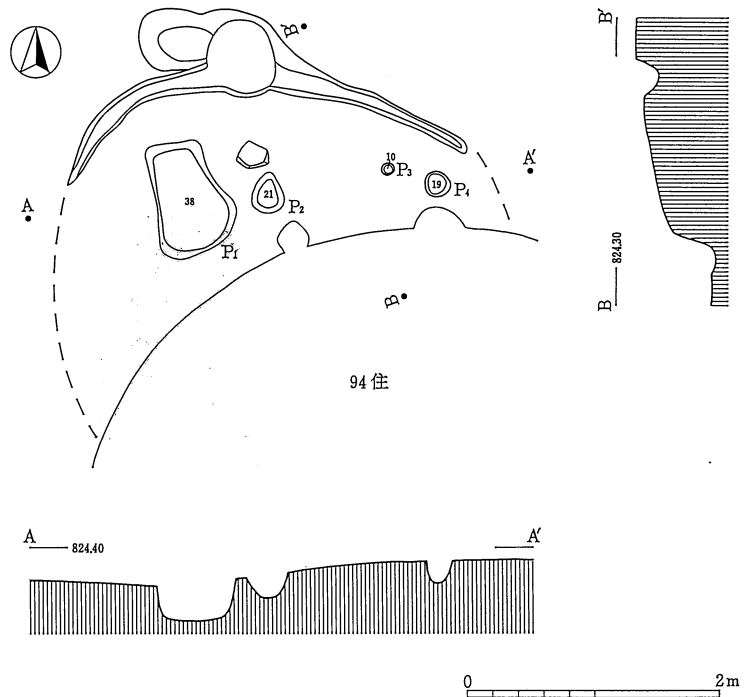


第54図 64号竖穴住居跡 1 : 40

67号竖穴住居跡（遺構：第55図 遺物：図版116、PL149）

遺構：O-6、O-7、O-11、O-12グリッドに位置する。本跡は平成5年度の調査区域際に存在して

おり、94住との重複は確認できたものの、新旧関係をつかむことができないまま調査したものである。出土土器からすれば本跡の方が古い。壁高は北側の一部で17cmを測るのが最大であり、消失している部分が多い。周溝は北側にみられるのみであるが、平面プランは周溝の巡りから推定すれば、径3.5m程の規模を測るものと考えられる。床には貼床や硬化面はみられない。炉は認められない。ピットは4ヶが検出されているが、柱穴は不明である。
 遺物・時期：遺物は少なく土器1点(201)と多孔石1点(447)のみである。中期5段階に比定できよう。



第55図 67号竪穴住居跡 1 : 60

69号 竪穴住居跡 (遺構：第56図、PL91 遺物：図版116、PL149)

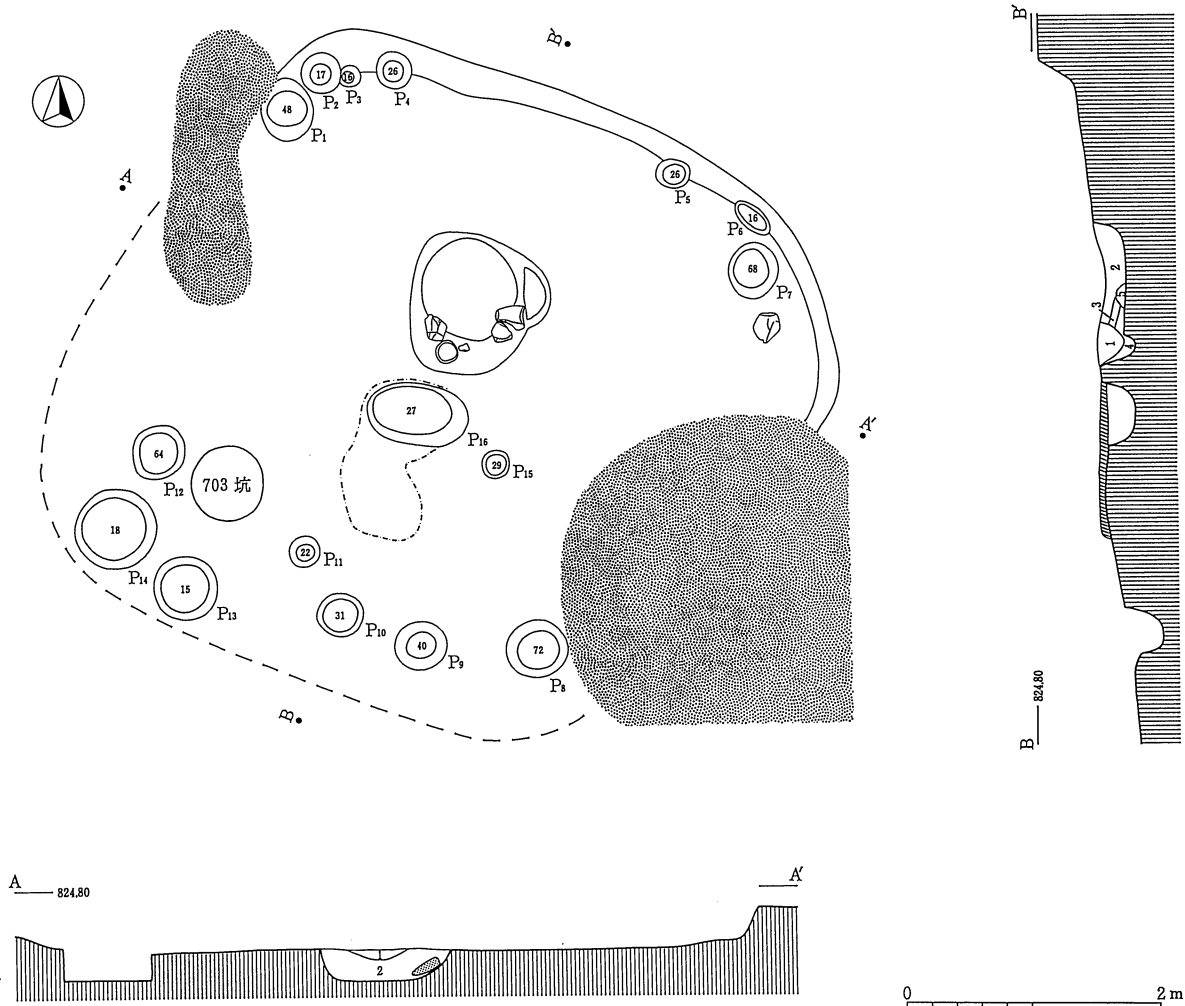
遺構：O-13、14、19グリッドに位置する。703坑との新旧関係は遺構検出段階では不明であったが出土土器からすれば本跡の方が新しい。南側は壁が消失しており、また東側及び西側の一部が攪乱による破壊を受けているため、平面プランは明確ではないが、径5.2m程の規模を測り、隅丸方形に近い形状を呈しているものと推定される。壁高は北側で最大25cm程を測る。炉の南側には貼床が認められている。中央やや北寄りに炉が位置している。掘り方は約25cm程の深さを有し、本来は石囲炉であったと考えられるが、残存している炉石はわずかである。図示はしなかったが、炉の周辺には破碎された安山岩質石が数点、床面出土で認められており、おそらく抜き取られた炉石の一部であると思われる。周溝はみられなかった。ピットは16ヶが検出された。柱穴としてはP1、P7、P8、P12が該当するものと想定でき、4隅に支柱穴を配している。P16は貼床下から検出されたものである。

遺物：図示した土器は2点(202、203)である。石器は欠損した打製石斧2点、剥片石器1点、それに図示した石皿1点(417)が出土している。また獣骨片が炉内から検出されている。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。

70号 竪穴住居跡 (遺構：第57図、PL91 遺物：図版117、PL149)

遺構：P-16グリッドに位置する。106住の覆土上面において構築された敷石住居である。平面プランも規模も、敷石のひろがり以外にはつかむ要因がないため不明であるが、敷石は本来は、炉を中心として方形を呈していたと考えられる。また敷石の北東際には平石を縦に埋め込んでいるのが認められるため、この付近が奥壁となっていたものであろう。敷石には平石を多く用いており、その隙間には小礫や打製石斧などを埋め込んで構成している。炉は4枚の扁平な安山岩質石を縦に配した石囲炉である。炉内の掘り方は約20cm程度であり、灰や焼土は認められない。炉から南へ約70cm程離れたところには埋甕(204)が存在している。ちょうど敷石のとぎれる位置にあるため、この付近が出入口部であったと理解できる。ひろめの掘り方をもち底部を欠した土器を正位に埋設している。また、埋甕の北側そばには丸石(516)が置



第56図 69号竖穴住居跡 1:60

かれてあった。

遺物：図示した土器は4点（204～207）である。204は埋甕、205～207は敷石に密着しての出土である。204の胴部にみられる蕨手状沈線は指頭状で浅い。205は楯歯状沈線。207は曾利式。石器はスクレイパー1点（141）、打製石斧7点（201）、剥片石器1点（294）、磨石3点、敲石1点（371）、軽石製品5点（533、541、545、554、644）、台石2点、丸石1点（516）、多孔石3点（448、449）が出土している。また未鑑定ではあるが、炉内から骨片が検出された。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

71号竖穴住居跡（遺構：第58図、PL92 遺物：図版117、PL149）

遺構：P-11、16グリッドに位置する。遺構検出段階で75住、80住よりも本跡の方が新しい所産であり、また293坑よりは古い所産であることが理解できた。壁は北側で最大約10cm程を測るにすぎず、南側では消失している。規模は径約3.7mを測り、やや不整の円形を呈している。床は貼床がわずかに認められたにすぎない（図示はせず）。炉はほぼ中央に位置している。炉内は約20cm程を掘りくぼめてあり、炉石と思われる安山岩質石が散乱していた。炉石の抜き取り痕もみられることから、本来は石囲炉であったと考えられる。南西隅には底部を欠損した埋甕（208）が正位に埋設されてあった。周溝は東側及び西側にみられている。ピットは12ヶが検出された。

遺物：図示した土器は2点（208、209）であり、208は埋甕、209は床面より10cm程浮いての出土である。

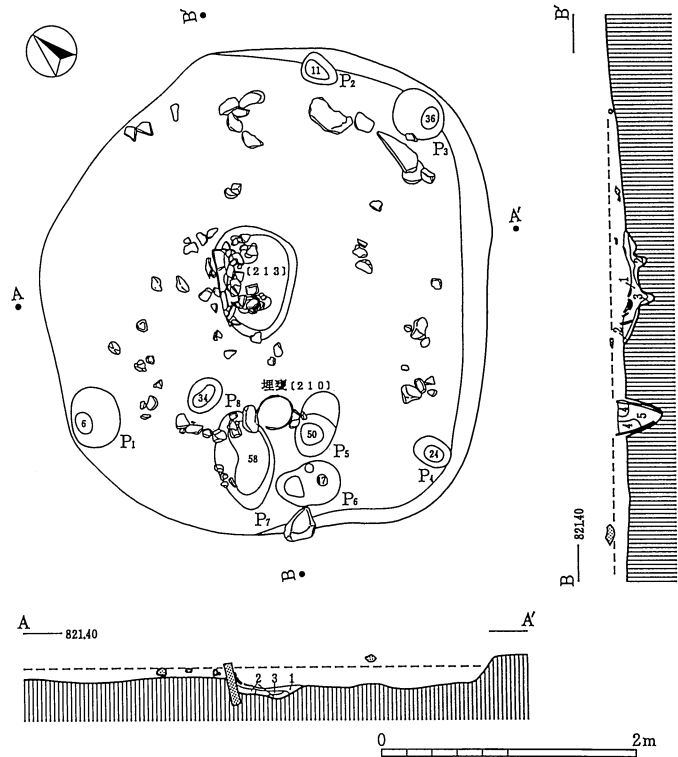
208は不均等ながら縦に2条1組の沈線が12単位認められる。そのうちの11単位は単節縄文を施すが、一単位のみ無節縄文を施しており、極めて特異である。209は表面の風化が著しい。石器は欠損した打製石斧2点の他には石棒の欠損品がわずかに認められるにすぎない。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

72号竪穴住居跡（遺構：第59図、PL92 遺物：図版118、PL150）

遺構：T-20グリッドに位置する。遺構検出段階では119住及び538坑よりも新しい所産であると判断したが、出土土器から判断すると119住よりは本跡の方が古い。119住は壁が消失しているため、検出段階で新旧関係を誤認したものと思われる。図面上では遺構検出時の所見のまま掲載したが、119住よりも古い構築である。

壁高は東側で最大20cmを測るが、西側では壁はほとんど消失している。規模は長径3.85m、短径3.55mを測り、やや不整な円形を呈する。床には敷石が置かれており、敷石住居であることがわかる。敷石に用いられた石にはやや大きめの平石と小ぶりの小礫とがみられる。いずれも上面をしっかりと磨きこんでいる。本跡周辺の耕作土が浅いことに起因してか、敷石の遺存状態はあまりよくない。炉はほぼ中央に位置する。西辺には扁平な安山岩質石を縦に配した炉石が残っており、石囲炉であったことが理解できる。炉石が残っているのはこの西辺のみであり、他の3辺には



第59図 72号竪穴住居跡 1:60

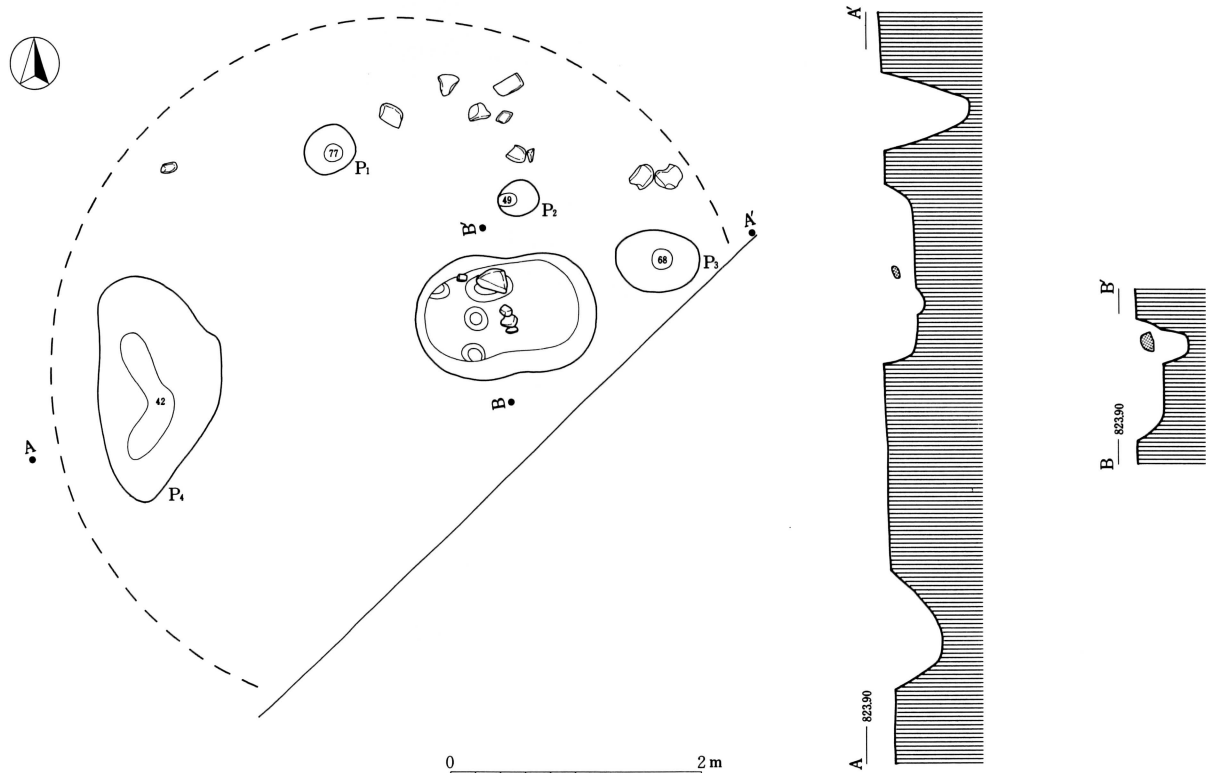
炉石は抜き取られたようである。北辺と南辺には抜き取り痕が認められる。炉内は約10cm程度を掘りくぼめてあり、土器1個体分(213)が横たえた状態で出土している。炉内に灰や焼土はみられなかった。炉の南50cm程のところに埋甕(210)が存在している。底部を欠した土器を正位に埋設したものである。周溝みられなかった。ピットは7ヶが検出された。柱穴にはP1、P3、P4が該当すると思われる、P5、P6、P7には埋甕とともに何らかの出入口部施設としての機能が想定できよう。

遺物：遺物は収納箱で1つほどの出土量であり、図示した土器は4点(210~213)である。210は埋甕で口縁部に浅い沈線を有する他は無文である。211は底部近くで櫛歯状沈線が認められる。石器は石鏃1点、打製石斧4点(247)、敲石1点、石棒A類1点、軽石製品1点(399)が出土している。

時期：出土した土器から、中期9段階に比定できる。

74号竪穴住居跡（遺構：第60図 遺物：図版118）

遺構：P-9、14に位置する。本跡を検出した段階ではすでに壁は消失しており、また周溝もみられないが、炉とピットの存在から住居跡と判断した。東側は田切り地形による小谷になっており、地形は落ち込んでいる。したがって平面プランや規模はピットの配列から推定するしかないが、その場合は径5.5m程度の規模を測るものと考えられる。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は楕円形の掘り方を有



第60図 74号竪穴住居跡 1 : 60

し、約25cm程の深さを測る。炉内には灰や焼土は認められない。炉内及び炉の北側の床面には安山岩質石が散乱しているが、これらは炉石を破碎したものである可能性がある。ピットは4ヶが検出された。このうちP1、P2、P3は柱穴としての機能が想定できるだろう。

遺物：遺物は収納箱で1箱程であるが、土器はすべて破片資料であり、4点（214～217）を図示した。石器は石鏃1点、欠損した打製石斧7点、磨石1点が出土している。

時期：出土した土器から、中期7～8段階に比定できる。

75号竪穴住居跡（遺構：第58図、PL92 遺物：図版118、PL150）

遺構：T-15、P-11グリッドに位置する。遺構検出段階で71住より古く、80住、105住より新しい所産であることが理解できた。規模は径4.1m程を測り、ほぼ円形を呈する。壁高は5～10cm程を測る。床は掘り込んだIII層をそのまま利用している。炉はほぼ中央に位置するが、251坑及び71住による破壊を一部受けている。方形の掘り方のみがみられるが、本来は石囲炉であった可能性が高い。炉内は25cm程を掘りくぼめているが、灰や焼土は認められなかった。南西隅に埋甕（218）が存在している。やや広めの掘り方もち、北へやや傾いた状態で、底部を欠した土器を正位に埋設してあった。周溝は71住と重複する部分以外はほぼ全周している。ピットは17ヶが検出されている。柱穴はP1、P5、P11、P13、P14が該当しよう。

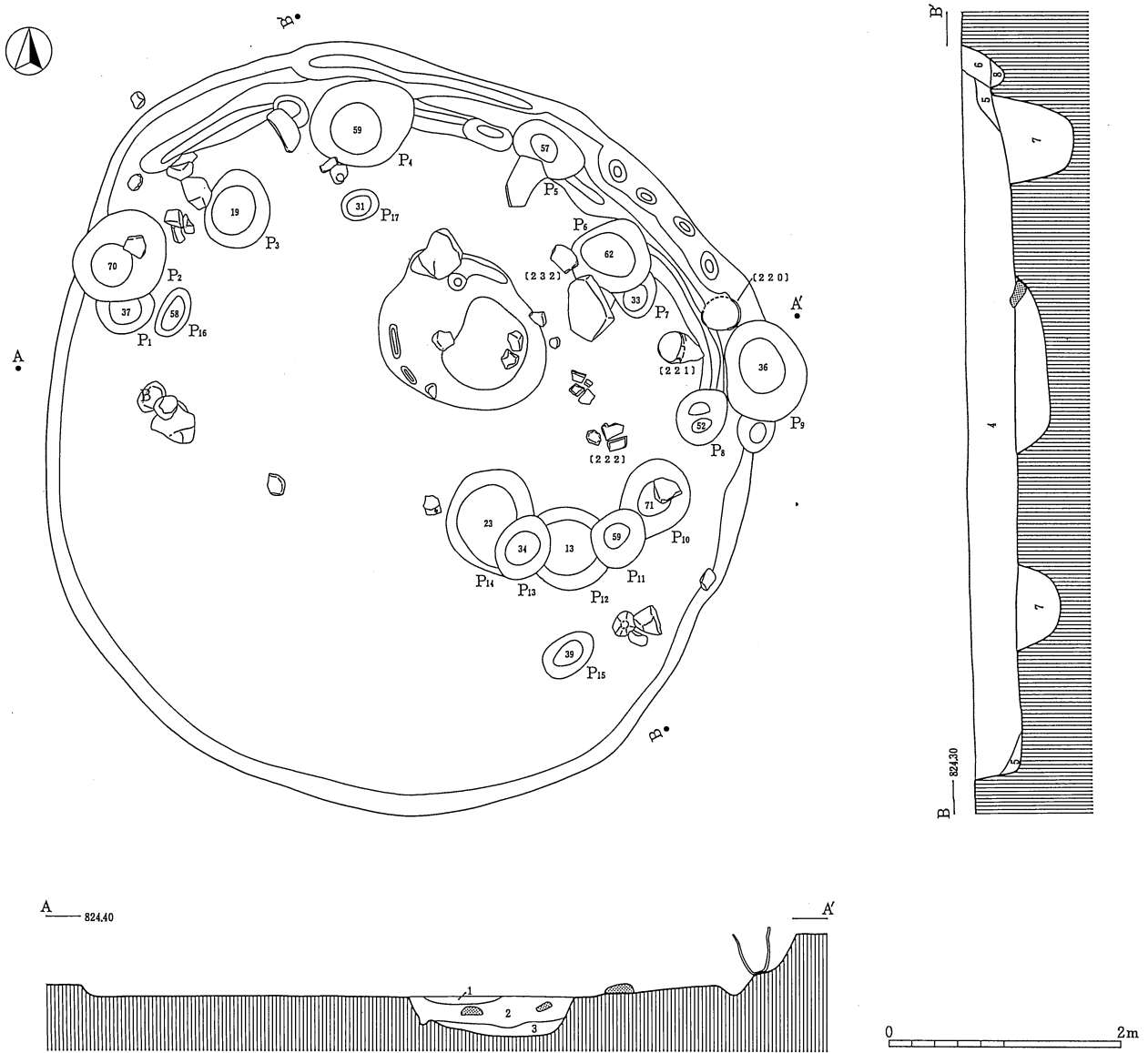
遺物：遺物は少なく、ビニール袋3つにすぎない。土器は2点（218、219）を図示した。218は埋甕で、表面は風化が著しくもろい。石器は欠損した打製石斧2点が出土しているにとどまる。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できよう。

76号竪穴住居跡（遺構：第61図、PL93 遺物：図版119・120、PL150・151）

遺構：P-7、P-8グリッドに位置する。77住、79住と重複する。77住との新旧関係は、先行トレンチによる土層観察の際に、77住の覆土中において、本跡の床面とほぼ同じレベルで、一部であるが粘質土が帯状に続いているのが確認されたことから、これを本跡の貼床と理解し、本跡の方が新しい所産であると判断した（この粘質土層は記録にはとってはいない）。なお、他の床面からは貼床は認められなかったが、比較的良好に締まっており堅固な床となっている。79住は本跡及び77住の調査が終了した後に周溝が検出されたため、より古い所産であると考えられる。規模は長径6.4m、短径6.1mを測り、やや南北方向に長い円形を呈する。壁高は北側では50cm前後を測るが、南側では77号住との重複もあってか10cm程を測るにすぎない。炉は中央北寄りに位置する。炉内は約35cm程の深さの掘り方をもち、炭や灰もわずかながら認められる。また炉石の抜き取り痕が確認できることから本来は石囲炉であったと考えられる。炉内及び炉北側周辺には安山岩質石が散乱しているが、これらは炉石であった可能性が高い。周溝は北側にのみみられ、二重に巡っている。ピットは17ヶが検出された。このうちP2、P4、P5、P6、P8、P10、P11に支柱穴の機能が想定される。また、柱材にはクリが使用されたことが炭化材の鑑定により判明した。

遺物：出土した遺物量は多い。図示した土器は15点（220～234）にのぼる。220と221は床面直上にはほぼ完



第61図 76号竖穴住居跡 1 : 60

形の状態で正位に置かれていた。222は床面より10cm程浮いての出土であり、232は床面からの出土である。覆土の堆積状態からすると14住と非常に類似しており、同様に一括廃棄されたものと理解できるのではないだろうか。石器は石鏃1点(12)、石鏃未製品2点(111)、石錐未製品1点、磨製石斧1点(189)、剥片石器1点(297)、打製石斧25点(248、283)、磨石3点(326)、敲石1点、丸石1点(517)、軽石製品5点(555、556、570、571、636)が出土している。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。

77号竪穴住居跡(遺構：第62図、PL93 遺物：図版121、PL152)

遺構：P-7、P-8、P-12、P-13グリッドに位置する。遺構検出段階で76住、321坑より古いことが理解できたが、79住との新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば本跡の方が古い所産であることが理解できた。壁高は最大でも20cm前後であり、79住と重複する西側では壁は消失している。また北側から東側にかけては巡っている周溝もこの部分では認められないため、平面プランは推定の域をでない。推定規模は長径約6.2m、短径約5.7mを測り、やや南北に長い楕円形を呈するものと考えられる。床には堅致な貼床が全面におよんでいる。南東部の覆土中からは径20~50cm程の軽石が集中して出土している。炉はほぼ中央に位置する。深さ約20cm程の楕円形の掘り方に、安山岩質石を用いた石囲炉を埋設し、掘り方埋土で固定している。北辺と西辺の一部は炉石が抜き取られている。抜き取り痕も確認できる。炉周辺の床面には安山岩質石が散乱しているが抜き取られた炉石の可能性もあろう。また東辺と西辺では扁平な石を縦に配しているのに対し、南辺は上面が平坦な枕状の石を据えており、南辺が焚き口であることが理解できるだろう。炉内の堆積土は2層にわけられ、第2層では灰がまじっている。炉内からは同定不能ながら炭化種実が出土している。ピットは7ヶが検出された。P4とP6には径約40cm程の軽石が認められている。柱を抜いた後に意図的に投棄したものと考えたい。また315坑も本跡の柱穴である可能性がある。

遺物：図示できた土器は少なく、床面出土の235のみである。石器は磨石1点、凹石1点、敲石1点、石皿1点が出土しているがいずれも覆土からである。

時期：出土した土器から、中期5段階に比定できる。

78号竪穴住居跡(遺構：第63図、PL96 遺物：図版121、PL152)

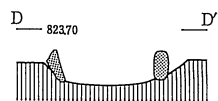
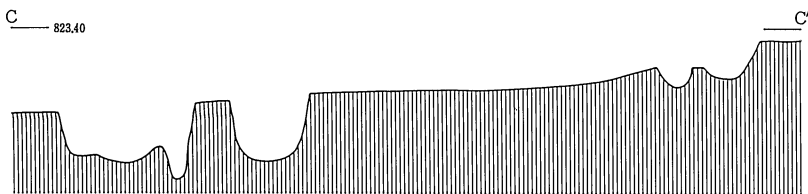
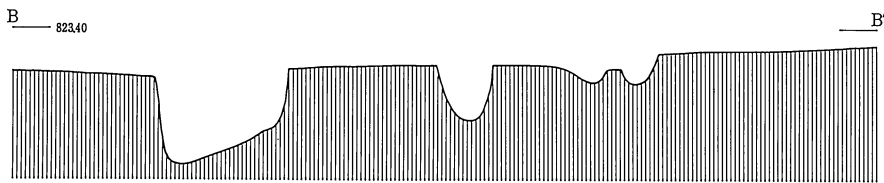
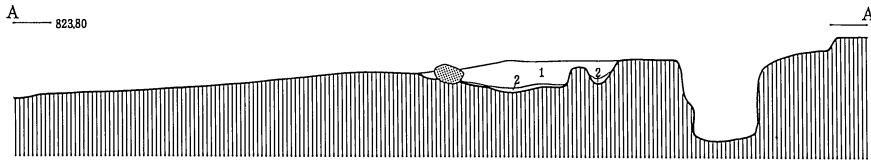
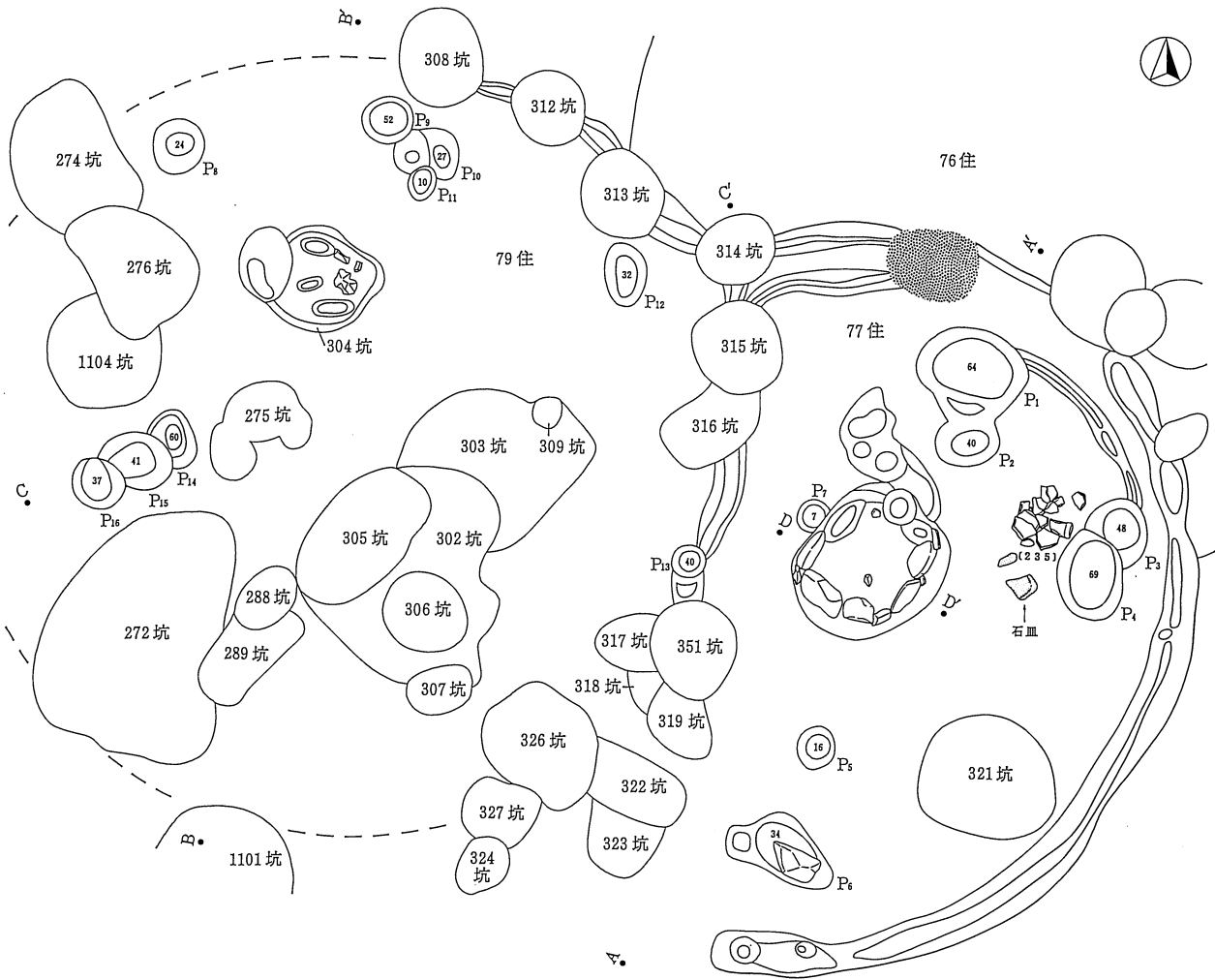
遺構：P-18グリッドに位置する。本跡は検出した段階ですでに壁は消失しており、炉と周溝の存在により住居跡と判断したものである。規模は径3.5m程度を測るものと推定される。平安時代に比定される87住より古いことは容易に判断できるが、遺構検出段階では81住と84住との新旧関係はつかめなかった。出土土器からすれば81住よりも古い。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は約30cm程の深さを測る掘り方を有し、土器片や安山岩質石が散乱した状態で出土している。これらの石は炉石であると考えられるが原位置をとどめているものはほとんどない。覆土は暗褐色土で単層である。ピットは2ヶが検出されたが、いずれも柱穴として理解できよう。

遺物：図示した土器は炉内から出土した2点(236、237)である。石器は打製石斧2点(268)と軽石製品1点(614)が出土している。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できようか。

79号竪穴住居跡(遺構：第62図、PL93 遺物：図版121)

遺構：P-7、P-8、P-12、P-13グリッドに位置する。76住の調査が終了した段階で周溝が確認されたため、住居跡として認定したものである。したがって76住よりは古い所産であると考えられる。77住



0 2m

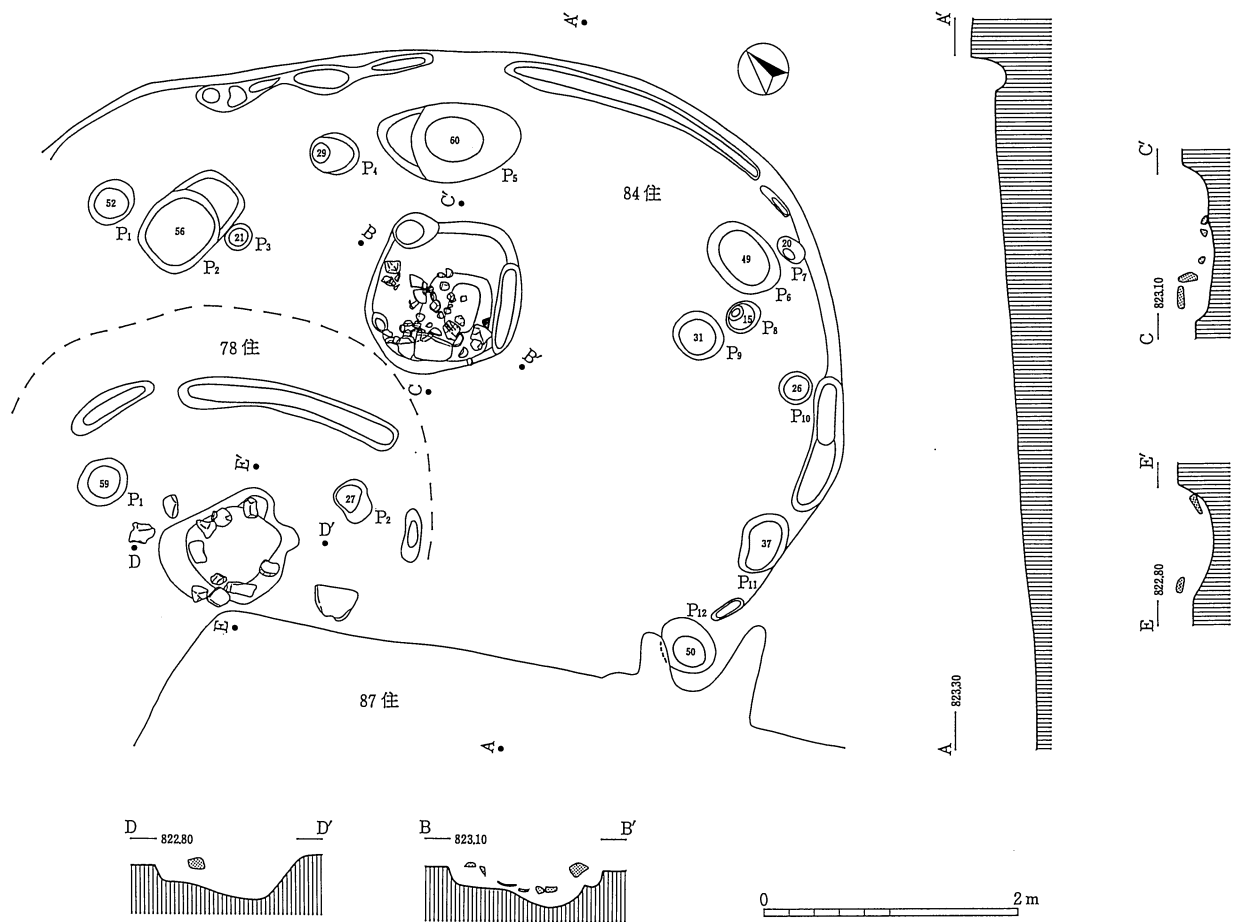
第62図 77号・79号竪穴住居跡 1:60

とも重複し、遺構検出時では新旧関係はつかめなかったが、出土土器からすれば本跡の方が新しい。また302坑をはじめとする多くの土坑と重複するが、住居跡と認定した段階ではすでに覆土は失っていたため、新旧関係は明らかではない。このように数多くの遺構と重複したうえ、壁が消失しているため、平面プランは東側にみられる周溝とピットの配置から推定するしかない。その場合、径6.2m程度の規模になるだろう。炉は認められないが、304坑が炉である可能性も否定できない。床には貼床や硬化面は認められなかった。本跡のピットとしては9ヶを認定した。

遺物：出土遺物は少ない。土器はすべて破片資料で、図示したのは3点（238～240）である。石器も欠損した打製石斧1点、磨石2点（319）のみである。

時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。

80号竪穴住居跡（遺構：第64図、PL94 遺物：図版121、PL152）



第63図 78号・84号竪穴住居跡 1:60

遺構：P-12グリッドに位置する。71住、75住、81住、1溝、298坑、299坑と重複し、遺構検出段階でそのいずれよりも古い所産であることが理解できた。重複部分が多いため、規模は明確ではないが、長径約6.7m、短径約5.5m程度を測るやや南北に長い楕円形を呈すると推定できる。壁高は最大でも約15cmと浅い。たたきしめた堅致な床面が全面におよんでいる。炉は扁平な安山岩質石を縦に配した石囲炉であるが、南辺の炉石は抜き取られている。抜き取り痕も確認できた。炉内はごく浅く掘りくぼめただけのものであり、住居覆土と同じ土が堆積している。炉内及びその周辺には軽石礫が多量に集中している。おそらく本跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。また軽石に混じって安山岩質石もいくつかみられるが、これらには抜き取られた炉石である可能性が高い。周溝は重複部分を除き全周している。東側では二重に巡



第64図 80号竪穴住居跡 1 : 60

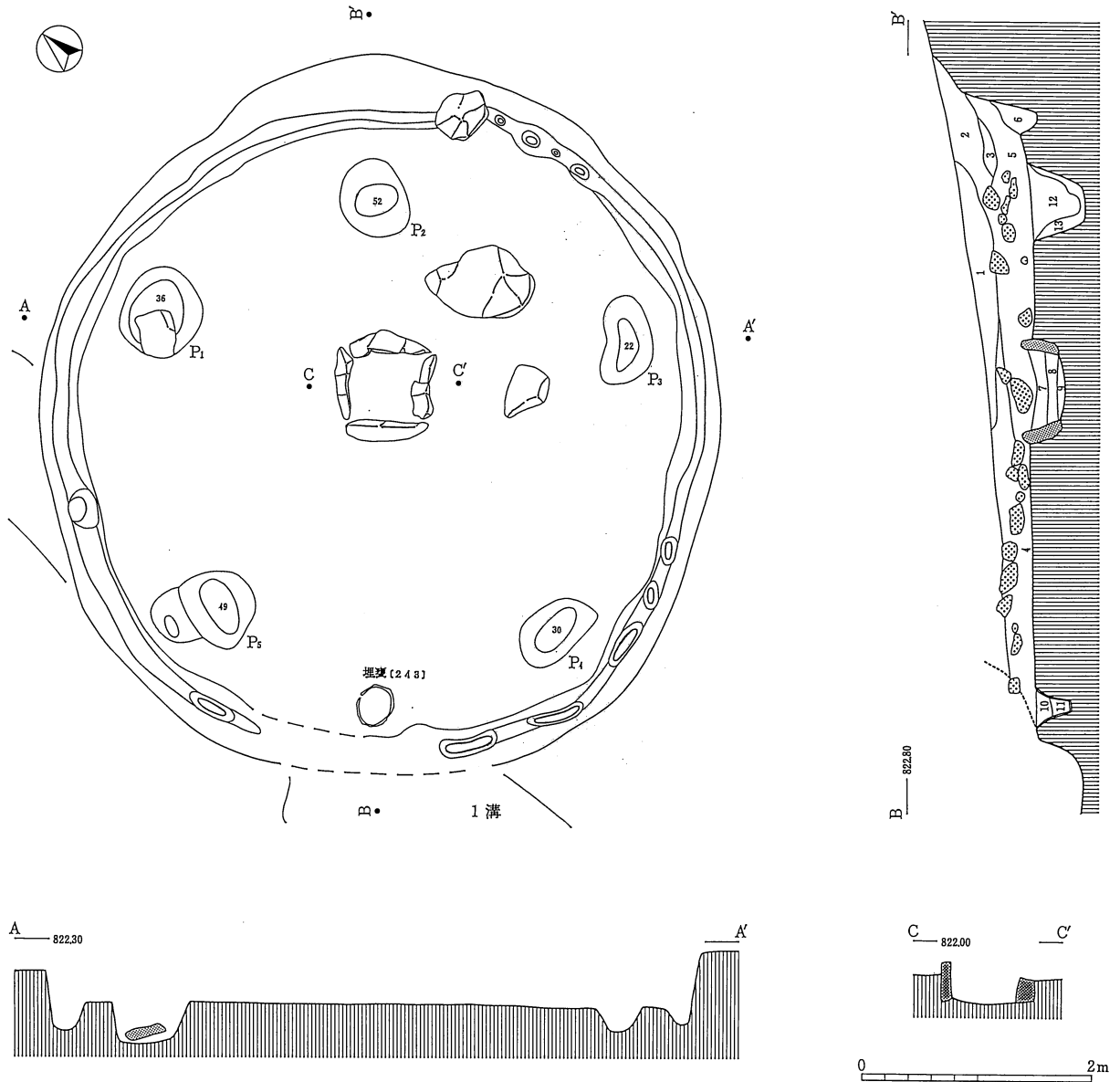
る部分もある。ピットは6ヶが検出された。

遺物：遺物は少ない。図示しうる土器は2点（241、242）にとどまる。241は床面出土である。石器も打製石斧9点（269）、敲石1、軽石製品1点（637）が出土するにすぎない。

時期：出土した土器から、中期5段階に比定できる。

81号竪穴住居跡（遺構：第65図、PL94 遺物：図版122、PL152）

遺構：P-11、12、16、17グリッドに位置する。遺構検出段階で80住、85住より新しく、87住、1溝よりも古い所産であることが理解できた。P5及び埋甕は1溝の下から検出されたものである。壁高は重複する部分を除くと約50~80cm程を測り、比較的深い。覆土は6層にわけられる。覆土のとりわけ4層と5層には径20~40cm程の軽石が多量に含まれている。住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。規模は長径推定6.2m、短径5.9mの円形を呈する。床には貼床や硬化面は認められなかった。なお炉の東側にみられる2点の安山岩質石は地山と一体をなすものであり、意図的に埋め込まれたものではない。使用された形跡もない。炉はほぼ中央に存在し、扁平な安山岩質石を4個用いた石囲炉である。炉内の掘り方は約30cm程であり、覆土は3層にわけられる。炉内の1層、2層には住居覆土同様に軽石が投げ込まれている。埋甕（243）は南西隅に認められる。口縁部を打ち欠いた土器を正位に埋設していた。埋土からわずかなが



第65図 81号竪穴住居跡 1:60

ら炭化物が出土している。周溝は全周している。ピットは5ヶが検出され、いずれも柱穴と想定される。P1の底部近くからは扁平な安山岩質石が出土している。礎石と同じ機能をもつ可能性もあるかもしれない。

遺物：図示した土器は4点(243~246)である。243は埋甕、他は覆土からの出土である。246の単節縄文原体は粗大で粗い。石器は石鏃4点(25、26)、石錐未製品2点、打製石斧32点(244)、剥片石器1点、磨石3点、凹石3点(345)、敲石1点、軽石製品1点(620)が出土している。他には獣骨片が出土している。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

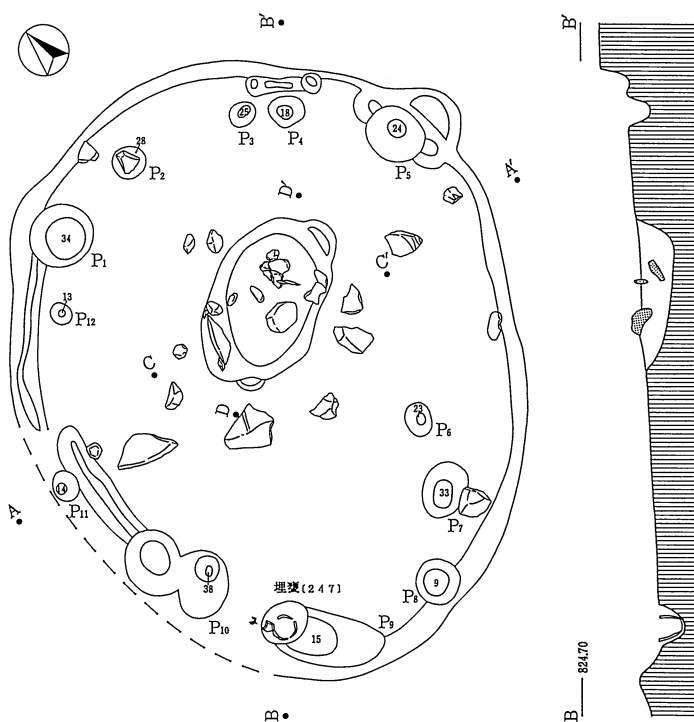
82号竪穴住居跡(遺構：第66図、PL96 遺物：図版122、PL153)

遺構：P8、P9、P13、P14グリッドに位置する。長径4.9m、短径4mの規模を測り、南北方向に長い楕円形を呈する。壁高は北壁では20cm前後を測るが、南西部では消失している。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は中央やや北寄りに存在している。不整楕円形の掘り方をもち、約25cm程の深さを測

る。西辺にのみ扁平な安山岩質石が縦に配されており、本来は石囲炉であったことが理解できる。西辺以外は炉石が抜き取られたものと考えられる。炉内覆土及びその周辺には石が散乱しており、これらが抜き取られた炉石である可能性も高い。南西隅にはP9を切るように埋甕(247)が認められた。口縁部から頸部上半部を欠した土器を正位に埋設している。周溝は西側の一部に認められるにとどまる。ピットは12ヶが検出されたが、いずれも壁柱穴と考えられよう。

遺物：土器は4点(247~250)を図示した。247は埋甕である。石器は打製石斧2点、磨石2点(335)、敲石1点が出土した。

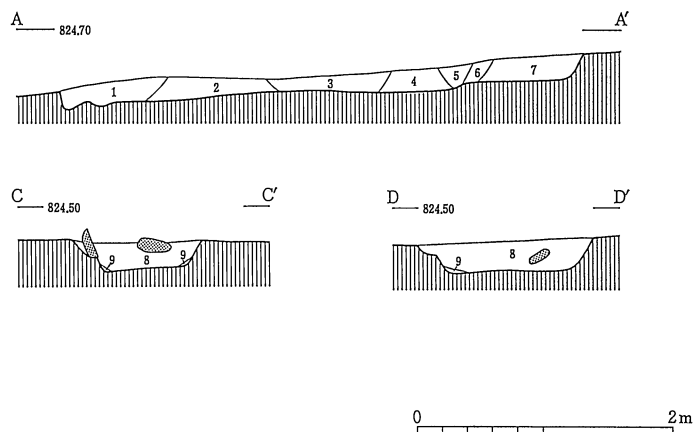
時期：出土した土器から、中期7段階に比定できる。



83号 竪穴住居跡 (遺構：第67図、PL95)

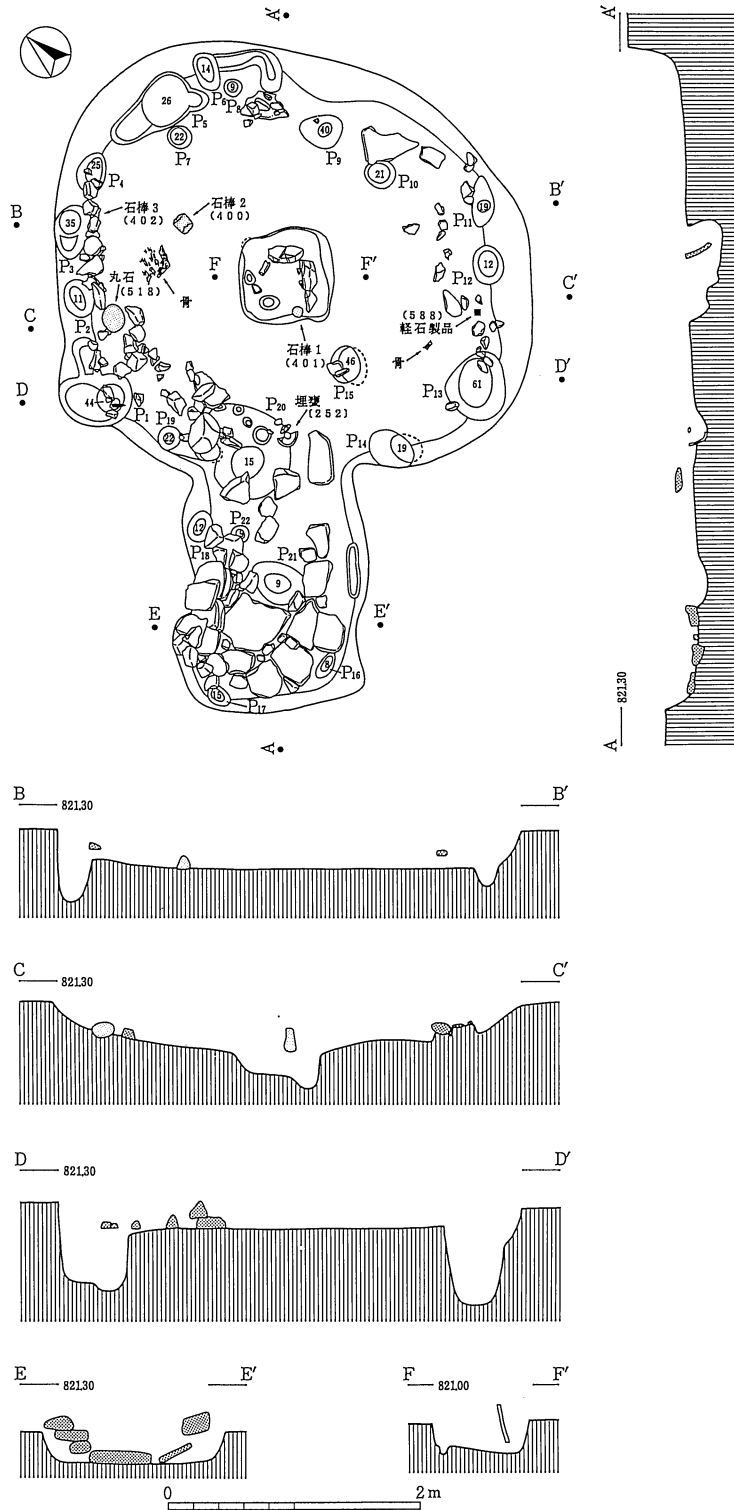
遺物：図版123、PL153)

遺構：T-20、T-25、P-21、P-18グリッドに位置する。106住と重複し、それよりもより新しい所産であることがわかる。柄鏡形の敷石住居跡である。主軸長は5.25mを測る。主体部は隅丸方形に近い形状を呈し、南北径約3.3m、東西径3.75m前後を測り、東西方向にややひろがっている。



第66図 82号 竪穴住居跡 1:60

る。張り出し部は南北径約1.9m、東西径1.45mを測る。壁高は約15、約45cmを測る。住居覆土は単層であるが埋土とともに多量の軽石が出土している。本跡廃絶後に意図的に投棄されたものと思われる。主体部では壁に沿って扁平な安山岩質石が敷かれ、その隙間には小礫をはじめ、打製石斧や磨製石斧なども埋め込んで敷石を構成している。敷石の遺存状態はあまりよくないが、当初から敷石は壁沿いに限られているようである。丸石また西壁沿いでは敷石上もしくは若干浮いて礫が巡っている。礫に混じって小型石棒A類(402)も認められている。張り出し部では連結部近くの一部を除き敷石がみられ、さらに特筆すべきは石積みを伴っていることである。石積みは横積みされた安山岩質石から構成されているが、階段状の施設は認められなかった。炉は方形の掘り方を有し、その内側に扁平な安山岩質石を縦に埋め込み、埋土で固定した石囲炉である。北辺と東辺及び西辺の一部の炉石は残存しているが、西辺と南辺の炉石は抜き取られている。南東隅にはやや小ぶりの石棒A類(401)が樹立している。主体部と張り出し部の連結部付近には埋甕(252)が存在している。口縁部から胴部下半までを欠し、底部のみを正位に埋設したものである。周溝は北側の一部のみでみられるのみである。ピットは21ヶが検出された。P5、P20を除いて壁柱



第67図 83号竖穴住居跡 1 : 60

穴であると考えられる。張り出し部の壁沿いにもピットもしくは溝が認められるため、張り出し部にも何らかの上屋が存在していたことが理解できる。P20は埋甕が埋設してあるため、対ピットが連結したものではないかと考えられよう。炉の西側の床面からは人骨片が出土している。人骨は南東隅近くからも認められる。

遺物・時期：土器は4点（251～254）を図示した。251は基本的には縦に垂下する隆帯によって縄文帯と無文帯が交互に配されるが、1か所のみその配列が乱れ、縄文帯が続く部分がみられる。252は埋甕であ

る。石器は石鏃2点(27)、打製石斧13点、磨石11点、敲石7点、磨製石斧1点(190)、剥片石器2点(296)、石棒A類3点(400~402)、多孔石2点(450)、丸石1点(518)、軽石製品8点(542、588、589、622)が出土している。丸石は西壁沿いの床面からの出土である。この丸石も敷石を構成していると考えられる。他に獣骨片及び、キジ骨片が検出された。出土した土器から、中期10段階に比定できる。

84号竪穴住居跡(遺構:第63図、PL96 遺物:図版123)

遺構:P-12、P-13、P-17、P-18グリッドに位置する。78住と87住と重複する。平安時代に比定される87住より古い所産であることは容易に判断できるが、78住との新旧関係は遺構検出段階で判断することはできなかった。壁は北側から東側では約20cm程を測るが、西側では消失している。したがって規模は推定の域を出ないが、長径約7m、短径約5m程度を測る、北東-南西方向に長い楕円形を呈するものと想定される。床は掘り込んだIII層をそのまま利用している。炉は推定プランの中央やや北寄りに存在している。方形の掘り方を有し、約35cm程の深さを測る。本来は石囲炉であったと考えられるが、原位置をとどめているのは南辺の炉石だけであった。この炉石は上面が平坦であり、おそらくここが炊き口であったと思われる。炉内には破碎された石がみられるが、これらのうちには抜き取られた炉石の一部も含まれている可能性が高いだろう。周溝は比較的短いものが北側から東側にみられている。ピットは12ヶが検出されたが、柱穴としてはP2、P5、P6、P12があてはまろうか。

遺物・時期:出土遺物はビニール袋に3つと少ない。図示した土器は3点(255~257)である。石器は打製石斧1点と凹石2点が検出されただけである。中期7段階に比定できる。

85号竪穴住居跡(遺構:第68図、PL96 遺物:図版124、PL153)

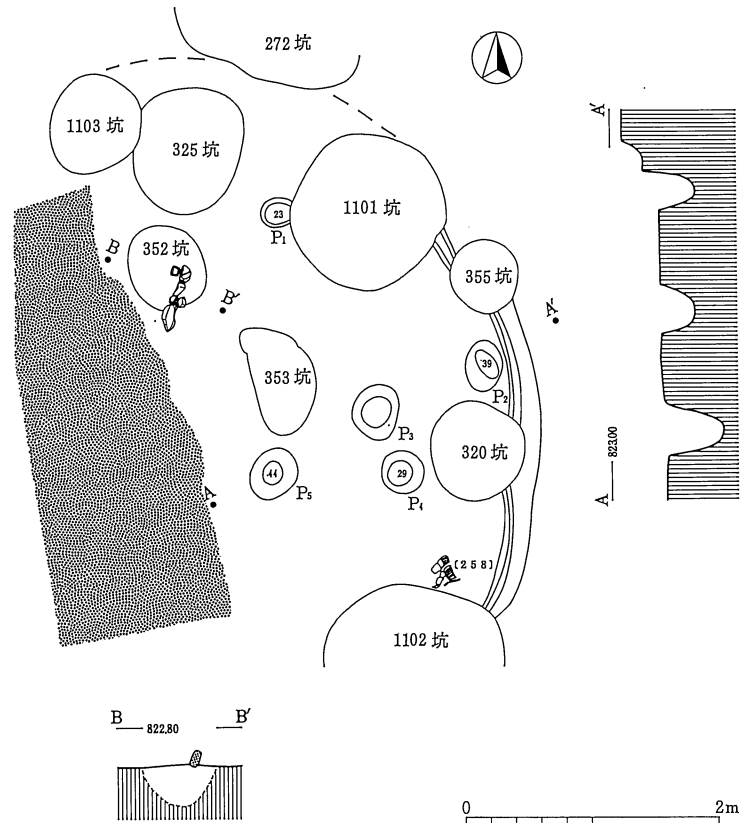
遺構:P-12グリッドに位置する。81住、1101坑をはじめとする多数の土坑と重複する。このうち352坑は本跡の炉より古い構築であるため、本跡の方が新しい所産であることは確実であるが、他の遺構との新旧関係は検出段階では不明であった。出土土器からすれば81住の方が新しい。平面プランも東側で約20cm程の壁高を測る以外ははっきりしない。東側に残存する周溝の巡りから推定すれば、径5.5m程度を測るものと想定されよう。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は352坑の上面に、おそらく東辺にあたる位置に扁平な安山岩質石を縦に配しているのが認められるため、石囲炉であることが判断できる。炉石が残っているのはこの東辺のみであり、他は抜き取られたものと考えられる。炉内の掘り込みはほとんどなかったものと理解できる。ピットは5ヶが検出されたが、柱穴は不明である。

遺物・時期:出土遺物は土器のみでビニール袋に3つと少ない。図示した土器は3点(258~260)であり、258は床面から出土している。259と260は加曾利E III式期以降のものであるが、258の土器をもって中期7段階に比定したい。

88号竪穴住居跡(遺構:第69図、PL96 遺物:図版124、PL153)

遺構:N-19グリッドに位置する。403坑と重複し、遺構検出段階で本跡の方が古い所産であることが理解できた。また壁が消失しているため、新旧関係は不明ではあるが92住とも重複していると理解できよう。本跡は南半部が調査区外であるため、北半部のみの調査にとどまった。径約4.5m程度を測るものと想定できる。壁高は約20cm前後を測る。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は調査範囲内では認められなかった。周溝はみられない。ピットは7ヶが検出されたが、このうちP2、P5、P6が柱穴に該当しよう。

遺物:P7の周辺には多量の軽石礫とともに土器が集中して出土している。図示した262と263はこの周辺



第68図 85号竪穴住居跡 1 : 60

の床面からの出土である。典型的な焼町土器である261はP 5 周辺の床面からの出土である。石器は図示した石錐1点(99)と石皿1点(420)のみである。石皿は床面から5cm浮いたところから出土している。
 時期：出土した土器、とりわけ261から、中期1段階に比定できよう。

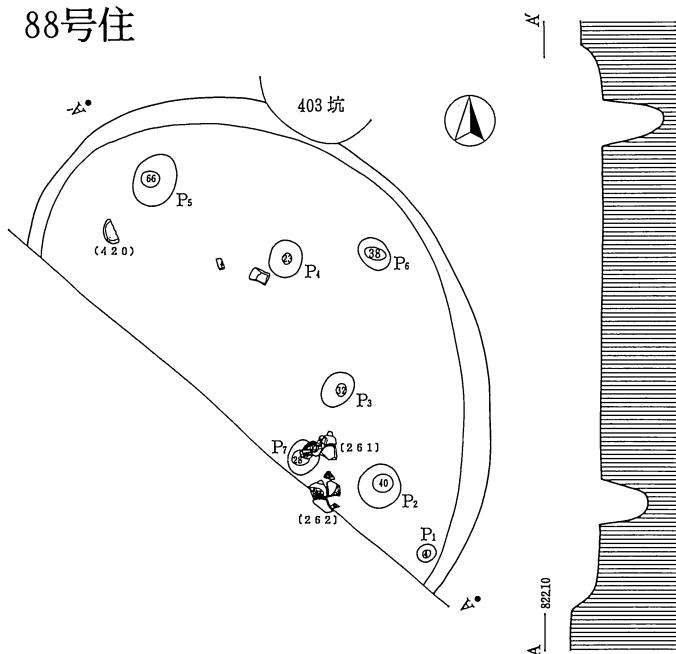
89号竪穴住居跡 (遺構：第69図、PL97 遺物：図版125・126、PL154)

遺構：N-13、N-14グリッドに位置する。南半部が調査区外にあたるため、北半部のみの調査となった。壁高は残存する西側では15~40cm前後を測るが、北側から東側にかけては攪乱のため壁は消失している。したがって平面プランは明確ではないが、径約3.8m程度の規模を測るものと想定される。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は安山岩質石を用いた石囲炉であり、完存している。多量の軽石・安山岩質石が炉を覆っていた。他の覆土からはそれほど軽石等はみられず、炉に集中していたことは炉に対する何か特別な観念が存在したことを示すものであろうか。炉内は10cm程の掘り込みを有し、中央部にはさらに約15cmの小穴が認められる。炉内からは炭化したオニグルミ4点が検出された。周溝はみられない。ピットは3ヶが検出されたが、柱穴は不明である。

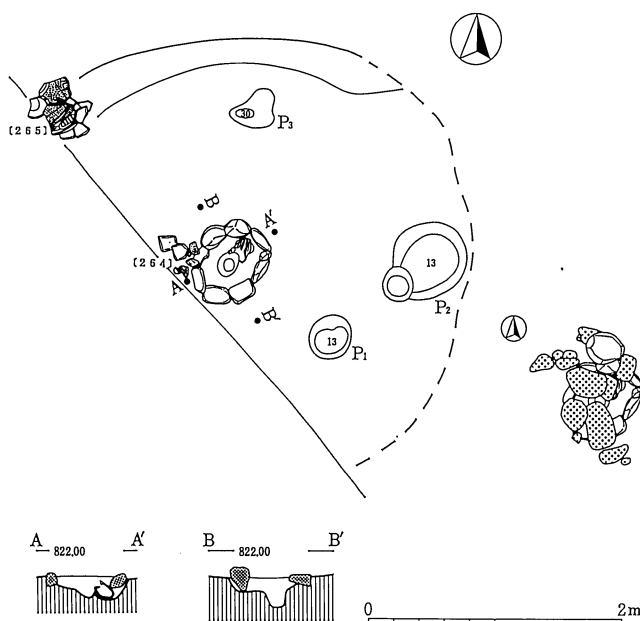
遺物：図示した土器は12点(264~275)を数える。264は炉周辺からの出土、270は炉内から出土したものである。また本跡の西脇、調査区際からは土器片の集中個所がみられている。III層上面にひろがるものであり、ここから265が検出された。265は撚糸を地文とする。石器は石鏃2点(28)、欠損した打製石斧7点、剥片石器1点、磨石1点、凹石1点、軽石製品4点(557、590)が出土している。他には炉内から獣骨片と鳥骨片が検出された。

時期：269は井戸尻III式、268・270は中期7段階頃だが、他の土器から中期3段階に比定したい。

88号住



89号住



第69図 88号・89号竪穴住居跡 1:60

90号竪穴住居跡（遺構：第70図、PL90 遺物：図版127、PL155）

遺構：N-9、N-10、N-14、N-15グリッドに位置する。1121坑ほか多数の土坑と重複するが、遺構検出段階で1121坑よりも古く、1040坑より新しい所産であることが判明した以外は新旧関係が不明である。本跡は覆土が浅く、しかも多量の軽石礫が覆土に混じっていたため、覆土を除去した段階では壁はほとんど消失しており、わずかに東側の壁が約20cm程と周溝が認められるだけであった。平面プランはその壁高と周溝の巡り及びピットの配置から推定するしかないが、その場合は長径約6.2m、短径約5.7m程度を測るものと想定できよう。東壁から炉の周辺には貼床が認められている。南側では床の凹凸が激しく若

干の攪乱を受けているようである。炉は南辺を除く3辺には扁平な安山岩質石を縦に配し、南辺には上面が平坦で他辺よりも一段低い平石を据えている。南辺が焚き口であることが理解できる。炉内の掘り方は約25cm程であり、覆土は2層にわけられる。第2層は灰が堆積している。ピットは11ヶが検出されたが、このうち支柱穴としてはP1、P2、P3、P6、P10、P11にその可能性があるだろう。

遺物：土器は炉の南側の覆土中から出土するものが多い。図示した土器は4点(276～279)であり、276は床面から約50cm程浮いて出土している。また前年度に単独土器11としてとりあげた986は、位置的には本跡に含まれる。所属するかどうかは不明であるが、その可能性は十分高い。石器は石鏃1点(29)、打製石斧11点(202、245、266、336)、磨石2点、敲石2点、軽石製品3点(617)が出土している。またヒスイの原石も1点(663)だが検出されている。土製品としては、土偶2点(24、34)が出土している。他には炉内からシカの骨と獣骨片が検出されている。

時期：出土した土器から、中期5段階に比定できる。

91号竪穴住居跡(遺構：第70図、PL98 遺物：図版128、PL155)

遺構：N-14、15グリッドに位置する。東側は40cm程の壁高を測るが、北西部は攪乱による破壊を受け、南側は壁が消失している。したがって平面プランは明確ではないが、径約6m程を測るものと推定できる。1124坑、1125坑、1126坑と重複し、遺構検出段階でそのいずれよりも古い所産であることが理解できた。推定プランに従えば、92住とも重複すると考えられるが、新旧関係は不明である。覆土中には多量の軽石礫が集中していた。床面出土はほとんどなく、床から数～10cm程浮いて出土しているものが大半である。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は東西辺は円礫を並べ、北辺には扁平な石を縦に配している。南辺は扁平石を横置し、平坦面を上面にして据えていて、他辺より一段低くなっている。いずれも安山岩質石を用いている。炉内にはほとんど掘り込みはみられない。周溝は東側にみられるのみである。ピットは25ヶが検出された。柱穴の可能性のあるものとしてはP3、P7、P11、P12、P14、P15があげられよう。またP11とP12は1126号土坑の底部で検出されたものである。

遺物：軽石礫と同様、遺物の大部分は覆土中からの出土であり、床面出土の遺物はほとんどみられない。図示した土器は6点(280～285)である。石器は石鏃4点、打製石斧3点(249)、剥片石器1点、凹石2点、敲石1点、石皿1点(421)、丸石1点(519)が出土している。519は小穴を有し、多孔石としての機能も認められる。土製品としては土偶1点(5)が出土している。

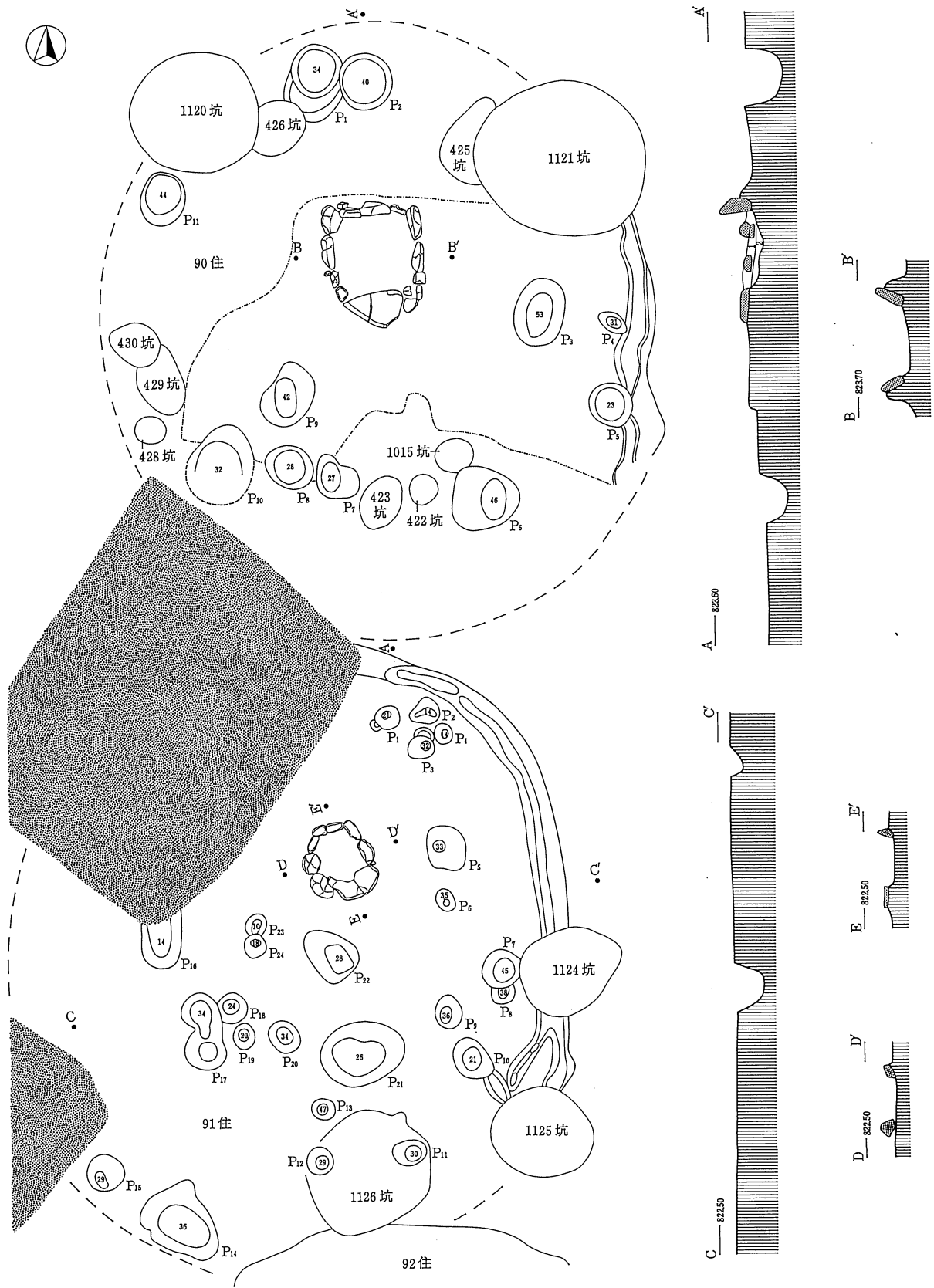
時期：283と285は井戸尻式期のものだが、他の土器からは中期5段階に比定されよう。

92号竪穴住居跡(遺構：第71図、PL98)

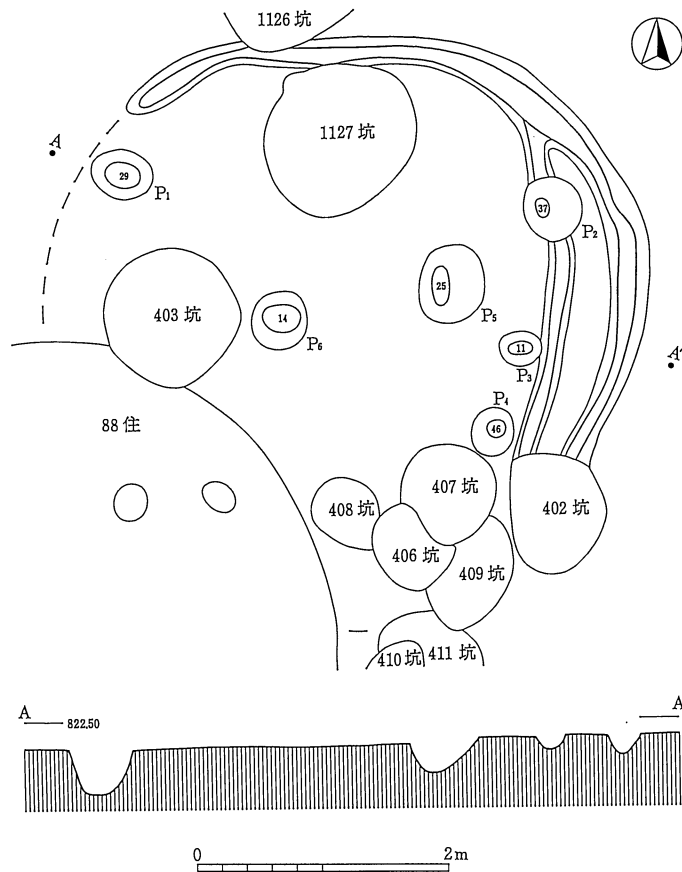
遺構：N-14、15グリッドに位置する。北側から東側にかけては数～15cm程の壁高と周溝が巡っているが、他では壁は消失している。したがって、平面プランは推定の域をでないが、径4.8m程度を測るものと想定できる。東側の周溝は二重に巡っており、この方向に建て替えを行ったようである。1127坑をはじめとする多くの土坑と重複するが、遺構検出段階でいずれも本跡より新しい所産であることが理解できた。推定プランに従えば、88住とも重複するが、新旧関係は不明である。覆土中からは多量の軽石礫が出土している。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は認められなかった。ピットは6ヶが検出された。柱穴としてはP1、P2、P3、P4に可能性があるだろう。

遺物・時期：P5から土器片が検出されたが、図示していない。縄文中期には比定できよう。

93号竪穴住居跡(遺構：第72図、PL98 遺物：図版129)



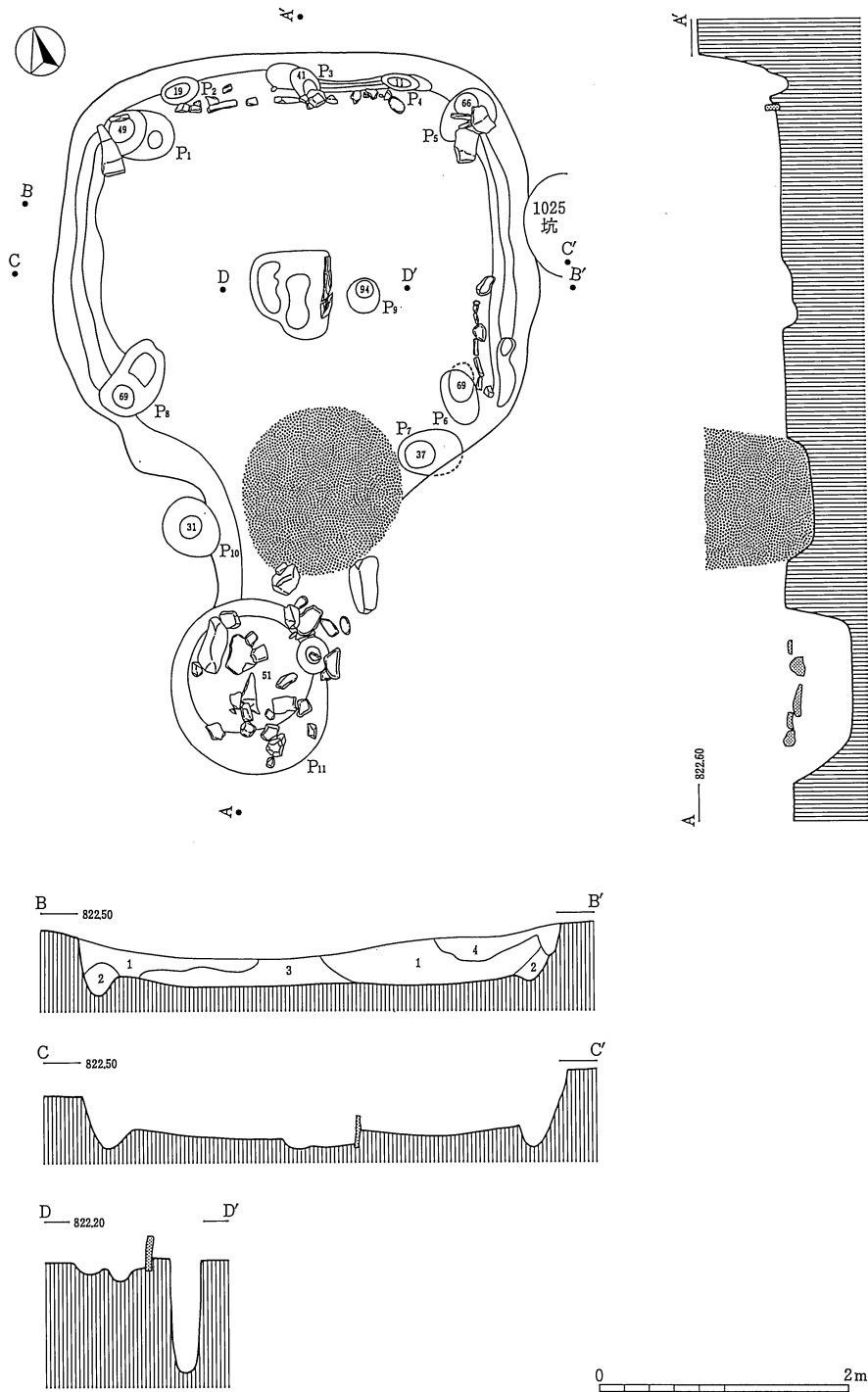
第70図 90号・91号竪穴住居跡 1:60



第71図 92号竪穴住居跡 1 : 60

遺構：O-16グリッドに位置する。1025坑と重複し、遺構検出段階の所見から本跡の方が古い所産である。柄鏡形敷石住居跡である。張り出し部の南端には大きめのピットが存在し、その上面には敷石に用いられたと思われる安山岩質石がみられている。調査時には本跡に属するピットとして理解したが、上面に敷石が存在しているのであれば、本跡とは直接関係がなく、より古い構築のピットである可能性も高い。主軸長は約5.8mを測る。張り出し部との連結部分が攪乱による破壊を受けているためはっきりしない部分はあるが、主体部は東西径3.9m、南北径約3.7m程を測り、六角形を呈する。壁高は30~50cm程度を測る。敷石は北壁際及び東壁際の柱穴沿いに存在している。扁平な石を縦に埋め込むものがほとんどであり、北西隅の石も本来は縦に配されていたものと考えられる。それ以外の敷石は全く認められず、当初から敷かれていなかったのではないかとと思われる。張り出し部には東西にS1とS2という大ぶりな石が床面に置かれており、意図的な配置を感じさせる。東西径は約1m程を測る。前述のP11の上面周辺に扁平な石がやや散乱気味に認められている。これらは敷石として判断したい。壁高は最大で15cm程度であり、南側では消失している。覆土は4層にわけられる。炉はやや不整な方形の掘り方をもち、東辺には扁平な安山岩質石を縦に配しており、石囲炉であることがわかる。炉石は他の3辺にはみられないが、抜き取られた痕跡が認められる。炉内の掘り込みは20cm程度である。周溝は主体部の東・北・西の3辺に認められている。ピットは11ヶが検出された。柱穴としてはP1、P5、P6、P8が該当する。炉の東脇に位置するP9は1m近い深さを有するが、その性格は不明である。

遺物：出土土器は少なく、すべて破片資料である。図示しうるものは2点(286、287)のみであった。石器は石鏃1点、打製石斧7点、磨石2点、凹石2点(349)、敲石1点(385)、多孔石4点(452~454)が出土している。



第72図 93号竖穴住居跡 1 : 60

時期：出土した土器から、中期10段階に比定できる。

94号竖穴住居跡（遺構：第73図、PL99 遺物：図版129、PL156）

遺構：O-11、12グリッドに位置する。67住、95住、1133坑等と重複する。67住は前年の平成5年度に調査されたものであるため、新旧関係をつかむに至らなかった。出土土器からすれば本跡の方が新しい。また95住との新旧関係も把握できなかった。1133坑をはじめとする多数の土坑は遺構検出段階で本跡よりも新しい所産であると判断した。壁高は約20~40cm前後を測るが、南西部では壁は消失している。南東部は

95号住と重複するが、規模は径約5.8m程を測るものと推定できる。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉はほぼ中央に存在している。本来は石囲炉であったと考えられる。長方形の掘り方を有し、炉内及び周辺には安山岩質石が散乱している。これらは取りはずされた炉石であろうと思われる。炉に壊されるように左脇には浅いピットが存在している。覆土はしまりの悪い褐色土であり、他のピットとは趣きを異にする。炉内の掘り方は約20～30cm程であり、灰や焼土は認められない。周溝は北側から東側にかけてと西側の一部にみられる。ピットは18ヶが検出された。柱穴の可能性のあるものとしてはP1、P2、P4、P5、P6、P7、P9、P10があげられ、壁柱の可能性が高い。P6では掘り方北際の底部に石を埋め、その上に扁平な石を縦に配している。柱を補強したものでしょうか。

遺物：図示した土器は4点（288～291）である。291は遺構外出土が主体を占めるが、1片のみが本跡出土であったため、ここで掲載する。ただし本跡には伴わないと思われる。289は4単位の波状口縁をもち、胴部には櫛歯状沈線を施す。石器は、石鏃1点、磨製石斧1点（175）、打製石斧15点（267）、剥片石器1点、磨石2点（337）、凹石1点、敲石1点、軽石製品2点（558、575）、石棒1点（403）、台石4点、石皿2点（422）、丸石1点（520）が出土している。炉西脇からは緑色片岩製の石棒（403）が、そこから50cm程南には同じく緑色片岩製の石皿が出土している。いずれも床面より10cm程浮いての出土である。地元産ではない石材を用いた石棒と石皿は何らかの有機的な結びつきが想定されよう。なお、遺憾ながら石皿は現場にて盗難に遭ってしまった。土製品としては土偶1点（10）が出土している。他には炉内から獣骨片が検出されている。

時期：288は加曾利EⅢ式新期、291は曾利Ⅰ式期に位置づけられるが、中期8段階に比定される289をもって本跡の時期としたい。

95号竪穴住居跡（遺構：第73図、PL99 遺物：図版129）

遺構：O—11、12グリッドに位置する。94住と1133坑をはじめとする5基の土坑と重複する。遺構検出での所見により、土坑はすべて本跡よりも新しい所産であると考えられるが、94住との新旧関係はつかめなかった。壁高は数～20cm前後を測る。土坑と重複する部分が多いが、径3.3m程の規模を測り、隅丸方形に近い形状を呈する。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は認められなかった。1141坑が炉跡である可能性もある。周溝は南側で一部を除いて全周している。ピットは3ヶが検出された。このうちP2、P4はP1とともに柱穴である可能性があるが、同時にP3とあわせて何らかの出入口部施設を構成していた可能性もあると思われる。

遺物・時期：出土遺物はビニール袋に1つにすぎない。土器はすべて破片資料であり、2点（292、293）を図示したにとどまる。石器は図示した軽石製品1点（548）のみである。中期8段階に比定できようか。

96号竪穴住居跡（遺構：第74図、PL99 遺物：図版130）

遺構：N—10、O—6グリッドに位置する。98住と1154坑をはじめとする多数の土坑と重複する。敷石住居跡である98住の敷石が本跡内まで認められるため、本跡よりも新しい所産であることが理解できる。土坑については1155坑が本跡の炉石で覆われていることから本跡の方が新しいと判断できる。1148坑、1154坑、441坑は遺構検出段階で本跡よりも新しいことがわかる。壁高は浅く最大でも10cm程である。規模は南北径約5.2m、東西径5.65mを測り、やや東西に長い。床は炉の西側にわずかではあるが貼床が認められている。炉は中央やや北寄りに存在している。安山岩質石を用いた石囲炉である。南辺を除く3辺は扁平な石を縦に配するが、南辺は平坦面を上にして据えてある。南辺の炉石は本来はひとつの石であったものだが3つに割れている。炉内の掘り込みは約20cm程であり、覆土からは炭化物が多くみられている。こ



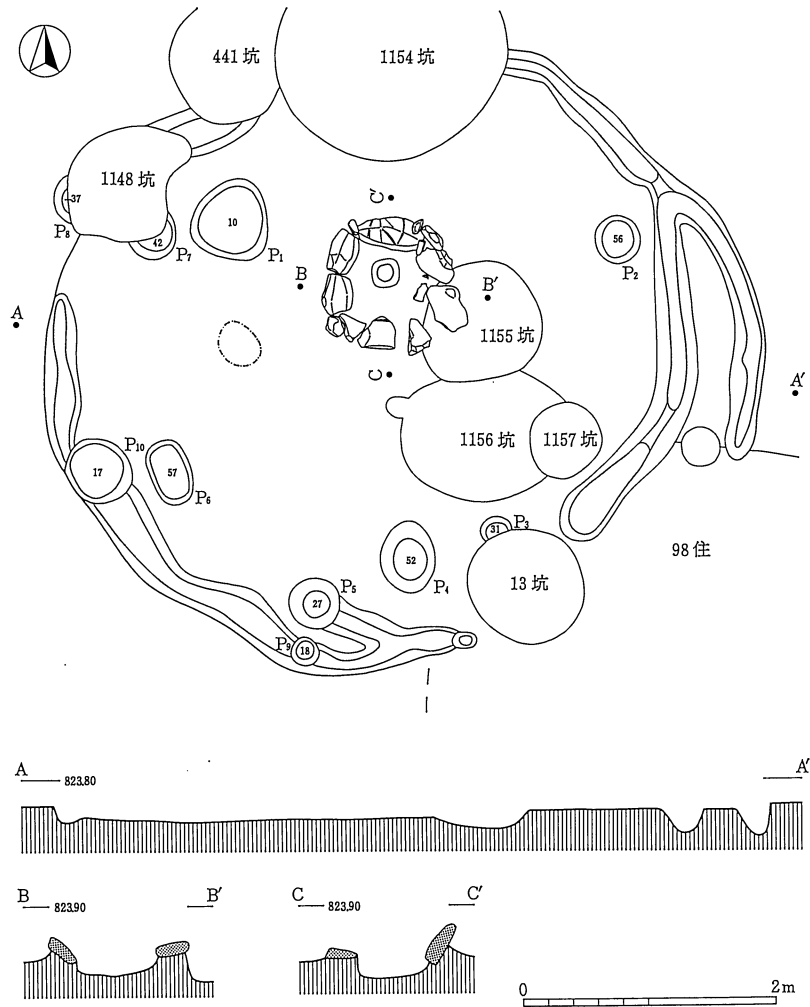
第73図 94号・95号竪穴住居跡 1 : 60

のうちの1点を鑑定したところクリ材であることが判明した。また放射性炭素測定では 4630 ± 100 BP (Gak-18680) という値が出されている。周溝はほぼ全周し、東側では二重に巡っている。この方向に拡張したのであろう。ピットは10ヶが検出され、支柱穴としてはP2、P3、P4、P6、P7が該当するだろう。遺物：出土遺物はビニール袋に2つにすぎない。土器はすべて破片資料であり、10点(294~303)を図示した。石器は、石鏃4点(9、13、30)、打製石斧2点(209)、磨石3点(329)、敲石1点、台石1点が出土している。

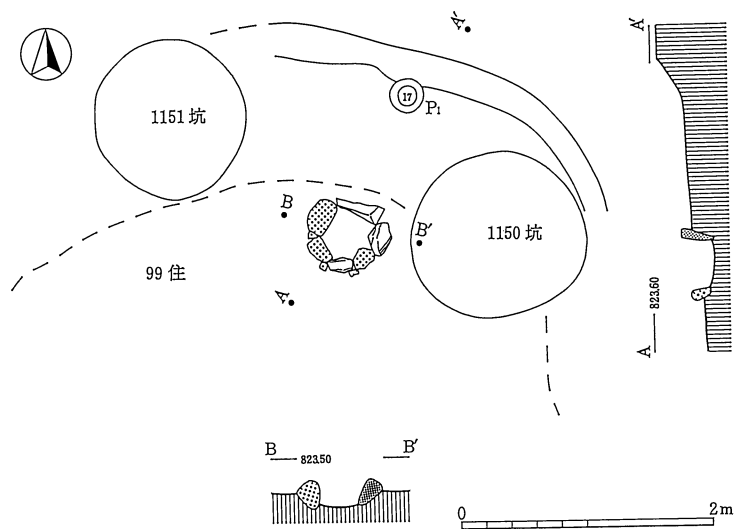
時期：294は加曾利EIV式期、301は井戸尻式期、297は時期不明であるが、他の土器から中期7~8段階頃に比定できようか。

97号竪穴住居跡 (遺構：第75図、PL99 遺物：図版130・131、PL156)

遺構：O-11グリッドに位置する。99住、1150坑、1151坑と重複する。99住の覆土上面に本跡の炉が存在



第74圖 96号竖穴住居跡 1 : 60



第75圖 97号竖穴住居跡 1 : 60

していることから99住より新しい所産であると判断できる。遺構検出段階では土坑との新旧関係はつかめなかった。壁高は北側で15cm程の深さを測るのみで、他は消失している。ピットも1ヶが検出されたのみであり、柱穴かどうか不明である。したがって平面プランや規模もはっきりしない。炉は安山岩質石と軽石とを組み合わせた石囲炉である。炉は多量の軽石礫によって覆われていた。安山岩質石は扁平であり、縦に配している。炉内の掘り込みは浅く約15cm程を測るにすぎず、覆土には灰や焼土、炭化物などはみとめられなかった。周溝はみられなかった。

遺物：図示した土器は9点（304～312）である。石器は、石鏃3点（31）、打製石斧21点（282）、磨製石斧1点、凹石1点（347）、敲石1点（377）、石皿1点（424）が出土している。石皿は小穴を有しており、また砥石としての使用も想定できるものである。他には獣骨片が検出されている。

時期：308は加曾利EIV式期、312は称名寺式期であるが、他の土器から中期8段階に比定したい。

98号竪穴住居跡（遺構：第76図、PL100 遺物：図版132）

遺構：N-5、O-6、N-15、O-11グリッドに位置する。敷石住居跡であり、その敷石の残存状況が



第76図 98号竪穴住居跡 1:60

ら、重複する96住、97住、99住、102住のいずれよりも新しい所産であることがわかる。壁高は北東側で約15cmを測るほかは、壁は消失している。覆土からは多量の軽石礫が出土している。そのため、平面プラン・規模は残存する壁の巡りとピットの配列、それに敷石の配置から推測するしかない。それにしたがえば、柄鏡形を呈し、主軸長約6.5m、主体部は東西径約4.7m、南北径約4.5mの規模を測るものと想定されよう。敷石は平石の他、小礫、打製石斧、敲石なども用いて構成されている。丸石も敷石と一体化しているように思われる。敷石の大部分は主体部の壁際柱穴沿い、主体部と張り出し部の連結部、張り出し部にめぐらされている。地表から浅いためか、敷石の遺存状態はあまりよくないが、全面に敷かれていたとは考えにくい。敷石は掘り込まれたIII層よりも数cm程上に敷かれている。炉は安山岩質石を用いた石囲炉であり、東辺と南辺の炉石は抜き取られている。炉内に散乱する石は破碎された炉石である可能性が高い。炉内は20cm程の深さを測る。灰や焼土等は認められなかったがわずかに骨片が検出されている。ピットは3ヶが検出されたが、いずれも柱穴として理解できよう。

遺物：土器は9点（313～321）を図示した。315は表面の風化が著しい。石器は、石鏃1点（32）、打製石斧2点（243）、剥片石器1点、凹石3点、敲石2点、軽石製品3点（536）、石皿1点、丸石1点（521）が出土している。土製品としてはミニチュア土器（83）が出土している。他には獣骨片が検出されている。

時期：313が井戸尻式期、314・316・318、321は中期7段階だが、315と317をもって称名寺式に比定したい。

99号竪穴住居跡（遺構：第77図、PL100 遺物：図版132）

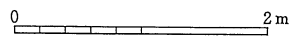
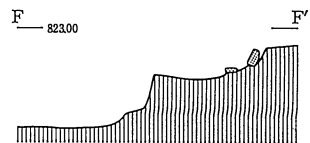
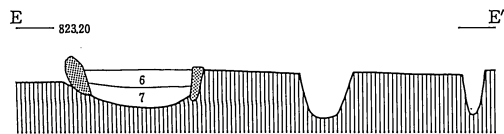
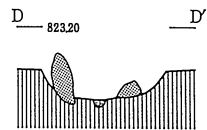
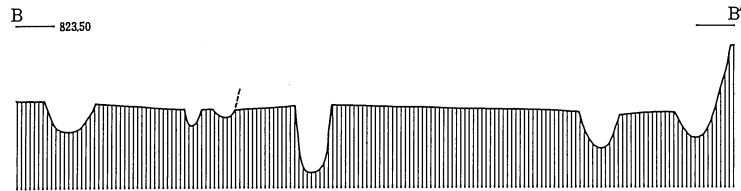
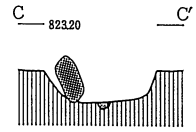
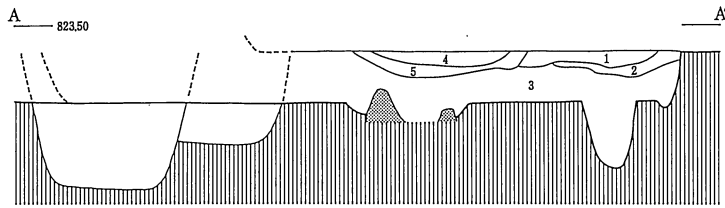
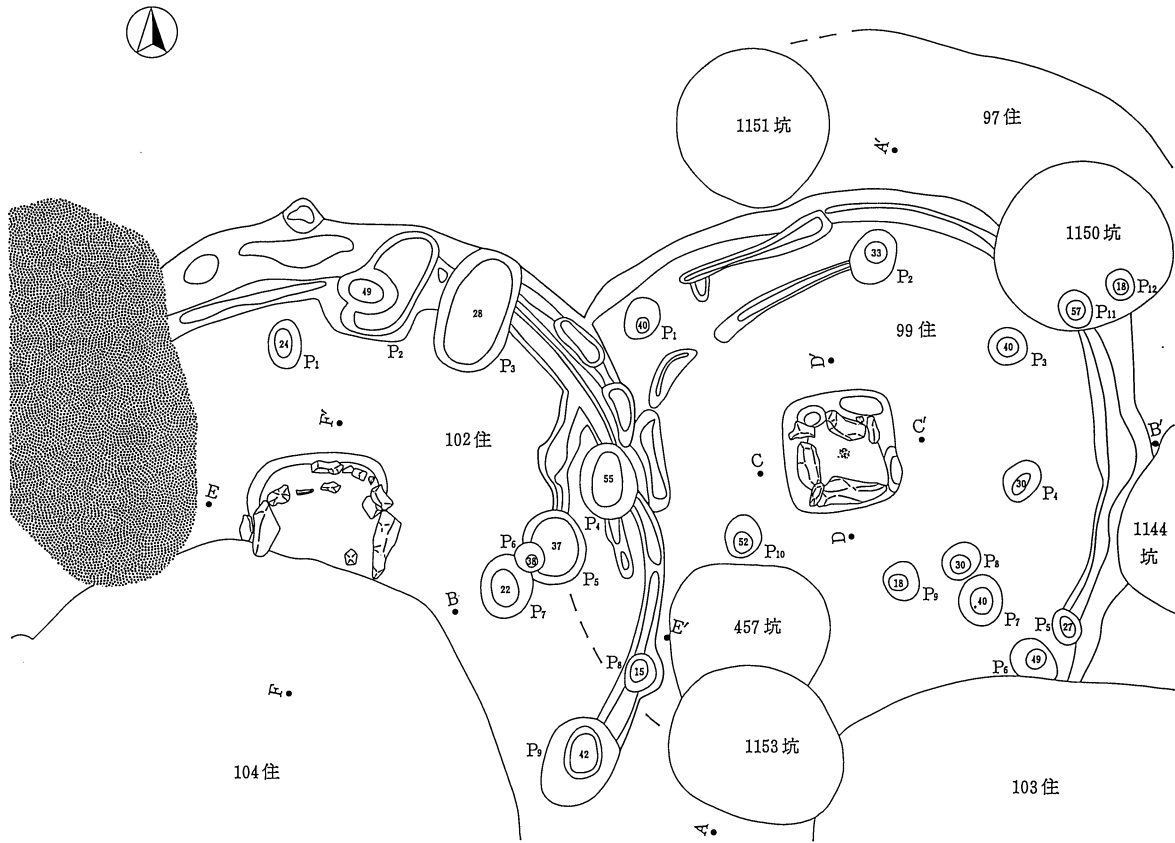
遺構：O-11グリッドに位置する。遺構検出段階の所見から97住、103住より古い所産であることが理解できた。1050坑の底部から本跡のピットが検出されたため、本跡よりも新しい所産であることがわかる。1044坑は本跡の周溝を壊しているのもこの本跡より新しい所産である。1053坑は103住より新しいため、本跡よりも新しいことが理解できる。102住と457坑との新旧関係はつかめなかった。重複部分が多いため、平面プランははっきりしないが、径約4.8m程の規模を測るものと想定される。壁は102住及び103住と重複している部分は消失しており、残存する壁高は約30～50cm前後を測る。覆土中からは多量の軽石礫が出土している。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉はほぼ中央に存在している。方形の掘り方を有し、その内側に安山岩質石を縦に配し、掘り方との隙間を埋土で固定した石囲炉である。東辺の炉石は抜き取られている。炉内は25cm程の深さを有し、中央部には径10cm程の落ち込みがあり、そこには灰が堆積していた。周溝は北西側では二重に巡っており、この方向に拡張された可能性が高い。ピットは12ヶが検出された。柱穴としてはP1、P2、P3、P6、P10、P11があげられる。

遺物：出土土器は少なく、すべて破片資料である。図示したのは4点（322～325）である。石器は石鏃1点（33）、石匙1点（138）、打製石斧14点（234）、磨石1点、敲石3点、軽石製品3点（559、563、573）が出土している。他にはイノシシ肋骨とシカ角片が検出されている。

時期：322が加曾利EIV式期ではあるが、他の土器から中期7段階に比定できよう。

101号竪穴住居跡（遺構：第78図、PL101 遺物：図版133、PL156）

遺構：N-15、O-11グリッドに位置する。耕作土が浅いうえに、土坑の密集する部分であったため、105住及び多数の土坑と重複するが、遺構検出段階ではいずれとの新旧関係も不明であった。壁は検出した段階では東側で最大約25cmが残っていた以外はすべて消失していた。覆土中には多量の軽石礫が出土している。したがって本跡は残存した壁と炉の存在により住居跡と判断したものである。ピットは4ヶを認



第77図 99号・102号竪穴住居跡 1 : 60



第78図 101号・105号竖穴住居跡 1 : 60

定したが、多数の土坑に囲まれたピットの認定は困難を極めた。配列と柱穴としての機能を果たし得る程度の深さを有することなどを考慮に入れて認定した。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉には土器の底部(328)が埋設されており、その周囲には炉石の抜き取り痕らしき掘り込みが認められるため、石囲埋甕炉であったと考えられる。周溝は東側にのみみられた。

遺物：土器は3点(326~328)を図示した。328は炉体土器である。縦に垂下する隆帯は2条1組のものが3単位、1条のものが1単位と不均等な配列である。石器は、石鏃2点(34)、石鏃未製品2点、石錐未製品1点、打製石斧19点(261、270、284)、磨製石斧1点、磨石6点(324)、凹石1点、敲石1点、剥片石器1点、軽石製品2点(643)が出土している。土製品としては、三角柱状土製品(71)が炉の東側の床面から出土している。骨類の出土も多く、計265gのイノシシ骨、ノウサギ骨が検出されている。

時期：炉体土器である328をもって時期を決定したい。中期6段階に比定できよう。

102号竖穴住居跡(遺構：第77図、PL100 遺物：図版133)

遺構：N-15、O-11グリッドに位置する。98住、99住、104A住・104B住、1158坑と重複するが、遺構検出段階の所見では、98住・104A住・104B住よりも古い所産であることは理解できたが、99住との新旧

関係はつかめなかった。1158坑よりは新しい。南側は104A住、104B住によって、また西側を攪乱によって破壊されている。したがって規模は推定の域を出ないが、径5.2m程度を測るものと想定される。床はほぼ全面に貼床が認められている。104住との新旧関係も重複部分の貼床の有無によって判断した。炉は安山岩質石を縦に配した石囲炉であるが、北辺の一部および104住と重複する南辺は炉石が抜き取られている。炉内の掘り方は約30cmと比較的深い。覆土は2層にわけられるが、第2層は灰が堆積している。周溝は残存する部分ではすべて認められている。一部では二重に巡っている。ピットは9ヶが検出された。柱穴はP2、P3、P4、P5、P9が該当すると思われる。

遺物：出土土器は極めて少なく、図示できるのは329の1点のみであった。石器は、石鏃4点(35、36)、石鏃未製品6点、石錐1点(102)、打製石斧7点(235)、磨石1点、敲石1点が出土している。他にはシカ骨が検出されている。

時期：時期決定資料は329のみであり、中期7段階に比定できよう。

103号竪穴住居跡（遺構：第79図、PL101 遺物：図版134）

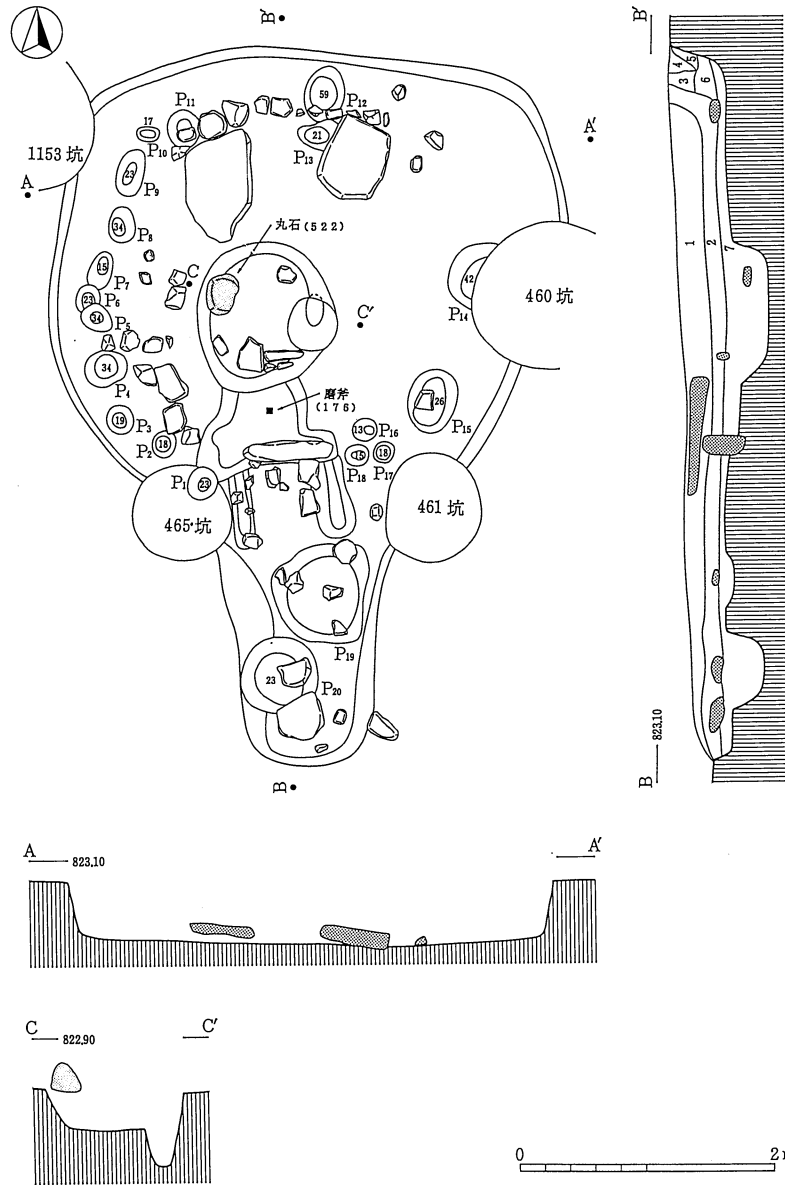
遺構：O-11、O-12、O-16、O-17グリッドに位置する。遺構検出段階の所見によって456坑、458坑、700坑より新しく、460坑、461坑、465坑、1153坑よりも古い所産であることが理解できた。柄鏡形敷石住居跡であり、壁高は20～30cm前後を測る。主軸長は5.7mを測る。主体部は東西径約4m、南北径約3.3mを測り、六角形を呈するものと考えられる。張り出し部は南北径約2.4m、東西径約1.2mを測る。主体部の敷石は北壁及び西壁際の柱穴沿いに認められている。北壁側には長径50cmを超える石が2ヶみられ、炉の奥壁側に敷石を配していたことが理解できる。張り出し部との連結部には扁平石を縦に埋め込んでいる。この北側には対ピットが連結したと思われる不整なピットがみられ、南には二本の溝が掘られている。こうした状況はこの部分に何らかの出入口部施設が設けられていたことを想起させる。張り出し部でも散在ながら敷石が認められている。炉は円形の掘り方をもち、本来は石囲炉であったと考えられるが、炉石はすべて失っている。炉の覆土上面には敷石と丸石が認められている。やや大きめに掘り方を設け、炉石を配していたようである。炉内の掘り方は約30cmを測る。炉覆土には灰や焼土等は認められなかった。周溝はみられない。ピットは20ヶが検出された。P1～P18は壁柱穴であると理解できる。P19とP20は性格不明である。

遺物：出土土器は破片資料がほとんどであり、18点(330～347)を図示した。330は木葉痕が認められる。石器は石鏃1点(37)、石鏃未製品3点(87)、打製石斧14点(271)、磨製石斧1点(176)、丸石1点、剥片石器1点、スクレイパー2点(142、144)、丸石1点(522)、軽石製品3点(565、574、645)が出土している。磨製石斧は炉の南、框石を覆っていた約100×60cm程の大きな扁平石(図示はしていない)の下から検出された。土製品としては性格不明の(68)が出土している。土鈴と想定できるだろうか。

時期：出土した土器から、後期称名寺式に比定できようか。

104A号竪穴住居跡・104B号竪穴住居跡（遺構：第80・81図、PL100・102 遺物：図版135、PL156）

遺構：N-15、20、O-11、16グリッドに位置する。当初は104号住居跡として調査していたものだが、調査途中で東側の敷石が上下2面にわかれていることに気付き、2軒の重複であることが判明した。そのため、上面の住居跡を104A住、下面の住居跡を104B住としたが、遺物の大半は104住一括でとりあげており、分離することはできなかった。張り出し部がはっきりしないもののいずれも柄鏡形敷石住居跡になるものと想定される。炉は継続して用いられたと考えられる。住居の掘り方もほぼ共通している。102住と重複するが本跡の方が新しい所産である。



第79図 103号竪穴住居跡 1 : 60

104A号住居跡は上面の敷石のひろがりをもって住居跡と認定した。東側にみられる敷石と同じレベルでひろがる敷石も本跡に所属するものとしてとらえた。ピットは重複関係の新しいP6を基準としてほぼ同規模のものを抽出した。規模は張り出し部が明瞭でないため、はっきりしない。

104B号住居跡は下面の敷石のひろがりをもって住居跡と認定した。

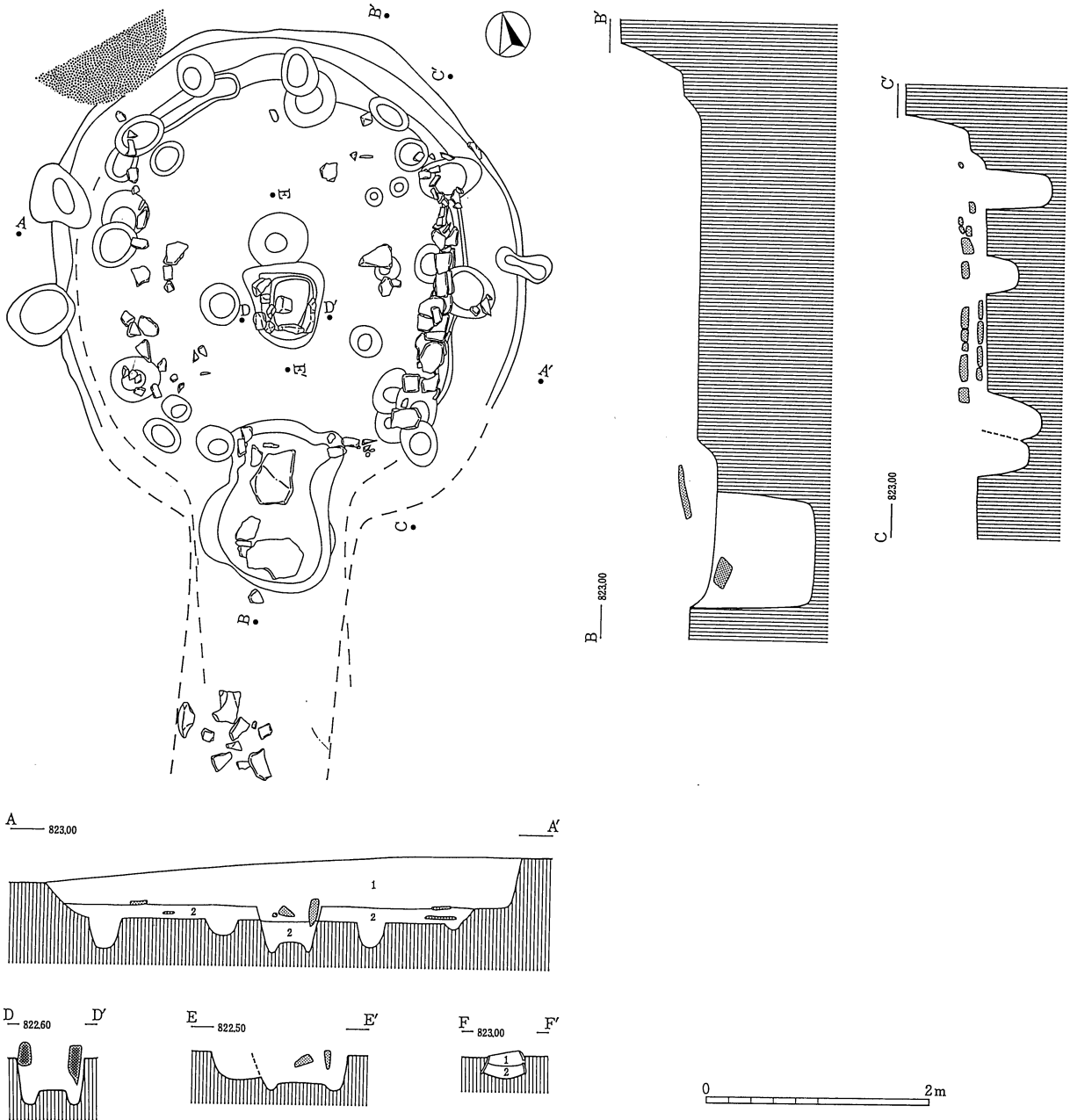
遺物：前述したように遺物の大半は104A号住居跡としてとりあげている。図示した土器では348～353の6点が該当する。104B住としてとりあげたものは土器3点（354～356）だけである。石器はすべて104A住のものとしてとりあげている。石鏃12点（38、39）、石鏃未製品11点、石錐3点（100、101）、石錐未製品1点（140）、石匙1点、磨製石斧1点（177）、打製石斧18点（250、285）、剥片石器2点、磨石7点、凹石2点、敲石2点、多孔石2点（459、460）、軽石製品1点（538）が出土している。他には獣骨片が検出されている。

時期：104A住は後期称名寺式、104B住は中期後葉のものと考えられる。中期8段階に比定できる104A住でとりあげた350は104B住に属するものと考えた方がよいかもしれない。中期8～10段階頃に比定できそうである。敷石住居跡であることを踏まえれば、9～10段階頃にしぼりこむこともできるかもしれない。

105号竪穴住居跡（遺構：第78図、PL103 遺物：図版136、PL156）

遺構：P-6、11、T-10、15グリッドに位置する。75住、101住及び多数の土坑と重複するが75住が本跡より新しい所産である以外は遺構検出段階では大半の新旧関係は不明であった。この付近は耕作土が浅いうえに、遺構の重複が多く、平面プランははっきりしない。したがって検出した段階では、炉と東側にわずかに残る壁及び周溝が認められたにすぎない。規模は壁及び周溝の巡りから判断すれば、径5.8m程度を測るものと想定される。炉は石囲埋甕炉であるが、西辺と東辺の一部の炉石は抜き取られている。炉内のやや北寄りに小ぶりな土器（357）が埋設されていた。炉内は15cm程の掘り方をもつ。周溝は東側に二重に巡っている。ピットの認定は難しいが、柱穴の機能が想定できる4ヶを本跡に伴うものとして理解した。

遺物：土器は少なく、図示したものは炉体土器である357のみである。口縁部及び底部を欠したもので、縄文を施している。石器は石鏃1点（40）、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石3点、敲石7点（372）が



第80図 104A号・104B号竪穴住居跡(1) 1 : 60

出土している。

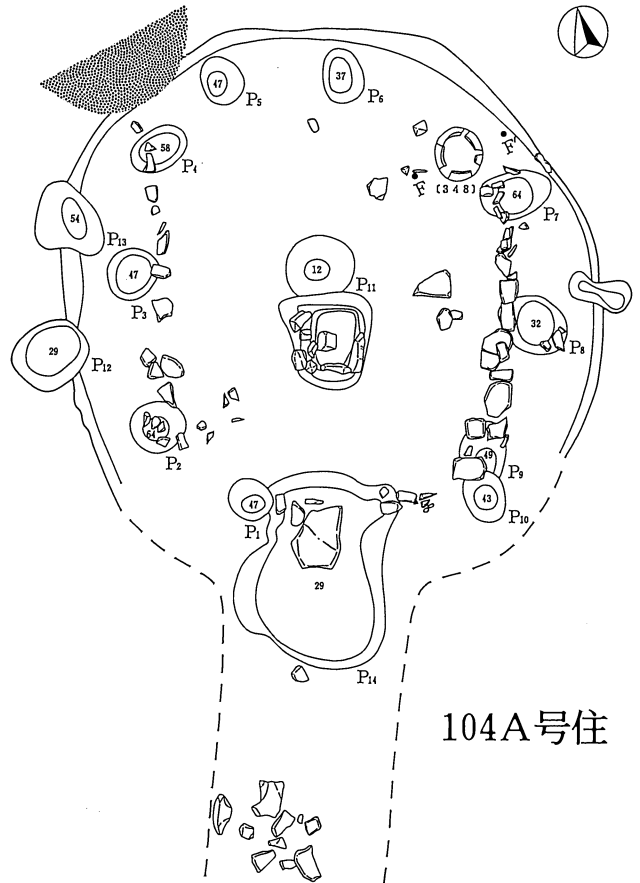
時期：357のみが時期決定資料だが、中期7段階以前のものであろうか。

106号竪穴住居跡（遺構：第82図、PL103 遺物：図版136、PL157）

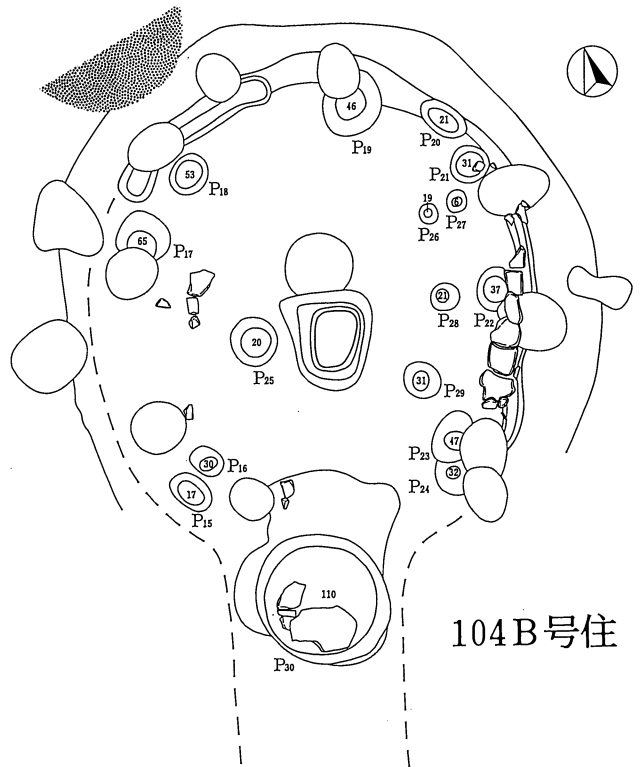
遺構：P-16グリッドに位置する。70住、71住、83住、1溝、293坑と重複し、遺構検出段階でそのいずれよりも古い構築であることが理解できた。他の遺構との重複及び攪乱によって平面プランは明瞭ではないが、長径は南北方向に約7.4m、東西方向の短径は約5.8mを測る楕円形を呈するものと想定される。炉は住居の拡張にあわせて、古い炉を壊して新しい炉を設けている。新炉は方形の掘り方を有し、北辺には安山岩質石を縦に埋め込んでいるのが認められており、石囲炉であったことが理解できる。他辺では炉石は抜き取られたようである。炉内の掘り方は25cm程の深さであるが、中央部ではさらにピット状の落ち込みがあり、そこには灰や炭化物が堆積していた。東辺付近では焼土が層状に認められている。古炉は新炉に大部分が壊されているがわずかに掘り方が残っている。ピットは6ヶが検出された。P4は覆土第2層から焼土が層になって認められている。

遺物：土器は8点を図示した（358～365）。359は重複する83住出土の土器片及び1片のみながら126住出土土器片と接合しているが、主体は本跡である。361は鉢形土器。石器は、尖頭器1点（2）、石鏃1点（41）、打製石斧16点（204、251、272）、磨製石斧1点、磨石類4点（320）、石棒1点、軽石製品1点、それに小剝離痕を有する剥片1点（146）が出土している。他には炉内からイノシシ幼獣骨と鳥らしきものの骨が検出された。炉以外からも獣骨片は認められている。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

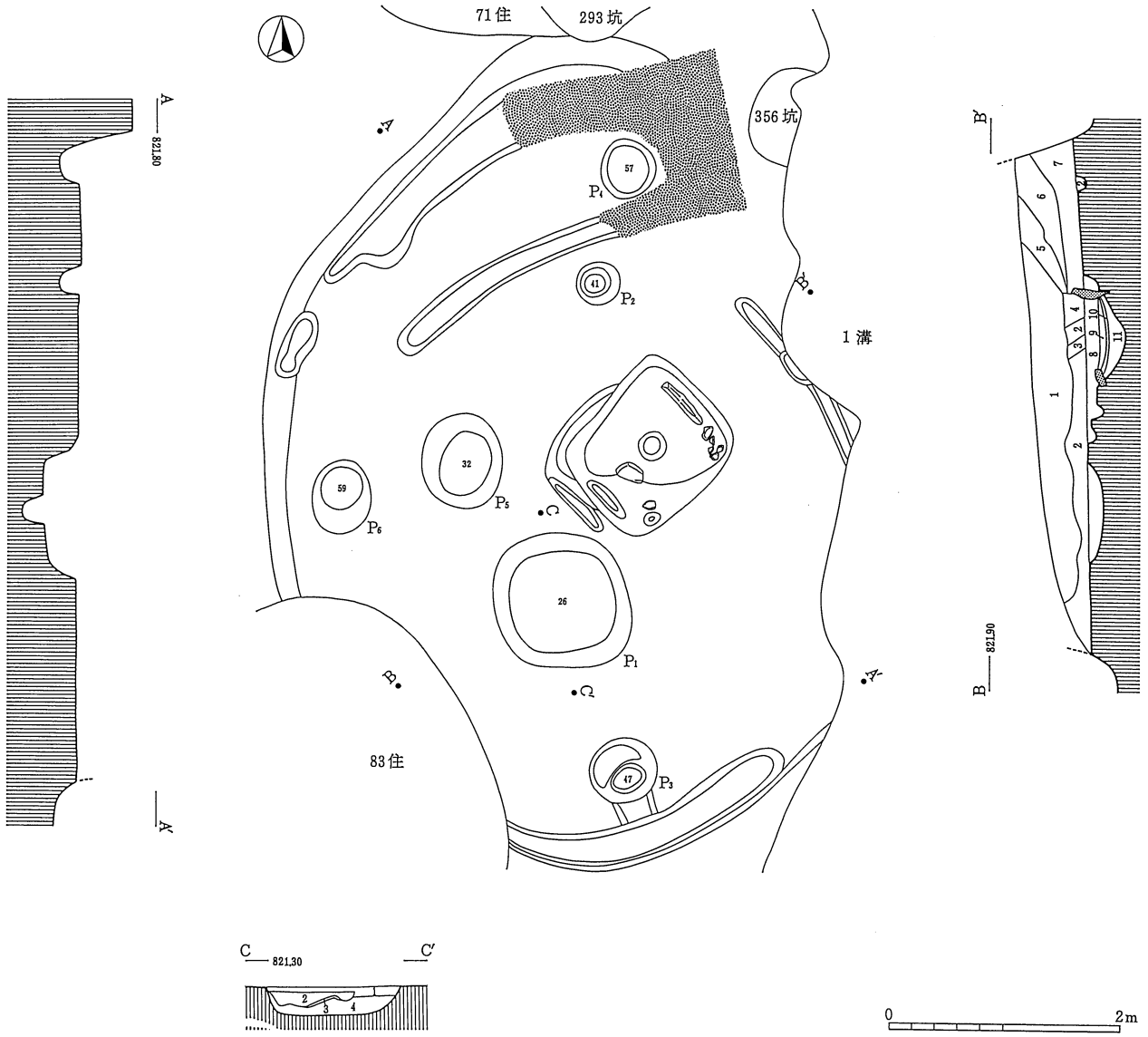


104A号住

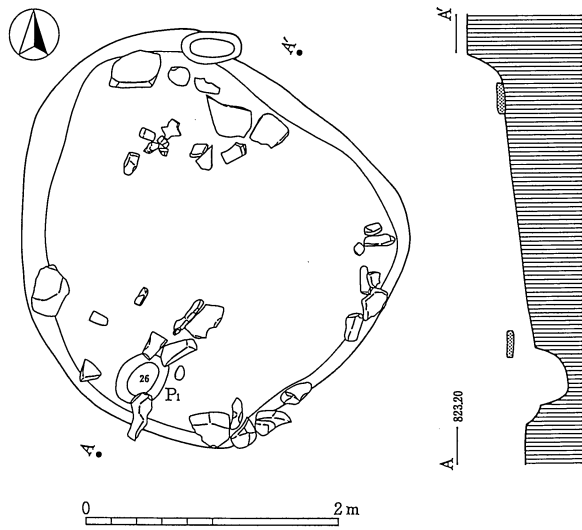


104B号住

第81図 104A号・104B号竪穴住居跡(2) 1:60



第82図 106号竪穴住居跡 1 : 60



第83図 107号竪穴住居跡 1 : 60

107号竪穴住居跡（遺構：第83図、PL103 遺物：図版137、PL157）

遺構：O-17、18グリッドに位置する。765号土坑、1341、1344、1346坑と重複し、遺構検出段階でそのいずれよりも新しい構築であることが理解できた。覆土には多量の軽石、安山岩質石が投棄されており、またそれらに混じって黒曜石片も相当量が出土している。本跡では覆土のすべてをふるいにかけて黒曜石片を採集した（PL193）。床面には敷石が認められており、敷石住居跡であることがわかる。長径3.2m、短径2.9mの規模を測る。円形の敷石住居跡である。敷石は炉の周辺、北壁際、東壁際、西壁際に認められている。遺存状態は良くないが、炉周辺と壁際に設置していたことがうかがえる。覆土は単層である。炉は南寄りの位置に存在している。扁平な安山岩質石を縦に配した石囲炉であるが、炉石は東辺と西辺にみられるのみである。周溝はみられない。ピットも1ヶが検出されたが、柱穴としての機能は考えられない。

遺物：土器は3点（366～368）を図示したのみである。366は炉内からの出土。石器は石鏃14点、石鏃未製品15点、石錐2点、石錐未製品2点、磨石1点、凹石1点（348）、欠損した巨大な打製石斧1点（262）、多孔石3点（461、462）が出土した。黒曜石片は666.6g、チャート片は5.3gを測り、製作に関係した住居跡の可能性も高いだろう。他にはシカ骨が検出されている。

時期：出土した土器から、後期称名寺式に比定できようか。

108号竪穴住居跡（遺構：第84図、PL104 遺物：図版137、PL157）

遺構：O-15、20グリッドに位置する。遺構検出段階で1192坑、1溝より古く、113住よりも新しい構築であることが理解できた。西半部を1溝によって壊されており、東半部のみの残存ではあるが、規模は径約6m程を測るものと推定される。炉はみられなかった。周溝は残存する東半部では全周し、北東部では二重に巡っている。ピットは13ヶが検出された。このうちP12とP13は1溝の下から検出されたものである。

遺物：土器は2点（369、370）を図示した。369はP14上からの出土である。床面には安山岩質石が散乱していたが、炉石であった可能性もあろうか。石器は出土していない。

時期：370は本跡に伴う可能性は低く、369から時期決定すると、中期4段階に比定できよう。

109号竪穴住居跡（遺構：第85図、PL104 遺物：図版137、PL157）

遺構：P-1グリッドに位置する。701坑、702坑と重複し、遺構検出段階でいずれも本跡よりも新しい構築であることが理解できた。また北東部は攪乱によって壊されている。壁高は約10～30cm前後を測るが、西側では壁は消失している。残存する壁の巡りからすると、長径約4m、短径約3.2mを測り、南西-北東方向に長い楕円形を呈するものと推定できる。炉はほぼ中央に土器を埋設した埋甕炉である。口縁部及び底部を欠した土器（372）である。炉内には灰や焼土は認められなかった。ピットは11ヶが検出されたが、柱穴としてはP2、P7、P11が該当しようか。

遺物：土器は2点（371、372）を図示した。P4付近の床面から371が出土している。372は炉体土器である。石器は凹石1点と打製石斧1点（238）が出土している。土製品としては土偶2点（44、45）が出土している。

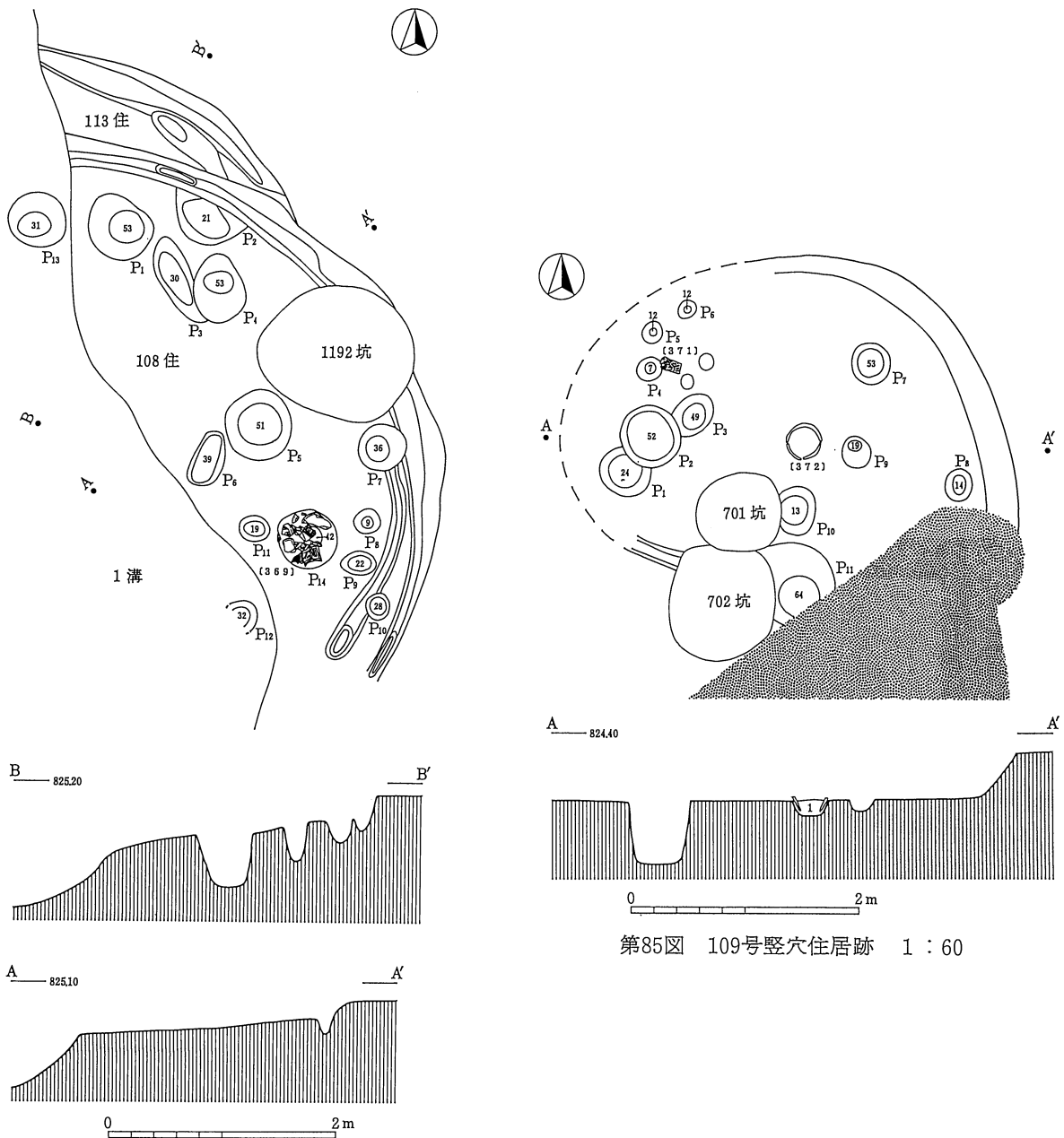
時期：出土した土器から、中期1段階に比定できる。

110号竪穴住居跡（遺構：第86図、PL104 遺物：図版138、PL158）

遺構：K-16、21、O-20、25グリッドに位置する。遺構検出段階で1溝と1178坑と重複し、そのいずれ

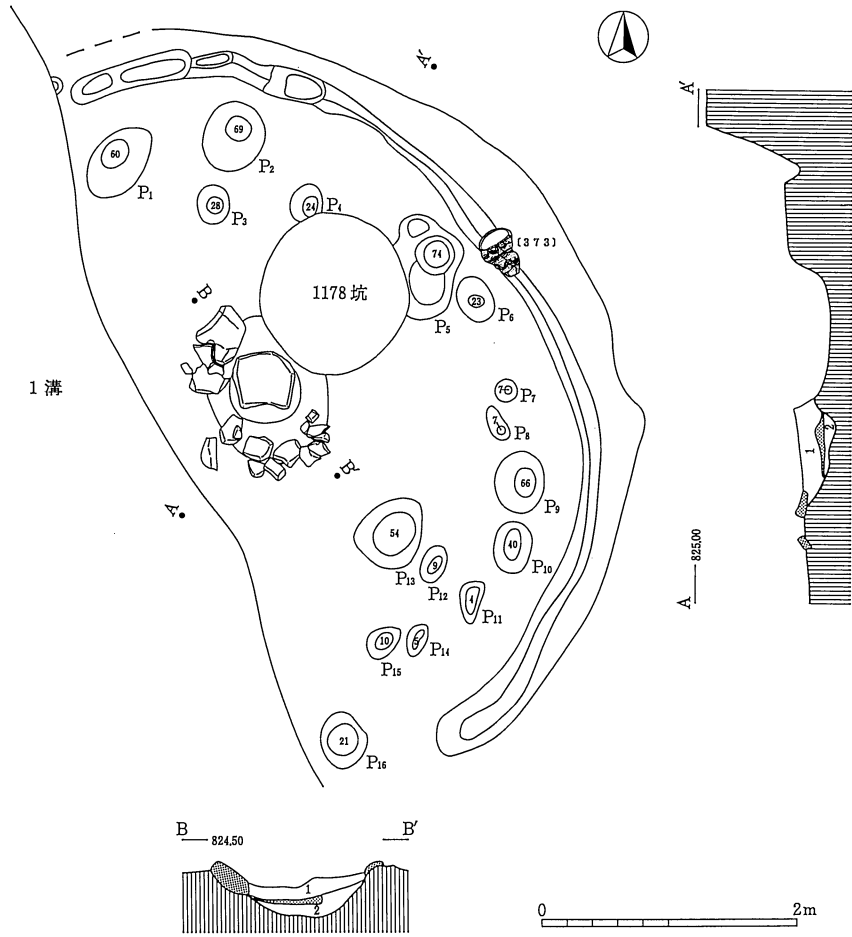
よりも古い構築であることが理解できた。また561坑より新しい。西半部は1溝によって壊されているため、東半部のみが残存している。規模は径約6.4m程を測るものと推定される。炉は石囲炉であったと考えられるが、炉内及び周辺にみられる石は原位置をとどめているものとは理解できない。おそらく抜き取られたものであろう。炉内の堆積土にも灰や焼土は認められない。周溝は残存する東半部ではほぼ全周する。ピットは16ヶが検出されたが、柱穴としてはP1、P2、P5、P9、P10、P13、P16があてはまる。遺物：土器は2点(373、374)を図示した。373は比較的古手の連弧文土器であり、東壁際の床面から出土している。石器は石鏃未製品2点、打製石斧3点(252)、石匙1点(118)、磨石2点、凹石1点(363)、軽石製品1点(591)が出土している。他にはイノシシ骨と未鑑定ながらイノシシの歯が検出されている。

時期：出土した土器から、中期6段階に比定できる。

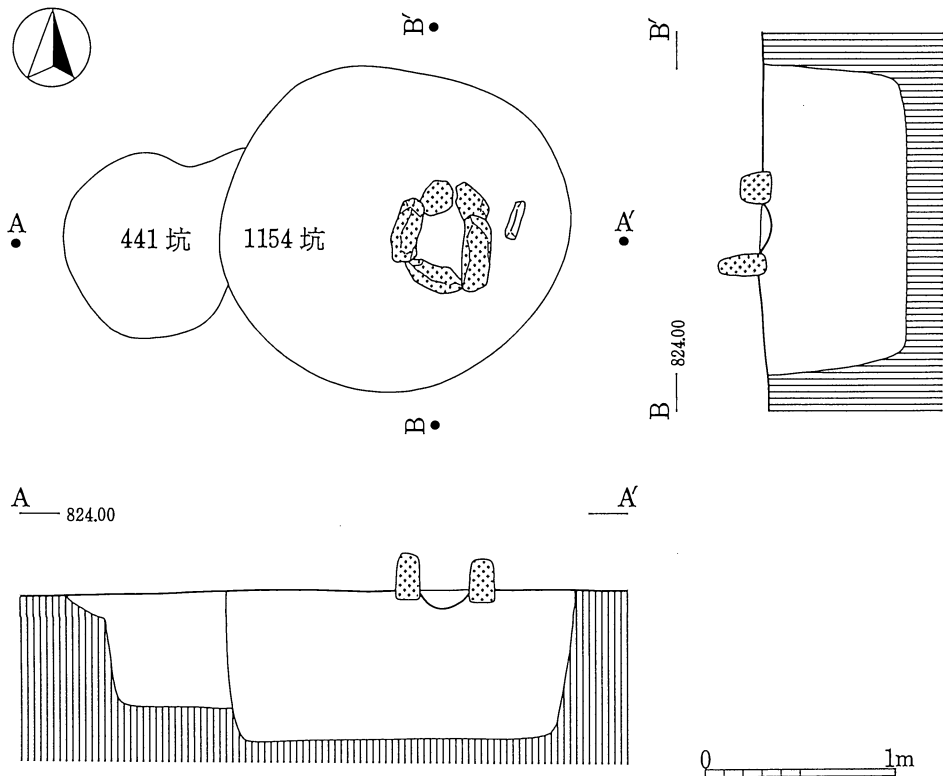


第84図 108号・113号竖穴住居跡 1:60

第85図 109号竖穴住居跡 1:60



第86図 110号竖穴住居跡 1 : 60



第87図 111号竖穴住居跡 1 : 40

111号竪穴住居跡（遺構：第87図、PL105）

遺構：N-10グリッドに位置する。ピットや周溝等は精査したが検出されなかったが、4ヶの軽石を用いた石囲炉のみが認められているため、住居跡と認定した。96住と441坑、1154坑と重複するが、遺構検出段階でそのいずれよりも新しい構築であることが理解できた。

遺物・時期：遺物は炉内から出土した軽石製品1点（581）のみであった。他にはイノシシ骨が検出されたにすぎない。土器が出土していないが、1154坑より新しいため中期10段階以降の可能性が高い。

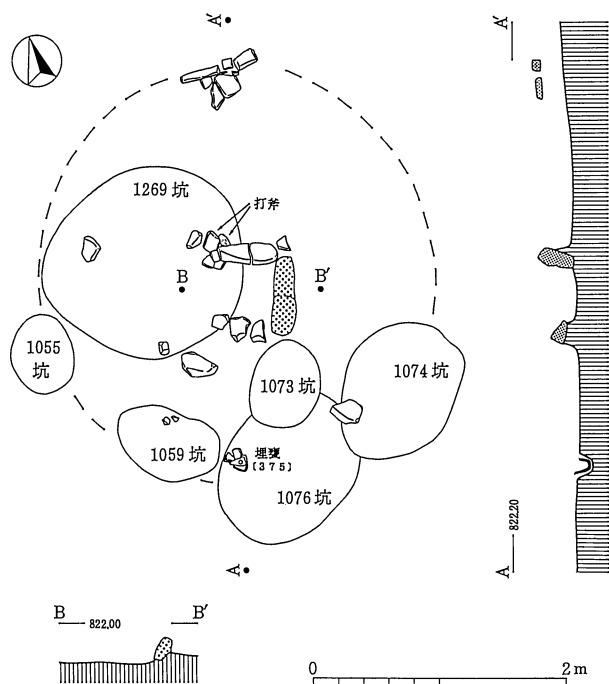
112号竪穴住居跡（遺構：第88図、PL105 遺物：図版138、PL158）

遺構：O-21グリッドに位置する。敷石住居跡である。1269坑をはじめとする6基の土坑と重複するが、1055坑以外は本跡の炉や敷石、埋甕の下から検出されたため、本跡の方が新しい構築であると判断できる。1055坑との新旧関係は不明である。壁を完全に失っており、敷石と埋甕の位置によって規模を推し量るほかない。北側にみられる縦に配した敷石は壁際を示していると思われ、南側の埋甕付近を出入口部であるとすれば、径約3.5m程の規模を測るものと考えられる。敷石の遺存状態は悪いが、これはこの付近の耕作土が非常に浅いことに起因するものであろう。炉は石囲炉であり、東辺には四角形に面取りした軽石を縦に配している。北辺及び南辺には安山岩質石を配するが、西辺の炉石は抜き取られている。南辺も炉石は完存してはいない。北辺の炉石近くには打製石斧が1点認められている。埋甕（375）は口縁部から胴部を欠し、底部のみの土器を正位に埋設したものである。ピットは認められなかった。

遺物・時期：出土遺物はビニール袋1つにすぎない。図示しうる土器は埋甕の375だけである。石器は欠損した打製石斧1点と磨石1点が出土した。後期称名寺式に比定できようか。

113号竪穴住居跡（遺構：第84図、PL104）

遺構：O-15グリッドに位置する。108住、1溝よりも古い構築で、ごくわずかな部分が残存しているにすぎない。平面プラン・規模等は不明である。炉・ピットもみられず、周溝が確認されただけである。



第88図 112号竪穴住居跡 1:60

遺物・時期：出土遺物はわずかであり、図示できる遺物はなかったが、縄文中期に比定される可能性が高いだろう。108住より古いため中期4段階以前となろうか。

114号竪穴住居跡（遺構：第89図、PL105 遺物：図版139）

遺構：P1、P2、P6、P7グリッドに位置する。466坑ほか多数の土坑と重複するが、新旧関係は不明である。ただし貼床と接する467・468・1099・1205坑では貼床が認められないので、本跡よりも新しい構築の可能性が高いだろう。北西側は攪乱によって壊され、南西側も一部床を失っている。したがって平面プランは不明であるが、径6mを超える規模を測るものと考えられよう。床には貼床が中央部を中心として所々に認められている。炉は確認できなかった。ピットは22ヶが検出されたが支柱穴としてはP1、P5、P6、P11が該当すると思われる。また壁際に巡る小穴のP13、P19は周溝と同様な性格をもつものと推定されよう。

遺物・時期：出土遺物は少なく、ビニール袋に1つのみであった。図示した土器は2点（379、380）である。石器は、図示した石棒B類1点（404）の他には、打製石斧5点が出土しただけである。石棒B類はP11の底部から検出された。380はやや後出であるが、中期8～9段階に比定されよう。

116号竪穴住居跡（遺構：第90図、PL105 遺物：図版139）

遺構：K-21・22グリッドに位置する。16住、1270坑より古く、1286坑よりも新しい構築である。規模は長径6m（北西-南東方向）、短径5.6m（北東-南西方向）を測る。床には貼床や硬化面は認められなかった。ほぼ中央部に焼土が認められた。炉石の抜き取り痕はみられないため石囲炉であったとは理解しがたい。地床炉であろうか。周溝は東側を除き全周している。北西部から南部にかけては二重に巡っている。ピットは21ヶが検出された。覆土は6層にわけられる。第1層は黒褐色土、第2層はパミス粒を多く含む暗褐色土、第3層はパミスの少ない黒褐色土、第4層は第2層よりパミスを含む割合が大きく、第5層はパミスを多く含む黒褐色土、第6層は焼土である。北側においてのみ覆土の分層ができた。

遺物：出土遺物はビニール袋2つにすぎない。土器はすべて破片資料であり、図示したのは9点（381～389）である。石器は石鏃未製品2点、打製石斧2点（273）、剥片石器（299）、磨石2点、台石4点、多孔石2点（455）が出土している。

時期：出土した土器から、中期1段階に比定できる。

118号竪穴住居跡（遺構：第91図、PL106 遺物：図版138、PL158）

遺構：P-6グリッドに位置する。多数の土坑と重複するが、検出した段階ではすでに覆土を完全に失っていたため、土層観察による新旧関係はつかめなかった。ただ1340坑は本跡の埋甕の下から検出されたものであるため、本跡よりも古い構築であることがわかる。したがって平面プランも規模も不明であるが、本跡に属すると理解できるピットと埋甕（376）の位置から推し量れば、約3.9m程の規模を測るものと考えられる。炉は面取りされた軽石を縦に配し、内部には土器を埋設した石囲埋甕炉であるが、北辺と西辺の炉石は抜き取られている。炉体土器（377）は口縁部から胴部を欠している。炉内はほとんど掘り込みはみられない。埋甕は底部のみが残る土器を正位に埋設している。ピットは5ヶを認定した。

遺物：出土土器は少なく、ビニール袋1つにすぎない。図示した土器は埋甕の376と炉体土器の377の2点のみである。石器は出土しなかった。土製品としてはミニチュア土器（84）が出土した。他には炉の埋設土器内からイノシシ骨が検出されている。

時期：埋甕と炉体土器から、中期9段階に比定できる。

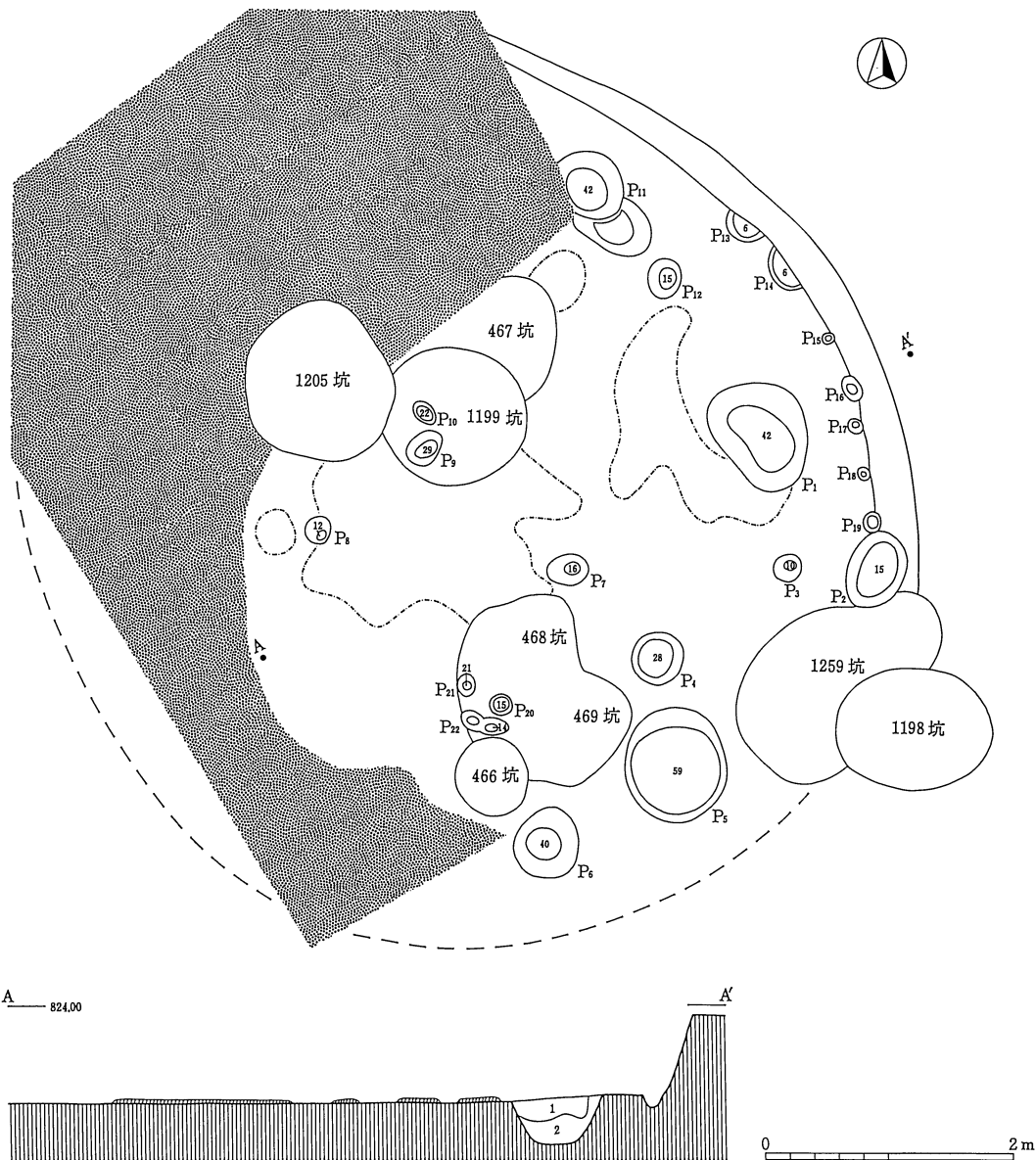
119号竪穴住居跡（遺構：第92図、PL106 遺物：図版138、PL158）

遺構：T-20グリッドに位置する。検出した段階ですでに壁を完全に失っていた。遺構図では検出時の所見から72住よりも古く表現されているが、出土土器からは本跡の方が新しい。新旧関係は出土土器をもって決めたい。規模はピットの配列と埋甕（378）の位置から推定するほかないが、おおむね径約4 m程を測るものと考えられる。炉は安山岩質の扁平な石を縦に配した石囲炉であるが、西辺の炉石を除いて抜き取られている。北辺にみられる炉石は原位置にはない。炉内の掘り込みは浅く、また炉石の抜き取り痕は明瞭であった。埋甕は調査区際で確認された。底部のみの土器を正位に埋設している。ピットは5ヶが検出され、いずれも柱穴と理解できよう。

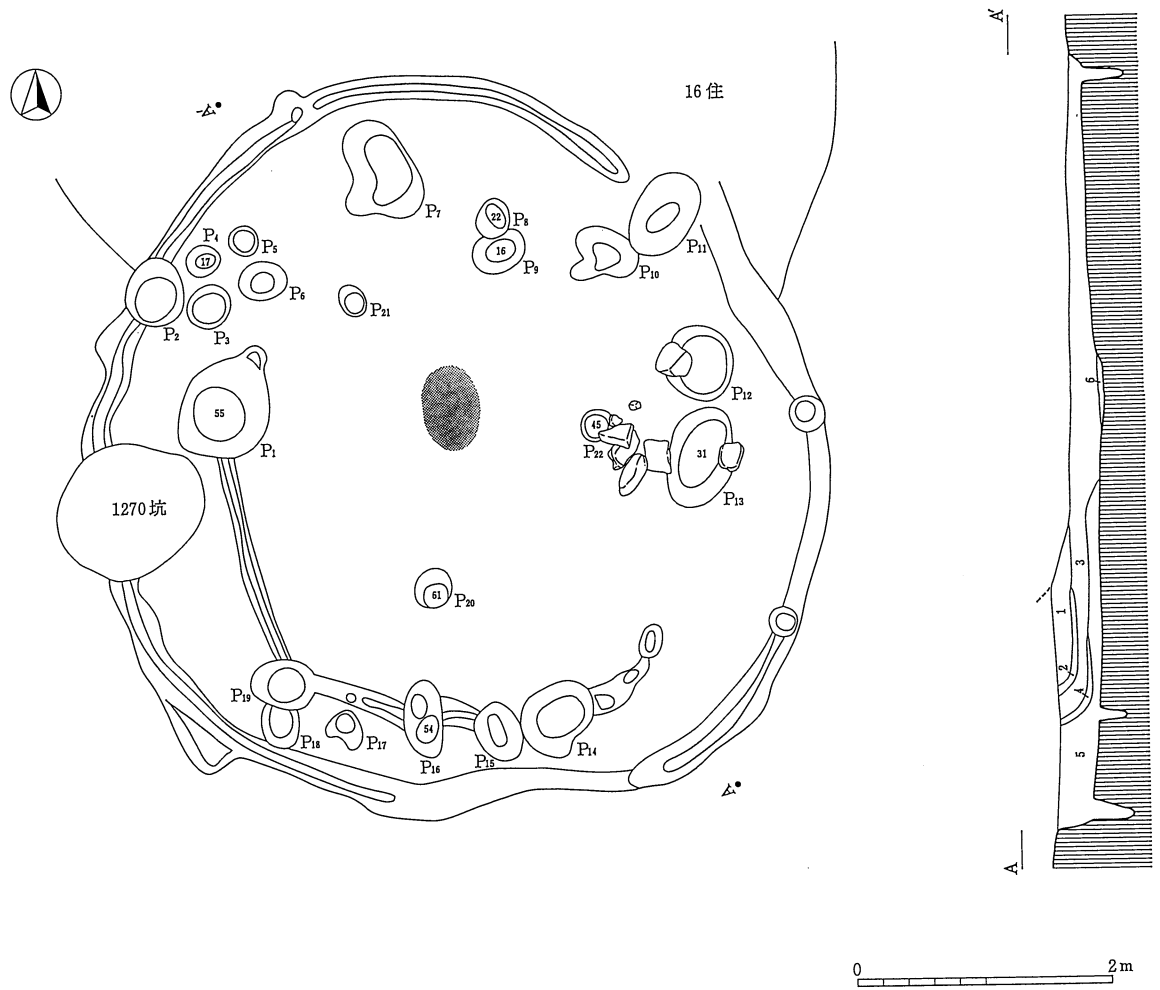
遺物：出土遺物は少なく、図示したのは埋甕の378のみである。石器は出土していない。

時期：時期決定資料は胴部下部から底部のみが残存する埋甕のみである。底部近くまで縄文を施文していることが認められるが、中期V期10段階から後期称名寺式頃のものとは比定できようか。

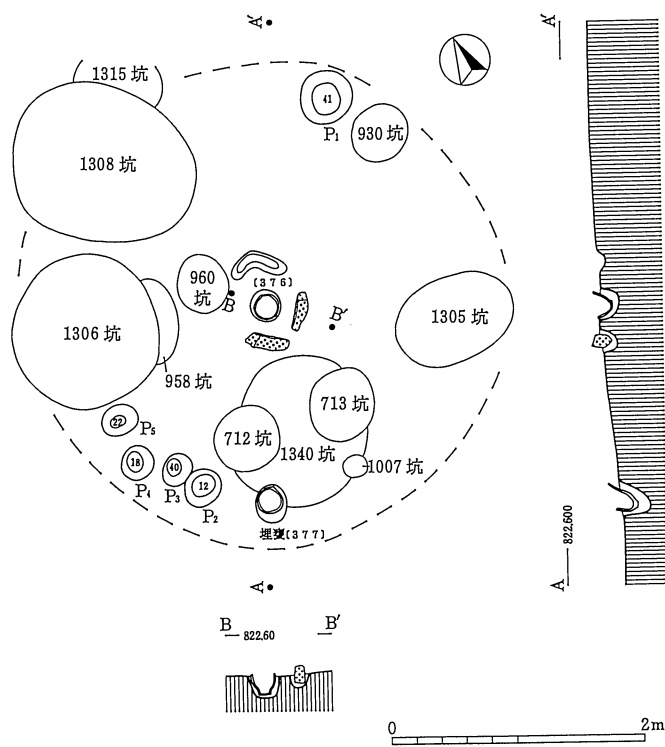
120号竪穴住居跡（遺構：第93図、PL106）



第89図 114号竪穴住居跡 1 : 60



第90図 116号竖穴住居跡 1 : 60



第91図 118号竖穴住居跡 1 : 60

遺構：T-5グリッドに位置する。検出した段階ではすでに壁を失っており、石囲炉の存在をもって住居跡であると判断した。多数の土坑と重複するが、新旧関係はつかめなかった。また128住とも重複すると思われるが、新旧関係は不明である。多数の土坑と重複しているため、本跡に属するピットを抽出することは容易ではないが、4ヶを認めた。壁を失い、周溝も認められないため、規模はピットの配置から推し量るしかないが、径約3.7m程を測るものと推定されよう。炉は石囲炉であり、扁平な安山岩質石を縦に配している。炉石が残存しているのは北辺と西辺の一部であり、それ以外の石は原位置をとどめてはいない。

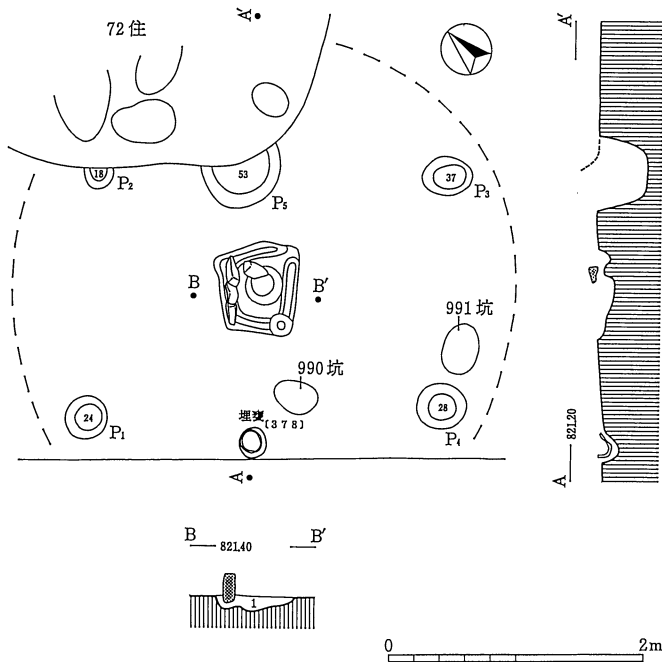
遺物・時期：本跡に所属する遺物としては台石1点をあげるのみである。土器は出土していないが、縄文中期に比定される可能性が高いだろう。

121号竪穴住居跡（遺構：第94図、PL107 遺物：図版140、PL158）

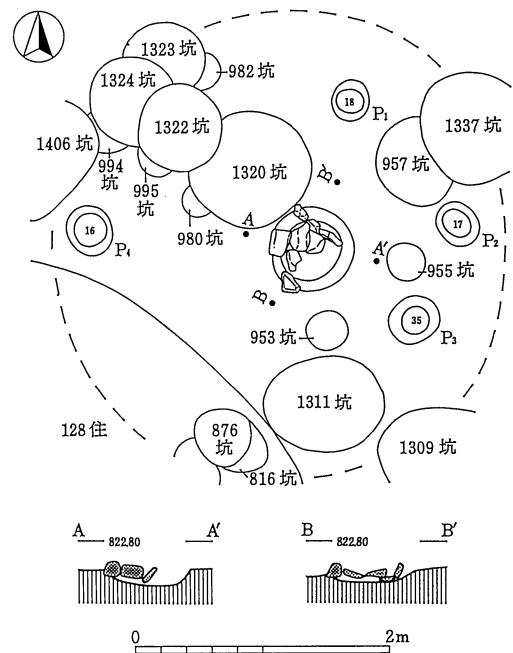
遺構：O-23・24、T-3・4グリッドに位置する。863坑よりも古く、835坑ほかよりも新しい構築である。南北径6.8m、東西径6.9mを測る。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は中央やや北寄りに存在している。扁平な安山岩質石を縦に配した石囲炉であり、北辺の炉石は抜き取られている。埋甕は南壁際に存在しており、胴部以下を欠した土器（390）を逆位に埋設している。覆土は2層にわけられるが、自然堆積と理解できる。周溝は北西部分を除いて巡っている。ピットは9基が検出され、P1~P6、P8は支柱穴と理解でき、P7、P9は出入口部に関する機能をもつものと想定できようか。

覆土：4層に分けられる。すべて黒褐色土であるが、第1層と第2層は親指大から拳大程度の軽石礫を含んでいるのに対し、第3層と第4層は軽石礫をほとんどみないという違いがある。

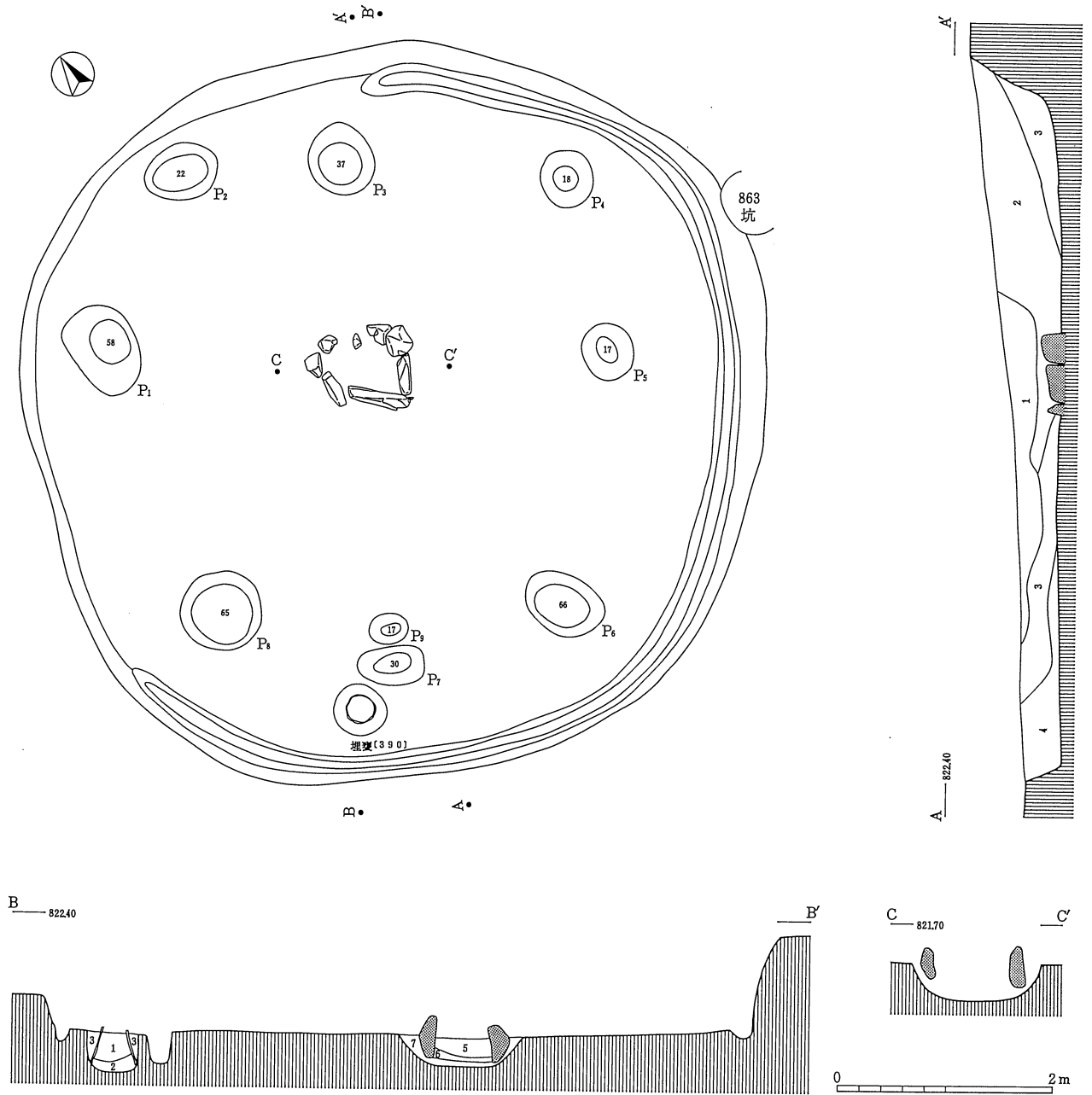
遺物：土器は6点（390~395）を図示した。390は埋甕である。石器は石鏃2点（80、81）、石鏃未製品4点、打製石斧82点（205、210、211、226、227、253~260、276）、剥片石器1点（300）、磨石5点（321）、凹石3点、敲石1点、石皿1点（425）、軽石製品8点（544、560、578、592）が出土している。土製品としては土偶1点（43）が出土している。打製石斧は完形26点、欠損56点を数える。なお打製石斧は第1層で最も出土量が多く（32点）、しかも完形品（14点）が目立っているのに対し、下層にいくにしたがって



第92図 119号竪穴住居跡 1:60



第93図 120号竪穴住居跡 1:60



第94图 121号竖穴住居跡 1:60

出土量は減っている。他には獣骨片が検出されている。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

122号竪穴住居跡（遺構：第95図 遺物：図版141、PL158）

遺構：T-3グリッドに位置する。敷石住居跡である。検出した段階ではすでに壁は失っていた。規模は推定約5m程を測るものと考えられようか。123住・130住・132住と重複するはずであるが遺構検出段階での新旧関係は不明であった。出土土器からすればいずれよりも本跡の方が古い。敷石は北側にみられるだけである。炉は安山岩質石を用いた石囲炉であり、扁平な石を縦に配している。掘り方は深く約70cmを測る。炉の南東脇には大きな石が存在しているが、炉とは関係なさそうである。

遺物：土器は炉内から出土している2点（396、397）を図示した。397は瓢形土器。石器は石鏃未製品が1点出土しているのみである。

時期：出土した土器から、中期8段階頃に比定できよう。

123号竪穴住居跡（遺構：第96図、PL107 遺物：図版141、PL159）

遺構：T-3、T-8グリッドに位置する。柄鏡形敷石住居跡である。130住と重複する。また5基の土坑と重複するが、遺構検出段階の所見で952坑と1039坑が本跡よりも古い構築であることが理解できる他は新旧関係は不明である。東西径5.6m、南北径約4.6mを測る。壁高は約20cm程だが南西部では壁は消失している。張り出し部は壁を失っているため敷石のひろがりから規模を推定すれば、南北径約3.4m、東西径約2m程度になると思われる。そうであれば主軸長は約7m程を測るであろう。敷石は主体部では奥壁部及び西壁側にみられる。本跡付近は耕作土が浅く、敷石の遺存状態はよくないが、敷石は当初からおそらく壁際と炉周辺に設置されていたものと想定でき、床面全域に敷かれていたとは考えにくい。張り出し部では埋甕周辺からひろがっている。炉は作り替えたらしく旧炉の掘り方が認められている。新炉には土器（400）が敷かれていた。方形の掘り方を有し、炉石の抜き取り痕も認められるため、本来は石囲土器敷炉であったと考えられる。埋甕は張り出し部との連結部に存在している。耳状把手付深鉢の耳状把手部分を欠したもの（398）を正位に埋設している。周溝は東側にのみみられている。ピットは18ヶが検出された。壁柱構造のようである。P17・P18は性格不明であるがP17は対ピットが連結したのものとも理解できよう。

遺物：図示した土器は3点（398～400）である。398は埋甕、400は土器敷炉に用いられたもの、399も炉内から出土している。石器は石鏃未製品2点、打製石斧9点（228）、磨石5点、敲石3点が出土している。他にはピット内からイノシシ骨が検出されている。他にも獣骨片・鳥骨片も認められている。

時期：出土した土器から、中期10段階に比定できる。

124号竪穴住居跡（遺構：第97図、PL107 遺物：図版142、PL159）

遺構：O-24、T-4グリッドに位置する。多数の土坑と重複するが、大半の新旧関係は不明である。ただ屋外埋甕7・8はその土器から判断すれば、本跡よりも古い構築であると考えられる。壁高は約10～30cmを測るが南側では消失している。このように多数の土坑との重複と壁の消失のため、平面プランは明瞭ではないが、軽石製埋甕の存在から形状を想定すれば、柄鏡形敷石住居跡になると思われる。その場合、主軸長は約7.2m程度を測るものと推定できる。主体部は径約5m程の規模になろうか。敷石は主体部の北側に3点が認められている。扁平な安山岩質石であり、上面はよく擦られている。本跡には敷石の他にも安山岩質石が少なからず認められるが、これらは土坑に伴うものと理解するべきであろう。埋甕は軽石

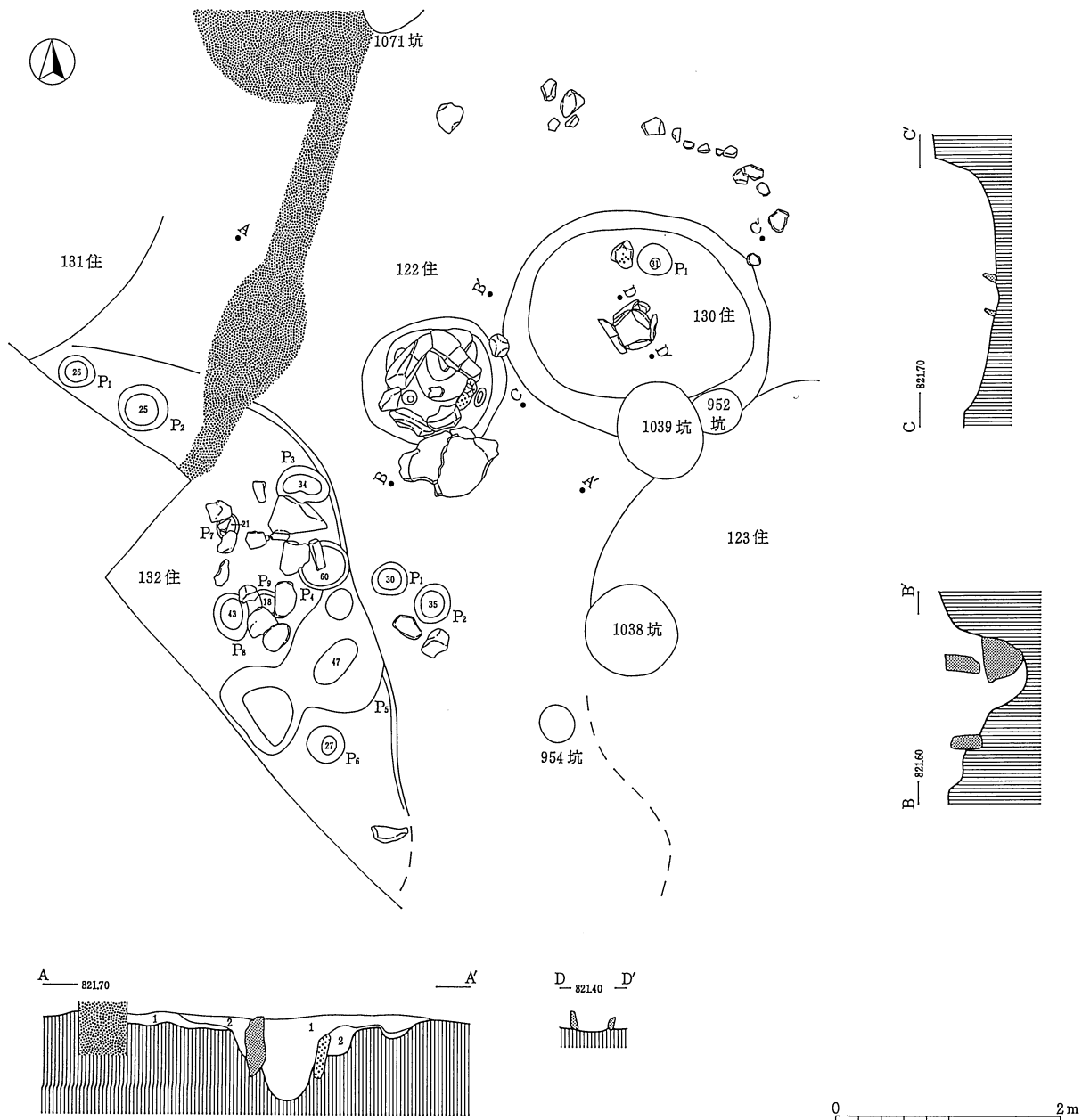
を掘りくぼめて鉢状に加工したものであるが、非常にもろくとりあげることはできなかった。10cm程度の掘り方を有している。炉ははっきりしないが、埋設された(401)を炉体土器であると考えたい。ただし401は屋外埋甕である可能性も否定できないかもしれない。周溝はみられない。ピットは2ヶを認定した。

遺物：図示した土器は5点(401~405)である。401は炉体土器である。石器は石鏃未製品1点、打製石斧15点、磨石2点(325)、凹石1点(346)、敲石1点、石棒A類1点(406)、丸石(523)、軽石製品2点(572)が出土している。他には獣骨片が出土している。

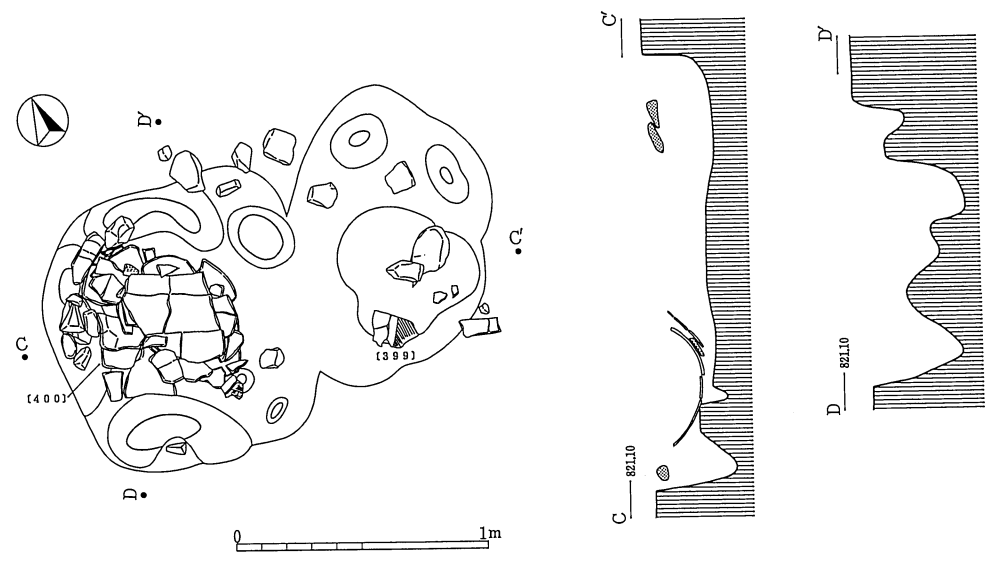
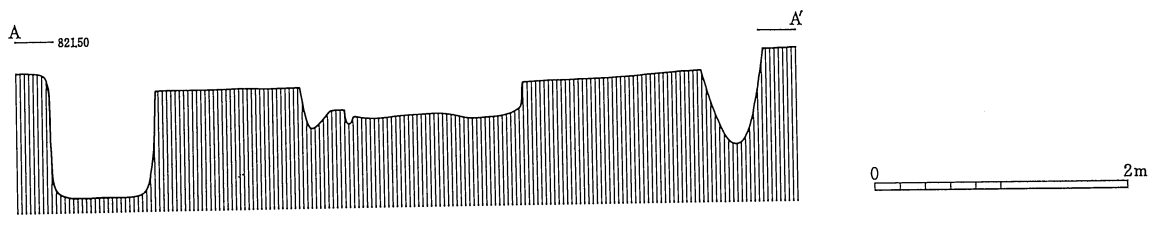
時期：401の土器から、後期称名寺式に比定したい。

125号竪穴住居跡（遺構：第98図 遺物：図版142、PL160）

遺構：T-8・9・13・14グリッドに位置する。1304坑をはじめとする多数の土坑と重複する。大半の土坑との新旧関係は不明であるが、1394坑・1395坑は埋甕の下から検出されているため、本跡の方が新しい



第95図 122号・130号・132号竪穴住居跡 1 : 60



第96図 123号竖穴住居跡 1:60

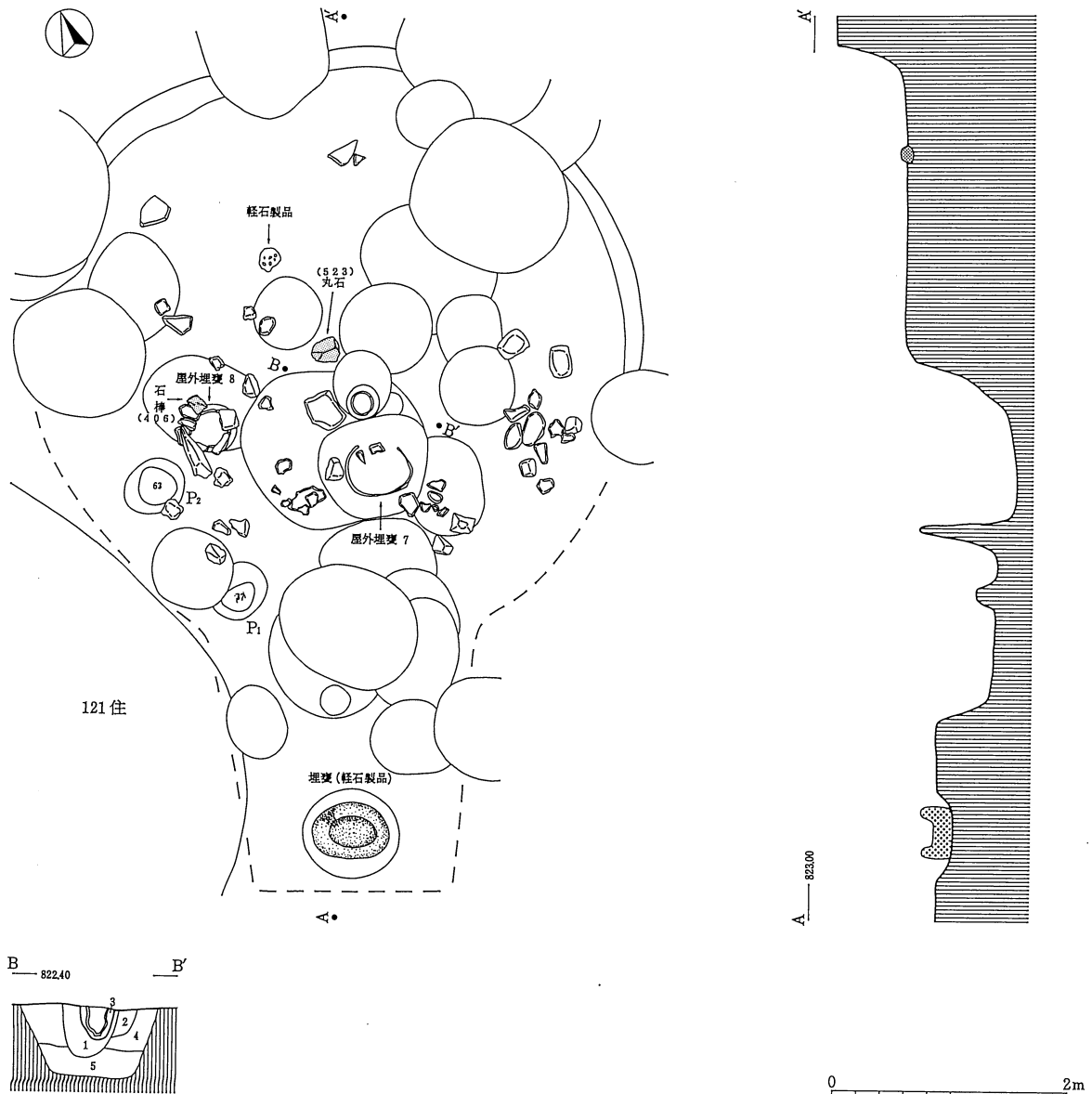
構築であることが理解できる。壁はほとんど消失しており、埋甕及び周溝から形状を推定すれば径約5m程の規模を測るものと考えられよう。埋甕は胴部以下を欠した口縁部のみの土器を逆位に埋設している。ピットは28ヶを検出した。P1～P10は周溝内の小穴である。

遺物：出土遺物は少なく、ビニール袋3つにとどまる。図示した土器は埋甕（406）の1点のみである。石器も図示した軽石製品1点（593）の他には欠損した打製石斧4点と磨石1点にすぎない。

時期：埋甕（406）から、中期7段階に比定できる。

126号竪穴住居跡（遺構：第99図、PL108 遺物：図版143、PL160）

遺構：T-4・T-5・T-9・T-10グリッドに位置する。1390坑・1391坑・1402坑よりも古く、126住・127住よりも新しい構築である。東西方向に長径6.4m、短径は5.4mを測る。拡張されたらしく周溝は西半部では二重に巡っている。東半部には周溝はみられない。床には貼床や硬化面は認められなかった。炉は作り替えられたようで2基が検出された。新炉は石囲炉であり、北辺と東辺の一部の炉石は欠如



第97図 124号竪穴住居跡 1:60

している。扁平な安山岩質石を縦に配する。旧炉は新炉に一部壊されているが、不整な方形の掘り方を有している。炉石はほとんど残っていないが、本来は石囲炉であった可能性が高い。おそらく住居拡張に伴い炉も作り替えられたものと考えられよう。ピットは16ヶが検出された。

遺物：図示した土器は2点(407、410)である。410は人面付釣手土器であり、釣手部分は覆土上面から出土し、残りの部分も覆土中からの出土であった。407は極めて稚拙なつくりであり、習作的な意味をもつものとも考えられまいか。石器は石鏃未製品2点、石錐1点、欠損した打製石斧12点、敲石2点、多孔石1点(456)、不明石器(658)が出土している。658は独犛石に近い形状を示す。他にはイノシシ及びビシカの骨が検出されている。

時期：出土した土器は中期7～8段階に比定できるものだが、8段階に比定される128住を切っているという遺構検出段階の所見を重視して、8段階の住居跡であるととらえたい。

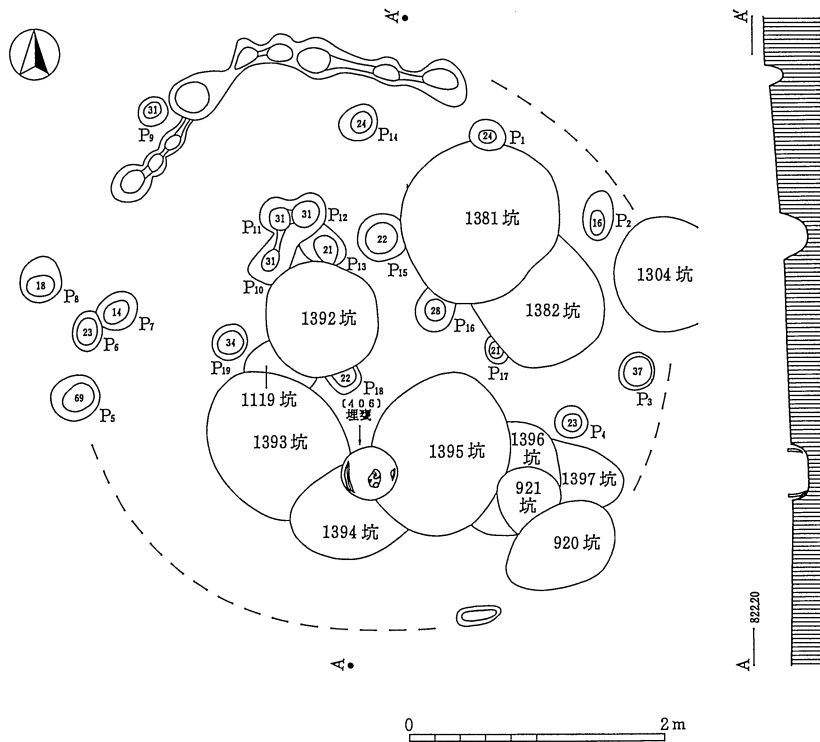
127号竪穴住居跡(遺構：第99図、PL108)

遺構：T-5グリッドに位置する。遺構検出段階で126住より古い構築であると理解できた。大部分を126住に壊されていて、規模・形状は不明である。壁高は最大で約30cmを測るが、西側では消失している。

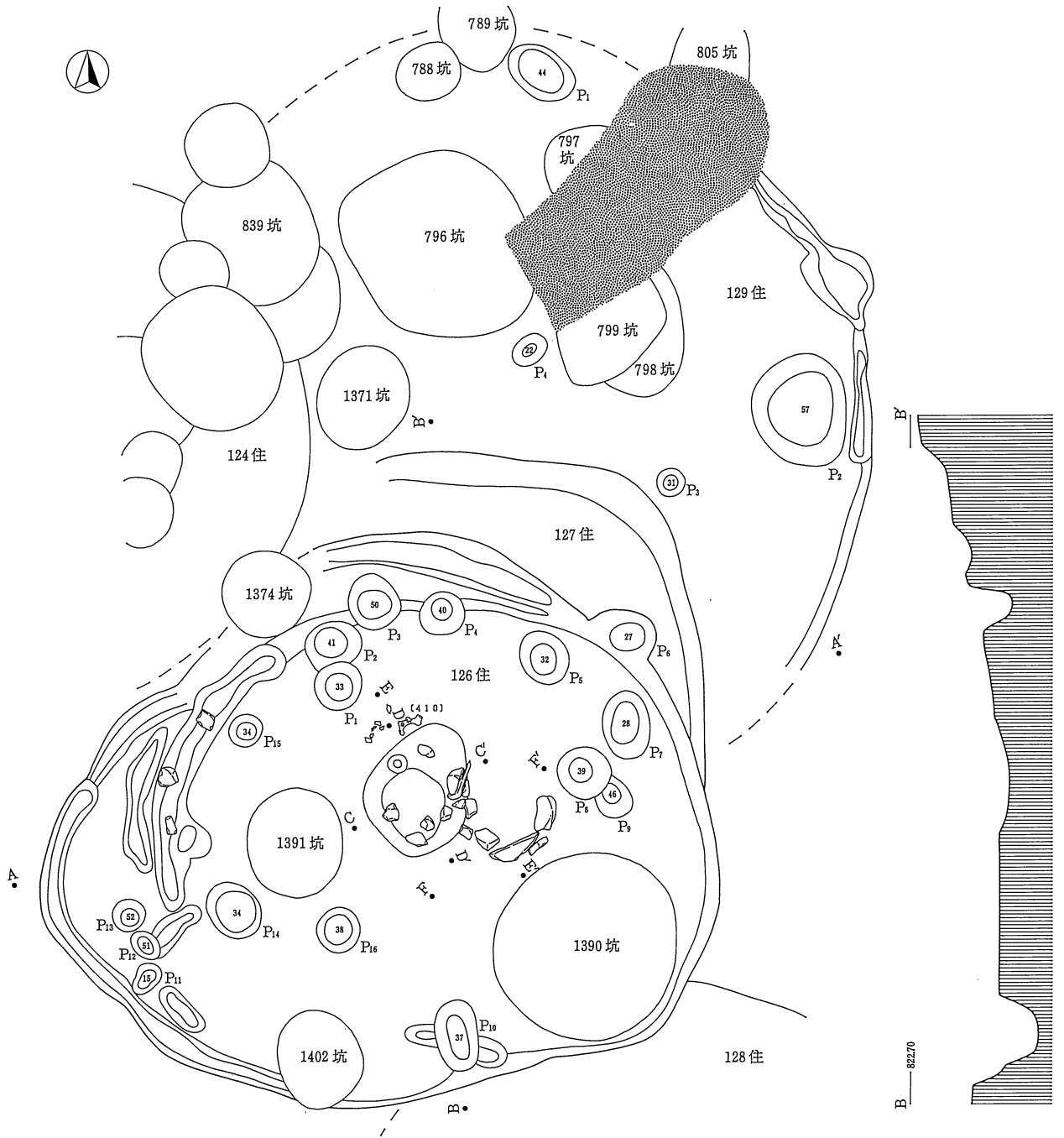
遺物・時期：本跡に属する遺物は出土しなかったが、126住に切られるという遺構検出段階での所見からすれば、中期8段階以前の所産であることは理解できよう。

128号竪穴住居跡(遺構：第100図、PL108 遺物：図版142)

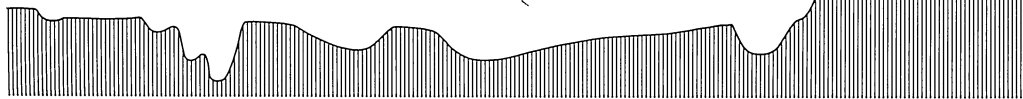
遺構：T-5グリッドに位置する。遺構検出段階で126住より古い構築であることが理解できた。また多数の土坑と重複するがそのほとんどのものとの新旧関係は不明である。ただ遺構検出段階の所見によれば、997坑が本跡よりも古いほかは新しい構築のものが多いように思われる。貼床と接しながらも貼床が認められない1379坑・1414坑・1373坑は本跡よりも新しい構築の可能性が高い。壁高は20cm前後を測る



第98図 125号竪穴住居跡 1 : 60



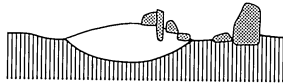
A — 82280



C — 82210



E — 82250



D — 82210



F — 82230



0 ————— 2m

第99圖 126号・127号・129号竪穴住居跡 1 : 60

が、西半部では消失している。推定規模は径約6.1m程になろう。周溝も東半部にのみみられ、しかも二重に巡っている。炉を中心として東側には貼床が認められている。炉は作り替えが確認されている。新炉は石囲炉であり、北辺の炉石が欠している。抜き取られたものであろう。旧炉は貼床下から検出されたものであり、抜き取り痕を含む掘り方がみつまっている。周溝が二重に巡っていることともあわせ、本跡が立て替えられたことが理解できる。ピットは11ヶが検出された。

遺物：出土遺物は少なく、ビニール袋1つにすぎない。土器はすべて破片資料であり、2点（408、409）を図示した。石器は打製石斧1点のみである。

時期：出土した土器から、中期8段階に比定できる。

129号竪穴住居跡（遺構：第99図、PL108）

遺構：O-25・T-5グリッドに位置する。124住・126住・127住及び多数の土坑と重複するが、壁は東側で数cm程を残す他は消失しているため、新旧関係はつかめなかった。わずかに残存する壁の形状から平面プランを推定すれば、径約7.4m程の規模を測るものと思われる。炉は確認できなかった。周溝は東側の一部のみみられている。ピットは4ヶが検出された。P1とP2が支柱穴の可能性が高い。

遺物・時期：本跡に属する遺物は出土しなかったが、縄文中期に比定される可能性が高いだろう。

130号竪穴住居跡（遺構：第95図、PL108 遺物：図版144、PL160）

遺構：T-3グリッドに位置する。122住と重複するが、出土土器からすれば本跡の方が新しいことが理解できる。長径2.4m、短径2mの規模を測る本遺跡で最小の住居跡である。壁高は約20～50cm前後を測る。床には貼床や硬化面は認められなかったが、やや凹凸がみられる。炉は扁平な安山岩質を縦に配した石囲炉であり、完存している。炉内はごく浅く掘りくぼめた程度である。住居跡に比して大きな炉である。周溝はみられない。ピットは1基が検出された。

遺物：図示した土器は3点（411～413）である。411は床面出土。石器は打製石斧3点（239）、磨石1点、多孔石1点（458）、軽石製品（566）が出土している。多孔石は壁際の床面から出土している。他にはイノシシ骨が検出されている。

時期：出土した土器から、中期10段階に比定できる。

131号竪穴住居跡（遺構：第101図、PL108 遺物：図版144）

遺構：T-2グリッドに位置する。敷石住居跡である。南半部は調査区外のため、柄鏡形を呈するかどうかは不明である。1072坑と1075坑と重複するが、それらよりも古い構築である。西側では約20cm程の壁高を測るが、東側では壁は消失している。規模は径約4.8m程を測るものと推定される。ピットは壁際に沿って配置されており、いずれも柱穴と思われる。敷石は北壁際の柱穴沿いに多く認められている。1075坑の北側に扁平な安山岩質石を縦に配したものが認められているが、これは石囲炉の一部であった可能性も高いだろう。周溝は確認できなかった。

遺物：土器は4点（414～417）を図示した。414は敷石下からの出土。石器は石鏃3点、石鏃未製品2点、打製石斧3点（206）、磨石8点（331）、凹石1点、敲石1点、石棒B類1点（405）、多孔石1点、台石1点（492）が出土している。土製品としては土錐1点（74）が出土している。

時期：出土した土器から、中期10段階から後期称名寺式頃に比定されよう。

132号竪穴住居跡（遺構：第95図、PL108 遺物：図版144）



第100図 128号竪穴住居跡 1 : 60

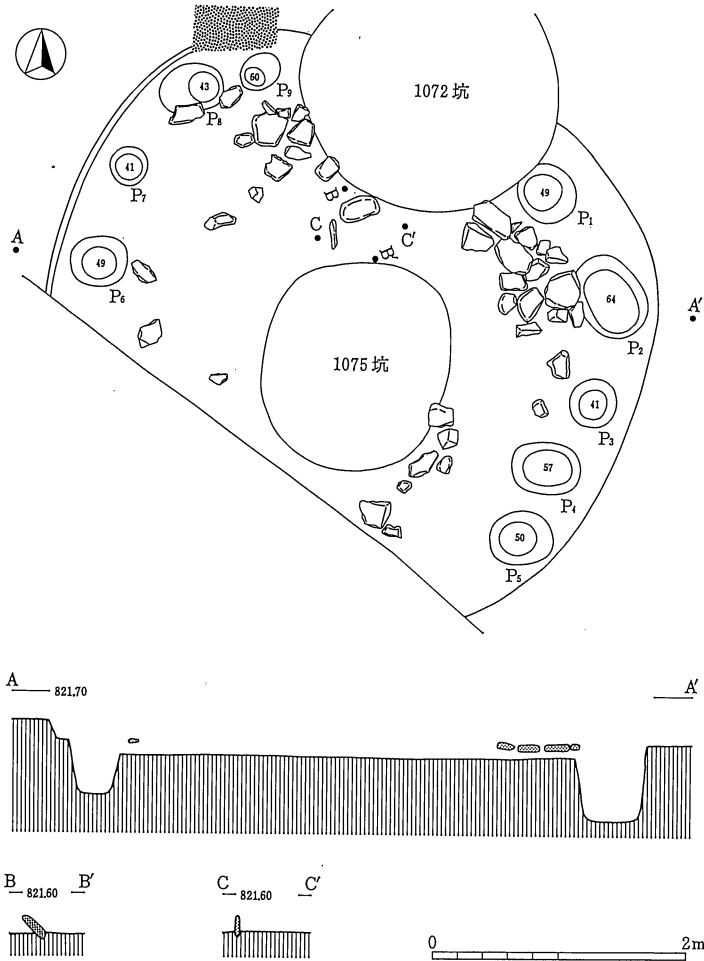
遺構：T-2・T-7・T-8グリッドに位置する。大部分が調査区外にかかり、北側の一部を調査したにとどまる。したがって規模や平面プランは不明であるが、敷石住居跡であることは間違いがない。残存する壁高でも数cmを測るにすぎない。推定プランからすれば、122住と重複するはずであるが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。ピットは9ヶが検出された。P5は性格不明であるが、P1・P2・P3・P4・P6は柱穴と思われる。P4の掘り方際に長方形を呈する石が縦に埋められていた。柱をたてる際の補強に使われたと考えられよう。

遺物：出土遺物は少なく、ビニール袋1つ程である。土器はすべて破片資料であり、3点(418、420)を図示した。石器は石鏃未製品1点、磨石2点、凹石1点(357)、敲石1点、多孔石(457)、台石1点が出土している。他にはピット内から未鑑定ではあるが動物らしき骨が検出されている。

時期：出土した土器から、中期10段階に比定できる。

時期別軒数

当該期の住居跡は107軒を数える。その時期別軒数は以下の通りである。



第101図 131号竖穴住居跡 1 : 60

- 中期1段階 = 5軒 (18住、21住、88住、109住、116住)
- 中期2段階 = 4軒 (11住、12住、16住、19住)
- 中期1～2段階 = 2軒 (48住、50住)
- 中期3段階 = 5軒 (15住、20住、25住、32住、89住)
- 中期4段階 = 2軒 (10住、108住)
- 中期5段階 = 8軒 (33住、44住、60住、67住、77住、80住、90住、91住)
- 中期6段階 = 8軒 (1住、2住、22住、29住、37住、101住、110住)
- 中期7段階 = 20軒 (4住、6住、8住、14住、17住、24住、28住、41住、43住、46住、69住、76住、78住、79住、82住、84住、85住、99住、102住、125住)
- 中期5～7段階 = 4軒 (5住、23住、26住、40住)
- 中期7～8段階 = 2軒 (74住、96住)
- 中期8段階 = 15軒 (38住、39住、47住、70住、71住、75住、81住、94住、95住、97住、106住、121住、122住、126住、128住)
- 中期8～9段階 = 2軒 (119住、131住)
- 中期9段階 = 2軒 (72住、118住)
- 中期8～10段階 = 1軒 (104B住)
- 中期10段階 = 5軒 (83住、93住、123住、130住、132住)

中期10段階～後期称名寺式＝2軒（119住、131住）

後期称名寺式＝7軒（3住、98住、103住、104A住、107住、112住、124住）

中期7段階頃以前＝2軒（7住、105住）

時期不明＝12軒（30住、31住、35住、42住、49住、64住、92住、111住、113住、120住、127住、129住）

② 土坑

前述の通り、1125基の土坑のうち当該期の遺物を出土するのは462基であるが、紙面の関係もあり、ここで紹介するのは、遺物を図示した278基にとどめた。これ以外で当該期の遺物を出土した土坑については文末にその概略をまとめてある。また遺物を出土していない土坑のうちにも相当数が当該期に所属するものと想定されよう。なお、土坑の時期決定においては、基本的には出土土器に基づいたが、重複関係をもつものについては、遺構検出段階での所見を優先させた。したがって、若干の齟齬をきたしているケースもあることを断っておきたい。

15号土坑（図版22）

位置：K-16 重複：11住→本坑 規模：径138×126cmの円形を呈する。深さは36cmを測る。遺物：土器の出土量は多く、図示した1点（421）の他にも約3Kg程が検出された。石器は石鏃未製品1点と打製石斧2点が出土した。 時期：中期10段階。

31号土坑（図版23）

位置：K-12 重複：なし 規模：径154×144cmの不整な円形を呈する。深さは40cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層で、径20cm程の軽石礫が多数認められる。遺物：土器は約1Kg程の出土であり、1点（422）を図示した。石器は磨製石斧1点が出土した。 時期：中期5段階。

35号土坑（図版24）

位置：J-22 重複：なし 規模：径82×70cmの不整な円形を呈し、一部でオーバーハングしている。深さは62cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層である。図示はしていないが底部には自然礫が認められた。遺物：少量の土器片のみであり、1点（423）を図示した。 時期：出土土器からは中期5段階に比定されるが、遺構検出段階の所見では14住よりも新しいため、7段階以降としておきたい。

36号土坑（図版24）

位置：J-22・23 重複：17住→本坑→14住 規模：14住に切られているため、平面プランは明確ではないが、径290cm程の隅丸方形に近い形状を呈すると思われる。深さは68cmをはかる。覆土：パミスを含む暗黄褐色土の単層である。遺物：土器の出土は少量であり、1点（424）を図示した。石器は剥片石器1点のみの出土である。 時期：出土土器からすれば中期6段階だが、17住との重複関係から中期7段階としたい。

40号土坑（図版24、PL109）

位置：D-19・20 重複：なし 規模：径78×68cmの楕円形を呈する。深さは38cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層である。遺物：土器はすべて破片資料であり、約500g程が出土し、2点

(425、426) を図示した。石器は打製石斧2点が検出された。 時期：中期6段階。

46号土坑（図版25）

位置：D-19 重複：なし 規模：径70×64cmの円形を呈する。深さは36cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層である。 遺物：土器片4点のみの出土であるが、そのうちの2点（427、428）を図示した。 時期：中期9段階。

64号土坑（図版25）

位置：O-8 重複：なし 規模：径104×90cmのやや不整な円形を呈する。深さは24cmを測る。 覆土：パミスを含む黒色土の単層である。 遺物：土器片のみであり、2点（430、431）を図示した。 時期：中期3～7段階。

70号土坑（図版25）

位置：O-23 重複：なし 規模：径76×72cmの円形を呈する。深さは22cmを測る。 覆土：黄色味がかかる褐色土の単層である。 遺物：約2Kg程の土器片のみであり、2点（432、433）を図示した。 時期：中期8段階。

77号土坑（図版66）

位置：O-23 重複：1329号土坑及び1339号土坑の下部より検出されたものであり、したがってそれらより古い構築であることがわかる。 規模：径104×100cmの円形を呈し、深さは76cmを測る。 覆土：軽石礫を含む暗褐色土の単層である。 遺物：約500gの土器片のみであり、そのうちの2点（434、435）を図示した。 時期：中期5段階。

133号土坑（図版28）

位置：O-13 重複：135坑→本坑 規模：径80×60cmの楕円形を呈し、深さは68cmを測る。 覆土：パミス粒を含む暗褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片と凹石2点（356）が出土したのみである。 時期：出土した土器からは時期細分はできないが、縄文中期に比定できよう。

153号土坑（図版29）

位置：O-9・10 重複：本坑→170号土坑 規模：南北に長い楕円形を呈し、長径は推定約230cm、短径150cmの規模を測るのと思われる。深さは80cmを測る。 遺物：少量の土器はすべて破片資料であり、3点（436～438）を図示した。石器は図示した剥片石器1点（301）と石鏃未製品1点が出土している。 時期：438はやや新しいが、中期8段階。

160号土坑（図版29）

位置：J-16 重複：なし 規模：径58×52cmの円形を呈する。深さは26cmを測る。 遺物：少量の土器片が出土したのみであり、2点（439、440）を図示した。 時期：中期7段階頃。

165号土坑（図版29）

位置：I-21 重複：なし 規模：径46×40cmの不整円形を呈する。深さは42cmを測る。 遺物：土器の

破片資料のみである。約500g程が検出されたが、図示できたのは1点(441)のみである。 時期：中期3～7段階。

167号土坑(図版30)

位置：I-21 重複：なし 規模：径46×40cmの円形を呈する。深さは約40cmを測る。 遺物：約1500gほどの土器片のみであり、3点(442～444)を図示した。 時期：中期3～4段階。

170号土坑(図版29)

位置：O-13 153坑→本坑 規模：南北に長い楕円形を呈し、長径156cm、短径100cm、深さは46cmを測る。 遺物：土器は約1000g程が検出され、4点(445～448)を図示した。石器は打製石斧1点と磨製石斧1点(174)が検出された。 時期：445は中期8段階、448は中期7段階に比定できるが、446・447は後期称名寺式に位置づけたい。

239号土坑(図版32)

位置：P-5 重複：なし 規模：径74×60cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。 覆土：パミス粒を含む黒褐色土であり、砂層が一部で認められる。 遺物：台石1点(493)が覆土上層から検出されたのみである。 時期：土器は検出されなかったが縄文中期の可能性が高いだろう。

242号土坑(図版32)

位置：K-24 重複：本坑→33住 規模：径112×98cmのやや不整な円形を呈し、深さは42cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は軽石礫とローム粒を含む黒褐色土、2層はローム粒を含む黒褐色土である。 遺物：土器は142・449～452の5点を図示した。142は33住と接合するが、主体は本坑である。石器は磨石1点が検出された。 時期：中期2段階。

246号土坑(図版32)

位置：P-4 重複：なし 規模：径86×62cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。 覆土：パミス・ローム粒を含む黒褐色土の単層である。 遺物・時期：石器は磨製石斧1点(188)と剥片石器1点が検出された。出土土器は1点のみの出土である。時期細分はできないが、縄文中期に比定できよう。

251号土坑(図版32)

位置：P-1 重複：なし 規模：径160×156cmの不整な円形を呈し、深さは28cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は軽石礫を含む黒色土、2層はパミス粒を含む黒褐色土である。 遺物：少量の土器片のみであり、2点(453・454)を図示した。 時期：中期8段階。

272号土坑(図版33)

位置：P-7、12 重複：本坑→289坑 規模：径216×172cmの不整な円形を呈し、深さは92cmを測る。 遺物：土器はすべて破片資料であるが、約10Kg程と出土量が多い。5点(455～459)を図示した。石器は打製石斧4点、剥片石器1点、軽石製品1点(603)が出土した。 時期：中期5～9段階。

275号土坑(図版33)

位置：P-7 重複：本来は3基の土坑が重複したものと考えられるが、遺構番号は1つとしている。
規模：中央の土坑は径70×47cmの楕円形を呈し、深さは56cmを測る。 遺物：図示した土器は1点(460)のみである。460は遺構検出段階で覆土上面に露呈していたものである。 時期：中期8段階。

276号土坑(図版33)

位置：P-7 重複：なし 規模：径112×90cmの不整な楕円形を呈し、深さは22cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点(461)を図示した。 時期：中期6段階。

277号土坑(図版60)

位置：T-15 重複：579坑・580坑→本坑 規模：径190×134cmの楕円形を呈し、深さは22cmを測る。
覆土：径2cm程の軽石礫を含む黒色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり、1点(462)を図示した。 時期：中期10段階。

278号土坑(図版33)

位置：P-16 重複：本坑→279坑 規模：長径推定約50cm、単径41cm、深さ25cmの楕円形を呈する。
遺物：土器は少量の破片資料のみであり、1点(463)を図示した。石器は磨石1点が検出された。 時期：中期5段階。

292号土坑(図版34、PL109)

位置：T-15 重複：なし 規模：径188×148cmのやや南北に長い楕円形を呈し、深さは156cmを測る。
断面は袋状を呈する。 覆土：3層に分けられ、1層はしまりの悪い黒色土、2層は黒褐色土、3層は粘性がややある褐色土である。 遺物：2層を中心として多量に出土している。土器は約2000gを超える破片資料のみであり、3点(464~466)を図示した。石器は打製石斧2点(274)、石棒B類1点(407)、石皿2点(426・427)、多孔石2点(463・464)、台石1点(495)が検出された。貯蔵穴である可能性が高いと思われる。 時期：中期8段階。

293号土坑(図版34、PL110)

位置：T-15 重複：71住→本坑 規模：径128×120cmの円形を呈し、深さは74cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は径数cm程の軽石礫を多量に含む黒褐色土、2層はしまりのよい褐色土である。覆土上面には自然礫が露呈していた。 遺物：土器は約1000gを超える破片資料のみであるが、2点(467・468)を図示した。石器は打製石斧1点が検出された。 時期：中期8段階。

301号土坑(図版34)

位置：P-13 重複：なし 規模：径86×82cmの円形を呈し、深さは76cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層である。覆土上面には自然礫が露呈していた。 遺物：土器はすべて少量の破片資料であり、4点(469~472)を図示した。石器は打製石斧1点が検出された。 時期：中期5~9段階。

302号土坑(図版34)

位置：P-7・12 重複：303坑→本坑→305坑・306坑・307坑 規模：302号土坑は径約170cm程の不整な円形を呈するものと想定され、深さ38cmを測る。 覆土：パミスをわずかに含む黒褐色土の単層である。

遺物：出土量は多い。土器は図示した3点（473～475）の他に約7Kg程の破片資料が認められる。石器は打製石斧3点と凹石1点が検出された。 時期：475は中期7段階だが、473と474は中期9段階であるため、後者をもって本土坑の時期としたい。

303号土坑（図版34）

位置：P-7・12 重複：本坑→302坑 規模：長径推定170cm、短径128cmの楕円形を呈するものと思われ、深さは66cmを測る。 覆土：6層に分けられる。1層は黒褐色土、2層は黒色土、3層は暗褐色土、4層は黒褐色土、5層は暗褐色土、6層は粘性のある暗黄褐色土である。 遺物：土器は約3Kgを超える破片資料が出土し、4点（476～479）を図示した。石器は打製石斧1点を検出した。 時期：中期8～9段階。

304号土坑（図版34）

位置：P-7 重複：なし 規模：径120×88cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は炭化物をわずかに含む黒色土、2層は黒褐色土である。 遺物：土器片は少量であり、2点（480・481）を図示した。石器は打製石斧3点が検出された。 時期：中期5～9段階。

310号土坑（図版35）

位置：P-8 重複：なし 規模：径120×62cmの楕円形を呈し、深さは34cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（482）を図示した。 時期：中期9段階。

312号土坑（図版35）

位置：P-7 重複：79住→本坑 規模：径64×58cmの円形を呈し、深さは46cmを測る。 遺物：覆土上面には多孔石1点（465）が露呈していた。遺物は他には打製石斧1点のみである。 時期：土器が検出されなかったが縄文中期の可能性が高いだろう。

313号土坑（図版35）

位置：P-7 重複：79住→本坑 規模：径72×68cmの円形を呈し、深さは62cmを測る。覆土上面には自然礫が露呈していた。 遺物：土器片のみであり、4点（483～486）を図示した。 時期：483（中期8段階）を除く土器片から、中期10段階。

321号土坑（図版35、PL110）

位置：P-13 重複：77住→本坑 規模：径116×100cmの不整な円形を呈し、深さは94cmを測る。 覆土：多量の軽石礫と少量の炭化物を含む黒褐色土の単層である。 遺物：土器はすべて少量の破片資料であり3点（487～489）を図示した。石器は石皿1点（428）が覆土中位から検出されている。 時期：487は中期9段階、489は中期5～7段階だが、中期10段階の488をもって本坑の時期としたい。

324号土坑（図版35、PL110）

位置：P-12 重複：327坑→本坑 規模：径50×40cmの円形を呈し、深さは52cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（490）を図示した。 時期：中期10段階。

325号土坑 (図版35)

位置：P-12 重複：本坑→1103坑 規模：長径102×短径推定90cmの円形を呈し、深さは28cmを測る。
覆土：数cm程の軽石礫を多量に含む暗褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり、4点
(491~494)を図示した。 時期：中期10段階。

326号土坑 (図版35)

位置：P-12 重複：322坑・327坑→本坑 規模：径100×88cmの円形を呈し、深さは52cmを測る。 遺
物：少量の土器片のみであり、2点(495・496)を図示した。 時期：中期7段階。

328号土坑 (図版35)

位置：P-11 重複：330坑→本坑 規模：径70×64cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。 遺物：少量
の土器のみであり、器台1点(497)を図示した。 時期：中期3~7段階頃か。

329号土坑 (図版36)

位置：P-12 重複：なし 規模：径60×54cmの円形を呈し、深さ52cmを測る。 遺物：少量の土器片の
みであり、3点(498~500)を図示した。 時期：中期7段階。

351号土坑 (図版35)

位置：P-7・12 重複：79住・317坑・318坑・319坑と重複するが、遺構検出段階ではその新旧関係は
つかめなかった。ただし、出土土器からすれば、79住よりも本坑の方が古いことが理解できる。 規模：
径82×70cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。 遺物：図示した土器は完形の吊手土器1点(501)のみで
ある。埋納されたものであろうか。土坑出土の吊手土器は類例をほとんどみない。石器は打製石斧1点が
検出された。 時期：中期2段階。

355号土坑 (図版36、PL110)

位置：P-12 重複：なし 規模：径58×54cmの円形を呈し、深さは48cmを測る。 遺物：少量の土器片
のみであり、3点(502~504)を図示した。 時期：中期5~7段階。

356号土坑 (図版36)

位置：P-16 重複：本坑→1溝 規模：1溝に半分以上を切られるが、径88cm程の円形を呈するものと
思われる。深さは50cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点(505)を図示した。他には打製
石斧1点が検出されたのみである。 時期：中期9段階。

403号土坑 (図版36)

位置：N-19 重複：88住→本坑 規模：径106×104cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。 遺物：約1
Kg程の土器片のみであり、3点(506~508)を図示した。 時期：中期5~7段階。

422号土坑 (図版36)

位置：N-10 重複：なし 規模：径32×30cmの円形を呈し、深さ16cmを測る。 遺物：土器は少量の破
片資料のみであり、2点(509・510)を図示した。他には打製石斧1点が検出された。 時期：中期であ

ることは間違いないが細分はできない。

441号土坑 (図版57、PL110)

位置：N—10 重複：本坑→1154坑 規模：径推定約110×98cmの不整形を呈し、深さは68cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層はローム粒を含む黒褐色土、2層は灰白褐色土である。遺物・時期：土器はごくわずかであり、時期細分資料となりえなかったが縄文中期に比定できよう。石棒B類(408)、石皿(429)、台石(494)が1点ずつ出土している。石棒B類と石皿がセットで検出されたことは興味深い。

460号土坑 (図版37)

位置：O—11 重複：459坑→本坑など 規模：径130×114cmの円形を呈し、深さは132cmを測る。遺物：少量の土器片のみであり、1点(515)を図示した。時期：出土土器からすれば中期9～10段階だが、103住との重複関係から後期称名寺式にしたい。

461号土坑 (図版37)

位置：O—16 重複：462坑・463坑→本坑 規模：径86×74cmの楕円形を呈し、深さ60cmを測る。覆土：粒子の粗い褐色土の単層である。覆土上面には自然礫が露呈している。遺物：土器は2点(516・517)を図示したが、他にも約1Kg程の土器片が出土している。石器は打製石斧1点と磨製石斧の破片がわずかに検出された。時期：出土土器からすれば中期10段階だが、103住との重複関係より後期称名寺式にしたい。

468号土坑 (図版37)

位置：P—7 重複：466坑と469坑と重複する。遺構検出段階で466坑の方が新しいことは判断できたが、469坑との新旧関係はつかめなかった。規模：径約100cm程の円形を呈するものと思われる。深さは27cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は粘性をもつ黒色土、2層は粘性の少ない黒色土である。遺物：少量の土器片のみであり、3点(518～520)を図示した。時期：中期10段階～後期称名寺式。

504号土坑 (図版61)

位置：T—10 重複：644坑・645坑・1200坑→本坑 規模：径118×98cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。覆土中位には扁平な自然礫が認められる。遺物：土器は少量のみであり、2点(521・522)を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。時期：中期8段階。

507号土坑 (図版59)

位置：T—15 重複：1173坑・1175坑→本坑 規模：径60×54cmの円形を呈し、深さ42cmを測る。覆土：径2cm程の軽石礫を含む黒褐色土である。底面には自然礫が認められた。遺物：少量の土器片のみであり、1点(523)を図示した。時期：中期5～7段階。

513号土坑 (図版38)

位置：P—2 重複：なし 規模：北側の一部は攪乱によって破壊されているため、長径推定115cm、短径94cmの楕円形を呈し、深さは26cmを測る。覆土：パミスを含む暗褐色土の単層であり、自然礫2点が覆土中に認められる。遺物：少量の土器片のみである。1点(524)を図示した。時期：中期8～10

段階。

538号土坑 (図版38)

位置：T-15、20 重複：本坑→72住 規模：径約50cmの円形を呈すると想定でき、深さは21cmを測る。
覆土：φ10cm程の軽石礫を含む黒褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり、1点 (525)
を図示した。 時期：中期7～8段階。

556号土坑 (図版58)

位置：T-15 重複：1187坑・1189坑・1190坑→本坑→564坑 規模：径57cm程の円形を呈するものと思
われ、深さは18cmを測る。 覆土：軽石礫を含む黒褐色土であり、骨片がわずかに認められた。 遺物：
土器はごく少量の出土であり、1点 (527) を図示した。他には獣骨片も検出された。 時期：中期5
～7段階。

571号土坑 (図版73)

位置：P-1 重複：1326坑→本坑→1溝 規模：径188×推定約170cm程の円形を呈し、深さは80cmを測
る。 覆土：4層に分けられる。1層はローム土を含む暗褐色土、2層はローム土を含む黒褐色土、3層
はローム土をわずかに含む黒褐色土、4層はローム土を多く含む黒褐色土である。 遺物：土器は破片資
料のみであり、約4Kg程の出土量をみる。4点 (528～531) を図示した。石器は打製石斧3点を検出し
た。 時期：中期8～10段階。

578号土坑・586号土坑 (図版62)

位置：T-15 重複：土坑の重複の激しい個所であるが、578坑と586坑については、構検出段階の所見か
ら578坑の方が新しい構築である。

578号土坑

規模：径76×68cmの円形を呈する。深さは112cmを測り、かなり深い。 覆土：パミスを含む黒褐色土の
単層である。 遺物：土器片のみであり、1点 (532) を図示した。 時期：中期8段階。

586号土坑

規模：径100×86cmの円形を呈し、深さ45cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層はパミス粒とロー
ム土を含む黒褐色土、2層はローム土がブロック状に含まれる黒褐色土、3層はわずかなパミス粒を含む
黒褐色土である。 遺物：少量の土器片と打製石斧1点が出土し、土器片1点 (535) を図示した。 時
期：中期7段階。

583号土坑 (図版39)

位置：T-15 重複：582坑→本坑 規模：径51×50cmの円形を呈し、深さは36cmを測る。 覆土：パミ
スを含む黒褐色土の単層である。 遺物：土器片のみであり、2点 (533・534) を図示した。 時期：中
期10段階。

600号土坑 (図版39)

位置：T-15 重複：なし 規模：径45×40cmの円形を呈し、深さは62cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（536）を図示した。 時期：中期9段階。

652号土坑（図版40）

位置：P-6・11 重複：なし 規模：径36×36cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。 遺物：土器は少量の破片資料のみであり、図示はしていない。石器としては軽石製品1点（562）が検出された。 時期：縄文中期に比定できるが、時期細分はできなかった。

700号土坑（図版41）

位置：O-11 重複：本坑→103住 規模：径192×172cmの不整形円形を呈し、深さは140cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層は粒子の粗い灰褐色土、2層は赤褐色土、3層は灰褐色土である。 遺物：土器片のみであり、約1Kg程の出土量である。2点（537・538）を図示した。 時期：中期9段階。

701号土坑（図版41）

位置：P-1 重複：109住・702坑→本坑 規模：径74×74cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層である。 遺物：土器は少量の破片資料のみである。1点（539）を図示した。石器は打製石斧2点と敲石1点を検出した。 時期：中期5～7段階。

703号土坑（図版41、PL111）

位置：O-14 重複：なし 規模：径118×116cmの円形を呈し、深さは88cmを測る。 覆土：パミスを含む褐色土の単層である。 遺物：井戸尻Ⅲ式期の屈折底を有する完形土器（540）が出土している。その下部からは多孔石1点（466）と台石1点が検出されている。多孔石と台石とともに土器を埋納したものと考えられよう。 時期：中期2段階。

717号土坑（図版41）

位置：P-6 重複：なし 規模：径49×44cmの円形を呈し、深さは49cmを測る。 遺物：土器は少量の破片資料のみである。石器は多孔石1点（468）が検出されている。 時期：縄文中期に比定できるだろうが、時期細分はできない。

724号土坑（図版41）

位置：P-7 重複：なし 規模：径100×42cmの不整形な楕円形を呈し、深さ62cmを測る。 遺物：土器は図示した2点（541・542）の他、約1Kg程の破片資料が検出された。541は底面に木葉痕が認められる。石器は出土していない。 時期：中期8段階。

750号土坑（図版42）

位置：O-19 重複：なし 規模：径84×74cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は黒褐色土である。 遺物：土器は少量の破片資料のみであり、1点（543）を図示した。石器は石鏃1点（73）と石鏃未製品2点が検出された。 時期：中期5～7段階。

752号土坑 (図版42)

位置：O-19 重複：なし 規模：径42×38cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり、2点(544・545)を図示した。 時期：中期7段階。

755号土坑 (図版68)

位置：O-21、22 重複：本坑→1268坑 規模：残存部が少ないため規模は不明である。 覆土：パミスをわずかに含む暗黄褐色土である。 遺物：少量の土器片のみであり1点(546)を図示した。 時期：中期10段階。

756号土坑 (図版42)

位置：O-24 重複：759坑→本坑 規模：径36×28cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、3点(547～549)を図示した。 時期：中期5～7段階。

762号土坑 (図版42)

位置：O-19 重複：なし 規模：径86×68cmの楕円形を呈し、深さ24cmを測る。 遺物：土器は少量であるが、3点(550～552)を図示した。他には打製石斧1点が検出された。 時期：中期8段階。

764号土坑 (図版42)

位置：O-23、24 重複：なし 規模：径96×92cmの円形を呈し、深さ29cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層はしまりの悪い黒褐色土、2層は暗褐色土、3層はにぶい褐色土である。 遺物：約1Kgを超える土器片のみである。4点(553～556)を図示した。 時期：中期10段階～後期称名寺式。

765号土坑 (図版74)

位置：O-17 重複：1342坑・1346坑→本坑→107住 規模：径156×92cmの楕円形を呈し、深さ132cmを測る。 覆土：3層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は灰黄褐色土、3層は軽石礫の多い暗褐色土である。 遺物：土器はすべて破片資料だが、出土量は多く、約3Kgを超える。3点(557～559)を図示した。打製石斧1点が検出された。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。 時期：中期10段階。

766号土坑 (図版69)

位置：O-22 重複：68坑・781坑→本坑 規模：径36×36cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。 遺物：土器は3点(560～562)を図示した。560は781坑出土土器と接合できたが、主体は本坑である。他には打製石斧2点を検出した。 時期：中期9段階。

767号土坑 (図版42)

位置：O-16・17 重複：なし 規模：径110×104cmの円形を呈し、深さ34cmを測る。 遺物：少量の土器片のうち3点(563～565)を図示した。他に打製石斧1点が検出された。 時期：中期8段階のものから認められるが、本坑の時期は中期10段階～後期称名寺式に比定できよう。

768号土坑 (図版69)

位置：O-17 重複：769坑→本坑→1281坑 規模：径84cm程の円形を呈すものと思われ、深さは91cmを

測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層である。 遺物：土器片のみであり、2点（566・567）を図示した。 時期：中期8段階。

769号土坑（図版69、PL111）

位置：O-17 重複：本坑→768坑 規模：径70cm程の円形を呈するものと思われ、深さは92cmを測る。 覆土：しまりの悪い灰黄褐色土の単層である。石棒A類1点（409）が検出されている。他には土器片がわずかに認められるにすぎず、石棒を埋納したものであろうと想定できる。 時期：時期決定に耐える資料を欠くため、縄文中期のものとしか判断できない。

770号土坑（図版70）

位置：O-17 重複：本坑→1272坑 規模：径70cm程の円形を呈するものと想定される。深さは64cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のうち1点（569）を図示した。他に打製石斧2点が検出された。 時期：中期8段階。

771号土坑（図版23）

位置：O-24 重複：なし 規模：径57×55cmの円形を呈し、深さは70cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、2点（570・571）を図示した。 時期：中期10段階。

775号土坑（図版43）

位置：O-17 重複：なし 規模：径92×69cmの円形を呈し、深さは31cmを測る。 遺物：少量の土器片であり、3点（572・574）を図示した。 時期：中期8段階。

778号土坑（図版64）

位置：O-18・23 重複：本坑→1242坑 規模：径53cm程の円形を呈するものと想定される。深さは32cmを測る。 遺物：石棒A類1点（410）をあげるのみである。 時期：中期頃であろうか。

780号土坑（図版65）

位置：O-23 重複：1247坑→本坑 規模：径60×42cmの円形を呈し深さ40cmを測る。 覆土：ローム土が混じる暗黄褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり1点（575）を図示した。 時期：出土土器からすれば中期8段階だが、1247坑との重複関係からすれば中期10段階以降となろう。

781号土坑（図版69）

位置：O-22 重複：68坑→本坑 規模：長径115cm、短径推定約80cm程の楕円形を呈するものと想定される。深さは40cmを測る。 遺物：土器片のみであり、2点（576・577）を図示した。 時期：中期7段階。

783号土坑（図版43）

位置：O-17 重複：本坑→784坑 規模：径60cm程の円形を呈するものと想定される。深さは12cmを測る。 遺物：土器片のみであり、1点（578）を図示した。 時期：中期9段階。

784号土坑 (図版43)

位置：O-17 重複：784坑→本坑 規模：径65×64cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。 遺物：土器は少量の破片資料のみであり、1点(579)を図示した。打製石斧1点も検出された。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。 時期：中期9段階。

793号土坑 (図版43)

位置：O-23・T-3 重複：なし 規模：径114×54cmの不整な楕円形を呈し、深さは24cmを測る。 遺物：土器片のみであり、2点(580・581)を図示した。 時期：中期10段階。

794号土坑 (図版43)

位置：O-23・T-3 重複：なし 規模：径170×70cmの楕円形を呈し、深さは34cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、4点(582～585)を図示した。 時期：中期10段階。

796号土坑 (図版43)

位置：O-25 重複：なし 規模：東側の一部を攪乱により破壊されているが、径185×165cmの円形を呈し、深さは78cmを測る。 覆土：しまりの良い黒褐色土の単層である。 遺物：少量の土器片のみであり、3点(586～588)を図示した。 時期：中期8段階。

798号土坑・799号土坑 (図版43)

位置：O-25・T-5 重複：798坑→799坑 規模：北側を攪乱により失っているため規模等は不明である。 覆土：798坑がしまりの悪い黒褐色土で炭化物をわずかに含む。799坑は小軽石礫を少し含むしまりの良い黒褐色土である。 遺物・時期：いずれも土器のみである。798号坑は1点(589)を図示し、中期8段階。799坑は2点(590・591)を図示し、中期8段階。

800号土坑 (図版76)

位置：O-24 重複：本坑→1384坑 規模：径78cm程の円形を呈し、深さは70cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層はしまりの悪い暗褐色土、2層はにぶい赤褐色土でしまりが非常に悪い。 遺物：土器はすべて破片資料であるが、約3Kg程の出土量をもつ。3点(592～594)を図示した。石器は石鏃1点と打製石斧1点が検出された。 時期：594は中期5～7段階だが、593と595をもって中期10段階を本土坑の時期としたい。

804号土坑 (図版75)

位置：O-24 重複：本坑→1366坑 規模：径52cm程の円形を呈し、深さは30cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点(595)を図示した。 時期：中期9段階。

810号土坑 (図版44)

位置：T-10 重複：本坑→809坑 規模：長径推定約70cm、短径58cmの楕円形を呈し、深さは62cmを測る。 覆土：3層に分けられ、1層と3層は暗褐色土、2層は黒褐色土である。2層は柱痕の可能性もあろうが、周辺には同様な土坑は見当たらず、掘立柱建物跡の柱穴である可能性は低いと思われる。 遺物：少量の土器片のみであり、2点(596・597)を図示した。 時期：中期7段階。

821号土坑 (図版45)

位置：T-4 重複：124住と重複する。図面上では124住のピットを切るように表現されているのが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。規模：径67×66cmの円形を呈し、深さは39cmを測る。覆土：記載なし 遺物：少量の土器片のみであり、2点(600・601)を図示した。時期：601は中期3～4段階だが、7段階頃に比定される600をもって本土坑の時期としたい。

828号土坑 (図版45)

位置：T-9 重複：846坑→本坑 規模：径130×93cmの楕円形を呈し、深さ82cmを測る。遺物：土器片のみであり、3点(602～604)を図示した。時期：中期8段階。

835号土坑 (図版75)

位置：O-24、T-4 重複：本坑→121住・1364坑 規模：重複部分が多いため不明である。覆土：親指大の軽石礫を含む暗褐色土の単層である。遺物：少量の土器片のみであり、2点(605・606)を図示した。時期：中期7段階。

836号土坑・838号土坑・839号土坑・840号土坑 (図版44)

位置：O-24・T-4 重複：多数の土坑が重複する個所である。836坑・838坑・839坑は837坑より古いことは土層観察から判断できた。839坑はさらに838坑と840坑にも切られている。

836号土坑 規模：径120cm程の円形を呈するものと思われ、深さは58cmを測る。覆土：しまりの良い暗黄褐色土で骨片を含む。遺物：土器はすべて破片資料であり、3点(607～609)を図示した。石器は打製石斧3点と剥片石器1点が検出された。時期：中期10段階。

838号土坑 規模：径60cm程の円形を呈するものと思われ、深さは40cmを測る。覆土：3層に分けられ、1層は灰褐色土、2層はしまりの悪い黒褐色土、3層はローム土を多く含む暗黄褐色土である。遺物：土器片のみであり、2点(610、611)を図示した。他に打製石斧1点を検出した。時期：中期8段階。

839号土坑 規模：径120cm程の円形を呈するものと思われ、深さは68cmを測る。覆土：粒子の粗い暗黄褐色土の単層である。遺物・時期：土器は4点(612～615)を図示した。612と613から中期8～9段階。

840号土坑 規模：径80×38cmの円形を呈し、深さ90cmを測る。遺物：土器は2点(616、617)を図示した。他に打製石斧1点が検出された。時期：中期8段階。

843号土坑 (図版45)

位置：T-9 重複：なし 規模：径71×60cmの円形を呈し、深さは30cmを測る。覆土：しまりの悪い暗褐色土の単層である。遺物：土器は約1Kg程の破片資料のみであり、3点(618～620)を図示した。他には打製石斧1点が検出された。時期：中期8段階。

847号土坑 (図版45)

位置：T-9 グリッドに位置する。 重複：851坑→本坑 規模：径157×133cmの円形を呈し、深さは77cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は軽石礫を多く含む暗黄褐色土、2層はブロック状に黒色土が混じる暗褐色土である。 遺物：土器は少量で1点（621）を図示した。他には打製石斧1点（240）が検出された。 時期：中期5～6段階。

870号土坑（図版46）

位置：T-10 重複：869坑→本坑 規模：径62×56cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。 遺物：土器片のみであり、1点（622）を図示した。 時期：中期1～2段階。

958号土坑（図版72）

位置：T-10・P-6 重複：本坑→1306坑 規模：重複部分が多いため、規模等は不明である。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（623）を図示した。 時期：中期5～7段階。

965号土坑（図版48）

位置：T-14 重複：966坑→本坑 規模：径35×28cmの円形を呈し、深さは30cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであるが、1点（624）を図示した。 時期：中期8段階。

1011号土坑（図版23）

位置：O-24 重複：23坑・1036坑→本坑 規模：径66×55cmの楕円形を呈し、深さ32cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（625）を図示した。 時期：中期10段階。

1042号土坑（図版50、PL111）

位置：T-2・3 重複：なし 規模：攪乱により一部を失っているが、径156cm程の円形を呈し、深さは78cmを測る。 覆土：3層に分かれ、1層は暗褐色土、2層は軽石礫を含む暗褐色土、3層は暗褐色土である。 遺物：少量の土器片のうち2点（626、627）を図示した。石器は多孔石1点が検出された。 時期：中期8段階。

1044号土坑（図版51）

位置：O-21 重複：なし 規模：南西部分は調査区域外であるが、径106cm程の円形を呈し、深さ48cmを測るものと想定される。 遺物：土器は220gを出土したが図示していない。石器は出土していない。土製品としてミニチュア土器1点（85）が検出された。 時期：縄文中期に比定できるだろうが、時期細分はできない。

1045号土坑（図版66）

位置：O-23 重複：1043坑→本坑 規模：一部を攪乱によって失っているが、径194×131cmの円形を呈し、深さは94cmを測る。 覆土：4層に分けられる。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土、3層は褐色土、4層はローム土を多く含む黄褐色土である。 遺物：約1Kg程の土器片のうち、3点（628～630）を図示した。石器は打製石斧1点、凹石1点（350）、台石1点（496）、軽石製品1点（546）を検出した。 時期：中期10段階。

1046号土坑（図版51）

位置：T-2 重複：なし 規模：径31×28cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層である。 遺物：図示した台石1点（497）のみであった。 時期：縄文中期のものであるとは判断できない。

1059号土坑（図版51）

位置：O-21 重複：なし 規模：径86×55cmの不整な円形を呈し、深さ38cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（631）を図示した。 時期：中期9段階。

1072号土坑（図版52、PL111）

位置：T-2 重複：なし 規模：径208×188cmの円形を呈し、深さ92cmを測る。 覆土：8層に分けられる。1層は黒色土、2層は暗褐色土、3層は軽石礫と炭化物を多く含む黒褐色土、4層は3層よりもしまりの悪い黒褐色土、5層は粒子の細かい暗褐色土、6層はローム土を少し含む暗褐色土、7層はローム土の崩落と思われ、8層はローム土を少し含む暗褐色土である。 遺物：土器片の出土量は多く図示した3点（632～634）の他にも3.5Kg程が検出されている。石器は石鏃未製品1点、打製石斧2点、剥片石器1点（302）、磨石1点、敲石2点（386）、石皿1点（430）、多孔石3点（469～471）が出土した。他にはクリの炭化物が検出されている。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。 時期：中期10段階～後期称名寺式。

1074号土坑（図版52）

位置：O-21 重複：1076坑→本坑 規模：径120×69cmの楕円形を呈し、深さは52cmを測る。 遺物：土器・石器の出土はなし。土製品としてミニチュア土器1点（86）が検出されたのみである。 時期：土器は検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1075号土坑（図版52）

位置：O-21 重複：なし 規模：径168×144cmの円形を呈し、深さは84cmを測る。 覆土：5層に分けられる。1層は黒色土、2層はφ1～2cm程の軽石礫が大量に含まれる暗褐色土、3層は土器片が多く含まれる暗褐色土、4層は粒子の細かい黒褐色土、5層はローム土の崩落と思われる。 遺物：土器は4点（635～638）を図示した。他にも2.5Kg程の出土をみている。637と638の底面には網代痕が認められる。石器は図示した軽石製品1点（624）の他に、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石1点、凹石1点、石皿1点が検出された。 時期：中期10段階～後期称名寺式。

1101号土坑（図版53）

位置：P-2 重複：85住→本坑 規模：径122×116cmの円形を呈し、深さは56cmを測る。 覆土：2層に分けられる。1層はローム土を含む黒色土で軽石礫を多く含む。2層は黄褐色土である。 遺物：土器は約1Kg程の出土量であり、4点（639～642）を図示した。石器は磨石1点が検出された。 時期：中期9段階。

1102号土坑（図版53）

位置：P-12 重複：なし 規模：径140×122cmの円形を呈し、深さは80cmを測る。 覆土：2層に分け

られ、1層は握拳大の軽石礫を多く含む黒褐色土、2層は褐色土である。遺物：土器は4点を図示した。他にも約2.5Kg程の土器片が出土した。石器は打製石斧1点と石皿1点(431)が検出された。時期：中期9段階。

1104号土坑(図版53、PL112)

位置：P-7 重複：なし 規模：径96×96cmの円形を呈し、深さ80cmを測る。覆土：粒子の粗い灰褐色土でパミスを多く含まれる。遺物：土器は5点(647~651)を図示した。覆土中位から検出された647は内部には赤色顔料が認められており、これは鑑定の結果、ベンガラであることが判明した。朱ではなく、ベンガラを入れたものであることがわかる。時期：中期9段階。

1105号土坑(図版53)

位置：P-13 重複：1106坑→本坑 規模：径106×60cmの不整な楕円形を呈し、深さは36cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は褐色土である。覆土上面には自然礫が露呈している。遺物：土器片のみであり、2点(652・653)を図示した。時期：中期9段階。

1107号土坑・1108号土坑(図版53)

位置：P-13 重複：この周辺は土坑の重複が著しい。

1107坑については、遺構検出段階で1111坑より新しく、1108坑よりも古いことが理解できた。径132×76cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。覆土は2層に分けられ、1層はローム土でかなり締まっている。2層はローム粒混じりの黒褐色土である。覆土の上面には数点の自然礫が認められている。土器は3点(654~656)を図示した。他には剥片石器1点が検出された。中期8~10段階。

1108坑は、1107坑・1110坑・1111坑よりも新しいことが理解できた。径122×96cmの不整な楕円形を呈し、深さは44cmを測る。覆土は2層に分けられ、1層は粒子の細かい黒色土、2層はしまりの悪い黒褐色土である。ここでも覆土上面には自然礫が認められている。遺物は土器のみであり、1点(657)を図示した。中期10段階。

1109号土坑(図版53)

位置：P-13 重複・規模：1110坑に大部分を切られ、規模等は不明である。覆土：黄褐色土の単層である。遺物：土器は2.5Kg程の出土量であり、2点(658・659)を図示した。石器は打製石斧2点が検出された。時期：中期5~7段階。

1110号土坑(図版53)

位置：P-13 重複：1109坑・1111坑→本坑→1108 規模：径136×96cmの楕円形を呈し、深さは76cmを測る。覆土：7層にわけられる。1層はロームブロックを含む黒褐色土、2層はパミスをわずかに含む黒褐色土、3層はパミスをわずかに含む黒色土、4層はパミスを多く含む褐色土、5層はパミスをわずかに含む黒色土、6層は黄褐色土で地山の崩落か。7層はパミスを多く含む褐色土である。遺物：約2Kg程の土器片が出土しており、4点(660~663)を図示した。他には打製石斧3点が検出された。時期：中期9段階。

1120号土坑(図版54、PL112)

位置：N-9 重複：426坑→本坑 規模：径130×130cmの円形を呈し、深さは76cmを測る。覆土：3層に分けられる。1層はしまりの悪い黒色土、2層はパミスの非常に多い赤褐色土、3層は軽石礫の多い黒褐色土である。遺物：土器は3点(664~666)を図示したが、これ以外にも約8Kg程が検出されている。666は瓢形注口土器である。石器は石鏃1点、打製石斧4点、敲石1点が認められる。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1121号土坑 (図版54、PL112)

位置：N-10 重複：425坑→本坑ほか 規模：径176×160cmの円形を呈し、深さは108cmを測る。覆土：7層に分けられる。1層は軽石礫を含む黒褐色土、2層は軽石礫を含む暗褐色土、3層は粘性のない橙色土、4層は暗赤褐色土、5層は黒褐色土、6層はやや赤味を帯びる灰色土、7層はローム土を含む褐色土である。断面形は袋状を呈する。遺物：土器は約6Kgを超える破片資料が出土している。図示したのは1点(667)である。石器は打製石斧9点(207)、磨製石斧1点、凹石1点、敲石1点、台石1点が検出された。動物遺存体ではシカ骨片・獣骨片が検出された。 時期：中期5段階。

1124号土坑 (図版55)

位置：N-15 重複：なし 規模：径104×78cmの不整な楕円形を呈し、深さは54cmを測る。覆土：黒褐色土の単層である。覆土上面には小自然礫が認められる。遺物：土器は2点(668・669)を図示した。未図示土器も約2Kg程認められる。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1125号土坑 (図版55、PL112)

位置：N-15 重複：なし 規模：径104×94cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土：土層注記は記載なし。覆土上層には自然礫や軽石礫が大量に認められる。覆土中位からはシカの角が検出されている。遺物・時期：土器は4点(670~673)を図示した。未図示土器は約7Kgをはかる。673はやや古いが、中期10段階。石器は石鏃1点(15)、打製石斧2点、敲石1点、軽石製品1点(616)が出土した。動物遺存体ではシカ角片の他にも獣骨片が検出された。

1126号土坑 (図版55)

位置：N-14・15 重複：91住と重複するが、本土坑を底面まで掘り下げた段階で91住のピットが検出されたため、本土坑の方が新しい構築であると判断した。規模：径132×116cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。覆土：3層に分けられる。1層は黒色土、2層はパミスを多く含む暗褐色土、3層はパミスを含まない暗褐色土である。遺物：土器は2点(674・675)を図示した。未図示土器は約2.5Kgをはかる。石器は打製石斧の破片が検出されたのみである。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1127号土坑 (図版55、PL112)

位置：N-14・15 重複：なし 規模：径130×112cmの円形を呈し、深さ48cmを測る。遺物：土器は5点(676~680)を図示した。未図示土器は約2.5Kgをはかる。他には打製石斧1点が検出されたのみである。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。 時期：中期10段階。

1131号土坑 (図版55)

位置：N-14 重複：なし 規模：径94×92cmの円形を呈し、深さは30cmを測る。遺物・時期：土器は少量であり、1点(681)を図示した。これは覆土上面から検出されたものである。中期5～7段階。石器は磨石1点、多孔石1点(473)、台石1点(499)が出土した。これらも覆土上面から検出されたものである。

1132号土坑(図版55)

位置：N-14 重複：なし 規模：径72×62cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層である。遺物：図示した多孔石1点(472)のみである。これは覆土上面に露呈しているものである。時期：中期9段階。

1133号土坑(図版55、PL113)

位置：O-12 重複：なし 規模：径120×116cmの円形を呈し、深さ64cmを測る。覆土：4層に分けられる。1層は暗褐色土、2層は黄褐色土の砂層、3層は黒褐色土、4層は粘性をややもつ褐色土である。全体的に微小な軽石礫が含まれている。覆土上面にはやや大ぶりの自然礫が認められる。遺物：土器は2点(682・683)を図示したが、他にも約3Kg程の土器片が出土している。石器は打製石斧3点、凹石1点、敲石1点、軽石製品2点(550・579)が出土している。また炭化物としてクリが検出された。これは放射性炭素測定を実施し、3950±130BC(Gak-18678)という結果を得ている。動物遺存体では獣骨片が検出された。時期：中期8段階。

1134号土坑・1135号土坑・1140坑(図版55、PL113)

位置：O-12 重複：265坑→1140坑→1135坑→1134坑の順に構築されたことが理解できた。また1134坑と1135坑は95住よりも新しいことも把握できる。

1134坑 規模：径86×64cmの円形を呈し、深さ74cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は粒子の細かい黒褐色土、2層は粒子の粗く、やや赤みを帯びた黒褐色土である。遺物・時期：土器は2点(684・685)を図示した。中期9段階。石器は打製石斧1点と軽石製品1点が検出された。

1135坑 規模：径138×104cmの円形を呈し、深さ84cmを測る。覆土：微小な軽石礫を含む褐色土の単層である。遺物・時期：土器は1点(686)を図示した。中期9段階。石器は石鏃2点、石鏃未製品1点、打製石斧1点、剥片石器1点が検出された。

1140坑 規模：径128cm程の円形を呈するものと想定され、深さは48cmを測る。覆土：粒子の粗い褐色土の単層である。覆土上層には自然礫が認められる。遺物・土器：2点(693・694)を図示した。中期8段階。石器は打製石斧1点と敲石1点が検出された。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。

1136号土坑(図版56、PL113)

位置：N-20 重複：262坑→本坑 規模：径106×88cmの円形を呈し、深さは82cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は暗褐色土で上部には軽石礫が数点認められる。2層は褐色土でここからも軽石礫が少なからず認められる。遺物：土器は1点(687)を図示した。未図示土器は約1Kg程をはかる。石器は

丸石1点(525)が検出された。時期：中期9段階。

1137号土坑(図版56、PL113)

位置：N-20 重複：なし 規模：径86×76cmの円形を呈し、深さ62cmを測る。覆土：しまりの悪い褐色土の単層であり、自然礫が多く認められる。遺物：土器は2点(688・689)を図示した。石器は打製石斧1点が検出された。時期：中期9段階。

1138号土坑(図版56)

位置：N-20 重複：264坑→本坑 規模：径82×80cmの円形を呈し、深さは32cmを測る。覆土：粒子の細かい暗褐色土の単層である。遺物：少量の土器片のみであり、1点(690)を図示した。時期：中期8段階。

1139号土坑(図版56)

位置：N-20 重複：256坑→本坑 規模：径66×54cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。覆土：暗褐色土の単層である。覆土上層には自然礫及び軽石礫が認められる。遺物：少量の土器片のみであり、2点(691・692)を図示した。これらは覆土上層からの検出である。時期：中期5～7段階。

1142号土坑(図版56、PL113)

位置：O-12 重複：94住内から検出されたものだが、遺構検出段階での新旧関係はつかめなかった。規模：径106×86cmのやや不整な円形を呈し、深さ36cmを測る。遺物：少量の土器片のみであり、1点(695)を図示した。時期：中期7段階。

1143号土坑(図版56)

位置：O-12 重複：なし 規模：径60×44cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。遺物：少量の土器片のみであり、1点(696)を図示した。時期：中期6段階。

1144号土坑(図版56)

位置：O-11 重複：99住→本坑 規模：径158×98cmの不整な円形を呈し、深さは50cmを測る。覆土上面には自然礫が露呈していた。遺物：少量の土器片のみで、1点(697)を図示した。時期：中期8段階。

1147号土坑(図版56)

位置：N-20、O-16 重複：なし 規模：径118×88cmの楕円形を呈し、深さは50cmを測る。覆土：暗褐色土の単層である。覆土上面には自然礫が露呈していた。遺物：少量の土器片のみであり、2点(698・699)を図示した。時期：中期8段階。

1148号土坑(図版56)

位置：N-10 重複：96住と重複するが、96住のピットを切っているため、本土坑の方が新しいことが理解できた。規模：径116×88cmの不整な円形を呈し、深さは22cmを測る。覆土：黒色土の単層である。遺物：少量の土器片のみであり、2点(700・701)を図示した。701は波状口縁部に円文突起を有

する。 時期：中期10段階。

1150号土坑（図版56、PL114）

位置：O-11 重複：97住・99住→本坑 規模：径136×130cmの円形を呈し、深さは60cmを測る。 覆土：2層に分かれ、1層は黒褐色土、2層はパミスを多く含む褐色土である。覆土1層の上部には軽石礫が大量に検出されている。 遺物：土器は1点（702）を図示した。未図示土器は約2Kg程をはかる。石器は打製石斧3点が検出された。 時期：中期9段階。

1151号土坑（図版56、PL114）

位置：O-11 重複：97住及び98住内から検出されたものだが、遺構検出段階では新旧関係はつかめなかった。 規模：径128×118cmの円形を呈し、深さ88cmを測る。 覆土：5層に分けられる。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土、3層はパミスの非常に多い暗褐色土、4層はしまりの悪い暗褐色土、5層はローム土を多く含む黄褐色土である。 遺物・時期：土器は破片資料のみであったが、約7Kgを超える出土量をもつ。4点（703～705）を図示した。704はやや古いが、中期10段階。石器は打製石斧1点、敲石1点、剥片石器1点が検出されている。

1152号土坑（図版57）

位置：N-20 重複：412坑・415坑→本坑→421坑 規模：径114cm程の不整な円形を呈するものと想定され、深さは20cmを測る。 覆土：黒色土の単層である。 遺物：土器片のみであるが、2点（706・707）を図示した。未図示土器は約8Kg程をはかる。 時期：中期9段階。

1153号土坑（図版57）

位置：O-11 重複：遺構検出段階の所見で、457坑より新しいことは理解できたが、99住及び103住との新旧関係はつかめなかった。 規模：径142×122cmの円形を呈し、深さ78cmを測る。 覆土：4層に分けられる。1層はパミスを含む黒色土で炭化物・骨片が多く混じっていた。土器もこの層からの出土が多い。2層は粒子の粗い暗褐色土、3層は黒褐色土、ここからも炭化物・骨・土器が多く認められる。4層は締まりのよい黒褐色土である。 遺物：土器片のみであり、2点（708・709）を図示した。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：出土土器からすれば中期9段階だが、103住との重複関係から後期称名寺式にしたい。

1154号土坑（図版57、PL114）

位置：N-10 重複：96住・441坑→本坑。また本土坑の覆土上面には111住の炉が存在しており、本土坑より新しいことがわかる。 覆土：軽石礫を多く含む黒褐色土の単層である。 遺物：土器は5点（710～714）を図示した。石器は石鏃1点（74）、打製石斧1点、軽石製品2点（569・609）が検出された。 時期：中期10段階に比定される713をもって本土坑の時期としたい。

1158号土坑（図版57、PL114）

位置：N-15 重複：102住→本坑 規模：西側の一部は攪乱によって失っているが、長径推定160cm、短径134cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層である。 遺物：土器は3点（715～717）を図示した。未図示土器は約1Kg程である。715の底面には木葉状痕が認められる。石器と

しては石皿1点(432)が覆土上面に露呈していた。時期：出土土器からすれば中期9段階だが、102住との重複関係からして7段階以前になろう。

1170号土坑(図版57、PL114)

位置：T-15 重複：なし 規模：径130×96cmの不整な円形を呈し、深さ26cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はローム土の崩落と思われる。遺物：少量の土器片のみであり、1点(718)を図示した。時期：中期8～9段階。

1172号土坑・1174号土坑(図版59、PL114)

位置：T-15 重複：土坑の重複が激しい個所であり、土層観察から、1172坑は557坑・558坑・1073坑よりも新しく、1171坑・1174坑よりも古いことが理解できた。

1172坑 規模：径116cm程の円形を呈すものと想定され、深さは88cmを測る。覆土：軽石礫を含む黒褐色土の単層である。遺物・時期：土器は2点(719・720)を図示した。中期8段階。石器は打製石斧1点と敲石1点が検出された。動物遺存体では獣骨片が検出された。

1174坑 規模：径80×76cmの円形を呈し、深さは52cmを測る。覆土：ローム土がブロック状に含まれる黒褐色土の単層である。遺物・時期：土器片のみであり、1点(721)を図示した。中期8段階。

1176号土坑(図版58)

位置：T-15 重複：1220坑→本坑→1190坑 規模：径94×86cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。覆土：軽石礫を含む暗褐色土の単層である。遺物：土器は3点(722～724)を図示した。未図示土器は約1Kgをはかる。石器は磨石1点が検出された。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。時期：中期8段階。

1178号土坑(図版57、PL114)

位置：K-16・O-20 重複：なし 規模：径128×118cmの円形を呈し、深さは30cmを測る。覆土：黒褐色土の単層である。覆土中位には自然礫が2点認められている。遺物：土器は2点(725・726)を図示した。未図示土器は約2Kgをはかる。石器は打製石斧4点(229)、敲石1点が検出された。時期：中期8段階。

1179号土坑(図版59、PL114)

位置：K-16・O-20 重複：なし 規模：径196×164cmの円形を呈し、深さ44cmを測る。覆土：暗褐色土の単層だが、軽石礫が大量に認められた。遺物：土器片のみであり、3点(727～729)を図示した。時期：727・728は中期5～7段階のものだが、中期9～10段階に比定できる727をもって本土坑の時期としたい。

1181号土坑(図版59、PL114)

位置：K-21 重複：なし 規模：径138×130cmの円形を呈し、深さは68cmを測る。覆土：軽石礫を含む黒褐色土の単層である。遺物・時期：土器は4点(730～733)を図示した。中期5～7段階。石器は

石鏃1点、打製石斧2点、それに小剥離痕を有する剥片1点(160)が検出された。

1183号土坑(図版59)

位置：P-2 重複：なし 規模：径118×108cmの円形を呈し、深さは30cmを測る。覆土：暗褐色土の単層である。遺物は土器片のみであり、2点(734・735)を図示した。時期：中期3～7段階頃。

1185号土坑(図版58)

位置：T-15 重複：546坑・550坑・581坑→本坑 規模：径86×82cmの円形を呈し、深さは86cmを測る。覆土：3層に分けられる。1層は炭化物をわずかに含む黒褐色土、2層は微小な軽石礫を含む暗褐色土、3層は褐色土である。遺物：石器のみであり、打製石斧1点(241)、軽石製品1点(621)が検出された。動物遺存体では獣骨片が検出された。時期：時期細分はできないものの縄文中期のものといえるだろう。

1186号土坑(図版58)

位置：K-16 重複：553坑→本坑 規模：径126×110cmの円形を呈し、深さは78cmを測る。覆土：握拳大程の軽石礫を含む黒褐色土の単層である。遺物・時期：土器は4点(736～739)を図示した。736はやや古いのが、他の土器から中期9段階。石器は打製石斧3点が検出された。

1187号土坑(図版58)

位置：T-15 重複：本坑→1188坑・1189坑 規模：検出段階での規模は推定径110×80cmの円形を呈するものと想定され、深さは48cmを測る。覆土：ローム粒を多く含む黒褐色土の単層。遺物：石器として石鏃1点(75)が出土した。時期：土器が検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1189号土坑・1190号土坑(図版58、PL115)

位置：T-15 重複：土坑の重複の激しい個所である。

1189坑 規模：径136cm程の円形を呈するものと想定され、深さは70cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は軽石礫を多く含む暗褐色土、2層はローム土が多く含まれるにふい黄褐色土である。遺物・時期：土器は2点(740・741)を図示した。中期8段階。石器は打製石斧1点が検出された。

1190坑 規模：径158cm程の円形を呈するものと想定され、深さは32cmを測る。覆土：軽石礫を含む黒褐色土の単層である。遺物・時期：土器は1点(742)を図示した。出土土器からすれば中期5～7段階だが、1176坑との重複関係からすれば8段階以降となるだろう。石器は凹石1点が検出された。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。

1191号土坑(図版60)

位置：T-10・P-6 重複：540坑・567坑・568坑→本坑→1184坑 規模：径92cm程の円形を呈すると想定され、深さは28cmを測る。覆土：ローム土を含む黒褐色土の単層である。遺物：土器片のみであり、1点(743)を図示した。未図示土器は約700gをはかる。時期：中期9段階。

1192号土坑（図版60、PL115）

位置：O-15・20 重複：なし 規模：径128×120cmの形を呈し、深さは104cmを測る。遺物・時期：土器は5点（744～748）を図示した。未図示土器は約3Kg程をはかる。748は中期3～4段階の台付土器の脚台部分であろう。他の土器は中期5～7段階に比定できるためこれをもって本土坑の時期にしたい。石器は打製石斧1点が検出された。

1193号土坑（図版58）

位置：T-15 重複：570坑・572坑→本坑→565坑・566坑 規模：径68×60cmの形を呈し、深さ50cmを測る。覆土：ローム土を含む黒褐色土の単層である。遺物：少量の土器片のみであり、1点（749）を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。時期：中期5～7段階。

1196号土坑（図版60）

位置：T-15 重複：本坑→277坑 規模：径98cm程の円形を呈するものと想定され、深さは50cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土である。遺物：少量の土器片のみであり、3点（750～752）を図示した。時期：中期8段階。

1197号土坑（図版61）

位置：T-15 重複：なし 規模：径70×66cmの円形を呈し、深さは68cmを測る。覆土：4層に分けられる。1層は暗褐色土、2層は炭化物を多く含む黒色土、3層はローム土を多く含む褐色土、4層はローム土を含む暗褐色土である。遺物：少量の土器片のみであり、1点（753）を図示した。時期：中期8段階。

1198号土坑（図版61）

位置：P-7 重複：1259坑→本坑 規模：径126×100cmの円形を呈し、深さ78cmを測る。覆土：暗褐色土の単層である。遺物：土器は少量だが、2点（754・755）を図示した。石器は台石1点（498）が検出された。時期：中期10段階。

1199号土坑（図版61）

位置：P-12 重複：467坑→本坑→1205坑 規模：径114×112cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。覆土：黒褐色土の単層である。遺物：土器は2点（756・757）を図示した。未図示土器は約1Kg程をはかる。石器は石匙1点（139）が検出された。時期：中期7段階。

1200号土坑（図版61）

位置：T-10 重複：638坑・644坑・1208坑→本坑→504坑 規模：長径110cm×短径推定90cmの楕円形を呈し、深さは90cmを測る。覆土は2層に分けられ、1層はローム土を含む黒褐色土、2層はローム層を多量に含む黒褐色土である。遺物：少量の土器のみであり、3点（758～760）を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。時期：中期5～7段階。

1205号土坑（図版61）

位置：P-1 重複：1199坑→本坑 規模：径132×114cmの円形を呈し、深さ48cmを測る。覆土：粒子

の細かい黒色土の単層 遺物：土器は4点(761~764)を図示した。石器は打製石斧2点が出土した。
 時期：中期10段階

1209号土坑(図版62、PL115)

位置：T-10 重複：なし 規模：径52×50cmの円形を呈し、深さ18cmを測る。 覆土：褐色土がブロック状に混じる黒褐色土。多孔石1点と自然礫2点が発見される。 遺物：石器のみであり、多孔石1点(475)が出土した。 時期：土器は発見されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1211号土坑(図版62、PL115)

位置：O-24 重複：なし 規模：径84×80cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土 遺物：土器片のみであり、1点(765)を図示した。 時期：中期5~7段階。

1212号土坑(図版62、PL115)

位置：O-24 重複：なし 規模：径86×82cmの円形を呈し、深さ110cmを測る。 覆土：しまりの悪い暗褐色土、上層から骨片を発見した。 遺物：土器は破片資料のみであり、1点(766)を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨が発見された。 時期：中期9段階。

1215号土坑(図版62)

位置：T-10 重複：676坑→本坑→675坑 規模：長径92×短径推定80cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。 覆土：ローム土を含む黒褐色土 遺物：土器は1点(767)を図示した。石器は石鏃1点が出土する。 時期：中期5~7段階。

1216号土坑(図版62、PL116)

位置：T-14 重複：なし 規模：径144×128cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。 遺物：土器片のみであり、3点(768~770)を図示した。それ以外にも500g程が出土する。 時期：768はやや古いが(中期8段階)、中期9段階頃といえようか。

1219号土坑(図版62)

位置：T-10 重複：677坑→本坑 規模：径92×88cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。 覆土：微小な軽石礫を含む暗褐色土の単層。 遺物：土器は少量であり、2点(771・772)を図示した。石器は打製石斧1点、石錐未製品2点(109・113)が出土した。 時期：中期8段階。

1220号土坑(図版58)

位置：T-15 重複：本坑→1176坑・1190坑(土層観察の結果から判断) 規模：径77×77cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。 覆土：ローム土を含む暗褐色土。 遺物：土器片のみであり、2点(773・774)を図示した。 時期：中期7段階。

1223号土坑(図版63、PL116)

位置：T-14 重複：なし 規模：径120×112cmの円形を呈し、深さ108cmを測る。 遺物：石器のみであり、打製石斧1点と軽石製品(561)が出土した。 時期：土器は発見されなかったが、縄文中期の可

能性が高いだろう。

1227号土坑 (図版63、PL116)

位置：P-6 重複：918坑・919坑・959坑→本坑 規模：径96×76cmの円形を呈し、深さ64cmを測る。
覆土：2層に分けられ、1層はローム土を多く含むにぶい黄褐色土、2層は黒褐色土である。遺物・時期：土器片のみであり、4点(775～778)を図示した。776・777は中期5～7段階だが、中期10段階の775・778をもって本坑の時期としたい。

1229号土坑 (図版63)

位置：T-10 重複：718坑より新しい。 規模：径96×76cmの楕円形を呈し、深さ64cmを測る。 遺物：土器片のみであり、2点(779、780)を図示した。 時期：中期8段階。

1230号土坑 (図版63)

位置：O-24 重複：1231坑→本坑 規模：径96×92cmの円形を呈し、深さ102cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はにぶい黄褐色土である。土器は1層からの出土が多い。 遺物：土器片のみであり、2点(781、782)を図示した。 時期：中期10段階。

1233号土坑 (図版64、PL116)

位置：O-18 重複：本坑→1234坑 規模：径70cm程の円形を呈するものと想定され、深さ70cmを測る。
覆土：パミスを含むにぶい黄褐色土。 遺物：土器片のみであり、3点(783、785)を図示した。 時期：783はやや古いが(中期9段階)、784、785を根拠に中期10段階。

1234号土坑 (図版64、PL116)

位置：O-18 重複：1233坑→本坑 規模：径146×146cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む暗褐色土、2層はパミスを含むにぶい黄褐色土である。 遺物：石器のみであり、台石2点(うち図示500)が出土した。 時期：土器は検出されなかったが縄文中期の可能性が高いだろう。

1235号土坑 (図版71、PL116)

位置：O-19 重複：1284坑と入れ子状に重複するが、土層観察により、それより新しいことが理解できた。 規模：径75cm程の円形を呈し、深さ32cmを測る。 遺物：土器は1点(786)を図示した。底部を欠した大型の土器であり、口縁部を下にした逆位に埋められていた。覆土は4層にわけられる。1層はパミスを含む黒色土、2層はパミスを含むにぶい黄橙色土、3層は黒褐色土、4層はパミスを含む黒色土である。土器の大きさ及び埋設形態からすれば、住居内埋甕である可能性も高いが、周囲に住居跡は認められないため、単独土坑として報告する。屋外埋甕の可能性も否定できまい。石器は打製石斧1点が検出された。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1237号土坑 (図版64)

位置：O-23 重複：なし 規模：径112×98cmの円形を呈し、深さは48cmを測る。 覆土：パミス・小礫を含む暗褐色土の単層 遺物：土器片のみであり、1点(787)を図示した。 時期：中期8～10段階。

1238号土坑 (図版64、PL116)

位置：O-23 重複：1245坑→本坑 規模：径90×80cmの円形を呈し、深さ52cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む黒褐色土、2層は小礫を含む暗褐色土である。 遺物：土器は1点(788)を図示し、石器は打製石斧1点と軽石製品1点(594)を出土した。 時期：中期10段階。

1240号土坑 (図版64)

位置：O-24 重複：本坑→1239坑 規模：長径推定90×短径76cmの楕円形を呈し、深さ58cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層はにぶい黄褐色土である。 遺物・時期：土器のみであり、3点(789~791)を図示した。未図示土器片も約2Kg程を量る。中期5段階。791は曾利式である。

1241号土坑 (図版64)

位置：O-18 重複：なし 規模：径114×100cmの円形を呈し、深さ44cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：土器は1点(792)を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期8段階。

1244号土坑 (図版64、PL117)

位置：O-24 重複：なし 規模：径140×108cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。覆土上面には大小様々な大きさの自然礫が露呈していた。 遺物：土器は2点(793・794)を図示した。未図示の土器片も約2Kg程を有する。石器は打製石斧1点、剥片石器1点が検出された。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1245号土坑 (図版64)

位置：O-23 重複：本坑→1238坑 規模：径88cm程の円形を呈するものと想定され、深さは32cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり、2点(795、796)を図示した。 時期：796は中期7段階だが、中期10段階に比定できる795をもって本坑の時期としたい。

1246号土坑 (図版65)

位置：O-23 重複：1247坑→本坑 規模：径98×92cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。 覆土：小礫を含む黒褐色土の単層。 遺物：土器は1点(797)を図示した。石器は敲石1点を出土した。 時期：中期10段階。

1247号土坑 (図版65、PL117)

位置：O-23 重複：本坑→780坑・1246坑 規模：径188×148cmの楕円形を呈し、深さは100cmを測る。 覆土：3層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土、3層は記載なし。 遺物・時期：土器は4点(798~801)を図示した。798・799は中期9段階、800・801は中期10段階に比定される。石器は石鏃未製品1点(88)、打製石斧2点、磨石1点を検出した。動物遺存体では獣骨片及び3層からイノシシ骨が検出された。

1248号土坑 (図版65、PL117)

位置：O-18・19 重複：なし 規模：径196×144cmの楕円形を呈し、深さは92cmを測る。 覆土：5層

に分けられる。1層は黒褐色土、2層は小礫を含む灰褐色土、3層はにぶい赤褐色土、4層は小礫を含む黒褐色土、5層はにぶい黄褐色土である。骨は上層及び下層から検出された。遺物：土器片のみであり、1点(802)を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。時期：中期10段階。

1249号土坑(図版64、PL117)

位置：O-23・24 重複：なし 規模：径78×70cmの円形を呈し、深さは12cmを測る。覆土：黒褐色土の単層。遺物：土器片のみであり、2点(803、804)を図示した。時期：縄文中期である可能性が高い。

1250号土坑(図版66)

位置：O-22 重複：なし 規模：径100×78cmの楕円形を呈し、深さは88cmを測る。覆土：ローム土をブロック状に含む黒褐色土の単層である。遺物・時期：土器は1点(805)を図示した。未図示の土器片は約1.6Kg程を量る。中期10段階。石器は石鏃1点、打製石斧1点、磨石1点が検出された。

1251号土坑(図版64)

位置：O-22 重複：なし 規模：径118×98cmの不整な円形を呈し、深さ94cmを測る。覆土：3層に分けられ、1層はパミスを含む暗褐色土、2層はパミスを含む暗黄褐色土、3層は暗褐色土である。遺物：土器は2点(806、807)を図示した。石器は石鏃1点(76)、打製石斧1点が出土した。時期：807は中期7段階だが、中期10段階に比定される806をもって本坑の時期にしたい。

1252号土坑(図版65)

位置：O-17 重複：本坑→1253坑 規模：径80cm程の円形を呈するものと想定され、深さは46cmを測る。遺物：土器片のみであり、1点(808)を図示した。時期：中期7段階。

1253号土坑(図版65、PL117)

位置：O-17・22 重複：1252坑→本坑 規模：径120×98cmの不整な円形を呈し、深さは66cmを測る。覆土：暗褐色土の単層。遺物：土器は2点(809、810)を図示した。石器は石鏃1点、打製石斧2点(275)、磨石1点、敲石1点、磨製石斧1点(189)が出土した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。時期：中期9段階。

1254号土坑(図版65)

位置：O-22 重複：なし 規模：径134×104cmの円形を呈し、深さは102cmを測る。遺物：土器は3Kg程の出土だが、1点(812)を図示した。石器は打製石斧6点が出土した。動物遺存体では獣骨片が検出された。時期：中期5～7段階。

1255号土坑(図版65、PL117)

位置：O-17 重複：なし 規模：径72×58cmの不整な楕円形を呈し、深さは30cmを測る。覆土：暗黄褐色土の単層である。遺物・時期：底部を欠した土器(813)が正位の状態で見出された。これ以外に検出された土器片はごく少量であり、813はおそらく意図的に埋設したものではなかろうか。中期8段階。石器は打製石斧3点が出土した。

1257号土坑（図版65、PL118）

位置：O-22 重複：1256坑→本坑 規模：径240×124cmの楕円形を呈し、深さ72cmを測る。覆土：7層に分けられた。1層は炭化物が多く含まれる黒褐色土、2層は黄褐色土、3層は暗褐色土、4層はパミスを含む暗黄褐色土、5層は炭化物がわずかに含まれる暗褐色土、6層は黒色の強い暗黄褐色土、7層は暗黄褐色土である。遺物・時期：土器は2点（814、815）を図示した。未図示土器片は約3Kg程をはかる。中期10段階。石器は打製石斧2点と磨石1点が出土した。またクリの炭化物が検出されている。

1258号土坑（図版66、PL118）

位置：O-22 重複：69坑・1290坑→本坑 規模：径94×78cmの円形を呈し、深さは54cmを測る。覆土：覆土上層には複数の自然礫が検出された。遺物：土器片のみであり、2点（816、817）を図示した。時期：中期10段階。

1259号土坑（図版61）

位置：P-7 重複：本坑→14坑・1198坑 規模：径186×推定100cmの楕円形を呈し、深さは62cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。遺物：土器は約2Kg程の出土であり、1点（818）を図示した。石器は打製石斧2点のほか、小剝離痕を有する剥片1点（150）が出土した。時期：縄文中期であろう。

1260号土坑（図版65、PL118）

位置：O-17 重複：1027坑→本坑 規模：径122×92cmの不整な楕円形を呈し、深さは122cmを測る。覆土：暗褐色土の単層である。遺物：土器のみであり、2点（819、820）を図示した。820は1255坑とも接合するが、主体は本坑である。時期：中期5段階。

1262号土坑（図版68）

位置：O-17 重複：本坑→1266坑 規模：径104cm程の円形を呈するものと想定され、深さは64cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む黒褐色土、2層はパミスを含む灰黄褐色土である。遺物：土器は1Kg程の出土であり、1点（821）を図示した。石器は打製石斧1点、磨石2点、剥片石器1点を出土した。時期：縄文中期である。加曾利EⅢ式頃であろうか。

1263号土坑（図版68）

位置：O-17 重複：1266坑→本坑 規模：径110×80cmの楕円形を呈し、深さ64cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。遺物：土器は約1Kg程の出土であり、1点（822）を図示した。石器は石鏃1点を出土した。時期：中期9段階。

1264号土坑（図版68）

位置：O-17 重複：1265坑→本坑 規模：径72×70cmの円形を呈し、深さは60cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む黒褐色土、2層はローム粒を含む暗褐色土である。遺物：3点（823、825）を図示した。石器は磨石1点を出土した。時期：中期8段階。

1265号土坑（図版68）

位置：O-17 重複：本坑→1264坑 規模：径推定約75×66cmの円形を呈し、深さは46cmを測る。 覆土：ロームを遺物を多く含む暗黄褐色土である。 遺物：土器片のみであり、3点（826、828）を图示した。828は称名寺式だが、826、827は加曾利EⅢ式古期である。 時期：中期8段階。

1266号土坑（図版68）

位置：O-17 重複：1262坑→本坑→1263坑 規模：径124×推定100cmの楕円形を呈し、深さは114cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は暗黄褐色土、2層は黄褐色土である。 遺物：土器は2点（829、830）を图示した。石器は石鏃1点を出土した。またクリの炭化物が検出された。 時期：829は中期5～7段階、830は中期8～9段階である。

1268号土坑（図版68）

位置：O-21、22 重複：755坑→本坑 規模：径204×196cmの楕円形を呈し、深さは52cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は軽石礫を含む暗褐色土、2層は暗黄褐色土である。 遺物・時期：土器は非常に多く、7点（831～837）を图示したが、他にも約14Kg程を出土した。中期10段階。石器は打製石斧7点、多孔石1点（476）、軽石製品5点（537）を出土した。

1269号土坑（図版68、PL118）

位置：O-21 重複：なし 規模：径160×148cmの円形を呈し、深さ196cmを測る。 覆土：9層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は炭化物を多く含む黒褐色土、3層はしまりのよい黒褐色土、4層はローム土を多く含む赤褐色土、5層は4層と似ているがしまりがやや悪く、6層はローム土を多く含む灰褐色土、7層はボソボソとした黒褐色土、8層は灰暗褐色土、9層は小礫を多く含む黒褐色土である。 遺物・時期：土器は5点（846～850）を图示したが、未图示土器片も11Kgを超えている。847はやや古いが、他の土器より中期10段階に比定できよう。石器は打製石斧1点、磨石1点、台石1点（502）、軽石製品3点（638、639、651）が出土した。他に2層及び7層からクリの炭化物が検出された。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。

1270号土坑（図版68、PL118）

位置：K-21 重複：なし 規模：径120×102cmの円形を呈し、深さは30cmを測る。 遺物：图示したのは石器のみであり、台石1点（503）、多孔石3点（477、478、479）が出土した。 時期：土器が検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1272号土坑（図版70）

位置：O-17 重複：770坑・1273坑→本坑 規模：径160×100cmの不整な楕円形を呈し、深さは104cmを測る。 覆土：8層に分けられる。1層は軽石を含む暗褐色土、2層は軽石を含む黒褐色土で、炭化物も混じる。3層は暗褐色土、4層はやや粘性のある暗褐色土、5層はパミス・ロームを含む暗黄褐色土、6層はローム・パミスを含む暗褐色土、7層はローム土、8層はパミスを含む黒褐色土である。 遺物：土器は3点（851、853）を图示した。石器は打製石斧1点を出土した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。他にクリの炭化物が検出された。 時期：中期9段階。

1273号土坑（図版70）

位置：O-17 重複：本坑→1272坑 規模：径60cm程の円形を呈するものと想定され、深さは67cmを測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。 遺物：土器は2点（854、855）を図示した。石器は多孔石1点（504）が出土した。 時期：中期8段階。

1274号土坑（図版70、PL119）

位置：K-22・P-2 重複：なし 規模：径126×124cmの円形を呈し、深さは36cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：土器は2点（838、839）を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。 時期：中期5～9段階。

1275号土坑（図版70、PL119）

位置：P-2 重複：なし 規模：径54×48cmの円形を呈し、深さは12cmを測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。上層には自然礫1点と台石1点が検出された。 遺物：図示したのは石器のみであり、台石1点（506）が出土した。 時期：土器は検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1278号土坑（図版69）

位置：O-22 重複：1277坑・1319坑→本坑 規模：径126×86cmの楕円形を呈し、深さは92cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層はパミスを含む暗褐色土である。 遺物：図示した土器は1点（840）である。石器は台石1点（507）と打製石斧3点が出土した。 時期：中期9段階に比定できよう。

1279号土坑（図版68、PL119）

位置：O-23 重複：なし 規模：径120×120cmの円形を呈し、深さは114cmを測る。 遺物：土器は3点（841、843）を図示した。図示したものほかに約8Kg程が検出された。石器は石鏃1点（78）と打製石斧2点を出土した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。 時期：843は中期5～7段階だが、841の中期10段階をもって本坑の時期としたい。

1280号土坑（図版69、PL119）

位置：O-17 重複：1281坑→本坑 規模：径150×120cmの円形を呈し、深さは112cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層はローム粒を含む黄褐色土、2層は軽石を含む暗褐色土、3層は礫を含む暗褐色土である。 遺物：土器は2点（844、845）を図示した。他に約7Kg程が検出された。石器は剥片石器1点（303）が出土した。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期8段階。

1281号土坑（図版69）

位置：O-17 重複：本坑→1280坑 規模：長径推定130×短径84cmの楕円形を呈し、深さは126cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はロームを多く含む暗褐色土である。 遺物：土器片のみであり、2点（856、857）を図示した。 時期：中期8段階。

1282号土坑（図版70）

位置：O-16、17 重複：なし 規模：径136×122cmの不整な円形を呈し、深さは116cmを測る。 覆土：ロームを多く含む黄褐色土の単層。 遺物：土器は少量であり、1点（858）を図示した。石器は台

石1点が出土した。 時期：中期5～7段階。

1283号土坑（図版71、PL119）

位置：O-18、19 重複：なし 規模：径116×102cmの円形を呈し、深さは106cmを測る。 覆土：パミスを含む黄褐色土の単層。 遺物：土器のみであり、1点（859）を図示した。 時期：中期7段階。

1286号土坑（図版71）

位置：K-21 重複：1287坑→本坑→116住 規模：径156cm程の不整な円形を呈するものと想定され、深さは84cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は軽石を含む黒褐色土、2層はロームを多く含む黄褐色土である。 遺物：約3Kgの土器片のみであり、2点（860、861）を図示した。 時期：出土土器からすれば中期8～9段階だが、116住との重複関係では中期1段階以前となる。

1287号土坑（図版71）

位置：K-21 重複：本坑→1286坑 規模：長径推定140×短径104cmの楕円形を呈するものと想定され、深さは30cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。上面には自然礫が1点露呈していた。 遺物：土器は2点（862、863）を図示した。石器は打製石斧2点を出土した。 時期：862は中期9段階、863は中期5～7段階だが、1286坑との重複関係からすれば中期1段階以前となろうか。

1289号土坑（図版71）

位置：O-12、19 重複：なし 規模：径96×80cmの円形を呈し、深さは74cmを測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり、2点（862、863）を図示した。 時期：中期10段階。

1290号土坑（図版71、PL119）

位置：O-12、17 重複：なし 規模：径122×120cmの円形を呈し、深さは142cmを測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。 遺物：土器は破片資料のみであり、1点（866）を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。 時期：中期10段階。

1291号土坑（図版66）

位置：O-23 重複：787坑・1329坑→本坑→1335坑 規模：径110×88cmの楕円形を呈し、深さは98cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はにぶい黄褐色土である。 遺物：土器は4点（867～870）を図示した。石器は打製石斧3点（230）が出土した。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1292号土坑（図版66）

位置：O-22、23 重複：1043坑・1328坑→本坑→1296坑 規模：径133×102cmの円形を呈し、深さは80cmを測る。 覆土：ロームを含む黒褐色土の単層。骨は東際より多数検出された。自然礫が上面に露呈していた。 遺物：土器は2点（871、872）を図示した。石器は石鏃未製品1点と打製石斧2点を出土した。動物遺存体ではイノシシ骨・シカ骨が検出された。 時期：中期8～10段階。

1294号土坑 (図版71、PL120)

位置：O-18 重複：1297坑→本坑 規模：径140×132cmの円形を呈し、深さは98cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土である。遺物：土器は3点(873、875)を図示した。石器は打製石斧2点、台石1点(505)を出土した。時期：中期10段階。

1295号土坑 (図版71)

位置：O-13・18 重複：なし 規模：径110×90cmの不整な円形を呈し、深さは70cmを測る。覆土：3層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はにぶい黄褐色土、3層は黒色土である。遺物：少量の土器は2点(876、877)を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。時期：中期に比定できようか。

1296号土坑 (図版66、PL120)

位置：O-22・23 重複：69坑・1292坑・1328坑→本坑→1258坑 規模：径120×104cmの円形を呈し、深さは70cmを測る。覆土：9層に分けられる。1層は軽石礫を含む黄褐色土、2層は炭化物が混じる黒褐色土、3層は暗黄褐色土、4層はローム土を多く含む黄褐色土、炭化物がブロック状にまじる。5層は暗褐色土、6層は粒子の粗い暗褐色土、7層は炭化物を含む黒褐色土、8層は暗黄褐色土、9層は微小な軽石礫を含む黒褐色土である。遺物・時期：土器は4点(878～881)を図示した。中期10段階。石器は磨石1点が検出された。動物遺存体では獣骨片が検出された。

1297号土坑 (図版71)

位置：O-18 重複：本坑→1294坑 規模：径110cm程の円形を呈し、深さは82cmを測る。覆土：暗褐色土の単層。遺物：土器は少量で1点(882)を図示した。石器は欠損した丸石1点が検出されたが、これは107住出土のものと接合した。時期：中期10段階。

1298号土坑 (図版67)

位置：O-18、23 重複：なし 規模：径114×98cmの不整な円形を呈し、深さは50cmを測る。覆土：明暗褐色土の単層。遺物：少量の土器片のみであり、2点(883、884)を図示した。時期：中期9段階。

1299号土坑 (図版67)

位置：O-18 重複：なし 規模：径72×70cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。覆土：しまりの悪い暗褐色土の単層。遺物：土器は1点(885)を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。時期：中期7段階。

1304号土坑 (図版67、PL120)

位置：T-9 重複：なし 規模：径92×88cmの円形を呈し、深さは72cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む暗褐色土、2層はローム、パミスを含む暗褐色土で石皿が自然礫とともに検出されている。遺物：土器は3点(886～888)を図示した。石器は石皿1点(433)と打製石斧1点を出土した。時期：中期8段階。

1308号土坑 (図版72、PL120)

位置：T-10・P-6 重複：1315坑→本坑 規模：径150×122cmの楕円形を呈し、深さは38cmを測る。
覆土：粘性のある黒褐色土の単層である。 遺物・時期：完形土器（889）が正位に直立した状態で出土している。また覆土上層には自然礫が数点検出されている。中期9段階。石器は打製石斧1点、磨石1点（595）、スクレイパー1点（143）、軽石製品1点が出土した。動物遺存体では獣骨片が検出された。

1309号土坑（図版72、PL120）

位置：T-5・P-1 重複：1310坑・1313坑→本坑 規模：径92×80cmの円形を呈し、深さは34cmを測る。 覆土：パミスと炭化物を含む黒褐色土の単層。 遺物：土器は2点（890、891）を図示した。石器は打製石斧1点、石皿1点（434）、多孔石1点（480）、台石1点（508）を出土した。これらは軽石礫とともに覆土上面に露呈していた。 時期：中期8～9段階

1310号土坑（図版72、PL120）

位置：T-5・P-1 重複：1313坑→本坑→1309坑 規模：径92cm程の円形を呈し、深さは36cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：石器のみの出土であり、打製石斧1点、敲石1点、多孔石1点（481）を出土した。 時期：土器が検出されていないが、縄文中期の可能性が高いであろう。

1317号土坑（図版69）

位置：O-17 重複：本坑→1318坑 規模：長径推定90×短径68cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。 覆土：粒子の粗い暗黄褐色土の単層。 遺物：土器は3点（892～894）を図示した。石器は打製石斧1点と磨製石斧1点を出土した。 時期：中期8段階。

1318号土坑（図版69）

位置：O-17・22 重複：1317坑・1319坑→本坑 規模：径98×96cmの円形を呈し、深さ54cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層はパミスを含む暗黄褐色土である。 遺物：土器は2点（895、896）を図示した。石器は台石1点（501）を出土した。 時期：中期8段階。

1320号土坑（図版72）

位置：T-5 重複：980坑→本坑→1322坑 規模：径95cm程の円形を呈し、深さは42cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（897）を図示した。 時期：中期8段階。

1321号土坑（図版69）

位置：O-17・18 重複：1277坑→本坑 規模：径110cm程の円形を呈し、深さは70cmを測る。 覆土：パミスを含む暗黄褐色土の単層。 遺物：土器は少量の破片資料のみであるが、2点（898、899）を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。 時期：中期8段階。

1324号土坑（図版72）

位置：T-5 重複：994坑・999坑・1323坑→本坑→1322坑 規模：径70cm程の円形を呈し、深さは26cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（900）を図示した。 時期：中期8段階。

1326号土坑 (図版73)

位置：P-1 重複：本坑→571坑 規模：径124×104cmの円形を呈し、深さは42cmを測る。覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む黒褐色土、2層はローム、パミスを含むにぶい黄褐色土である。遺物：少量の土器片のみであり、1点(901)を図示した。時期：中期8段階。

1329号土坑 (図版66)

位置：O-23 重複：777坑・871坑・291坑→本坑→1328坑 規模：重複が激しく、平面プランははっきりしないが、径100cm程の円形を呈するものと想定される。深さは110cmを測る。覆土：3層に分けられる。1層はパミスを含む黒褐色土、2層はパミスを含む暗褐色土、3層はパミスを大量に含む暗褐色土である。遺物：土器は3点(902～904)を図示した。石器は打製石斧2点と磨石1点を出土した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。時期：中期9～10段階。

1330号土坑 (図版73)

位置：T-5 重複：1331坑→本坑 規模：径114×104cmの円形を呈し、深さは76cmを測る。覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。遺物：5Kg程の土器片のみであり、2点(905、906)を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。時期：906は中期7段階だが、中期10段階に比定される905をもって本坑の時期としたい。

1332号土坑 (図版73)

位置：T-5・10 重複：997坑→本坑 規模：径86×76cmの形を呈し、深さは64cmを測る。覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。遺物：図示したのは台石1点(509)のみである。台石は覆土上層からの検出である。時期：土器が検出されないが、縄文中期であろう。

1333号土坑 (図版73、PL120)

位置：O-18・23 重複：なし 規模：径60×56cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。遺物：少量の土器片のみであり、2点(907、908)を図示した。時期：中期8段階。

1335号土坑 (図版66)

位置：O-23 重複：74坑・1291坑→本坑 規模：径136×122cmの円形を呈し、深さは122cmを測る。覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。下部には頭大の軽石が数点認められる。遺物：約3Kg程の土器が出土し、2点(909、910)を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。時期：中期10段階。

1336号土坑 (図版66)

位置：O-23 重複：なし 規模：径80×68cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。遺物：土器は少量の破片資料のみであり、2点(911、912)を図示した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。時期：中期10段階。

1337号土坑 (図版73)

位置：T-5・P-1 重複：957坑→本坑 規模：径88×60cmの円形を呈し、深さは56cmを測る。覆

土：ローム、パミスを含むにぶい黄褐色土の単層。 遺物：土器は1片のみの出土であり、図示はしていない。石器は出土していない。クリの炭化物が検出されたのみである。 時期：縄文中期の可能性が高いであろう。

1339号土坑（図版66、PL121）

位置：O-23 重複：77坑→本坑→1329坑 規模：径192×100cmの楕円形を呈し、深さは46cmを測る。 状況：本坑の覆土上面には胴部以下を欠した大形土器が2点（914、915）、口縁部を下にした逆位の状態で認められる。断面の観察から915を埋設してから後、815を埋設したことがわかる。当初は屋外埋甕として理解していたが、断面観察によってもその掘り方は認められないため、本坑に属するものであると結論づけるにいたった。ただし、覆土は2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は灰色の強い褐色土である。 遺物・時期：土器は前述した914・915の他、1点（913）を図示した。中期9段階。石器は打製石斧1点が出土した。動物遺存体としてはイノシシ骨・獣骨片が検出された。周辺からも動物骨の出土が目立っている。また本坑の周辺からもオニグルミとクリの炭化物が検出されている。

1342号土坑（図版74）

位置：O-17 重複：765住→本坑→107住 規模：長径推定100×短径86cmの楕円形を呈し、深さは58cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、3点（916～918）を図示した。 時期：916、917は中期7段階、918は中期10段階に比定される。

1343号土坑（図版74）

位置：O-17・18 重複：本坑→107住 規模：径82×76cmの円形を呈し、深さは42cmを測る。 遺物：土器は少量の破片資料のみであり、2点（919、920）を図示した。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：919は中期3～7段階、920は中期9段階に比定される。

1346号土坑（図版74、PL121）

位置：O-17・18 重複：本坑→765坑・107住 規模：径114cm程の円形を呈し、深さは42cmを測る。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（246）を図示した。 時期：中期10段階。

1362号土坑（図版74、PL121）

位置：O-23・24 重複：なし 規模：径76×72cmの円形を呈し、深さは78cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層はパミスを含む黒褐色土、2層はパミスを含むにぶい暗褐色土、3層はパミスを含むにぶい褐色土である。 遺物：土器は少量の出土であつたが、2点（923、924）を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。動物遺存体ではシカ角片が検出された。 時期：中期8段階。

1363号土坑（図版74）

位置：O-24 重複：なし 規模：径84×80cmの円形を呈し、深さは38cmを測る。 覆土：にぶい暗褐色土の単層である。中位には扁平な自然礫が検出された。 遺物：土器は少量の破片資料のみであり、2点（925、926）を図示した。動物遺存体ではシカ骨が検出された。 時期：中期7段階。

1364号土坑（図版75）

位置：O-24 重複：835坑・1401坑・1375坑・1378坑→本坑→121住 規模：径122cm程の円形を呈するものと想定され、深さは46cmを測る。 覆土：2層に分けられる。1層は黒褐色土、2層は骨片を含む暗褐色土である。 遺物：土器は2点(927、928)を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。 時期：出土土器からすれば中期10段階だが、121住との重複関係からすれば、中期8段階以前となろう。

1365号土坑(図版74)

位置：O-24 重複：本坑→1369坑 規模：径92cm程の円形を呈するものと想定され、深さは40cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層。 遺物：土器は2点(929、930)を図示した。石器は敲石1点を出土した。動物遺存体ではイノシシ骨・獣骨片が検出された。 時期：中期10段階。

1366号土坑(図版75)

位置：O-24 重複：804坑・1375坑・1376坑→本坑 規模：径94×92cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は黒褐色土、2層は暗褐色土である。 遺物：土器は5点(931、935)を図示した。石器は磨石1点、凹石1点を出土した。動物遺存体ではイノシシ骨が検出された。 時期：中期10段階。

1370号土坑(図版75、PL121)

位置：O-24 重複：801坑・1377坑→本坑 規模：径92×68cmの楕円形を呈し、深さは60cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層。扁平な自然礫が3点上面に露呈していた。 遺物：土器片のみであり、2点(936、937)を図示した。 時期：中期8～10段階。

1371号土坑(図版76)

位置：O-25・T-5 重複：なし 規模：径100×86cmの円形を呈し、深さは60cmを測る。 遺物：多孔石1点(482)のみの出土である。底部近くからの検出である。 時期：土器は検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1372号土坑(図版75、PL121)

位置：T-4 重複：1403坑・1404坑・1405坑・1410坑→本坑 規模：径120×100cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む黒色土、2層はローム、パミスを含む黒色土である。 遺物：土器は4点(938～941)を図示した。石器は凹石1点、台石1点(510)が出土した。動物遺存体では獣骨片が検出された。 時期：中期8～10段階。

1374号土坑(図版76、PL122)

位置：T-4・5 重複：本坑→126住 規模：径80×80cmの円形を呈し、深さは34cmを測る。 覆土：黒褐色土の単層。覆土上層から自然礫が検出された。 遺物：土器は2点(942、943)を図示した。石器は打製石斧1点、敲石1点が出土した。 時期：中期7段階。

1376号土坑(図版75)

位置：O-24 重複：本坑→1366坑・1375坑 規模：重複が激しいため平面プランは明確ではないが、径120cm程の円形を呈すると想定され、深さは33cmを測る。 覆土：記載なし 遺物：土器片のみであり、

2点(944、945)を図示した。 時期：中期9段階。

1380号土坑(図版75)

位置：O-23・24 重複：1401坑→本坑→121住・1383坑 規模：重複のため平面プランは明確ではないが、径82cm程の円形を呈するものと想定され、深さは74cmを測る。 覆土：にぶい乳褐色土の単層。 遺物：土器は2点(946、947)を図示した。石器は多孔石1点(483)、台石1点(511)を出土した。 時期：中期8段階。

1381号土坑(図版76)

位置：T-9 重複：1382坑→本坑→125住 規模：径130×118cmの円形を呈し、深さは64cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層はパミスを含む黒褐色土、2層はパミスを多く含む黒褐色土、3層はパミスを多く含む暗褐色土である。 遺物：土器片のみであり、2点(948、949)を図示した。 時期：出土土器からすれば中期9段階だが、125住のP1に切られている。

1384号土坑(図版76)

位置：O-24・T-4 重複：800坑→本坑 規模：径116×108cmの円形を呈し、深さは62cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり、2点(950、951)を図示した。 時期：中期8～10段階。

1387号土坑(図版76)

位置：T-4 重複：多数 規模：径160×134cmの不整な円形を呈し、深さは84cmを測る。 覆土：3層に分けられる。1層はパミスを含む暗褐色土、2層は灰暗褐色土、3層はパミスを含む黒色土である。 遺物：土器は2点(952、953)を図示した。石器は打製石斧1点と凹石1点が出土した。 時期：中期9段階。

1388号土坑(図版76)

位置：T-4 重複：本坑→812坑・814坑・屋外埋甕7・屋外埋甕8 規模：長径86×短径推定65cmの楕円形を呈し、深さは54cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層は暗褐色土、2層は灰茶褐色土である。 遺物：土器は1点(954)を図示した。石器は打製石斧1点が出土した。 時期：中期10段階。

1389号土坑(図版73、PL122)

位置：T-10 重複：128住と重複するが、新旧関係ははっきりしない。 規模：径80×74cmの円形を呈し、深さは40cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。大ぶりの自然礫数点が上層から検出された。 遺物：土器は1点(955)を図示した。石器は打製石斧1点を出土した。 時期：加曾利E I・II式頃(中期3～7段階頃)と想定できよう。

1390号土坑(図版77)

位置：T-5 重複：なし 規模：径180×176cmの円形を呈し、深さは120cmを測る。 覆土：5層に分けられる。1層はパミスを含む暗褐色土、2層はパミスを含む黒褐色土、3層はパミスを含むにぶい黄褐色土、土器の出土は本層からのものが多い。4層は暗褐色土、5層はパミスを含む暗褐色土である。 遺

物：5点（956～960）を図示した。石器は石鏃1点、磨石1点、凹石1点、軽石製品1点（596）を出土した。 時期：960はやや古いが、中期10段階に比定できよう。

1392号土坑（図版54、PL122）

位置：T-8・9 重複：1119坑→本坑 規模：径92×90cmの円形を呈し、深さは44cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり2点（961、962）を図示した。 時期：中期3～4段階。

1394号土坑（図版77、PL122）

位置：T-13・14 重複：1393坑→本坑→1395坑 規模：長径推定95×短径74cmの楕円形を呈し、深さは88cmを測る。 遺物：土器は1点（963）を図示した。石器は丸石1点（526）が底部近くから検出された。 時期：出土土器からすれば中期8段階だが、125住との重複関係を重視すれば7段階以前に比定されようか。

1395号土坑（図版77）

位置：T-15 重複：1394坑・1396坑→本坑→921坑 規模：径132×110cmの円形を呈し、深さは116cmを測る。 覆土：2層に分けられ、1層はパミスを含む黒色土、2層はパミスを含む灰黄褐色土である。 遺物：図示した石鏃1点（79）のみである。 時期：土器が検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1406号土坑（図版77、PL122）

位置：T-5 重複：なし 規模：径96×60cmの不整な楕円形を呈し、深さは60cmを測る。 覆土：砂層を一部で含む暗褐色土の単層。 遺物：図示した石皿1点（435）のみである。覆土中位からの検出である。 時期：土器が検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

1410号土坑（図版75）

位置：T-4 重複：1404坑→本坑→1372坑・1416坑・1417坑 規模：径95cm程の円形を呈し、深さは95cmを測る。 覆土：パミスを含む暗褐色土の単層。 遺物：少量の土器片のみであり、1点（964）を図示した。 時期：中期8段階。

1413号土坑（図版78）

位置：T-5 重複：本坑→1327坑 規模：径86×70cmの円形を呈し、深さは42cmを測る。 覆土：パミスを含む黒褐色土の単層。 遺物：土器片のみであり、2点（965、966）を図示した。 時期：中期8段階。

1417号土坑（図版78）

位置：T-4 重複：1410坑→本坑→1416坑 規模：径64cm程の円形を呈し、深さ68cmを測る。 遺物：図示した石棒B類1点（411）と台石1点（512）のみである。 時期：土器は検出されなかったが、縄文中期の可能性が高いだろう。

上記以外の遺物出土土坑

(数字は個数、土器片のほとんどは縄文中期中葉～後期初頭期頃に比定できうるものと考えられる。)

A 縄文土器片を出土した土坑

60坑・127坑・134坑・136坑・137坑・141坑・145坑・146坑・154坑・155坑・163坑・166坑・168坑・173坑・193坑・194坑・210坑・211坑・247坑・249坑・259坑・261坑・262坑・269坑・273坑・280坑・298坑・308坑・314坑・323坑・352坑・402坑・404坑・406坑・407坑・409坑・413坑・428坑・436坑・465坑・467坑・469坑・500坑・501坑・502坑・503坑・525坑・540坑・545坑・554坑・559坑・563坑・564坑・572坑・575坑・606坑・608坑・617坑・644坑(動物骨も出土)・649坑・651坑・653坑・654坑・655坑・656坑・657坑・659坑・662坑・666坑・673坑・675坑・705坑・713坑・718坑・763坑・776坑・786坑・787坑・789坑・792坑・801坑・803坑・830坑・832坑・833坑・837坑・842坑・845坑・859坑・860坑・863坑・917坑・957坑・967坑・979坑・1004坑・1038坑・1039坑・1040坑・1048坑・1050坑・1051坑・1054坑・1058坑・1064坑・1066坑・1070坑・1071坑・1076坑・1111坑・1112坑・1114坑・1122坑・1128坑・1129坑・1157坑・1171坑・1173坑・1175坑・1184坑・118坑・1201坑・1203坑・1207坑(動物骨も出土)・1210坑・1218坑・1226坑・1231坑・1236坑・1239坑・1242坑・1267坑・1277坑・1288坑・1293坑・1300坑・1307坑・1319坑・1322坑・1325坑・1327坑・1334坑・1361坑・1373坑・1377坑・1379坑・1391坑・1393坑・1404坑・1407坑

B 石器が出土した土坑

10坑(磨製石斧破片1)、71坑(打製石斧1)、682坑(凹石1)、712坑(打製石斧1)、773坑(軽石製品)、782坑(磨石1)、834坑(打製石斧1)、1208坑(打製石斧1・動物骨も出土)、1256坑(凹石1)、1302坑(打製石斧3、石匙破片1)、1303坑(打製石斧1)、1312坑(軽石製品1)

C 土器片と石器が出土した土坑

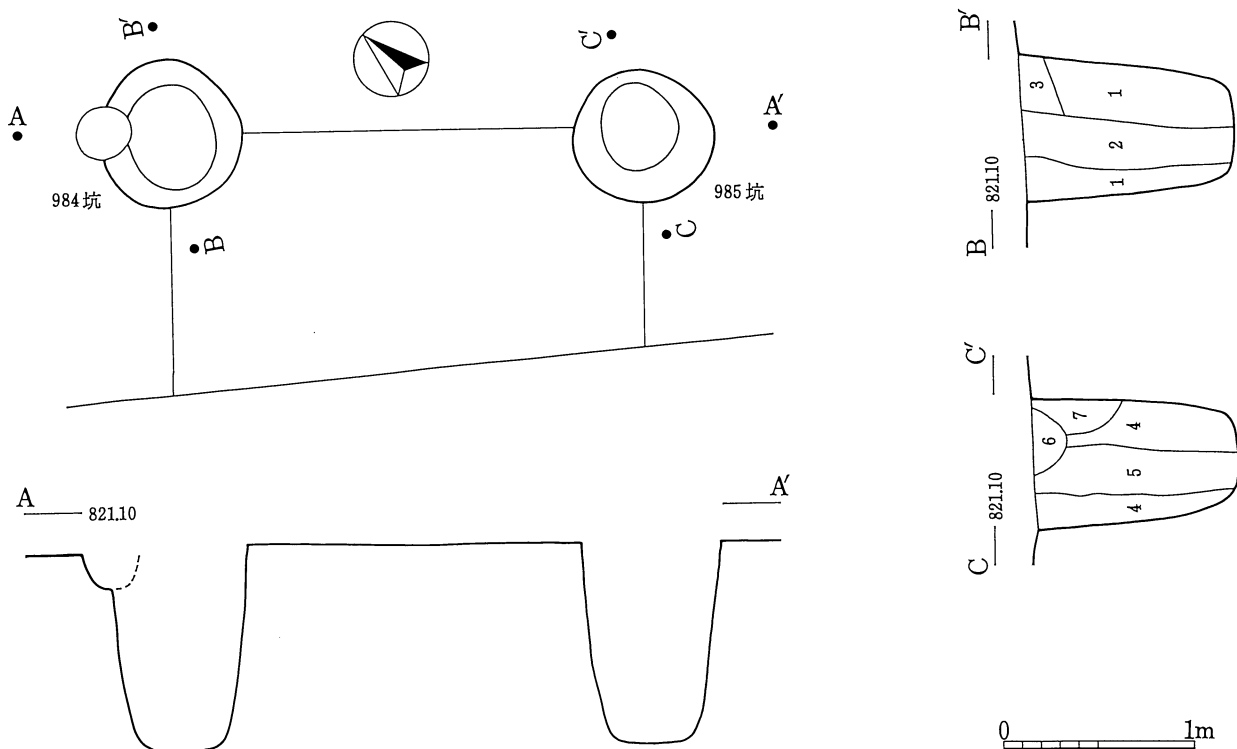
37坑(土器片、打製石斧2)、39坑(土器片、敲石2)、97坑(土器片、敲石1、磨石1)、103坑(土器片、打製石斧1)、248坑(土器片、打製石斧1)、320坑(土器片、磨石1)、463坑(土器片、打製石斧1)、512坑(土器片、打製石斧2、敲石1)、664坑(土器片、打製石斧1)、1043坑(土器片、打製石斧1)、1106坑(土器片、石鏃1)、1202坑(土器片、磨石1) 1204坑(土器片、打製石斧1)、1214坑(土器片、石皿1・動物骨も出土)、1228坑(土器片、打製石斧3)、1277坑(土器片、打製石斧2、敲石1)、1301坑(土器片、石鏃未製品1)、1311坑(土器片、打製石斧1) 1331坑(土器片、磨石1)、1382坑(土器片、石鏃未製品1・動物骨も出土)、1383坑(土器片、黒曜石片)

土坑の時期細分

土坑においては、その時期を決定する際の資料となる土器は破片資料である場合が多い。そのため、数点の出土土器をもって厳密な時期を決定することは難しいといわざるをえないが、今回、できる限りの細分を試みた。それによれば、6段階以前に比定できる土坑が40基程度にとどまるのに対し、7段階以降に爆発的に増加していることが理解できる。つまり、7段階には20基程が比定され、また8段階、10段階では各段階でそれぞれ50基近くが比定できうる。加曾利EⅢ式～IV式頃に比定できる土坑が圧倒的に多いことが認められよう。なかでも住居跡数が減少する9～10段階に土坑数は増大してくることは注目されてもよいのではなかろうか。

③ 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(遺構:第102図)



第102図 掘立柱建物跡 1:40

T-19、20グリッドに所在する。当初は984坑、985坑としてそれぞれ調査したものだが、断面観察によって柱痕の存在が想定されたため、掘立柱建物跡として認定した。両土坑間が短辺にあたると思われる、175cmを測る。長辺は南西方向に存在するものと考えられるが調査区外にあたるため、規模は不明である。その場合、長軸方向はN-42°-Eを呈し、北東-南西方向を向くと思われる。984坑は983坑と重複しており、より古い構築である。984坑は長径76×短径72cm×深さ111cm、985坑は長径72×短径70×深さ108cmの規模をそれぞれ測る。両土坑ともほぼ同様な土層を呈しており、1層の黒褐色土が柱痕であったと想定される。2層及び3層が掘り方埋土であると考えられる。2層は暗褐色土、3層は黒褐色土を呈している。いずれもIII層土壌を含んでいるため、埋め戻されたことが想定できる。2層は両土坑とも底面まで至っており、径約25cm程の柱を底面から据えたことが推測できよう。984坑からは縄文中期後葉頃の土器片が数点検出されたため（図示はせず）、当該期の遺構として理解したい。

④ 屋外埋甕

屋外埋甕は8基が検出された。これらは2ないし3基をもって群を成している。こうした屋外埋甕群は3か所で認められる。

ア. 屋外埋甕群A

D-19グリッドに位置する。1号・2号・3号屋外埋甕の3基からなる。この屋外埋甕群には43坑、44坑、45坑、49坑も重複している。遺構検出段階で屋外埋甕はそれぞれ重複する土坑よりも新しい構築であることが理解できたが、屋外埋甕間の重複関係はつかめなかった。また3基ともIII層上面より数cm程高い地点において口縁部が認められる。

1号屋外埋甕（遺構：第103図、PL176 遺物：図版194、PL176）

本跡よりも古い構築である44坑と49坑と重複する。掘り方は85×65cmを測り、深さは検出面から約38cmである。埋設された土器は大形の深鉢形であり、正位に埋められていた。口縁部は割れていたが、原位置近くに破片としてみられるものが認められたほか、土器内から検出されたものもあった。したがって本来は口縁部から底部まで残る完形品であったことがわかる。土器内堆積土は暗褐色土の単層である。土器内堆積土からは打製石斧1点も検出されているが欠損品である。中期6段階に比定される。

2号屋外埋甕（遺構：第103図、PL176 遺物：図版194、PL176）

45坑と重複し、本跡の方が新しい構築である。掘り方は55×50cmを測り、深さは検出面から約35cmである。大形の深鉢形土器が正位に埋設されていた。土器内堆積土は暗褐色土の単層であり、掘り方覆土との相違はほとんどみられない。検出段階では口縁部は欠けていたが、土器内に口縁部が重なり合うように出土しているのが認められた。いずれも口縁部側が下に向いていることから人為的な行為によるものとは想定しがたい。埋設段階では完形品であったものが、口縁部が割れ落ち、土器内に積み重なったと考えるべきであろうか。そうであれば土器内は完全に埋まっていたのではなく、ある程度は空洞状態であったということになる。土器内からは打製石斧2点（完形品1、欠損品1）も検出されている。意図的な埋納とは理解できないため、これも土器内が空洞状態であったことを示すものとなるであろうか。中期5段階に比定される。

3号屋外埋甕（遺構：第103図、PL176 遺物：図版195、PL176）

45坑と重複し、本跡の方が新しい構築である。掘り方は75×75cmを測り、深さは検出面から約48cmである。大形の深鉢形土器が正位に埋設されていた。土器内堆積土は暗褐色土の単層である。口縁部は欠していたが、土器内堆積土上層で一部は検出された。そのため全体の器形を知ることができたわけだが、大半の口縁部はみあたらなかった。本来は完形品であったと思われるが、この付近は耕作土が非常に浅いため、口縁部の大半は耕作によって失ってしまった可能性が高い。中期5段階に比定されよう。

イ. 屋外埋甕群B

〇—5グリッドに位置する。4号・5号・6号屋外埋甕の3基からなる。遺構検出段階で56坑・57坑・58坑・59坑と重複し、そのいずれよりも新しい構築であることが理解できた。口縁部はⅢ層上面よりも数cm程高い地点で検出されている。

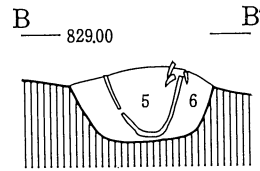
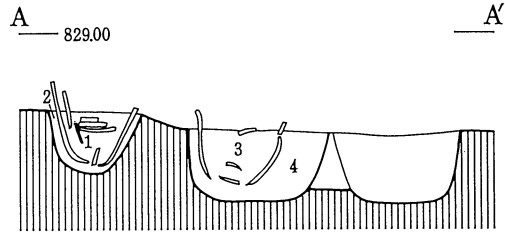
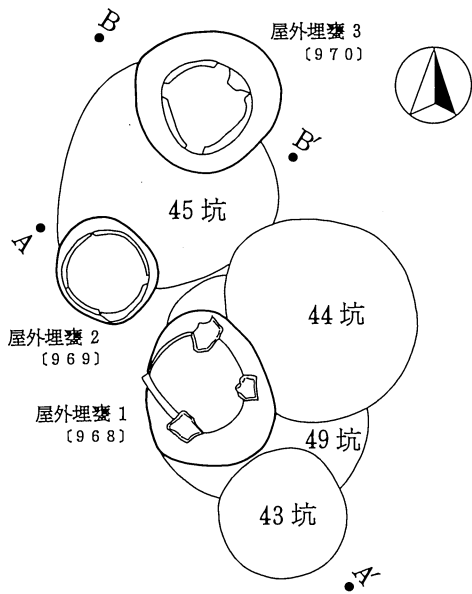
4号屋外埋甕（遺構：第103図、PL177 遺物：図版195、PL177）

7住内に存在する。新旧関係ははっきりしないが、本跡に用いられた大形深鉢形土器の口縁部が7住の床よりも高いレベルにあることから、本跡の方が新しい所産であると想定できようか。掘り方は118×94cmを測り、深さは検出面から約35cmである。正位で西側へやや傾斜気味に埋設されている。胴部の一部分が欠しているがこれは意図的に割られたものと理解できる。胴部穿孔の一種としてとらえたい。口縁部の一部も欠しているが、これは後世の耕作等によるものであろう。土器内堆積土は暗褐色土の単層である。中期6段階に比定される。

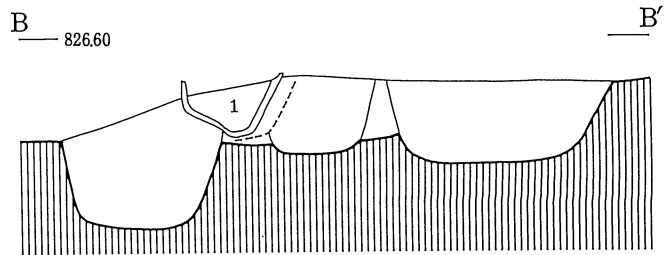
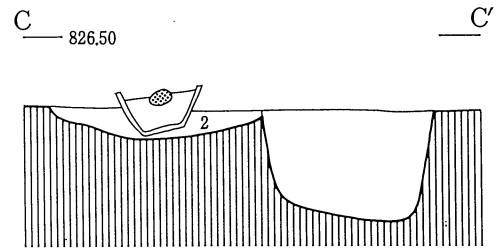
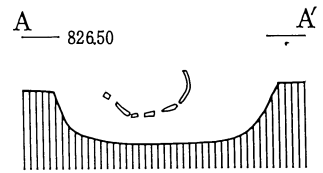
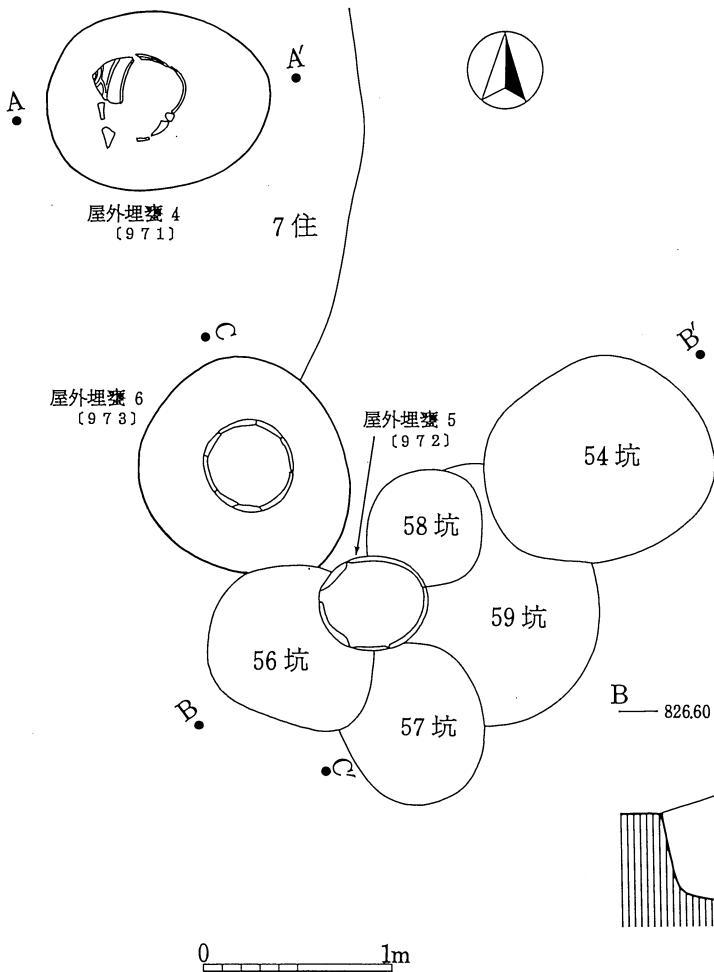
5号屋外埋甕（遺構：第103図、PL177 遺物：図版195、PL177）

56坑、57坑、58坑、59坑と重複し、そのいずれよりも新しい構築である。明確な掘り方は認められなかった。おそらく土器が埋設できる最小限の掘り方であったのだろう。口縁部は欠していたが、正位に埋設

屋外埋甕A群



屋外埋甕B群



第103図 屋外埋甕(1) 1 : 40

されていた。土器内堆積土は暗褐色土の単層である。中期5段階に比定されよう。

6号屋外埋甕（遺構：第103図、PL177 遺物：図版195、PL177）

56坑と重複し、本跡の方が新しい構築である。掘り方は長径約120cm、短径110cm、検出面からの深さ約15cmを測る。口縁部は欠していたが正位に埋設されていた。土器内堆積土は暗褐色土であり、土器内堆積土の中位から円礫が検出された。中期5段階に比定されよう。

ウ. 屋外埋甕群C

T-4グリッドに位置する。7号・8号屋外埋甕からなる。ともに124住と重複するが、称名寺式に比定される401を124住埋甕炉と理解すれば、本埋甕群の方が古い構築であると考えられよう。ただ、124住の床面より高いレベルで検出された点がうまく説明できない。

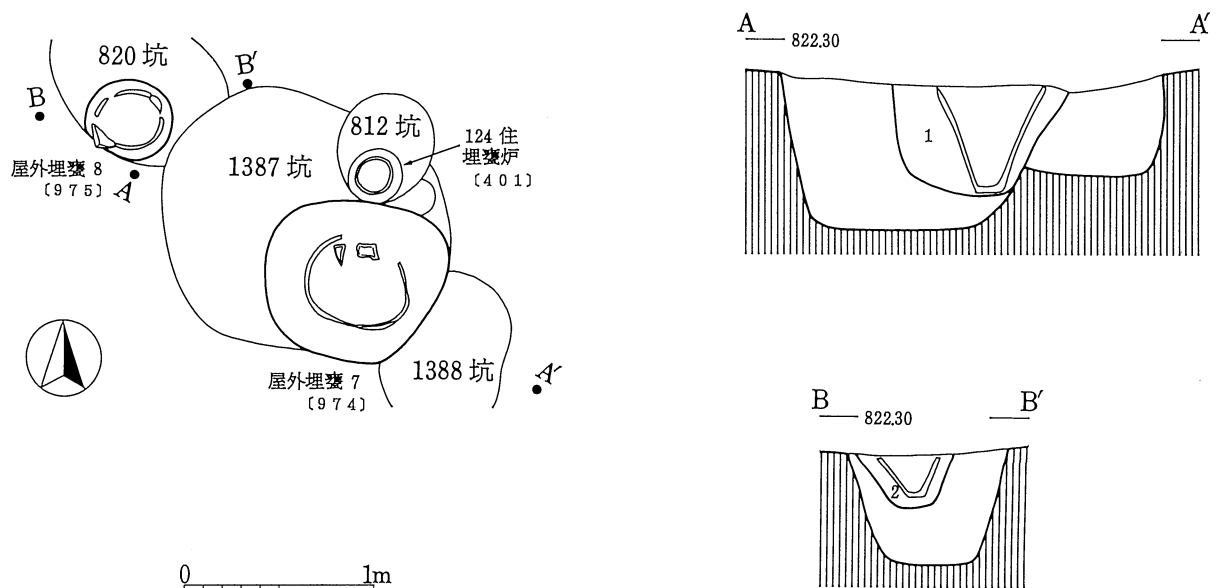
7号屋外埋甕（遺構：第104図、PL178 遺物：図版196、PL178）

1387坑、1388坑、814坑と重複し、そのいずれよりも新しい構築である。掘り方は100×90cm、深さは検出面から約57cmである。大型の深鉢形土器が正位に埋設されていた。土器内堆積土は暗褐色土の単層である。口縁部から底部まで残る完形品であるが口縁部の一部は欠していた。掘り方覆土は暗褐色土であるが、骨片が混じっていた。また径10cm程の軽石礫も数点含んでいる。中期10段階に比定される。

8号屋外埋甕（遺構：第104図、PL178 遺物：図版196、PL178）

820坑と重複し、本跡の方が新しい構築である。掘り方は長径45cm×短径40cm×検出面からの深さ約30cmを測る。口縁部は欠していたが正位に埋設されていた。土器内堆積土は暗褐色土の単層である。中期10段階に比定される。

屋外埋甕C群



第104図 屋外埋甕(2) 1:40

⑤ 集石

1号集石 (第105図、PL89)

〇-7グリッドに位置する。II層中に構築されているものである。約110×80cmの範囲に拳大程度の礫の集中が認められている。こうした拳大の礫を取り囲むように、大ぶりで扁平な礫が縦に設置されている。そのため当初は石囲炉ではないかと考えたこともあったが、一般的な石囲炉とは趣きが異なるため集石として認定した。II層中に掘り込みが認められた。遺物は礫上に露呈していた土器1点(967)をあげのみである。この土器は中期1~2段階頃に比定できるものと思われるが、本跡は中期7段階に比定できる41住のピットの上部に構築されていることから、7段階以降のものであると理解すべきであろう。

2号集石 (第105図、PL89)

〇-7グリッドに位置する。約70×50cmの範囲に礫の集中が認められたため、集石と理解した。遺物は図示しなかったが、中期頃の土器片が若干ながら認められたため、近接する1号集石と近い時期に比定できようか。

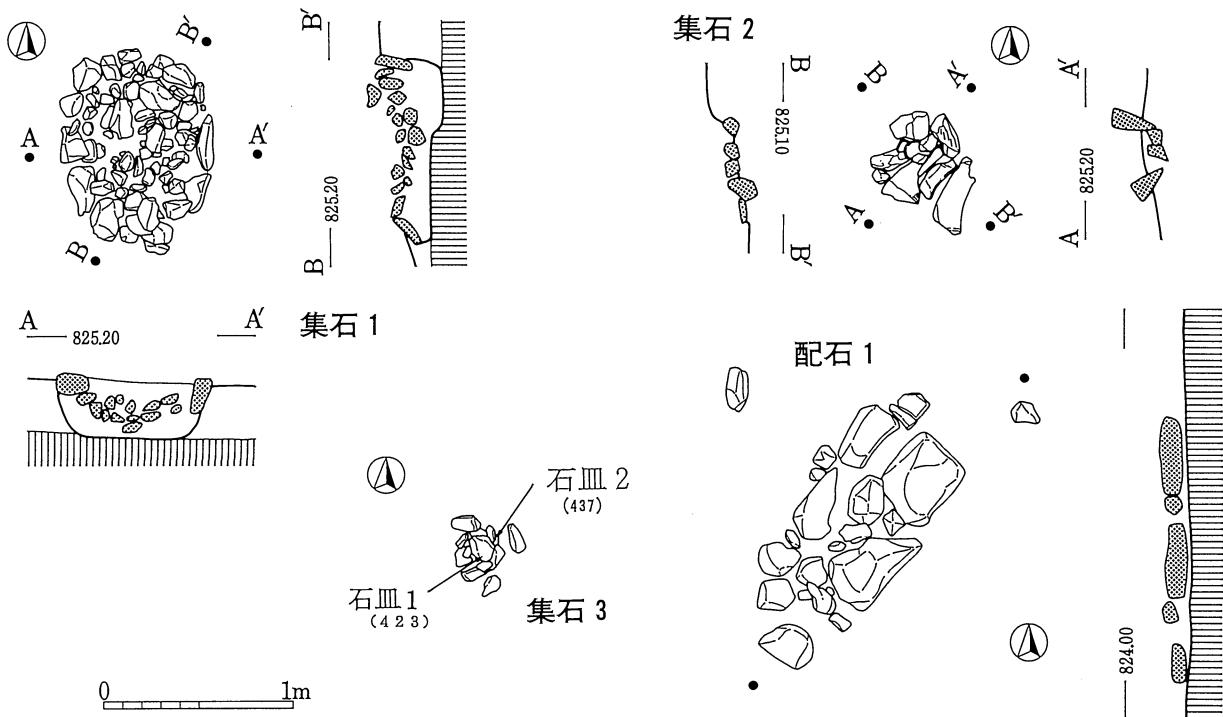
3号集石 (第105図)

T-20グリッドに位置する。約50×40cm程の範囲に、石皿2点(423・437)及び数点の自然礫による集中個所が認められるため、集石と理解した。掘り込みは認められない。遺物は石皿2点及び中期頃の土器片が若干検出されている。時期の細分はできないが縄文時代中期頃であることは間違いなからう。

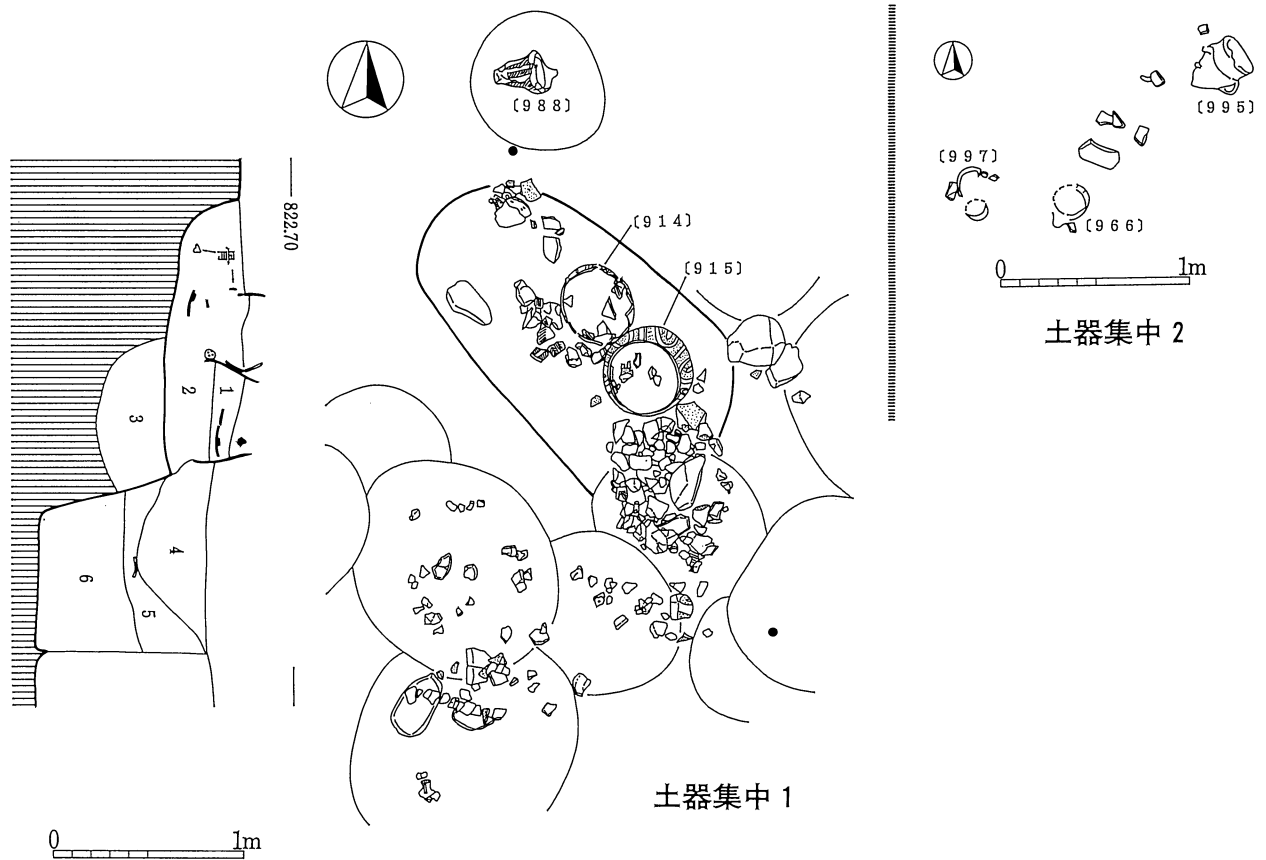
⑥ 土器集中

1号土器集中 (第106図、PL123)

〇-22、〇-23グリッドに位置する。破片状態の土器がIII層上面に集中して検出された。また焼けた動物骨も土器片に混じって多量に検出された。図示した土器は987~994までの8点であるが、ほぼ完形状態



第105図 集石・配石



第106図 土器集中 1 : 40

であったのは988のみであり、そのほとんどが破片状態であった。この土器集中は1339坑の周辺に特に集中している。1339坑には底部を欠した大形土器2点(914・915)が逆位に埋設されている。土坑出土の土器としてはやや特異な出土状態であるため、これらも土器集中の一部である可能性も考えられよう。土器集中の下部には70坑・1328坑・1329坑・1292坑・1296坑が存在しているが、70坑を除くと、土器集中は土坑をまたがって分布しているため、土坑に属するものとは考えにくいと判断した。また、988の下部には70坑が認められているが、70坑の検出面からやや浮いて出土していること、70坑出土の432・433が中期8段階であるのに対し、988は中期10段階に比定でき、時期に差がみられること、の2点から988は70坑に属するものとは判断できないと考えた。時期は991・992はやや新しいが、図示した他の土器から、中期10段階に比定できよう。

2号土器集中(第106図、PL123)

P-2グリッドに位置する。ほぼ完形な3点の土器と若干の土器片がまとまって認められたため、土器集中として理解した。図示した3点(995~997)ともⅢ層上に密着しての出土であり、同時期性は高いと考えられる。995及び997は無節縄文を、また996は単節縄文を施している。中期9段階に比定できよう。

⑦ 単独土器(図版196~198、PL170~171)

厳密な意味では遺構とはいえないが、Ⅲ層上面に接した状態で、ほぼ完形に近い状態で検出された土器が11点認められた。ここでは単独土器として扱いたい。遺構配置図に出土位置を示してある。

単独土器1(976)と単独土器2(977)は、D-19グリッドに位置する。いずれも胴部下半部のみが残存しているにすぎない。単独土器1には無節縄文が施されている。いずれも中期10段階に比定できよう。

単独土器3(978)はN-5グリッドに位置し、中期5段階に比定される。

単独土器4(979)はN-4グリッドに位置する。頸部以上を欠するが中期5段階に比定されよう。

単独土器5・6・7・8の4点はO-13グリッドに位置する。単独土器5(980)は他の単独土器とやや趣きを異にし、残存割合の低いものである。中期5段階に比定できる。単独土器6(981)は中期3段階に比定できる。単独土器7(982)は中期10段階に比定されよう。単独土器8(983)は横位に検出されたもので、後期称名寺式に位置づけられる。

単独土器9(984)はO-14グリッドに位置し、中期5段階に比定できる。

単独土器10(985)はN-20グリッドに位置する。2号住居跡出土の(9)・(10)と同タイプの浅鉢であり、本来は口縁部が「くの字」形に外反するものであろうが、口縁部は欠している。中期5段階に比定できる。

単独土器11(986)はN-9グリッドに位置する。ほぼ直立した状態で検出された。これは平成5年度の調査区の南端に位置していたが、6年度に調査された90住の内部に含まれる。したがって90住に属する可能性も否定できまい。中期5段階に比定できる。

2 出土遺物

(1) 概観

本時期の出土遺物は膨大な量にのぼる。そのため、図示した遺物は一部にとどめざるをえなかった。個別遺構ごとの出土遺物の種類・数量については、1項の遺構説明の中で記載したが、本項では①土器、②石器、③土製品、④動物遺存体について、①は時期別に、②～③は品目別に記載していく。また④は金子浩昌氏による分析結果を掲載する。

(2) 各説

① 土器

当該期の土器は中期中葉の井戸尻式から後期の加曽利B式まで認められる。このうち中期土器は1項でも述べたように10段階に細分した。今回の時期細分においては、遺構単位の一括性のある資料を基軸とし、段階設定を行った。したがって明らかに時期の隔たる混入品を除き、多少の時間幅が認められても、遺構単位に良好な一括資料を重視した。これに屋外埋甕、単独土器、遺構外土器を適宜加えていく。なお、本遺跡は遺構間の重複は著しいが、多くの住居跡では壁高の残存が少なく、明確な重複関係がつかめた例はごく一部にすぎないため、重複関係からの分析はごく少数にとどめざるをえなかった。

以下、ア～ウではそれぞれの遺構において、段階設定の基軸となりうる一括性の高い土器群の出土状況を解説し、エでは遺構外出土土器の概略を記す。そして、オでは段階設定と各期・各段階の様相を概観する。

ア 住居跡出土の土器について

本遺跡では土器の良好なセットを有する住居跡が少なからず認められる。これらは時期細分において有効な資料となりうる。こうした良好なセットが認められるのは、1住、2住、4住、6住、14住、16住、24住、32住、39住、44住、60住、76住、81住、89住、106住、121住、123住などがあげられよう。なかでも同時性の高い、14住、24住、44住、76住についてはここで簡単にその出土状況を記しておきたい。

14住 図示した土器は24点(44～67)に及ぶが、覆土は単層であり、その大部分の土器は床面より数cm程浮いた付近から出土している。これらは完形のものも多く、住居埋没途中のある段階で一括し

て投棄されたものと理解できそうである。中期7段階の一括資料である。

- 24住 図示した土器は17(105~121)点であり、量的にも良好な中期7段階のセットとなっているが、なかでも106~111の6個体はいずれも胴部中位以下を欠した状態で床面に逆位で伏せられていたものである。そしてこれらの土器に囲まれるように105の大形鉢が置かれていた。以上の7個体の土器は本跡廃絶時における同時性が高いものである。また本跡からは埋甕112も検出されている。
- 44住 P5からは181の土器が石蓋を伴って検出された。床面及び床面直上からは178~180が出土。また底部を欠した182は口縁部を下にした逆位の状態で床面に伏せられていた。これら5点の土器は本跡廃絶時における同時性の高い中期5段階のセットである。60住出土土器として掲載した192は33住及び本跡とも遺構間接合ができたものである。また覆土から出土した183~185の3点は中期10段階の良好なセットである。
- 76住 図示した土器は15点(220~234)であり、覆土の堆積及び土器の出土状況は14住に類似している。中期7段階の良好なセットである。なお、77住との重複関係は先行トレンチによる土層観察によって明確に本跡の方が新しい所産であることが理解できたものである。

イ 土坑出土の土器について

当該期の土器を出土する土坑は462基にのぼる。このなかには比較的多量の土器を出土し、段階設定において有効な資料を輩するものも少なからず認められる。特筆すべきものとしては、302坑、1104坑、1126坑、1127坑、1260坑、1268坑、1279坑、1296坑、1339坑、1374坑、1390坑などがあげられる。こうした良好なセットをなす土坑に加えて、完形もしくはそれに近い土器を出土する土坑も相当数におよぶ。

ウ 土器集中の土器について

O-23グリッドを中心とする1号土器集中は土器8点(987~992)を図示した。また1項でも述べたように1339坑の914・915も1号土器集中を構成するものになるかもしれない。P-2グリッドに所在する2号土器集中(995~997)は土器3点を図示した。いずれの土器集中も同時性が高いと考えられる。

エ 遺構外出土の土器について(図版201~210、PL172~175)

遺構外出土の土器は膨大な量にのぼるが、図示はごく少数に限らざるをえなかった。図示した土器は998~1051である。図示は完形もしくはそれに近いものを優先したため、これは時期的な出土量を示すものではない。なお、遺構外遺物は、五領ヶ台式期の土器片が2点のみだが出土している他は、中期中葉・井戸尻式期から後期加曾利B式期までの時期のものが認められる。

998~1001は中期2段階に比定される。このうち999~1001は口縁部に刻みを有し、曲隆線と縄文(1003は捺糸文)で胴部を施文する。焼町土器の最終段階に位置するものである(寺内1997)。

1002~1007は中期3段階に比定される。このうち1002~1005は曾利I式といえよう。1008は加曾利E I~II式頃であろうか。1009~1014中期5段階に、また1015~1019は中期6段階に比定できる。1018は頸部に沈線鋸齒文を施す。1020~1028は中期7段階、1029~1030は中期8段階に比定されよう。1030は大木9式とも受け取れるが、群馬県でみられる胴部隆帯文土器と理解した方がよいかもしい(石坂ほか1989)。1031~1032は中期9段階に、1033は中期10段階に比定できる。1034~1037は浅鉢を掲載した。井戸尻式~加曾利E II式頃に位置づけられようか。1038・1039は器台であり、加曾利E I~II式頃に比定できようか。後期に属するものとしては、1040~1043が称名寺式、1044~1046・1049が堀之内式に該当しよ

う。1045は鉢、1046と1049は注口土器であり、同一個体の可能性もある。これらは堀之内2式期に比定できよう。また1051は加曾利B2式頃のものである。また1047・1048・1050も後期であろうと考えられる。

オ 段階設定

1項でも述べたように、本遺跡の中期土器は、その編年軸を井戸尻編年及び加曾利E式編年（谷井彪ほか1982）に基づき、10段階に細分した。

つまり、1段階（井戸尻I式期並行）、2段階（井戸尻III式期並行）、3段階（曾利I式・加曾利E I式古期並行）、4段階（加曾利E I式新期並行）、5段階（加曾利E II式古期並行）、6段階（加曾利E II式中期並行）、7段階（加曾利E II式新期並行）、8段階（加曾利E III式古期並行）、9段階（加曾利E III式新期並行）、10段階（加曾利E IV式期並行）とした。ただし、前述の通り、この段階設定は厳密な土器分析を経たうえで行ったものではなく、あくまでも出土遺物の一括性などをもとにした時間的な配列であることを断っておきたい。また、この10の段階は土器様相や集落変遷などの要素からさらに、I期（1段階～3段階）、II期（4段階～5段階）、III期（6段階～7段階）、IV期（8段階～9段階）、V期（10段階）の5期に大別することができる。

これに後期の称名寺式並行期・堀之内式並行期・加曾利B式並行期がつづく。

カ 各期・各段階の様相

以下、各期・各段階の様相を期していきたい。中期土器は以下の8系統に区分する。記述にあたってはA～Hの記号で表現する。

A系統：井戸尻式（勝坂式）土器。

B系統：焼町土器。

C系統：加曾利E式土器。

D系統：曾利式土器。

E系統：連弧文土器。

F系統：唐草文系土器。

G系統：群馬県周辺に主体的に分布する土器で、三原田式など。

H系統：沈線文を地文にもち、前期のA～G系統のいずれとも異なり、強いて言えば唐草文系土器と加曾利E式土器の折衷タイプとでも言える系統で、佐久地方に主体的に分布する。

中期第I期（1段階～3段階）

1段階～3段階までを第I期とする。3段階で区切ったのは、3段階と4段階の間に若干の断絶期を介しているためである。1段階は井戸尻I式並行期である。18住・88住・109住出土土器が該当する。また破片資料のみであるが、21住・116住も良好な資料を有する。本段階では18住—99・100、88住—261をはじめとしてB系統の土器が多数を占める。18住—96は、群馬県に出自をもつG系統の土器であろう。

2段階は井戸尻III式並行期である。11住・12住・16住・19住出土土器などが該当する。前段階で多数を占めたB系統の土器は前段階よりも減少し、また遺構外—999～1001のように、口縁部に刻みをもち、胴部には曲隆線と縄文を施すという最終末の様相を呈する。かわって16住—81、703坑—540などのA系統の土器が目立つようになる。関東的な要素が強くなるようである。また11住—36は器形は異なるものの施文はG系統の三原田式に類似する。同じく33住—142も県内では類例をみないものであり、群馬県方面に出自が求められるだろうか。D系統土器では12住—40・43などがみられる。19住—102は曾利I式に下る。他にも47住—191は本段階に位置づけられ、混入品と考えられる。16住—70はB系統と思われるが、北陸方面の影響が感じられそうである。

3段階は加曾利E I式古期・曾利I式並行期である。15住・20住・25住・32住・89住出土土器などが該当する。C系統の土器では最古の段階の例が多い。これらはD系統土器と共伴するが、なかにはA系統土

器と思われるものも交わっている。例をあげると、89住—264—275では269のような井戸尻Ⅲ式が認められる。25住—122はG系統の三原田式と思えるが、胴部の沈線施文順序が三原田式とは異なっている。遺構外出土の1002—1006はD系統である。351坑—501は完形の釣手土器である。土坑から完形の釣手土器が出土する例は極めて稀少であろう。32住—135は図示していない面の口縁部の突起の内側に三叉文を施している。

中期第Ⅱ期（4段階～5段階）

4段階と5段階を第Ⅱ期とする。4段階は前段階と断絶し、5段階に連続するため、本期を設けた。4段階は加曾利EⅠ式新期並行期である。10住と108住出土土器などが該当する。概して住居跡をはじめ遺構数が少ない。108住—370は加曾利EⅡ式以降の混入品とみられる。5段階は加曾利EⅡ式古期並行期である。33住・44住・60住・67住・77住・80住・90住・91住出土土器などが該当する。C系統土器とF系統土器が主体的にみられる。また110住—373のみではあるが、E系統土器も認められる。さて、この段階のF系統土器は29住—134のように松本盆地周辺の唐草文系土器に比較的近いものが多いようである。44住—178—182は同時性の高い出土状態を示し、良好なセットである。181では二条一対の隆帯が認められる。一方、91住—280では胴部下半部の区画線が沈線化していることがわかる。またD系統土器には1240坑—791などがあげられるが、791では胴部下半部に本来ならば入らないはずの横方向の沈線が施されているように唐草文系土器の影響が強く感じられる。同様に91住—282でも胴部に横方向の沈線が施される。なお、60住—192は33住および44住とも接合している。また屋外埋甕2号(969)・3号(970)・5号(972)・6号(973)も本段階に位置づけられる。このような大型深鉢は竪穴住居跡にはほとんど認められず、屋外埋甕に多く見受けられる。屋外埋甕専用のものなのかもしれない。

中期第Ⅲ期（6～7段階）

6段階と7段階を第Ⅲ期とする。在地色の強いH系統土器が多数を占め、単純相に近いありかたを示すようになる。鱗状短沈線の地文があらわれはじめ、綾杉状沈線が粗大化してくるようになる。他系統の土器はH系統土器に圧倒されてしまい、その存在はごく少数となる。H系統の土器はF系統の唐草文系土器の系譜をもつものと思われるが、この時期になるともはや唐草文系土器の範疇では説明がつかないほど在地化が進む。もはや別系統の土器といってよいであろう。そのようななか、82住—250は松本盆地の唐草文系に近い様相を示す。6段階は加曾利EⅡ式中期並行期である。1住・2住・29住・101住・110住出土土器などが該当する。屋外埋甕も1号(968)・4号(971)が本時期に比定される。7段階は加曾利EⅡ式新期並行期である。4住・6住・8住・14住・24住・28住・41住・43住・46住・76住・84住・85住・102住・125住出土土器などが該当する。本段階になると住居跡数は20軒近くを数え、急激に増大する。14住は6段階の方に近いかもしれない。14住—44—67は極めて同時性の高いセットである。44・48—51のように隆帯文をもつものと45—47など沈線文をもつものの両者が認められ、時間幅がみられる。24住—105、111も住居廃絶時における同時性が極めて高いものであるが、14住と同様に隆帯文をもつもの(107・110・112・115)と沈線文をもつものとの両者が認められ、これもまた時間幅がみられる。隆帯文(古相)から沈線文(新相)へという流れは感じられるものの住居跡出土のセット資料では明らかに混在している。ある程度の時間幅が存在したようである。良好なセットである76住でも220・225などは隆帯文をもちやや古相を示す。4住・41住・46住も6段階の要素を有している。また鱗状短沈線文は97住—307のように曲線がよりはっきりしてくる。24住—121・4号屋外埋甕—971は埼玉県北部地域にみられる大形甕形土器(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986)である。

中期第Ⅳ期（8段階～9段階）

8段階と9段階を第Ⅳ期とする。H系統土器は減少し、かわってC系統土器が増加する。つまり加曾利

E式が主体を占めるようになり、在地のH系統土器は劣勢となる。なお、この時期のH系統土器は佐久市吹付遺跡報告で百瀬忠幸氏によって「佐久系土器」と仮称されているものである。沈線は曲線化が進んでより一層独特のものとなる。8段階は加曾利EⅢ式古期並行期である。本段階も7段階と同様に住居跡数が多く、十数軒を数える。38住・39住・47住・70住・71住・75住・81住・94住・95住・97住・106住・121住・122住・126住・128住出土土器などが該当する。また本期から土坑数が急増する。他系統の土器は僅少であり、207の曾利式両耳壺をあげる程度である。9段階は加曾利EⅢ式新期並行期である。72住・118住出土土器などが該当する。住居跡数は前段階と比べると急激に減少する。

中期第V期（10段階）

加曾利EⅣ式期並行期である10段階を第V期とする。C系統土器が単純相を示し、H系統土器は極めて少なくなる。この時期になると柄鏡形敷石住居跡が確実に認められてくる。83住・93住・104A住・123住・130住・132住出土土器などが該当する。住居跡数は減少するものの、それに対して土坑数の増加は続く。なかでも1127坑・1268坑・1279坑などのように完形もしくは大形の破片を伴う土坑が目立っている。また7号屋外埋甕—974・8号屋外埋甕—975も見受けられる。

後期

称名寺式並行期は3住・107住・112住・124住などが該当する。単独土器8—983、遺構外—1041～1044も当該期に比定できよう。堀ノ内式・加曾利B式は遺構外出土のみであり、前者には1045・1046等が、後者には1052等が該当する。

キ H系統の土器について一仮称「郷土式土器」成立の可能性

H系統土器は、佐久地方に主体的に認められる沈線地文をもつ土器群である。沈線地文をもつ点では松本盆地を中心とした地域でみられる唐草文系土器と共通するが加曾利E式の影響も大きく受けており、いわば唐草文系土器と加曾利E式土器の折衷タイプとでもいえそうな土器群である。バリエーションにもかなり富んでいる。本遺跡では第Ⅱ期5段階頃から出現し、6～7段階の第Ⅲ期には他系統土器を圧倒して単純相に近い様相を呈するほどになる。

こうした佐久地方にひろくみられる唐草文系土器の系譜を有する土器群については以前より注目されていた。なかでも加曾利EⅢ式（本遺跡では第Ⅲ期）に認められるこうした土器群に関しては、百瀬忠幸氏によって仮称「佐久系土器」が提唱されている（百瀬1991）。百瀬氏によれば「鱗状短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布をみせる土器」であり、そして「松本平から上伊那地方にかけて分布する唐草文系土器の影響を受けて成立した土器と考えられ」るものだという。

ところで本遺跡での所見からすれば、H系統土器の沈線地文は鱗状短沈線文に限られるわけではない。鱗状短沈線文は加曾利EⅢ式期にみられるものであるが、H系統の沈線地文の一側面にすぎないのであり、H系統土器の沈線地文はもう少しひろい範囲を有するようである。これは吹付遺跡の出土土器の大半が加曾利EⅢ式以降のものであることに起因する。また佐久地方では加曾利EⅠ～Ⅱ式期の遺跡の調査例は少なく、そのため土器様相も不明瞭であったことも一因である。その点、本遺跡では加曾利EⅠ～Ⅱ式期における土器の出土量が豊富であり、従来の空白時期を埋める資料を得ることができたといえよう。

さて、このようにH系統土器は在地色が強く、加曾利EⅢ式期の「佐久系土器」をも含む土器系統である。したがってこれもまたひろく「佐久系土器」として包括することも一案かもしれないが、「佐久系土器」が加曾利EⅢ式期の鱗状短沈線文を地文とするものとして理解されている以上、同じ用語を使用することは混乱を招きかねない危惧を覚える。

また「佐久系」というややあいまいな地域呼称にも抵抗を感じるのも事実である。かつて小林眞寿氏は

浅間山麓とはどこからどこまでの地域を指すのかが明確ではないと指摘し、「佐久系土器」という言葉も再検討するべきではないか、と長野県考古学会平成7年度秋季大会で述べられたことがある^(註1)。私も小林氏の指摘に同感である。今回は土器の分析も十分ではないため、H系統土器という分類にとどまってしまったが、私自身としては将来的には、質・量ともに良好な土器群を有する本遺跡を標識遺跡とする仮称「郷土式」が成立する可能性は十分に高いと考えるものである。今後の研究課題としておきたい^(註2)。

② 石器

石器も多数出土した。その多くは縄文時代中期中葉～後期前半にかけてのものと考えられるが、このうち縄文時代早期末～前期初頭期の遺構から出土した石器についてもここで報告する。なお、これら当該期の遺構からは当該期の土器に混じってわずかながらも中期土器も検出されている。したがって、石器に関しても中期のものが混入した可能性は否定できないだろう。そのため、ここでは時期にこだわらず、品目別に報告していきたい。

ア 石鏃 (図版211～213、PL187～188)

製品は487点が出土した。このうち完形品は151点にとどまる。石材別では黒曜石363点、安山岩50点、チャート52点、玄武岩17点、たんぱく石1点、不明4点となっている。図示したのは2～81の80点である。形態的には凸基有茎1点(2)、平基有茎1点(3)、凹基有茎2点(4・5)、円基1点(6)、平基無茎10点(7～16)、凹基無茎65点(17～81)という内訳になる。全体としても凹基無茎が429点と9割近い比率を有する。

未製品と思われるものは178点が出土した。石材別では黒曜石159点、安山岩4点、チャート13点、不明2点である。8点(82～89)を図示した。

イ 石錐 (図版214、PL189)

製品は28点が出土した。完形品は9点、欠損品が19点である。完形品のうちではつまみ部を有するものが3点、つまみ部のないものは6点を数える。石材の内訳は黒曜石14点、チャート8点、玄武岩6点となっている。図示したのは90～109までの20点である。

未製品とおぼしきものは19点であり、すべて黒曜石製である。

ウ 石匙 (図版215～217、PL190～191)

製品は27点が出土した。黒曜石・チャート製(1・120・123・128・135・136・139)と玄武岩・安山岩製(114～119・121・122・124、127・129～131・133・134・137・138)とにわけられよう。このうち後者には粗製・粗大品も含まれている。今回は両者をあわせて石匙として報告するが、その機能は同一ではないだろう。140は黒曜石製の未製品と考えられる。

エ スクレイパー (図版217、PL191)

円形を呈し、縁部に刃部もしくはそれに類似する剝離痕をつくりだしているものをまとめた。4点が出土し、すべてを図示した(140～144)。いずれもチャート製である。143は石鏃未製品である可能性もあろう。144はどちらかといえばサイドスクレイパーと理解した方がよいかもしれない。

オ 小剝離痕を有する剥片 (図版218、PL191)

剥片などに小剥離痕が認められるものをまとめた。145～164までの20点を図示した。すべて黒曜石を利用している。

カ 磨製石斧 (図版219～221、PL192～193)

83点が出土した。この他に破片14点も検出された。完形品は23点、欠損品が60点である。形態別では定角式43点、乳棒状式19点、小形20点、擦切2点、不明14点となる。石材は破片も含めて、粘板岩62点、チャート8点、閃緑岩6点、輝緑岩5点、玄武岩質安山岩4点、角閃石輝石安山岩3点、緑泥片岩3点、はんれい岩2点、砂岩2点、蛇紋岩1点、メノウ1点という内訳になっている。図示したのは165～198までの34点である。特筆すべきは197・198の2点の擦切磨製石斧である。

キ 打製石斧 (図版222～227、PL194～197)

2882点が出土した。このうち2292点が遺構外出土である。これ以外に229点の破片も検出された。完形品は568点、欠損品が2315点を数える。形態分類は伝統的な短冊型・撥型・分銅型の3種類としたが、分類に悩むものも多かった。完形品のみを対象とした場合、短冊型500点(うち樽型といえそうなものが28点)、撥型65点、分銅型3点となる。石材は角閃石輝石安山岩2190点、玄武岩質安山岩876点、安山岩15点、ガラス質安山岩11点、粘板岩5点、砂岩4点、硬砂岩3点、緑泥岩2点という内訳になっている。

図示したのは199～285までの87点である。199～260までが短冊型である。なかでも199～202までの4点は長さ20cmを超える大形品である。こうした大形品は他にも261など約十数点が出土している。202～212までは柄部にえぐりが認められるタイプである。236・237・242～245は樽型といえそうな形態を示す。261～284は撥型である。262は残存部で20cmを超える超大形品、打製石斧ではない可能性もあるだろうがここでは打製石斧として報告したい。283は約4.5cm程の小形品。285は分銅型である。

ク 剥片石器 (図版228～229、PL198～199)

105点が出土した。剥片を利用した不定形の石器を一括した。石材は玄武岩質安山岩75点、角閃石輝石安山岩22点、安山岩2点、粘板岩2点、ガラス質安山岩1点、たんぱく石1点、不明2点という内訳になっている。図示したのは31点(286～316)である。

ケ 磨石類 (図版230～237、PL200～202)

ここで磨石類としたのは磨石、凹石、敲石の3種である。総計654点を数える。これらは手にもつことができる大きさであり、「タタク」「ツプス」「スル」といった機能を有するものである。1つの機能のみしか有さないものは少なく、複数の機能をあわせもつものが多い。したがって、従来の伝統的な分類方法にしたがって磨石・凹石・敲石を分け、さらにその有する機能と形態とに基づいて細分類を行った。

つまり、敲石(敲打痕のみられるもの)、凹石(凹部のみられるもの)、磨石(磨り面のみられるもの)とに分類し、さらにこのうち凹石はA類(磨り面を有するもの)とB類(磨り面を有さないもの)に細分し、磨石はA類(敲打痕を有するもの)とB類(敲打痕を有さないもの)とに細分した。

形態分類は、1類(平面形が円形を呈するもの)、2類(平面形が楕円形を呈するもの)、3類(平面形は隅丸長方形を呈し、断面形が方形もしくは長方形に近いもの)、4類(球状を呈するもの)、5類(棒状を呈するもの[長径が短径のおよそ3倍以上を測るものも含む])、6類(形状が不定なもの)に分けられる。なお、2類はさらに2a類(長径が短径の2倍以下であるもの)と2b類(長径が短径の2倍程度であるもの)とに細分した。以上のような機能と形態を組み合わせた分類方法によって磨石類の分類を試みた

い。

磨石は355点が出土した。A-1類=57点、A-2a類=138点、A-2b類=20点、A-3類=27点、A-4類=19点、A-5類=11点、A-6類=44点、A-7類=5点、B-1類=1点、B-2a類=6点、B-2b類=3点、B-4類=1点、B-6類=1点、B-7類=1点となる。なお、A類以上の細分類ができなかったもの20点と同様にB類1点も数える。

凹石は137点が出土した。A-1類=8点、A-2a類=41点、A-2b類=8点、A-3類=26点、A-6類=4点、B-1類=9点、B-2a類=31点、B-2b類=3点、B-3類=3点、B-6類=3点となる。他にA類=1点がある。

敲石は162点が出土した。1類=18点、2a類=48点、2b類=7点、3類=2点、4類=8点、5類=10点、6類=61点、不明=8点となる。

このうち70点(317~386)を図示した。317~321は磨石A-1類、322は磨石B-2a類、323・325は磨石A-2a類、324・326は磨石A-3類、327は磨石A-4類、328~331は磨石A-5類、333・335・336・360は磨石A-6類、337・338は磨石B-2a類、339は磨石B-2b類、340は磨石B-4類、341は凹石A-1類、343~348は凹石A-2a類、349・350は凹石A-2b類、351~356は凹石A-3類、357・358は凹石B-1類、359は凹石B-2b類、361~366は凹石B-2a類、367・368は凹石B-3類、369~372は敲石-1類、373は敲石-2b類、374は敲石-2a類、375は敲石-3類に分類できる。

石材別では角閃石輝石安山岩484点、輝石安山岩71点、安山岩57点、砂岩21点(うち1点は赤色砂岩)、火山弾6点、輝緑凝灰岩4点、花崗岩5点、流紋岩3点、玄武岩質安山岩3点、硬砂岩3点、チャート2点、閃緑岩2点、結晶片岩2点、石英安山岩1点、輝緑岩1点、玄武岩1点となっている。

コ 石棒類(図版238~241、PL203~204)

加工を施したものを石棒A類、加工を施さないいわゆる立石はここでは石棒B類とした。総計27点を出土した。図示したのは26点である。石棒A類は14点(388・393~395・397・399~402・403・405・409・410・412)、石棒B類が12点(387・389~392・396・398・404・406・407・408・411)を図示した。397には小穴が認められ、多孔石のな性格もあわせもっている。石材には花崗岩が多く用いられている。また403は石墨片岩、409は細粒花崗岩である。

サ 石皿(図版242~247、PL205~206)

ここでは作業面である皿部を明瞭に形成し、くぼんでいるものを石皿として報告する。また石皿の裏側が多孔石としても利用されているものも多くみられるが、皿部に明瞭な凹みを有していれば、それらは石皿に含めることにする。38点が出土し、28点を図示した。

413は皿部にはやや浅めながら明瞭な凹み部を形成しているが、皿部以外は自然面のままで手を加えてはいない。そのため、外形は整っていないが完形品といえよう。完形品は本例のみであり、他はすべて欠損品である。本例のように皿部のみの形成で、全体には加工を施さないものとしては他に422もある。いずれも皿部は浅いが明瞭な形成であることも共通している。この2例以外は全体を整形しているものである。416は裏面に多数の凹み穴があり、多孔石としての機能も合わせ持っている。このように裏面に多孔石状の凹み穴をもつケースは少なくなく、424・425・429・430・438・439にも認められる。またこれとは異なるが、424・425・429・435などのように皿部に凹み穴が認められるケースもみられる。これらの凹み穴は1~2点という場合が多く、多くても数点程度である。417は両面に皿部を形成したものであり、同様な例としては他にも424・432・433がある。石材は角閃石輝石安山岩、砂岩、溶岩などが用いられて

いる。

シ 多孔石（図版248～257、264、PL207～208）

多くの凹み穴を有し、蜂の巣状を呈するものである。55点が出土し、49点（442～489・529）を図示した。形態的にはかなりバラエティーに富んでいる。楕円形または円形を呈するものが多いが、丸石（527）に凹み穴を施すものもみられる。素材となる石の形態にはあまりこだわってはいなかったのかもしれない。また473のように顕著な磨り面をも同時に有するものもある。同様な例として443・450・460・462・473なども該当する。凹み穴を施すのも一面に限るものや両面に及ぶもの、全体に及ぶものなど様々である。石材は角閃石輝石安山岩、溶岩などが用いられている。

ス 台石（図版258～261、PL208～209）

石皿と異なり、使用面が平坦なものを台石として報告する。47点が出土し、23点（490～512）を図示した。より顕著な磨面の場合にはスクリーントーンで示してあるが、台石の場合は、素材となる石をそのまま使用しており、全体に整形を施すことはほとんど行われていない。490・504・505などの使用面は明確である。とりわけ504は石皿ほど明瞭ではないが、凹み部が形成されている。491は、多孔石状の凹み穴が数点確認されている。台石は土坑、それも貯蔵穴と想定できるものから出土するケースが非常に多いのが特徴である。石材は角閃石輝石安山岩、輝石安山岩、安山岩が多く使用されている。

セ 丸石（図版262～264、PL210～211）

19点が出土した。513・514は24号住居跡の奥壁部に対になるように置かれていたものである。515は欠損品。516・518には顕著な磨り面が認められる。519は凹み穴が1ヶみられているが、全体として球形に整っているため、丸石に含めた。同様な例としては525・527もあげられる。522は欠損品だが、欠損面を下にした半球状態で出土したものであり、意図的に半球状態に置いたものと理解できる。524は124住と1297坑、T-5グリッドの3ヶ所から出土したが接合できたものである。528は顕著な磨り面が認められる。丸石の用途は不明であるが、24住での事例から想定すれば、何らかの祭祀的役割を果たしていたようである。103住のように半球状態で置かれていた事例、1394坑のように土坑に埋置されていた事例などもある。石材は、花崗岩、安山岩、角閃石輝石安山岩などが使用されている。

ソ 軽石製品（図版265～275、PL212～219）

本遺跡からは軽石に加工を施した、軽石製品が172点出土した。これは本遺跡が浅間第二軽石流上に立地しており、地山に軽石を多量に含んでいるという地形的な要因によるところが大きいだろうが、それにしてもその数量の多さには目を見張るものがある。このうち完形品は139点、欠損品が36点である。さらに出土数量の多さのみならず、本遺跡の軽石製品にはさまざまな形態のものがみられる。そこで出土した172点について今回は、8群に分類してみた。そのうち124点を図化した。以下、各分類に従って、報告していく。

A群 埋甕として用いられたもの（530）

3号住居跡及び124住居跡では中央部を掘りくぼめた軽石製品を埋甕として用いている。これらは土器の代わりに軽石製品を用いたものであり、「軽石製埋甕」として理解するべきであろう。3住の軽石製埋甕（530）は外形をきちんと整えてあり、凹みも深く丁寧に掘り込んである。また、124住の軽石製埋甕はもろく、とりあげることができなかったが、浅めの凹み部を有し、これも丁寧に作りであった。

B群 何かを模倣したとみられるもの (531~538)

この群には、何ものかを模倣したとみられるものを含めた。1類は石皿を模倣したとみられるものであり、ほぼ実物大の大きさのもの(a)とミニチュア的な大きさのもの(b)とに分けられる。aは2点、bは3点が出土している。(a)のうち531は欠損品である。明瞭な皿部が両面に認められ、いずれの面も皿部には非常に顕著な磨り面が認められている。そのため、皿部の底部は非常に薄くなっている。この底部の薄さが欠損した一因であるかもしれない。裏面には条線的な刻みもみられる。形態は石皿に類似しているが、一種の砥石的な使用も想定できるかもしれない。532の裏面には多数の凹穴がみられ、多孔石を模している。これも皿部には顕著な磨り面が認められる。本遺跡から出土する石皿には裏面に多孔石の機能もあわせもつものが多いが、軽石製品もそうした事例を模しているようである。bの533~535はいずれも脚付石皿の模倣と考えられる。出土した5点すべてを掲載している。

2類は多孔石を模倣したとみられるものであり、8点が出土している。いずれも実物とほぼ同様な大きさである。536・537・538の3点を掲載した。いずれも完形品である。

C群 中央部に凹部を有するもの (539~572)

中央部に凹部を有するものを一括した。

1類は外形が比較的整っているものを含めた。長さがおおよそ約10cm以上のものを大形品(a)とし、それ以下のものを小形品(b)とした。図化したのはaが8点、bが3点である。aのうち540・542・544はA群の軽石製埋甕とよく似た形態であり、A群同様に土器を模している可能性も高いかもしれない。bも丁寧に外形を整えてあり、aの小形版とでもいえそうな形態である。なかでも555は非常に丁寧な作りである。これに対して外形が整っていないものは2類とした。これも1類と同様な基準により大形品(a)、小形品(b)とわけた。図化したのはaが5点、bが3点である。外形ばかりでなく、凹みも粗雑なものが多い。1類の平面形が円形もしくは楕円形でおおむね構成されているのに対し、平面形もあまり手を加えていない。565はその傾向が特に著しい。凹みをつけることが重要であり、その精粗は問わなかったのかもしれない。3類としては551・552が該当する。舟形とでもいえる形態を示すが、凹部が縁辺まで及び、縁が部分的にしかみられないものである。作りは2点とも比較的丁寧である。

D群 板状を呈するもの (573~616)

板状を呈する一群である。撥形を呈するものを1類とし、(a)穿孔されているもの、(b)穿孔のないものと細別した。掲載したのはaが5点(完形品3点、欠損品2点)、bが9点(完形品2点、欠損品7点)である。他の類型に比べて欠損品が多くみられる。2類は長方形もしくは方形を呈するものであり、これも穿孔の有無によって(a)と(b)に分けた。掲載したのはaが1点、bが17点であり、圧倒的に穿孔のないものが多い。601には「ハ」の字様の線刻が認められる。またしっかりと面取りしてあるものとそうでないものにも分けられるかもしれない。2類は三角形を呈するものであり、587のみの出土である。穿孔が2カ所なされている。3類は楕円形を呈するもので穿孔のあるものはみられない。掲載したのは2点である。4類は円板形を呈するものでこれも穿孔の有無によって(a)と(b)に分けた。掲載したのはaが3点(完形品2点、欠損品1点)、bが6点(すべて完形品)である。609は欠損品であるが、穿孔が2箇所なされており、また線刻らしき形跡も認められる。613・616は穿孔を途中でやめたものと考えられよう。615は1類の撥形の欠損品を再度円形に整形したもののようにも受け取れる。

E群 円柱形を呈するもの (617~619)

円柱形を呈する一群である。これも穿孔の有無によって(a)と(b)に分けた。図化したのはaが2点、bが1点でいずれも完形品である。619は他の2点のような明瞭な面取りはなされていない。

F群 球状、卵状を呈するもの (620・621・622~637)

球状、卵状を呈するものを一括した。球状を呈しているものを1類とした。2点を図化した。2類には卵状もしくはそれに近い形を呈しているものを含めた。形態はそれほど統一がとれているわけではないが、ちょうど手にもつことができる大きさのものが大半である。凹穴の有無によって(a)と(b)にわけられる。また635～637のように非常に小形のものもみられている。図化したのは16点であり、すべてが完形品である。ただし本群は他群に比べて明瞭な加工痕跡が認められないため、自然形成物の可能性も捨てきれない。

G群 中央に孔を有するもの (638～640・643)

中央に穴を有する一群である。外形等が整ったものを1類とし、整っていないものを2類とした。2類は大形品(a)と小形品(b)にわかれる。638は外形ばかりではなく、内面に至るまで丁寧に整えられている。同じ1269号土坑からは2類にあたる639も出土している。外形ばかりではなく、穿孔も粗雑である。bは2点(640・643)を図化した。外形はほとんど手を加えていないが、穿孔は比較的丁寧になされている。

H群 その他の形態を呈するもの (641・642・644～654)

以上のA～G群までに含まれないものをここにまとめた。1類は基石状の形態であるが、中央部に比べて周辺部が薄くなっている。2点を図化した。2類はある一面を徹底的に磨き、平坦な磨り面を形成しているものを含めた。3点(644～646)を図化した。溝らしき形跡を有するものを3類とした。647～649である。4類には650～651のように、縦方向に穿孔を試みているが、貫通せず途中で終わっているものを含めた。5類には形態分類が不可能な652～654を含めた。このうち1類・3類・5類には自然形成物の可能性もある。

タ その他の石器 (図版276、PL220)

上記で報告した以外の石器をここに含める。655～657は砥石である。657は石棒としての機能も有する。658、661は性格不明の石器である。小形石棒とも晩期にみられる独犛石に近いものとも見受けられるが、よくわからない。662は性格不明石器である。663は90住から出土したヒスイの原石である。

③ 土製品 (図版277～283、PL221～224)

土偶は67点(1～67)が出土した。1・2は抽象的な表現ながら全身をあらわしているものと理解できる。3～7は頭部、このうち4・5・7・9はいわゆる河童型土偶である。8は遺構外出土の胴部および接合はできなかったものの同一個体と思われる脚部(右足・1268坑出土)である。10は胸部に顔を表現している。11～15は胸部、16～22は腕部、23～34は臀部、35～67は脚部である。26は焼町土器の文様を描く。

69は土製石匙、72・73は土鈴、68は性格不明だが土鈴の欠損品であろうか。71は三角柱状土製品、370gの重さをはかる。70も三角柱状土製品の欠損品の可能性が高い。74は土錘、75～77は耳栓、78～80は土製蓋である。81は土器片を用いているが、性格は不明である。割れ口は丁寧に研磨している。82～93はミニチュア土器である。

④ 動物遺存体 (PL225)

本遺跡からは多数の動物遺存体が検出された。その大部分は強い加熱を受けた焼骨である。29軒の住居跡と78基の土坑及び遺構外から検出されている。これらについては金子浩昌氏の鑑定を受けているため、以下その報告を掲載する。(鑑定依頼したのは23軒の住居跡と70基の土坑と遺構外出土についてである。)

長野県小諸市郷土遺跡出土の脊椎動物遺体

金子浩昌

1 試料と方法

本遺跡の縄文時代中期後葉の住居跡や土坑などの遺構からは、多くの動物遺体が検出されたが、その大部分は強い加熱を受けた、焼骨の状態であった。しかし、こうした焼骨の出土例のなかでは保存は良好な方であって、頭骨の種々の部位、四肢骨を確認することができたので、当時の狩猟の実態を知る上で貴重な資料といってよいであろう。

各試料の詳細は、同定結果とともに遺構別に表1にまとめた。遺構別にまとまって出土した標本が多かったので、この方法でも傾向を把握できるのではないかと考えたからである。観察は肉眼及びルーペにて行い、形質的な特徴に基づき種類・部位などを同定した。

2 検出した動物遺体の種名表

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

鳥綱 Class Aves

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

キジ Phasianus colchicus

哺乳綱 Class Mammalia

霊長目 Order Primates

ヒト科 Family Hominidae

ヒト Homo sapiens

ウサギ目 Order Lagomorpha

ウサギ科 Family Leporidae

ノウサギ Lepus brachyurus

偶蹄目 Order Artiodactyla

イノシシ科 Family Suidae

イノシシ Sus scrofa

シカ科 Family Cervidae

ニホンジカ Cervus nippon

3 同定結果

同定を行った試料標本の中で、顎骨、四肢骨などが検出されている例を以下にまとめておく。おそらくこれらの骨は、意図的に遺構内に搬入されたと考えられるからである。

a. 鳥類

83号住、89号住、O-23グリッドなどで、椎骨、四肢骨などがわずかに出土している。

b. ヒト

1335号土坑の下顎骨片1点のみである。この下顎骨は、萌出直前の切歯をもつ。7才位である。

c. ノウサギ

101号住で、脛骨片1点を得ているのみである。

d. イノシシ

101号住：イノシシの下顎骨を主体に出土。骨体部分は破損して個体を区別できないが、下顎骨部分から7個体はあったことが推定される。

123号住内ピット：橈骨、中手骨のみ。

1276号土坑：尺骨1点。

1200号土坑：上顎骨、肩甲骨、尺骨各1点。

1207号土坑：口蓋骨左右。

1212号土坑：側頭骨、鼻骨、寛骨臼部を残す。

1217号土坑：下顎骨が残される。

1247号土坑下層：上顎骨が残される。

1248号土坑：肩甲骨と基節骨があり、いずれも若獣。

1253号土坑：口蓋骨、切歯骨があり、肩甲骨。

1269号土坑：被熱されない上顎骨左右があり、顎骨が焼かれる前の状況を暗示させるような試料である。

なお、この他に焼けた脛骨、中心足根骨がある。

1272号土坑：左右上顎骨と頭蓋底部があり、頭蓋の意図的な埋納を推測させる。

1278号土坑：多くの獣骨が検出された土坑である。

成獣3個体分の左右上顎骨と若獣の左右上顎骨1個体分があり、さらに幼獣の左右側頭骨（うち右側2）がある。若獣の頬骨、幼獣の下顎骨の一部もあって、もとはこうした個体の頭蓋が焼かれ、ここに運ばれたのであろう。四肢骨は僅かに尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨が1～2点あったのみである。頭骨を主に納めようとした意図があったことが窺える。

1279号土坑：眼窩後突起部、下顎骨、脛骨各1点である。

1292号土坑：側頭骨、上顎骨、頬骨突起と下顎骨、それに尺骨、寛骨があった。

1321号土坑：前頭骨、頬骨、下顎骨各1点、四肢骨は上腕骨、寛骨、脛骨があった。

1329号土坑：椎骨1点、頭蓋底部、側頭骨、後頭顆、下顎骨があり、橈骨、大腿骨があった。

1335号土坑：この土坑も獣骨の出土が多かった。

軸椎骨1点、頭蓋の後稜、側頭骨、前頭骨、頬骨、涙骨があり、幼、若、成獣がみられた。上顎骨には右側4点があり、この程度の頭蓋があったのであろう。下顎骨は左右2点程で、やや少なかったようである。四肢骨は肩甲骨（幼体左2点）、上腕骨、寛骨（成獣右2点、左1点）、脛骨があった。

784号土坑：後頭骨、上顎骨、大腿骨、脛骨各1点。

837号土坑：切歯骨、下顎骨各1点。

1045号土坑：前頭骨2点のほか、側頭骨、上顎骨があり、四肢骨には寛骨、大腿骨、腓骨、基節骨各1点があった。

T-15グリッド：上顎骨

O-23グリッド（1339号土坑周辺）：前頭骨、上顎骨、下顎骨と上腕骨。

O-23グリッド：この地区に、もまとまった獣骨があったようである。同グリッド名のついた試料を一括してみると、かなりの量になる。

椎骨は頸椎、腰椎骨各1点、後頭骨左右各1点、側頭骨右2点、左1点、上顎骨左2点、右1点、頬骨左2点、右1点、鼻骨があり、下顎骨は1点である。おそらく、もとは頭骨2個があったのであろう。四肢骨は肩甲骨1点、上腕骨右4点、左4点と多く、橈骨、尺骨各1点、寛骨、脛骨3点があった。

1339号土坑：2個の土器中に、それぞれ上顎骨、下顎骨（幼獣、成獣）があり、尺骨の入れられていたのもあった。

e. ニホンジカ

ニホンジカの遺体は、イノシシに比べてきわめて少なかった。表にみるように確認された標本自体少なく、同定された骨格の部位も、頭骨で後頭骨、前頭骨などが数点、鹿角、そして四肢骨で橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨、中手もしくは中足骨などがあったのみである。土壌内での在り方では、1335号土坑において鹿角、下顎骨片、橈骨、脛骨左右などを検出したのが、唯一イノシシにみたのと共通する例であった。

4 考察

焼骨の出土は101号住、1269号土坑、1321号土坑、1329号土坑、1045号土坑でやや多く、特に多かったのが1278号土坑、1335号土坑、0—23グリットで、特定の骨を搬入したことが推測される。

人骨については、多くの獣骨に混在してわずかに1点を確認したのみであり、それ以外には確認できなかった。獣類の遺体を焼いた場所で人の遺体も焼くことが行われたことは事実であろうが、その実態については不明である。本遺跡の調査では、焼人骨を主体的に検出した事実は知られていないが、縄文期の焼人骨の出土例は既に知られ、そこに獣骨が共伴することも報告されている。人と他の生物との一体化の観念のより強い時代であれば、同じ扱いがあったことも当然考えられよう。

その他の動物遺体では、鳥骨が若干あった他はすべて獣骨で、量的にはかなり多いものであった。獣骨ではイノシシが圧倒的に多く、シカは僅かな数であった。おそらく実際の狩猟面における、捕獲の傾向を示すものと推定される。なおキジ、ノウサギのような鳥、中型獣の骨格は、破損して不明とした試料中に含まれていものもあるかと思われる。

遺構内のイノシシの遺体は、頭骨と四肢骨を組み合わせたような状態で搬入されたと考えられる。多数の遺体が出土した1278号土坑などで得られたイノシシの部位をみると、頭骨では後頭骨、頭頂骨、側頭骨、頬骨、上顎骨、下顎骨などが左右ともにみることができ、それも複数個体が想定されるものであった。四肢骨では肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、脛骨に限られ、手足根骨、中手もしくは中足骨、指骨などはごく少なかった。また肩甲骨以下の主要骨格もすべて揃うことはなく、一部であった。おそらく頭骨は意図的に焼かれ、運ばれようとしているが、四肢骨は一部が焼かれたのであろう。焼くという行為としては、頭部が意図的に行われ、四肢骨は付属的であったといえよう。しかし、少なかったとはいえ四肢骨が含まれていたのは、それなりの意味があったのであろう。

イノシシについては個体の雌雄別、1才未満の幼獣、若、成獣の区別が可能であり、判明できる範囲でその区別を表中に記しておいた。今回の結果をみると、幼体、成獣の区別無く同じように扱われていることが推測される。もう少し標本が多ければ、何らかの傾向を捉えることもできたかも知れない。

ニホンジカの遺骸の少ないことは既に述べたが、イノシシが主体的に出土する例を更埴市円光房遺跡で調査したことがある。縄文時代前期諸磯b期土壌内の多数の焼獣骨、縄文時代中期末の住居内炉址、床直上、その他の地点からの多くの焼獣骨では、いずれもイノシシの方が骨格の部位を多く出土し、シカは少なかったのである。イノシシとシカの骨格の量的な比率は、郷土遺跡の場合の方がやや顕著であるが、基本的にはほぼ同じではなかったかと思われる。またこの時期に併行する東筑摩郡明科町北村遺跡の獣骨でも、イノシシの多いことが報告されている。円光房、郷土遺跡のような焼骨の場合にはまた別の選択がおこなわれた可能性があり、量的な差異が大きくなったのであろう。

こうした前・中期の様相に対して、縄文時代後期加曾利B2期の小諸市石神遺跡の調査結果によると、ここではイノシシよりもシカの方が多かった。石神遺跡でのイノシシとシカの踵骨の検出比率は1：5になる（金子1994）。石神遺跡の獣骨は住居址内及び包含層中の出土であるが、保存の良い遣り方で、焼骨ではない。このうち住居址内から検出された試料は、狩猟時の結果を直接現すと考えられる。石神遺跡の獣骨にみたシカの増加は、縄文時代後期における特徴として関東地方の貝塚においてもみられることは早くから指摘されている（金子・田中・鈴木1973、金子1977）。それはシカの増加ということだけでなく、全般的に狩猟活動の活発化がうかがえるのである。そして焼獣骨、人の焼骨例も次第に増える傾向をみるのである。

<引用文献>

- 金子浩昌・田中新史・鈴木洋子（1973）貝の花貝塚出土の脊椎動物遺存体、「貝の花貝塚」、松戸市教育委員会・
- 金子浩昌（1977）脊椎動物遺体の出土状況にみる時期的変化、「西広貝塚—上総国分寺遺跡調査報告Ⅲ」、早稲田大学出版部。
- 金子浩昌（1990）円光房遺跡における焼獣骨の調査、「円光房遺跡—長野県埴科郡戸倉町更級地区県営ほ場整備事業に伴う福田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調査報告—」、戸倉町教育委員会。
- 金子浩昌（1994）縄文後期の住居址から検出された貝片、骨角器、獣骨片の分類、同定、「石神—長野県小諸市石神遺跡発掘調査報告書—」、小諸市教育委員会。
- 桜井秀雄・茂原信生（1993）哺乳動物遺存体、「北村遺跡」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書—明科町内—11、長野県教育委員会。

編集者註

本稿は（株）パリノサーヴェイを介して、平成6年度に早稲田大学の金子浩昌氏に鑑定を依頼した結果報告である。金子氏より賜った玉稿をそのまま掲載したが、整理作業段階で遺構番号が変更したものについては、編集者の桜井の責において番号をつけかえてある。また、鑑定は現場にて採取したものを取り上げ用の容器ごとに依頼したため、同一遺構についても数項目にわたっているものもある。

また83住出土動物骨については京都大学茂原信生先生に鑑定を依頼した。これについては第6節で古墳出土人骨とともに鑑定結果を掲載してある。なお、鑑定依頼ののちの整理作業においてみつかった骨（動物骨が主体と思われる）もみられる。これらについては以下に記すが鑑定作業は行っていない。

[未鑑定（動物）骨]

39住（2.13g）、70住炉（3.4g）、91住（2.02g）、110住（11.39g イノシシの歯であろうか？）、132住（8.6g）、1121坑（1.88g）、1125坑（135.2g シカの角であることは間違いのないため鑑定依頼はしなかった。）、1153坑（9.4g）、1220坑（8.4g）1251坑（11.3g）、1260坑（3.54g）、1294坑（2.2g）、1390坑（47.0g）、出土地不明（35.2g）

表1 骨同定結果

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他
69住炉内	—	—	獣骨片 (イノシシ/シカ)	—
81住	—	—	獣骨片	—
83住	—	—	獣骨片	キジ頸椎骨：1
89住炉内	—	—	獣骨片	鳥骨：1
90住炉内	—	中手/中足骨 遠位部：1	獣骨片	—
94住炉内	—	—	獣骨片	—
97住	—	—	獣骨片	—
98住	—	—	獣骨片 (小片)	—
99住	肋骨：1	角片：1	イノシシ	—
101住	下顎骨 R：7	角片：1	—	ノウサギ脛骨 L 遠位・骨端部(1)
	下顎骨 L：7	—		—
	下顎骨舌側 RP ₁₋₃ ：3	—		—
	下顎骨舌側 LcP ₄ ・M ₁ ・M ₂ ：2 (♂)	—		—
	下顎骨 LM ₃ 外側：1	—		—
	下顎骨未出歯：1	—		—
	切歯骨 I ¹⁻³ ：1	—		—
	後頭顆 L：1	—		—
肋骨片：1	—	—	—	
102住	—	橈骨 R と L 遠位部：各1	—	—
104住	—	—	獣骨片	—
106住	—	—	獣骨片	—
106住炉内	肋骨：1 (幼獣?)	—	—	鳥骨?：2
107住	—	角片：1	—	—
		尺骨 R 近位部：1		
110住炉内	中間手根骨 L：1	—	—	—
111住炉内	下顎骨：1	—	獣骨片	—
	肩甲骨：1		—	
118住炉内	大腿骨 R/L? 遠位部：1	—	—	—
121住	—	—	獣骨片	—
123住炉内	—	—	獣骨片	鳥骨片：1
123住	—	—	獣骨片	鳥骨片：1
123住ピット	橈骨 R 近位部：各2	—	—	—
	中手骨 R III 近位部：各1			
	中手骨 L III/VI 近位・骨端部：1			
124住	—	—	獣骨片 (肋骨1点含む)	—
126住	頸椎骨：1	肋骨：1	シカ	—
	—	中手根骨 R：1	—	
	—	中節骨遠位部：1	—	
	—	角片 (多数)	—	
130住	基節骨 III/VI 遠位部：1	—	獣骨片	—
1120坑	—	—	獣骨片	—

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他	
1121坑	—	角片：1	—	獣骨片	—
1124坑	—	—	—	獣骨片	—
1125坑	—	—	—	獣骨片	—
1126坑	—	角（枝の先）：1	—	獣骨片	—
1127坑	足根骨RNo. 4：1	—	—	—	—
1133坑	—	—	—	獣骨片	—
1140坑	中節骨：1	—	—	獣骨片	—
1153坑	—	—	—	獣骨片	—
1155坑	—	—	—	獣骨片	—
1172坑	—	—	—	獣骨片	—
1176坑	尺骨R近位部：1	—	—	獣骨片	—
1185坑	—	—	—	獣骨片	—
1190坑	下顎骨RP ₂ ・P ₃ ：1（若獣・♂）	—	—	獣骨片	—
1193坑	頬骨？：1	—	—	—	—
1200坑	上顎骨R：1	—	—	—	—
	肩甲骨R：1				
	尺骨L：1（若獣）				
1207坑	口蓋骨RI ¹⁻³ ：1	—	—	イノシシ（口蓋骨片）	—
	口蓋骨LM ²⁻³ ：1			—	
1208坑	肋骨：1	—	—	獣骨片	—
	脛骨L近位・骨端部：1			—	
1212坑	側頭骨R：1	—	—	—	—
	鼻骨L：1				
	寛骨臼部R：1				
	恥骨R：1（寛骨臼部と同個体と思われる）				
1214坑	涙骨片L：1	—	—	獣骨片	—
1217坑	下顎骨LcP ₂ ・P ₃ ・P ₄ ：1（歯根一部残存）	—	—	獣骨片	—
1218坑	中手骨II/V近位部：1	—	—	獣骨片	—
1235坑	—	—	—	獣骨片	—
1241坑	—	—	—	獣骨片	—
1244坑	—	—	—	獣骨片	—
1247坑	—	—	—	獣骨片	—
1247坑下層	上顎骨RCP ¹ ・P ² ：1（♂）	—	—	獣骨片	—
1248坑	肩甲骨R近位部：1（若獣）	—	—	獣骨片	—
	基節骨II/V遠位部：1（若獣）				
1253坑	口蓋骨：1	—	—	獣骨片	—
	切歯骨RI ¹ ・I ² ：1				
	肩甲骨片：1（若獣）				
1254坑	—	—	—	獣骨片	—
遺構外	—	—	—	獣骨片	—
1267坑	—	—	—	獣骨片	—
1269坑	鋤骨(1)	—	—	イノシシ（頭蓋骨片）	—

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他
1269坑	上顎骨RとL: $1 < \frac{LcP^3 \sim M^3}{R P^2 \sim M^2}$ (被熱なし)	—	—	—
	切歯骨M ³ : 1 (磨滅痕なし)		—	
	頬骨L: 1 (若獣)		—	
	脛骨L近位部: 1 (幼獣)		—	
	中心足根骨L: 1		—	
1272坑	頭骨底部片: 1	—	—	—
	上顎骨LP ⁴ ~M ³ : 1			
	上顎骨RP ⁴ ・M ¹ : 1			
1272坑	頸静脈突起片: 1	—	—	—
1278坑	後頭顆R: 1	鼻骨R: 1 (幼獣)	—	—
	頭頂骨+前頭骨R: 2 (幼獣)	橈骨R: 1		
	側頭骨RとL: 各1 (幼獣・♀)	中手骨R: 1		
	側頭骨R: 1 (幼獣)	寛骨L: 1		
	前頭骨R: 1	—		
	鼻骨+前頭骨R: 各1			
	鼻骨R: 1 (幼獣)			
	涙骨R: 1 (幼獣)			
	上顎骨R: 2 (歯槽残す)			
	上顎骨LM ²⁻³ (1)			
	上顎骨Lc歯槽部: 1 (♀)			
	上顎骨RとL: 各1 (若獣)			
	上顎骨P ¹⁻⁴ : 1 (♀)			
	切歯骨RI ³ : 1			
	切歯骨R: 1			
	口蓋骨R: 1			
	頬骨L: 1 (若獣)			
	頬骨: 3 (内R1点は若獣)			
	下顎骨R: 2 (幼獣枝部)			
	下顎骨連合部: 1 (幼獣・♂)			
	尺骨L: 1			
	寛骨R: 2			
	大腿骨L: 1 (外・内側顆)			
脛骨L近位・骨端部: 2				
中心足根骨R: 1				
1279坑	眼窩後突起R: 1	—	獣骨片	—
	下顎骨LcP ₂ ・P ₃ : 1 (♀)		—	
	脛骨R遠位部: 1		—	
1280坑	—	—	獣骨片	—
1290坑	四肢骨片: 3	—	—	—
1291坑	—	—	獣骨片	—
1292坑	側頭骨R: 1	尺骨L: 1	—	—
	上顎骨P ³⁻⁴ ・M ¹⁻² : 1	寛骨臼部R: 1		

第4節 縄文時代中期中葉から後期前葉の遺構と遺物

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他
1292坑	頬骨突起 R : 1	大腿骨 R 近位部 : 1	—	—
	下顎骨 RP ²⁻⁴ : 1	—		
	尺骨 R : 1			
	寛骨 R : 1			
1296坑	—	—	獣骨片	—
1303坑	—	—	獣骨片	—
1308坑	—	—	獣骨片	—
1321坑	前頭骨 R : 1	—	獣骨片	—
	下顎骨 R : 1		—	
	頬骨 R : 1		—	
	上腕骨 R 遠位部 : 1		—	
	寛骨 L : 1 (幼獣)		—	
	脛骨 L 近位・骨端部 : 1		—	
	脛骨 L 遠位・骨端部 : 1		—	
	中節骨 : 1		—	
1329坑	椎骨 : 2	—	—	—
	頭蓋骨底部 : 1			
	側頭骨 L : 1			
	後頭頰骨 L : 1			
	下顎骨片 : 1			
	橈骨 R : 1			
	大腿骨遠位部 : 1			
1330坑	肋骨 : 1	—	獣骨片	—
1335坑	軸椎骨 : 1	鹿角枝部 : 1	—	—
	後稜骨 : L 1 (若獣)	下顎骨 R 近心部 : 1		
	後稜骨 L : 1 (幼獣)	橈骨 L 遠位・骨端部 : 1		
1335坑	側頭骨 : 1 (幼獣)	脛骨 L 骨体部・遠位端 : 各 1	—	—
	前頭骨 R : 1 (若獣)	脛骨 R : 1		
	前頭骨 R : 1	—		
	鼻骨 L : 1			
	涙骨 R : 2			
	上顎骨 Rdw ²⁻³⁻⁴ : 1			
	上顎骨 RM ¹⁻²⁻³ : 1			
	上顎骨 RP ⁴ ・M ¹ : 1			
	上顎骨 RM ⁸ : 1			
	上顎骨 LM ¹⁻² : 1			
	上顎骨歯槽 : 1 (♂)			
	切歯骨 L : 1			
	頬骨 L : 1			
	下顎骨 RM ₁₋₃ : 1			
	下顎骨近位部 R と L : 1			
	下顎骨 R と L 各 : 1			
	肩甲骨 L : 2 () 幼獣			
	上腕骨 R 遠位部 : 各 1			

第7章 郷土遺跡

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他
1335坑	寛骨 R : 2			
	寛骨 L : 1			
	脛骨 R 遠位部 : 1			
1336坑	頬骨片 : 1	—	獣骨片	—
1339坑	腰椎骨片 : 1	—	獣骨片	—
1341坑	—	—	獣骨片	—
1343坑	—	—	獣骨片	—
1345坑	—	基部骨近位部 : 1	—	—
1362坑	—	角片 : 1	—	—
1363坑	—	中手骨 : 1	—	—
1365坑	中節骨 : 1	—	獣骨片	—
1366坑	大腿骨 L 遠位部 : 1	—	—	—
1366坑	手根骨 R/L II4III : 1	—	—	—
1372坑	—	—	獣骨片	—
1382坑	—	—	獣骨片	—
1404坑	〈イノシシ/シカ〉 頭蓋骨片 :		—	—
遺構外	—	前頭骨片 : 1	—	—
504坑	—	上腕骨 R 近位・骨端部 : 1 (幼獣)	獣骨片	—
504坑	大腿骨 R : 1	—	—	—
556坑	—	—	獣骨片	—
564坑	—	—	獣骨片	—
644坑	〈イノシシ/シカ〉 後頭頤 : 1・肋骨 : 1		—	鳥骨片 : 1
765坑	上腕骨片 ? : 1	—	—	—
784坑	後頭骨 : 1	乳突起骨 : 1	獣骨片	—
	上顎骨 RM ^{3,4} ~M ¹ : 1 (若獣)	—	—	
	大腿骨 L 遠位部 : 1	—	—	
	脛骨 R 近位・骨端部 : 1	—	—	
4号屋外埋竊掘方	—	—	獣骨片	—
837坑	切歯骨 R I ^{1,2} : 1	末節骨 : 1	獣骨片 (肋骨 1点含む)	—
	下顎骨片 : 1	中足骨近位部 : 1	—	
905坑	—	—	獣骨片	—
1045坑	前頭骨 : 2	—	—	—
	側頭骨 L : 1			
	上顎骨 LM ²⁻³ : 1			
	上顎骨片 : 3			
	寛骨 L : 2			
	大腿骨後面遠位部 : 1			
	基節骨近位部 : 1			
	腓骨 R 遠位部 : 1			
	四肢骨片 : 4			
1072坑	尺骨 R 遠位・骨端部 : 1	—	獣骨片	—

第4節 縄文時代中期中葉から後期前葉の遺構と遺物

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他
Nグリット	—	—	獣骨片(被熱なし)	—
Pグリット	—	—	獣骨片: 頸椎骨 (被熱なし)	—
Tグリット	—	脛骨R近位・骨端部: 1	—	—
T-15グリット	上顎骨R/LC・P ²⁻⁴ M ^{1,2} : 1 (♀)	—	—	—
0-23グリッド (1339坑脇)	前頭骨R: 1 上顎骨Ldw ⁴ ・M ¹⁻² : 1	—	獣骨片(頭骨・肩 甲骨・椎体骨含 む)	—
0-23グリッド (1339坑脇)	下顎骨片M ² /M ³ : 1 上腕骨R遠位・骨端部: 1	—	—	—
0-23グリッド (1339坑脇)	橈骨L: 1	—	—	—
0-23グリッド	胸椎骨片: 1 上顎骨LM ¹⁻² : 1 上顎骨Rdw ⁴ : 1 大腿骨近位・骨端部: 1	—	—	—
0-23グリッド (1339坑周辺)	頸椎骨: 1 腰椎骨: 1 側頭骨RとL: 各1 側頭骨R: 1 上顎骨LP ⁴ ・M ¹ : 1 上顎骨L: 1 頸静脈突起L: 1 上腕骨R: 2 (幼獣) 上腕骨L: 1 上腕骨L遠位部: 2 上腕骨L遠位・骨端部: 1 橈骨L遠位部: 1 尺骨L遠位部: 1	—	—	—
0-23グリッド (1339坑周辺)	頬骨RとL: 各1 頸椎骨: 1 肩甲骨R: 1 上腕骨L遠位・骨端部: 1 脛骨R近位部: 2 (他に破片)	—	—	キジ尺骨遠位・骨 端部(1) — — — —
0-23グリッド 土器集中1	頸椎骨: 1 後頭骨: RとL: 各1	—	—	—
0-23グリッド 土器集中1	鼻骨: 1 上顎骨RM ²⁻³ : 1 切歯骨RI ¹⁻² : 1 頬骨L: 1 下顎骨LM ³ : 1	—	—	—

種類別 出土遺構	イノシシ	ニホンジカ	獣骨片 (イノシシ/シカ)	その他
0-23グリッド 土器集中1	下顎骨L近心部：1 (同一個体?)	—	—	—
	後間接突起骨：1			
	上腕骨R遠位部：1			
	上腕骨R遠位部：1			
	上腕骨L遠位部：2			
	寛骨臼歯L：1			
	寛骨：1			
	脛骨R近心・骨端部：1			
0-23グリッド	上顎骨LM ² ・M ³ ：1	—	—	—
1339坑 (土器915内)	上顎骨LC・P ¹⁻³ ：1 (♀)	後頭顆L：1	—	—
	上顎骨R：1 (幼獣)	大腿骨R骨端部：1		
	切歯骨RP ¹ ：1	—		
1339坑 (土器914内)	上顎骨Ldw ³⁻⁴ ・M ¹ ：1	後頭骨L：1	獣骨片 (肩甲骨・尺骨含む)	—
	下顎骨LC・P ² ：1 (♂)	脛骨R遠位部：1	—	
	尺骨R遠位部：1 (骨端部外れ)	—	—	
不明住居炉	—	—	獣骨片	—

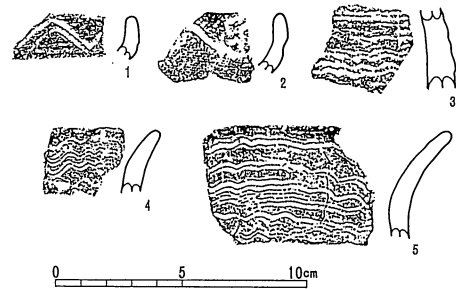
* 上顎骨・下顎骨の歯は歯槽が残存するのみ

* 「被熱なし」としたものの以外は、全て被熱の痕跡が認められる

第5節 弥生時代から古墳時代前期の遺物

本遺跡からはいずれも遺構外出土ではあるが、当該期の土器片5点が出土している。第107図の1と2は弥生時代中期に、3・4・5は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期に比定することができるだろう。

従来、佐久地方の弥生時代の稲作の限界ラインといわれたのは標高約720mであった。したがって浅間火山南麓は弥生時代の遺構・遺物はほとんど検出されることのない地域であったが、標高810mを超える御代田町の細田遺跡及び下荒田遺跡で、弥生時代終末期の住居跡が計15軒発見され、通説は大きく変わることとなった（御代田町教育委員会1993・1995）。今回、標高約830m程度をはかる本遺跡からも当該期の土器が出土したことは今後の研究の一資料となりうるだろう。また古墳時代初頭期の遺構も、従来はほとんど認められていなかったが、近年、本書で報告する石神遺跡群、御代田町塚田遺跡、軽井沢町県遺跡などで住居跡が発見され、浅間火山南麓でも小規模な集落が点々と営まれていることが判明してきている。本遺跡からは遺構は検出されなかったが、当該期の足跡は認められるのである。



第107図 弥生時代～古墳時代前期の土器

第6節 郷土古墳群2号墳

1 郷土古墳群について

本遺跡において古墳1基が検出された。

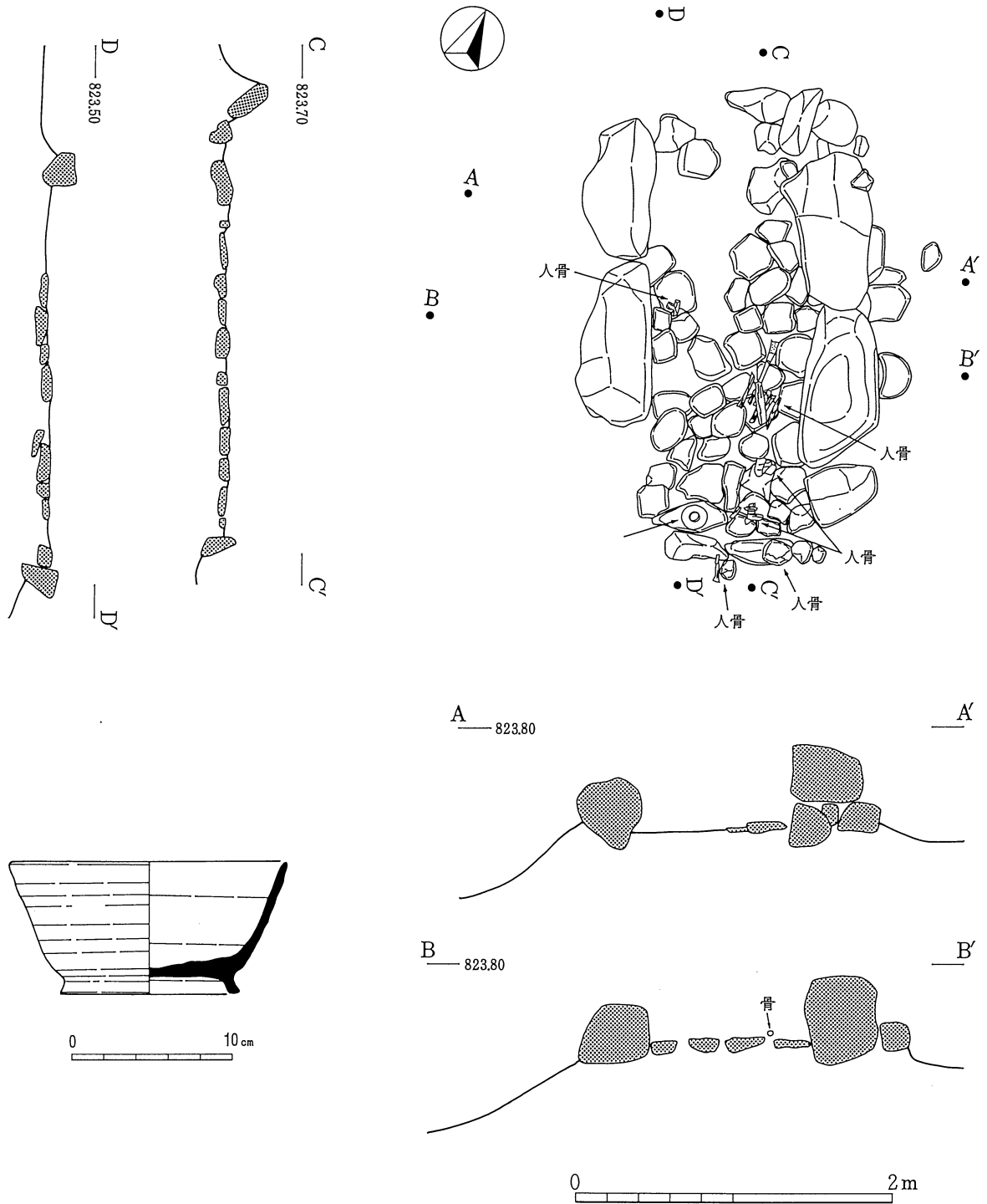
『小諸市誌考古篇』によると、郷土古墳群は5基が存在していたという。同書に収録されている小諸市古墳調査票には、3号墳については「小諸某氏倉庫建築の石垣石として崩したという」、4号墳についても「小諸某氏建築材として破壊して持ち去り」という記載がなされており、調査票が作成された昭和45年にはすでに破壊されていたことが理解できる。また同調査票によれば5号墳も石垣用として取り崩されたようだが、その際に直刀が出土したということである。また、昭和62年に刊行された小諸市遺跡詳細分布調査報告書では1号墳と2号墳の存在が認められている。

したがって今回の発掘調査で発見された古墳がこうした郷土古墳群のうちの1基であろうとの認識は調査段階からしていたが、何号墳に比定されるかは整理作業での検討課題となった。そして平成8年度に小諸市教育委員会とともに行った比定作業の結果、2号墳に比定できるとの結論を得るに至った。

なお、郷土古墳群の周辺には北霞古墳群、松井古墳、堰下古墳群なども認められている。

2 郷土古墳群2号墳の概要（第108図、PL124・226）

O-11グリッドにおいて検出された。この付近には大小様々な礫が集められており、周辺に比べてやや盛り上がっていたが、当初は耕作時に集められた礫の集積ではないかと想定していた。しかしながら本遺跡を含む郷土地籍には郷土古墳群の存在が認められていることと、地主草間重男氏から今回の調査地域にはかつて古墳が存在していたとの話を伺ったことから、古墳の可能性も考慮しながら調査にはいった。耕作土及び明らかに最近の投棄とわかる礫を取り除いていったところ、巨大な礫が姿を現してきた。これは



第108図 郷土2号墳 1:40、出土遺物 1:4

原位置はとどめてはいなかったものの天井石と判断できそうなものであった。この天井石とおぼしき礫を取り除くと、側壁の根石らしき礫が残存しているのが判明、さらに石が敷きつめられた床面も検出されはじめ、ここにおいて古墳である確信をもつに至った。なお、本古墳は99号住・102号住・103号住・104A号住・104B号住の上に構築されている。

破壊の度合いが著しく、残存状況は良好ではない。墳丘はまったく残っておらず、また周溝も認められなかった。したがって形態・規模は不明である。確認できたのは玄室の側壁と礫床のみであった。

玄室は内矩で幅96cm、残存している奥壁部までの長さ約280cmをはかる。側壁は約40～50×約100×約40～60cm程度の大きさの根石が残存しているにとどまる。右側壁では根石は2段に積み重ねられ、約60cm程の高さにまで積みあげていることが確認できる。

礫床は安山岩質であり、径約20～30cm程度の大きさに扁平なものを敷きつめている。床面の敷石上には人骨が検出されている。これらの人骨は元位置をとどめてはいないと考えられるが、大きく4か所からまとまって検出されている。

遺物としては人骨と土器が認められる。このうち人骨については次項で茂原信生先生による鑑定結果を掲載してあるので詳しくはそれを参照していただきたいが、少なくとも3体の人骨が確認できるということである。

土器は、礫床直上から出土した須恵器の台付坏1点のみである。これは口縁部を下にして伏せた状態で出土している。8世紀代に比定できるものである。この土器をもって本古墳の時期決定資料としたいが、人骨が3体であるため、7世紀代にさかのぼる可能性もあるだろう。

3 郷土遺跡出土の人骨(古墳時代)と脊椎動物遺存体(縄文時代)

京都大学霊長類研究所

茂原信生

I) はじめに

郷土遺跡は長野県小諸市大字甲字中郷土にある遺跡で、上信越自動車道の建設に伴い長野県埋蔵文化財センターによって平成4～7年に発掘調査された。本報告書はその際出土した人骨と脊椎動物骨に関するものである。人骨はおもに郷土古墳2号墳から出土したもので、8世紀代のものと考えられている。一方、脊椎動物骨は縄文時代中期とされている83号竪穴住居跡から出土していたものである。

人骨の計測はマルチン法(馬場;1991)に従い、歯の計測は藤田(1949)にしたがった。歯の計測値で比較に使用したのは権田(1959)の現代日本人のものである。

先に人骨について記載し、後に脊椎動物骨について記載する。

II) 出土人骨の特徴

A) 2号古墳(8世紀代)出土の人骨

この古墳は煙滅古墳で、石室の残りはよくなかったが、人骨の保存状態は比較的よい。石室の半分程度に散乱しており、後述のように複数個体が埋葬されていたと考えられるが、時代的な差などに関しては不明である。それぞれの個体の識別が難しいので、出土位置にしたがって記載する。

1) 郷土①—1

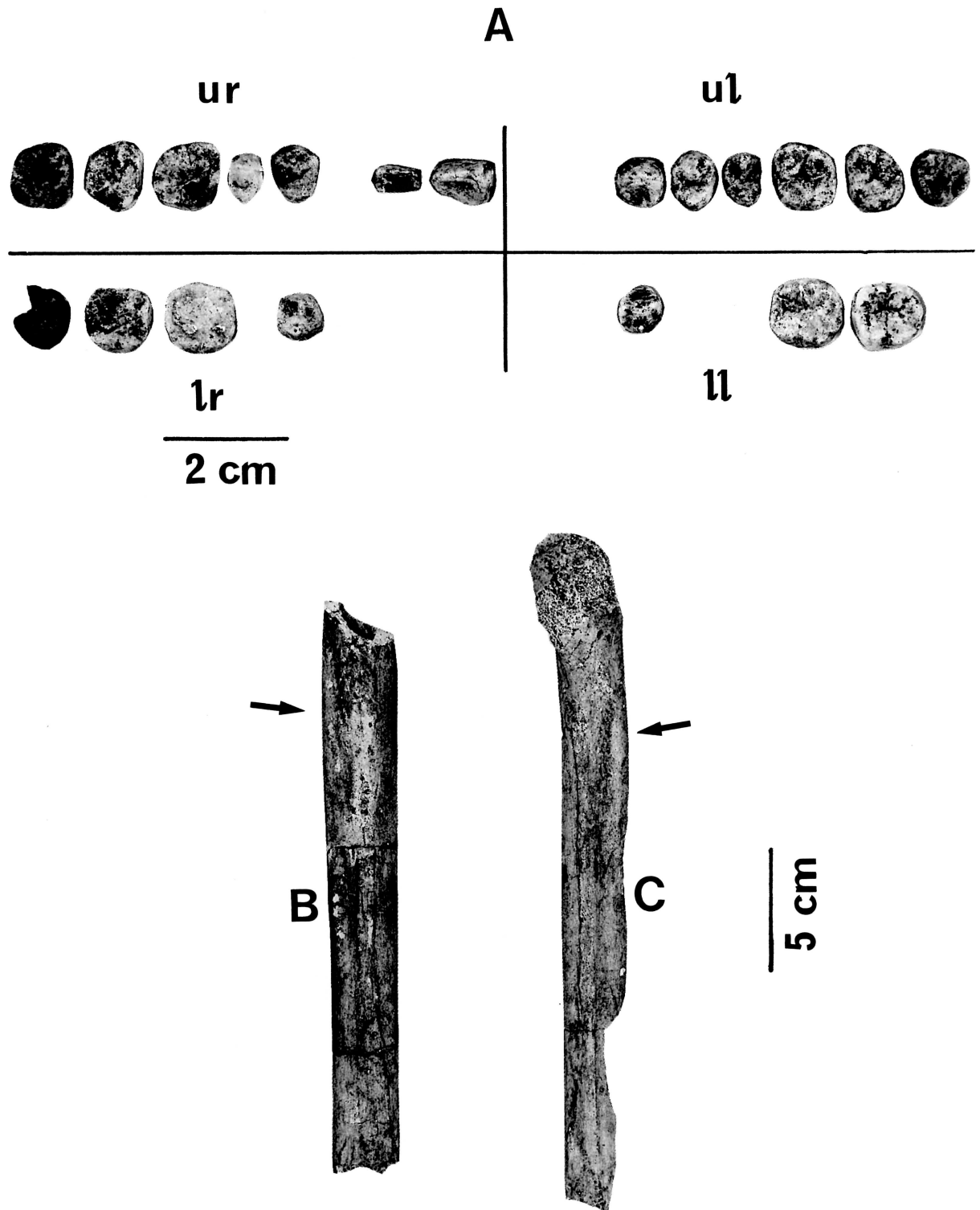


写真1 郷土遺跡から出土した人骨と歯

頭蓋骨のうち、前頭骨から頭頂骨にかけての頭蓋冠と右側頭骨錐体部が残っている。前頭骨の眉上隆起はよく発達していて、前額部も傾斜していて男性的である。耳道上稜はわずかに発達している。乳様突起は基部だけが残っているが内外的にやや厚めである。外後頭隆起はプロカのIII型程度である。縫合は癒合しておらず冠状縫合、矢状縫合などは鋸歯状が明瞭であるのでさほど高齢ではなからう。

この頭蓋骨は男性のものと考えられる。成人であろうが詳細は不明である。

2) 郷土①—2

頭蓋冠の一部が破片となって10点ほど、ならびに右側頭骨錐体部が残っている。頭蓋冠の骨は厚い。耳道上稜はよく発達している。乳様突起は基部だけが残っているが内外的にやや厚めである。一部しかないので断定は出来ないが男性的な頭蓋骨である。このまともは、先の①—1と側頭骨が重複しているので別個体であろう。

この頭蓋骨は男性の可能性が高い。年齢は不明である。

3) 郷土①—3

頭蓋骨の細片とわずかな四肢骨片だけである。この中には左・右の側頭骨錐体片が見られるので先の両個体とは別個体である。年齢・性別は不明である。

4) 郷土①—4

わずかな頭蓋骨片と歯が残っている。歯は、歯根が失われているものが多く、ほとんどは歯冠エナメル質だけである。上顎では、左の犬歯から遠心のすべての歯、右は中切歯、側切歯と第1小白歯から遠心のすべての歯が残っており合計13本、下顎では右は第1小白歯と3本の大白歯、左は犬歯と第1・第2大白歯の合計7本、したがって全体で20本が残っており、それ以外に小さな破片がある(写真1-1)。

上顎中切歯は軽度のシャベル型である。咬耗は少なく、象牙質の露出しているものは上・下顎の第1大白歯で、犬歯には小さな象牙質が見られる。第3大白歯は上・下顎ともに咬耗はなく萌出中かあるいは未萌出と思われる。したがって20歳には達しておらず18歳前後ではないかと考えられる。下顎大白歯の咬頭と溝の型は、第1大白歯がY5型、第2大白歯が+5型である。

歯の大きさは、現代日本人の男性と女性の歯の大きさ(権田:1959)や岡山県の古墳時代人と比べても大差ない大きさで、男性、女性のどちらとも言えない。

E) 郷土①—5

左の上腕骨遠位半、左・右の大腿骨骨幹、左・右の脛骨骨幹などが残っている。上腕骨は、比較的頑丈である。大腿骨の上部は扁平である。右側の上横径は29.6mm、上矢状径は20.2mmで扁平示数は68.2、左側では上横径は31.7mm、上矢状径は20.8mmで扁平示数は65.6であり、どちらも超扁平大腿骨に属する。上部外側の殿筋隆起はやや発達しており、殿筋付着部は下溝となっている(写真1-2、3)。後部の粗線はさほど発達しておらず、数mmの幅は持っているが高くない。脛骨の後面の垂直線は中央付近に達している。断面は後面が丸みを帯びておりヘリチカのV型である。

この四肢骨では、大腿骨はさほど太くはなく、後面の粗線はあまり発達していない。この状態が年齢が若いことによるのか、あるいは女性であるからなのかは不明であり、この四肢骨が上記のどの頭蓋骨と同一個体であるかどうかははっきりしない。ただ、年齢が若いことによるなら上記の頭蓋骨①と同一個体の可能性も出てくるが、確定的ではない。

2号古墳出土人骨についてのまとめ

玄室の床面4カ所から人骨が取り上げられているが、重複を考えると少なくとも3体の人骨が確認できる。四肢骨は大腿骨の扁平さが目に付く。まとめて出土した四肢骨は同一個体のものであろうが、この四肢骨が頭蓋骨のどれと組合わさるのかは不明である。ただし、出土した歯は18歳前後のものであるから、頭蓋骨①—1と同一個体であっても矛盾はない。

III) 出土脊椎動物骨の特徴

脊椎動物骨は83号竪穴住居跡から出土したものである。時代は縄文時代中期と考えられている。出土し

表1 郷土遺跡出土の人骨の上顎歯および下顎歯の計測値と比較資料

上顎歯	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		備考
		m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	
郷土遺跡出土人骨	右	9.5	7.5	7.8	-	-	-	7.4	9.6	-	-	10.0	11.3	8.9	11.6	9.8	11	
	左	-	-	-	-	7.7	8.7	7.4	9.7	6.5	9.2	9.9	11.8	9.4	11.8	-	-	
岡山古墳人 (茂原：計測)	古墳 男性	8.6	7.3	7.0	6.8	8.2	8.4	7.4	9.2	6.6	9.2	10.5	11.9	9.6	11.5	9.1	11.1	岡山理科大学資料
	女性	8.7	7.1	6.8	6.4	7.9	7.9	7.5	9.6	7.0	9.3	10.7	11.6	10.4	12.2	-	-	
現代日本人 (横田：1959)	現代 男性	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79	
	女性	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50	

下顎歯	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		備考
		m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	m-d	b-1	
郷土遺跡出土人骨	右	-	-	-	-	-	-	7.6	8.2	-	-	11.3	11.6	10.8	-	-	-	
	左	-	-	-	-	7.2	7.8	-	-	-	-	11.5	11.5	11.6	11.0	-	-	
日本人 (横田：1959)	現代 男性	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	8.06	7.42	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28	
	女性	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.77	7.29	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02	

表2 郷土遺跡出土の脊椎動物依存体
(F：破片、C：完形)

遺構番号	種	部位	部位名・骨名	左右	状態	完形	c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	備考
S B 83	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨下顎窩	左右	焼骨	F									
S B 83	イノシシ	肩甲骨	関節部	左右	焼骨	F				1					
S B 83	イノシシ	手根骨	尺側手根骨	左右	焼骨	C									
S B 83	イノシシ	大腿骨	大腿骨頭	左右	焼骨	F				1					幼獣
S B 83	イノシシ	脛骨	近位骨幹	左	焼骨	F					1				
S B 83	ニホンジカ	椎骨	頸椎		焼骨	F									
S B 83	ニホンジカ	上腕骨	骨頭	不明	焼骨	F				1					幼獣
S B 83	ニホンジカ	寛骨	寛骨白部	左右	焼骨	F									坐骨
S B 83	ニホンジカ	寛骨	寛骨白部	左右	焼骨	F									恥骨
S B 83	ニホンジカ	寛骨	寛骨白部	左右	焼骨	F									腸骨
S B 83	ニホンジカ	大腿骨	大腿骨頭	左右	焼骨	F				1					幼獣
S B 83	ニホンジカ	脛骨	遠位部	右	焼骨	F								1	
S B 83	ニホンジカ	脛骨	遠位部後部	右	焼骨	F								1	
S B 83	ニホンジカ	脛骨	近位部骨端内側部	右	焼骨	F				1					幼獣
S B 83	ニホンジカ	足根骨	距骨	左	焼骨	F									
S B 83	ニホンジカ	足根骨	距骨	左	焼骨	F									
S B 83	ニホンジカ	足根骨	距骨	左	焼骨	F									
S B 83	ニホンジカ	足根骨	踵骨	左	焼骨	F				1	1	1	1		
S B 83	ニホンジカ	足根骨	顆骨	左	焼骨	F									
S B 83	ニホンジカ	指骨	種子骨	不明	焼骨	C	1								
S B 83	ニホンジカ	指骨	中節骨	不明	焼骨	F								1	

た種は限られており、イノシシとシカだけである。すべて焼かれたものである。いずれも白く灰化するまで焼かれており、細片化している。大きなものでも数mmである。同定できたのは21点で、そのうちニホンジカが16点、イノシシ（あるいはブタ）が5点である。

A) 出土動物骨のリスト

哺乳綱 Mammalia

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ（あるいはブタ） Sus scrofa

シカ科 Cervidae

ニホンジカ Cervus nippon

イノシシは細片では飼育されたブタと区別が付きにくく、ここでは一応イノシシとしたが、飼育されたブタである可能性もないわけではない。

B) 出土したイノシシの特徴 (表2)

5点が確認された。完形のもの小さな手根骨だけである。大腿骨頭は幼獣のものである。

C) 出土したシカの特徴 (表2)

16点が同定されたが、歯や頭蓋骨は認められなかった。小さな種子骨のみが完形であるが、他はすべて破片である。幼獣のものが認められる。同一個体のものかどうかは判定できない。

D) 出土獣骨のまとめ

住居跡の床面に散乱していたものであり、いずれも灰化するまで焼かれている。イノシシとニホンジカの2種だけが出土しておりニホンジカの方が多い。どちらにも幼獣の骨端が認められた。この幼獣が単独で狩られたものかどうかは不明である。ニホンジカには頭蓋骨が見られず、また、どちらも歯は出土していない。資料数が限定されており、詳細は不明である。

本報告書をまとめるに当たり、貴重な資料を観察する機会を与えて下さった長野県埋蔵文化財センターの方々に厚く感謝いたします。

参考文献

- 馬場悠男 (1991) : 人骨計測法. 人類学講座別巻1、「人体計測法」、雄山閣 江藤盛治編集；159—358.
 藤田恒太郎 (1949) : 歯の計測規準について、人類学雑誌、61；1—6.
 権田和良 (1959) : 歯の大きさの性差について、人類学雑誌、43(1)；151-163

写真の説明

写真1 : 郷土遺跡から出土した人骨と歯。

- A : 2号古墳から出土した歯、ur : 上顎右側、ul : 上顎左側、ll : 下顎左側、lr ; 下顎右側、
 B : 2号古墳から出土した左大腿骨の骨幹後面、C : 2号古墳から出土した右大腿骨骨幹後面。
 左右とも矢印は外側の殿筋隆起部である。

第7節 奈良時代及びそれ以降の遺構と遺物

奈良時代に属する遺物としては和同開珎が認められる。平安時代では遺構としては竪穴住居跡2軒と土坑1基が検出され、遺物には土器、砥石が認められる。また若干ではあるが、中・近世の土器片と古銭も検出されている。なお、自然流路である1溝は厳密には遺構ではないが、平安時代に最終的に形成されたものと考えられるため本節で報告する。

1 検出遺構

① 住居跡

87号竪穴住居跡 (第109図)

遺構：P-17グリッドに位置する。縄文時代中期の78住・84住と重複する。南側は壁も床も消失しているが、残存部分から想定すれば、一辺5.6m程の規模を測る方形の住居跡と考えられる。カマドは北壁東寄りに存在しているが、粘質土が崩れた状態で確認されたにとどまる。カマド石はみられなかった。ピットは3基が検出された。

遺物・時期：本跡に確実に伴う土器は少なく、すべて破片資料である。図示できる資料はないが、10世紀前半頃と比定できようか。

100号竪穴住居跡（第109図、PL125）

遺構：T-10グリッドに位置する。縄文時代中期の101住及び多数の土坑が密集する個所に位置するため、遺構検出は困難を極めたが、カマドと北壁の一部が残存していたことから住居跡であると判断した。したがって平面プランも規模も不明である。壁高は数cmを測るのみである。カマドは北壁に存在し、カマド石及び袖を構築していた粘質土が確認された。

遺物・時期：右袖の先端に甕の口縁部破片が1点、袖の中程に土師器破片が5点出土しているが、図示できるものはなかった。10世紀前半頃と比定できようか。

② 土坑

33号土坑（遺構：第109図 遺物：第110図、PL226）

遺構：P-4グリッドに位置する。長径130cm、短径120cm、深さ36cmの規模を測る円形の土坑である。覆土は小円礫や軽石礫を含む黒褐色土の単層である。

遺物：完形の土師器坏が2点出土している。3は口径101mm、器高19mm、底径46mmをはかる。4は口径103mm、器高22mm、底径49mmをはかる。

時期：11世紀中頃から後半期に比定できよう。性格・機能等は不明である。

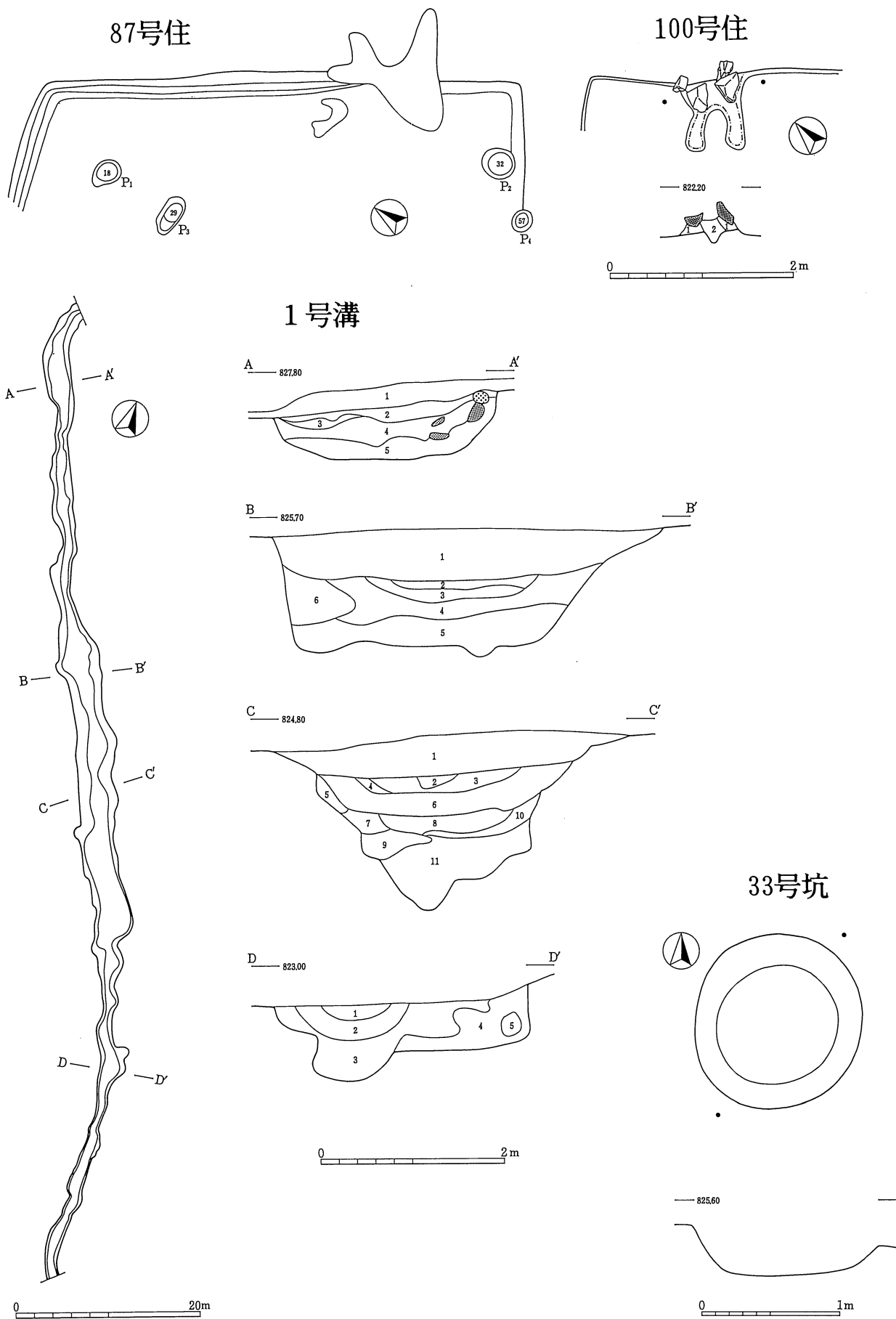
③ 自然流路

1号溝（遺構：第109図、PL125 遺物：第110図、PL226）

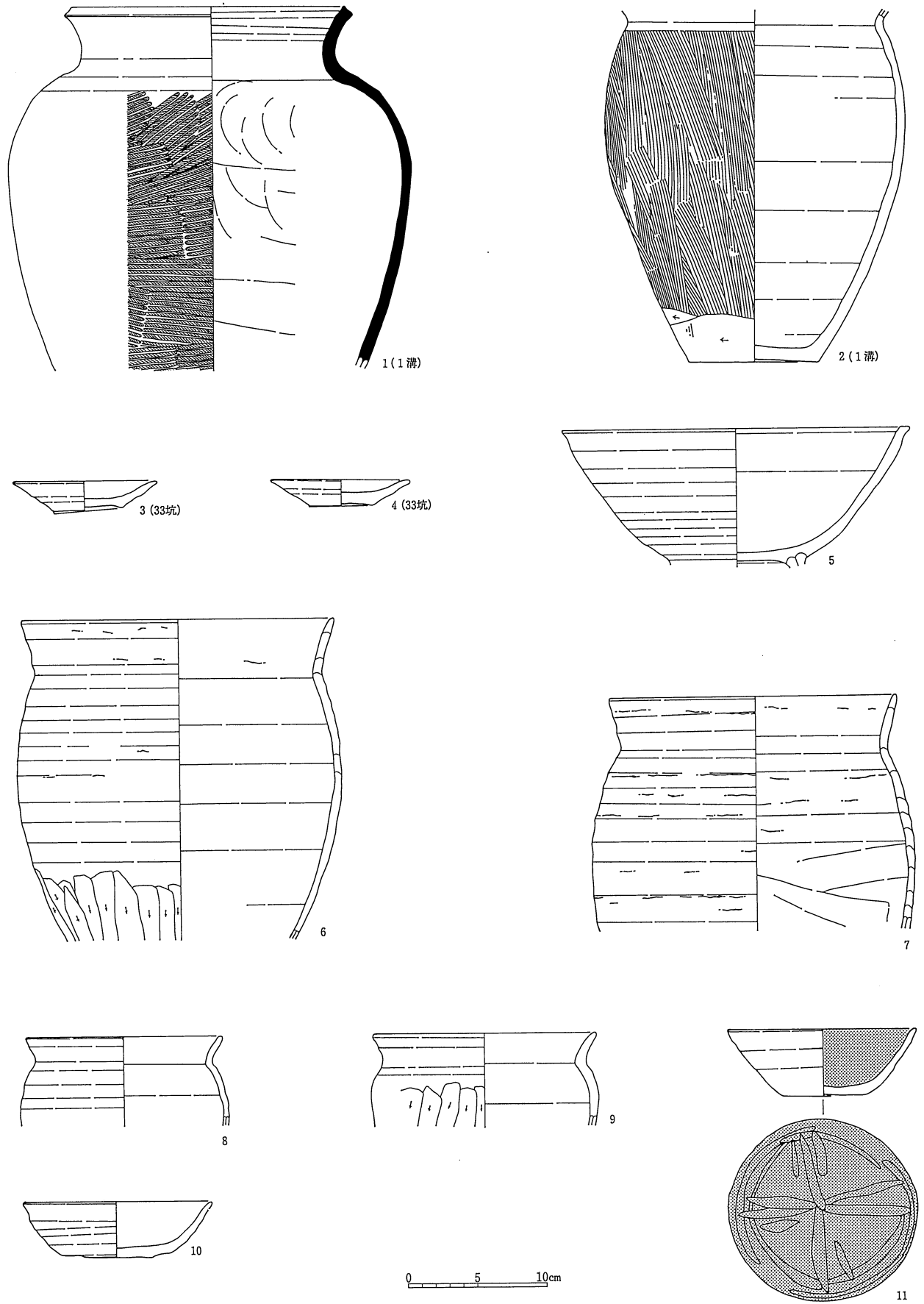
調査区内をほぼ北から南へと流れる流路である。調査段階では「溝」という名称を用いたため、1号溝と呼称するが、人工構造物ではない。おそらく大雨などによる大水発生に伴い、形成された流路であるのだろう。深さは約20cm～約2mまでさまざまであり、この点からも自然形成であることがわかる。覆土は基本的には4層にわけられる。1層はパミスを含む黒褐色土、2層は黄色の粘土質土、3層はパミスの少ない黒色土、4層は砂礫層である。遺物はそれぞれの層から出土しているが、4層から最も多く出土している。4層出土の遺物は角がとれ、流れた痕跡を示すものが多い。縄文時代中期の遺物が圧倒的に多く出土していたため、当初は集落とほぼ同時期に形成されたものとして理解していたが、4層から平安時代の土器が少なからず出土したことから平安時代以降に形成されたものと判断した。1回のみのお水によって形成されたものとは考えにくく、おそらく複数回に及んだものでないかと理解できる。第110図-1・2が9世紀後半頃に比定できるため、おおむねこの頃に最終的に形成されたものと考えられよう。図示した遺物は第110図-1・2のみである。1は須恵器甕、胴部以下を欠する。口径210mm。2は土師器。2は口縁部及び底部を欠するが、体部外面には縦方向のハケ目調整を施す。

2 出土遺物

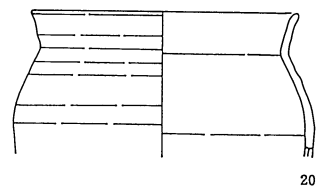
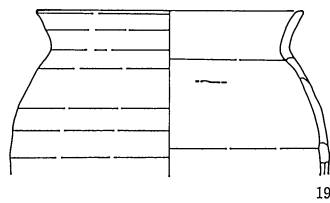
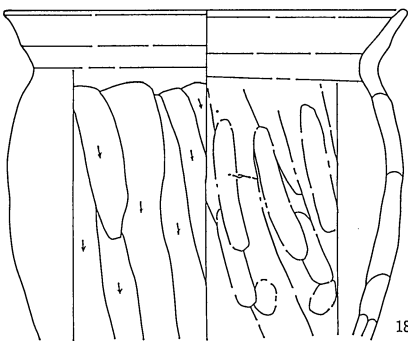
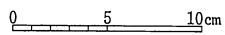
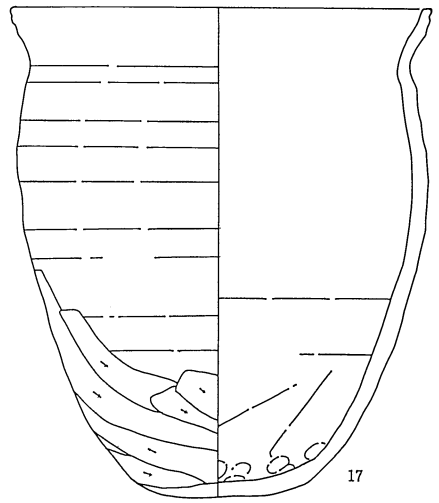
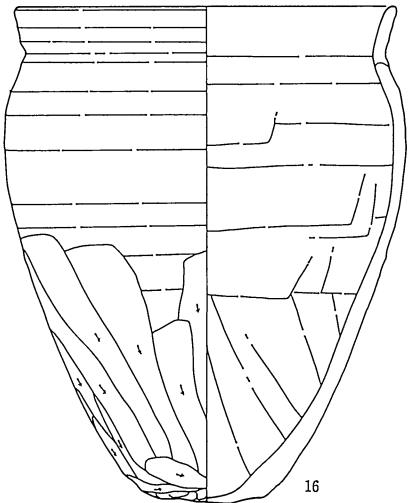
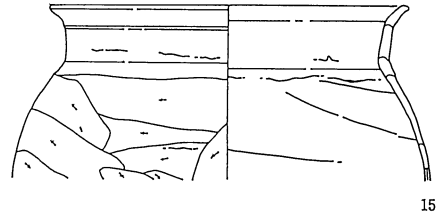
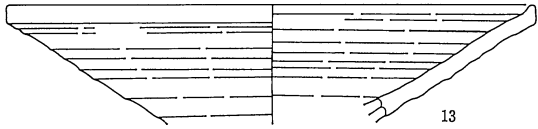
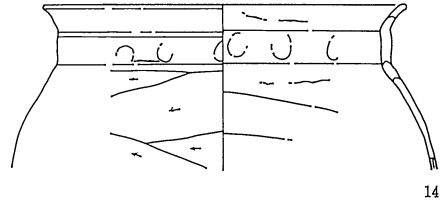
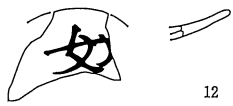
① 土器（第110、111図、PL226）



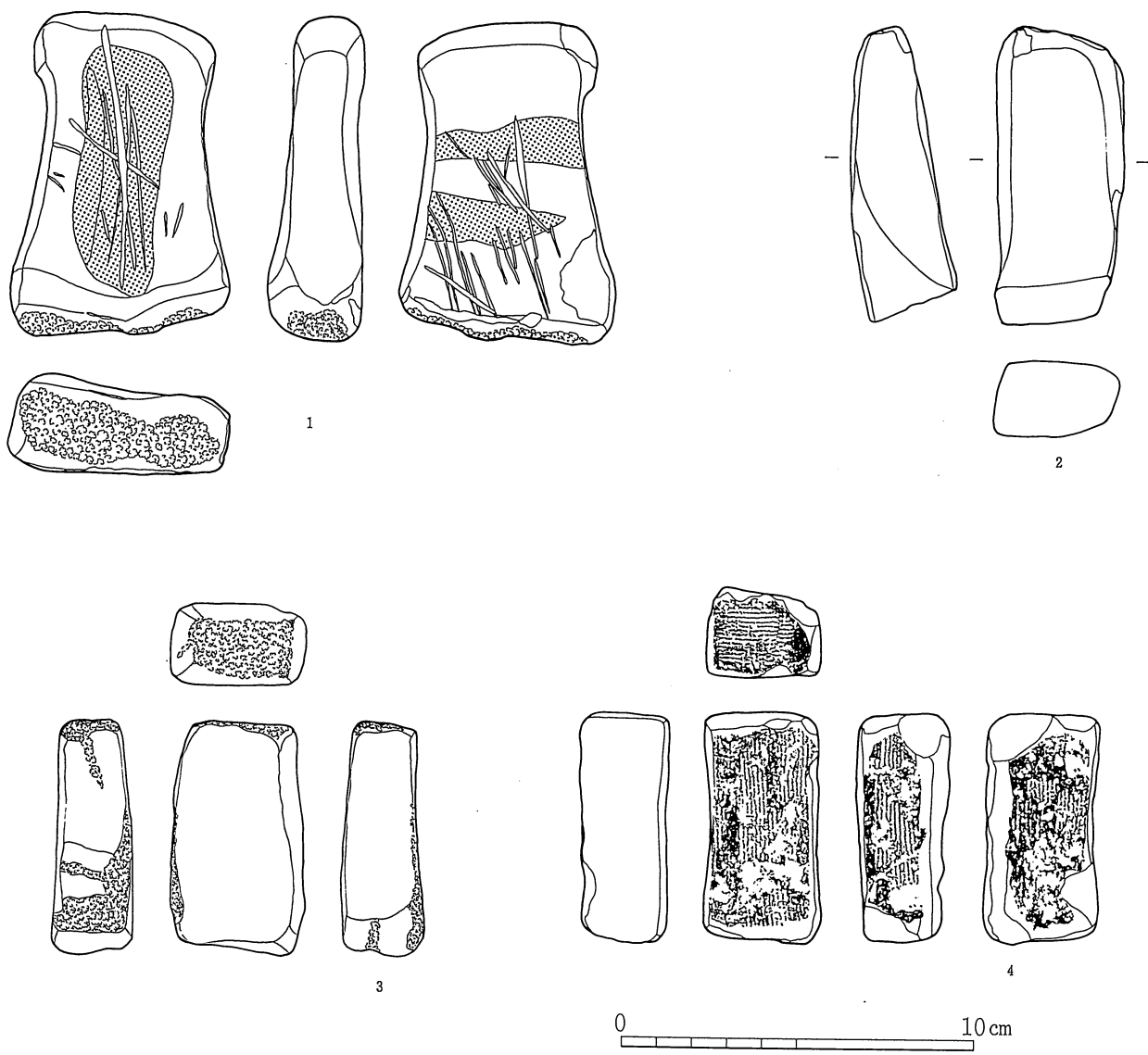
第109図 古代の遺構 1:60



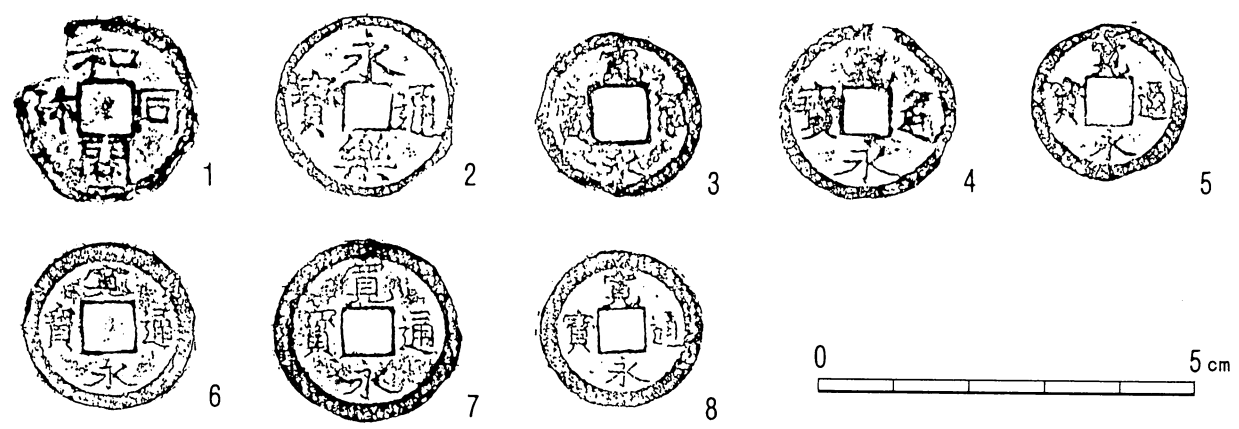
第110図 古代の土器(1) 1 : 4



第111図 古代の土器(2) 1 : 4



第112図 古代の石器 1 : 2



第113図 銭貨 1 : 1

奈良時代～平安時代

遺構に属するものは少なく、第110図—1・2（1溝）、3・4（33坑）のみである。5～21は遺構外出土である（第110図、第111図）。完形もしくはそれに近いものが多く、検出できなかった住居跡などの遺構に伴っていた可能性も高い。

5～10はP—1グリッドから検出された。5は大形の鉢であろうか。6～9は土師器甕である。10は内面黒色坏であり、雑なミガキが施されている。

11はP—2グリッドから検出された。内面黒色坏である。内面には暗文が認められ、ミガキが施されている。

12～15はP—6グリッドから検出された。12は内面黒色黒坏の口縁部破片であり、外面には墨書で「女」偏の文字が書かれている。土師器盤であろうか。14～15は土師器甕である。

16～20はP—13グリッドから検出された。すべて土師器甕である。

21は、8m×8mのグリッドではとりあげられなかったが、N地区から検出されたものである。宝珠形つまみをもつ須恵器の坏蓋であり、ゆがみが著しい。

時期については、5～10は10世紀代前半頃、11は9世紀末～10世紀前葉。12～15は9世紀後半頃、16～20は10世紀代後半頃、21は8世紀前葉頃に比定できようか。

中・近世

中・近世土器もわずかながら検出されている。いずれも破片資料のため、図示はしなかったが、市川隆之氏の鑑定によると、中世土器では中津川焼片1点（13世紀後半～14世紀前半）、近世土器は伊万里、唐津、瀬戸美濃、古瀬戸など12点がみられている。

② 石製品（第112図、PL220）

本遺跡からは縄文時代の砥石も出土しているが、当該期に属すると想定される砥石も検出されている。4点を図示した。重量は第112図—1（177.2g）、2（119.5g）、3（97.7g）、4（95.3g）をそれぞれはかる。石材は砂岩を多く使用している。

③ 古銭（第113図、PL226）

古銭は和同開珎1点、永樂通宝1点、寛永通宝8枚が出土しており、寛永通宝の欠損品2点を除く8点は図示した。いずれも遺構外出土である。

第8節 時期不明の遺構

遺物が出土していないため、時期決定ができなかった遺構をここで報告する。

① 土坑

総計1125基の土坑のうち、遺物が出土せず、時期決定が不可能なものは659基にのぼる。これらについては個別な記述は省略したい。

② ピット（第114図）

径約20～40cm、深さ約10～20cm程の規模を有するものをピットとした。K—22、K—23、P—2グリッドに位置する21基が検出された。個別な記述は省略する。

③ 1号配石 (第105図)

P-13グリッドに位置する。数点の約20～40cm程の扁平な礫とその間に配する小礫を用いて、約160×60cm程の長方形に近い形状を呈するものを配石として認識した。長方形を意識した形態となっているように思われるが、機能・性格等は不明といわざるをえない。

第9節 小 結

学史的にも著名であり、浅間火山南麓を代表する縄文中期遺跡であろうことは従来から指摘されてきた本遺跡であるが、過去に調査された地点はごく限られた部分にすぎず、その全体像はベールに閉ざされていた。そのベールは今回の調査で大きく開かれることになったといえよう。今回の調査地区は約8500㎡程ではあったが、検出された遺構は竪穴住居跡115軒、土坑1125基など相当数を数え、出土遺物も遺物収納箱で約900箱という膨大な量にのぼっており、本遺跡のほぼ中核部分にあたるものと思われる。

縄文時代早期末～前期初頭期には竪穴住居跡6軒・土坑4基が検出された。遺構伴出の遺物も少なからず認められ、比較的資料の少ない当該期にあって良好な資料を得ることができた。

縄文時代中期中葉～後期初頭には竪穴住居跡107軒、土坑462基以上などが認められ、当該期が本遺跡の中心的な時期であることが理解できる。ここで特筆すべき事項としては、今まで佐久地方では出土例が少なかった加曾利E I式～II式期頃の遺構・遺物が相当数検出され、資料の蓄積をみたことがあげられよう。なかでも土器については加曾利E II式頃には在地色の強い沈線地文をもつ土器が主体を占めるようになる。今回の報告では土器分析までたちいることができなかったものの、これらが佐久地方独特の土器であることは疑いないことであり、将来的には「郷土式土器」として成立する可能性も十分に高い。今後の研究課題であろう。また他にも遺物には土偶67点、三角柱状土製品なども認められ、豊富な出土量をほこる。土坑の検出数も特筆すべきである。当該期の遺物を出土したもので462基にのぼり、遺物を伴わない土坑の存在を考慮すれば、実際はそれ以上になろう。調査区の南側にとりわけ密集しており、時期的にも加曾利E III式～IV式期頃のものが圧倒的に多い。今回の報告では土坑の性格・機能まで論じることができなかったが、貯蔵穴が相当数認められるのではないかと感じている。さらにこの調査区南側の土坑密集地帯からは動物焼骨を伴う土坑も多く認められ、遺構外からも動物焼骨の検出が著しい。これら動物焼骨のもつ意味もあわせて今後に残る課題である。

他にも郷土古墳群2号墳、平安時代の竪穴住居跡2軒なども検出され、浅間火山南麓の古代についても新たな資料を提供することができたといえよう。

しかしながら質・量ともに膨大な資料を前に、事実記載に終始せざるをえなかった。いや事実記載さえ十分ではない点もあろう。調査段階から一貫して郷土遺跡と向かい合ってきた担当者としての責務は、本報告書刊行後も続くものと認識している。消滅してしまった郷土遺跡に報いるためにも今後も何らかの形で記録を残していきたいと強く感じている。

引用参考文献・註

石坂茂・藤巻幸男・桜岡正信1988

「加曾利E式土器に関する一考察—いわゆる「胴部隆帯文土器」の系譜—」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎卓也1970 「長野県小諸市郷土遺跡」『日本考古学年報18』

- 小淵武一1993「II遺跡の概観 1 遺跡の自然的環境」『郷土遺跡』所収
- 小諸市教育委員会1987『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』
- 小諸市教育委員会1993『郷土遺跡』
- 小諸市教育委員会1994『石神遺跡』
- 小諸市誌編纂委員会1974「郷土遺跡発掘記録」『小諸市誌 考古篇』所収
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986『将監塚—縄文時代—』
- 佐久市教育委員会1995『寄山』
- 谷井彪ほか1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要』、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 寺内隆夫1997「2 川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について」『川原田遺跡 縄文編』御代田町教育委員会—
- 御代田町教育委員会1993「細田遺跡」・1995「下荒田遺跡」
- 百瀬忠幸1991「第2節 吹付遺跡 5 まとめ (1)縄文時代中期後葉の土器群とその変遷」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』長野県埋蔵文化財センター
- 八幡一郎1934『北佐久郡の考古学的調査』（今回は1978年に歴史図書社より再刊したものを参照した。）
- 八幡一郎1982「郷土遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡（北・東信）』

註1 長野県考古学会平成7年度秋季大会「寄山遺跡」の事例報告において述べられた。本大会は「浅間山麓の縄文文化」をテーマに御代田町で開催されたものである。大会の様子は『信濃考古 No144』に掲載されている。

註2 本項を草するにあたっては県立歴史館綿田弘実氏に多大なご教授をいただいた。深く感謝の意を表したい。ただし文責は報告者の桜井にある。

第8章 ひがしまるやま 東丸山遺跡

第1節 遺跡の概観

旧大里村菱野分の丸山地籍と、小諸の本町分の東丸山地籍とを含めて、この地域一帯を俗に丸山といっているが、かつてここを丸山遺跡と呼び（小諸市誌編纂委員会1974）、縄文時代の大集落跡と認識されてきた。現在ではこの部分を含め、これを東丸山遺跡と呼び、遺跡範囲を広範化し、あわせて平安時代の集落の存在も想定しているらしい（小諸市教育委員会1986）。現況は畑地を基本とするが、今なお宅地化が進みつつある。

高峰山から南行する尾根の東縁部に営まれた遺跡である。標高は765～810mほどをはかり、西側に丸山と呼ぶ小高い丘を背負い、東側は中沢川の沢に向かって緩く傾斜する。日当たりと見晴らしの良い南斜面の場所である。

遺跡の南端、丸山との境界から以前は清水が湧いていたらしいが、耕地化が進み、さらに近年住宅地として各種の工事が行われるなどして、現在では涸渇している。

出土品はすこぶる多いが、中心は南端部にあるものと思われる。縄文時代中期中葉から後期中葉の遺物が多いらしいものの、これまで調査されたことはない。

第2節 調査の概要

上信越自動車道は遺跡の最北端を横断することとなり、北端の一部、1,500㎡が調査対象になった。ところが、その範囲の中の東側については遺跡が存在しえないと思われる急傾斜であったし、逆に緩傾斜面では地形変化が少なく、遺跡の存否を問うには問題が存在するものと判断し、この部分に限り平成3年5月28日から手掘りによる試掘調査を行った。結果、遺構分布は希薄ながらも、緩斜面全体に遺構が認められ、2,100㎡の調査対象面積が必要であり、あわせて東丸山遺跡の北縁を拡大させることになった。

6月27日から本調査を実施した。調査対象区内に市道7052号線が通過していることから、一度には調査できず、第1次・第2次調査に分けた。

第1次調査は8月2日に終了した。西側は全体に堆積が厚く、また浅く堆積した浅間第1軽石流や崖堆性の崩落土も認められ、あわせてローム層上面に黒色土の細砂壤土の堆積も確認できた。遺構は西側のものに限り、この黒色土上面から掘り込まれていることが試掘状況で判明しており、部分的だが2面調査を必要とした。上面では縄文時代中期の竪穴住居跡1棟のみの確認であったが、以後ローム層、及び浅間第1軽石流上面で前期の竪穴住居跡1棟・中期の竪穴住居跡1棟・同期の土坑63基・時期不明の陥し穴1基を確認した。

12月11日から同17日まで、第2次調査として市道7052号線下の調査を行った。縄文時代中期の所産と思われる土坑9基を確認した。

計、縄文時代前期の竪穴住居跡1棟・中期の竪穴住居跡2棟・同期と思われる土坑72基・時期不明の陥し穴1基を確認した。



第1図 遺構配置

調査日誌抄

平成3年度		7月4日	南端から土坑群を検出。
5月28日	調査開始。西丸山遺跡と同時併行で行う。手掘りによる試掘調査から開始。	7月6日	新たに竪穴住居跡1棟を検出。
5月29日	周知の遺跡範囲外から縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑1基を確認。本調査の必要ありと判断。	7月8日	遺構調査開始。
5月30日	昨日発見された竪穴住居跡は黒色土中から掘り込まれていることが判明。2面調査が必要と判断。	7月10日	1面目の表土剥ぎ終了。即、2面目の表土剥ぎに移行。
6月4日	試掘調査終了。全体的には縄文時代中期の遺物を採取している。	7月11日	新たに竪穴住居跡1棟を検出。
6月27日	表土剥ぎ開始。	7月12日	表土剥ぎ作業終了。
7月3日	遺構検出作業開始。	7月19日	基準杭設定開始。
		8月2日	第1次調査終了。
		12月11日	第2次調査開始。表土剥ぎ作業及び遺構検出作業を開始。
		12月12日	遺構調査開始。
		12月17日	調査終了。

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(第2図、P L228・231・232)

ローム層上面で検出した。柱穴の配置から、概ね主軸をN-66°-Wと判断し、およそ等高線に直交する方向で建てられている。主軸長3.85m、副軸長3.66mを呈し、壁高は最大で38cmをはかる。また、床面は斜面下方に向かって最高で26cmも傾斜している。

覆土はいずれも自然埋没土だが、2層には軽石流堆積物層が一定量混入しており、周堤帯のように住居の周囲に掘り上げた土を盛土した可能性もある。

炉は認められず、床面に焼土が飛散するようなこともなかった。火処を一切持たない竪穴住居であり、一般的な利用方法とは使い方が違うらしい。床面は極めて軟弱で、堅緻面は認められなかった。

出土遺物は石鏃がすこぶる多く、土器群はわずかな破片しか出土していない。また、少なくとも13から17は石鏃の未成品と考えられるので、火処がないにもかかわらず、ここで石鏃を多数製作していたことがうかがえる。なお、北壁付近から床面直上にやや偏平な円礫が出土しており、本来何らかの役割があったものと思われるが、とくに使用痕は認めれなかった。

時期は前期末、北白川下層式Ⅲ段階のものである。

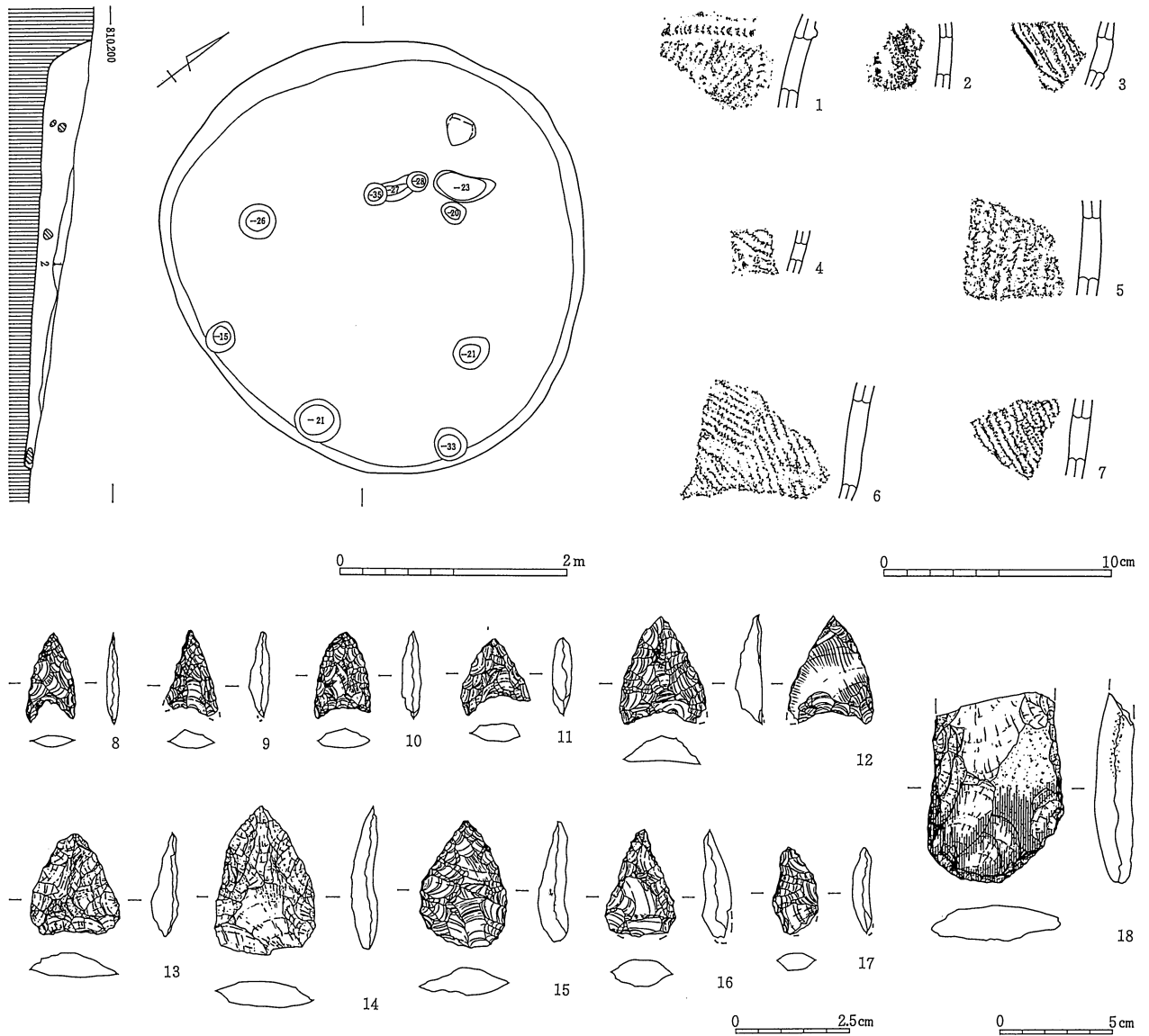
2号竪穴住居跡(第3・4図、P L228・230~232)

手掘りによる試掘調査で確認されたため、当時の掘り込み面、もしくは検出可能な最高位で確認可能であった。浅間第1軽石流上面に厚く堆積した黒色土の細砂壤土がそれで、以後、極暗赤褐色土が薄く堆積するが、それが覆土の第1層となる。

N-60°-Wを主軸とし、5.52mを主軸長、5.82mを副軸長とする比較的大形の住居である。壁高は確認面の高さから優に60cm前後を有している。

覆土は1層が基本土層が落ち込んだもの、2・3層は黒色ないしは黒褐色の細砂壤土で軽石流堆積物を含むが、浅間第1軽石流上面に堆積する黒色土に比較的近似するものである。4層は軽石流堆積物を基本とするもので、壁崩落土と考えられる。

床面は比較的平坦であるが、炉の周囲だけ若干傾斜している。なお、南側の一部が風倒木痕によって壊されている。



第2図 1号竪穴住居跡

炉は住居中央に位置する埋甕炉である。底部を完全に欠落させた1の深鉢形土器を炉体土器としていた。口縁部は若干床面から露出していたが、そのためか口唇部は欠失している。炉体土器は口縁部が多少劣化しているものの、内部に焼土と思われるものは一切認められなかった。また、土器内部には、覆土第3層が充填されており、住居廃絶時の際、炉の内部を清掃したようすがうかがえる。

出土遺物は、1が炉体土器、その他は位置を明確に押さえていない。

中期初頭の時期で、五領ヶ台II式に併行するものと思われる。

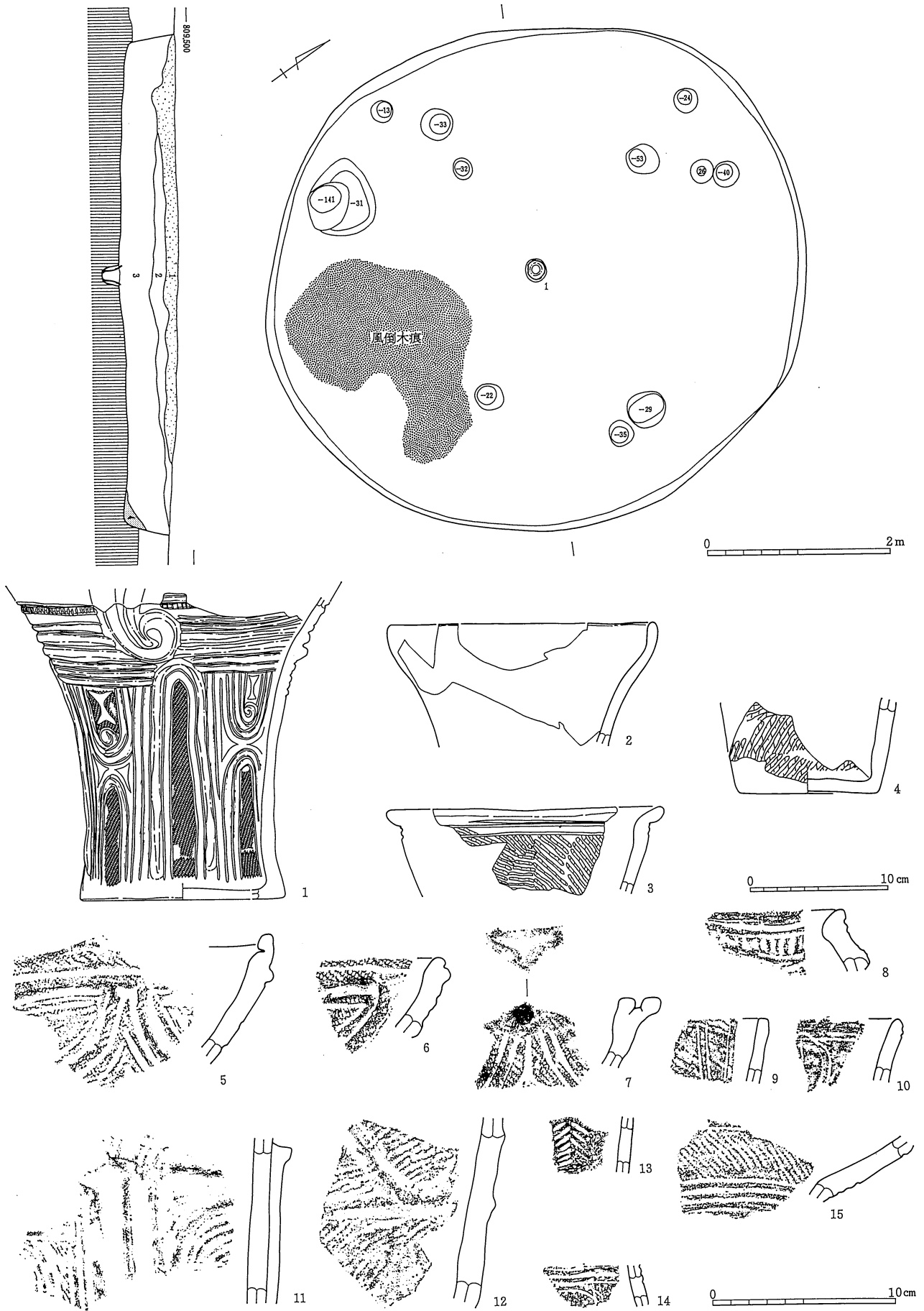
3号竪穴住居跡 (第5図、P L228・230)

浅間第1軽石流上面で検出した。主軸はN-8°-Wを呈し、主軸長は3.37m、副軸長は3.34m、壁高は最大で22cmをはかる。

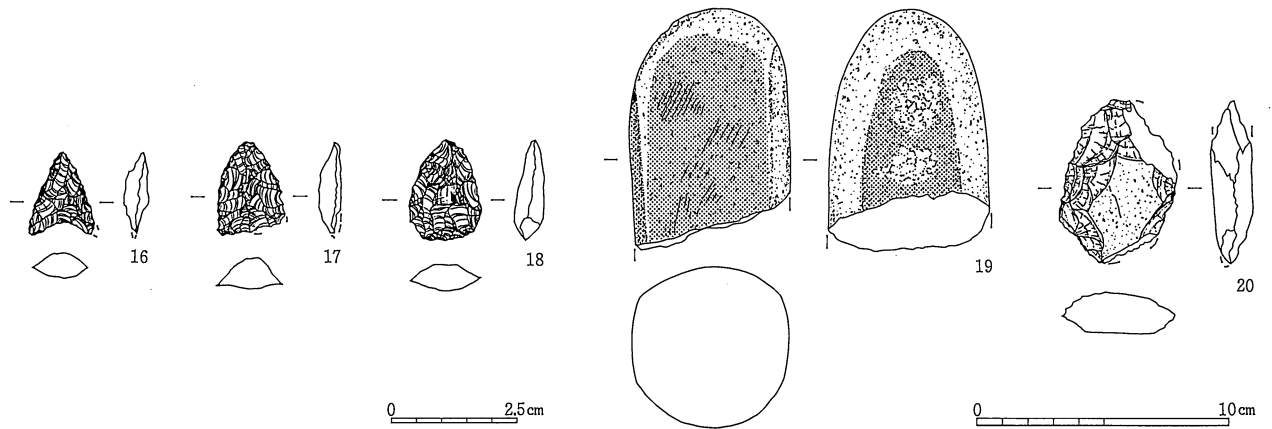
覆土は単層であるが、2号竪穴住居跡の第3層に等しいものであった。

床面は周囲がほぼ水平を保ちつつも、中央に向かって若干傾斜している。堅緻面は認められていない。

炉は住居中央やや手前に設けられた石囲炉である。角礫~亜角礫を用いたもので、炉の深さは床面から



第3図 2号竖穴住居跡(1)

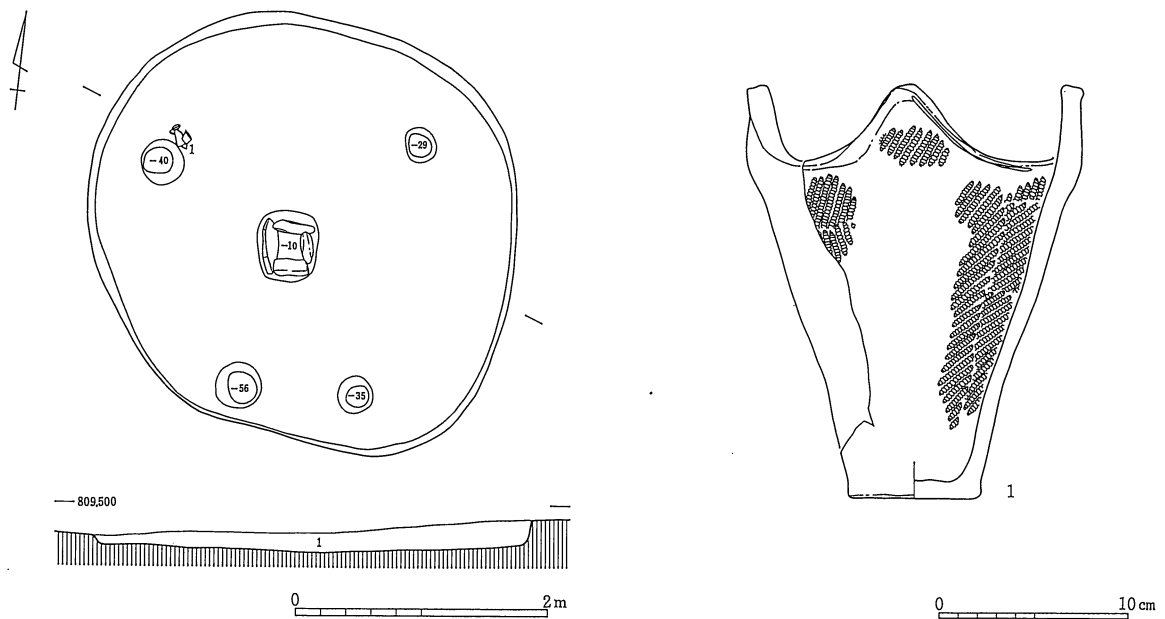


第4図 2号竖穴住居跡(2)

約10cm、炉縁石上端から炉底までの深さは20cm前後をはかる。焼土は一切認められなかった。

出土遺物は、1が床面直上で出土している。ほかは極めて微量で、時期を云々できる土器破片は出土しておらず、当然石器なども出ていない。

住居形態をみれば中期後葉の気配もあるが、1の土器の口縁部断面形態からすれば中葉の一群とも取れる。識別困難な遺構である。

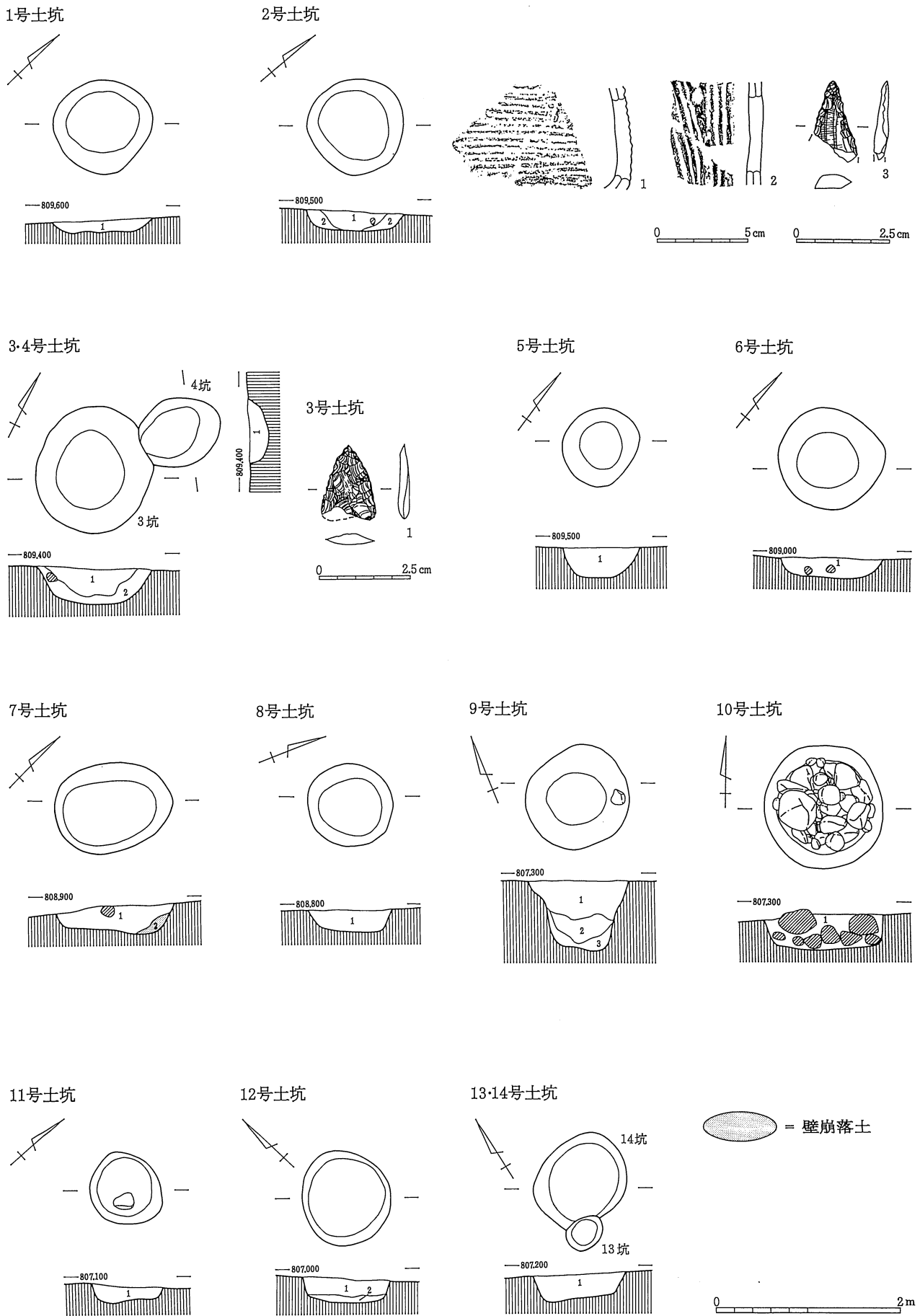


第5図 3号竖穴住居跡

2 土坑 (第6～9図、P L229・231)

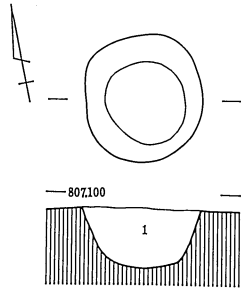
総数72基を確認した。3号竖穴住居跡北側に2基、1号竖穴住居跡南側に数基の土坑が認められるが、全体には南寄りの地点に、しかもやや帯状に群在している。遺物を伴出したものは少ないものの、時期が判明したのはすべて中期初頭、五領ヶ台式併行のものであった。構築地点が集中し、しかも意外にも切り合いが少ないことから、ほとんどのものが該期の所産でないかと考えている。

一部、小規模なものまで土坑としているが、概ね径1m前後の円形土坑を指している。ただし、深さはまちまちで、たとえば9号土坑は75cm、42号土坑は133cmと一段深くなっている。また、42号土坑のよう

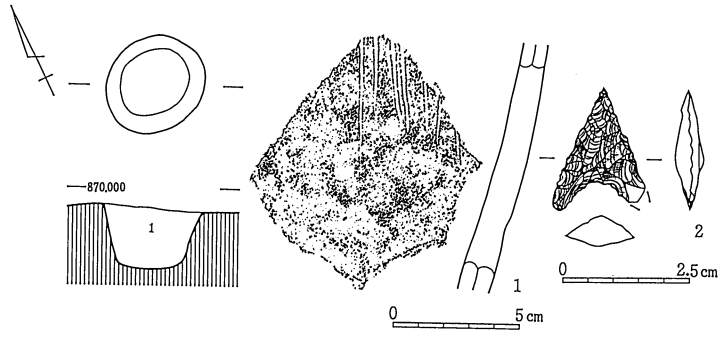


第6図 土坑(1)

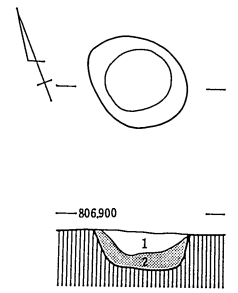
15号土坑



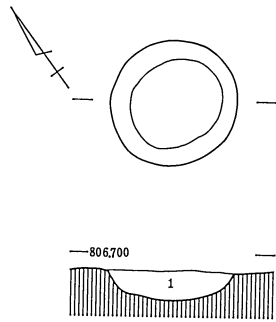
16号土坑



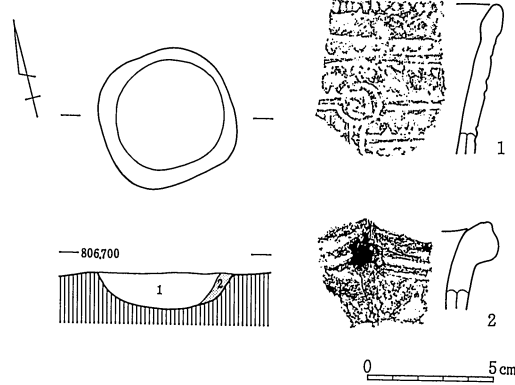
17号土坑



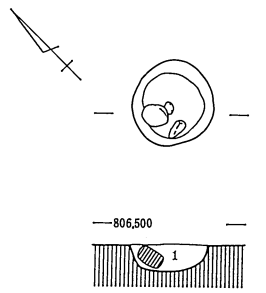
18号土坑



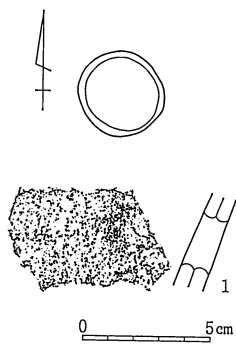
19号土坑



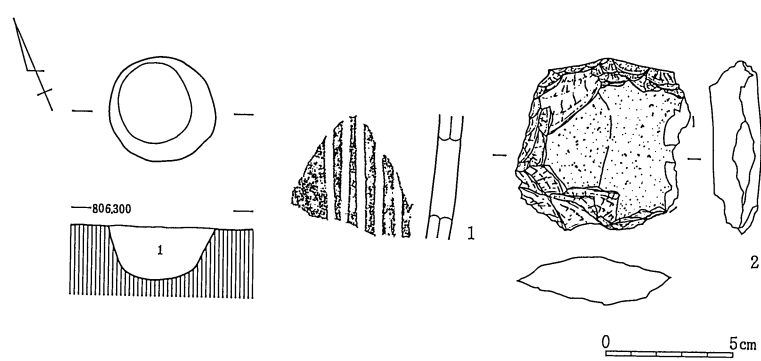
22号土坑



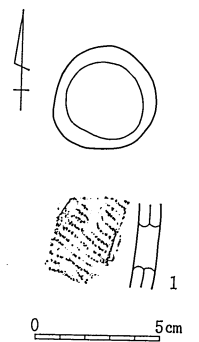
24号土坑



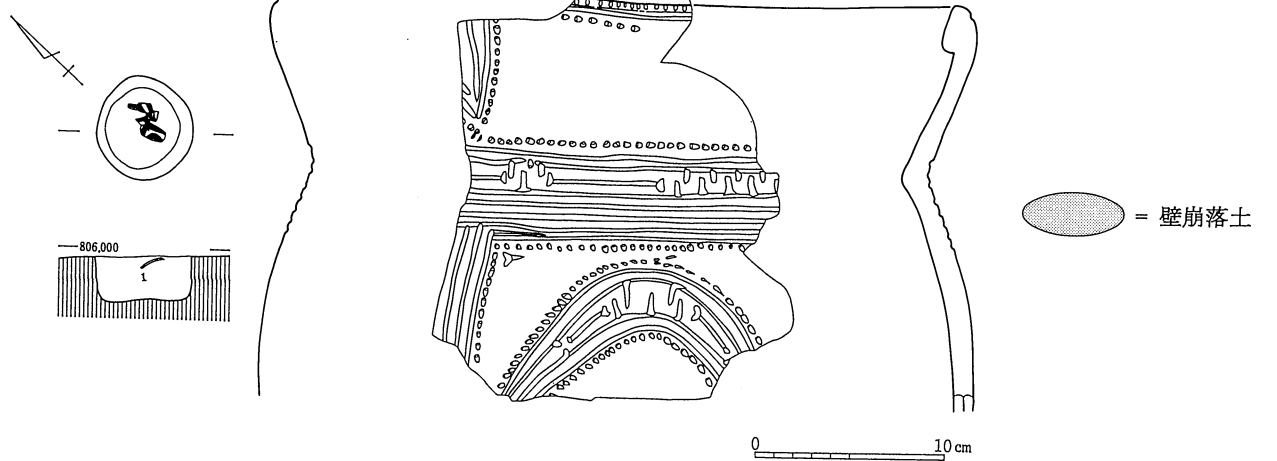
25号土坑



28号土坑

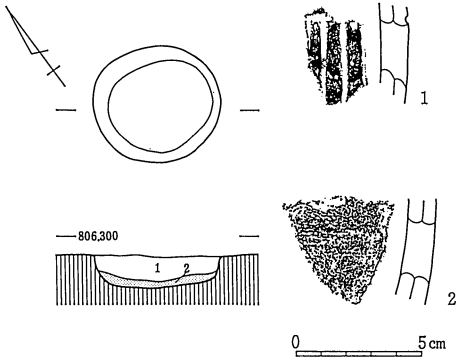


29号土坑

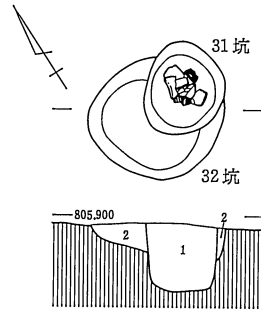


第7图 土坑(2)

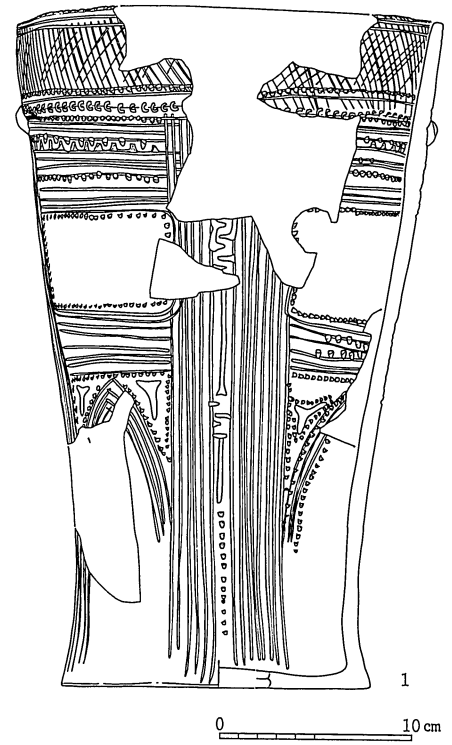
30号土坑



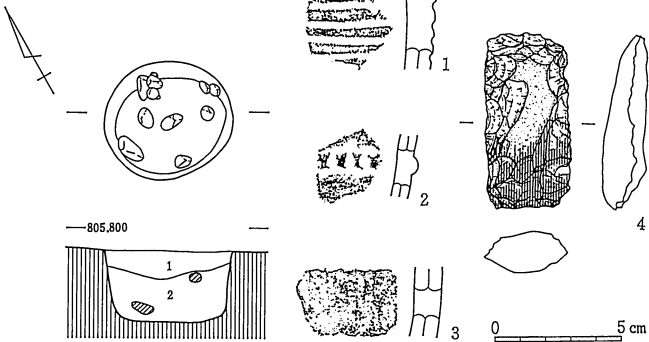
31・32号土坑



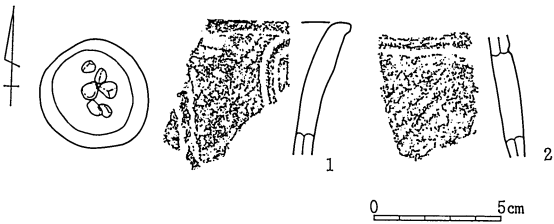
31号土坑



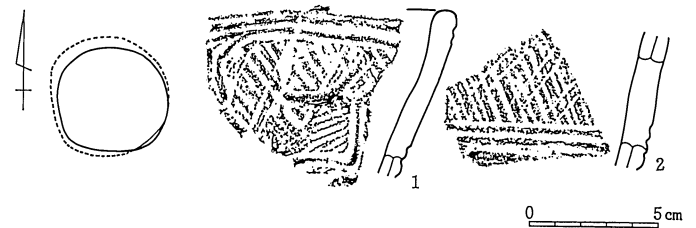
35号土坑



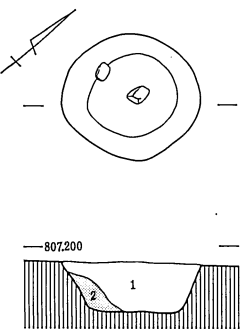
41号土坑



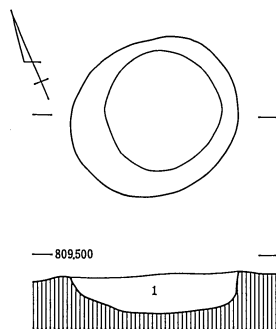
42号土坑



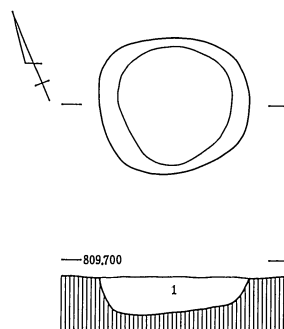
47号土坑



48号土坑



49号土坑

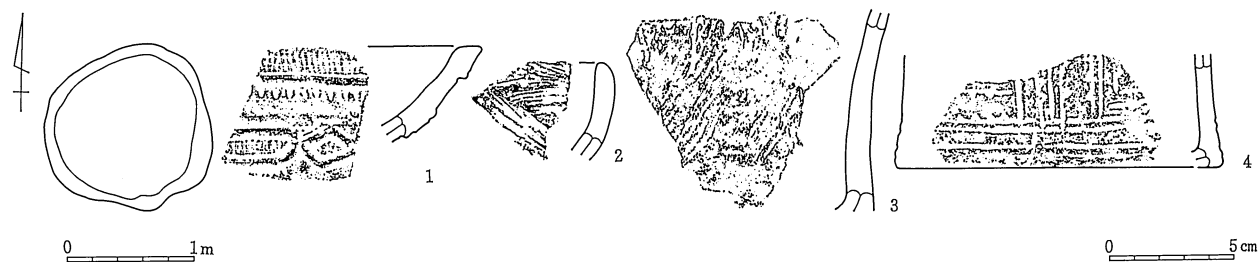


○ = 壁崩落土

0 2m

第8図 土坑(3)

101号土坑

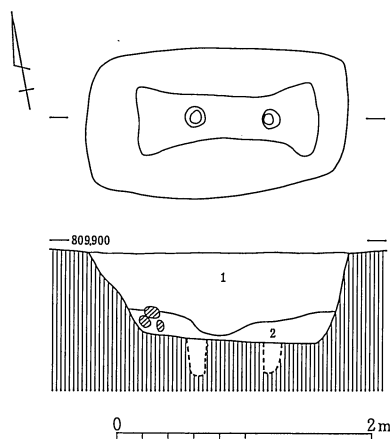


第9図 土坑(4)

に、下端がオーバーハングするものも見受けられる。覆土は基本的に自然埋没したものと考えたが、10号土坑のみ意図的に礫を充填しており、人為的な埋め戻しが行われたのかもしれない。遺物は29号土坑及び31号土坑の覆土最上層に一定量の土器破片が確認され、これについては意図的に廃棄されたものか。それ以外については定かでない。

3 陥し穴

1号陥し穴 (第10図、P L230)



ローム層上面で検出し、深さは最高で71cmをはかる。主軸はN-80°-W前後であり、ほぼ等高線に等しく設定されている。主軸長2.05m、副軸長1.19mをはかる。

覆土は2層に分層したが、第1層については、土坑の覆土に数多く認められる緻密な黒褐色土壌と同質で、陥し穴の一部は中世から近世の産物のものという意見もあるが(保坂1990・桜井1998)、ここではやはり縄文時代の所産とみておきたい。

平面形はやや胴張りの隅丸長方形、底部は両端が極端にV字状に開いている。逆茂木痕は2個認められたものの、打ち込んだものか、埋め込んだものか確認できていない。

遺物は出土していない。

4 遺構外出土遺物 (第11・12図、P L230・231)

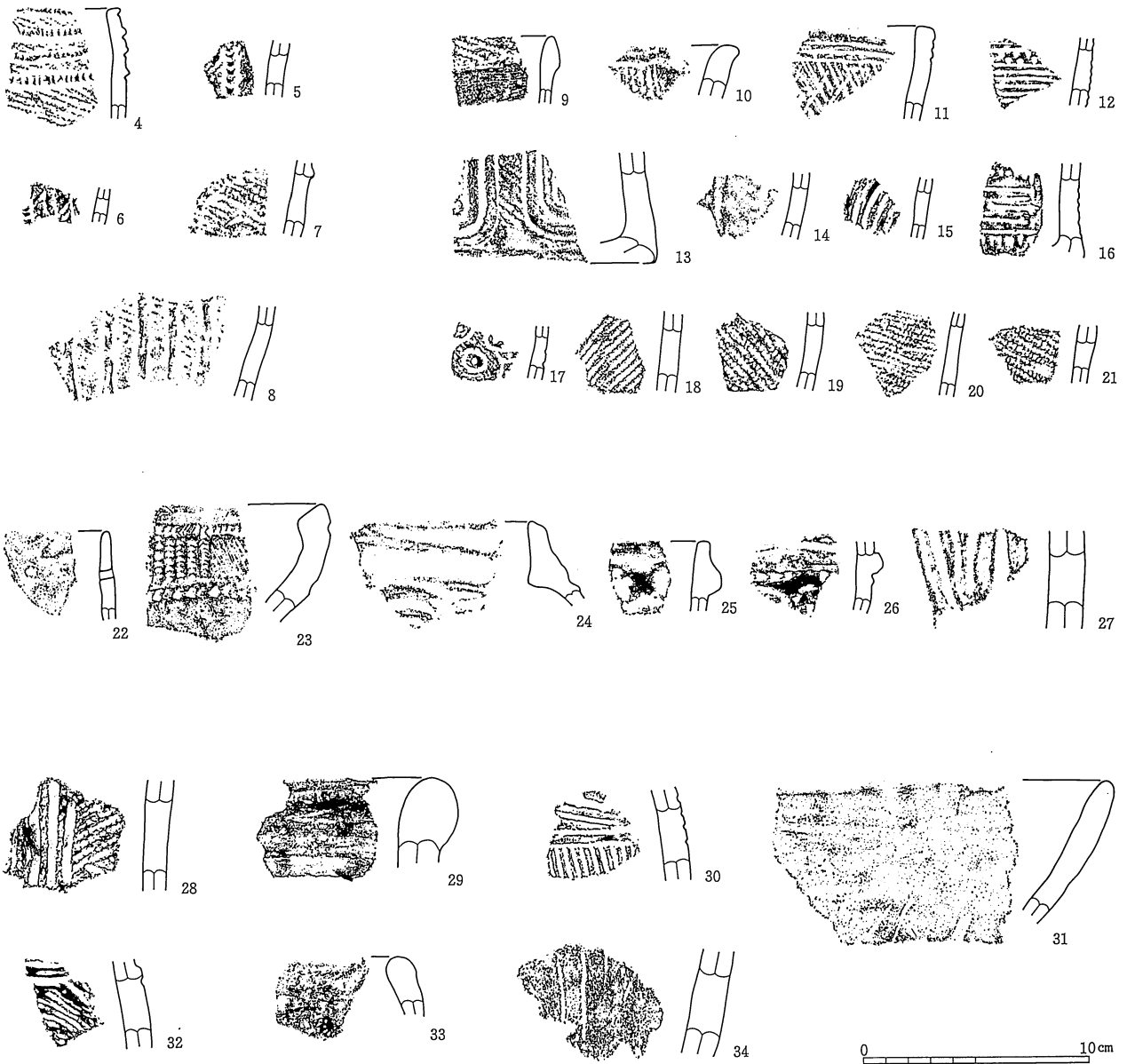
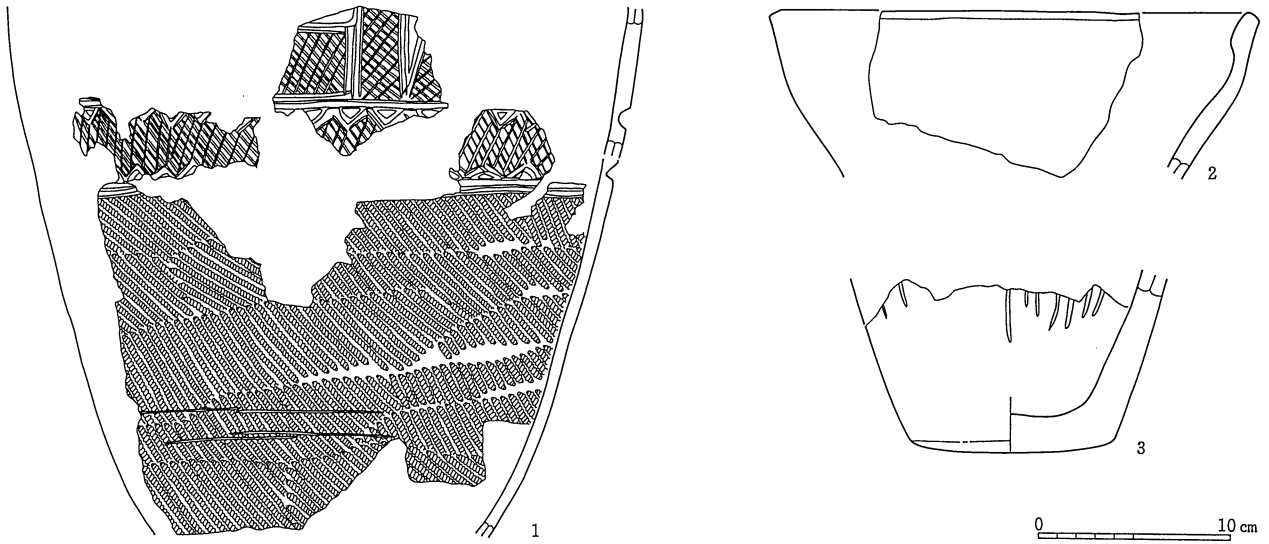
土器群だけ記述しておく。石器は表2を参照されたい。

1は中期初頭の五領ヶ台I式併行の深鉢、2は金雲母が多数混入しており中期中葉の浅鉢、3も同期のものか。4～8は前期末の北白川下層式III段階の所産である。

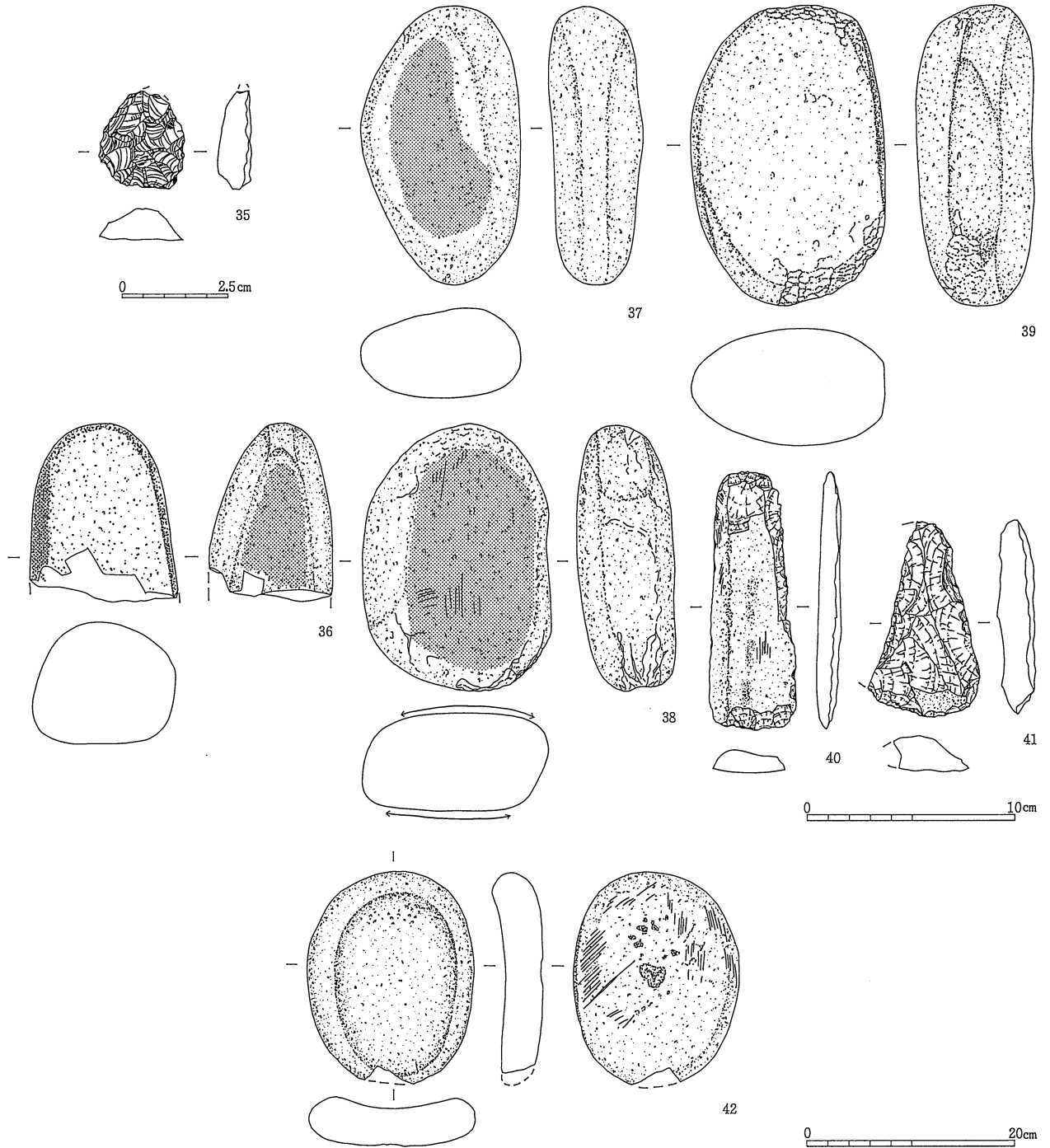
以下、すべての資料が正確とは限らないが、9～21は中期初頭の五領ヶ台式併行の一群、22～27は中期中葉の一群、28～34は中期後葉の一群である。

第4節 小 結

遺跡が連続するような緩斜面はここで尽きてしまうので、おそらく遺跡の最北端部を知ることになった。一般には、縄文時代中期中葉から後期中葉の大遺跡群と認識されてきたが、ここでは小規模ながらも、前期末や中期初頭の集落の存在が判明したのである。とりわけ中期初頭の土坑群は群在化し、一定の



第11圖 遺構外出土遺物(1)



第12図 遺構外出土遺物(2)

規模を把握できた点、大きな意味がある。ここで検出されたのは2号竪穴住居跡だけだが、さらに数棟の住居が建ち並び、こうした土坑群を成立させたものと考えられる。いずれにせよ、前期末にしても中期初頭にしても、南方に広がる遺跡中心部とはまったく別の小集落を形成していたに違いない。また、3号竪穴住居跡については、遺存状況のよい土器が出土しているにもかかわらず、中期中葉か後葉かもわからなかった。これについては、今後の研究課題としておきたい。

引用参考文献

小諸市誌編纂委員会編 1974 『小諸市誌 考古篇』小諸市教育委員会

小諸市教育委員会 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』

桜井秀雄 1998 「3 南平遺跡にみられる二種の陥し穴」『南平遺跡発掘調査概報』原村教育委員会

保坂康夫 1990 『丘の公園第5遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会

表1 土坑観察表

遺構番号	長軸長	短軸長	深さ	備 考	遺構番号	長軸長	短軸長	深さ	備 考
1号土坑	1.08	1.00	0.28		37号土坑	0.73	0.69	0.19	
2号土坑	1.04	1.03	0.39		38号土坑	0.72	0.68	0.23	
3号土坑	1.38	1.23	0.54	4号土坑と重複	39号土坑	0.80	0.78	0.25	
4号土坑		0.75	0.39	3号土坑と重複	40号土坑	0.94	0.89	0.33	
5号土坑	0.87	0.77	0.39		41号土坑	0.88	0.83	0.39	
6号土坑	1.10	1.06	0.42		42号土坑	0.86	0.82	1.33	下端オーバーハング
7号土坑	1.28	0.96	0.41		43号土坑	0.94	0.93	0.48	
8号土坑	0.93	0.90	0.30		44号土坑	1.03	1.01	0.25	45号土坑と重複
9号土坑	1.12	1.06	0.75		45号土坑	1.05	0.99	0.31	44号土坑と重複
10号土坑	1.36	1.27	0.38		46号土坑	0.77	0.71	0.21	
11号土坑	0.83	0.77	0.20		47号土坑	1.06	0.99	0.43	
12号土坑	1.06	1.01	0.38		48号土坑	1.37	1.23	0.36	
13号土坑	0.43	0.34	0.39	14号土坑と重複	49号土坑	1.19	1.07	0.40	
14号土坑	1.08	0.91	0.42	13号土坑と重複	50号土坑				1号陥し穴に振り替え
15号土坑	1.02	0.94	0.53		51号土坑	1.03	0.98	0.33	
16号土坑	0.83	0.72	0.54		52号土坑	0.84	0.83	0.29	
17号土坑	0.86	0.69	0.28		53号土坑	0.89	0.89	0.35	
18号土坑	1.01	0.99	0.28		54号土坑	0.88	0.82	0.38	
19号土坑	1.09	1.04	0.33		55号土坑	0.82	0.80	0.43	
20号土坑		0.72	0.23	21号土坑と重複	56号土坑	1.06	0.96	0.33	
21号土坑	0.99		0.19	20号土坑と重複	57号土坑	0.95	0.84	0.47	
22号土坑	0.66	0.65	0.21		58号土坑	0.94	0.91	0.31	
23号土坑	0.87	0.86	0.33		59号土坑	0.81		0.23	
24号土坑	0.67	0.66	0.26		60号土坑	0.72	0.68	0.15	
25号土坑	0.85	0.82	0.44		61号土坑	1.21	1.19	0.44	
26号土坑	0.57	0.56	0.19		62号土坑	0.99	0.95	0.47	
27号土坑	0.55	0.54	0.21		63号土坑	1.08	1.07	0.27	
28号土坑	0.80	0.73	0.27		64号土坑	0.84	0.83	0.20	
29号土坑	0.76	0.75	0.40		100号土坑	0.82	0.78	0.48	
30号土坑	1.00	0.94	0.32		101号土坑	1.31	1.30	0.30	
31号土坑	0.74	0.61	0.54	32号土坑と重複	102号土坑	1.38		0.40	
32号土坑	0.98		0.30	31号土坑と重複	103号土坑	0.96	0.91	0.36	
33号土坑	0.56	0.54	0.17		104号土坑	1.01	0.92	0.52	
34号土坑	0.63		0.33		105号土坑	0.82		0.34	106・107号土坑と重複
35号土坑	1.01	0.93	0.63		106号土坑		0.52	0.22	105号土坑と重複
36号土坑	0.74	0.70	0.20		107号土坑	0.72		0.24	105号土坑と重複
					108号土坑	0.74	0.65	0.28	

表2 石器観察表

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1住-8	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.4	
1住-9	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.5	0.5	
1住-10	石鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.8	
1住-11	石鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.8	
1住-12	石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.6	1.8	
1住-13	石鏃未製品	ガラス質安山岩	2.3	2.0	0.6	2.1	
1住-14	石鏃未製品	ガラス質安山岩	3.2	2.2	0.6	4.2	
1住-15	石鏃未製品	黒曜石	2.7	2.0	0.6	2.7	
1住-16	石鏃未製品	黒曜石	2.4	1.6	0.6	1.7	
1住-17	石錐	黒曜石	1.9	1.0	0.4	0.7	
1住-18	打製石斧	千枚岩質粘板岩	8.2	5.6	1.4	102.0	
2住-16	石鏃	黒曜石	1.7	1.3	0.5	0.6	
2住-17	石鏃未製品	黒曜石	1.8	1.4	0.5	0.9	
2住-18	石鏃未製品	黒曜石	2.0	1.5	0.6	1.6	
2住-19	磨石	安山岩	9.5	6.4	6.2	552.2	側面中央に敲打痕有り
2住-20	スクレイパー	千枚岩質粘板岩	6.0	4.3	1.6	53.8	
2坑-3	石鏃	黒曜石	2.2	1.1	0.4	0.6	
3坑-1	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.3	0.7	
16坑-2	石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.6	1.1	
25坑-2	スクレイパー?	ガラス質安山岩	6.6	6.3	1.7	91.6	打製石斧片?
35坑-4	打製石斧	千枚岩質粘板岩	6.9	3.2	1.6	49.6	
遺構外-35	スクレイパー	黒曜石	2.4	2.0	0.8	3.2	
遺構外-36	特殊磨石	安山岩	8.4	6.7	5.9	492.2	
遺構外-37	磨石	安山岩	13.4	7.7	4.1	643.9	
遺構外-38	磨石	安山岩	14.2	9.3	5.5	1238.0	
遺構外-39	磨石	安山岩	12.8	8.8	4.5	841.8	両端に敲打痕有り
遺構外-40	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.2	4.0	1.0	69.4	
遺構外-41	打製石斧	硬砂岩?	9.3	5.1	1.5	70.5	
遺構外-42	石皿	安山岩	19.3	15.7	3.9	2084.2	

第9章 にしまるやま 西丸山遺跡

第1節 遺跡の概観

小諸市大字菱平字西丸山に所在する。丸山と称される小丘を挟んで、第8章で記した東丸山遺跡が存在する。高峰山から南に下りおりる幅広い緩斜面に位置しており、まさに日当たりと景観の良い場所である。畑地として利用されているが、所々に宅地も見受けられる。

一見、遺跡を営むには手頃な場所と思われがちだが、わずかに平安時代の遺物散布地として、狭い範囲を西丸山A・B・Cとして、3か所の遺跡が周知されているに過ぎない（小諸市教育委員会1987）。事前踏査を試みたが、遺物はまったく拾えず終いで、比較的小規模な存在であったものと思われる。もちろん、これまで調査されたことはない。

第2節 調査の概要

上信越自動車道は、小諸市教育委員会がいうところの西丸山C遺跡の北端部を横断することになり、1,000㎡が調査対象となった。ただし、1,000㎡といっても、筆境で示される数枚の畑がその範囲であった、実際には緩斜面自体に小地形の変化がさほど認められない状況にあった。したがって、まず緩斜面全体の試掘調査を行い、遺跡の実態を把握し本調査に当たるよう計画した。

試掘調査は、すべて手掘りによるトレンチ調査で行った。平成3年5月28日に開始し、6月19日にすべて終了したが、結果、もっとも東端の丸山寄りの西向き斜面のみ遺構・遺物を検出した。また、本来対象となるべき西丸山C遺跡の箇所では、切土されており遺構・遺物とも存在しなかった。

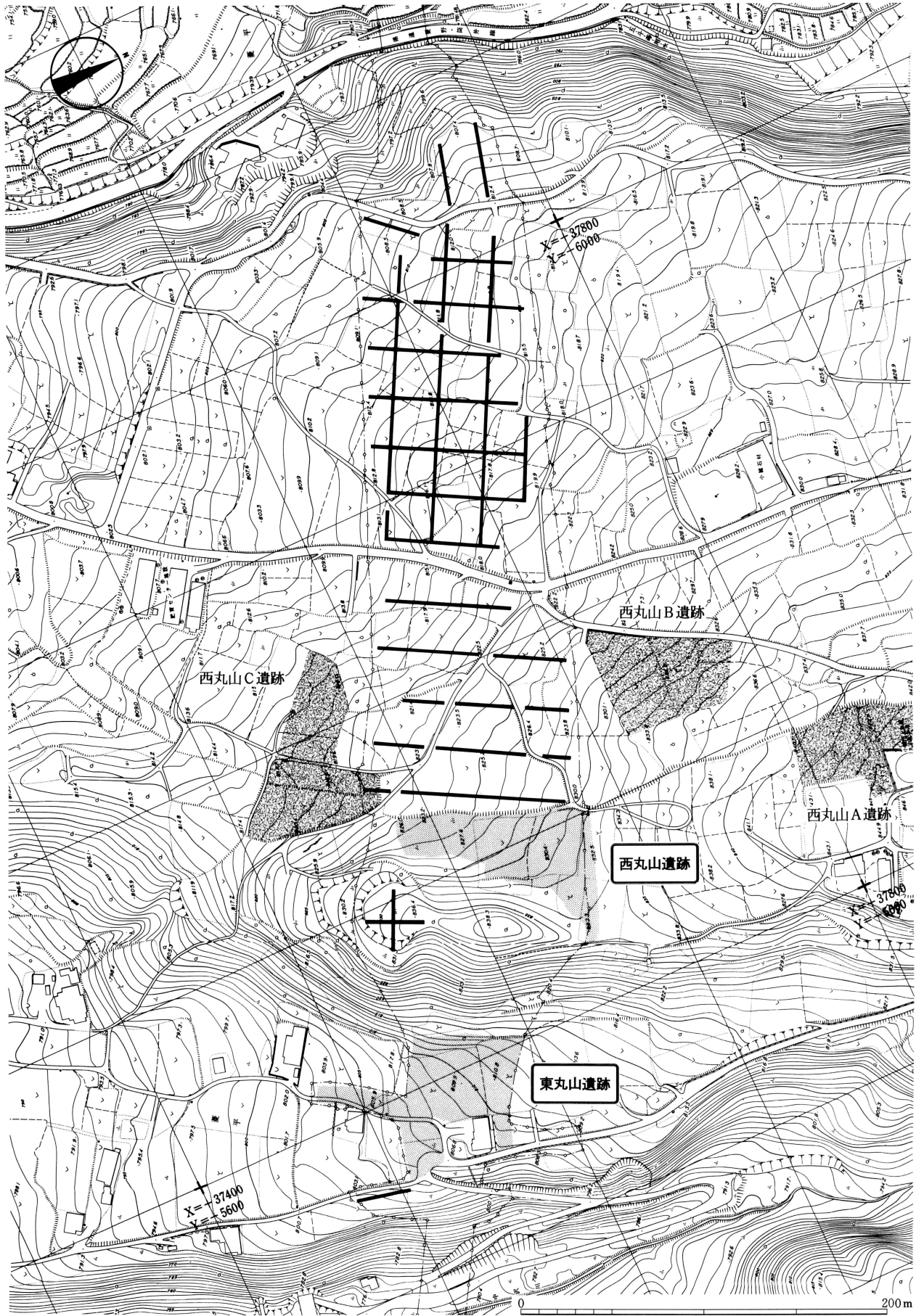
この結果から、西丸山C遺跡とはまったく別の場所で、2,800㎡の調査対象面積が必要であり、また、これらをすべてまとめて西丸山遺跡と称した。

面的調査は6月10日から8月8日までの期間に行った。東丸山遺跡と同時併行で行ったので、途中期間をあけた場合もあった。縄文時代の可能性が高い土坑43基が検出できた。

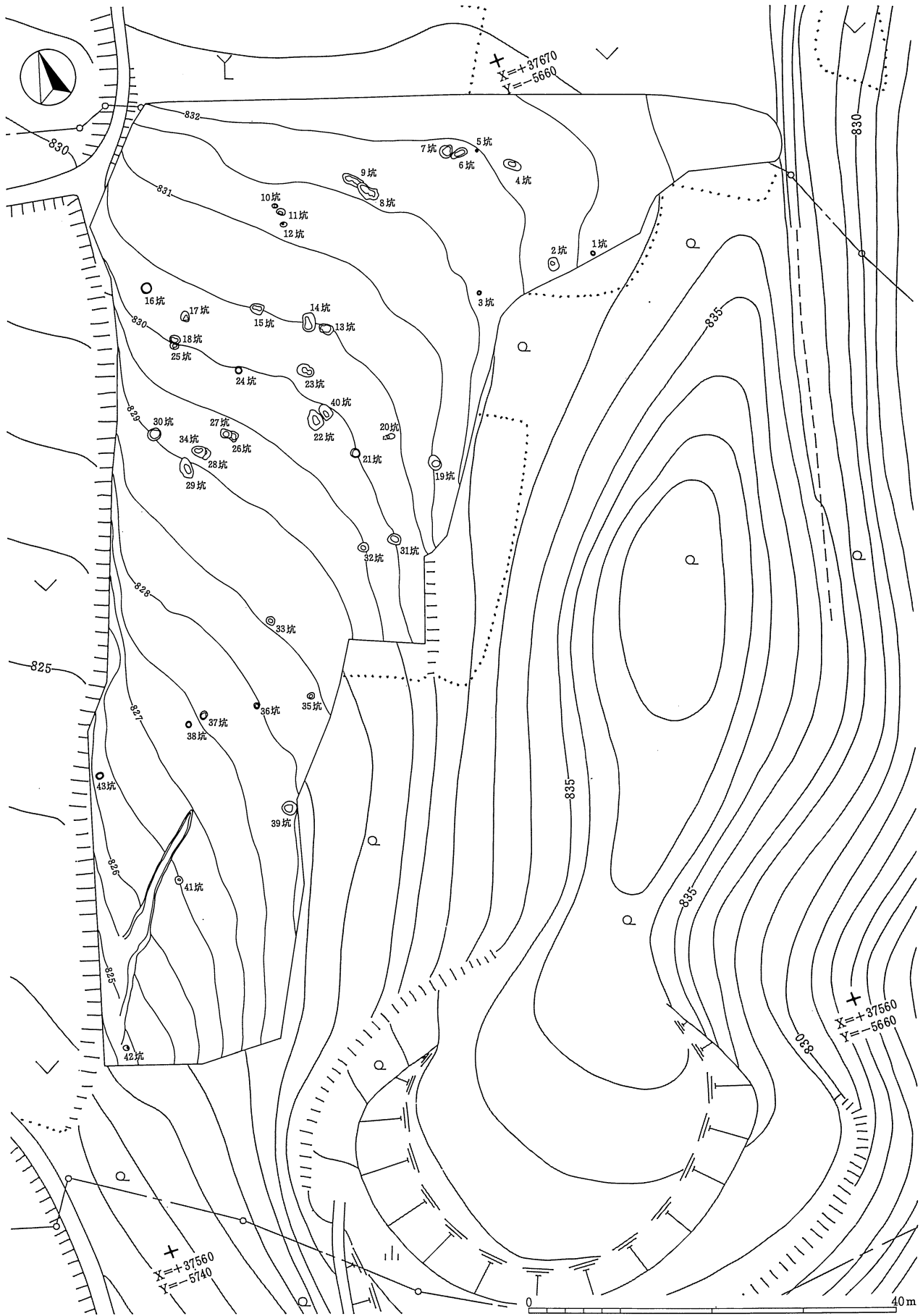
調査日誌抄

平成3年度

5月28日	本日より調査開始。手掘りによる試掘調査から行う。	6月18日	調査区内の精査に着手。
5月29日	東端部から土坑1基を確認。調査対象区外だが本調査必要性ありと判断。	6月19日	試掘調査終了。市道7035号線以西は遺構・遺物ともなし。
6月3日	西丸山C遺跡は切土されており、遺構・遺物とも存在しないことが判明。	6月21日	遺構掘削を開始。
6月5日	市道7035号線以東までの試掘調査終了。丸山寄りの西向き斜面のみ本調査が必要と判断。	7月2日	全掘作業終了。
6月6日	試掘調査を市道7035号線以西に移動。	7月4日	完掘状態の写真撮影終了。以後、基準杭が設定されるまで東丸山遺跡に移動。
6月10日	表土剥ぎ開始。	7月17日	基準杭設定開始。
		7月25日	平面図作成。
		8月8日	調査終了。



第1図 調査範囲



第2図 遺構配置

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 土坑 (第3～5図、P L234)

土坑43基を確認した。そのうち、遺物が伴出したのは、唯一、8号土坑の覆土上層に縄文時代の打製石斧が認められただけである。だからといって、決して縄文時代に相当するものとは限らないのだが、遺構外遺物は縄文時代以外には何もなく、また覆土全体も、周辺の遺跡で認められるような古代以降の粘り気の強いようなものではなく、縄文時代特有の緻密なものであった。遺構外遺物はすべて縄文時代中期後葉加曾利EⅢ式のもので、これに相前後する産物ではないかと考えている。

これら土坑は非常にバリエーションが多く、一概に類型化は無理である。一般に集落を調査している際に検出される土坑とは異なり、かなり不規則な掘り方のものが多い。しかし、決して風倒木痕のようなものを調査したわけではなく、すべてきれいな壁面をもつもので、明らかに人為的な掘り込みと思われる。集落に認められるような比較的大形の土坑といえば、16・30・31・39号土坑が精々で、一般には規模から始まり、平面形・断面形にもバラツキが目立ち、一見してかなりの見劣りがする。

覆土は小土坑を除いて確認しているが、39号土坑を除いては自然埋没と考えている。39号土坑には、覆土上層にも純粋なロームブロック層が分厚く確認されたので一応人為的埋没、その他は仮に分層されても、最下層に溜まる壁崩落土や三角堆積する通常の細砂壤土であり、自然埋没土と考えた。

13・15号土坑内には礫が伴出している。実測していないが、そのほかにも礫を伴ったものもある。ただし、礫自体、自然に包含されているものなので人為的かどうかは不明である。

土坑群は一部重複しているが、概ね散在傾向にある。地形の状況からすると、南側は終焉し、逆に北側では広範な広がりが見られる。

2 遺構外出土遺物 (第6図、P L234)

これ以外に遺構外から出土した遺物はない。すべて、本調査対象地点の試掘調査から出土したもので、さらに西側の試掘部分から出土したものではない。

4点とも縄文時代中期後葉、加曾利EⅢ式期の深鉢形土器である。

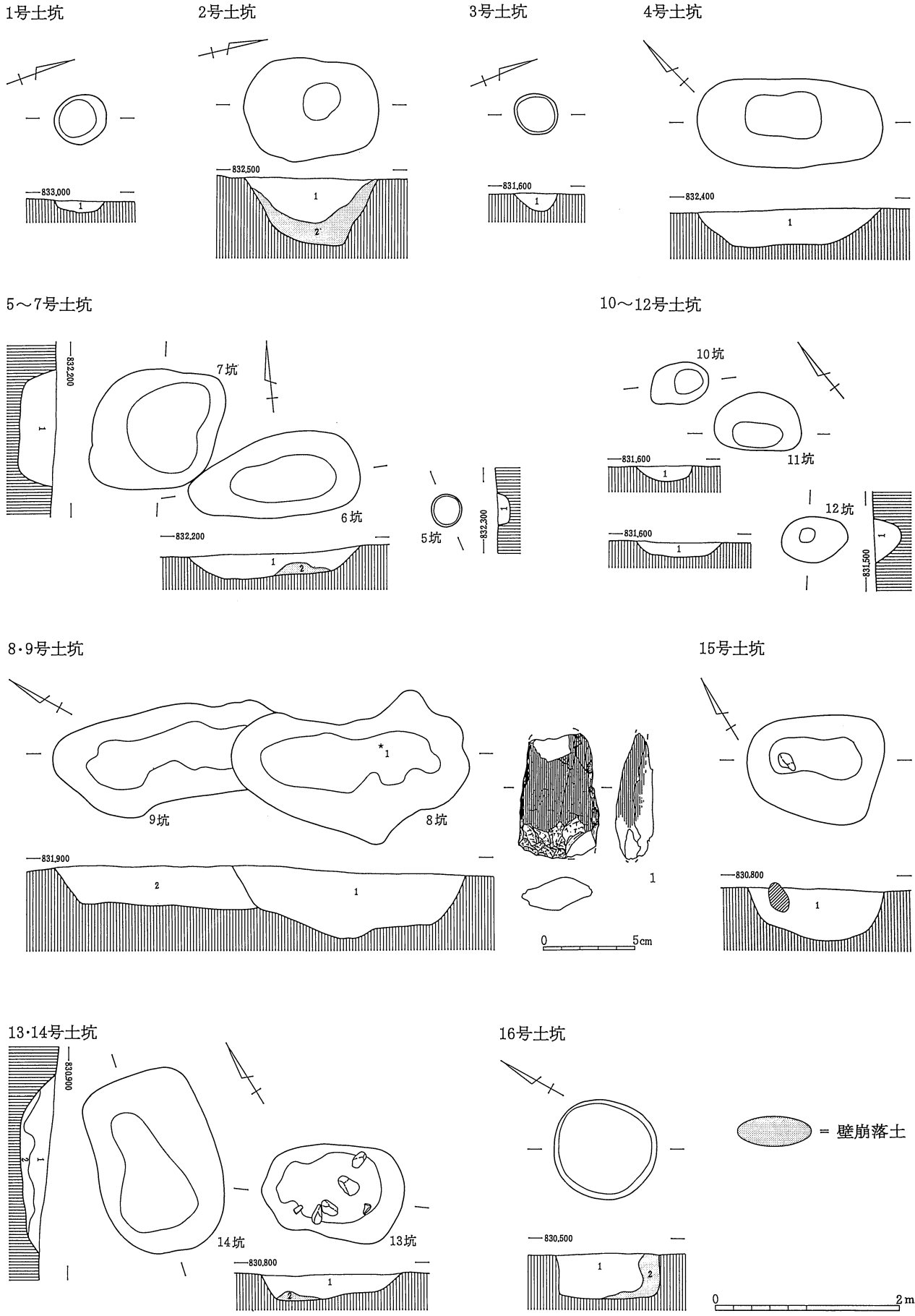
第4節 小 結

覆土の様相や8号土坑の伴出遺物、及びわずかながらの遺構外遺物から縄文時代中期後葉頃の遺構と判断したがいかがであろうか。時期的な識別はさておいて、いずれの時代・時期においても一般的な集落とはまったく形態の異なる土坑がほとんどであり、実際に住居跡は出ておらず、遺物自体も貧弱極まりないのである。集落とはまったく別の土坑群と考えるのが妥当だろう。

では、一体いかなる機能を果していたのであろうか。知る術をしらないが、やはり何らかの生業活動に関連したものではないかという考えしか思いつかない。集落外でのこのような不定型極まりない土坑群の意味を考えるのも、今後のひとつの課題と考えられる。

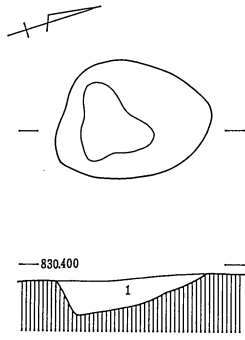
引用参考文献

小諸市教育委員会 1987 『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』

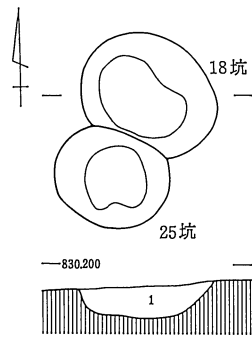


第3图 土坑(1)

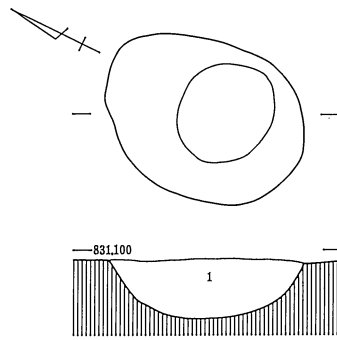
17号土坑



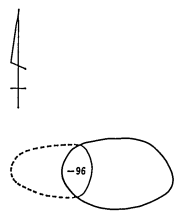
18・25号土坑



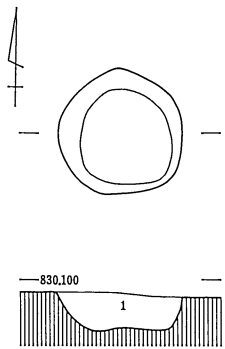
19号土坑



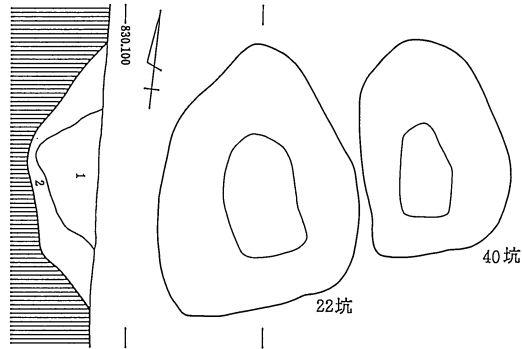
20号土坑



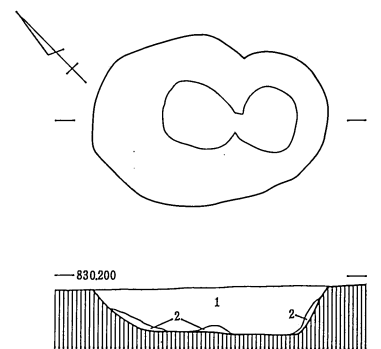
21号土坑



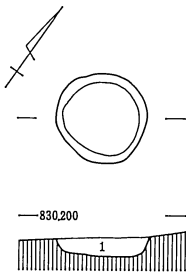
22・40号土坑



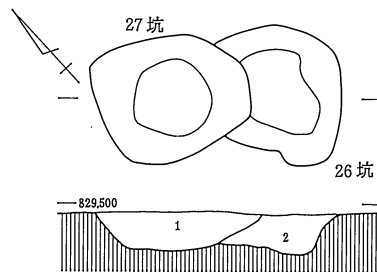
23号土坑



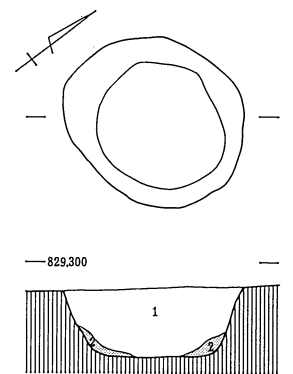
24号土坑



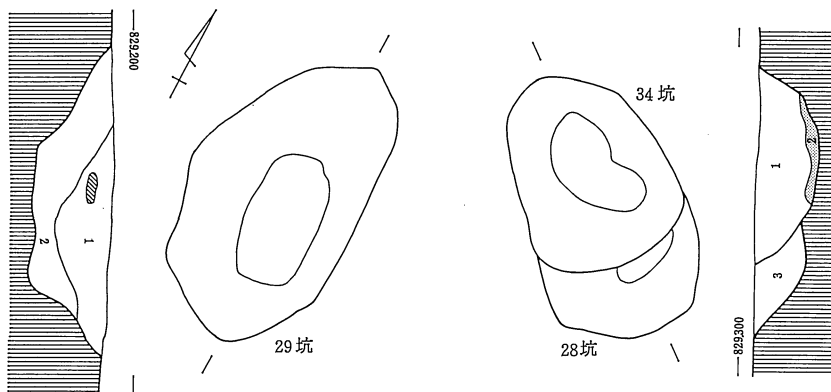
26・27号土坑




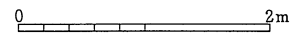
30号土坑



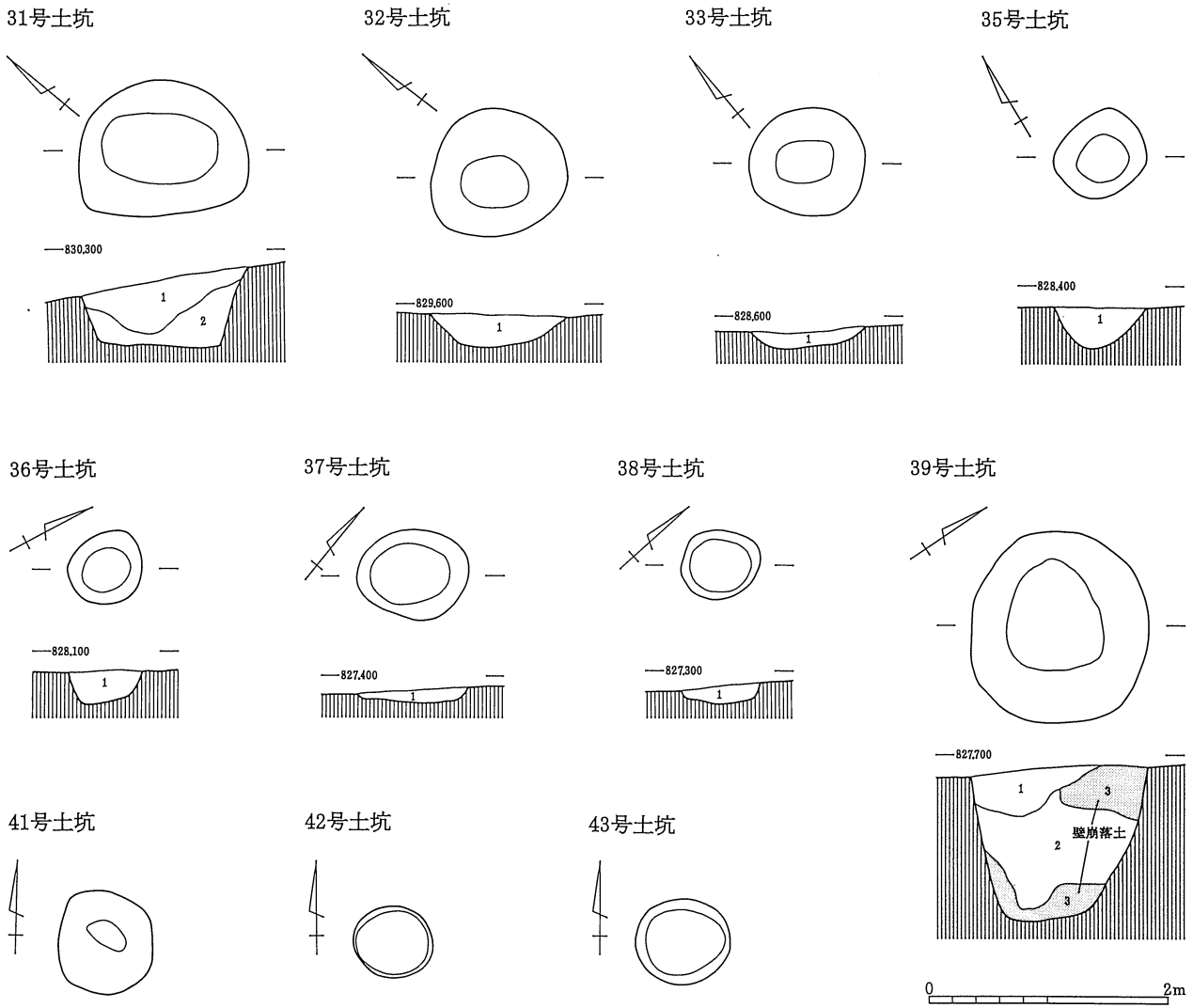
28・29・34号土坑



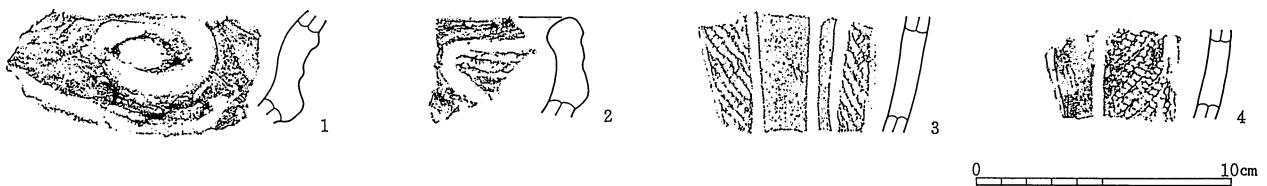
 = 壁崩落土



第4图 土坑(2)



第5圖 土坑(3)



第6圖 遺構外出土遺物

表1 土坑観察表

遺構番号	長軸長	短軸長	深さ	備 考	遺構番号	長軸長	短軸長	深さ	備 考
1号土坑	0.59	0.53	0.30		22号土坑	2.20	1.59	0.61	
2号土坑	1.46	1.05	0.64		23号土坑	1.87	1.36	0.60	
3号土坑	0.46	0.45	0.21		24号土坑	0.74	0.73	0.26	
4号土坑	2.03	0.96	0.57		25号土坑	0.91	0.75	0.45	18号土坑と重複
5号土坑	0.34	0.31	0.16		26号土坑		0.99	0.41	27号土坑に切られる
6号土坑	1.87	0.92	0.37		27号土坑	1.22	1.00	0.37	26号土坑を切る
7号土坑	1.38	1.31	0.39		28号土坑		1.29	0.43	34号土坑に切られる
8号土坑	2.61	1.18	0.72	9号土坑を切る	29号土坑	2.49	1.41	0.82	
9号土坑		1.02	0.53	8号土坑に切られる	30号土坑	1.44	1.26	0.72	
10号土坑	0.61	0.45	0.23		31号土坑	1.38	1.13	0.73	
11号土坑	0.96	0.46	0.42		32号土坑	1.16	1.08	0.57	
12号土坑	0.72	0.50	0.42		33号土坑	0.96	0.91	0.25	
13号土坑	1.56	1.04	0.37		34号土坑	1.52	1.18	0.67	28号土坑を切る
14号土坑	2.01	1.31	0.46		35号土坑	0.75	0.64	0.30	
15号土坑	1.43	1.17	0.69		36号土坑	0.63	0.58	0.36	
16号土坑	1.13	1.08	0.55		37号土坑	0.96	0.78	0.35	
17号土坑	1.25	0.95	0.35		38号土坑	0.60	0.60	0.17	
18号土坑	1.11		0.31	25号土坑と重複	39号土坑	1.60	1.50	1.28	
19号土坑	1.67	1.24	0.56		40号土坑	1.69	1.17	0.56	
20号土坑	0.89	0.56	0.96		41号土坑	0.90	0.86	0.54	
21号土坑	0.99	0.97	0.34		42号土坑	0.68	0.57	0.23	
					43号土坑	0.78	0.72	0.25	

表2 石器観察表

図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8坑-1	打製石斧	千枚岩質粘板岩	6.6	4.1	1.9	62.7	

第10章 ふかさわ 深沢遺跡群

第1節 遺跡の概観

小諸市大字滋野甲字東原312番地ほかに所在する。烏帽子火山群の裾野をなし、深沢川の形成する押出扇状地上の緩やかな傾斜地に位置する。南を流れる千曲川に向かってゆるやかに傾斜し、東側は深沢川が浸食した深い峡谷で切られている。標高は720～730m程度をはかる。

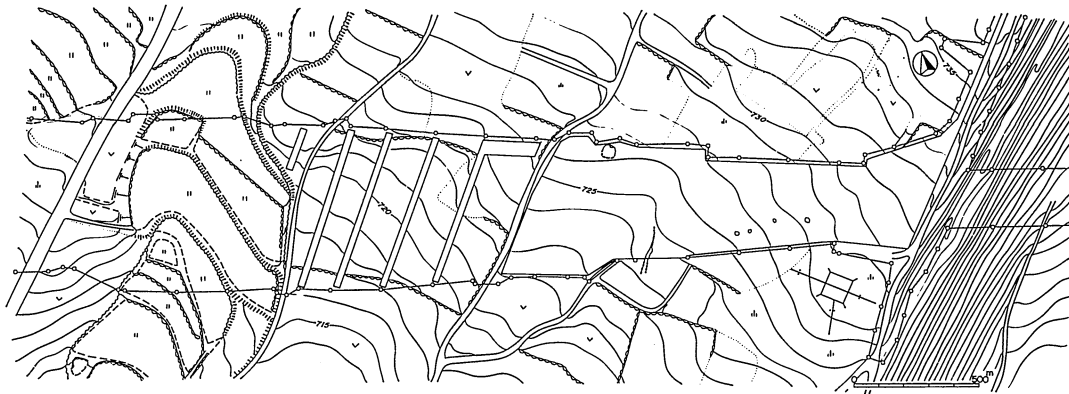
昭和59年には小諸市教育委員会によって一部試掘調査が行われており、弥生時代後期の土器片が出土したが、遺構は検出されていない^(註1)。

第2節 調査の概要

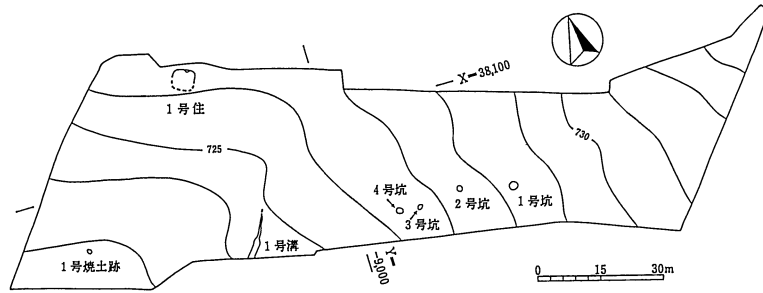
平成4年11月24日から12月18日にかけて調査した。調査はまず、地形の傾斜に沿って本線を横断する方向に重機による13本のトレンチを入れ、その結果を踏まえて面的調査範囲を確定した。調査面積は本線部分の8000㎡と小諸市から委託された市側道拡幅部分890㎡を合わせた計8890㎡である。なお、遺構測量は高速道建設工事用の幅杭から導き出した国家座標に基づき、平板測量にて実施したため、埋文センターで定めたグリッド設定は行っていない。

調査日誌 (抄)

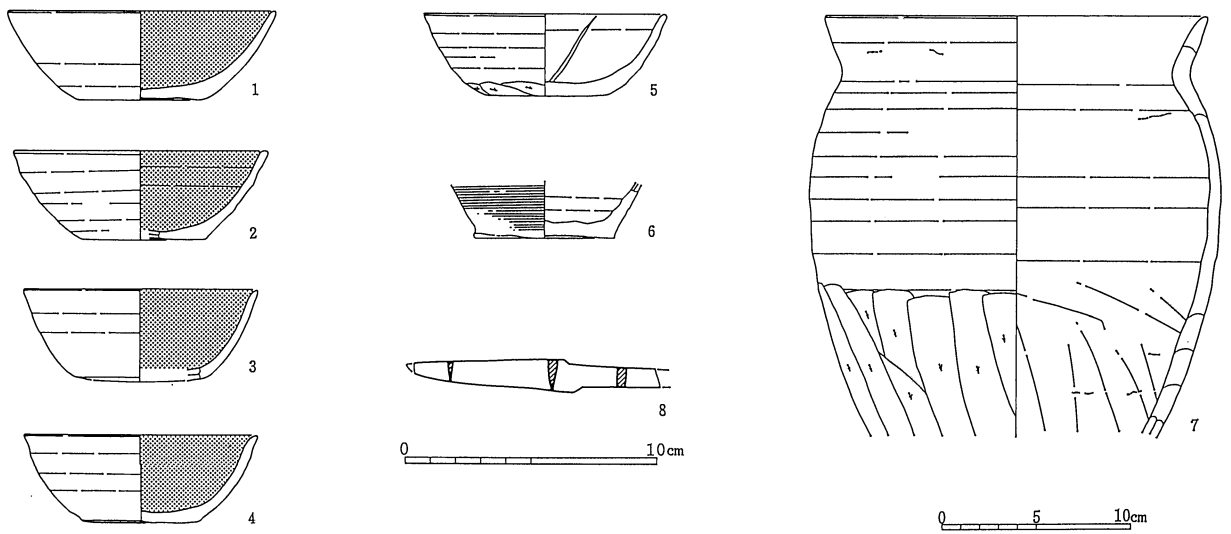
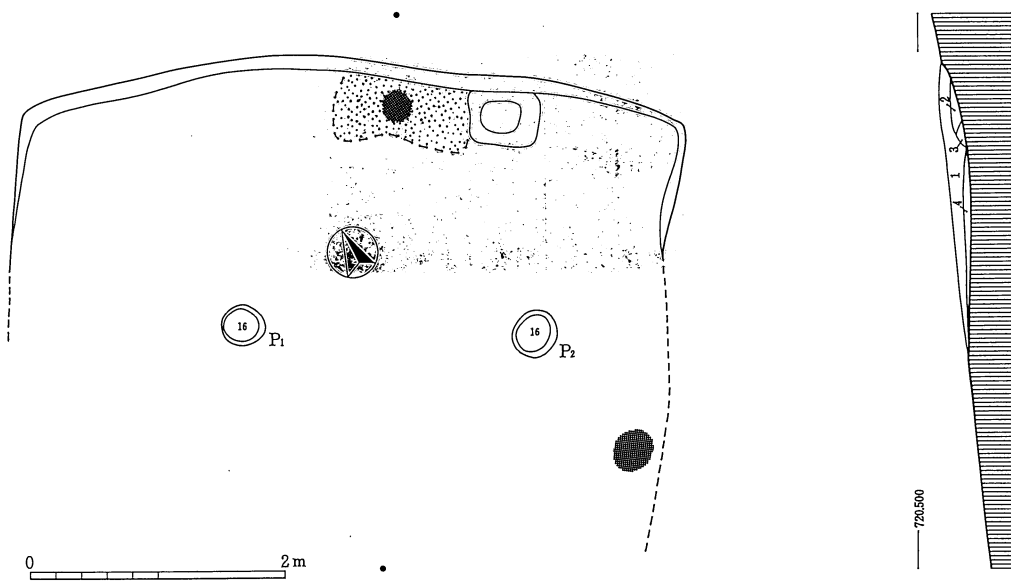
平成4年		11月26日	2基目の土坑、溝状の遺構検出。
11月24日	調査開始。担当は藤原直人調査研究員、青沼博之所長、白田武正課長。重機によるトレンチ掘削開始。黒褐色土の落ち込みが確認され、一定範囲は表土はぎに切り替える。	12月8日	遺構の掘り下げを開始。
		12月9日	平面図実測作業開始。
		12月12日	竪穴住居跡、焼土跡を検出。土坑は4基を数える。
11月25日	落ち込みは土坑と判断。県文化課市沢・春日両指導主事が来訪。	12月18日	1住の床下調査。発掘機材搬出。調査終了。



第1図 深沢遺跡群調査範囲図 1 : 3000



第2図 深沢遺跡群遺構配置図 1:1800



第3図 1号竪穴住居跡とその出土遺物 (1~7=1:4、8=1:3)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1号土坑（第4図、PL236）

遺構：規模は、径123×115cmの円形を呈し、深さは115cmを測る。覆土は9層に分けられ、1層は小礫を含み粘性のある黒色土（7.5YR1/2）、2層はφ1～10cm程の小礫を含み粘性の強い暗褐色土（7.5YR3/3）、3層は微小な小礫を含み粘性の少ない黒褐色土（7.5YR3/1）、4層は微小な小礫を多量に含みしまりのよい暗褐色土（7.5YR3/4）、5層は粘性の強い褐色土（7.5YR4/6）、6層はφ5～15cm程の礫を含む灰褐色土（7.5YR4/2）、7層はやや砂質の褐色土（7.5YR4/3）、8層は粘性のある灰褐色土（7.5YR4/2）、9層は粘性のある褐色土（7.5YR4/4）である。性格は不明であるが、陥し穴の可能性も考えられる。

遺物・時期：打製石斧1点（第4図一1）が検出されたのみである。柄部が欠損しているが、残存部の長さ7.2cm、幅3.7cm、厚さ1.3cmを測る。土器が出土していないため、縄文時代であると判断できる以上の細分はできない。

第4節 平安時代の遺構と遺物

1号竪穴住居跡（第3図、PL236）

遺構：規模は、東西方向5.2m、南北方向は南側が削平されているため、約3m程の残存部を測るのみであり、不明である。深さも最大で約20cm程を測るにすぎない。平面プランは残存部から方形を呈することが理解できる。覆土は5層に分けられる。1層はしまりがなくローム粒を少量含む黒褐色土（7.5YR3/1）、2層はにぶい赤褐色土（5YR4/4）を帯びるカマドに伴う焼土、3層はしまりのない砂質の暗褐色土（7.5YR3/3）、4層はφ1～2cm程のローム粒が多量に含み固くしまる暗褐色土（7.5YR3/3）であり貼床であると考えられる。5層は黄褐色土のローム土（10YR5/6）であり、地山である。床は平坦であるが硬化面は認められなかった。カマドは北壁に設置したものと考えられるが、破壊が著しく焼土が散布しているにすぎない。カマドの東脇には2～3cm程の落ち込みを有するピット状の施設がみられる。ピットは2ヶが検出されており、いずれも柱穴として理解できよう。

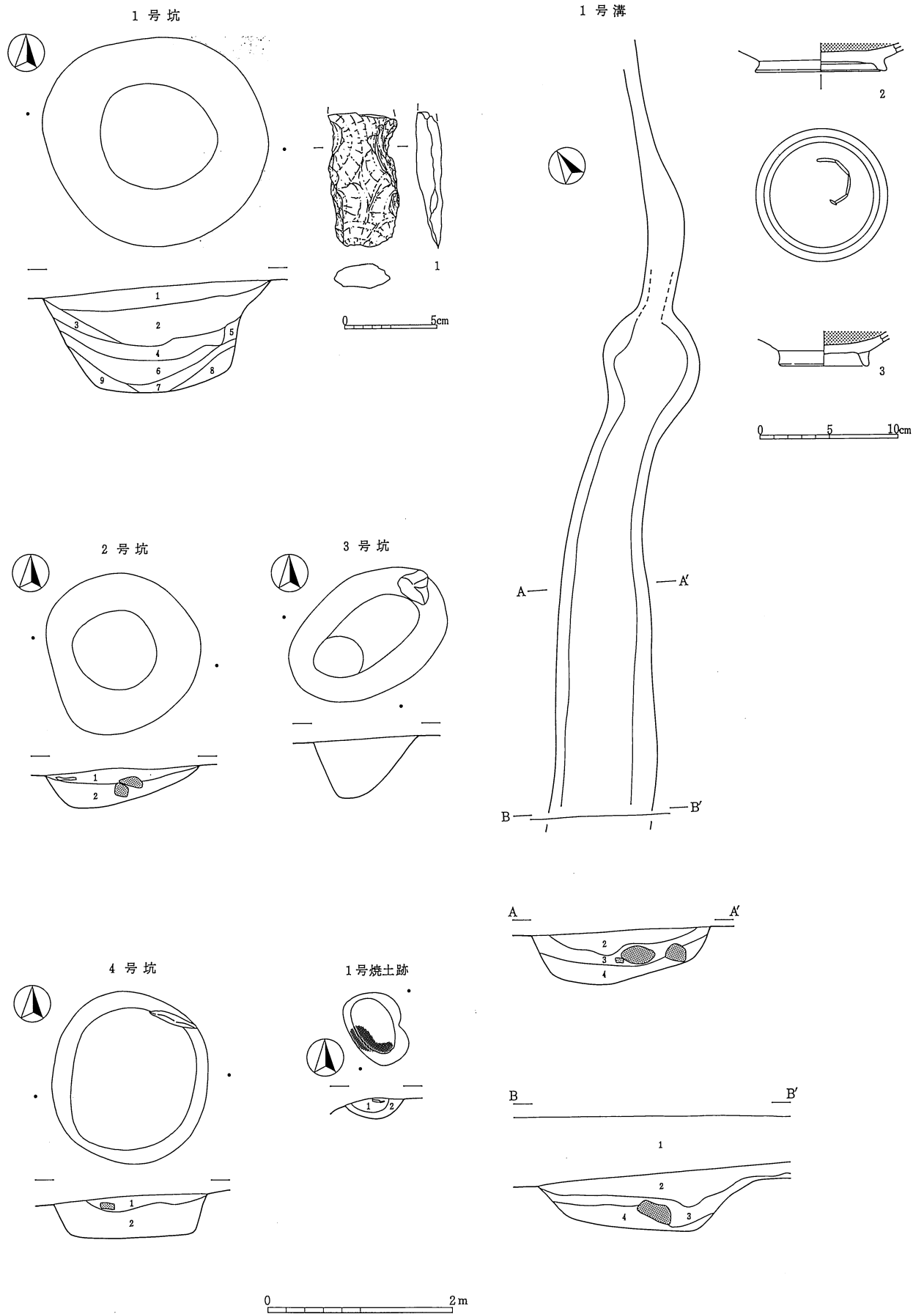
遺物：1～7の土器はすべて土師器である。1～4は内面黒色坏。1～3は口縁のみにミガキを施す。4にはミガキはみられず、底部は手持ちヘラケズリである。5の坏もミガキがみられず、底部は手持ちヘラケズリである。6は底部のみの残存である。7は底部を欠した甕である。8は鉄製刀子である。1・4・5はカマド内出土。2は床面・カマド内・床下の3か所からの出土破片が接合したものである。3は覆土からの出土。6は床面出土。7はカマド内及び床面出土の破片が接合したものである。8は床面からの出土。

時期：10世紀代前半頃に比定できよう。

1号溝（第4図、PL236）

遺構：幅は15～110cmに、長さは調査区内で約8.4mが確認されており、調査区外にも続いている。深さは約60cm程を測る。覆土は4層に分けられ、1層は耕作土、2層はパミス・ローム粒をほとんど含まず、粘性を帯びる黒色土（7.5YR2/1）、3層はローム粒を比較的多く含み、粘性をわずかに帯びる黒褐色土（10YR2/2）、4層はφ1～15cm程の礫を含む暗褐色土（7.5YR3/4）である。

遺物：土師器の内面黒色坏2点が出土した。いずれも底部のみの残存である。1の底面には押し引きによ



第4図 土坑・溝・焼土跡とその出土遺物 (1 = 1 : 3、2・3 = 1 : 4)

る線刻がなされている。

時期：10世紀代前半頃に比定できようか。

第5節 時期不明の遺構

遺物が検出されなかったため、時期の決定ができなかった土坑3基と焼土跡1基をここでとりあげる。

2号土坑（第4図、PL236）

規模は径85cmのやや不整な円形を呈し、深さは40cmを測る。覆土は2層にわけられ、1層は小礫を含み粘性のある黒色土（7.5YR2/1）、2層はφ1～10cm程を多量に含み粘性の強い暗褐色土（7.5YR3/3）であり、固くしまっており自然堆積だと考えられる。

3号土坑（第4図、PL236）

規模は径90×65cmの楕円形を呈し、深さは65cmを測る。覆土は下部にロームブロック、上部に褐色ブロックを含む暗褐色土（7.5YR3/3）であり、人為的な堆積の可能性がある。

4号土坑（第4図、PL236）

規模は径93×83cmの円形を呈し、深さは50cmを測る。覆土は2層に分けられ、1層は小礫を含み粘性のある黒色土（7.5YR2/1）、2層はφ1～8cm程の小礫を少量含み、粘性のある黒色土（7.5YR2/1）であり、自然堆積と考えられる。

1号焼土跡（第4図、PL236）

およそ85×65cm程度の範囲に焼土が散布していたため、焼土跡として理解したものである。焼土は深さ25cm程が堆積しており、2層に分けられる。1層は暗赤褐色土（5YR3/6）、2層は暗赤褐色土（5YR3/3）である。

第6節 小 結

今回の調査によって、縄文時代は土坑1基、平安時代は竪穴住居跡1基と溝1基、それに時期は不明であるが、土坑3基と焼土跡1基が検出された。本遺跡は、遺物の散布地であることは従来から認識されていたが、今回の調査で遺構が確認されたことの意義は大きいといえよう。遺物散布地はこの周辺にも広がっているため、工事路線外にも遺構が存在するという可能性が十分に考えられよう。

（註1） 小諸市教育委員会の花岡弘氏のご教示による。

第11章 結 語

本書で報告した8遺跡は平成3年度～7年度にかけて発掘調査を実施したものであり、調査開始からちょうど10年の歳月を経て、ここに報告書刊行に至ることができた。本格的な整理作業は平成7年度～10年度までの期間であったが、途中平成8年度の一時期と平成9年度には整理担当者の、他遺跡の発掘調査への従事及び市町村への派遣のために、整理作業を中断せざるをえない時期も続いた。しかしながら多くの関係者のご尽力により業務の遂行をなしえることができた。ここに感謝申し上げたい。

また、本書の刊行をもって、佐久調査事務所で実施した佐久I.C～小諸I.C間の18遺跡の発掘調査業務はすべて終了することになる。

本書掲載の8遺跡は三子塚遺跡群を除いて縄文時代がその中心となっている。そうした点を重視するならば、本書はいわば浅間火山南麓の縄文遺跡の報告書ともいえるだろう。

今回報告した8遺跡のなかには、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡のように、学史的にも古くからその存在が知られるものが少なくない。これは昭和初期に八幡一郎氏による『北佐久郡の考古学的調査』においてひろく当地の遺跡の存在が知られるようになったことも大きい影響を与えたものと思われる。

このように浅間火山南麓には古くから知られる縄文遺跡が多いのではあるが、発掘調査はほとんど行われず（ただし、滋野地区の寺ノ裏遺跡や成立遺跡は昭和初期には発掘調査が実施されており、昭和8年には国史跡に指定されている。郷土遺跡では昭和36年および40年に学術調査が実施されている。）、その実態は不明な点が多かったのが実情であった。

そうした状況に変化をもたらしたのが、近年の圃場整備事業と上信越自動車道建設に伴う発掘調査である。石神遺跡群は圃場整備事業に伴う発掘調査が小諸市教育委員会によって実施され、とりわけ縄文時代晩期の良好な資料を得ている。

今回の発掘調査によっても古くから知られてきた石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡の実態解明に大きな成果をあげたといえるだろう。

また、三田原遺跡群と岩下遺跡では縄文時代中期末葉～後期前半の敷石住居跡が多数検出され、まさに「敷石住居のムラ」と呼ぶにふさわしいほどである。三田原遺跡では2軒の柄鏡形敷石住居跡で柄部に出入口部施設の認められている。岩下遺跡では緩斜面を平坦に削った円形広場の北部中央に大形敷石住居を構え、その両翼に巨大な張り出しをもつ敷石住居を従わせて円の中核とするという壮大なサークル状構造を有している。これと同様なものは三田原遺跡群でも認められている。

浅間火山南麓の縄文文化は今までいまひとつ実態がはっきりせず、八ヶ岳西南麓と比べると目立たない地域であったが、御代田町川原田遺跡や滝沢遺跡など近隣地域で行われた近年の調査結果も踏まえれば、けっして勝るとも劣らない文化が栄えていたことが判明してきている。本書ではこのように浅間火山南麓に栄えた縄文文化の一端を明らかにできたのではないかと思う。

しかしながら、本書はあくまでも事実記載中心にとどまっており、これを生かした研究を通して、さらに浅間火山南麓の縄文文化の解明に努めていかなければなるまい。また三子塚遺跡群などの平安時代、三子塚4号墳や郷土2号墳など他の時代の遺構・遺物も少なからずみつまっている。本書がこの地の先人達の足跡をたどる一資料になることを願ってやまない。

報 告 書 抄 録

書名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19
副書名	三子塚遺跡群、三田原遺跡群、岩下遺跡、石神遺跡群、郷土遺跡、東丸山遺跡、西丸山遺跡、深沢遺跡群、
巻次	小諸市内3
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	52
編著者名	桜井秀雄、宇賀神誠司
編集機関	財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒387-0007 長野県更埴市屋代260-6 TEL026-274-3891
発行年月日	平成12年3月30日

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査年	調査原因
三子塚遺跡群 みつごづか	小諸市平原	36°18′	138°29′	1991, 1992	上信越自動車道建設による緊急発掘調査
三田原遺跡群 さんだはら	小諸市平原	36°19′	138°29′	1992, 1993	
岩下遺跡 いわた	小諸市八満	36°19′	138°28′	1992, 1993	
石神遺跡群 いしがみ	小諸市八幡	36°19′	138°28′	1991	
郷土遺跡 ごうど	小諸市甲中郷土	36°20′	138°27′	1992, 1993, 1994, 1995	
東丸山遺跡 ひがしまるやま	小諸市菱	36°20′	138°26′	1991	
西丸山遺跡 にしまるやま	小諸市菱	36°20′	138°26′	1991	
深沢遺跡群 ふかさわ	小諸市滋野甲	36°21′	138°24′	1992	

所収遺跡名	種 別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
三子塚遺跡群	集落・古墳	古墳・平安時代	古墳、竪穴住居、畑跡	土器、	古墳1基 10～11世紀の集落
三田原遺跡群	集落	縄文・平安時代	敷石住居、土坑、竪穴住居、	土器、石器、	縄文後期前半の環状集落で、特異
岩下遺跡	集落	縄文・古墳・平安時代	敷石住居、土坑、竪穴住居、	土器、石器、	縄文中～後期集落、特に後期前半の環状集落は特異
石神遺跡群	遺物散布地	縄文・平安時代	土坑	土器、石器	
郷土遺跡	集落・古墳	縄文・古墳・平安時代	竪穴住居、土坑、古墳	土器、土偶、石器、	中期後半主体の大規模集落、古墳1基
東丸山遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居、土坑	土器、石器	前期末～中期初、中期中葉
西丸山遺跡	遺物散布地	縄文時代	土坑	土器、石器	
深沢遺跡群	集落	縄文・平安時代	竪穴住居、土坑	土器、石器	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 52

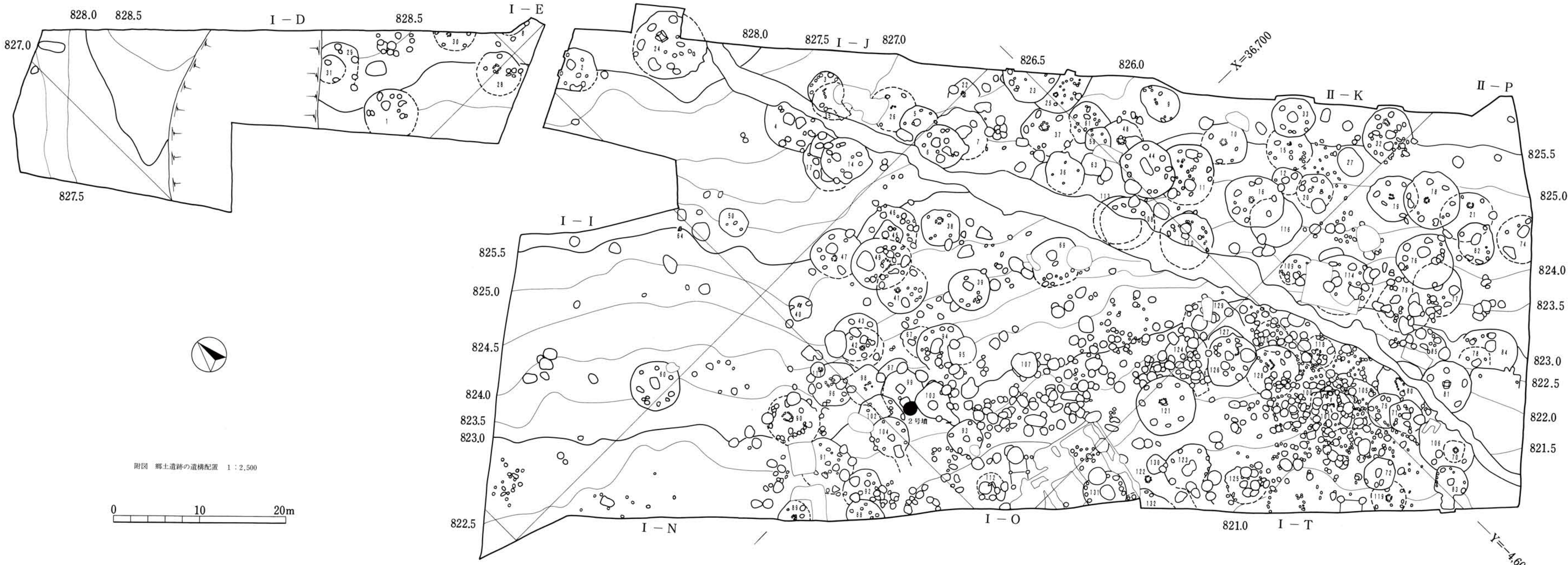
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 19

—小諸市内3—

三子塚遺跡群 三田原遺跡群 岩下遺跡 石神遺跡群
郷土遺跡 東丸山遺跡 西丸山遺跡 深沢遺跡群

本 文 編

発 行 平成12年3月30日
発行者 財長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化センター
☎387-0007 更埴市屋代清水260-6 TEL 026-274-3891
FAX 026-274-3892
印 刷 第一印刷株式会社



附図 郷土遺跡の遺構配置 1:2,500

